現代日本文學全集

PL
817
A55A6
1931

Tamura, Toshiko Sato
Tamura Toshiko shu

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

杉浦非水装幀

田村俊子集
野上彌生子集
中條百合子集

改造社版

LIBRARY
MAY 16 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
817
A55A6
1931

作家時代の田村氏（左上）と最近の野上氏（右上）中條氏（下）

「田村・野上・中條集」目次

巻頭寫眞（諸家照影）

田村俊子集

筆蹟 …… 四

あきらめ …… 五

誓言 …… 八〇

女作者 …… 九三

木乃伊の口紅 …… 九七

炮烙の刑 …… 一二七

榮華 …… 一五四

寒椿 …… 一六七

春の晩 …… 一七二

（附）「後のはかなさ」より（七九）　「愛かなさけか」より（九一）　「後のはかなさ」より（一二六）
「愛かなさけか」より（一五三）　同（一六六）　同（一七一）　「後のはかなさ」より（一八二）

年譜 …… 一八三

野上彌生子集

序詞（筆蹟）……一八六
小さい兄弟……一八七
母親の通信……二三一
海神丸……二五一
大石良雄……二八〇
片脚の問題……三一四
縛られた者……三一八
腐れかけた家……三四二
（附）日記の中から一（二五〇）　同二（二七九）　同三（三一七）　同四（三八〇）　同五（三八二）
年譜……三八一

中條百合子集

序詞（筆蹟）……三八四
貧しき人々の群……三八五
伸子……四三〇
（附）「ロンドン一九二九年」より（四二九）　同（六一一）　同（六一五）
年譜……六一二

田村俊子集

娘の部屋

田村俊子

一、

峯子は、もう半時間ほど泣きつゞけてゐた。

この部屋に出たり這入つたりしてゐた人たちは、峯子の泣いた顔を見ようと、又戻つてきた。とその何人かが部屋でちらりと見ればかりした。そのわけを知らうとしてゆくうともしあつた。全部屋の者が此の様な貴夫人の挨拶で、出て口で靴を穿いてゐたが、やがて席の上をそろ

あきらめ

序

去年大阪朝日新聞の依頼で此の小說を讀んだ時の記憶を辿つて見ると、此の作には、第一に若い女の心のひらめきで、到底男の思ひ及ばない微妙なシェーヅが所々に捉へてある、どうしても作者は女性だらうと思つた。自分には是れが先づ面白かつた。

次に一方單純な女學生式の生活に對して、複雜な下町式、または料理屋、女優、踊の師匠といつた風の空氣が、場所にも人間にも可なり鮮かに點出せられてゐる。此の二つの違つた現代女性の世界を一つに綯ひまぜた所が、作者の強味である、ありふれた若い人々の作に比べて異彩だと思つた。

それから如何にも女の眼から見た、だらしない男性といふやうなものが、ちら〳〵書いてある。それから女と女との心の祕密も、男の想像し得ない或機微に觸れてゐる。

其の外、細かい事を恐ろしく細かく描く人だと思つた。併しこの細かさは、驚くに足らん。細かい注意と知識上の細工とでも書ける、必ずしも皆自然に活きてゐるとは限らない。時としては餘りに巧みすぎて、興を妨げる所すらある。それが繰り返されて更に病を重ねる。また文章にも知識的になり過ぎて腰の折れる箇所がところ〴〵ある。要するに此の作者には知の要素が勝つてゐるかとも思はれる。

全篇の味は、平淡で眞實で優しい所にある。平淡はだれると言つて嫌ふ人もある、優しいのは女性の筆だからとも見られる。たゞ其の眞實はこの種の作風の生命である、作者の動かし難い内的眞實に接近してゐると察せられるだけ、それだけ其の箇所が生きてゐる。深さと淺さは、はつきり是れによつて區分せられる。

此の作は、作者の全部が是れで展開し了つたものとしても、今の作界の水平線上に一地歩を占めるに足りるのは論を俟たぬ。若し此の上に伸びるとすれば、寧ろ大きく伸び得る風格である。同時に、一歩を誤れば、全く常識の表面に流れ去つてしまふかも知れない。

結局眞に感じ、廣く觀、細かく描く基礎は既に此の作で築かれて居る。最大事はそれを一層深く觀、深く感ずる工夫である。玆に此の作者の前途が横はるのであらう。

明治四十四年五月　島村抱月批

拜復

小說「あきらめ」の序文、あの時何の氣もなく御引受けして、今では飛んだことを引受けたものだと後悔いたし居候折柄、御催促の御狀に接して、頓には御返事も成りかねたる始末に候。今更御詫びして御斷りするのも忌々しく、思ひ切つて禿びたる筆を取上げ候。

かくて筆は持ちたれど、何から書き始めてよいやら、餘儀なく初めて「あきらめ」を讀みたる折の感想でも申述ぶべく候。「あきらめ」を手に取りたる刹那、まづ紫色のインキにて書きたる肉細の女文字が眼に

[illegible]中候。段々讀みもて行くに、女な
らではと思はるゝやうな、美しき官能に
ほひも有れば、こまやかな神經の反應も有
り、作中の人物の名前はいかにも白粉臭
けれど、立派な藝術家、[illegible]たる心理[illegible]部に
も豐かに、而も其中から[illegible]に取纏らんとす
る様なる[illegible]しさもありて、藝術の技倆を持
ちたる作者が未聞の人の間に隠れ居たるこ
との床しく、其事情からおのれが早くそれ
を知りたるをうれしく覺え候。其後さる
折に、不圖、これは誰か世に聞えたる女流
作家の假面を被りたるにあらずやと思ひ泛
べて、あれかこれかと打案じながら、さる事
なかれかしと念じたるも可笑しく候。
偖ていよ〳〵誰人の作かと云ふことも分り
て、其作者は筆を執りてこそ聞えざれ、そ
れよりは一層華々しい舞臺に立つて、長い
袂を翳したこともある人よと聞いた時の
心持は只御推察に任せ候。但し此處に一
つ云ひたいのは、私は偶然にも舞臺に立
つた、あきらめの作者を見ぬ僞でもあらう
が、如何しても舞臺の人としての此作者と、
「あきらめ」の作者とを一つにすることが出
來ないと云ふことに候。言ひ換ふれば、
「あきらめ」の作者が嘗て舞臺に立つた人だ
とは如何しても信ぜられないのに候。こ
れなど[illegible]此作者の未來が長い[illegible]る
[illegible]候。
これでは御間に合ふまじきか。御氣に召さ
ずば[illegible]てられてもよろしく候。以上。

三月三日　森田草平

田村とし子様

一

富枝は歸らうとして校舍の裏手へ出て見た。生徒は大抵散じ盡したあとで、遙か寮舍の方で水を使ふ音が聞えてゐた。園藝好きの古井が、花鋏を持つて坂を下りてゆくのが見えた。何と云ふでもなく呼んで見ると彼方は近くを探しながらくるりと振り向いて、富枝を見附けると莞爾として又歩き出した。

オリーヴ色の袴が蹴上る。餘り白くない脛が白足袋の上を一寸ばかり露はれるのが遠目に分る。

自分の培養した花を自慢に寮舍の各室へ插して廻つて、皆から嬉しさうな挨拶を聞いてそれで面白くしてゐる。いつも理想の[illegible]を作つて一[illegible]花[illegible]中に[illegible]して[illegible]のだと云つて樂しんでゐた。

[illegible]に[illegible]に出ると、[illegible]して[illegible]になれ、[illegible]く人として、[illegible]あの人はその[illegible]に[illegible]ない[illegible]だらうと富枝は考へた。自分の、[illegible]に心を[illegible]きたと云つて學校から[illegible]された[illegible]自分の[illegible]から比較べて、平常[illegible]を向けなかつた同僚の一人の上にふと[illegible]く立入つて見た。——まづ根底を作つて、立派な美しい花を[illegible]せようと勉めるのが此校の主義、その根も功績を[illegible]いては花の咲くべき日がない——と云つた[illegible]見[illegible]の低い[illegible]か、校[illegible]の[illegible]しい風に新たにされた響きになつて、富枝の耳の奥に再び[illegible]き廻つたやうに思はれた。

立並んだ寮の二階で、赤い色、白い色が消えたり現れたりする。前掛をかけた生徒が料理場へ入つてゆく。小學部の小さい生徒が三人手を組んで寮の門を出て來る。[illegible]色だつた兵兒帯を下げてゐる。彼樣に幼稚くての寄宿舍生活は、どんなに寂しいことであらうと富枝は例になく不憫な氣がおこつた。自分は明日から此校の土を踏まぬことになるかも知れない、と

年馴染んだこの櫻も花を謳ふ三度目には逢はずに、葉の黄ばみかゝつた今を別れの最期とすると思ふと、學校を捨てるに未練はないが、校舎を取り繞つた四邊の風物に名殘りが惜まれる。例も讀むものを抱へては寄り掛つた圖書室前の桐の木の許へ行つて見た。圖書室の窓に白い窓掛が下りてゐた。

矢張同級の上田が、富枝を探しながら此所へ來た。

「もう御歸りかと思つてましたら。」

上田はアイボリー石鹸のやうな額[illegible]をしてゐる。[illegible]生際の邊は縮れてゐる。本郷通りの洋品店の看板人形と云ふ評があつた。

「どんなこと仰しやつて。」

と聞いた。

富枝は答へずにゐた。今の場合、校長に代つて學監が云つたことを、然まで親交のない上田に明かに告げるのが何となく子供らしい氣がされるやうで、富枝は自分の威を保つと云ふ迄でもないが、返事することを避けるやうな風であつた。上田は押して、

「主義の下に何う言うと仰しやりはしませんでしたか。」

と好奇らしくその眼を輝かした。

富枝は學校さへ廢めればいゝのだと考へてゐた。脚本などを書いた爲に學監から注意を受けた。學校の籍を除かないうちは斯う干渉されるのも當然なことではあつた。主張したいことがあつても女性と云ふ點に省みて、この校門を毎日潜る以上は學監へ對してそんなことも出來なかつた。

上田は若し貴女が學校を廢めるやうな事でもあると文藝會が寂しくなる、スターを失ふのは惜しい、と云つた。

富枝は友人の言葉は兎に角、自分の荻生野富枝と云ふ名が明治の文藝史上の一端を染めかけてゐると云ふ事に就いて誇りの影が射さないでもなかつた。そして其の名が、廣い天下に戶の節孔を漏る日光のやうに細い一道の光線となつて現れたのを奇異にも考へた。

白手袋を嵌めながら、英語の教師のミッセス、ズミスが正面の石段を下りて來た。自轉車を曳き出すのを待つて、その後から兩人は並んで歩きながら門を出た。

水色のスカートが、帆に膨らんで走つてゆく。砂が僅かづつ尾をひく。襟を廻つた飾りがきらきらする。ヘ[illegible]の髮が帽の下から喰み出して、眞つ白な[illegible]が白壁のやうに綺麗だ。富枝は後から、その姿を眺めてゐた。

校門の傍の洋品店の女が二人を見て店から挨拶した。その笑顏を見るとこの女にも逢へなくなるかも知れないと富枝は一寸振り向いた。美術店の硝子戶に上田の姿が映つてゐた。

「大學創まつてからの功名者、實に誇りとするに足りるわ。」

と上田は言つた。

富枝は横に上田を見た。肩を丸くして背を屈めて、伊勢崎銘仙の單衣を皺だらけにした袴の腰板の上へも序に目をやつた。

「けれど、これぱかりは模倣はうと云つたつて凡力のものには出來ない事なんですもの、天才でなくつちや駄目ですわ、貴女は學校生活をして、學校制度の型に嵌つて遣ると云ふやうな小さな器ぢやないんです。お遣りになつた方がいいわ。飽くまで努力なさいよ、ね、荻生野さん。」

瘦せた、萎けた様な身體を伸して、上田は熱心に云ふ。[illegible]つて、思はず包みを抱へた手に蝙蝠傘を一所にして、明いた片手に荻生野の片手を握り占めた。

「有難う。」

[illegible]に富枝は、謝辭を籠めた眼に、上田の面

を見返す。平生は、纏り好いたとも思つてゐなかつたが、今日、こんな場合に、この人の口から斯う云つた言葉を聞かうとは思ひもかけなかつた。他の女は、今日の富枝の出世を見てから、妙に隔てて近附くものさへ無かつた。一種の墮落だと疑つて、賢いのは敬遠主義さへ取るのがある。ために、この人の好意は意外だと思ふ程、嬉しかつた。

「學校をお廢めになつても、妾だけは交際はして下さい。妾は貴女を師と仰ぐわ。妾だけはあなたの成功を祈ります。心から。」

富枝は默つてゐた。こんな時、自分とよく話の合ふ昔の友人を思ひ出して、その友人に自分の思ひを吐いて見たいと考へてゐた。

「上田さんは、三輪さんを覺えていらつしやいますか。」

上田は考へるやうに首をまげた時、耳の後の垢が富枝の眼の前を遮つた。富枝は少し横に離れて歩を早めた

「えゝ、僅か半學期ばかりで、退學なすつた方でせう。矢張り天才肌でしたわね。」

「然うでしたね。」

眉の迫つた、眼の美しい三輪の面影を忍んで、富枝は恍惚するほど戀しくなつてくる。兩人は何時か町へ出てゐた。濱田町の前を通つて電車の停留所の方へと向きを換える。

場末の寄席の幟し旗なのが、何なから富枝の胸を濁らせるので、今日も其れを振り返つて不愉快な思ひで眺めた。

眞つ赤な毒々しい色で緣を取つた看板に、眞つ黒く浪花亭何々と認められてある。その看板を後にして、汚れた白い法被を着て、毛脛を出した男が、息潰んだ聲で、

「いらつしあい。」

と叫んでゐる。この喧々とした眞晝間、こんな焦けた樣な薄暗い寄席の內に入つて、浪花節を聞いてゐる客の感じと云ふものは、何樣なものだらうかと富枝は考へる。上田は氣が附かずに、平生踏み馴れた右側の軒の下を、拾ふ樣にして歩いて行く。

二

露路を入らうとした富枝は、角の八百屋の前に見馴れた女が後向きになつて立つてゐるのを見附けて、ふいと立ち止つた。女は草色の風呂敷を、マッフをする樣にくる〳〵と兩手に捲き附けて、卷く捲れ上つた浴衣の裾から赤黒い太い足頸を見せてゐる。八百屋の店頭は青い色が溢れてゐた。

「おきそ。おきそ。」

と、富枝は下町の調子を口に當て云ひながら呼んだ。女は仰山に振り返つて日和下駄を履いた足をせはしく、驅けて來て、

「お歸りなさいまし。今日は御ゆつくりでいらつしやいましたね。」

と御辭儀をしながら云つた。

「いゝから早く、お歸りよ。」

富枝は斯う云ひながら、おきその襟袋に插してゐる、自分のお古の海老茶色の半襟を見た。おきそは又下駄の齒裏を見せて八百屋の店へかへつた。紫メリンスの小さな帶の結び目が吸ひ附くやうに背中の中央にとまつてゐる。立ち並んだ店の内で一軒で日除をとると彼方でも此方でも日除を外し始める、又何處かで水を撒きだすと隣家でも向う側でも撒き始める。簞笥町の狹い通りには小さな商店が同じ程な間數の間口を揃へて並んでゐて、夕方のその道路は、富枝の重ね草履を濕らせるほど其方此方が濡つてゐた。富枝はおきその袂を捉へながら飛び飛び歩いた。

「お包みを持つてまゐりませうか。」

おきそは、蝙蝠傘と本の包みとを一所にして

抱へた富枝の片手を覗いて聞いた。富枝は唯頭をふつた。通り過がつた理髪床で、客の頭髪の上にバルカンを手にした職人が人の通る通りを振り返つた。白い上衣の裾が捲れたまゝその尖きだけがひら〳〵と動いてゐる。

　道がよくなると富枝はおきそを提へた手を放して、又扇子を脣に當て支つて歩いた。おきそは片手にぶら提げた風呂敷包みを、自分と富枝の間へ提げ直した。ぶら〳〵させるおきその手の波動に風呂敷包みは富枝の膝へ時折打突かつた。自分の脚へもその餘波を打ち突けて、富枝は風呂敷包みへ目を落して、その風呂敷包みがおきその膝に當るとき更に目を上げておきその顏を眺めた。おきそは知らずにゐた。富枝は默つて笑つてゐた。露路のなかは風が涼しかつた。富枝は襟止を外して少しばかり白細の襟の肌襦袢の合せ目を寛くした。突當りの自宅の二階で、簾を捲いた人が座敷へ入らうとした後姿が柳がくれに見えた。

「兄さんはゐる。」

と富枝は聞いた。おきそは在宅だと云つて勝手の方へまはつて行つた。

　家の前には綺麗に水が撒いてあつた。牛乳受箱に淡黄色の雫か、溜つては落ち、溜つては落ちしてゐる。三寸程開き殘した潜り戸には、もう半分通り打水が乾きかけてゐて、敷居に流れてる水の溜りが、涼しさうに戰いでゐた。

　庭と區劃の木戸が開いてゐたので、富枝は其處から入つて庭の方へ廻つた。

　鏡臺を前に据ゑて、お化粧をしてゐた姉の都滿子は、富枝を見ると微笑した。

「遲かつたでせう。」

　と富枝も笑ふ。垣根の傍の萩に袴を濡らしたので、ぐいと裾を引上げながら、茶の間の方の緣側へ向いて歩いた。

「もう、お湯へ入浴つて。」

　とその艶やかな姉の顏を見て富枝は聞いた。姉はポットで粉白粉を叩き込んでゐた。粉が浴衣の黑い襟にかゝつて散つた。

　都滿子は自分の濃い、長い、下り眉をもう一際黛に濃くしてゐる。要らない事をすると富枝に何時も笑はれるけれども癖になつてゐるので、何うしても一度筆染めなければ、何となく顏面が引立たぬ樣に思つて了つてゐる。自然、眉の配合を取る爲に、白粉も濃くなる。眞つ黑な髮を大きな丸髷にして、幅を廣くとつた前髮を額へぴたりと潰してゐる。來年、三十歳となる人にしては、隨分若作りだと、富枝は例も然う思つてゐる。

　眉筆を取つて、一寸、緣側の富枝を見た都滿子は、

「お祝ひに兄さんが何處かへ連れて行つて上げるんですとさ。」

　と云つた。富枝は緣側へ腰をかけて、靴を穿いた兩足を、宙に浮かせてばた〳〵爲せながら、上らうとも爲ずに、

「姉さんも一所ですか。」

　と聞いて見た。

　晝寢から覺めた樣な顏をして、隣家の百日紅が塀越しに突き出てゐた。薄い夕日が其の頭を掠めて、横に此方の庭の松の木へと日射しが流れてゐる。摩り芋を水に浮かした樣に、白い雲が漂つて行く。飛石の如露の上へ、脚を長くして蟋蟀が飛びついた。そんな庭の景色を眺めて、秋になつた事を富枝は知つた。

　木の葉は落ちなくとも、其邊等の景物が秋を含んで見える。緣の金魚鉢に、唯一尾命を保つてゐる金魚も、逝つた夏の殘物であると思つた。

「何を茫然してゐるの。」

　都滿子は化粧を終つて、立ち上つた。棒縞の

浴衣が足に絡むのを氣にしてゐたので、着物の前が露出り、脂肪ぎつた薄赤い踵が返つて、一寸媚めく。

「姉さん。校長大反對よ。」

急に、富枝は斯う云つて、忙しさうに足をあげて靴を脱いだ。

長火鉢の横に、葛饅頭を盛つた菓子皿が出てゐるのを見ると、富枝は中腰になつて、一つ摘んだ。

都滿子はお客のお初をとつたと云つて叱つた。

「然う、失禮したわね。」

斯う云ひながら惡指口の中へ入れて了ふと袴をとる、楕形の縮み一つになつて足を投げ出しながら、靴下の上から兩手で爪先を揉んでゐた。

二階から兄の呼ぶ聲がした。

「はあい。」

と、癇走つた長い返事を、姉が代つて爲てやつて、

「行途に、これを持つて行つて頂戴。」

と菓子皿を渡した。富枝は男結びにした、草色博多の帶の後を一寸觸つて見て、二階へ上つて行く。

煽風器を横手に置いて、その綠紫は床柱に寄り掛つてゐた。客は、その前に坐つてゐる。尻の下へ高く重ねてある錦見敷の上へ、白綸子の地布の結び目がだらりと長く垂れてゐる。その間を透つて白縮緬の醤油色になつた裾が裏返つてゐる。

先づその後方に片膝突いて、富枝は客に挨拶する。客は持つた團扇を前へ突出して低頭する。灰皿の灰がふはりと其の小さな干燥けた樣な耳に飛ぶ。辭儀がすむと團扇は依然持つた儘で、柄の方で自分の膝頭を叩いてゐる。主人も客も欄干の下に擴がつてゐる無花果の葉の色を受けて蒼ずんだ顏をしてゐた。

「何か氣焔でも吐いてきたか。」

富枝の言葉を耳に挾んだ綠紫は調戲のやうに聞いた。富枝は眞面目に何とも云はずに歸つて來たと答へた。

「意氣地がないなあ。」

と兄は笑つた。それで富枝はもう學校を廢めようかと思ふと云ふことを相談した。綠紫は惜しいこともないから廢して了つて文學のことを專念にやつたら宜からうと云つた。

「學校ぐらゐ癪にさはるものはない。」

と綠紫も云つた。富枝は自分ももう校門を潜らないつもりで今日出て來たと云つた。

「作物のことで面倒になりましてね。」

客は斯う口を挾んで二人の顏を見比べた。

來年、書肆から出るものにと思ふと、女の何で何となく甘しい氣がした。彼の新聞紙に寄して置いて、學校の方へも出す、さずに置いて、卒業してから新たに文壇へ名乘りを上げた方が宜かつた、と未練らしく富枝は思つた。

富枝には兩親がない。故國に祖母と、姉の都滿子と、妹の露枝との三人があるばかりである。それも妹は志野と云ふ家へ養女に遣つて了つたので他人も同じである。姉は父の在世の間に染谷へ嫁したので、中の富枝に其生野の家を續かせる心算で父は死亡つたのである。富枝は故國の岐阜へ歸つて――自分は東京で生れた限り、未だ一度もその地を踏んだ事がない。其國には眞の祖母も居るし、後妻であつた母のお伊豫も、父が死亡つてから、父の遺言を受けて祖母の介抱に故國へ歸つてゐる。――生野の家を續いで、義理を辨へた繼母や、取殘した祖母に安心をさせなければならない身である。

富枝姉妹の父は、土地の豪家の息であつた。母は土地の藝妓であつた。家を捨てて祖母と殘

し、東京へ出京て了つたのも、皆藝妓であつたその母が煽動した爲であると祖母は恨み切つてゐた。

母は貴枝を生んだ年に死亡つたので、その時、姉妹三人の中、何方か一人故郷へ歸して、祖母に孝行をさせて呉れと云つて死んだ、その一人に富枝が當つたのである。

繼母の伊豫が故郷へ赴いた時に、既に富枝も岐阜の人とならなければならなかつたのであるが、姉の都満子も富枝を手放すのは厭だと云ふし、富枝も見も知らない田舎へ埋れに行くのが辛いので、もう三年勉强する、と云つて、繼母に無理を云つて、とう〳〵殘る事に爲て了つた。繼母は染谷夫婦に富枝の上を頼んで一人岐阜へ行つたのである。

財産は大方父が蕩盡したあとである。知つた人もない田舎に、老衰した姑を介抱して、朝夕淋しい生活を續けてゐる繼母は、富枝を何處までも自分の眞實の子として力にしてゐる。さうして行末を樂しんでゐる。早く勉强を爲遂げて一日も早く歸郷して祖母さんに安心をさせて呉れ、と云つて度々手紙をよこす。

富枝にこれを苦に思ふ氣は毫末おこらぬ。繼母の志を一分時なりと忘れては濟まぬと思ひ染みてゐる。況して長い間捨てて顧みなかつた祖母に、自分に代つて孝行をして呉れとは、亡くなつた母の遺して行つた言葉である。富枝は其責を思ふ毎に、繼母への同情の湧く毎に、自分の身體が重い鎖で岐阜の方へ結び附けられてある様な氣がして、唯々鬱陶しくなつて來る事がある。

自分は、自分の力で繼母や祖母を養つてゆかねばならぬのだ。田舎へ歸つて、土地から養子などを迎へるのは厭だと思ふ限り、自分の力で一家を養つてゆかねばならぬ。夫れには何日何時にも自活の途の取れる地位、確固した根據を作つて置かなければならない。

大學を卒業て、地方の女學校の教師になる……其れが自分の目的ぢやないが、自分の自然の境遇が、其様なことでも望まなければ、自分だけの人生に満足する道が盡きないことになる。

故郷へ行つてるのが生みの母であつたら自分は深く何も思ふ事はないであらう。繼母に、自分の他には子もなく、故郷の祖母の他には親もないと思つてゐる。繼母は當世の教育のある人ではない、書物に由つて人の道を考へる人ではない、其處に貴い所が見えるのだ、と富枝は考へる。其の繼母に對して、自分も必ず何物か犠牲にしなければならないに定つてゐると觀念する。

都の風は面白い。華麗な氣に觸れて其れを謗るやうな富枝でもない。捨てずに濟むものなら都を捨てようとは思はぬ。けれども、然うはならない自身である。自活の出來得る様に大學を卒業て、これが三年間勉强した證だと云つて卒業證書を見せて、憎いと思つた女の腹から此様な殊勝らしい娘が出來たかと平時に祖母をよろこばせて、これが自分の娘だと威張り度いと云つた繼母にも、自慢の種を供給する。然うしなければならない自分だ、其れを無意義だなどと、悲觀するのを我儘だと自覺する程、自分は利口に生れ附いてゐるのだと、富枝は悲しく斷念めてゐた。

筆馴らしに富枝は脚本を書いて見た。文士の家に寄宿してゐた富枝はこんな事が好きであつた。ある新聞で懸賞の脚本を募つた時に試にそれを投じておいた。それが圖らずも當選する事になつて今年はある舞臺へかけられると云ふ事にまでなつた。

かうして當つて見るとそれが不思議であつた。

それに慢じた譯ではなかつたが、富枝は自然

好きな道に心を入れ勝ちになつて學校もよく怠つた、學課の暗誦もうるさかつた。けれども今のやうな境遇を考へると學校を廢めるのも殘念で、氣が乘らぬながらも捨てずにゐた。それが今度新聞によつて紹介されると一所に自分の名も學校の人達に見出された。それを虛名を望むと云つて學監は學校の主義を說いて富枝の反省を促したのであつた。

今は何うしても廢めるより他はない。廢めて覺束ないながらも名を得た文藝によつて身を立てようかとも考へた。

欄干に吊した絽の長襦袢がぐる〳〵風に吹きまはされてゐた。模樣の觀世水がちよろ〳〵とうごくやうに見えた。主人も客も頻りにサイダーを飲んでゐた。

三

客と兄の並んで行く後から、富枝は姉と並んでゆく。姉の頸元から香水の匂ひと、白粉の匂ひが富枝の頰の邊を襲つてくる、涼しい風が姉の鬢尻をそよがせた。

綠紫は洋杖を擔いだ客に、何か云つて笑ひながら歩いた。縞絽の羽織が風に流れて漂つてゐる。麥藁帽子とパナマの帽子が、右から左からと傾ぎ合つて、離れたり附着いたりしてゐた。

「この頃ね、貴枝ちやんの許へちよい〳〵、出掛けるんだつて。」

と姉は聲を潛ませた。外輪にして歩くのが都滿子の癖だ。少し身體を乘り出すやうな恰好をする。紺大名のお召の袖が輕く富枝の腰に觸る。

「貴枝ちやんの許へ。何しに遊びに行くの。」

「何しに行くんだか、分りやしないわ。」

「だつて、眞逆……」

姉を見上げた眼に意味が含まれた。

もう暮れて了つて、町並の店に燈が綺麗に輝き出す。兄と客の後姿が明るくなつたり、暗くなつたりしてゐる。

「彼樣云ふんだから、妹だつて手を出しかねやしないわ。」

と云つた時に、藤鼠地の絽縮緬の襦袢の襟から、襟止の玉がきらりと光りを投げた。

「富枝さんは大丈夫だけれど。」

聲はしないが笑つてゐる樣だつた。

三輪さんも、繁々妾の許へ來る間に、兄さんと怪しいと姉さんが騷ぎ出したので、其れが原因で來なくなつて了つた。彼れは事實ぢやないに定まつてる、何にもできない癖にした兄さんも悪いけれど、姉さんも直によく人を疑ふ。貴枝ちやんだつてまだ子供だ。兄さんが何う仕樣もないのにと心の中で考へる。

「今度ね、貴枝ちやんの許へ行つたら、其れとなしに樣子を聞いておいて頂戴。」

「えゝ。」

と返事だけ爲て置く。自分の噂をされるとも知らないで、兄と綠紫が停留場の柱の傍から、

「京橋の方へ行くかな。」

と聲をかけた。客は洋杖でこつ〳〵土の上を叩いてゐた。都滿子は、

「然うしませう。」

と云ひながら少し急ぎ足になる。

丁度其處へ來た電車に、後になり前になりして、四人ながら乘つた。

乘客の視線が一時集注する。客は綠紫の隣席に腰をかけながら吊し革に手をかけてゐる。對ひ合つた都滿子が、其れを見て、

「實に高の字は嫌ひよ。彼れが半田さんだと好いけれども、一所に歩くのもいやね。」

と蓮葉な態をした。半田さんも厭な人だ、と云はうとして、富枝は口を噤んで唯笑つただけ

にする。

何時かしら、と廣告時計を見ると、生憎乘換切符が斜に貼られて、役に立たないと云ふ事を斷つてゐる。客が隙さず、富枝の樣子を見て取つて、自分の銀側の懷中を取り出す。富枝は濟ましてゐる。必要があつて時間を見た譯でもないので、敢て聞かうともしずにゐる。客は少してれて、ぱちりと蓋をしながらぬうと顔を外方へ向けた。内幸町で降りると、銀座の方へむいた。

派出所の巡査が、赤い電燈の色を浴びて、電氣踊りの踊りつ子の樣な色合で立つてゐる。日比谷公園の門を目指して袴を穿いた女生が兩人行く。公園に門のあるのは日比谷ばかりだと、富枝は振り返つて見る。

「支那料理にしよう。ね。」

と綠紫は袖湯子に云つてる。見ると兩人は竝んで行く。客は橋に離れて相變らず洋杖を擔いでゐる。

「洋食にしませうよ。ねえ富枝さん。」

遅れた富枝を待ちながら、立ち止つて姉は甘えた樣な聲を出してゐる。

「何方だつていゝわ。」

「例の尾張町の支那料理でせう。お馴染のゐる。美人がゐなけりや、御馳走は食べられないものと思つてゐるのねえ。」

其樣な話を避ける積りで、富枝は態と遅れた儘で行く。

すつと、風が富枝の橫顔を切つた。見ると車が一臺もう四五軒先きを走つてゐる。車も音のしないのが價値があるのだ、と護謨輪の車の影を追ふ。

車上の人の眞つ白な頸筋が水際立つてゐる。島田

ぐつと衣紋を拔いた撫肩が浮いてゐる。

の髷のぐらつくのも朧に見える。藝妓だ、と富枝は見直した。

素人は、車に乘ると折角飾つた姿を丸々と内へ沒して了ふ。賣女は作らない姿の時でも、作らない儘を形狀にして車の上へ乘せる、浮き出させてゐる。其點が、一口に商賣人だと人の目に映る相違なのだらうと感心をする。

廣い明い通りを出ると數寄屋橋にかゝる。

有樂座前のイルミネーションが遠くの方でちらちらしてゐる　子供デーの看板が、四角く白く匂配になつてゐる。橋から見ると引込んでゐるだけに、一つの綺麗な娯樂場の建物が、生きて働いてゐて四方を通る群集の足を引張つてゐる樣に見える。然う思ふと闇い三角な建物の尖きに、大きな眼があるやうに見える、兩方の橫から手が出る樣に見える。富枝は此樣なことを考へて、遠く周圍の薄黑い有樂座を望みながら橋を渡つてゆく。

洋食と一決つたと見えて、富枝は風月に伴はれた。

客は落着かない顔をして、天井を見上げたり、食卓の上を眺めたりして、

「どうも拙いですな。矢張り腰をかけてフォークを使ふのは天井の高い方がいゝ樣ですな。」

と云つて居た。

西洋人が三人、卓を圍んで頻りに話をしてゐる。金地に模樣を描いた、床の間の軸袋の戸に、その赤髮の頭が支へさうに見えた。

丁度、階子段を靴でとん〳〵と上つてくる音がする。洋杖を傘入へすとんと刺した音と同時に、仰向いた綠紫と顔を合せて、

「やあ。」

と云つた聲がした。

「何うですな。」

と、綠紫が新聞開いた男に向つて云ふと、

「や。」

と云つたばかりで、其の人は隣席の食卓に席を占めた。

都蒲子は凝視と眺めてゐる。樣子の好い人だと云ひ度さうな眼をする。富枝も男の姿を覗たが、男の方は椅子に背を凭せて、兩足を食卓の下にぐつと開いて献立書を遠くから見詰めてゐた。

「大分、御盛のやうですな。」

と重ねて絲紫が云ふ。

指の頭で、これ〳〵と註文して了ふと、

「何ですか。」

と云つて色の淺黑い顔を此方へ向ける。鼻眼鏡が電燈の光りに反射する。プラチナの鎖が搖ぐ。小さい口許に笑ひを含んで愛嬌を湛へる。

食卓に寄り掛つて又に組んだ腕に、カフスボタンの金剛石が光りを潜める。橙色のネクタイが白く見える。

「學校の方は御成功のやうですな。」

「俳優學校ですか、何うにか斯うにかやつてる樣です。」

「創立當初だけに、何彼に就けて困難を感じられるでせうな。」

「然うです。」

と云つて默つて了ふ。餘り親交のない人なのかと都蒲子は猶見守つてゐる。これが噂に聞いた千早文學士ではないかと富枝も密に目を放さずにゐる。

誂へものがくる。三十ばかりの、によきりと爲た男がナイフやフォークを揃へて行つた。

「どうも、疊の上で胡坐でなけりやあ、調和が取れませんな。」

と絲紫の伴はまだ其れを云つてゐる。

中央の花瓶に插してある夏菊の花を富枝は指で彈いた。花片が都蒲子の持つた半巾の上にかかると富枝は又拾ひ上げてふうと吹いて見る。隣りの男はそれを見てゐた。

四

藤間と書いた軒燈の硝子に、雨の點滴が傳はつて水玉を作へてゐる。出窓の簾が澁色に濡れて、ことり〳〵と風に音を立てる。溝板の上に赤い丹波鬼灯が踏み潰されて、泥に塗れて、赤い根を吐き出してゐる。

人を威喝する樣なパン屋の聲が遠ざかると、細い新道が又舊の雨の音に閉される。頭痛膏を貼つた半纏を着た女が風呂敷包みを重さうに提げてゆく。立秋の寂つぽい薄寒さが、その女の半纏の襟先あたりから迫る。

「一所に行きませう。」

と格子のうちで云つた聲が、蕭々とした雨の音を掃つて、軒の下に冴々した波動を傳はらせる。

格子ががらりと開く。前方に[illegible]中入髷の頭髮が出る。長い中形メリンスの袂が兩方へだらりと垂れる。櫻皮の爪掛の[illegible]上に揃ふと小さい蛇の目の傘がすぼんと上に開く。傘を擔ぎながら格子を閉めた時は後向になつてゐる。朱塗の足駄の小さい齒に、身體を支へてゐるのが八字になつて見える。

「妾は電車よ。」

と云ひながら後から出て來たのが格子を後手に閉める。

淺黄の木目に、所々牡丹の花を散らした合羽を着てゐる。引詰めた下地に結つてゐるので濃い富士額が殊に劃然としてゐる。目鼻立は綺麗だが色が黑い。生際に白粉が凝結つて殘つてゐる。

「ぢや、電車へ乘る所までね。」

唐人髷が斯う云ふ。下地は奴の傘を翳して兩人並んでゆく。姓名を書いた字が薄くなつてゐる。時々傘が衝突かつては驚いた樣に離れる。

「今日のとこね、むづかしくつていやになつちやつたわ。」

毛は赤いが色の眞つ白い、クリームを溶かし

た様な艶をしてゐる。腫れぼつたい一重瞼を張つて受口をする。傘の柄を扇子で叩きながら、
「春——と、夏との、ま、狂人ぢやあ。」
と身振りをする。銀で陰と陽とに出した葡萄模様の袂が揺れる。泥が裾に跳ね上る。
「ねえ春——つてとき、此様な眼をするのよ。ちよいとちよいと、御覧なさいつてば。」
両人は往來の眞中へ立ち止る。唐人髷は顔を斜にして、眼を横に使つて、眩しいと云ふ様に屡叩かせる、受口が猶受口になる。
「ねえ、」
「うそだわ。其様な眼をするんぢやないことよ。お師匠さんと遊ぶことよ。」
又並んで歩き出す。
「狂人の眼つて、どんなんでせう。見た事あつて。」
雨が横に吹きつけて、可愛らしい顔を濡らす。下地は傘を横にする。唐人髷は雨の来る方へ傘をやらずに、依然頭に擡いてゐる。袖が半分通りもう濡れてしまつてゐた。
「なに、少し眼は開いてゐるわ。」
「そりや然うだわ。盲目だつて盲目ぢやないんですもの。……狂人ぢや、狂人ぢや、」
と急に下地の傍へ寄りつく。力が籠つて[illegible]傘が轉倒になる。
「あら。あら。濡れちやつてよ。巫山戯ちや可けないわよ。」
下地が澁面を作る。
「あなた妾に惚れてゐるんぢやありませんか。威張れないわよ。」
と扇子でその肱を突く。十五ぐらゐの口から済まして此様なことを云ふ。
「ふゝゝゝ。」
と下地は笑ひ出す。
「お頼申してよ。貴枝ちやんに惚れるんぢやないんですからね。この兵衛さんが松風に惚れるんだわ。」
「何方だつて同じよ。妾の袖をもつて口説くくせに。」
「そんな事云や、業平の時はどうしたの。貴枝ちやんが妾に惚れるんだよ。」
「然うだつたわね。大きに失敬。」
笑つた顔が、角の白牡丹の硝子戸に映る。中を覗くと番頭が四角に坐つて煙草を吸つてゐる。金や銀の色がきら／＼と、一所になつて眼を射る。毎日踊りの稽古に行く子か、今通つて行かあ、と云ふ様な顔をして、筒袖を着た小僧が眺めてゐる。電車の音がぎいつと濡れた色を出して通る。両人は大通りへ出た。
尾張町の交叉點の所で立ち止ると、
「左様なら。」
と下地は早々と向う側の赤い柱の下へゆく。
合羽の肩上げが四角に尖つてゐる。貴枝も線路を突切らうとすると、大きな番傘が眼の前に塞がつて、小倉の帯の結び目を振りながら威張つてゆく。憎らしさうに見ながら漸く向う側へ移つて、弓町へ曲ると、
「貴枝さん、おい。」
と男の聲で呼ばれた。
「兄さん、宅へ行つて。」
懐愛しさうな顔をして、貴枝は緑紫の半外套の傍へぴたりと寄りつく。緑紫の蛇の目の傘の半開きが風を傳はらせた。
「え。兄さんはお店へ行くの。」
「奥へ行くのさ。お前の許へ来たんだもの。」
口尻の筋肉が弛んだ様な顔をして情児緑紫は貴枝の顔を眺める。
「おゝ厭な兄さん。妾ん許へなんか来たつてつまらないわ。」
と云ひ捨てに貴枝は歩き始める。水菓子屋の戸が半分下りてゐて、「ミルクセーキ」と書いた旗が寒さうに震へてゐる。何所からか天麩羅の匂

ひが流れて來る。
「然う急くなよ、兄さんを嫌ふのかい。」
「だつて、彼樣なことを云ふんですもの。」
「どんな事。」
綠紫は調戯ひながら後から尾いてゆく。眼尻が皺んで始終嬉しさうに笑んでゐる。
「妾の許へ來たんだなんて云ふから……」
「それが惡いのかい。」
「可笑しいわ。」
笑ひ度いのを我慢してゐると云ふ樣に、貴枝は頰を膨らまして、眼を小さくした。綠屋の前まで來ると、家内を覗いて貴枝はお辭儀をする。知つた家だなと思ひながら、綠紫は少し離れて歩いた。
「兄さん。何故昨日來なかつたの。」
今度は不平さうに拗ねた顏をして、又貴枝は綠紫に摺りつく。
「用があつたから。待つてたかい。」
「待つてたわ。」
眼も濕んだかと思ふ樣な聲を出す。待つてゐたのでも何でもないので寧ろ忘れてゐたのだらうのに、貴枝は眞實めかしく斯う云つた。
十五歲の幼稚な頭腦で、何うして斯樣な男を僞る言葉が出るのだらうか、と綠紫は其れを面白がる。
「兄さんが戀しくつてかい。」
と綠紫は試に斯う聞く。
「え。」
と點頭いて、通りかゝつた餅菓子店を覗きながら、
「兄さん。毎日いらつしやいな。毎日來て頂戴よ。」
「兄さんなんかが、來たつて仕樣がないぢやないか。貴枝さんは市村座の花雀が好きなんだらう。」
何う返事を爲るだらう、と綠紫は貴枝の肩に手をやつてその顏を守る。
「花雀さんは花雀さんよ。兄さんは兄さんだわ。」
と濟ましてゐる。何う違ふのと聞かうとすると、露路を潛つて貴枝は早走に宅の前まで行つて了ふ。其所が料理店あづま樓の裏口になつてゐる。
「兄さん、お先き。」
と聲を掛けて置いて貴枝は格子を入つた。
「お歸んなさい。降つて可けませんでしたねえ」
と婆あやが葭戸を開けて下の方から顏を出した。[illegible]を[illegible]ぎ、抛り出して室内へ入ると、婆あやは膝から下へ搔卷を被けて、肱枕になつた儘で顏だけを持上げてゐる。[illegible]りしたメリンス友禪の夜着が、煙草盆と一所になつて散在かつてゐる。婆あやの行作を見て、阿母さんは不在だと貴枝は直ぐ察した。
「何所へ行つたの。」
「阿母さんはお店ですよ。」
「然う。兄さんがいらしつたのよ。」
婆あやは、肱へ載けた頭髮を再び上げて、齒の抜けた窄んだ口をもぐ／＼爲せながら、皺びた顏に釣り上つた眼だけを働かせて、何所へと云つたやうな顏で貴枝を視る。
「今日は涼しいね。」
と其所へ綠紫がづかりと入ると、流石に被たものを剝ねて婆あやは起きたが、
「能くこの降るにねえ。」
と億劫さうに立つて、雜と其邊らを片附けながらわざと面倒臭さうな顏をした。貴枝は婆あやの後へまはつて「いゝ」をしながら、小さな拳固で打つまねをして綠紫の方を見て笑つた。

五

「お貴枝さんは、琴のお師匠さんへ行きなさる

んでせう。遅くなりますよ。」
と凌あやが隣室の静かなのを怪しむ様な言葉附で、聲をかける。
「あゝ。」
大きにお世話よ、は口の中で消して了ふ。貴枝は緑紫の傍で習字をしてゐた。
簾が捲き上つて、店の庭續きを區劃つた小さい店が見通された。
叢筍の上に安置した稲荷の祠が松の蔭になつてゐる、小さい階段の上に乗せた油揚が、黄色く二枚重なつてゐる。石の地蔵像が丸い玉子形の石の上に立つて、楓の樹の下に雨宿りと云ふ見榮である。縁先に大きな箱庭が荒れた風情で、蒸した小松が揃えて了つたのが抛り出されてる。黒く、もう杯になつた松葉牡丹が、薄桃色に蒲と花を咲して、暗いやうな庭の中に雨に煙つてゐた。
「つまらないくさ——と傍ら溜息にお書きなさい。然う固れくにしちや駄目よ。」
と緑紫が幻佯的な言葉を使ふ。
「だつて、上手く書けないのよ。」
と甘える。筆を持つて下さいと云ふと、細い緑紫の腕の毛が、貴枝の中へ触れる。緑紫は貴枝の手を後から持ち添へて書き流してゐる。

「お、痛つ。」
と云つた仰山な聲に緑紫が手を放すと、貴枝は四稜紅石の入つた指環の上から自分の手を撫でて、顔を顰めた。
「其様に強く持つちや痛いわ。亂暴だわよ。」
「痛かつたかい。何う……」
と緑紫はその手を取つて検める。
「此様になつちやつたわ。」
と指環を抜いて見せる。
「そりや、指環の痕だ。」
緑紫は若い氣になつてゐる。三十七の中から二十を減らして十七に返つた心持でゐる。戀の手習ひをしたお染久松は、何の位の程度まで幼稚らしい事を云ひ合つて埒もない事を興じ合つたのだらう、と不圖然う云ふ事を考へた。
「さあ、もう少しお習ひなさい。」
「もう澤山、御遠慮はいたしません。」
貴枝は高慢に憎い口を利く。そしてころ／＼と笑つてゐる。筆も紙も机の上へ投げ出して、袂を繋いだ片手を長く枕にして、身體半分其の上へ横にする。縮緬の腰卷が片膝從に露出しになつて、その下からさすが子供つぽい小さな足が食み出してゐる。緑紫は少し眞を惜まされる。急に二十を老けて了ふ。そこで大島の袂から敷島を取り出した。
「ぢや、止すさ。」
「うそよ。うそよ。教へて頂戴よ、ね、兄さん。よう、ようつてばさ。」
貴枝は寝た儘、緑紫の袂を搖ぶる。そして、何かふつと見開けた様な眼をして、
「あら、あら、兄さんの此邊に白髪があつてよ。まあ。」
「何所に。」
「此所んとこ。」
と依然寝た儘、指で緑紫の鬢を指す。
「抜いて頂戴。」
若白髪だと緑紫は氣にしてゐる。
「やつとこで。」
「いゝ、いゝ、やつとこ、何だいそりやあ。」
「釘を抜くもんだわ。ありや然うぢやないわ、……毛抜きよ。毛抜きよ、ね。」
「釘抜きで抜かれて堪るもんか、坊主になつて了ふよ。」
貴枝は嬉しがつて笑ふ。笑り笑つて泣いた様な眼を為る、顔を眞つ赤にして白い額を汗滲ませてゐる。小さい指の後れ毛が、細い襟元へ掩ひ被さつて、根の抜けた稲穂がいくつか、ついてくる。
眞つ赤な顔もちんとみ掛けの細で目を開けて

の中に下つて了つてゐる。
格子の開いた音がした。
「おいでなさいまし。」
と挨拶してゐる婆あやの聲が聞えるとすぐ、婆あやは麻布の姉さんが來たと云つて貴枝に知らせた。貴枝はどうしようと云ふ樣な顔をしながら、
「構はないの。」
と小聲で綠紫に囁いた。
「構はんさ、何故。」
さう云つた綠紫はわざと貴枝の云つた言葉が解らないやうな顔をして見せた。
婆あやに挨拶しながら、入つて來た富枝は兄を見ると思ひがけないと云ふ顔をして默つて立つた。さうして何所となく二人の顔に白けた色の見えたのが富枝に極りの惡い思ひをさせた。
「姉さん。ちつとも來なかつたぢやありませんか。隨分しばらくよ。」
さう云つて貴枝は嬉しさうに富枝の傍へ寄り附いて姉の手を自分の肩にかけたりしてまつはり附いた。
「ねえ姉さん。姉さんの作へたのをお芝居でやるんだつてねえ、實に豪いつて阿母さんが然う云つて賞めててよ。」
貴枝は綠紫ゐるのも忘れたやうな顔をして、富枝にばかり縋りつきながら、足をとんとん踏んで子供の跳ねる眞似をしたり、富枝が簞笥の衣桁へコートを持つて行かうとすると、それを引奪つて、自分で掛けてきたりしてお世話をつかつた。
「ねえ、姉さん、大和座で演るんだつてね、妾、嬉しくつて仕樣がないのよ。」
坐つた富枝の傍へ來て、今度は膝によりかゝつた。
「ほんとに貴枝ちやんは、人の身體へ密着くのが好きね。暑苦しいぢやありませんか。」
と云つて富枝は綠紫の方を見る。綠紫は默つて貴枝の風を眺めてゐた。
兄さんにも、此樣にして貴枝ちやんは縺ひ附くのだらうか、兩人限りで、今何をしてゐたんだらうかと富枝は二人の顔を見比べた。貴枝の小さな身體を鷲づかみにする大きな手が富枝にふつと見えた。
綠紫は歸ると云ひながら獻上の卷帶を締め直して立ち上つた。貴枝は、ほんとに厭な兄さんよ、と云ふ眼遣ひで下から見上げてゐる。そしてその眼を姉さんが見れば好いと云ふ樣に、一寸々々姉の方にも眼をやつた。
「お歸りになるんですか、兄さん。」
何時か素直な態度で、富枝ははつきりとした。
「歸るの。兄さん。」
貴枝も姉に聲を合せて、意地惡さうな聲を出す。兄さんより姉さんが大切だと云ふ樣に、貴枝は綠岡と富枝の膝に縋つてゐる。
例も綠紫の歸る時は、母親が見てゐないと、貴枝はその手に取着いて歸さないと云つては大騷ぎをする。背負つたり抱かつたりして甘え放題をやる。今日は母親のゐる時と同じに、富枝を恐れて貴枝は綠紫を追ひ出さうともしない。
綠紫は、父來ると云つて歸つて了つた。
「兄さんはこの頃、毎日いらつしやるの。」
と其の後で富枝は貴枝に聞いた
「えゝ。この頃は毎日のやうだわ。ほんとに厭な兄さんなのよ。」
云告口をする口調で貴枝は云つた。
「妾の手を引つ張つたり何かするんですもの、恐くつていやだわ。縁日や何かに連れてつて呉れるのよ、然うすると、必然暗い所を通らせられるの、さうしてねえ……」
恥含んだ樣な顔をして、泣面をかくやうな口附をして、貴枝は富枝の指を彈いた。
「さうして……」

富枝は貴枝を疑はずにゐる。今云つてる事が貴枝の眞の情だと思つてゐる。此樣な無邪氣なものを、庠ぶ兄の綠紫が、敵とも思ふ程憎く憎く思はれてくる。

「さうしてね、頰邊を吸つたりするの。だから何時でも然うすると返して頂戴つて云つてやるの。先の樣に綺麗な頰邊にして頂戴よつて云ふのよ。」

十歲ぐらゐの言葉附になつてゐる。何て愛度氣ない事を云ふのだらうと富枝は可愛くなる。後から抱き締めてやると、弱々と寄り掛つて、口を結んで頰を膨らせて甘え顏をして見せる。

「兄さんが連れてつてやると仰しやつても、貴枝ちやんは成るだけ行かないやうになさい。兄さんだから構はないけれども、貴枝ちやんも最う妙齡一杯なんだから、自分で男の人となんぞ外を步かないやうにするんですよ。假令兄さんでもねえ。」

貴枝は何と思つてるのか點頭いてゐた。その細い頸首を見詰めてゐると、椽廊下傳ひに養母の[illegible]から[illegible]てきた。これも貰ひ子の九歲になるおむつちやんが、若い女に手を引かれて後から尾いてきた。

女は[illegible]前後の[illegible]の[illegible]を[illegible]てる。黑地へ白く秋海棠を拔いた琥珀の帶を、小さく結んでゐる。洗ひ髮を大きな銀杏返しに結つて、薙刀鬼灯を鳴らしてゐる。色の白いところへ口尻の黑子が目に立つた。

肥大つた身體を重さうにお埒は坐ると其處に抛り出てる貴枝の踊り扇を取つてばた〳〵と煽いだ。浮世のあらゆる荒い風に吹曝した眼を、小さく瞼の内に潛ませて容易には光らせもしない。楮ら顏の頰は悠然と常住笑を湛へてゐるやうに見える。總髮の丸髷の眞中が少し禿げて、蒔繪の櫛が落ちかゝつてゐた。

おむつちやんは、富枝よりも一所に來た女の方が好きと見えて、遠くからお叩頭をしたばかりで女の傍を離れずにゐる。赤いリボンがお下げの毛と同じ長さに垂つてゐる。

「千萬次さんは富枝さんと初めてかい。」

お埒が女にかう聞くと、

「はあ。」

と云つて女は黃金の延べを火鉢の緣で二三度叩いた。長い簪が其の度に搖れた。

「然うかい、御紹介を申しませうかね」

「へえ、この度御紹介いたしまするは滑稽なるところの……」

と貴枝は大きな聲を出す。

「道化てるねえ。餘つ程……」

とお埒が云つて一同大笑ひをする。

「お話にや伺つてましたけれど、妾がむつの姉ですよ。」

と千萬次は少し首を下げた。

「矢張り、繫がる緣で姉妹見たいなもんだからねえ。何彼に附けてお互に力にねえ。」

とお埒が口を挾む。

「それ、先日の話の、この女の作つたものを芝居にするんだつて云つたらう。この女だよ。」

と自慢さうな顏をした。

「豪いわねえ。女の方でねえ。」

と千萬次は煙草を喫みながら富枝を見た。富枝は自分の作つたものを斯う云ふ人たちに何うのかうのと云はれるのがいやで默つてゐた。自分でも誇りたい樣な事だとも思つてゐないし、この人たちにも豪いと感じられさうにもない事を仰山に豪いわねえ、と賞められたのが馬鹿馬鹿しくて滑稽だつた。富枝は俯向いて苦笑ひした。

「養母さん、江戸やの花ちやんね、御前に拵へて貰つた洋服が三千圓たつて、さすがに羨ましくなつちまつたの。」

千萬次は[illegible]な事を云ふ。

「厭んたね、賑い事を吐くぢやないか。お前さんも拵へて貰ふさ。」
「妾の御前は、吝だから呵けないのよ。手鹽にや依らないよ。養母さん、男に依るわ。」
「然う云ふ男を探すのが手數ぢやないか。」
「これは、確かに一本……參つた。」
蔦枝が笑ひやうに[illegible]かたと富枝は見てゐた。門で車の留まる音がした。格子が開いて、男の聲で何か云つてる。
「舞鶴屋さんですか。」
と取次に出た下女の聲が聞える。
「内儀さんは。」
と高慢な男の子の聲がつゞく。
「あ、三之助さん！　舞鶴屋の……お入んなさいな。」
とお埒が反り返つて大聲で云ふ。
「今日は急ぎますから、これで……」
とこれは大人の男の聲。千萬次が心得顔に出て行つた。
葭戸の蔭から白つぽい博多平の袴がちら／＼して、肩上げの深い紹縮緬の黑の紋附も見えた。
「先日は、有難う存じました。」
と男の子が云つてる。
「まあお上んなさい。阿父さんの代理。」
「いえ、まあ何分とも……」
と男が男の子の手を前で組んで、頭を下げたのが見える。
「内儀さんへ宜しく。」
「三ちやんはお化粧もしないのね。」
「えゝ。この上粧ると、[illegible]ますからね。」
格子が閉まると千萬次が薄い桐の箱を持つて笑顔で戻つてきた。
葭戸の傍から立つて覗いてゐた貴枝も、千萬次と一所になつて戻つてきた。
「[illegible]が巧者いだけあつて、高慢ちきねえ。」
と千萬次が養母に云つた。
「お師匠さんの許へ遊びに來てもね、そりやお高慢よ。小役者つて一同に嘲弄はれて、そりや面白いの。」
「春彌さんの許へ行くの。」
「えゝ。」
「春彌さん、この節どんな。」
「小言ばかり云つて、怖いのよ。」
「八つ當りなのさ。」
「えゝ、立花の一件なのよ。」
と舌を出した。富枝は貴枝の喧噪ぎ出すに作れて、漸次調子の賤しくなつてくるのが情ないやうで、凝視とその顏を見詰めた。此樣な人等の中に交つてゐるから、知らず[illegible]のだと可哀想になる。[illegible]を[illegible]つて其れを使い[illegible]てゐるのだと、幼い貴枝の[illegible]、自分に責任のあるやうな[illegible]を作[illegible]へば他人だけれど、[illegible]一人の[illegible]を、無しにして了つては[illegible]して保護してやる姉の甲斐がなくなる、と富枝は律儀に考へた。貴枝を眞面目な人にしようと何うしようと、これからだと思つてゐる、もう半ば[illegible]生地を失つてゐるとは氣が付かずにゐる。
「二十日がお浚ひなのよ。姉さん、いらつしやいな。」
と貴枝は富枝に[illegible]る樣な[illegible]で云つた。
「[illegible]館よ。お月浚ひなんだけれど、今度は大仕掛けよ。[illegible]にやるんだつて。」
「貴いちやんは何を演るの。」
と千萬次が聞いた
「いろ／＼なものを擔ぎ出すんで、驚いたよ。兩面のお組をやる、近江のお兼をやる、小蝶をやる。大變さ。」
とお埒が茶器を揃へながら、笑つて云つてる。
「上手だから仕方がないわね。衣裳は。」
みんな古いんで胡麻化しさ。小蝶だけわね、

あとを長繻袢にしても可いと思つて、白縮緬へ例の剥身縮緬を染めさせたんだよ。」

「可いわねえ。」

千萬次も浮かれた樣な顏をする。

「其れでね、切りがね、姉さん、お師匠さんと三輪さんの關の扉なのよ。妾に小町をさせるつてね、お止めになつたの、もつと大きくなけりや可けないんですつて。」

「三輪さんて、男。」

「役者。女役者だつて、それで學問がよく出來るんだつて。」

なつかしい名を聞くものだと富枝は話の方へ顏を向けた。こうして三輪何と云ふのか貴枝に尋ねたけれども貴枝は知らなかつた。顏や姿を聞いても貴枝はたゞ、

「美い女。」

と云ふばかりだつた。

富枝の知つてる三輪さんもよく女優になると云つてゐた。學校を出てから富枝の許へ度々來るうちに緣柴と關係があるやうなことを都滿[illegible]たので三輪は怒つて富枝との交際も止めてしまつたが、富枝にはその三輪さんは忘れ[illegible]ない人であつた。[illegible]る三輪さんぢやないかと富枝が云つたので皆が珍らしさうな顏をした。

「明日でも、其の人の名前と住所を聞いて來て呉れなくつて。姉さんが斯うだなんて云はないで、ね。」

「えゝ可くつてよ。聞いてくるわ。脊の高い人よ。妾なんかにでも面白いことを云つてよ。」

と思ひ出した處を添へる。

「幾歳ぐらゐ。」

「姉さんよりもつと年を老つてるわ。」

「美い眼ぢやないの。」

「えゝ、美い女。お師匠さんが例も賞めてるわ。ほんたうに。」

千萬次は、その時お埒の傍へ行つて何か小聲に話をしてゐた。話をしながら指環を拔くと、お埒は、

「いゝよ、そんな事をしないでも。」

と云つて、奥の座敷へ立つて行つた。

雨が止んで、暮れ際の窓が、日光を含つた樣に薄明るくなつた。

六

[illegible]女世界の訪問記者だと云つて、仲司八重子と云ふ名刺を通じさせた人は、富枝の前に俯向き[illegible]ちで、

「私は、皆樣を御訪問申して、お話を伺ふと云ふ樣な…柄ではない樣で御座います。」

と[illegible]に此樣なことまで自分から云ひ出してゐる。

斯う云ふ職[illegible]柄の人の風姿としては珍らしく、品の好い銀杏返しに結つてる。惡く云へば馬の尻尾の樣な毛だが、澤山な艶のない毛が濃いには非常に濃い。少しお出額で色の黒い中窪み[illegible]眼に眼[illegible]をかけてゐる。何所か儀式めいた場所へ出席るのだ[illegible]見えて、纏めた樣な空色の縮緬の紋附を着て濃い栗梅に花の模樣を織り出した繻珍の丸帯を高く締めてゐる。白鹽瀬の半襟か、尖つた[illegible]の下にきちんと重なつてゐる。

「隨分、お骨が[illegible]折れになることで御座いますわね[illegible]」

高い調子で[illegible]物も云へない樣子を見て、富枝は[illegible]の毒だと[illegible]する。

去年大學を卒業してゐるので、富枝には先輩に當つてゐる[illegible]とは云へ僅の見知り越しと云ふ[illegible]けで、[illegible]には[illegible]と顏を合せても挨拶さへ爲す[illegible]過した[illegible]である。けれども、富枝は在[illegible]時代の[illegible]はしを忘れずに先輩として敬意を拂つた。

仲司の方では富枝を社會の人として見てゐる。新時代に初めて現れた、最も望み多いところの女作家として尊敬する。そして、劇作家として婦人として立つに就いての抱負を聞かして貰ひ度い、と云ふのが今日の訪問の問題だと云ふ。

「何卒、お聞かせ下さいませ。」

と詞辯な口を滋らせて、仲司は促す。膝の上に小さな手帳が開かれた。

おきそが、狼狽てた風で紅茶を二つ、盆に乘せてきた。朝起きた時、薄ら寒いと思つて引つ掛けた羽織を、富枝は脱いでおきそに渡した。紅絹裏が疊へ射した朝の日光を受けて、赤く燃え立つた。じわ〳〵と鍋の底が漸次に熱くならうと爲る樣な朝の氣候が、晴れ上つた空のうちに見えて、庭の隅の鷄頭の花が、赤く乾いた色にそよいでゐるのも涼しくはなかつた。

「母ちやん。お人形にもマチマロをやつて頂戴な。しづちやんにもよう。」

「何ですね、お行儀の惡い。手々を出さないでも、おちやんとしていらつしやい……叔母さん、世話が燒けたでせう。」

「いゝえ。温和しかつたんですよ。」

などと云つてる聲が茶の室の方から聞えた。

緑紫の弟の家へ四五日宿りに行つてゐた子供の紫都子が、今日弟嫁に連れられて歸つて來たので急に一人の子供の爲に家の内が騷々しくなつてゐる。

「すつかり、お寒さが冴返りましたよ。」

と、おきそは汗だらけだ。

紫都ちやん、と富枝は呼んで見度くなる。此所へ呼んで、抱いてやり度いと思ふ。おきそに然う云はうかと考へてる間に、おきそは忙しさうに行つて了ふ。

「で、學校の方は斷然お捨てになりましたんですか。」

と妙に斷然に力を入れる。

捨てようとも思はないが場合が惡くなつて行かずにはゐる、愚圖々々に止めるやうになるのだらうと云ふ樣なことを富枝は無興味な顏して云つた。

「然し學校の方では別に何とも申しますまい。校長の意見なぞは何うで御座います。」

無論問題にたつてゐると知りながら、女の記者は態と斯う聞く。何も纏つた思想があつて筆を持たうと思ひついたのでもないから將來も作家で立つやら何やら分らないと云つて富枝がまとまつた談話をしないので、自然の話の中に[illegible]、其れを物にしようと待ち[illegible]は拙劣だが、馴れてゐるだけに此樣な作[illegible]する。

「あ[illegible]ですから……」

と云つただけで富枝は口を噤んで了ふ。迂濶り順序もない事でも云つて、其れを仰山に書かれては困る、と用心をする。

「折角參つたものですから、それでは御作の苦心談でもお聞かせ下さい。今日の問題は他日に伺ふことと爲まして、せめて然う云ふお話でも……」

と責め立てる。

折角貴枝に聞かせても、一向不得要領だつた三輪何某と云ふ女を、今日のお遊びに伴ながら見る積りでゐるので、富枝は次第に氣忙しくなつてきた。

「苦心に程の苦心もありません。唯一寸書いて一寸出しただけです。出來心とでも云ふんでせうか。」

と少し焦慮出してくる。一寸書いて、一寸出したと云ふ一寸か、滑稽趣味を帶びる。自分の逢ひ度いと思つてゐる三輪さんだつたら何うしよう。……三輪初女さんだつたら何と云つて逢はうか、と富枝はもう今から胸が騒いでゐる

ので、執拗く聞かれる程、仲司の眼鏡が癪に觸つてくる。そして直ぐと、

「今日は少し急ぎの用事がありますものですから何うも落着いてゐないものですから……」

と、自分の態度に氣が附いて、辯解をした。

「いゝえ、飛んだお妨げを致しました。今度お暇のときに是非伺はせて戴きませう。何日頃がお樂でいらつしやいますか。」

と先方も切り上げにかゝつた。

「何日と申して……別にお話し致す樣な事も御座いませんから、もう是れで。」

と富枝は斷つた。

仲司は默々として手帳を片附ける。髮に不調和な眼鏡が閃りとする。丸々とした、手の甲に窪みを持つた兩手が、黑い繻子の風呂敷に絡んで動いてゐる。

「少し執念深い樣ですけれども、是非伺はせて戴きます。御用事のお閑な時を見計らつてお伺ひ致しますから……宜しう御座いますか。」

と押附けた樣な言方をした。

其れをも富枝は聞いて居ない、其處に年齢の差と、多少社會に出て、自由的の活動をしてゐる人と、笄町の兄の家に平凡無事な生活をしてゐる人との懸隔が現れる。

「お五月蠅くとも、一言で結構で御座います、是非お願ひ致しておきます。」

と云ひ切つて仲司は暇を告げる。

送り出して了ふと富枝は茶の室へ入つた。朝夕新聞記者の花澤が、主人めかしく胡坐をかいて、紫都子を遊ばせてゐた。

「富枝さん。何故もつと氣焔を吐かないんです。弱いなあ。」

と富枝の顔を見て笑ふ。鼻の大きな、眉毛の濃い、細面の顔を自棄に仰向かして、まじ／＼とする。分けた髮の毛がはらりと四角な額にかかる。

「姉ちやん、何處行つてたの。」

と紫都子が母親似の眼を丸くして見上げる。禿切りの髮がふさ／＼と、白い胸掛の紐の上に揺れる。

「紫いちやん。長く宿つてたのねえ。阿母ちやんが戀しくはなかつたの。」

と頬摺りして抱きよせる。

「お宅、歸りたくなかつたのよ。」

と紫都子は威張る。小さな指で、花澤に拵へて貰つた卷煙草の箱で出來た人形を弄つてゐる。

「此樣に弱いところを見ると、半田君が氣を揉みますぜ。」

花澤の細絲編みのネクタイがだらり／＼と動く。勝手の方でおきそを叱つてゐる都満子の聲がぴんと響く。

其所へ、弟嫁のおきたが入つてきた。丸髷に赤い手柄をかけて、初々しい姿をしてゐる。細かい鼠縞の縮緬の着物が光つて見える。

兩女が挨拶をしてゐる間、花澤は紫都子の髮の毛を引つ張つて、チウ／＼と鼠の鳴き眞似をする。紫都子が小さい手で、自分の頭を撫で廻した。

「花澤ちやんよう。」

と長い袖で花澤を打つ。

「ねえ、富枝さん。富枝さん。」

と花澤が小聲で呼ぶ。

富枝は聞かない振りをして、自分の室へ退つて行つた。

「僕にまで逃げなくつてもいゝぢやありませんか。」

と後から大聲をする、そして、

「逃げやしないわよう。」

紫都子が云ふと、

「さうぢやないわよう。」

と紫都子の口眞似をしてゐるのが聞えた。

富枝が書齋へ入つてくると、縁側から窓越しに机の上を覗いてゐた書生の美樹が周章てて雑巾をバケットの中へ押し込んでざぶ〳〵と遣り始める。捲り上げた白絣の袖口が綻びてゐた。

机の上に何を乗せて置いたかしら、と前へ来て見ると、上田りん子からの手紙が展げた儘になつてゐる。原稿ででもあるかと思つて覗いてゐたんだわ、と可笑しく思ふ。中腰になつて、手紙の讀み掛けを讀む。

お話の題は「虚名と實力」と申すにて候。畢竟は貴女様の「塵泥」を含んでのお話に候。名を外に弄せんとするよりは、内に力を養へと……申す樣な、例の調子の校長のお話にて候ひき。

彼の日には蔭でいろ〳〵と批評をされし方々も、彼れから缺席續きの貴女様を急に懐かしがり出して、天才の荻生野さんを失つては、文藝會が寂寞しくなると申して大騒ぎに候、秋期の文藝會ももう直のことに候、平生より校長も貴女様の文才は限りなく、賞揚され居り候ことなれば、半途にて御退學など成され候ときは、御不本意のことと存じられ候、また、或る方々、漏らされ候校長の語氣のうちにも貴女様を惜む樣なるところ相見えし由、平氣にて御登校遊ばさるゝが宜しきかと存じ候。

今度の會には、私の作詩を二年生の櫻川よし子が朗讀する由に候。一星の林の方に候。

繰返し、御退學の意志に就て、御再考あそばさるゝやう祈り候。

菫色のインクで書いてある。讀んで了ふと、もう一通を取り上げる。白の封筒へ小野流で房田染子とかいてある、高等女學の方の五年の生徒である。春の文藝會の時、富枝の作いた「早子姫」と云ふのその主人公に扮して演じた生徒だ。

奸臣の讒言に由つて、遠く逐はれた生母を尋ね歩く、と云ふお伽噺の樣なのである。

其の日臨席して、染子の早子姫を觀た生徒の父兄や、校の生徒は、誰一人として動かされないものはなかつたのである。校長までが涙を催したと云ふので大評判であつた。十分俳優になる資格があると云つて、天才だと云つて舌を捲かせた。染子は今の文部次官の娘であつた。

其れから富枝は染子と[illegible]を出したのである。

お懐しいお姿に[illegible]て、[illegible]の桐の木に寄つてはぼんやりと致してをります。[illegible]様が其の桐の木へ[illegible]けなさいました。

何故登校遊ばさないのでせう。染子をお忘れあそばして？ いやでございますわ、お姉様、せめて御手紙なりとお示しあそばされてもとお恨みに存じます、お姉様のお見えにならぬ限り、泣いて、泣いて、泣いてくらすもののあるのをお忘れあそばしますな。

富枝は一寸手紙に接吻すると、急いで、小形の用箋紙を引展ばした。

當分學校へは行きませんから、わたくしの許へ遊びにいらつしやい。待つてますよ。

と走り書をする。上田へは返事を書かないでおく。

「半田さんは何處へ引附けられてるんです。この頃は顔も出さないのね。」

と云ふ都滿子の聲がした。男女の笑ひ聲が交つて、賑やかに聞える。反對に、富枝の心の

狀態が今靜かになつてゐた。夕暮れを吹く秋の風のやうに何か淋しいものが富枝の胸の底を搖ぶつては過ぎた。富枝は搖ぶられる儘にその淋しいものに親しまうとしてぢつと机によつてゐた。

七

演藝館の樓上には、藤間[illegible]の弟子等の親類や知己で滿員になつてゐた。

春姉さん〳〵、と云ふ聲が幾分も他を[illegible]んで引かれてゐる。此だの日出處だのと云ふ比羅に交つて、富枝などと書いたハイカラなのが、窓から入つてくる風に搖らぎ立つて、滿員の入場者を煽ぎ立ててゐる。人と人との間にすし皿やサイダーの瓶が席を占めてゐる。舞ひの印半纏を着た若い男が白[illegible]の尻端折になつた描いた眉の下[illegible]つた一歳ばかりの子を抱へて讀中へ割込んでくる。[illegible]の紺の[illegible]が出て怒つた肩へ垂れ下つてゐる。

「おい〳〵、結構でしたねえ。」

と云ふ若い男が立つて其の子を抱き取る。

「よく出來たねえ」

と白髪の女が扇子を開いて[illegible]、[illegible]年頃の女、四十人ばかりの一團が[illegible]を寄せ合つて、其の子を代る〴〵賞め立ててゐる。隣席の一組が、遠くから覗いて、何だらうと云ひさうな顏をしてゐる。彼樣な踊り振りでも嬉しいのかしら、と云ひさうだ。

千萬太が、義理で連中を拵へたと見えて、商家の女房らしいの、待合の女將らしいの、生眞面目な素人風の娘など、十四五人もの組の中へ入つて幹旋の勞を取ると云ふ風で、粹な姿を泳がせてゐる。富枝は伴れもない一人の身體を裏梯子の上り口の柱に凭せて背後の方から然うした種々な光景を眺めてゐる。

部屋詰らしいのを連つて、十三歳位な女の子が通る。派手な源氏車の染拔いた縮緬の浴衣を着て、紫博多の帶を貝の口にしてゐる。後から腰元らしいのが頭を結めて隨いてゆく。先刻忠信を踊つた子に似てゐると富枝は見送つてゐる。

「富枝さん、ちよいと。」

直ぐ其の後から梯子を登つて來た女が、首だけ出して富枝を呼んだ。

振り返ると、お琴が手招ぎをしてゐる。

立つて行くと、

「お辨當をね、部屋に出してあるから、一寸今の間にお濟ませなさいな」

と先きへ下りる。富枝も伴いて下りる。幅の廣い廊下に出る。便所を横にして右へ入ると衣裳部屋にした室前になる。貴枝が浴衣の上へ桃色の扱帶を締めて、其室に立つてゐる。傍に薄紅梅色の狩衣を着て、島田の鬘を被たのが腰をかけてゐる。緋へ繍をした衣裳の裾が白と裏になつて長く後へ曳いてゐる。振袖の袂も重さうに兩端へ曳いてゐる。雛の樣だと思つて富枝は見る。

足袋を穿かずに衣裳を着て了つたと云ふので、腰をかけて穿かせて貰つてゐる。

「足袋を穿かないで、衣裳を着る馬鹿があるかね。」

と後見らしいのが傍から叱つてゐる。

其れに會釋してお琴はこの室を通り拔ける。富枝も一所に行く。貴枝は富枝を見ても知らん顏をして挨拶もかけずにゐた。

「隨分狹いとこだけれど、二階で一人で食べるよりはねえ。」

とお琴が富枝に囁く。

「作さん一人ぢや[illegible]の間に合はないんですよ。お師匠さん、一寸來て下さいな。」

と向うの部屋の外から若い男が聲をかける。

應じて一人が出てくる。お師匠さんと云つたの

で、美しい[illegible]判の作[illegible]と云ふのかと思つて富枝が注意をすると、存外低い色の黒い女で黒の紋附に繻珍の帯を矢の字に結んでゐる。

大きい廣間へ連れられてきた。仲間々々が自然に一構の域を作つて、方々に團結つてゐた。電氣が點いてゐて、白壁がぱつと明るく眼に映つた。

店の女中が三人も來て手傳つてゐる。千代田袋だの風呂敷包みだの、何が入つてゐるのか其邊に充滿散在かつてゐる。果物の籠、菓子の箱、繩で縛つたシトロンなどが、競爭の姿で並んでゐる。此所にも壽司の皿が平たく威張り込んでゐる。

富枝は重箱を乘せた膳の前に坐らせられた。女中の一人が茶を注いでくれた。

「鰻ですから、食れるでせう。」

とお柳は愛想を云つて置いて、

「今度お鐘たからね、盥だの曝布だの揃へておいて貰ひなよ。」

と女中に命令ける。女中は直ぐ立つて行く。

「寫眞屋さあん。寫眞屋さあん。」

と呼んでる聲が廊下を走る。

「開けても可いぜ。え、開けても可いぜ。」

と云ふ男の聲が、其れに絡む。

「阿母さん、阿母さん、頭髪の根が痛くつて仕樣がないよ、阿母さん。」

と自烈てる聲も聞える。富枝は箸を取る勇氣も出ない。餘りの眼眩しさに逆上せて了つて唯茫然と人と人とが衝突する廊下の方を眺めてゐた。

「はあ、何分宜しく。」

騒々しい音の集まる中を、不意に斜に裁ち切つた様な涼しい聲が透つた。紫紺色の羽織、白い足袋が富枝の眼に映つた。

自然眼に入る儘に、富枝は其の後姿を眺めた。

洗ひ髪を根で括つて、長く後へ下げてゐるのが重さうだ。長い耳前髪に後れ毛が密着いて、白い頬へ一刷毛掠らした様に見える。白つぽい絹布ものの單衣を着てゐる。片布らしい製りのスカラップバグを提げてゐる。見た様な着物だと富枝は眼を凝らす。廊下を向うへと抜けようとして、其の女は何か思ひ附いた様に後方へ引返してきた。

眞正面になつたので、女は座敷の中に富枝をふつと見る。富枝も振り向いた女の顔に目を向ける。思はずはつとした色が富枝の眼色に動いた時に、

「まあ、[illegible]、何うして此様なところに。」

と逸早く先方では[illegible]白い手[illegible]の紫紺の色が隈取つてゐた。

「三輪さん。」

と富枝は漸く立つたばかりで、[illegible]見たが身動きも[illegible]にゐる。

「不思議な場所でお目に掛るものね。」

と三輪は入口へ寄つてきた。そして、[illegible]しいと云ふ表情が、見る間にその彫りつけた様な眼の内に現れた。笑まずに結んだ口が人を和らげるだけの優しみを含んでゐる。長い睫毛が瞬打かれる。丁度涙を含んだ人の様に。

富枝は其の手に縋り度いと思ふ程情が熱して、其の胸へ頬を寄せて何かしら打解けた調子で物を語り度いと思ふ程、その胸が懐かしさに躍つてゐた。然しその顔色は平然としてゐる、何物か眼に止まるものを認めて猶其れを熟視してゐる様な顔であつた。

三輪は富枝の傍の人を憚つて入らずにゐた。富枝の立つてくるのを待つ、が、富枝が恐しく澄ました顔で起たうとも爲ずにゐるので一寸其の胸の中を計りかねて、

「後で貴女の許へもいらつしやい。」

と云ひ捨てて三輪は通り過ぎて了つた。行く時に始めて笑みを見せた。

「三輪さん、三輪さん、」と富枝は胸の中で其の名を繰り返した。そして、三輪さんと胸で呼ぶ時、戀しいものの形が判明と自分の心の中に現れる樣に、樂しいと云ふ氣が身體全身に開かれる思ひがされる。逢ひたいと思つてゐる人に逢へたと云ふ嬉しさが、初めて徐に胸の底へ湧き出したやうに思つた。

「無意な人。」

とお埓は聞いた。

「一寸、行つて來ますから。」

と富枝は其後から行かうと爲ると、

「これを食べておいでなさいなね。よ。」

とお埓が顏を顰めて引留めた。

「後になると、此處が混雜して可けないから。」

と不[illegible]待た。仕樣がないので箸を取る、いまだと思ふ[illegible]にかへる、瑠璃色をした[illegible]に、[illegible]色の[illegible]、小皿の上に美しい色を[illegible]てこれが、

「いまたお[illegible]な[illegible]。」

と富枝が[illegible]を云ひながら入つてくる。

「[illegible]も、今の間食べてお了ひよ。」

食べたくないもの、そんな[illegible]。

と拗ねてゐる。千萬次がおむつを連れてきた。

「お骨折だつたねえ。今度は切符だなんてんだから、骨が折れるねえ。」

とお埓がせか〳〵と物を云ふ。

「富枝さんも此方の連中の方に御入んなさいな。一人法師であんな隅にゐるんだもの。」

今日は潰島田の千萬次が富枝に斯う云つた。

千萬次は何とも思つてゐないがお埓は富枝の千萬次に對する擧動を快からず思つてゐる。千萬次が斯うして連中だの何だのと云つて貴枝には義理の姉妹の好誼を盡してゐるのに、富枝は眞の姉でゐながら其の好意を無視してゐる樣な樣子合に見えるのをお埓は不快に思つてゐる。畢竟富枝が千萬次に打解けて今日の事などもを感謝を表せばいゝのだが、富枝には其れができない。

貴枝は貴枝、千萬次、千萬次は自分、と其の邊の義理合を解らぬ質の富枝でもない。貴枝の踊りのお浚ひに見物人を殖やして呉れたところで、其れが有難い事とも思へないが、然し斯う云つた仲間に入つては、其れ等も一つの心盡しと此方から言つてやらねばならない位に心得てゐる。心では十分に考へてゐるのだが、富枝には其れを喋々する事が出來ない。お埓の胸中も、富枝には能く寫つてゐた。

八

薄鼠羽二重へ白く勿忘草を裾の方だけに散らしたマントを着てゐた。其の眼馴れない姿を見ただけで、おきそは富枝に取次ぐ時房田染子と云ふ名を忘れて了つた程驚かされて了つた。

マントを脫ぐと、濃紫の琥珀の袴が高貴の香を幽に響かせる。同じ濃紫の紋羽二重に源氏五十四帖を地紙形にして散らした總模樣の二枚給を着てゐる。その長い袂を土間に引摺らして靴を脫いでるのを、おきそははら〳〵しながら見た。頸へかけた黃金の鎖が搖れて銀のクロッスが氷の樣に冷たく其の胸を護つてゐた。

車夫が後から差出した花束を採つて、[illegible]の後を[illegible]い繰りながら上る。マガレットに結んだ濃綠色のリボンが、[illegible]を[illegible]けた[illegible]にも後から行くおきその眼には見えた。

「よくいらしつたことねえ。」

富枝は[illegible]の前の緣に立つてゐた。染子は其の[illegible]に抱きつきながら、

「富[illegible]さんよう。」

と云つた。そして、[illegible]つて花束を富枝に渡した。

富枝にあしらつたメーデンヘーアが、可憐に戰いて軟かい風情を見せてゐる。西洋石竹の桃色が贈り主の優美を代表してゐる樣に見える。受けた富枝の手に、銀色の紙から染子の手の温度が[illegible]れた。

「有難う。妾も逢ひたくつて仕方がなかつたの。」

と富枝は其の肩に手をかける。

「取散らしてあるけれど、此方へいらつしやい。」

「ねえ、お姉樣、お姉樣は妾の夢を御覽になつて。」

と取縋つた手を、まだ弛めずにゐる。

「えゝ、毎晩。」

「ほんたうに、え、お姉樣。」

「謔なんぞ。染子さんに謔は申しませんわ。」

染子は嬉しさうに笑つた。

かうして富枝の傍にゐるとき、染子は自分の身體中の血を富枝の口にくゝんで溫められるほどなつかしかつた。さうして取られた手をいつまでも放すのがいやだつた。

二人はぢつと手を握つたまゝ暫時緣側に立つてゐた。

細かい雨が[illegible]にほろ／＼と降つた。もう末になつた萩が横に倒れ伏せになつてゐて、紅い小さい花が吹けば飛ぶやうに二[illegible]ばかり枝を綴つてゐる。閉てた椽の硝子戸にも秋深い思ひが傳はれた。

「もう學校へは、おいで遊ばさないおつもり。」

と染子は白い半巾を口の邊に當てながら云つた。其所からミツノ香水の匂ひが散つてゐる。褪紅色の繻袢の袖の下から、腕環の黄金が燦とした。

「學校へ行かないでも、時々逢へればいゝでせう。其れでは可けないの。」

「妾、斯うして毎日々々貴女のお傍にゐる譯には何うして參らないんでせう、何故眞の妹に生れて參らなかつたんでせう。」

と云つて涙含んでゐる。

「妾の妹になんぞ生れていらしつたら、貴女は不幸な一生を送らなけりやなりませんわ。馬鹿なことを仰しやるのね。」

染子は首を振つた。富枝の沈んだ聲が悲しくつて長い睫毛のなかに溢れてる涙をまばたきして拂ひながら、手はぢつと握られたまゝで富枝の顏を振り仰いで立つてゐた。

富枝に染子を抱きながら室内へ入つて[illegible]

[illegible]に[illegible]、

[illegible]ミャンダ[illegible]

り[illegible]にし[illegible]して了つたんですもの

と云つて涙を出した。

[illegible]に、染子[illegible]

餘りに健康が勝れずにゐる、是れ半日でもいいから大磯へ來てくれと云ふ懇ろな通知で、二、三日大磯へ行つて、氷嚢を頭に置いて一晩[illegible]んでゐた染子を訪ねた事を思ひ出した。

染子は富枝を見ると懐しいと云つて泣いて[illegible]かりゐた。そして、其の晩は染子と同じ床の中に沙翁のテンペストの話を爲た。

「あのお話のつゞきをその内にして上げ[illegible]う。」

と云ひながら富枝が染子の濡れた半巾を取つて涙のあとに自分の唇をあてたのを染子は見た。染子はやつと笑ふやうな顏をして袖で頬をふいた。さうして、

「見て頂戴。」

と云つて、左手の腕環を外して見せたが、其の飾りにした小さな時計の蓋を刎ねると、其の蓋の裏にTとSとが組み合して彫り附けてあつた。

襟止の裾を彫らした小判形の金具が雙つに開くやうになつてゐて、其の内には富枝の寫眞の顏だけを縮寫したのが入つてゐた。

富枝はこれを見ると黙つて笑つた。

奥で紫郁子が泣いたり、都滿子が慳貪に何か云つたり、二階へ來客が來たり、何となく家内の忙しさうなのに氣を兼ねて、染子は思ふやうに心の内を語れないのを悶焦かしさうにしてゐたが、やがて歸ると云ひ出した。

富枝も自分を戀しいと云つて泣いた人を、この儘歸して了ふのは本意ない氣がする。けれど、斯うして向ひ合つてゐても兩人の情趣は直ぐ消えがちで、却つて手持なくなる様なのが辛いやうで、二三日内に近い所へ二人伴れ立つて一日遊ぶ約束をして歸して了つた。車の幌のうちに其の姿の包まれた時、何となく富枝は掌のものを失くした様な氣もされた。

[illegible]頃、圖書室にゐる時、音樂室にゐる時、ふと氣附いて四邊を見ると、必然自分の後に見える所に立つて染子が此方を眺めてゐた。富枝が見ると下を向いて急に何處へか行つて了ふ。他の友人と一緒の時に行遇ひでもすると、染子は伴れ立つた誰れ彼れに[illegible]を[illegible]か[illegible]たりする。そして[illegible]出して何處かへ行く。

其れが富枝の染子に對する注意の眼で迎へる初めだつた。其の次ぎに妹にして呉れと云つて艶麗な文章で手紙を寄越した。其れへ雜とした返事をやつてから四五日目に、一人で圖書室の前の桐の木に寄つてゐると、其の後へ何時か染子が來てゐて默つて立つてゐた。富枝は其の手を摑して、姉妹になる約束をしながら校庭をそゞろ歩いたが、櫻の盛りな頃で、染子の藤鼠綸子の被布に花の散つたのを富枝は憶えてゐる。

文藝會の時、自分の作つた早子姫を染子が演じてからは、富枝の方から染子の自分への熱の[illegible]猛烈に燃えてくる様なことを好んで書いて送つたこともあつた。

其様なことを思つて、富枝は恍惚とした。小雨の降る中を歸つて行つたが今夜も自分を戀しがつて、寝られないと云ふだらうか、と哀れに[illegible]になつてくる。晩に床へ就くまでの時間に間に合せて、手紙を送つて遣はしてやらう、と其の人の移香の消えずにゐる間によつて、紫[illegible]へと筆を出して、自分は今、紫色の夢を見度いと思ふ、濃い紫に包まれて、紫の中を彷徨して、紫の色に惱まれる夢が見たい、と書いた、[illegible]ひながら都滿子が其所へ入つてきた。

「今來た人は、お前さんに惚れてるの。」

「何故。」

「でもね、兄さんがお前さんに今の人は惚れてゐるんだと云ふからさ。女が女に惚れるつて有るかしら、妾生れて初めて聞いたわ。そんなこと。」

「いやな事を云ふぢやありませんか。そんなのぢやないわ。」

と忌々しさうな顏をする。

「そりやね、姉さんにしたいとか何とか云ふのなら無理とも思はないけれど、眞逆女が女に惚れやう道理がないぢやありませんか。兄さんも偶〻[illegible]なことを云ひ出すよ。」

「一體に兄さんは然うした方へ[illegible]するのね。[illegible]に低趣味よ。」

「[illegible]を[illegible]でなくつて何だ。」

と隣室の方で緑紫が云ふ。

「あの人の、お前さんは[illegible]」

と都滿子は[illegible]

た[illegible]い[illegible]に[illegible]いた[illegible]を見て[illegible]ゐる。

もう少し紫の色の影をそつくりしておきたかつたと富枝は口惜しい氣がする。毒々しい赤い色だの、汚らしい泥色だのが流れて來て、美しい紫の色を[illegible]して了つた、と[illegible]

した。
「一目で覺める樣な人ね、彼樣な人に思はれるならいゝわね、思はれ甲斐があつて。貴君なんぞは一時でもいゝから富枝さんに一寸代りたいでせう。」
と冷かす。
「まつたくだ。彼樣なことを云はれた富枝は何樣な顔をしてゐたか、其れが見たかつた。」
と笑つてゐる聲がする。
富枝は默つて、手紙を封じて了ふと、姉に見せない樣にして上書を走り書きする。泥濘を踏む車夫の足音を現なく聞いて、紫の人の思ひは此所に通つてるのだらう、と富枝は薔薇の匂ひをなつかしんだ。

九

「今日は、貴君の所謂掘出物の經歷を伺ひに上つたんです。」
髮のコスメが額際まで滲染み出した顔を突き出して、半田は洋服の胸を反らす。男としては黑い方ではないが、反齒が折角の男振りを損つてゐる。
「君は拔目がないよ。實に職務に忠だね。」
差對つてゐるのは文學士千早梓だ。圍んだ卓子の上には何時も雜誌が亂雜になつてゐる。片手を椅子からだらりと下げて、片手は皿の上の菓子を小楊枝で突いてゐる。
「發表しても可いのでせう。」
「可けないよ。」
「何故です。」
「まだ決定せんのだから。」
千早の笑つた影が、後方の書戸棚の硝子に映つて、内に並んだ金文字入の洋書が主人の笑ひを手傳ふ樣に搖いで見える。解しかねた半田の顔に、匍匐になつて頰杖を突いた洋畫の額の裸體美人が、上の方から媚めいた笑ひを浴せかける。
「君が輕率に筆を取らんと云ふ誓ひを立てたら、今夜その掘出物に逢はしてあげる。」
「其りやあ、貴君が書いちや可かんと仰しやれば書きませんさ。ぢや逢はして下さい。」
「必然書かないかい。」
「必然書きません、書かんと云つたら書きません。」
卷烟草の箱の、蒔繪の鶉に小さな唾が飛んだ。緣の何所かで松蟲が鳴いてゐる。
「だから逢はして下さい。」
「熱心だね、職務上逢はうと云ふんぢやないんだらう。」
「實に何樣なものか見たいですな。」
千早が笑ふと半田も笑ふ。
「然うなると、愈々容易くは見せられん。」
[illegible]眼鏡の内から笑ひの消え切らない眼をして、遠く大森の海を眺める。灰色の海が遠く自分等の居る所まで包んで了ふかと見える。薄い雲に掩はれた空が濁つて、笠になつて頭の上に蔽かつてくる樣に思はれる。片寄せた欄干の硝子戸に風が[illegible]當つて、卓子の上の雜誌の表紙が[illegible]る。千早のセルの袂が吸ひ附いた樣に飛び上つてひら〳〵した。
「一體、何樣な婦人です。」
「美、極まるものさ。」
「其りや然うでせうけれども、白粉をつけた從者がすきで墮落した女學生上りと云つた樣なものぢやないんですか。」
「異ふ。」
「まだ一度も舞臺を踏まないんですね。然う聞くと、から價値がない樣に思はれる。」
「おい、おい、誰が掘出したんだと思つてるんだい。僕が拾ひ出して朝暮の一座へ加れようと云ふんぢやないか。」

「大きに。」

と牛田は頭を掻く。恐縮した樣子がその肩を窄めたところへ現れる。

當時實業界でその名を響かしてゐる千早阿一郎は、千早文學士の父親である。

劇評もやる、創作もやる。脚本も書く。そして、當の力で藝人社會を壓伏してゐる。一度自分の作を演じると、直ぐ其の座の關係者一同を招いて大饗應をする。箱根邊へ伴れて行つて遊山もさせる。作者からは[illegible]強請をされるもの[illegible]に心得てゐる輩は千早のこの點ばかりに[illegible]。所謂ご[illegible]もの[illegible]貴族から先生と尊稱するのはこの學士に對つてばかりと云ふことである。

千早は新聞記者だけは[illegible]ひだと云ひながら、朝夕新聞の牛田稀吉ばかりは親密にしてゐる。隔意なく扱ふ。外にある時の千早の影には何時も牛田が添つてゐると云ふので、牛田は梓學士の幇間だと社内のものから譏られてゐた。

「[illegible]」

想像の出來ない人間だね。」

「是非伴れてつて下さい。」

老婆が麥酒を持つて來た。

「君は染谷の妹を知つてると云つてたね。」

「知つてます。」

「今度伴れて來ないか。」

「宜いですとも。大分女流の傑作をお集めですね。」

「既になつて了つたものには、用は無いんだよ。」

臙脂色の卓子掛が卓子を溢れた麥酒を受けて濃い色に濡れた。

大森[illegible]を過ぎる電車の音が、素通りも出來ないと云つて聲を掛けて行く樣に聞える。

＋

二臺の人力車が、朝菅[illegible]の門の前で停止ると、門前を掃いてゐた車夫が、先の車上の千早を見て、急に帚箒を抛つて上から押し潰された樣な叩頭をした。そして後方から下車りた牛田を見ると、

「牛田さん。先日は有難う。」

と女[illegible]に何か云ふ樣な事を云つてる。

[illegible]して結つて、髷を高く締めた下女が謹んで[illegible]へる。肥太つた朝菅の細君が——細君は[illegible]たと云ふが、其樣な面影が少しも殘つてゐない——綺麗に脂肪切つた顔を[illegible]かして[illegible]いてゐる。

帳場の電話室で、セルの袴を穿いた主人の聲が[illegible]れた聲を上釣らして、

「ふん。ふん。」

と受け答へをしてゐる。受話器を耳にした儘千早の方を覗いて見て眼に笑みを含たせて[illegible]へる。そして、

「然しねえ君。」

と電話に向つて調子を張り上げる。下女が案内する。兩人は[illegible]つた廊下を傳つて庭へ出る。[illegible]を廻つて[illegible]座敷へ[illegible]を[illegible]。

「直ぐ、タオルを濡らして差上げておくれ。よ うちやん、お前さんはお茶のお準備だよ。」

と細君が細い聲で命じるのが聞える。千早文學士の待遇は異つたものだと牛田は今更のやうに感心をする。

離れ座敷の丸窓から三輪が顔を出す。そして、直ぐ引込める。牛田は[illegible]へ取つたやうに思つた。[illegible]に[illegible]れて、[illegible]。

「早かつたですね。」

斯う云ひながら千早は座敷へ上る。薄肉色の紗に包まれて、電燈がほんのり點つてゐる。焚物の香が牛田の鼻を擽る。月[illegible]なうとしてゐる石燈籠へ、飛石を踏んで誰かが灯を入れに

来た。

続いて、平常着に下し了つたと云ふ様な、着措らしたお召絣の單衣の上へ桔梗色縮緬の無地の袷羽織を引つ掛けた二十一二の島田が、美しく化粧した顔で茶を持つてきた。取置に、眞珠を鏤めた彫刻の指環がちら〳〵する。

後から朝菅が袴の儘で、高貴縞の袷羽織をきう〳〵云はせながら、上埃及卷煙草を指に挾んで忙しさうに入つてきた。

お納戸地のネルに手擂れた白博多の帯を締めた三輪の服装を、島田はじろ〳〵見ながら茶を置く。

「稽古から歸つて來たところ。」

と半田が朝菅に聞く。

「然うです。半田さん。今度ばかりは如何に皮肉る筆に妙を得た貴方と雖も、其れをお振ひになる餘裕はありませんよ。」

「何う云ふ意味、出來が結構と云ふの。」

「無論でさね。」

愛嬌を癖附けた口許が、不斷に笑みを湛へてゐる。この人特徴の大きな木の葉形をした眼が、他人の一顰をも見免すまいとする様に動いてゐる。

「誰が儲けさうだね。」

と千早が云ふ。

「稽古の[illegible]でせうね。隨分苦心もしてゐる様ですけれど。」

此所で朝菅は點檢する眼附で三輪を視る。三輪は興深さうな顔をして其様な話を聞いてゐた。

「女優の養成ぢや三度も失敗してますよ。」

「其の筈さ。朝菅君のは直ぐ提携しちまふんだから。」

と半田。

「懲りましたね。」

「相當に役者はしてゐるのかね 今。」

「逆戻りに藝妓をやつてるのもありますしね。いろ〳〵ですよ。眞面目に藝道を研究するんぢやないんですからね。殊に素人衆は可けない様ですね。馬の足でも實男に見えるんださうですからね。」

「崇拜の度が强過ぎちやふんだね、畢竟仕出し諸君にまで敬意を拂ふ結果なんだらう。」

と千早が三輪を見ながら云ふ。

「仰しやる通りですよ。役者珍らしい様な事ぢや、とても成せつこはないやうです。藝妓なんぞのは冗談半分ですからね、素より意を用ふる程の事もありませんし、直き小面倒だで捨てちまふか、比較的素人方が[illegible]心はまだ様でト[illegible]ね。其の代りもう直ぐ[illegible]されちまいます[illegible]。[illegible]方へ引込まれて[illegible]してゐる様なのもありますわ。まあこの[illegible]へ入つて[illegible]にも[illegible]、[illegible]も[illegible]ずに[illegible]くと云ふのは[illegible]な[illegible]人として出[illegible]いことなんでせうよ。」

「誰しも、女優界の女王にはなりたいんだからねえ、野心も勃々とするんだらうけれど、[illegible]附くまでには横道へ入つてしまふ[illegible]、なか〳〵[illegible]りの罪でもないよ。」

斯う云つて、千早は又三輪を見てゐる。三輪は何も云はずにゐる。庭と庭とが背中合せになつてゐる待合の方から、二上りの三味線の音が空間の空氣に粋の部分を飾ひ上げさせて美しいところだけを響かしてくる。

電燈の花蓋が、其の音に戰へを帶びてでもゐる様で、幽遠な趣に三輪は一寸引締められる。掛軸の祇王祇女が白く朦乎として、裾の邊に香の煙が棚引いてゐる。千早は三輪の品性や、藝術の爲に自身を犠牲にしてゐることなどを賞めちぎる。朝菅は少し切り口上になつて恐れ入つた態度を作る。

「一方に職業があるんだから。」

と千早が云ふと兩人は不思議さうな顏をした。

「繪師さ。」

「畫家ですか。」

半田は敬意を含つた言葉に云ひ代へる。

「看板書きさ。」

前髮が眞中から二つに割れて額へ崩れかゝつてゐる三輪の顏を、何かの廣告のモデル美人にあつたやうな顏だと朝菅は眺める。然し美しいものだと密に感歎の溜息を吐いてゐる。千早がこんなに力を入れるのは、何か其所に結び附いた或物があるのだらうと合點した。

「宜しうございます。三輪さんが舞臺をお踏みになるに就いて、出來るだけの御便宜をお計らひしませう。」

「ペンキ屋ですか。」

半田はまだ其れを驚いてゐる。そしてこれ丈美しい顏を持つて斯う云ふ質素の服裝を爲ながら、女役者にならうと望んでゐるその胸には時代相應な虛榮の影が少しも覆ふことなしにゐるのだらうかと疑つて見る。

「兎に角眞面目なのが嬉しいから。」

と千早が何方附かずに言葉を添へる。

「熱心でさへあれや。」

と朝菅も斯う云つた。三輪は格別嬉しさうな風にも見られなかつた。

十一

富枝は姉に氣魂しく呼び覺まされて飛びおきた。たゞ四邊が眞つ暗で、矢庭に自分の體を騷擾の渦の中へ持つてゆかれる樣な驚きが富枝をうろたへさせた。富枝は眞つ蒼な顏をして其處に立つた。

都滿子の眼は血走つて、顏色が鈍蒼く、靑黛に墨を混ぜた繪の具を塗つた樣になつてゐた。丸髷が崩れて肉色の絹絲縞の手柄が毛の中に埋まつてゐる。洗ひ曝したネルの寢衣の袖が纏に縒れて、淺黃の扱帶の解けかゝつたのが、立つた裾に絡んでゐた。

心が落着いてはつきりしてきた富枝は自分の前に立つたその姉の顏を見た。さうして眼を釣り上げた姉の樣子に氣が付くと昨夕綠紫が歸らなかつたのでその爲の姉の嫉妬だと直ぐに悟つた。

始終こんな事に慣らされた富枝はそれには驚きもしなかつたが、然し今綠紫の外套の衣囊から出したと云つて都滿子に手紙を差しつけられた時は富枝は何うしていゝか分らなかつた。

その手紙の字は貴枝の字であつた。

都滿子は直ぐにこれから東へ行つてくると云つて騷いだ。富枝が東へなんか行つては可けない、却つて此方が恥を掻くやうなことがあつては惡いと制しても、これが貴枝の字でなくつてどうする、お前が止め立てする權利はない、東へ行つて養母さんに逢つて話しなきや分らないと都滿子は脣を白くして身體を震はしながら怒鳴つた。二人はお互に息を切らして爭つた。

「よしんば然うにしたつて、事實としたら、猶姉さんが直に東の家へ行かれますか。」

「事實だから行つてくるんだよ。お前が何を云つたつて可けない。放してお呉れ。お前までが兄さんや貴枝の肩を持つんだね。宜いとも。宜いからお放し。」

片手で強く富枝の肩を拂つたので富枝は横樣に倒れた。都滿子は茶の室へ駈けて行つた。

「可けないわ。何て云つたつて止めますよ。事實だと思ふなら貴枝ちやんを此處へ呼んでお聞きなさい。其樣な事を東の養母さんにまで聞かすものぢやないわ。妹ぢやありませんか。姉さん。」

富枝は姉に追ひ縋つて其所へ坐らせようとする。おきそは[illegible]さうな顏をして玄關の方から入

つてきた。開いた襖の茶の室の方から電氣の光りが黄色い色に流れてくる。

「もう夜が開けたんだらう。其邊等開けてお了ひ。」

と富枝はおきそに吩咐ける。おきそは普通でない都滿子の姿に、途方に暮れた顏をしながら何と思つたか其所へ坐ると、

「戸を開けるんだよ。」

と怒鳴られて、又起つて玄關の方へ行つた。

「お前が何うしようと勝手だよ。妹も何もあるものか。妹なら猶堪忍は出來ないんだよ。恥を掻くのは一同が掻くんぢやないか。何故東へ行つて惡いんだい。お前までが妾を馬鹿にして貴枝を庇護つてるんだね。何うせ馬鹿にされるんだわ。」

と云つて都滿子は聲を出して泣いた。襟が亂れて、胸を露現けて、苦しさうに口を開けて息を吐いて、蒼い頰に涙の傳はつた、その姉の樣子を見ると富枝は唯可哀想になつた。

「妾を東へ遣つてお呉れ。妾や何うしても直ぐ行くよ。」

と又立たうとする。其の膝を富枝は壓し迫ける樣にした。

「姉さんの代りに妾が行くから、姉さんは宅に落着いてて下さいよ。姉さんが其樣な取亂した風をして、外見ないから止して下さい。妾が屹つと姉さんの心の晴れる樣にして上げますから。」

「取亂してゐちや外見ない。誰が取亂す樣な事を爲せるんだよ。お前は妾の惡口ばかりきいてるんだね。宜いよ。もう蒼蠅い。お前の云ふ事なんぞは聞かない。外見なくつてもお前の世話にはならない。放しておくれよ。兄さんと同じ樣なことを云つて妾を苛責めて……お前まで兄さんの肩を持つんだから。」

都滿子は齒を嚙んで泣いた。

「其樣なことはありやしないわ、姉さんの云ふ事は妾には解つてゐる。兄さんが惡いんですとも。兄さんの肩を持つたりして其樣なことを妾は云ふんぢやない。姉さん、東へ行つちや可けませんよ。」

突伏して都滿子は泣續けてゐる。昨夜の白粉が冷たさうな耳の根に浮いてゐる。

今迄の心の狀態が悲哀に傾いだので、餘つ程姉は溫和しくなつてきた。其れ限り何も云はずにゐるので、富枝は羽織を取りに寢室へ行つた。

其室では目を覺ました紫都子がおきそを困らせてゐた。

「もう少し寢んねして、いらつしやいよ」

額の上に載つた手拭を、富枝はそつと上から撫でてやつた。

「旦那樣は お歸宅がなかつたんでございますか。」

とおきそが生憎な事を聞く。富枝は寂しい顏をして默つてゐる。總八丈の袖の羽織を持つて早速と行かうとして、自分の寒いのに又氣が附いた。

おきそは急いで富枝の部屋へ羽織を取りに行つた。

「姉ちやん。此所お入んなちやい。」

と紫都子がお世話を遣つてゐる。子供心にも、泣顏を半分した澁面しい富枝の顏を見て、氣をおくのだと見える。

富枝は默つて、傍に落ちてゐる先刻の手紙を拾ひ上げた。

今夜はだめよ　おつかさんがゐてよ　あ
さつてなら　紺屋町のをばさんところへ
ゆくから　ゐなくてよ　それでも　とま
りなんかできないわ

と書いたのを繰り返して見る。確かに貴枝の手跡だ。何うして此樣な大膽な

ことを爲るのだらう。封筒がないから分らないけれど、山陽堂の編輯へ宛てて出したに違ひない。家内へは秘す事と、兄さんに教へられてゐるのだらう。貴枝の仕上げに魔の大きな手が掛つてゐるのだ、と富枝は寸時も猶豫の出來難い程氣が焦慮つてくる。姉の嫉妬に同情するよりは小さい妹に迫つてゐる危險を思つて、富枝は直ぐ東へ行つて來ようと決心した。

おきそが羽織を持つてきたので其れを着ながら姉の許へ行くと、都滿子はまだ其處に突伏してゐる。羽織を上から掛けてやつて、寢床へ戻るやうに宥めようと思つてゐると、誰か徐に門を叩く音がした、

主人の緑紫が歸つて來た。

「姉さんが怒つてるぢやありませんか。昨夜歸つていらつしやればいゝのに。」

と富枝は嘲ひて笑つた。緑紫は都滿子の樣すを見て、「持病が發作したな、」と思ひながら、銘仙の袷の裾を捲つて平然と立つてゐる。さうして、

「飯島の所にゐたんだ。通夜を通して、其れ限り倒れて了つたものだから、遲くなつて濟まなかつた。」

と頭を下げた。[illegible]、緑紫へ[illegible]つた[illegible]の緑紫の辯解は、例も斯うと型が極つてゐた。細君の嫉妬を恐れながら、その目を忍び〳〵遊ぶにしては少つと巧妙な辯解の仕方がありさうなものだと、富枝は寧ろ兄を氣の毒に考へる。

「又、人を欺す。譃を仰しやい。」

突如都滿子は顏を振り上げて、その聲を絞つた。

「何所へ行つたんです。貴枝を伴れて何所へいらしつた。」

富枝の眼には、口の裂けた相に姉の顏が映つた。緑紫は寢不足らしい蒼ずんだ顏を背向けて、

「邪推は可かん。想像の嫉妬は困る。」

と呟きながら奧へ行かうとする。

「貴君。お待ちなさい。」

と都滿子は緑紫に武者振りつきながら、

「富枝、手紙を持つて來ておくれ。よ、貴枝の手紙を持つておいでよ。」

と兩の手を震はせた。

「外套の衣囊から何か出したな。」

直ぐと思ひ當つた樣に、緑紫はわざと笑つた。

「あの手紙なら、貴枝が寄越したんだ。其れが何うしたと云ふのか。」

緑紫は又わざと聞き返した。秘すべき事たらうと思ふ事を、から明らかにするには其點に自然潔白な意が潛んでゐると云ふことを言外に漲らせる。

「だから、兩人で何所へ行つたんですよ。」

斯う云つてる間も、良人が貴枝を伴つて或る樓上に酒を飲んでる圖が、判然と都滿子の頭腦に浮んでくる。自分もその圖中の人物になつて、良人と貴枝の笑ひ興じてゐる座の中に躍り込んだ樣な心持になつてくる。現在緑紫を視詰めた眼は、既に然う云つた場合に遭遇して良人を捉へた時の眼になつてゐた。

「あれは手紙ぢやないか。僕を招んだ手紙だ。其れが何うかと云ふのか。」

「貴枝なんぞと其樣な關係をして、貴方は一同に顏が合されるんですか。」

都滿子は涙を振り落しながら、緑紫の腕を掴んで小突いた。

「馬鹿なことを云ふもんぢやない。だから邪推を爲るなと云ふのだ。何をぶつてもお前には今は解らん。後で話す。」

「妾は貴君ほど逆上せちやゐません。」

都滿子は良人に嘲笑を與へる程冷靜になつてきた。何時の間にか靜子が姉の後へ來てゐて、目を擦りながら泣いてゐる。

「貴枝は子供だと思つて心を許してゐたが、中々發達してゐるなあ。彼樣な手紙を毎々送つてくる。俺も弱つてゐるんだ。」

綠紫は斯う云つて靜に二人を見た。

綠紫は貴枝の驚くばかり淫奔な事を、慨嘆する樣な調子で、都滿子が興を持つて聞く度合までを語つて聞かせた。

踊りの稽古の歸途に友達を作れてわざ〳〵山陽堂の前を通る事、無益らぬ手紙を增長になつて書いてよこす事、用もないのに電話をかけてくる事、母親がゐない時の綠紫に對する貴枝の擧動などを殘らず語つて終りに、

「お前の妹だけれど、困つたものだね。後に俳優狂ひでも始めて母親さんを泣かせる方だ。」

と云つて笑つた。貴枝に對して斯う云ふ感情を持つてゐる以上、其のものに愛のないと云ふ事は分り切つてゐるぢやないか、と云ふ事がその言葉の中に含まれてゐる。

都滿子は忽ち良人の手の上に乘つた。良人が貴枝を斯う思つてゐるのでは、其者を愛する筈もないと、良人に對する嫉妬はなくなつたが、然し、良人を唆す妹が打ち叩きもしてやりたい程憎かつた。

「矢張り踊りなんぞ習はせるから浮氣つぽくなつて行くんだわ。死亡つた母親さんの氣質を受けてるんだね、いくらか。」

と富枝に云つた。都滿子は燃えつくほどに腹の立つその胸を癒す爲に、遂に大切な生みの母を辱しめてまでも憚らなかつた。富枝は餘りの淺間しさに言葉も出なかつた。

綠紫は紫都子を抱いて奥へ行つた。昨夜の宿り先は手紙に因してゐる事と許り思ひ詰めてゐた處を、其の手紙に對する疑ひは晴れ、貴枝に對する良人の愛がないと知ると同時に都滿子は昨夜良人が飯島の家に宿つたものと信じて了つてゐる。

富枝はその姉の淺慮なのがなさけなかつた。

「もう起きて了はうか。もう少し寢ようかね。富枝さんも早く起して氣の毒だつたから、もう少時寢むといゝわ。妾に此樣な心配をさせたから、晩には何所かへ連れてつて貰ひませうよ。」

平生の元氣に復つて、寧ろ喧噪いだ態度で都滿子も良人の後から行く。

良人が他に女を持たぬと知つた時、其の良人の愛は自分專有のものと感じる。然しその感じは永くつゞくものではなく、事に觸れると直ぐ愛が他にあるであらうと疑ふのだが、自分が愛を受けてゐると感じたその一瞬の間を喜んで、都滿子はもう何も彼も忘れてゐた。

姉夫婦の後を見てゐた富枝は幾度もなく涙が溢れた。

貴枝は淫奔なのだらう。其の淫奔を一種の興味に解して兄自身へ向つて發現させようとした兄は殘酷極まつてゐる。白癡を捕へて、その白癡狀態を自分の前に露骨させて喜んでゐるのと差別はない。兄は貴枝の女つくらない身體を挑むやうにして、その身體のうちの何所かに潛んでゐる淫奔な血を沸かせようとしたのぢやないか。それだのに兄は實に卑劣な兄だと富枝の胸には怒りが渦を卷いておこつた。

貴枝が妹でなくとも、他人であつてもかゝる場合の兄は許すことは出來ないと思ふ。姉は何うだ、良人の口から貴枝の性行を聞いた時、其の良人の言葉を信じるなら、貴枝に對して憫れの情が起らなくちやならない。姉は肉身の情も忘れて嫉妬の爲に心を狂はしてゐる。そして小さいものを罵つて腹癒せをする。

狹量な姉は別として、かゝる兄に文藝の作に就いての意見を聞き、主義を倣はうとした自分までが卑しまれて、富枝は其の座に自分の身體を置くさへ厭はしいと思つた。

富枝は少時は坐つた切りでゐた。奥からは、

紫都子の笑ひ聲に和して、綠紫と都蒲子の笑ひ聲が聞えた。

臺所の引窓から白い光りが射し込んで、おきその竈を焚き附ける煙が室に侵入して來る。染谷の家の今朝は平和になつたと富枝は自分の室に行つた。

十二

嚴しく貴枝を戒めなければならないと、富枝は朝飯を濟ますと東へ行く事にして外出支度をしてゐた。

其處へ半田が遣つて來て千早からの迎ひの意を傳へた。

富枝は行く氣もなかつたので斷ると、

「三輪つてのを貴女御存じだつてね。」

と半田は聞いた。

「[illegible]今日千早の所へ用事があつて行くのださうである。丁度宜い折だから萩生野女史も呼んでくれと云ふ事だつたので都合を聞きに來たのだ」と云つた。

「あの人もね、愈々朝菅の一座へはひる事になつて次興行[illegible]から大活動をやるの。」

然う云つて半田も嬉しさうな顏をした。

半田一寸[illegible]の[illegible]につくり逢ひたいとは富枝も考へてゐた。然し何かによつて殊更逢ふ機を作りでもしなければ、わざわざお互同士を訪ね合ふのもおつくうな程二人の仲は長らく絶えてゐるので、富枝は今日の半田の迎ひを丁度好いとも考へた。

「三輪さんが行くなら。」

と富枝は行くことにした。

富枝が自分の室へ支度に行つた後で綠紫は三輪の噂をした。半田が中々意志のしつかりした女だと云ふと、

「どうして。あれで男に脆いんだ。」

と綠紫は笑つた。

「僕は親しく交際つてよく知つてる。」

半田が驚いた顏をして座蒲團の上に足をとめた時富枝が丁度入つてきた。富枝は二人が今何を話してゐたかが直ぐに解つた。さうして冷たい眼で兄の顏を眺めた。

富枝達二人が大森の千早の家に着いた時はもう午をすぎてゐた。

座敷に面した四十坪ばかりの庭は、一杯に稚松が植つてゐた。稚松の並木の樣なものが形成つて[illegible]側には、草の葉一つ眼に觸れるものもない。

座敷の壁には、主人の千早が作畫した現時の俳優の舞臺の形をポンチ畫にしたのが、並んでかゝつて、隣りに三味線が一挺、緞子の片布に胴を包んだのが引つ掛つてゐた。其の中央に白綸子の座蒲團を敷いて、三輪はイプセンの「人形の家」を拾ひ讀みしてゐた。富枝を見ると書物から離れて輕く挨拶した。そして莞爾ともしないで「塵泥」の女主人公はいゝ役だと云つた。

「讀んで下すつて、何う感じて。」

さう云ひながら富枝は三輪の傍に坐つて頰と頰とを並べた。袷の胸が汗滲んで少しむつとする。白い日覆の横から硝子戸に乾いた日光の色が半ば屆いてゐた。

「實に好いと思ひました。一寸、土橋の累を當世で行く所があるけれど。」

二人は暫時「塵泥」のことで語り合つた。それから富枝は三輪が芝居へ出るに就いていろいろと聞いたけれども三輪はそれには何も云はなかつた。隣室で、

「君も來年は博士だね。」

と千早が客に云つてる。

「不賛成だね。僕は博士[illegible]を文部省へ[illegible]出すつもりだ。」

「何だねえ。」

「可かん。博士の稱號[illegible]世人を[illegible]るものは

帝劇なからう、時にさへ行りや宜いものと世人に思ふだらう。殊に講料は可かんね、博士になると診察料を高値く取る。正札附の詐欺師だ。博士が結託して國民を瞞着させる様なものだ。」

などと気焔を吐いてゐるのが聞えた。二人は黙つて二人の話を聞いてゐた。三輪が富枝の古つぼい縞お召の着物を見てゐる間、富枝も三輪の綺麗な顔を見てゐた。

「たいへん靜ですね。」

千早が其所から覗いて聲をかけた。二人は顔を見合してたゞ微笑した。

千早も半田も來合せてた客も、皆一所へ寄ると「塵泥」の話が又出た。半田も讀んで見ないと云ふし、來てゐる客の爲に千早がその略筋を語つた。

ある子爵の令嬢が、園遊會の餘興に招んだ非常な美男の奇術師に逢つて、遂に家を出て其の奇術師と共に海外へ行く、相應な女奇術師になつて歸つてくる。男は海外にある間でも女の美貌な爲に嫉妬を起しては女を苦しめてゐたが、日本へ歸つて來てから愈々その嫉妬が募つて遂に刃物三昧して女の顔を傷つける。

女は興行をする時、人に顔を見られて子爵の令嬢だと噂されるのを厭つてた時なので、自分を愛するために然ら云ふ狂的なことを行つた男を恨まずに、疵を受けたを幸ひ覆面して舞臺へ出る。相變らず男と一所に奇術をやつては喝采を受けてゐる。女は最初は男の愛の爲に自分の顔の外見なくなつたのを恨みもせず、寧ろ滿足に感じてゐたのが、次第々々に良人の愛情の自分に對して薄らいでゆく様な氣がして、唇の歪んだのや、眼跛になつた自分の顔を鏡に映して見ては嘆くやうになる。男は素より罪は自分にあるので一層優しく扱ふが女は漸々に僻んでくる、詰らぬ女弟子などを相手に嫉妬を起して良人を苦しめる、丁度男が藝妓に思はれて弱つてる時なので愈々女の嫉妬は募つてゆく。

その女奇術師を興行地の小田原へ訪れた男が兩人ある。一人は兄で一人は許婚の男爵で、今までの行ひを懺悔して邸へ歸れと勸める。其の變つた面影を見ても、墮落した境涯を目擊しても自分は少しもお前に對する愛は褪めぬ、と男爵には云はれる。然し邸へは歸らない、捨てて呉れと云ふ。兄の子爵は怒つて其處で絶縁する。

旅宿へ歸つて、一所に伴立つて來た妹に話する。妹は甚く一人の姉を失ふことを悲しんで、兩人に内緒で姉に逢ひに行く。姉は不在だつたので男に逢つて、姉を離して邸へ歸して呉れと頼む。昔女を誘惑した自分の罪を思ひ、女の不幸を思つて其所で承諾する。其れ一味は自分は單身でなぞ此様な所へ来る事が分ると兄の叱りを受けるから、今夜會館に松原へ逢ひに連れて來てくれと頼んで歸る。男に寧ろ歸つて來ると子爵家へ歸る事に決める。自分の罪を償ふ爲にもお前を邸宅へ歸さなければ濟まぬと云ふ。女は今になつて男が自分を疎む爲に、お爲ごかしに自分を逐ひ拂ふのだと云つて聞かず、大酒を仰飮つて宥める男を弱らせる。そして、留守に美しい女が來たと女弟子から聞いて、良人に責めると妹だと云つて頼んで行つた事を告げるけれども、其れは虚言だと云つて承知しない。

直接に姉に逢つて話を爲る様、其の誤解も解けるやうにと、男は妹を呼びに松原へ行く、女は良人の擧動を怪しんできつと情婦に逢ひに行くに違ひない、其の時は斯うして威嚇してやると云つて、自分の疵つけられた短刀を咽喉に擬して女弟子に見せながら、大笑ひをして蹌踉として男の後を追つてゆく。松原で若い女

が泣いてゐる。其の傍に立つた男の姿を一日見ると、女は忽ち狂態になつて突如松の蔭から男を刺す。妹が男を庇護つて自分は貴女の妹だと云つても女の耳に入らず、遂々殺して了つてから妹の聲が初めて耳に入つて精神が舊にかへる。心が痛く〳〵と同時に男の死骸の唇を接吻した儘卒倒する。と云ふ筋。

「面白い。實に好い。是非、早速讀みませう。」

筋を聞いて了つてから、半田は此樣なことを云つた。

客人が獨逸で見たと云ふ「サロメ」の話から、今の日本劇壇のつまらないこと、舊劇は矢張り保存しておかなければならないことなどが語り交された。女優の呼聲ばかりが高くても眞に技術のある立派な女優の現れるのはまだ〳〵遠いことなどをこの二人は三輪を前に置いて云つた。

半田は時に龍いと熱心に云はれたことを思ひ出して三輪の顔を見てゐた。其の眼は始終何にか憧れたいと願つてゐるやうな眼だと思ふ。多情な女だと、一人で合點いてゐた。

十三

富枝は三輪と連れだつて千駄木の家を出た。さうし、今朝からの話を三輪に聞かして、餘り氣になるから東へ一寸寄つて行きたいと云つたので、三輪も一所に來た。格子の外から覗くと大柄の紫矢絣の袷を引つかけて、緋縮緬の長襦袢を露出けた儘、横坐りをして貴枝は何かつまんで食べてゐた。

「阿母さんはお不在。」

と聲をかけると、

「えゝ、ゐませんよ。何誰。」

と食べながら貴枝は出てきた。他家から歸つて來たばかりの所と見え、白い足袋を穿いた儘でゐる、緋の裾を返して、紫の長い袂をひらつかした姿が、電燈の影に暗くなつたり判然したりして美しく見えた。

姉の姿を見ると貴枝は裾を褰げて下駄を突掛けながら土間へ下りた。

お伴れがあるから、今夜は悠然してゐられないと云つて富枝は貴枝の高島田に結つた、水の滴れる樣な姿を見た。

「一昨夜、貴枝ちやんは何處かへ宿つて。」

「いゝえ、家にゐたわ、何故。」

と不思議さうな顔をした。食べかけの小倉餡した指で捏ねてゐる。

「兄さんの許へ貴枝ちやんは手紙を出したでせう。」

これには羞かしい素振りもするかと思つたが、貴枝は平氣であつた。

「妾に……何とかつて待合だか何だか、其所へ來い〳〵つて電話で呼ぶんですもの。さうして手紙で都合の好い日を云つておよこしつて云ふのよ。妾そんな事したら阿母さんに叱られて其れこそ大變だわ。だから斷りの手紙出したのよ。姉さん讀んで。」

「斷りの手紙ぢやないでせう。阿母さんの不在の日を云つてやつたんぢやないの。」

貴枝は默つて、捨てた菓子を下駄で踏んでゐた。

「貴枝ちやん。譃を云つては駄目よ。」

そのきつい富枝の聲が貴枝は恐かつた。

「姉さん、堪忍して頂戴。」

貴枝は即座に白狀る。そして泣きさうな顔になつて、

「阿母さんの不在の日を知らしてくれつて、兄さんに云はれたもんだから、つい、書いて出したのよ。惡い事して。」

貴枝は悄然れて俯向いた。頸筋に緋の襦袢の襟が濃い色を彩つてゐるのを見ると、富枝は可憐らしく〳〵て叱れもしなかつた。

兄さんの云ふ事を聞くと貴枝ちやんの爲にならないのだから、決して兄さんを信じて云ふ通りになつてはいけない。怒られてもいゝから兄さんには逃げるやうにしなければ可けないと富枝は繰り返して云つて聞かした。

「ほんたうに昨夜は何所へも行かなかつたのね。」

「行かないのよ。兄さんが宵の間に來たけれど阿母さんがゐたもんだから歸つちやつたの。」

「貴枝ちやんから、兄さんへ電話をかけたり、手紙で呼んだりすると聞いたけれど、其樣なことはないのね。」

「えゝ。そんなこと。」

と莞爾してゐる。

富枝は貴枝を子供だと思ふほど可愛かつた。又來るからと富枝は其れだけ云つて歸る。貴枝は例のやうに纏繞りついて留めようともしなかつた。

角へ出ると三輪が待つてゐた。二人は銀座通りをぶら〳〵歩いた。

からして肩を擦れ合して下駄を揃へて行くのが富枝にはなつかしかつた。

「何年振りで一所に歩くのでせう。」

と三輪も云つた。

夜店の洋燈の光りと街燈の大商店の電燈の瓦斯の光りとが睨め合ひをしてゐる横丁通りを、樣々な人が影を濃くして歩いて行く。明るい繪葉書店の前に人が集まつてゐた。

富枝はこの頃の自分のいろ〳〵な事に就いての感じを三輪に語りたかつた。然し三輪は昔富枝を一人の話相手にして劇界へ立つての抱負を語つたり、自分の感情を富枝の前には露にしたやうにして今の富枝には對さなかつた。何所か自分は自分の思ふ道を行くと云つた樣に深い話もなくつて其の場なりに濟ましてゐるのが富枝には飽き足りなかつた。

富枝は三輪が打解けてゐないので斯うお互の心持がはぐれ〳〵になつてゐるのだとも思はなかつた。昔は二人ながら赤い色と思つたものも、今では自分には紫に見え三輪には黄色く見えるほどに、二人の別れてゐた間の年月がそれぞれに自分と云ふものを作り上げてしまつたのだから仕方がないとも思つた。さうして二人は餘り語りもしずに歩いて行つた。

京橋の停留場までくると、三輪は一所に自分の家へ來るやうに勸めた。富枝は其所から電車に乘つて淺草の代地の三輪の家まで行つて見た。

三輪の家の近所はもう寂寞としてゐた。軒の灯が三輪の家の戸閉まりした門を照らして、低い格子に光明の透きついた窓が一間あつた。富枝は三輪に伴れられて家内へ入つた。住事が間と見えて、家の内は綺麗に片附いてゐた。次ぎの座敷の床の間に清水寺の清玄と櫻姫を書いた繪看板が立てかゝつてゐるのが開いた唐紙の間から見えた。香の具の匂ひがした。

富枝は、櫻姫の着物の色の赤に眼を懐しくさせながら、三輪に續いて上つた。三輪の母親は富枝を見ると久し振りだと云つて喜んだ。富枝も三輪の母親に逢ふのもなつかしかつた。

三輪は富枝を二階へ上げておいて自分は直ぐに下へおりて行つた。富枝は三輪の室らしい座敷の中を眺めた。

机の傍の壁にオルガ、ネザソールのカーメンに扮した極彩色の寫眞版が、白い臺紙に貼附けて掛けてあつた。其の隣りにキャミールに扮した佛國女優の目の覺めるやうなこれも寫眞版が同じ度合の高さに押し並んでゐる。名が無いので富枝には誰とも解らずに見た。

鰐魚皮の化粧箱が、机の上に硯箱やインキ壺と雜居してゐる。車輪梅が白く萎れて一輪乘つてゐる。千早文學士の著した佛國演劇史が讀

みさしになつて、机の中央を占めてゐた。

「お湯へ入浴りませんか。」

と下から三輪が呼んだ。

降りて行くと、鳴海絞りの浴衣を着た三輪が手拭を提げて待つてゐた。

富枝は三輪の出してくれた瀧縞の浴衣を着て、兩人は臺所つゞきの湯殿へ行つた。

風呂の前で弟子の丹吾が火を焚きつけてゐた。この男は啞だつた。背の小さい、色の白い眉毛の濃い役者の年寄顔のやうな顔をしてゐる綺麗な男だ。眞實の年齢は三十六歳だと云ふけれども、二十二三位より他見えない。三輪の父親の弟子で今のところも丹吾の手一つで職業をしてゐる様なものである。畫かせるには方法があつて註文の畫の下圖をしてやらなければ丹吾には筆が下せない。三輪が父に代つて今では丹吾の下圖をしてやる、忽ち天性の畫才を振つて丹吾は仕上げる。不具者でなければ、看板畫きには惜しいものだと三輪は富枝に話しながら入る。

丹吾は丁寧に頭を下げて出て行つた。

「冷えたでせう、お入んなさい。」

三輪は濡れた富枝に云ひながら眞つ白に脂肪を盛つた上の半身を湯槽に浮かして、朦朧とした湯の中の灯のまはりを見つめてゐた、富枝は三輪を見た。さうして三輪の溫かい肌と自分の冷えた肌とが腕のところで僅かふれた時、富枝は異様に恥かしかつた。

湯から上ると富枝は、貴女の肌の色はそれでも人間界を吹いてる風に朝夕あたつてゐるのかと思ふと不思議だと云つて笑つた。

「天女でせう。」

と云つて三輪も笑つた。

三輪の母親はすしなど取つて富枝をもてなした。さうして一時富枝の兄の綠紫が毎日のやうに來て困つたことがあつたと話した。三輪は默つてゐたが富枝は極りのわるい思ひをした。

然し自分はその兄の力で生存して行くのである。

親の遺したものは、僅少なもので、自分が今日までの食べる費用だけにも當つてゐない。今になつて兄を卑しむやうなものの、兄に由つて自分は今日まで不足も感ぜずに、大學へも通はして貰つてゐたのだと、然う思つて富枝は甚く落膽する。一度は染谷綠紫と云ふ小說家が自分の兄だと云つて自慢をした事もあつたと富枝は冷たい汗を催した。

富枝は自分の思つたことを三輪に語つて、さうして兄の手を離れて自活したいと云つたが、三輪はそれには何も答へなかつた。オルガ、ネザソールの寫眞版を見て、この女優はサアフォーやカーメンを演じると餘り妖艶で人を魅しすぎる爲、政府からインモーラルだと云つて興行を差しとめられたほどだとそんな話をした。さうして何かに憧れてゐるやうな捉へたいものがあつてそれを追ふやうな眼をしてぢつと考へてゐた。浴衣の上に重ねた荒い格子のお召の袷も意氣であつた。細い博多の伊達卷がずるこけてゐた。

富枝はその美しい顔を、自分一人唯かうして無意味に眺めてゐるのが惜しいと思つた。其れを云ふと三輪は富枝の顔を見て一寸笑つた。倦怠さうに机の上に投げだした湯に熱つた手を、三輪は反らしたり握つたりして、また何も話さなくなつた。

二人は何もお互の胸に觸れるところもなくつて別れた。それでも歸る時三輪は電車の停留場まで送つて來た。富枝は自分と一所にゐた間の三輪が始終興のない顔をしてゐたと云ふ感じだけを殘して麻布へ歸つた。

十四

消燥して田端の別莊の方に一人移つてゐると

云ふ染子からの手紙が來た。相變らずお姉様が戀しいと云ふ字がいくつも記してあつた。
午時からでも行つて見ようかと思つてゐると大和座附の作者が訪ねて來た。
「塵泥」を次興行に上場するに就いて種々打合せも爲たり、意見も聞き度いと云ふので、略内定した役割なども話する。革新座の朝菅秀彌と對抗して、これも新派側の一方の驍將と云はれる大和座の加美澤杜鵑の一派で演じることになつてゐるので、女主人公の小満名に扮する筈の田里有明が、是非一度お目に掛りたいと云つてゐた、と傳へた。
薄痘痕のある、薄い毛を撫で上げた、着物の前幅を廣く着た、腰の低い男だ。緑紫の小説をこの男が脚色して、一二度舞臺へ上したこともあるところから、緑紫はよくこの作者を知つてゐるのだが、態と避けて此所へは來ずにゐる。富枝はさすがにまだ不馴れなので凡てに就いての用意がない。隨つて出したい様な註文も起つてこない。
「皆さんのいゝ様になすつて下さい。」
と逃げてゐた。
「染谷さんに御相談を願ひませうか。」
と吉櫻は云ふ。けれど、お前の作はお前勝手に處置しろ、と意地の悪いことを云はれてゐるので、兄なんぞに意見を求めて自分の作へ拵へた脚本を持て餘してゐるなどと云はれるよりは、凡て演技者任せに放任した方がいゝ、默つてた方が悧巧だと考へる。
「兄は面倒がつてゐますから。」
「其れぢや餘りお手數を煩はさない様なことに致しませう。」
と云つて歸つた。後で食事の時、富枝は緑紫と顔を合せたが、緑紫は何も聞かずにゐた。富枝も默つてゐた。都満子が一人で、
「田里の小満名は必然いゝわね。喝采るに定つてるわ。」
と嬉しさうであつた。
緑紫は笑ひながら、四面から作を非難されるに定つてるが怒つちや可けないと云つた。
富枝は外へ出た。空が割然と晴れて、何萬丈の深い〳〵底の青さが空の面へ透いてゐる様な色をしてゐる。少時歩いてゐると絲織の袷の表が焼かれる様に熱くなつた。乾燥ぎ切つた空氣に呼吸の詰るを覺えるやうな小春日和である。
富枝は田端へ行つた。
染子は髪の根も括らずにばら〳〵に下げた儘附人の女に手を引かれて門のところに立つてゐた。羽織に濃い青紫色の袷の裾を引いて美しい色に見えた。
染子は昨夜一夜中富枝のことばかり云ひつゞけて少しも寝なかつたと女が云つた。さうして這々人形を持ち出してきてそれを富枝のところへ染子の記念だと云つて置いて來てくれと云つて、泣いて〳〵仕方がなかつたと話した。染子も昨夜はどうしてもその這々人形が物を云ひさうで、自分の思つてゐることを残らずお姉様に傳へてくれるやうに思はれて仕方がなかつたと云つて、懐中のなかからその人形を出して富枝に見せた。
「おはまが昨夜氣味をわるがつて。」
と染子は女を見て少し笑つた。
染子の眼は磨ぎすました刃物のやうな光りをもつて瞳が底光りのする様に蒼白かつた。
「ね、この人形の口が動きさうでせう。眼がお姉様を見てゐませう。このお人形のなかに妾の心がはひつてゐるんです。お姉様が戀しいつて泣きますのよ。」
染子は然う云つて人形を撫でた。富枝はいきなり染子の手を取つて其の甲に接吻した。染子は赤い顔をして富枝の袖の内に顔を埋めなが

ら、

「澤山して頂戴。」

と云つた。

染子は富枝が來るまで自分の髮に誰にも手を付けさせないと云つて聞かないので、かうして氣狂ひのやうにばら／＼の髮をしてゐるのだとおはまが云つたので、富枝はリボンで結んでやつた。さうして、いくら貴女が私を戀しがつてくれても、貴女は貴女、自分は自分と別々にこの世の中に生れて來たのがもう定つた運命で、どうしたつて貴女と一所に住んで一所に生活する譯には行かないのだから、つまらない事なんぞを思つて夜も寢なかつたり身體を惡くしたり、御兩親に心配をかけたりするやうなら、妾は貴女の爲を思つてもう來ないことにする、と富枝はしつかりと染子に云ふと、染子はもう泣いた。

お母樣もお父樣も兄樣も、誰れも彼れも厭で厭でお姉樣一人だけが好きなのだから離れてゐるのはいやだと云つて泣いてゐた。

「いくら好きでも、妾は一生かうして貴女の傍にはゐられませんもの。」

それを聞くと染子は默つて窓掛の下へ行つてその上へ突伏した。丁度傍のピアノ臺から譜の本と一所に金の留針が辷つて床のうへに爽かな音を立てた。

富枝は此方から染子の泣く姿を少時眺めてゐたが、染子はいつまでも泣いてゐた。

富枝は今夜宿ることにして漸と染子の機嫌を直させると、一所に裏庭から外へ出て見た。玻璃器へ空色の水を盛つた樣だつた空に、漸く暮れようとする夕闇の薄黑い蔭が射してゐた。房山の洋館の焦茶色のペンキの塗色が、杉の並木がくれに朽ちたやうな色に見えた。

丘へ立つと三河島の田圃が一面に見渡された。

「寒いやうね。」

富枝は染子の素足の冷たさうなのを見ながら云つた。

（ひらりと乘りは、乘りしかど……）

と何所からか琵琶歌を唄ふ聲が途切れて聞える。其れが兩人並んで立つてる足許の草叢に響く樣で、只一つ咲いてる紫苑の花が戰へを帶びたやうに思はれた。白いリボンで根を括つた髮が染子の青い額に亂れてばさ／＼と搖いでる。草叢の中の赤の飯の花と、染子の襦袢の袖の薄鴇色とが、僅に其邊の景物の中でやはらかい柔しさを見せてゐ　。

富枝は蹲踞んで田圃の方を眺めた。

土色、黄色、草色、鶸色などで引き延ばしたやうな田圃の表面は薄暮の色が淡くかゝつてゐる。松の木榛の木、などの所々に固結つてゐる間に、板葺屋根の家が遠見に摘めば掌へでも乘りさうな風で置かれてる。工場の煙筒が太く長く短く煙を吐き出してゐるのも吐きだしてゐないのも、彼方此方に各々の工場の勢力を爭ひ顏に背向いたり對ひ合つたりして立つてた。

空の際には濁浪を浴びてる巖岩のやうな雲がむら／＼と湧いてくる。其の破れ目から紅絞りのやうな紅い夕燒雲が一片見えてゐたが、何所かへか何時の間にか押流されてしまつた。

富枝はまだ見た事のない故郷の地がふつと思はれた。そしてまだ逢つたことのない祖母を思ひ浮べた。

自分が養はなければならぬお祖母さんだと思ふと、其れをこの頃の氣候にも端書一片消息せずにある事が甚く不孝に感じられて富枝は祖母の上を思つた。

さうして又染子がなつかしかつた。富枝は染子の手をひいた。染子は滿足さうに富枝の眺めてる方を自分も眺めながら立つてゐた。其所の芝生から秋寒い風がふいて二人の肌を冷々とさせ

た。

十五

お姉樣がお好きだからと云つて、染子はおはまの止めるのも聽かずに、昨夜江戸紫の二枚袷を着て寢た。長い裾を足に絡まして、白い敷布の上に下白を亂して寢てゐた姿を夜中にふと眼を覺まして眺めた時の感じを、今富枝は緣に立つて奇異な夢のやうに繰り返した。

空が曇つて庭の色が沈んでゐた。ダリヤの花の亂れて咲いた前に立つて染子は花を摘んでゐた。富枝は緣から笑みを送つたけれども、染子は下を向いて立つた儘、ダリヤの花瓣を指で彈いてゐた。

富枝はふつと、その美しい人一人を自分の思ひの儘にしたと云ふ誇りが湧いた。

「此方へいらつしやい。」

と呼んで見た。染子は顏を上げて富枝を見たが、顏を斜にしてついと垣根の後へ入つて了つた。昨夜の着物の紫の振袖が冷たい色に搖いで殘つた。

顏を洗つて了つてからも染子は何所に隱れてゐるのか顏を見せずにゐた。おはまが折角宿つて戴くと平常の半分程も大騷ぎをなさらない、不思議、御座いますねえと云つてゐる。富枝は默つて笑つてゐた。

座敷へ行くと卓子の上に其の日の朝夕新聞が乘つてゐる。上のを開いて三面を見ると直ぐ二段目邊の「朝菅一座の新女優」と云ふ標題が眼についた。美しい三輪の寫眞版が挿入れてある。千早阿一郞氏の寵姿だとある。梓學士が女芝居の一座から引抜いて朝菅一座へ出世させて遣つたのも故ある哉と書いてある。そして終ひに、舞臺での表情は嘸かし幾多の阿一郞氏を惱殺するであらうと冷かしてあつた。三輪の寫眞版は、その記事を自慢らしく公衆に示してゐるかの樣に、少し笑んでる顏が殊に鮮明に刷られてある。

牛田がゐながら思ひきつたことを書いたものだと思つた。そして、富枝は全體を讀み終らぬうちに、僞りの記事だと思つた。定めし三輪はこの記事に對して憤慨してるだらうと同情した。千早なんぞに贔屓にされて新俳優の一座ぐらゐへ加れて貰つた爲にこんな寃罪を蒙つた事を口惜しく思つてるに違ひない。傷つけられた人格を悲しんでるに違ひないと思つた。

新聞を持つて立ち上ると、前の姿見に染子の姿が映つてゐた。富枝は振り向くと緣の柱に立つてゐた染子の傍へ行つて其の手を取りながら、

「何うして。」

と其の赤い耳朶に口をよせた。

「何故傍へ來ないの。」

斯う聞いた富枝も、自分の胸が騷いてゐるのを知つてゐた。

富枝は牛乳の滴つてゐるやうな染子の頰を吸つてやり度いと思つた。さうして、染子の羞恥を含んだ風情を見度いと思つた。

「ね。」

と何がなし自分の望んでゐる事を求めるやうに、其の肩を搖ぶつたが、染子は默つて下を向いてゐた。

「何か仰しやい。」

と富枝は再び其の肩を押すと染子の下げた髮が背と柱の間から外れて富枝の胸へばらりとかゝつた。

眼の瞼に殘つた薄い白粉もしをらしかつた。息が彈んでゐるのか赤い唇を半開けてゐた。染子の眼は、もう戀を知つた眼の樣に、情の動く儘に閃いてゐた。富枝は其れを凝乎と視てゐるうちに、何となく秋成の物語を思ひ出してゐた。

可愛がり切つてゐた美しい小姓が死んでから、その坊さんは狂亂になつて小姓の死骸が腐るまでも、その骨を舐めたり肉を食べたりして執着してゐた凄い話を思ひ出した。

荒寺の内に夜も眠らず骨と皮ばかりに痩せ衰へた坊さんが、着物を剝いで其の腐爛した肉を食べる圖があり／＼と見える。富枝は何がなし慄然としながら、染子を離して、染子を見た。そして染子は自分を戀し、その戀が遂げられた樣な感じで今朝を過してゐるのだらうかと富枝は再び昨夜の不思議なことをしみ／＼と考へてゐた。

十六

富枝は二日を田端で過して翌日の晝頃麻布へ歸つてきた。宅には兄も姉もゐなかつた。

自分が田端に宿つてゐた間緑紫も歸らなかつたのだそうである。都滿子はたんでも貴枝を何所かへ連れだしたに違ひないと非道く怒つて先刻車へ出かけたとおきそが告げた。

たゞと、私をさらしに陸へ合つてくる方がいいと富枝は然う思つた。

富枝は自分の室へ入つた。染子が何日か持つて來た謝禮か萎れて、薔や菜ゑ椒曝しの花籠のやらにかさ／＼になつてゐた。その傍に坐つて不思議なこの二三日を繰り返した。

頭腦の中の血が始終動いてゐる樣で、物を視るとちら／＼したものが間を遮る。昨夜の事、一昨日の事が朧に夢のやうに思はれる。丁度頭の疲れてゐる夜更けになつてから觀た演劇を、翌日の晴々した朝になつてから繰り返して見るやうな氣がされる。一昨日から今まで此處に寢てゐて、よく自分が其樣な風に描く空想を、人物だけは事實の人を架して矢つ張り描いてゐたのかも知れぬと思ふほど、富枝の頭腦はぼんやりした。

曇つた空が窓の障子に映つて、室内が薄暗いと思ひながら、觸るとざらつとする机の上に凭れると毎晩の寢不足が出て何時かうとうととした。

見ると染子が彼方から自分を目掛けて驅けてくる。早く傍へ來ればいゝのにと思つて焦慮つてゐても中々近附かずにゐる。自分の方から近寄らうとすると足が重く／＼地に吸ひついた樣で動く事が出來ない。

染子は矢つ張り自分の方を向いて驅けてゐる。と思つてゐるとおきそに起された。御飯の支度をしたと云はれて立たうとすると眼が眩んで足許が蹌踉とする。肩先が壓し附けられてゐる樣で口の中がかわいた。

「まあ何て蒼いお顏でせう。」

おきそは驚いて富枝を見てゐた。

「お前、紫の帶を締めてるのねえ。」

「えゝ。唐縮緬ですよ。」

と帶の前を撫でて見せて、

「縮緬のやうに見えませう。」

と笑つた。

富枝は億劫さうに視力を据ゑて其の帶を眺めてゐると、急に車の音が喧しく起つて都滿子が紫都子を伴れて歸つて來た。

姉は何處へ行つたとも、何うしたとも何とも云はずに鳩羽鼠のコートを羽織つて、長火鉢の前で茶をがぶり／＼と音させて飲んでゐる。逆上せてゐると見えて眼が血走つて酒に醉つてる人の樣に頰も眼の端も額まで赤くなつてゐた。火鉢に翳してゐる片手だけは霜に痛んだ樣に青白く凍えた樣な色をしてゐた。

富枝はおきそに給仕をさせてその傍で食事をしてゐたが、大方東へ行つて阿母さんに毒突かれて來たのだらう、と姉の樣子をそつと見た。氣の毒な樣な氣がして姉に何か尋ねるのが[illegible]に思はれるので此方も無言でゐた。

「今歸つて來たの。」
都滿子は突然にさう云つた。富枝が返事も爲ずに其の顏を見てゐると、
「よくこの頃は、無斷で宿つてくるのね。そんな事から品行が段々亂らになつてゆくとは思はないのかしら。染谷と一所になつて家を開けられちや、妾が世間へ對して面目ない。ほんとに何女も此女も一人も碌な姉妹はありやしない。不品行な女ばかりよくも揃つたもんだね。」
と大きな聲で云つた。
富枝は八つ當りだらうと思つてだまつてゐた。都滿子はいゝかさにかゝつて種々な事を云つた。
急に故郷へさう云つてやつてお前を呼ばせる。學校は止めるし、夜宿りはするし、ぶらぶら遊んでゐて文學の研究が聞いて呆れる、どうせそんな事をしてゐるうちに碌なことは仕出來さないんだ、墮落して了ふんだ。第一かうして置いてはお前の爲にも自分の爲にもならないんだから國へ歸してしまふ。兄の傍にはお前をおく事は出來ないのだ。と都滿子はそれまで云つた。富枝は默つて家を出た。門の所で雨がぽつりと頰に當つたが、富枝は傘を取りに戻らうともしなかつた。

「もう歸つて來ない方がいゝ。勝手な所へ嫁さんを捨てて行つておしまひ。」
焦慮て怒罵つた聲が、窓越しに富枝の後へ噛み附く樣に聞えた。途端に紫都子のわつと泣き出した聲がした。
勝手口へ附いて廻つて裏へ出ると、隣家の櫺子窓の障子が細目に開いてゐて人影がちらりする。其の下を通り拔けると、後からおきそが追つ驅けて來て、お孃樣お孃樣と呼んだ。
「貴女、お家にいらしつて下さいよ、旦那樣が歸つていらしつたら又騷動が始まると、妾や一人で困りますもの。」
おきそははら〳〵した顏をして泣聲をする。少時其の顏を富枝はぢつと見てゐたが、
「知らない。」
と一言云つて早々と歩き出した。
「ねえ、お孃樣、お孃樣つてば。」
言葉まで粗略になつて、おきそは頻りと富枝を呼んだが富枝は振り向きもせずに通りへ出てしまつた。
電車に乘つて三輪の許へ行つたが三輪は不在だつた。行き着いた時には雨は本降りになつてゐた。富枝の着物は彼方此方と濡れてゐた。其れを溫めながら娘の歸りをお待ちなすつた方が宜いと母親が勧めるので、富枝は上へ上つた。母親は種々と世話しながら、早く來なかつた事を尋ねたりなぞする。新聞の事に就いて富枝は聞かずにゐたが、母親の方から云ひ出した。
「あんな事が新聞に出ましたでな、彼女も怒つとりますの。何うやらした御都合で先方樣が洋行さしてやらうと云ふお話で、もう極つたやうな事を申してをりますが。」
「先方つて、千早ですか。」
と富枝は驚く。
「はあ。何やら分らんけど、年老つたものを置いてゆかれますのが辛いでな。」
母親はもう目を濕ましてゐる。
「立派になる事なら、何うでも宜しいにや宜しいが、五日や十日で往復の出來ますことでもなし、なあ貴女。」
富枝は點頭いた。母親も其れぎり口を噤んで了ふ。雨が猶強くなつて近所のトタン屋根に喧しい音を立ててゐる。
何うして洋行費用なぞを千早が出すのだらうと富枝は不思議に思ふ。其れに就いて三輪を疑つて見たり、千早と何か關係があるのではなかつたかとも思つて見たり、容易に解釋のつかぬ間に日は暮れかゝつて來た。

三輪はまだ歸つて來ない。千早と逢ふ約束があつたので行つたのだから遲くなるかも知れないと母親が云ふ、自分の爲に手を開けてゐられるのが氣の毒なので、何時まで待つても際限がないからと雨傘を借りて富枝は三輪の家を出た。途中で逢ふ事もあらうかと注意したが、其れらしい人にも出逢はなかつた。

新聞記事だけのことなら、千早が洋行費用を出してやるまでの弱點とは思はれない。三輪はあの記事を利用したのであらう。傷つけられた名譽の賠償金額が洋行費用なのかも知れない。それか、然もなければ新聞記事が事實なのかも知れないと富枝は疎ましく思つた。

何となく三輪とは遠く離れて了つたやうな氣がした。自分と對ひ合つた敵陣のなかへ三輪が立つたやうに感じられた。

切通し上で下車りて、自分の「塵泥」を舞臺へかけようと云ふ劇場の前へ行つて見た。

雨は止んで、看板の枠だけが淋しく濡れてゐる。入口を鎖した鐵の扉で永久開かないものの樣に錆び附いて見える。車や馬車が此處に群集して、舞臺へ現れさうな扮裝をした令孃等が、嬉々として入つて行く劇場中の劇場は想ひ得られない。千古の記念建築か何かの樣にしやうに、重く鬱陶しく眞つ黒く見えた。向ひ合つた芝居茶屋の、戸を閉め切つた軒に花の暖簾が薄すりしてゐた。

富枝は少時立ち止つてゐたが、此所で兎に角新派の一流と云はれる俳優達が自分の書いたもののために心を疲らしたり身體を動かしたりするのかと考へ、又、それを多くの人が見物に來たり、眞面目に批評したりするのかと考へて見た。さして自分の心の浮くやうな誇りも味はれなかつた。

額が新派俳優の一座になぞ組むのを自分で笑つて、今度の記事を好い口實に、地位もない名もない婦女の身で歐米へ飛ぶ幸福を作つた三輪を、富枝は偉いと思つた。

劃然と釣つて作つたその人の眼が薄暗い劇場の前に浮き出す。そして、幾年かの後に女優學校から目差される程の女優も出ず、春の早蕨のやうに一列一體によき〳〵と頭を擡げた新しい女優が、まだ身體半分も伸し切らぬうちに何か西洋での名聲を人氣的に掴んだ三輪が、大評判で日本から迎へられる時の有樣までが、富枝には見える。

富枝は舊の道へ引つ返して來た。其所から上野まで歩いた。

大きな手に月を掴んだ雲が、その掌を開いたり窄めたりしてる樣な空である。富枝は借りた傘を荷厄介にしながら山の手線の電車の停留場へ入つた。

電車の中でフロックを着た男と、袴を穿いた男がお互に珍らしさうな顔を爲合つて挨拶をしてゐた。富枝はその傍に腰をかけた。その男の話の中に、

「彼方の電車だつて、君、汚いさ。」

と云つた言葉が富枝の耳に入つた。彼方と云つたのを西洋の事に解して聞いて、妙にその胸が顫へた。

車掌が荷物の番號を一々手帳に記けてゐる。破裂しようとする火山脈の上にでも立つてゐるやうな心持を起させる音響が、電車の床の下で鳴てゐる。富枝は不安な眼で自分の脚下を眺めてゐた。

富枝は染子の許へ行く積りで電車に乗つたのだけれども、染子の家に着くまで染子の事を思はなかつた。

夜深い眞つ暗な四邊に襲はれながら、寂寞した家の内に染子の呼吸を考へた時、急にその人が懐しくなつて來た。

裏門に添つて勝手口へ廻るまで、家の人は

も富枝の來たことを氣付かずにゐた。
「萩生野さんでございますか。」
洋燈を先きに突き出して、出てきた老婆が斯う云つた。白髪が燈火の暈に搖られてゐる。
「お孃さまはお邸へお歸りになりました。」
と斷るやうに又云つた。
病氣が重つたので今日の晝頃、夫人が連れて赤坂の本邸へ歸つたのだと話する。
「重るつて。今朝何ともなかつたのに。」
「急に何でさ、晝頃から工合の惡いところへ夫人が來さしつてお醫者の都合もあるからと云ふことで。」
富枝は落膽して、臺所の踏板に腰をかけた。燈火の點いてゐない奥の方から染子の聲が聞えてくるやうな氣がした。
親切に老婆は提灯を點けて送つてくれた。田端の停車場へ引つ返した時はもう八時を過ぎてゐた。
疲れた富枝は惡寒がして、頸筋の粟立つのが毛孔の引釣れる爲に自分でよく分るやうであつた。染子の容態を種々と老婆に尋ねても少しも老婆の口からは得るやうなこともなかつたが唯斯う云つた。
「何でも貴女樣のことで御座いませうよ。是非今日はおいでなさるお約束だからお待ちしていらつしやるつて云つてらしつたつけ。夫人は何處へ來さしつて下さるも同じだなんて。」
電車がくると富枝は億劫さうな足取をして其れへ乘つた。紅葉見歸りの人が滿員で濡れた楓が富枝の頰に觸れた時富枝は慄然する。發熱したのだらうと自分で自分の身體を氣遣つた。兄の家へ歸るのは厭だと思ひながら、外に宿るやうな馴染んだ家も持たない富枝は、仕方なしに又鍛冶町へ歸つた。家へ入るとき門へ兩手をかけながら、借りた傘を他家へ忘れて來たことを思ひ出してゐた。
おきそに聞くと都滿子は寢てゐると云つた。おきそはポンチ繪の本を紫都子に見せて遊ばしてゐた。
「まだ起きてるの。」
「父さん歸らないのよ。」
と心配さうな顏を叔母に向けて紫都子は仰向いた。
富枝は自分の部屋へ入つてほつとしながら暗い中に茫然と立つてゐると、おきそが怯えた樣子で洋燈を持つて來た。臺へ据ゑて心を捻ぢつてゐるおきその赤い太い手が、富枝の疲れた眼に何うしたのか非常に大きく、氣味の惡い程明瞭と見える。そして其の手に自分の眼が惹くと吸込まれるやうで富枝は驚いた樣に[illegible]を移した。移した場所は眞つ暗だつた。
何時の間にかおきそは寢床を敷いてくれた。ぼんやりと壁に寄り掛つてゐた富枝の傍へ來て小さな聲で、
「お寢みなさいまし。」
と云つて行つて了ふ。富枝は着物を脱ぎ代へもしないで其の儘床の中へ入つた。枕へ頭を押附けるとどしんと地の中へ自分の身體が沈んで行く樣に思はれた。分けて頭が動かすことの出來ない程重くなつてゆく樣な氣がされた。富枝は何も考へずに、唯自分の頭腦が端から眞中へと段々に痲痺れてゆくことだけを覺えながら眠つた。
ふつと、呻吟いたやうな男の聲に目が覺めた。夢から覺めたばかりの富枝は、胸が碎れさうに動悸を打つてゐた。男の呻吟が鼓膜の底に纏はつてゐるやうに感じてゐた。
「ぢやあお前の宜いやうにするさ。」
これは明瞭聞えた。それは兄の聲であつた。續いて姉の泣く聲が聞えた。立つたのか何うしたのか疊を強く踏んだ音がした。直ぐとおきその、

「まあ。まあ。」

と云ふ聲もした。富枝はぢつと夜着の中に身を萎縮めて息をこらしてゐた。

其れ限り茶の室の方は靜であつた。

富枝は一寢入りをすると同時に發熱して總身が燒くやうに熱かつた。田端からの歸り途が甚く困難だつた事が不意と思はれて、今斯うして安らかに蒲團の中に休んでゐる事を殊に選ばれがたい幸福に感じる程嬉しく思はれる。富枝は寢返りして熱ばんだ片手を夜着の冷たい片袖の内に透した。

十七

富枝は病氣であつた。朝飯も欲しくなく床を離れることは猶更出來なかつた。おきそは臺所が忙しいのか少しも顏を出さずにゐる。都滿子も見舞はなかつた。富枝は時々心地惡く目を瞑しては又惛々と眠つた。

お午飯に鷄卵をおきそが持つてきた。何か食べないと身體が疲れるからと云ふおきその注意であつた。富枝は欲しくなかつた。眼の覺めた序に便所へ立つた時、おきそは夜着の中の熱臭いのに驚かされた。

「二階の[illegible]お惡いやうぢやございませんか。」

とおきそは又熟々富枝の顏色を覗つた。富枝は足が浮いて、縁に射した日が眼に痛かつた。

再び床へ入らうとするとおきそは昨夜の手紙を机の上から取つて出した。染子からであつた。

「餘つ程お惡いんでせう。お苦しかございませんか。」

とおきそは重ねて尋ねる。富枝は唯、

「そんなでもない。」

と云つただけで染子の手紙を讀み耽つてゐたが、大儀さうに拋り出して枕にこぼれた髮を押附けると、おきそは富枝の寢衣を持ち出して來て着更へるやうに強ひて勸めた。富枝は冷たいものが肌に觸れることを思つただけでも身内が粟立つのでいやだと云つた。それでは暖めて來て上げると云つておきそは出て行つた。

直ぐと守田の振出しを熱く振出したのを湯吞に入れておきそは持つてきてくれた。富枝は湯氣に薫る香を嗅ぎながら茶碗の端と絲底に指をかけていや／＼飮んだ。おきそは直ぐ又立つて行つて、寢衣の溫みの散らないやうに丸めて抱へながら持つてきたのを富枝に着せる、富枝は一寸着物を脫いだ隙にもう全身が冷えて惡寒をもよほしてゐた。耳孔に[illegible]の鳴るのが針を刺されるやうに思はれたが、床に入ると直ぐ氣怠いほどに熱ばんできて、眠りが富枝の身體を吸ひ込むかと思ふ樣によく寢入つてしまつた。

寢てゐる間も一寸々々人の出入りするのだけは、現に覺えてゐた。いつもおきその樣であつた。一度は自分がその名を呼んだやうにも思つたが、入つて來た人は自分の寢顏を見るなり狼狽てて出て行つたやうであつた。

少時して目が覺めた時は汗に濡れた着物がびつしよりと身體を締めつけてゐた。富枝は低い聲を出しておきそを呼んだ。おきそは氣も苛らさせず直ぐ來た。

「お湯をくれなくつて。」

おきそは湯を取りに行つた。

それを持つてくる時一所にして藥も添へて來た。

「何か食らないと可けませんでせう。」

「欲しくはないもの。」

富枝は起きて兩手をさすりながら身體が[illegible]と云つた。

「晩に少しお粥を摺り申しませう。山崎さんをお呼びした方が宜いだらうつて旦那樣が先刻そんな事を仰しやつていらつしやいました。」

「お醫者なんぞ――」

斯う云つてから、姉は自分の病氣に何故少しも構はないのかと不思議に感じた。誰よりも大騒ぎして仰山に心配する人が聲もかけてくれないのを可笑しく思つた。富枝は昨日の晝の爭論が此樣なことまでの根をしてゐようとは考へられないのだつた。

「姉さんは何うしたの。」

富枝の問ひは輕かつたが、おきそは返事に困ると云ふ顔附をして默つてゐた。おきそは富枝の言葉のうちに怒りが含まれてゐると察して、恐れたのであつた。都滿子は富枝が寢てゐるのは、自分に對して極りが惡いので假病を遣つてゐるのだと先刻おきそに云つた。おきそは其れを富枝に告げて一所に腹を立てようと思つてゐたが、富枝の言葉か何となく怒つてゐるやうな調子だつたと思ふと、話したい事は澁つてしまふ。この上にも面白くない事を聞かせるのが氣の毒のやうで何とも云はなかつた。富枝も聞き度がらなかつた。

夜になるとおきそが昨夜の通りの影を作つて手洋燈を置いて行く。富枝は昨夜の明りを見た時の不快だつた氣分を思ひ出して今夜は其れより幾分か氣が引き立つてゐるやうに感じられた。

翌日はもう富枝は起きられた。[illegible]のものにこれから[illegible]満ちて行かうと云ふ樣な希望があつて、病み上つた力の挫けた身體は大儀で力のなかつた時の身體よりも樂しい狀態にゐる。一日寢て暮した翌日の今日は、一月も二月も患つてから漸く起きられた樣な樂しみを味つた。茶の室で姉に顔を合せたが、都滿子は口を利かなかつた。都滿子は鏡臺に向いて髮をとかしてゐる。富枝はその後に立つて少時默つて見てゐた。

「姉ちやんは寢ん寢して。」

と紫都子が坐つたまゝ仰向いて富枝に聞く。

「紫都ちやん、おとなね。」

富枝は首を曲げて微笑んだ。其所へ、

「今日はお粥になさいますか。」

とおきそが聞きに來ると、

「いゝ病人だね。」

と姉は冷笑しながら云ふ。富枝は姉の肩越しに、鏡の中の蒼い姉の顔を眺めた。

「お粥つてのも大仰ねえ。」

富枝は姉の言葉を常談に取つておいて自分の室へ行つた。

しぐれた空は軒の蔭も寒く思はせた。富枝は障子を閉て切つて、その障子に懷手をしなが[illegible]ゐた。

曇つた色に[illegible]つた障子の[illegible]の心は[illegible]しい。[illegible]しいほど、自分の[illegible]見[illegible]ともする。何[illegible]な[illegible]自分は[illegible]するやうにも思はれる。[illegible]えなくなつた快さを[illegible]だけであつた。その時は見[illegible]切つたもの[illegible]新しく[illegible]しく、何を見る目も[illegible]ゐたが、身體が眞に復ると共に一[illegible]花の咲いたやうな心持ちも舊に復つて平常の淋しい氣分に[illegible]れて了ふ。富枝は唯ぢつと考へ込んでゐた。

例なら何かしら菓子を調へて姉の室で呼ばれる時間であつた。何の爲に姉妹は不和になつて言葉一つ交へないのかと其れが忌々しく思はれた。富枝は茶の室へ出て行つた。都滿子は新聞を讀んでゐた。

富枝は平生の通りの樣子をして、

「もうお八つの時分でせう。」

と態と笑つて聞いた見た。

「然う。」

都滿子の返事はそれだけで、白粉をつけた頸

を拔いて、柔かい片手は新聞の上に投げ出して
ゐる。
「馬鹿々々しいわ。喧嘩したつてつまらないぢ
やありませんか。何うしたつていふの。」
都滿子は默つてゐる。讀んでゆく記事のうち
に可笑しいことがあつたといふ樣に新聞を讀み
さして獨りで笑つてゐる。
「いやな態を爲あつてゐて何が面白いの。」
「ちつとも面白くはありませんよ。」
都滿子は突然に然ういつて身體をおこした。
「お前見たいにしてたら好いぢやありませんか。
姉さんは暢氣よ。」
「暢氣ですとも。暢氣だからこそ一日でも生き
てゐられる。」
「安成さへやいやいやかましく言はれて結構んだから暢氣
だわ。兄さんのためにお化粧して、兄さんの傍
にこにこしたり泣いたりしてみれば其れで濟むんだ
から結構でせう。姉さんの眼のうちに姉妹なん
そんなものはないんですもの。」
「世話のやける姉妹なんぞ欲しくない。」
「欲しくないつたつて捨てる譯にもゆかないで
せう。」
兩人はこんな事を言ひ論つた。貴枝に對する
と違つて、都滿子は富枝に對して自分の心
推を滑らすことは出來ない。都滿子は自分の疑
念を晴らす爲に、先日中の泊り先きを尋ねたか
つたのだけれども自分の胸のうちを見透かされ
るやうな氣がして其れすら聞き得なかつた。然
うかといつて容易に妹に打明ける事も出來な
かつた。富枝は何所か濟ましにくい語氣を示せて、
機嫌の直らない樣である。
別になるからいゝと富枝は云ひ出した。そん
な小さな橋の杭の下に卷いてるやうな渦の中に
自分も捲込まれるのは嫌だからと笑つた。
「それで宜いわ、さうして何でも好きな事をや
るに限るわ。」
都滿子は然ういつて、火鉢にかゝつてゐる鍋
の中の牛乳を攪きまはしてゐた。

十八

二三日富枝は自分の室に引き籠つて暮した。
家にゐるのは厭でもあるし、さて行先を考
へて見ると何處も此處もつまらない場所ばかり
であつた。染子に逢つて見たいのだけれども、
自分が其の當人に逢はうとするまでに、然うす
る事を順序づける他の人々の頭に逢ふのが面
倒であつた。その間に染子の消息を見知つてや
る氣もしなくなつてゐた。
暮れ際になつてから雨がしよぼ／＼と降り出
した。家のものは皆綿入れになつて丁度今日の寒
さを話しあつてゐる。富枝の室へも火鉢が運ば
れて室々の障子を閉てきる音が冬籠りの用意
の一つらしく響く。富枝はコートを着て家を出
た。
電車へ乘ると、雨に濡れた人が隙々にばらり
と腰かけて居るのも寒かつた。風邪の氣味できら
ない身體に、冷たい風が堪れない肌に觸るのが
それも快くなかつた。富枝は東へ行つた。
店の女中が二人ばかり遊びに來てゐて、一人
は三味線を彈いてゐた。貴枝と結ひ立ての若い人
が聲を張らして唄を歌つたりしてゐたが、富枝が
來ると女等は直ぐ止めて店へ歸つて行つた。
「お都滿さんにも呆れるのね。」
突然お姉は富枝に然ういつた。お姉は何か
考へながら書いてゐた算盤を傍へ置いて膝の上
の帳簿を音さして閉ぢる。
富枝は久しく逢はない氣がして家の人たちが
皆懷かしく、思はれた。貴枝を顧いて、
「相變らず達者。」
と聞く。
「この人はもう此頃中一日置に元氣やさんだ。」
貴枝は默して微笑んでゐる。その微笑んだ顏

が富枝には見違へる程小賢しく大人びて見えた。

「富枝さんの好きな金玉糖があつたら、お出し。」

「はい。」

貴枝は返事まで平生と異つてゐる。菓子簞笥の傍へ坐つて、温雅に物を出す風を富枝は何かの實驗でも見究める樣な眼でしつかりと見る。貴枝の羽織の袖は相變らず長く細い頸には例の通り白粉が濃くつけてある。けれど菓子を大きな器から小さい物へ移す器用な手先きや、箸を揃へてから簞笥の中を舊の通りに始末して硝子戸をぴつたりと締めて、さて菓子器を盆ぐるみ持つて立ち上つた樣子や行ひまで、いつもの貴枝とは全く變つてゐた。

「姉さん、お一つ。」

貴枝は又斯う云つた。富枝は答への度を失つてゐた。さうして唯熟々貴枝の顔を打見てゐた。

「あれからお都滿さんは何んな樣子。」

お埒の尋ねることに富枝は委しい返事をするのが辛かつたので自分も病氣でゐたから姉さんの樣子は能く知らないし、姉さんの此處へ來たことも知らないでゐたと云つた限りで、もつと貴枝の變つた態度を見聞きさうとそればかりを氣にしてゐた。

お埒は都滿子が此所へ來たときの樣子を悉く富枝に語つた。富枝より以外にそれを話して聞いて貰ふやうな人はお埒の知己のうちになかつた。話したところで新聞の三面記事を面白がつて讀むのと同じ感想を持つやうな人ばかりで、その場合のお埒の立場に同情したり、貴枝を憫れんだりしてその事件相當の分別を與へて答へる人は一人もなかつた。富枝なら自分の腹の癒えるだけの返事をして呉れるばかりでなく、富枝は富枝だけに自分に聞いて貰ひたい愚痴もあらうと思つたのだが、富枝は別にお埒が激するほど姉のことに就いて彼樣斯樣と云ひもしずにゐた。まして其の事から自分までが妙な誤解を受けて未だに不和でゐる事なぞ少しも聞かさなかつた。富枝はお埒に限らず誰にもそんな恥づべきことは云ひたくないと考へてゐた。

貴枝は行儀よく默つて兩人の話を聞いてゐた。

僅の日數の間に斯うまで態度を變らせたその動機が富枝は知りたかつた。何かの事に就いて甚い小言でも云はれたのかも知れない、貴枝は多々ではあつたけれど、年には似合はぬ老熟せた所もあるので、貴枝は寂しい花嫁の爲にいぢけて一概に子供つぽい樣を爲されて了つたのかも知れぬと富枝は考へた。この事件も兄との關係の事に就いてであらうと判斷した。

「貴枝ちやんは大層おとなしくなつたぢやありませんか。何かお薬が利いたと見えますわね。」

富枝は貴枝の邪氣ない風の消えたのが不平で、わざと皮肉に云つた。お埒は、

「さうでもない。富枝さんがおいでだから一寸猫を被つたところなんさ。忽ち尻尾を現しますよ。」

と云つて綺麗に笑ふ。貴枝は羞かしさうにして腮を襟に擦り附けて俯向く。それが如何にも苦々しいほど態とらしく富枝に見えた。

富枝は貴枝によつて興を醒まされながら其れでも今日自分の來たことの用をお埒に告げた。お埒は眉を寄せて容易ならない事でも聞き出してゐる樣な顔をしてゐたが、

「何故また一人別にならうと思ひ附きだしたのかしら。家がおもしろくない樣なことでも起つたんですか。」

と、其の用を辨じてやるの諾否よりも、まづそれを聞きたがる。

「別に然うぢやないんです。唯一人になつた方

が面白いから。」
「面白いつたつて若い女が一人で世帯を持つ譯にもゆかないし下宿も出來ず、そりやね、家なんぞは隨分、世の中の落ちこぼれ人間が迷ひ込んでくるから、貴女を同居させる樣な都合の好い家もないぢやないが、それだけは能く考へた方がいゝよ、富枝さん、何なら家へ來てたら好いでせう。」
富枝はそれは好まなかつた。
「家を有つ位のことなら妾にも出來るんですから、唯家の事をやつて呉れる樣な老人はないでせうか。」
これが富枝の癖だとお埒は一寸癪にさはる。親切にして云つてやる事は頂から刎ね附けて了つて、自分の云ひ條ばかりを何所までも好いに定めてかゝるのがお埒には生意氣に受取られた。
「なくもありませんよ。然うして一人で生活して行かうと云ふんですか。」
富枝に[illegible]いてゐる。斯う云ふ事情だから別居するとか、別居するには何うしたら好いだらうかとか、富枝に相談をかけられたいのもお埒にはおもしろい[illegible]事も出來ない一つであつた。
そんな位ならさつさと桂庵へでも頼んで人を傭つ

ふが宜いとお埒の顏色は直ぐに變つてくる。けれど笑顏で、
「富枝さん見たいに譯も云はないで唯然う藪から棒ぢや相談にもなれないわね、何故一人になり度いんだか、それが分りや妾だつて力の入れやうもあるつてもんだけれど。」
と苦く云つた。富枝はもう押してその上を賴まなかつた。それで話は又都滿子の上へ返つた。
「ほんとに妾は思ふさま毒突いてやつた。親戚同樣だから好いやうなものの、いゝ恥曝しぢやないかね。貴枝も打たれたんですよ。お前さんは氣狂ひかつて云つたら、氣も狂つてるでせうと云つた。氣狂ひは相手にならないから早々と歸つて貰ひませうと云ふとね、泣き出してさ。」
「持病で仕方がないけれど困るわね。」
「富枝さんも何か姉さんと折合ひがつかないんで別にならうとでも云ふんぢやないか。」
富枝は其れは打明けなかつた。
其晩富枝は初めて東の家へ泊つた。今まで何樣な時にも泊つたことのない富枝が、お埒の勸めるまゝに泊ると云ひ出したので、お埒はひどく喜んだ。お埒は富枝に賴られるほど滿足なので、今夜も不斷の[illegible]にまで[illegible]を[illegible]らして[illegible]

人等を忙しがらせる程大騷ぎした。

十九

翌日になると、暫時斯うして此處に寢起きしたら何うかとお埒は勸めた、決して勉强や書きものの邪魔はさせない樣に大事にするから、氣を措かずに居て見ては何うだらうと云つてくれる。お埒は富枝を引留めておいて人に自慢も爲たいのであつた。それだけにお埒は富枝を尊敬もし、世間見ずの擧動なんぞは、芝居で知つてる吃の又平や左甚五郎などの名人に限つて世間に疎かつたことを手本にして、
「何藝に限らず、他のものより立勝つた人はみんな彼樣なものだ。」
と却つて感心する方であつた。其れだけに自分の家を富枝の家のやうにして、我儘もし、世話も燒かされて[illegible]つた方が嬉しいのだけれども、唯貴枝を懷愛しんで斯うして時々來るだけなのがお飽き足りなかつた。
姉さんの傍[illegible]けれようと云ふのなら、此家へ來てゐた方がいゝ、それとも唯自分だけ一人になりたいと云ふのなら又[illegible]しやうもあると云はれても、其れに[illegible]して富枝は少しも自分の考へを云はないのがお埒[illegible]ないで[illegible]かつ

た。此の話はそんな事であつたが、午後になると富枝はお玲に駒下駄をかりて貴枝を伴れて家を出た。

銀座で買物をしようと云ふのである。買物も貴枝に何か買つてやらうと云ふ註文なので、兩人は遊びながら、煉瓦の路を歩いた。

貴枝は彼れも欲しいこれも欲しいと臆面もなく云ひ出した。お玲の傍とは違つて何點か餘裕の出來た顏が美しく見えた。

「貴枝ちやんは何だつて欲しいものは阿母さんが買つてくれるからいゝぢやないの。」

「幾何買つてくれても、まだ欲しいわよ。」

富枝はその云ひ草がをかしく思はれた。兩人は三越へ入つて花簪を買つた。色は白いけれど大きな花の花簪だつたので、まだ此樣な物を插したい氣なのが可愛らしかつた。雛妓が兩人島田の[illegible]にするのだと云つて、薄桃色の造花を同じ大きさに作らしてゐるのを貴枝は見てゐたが、その顏を見てから自分の容貌を誇つたやうな濟まし顏して傍の方を仰向いた。それを富枝はぢつと眺めた。其處を出ると富枝はぶらぶらと新橋の方に向く。貴枝は博品館へ入ると云つてる。富枝は貴枝の柔かい手を曳いて、

「もつと遠い所へ遊びに行から。」

と云つた。

「遠い所つて何所、上野。」

と貴枝が自分相應の遠いところを聞いて見る。

「もつと。汽車へ乘つて行くやうなところ。」

往來の女はもう襟卷を爲てゐる時であつた。晴れた日に當つてゐたから風が脣に冷たい。

「汽車で。大變だわ。」

貴枝はさも驚いた樣な聲を出す。富枝は默つて新橋の停車場へ入つた。

富枝は貴枝を伴れて箱根へ行かうと思ひ附いた。國府津行の汽車は發車するまでに、僅十五分しきや間のないのが餘計富枝の心を促した。富枝は切符を買つてから愉快さうに貴枝を見て笑つたが、貴枝は氣味を惡がつて汽車へ乘るのは厭だと云ひ張つた。

「こんな着物でそんな所まで行かれないわ。外聞がわるいわよ。」

貴枝が斯う云つて、それでも引つ掛けて出た[illegible]縮緬の羽織をいぢつて見た。

「着物で行くんぢやないの。何だつて構はないぢやありませんか。」

「妾いやだわ。連れてつて貰ふのは宜いけれど。そんなら一旦家へ行つて美い衣服を着て來ないうちは、」

昨日兄の家を出た時から富枝は箱根へでも行かうと思つてゐた。貴枝が望まなければ一人して行くつもりで[illegible]へ行つた時、貴枝は[illegible]かけて來て、

「直ぐ歸れて。」

と聞いた。

「それア何日歸れるか分らない。」

と云つたにも關はらず、貴枝は富枝に從いて入つた。切符を二枚切らせて人に押されながらプラットフォームを走つた。

汽車の中でも貴枝は家を案じ[illegible]げなかつた。唯、溫泉へ行つてもこんな着物ではと[illegible]ばかりを繰り返してゐた。手に持つてるのが面倒だと云ふので、買つた花簪を箱から出して貴枝は頭髮に插した。箱を潰して窓から外へ富枝は投げた。丁度[illegible]松原が過ぎて見える。

貴枝は夏冬の湯治に伴はれ馴れて、汽車の旅を珍らしがる風はない。家にゐて踏臺へでも腰を掛けて巫山戯てゐる樣な工合で、室の腰掛に身を凭せてゐる。窓硝子に貴枝の插した花簪が白く映つてちら／＼する。

室の内には他に客の一組がある限りで靜であ

つた。其の客は窓によつた腰掛を殘らず占領して、毛布に包まつて寢てゐる病人らしい男を、女が二人男一人で取卷いてゐた。丸髷に結つた年增の女はいかにも水々と意氣に見えた。白い袖の振りが短く揃つてゐる。足が痲痺れると見えて時々坐つた足を腰掛の下へと延ばす。眞つ白な小さい足袋が下駄を探る度にお召の裾がなだらかに絡む。一服吸ふと、吸殼を茶碗に受けて、直ぐ丁寧に煙管筒に煙管をしまひ込みその兩手を膝に乘せて少し身體を屈み加減にさせてゐる。物を云ふとき眉毛を上げて、頰に窪を湛ふあたりが素人の匂ひばかりはしなかつた。伴れのわかい女はこれに比べて野暮な風であつた。唯その指環なり衣服なりに、年增の女に劣らぬほどの贅を見せてゐた。男は二人に使はるゝ下僕の樣な言葉づかひをしてゐる。病人は若い女の良人らしい樣にも察せられた。若い女は伴れの方を姉さんと呼んでゐる。年增の女は貴枝の丁度向ひにゐたので貴枝を好きらしい眼つきでじつと見ながら、

「何處へいらつしやるの。」

と尋ねた。

「箱根へかんざしを買ひに出た途中から急に行くことになつて了つたの。」

と臆面もなく甘え氣味で貴枝は答へる。彼方の女は笑つてゐた。

「姉さんは斯う云ふ無暗な人なのよ。」

と此樣なことまで饒舌つて、それでも富枝の袖に擦りついてゐる。女の子供の云ふ事は分らぬと云ふ顏附で又笑つた。

「彼方へ行つてから電報打つの。今夜は阿母さんが大騷ぎすることよ。」

貴枝は寧ろそれを面白さうにして斯う云ふ。

「電報を見るとね、妾の衣服を持つて直ぐやつてくるわ。」

貴枝は幼い心にもこんな唐突のことが面白く感じられた。そして人を驚かし騷がすのも嬉しかつた。

「姉さんと一所だから叱言は云はれないわねえ。」

と落着くと共に斯う喜んだ。

國府津へ着くと二時過ぎてゐる。此處で電報を打つて二人は直ぐに電車へ乘つた。小田原の町は寂しくて、砂埃が立つてゐた。貴枝は汽車から下りた時初めて東京から遠く離れた思ひが迫つて心細く感じた。そして甚く寒かつた。

「もう東京ぢやないのね。」

と寂しい顏をする。それでも、これから旅行すると云ふ區劃がついてゐなかつたので、花簪を買ひに出た通りの路を眞つ直に運ばれてるやうにも感じてゐた。

「明日は歸るんでせう。ねえ、姉さん。」

富枝は貴枝と二人限り、斯うして知つた人等の手から離れて旅をすると云ふ心持が、貴枝を親しませ馴染ませる樣に思はれて嬉しかつたので、

「いつまでも遊んでようとは思はないの。姉さんと二人でゞ。」

と云つて貴枝の背中に手を廻した。貴枝は、

「寒いわねえ、箱根は。」

と自分の小さい額に迫つた山を窓から振り返つて身を固くした。

二十

溫泉宿へ着いた時はもう電燈が點いてゐた。鞄もなければ着代へもないのを、をかしいと云つて貴枝は床の間の前で笑つた。此家では富枝にも貴枝にも馴染であつた。

廊下に出て貴枝はまた全く暮れ切らない山と空を見上げて眺めてゐた。

二人は湯に入つた。

貴枝は素早く衣服を脫ぎすてて、穴の湯に

るやうな湯槽の中に飛び込んできやつ〳〵と騒いでゐる。そして富枝を野呂間だと云つて湯に入るのゝ遅いのををかしかつた。

「紅葉が赤かつたわねえ。」

貴枝の眼に殘つた印象は、來るまでの山を通して赤い楓一つであつた。

湯から上つた貴枝の顏は綺麗であつた。荒い銘仙の袷に白と紫の縞襦子の帶を貝の口にして貴枝は膳に向つた。緋縮緬の小さな襦袢の襟が慥くりした圓い咽喉に食ひ込んでゐる。眼の端の紅を刷したやうに赤らんだのを屢打かしながら、貴枝は頻りと今日不意にこんな遠くまで來た顚末を給仕の下女に話した。

「これを買ひに出たのよ。」

と云つて插してゐた花簪を拔いて下女に見せた。

「お宅ぢや御心配なすつていらつしやいませうね。」

と富枝に下女は聞いた。

「妾と一所だから何とも思やしないでせう。」

「明日は一番で阿母さんは飛んで來てよ、もうきつと、斯う云ふわ。富枝さんも富枝さんだ、何とか云つて出たら宜ささうなもんだのに、つて。」

聲まで太くして云つたのが可笑しかつたので富枝も下女も笑つた。

客が少いので何室も森としてる。溪流の音が時々貴枝のはしやいだ氣を沈み込ませた。

「お天氣だと月があるんだけれど、曇つてるわね。」

富枝が聞くと下女は膳を下げながら、曇つてゐると答へた。

「外へなんか出るのはいやよ、妾人形だけでも持つて來たかつたわ。」

「ぢや橋の邊までゆくのもいや。」

「明日がいゝわよ。」

貴枝は火鉢の横に横坐りして、今時分は電報を見て驚いて騒いでるだらうの、明日出てくる支度を阿母さんが眼ばかりになつてやつてるだらうの、とそんな事ばかり云つた。

「又お湯へ入りませうか。」

「入りたきや入つていらつしやいな。」

貴枝は又入浴りに行つた。後で富枝は茫然と額を眺めた。額は當時の名の響いた畫家や文士等が、絹地に一筆づつ揮つたものだつた。中に綠紫の名を署したのを見出して珍らしく眺めた。

貴枝は下女に白粉を借りたと云つてお化粧をして來た。

「姉さん、妾もう東京へなんか歸りたくないわ。」

「箱根にゐるの。」

「箱根つて此處にばかりもゐられないけれど。」

と云つて貴枝は考へてる。

「ぢや何所にゐたいの。」

「矢つ張りまあ此樣なやうな所でね、好きなことして遊んでゐたいの。」

富枝は自分も母の血を享けてゐる、貴枝も自分と同じ母の血を受けてゐると思つて少時その顏を打守つた。

「妾、阿母さんは嫌ひぢやないけれど恐くつていやだわ。」

貴枝は又こんな事を云ひ出した。蒔繪の食籠の蓋を取つて貴枝は中を覗く。バナヽの菓子の褪紅色に白い粉をまぶしたのが重なつてゐる。

廊下の雨戸一重の外から山氣の襲ふのがよく富枝の肌に知れた。兩人は熱い湯に漬かつた名殘りの暖みの去らない身體を又暖かい夜着の内に入れた。掌や足の裏に脂肪が浮いて、溶けさうな軟かみを自分の肌に感じた時快い氣持に横臥はつた。

貴枝は溪の水の音が耳に附いて寢られないと

云つて、蒲團の中で動き返つた。富枝も寢附かれなかつた。

「妾、夢見たいよ。此樣な所へ來てからして姉さんと寢てゐるのが。」

貴枝は姉の方を向く。明るい電氣の下に貴枝の髮が黑い蔭を作つて、枕のふさが搖れた。

「何だかね、銀座の通りを歩いてるやうな氣ばかりしてるの。」

姉妹は生みの母の話を始めた。

富枝は貴枝と別れてから斯うして一つ床のうちに寢たのは初めてであつた。

「貴枝ちやんと一所にゐた頃は、始終姉さんとばかり寢てゐたのね。」

さすがに貴枝も其れを懷愛しく思ひ出した。

「妾は二人阿母さんを持つたんだわね。」

何にも珍らしいと云ふ風で貴枝は云ふ。

「どの阿母さんが好い。」

「さうね、眞の阿母さんが一番好いに違ひないけれどよく知らないもの。」

貴枝は起き上つて襟元を撫でながら枕が痛いと云つた。富枝は起きて座蒲團に自分の帶上げの布を巻いて渡した。貴枝は木枕を傍に投げ出して、姉の手から渡された枕に深く頭を落し込んで姉の方を向いた。

「姉さんと二人つ切り、何所かへ行つちまつたら何うするでせう。」

「姉さんと何所へでも行く、貴枝ちやんは。」

貴枝は直ぐに返事をしなかつた。富枝は染子を思つた。貴枝が染子であつたら、何故二人はからして一生一所にゐられないのかと泣くであらうのにと考へた。

貴枝が痲疹に罹つた時熱に苦しめられてはいつも富枝を呼んだ、後妻であつたお伊豫に少しも馴れないで。父も嫌つて唯姉ばかりを慕つたことを富枝が話して聞かせる。

「貴枝ちやんが五歲の時よ。夜中になるとね、苦しい〳〵と云つて泣き出すの。然うすると妾がもう三十分經つと熱が失くなるからもう少しの我慢だと云ふとね、妾の袖を掴んでもう何時々々つて聞いたつけ。」

貴枝はくす〳〵笑つてる。

「覺えてるの。」

「えゝ、ぼんやり覺えてるわ、其れより火傷した時の方がまだ能く覺えててよ。」

友人と座敷の中で鬼ごつこをした時、煙草盆を覆返した中の煙草の火の小さなのが貴枝の踵の横に密着いて了つた。その火傷の爲に、每日跛をした足を投げ出して坐つてゐた事を覺えてゐる。

「小さい時はほんとに泣蟲だつたんだけれど、今ぢや可けないわ。」

貴枝は高慢に、

「大人になればもう泣きやしないわ。」

と云つて蒲團の中でころ〳〵と笑つた。

「大人になつても泣く人もあるの。」

「ぢや馬鹿だわよ。」

貴枝は眠くなつた樣な眼附で富枝の顏をちつと見てゐたが、次第に瞼が重なりかけて眼をしぱしぱさせると、

「眠くなつちやつたわ。」

と云つてがつくり頭を枕に落して了つた。

富枝は何も云はずに貴枝の眠つてゆく顏を眺めてゐた。前髮の下の方へ傾斜いだ白い花簪が拔けさうに髮の上を覗んでゐる。富枝は手を延ばして花簪を拔いてやつた。拔いた花簪を眼の前へ持つて來て少時油の香を嗅いでゐた。

山には鳥の聲もしなかつた。段々冬に入らうとする山の荒んだ形が胸に徹みて富枝は寂しい幻を描いてゐた。

二十一

朝早く二人は湯本の方へ下つて行かうとし

た。宿の下女が一緒に從いて來た。宿の前はあつたけれども西の日が山を照して快い心持であつた。宿は何處も戶が閉してあつて硝子障子に落葉の影を映してゐるやうな陰氣な家も見える。山の裾には紫の野菊が咲いてゐた。玉簾の瀧まで來ると顫へる程寒かつた。夏場だけよく[illegible]と云ふ貸家が釘附けになつてゐて、屋根に半ば枯れた蔦が這ひ落ちてゐるのも淋しかつた。瀧の水が灰色に縮れて見えた。貴枝は寒いから歸ると云ひ出した。貴枝の欲しいと云ふ菓子を下女に求めさせて二人は元の道へ戻つてくると、太つた女が人力車いつぱいになつて遅々と途を上つて行くのが行先に見えた。小さい丸髷の頭を頻りに右左に彼方此方と動かしてゐるやうであつた。

「阿母さんだわ。」

貴枝は斯う叫んで馳け出した。然し人力車は停まる事なしに、今までよりは速力を增して馳けて行つた。貴枝は足を止めて後から來る富枝を待つてゐた。

「何て早いんでせう、一番で來たんでせうか。」

「一番だつて箱根まではまだ來られやしない。」

二人は急いで歩行いた。玉の緒橋まで來ると自分等の宿の前に今行つた人力車の停まつてゐるのが見えた。

「母親樣がお見えになりました。」

宿の內儀は二人を迎へて斯う告げた。貴枝がすた／＼と走つて二階へ行くと、お埒は座敷に坐つて、半コートを脫ぎかけてゐるところだつた。

「早かつたわね。」

「早いつてお前。」

お埒は斯う云つた限りでぽつと息を吐いてゐる。

「御心配なすつて。」

富枝は笑ひながら後から入つて來て中腰になつた。

「心配もしないけれどもね。」

お埒は狼狽てた顏を見せるのも忌々しく思つた。昨日電報を受取つた時、女の癖に大膽だと呆れて腹を立てたが、今斯うして二人の樣子を見ると見物に出た序にお湯に入りに來たと云ふ程手輕にしか思はれなかつた。却つて、昨夜の七時五十分の汽車で國府津まで來てゐた自分が、餘り周章てすぎて馬鹿々々しいやうに思ひ取られた。

「何程何だつて此女が平常のまゝだからと思つてね、着代を持つて來ましたよ。」

貴枝は鞄に寄つて直ぐ着代へようとした。

「電報を見ると直ぐ支度して昨夜の內に國府津へ來てゐた。」

「其れで此樣に早かつたんだわ。」

貴枝は[illegible]を明けると、お埒は[illegible]を貴枝に渡してから長襦袢に新しい湯文字までを用意して、次の室へ持つて行つた。

「富枝さんも寒からうと思つて、コートも着て出なかつたから持つて來て上げた。」

と次ぎの室からお埒は聲をかけた。富枝は手數をかけて濟まなかつたと禮を[illegible]、行つて、

「今日お歸りなさるの。」

と聞いて見る。

「歸らなくつちや妾の手は開けておかれないからね、女同士で此樣なところに居るのは富枝さんも宜くないから歸つた方が宜い。此樣な所へ來るなら來る樣に家の整理をつけてちやんとして置いてからでなくちや出られないから。」

お埒は貴枝の帶を結んでやらうとして又鞄のある所まで來たが思ひ直して中から緋しぼりの扱帶を出した。

「それ。」

と云つて貴枝に投げてやると、貴枝が其れを

ばらりと解いてぐる／＼と巻いた。

お埒はもう一つ小さい箱から指環を出してそれを貴枝に渡した。貴枝は平生は紅石入りのを一つしきや嵌めてゐなかつた。

お埒が渡したのは眞珠の三つ入つたのと牡丹を彫つた厚味のあるのと二箇であつた。

貴枝はそれを兩方の指へ適宜に嵌める。下女が二人も來て着物の始末などしてくれる。

やがてお埒は貴枝を伴れて湯へ入りに行つた。

富枝は茫然としてゐた。然しお埒に反抗つて一人此所に殘るのもつまらなく思はれた。東京へ歸るのもつまらないと思ひながら矢張り其所へ歸る他はなかつた、東京へ歸つて兄の家へ入るより他には富枝の身體を持つてゆく所もなかつた。富枝は落膽として坐り込んだ。

「午後だと何時の汽車になりますね。」

お埒は下女に聞きながら廊下を歸つてきた。

貴枝が先に入つて鏡臺の前へ坐ると、又鞄の中から化粧道具を出してやつた。貴枝は浴衣の肌を脱いで器用に化粧をした。下女は洗面器に湯を汲んできた。その時お埒は寒いと云つて障子を閉てさせた。

「もう箱根も有難くない時候になりましたね。」

とお埒は下女に云つた。

「左樣でございます。もう冬枯れで。」

と下女は微笑んだ。貴枝は手を洗いでから一旦拔いた指環を又丁寧に一本づつ嵌めた。下女は目をそれに注めてゐた。

四時半の國府津發の汽車で歸ることに定めてお埒は晝飯を命じる。富枝は默つてゐた。

「貴枝ちやん、箱根へ來て面白かつたかい。」

お埒は聞いた。

「妾、夢中よ。」

貴枝は當り觸らぬ返事して鞄の中を見てゐたが、

「こんな甘味しいお菓子があるのに。」

と云つて紙包みを出した。

「ほんにさ。國府津で貰つて來たんだよ。お食りな。」

貴枝は紙を展げて姉の前に置いた。砂糖漬の菓子を摘んで貴枝はその指を含んだ。

「阿母さん、心配して。」

「芝居へでも入り込んでるんで遲いのかと思つてゐたら其所へ電報が來たんだよ。一度は度膽を拔かれた。餘り離れ業を富枝さんがやつたから。」

富枝は苦笑ひした。然し其れに就いて謝罪るべき筋はないと思つてゐるので何とも云はずにゐる。お埒も怒りやうもなかつた。

「せめてね着物でも着代へてゐればまだしも、此樣な服裝で箱根くんだりまで出てくるなんて。汽車は一等かい、三等かい。」

「二等よ。」

「よく恥かしくなかつたね。」

貴枝は何が可笑しかつたか突然笑ひ出した。

「裸體で道中がなるものかつて云ふけれど、着物着てゐるから大丈夫よ。」

お埒も笑はされた。貴枝は飾りのない昔の貴枝になつて母のまへでも巫山戲だした。富枝はそれが滿足に思はれて嬉しかつた。

三人は宿のものに送られて湯本まで步いた。黑と白の矢羽根のお召の半コートの下から藤と白の市松紋羽二重に大きな模樣の派手なのが現れてゐた。所爲のない方々の宿屋の人等は美しい貴枝を外へ出て見送つて噂をしあつた。お埒は溜飲の下つた樣に自慢の目を輝かし／＼して步いて行つた。

新橋へ着くと七時を過ぎてゐた。停車場へは電報に由つて迎へに來た店の若い者が待つてゐた。東京は風が吹いて眼も向けられない樣な甚

い埃の夜の街に擴がつてゐた。
富枝はお埒に強ひられて東へ一旦歸る事にした。そしてお埒は今夜悠くり先夜富枝の話した身の移動に就いて相談しようと云つたが、富枝は却つてそれを迷惑に感じた。けれど伴はれて東へ行く事は行つた。
何時の間に購はせたかお埒は寄木細工の土産物を出して皆に分けてやつてゐる。
「富枝さんのお蔭でいゝ保養をさせられた。」
と云つてお埒は大笑ひした。店の女中が代る代るお埒の許へ挨拶に來る。貴枝は疲勞れた顔も爲ずに、鞄や自分の身の周りの物など一々奥へ入つて片附けてゐた。湯に入つてゐた婆やはその時上つて來て、
「お早うございました。お勞れでございませう。」
とお埒に挨拶してから、
「ほんとに貴女は見掛けによらない無暗な方だね。妙齢の娘さんを箱根くんだりまで連れ出すなんて、男だつて一寸はやり得ませんぜ。」
と富枝に云つた。
「御當人は平氣でも傍が驚きますからね、新橋の千萬ちやんも大層心配なすつてね。」
「然うかい。あの子は連れてでも行つたのかい。」
とお埒は煙草を飲みながら口を挾んだ。姉さんの許へおむつちやんは伴れて行きなすつたと云つてから婆やは富枝を熟々眺めて、
「一體にこの姉妹衆は變つてゐなさいますね。」
と眼で笑つた。
「富枝さんは別さ。然う云ふ點が又好いのさ。」
とお埒は取合はなかつたが、富枝は強い顔して婆やの顔を見返してゐた。お埒はいろ〳〵と云つて留めたけれども、富枝は麻布でも心配するからと云ふのを楯にして歸つた。貴枝は、
「左様なら。」
と云つた限りで送つても出ずにゐた。富枝の歸つた後で、少しでも昨日の叱言を輕くする手段として態と富枝に疎くして見せるのだが、それが富枝には話して聞かされる樣によく見え透いて憫れに思つた。
今日お埒が迎へに來た時、もつと自分と箱根で遊んで居たいと云はれたら自分はどんなに嬉しかつたらう。母へ附くもの姉へ附くものとの區別を明かにしないで遊んでゐたいとも歸りたいとも自分の意志を露にする事もなく、唯切々と化粧をして綺羅びやかな裝ひを人の前に曝して貴枝は姉に伴れられて行つた。貴枝は又姉に伴れられて歸つて來た。富枝は貴枝が憎くはなかつた。唯眼の前に見た貴枝の動作の一つ〳〵が、不具者の動かす手足のやうに富枝には不憫に悲しく思はれてならなかつた。

二十二

家へ歸るとおきそは相變らず親切な顔をして富枝を勞つてくれた。都滿子は何とも云はなかつた。富枝が室に入つて少時すると兄の緑紫に呼ばれた。富枝は二階の書齋に行つた。
「この頃はよく家を明けるつてね、何所へ出かけるんだい。」
兄は笑ひながら斯う尋ねた。朱筆を持つた緑紫は机を向いて校正をしながらであつた。富枝は默つてゐた。
「ねえ、何所へ行くんだね。姉さんが心配するから僕が聞くんだけれど差支へない限り僕等の耳へも入れておくさ。」
兄は筆を擱いて煙草を喫み始める。無論緑紫は富枝の行先を怪しんでゐるのではなかつた。姉の都滿子よりも兄の方が富枝の性行をよく呑み込んでゐる。何所か山や水のある邊まで出て言つたのだらうとは推してゐるが、自分は其の

爲に都滿子から面白くない事を云はれてゐるので、その疑ひを解く爲に綠紫自身富枝の出先を聞いてやらうと云ふのであつた。

「そんな事は僕等に聞かして置いてくれないと一寸困ることがあるからね。」

と、兄はまた言つた。

「惡うございました。」

富枝は綺麗にあやまつてもう其樣な御心配はかけないと云つた。綠紫は笑ひ出して、

「さう改まられると、此方が極りが惡い。あやまる必要もないが姉さんだけには聞かして置きたまへ。昔の性だから。」

終りの言葉を姉に向けて綠紫は云つた。

「旅行でもして來たか。」

「いゝえ。」

兩人の言葉は其れ限りで切れて了ふ。話が切れると富枝は自分の室へ引取つた。染子から手紙が來てゐた。

駿河臺の病院にゐるとしてあつた、明日は早く行くことにして富枝は直ぐ床に入つた。

翌日富枝が病院へ行かうとして家を出る時、姉の旅裝の支度を都滿子は手傳つてゐたが近頃にない機嫌の好い顏で、

「今日も出かけるの。」

と聞いた。富枝は姉の笑顏を珍らしく眺めて、染子が入院したと云ふから病院まで行つてくると角もなく答へておいて、

「兄さんは御旅行なさるんですか。」

と此方からも聞いた。

「當分不在にするから、宜しく賴みます。」

と笑つた綠紫が其れに返事した。富枝は旅行先を押しても聞かずに出ると、都滿子は、

「早くお歸んなさい。」

と云つて玄關まで送つて出た。下駄の事まで心を附けて、

「逢つたらよろしく、お大事に。」

と姉は調子に乘つた世辭までを附け加した。

富枝は病院の歸途に何所か小さな家を見附ける積りでゐた。それから桂庵へ賴んで老婆を抱へようとそれまで極めてゐたが、今日の姉の素振に又釣られて、富枝は家を探して一人別になると云ふ氣が失くなりかけた。姉の云ふ通りに早く歸つて、久し振りで姉妹らしい顏を見あつて話して見たかつた。富枝は外を歩きながら幾たびも姉を懷愛しく思ひ出してゐた。

富枝が駿河臺の病院に着いたのは丁度十時頃だつた。染子は湯を使つてる最中で室にはゐなかつた。邸から從いて來てゐる老人の女が嚴肅な顏をして椅子に腰かけてゐた。

「お見舞の方でございますよ。」

と案內の看護婦が云つた時に、老女は恭しく立つて富枝を迎へた。

「只今お湯浴最中でございまして。ま、おかけ遊ばせ。」

老女は斯う挨拶した。白い襦袢の襟を苦く襟元から出してゐるのが富枝の眼につく。老女は立つて次ぎの寢臺のある方の室に行つたが、やがて珈琲を持つて來た。卓子の上にはいろ〳〵な繪葉書だの、見舞狀だの、見舞品だの名刺だのが片附いて乘つてゐる。

「御重態でございますか。」

「いゝえ、お動けになります位でございます。さしたる事もお在りにはならない樣でございます。」

「御病氣はなんで御座いますの。」

老女は首を傾けて、一旦剃つた眉毛が十日ばかり生えたと云ふ樣なのを八字にして考へてゐたが、

「妾、いま忘れましてございますが。」

と云つてつゝしみ深く笑つた。

隣室の扉が開いて、二三人の足音が靜に爲た。老女は直に隣りへ行つた。間の扉もきちりと

出て行つた。[illegible]でいた[illegible]の表の[illegible]合ふやうにさや／＼と聞かれる。又一人外から入つて来たやうであつた。誰の声も交つてゐるやうであつた。若女は長い間出てこなかつた。富枝は不思議に思ふほど待たされた。

呼びに来たのは看護婦だつた。行つて見ると染子は窶れた面を上げて寝臺の上に起きてゐた。若女は傍に立つてゐる。看護婦が二人後方にゐる。盛装した令嬢が染子の身體を後から支へてゐるところだつた。自分の入つた戸口の傍には洋服の男と若い侍女らしい女とが並んでゐた。富枝は眩しい人に眼を失つて、入口に立つた儘遠く染子の方を見ると、漸と笑ふと云ふ様な顔をして染子は丁寧に辭儀をした。富枝が頭を下げた時、室にゐた殘らずの人が云ひ合せた様に一齊に頭を下げた。

富枝は傍へ寄つても云ふべき言葉がなかつた。傍の人に聞かれても好い様な飾つた言葉を用ふるのは富枝にはこの場合どうしても出来ない。仕方なく富枝は默つて唯ぢつと染子の顔を見ただけである。染子の眼は涙含んでゐる。令嬢は細い指で染子の髪を後へ撫でてゐる。その度に高貴な匂ひがそこらに流れる。誰も一言を云ふものがないので室は唯人々が位置づいた儘に立つた儘でゐる。[illegible]、又見舞の人が来た。面識らしい夫人であつた。その人は入ると輕く會釋して、つか／＼と染子の傍へ行くと、

「どんな。容態は變りませんか。」

と優しく聞いた。侍女が椅子を二つ持つて来て寝臺の傍に置く。夫人はそれに掛ける時、

「どうぞ。」

と云つて富枝にも勧めた。

富枝は何も染子に語る機會がなくなつて過ぎた。夫人は快活で世間の事などいろ／＼と話して聞かしたが、来合せてゐる令嬢や染子の親類などに関係のあるらしい話が多く交つて富枝はまるで他の人であつた。染子は悲しさうな顔に絶えず笑ひをもつてその話に耳を傾けてゐるやうな様子を見せてゐたが、夫人が次ぎの室へ行つた時、

「お姉様。」

と呼んだ。富枝が立つて傍へ行くと、

「此様なところで失禮して。」

と云つただけで默つた。富枝はたゞ、

「我儘なさらずによく御養生なさい。直きと御全快なさるでせう。」

と慰めた。染子の後にゐた令嬢は夫人の後に従いて隣室へ行つて了つたけれども、二人はそれ以上口を[illegible]、この[illegible]ないやうであつた。[illegible]が一番よく[illegible]る。

白い寝臺にまだ[illegible]その時看護婦の匂ひをさした看護婦が[illegible]て来て染子の[illegible]を換へた。衣嚢から女[illegible]を出した[illegible]顔が[illegible]つてゐるのできさうに富枝に見えた。

「お寝みになつていらつしやらなければ行けません。」

と看護婦は優しい調子で云つて、[illegible]看護婦に何か命じる。一人の看護婦は[illegible]から表を取つて渡した。

染子は看護婦の丁寧な手扱ひの静に寝かされた。そしてその枕頭に立つて散薬をオブラートに包まうとするのを見て、染子はこの方にそれを為て戴いてくれと頼んだ。看護婦は[illegible]ひながらそれを富枝に渡した。富枝はオブラートを水に浮かして中に粉薬を落しは落したが、巧にそれを包むことが出来ないので困つた顔をする。染子はそれを見て禁め得ないやうな笑顔を見せた。

看護婦に包んで貰つたのを富枝は小楊枝の先きにかけて染子の口に入れた。それから又看護

婦から湯呑を受取つて染子の口の傍に持つて行つた。染子は起き返つてそれを手に支へて二口ほど呑んだ。

見舞の客は追々と來た。中には老女が應接しただけで歸るのもあつた。先きに來た夫人は今日一日看病するのだと云つて新刊の小説を持つて來て染子の枕頭に寄つた。それが好い遊び所にしてゐるやうに富枝には思はれた。

富枝は暫時して歸らうとすると、染子はもう少し居て欲しいと云つて歸したがらなかつた。夫人は不審さうに染子の云ふ事を聞いてゐたが、

「御病氣のある方を何ですね。今日は叔母さんがお待ちしてますから[illegible]を仰しやつては可けません[illegible]」

と染子をとめた。染子は富枝の歸つて行く姿を見送つて、眼に涙を溜めてゐた。富枝は歸りがけに送つてくれた看護婦に染子の病名を尋ねた。看護婦は呼吸器病だと答へた。

二十三

富枝は少しも氣が引立たなかつたのをその晩、都滿子に引つ張り出されて新橋の演藝館へ行つた。一流の落語家ばかりが寄つて組織した何會とか云ふのだつた。話の最中時々都滿子は聲を上げて笑つた。一所に來たおきそも揉られる樣な笑ひ方をして落語を面白がつてゐる。富枝は二人の笑ふのに氣を取られて傍へ氣をおいた。それから又二人が無心に笑ひ崩れて樂しさうなのが羨ましくもあつた。

「妙な噺だね、[illegible]よ、まあ―」

三人目かの若い落語家が出た時であつた。都滿子は斯う云つてもうくす／＼笑ひ始めた。

「ほんとで御座いますね　[illegible]ほんとの散り蓮華に[illegible]つてんで御座いませうね。」

富枝は二人のこの話が可笑しくて笑ひたい位であつた。[illegible]落語家は[illegible]れてはゐない樣であつたけれども[illegible]つた。いかにも話らしく、[illegible]のうちにも[illegible]しい可笑しい味を交ぜ[illegible]な出來事を並べてゆく所が中々[illegible]な[illegible]を見せてゐた。その話家は丁度今の小説の大家の筆振に似て[illegible]作への聯絡を自然に持つて行つて、それで次ぎの事件の起[illegible]人をして、次ぎの事件に[illegible]せるだけの餘裕を[illegible]ものだと富枝は[illegible]もあつた

し、隨分惡どく都滿子やおきその樣な人を笑はせるのもあつた。演藝館を出た時、おきそも都滿子も眼を眞つ赤にして一泣きしたやうな顏をしてゐた。[illegible]都子は何が面白かつたか母の膝に眠りもしてゐた。其處から一同電車で麻布へ歸つた。

歸つてからも都滿子は落語の筋を繰り返しておきそと散々笑つた。どうしたなら斯う笑へるかと富枝は又先刻の羨ましさを新しくした。

「富枝さんは何だか陰氣になつたのね。」

と都滿子は寢る時に富枝にたづねたが、おきそは、

「また御病氣が快くないんで御座いませう。」

と[illegible]顏を見た。その二人の顏を富枝は見比べて、

「だつて[illegible]の呑氣にや叶はないわ。」

と[illegible]に笑つた。

「何か心配なことでもあるんぢやありませんか。」

と都滿子は富枝の面に注意をしたが、心配事なら[illegible]や仕ない、必ずおすそ分けするから安心していらつしやいと云つて富枝は自分の座敷へ歸つた。

沈んだ自分を無理に掻き廻されたやうな心地

で、再び泥の澱むまでが富枝には苦痛であつた。逆上せた氣味で富枝は僅な頭痛を感じる。おきそは何時かの藥の殘りがあるからと云つて振出して來てくれた。

話の序に酉の市がもう直きだとおきそは云つた。富枝は年の經つのが恐しい程早く思へた。

「一の酉にはきつと行つて見たいものね。」

と都滿子が此處の話を聞いて茶の室から云つてる。

「姉さんは年が代つても赤い手柄。」

と富枝は調戯ひ半分こんな惡口を、自分の落着かない氣分から拾ひ出して云つて見た。

「紫都の次ぎが出來るまで赤いのと極めてあるんだもの。」

姉の調子は怒つてもゐなかつた。さうして明日は淺草から上野の方へ紫都を連れてゆくから富枝さんも行かないかと誘つた。緑紫は今日の晝に出立つて山陰山陽の方へ旅行した。兄の不在と云ふと都滿子は出歩くのが癖だと富枝は考へてゐた。

二十四

緑紫の不在は寂しくはあつたが平和なものだつた。都滿子は粧り立てて染子を伴れて出て歩いてゐる。富枝は大抵家にゐた。一度病院から迎ひを受けて出た限りだつた。その時の染子の容態は餘程輕快くなつてゐた。

例も染子の病室には華やかに着飾つた人等が二三人はきつと出たり入つたりしてゐる。女中や家扶が禮儀正しく扉の口を守つてゐる。富枝はそれが厭で染子を訪ねてやる氣が起らなかつた。染子も其れを察して强ひてもと呼ばなかつた。其れが又富枝には可哀想の樣な氣もされた。先日病院へ富枝が行つた時、

「早く退院して大磯へ行きますから、然うしたら少時妾と一所にいらしつて下さいますか。」

と染子は聞いた。富枝は必然行つて上げると約束した。又染子は、

「妾が貴女のほんとの妹で、それで貧乏で、それで妾が此樣な病氣になつてゐて貴女がその苦しい中からお藥を買つて下すつたり、看病して下すつたりしたら、悲しいでせうか嬉しいでせうか。」

斯んなことを云つて喜んだりした。

「いつそ死ぬなら、妾は然うして貧乏の中でお姉樣の傍で死にたい。妾はこんなにして病院にゐて大勢の人たちにわやく云はれても[illegible]しなければなりませんわ」

と云つた。その時は染子に付いてゐた。富枝は慰めやうもないので何とも云はなかつた。

その時傍に附いてゐた人等が面會を謝絶さ せ申すのは御病氣の爲に好くないからと云つて富枝をそつと次ぎの室に呼んで、この次ぎ御氣分の勝れてゐる時來て戴きたいと貴女に話させた。

染子がお目にかゝりたいと云ふから是非來てくれとの使ひで富枝はその日病院へ出掛けたのであつた。富枝は何となく氣色を惡くした。老女は又斯う云つた。

「貴女樣が御いで下さいますと、おいでの間は非常にお宜しくお見受けいたしますが、お歸りになつた後がげつそりと平常の御容態よりも惡うお見受けする樣になりますので、これが非常に御病氣の爲によろしくないのださうで御座います。もう院長の御注意でお睦まじいお友人の方々も成るたけは御面會をお避けいたしてをります。心をお安静かせ申すのが何よりなのださうで御座いまして。」

富枝は染子に別れも告げずに老女の云つた事を道理と思つて歸つて來た。それからは手紙をやる事も止めた。唯毎日美しい繪葉書に何かし

ら一句づつを認めて送るのを日課の樣にした。
染子からは時々字句の亂れた手紙を受取つた。

富枝の氣分は又落着いて、毎日の日和次第に身體も精神も順當であつた。旅行中の兄に對しては時には懷愛しく思ひやる事もあつた。この頃出版された兄の作を讀んだ時再び振ふ見込のない程、古ぼけた見え透いた技巧の筆で作り上げられたのを見て、富枝は遲れた人に同情して涙さへ浮んだ。

自分は已に遲れて了つたにも拘らずまだ〳〵時代相應に步調を早める事が出來ると確信してゐる人と、時代は進步したのではなく唯變遷しただけのもので、自分の時代は唯一寸先んじた瞳子の後にゐる、直ぐ又自分の時代に戾つてくる事があると平然としてゐる人がある。兄はその前者の方で遲れながら大手を振つてゐる。遲れて了つてゐる癖に時代と並んでる積りで出娑婆つてゐるのも意氣がなくて好いと、富枝は兄へ對して此樣な評もした。

富枝はこんな事で相手のない日を過してゐた。

その内に、東混の芝居が始まつた。非常に大入りとの事だつた。

初日に富枝は行かなかつたのに新聞には女流脚本家の荻生野女史も來てゐたと、れい〳〵しく書き立ててあつた。二三日すると評が新聞に出た。甘い作だが女としてはと筆を澁らせたのもあつた。無理に哀愁を帶びさせようとした樣な所があつて厭味だと云ふのもあつた。然うかと思ふと場每々々に變化があつて非常に面白い、大詰の松原などは役者の役柄と相まつて絕品だなどと賞めたてるのもあつた。俳優にどれも大概は賞めてあつた。評を見てから富枝は姉と一所に見物に行つた。

この日も滿員であつた。富枝は棧敷の姉の後に隱れるやうにして見た。

例の半田は富枝の見物に行く日をよく聞き合して寄越した。富枝は何とも云つてやらなかつたが今日何處から聞きだしたか直ぐ半田はやつて來て棧敷へ顏を出した。それから種々の人も連れて來て富枝を紹介した。

自分の筆の先き一つで、こんなに多くの人が熱心に力を勞らして動いてゐるかと思ふと富枝は寧ろ氣の毒になつてくる。田里と云ふのの小滿名は元より、女弟子に扮する役者でも仕出しでも、自分の書いたもの以上巧者い巧者いと思ひつゞけて見た。そしてこの演劇を見て一所に泣いたり笑つたり喜んだりしてる觀客にも感謝した。今日は役者の役柄によつて喝采する人とは思はれずに、自分の作を賞讚して拍手してくれる樣にしきや思はれなかつた。

半田は傍からこんな評をして聞かせた。三幕目の小滿名が亭主に斬られるところで、斬りかけながら良人に縋らうとする表情がまだ足りない。然し大詰の際つて亭主を追つかけて行くところは田里獨特の役柄を見せて從横無盡だ。などと評をした。都滿子は聞いて、

「全くだわね。」

と感心した。けれど富枝は何だか何でも俳優の役柄は悉く凡でないと思ひ込んで嬉しかつた。

土間棧敷に滿ちてる見物客は何か自分の憐れを現してる花のやうに見えた。その花がこの自分一人を取り卷いて爛漫としてゐるかのやうに目を惑はした。富枝は得意な氣が湧かずにはゐられなかつた。半田は棧敷を出たり入つたりしてゐたが幕間の時報の柝を鳴らして富枝を呼びに來た。さうして、

「三輪が來てる、三輪が來てる。」

と或る方角を指さした。富枝は悅んで立たうとすると、

「伴れがあるからお止しなさい。」

と留めて、

「田舍へ遊びにいつて云ふから一寸行きませんか。」
と田舍の方へ宇田は富枝を促した。富枝はそれは厭だと云つて斷る。
「一寸でいいから。僕連れて行つて[illegible]たんだから。」
富枝は何うしても行かなかつた。代りに行けるものなら[illegible]行きたいと蔦澗子が云ふと、
「ちや一所に來ればいい。富枝さんと。」
と宇田が云ふ[illegible]蔦澗子は熱心に富枝に勸めたけれども富枝は[illegible]行かないで了つた。
蔦澗子は其れを悲しく口惜しがつてゐた。
三輪のゐる所を宇田に聞いても[illegible]があるから[illegible]した方がいいと云つて教へなかつた。富枝はその人を探しに東京を出ると思ひかけない人にばたりと逢つた。それは千萬夫だつた。
[illegible]の運中だとの事で[illegible]が富枝の[illegible]に染み入るやうであつた。

二十五

富枝は三輪を探し得ずに了つた。[illegible]ところまでも富枝は蔦澗子に[illegible]て芝居の話、役者の噂を聞かされた。
「兄さんの作つたものよりずつと上等だわ。見榮えがするから御覽なさい。」
蔦澗子はこの事を[illegible]にして[illegible]ここへ云つてやると[illegible]でゐた。[illegible]宇田から[illegible]つてよこした[illegible]蔦澗子は自分の[illegible]つて了つた。富[illegible]
[illegible]とおつたけれども蔦澗子は[illegible]なかつた。富枝[illegible]に考へて[illegible]かつた。
今日の芝居で千萬夫が田里の事を云つて[illegible]の[illegible]はれたのを見て[illegible]。千萬夫にその[illegible]になつて、
「どうぞ[illegible]ひよ。」
と云つた。どうしたのか富枝にはその[illegible]らなかつた。さうして又千萬夫の[illegible]にした[illegible]一緒の優しいを[illegible]してゐるやうに富枝の目[illegible]らなかつた。それで富枝は[illegible]を千萬夫に[illegible]と思ひ附いてゐた[illegible]に田里の[illegible]とかで[illegible]に[illegible]二つ作らせたその一つだと云つてよこした。其[illegible]なも[illegible]を[illegible]上げて[illegible]、[illegible]小滿[illegible]に[illegible]て使用したものだから記念としてお[illegible]すると云つた口上が[illegible]いてゐた。[illegible]工者がこの[illegible]を作るに一年かかつたとか云ふ[illegible]でお[illegible]に[illegible]てゐた。
[illegible]日の[illegible]に[illegible]の[illegible]その[illegible]の事を[illegible]くもないかも知れないが、田里は夫婦[illegible]の一つを[illegible]の[illegible]を一生の[illegible]とすると云つて喜んでゐるとして[illegible]むやうな[illegible]になるやうな[illegible]
「それなら[illegible]へ[illegible]なさいませう。」
[illegible]を[illegible]けれど、
「記念だわ。」
と云つて蔦澗子は自分のものの[illegible]に大切に保存するらしい[illegible]を[illegible]した。
「おや[illegible]つておかないでお使ひなさいな。」
「勿體ないから。」
[illegible]はそれを[illegible]かつた。富枝はその[illegible]で[illegible]に[illegible]た。どうかして蔦澗子に[illegible]千萬夫に[illegible]る工夫はないものかと[illegible]て見た。
その[illegible]まで[illegible]から思ひがけなく使が來た。

「名高い化粧箱が拝見したいから是非この使と同道で來てくれとしてある、その箱の通り誂らへたいと云ふ人があるから是非々々拝見したいと繰り返してあつた。富枝は都満子にそれを見せて化粧箱を求めると、あづまへなんか待ち込んだ日には取られて了ふからと應じなかつた。
「折角見たがつてるんだから貸して上げたらいいでせう。」
と富枝は笑ひながら然う云つて、所在を聞いてから自分で出して使に持たしてやつた。その時手紙を開けて、これは、千萬次さんに差上げる、その積りでお渡しの節精々大事になさる様に仰しやつて戴きたいと書いた。
その日は夜へかけて、知らない人からの手紙を幾通も受取つた。女からのもあつた。是非逢ひ事がいたゞき度いと云ふのもあつた。役者、窪田が來て芝居の話、三輪の話などをして行つた。三輪は全く千早の嫁になる人の姿だと告げた。昨日もその人と來てゐたとの事だつた、窪田が自分に三輪の居る所を教へなかつた事をさすがに世慣れた人の為る事だと感心した。

二十六

岐阜の義母が上京したのはもう十一月も終つた頃であつた。丁度染子が退院して大磯へ着いたと云ふ染子の母からの手紙を受取つてから三日目だつた。染谷の家では旅行から歸つて間のない緑紫のところへ多くの客があつて、おきそも都満子も襷がけで働いてゐた。富枝は自分の座敷で書きかけた一幕物の脚本を纏めようと机に向つたが、茶の室が騒々しくて少しも想が纏まらなかつた。茫然と空を見てゐるうちに大磯へ行きたい様な氣も起つてゐた。凍り附いた様な曇つた空はもう山に降る雪を聯想させる程の寒い夕方であつた。
お伊豫は突然にその夕方染谷の家に來た。門前で人力車から荷物を下させてゐるのも、門の開かない爲に家の人達は誰も知らなかつた。門が開いてからも來た人は後より荷物を運び入れる車夫の形ばかりが分つて家の人には誰が來たのか知る事が出來なかつた。おきそに云はれて飛び出した都満子も一時に驚かされ車夫の請る價を聞いてゐた。來た人は門の外で車夫に賃錢を渡してから初めて門に入つた。それはお伊豫だつた。室にゐた富枝は無論呼ばれるまで知らなかつた。
「前もつて知らせうとは思ひましたが。」
とお伊豫は皆にさう云つた。別れた時より十歳ばかりも一時に老けたとは誰の眼にも感じられた。
義母の前に出ると何時も無沙汰勝ちに過してゐた事が甚く富枝は面目なかつた。富枝は二歳から六歳までこの人の世話になつた。都満子は十四から十八までお伊豫と一緒に朝夕を共にした。富枝は九歳から十七まで姉妹中一番年數長くその手にかゝつただけに、如何しても最も多かつた。それだけにお伊豫の眼にも富枝の様子が先づ眼にとまつた。
「えらい大きくなつたもんやなあ。」
お伊豫は生れは矢張り岐阜の人であつた。長く東京に住んで大方忘れてゐた生國の言葉を少時使ふとあの土地の一種な言葉が出てゐた。富枝はその色の浅黒い少しも角のない平つたいお伊豫の平凡な顔が、自分には離れがたい様を持つた世界に一人の人の顔だと云ふことを意々意識して、さうして見詰めてゐた。
「阿母さんは何を差上げました」と
何の挨拶もないうちに都満子は孫も伴はずから云つた。おきそは一先づ書生に手傳はして荷物を茶の室に運び入れた。客に出すものを出してしまふまでは落着かないからと斷つて都満子

は遠來の客を迎へた待合所へ行つた。その人の顔にも逢ひがたい人に限らずめぐり逢つたと云ふほどの喜悦の色は認められなかつた。

お伊豫は富枝の座敷へ入つて漸くその腰を落着かせると直ぐ又立つて荷物の方へ行つた。土産物を出して置かうと云ふのだつた。東京に一所にゐた頃は何點かきりつとして氣の利いた人だつたのに、斯うまご〳〵してる樣子は全で田舍者の樣だと富枝は土地の感化の烈しい力に驚かされた。

「そんなものは後だつて好いぢやありませんか。」

と富枝は繼母のそは〳〵した樣子が氣の毒らしさに止めたが、

「直ぐ妾は山尾の方へ行くで。」

とお伊豫は又手荷物の中から種々なものを出しかけた。

山尾と云ふのはお伊豫の弟で深川の方で酒店を開いてる人だつた。染谷では僅の盆正月の交際だけで其れさへ此方から出て行くことも稀であつた。お伊豫は美濃紙を二十帖ばかりも新聞紙に包んだのに、岐阜團扇を二本添へて富枝に渡した。

「冬のお土産に團扇は可笑しいやうだけれど、名物だによつて。どうせ夏になれば要るものだに。」

と云つて鐵漿をつけた歯を見せてお伊豫は笑つた。

「美濃紙も名物なんですか。」

と富枝は包んだ紙を開いて斯う聞いた。

その晩お伊豫は山尾の方へ行くと云ふのを、綠紫も共に勸めて染谷へ宿ることにさせて富枝を附けて近所の湯屋へ入浴にやつた。やがて二人は歸つてくると富枝は坐りもしないうちに、

「阿母さんはすつかり田舍者になつちまつた。何うしたんでせう。」

と云つて噴き出した。お伊豫もそれを可笑しさうにして人好く笑ひながら、搔き上げた鬢際の濡れてる下から光つた耳の頭を見せて其所に辭儀をした。

「何うも御馳走さん。」

其れを聞くと都滿子も、

「ほんとに何所へ出しても關西の人だわ。」

と云つて笑ひだした。

國の方の商賣の話、祖母の話で持ち切つた。商賣は鏡商であつた。今年六十三になる先代からの番頭が夫婦して店をやつてゐて呉れるので、自分の身分は樂なものだとお伊豫は嬉しさうな顔であつた。

「田舍の人は忠義なもので、妾をほんとの主人のやうにしてくれます。妾も鏡を研くでこの手を見て頂戴。まあこんなもんに。」

と云つて兩方の手を出した。もう爪も磨ぎされかけ切れて湯から出たばかりの指は皮膚が[illegible]のやうにはじけてゐた。

祖母も最う八十歳であつた。其れでも達者で縫物でも洗濯でもすると云つて、話してゐるお伊豫自身も驚いた顔をして云つた。

「唯時々もうろくをお爲やすで困る、先日もせつせと煙草入を片手に持つてなも、片手に湯呑を持つて斯う云ふ事をしてる、」

と云つてお伊豫はその形をして見せて、

「まあ湯を注ぐ眞似とほかは見えんで、祖母さん何を爲てゐなさるかと聞いたら、この土瓶はちよつとも茶が出んでお前一寸注いで見てくれよと斯う云ひます。まあ土瓶と煙草入を間違ふなんて、祖母さんはよほどこりや腰があかつて御座るわいと大笑ひしましたに。」

このはなしには皆笑はされて、玄關の書生の美樹までがぷつと笑ひ出したのが聞えた。富枝は老衰し切つた祖母が目に見える樣で哀れで

あつた。小さな潤んだ眼を屢瞬かして、凡ての物の形がもう鮮明とは映つてこないながら、茶がお飲みたいと云ふ富枝のもとに、八十年来の慣習で両手だけは茶を注ぐ形をする。さうして[illegible]いたいと思ふ様な声も出ないのは何うかと云ふ静かな不思議にそれを見出だしてゐるその木彫りのやうな老婆の顔が富枝にははつきりと見えた。

「貴女のお祖母さんもお弱りですね。」

都満子は少しも自分には寂しさを感じない同情の言葉を表面にして、務めて斯う云つた。

緑葉は当分此方で仕事をする事にして、少し気な扶いた風が在いと同時に云つた。

「私も、つい二三日前京城から帰つて来ました。あなたもお疲れでせうから緩つくりお休みなすつた方がいゝ。」

と緑葉の工合なども都満子に聞いたりして、

「何うです。今度出京て来ましたもう一度また学校の方を始めたらなで一通りは文学の素養なり稿業してはまませんと言はれると思ひまして。」

両親にその話も今夜仕たい風であつたけれど、またくへ日数もあるからと緑葉が話の腰を挫いて休ませる事にした。お祖母は二部へ寝かされた。富枝は御仕事を二階へ運ると直ぐ自分も自分の座敷へ入つて了つた。

二十七

富枝は平生から継母の境遇に憐れみを持つて自分の負ふべき責も心得てはゐたのだけれども、さて斯うして思ひがけなく出京てきた継母を見ると、そこに急に解決したければならない問題が起つた様で[illegible]はしかつた。

その晩富枝は眠れなかつた。自分が東京に踏み留つて好きな事をやり度いと思ふ限り、其れ等に就いての権利は矢つ張り兄に頼むより他はなかつた。自分は男ではない。弱い女である。

その晩富枝は非常く寂しかつた。

翌朝富枝は[illegible]い思ひを抱いて継母に逢つた。継母は富枝の居間へ入つて衣類などの世話を焼いたり、箪笥に[illegible]するもの下宿の[illegible]にあるすけ出したどを區別して聞かしたりした。ますます母子となつて[illegible]い話を話し合つた[illegible]が僅の事にも窺はれるやうに思はれた。富枝にもその和らいだ心持が嬉しく受けとれた。

「[illegible]」をやつての滞留はまだ間いてゐた。何よりの土産話になる積りで緑葉は態々自身お伊豫を作つて出かけた。

不在の間富枝は[illegible]して用を済した。[illegible]は富枝の[illegible]ている前に[illegible]いてはきる下女[illegible]たかつた。夕飯の時、[illegible]へ仕した化粧館の事を富枝に聞いた。今日の芝居行に就いて都満子は忘れてゐた事を不図思ひ出したのだつた。

「どうしたか知らないわ。」

と都満子は怒つた気色を見せた。

「あれは遣つて了つたんです。」

「誰に。」

「欲しいつて人があつたから。」

富枝は其れ限り云はなかつた。都満子は人になんぞ無死々々やつて了ふ様な品ぢやないと云ふ事を、理窟つぽく長々と怒つて云つた。

「そんな事より、[illegible]の[illegible]でも考へて下さい。」

と富枝は吐息をしないばかりであつた。

「自分の事は自分で[illegible]するに限るわ。」

都満子は[illegible]と冷淡に云つた。化粧館の[illegible]を叶つたのだ。富枝はそのつんとした[illegible]を[illegible]めて黙つてゐた。

お伊豫は父緑葉に伴れられて歸つて来た。お伊豫[illegible]つて云つた。

「どれを富が拵へたのか。」

誰もこの返事をする人がなかつた。ただ一[illegible][illegible]を見合せてその了解しかねた[illegible]と[illegible]た[illegible]と[illegible]ようとするかの[illegible]であつた。

「すつかり富枝が作つたんですよ。」
緑紫は暫くしてから疑はしい調子で云つて見た。
「この人の手一つで作つたのかな。」
「然うですとも。誰も手傳やしません。」
緑紫は只斯う返事してお伊豫の顔色を見た。
お伊豫は何故だか顫へてゐた。
お伊豫は幼少い時から厳しい親達の手に育つて芝居と云ふものは見た事がなかつた。お伊豫の親は身分は低かつたが武士であつた爲に、その家庭の武士的教育が芝居見物と云ふ様な惰弱を許さなかつた。それでも富枝姉妹の母となるまでに一度嫁入つた先きの良人と云ふのが芝居好きであつた。よく芝居の話を爲て嘗て見た事のないお伊豫にその面白味を説明して聞かしたもので、二度ばかりは同行もさせられた。その良人と云ふのは弟と同業の酒屋であつたが早く死亡つたのでお伊豫は又富枝の父の許へ再嫁したのであつた。富枝の父は芝居の事に委しかつた。けれどもお伊豫の來た頃は夫婦して芝居を見に行くだけの餘裕もなかつたのでお伊豫は全く世の中に芝居と云ふものの存在する事さへ忘れ果ててゐた。
富枝が何を作つたのかお伊豫には少しも呑み込むことが出來なかつた。
お伊豫の富枝を責めないのが却つて皆には思ひがけなかつた。
「あれだけのものを作るなんて、萬人に一人の人なんですよ。」
都満子が促した言葉もお伊豫の暗い頭の中へは納まりやうがなかつた。都満子は先日來の新聞を探し出してお伊豫に示した。
「ね、肖像が出てるでせう、荻生野富枝つてこの人の名でせう。」
も一つ證據物件として役者から送られた化粧籠を見せようとしたが、それは生憎なかつた。其れに就けてもと云ひ度さうに恨みを持つた眼が富枝をきつく見た。
「一體まあ、役者なんぞ云ふものは河原乞食だで、そんなものに貰つたところで有難いことはありませんが、然し新聞にまで出りやえらいもんですわな。」
お伊豫はから結末をつけた。けれど何う云ふ豪いことを富枝が爲たのかは更にお伊豫の腑に落ちなかつた。從つてその功もお伊豫には一分認めることが出來なかつた。都満子は河原乞食と云つた言葉に脅かされて唖然としてゐた。
緑紫は無論その上を云つて聞かすほどの勇氣もなかつた。
芝居で散々御馳走になつたからとお伊豫は斷つたけれども、染谷の家では又蕎麥などを取つて待遇した。都満子は執念く芝居の事を言ひ出して、
「面白うございましたか。」
と聞いた。お伊豫は大層面白かつたと云つた。あれだけの物を富枝が拵へたのだ、根氣よく都満子は說くと、お伊豫は感心を爲た[illegible]顔はせずに唯點頭いてゐた。
その晩も此樣なことでお伊豫の云ひ度いことは云ふ暇のない爲にまた明日に譲ることになつた。お伊豫が二階へゆくと、その後で、
「あんな分らない人があるでせうか。山の中で一生暮したつて眞逆あゝでもあるまい。」
と都満子は憤慨して云つたが、
「無理はないさ。」
と緑紫は輕く受けてゐた。盲目に金剛石をやる樣なもので彼樣な人の娘だなんてこの人を云はしたくないとまで都満子は譏つた。
「あれが眞の阿母さんだつたら何樣に喜ぶかしれやしない。富枝さんも可哀想だ。」
と云つた都満子は、お伊豫が繼母だから富枝の功に就いてもよく分らないのだと云ふのであ

る。他人の子よりも自分の子の方が能く見えると云ふ樣な眞の母子の情味がないから富枝の上に就いても冷淡なのだと斯う云ふのだつた。綠紫も富枝も其れに就いて論じたり辯じたりするのも億劫であつた。

殊に富枝は職業を撰へたと云ふ事について何の感じもないお伊豫の態度が、よく己に對する世間一般を代表してゐるやうに思はれて自ら恥ぢ入つた。

都滿子は寢る迄も、あんなわからずやの人等に富枝を一生の相談相手として暮させるのは厭だと云つて獨りで力んでゐた。お伊豫は自分が劇の事に通じない爲に、そんなに迄して都滿子に疎まれようとは少しも知らなかつた。富枝の何所か犯し難い眞言な樣子を見て、浮附かない若い女の賴母しさうなのに全く眼も心も失くしてゐた。お伊豫は久し振りに富枝に逢つて自分の肩の輕くなるほど富枝へ深く望みをかけて喜んだ。

二十八

あくる日お伊豫は山尾の方へ行く前に富枝の居室へ行つて、富枝のこの後の身の始末などを其れとなく聞いて見た。富枝は仕方なく何の考へもない事だけを話した。

「考へもなく斯うしてゐるたけの事か。」

とお伊豫は重ねて聞いた。

「勉強はしてますよ。」

「でも學校を廢めたさうな。」

富枝はふと思ひ附いて斯う云つた。

「つまりね、妾は職業を始めたんです。お金を取ることを始めたもんだから學校も廢したやうな譯なんです。」

嬰兒には何故火は熱いかと云つて聞かしても分るものではない。この赤いものに觸ると痛いと云ふ事だけを示すより外はないのと同じに、藝術趣味を解くよりも、お伊豫の日常耳に馴れてゐるやうな言葉を探し出して極く簡單に斯う云つて聞かした。

お金を取るといふことはお伊豫にも能く聞き分けられた。その商賣をお伊豫は聞いた。

「一昨日阿母さんが見てらしつた樣なものを、幾つも作へてはお金を貰ふんです。」

富枝は斯うは云ふものの苦しい思ひがした。懸賞金の若干を取つた限り、書いたものに就いてまだ一錢も得た事がない、この先きも雜誌などに出し〳〵して必ず取れるものか何うかはまだ覺束ない事であつた。

それで初めてお伊豫は富枝の事業の形だけが漸く分る氣がされた。富枝が一人前の働きをする樣になつた事に就いての得心がゆくと同時に、安心も出來、尊敬の意も起つて來た。學校を廢めた事に就いてはもう聞く必要もなくなつた。

それでその商賣は東京に居なければ出來ないものか何うかとお伊豫は又たづねた。富枝は苦く笑つて少時默つてゐた。

「その樣子で阿母さんにも分別があるで。」

とお伊豫は決心のあるやうな素振を見せた。祖母も最う長くは生きないこと、命のある間に是非一度富枝を介抱にやらなければ濟まないことなど繰り返した。

老人の生きてゐる間に富枝を遣はして、一日だけでもその傍に介抱の意を致させないでは亡夫へ對してお伊豫の義務は盡されないのである。

「今度なぞ、お前を連れて歸る事と思うて祖母さんは樂しんでる。今は祥岡夫婦がゐるで生活には不自由はないが、妾かて阿母さんの眞の親類と云ふではなし、考へても見なさい、祖母さんはどんなもんに淋しいか。もう明けに暮れに孫のことばかり云うてるがな。」

富枝はそゞろに涙を催した。然らでもお伊豫も朝夕に見馴けた老いさらぼつた老母の顔を思ひ出して涙含んでゐた。

「何もたよりは無しなあ。」

お伊豫は斯ら云つて鼻をかんだ。

お伊豫は思ひ出した儘に祖母の平常の樣子など話に出した。其れによつて富枝は祖母が綺麗に髮を剃つたおびくさんと云ふ事や、歯は前歯が一本しきやない事、坐つてゐる時でもお尻を端折つてる事、坐つてる間は兩手を膝の上に組んで眼を瞑つて俯向き込んでゐることなどが想像された。大層な佛教信者で始終お念佛を唱へてゐるとお伊豫は語つた。近所に說教があるとさへ云へば枝を突いて出て行く、その歩く姿を見てゐると、まるで地面の上に額がつきさうになつてゐるとお伊豫は笑ひながら、

富枝は姉妹の中でも自分よりは貴枝を祖母に見せ度く思つた。綺麗に着飾つた年の少い貴枝を孫だと云つて見せて喜ばしたかつた。

「阿母さんはあづまへも行きますか。」

と聞いた。お伊豫は寄らなければなるまいかと云つてゐた。

自分のしごとは田舍にゐても出來ることだからと云つて、富枝は容易くお伊豫と一所に國へ歸る事を言つた。その日の内にお伊豫は中尾の方へ行つた。

二十九

あとから富枝の許へ葉書が來た。受取つた都滿子は先きに讀んで了つてから富枝に渡した。

「何だつて此方に富枝さんを呼ぶんだらう。行かなくつてもいゝ。」

と強く云つた。都滿子の云ふ通り葉書は富枝に來てくれと云ふ意味のものだつた。

富枝は一時だけでも岐阜へ行くと定めてからは、出立つまでに逢つて置きたい人の許へは急に行つておかなければならなかつた。好い機會に富枝はあづまへ行つて來ようと思つた。序に自分がお伊豫と一所に今度岐阜へ行く事に定めたことも都滿子に話した。都滿子は直ぐには言葉も出ないほどに驚かされた。

「何で歸るの」

群がり廻るやうな混亂した胸の中から、都滿子は一言僅にもらした。

「阿母さんは迎ひに來たんですもの。」

「迎ひに來たつて宜いぢやないか。」

都滿子は脣が引釣つて思ふ樣に云ふ事が出來なかつた。第一都滿子は富枝に岐阜へ行けと云つて怒つた事もあつた、都滿子が富枝を叱つた時だつた。それを覺えてゐた富枝は思はず微笑した。

「一旦は何うしても行かないと阿母さんが怒つた事だから。阿母さんが亡くなるまでは岐阜で暮さうと云つたのに、なあ。」

「どうして阿母さんがお氣の毒なの。」

都滿子はまるで喧嘩腰であつた。富枝は何とも云はずに、唯自分は然うしなければならない義理があるのだから其れだけ盡せば早く東京へ歸る事にして、丁度阿母さんの出京して來たのを幸ひに一所に行つてくると云つた。都滿子は直ぐに綠紫を呼んで富枝の決心を語つてまづその可否を聞いた。

「然うした方がよからう。」

綠紫は然う答へた。

都滿子は地團太を踏まぬばかりに富枝の田舍へ行く事を承知しなかつた、

「富枝が行くと云ふんだからそれで話はついてるぢやないか。」

綠紫には都滿子の意がよく分らなかつた。都滿子は富枝のやりかけた事が徒勞になると云つて口惜しがつた。田舍へ行つたつて出來ない事

はない。祖母を見送るまで行つてこようと云ふのにお前の承知不承知を唱へる訳はないぢやないかと云つて繁紫はなだめた。

「富枝をこれだけにしたに就いては妾等の世話も考へて貰はなくちやならない。富枝が岐阜へ行けば祖母さんの身分でも[illegible]びるんですか。」

と真浦子は繁紫に食つてかゝつた。

「富枝さんもよく思ひ切つて田舎へ行く気になつたことね。妾は人の事でも折角人に評判されながら無残々々捨てて田舎へなんぞ行くのかと思ふと口惜しい。」

と真浦子は[illegible]をしないばかりであつた。

真浦子が[illegible]の理窟を云つて居る時、何も繁紫も富枝も聞き流して返辞はしないのが常だつた。富枝は好い加減にして[illegible]へ行つた。

近所の人が始めて富枝の顔を見たお緑は、何故来てくれなかつたかと恨んだり、以前の評判を[illegible]に[illegible]しかつたと喜んだりした。さうして[illegible]々富枝の噂をして暮して居たと[illegible]。

何うしてか[illegible]の女中に度々富枝を迎へに来た。[illegible]つて[illegible]知つてゐるまでが富枝が来たと聞くと物珍らしさうにしてやつて来た。この頃[illegible]の意見の[illegible]始めて富枝の事を女等が知つたので、今日は貴女が珍らしいのだらうとお埒は笑つた。富枝は何かの稽古に行つて居なかつた。

「餘り長らく富枝さんが見えないから[illegible]、こうも逢ひたがるし妾も逢ひたいし。」

と云つて笑つてから、

「はがきを出して見たんですよ。何日中別になるなんて云つてたけれど何うしましたね。」

お埒はそれがこの間から気になつてゐたので、[illegible]感情から好い分別も與へなかつたのが苦になつてならなかつた。富枝は今度お伊豫の出て来た事を話して祖母を見送るまで岐阜で暮す積りだと告げると、お埒は意外な顔をした。

「そりや思ひがけない、富枝さんが行かなくても何うかなりさうなもんぢやないか。」

お埒も斯う云つた。

富枝は[illegible]東京を捨てるのではない、又必ず[illegible]へ行かなければならぬと云ふ[illegible]した事情があるのでもない。行かなければ行かずにも済む場合であつた。無[illegible]にして行くやうな土地でもなかつた。

富枝がお伊豫と一緒に行かうと思ひ立つたのは唯祖母に對する愛だけのものであつた。三十年も一人の子に離れて淋しく暮した祖母は、名目だけの[illegible]を持つた他人の手に縋りして世を終らうとしてゐる。富枝を岐阜へ招んだのはそれであつた。

「行かないでも済みさうなもんぢやないかね。」

とお埒は繰り返した。

富枝は別に祖母の様子なども話しようとしなかつた。

「阿母さんも上るつて云つてました。」

「お伊豫さんも老けたでせうね。」

[illegible]云つて田舎になんぞゐる人の[illegible]な[illegible]いと云ふ様な顔をした。お埒の目には富枝も[illegible]の知れない人の一人であつた。

お埒は思ひ出したやうに[illegible]の事を云ひ出して、あれが縁になつて千萬夫に田里に逢ふやうになつたと云つた。富枝は興を覺えた。

富枝が歸らうとする頃になつて[illegible]が[illegible]つて来た。お埒はすぐ、

「[illegible]さんは岐阜へ行つて了ひなさるんだよ、お[illegible]も当分逢へないんだよ。」

と聞かしてやつた。[illegible]枝は、

「さう。」

と云つた限りであつた。さうして先日の芝居のおもしろかつた事をお[illegible]のやうに富枝にて

はなくお縁に向つて話した。
「貴枝ちやんはおもしろかつたの。」
貴枝は點頭いてゐた。富枝は淋しくあづまを出て麻布の家に歸つた。
富枝が岐阜へ行く事に不贊成の姉は、富枝の顔を見ると直ぐ其れを云つて、自分がお伊豫に話をして、祖母が氣の毒だと云ふなら東京へ引取つても宜いと云つた。
「八十にもなつた祖母さんを汽車へ乘せる譯には行かないでせう。」
と富枝は笑つた。都滿子は富枝を岐阜へやるのが無暗に惜しかつた。もう再び東京へは出られないものと思ふほどに騷いだ。
「阿母さんも無理に妾を伴れてゆくとは云ひません。だけれども、姉さんにして考へたつて分るでせう、阿母さんの死亡る時あんなにして皆に頼んだのぢやありませんか。
それだから今の阿母さんが世話をしてるので、祖母さんが今日にも息を引取るのでもなからうからと都滿子は又云つた。そんな事を爭ふのが富枝はもう面倒だつた。
「それぢや富枝さんは岐阜の人にならうつて云ふのね。相當な良人でも持たせられゝば持つ積りなの。」
少し冷かすやうにして都滿子は富枝の顔を瞶めた。富枝には尚ほ滑稽であつた。そこで富枝は都滿子の得心するやうに自分は何處へ行つても自分一箇で、一身上の事にまでは祖母さんでも阿母さんでも立入らせるやうな事はしない、自分は唯祖母の介抱に行くだけのものだと云つたけれども、都滿子には其れが呑み込めなかつた。昨夜お伊豫を分らないと譏つた人は今夜自身その轍を履んでゐた。
富枝は手廻りのものを片附けて荷物にする積りで自分の居間へ行つた。もう短い日は暮れかかつて、生乾きの干物が重く軒の下へ運ばれる頃であつた。富枝は座敷へ入ると用意してあつた火鉢の火を掻き起した。
富枝の現在の境遇に於ける慾望や自由は皆い、い、あきらめの蔭に隱れてゐると云ふ様なのが今の富枝の心の形であつた。云ひ度いやうな不足もなかつた。お伊豫の都合のいゝ時に手荷物一つ持つて、まだ行つた事のない岐阜と云ふ所へ祖母に逢ひにゆき、又その土地から離されるまではそれだけの年限を其所で送らうと云ふ、それ限りの覺悟だけであつた。暫時しておきそが客が來たと告げて行つた。富枝は出て行つた。
白いネツトに顔を包んだ人が格子の外にゐた。富枝は下駄を穿いて又外へ出て見た。それは染子だつた。染子は大磯から眞つ直ぐ來たと云つた。
富枝は取敢ず自分の座敷へ入れて冷えた身體を暖めさせなどした。病後の染子は眼が目立つて大きかつた。痩せた手を火鉢の上に揃へて染子は微笑んでゐた。
「よく大磯から來ましたね。何誰も何とも仰しやらず。」
「お母様がお歸りになりましたから、後からそつと參りましたの。お姉様をお迎ひに上りましたの。」
染子は斯う云つて又微笑んだ。身體も十分快くならない間に其様な無理してと富枝は半分は呆れてゐた。
「それで今晩は何うなさるつもり。」
と聞くと、これから大磯へ送つて頂くのだと染子は澁りもせずに然う答へた。
お伊豫はその日は歸らなかつたので、今夜染子を家に泊めさせようか、それとも赤坂の邸宅の方へ送らうかと富枝は苦勞した。染子はどうしても大磯へ歸らなければ留守番のものが案じるからと云つた。染子を一人大磯へ歸す譯にも

ゆかなかつた。富枝はその晩のうちに大磯まで行つて來なければならなくなつた。

「お約束ですのに、お姉樣はいつまで經つてもおいで下さいませんもの。」

染子は恨みを云つた。富枝は支度をして染子を伴れて家を出た。

新橋まで行く人力車の上は股の中まで寒かつたので、富枝は後からくる染子の方を幾度か見返つた。停車場へ下車りた時は染子は寒さうな風もなくコートの袖を折つて小さな咳をしてゐた。

停車場の時計が間抜けて大きく見える構內は人の影が少くからんとしてゐた。赤帽が大勢待合室の暖爐の前に寄つてゐた。

暫時して兩人は又汽車に乘つた。染子は富枝にしつかり寄添つてゐた。

「—迎ひに來なくても行きますのに。貴女は身體は何ともありませんか。」

富枝は出來るだけ優しく云つた。染子の袖の中からその手を取らうとした時、染子の冷たい手に手袋のないことを初めて知つて、富枝は暫時その手を自分の手で暖めてから、自分の手袋をその手に嵌めてやつた。染子は又嵌められた手袋の上から自分の手を撫でてゐた。

室には二人の外誰もゐなかつた。染子は足を上げて腰掛の上に坐つた。或る時汽車の動搖で倒れかゝつたのを富枝は右の手を出して支へてやつた。其の時染子は微笑んだ。病氣の早く快くなつたこと、長い間逢はずにゐた事など兩人は話した。けれど染子は默つてゐる方が多かつた。富枝はそれを不思議がつた。

大磯へ着くと白い服を着た看護婦と東京の邸から從いて來た下女とが構內に待つてゐた。

「今、お邸へ電報を打たうかと存じてをりましたところで御座います。」

と下女は云つた。看護婦は今日夫人が歸京すると直ぐ雇入れて大磯へよこしたので、來て見ると病人のゐないのに看護婦は驚いたとの事であつた。別莊の留守のものは皆染子は東京の本邸へ行つたものだと思つてゐた。

「まだお一人の遠歩きは宜しくございますまい。」

と職掌だけに看護婦は直ぐ染子の脈を見た。染子と富枝は人力車であつた。看護婦も下女ものろい人力車と同じぐらゐの速さで歩いて來た。大磯は空も海も松も見ても黒かつた。

兩人が櫻炭の匂ひの傍に向ひあつて坐つた時、飾り棚の上の置時計が八時三十分のところを動いてゐた。富枝は染子の氣分を氣にしていろいろとたづねたが、

「大丈夫。」

と斯う云つて染子は蒼い顏に微笑んで見せた。

三十

昨夜は染子が熱に苦しんだ爲に、富枝は夜を通して眠らなかつた。然う云ふ時看護婦の有難味をつくづくと悟ることの出來るやうに富枝は感じた。

家の人は邸宅へ知らせると云つて騷いだ。その時も看護婦はそれに及ばないと云つて靜に制してゐた。烈しい運動の爲に發作した熱で病後の人にはよく有り勝ちの事だから心配する程の事はないと云つた。富枝はその看護婦の言葉がいかにも頼母しく聞きなされて自分の感謝の意を表す爲に、その人の人格まで推奨したい樣な氣がした。

今日も好い天氣であつた。締に閉て切つた窗子戶を透して、澄んだ空の色が流れる樣であつた。富枝は格別眠たい氣もしずに、却つて神經が冴えたやうな心持であつた。染子は富枝の影の見えない毎に呼んだ。呼ばれて富枝が行つて

見る度に染子は不安の眼で寢床の近くを見廻してゐるのが常だつた。
「歸らないで。折角お迎ひに行つたんですから。」
染子は斯う云つて賴んだ。その後は富枝は立ちたい用があつても我慢するやうにして枕頭に附いてゐた。
看護婦も其の近くに附添つてゐた。赤い時計の紐が白い服の帶に色を鮮かにしてゐる。捲り上げた筒袖の中から太い腕を出して看護婦は甲斐甲斐しく働いてゐた。染子はもう起きると云つたのを看護婦は堅く拒んで染子の望む通りにさせなかつたので、染子は看護婦に氣の毒らしいほど不快な顏色を見せてゐた。
晝になつて、暖かい日が一面にこの住居の上を包んだ頃になつてから看護婦は庭内だけ散步してもよいと染子に云つた。富枝は染子を伴れて庭の內を步いた。染子の身體にはもう全く熱はなかつた。
步きながら染子は二人限りで何所かへ行きたい、自分には何うして別莊などがあるのだらうかと云つた。
「自分の身體が自由になつてお姉樣のいらつしやる所へは何所へでも行かれるやうになりたい。」
富枝はそれを聞くと、あなたの樣な精を持つた人が不自由な家に生れたら悲しいに違ひない、今の身分を呪つては濟まぬと敎へた。
「不自由な家に生れてもお姉樣が妾に附いてて下さいますわ。妾は何もいりません。お姉樣が欲しい。」
「上げたぢやありませんか」
富枝は笑つた。染子は嬉しさうな顏であつた。染子は斯うしてゐる間も富枝が戀しかつた。
「妾、お姉樣の髮の毛になりたい。」
云ひながら染子は富枝の房々した、日の光りできら／＼してる髮を見た。
「あなたが髮の毛になつたら、妾は每日頭痛ばかりしてるでせう。」
「何故でございますの。」
と染子は變な顏をした。
「二人限りで彼方へ行きませう此方へ行きませうつて引つ張るでせうから。」
染子は聲を出して笑つた。その開いた樣な染子の顏が富枝には嬉しかつた。
染子の兄と一所に夫人はその日の夕方見舞ひに來た。
「昨日お歸りになつたばかりで。」
染子は母の來たのを不平さうに夫人は看護婦から容態を聞いて、昨日染子が何所かへ行つた事を知つた。それが富枝を態々東京まで迎ひに行つたのだと分つた時に、
「ほんとに嫌な人ですねえ」
と富枝へ話して氣の毒らしく笑つた。
「貴女の身體は宜いとして、此方がどんな御用がおありであつたかも知れないぢやありませんか。」
と云つた。
染子の兄は、夕飯に庭の芋を掘ばして汁鍋を拵へてもらつた。それを食べると、直ぐまた汽車で東京へ歸つて了つた。
夫人は、何の爲にこれ程にして染子が富枝を慕ふのかと、今夜は今までになく富枝へ對して注意の眼が底光つた。富枝は其れを知つて不快であつた。
染子には許嫁の良人があると云ふ事も、夫人の話で富枝は今夜初めて知つた。その人は今獨逸へ行つてゐるとの事だつた。來年歸朝すると直ぐ結婚させる積りだと、それでも夫人は親しんで語つた。
「病氣があるので弱ります。」

夫人の調子は沈んでゐた。

富枝は所謂客待遇を受けて鄭重に奥まつた一室へ寝ませられた。

翌朝富枝が染子に逢つた時、染子は泣寝入りをした樣にその眼が腫れぼつたかつた。起きたのは富枝の方が早かつた。今日東京へ歸る積りでその用意をしてゐる所へ染子は起きて來たので、昨夜富枝の寝ませられた室へ直ぐ訪ねに來た。

六疊の座敷の隅に、富枝が疊んで積んだ夜具が揃つて角を重ねてゐた。座敷の窓の下は大きな畑で、畑を越した彼方に松林が見えてゐる。その松林が今朝は縞の布を張つた樣な雨に見えおくれしてゐた。自然座敷も暗かつた。富枝は疊も上げてしまつて、借りてた着物も脱いで疊んでしまつたところだつた。

染子は富枝の改まつた姿を見て座敷の中に這入らずにゐた。富枝は染子が寒いであらうと窓を閉めた。

「病氣はどんなです。昨夜は何ともありませんでしたか。」

富枝が斯う言葉をかけた時、染子は涙を落してゐた。富枝も默つてしまつた。

少時して染子を呼んでる夫人の聲を聞いて、富枝に染子の手を引いて其室を出ようとした。染子は壁に寄りかゝつて泣き出した。

それも聲を忍んで、時々、く、く、と云ふ押へたやうな聲を出すだけだつたのが富枝には可憐らしかつた。下女は此室へ兩人を迎ひに來た。染子は涙を拭きながら富枝に引つ張られて母のゐる方へ行つた。

富枝が丁寧に朝の挨拶をしてゐる間、夫人は染子の泣いた顔を眺めてゐた。

―お客樣に御飯を差上げませう。―

夫人は優しく染子に云つた。染子はそれに返事をしなかつた。

膳に向つても染子は箸を取らなかつた。夫人はいろ〳〵慰めいたはりして染子の機嫌を取つてゐた。

雨は外を暗くして降つてゐる。富枝は歸らうとした。

夫人も當分この通り病氣でろくな待遇もできないから、全快した上で又ゆつくりと遊びに來て頂く、と富枝の歸るのを喜ぶ樣にして云つた。

其の夫人の顔に面白くない色の漂つてゐるのが富枝には歴然と讀まれた。

歸る時、染子の姿が見えないので家の人は方々を探した。富枝は玄關に出て染子を待つてゐた。やがて下女が來て、

「あちらのお座敷にいらつしやいます。」

と告げた。何をしてゐるかと夫人が聞くと、疊んだ夜着に寄りかゝつて泣いておいでの樣だと云つた。富枝は昨夜自分の寝んだ暗い座敷を思ひ出して淋しかつた。夫人は直ぐ見に行つたが再び獨りで戻つてきて、

「失禮いたしますさうですから。」

と斷つた。富枝は人力車で送られた。

人力車は邸宅を廻つて松原の横を走つた。別邸内の畑が見えた。自分の寝んだ座敷の窓が白く見えてゐた。人力車の幌は忽ちにそれをかくして唯行く手の廣い人道が見えるばかりであつた。

東京も雨の日であつた。富枝は人力車で[illegible]へ歸つた。

岐阜へ行く〳〵と云つてゐるかと思へば、大磯へ行つた限り歸つて來ず、呑氣な人だと云つて富枝の事を常滿子は笑つてゐた。お伊豫も山尾から歸つて來てゐた。兄は富枝が彼方へ行つて讀むやうな本を揃へておいてやつたと云つた。

富枝の氣は鬱してゐた。お伊豫の顔を見ると明日にも岐阜へ行かうと云つた。妹等は當分

富枝にも逢ふ機がなからうから一周で何所かへ會食に行かうと云つた。富枝はそれが厭であつた。

兄夫婦はお伊豫を連れて何所かへ出て行つた。雨は小さく細降つてゐた。

富枝は染子へ手紙を書いた。

自分は當分田舎へ祖母の看護にゆく。東京と大磯でさへ逢ひがたいのに今度は長い間お目にかゝる折もあるまい。精々附いてる人の云ふ事をよく聞いて、病氣を早く癒し安心をさせなければあなたは種々の人に濟まない事になる。自分は貴女に離れてゐても貴女の健康を思ふほかには何もない。と云ふ樣な意味であつた。書いて了ふと涙が封筒の上に落ちた。

富枝は又、學校時代から染子のよこした手紙を全部纏めた。紫、白、青、いろ／＼の紙箋の上に、戀しいと云ふ字が一封毎にいろ／＼の形の字で現れてゐた。富枝は少時それを讀んでゐた。

纏めた手紙を小さい寄木細工の箱に收めて、それに鍵をかけた。その箱の上に今の手紙を乘せて富枝は長い間思ひに耽つてゐた。

おきそがお茶でも差上げようかと云つてくれた。富枝は平常世話になつた報酬におきそに何か買つて與へようと云ふ氣が起つた。茶の室へ行つて無駄話をしてゐる間に富枝の氣分は少し晴れたので、富枝は傘をさして買物に出た。

おきそには反物をやる積りにして富枝は銀座の小さい呉服屋に入つた。

銘仙一反に紫都子の着るやうな袷布地の縮緬を半反求めて、それを風呂敷に包んで外に出た。富枝はまた電車で榛原まで行つた。貴枝の欲しいと云つてたことを思ひ出した富枝は、其所で踊りの扇子を買つた。扇子は後で誰かに屆けて貰はうとおもつた。

田舎へ行く自分に欲しいものはなかつたが、何か祖母を喜ばせるものはないかと富枝は苦心した。着物と云へば唯暖かくさへあれば好い。珠數の好いのでも持つて行つてやらうかと思つて富枝は自身可笑しかつた。漸く思ひ附いて富枝は幼兒の被るやうな毛絲の頭巾を二つ買つた。坊さんの頭を思ひ出したからであつた。あとは鹽瀬によつて長く保つやうな菓子を鑵詰にさした。年を老ると食慾の外何もないと云ふことを聞いてゐたからであつた。

その菓子の爲に荷物は大きく且つ重くなつた。好い工合に雨は止んだけれども提げた片手の傘を持ち扱つて富枝は肩に凝りさへ覺えるやうであつた。

漸く電車通へ出て、其所から電車に乗らうとした時、髪を結ひに行つた帰りの千萬次に逢つた。鼠納戸の絞つた半襟が綺麗であつた。千萬次は是非家へ寄つてくれと云つた。

「あなたにはそう、澤山にお禮をしたり云つたりしなくちやならないんですから是非寄つて下さいよ。妾はもうあれつ切りあなたにお目にかからずにゐるんで、何だか借金のある樣な氣がしてるんですよ。」

と賴むやうに云つた。荷物があるから又今度と云つて斷つても聞かなかつた。妾が荷物を持つて上げると云つた。顔や姿を賣る商賣の人にこんな大きな荷物を持たしては氣の毒だとお腹の中で然う富枝は思つた。

「それにね、妾はあなたに聞いて戴きたいことがあるんですよ。」

と云つて仇つぽく千萬次は笑んだ。

胸をめぐつたコートの襟は細かつた。長い裾の下から見えた爪革はいかにも小さかつた。その爪革の上に蛇の目の傘の頭を突いて、柄の方に兩方の手を重ねてかけてゐたその千萬次の姿が富枝の目に殘つた。何時でも逢へるからと云つて富枝は別れて了つた。

「あなたに、聞いて戴きたいことがある。」

千萬次は斯う云つた。田里との戀仲の事であらう。千萬次は自分の戀の唯一人の同情者として富枝を懐しがつた。切ない戀に同情してくれる人程、千萬次の眼に稀に見えるものはなかつた。富枝は聞いて貰ひたいことがあると云はれただけで十分だと思つた。

兄夫婦はまだ歸つてこなかつた。反物をおきそに渡した時、おきそは手を突いて辭儀をした。

翌日富枝はお伊豫と共に東京を出立つた。その朝三輪から十二月の幾日とかに日本を去るとふ葉書の知らせがあつた。わざ／＼知らしてよこした書狀は一枚の葉書であつた。それが月並らしく富枝には感じられた。

新橋の停車場で泣いて立つた姉の姿を富枝は眺めた。そしてこの汽車が大磯を通過ぎることを思つてゐるうちに汽車は出た。

◇

いつはりの涙なりともにじみ來よ命死ぬべく君の泣けるに（夕暮）

女が頻りに男の前で泣いてゐる。其れは、もう馴染みの深い二人が、男の外々しくなつた態度を恨んでの涙か、其れとも、初めから男に許されず男に疎まれてゐる片戀の女が、その自分の上を悲しんでのある時の涙か。何方かは分らないが何にしても命も絶え果てるまでに女は男の前で泣いてゐる。それを見てゐる男は、非常に氣の毒なやうな感じも起つては來るけれども、さて然うかと云つて自分の心は更に動かされない。男の冷たい意志は感情の泉をふつつりと塞いでゐる。男は自分にもそれを何うする事も出來ない。然し女の泣いてる姿を見てゐるとそれは如何にも可哀想だと思ふと云ふだけでも女に見せてやり度い。それだけでも知らしてやりたい。「せめて僞りの涙なりとも出て來よ」と男は自分に云つて見るほど、今は自分の胸の中の「冷たいもの」が自身にまで切なくなつて來たのである。――こんな時、自分の上に冷酷な影を見付けると云ふ事は誰れにも苦しい事である。それは相手に然うした冷酷な人間と見られる事が苦しいと云ふよりも、寧ろ自身に對してそんな人間を見せる事が心苦しいのである。其れで人はついこんな時に自身を甘く欺いてしまふ。冷たく凝固してゐるその心の中の本當のものを、僞りの情意で好い加減に解してしまふ。と、その時、罪は二重になつて相手の前に作り出される。

＊

春の雨音なく降れりかかる夜は君をおもふにらら安きかな（薫園）

落着いた春の雨の夜。其の周圍のしづかさが戀人を思ふ心の上にも安らかなものを傳へてくる。薄ら寒い氣はするが室の中は灯がほんやりと包つて、座蒲團の上の自分の温みがなつかしく感じられる。そこに戀人の息がひそやかに聞かれる。何も思ふ事のない、浮世の憂苦に染まない人の安らかな息である。遠くにゐる人の其の息を聞き染みて、思ひ染みて、自分も亦安らかに其處に息をつく、其れだけである。

（[illegible]）

誓言

せい子は今朝突然良人の家を出て、さうして手荷物を一つ持つた儘で私のところへ訪ねて來たのである。せい子はもう良人の家へは歸らないと云つてゐる。此の篇は其のせい子の話なのだ。

　昨日二人は鴻の臺へ遊びに行つたのです。

　三年前、まだ二人が結婚をしない時分に其處で一日暮らしたことがあつたのでした。その時は丁度夏の初めで市川には螢が飛んでゐました。さうしてお互の手が肩に觸れたり頭髮に觸れたりする度に、二人の血のをのゝきが二人の心の上に感じ合ふやうな新らしい樂しみに醉つてゐたのでした。二人が食事をした家で、白粉をぬつた女たちが兵士を相手にしてふざけてゐるのを見たり聞いたりしながら、二人の美しい戀を汚れた水に浸しけがされる樣な心持で、お互の愛を無言の内にそつと守り合つてゐたりしたのでした。さうして夕闇に螢を追ひながら二人は市川を出たのでした。

　この頃一緒に暮らすやうになつた二人は、その思ひ出をなつかしんで、其處で今日一日遊んでこようと云ふので出かけたのでした。

　二人は市川へ着きました。私は停車場前の茶屋の横を通つた時、私の肌を締めつけられるやうな嬉しさにそゝられる氣分が浮いたのでした。あの時、此所の女中に裏の草叢で螢を三つほどつかまへて貰つたのでした。十七位な娘でしたが――私はそつとお菓子の積んである横から中を覗いて見ましたがそれらしい面影の殘つてる女も見られませんでした。

「いやな所だなあ。」

　あの人は突然、町を歩いてる時にから云ひました。

　私は其の邊の何に目をやつても、それが悉く私のなつかしい思ひ出の蔭に優しくしをらしく囁きをしてゐる樣に思はれて、昔の戀の[illegible]のぬくみが、私の[illegible]の[illegible]に再び囁いたと觸れたのでした。それと共に、私は連れ立つてゆくあの人の姿にも昔の戀に囁いた初々しい瞳子を時々投げてゐたのでした。さうして私は無言でゐたのでした。その間にふと今の樣な言葉をあの人の口から聞いた私はある物に[illegible]れてゐる矢先きに、その物をふいと眼の前から引つ攫つて隱されたやうな氣がしました。

「でも、思ひだすわねえ。」

　私の聲には自分ながら可愛らしいほど、なついこい情緒が含まれてゐるのでした。私は無理にもあの人の心から追憶の懷かしみを誘ふやうに、首まで曲げて云つたのですが、あの人はそれには何の感じもない樣に默つてゐるのでした。

　私は生暖かい地上の日光の影を見つめながら、そこいらを飛びまはつてゐる一匹の蜂の、焦茶の色から晩春の感じを追つて歩いてゐました。さうして、昔の戀人と、今からして連れて歩いてゐる人とは別のやうな趣きを見出して、私は昔の優しかつた面影の戀人にあこがれぬいてゐたのでした。

　――昔の戀人は、私が夏の日に照らされな

がら斯うした野外を歩いて行くのを心配して、私の白い皮膚が、燒きごてで燒かれてゆく樣な慘ましい思ひがしてならないと云つたものです。私が夏の熱さに打たれて喘いでゐる時に、戀人は始終その額から物案じらしい眉のひそみを見せてくれました。――あの人は腕組みをしながら、さつさと歩いて行くのです。二人は眞間山の方へ廻りました。

さうして手古奈の祀つてある社の中へ入りました。碑の歌を讀んだりしてから二人は社の前の階段を上りました。あの人はお堂の中へ入つて行きました。丁度其所の茶番のところに、色の白いほんたうに目の覺めるやうな美しい、十七位の坊さんが坐つてゐました。お婆さんが一人其の傍にゐて何か話をしてゐました。

私はその美しい坊さんの顏を見てゐました。歌舞伎の花道からでも出てきさうな麗しい鮮かな目許と口付をしてゐるのです。

「どうぞ、お入り。」

その坊さんは其所に立つてゐる私の方を見てお辭儀をしながら聲をかけました。丁度その時御堂の内を掃いてきたあの人は、坊さんが何か云つてるのを聞き咎めたやうに其方を振り向いてから、すぐと茶番所の方へ出てきました。

私は入らずにゐました。あまり御堂の内が汚いので私は足袋をよごすのが厭だからだつたのです。坊さんは寄附をしてくれと云つて半紙をとぢた本を持つてきました。この若い坊さんは少し調子が違つてゐるのでした。その言葉が少しも普通の詞になつてゐないのと、物を云はうとするのに半分しきや口から出てこないのと、少し舌の縺れるやうな調子とで、私はすぐ白癡だと知りました。お婆さんは傍から足りない口を補つてゐるのでした。あの人もそれに心が付いたやうに、この坊さんにいろ／＼な事を聞いてゐました。

私たちが東京だと聞くと、その坊さんは自分の姉さんが烏森に藝妓をしてゐると云ひました。時々行くけれども、來てはいけないと云つて怒られるからもう行かずにゐると云ひました。この姉弟は此所の生れなのださうです。見れば見るほど美しい顏です。この人の姉ではどんなにか綺麗な藝者だらうとも思はれました。姉が藝者で白癡の弟がかうした社に茶の番をしてゐると云ふ事が、私の興味を喚び起してゐました。私はしみ／＼とこの美しい、汚い衣を着てゐる坊さんを見てゐたのです。

お婆さんはこの坊さんにお嫁の話なぞをして揶揄つてゐました。坊さんはたまつてあの人の顏を見ながら笑つてゐました。私たちは少しの金を納めて眞間山の方へ上つてゆきました。私はあの人にこの坊さんの珍らしい美男なことを繰り返し／＼話して行つたのです。

丁度本山の前でお賽錢を上げてる時でした。

「お前は彼處に立つてる時赤い顏をしてゐたのか。」

とあの人が聞くのです。それが私には、何の意味なのか少しも分らなかつたのです。それで私が默つてゐますと、今の坊さんが私の顏を見て、

「あの人は眞つ赤な顏をしてゐる。」

と云つて笑つたと云ふのです、私は社の外郭のところに立つて、あの坊さんの美しい顏に就いては興味的に眺めてもゐましたけれども、私の顏が赤くなる樣な何の刺戟も羞恥も受けた覺えはなかつたのです。それは、

「どうぞ、お入り。」

と云つた言葉を聞き違へたのぢやないかと私は思ひました。それで其の事をあの人に云ひますと、私は非常に怒られました。

「お前の耳は何うしてるんだ。」

あの人はかう怒鳴りつけました。

あの人の氣嫌はすつかり惡くなつて、其れからは私が何を云つても返事をしないのです。さうして歸ると云ひました。それは眞間の石の階段を下りる時でした。

私は悲しくなりました。昔、二人して戀を囁いたこのなつかしい地へ、今日また袖を並べて昔の戀を物語りに來ながら、二人はしみ〴〵した眼と眼さへ合さないのです。

木も石も、私の思ひ出の心の底には懷かしい影を投げてゐながら、二人はそれをまだ語り合はうともしてはゐなかつたのです。過ぎた戀……去つてしまつた時……に就いて、新たに悲しい味は齎らうとも、私には自分の初心な胸をふるはしたこの木の蔭に昔の初戀を振り返つて見て、さうして今の人に私の熱い手を與へて見たかつたのです。

それがこれ程の言葉の行き違ひから、あの人を怒らせて興味を失つてしまつたと云ふ事が私には取り返しのつかない悲しみでした。私はその思ひをこま〴〵と話して、さうして譯もなくあやまつて見ましたが、駄目でした。

あの人はおもしろくないから歸ると云ひ張つてゐます。私は泣いたのです。さうしてこの男を憎みました。この男が私の昔の戀人だつたと云ふ事を、思ふにも腹が立ちました。すべて、私の優しいなつかしい幻を打ち崩さう打ち崩さうとするこの男の目に見えないある力が憎いのでした。

「私が何の爲に顏を赤くして立つてゐる筈があらう。」

私はかう思つて、唯不機嫌に、怒鳴り調子で物を云ふこの男が、一途に憎くなつたのでした。

私は青麥のそよいで見える畑道に立つて、ほろほろ落ちてくる涙を拭いてゐました。

「機嫌を直してゆつくり一日遊んで行きませう。ねえ、然うしようぢやありませんか。」

私も一生懸命に自分の感情を抑へ付けるやうにして斯うなだめて見ました。

「いやだ。」

あの人は叩き付けるやうに一言云つたばかりでした。

私は大きな聲で泣きながら地面の上へぴたりと突つ伏してしまひ度いやうな、唯じり〳〵した心持になつたのです。さうしてあの人が斯う云ふ頑固な態度を見せる時に、私は發作的にこの人に手をかけて小突く癖があるのですが、今もそれが出て私はあの人の胸に手をかけるなりづうつと突き倒すやうに押し付けました。

「何をするんだ。」

「私がこんなにあやまつてゐるぢやないか、もう其れでいゝでせう。何故然うしてそんなにぷん〳〵怒るんです。此所は何所なんです。なさけない人ねえ。」

「いけない。いけない。」

あの人は激發する感情のおさへきれない樣な聲で怒鳴りつけました。

私は何うかして二人仲好くこの土を踏んで、せめては私たちの一生のある部分を色彩つた華やかな戀の時代に醉つて見たいと云ふ願ひで心がいつぱいになりました。私はどんなにしてもあの人の機嫌を直させなければならないと思ひました。私はじれつたい涙をこぼしながら、あの人の身體を無暗と突きました。

丁度小間物の行商人のやうな男が私たちの傍を通つて行つたのです。さうして少し向うへ行つてから振り返つて私たちの方をながめてゐました。

「止せ。見つともない。」

「それぢや當り前にして遊んで歸りませう。さもなければあなた一人でお歸りなさい。私はいやです。」

「勝手にしろ。」

あの人は然う云つて、ずん〳〵歩き始めました。

私は丁度櫻垣のところに立つてゐたのです。その葉を一つづつ捥りながら、私はいつまでも泣いてゐました。からした優しみのない邪慳な言葉は私の昔の戀人だつた男の口から出てゐるのです。よしんば何れほどの粗忽な事を私が爲たとしても、この記念の土の上で荒い言葉を投げるやうな素つ氣のない事をすると云ふ男が私には恨めしく思はれたのでした。戀のかたみを傷つた男のいつこくな心持が私には打つても斬つても足りない口惜しさなのでした。

それ限り私たちは物も云はずに停車場へ引つ返しました。停車場へ入つてそこに集まつてるいろ〳〵な人の顏を見てゐるうちに、私の胸はだん〳〵靜になつてきました。私は打ち解けて話をしかけようとしましたが、あの人は執念く無言で、決して私に返事をしようともしませんでした。

暮らして私たちはまだ日の明るい内に歸つて來て了つたのです。

私は心持ちわるいので髮を洗ひました。夕食をすましてからの事でした。あの人は、

「何故お前の態度が一々氣に食はないんだらう。」

と私に云つたのです。さうして、

「一々反感が起つて堪へられない。」

とその聲に角をつけて、けん〳〵云ふのです。私は默つてゐました。私は素直にあの人の前で默つてゐました。然うすると、あの人は又眞間の事を云ひ出したのです。

自分には赤い顏をしてゐると聞えた事が、どうしてお前の耳には、お入りと聞えたのか、それが分らない內は面白くないと云ひ張つてゐるのです。さうして、あの人がお堂の內を見物してゐる時に、何故一所に入つて見なかつたか、何故そんな勝手な振舞をするのかと云ふのです。

その時私はふと斯う云ふ事を感じたのです。この男が私の性格の上に氣に食はないことがあるからと云つて、私はそれを强ひても撓め直さなければならない務めと云ふものを考へなければならないのだらうか。私の態度によつて反感を起されると云はれて、私はこの男の前にはいつも縮こまつてその氣に觸れないやうな遠慮を考へなければならないのだらうか。——

私の態度が誰れにも彼れにも反感を持たせようとも、私の態度は自分のものなのです。私の性格が多くの人に爪はじきをされようとも嫌はれようとも、私の性格は自分のものなのです。特にあの人の口から斯う極め付けられると云ふ事は私には强い辱しめです。

「赤い顏をしてゐれば何うだつて云ふんです。」

私は[illegible]走つた聲で云ひ返しました。

「あなたの爲に私はどんなに侮辱されるか知れません。」

「あんな者に赤い顏をしてゐると云はれたのは侮辱ぢやないのか。」

あの人は押戾すやうに斯うしつぺい返しをしました。

私が全く赤い顏をしてゐたとして、それを穩な美しい坊さんが見咎めて笑つたと云ふ事に、どう侮辱的の意味があるのでせう。私にはどうしても分らないんです。私は然う云ふ事に就いて、さん〴〵爭ひました。

「兎に角お前の態度が氣に食はない。嫌ひだ。實にいやな女だ。」

かう、つけ〳〵と云ひ放つた時のあの人の顏の表情——その眼尻に刻まれた殘忍な皺、結んでゐる口許の周圍を色づけてゐる冷笑と憎い色——、その頬骨は世を打ち挫かうとし、易々とは壞れさうにも見えぬほど高く鋭く尖つてゐるのでした。さうしてその輪郭の[illegible]

つた線などには見られないほど、男の相好、とげとげとしてゐるのでした。私はぢつと見詰めてゐました。

二人が一所に暮らすやうになつてからまだ一年と少ししきや經たないのですが、あの人の顏の上にこれ程嫌惡の思ひを起させる面影をみとめた事はありませんでした。これが私の戀人だつたのか。さうして今はお互の血と肉が二人の魂の內に溶け合つて、そこから生れる新な愛が私たちの日々を濃やかに色彩つてゐる二人の仲に、見交される顏なのだらうかと思つた時に、私は云ひ樣もない寂しさにおそはれました。

「いつたいお前とは氣が合はないのだ。何かについて癪にさはる。――いつそ別れてしまはう。」

あの人は斯う云つたのです。

「お前とは氣が合はない、お前の樣なものと一所にゐてはおれは何も出來ない。人間がくだらなくなるばかりだ。」とはあの人の能く云ひ〳〵してゐる言葉なのでした。「何故です。」と私が聞いてもあの人ははつきりした返事もしないのですが、よく斯う云つて一人で考へてゐることがあつたのでした。

「別れよう。――」

これは初めて聞いた言葉でした。別れる……私は幾度繰り返してもこの言葉の形がはつきり私の胸に映つてこないほど驚きました。今こゝで別れようと云ひ切るまでのその經過に、私と云ふものが何うあの人の頭腦の中で動いてゐたものか夫れは私には分りません。分りませんけれども、私自身にしてはあの人から捨てると云ふ意味の別れ話を持ち出させようとは意外な事なのでした。私はたゞ、

「何故です。」

と押詰めるやうにして聞いて見ました。

「どうも氣に入らない。」

あの人は斯う云つて俯向いてゐました。

私の胸は洪水の押寄せてくるやうに、冷たく、その癖ひし〳〵と物が塞がつてくるのでした。私は齒を食ひしめながらあの人の顏を唯何時までも見詰めてゐました。

「別れてくれないか。」

その聲はわざとらしい程落着いたものでした。

「何故です。」

私は又から問ひ詰めて、さうしてぼんやりとあの人の顏を見てゐました。

「けれど……。」

私は私たちの愛について云はうとしたのですがそれは止しました。さうして、

「あなたには別れられるのですか。」

と聞いて見ました。

「別れたいのだ。」

あの人は當り前の聲で靜に云ふのです。

「ほんたうの事を云つてらつしやるんでせうね。戲談ではないんでせうね。」

私は斯う云ひながら、知らず〳〵あの人の袂を握つてゐました。

「ほんたうの事を云つてるのだ。もうお前と別れさへすればいゝ。お前が出てゆかなければおれが出て行く。」

あの人は遂にこゝまで云ひました。

私は不意とさゝいゝいけをされたと云ふ氣がしました。

さうして、私より先きにあの人から思ひ切られたと云ふ事が癪にさはりました。

「あなたは御自分の心から私と云ふものが消えてしまつたから、それで私と云ふものの形までもあなたの目の前に見まいとして其れで別れようと仰しやるんですか。」

「然うぢやない。愛がなくなつたから別れよう

と云ふのぢやない。」

「そんなをかしな事がありますか。」

「お前に分らなければ其れでいゝんだ。別れさへすればいゝんだ。」

「私はいやです。」

私は然う云ひ切つてしまふと、意氣地のない涙が綴りだされる樣に溢れてきたのでした。私は何か云はうとしても、涙聲になつて言葉がをのゝくのが氣になつて、幾度その涙を聲と一所に呑みこんだか知れません。さうして私は涙を額の上に流したまゝで、あの人の顏を見据ゑてゐました。

あの人も少時だまつてゐました。

「卑怯ぢやありませんか。ほんとに私を愛してゐるのなら、何故あなたは別れるひまに私を殺さないんです。あなたは私を遠のけておいて、さうしてまだ無くなりきらない愛を其の間に胡魔化さうとなさるんです。卑怯ぢやありませんか。あなたは何がこはいんです。私の何所がこはいんです。」

から私は泣きつゞけました。

あの人は私に始終壓迫されるのだと云つてゐました。さうして私の態度――それはどんな隙にでもすぐ私の身體を抜けかけさうな崩れた態度なのださうです。――その態度が絶えずあの人に反感をおこさせるのださうです。あの人は其の壓迫からのがれようとして、反抗的にわざと私を「いやな女」だと云つて罵るのです。

然うなのです。私にはその男らしくない卑怯さが憎くつて堪りませんでした。

「それ程私の壓迫を感じるなら、何故あなたはその壓迫の下に服さないんです。自分の愛する女だとか戀をした女だとか云ふ人に何うしてあなたはそんな優しくない反抗心を持つのです。その反抗心からあなたは始終私に侮辱を與へようとなさるんです。あなたは『別れよう』と言ふ言葉が私にとつてどんな侮辱だかと云ふことは分つていらつしやるんでせう。」

私は泣いてしまひました。しばらくして、あの人は斯う云ふ事を云ひました。

「お前に愛なんぞはないんだ。一所にゐるのさへいやな位な女に愛も何もない。いやになつたから別れようと云ふのだ。」

その男の眼の光りに、嘲うそぶくと云ふ樣な誇りの色が見えたのでした。

私の身體中の血がその瞬間に湧き上りました。

私はこの男を殺さう。殺してしまへばそれでいゝ――斯う云ふ殺伐な氣分が私の全體の上に嵐のやうに吹きひろがつたのです。私は自分の眼頭から血汐の吹きでるほど男の顏を睨んだのでした。

「私はあなたに別れるのはいやです。私はまだあなたを愛してゐるんですから。」

私は何ものかを嘲り〳〵から云ひました。

私はこれほどの侮辱を受けながら、何うしても男の言葉のやうに私の方からも、「あなたには愛がない。だから別れよう。」と云ふ一言が云ひ得ないのでした。今あの人に云つたその言葉は私の眞實の心底なのです。然しそれを眞心の涙と聲とで云ひ現はすのはいやなのでした、私はさうした不思議な未練を自ら嘲りながら、

「……まだあなたを愛してゐるんですから。」

と云つたのでした。

「唯意味もなく別れると云ふのはいやです。殺して下さい。あなたも男でせう。――私のあなたに對する愛はそれほど強いのです。」

から云ひました時に、

「おれは理窟は大嫌ひだ。それが迷ひなのだ。どつちの愛が強いか強くないか理窟で比較ができるのか。殺して貰ひたけりや殺してやらあ。

けれど[illegible]もなにもないお前なんぞを殺すのは馬鹿馬鹿しいから。自分の命の方がをしいから。」

あの人は乾いた笑ひ聲を上げました。

「それ程別れるのがいやなら今朝からの事をすべてあやまれ。さうしてこれから決しておれの言葉には背向かないと云ふ誓ひを立てたら許してやる。」

何と云ふ矛盾した言葉でせう。あの人はかう云ふ事を云つたのです。

「卑怯だ。」

私は又かう叫びたくなりました。

「あやまる事なんぞは何もありません。私はあやまりません。何の爲にあなたにあやまるんです。私はあなたにあやまらされるよりは殺された方がいゝ。」

「別れよう。別れよう。おれはもう堪らない。實に堪らない。」

「何だつて別れるんです……。」

あの人は立ち上りました。その羽織の襟先を私は摑んで引き据ゑたのでした。

「うるさいのは私の方がうるさいのですよ。誰の方からこんなうるさい問題を持ちだしたんです。誰の方から……。」

私はその時打たれたのでした。

「何だつて私を打つんです。どんな權があつてあなたにそんな目に逢はされるんです。」

私は自分ながら自分の眼の逆釣るのが知れたのでした。さうして私の混亂してゐるさまざまの感情を、たゞ一聲の叫びによつてすべて晴らし盡して了はうとする樣に、

「あなたは何なのです。」

と聲をからして泣いたのでした。

あの人は私の鏡臺を足で蹴つて鏡のおもてを割つてしまひました。電燈の球へ丁度私の投げつけた雜誌があたつて硝子をこはしてしまひました。その破片の散らばつてる疊の上で、私はあの人の髮の毛を搦り取るやうに摑んでは引きずり廻さうとしました。私は自分の掌の骨ぶしが滅茶々々に叩き折れるほど、あの人の身體を打ち据ゑました。あの人を打ち据ゑる度毎に、私の身體は却つてあの人の頑疊な掌でさんざんに叩きのめされるのでした。

「あやまれ。あやまれ。」

斯う云つてあの人は私の痩せこけた肩を小突くのです。尖つた腮を突きだして、卑しい表情をもつた眼で私を睨みながら、顏で拍子をとる樣にしてから云ふのです。ほんたうに私の眼からは血の滴つてくるやうな熱い、さうして痛い涙が流れました。

「何をあやまるんだい。あやまる樣な口を持つちや生れてこないんだ。」

私は唾でも吐きかけてやり度いほどの、突つかけた心持がしながらこんな惡態を吐きました。

私の左の袖付は引きちぎれて袖がぶら下つてゐました。丁度夕方髮を洗つてその儘下げてゐたものですから、その毛が引き摘れたり、あの人の手で引きぬかれたり、私の耳や目に蜘蛛の足のやうに引つかゝつたりするのです。私はその毛がもやもやもやもやと、いきれた熱を含んで顏や頸に纏ひつくので猶更心が逆上してゆくのでした。私は手あたり次第に何もかも投りつけました。私の背中の貝殼骨のところを、私の身體が微塵になるほどあの人は足で蹴りました。

「私はあなたを殺すか、あなたに殺されるか、どつちかにしなければ厭だ。」

私は然う云つて叫んでゐました。よく切れる刃物が手近にあつたら、その刃先でぷつりと、あの人の身體を突いたに違ひないのです。私の絶頂の癇癪と、私を打擲したり、あやまれと云つて責めたりするその男の態度に對する屈

獸と惡意とが、唯何かなし鋭い刃のやうなものをその憎い男の肉體に、突き突つ込んでやりさへすれば、それで一切の感情も平になるのだと思はれたのでした。さもなければ、私は彼に殺されたかつたのです。この男の手によつて永久に片付けてしまへばそれでもいゝのです。唯徒らにこの男の口から罵られたり、生身の身體を打擲される毎に反抗する爭闘をいつまでも續けてゐるよりは、私には一思ひに死の手で一方を解決してしまつたら、どんなに心持が快いか知れないと思ひ詰めたのでした。

それだのに、その最後の手に落ちては、私のこの怒りの感情が忍む餘はないのです。私は目が眩むほどの切迫した息づかひをしながら、あの人の着物の片端でも手に摑んだり、ぐとぐと全身の力に縋り縋つて、男の身體を打つ打ちよう打ち掛らうとあせるのでした。

「いゝ加減にしておけ。」

あの人は私を力任せに押し伏せました。

「私はどうしてもあなたを殺す。殺す。殺す…。」

私は泣きながらかう叫びました。

「そんなら外へ出ろ。」

あの人は落着いた聲で然う云ひました。茶の間の方へ出てくると片隅に若い下女が突つ伏して泣いてゐた際です。私はずんずん外へ出ました。

「氣狂ひ見たいな姿をして外に出るな。おい。髮でも何うかして行かないか。」

あの人は私を呼びとめて然う云ふのです。

「髮がどうしたつて。——私は眞に貴郎を殺すか殺されるかしなければやめたいのです。ほんとに。」

振り切つた私の聲は震へてゐました。私は綻びでちぎれかけた袖をぶらぶらさせた儘、散らし髮で外に出たのです。

ちらほらと軒燈が幾間も隔つた處に點つてゐるだけで、其邊に人通りもなく眞つ暗でした。庭を一つ境にして隣りの家では靜な音で琴をひいてゐました。あの人は下女に何か云ひながら後から出てきました。

「まるで氣狂ひだ。巡査に咎められたら何うするんだ。こゝは往來なんだぜ。」

私はその卑怯な言葉を聞いた時、私の興奮しきつてる火のやうな感情の底に、すつと冷たい笑ひが、一筋かすかに流れて通つたのでした。

「私は外も家もないんです。往來の人が見たつて氣狂ひと云つたつて何樣なことは構ひません。私はあなたを殺すか殺されるかさへすればいゝんです。」

「くだらないぢやないか。」

あの人はかう云つて私を宥めるやうな柔らかな調子を見せたのでした。

私の胸のなかを狂ひまはつてゐたどす黑い血が、その隙に私の指頭からすうつと逃げていつたやうな、目の醒めた心地がしたのでした。それと同時に、あの人の人格と云ふものをはつきりと目の前に露にされたやうな心持もしたのでした。

「何がくだらないのでせう。私にはこの事がどんなに大きな問題なのか知れないのです。あなたは私と離れようと觧してゐたのぢやないんですか。」

「然うだ。然しまあ落着いてよく考へて見ようぢやないか。」

「何を考へるんです。もう考へることも何もありやしません。私はあなたに殺されるか殺すかしなければ厭です。あなたはほんたうに卑怯な方ですね。何の爲に生きてたんです。」

「氣狂ひ見たいな事を云ふな。」

あの人は呟きながら[illegible]ました。

「私は正氣で云つてるんですよ。貴郎が正氣で別れようと云つた通りに私も正氣で云つてるんですから。」
「勝手にしろ。」
あの人は然う云ふなり、右へ曲つて早足に行つてしまひました。私は其の後を追ひながら通りへ出ましたが、あの人の姿も足音も聞えないのでした。私はそこに少時立つてゐました。
私の立ちました其所は土堤をくづした崖になつてゐまして、すぐその向うは汽車の線路になつてゐるのでした。停車場附近の構内から石炭を燃やしてゐる炎の影が、眞つ暗な闇の中を蠟燭の裸火がちらついてゐる様に、紅の輪をにじましてぽつと擴かつてゐました。曇つてゐるのと見えて星の光りはどこにも仰げませんでした。今の隣りの家の琴の音が微に細いねを顫はして私の裾の周りに漂つてゐました。
私の心は悲しみの間に引き緊つてゆくのでした。さうして、生温い風が闇の中に佇んでゐる私を探り〳〵してそつと吹き付けてゆくやうなその優しい肌ざはりにも、私の胸は譯もなく突き動かされるほど脆くなつてゐたのでした。人は斯う云ふ時に自殺でもするのではないかと思はれるやうに、打擲された筋肉に力を失つてしまつた私の身體は、立つてゐるにも堪へられないほど疲れてしまつてゐました。私の精神は丁度今まで摑みしめられてゐた手を急に放されたやうにぼやけて、私は物を思ふのさへ億劫ななかに、唯果敢ない悲しみと淋しさとだけが感情の輪郭を色どつて私の胸の上に被さつてゐるのでした。私は土の上にぴたりと坐りました。さうして私の袖付の破れを見てゐるうちに、私は自分の一生の破れの綻だと思ふとどれ程そのちぎれかけた袖が悲しかつたか知れませんでした。私はやゝ少時其所に坐つてゐました。
「別れてしまはう。」
斯うした考へが、私の朦朧とした心の底にぽつと色を濃くして潜まつてあるのでした。其の一點が、私の心の全體に落着いた悲しみを擴げさせてゐるのでした。私は袖を抱へて二度あの人の家へ入りました。
座敷の内は以前の通り狼藉としてゐるのです。下女が電氣の球を付け直したまゝ、その下のところでぼんやりと坐つてゐました。何を考へてゐたのか壞れたものを片付けようともしないでゐたらしいのでした。私が中に入つてゆくとこの若い下女は私の裾につかまつて、然うして泣きだしたのでした。
私は自分の部屋へ入つて、何と云ふこともなく入用の品だけを集めにかゝりました。さうして下女に云つて着物を代へました。その時私は脱いだ着物の袂のちぎれを、一生捨てずにおかうと決めて、その儘下女に畳ましたのでした。
机の上のアネモネの花は、紫、白、緋と色を交ぜて明りの蔭に美しさをあつめてゐました。紅のはひつた友禪の私の座蒲團――私はこの上に湯上りのだらけた身體を乗せて机の上に頬杖をつきながら、よくあの人の歸りを待つたものでした。――私はその上にぢつと坐りながら和らいだやさしい花の蔭に瞳子をなづけてゐるうちに、私の胸はいつぱいに塞がつてきて、さうして涙が一滴、一滴と熱くなつて瞼の底からこぼれてくるのでした。
私は戀の昔を思はずにはゐられなかつたのです。
私たちが結婚するについても、あの人の親達と私どもの親達との間にむづかしい交渉があつたのでした。私の一人の姉の力によつて漸く二人の縁はまとまつたのでした。いまかうして別れるとなつて、私は家へは歸れないのです。

家へ帰つたなら又うるさい仲裁の口がはひつて私に戻れと云ふかもしれません。

「別れてくれ。」

から云ふ言葉を男の口から聞いた私が、その男の前に手を突いてその言葉を取消して貰ふことを願ふのはいやです。私はあの人の傍をはなれてから、私のあの人に對する思ひの情がさまないまでも、一旦別れようと云ひ出されたあの人の前に再び私の姿を並べるのはいやです。いやです。あの人の心の上にどんな思ひの色が纏れてゐようとも、「別れよう。」と口から外にだしたその一言に對して、私は女の恥と云ふことの果敢なさを思はずにはゐられないのです。

此家を出てからの行く先き――そのことまでも私の考へがこまかく行き渡つてゆくのでした。今夜にも此家を出て、私は誰のところに行かう――私は姉の家へも行けないのでした。

私の一度萎えた心持が、この時にぴんと反りを打つて立直つてきました。私は自分の行く先きと云ふ事には目を閉いで、さうして直ぐ持つて出られる手まはりのものだけを始末しようとしました。

あの人は歸つてこないのです。

私は小さい荷物を拵へて其れをわきに置きました。あの人のゐない内に私は出て行けばいゝばかりに支度をしたのでした、さうして手鏡を机の上において髮をとかしました。

あの人は歸つてこないのです。

私はどうしても、もう一度あの人に逢はなければならないと思ひました。逢つて私は何を云ふつもりなのだらう。

「あなたのお望みどほり別れて上げませう。」

私はあの人の顔を見て、落着いた調子で斯う云ふ事を聞かせたかつたのです。

もう十二時を過ぎました。私は下女に戸締りをさせて先きへ寢ませました。さうして私は机の上に身體を寄せかけて、あの人の足音が門のところに響くのを待ちました。

破鏡――鏡のわれた事がこの悲しい成り行きの占ひをしたと云ふのも不思議です。私は斜に一筋疵痕をうねらせてる鏡のおもてを見詰めました。結婚した當時、大きな鏡の此室に据ゑられたのを珍らしがつてあの人はよくこの前に坐つて見たものでした。私がこゝでお化粧をしてゐる時には、きつと傍に立つて眉刷毛の手ばしこく動くのを面白がつたりしました。さうして鏡臺の上の一輪挿しにはあの人の手でいろいろな花を插しておいて貰ふのでした。それがあの人の樂しみの一つだつたのです。二人の顔はこの鏡の面に重なり合つては映つたのでした。その鏡の面は私たちの運命を占つて二つに割れてしまひました。

私はいつたいあの人の荒々しい感情の爲には何時も酷い思ひをさせられてはゐるのでした。私が風邪などをひいても、あの人は優しく私をいたはつて與れる事はしずに、「何故風邪をひくやうな事をするのだ。」と斯う極め付けるのが先きなのです。私はその小言が大嫌ひなのでした。――

私は取りとめもなくこんな事を考へてゐました。私の心がだん／＼と棚の置時計のちき／＼と云ふ音の中に吸ひこまれて行くやうな氣がしました。私はその針の動きを見てゐるうちに、良人の歸りのおそい時この時計の針に指をついて蟲の這ふやうに動いてゆくのを數へながら待ち焦れたことを思ひ出したのです。

脊骨から腕へかけての痛みが、錐の先きで突かれ始めたやうにはつきりと痛みだしてきました。柔らかな座敷の火に包まれて、かうして机に寄りかゝつてゐる私の身體は、その痛み、勞れとで何時ともなく熱がでてゐるのでした。

私はうつ〳〵と眠つたのです。けれど、すぐ目が覺めました。

私は時計を見ました。もう二時を過ぎてゐました。あの人は歸つてこないのです。一度眠つた私の神經はゆるみがでて、もう何うでもいゝと云ふ樣な投げた氣になつてゐました。「あやまれ」と云ふなら素直にあやまつて、平和な、打ちとけた笑ひを取り交したい。さうして私のこの勞れた心持をあの人の優しい言葉の内に休めたい。私にはあの人の顏を見ないうちはこの身體も心も安まりはしない。それが苦しい。私はあの人に縋りついてあの人の口から、「可哀想なことをした。」と云つて貰へば、私は舊のやうに輕々した、何を見ても聞いても浮々した心持に返れるのだ。さうして懷かしい涙に思ふさま咽んで、あの人の胸の内に顏を埋めたい。――

私は斯う云ふことを考へてゐました。あの人と結婚してから、あの人が二時頃までも歸らずにゐると云ふ樣なことはなかつたのです。私はこの眞夜中に懷手をして何所と云ふ當てもなく逍遥つてゐるあの人の姿を思ひやつて、さうして何とも云へない寂しい思ひにふさがれたのでした。

「ごめんなさい、私が惡うございました」斯う云つていきなりあの人の前に手を突いたら、あの人もきつと嬉しさうに笑つてくれるに違ひない。私は自分の身體をあの人の前に投げだしてあの人に手を突いた時の、自分の美しい姿を考へても見るのでした。

私はあの人の書齋へ入つてゆきました。せめてはあの人の室の中にぢつと坐つて見たいのでした。あの人の机の抽斗を開けたり、本箱に手を付けたり、あの人の好きな、サランボー姫の鑄物のおき物を抱いて見たりしたのでした。さうしてあの人の机の上に私は自分の半身を、あの人の手に抱かれるやうな心持でよせかけたのでした。

あの人は歸つてこないのです。

何所へ行つたのだらう――私はふと何かしら振り返つて見るやうな心持がしました。

この夜更けに唯一人で歩いてゐる筈はなかつたのです。友達のところと云つてもあの人が泊り込むやうな親しい人もないのです。何所へ行つたのだらう――私は何だか門のあたりにあの人が立つてゐて、態と家へ入らずにゐるのではないかと云ふ樣な氣がしました。

私は立つて行つて門をあけて見ました。恐しい夜中の暗い私の眼の上から壓しかぶさつてくるばかりで、人の影なぞが見えるわけではありませんでした。私は門をしめてからも暫らく門の上にいつまでも立つてゐました。何時からか吹きだした風が雨戸に烈しい音を立ててゐるのです。さうして門の櫻が軒燈の小さな光りの下に塵屑のやうに散つてゐるのでした。

朝まであの人は歸つて來ませんでした。私は夜が明けるまで唯あの人を待ち盡したのでした。私は昨夜自分の拵へておいた手荷物を、不思議な事實の塊りのやうな氣がして、明るくなつてきた窓の下で見詰めてゐたのでした。――

「お早う。」あの人は然う云ひながら歸つてきました。私は何年も逢はずにゐた人の顏を振り仰ぐやうに眺めました。あの人の顏は湯にでも入浴つてきたやうに光りと綺麗な艶をもつてゐました。さうして小楊枝を齒の先きでもちやにしてゐました。私はあの人の口から酒の息をかいだのでした。

「昨晩のお話はどうなさるんです。あなたは別れてくれと仰しやつたのですから、私はそのつ

もりでお待ち申してゐました。」

私はあの人の言葉の出ない内にから云つてしまひました。

「お暇しませう。」

あの人は然う云つたぎりで自分の部屋の方へ行つてしまつたのです。私はすぐあの人の家を出ました。

から話してから、せい子は私に「あの人の傍へはもう決して戻らない。」と云つて誓つた。せい子は何時まで私の二階にゐるつもりだらう。

◇

みじろがでわが手にねむれあめつちにならごともなし何の事なし（牧水）

強い力と深い愛！　讀んでゐると其れに打たれて自づと涙が浮んでくるやうないゝ歌である。戀人を手に抱いた男は、戀人の魂を安らかに打鎮めてやりながら「いつまでも安心して靜うしてぢつと眠つてゐれ。この世界には何事も起りはしない。どんな災禍も不幸な事も起りはしない。お前が私の手の内に抱かれてゐる間は、お前の世はすべて安らかである。不安や恐怖で自分を煩はしてはいけない。ぢつとして在るが儘に安心して私の手の内に抱かれてゐるよ。」と云ふ。自分の力を信じつゝ、女を抱擁する男のこの晴れ〲しい讃美！　そこには限りない寛い愛と大きな情熱とが、もつとも男性的な強さをもつて不滅の光りの中に包まれてゐる。女の魂を優しく愛撫する男のこの心よ。「みじろがでわが手にねむれ」何もかもと云つて女に凡てを[illegible]す男のこの心よ。女の男に對する眞の愛慕はこの大きな心臓の内にのみ永遠に息づかれるであらう。誠の戀の命はこゝにこそ限りない美しさを帶びて天日のやうに生き〲と輝く。人間の精神の美しいもの、愛らしいもの、清らなもの、尊いもの、大きなもの、其れ等はみんなこの男の心から引ける世界の内にのみ新たに見出され、さうして築かれる。戀愛の上に建てられたこの世の生活が、どんなに豐かなもので、どんなに麗しいもので、又現實的に力強く健全なものかと云ふ事は、唯この男の魂のみが知り得る心と心の調和な融合、幸福な日々の惠み、人生へ對するなつかしい愛——其れ等のいゝ事を齎してくるものはみんなこの戀の生活である。さうしてその魂が未來にわたつて亡びないやうに、其の生活も亦未來にわたつて亡びない——斯う云ふ戀の歌にこそ眞實がある。男の中の一人と云ひたい程の男の、もつとも美しい血潮がこの歌の上に流動してゐる。其れが何よりもこの歌の上に尊まれる。さうして讀むものは其の切實に泣かされる。

（「愛かなさけか」より）

女作者

この女作者の頭腦のなかは、今までに乏しい力をさんざ絞りだし絞りだし爲てきた殘りの滓でいつぱいになつてゐて、もう何うこの袋を揉み絞つても、肉の付いた一言も出てこなければ血の匂ひのする半句も食みでてこない。暮れに押詰まつてからの賴まれものを弄りまはし持ち扱ひきつて、さうして毎日机の前に坐つては、原稿紙の桝のなかに麻の葉を拵へたり立枠を描いたりしていたづら書きばかりしてゐる。

女作者が火鉢をわきに置いてきちんと坐つてゐる座敷は二階の四疊半である。窓の外に搖きむしるやうな荒つぽい風の吹きすさむ日もあるけれども、何うかすると張りのない艶のない呆やけたやうな日射しが拂へば消えさうに嫋々と、開けた障子の外から覗きこんでゐるやうな眠つぽい日もある。そんな時の空の色は何か一色交つたやうな不透明な底の透かない光りを持つてはゐるけれども、さも、冬と云ふ權威の前にすつかり赤裸になつてうづくまつてゐる森の大きな立木の不態さを微笑してゐるやうに、やんはりと靜に膨らんで晴れてゐる。さうしてこの空をぢつと見詰めてゐる女作者の額の上にも明るい微笑の影を降りかけてくれる。女作者には然うした時の空模樣がどことなく自分の好きな人の微笑に似てゐるやうに思はれるのであつた。利口さうな圓らの眼の睫毛に、つひぞ冷嘲の影を漂はした事のない、優しい寬濶な男の微笑みに似てゐるやうに思はれてくるのであつた。

女作者は思ひがけなく懷かしいものについと袖を取られたやうな心持で、目を見張つてその微笑の口許にいつぱいに自分の心を銜ませてゐると、おのづと女作者の胸のなかには自分の好きな人に對するある感じがおしろい刷毛が皮膚にさはるやうな柔らかな刺戟でまつはつてくる。其の感じは丁度白絹に襲なつた青磁色の小口がほんのりと流れてゐるやうな、品の好いすつきりした古めかしい匂ひを含んだ好いた感じなのである。然うするとこの女作者は出來るだけその感覺を浮氣なおもちやにしようとして、ぢつと眼を瞑つてその瞼の裏にできた人の面影を摘んで入れて見たり、掌の上にのせて引きのばして見たり、握りしめて見たり、然もなければ今日の空のなかにそのおもかげを投げ込んで、向うに立たせて思ひつきり眺めて見たりする。こんな事で猶更原稿紙の桝のなかに文字を一つづつ埋める事が億劫になつてくるのであつた。

この女作者はいつも白粉をつけてゐる。もう三十にならうとしてゐながら、隨分濃いお粧りをしてゐる。誰も見ない時などは舞臺化粧のやうなお粧りをしてそつと喜んでゐる。少しぐらゐ身體の工合の惡い時なら、わざ〳〵白粉をつけて床のなかに居ようと云ふほど白粉を放す事の出來ない女なのである。おしろいを塗けずにゐる時は、何とも云へない醜いむきだしな物を身體の外側に引つ掛けてゐるやうで、それが氣になるばかりぢやなく、自然と放縱な血と肉の暖みに自分の心を甘えさせてゐるやうな空解けた心持になれないのが苦しくつて堪らないからなのであつた。さうしておしろいを塗けずにゐる時は、感情が妙にきざ〳〵して、「へん」とか「へつ」とか云ふやうな眼づかひや心づかひを絶えず爲てゐるやうな僻んだいやな氣分にな

る。媚を失つた不貞腐れた加減になつてくる。それがこの女には何よりも恐しいのであつた。だから自分の素顏をいつも白粉でかくしてゐるのである。さうして頰や小鼻のわきの白粉が脂肪にとけて、それに物の接觸する度に人知れず匂つてくるおしろいの香を味ひながら、そのおしろいの香の染みついてゐる自分の情緒を、何か彼にか浮氣つぽく淺し込んで、我れと我が身の細に自分の心をやつしてゐる。

どうしても書かなければならないものが、どうしても書けない〳〵と云ふ焦れた日にも、この女作者はお粧りをしてゐる。また、鏡臺の前に坐つておしろいを溶いてる時に限つて、きつと何かしら面白い事を思ひ付くのが癖になつてゐるからなのでもあつた。おしろいが水に溶けて冷たく指の端に觸れる時、何かしら新らしい心の觸れをこの女作者は感じる事が出來る。さうしてそのおしろいを顏に刷いてゐる内に、だん〳〵と想が編まれてくる――こんな事が能くあるのであつた。この女の書くものは大槪おしろいの中から生れてくるのである。だからいつも白粉の臭みが付いてゐる。

けれどもこの頃はいくら白粉をつけても、何も書く事が出てこない。生地が荒れておしろいの跡が干破れてゐるやうに、ぬるい血汐が肉のなかで渦を描いてるやうなもの懷かしい氣分にもなつてこない。たゞ逆上してゐて眼が充血の爲に金壺まなこの樣に小さくなつて、頰が飴細工の狸のやうにふくらまつてくるばかりである。さうして何所にも正體がない。たゞ書く事がない、書けない、と云ふ事ばかりに心が詰まつてしまつて、耳から頸筋のまはりに蜘蛛の手のやうな細長い爪を持つたやは〳〵した手が、幾本も幾本も取りついてゐる樣なぞつとした取り詰めた思ひに息も絶えさうになつてゐる。それで今朝、この女作者は自分の亭主の前でとうとう泣きだして了つた。

「こんなに困つた事はありやしない。私何所かへ逃げて行きますよ。後であなたが好い樣に云つておいてくれるでせう。私にはもう何うしたつて一枚だつて書けないんだから。」

然うすると、火鉢の前で煙草をのんでゐたこの亭主は暫時返事をしないでゐたが、やがて、

―おれは知らないよ。―

と云つた。それが何う見ても小人らしい空嘯きかただつた。いつも私の事は私がする、お世話樣にやならないと云つてる口は何所へ捨ててきたんだと云ふ樣な、いかにも小つぽけな返報を心に疊んで、さうしてつんとありもしない顋を突き出したやうに女作者に見えた。それを見た女作者は急に自分の顏面の肉が取れてしまつて骨だけ露出したやうな氣がしたが、直ぐにそれは何所までも一本に突つ通つてゆく樣な吹つ切つた聲で、

「何ですつて。」

と云ひながら亭主の方をぢつと見た。

「おれは知らないつて云つたんだ。何だい。どれほどの物を今年になつて書いたんだ。今年一年の間に何百枚のものを書いたんだ。もう書く事がないなんて君は到底駄目だよ。俺に書かせりや今日一日で四五十枚も書いて見せらあ。何だつて書く事があるぢやないか。そこいら中に書く事は轉がつてゐらあ。生活の一角さへ書けばいゝんぢやないか。例へば隣りの家で兄弟喧嘩をして弟が家を横領して兄貴を入れないなんて事だつて直ぐ書ける。女は駄目だよ。十枚か二十枚のものに何百枚と云ふ消しをしてさ。さうしてそれ程の事に十日も十五日もかかつてゐやがる。君は偉い女に違ひない。」

男の聲は時々敷石の上を安齒の下駄で驅け出すやうな頓狂さが交つてほん〳〵と斷ち云ひ續けた。女作者の淚は漸く亢くなつて行くに伴

又二階へだん〳〵に上つて行つたが、泣くどころでなくて、失笑して了つた。
「成程、さうですか。それでもあなたは物を書く人だつたんだから實に恐れ入りますよ。」
女作者はふところ手をして、自分の褄先を蹴りながら座敷の内を飛んで歩いた。泣いた涙が眼のはたに溜つてゐて冷々とする。自分の飛んで歩いてゐる姿が姿見の前を横に切る時にちらりちらりと追羽根のやうに映る。女作者は自分の褄先の色の亂れを樂しむやうに鏡の前に行くとわざ〳〵裾をちらほらさせて眺めてゐたが、ふいと何かしら執拗く苛責めぬいてやり度いやうな氣がして來て、自分の身體のうちの何所かの一部がぐつと收縮してくる樣な自烈度い心持になつた。女作者は亭主の方を向くと、いきなり其の前に齒莖を出した口許を突き付けながら、拳固の中指の眞中の節のところでその額をごり〳〵と小突いた。
亭主は澄ましてゐた。
「ひよつとこ、ひよつとこ、盤若の面だ。」
然う云つても亭主は默つてゐる。女作者は自分の膝頭で亭主の背中を突くと、立膝をしてゐた亭主は、火鉢の前へ横に仆れたが、直ぐに又起き直つて小さな長火鉢へ獅嚙み付くやうに兩手を翳して默つてゐる。
「おい。おい。おい。」
女作者は低い聲で然う云ひながら、自分の亭主の襟先を摑むと今度は後の方へ引き仆した。
「裸體になつちまへ。裸體になつちまへ。」
と云ひながら、羽織も着物も力いつぱいに引き剝がうとした。その手を亭主が押し除けると、女作者はまた男の脣のなかに手を入れて引き裂くやうにその脣を引つ張つたりした。口中の濡れたぬくもりがその指先にぢつと傳はつたとき、この女作者の頭のうちに、自分の身も肉もこの亭主の小指の先きに揉み解されるやうな瞬間のある閃きがついと走つた。と思ふと、女作者は物を摑み挫ぐやうな力でいきなり亭主の頰を抓つた。
こんな女の病的な發作に馴れてゐる亭主は、また始つたと云ふ樣な顏をして根強く默つてゐる。おなかの中では、
「何て悍婦だらう。」
と思ひながら、いつそつとして置くと云ふ樣な口の結びかたをして默つてゐる。
女作者は、もう一度その頭を指で小突いてから、又二階に上つて來た。火鉢の中の紅玉を解かしたやうな火の色が仄かに被はれて、ところどころ[illegible]この[illegible]を開いたやうな崩れの點から陽炎が立つてゐる。[illegible]の花の樣な[illegible]つた一間張りの机の前に坐ると、まるで[illegible]たあとの空を浚ひ盡された後のやうに身體がげんなりしてゐる。さうして無[illegible]と悲しくなつて、涙が[illegible]てきた。
「何と云ふ仕樣のない女だらう。」
泣いてる心の内ではこんな言葉が繰り返された。
ある限りの女の友達の内で、自分ぐらゐくだらない女はないとこの女作者は思つた。殊に二三日前に例にもなく取り澄ましてやつて來たある一人の友達の事が考へられた。その女は近い内に別居結婚をすると云つて行つたのである。たいへんに戀し合つてゐる一人の男と結婚をするまでにはなつたけれども、同棲をしない結婚をするのださうである。さうして一生離れて棲んで戀をし合つて暮らすのだと云ふ事だつた。
「結婚したつて私は自分なんですもの。私は私なんですもの。戀と云つたつてそれは人の爲にする戀ぢやないんですもの。自分の戀なんですもの。自分の戀なんですもの。」
八重齒を見せながらその女はこの女作者に

斯う云つた。女作者はこの女の言葉に壓し付けられて少時は默つてゐた。

「あなたは苦しいの何のと云つてもあきらめて居られる人だからいゝ。心が苦しくつたつて形の上であなたはあきらめてゐる人になつてるんですもの。私は自分つてものをどんな場合にも捨てられない。自分は自分だわ。逢ひ度くなつたら逢ふし、逢ひ度くなければ逢はずにゐるわ。」

「でもあなたは、結婚しようとする人の事を毎日思ひつゞけてゐるでせう。思はずにはゐられないでせう。」

女作者は眼をみはるまでして斯う聞いて見た。この女は單に「えゝ。」と云つて、小指だけを反らせたやうな手つきで蜜柑の皮を剝いてゐた。

「私ぐらゐ自分のない女もない。右から引つ張られゝば右へ寄るし、左にも行くし、何でもいゝ、そんな女でせう。」

「然うでもないでせう。それは今、何かの反動でそんな事を云つていらつしやるんでせう。」

この女は然う云つて蜜柑の一房を口に含んだ。

「私は自分に生きるんだから。自分はやつぱり自分の藝術と云へるわ、自分の藝術に生きると云ふ事は、やつぱり自分に生きるつて事だわ。」

「私は自殺でもしたいほど苦しんでるの。何によつて生きたら好いのか分らないんですもの。私は何かに滅茶苦茶に取り縋らなくつちやゐられない樣な氣がしてゐるのだけれども、何にどう取り縋つたらいゝのか分らない。私は宗教なんて事も考へますけれどもね。然うならいつそその道の人になつて了ひ度いやうな氣もしてゐるんです。」

「私だつて隨分考へたけれども、私はもう自分に生きるより他はないと思つてしまつたの。私は自分に生きるの。」

この女は然う云つて、その戀男の黑いマントを被て歸つて行つた。

一人で生活をすると云ふ事もこの女作者は疾うから考へてゐた。一人になりたい、一人にならうと云ふ事に始終心を突つ突かれてゐる。けれどもこの女作者は一人になり得ないのである。一人の生活に復ると云ふ事がこの女作者には到底出來ない事なのであつた。

「そんなら何故結婚をなすつたの。」

その時も、この女達はこの女作者に斯う云つた。

「あの人は私の初戀なんですもの。」

「ぢや仕方がないわね。」

何か云ひ度い事が殘つてゐるやうな氣がしながら、この女作者は笑ふよりほか仕方がなかつた。

初戀――それはこの女作者の十九歳の時であつた。初戀と云ふよりはこの女作者の淫奔な感情が、ある一人の若い男を捉へたと云ふに過ぎないものであつたかも知れない。けれども、その時のこの若い男によつてふと彈かれた心の蕾の破れが、今も可愛らしくその胸の隅に影を守つてゐるのであつた。この女作者が今の男に對する温みはその影のなかから滲みでてくる一滴の露からであつた。この一滴はこの女作者が生を終へるまで絶えず〳〵滲み出るに違ひない。一人にならうとも、別れてしまはうとも、その一滴の濕ひは男へ對する思ひ出になつて、然うして又その男にひかれて行く愛着のいとぐちになるに違ひない。――

女作者はその女友達にこんな事は云はなかつた。さうしてその女友達が肉と云ふものは絶對に斥ける夫婦と云ふものを作らうとしてゐるらしい未通女氣とでも云ひ度いものに、この女作者の頭はさん〳〵にされた。女友達の戀

の相手がどんな人だかはこの女作者は知らなかつた。新らしい藝術家と云ふ事だけは噂によつて知つてゐた。——もう一年經つたらあの女は私の前に來てどんな事を云ふだらう。女作者は然うも思つたけれども、さも自分に生きると云ふ事をもつともらしく解釋して、強い自分と云ふものを見せようとしてゐたその女の友達の樣子に、おびやかされる程この女作者の今の心は脆い意氣地のないものになつてゐる。——

女作者は我れに返ると、何も書いてない原稿紙に眼をひたと押し當てた。何か書かなければならない。何を書かう。・・・・

「君は駄目だよ。」

斯う云つた先刻の亭主の言葉がふと胸に浮んだ。何故あの時自分は笑つてしまつたのだらう。いくらあの云ひ草が馬鹿々々しいと云つても、もう少し何か云つてやればよかつたと云ふ樣な反抗がついと湧いてきた。

「駄目な女なら何うなの。」

こんな事を云つて、又突つかゝつて遣り度い氣がしてきた。何でもいゝから自分の感情を五本の指で掻きむしるやうな事が欲しい。もつとあの男を怒らしてやらう。女作者はそんな事も思つた。

どれほど匂ひの濃かい潤ひを吹つかけて見ても、あの男の心は砥石のやうに何所かへその潤ひを直ぐに吸ひ込んでしまつて、さうして乾いた滑らかなおもてを見せるばかりである。

斯う云へばあの男は、

「私はあなたと別れますよ。」

「あゝ。」

と返事をするに違ひない。

「私は矢つ張りあなたが好きだ。」

と云へば、

「然うか。」

と返事をしてゐるやうな男なのである。自分の眼の前を過ぎる一つ〳〵に對しても、自分の心の内に浸み込んでくる一人々々の感情でも、この男は自分と云ふものの上からすべてを辷らせて了つて平氣でゐる。この男の身體のなかはおが屑が入つてゐるのである。生の一つ〳〵を流し込み食へ込むやうな血の脈は切れてゐるのである。女作者は然う思ふと、わざ〳〵下へおりて行つて自分の相手にするのもつまらない氣がした。

けふは時雨が降つてゐる。雨の音は聞えずにたゞ雫の音がはら〳〵と響きを打つてゐる。風のふるへ、障子に紙の隙間を[illegible]つてゐる。雨の降る日に遊びに行く約束した人があつたが、と、この女作者はふと思つたが、その考へは何の興味も起させずに直きとなだらかに消えてしまつた。自分の好きな女優が舞臺の上で大根の膾をこしらへてゐた。あの手が冷たさうに赤くなつてゐた。あの手を握りしめて脣のあたゝかみで暖めてやりたい。——

木乃伊の口紅

一

淋しい風が吹いて來て、一本圖拔けて脊の高い冠のやうな檜葉の突先がひよろ〳〵と風に揺られた。一月初めの夕暮れの空は薄黄色を含んだ濁つた色に曇つて、ペンで描いたやうな裸の梢の間から青磁色をした五重の塔の屋根が現はれてゐた。

みのるは今朝早く何所と云ふ當てもなく仕事を探しに出た良人の行先を思ひながら、ふとこゝろ手をした儘、二階の窓に立つて空を眺めてゐた。横手の壁に汚點のやうな長方形の薄い夕日がぼうと射してゐたが、何時の間にかそれも失くなつて、外は薄暗の力が端から端へと物を消していつた。みのるは夕飯に豆腐を買ふ事を忘れまいと思ひながら下へおりて行くのが物憂くつて、豆腐屋の呼笛の音を聞きながら、二三人家の前を通つて行つた事に氣が付いてゐたけれども下りて行かなかつた。さうして夕暮れの空を眺めてゐた。

晴れた日ならば、上野の森には今頃は紫いろの靄が棚引くのであつた。一日森の梢に親しんでゐた其の日の空が別れる際にいたづらをして、紫いろの息を其所等一面に吹つかけるのであらうと、みのるは然う思つて眺めてゐた。今日の夕方は木も屋根も乾いた色に一つ〳〵凝結して、さうして靜に絡み付いてくる薄暗の影にかくれて行つた。みのるは其れを淋しい景色に思ひしみながら、目を下に向けると、丁度裏の琴の師匠の家の格子戸から外へ出て來た娘が、みのるの顏を見上げながら微笑をして頭を下げた。みのるはこの娘を見る度に、去年の夏、夕立のした日の暮れ方に自分が良人の肩に手をかけて二人して森の方を眺めてゐたところを、この娘に見られた時の羞恥を思ひ出した。今もその追憶が娘の微笑の影と一所に自分の胸に閃いたので、みのるは何所となく小娘らしい所作で辭儀を返した。さうして直ぐぱた〳〵と戸を繰つて下へおりて來た。豆腐屋の呼笛が何所か往來の方で聞えてはゐたけれども、もう此邊までは來なくなつた。みのるは下の座敷の雨戸もすつかりと閉めて、茶の間の電氣をひねつてから門のところへ出て見た。

眼の前の共同墓地に新らしい墓標が二三本殖えてゐた。墓地を片側にして角の銀杏の木まで一筋の銀紙をはりふさげたやうな白々とした小路には人の影もなかつた。肋骨の見える痩せた飼犬が夕暮れのおぼろな影に石膏のやうな色を見せて、小枝を咬へながら驅け廻つて遊んでゐた。さうして良人の歸つて來る方をぢつと見詰めてゐるみのるの足の下に寄つてくると、犬はみのると同じやうな向きに坐つて、地面の上に微に尻尾の先きを振りながら遠い銀杏の木の方を見守つた。

「メエイ。」

みのるは袖の下になつてゐる犬の頭を見下しながら低い聲で呼んだ。呼ばれた犬は凝としたまゝでその顏だけを仰向かせてみのるを見詰めたが、直ぐその顏を斜にして、生きたものゝ物音は一切立消えてゆく靜まり返つた周圍から何かの神祕な物音に觸れようとする樣にその小さい耳を動かした。無數の死を築く墓地の方からは、人間の毛髮の一本々々を根元から吹きほじつて

行くやうな冷たい風が吹いて來た。自分の前に[illegible]はつてゐる小路の[illegible]を[illegible]め左へ[illegible]つてゐたみのるは、二三軒先きの下宿屋の軒燈が蒼白い世界にたつた一つ光りを籠めてゐるやうな淋しい灯影ばかりを心に殘して内へ入つた。

義男が歸つて來た時はぼら／＼した小雨が降り始めてゐた。普通よりも小さい義男の頭と、釣合ひのとれない西洋で仕立てた肩幅の大きな洋服の肩をみのるの方に向けて、義男は濡れた靴を脱いだ。濡れた毛を撫で上げながら明るい茶の間へはひつて來た義男は、その儘奧の座敷まで通つてしまつて、其所で抱へてゐた風呂敷包みと一所に自分の身體も抛り出すやうに横になつた。

「駄目。駄目。何所へ行つても原稿は賣れなかつた。」

「いゝわ。仕方がないわ。」

みのるは義男が風呂敷包みを持つて歸つて來たので、きつと駄目だつたのだと思つてゐた。何時までも歩きまはつてゐた[illegible]が、みのるには雨に迷つた小雀のやうに可哀想に思はれた。

「お腹は？」

「何も食べないんだ。何軒本屋を歩いたらう。」

義男は腹這ひになつて枕に顔を押付けてゐるので、その聲が物に包まれてゐるやうにみのるに聞えた。

義男が居ない間に、みのるは一人して箸を取る氣になれないので、今日も外へ出てゐた義男と同じやうに何も食べずにゐた。それで義男の言葉を聞くと急にみのるは食事と云ふ事にいつぱいの樂しみをつながれて臺所へ出て行つて働き始めた。膳の支度が出來るまで義男は今の樣子の儘で動かなかつた。

二

「僕は到底駄目な人間だね。僕にやとても[illegible]を養つてゆく力はないよ。」

默つて食事を濟ましてしまつた義男は、箸をおくと然う云つて又横になつた。其れに返事をしなかつたみのるは、膳を片付けてしまふと簞笥の前に行つて抽斗から考へ／＼いろ／＼なものを引出して其所に重ねた。

「おい。行つてくるの」

「えゝ。だつて何うする事も出來ないもの。」

みのるは包みを拵へてから、平常着の上へコートを着て義男の枕許で[illegible]の紐を結んだ。

「ぢや行つてきます。一人だつていゝでせう。淋しかないでせう。」

みのるは[illegible]いて義男の顔を[illegible]いて、義男の[illegible]い顔は冷たかつた。

「僕も一所に行く。」

「おや着物を着代へなくちや。[illegible]をかしいから。」

義男が洋服を脱いでゐる間、みのるは鏡の前へ行つて、身仕舞をしてくると大きい包みを抱へて立つて居た。さうして自分一人なら車で行つて來てしまふのに、この人と一所に雨の中を歩かなければならないと思つたが、口に出しては何も云はなかつた。

みのるは輕い包みを片手に抱へたまゝ戸締りをしたり、鬮から傘を下したりした。包みが邪魔になると、其れを座敷の眞中に置き放しにして來て、在所を忘れて又彼方此方を探したりした。

二人は一本づゝ傘を手にして臺所の木戸から表に廻つた。

「留守番をしてゐるんだよ。お土産を買つて來て上げるからね。」

雨のぴしよ／＼と雫を切らしてゐる暗い庭の隅に、犬の白い姿を見付けるとみのるは聲をかけた。犬は二人して外に出る時はいつも家の中

に閉ぢ籠められておくことに馴らされてゐた。怜悧な小犬は二人の出て行く物音に樣子を覺つて逐ひ籠められないうちに自分から緣の下にもぐり込まうとしてゐるのであつた。

門をしめて外へ出てからも、みのるはひつそりとしてゐる犬の樣子がいつまでも氣に掛つて忘られなかつた。少し歩いてくると義男は氣が付いたやうにみのるの手から包みを取らうとした。

「持つてつてやるよ。」

雨の停車場は遲れた電車を待合せる人が多かつた。つい今しがた降り出した雨だけれども、土も木も人の着物も一樣に濕々した濡れた匂ひを含んで、冷たい空氣の底にひそかに響きを打つてゐた。みのるは包みを外套の下に抱へてゐる義男を遠くに放して、その傍に寄らずにゐた。電車に乘つてからも二人は落魄した境涯にあるやうな自分々々を絶えず心の中で眺め合ひながら、多くの他人の眼の集まつた灯の明るい電車の中でこの夫婦といふ絲のある顏と顏を殊更合せる事を避けてゐた。みのるは時々義男の外套の下から風呂敷包みの覗いて出てゐるのを見た。前の狹い外套の裾は膝の前で窮屈さうに開れてゐた。みのるは顏を背向けるとその見窄らしい義男の姿を心に描いて電車の外の雨に濡れてゐる灯を見詰めてゐた。

自分を憫れんでゐるやうな睫毛の瞬きが、ふるへて落ちる傘の雫の蔭にちら〳〵しながら、みのるは仲町のある横町から出て來た。角の商店の明りの前に洋傘を眞つ直ぐにして立つて待つてゐた義男の傍に來た時、みのるの顏は何所となく囁き笑ひをしてゐた。

「うまくいつた？」

「大丈夫よ。」

嵩張つた包みが二人の間から取れて、輕い紙幣が女のコートの衣囊に殘つたといふ事が、二人を浮世の人間並みらしい感じに戻らせた。つい眼の前をのろ〳〵と横切つて行く雫を垂らした馬鹿氣て大きな電車を遣り過す間、今まで何所かへ押しやられてゐた二人の間の親しみの義務を、この間にお互の中に取り戻しておかなくてはならないと云ふ樣な顏付で、みのるは男の顏を見詰めてわざと笑つた。

「なんでもいゝや」

義男も腮の先きを片手で擦りながら笑つて云つた。けれども義男の眼にはみのるの笑顏が底を含んでるやうな鋭い影を走らしてゐたと思つていやな氣がしたのであつた。

「寒くつて、何か飮まなくちや堪らないわ。」

みのるは義男の先きになつて歩いた。向ら側を見ると何の店先も雨に曇つて灯が濡れしほたれてゐた。番傘が通りの灯影を遮つてゆく――泥濘の路に人の下駄の跡や、車の轍の跡をぼちぼちと光りを帶んだはねが飛んでゐた。

二人は區役所の前の小さい洋食屋へ入つて行つた。

室には一人も客はなかつた。鏡の前に行つて顏を映して見たみのるは、義男に呼ばれて暖爐の前に椅子を突き合せながら手をあぶつた。みのるはこんな時義男がいぢけきつて、自分の貧しさをどん底の零落において情なく眺める癖のある事を知つてゐた。からつぽの樣な瞼を皺つかして、頰の肉にだらりとした曲線を描きながらぼんやりと暖爐の火を見詰めてゐる義男の身體を、みのるは自分の肩でわざと押し轉がす樣に突いた。さうして義男の顏を横に見ながら、

「見つともない風をするもんぢやないわ。」

と云つて笑つた。義男は自分の見窄らしさをからかつてゐる樣な女の態度に反感を持つて默つてゐた。こんな場合にも自分だけは見窄らしい風はしまいといふ樣に自惚〳〵しい張り氣を作

つて、自分の情緒を臙脂のやうに彩らせようとしてゐる女の心持がいやであつた。義男はふと、みのると一所になる前まで僅かの間同棲して暮らした商賣上りのある女の事を思ひだした。その女は毎晩男の爲に酌の相手こそはしたけれども、貧しい時には同じ樣に二人の上を悲しんで、さうして仕事に疲れた義男を殆んど自分の涙で拭つてくれるやうな優しみを持つてゐた。浮いた稼業をしてゐた女だけれども、みのるの樣に直きと、

「何うにかなるわ。」

と云ふ樣な捨鉢な事は云つた事がなかつた。

「どうしたの。默つて。」

みのるは自分の身體をゆら／＼と搖らつかせながら、其の動搖のあふりを義男の肩に打つ突けては笑つた。

「僕は今日不愉快な事があるんだ。」

義男は暖爐の前に背を屈めながら斯う云つた。

「なんなの。」

義男の言葉に鬱した調子を交ぜてゐたのに反して、みのるの返事は何所までも紅の付いた色氣を持つて浮いてゐた。

「××にね、僕の作の評が出てゐたんだ。」

「なんだつて。」

「陳腐で今頃こんなものを持ち出す氣が知れないつて云ふのだ。」

みのるは聲を出して笑つた。

「仕方がないわね。」

「仕方がない？」

義男は場所も思はずに大きい聲を出してみのるの顏を睨んだ。みのるは默つて後を振り返つたが、人のゐない室には斜に見渡したみのるの眼に食卓の白いきれが靡いて見えたばかりであつた。さうして、それ／＼に食卓の上に位置を守つてゐる玻璃器にうつつた灯の光りが、みのるの今何か考へてゐる心の奥に潛かに意を寄せてゐる微笑の影のやうにみのるに見えた。みのるは顏を眞正面に返すと一人で又笑つた。

「君も然う思つてるんだね。」

「然うだわ。」

義男の腫れぼつたい瞼を一層縮まらした眼と、みのるの薄い瞼をぴんと張つた眼とが長い間見合つてゐた。

みのるはその作を原稿で讀んだ時、

「おもしろいわ。結構だわ。」

と云つて義男の手に返したのであつた。義男が自分の仕事に自分だけの價値を感じてるだけ、みのるも相應に自分の仕事に心を寄せてゐるものと思つてゐた。それが急に冷淡な調子で、世間の侮蔑とその心の中を鳴り合せてゐる樣な餘所々々しい態度を、みのるが見せたと云ふ事が義男には思ひがけなかつた。經濟の苦しみに對する義男への輕薄な女の侮蔑が、こんなところにもその迸りを見せたものとしきや義男には解されなかつた。

「君は隨分同情のない事を云ふ人だね。」

しばらくして斯う云つた義男の眼は眞つ赤になつてゐた。給仕が持つて來た皿のものをみのるは身體を返して受取りながら何も云はなかつた。

三

「君はそんなに僕を下らない人間だと思つてゐるんだね。」

二人は停車場から出ると、眞つ闇な坂を何か云ひ合ひながら歩いてゐた。硝子に雨の雫を傳はらしてゐる街燈の灯はまるで暗い人世の隅つこに泣きそべつてゐる二人の影のやうに見えてゐた。

二人が生活の爲の職業も見付からず、文學者としての自分の小さい權威も、何年か間の世

聞との約束からだん〳〵紛れて了つた事が義男にはいくら考へても情なかつた。さうして自分の多年の仕事に背向いてゆく世間が憎いと一所に、その背向いた中の一人がみのるだつたと云ふ事にも腹が立つた。一人が一人に向つて石を抛てば相手の女は抛つた方へその心を媚びさせて行くのだと思ふと、義男はあらゆる言葉で眼の前の女を罵り盡しても足りない氣がした。義男はさつきのみのるの冷笑がその胸の眞中を鋭い齒と齒の間にしつかりと咬へ込んでる樣に離れなかつた。

「君はよく〳〵そんな下らない人間と一所にゐられるね。價値のない男をよく自分の良人だなんて云つてゐられるね。馬鹿にしてる男のまへでよく笑つた顏をして澄ましてゐられる。君は賣女より淫蕩な女だ。」

義男は斯う言ひ續けてずん〳〵歩いて行つた。みのるは默つて後から隨いて行つた。みのるの着物の裾はすつかり濡れて、足袋と下駄の踵のうしろにひつたり密着いては歩行のあがきを邪魔してゐた。早い足の義男にはとても追ひ付く事が出來なかつた。

漸くみのるが家内にはひつて行つた時は、もう義男は小さい長火鉢の前に横になつてゐた。

みのるは買つて來た小さいパンを袋から出して、土間の中まで追つて來たメエイに投つて投げてやりながら、態といつまでも明りのついた義男の方を向かずにゐた。

「おい。」

義男は鋭い聲でみのるを呼んだ。

「なに。」

然う云つてからみのるは小犬を撫でたり、

「一人ぼつちで淋しかつたかい。」

と話をしたりして其所から入つてこなかつた。義男はいきなり立つてくると足を上げてみのるの膝の上に頭を擡せてゐた犬の横腹を蹴つた。

「外へ出してしまへ。」

義男はさも命令の力を顏の筋肉にでも集めてるやうに、「出せ」と云ふ意味を示すやうな頤の突き出しかたをすると、その儘其所に突つ立つてゐた。小犬は蹴られた義男の足の下まで直ぐ這ひ寄つてきて、さうして足袋の先きに齒を當てながらじやれ付かうとした。

「あつちへおいで。」

みのるは小犬の頸輪を摑むと、自分の手許まで一度引寄せてから、雨の降つてる格子の外へ抛り付ける樣に引つ張りだした。さうして戸を締めて内へ入つてくると舊のやうに火鉢の前に寢轉んでゐた義男の前に坐つて、涙と一所に突き上つてくる呼吸を唇を堅く結んで押へてゐる樣な表情をしてその顏を仰向かしてゐた。

「別れてしまはうぢやないか。」

義男は然う云つて仰向になつた。

放縱な血を盛つた重いこの女の身體が、この先き何十年と云ふ長い間を自分の脆弱な腕の先きに纏つて暮らすのかと思ふと、義男はたまらなかつた。結婚してからの一年近くのたどたどしい生活の中を女の眞實をもつた優しい言葉に彩られた事は一度もなかつたと思つた。振り返つて見ると、その貧しい生活の中心には、いつもみだらな血で印を刻した女のだらけた笑ひ顏ばかりが色を鮮明にしてゐた。さうして柔らかい肉をもつた女の身體がいつも自分の眼の前にある匂ひを含んでのさ〳〵してゐた。

「僕見たいなものにくつついてゐたつて、君は何うする事も出來やしないよ。僕には女房を養つてゆくだけの力はない。自分だけを養ふ力もないんだから。」

「知つてるわ。」

みのるは、はつきりと斯う云つた。唇を開くとその眼から涙があふれた。

ぢや、別れようぢやないか。今の内に別れてしまつた方がお互の爲だ。」

「私は私で働きます。その内に。」

二人は暫時だまつた。

この家の前の共同墓地の中から、夜になると人の生を呪ひ始める怨念のさゝやきが、雨を通して傳はつてくる樣な神經的のおびえがふと默つた二人の間に通つた。

「働くつて何をするんだい。君はもう駄目ぢやないか。君こそ僕よりも脈がない。」

義男は斯う云つてから、みのると同じ時代に同じやうな文藝の仕事を始めた他の女たちを擧げて、さうして現在の藝術の世界を今も花やかに飾つてるその女たちを賞めた。

「君は出來ないのさ。僕が陳ければ君だつて陳いんだから。」

みのるは默つて泣いてゐた。不仕合せに藝術の世界に生れ合せてきた天分のない一人の男と女が、それにも見捨てられて、さうして窮迫した生活の底に疲れた心と心を背中合せに凭れあつてゐる樣な自分たちを思ふと泣かずにはゐられなかつた。

「君は何を泣いてるんだ。」

「だつて悲しくなるぢやありませんか。復讐をするわ。あなたの爲に私は世間に復讐するわ。きつとだから。」

みのるは泣きながら斯う云つた。

「そんな事が當てになるもんか。働くなら今から働きたまへ。こんな意氣地のない良人の手で遊んでるのは第一君の沽券が下る。君が出來ると云ふ自信があるなら、君の爲に働いた方がいゝ。」

「今は働けないわ。時機がこなけりや。そりや無理ぢやありませんか。」

みのるは涙に光つてる眼を上げて義男の顏を見た。義男の見定められない深い奥にいつかしら一人で突き入つて行く時があるのだと云ふ樣な氣勢が、その眼の底に現はれてゐるのを見て取ると、義男の胸には又反感が起つた。

「生意氣を云つたつて駄目だよ。何を云つたつて實際になつて現はれてこないぢやないか。これよりや別れてしまつた方がいゝ。」

義男は打ち切るやうに斯う云ふと奥の座敷へ自分で寢床をこしらへに立つて行つた。

みのるは男の動く樣子を此方から默つて見てゐた。義男は片手で戸棚から夜着を引き下すと、それを斜つかけに摺り延ばして、着た儘の服裝でその中にもぐり込んで了つた。その冷たさうな夜着の褄を眺めてゐたみのるには、自分たちが火の氣もないところで長い間云ひ爭つてゐた事にふと氣が付いて急に寒くなつたけれども、やつぱり懷手をした儘で冷えてきた足の先きを着物の褄にくるみながら、いつまでも唐紙のところに寄つかゝつてゐた。さうして兎もすると、男が自分一人の力だけでは到底持ちきれない生活の苦しさから、女をその手から彈きださうと考へてゐる中を、からして縋り付いてゐなければならない自分と云ふものを考へた時、みのるの眼には又新らしい涙が浮んだ。

義男の力が、みのるの今まで考へてゐた男と云ふものの力の、層にしたならその一層にも足りない事をみのるは知つてゐた。その頼りない男の力にいつまでも取り縋つてはゐたくなかつた。自分も何かしなければならないと云ふ取りつめた考へによく迫られた。けれどもみのるは何も働く事が出來なかつた。義男が今みのるに云つた樣に、義男の前にみのるは何も爲て見せるだけの力量を持つてゐなかつた。自分の内臟を嚙み挫いでもやり度いほどの口惜しさばかりはあつても、みのるは何を爲る事も出來なかつた。みのるは矢つ張りこの力のない男の手で

養つてもらはなければならなかつた。

　みのるは溜息をしながら立ち上ると義男の寢床の方へづか／＼と歩いて行つた。さうして其の夜着を右の手を出して捲れ退けた。

「私も寢るんですから、夜具を下さい。」

二人の仲には一組の夜のものしきや無かつた。義男はその聲を聞くと直ぐに起きて枕許の眼鏡を探してゐたが、寢床を離れる時に、

「寢たまへ。」

と云つて文案の間の方へ出て行つた。その男の後を少時見てゐたみのるは丸まつてゐる樣な蒲團を丁寧に敷き直してから、自分の枕を持つて來てその中にはひつた。

　みのるは床に入つてから、締りのない生一本の男の心と、細工に富んだねつちりした女の心とがいつも食ひ違つて、さうして毎日お互を突つ突き合ふ樣な爭ひの絶えた事のない日を振り返つて見た。そこには、自分の紅總のやうに亂れた時きの感情を、その上にも渡してくれるなつかしい男の心と云ふものを見付け出す事が出來なかつた。

四

　義男がやつとある雜誌に就いたのは櫻の咲く頃であつた。自分たちの生活の資料を得る爲に瘦せた力のない身體を都會の眞中まで運んでゆく義男の姿を、みのるは小犬を連れて毎朝停車場まで送つて行つた。時にはその電車の窓へ向けて、戀人のやうに女の脣からキスを送る白い指先きが、温い日光の影を遮る事もあつた。みのるは小犬に話しかけながら墓地を拔けて歸つてくるのが常だつた。さうして二階の窓を開け放つて、子供の爪の先きが人の肉體をこそ／＼と掻きおろしてくる樣なきつい温さを含んだ日光に額をさらしながら、みのるは一日机を前にして暮らした。昔からみのるの思想の上に流れ込んでくる新らしい文字も、みのるは自分一人して味ふ時が多かつた。さうして頁から頁への藝術の匂ひの滴つた種々な場景が、とりとめのない憧憬の色に染み絹のやうに萎えしぼんだみのるの心を更に遠く幻影の世界に導いてゆく時、みのるは興奮して、その頰を一寸傷つけても血の流れさうな逆上した顏をして、さうして墓地の中を歩き廻つた。袖にさはつた莢の小枝の先きにも心を惹かれるほど、みのるの心は何も彼も懷かしくなつて涙が溢れた。無暗と騷ぎ立つ感情の押へやうもなくなつて、誰れとも知らない墓場の石にその額を押し付けた事もあつた。ぬきんでた樣な青い松と、むらがつてる樣な咲き亂れた櫻と、夕暮れの空の濃い隈をいろどつてゐる天王寺のあたりを、みのるは涙を溜めながら行つたり來たりした。

　ある晩二人は上野の山をぶら／＼と歩いてゐた。櫻の白い夜の空は淡黄色に晴れてゐた。森の中の灯は醉ひにかすんだ美しい女の眼のやうに、おぼろな花の間に華やかな光りを目交ぜしてゐた。

「いゝ晩だわね。」

　みのるは然う云つて、思ふさま身振りをして見せると云ふ樣な身體付をしてはしやいで歩いてゐた。この山の森の中にそつくり籠められてゐた幾千人の戀のさゝやきが、春になつて櫻が咲くと、靜な山の彼方此方から櫻の花片の一つ一つにその優しい餘韻を傳はらせて囁いてゐると思つた時に、みのるの胸は微かに慄へた。みのるは天蓋のやうに枝を低く差し伸べた櫻の木の下に、をり／＼雨袖をひろげて立つて見たりした。さうして花の匂ひに交つたコートの古い香水の匂ひを、みのるはなつかしいものゝ息に觸れるやうに思ひながら、兎もすると袂などへ

もなく消えさうになる香を一足々々と追つてゐた。

義男は義男で、堅い腕組みをして素つ氣つない顔をしながらみのると離れて、ぽつ〳〵と歩いてゐた。義男の頭について廻つてゐる貧乏と云ふ觀念が、夜の花の香を逍遙しても何の興味も起らせなかつた。長い間の窮迫に外に出る着物の融通もつかなかつたみのるは、平生着の上にコートだけを引つかけて歩いてゐた。その貧しいみのるの姿を後から眺めた時の義男の眼には、かうした舞臺ですべてを忘れてはしやいでゐるみのるの樣子は、醜さを背景にした馬鹿馬鹿しさであつた。

「もう歸らうぢやないか。」

義男は斯う云つては足をとめた。二人は環のやうに取りめぐつてゐる池の向うの灯を、山の上から眺めながら少しの間立つてゐた。その灯がさゞめいてるのかと思はれる樣な遠い三味線の響きが、二人の胸をそはつかした。みのるは不圖、久し振りな柔らかい着物の裾の重みの事を思つて戀しかつた。みのるの東下駄の先きでさばいてゐた裾はさば〳〵として寒かつた。

「吉原で懇親會をやるんださうだ。」

義男は斯う云つて歩きだした。明りの色が空を薄赤く染めてゐる廣小路の方を後にして、二人は谷中の奥へ足を向け直した。遠い町で奏でゝゐる樂隊の騒々しい音が山の冷えた空氣に統一されて二人の耳許を觀世水のやうにゆるく襲つては櫻の中に流れて行つた。みのるの胸には春と云ふ陽氣さがいつぱいに溢れた。さうしてこの山の外に、春の晩に醉ひ浮かれた賑やかな人々のどよめきの世界があるのだと思つた。その中に踏み入つて行く事の出來ない自分の足許を見た時にみのるは何とも云へず寂しくなつた。

「どうかして一日人間らしくなつて遊びまはつて見たいもんだわね。」

みのるは斯う云はうとして義男の方を見た時に、丁度二人の傍を三保の松原を走らせた天の羽車のやうな靜さで、一臺の車が通つて行つた。薄暗い壁に貼りつけた錦繪を覗いて見るやうに、幌の横から紅の濃い友禪模樣の美しい色が二人の眼を遮つていつた。さうして春の驕りを包んだ車の幌は、唯ゆら〳〵と何時までも二人の眼の前から消えなかつた。

みのるは其れ限り何も云はずにゐた。默つてゐる男が今どんな夢の中にその心のすべてを解かしてゐるのだらうかと云ふ事を考へながら、みのるはいつまでも默つて歩いてゐた。

五

義男にもみのるにも恩の深い師匠の大人が遂に亡くなつたと云ふ知らせが二人の許にとゞいたのは、四月の末のある日だつた

義男が一張羅の洋服で出てしまふと、仲町から自分たちの衣服を取り出してくるだけの豫算を立てゝゐたみのるは、何うにもその融通の出來ない見極めをつけると小石川の友達のところへでも行つてくるより外仕方がないと思つた。みのるは好い口實を作る事を考へながら出て行つた。

友達の家の塀際には咲き揃つた櫻が何本か並んで家の富裕を誇るやうに往來の方に枝を垂れてゐた。みのるは其家の主人の應接室で久し振りな顔を友達と合せた。みのるには自分が借りるのだと云ふ事が何うしても云へなかつた。一人身ならば自分が借りると云へるのだけれども、一家を持つてるものが主人の面目を考へても、そんな貧しい事は云はれるものではないと云ふ考へがみのるの頭の中を行つたり來たりしてゐた。

利口な女達は人の悪い臆測は女の嗜みではないと云ふ様なおとなしい笑顔を作つて、みのるの手から他の知人へ貸すと云ふのを眞に受けたらしい様子を示しながら、一襲ねの紋付を出して來た。

「お葬式には黒でなくちやいけないけれど、生憎私には黒がないから。」

女達の出した紋付は薄い小豆色だつた。裾には小蝶の縫ひがあつた。

その日は雨が降つてゐた。みのるは白木蓮の花を持つて、吾妻橋の渡船場から船に乗つた。船が岸を離れた時のゆるやかな心の辷りの感じと一所に、みのるの胸には六七年前の追懐の影が射してゐた。船の中からみのるは思ひ出の多い堤を見た。櫻時分の雨の土堤にはなくてならない背景の一つの様に、茶屋の葭簀が濡れしよぼれた淋しい姿を曝してゐた。さうして梳つたやうな細い雨の足が土堤から川水の上を平面にさつと撫つてゐた。みのるは又、船が迂曲を打つてはひた〳〵と立つてゆく川水の上に眞つ直ぐに眼を落した。自分の青春はこの川水のさゞなみに何時ともなくじり〳〵と浸し消されてしまつた様な悲しみがそこに映つてゐた。深い思ひを抱いてうつら〳〵と逍遙つた若いみのるの額の上に雫を散らした堤の櫻の花は、今もあゝして咲いてゐた。それがみのるには又誰れかの若い思ひを欺かうとする無残な微笑の影のやうに思はれてそこにも恨みがあつた

言問から上にあがると、昔の涙の名殘りのやうに、櫻の雫がみのるの傘の上に音を立てて振りこぼれた。土堤の中途でみのると同じ行先へ落合はうとする舊い知人の二三人に出逢ひながら、師匠の門を潜つた時は、義男と約束した時間よりもおくれて居た。

中へ入ると人々の混雜が、雨の軒端に陰にしめつたどよみを響かしてゐた。表から戸の開かれる障子の何所も彼所も開け放されて、人の着物の黒や紺が塊り合つて狹い外にその端を垂らしてゐた。裏手の格子戸の内は泥のついた下駄がいつぱいに脱ぎ散らしてあつた。みのるは臺所で見付けた昔馴染の老婢に木蓮を渡してから上り端の座敷の隅にそつと入つて坐つた。そこでは母親に殘された小さい子供たちが多勢の女の手に、悲しさうな言葉で可愛しまれながら抱かれてゐた。總領の娘も其所に交つて、障子の外へ出たり入つたりする人々を眺めてゐた。昔みのるがお手玉を取つたり鞠を突いたりして遊び相手になつた總領の娘は、何年も親しく逢つた事のないみのるの額を見ると、その眼を赤く腫らした蒼い額に笑みを作つて挨拶した。みのるの眼はいつまでもこの娘の姿から離れなかつた。

「この子はあなたの眞似が上手。」

みのるに然う云つて師匠が笑つた時は、まだ四歳ぐらゐの子であつた。みのるの例もするやうに風呂敷包みを持つて、氣取つたお辭儀をしてから、

「これはみのるたんだよ。」

と云つてみんなを笑はせた。幼い時から高い鼻の上の方の兩端へ幾つも皺が出る様な笑ひかたをする子であつた。みのるはこの娘のこゝまで成長して來たその背丈の蔭に、自分の過つた短い月日を繰り返して見て果敢ない思ひをしずにはゐられなかつた。

「おい。」

みのるは斯う呼ばれて振り返ると、縁側に立つた義男が腮でみのるを招いてゐた。傍へ行くと義男は、

「これから社へ行つて香奠を借りてくるからね。」

と小さい聲で云つた。

「いくらなの。」
「五圓。」
二人は笑ひながら斯う云ひ交すと直ぐ別れた。みのるは其室を出て彼方此方と師匠の姿を求めてゐるうちに、中途の薄暗い内廊下で初めて師匠に出逢つた。顔もはつきりとは見得ないその暗い中を通して、みのるは師匠の涙に濺つた聲を聞いたのであつた。

「あなたの身體はこの頃丈夫ですか。」

師匠はみのるが別れて立たうとする時に斯う云つて尋ねた。みのるは昔の脆い師匠のおもかげを見た様に思つてその返事が涙でふさがつてゐた。

六

その晩みのるは眠れなかつた。いつまでもその胸に思ひ出の綾が色を亂してこんがらかつてゐた。さうしてある春の日に師匠から送られた西洋すみれの花の匂ひが、みのるのその思ひ出に甘くまつはつて懷かしい思ひの血の鳴りを響かしてゐた。

あのなつかしい師匠に離れてからもう何年になるだらうかと思つてみのるは數へて見た。師匠の手をはなれてからもう五年になつた。さうして師匠の慈愛に甘えて一途にその人を慕ひ騒いだ時からはもう八年の月日が經つてゐた。その頃のみのるの生命は、あの師匠の世智に研ぎ澄まされたやうな鋭い光りを含んだ小さい眼のうちにすつかりと包まれてゐたのであつた。その師匠の手をはなれてはみのるの心は何方へも向けどころのないものと思ひ込んでゐた。さうして船で毎日の様に向島まで通つたみのるは行くにも歸るにも渡しの棧橋に立つて、滑かな川水の上に一滴の思ひの血潮を落し〳〵した。

それほどに慕ひ仰いだ師匠の心に背向いて了はねばならない時がみのるの上にも來たのであつた。其れはみのるが實際に生きなければならないと云ふほんたうの生活の上に、その眼が知らず〳〵開けて來た時であつた。毎日師匠の書齋にはひつて書物の古い樟腦の匂ひを嗅ぎながら、いゝ氣になつて遊んでばかりはゐられない時が來たからであつた。さうして師匠の慈愛が、自分のほんたうに生きようとする心の活きを一時でも痲痺らしてゐた事にあさましい呪ひを持つやうな時さへ來た。この師匠の手をはなれなければ自分の前には新らしい途が開けないものの様に思つて、みのるはこの慈愛の深い師匠の傍を去りたい、[illegible]離れた。——それきりその後のみのるの手に、目覺ましいといふ評價を持つた様な新らしい仕事は一つとして出來上つてはゐなかつた。みのるはその頃に自分を蔽ふやうな師匠の慈愛を思ひ出して、いたづらな涙にその胸を潤す日が多かつた。さうして唯一人の人へ對する堅い信念に繋がれて何日も、ゆるがなかつた幼い昔を、世間といふものから常に打ち叩かれてゐる様なこの頃のみのるの心に、戀しく思ひ出さない日と云つてはないくらゐであつた。

今夜は殊にその思ひが深かつた。みのるは今日の、夫人の棺前の讀經を聞きながら泣き崩れる様にして右の手でその顔を掩うてゐた師匠の姿を、いつまでも思つてゐた。義男はその晩通夜に行つて歸つてこなかつた。

「その紋付は何うしたの。」

一足先きに葬式から歸つてゐた義男は、みのるが歸つてくるのを待つてゐて直ぐ斯う聞いた。みのるは今日の式場で義男の縞の洋服がたつた一人目立つてゐた事を考へながら默つて笑つた。

「借りたの。」

うなづいたみのるも、うなづかれた義男も、

同じ様に極りの悪さうな顔をした。こんな時にお互に禮服の一つも手許にないと云ふ事がれいれいとした多くの人の集まつた後では殊に強く感じられてゐた。

「あなたの服裝は困つたわね。」

「まあいゝさ、君さへちやんとしてゐれば。」

義男は然う云つてから、もう一度みのるの借着の姿を見守つた。義男はそれを何所から借りたのかと聞いたけれども、みのるは小石川から借りたとは云はなかつた。舊の學校の友達から然うした外見ない事を爲たと云つたなら、義男は猶輕蔑な思ひをするであらうと思つたからであつた。みのるは自分の許へ親類の樣に出入りしてゐる商人の家の名を云つて、其所から都合して貰つたのだと云つた。さうして、何時も困つてゐるといふ噂のある義男の友人の細君が、ちやんとしてゐた事をみのるは思ひ出して感心した顏をして義男に話した。

「私たちの見たいに困つてゐる人はお友達の中にもないと見えるわ。」

「然うだらう。」

義男は然う云つて着てゐた洋服を脱いだ。さうして少時ズボンの裾を引つくり返して見てから、

「これもこんなになつてしまつた。」

と云ひながらその摺り切れたところをみのるに見せた。秋か春に着るといふ洋服を義男は暑い時も雪の降る時も着なければならなかつた。さうして何か事のある度にこの肩幅の廣い洋服を着てゆく義男の事を思つた時、今日のみのるは例の癖のやうに自分どもの貧しさを一種の冷嘲で打ち消して了ふ譯にはいかなかつた。さんざん悲しみの光景に馴らされてきた其の心から、眞から哀れつぽく自分たちの貧しさを味ふやうな涙がみのるの眼にあふれてきた。

「可哀想に。」

みのるは彼方を向いて、自分も着物を着代へながら然う云つた。世間を相手にして自分たちの窮乏を曝さなければならない樣な羽目になると、二人は斯うしていつか知らず其の手と手を堅く握り合ふやうな親しさを見せ合ふのだとみのるは考へてゐた。

「何うかして君のものだけでも手許へ置かなけりや。」

義男は然う云ひながら入湯に出て行つた。一人になるとみのるは今日の葬列の模樣などが其の眼の前に浮んで來た。花の土堤をその列が長く續いて行く途中で、面かづらを被つて泥濘の中を踊りながら歩いてゐる花見の群れに幾度か出つ會した。さうして醉漢の一人がその列を見送りながら、丁度みのるの乘つてゐた車の傍で、

「皆さんお賑やかな事で。」

と小聲で云つてゐた事などが思ひ出された。みのるは義男が歸つて來たらばそれを話して聞かさうと思つた。柩の前に集まつた母親を失つた小さい人々を見て、みのるもさんざんに泣かされた一人であつたけれども、その悲しみはもう何所かへ消えてゐた。

七

みのるの好きな白百合の花が、座敷の床の間や本箱の上などに絶えず插されてある樣な日になつた。義男の休み日には小犬を連れて二人は王子まで青い畑を眺めながら遠足する事もあつた。紅葉寺の裏手の流れへ犬を抱き入れて二人は石鹼の泡に汚れながらその身體を洗つてやつたりした。流れには山の若楓の若さと日光とが交つて寒天のやうな色をしてゐた。その濡れた小犬を山の上の掛茶屋の柱に繋いで置いて、二人は踏んでも歩けさうな日の下一面の若楓を眺めて半日暮らしたりした。その行き

道にある別宅らしい人の家の前に立つと、その檜葉の立木に包まれた薄鼠塗りの洋館の建物の二階が横向きに見えるのを見上げながら義男は「何も要らないからせめて理想の家だけは建てたい。」といつも云つた。みのるが頻りに髪を弄り始めたのもその頃であつた。みのるは一日置きのやうに池の端の髪結のところまで髪を結ひに行く癖がついた。みのるの用箪笥の小抽斗には油に染んだ緋絞りのてがらの切れが幾つも溜つてゐた。

　こんな日の間にも粘りのない生一本な男の心の調子と、細工に富んだねつちりした女の心の調子とはいつも食ひ違つて、お互同士を突つ突き合ふやうな爭ひの絶えた事はなかつた。女の前にだけ負けまいとする男の見榮と、男の前にだけ負けまいとする女の意地とは、僅の袖の擦り合ひにも縺れだして、お互を打擲し合ふまで罵り交さなければ止まないやうな日はこの二人の間には珍らしくなかつた。みのるの讀んだ書物の上の理解がこの二人に異つた味ひを持たせる時などには、二人は表の通りにまで響ける樣な聲を出して、それが夜の二時であつても三時であつても構はず云ひ爭つた。さうして、終ひに口を閉ぢたみのるが、憫れむやうな嘲冷る樣な光りをその眼に漲らして義男の狹い額をじろ／＼と見始めると、義男は直ぐにその眼を眞つ赤にして、

「生意氣云ふない。君なんぞに何が出來るもんか。」

　斯う云つて土方人足が相手を惡口する時の樣な、人に唾でも吐きかけさうな表情をした。斯うした言葉が時によるとみのるの感情を充らせずにはおかない事があつた。知識の上でこの男が自分の前に負けてゐると云ふ事を誰れの手によつて證明をして貰ふ事が出來ようかと思ふと、みのるは味方のない自分が唯情なかつた。さうして、

「もう一度云つてごらんなさい。」

と云つてみのるは直ぐに手を出して義男の肩を突いた。

「幾度でも云ふさ。君なんぞは駄目だつて云ふんだ。君なんぞに何が分る。」

「何故。どうして。」

　こゝまでくると、みのるは自分の身體の動けなくなるまで男に打擲されなければ默らなかつた。

「あなたが惡いのに何故あやまらない。何故あやまらない。」

　みのるは義男の頭に手を上げて、爭ひでもその頭を下げさせようとしては、男の手で酷い目に逢はされた。

「君はしまひに不具者になつてしまふよ。」

　翌る日になると、義男はみのるの身體に殘つた所々の傷を眺めて斯う云つた。女の軟弱な肉を振り挘るやうに摑み占める時の無殘さが、後になると義男の心に夢の樣に繰り返された。

　それは晝の間に輕い雨の落ちた日であつた。朝早く澤山の洗濯をしたみのるはその身體が疲れて、肉の上に板でも張つてある樣な心持でゐた。軒の近くを煙の樣な優しい白い雲がみのるの心を覗く樣にしては幾度も通つて行つた。初夏の水分を含んだ空氣を透す日光は、縁に立つてゐるみのるの眼の前に色硝子の破片を降り落してゐる樣な美しさを漲らしてゐた。何となく蒸し暑い朝であつた。みのるのセルを着てゐたその肌觸りが汗の中をちく／＼してゐた。

　それが午後になつて雨になつた。みのるは干物を縁に取り入れてから、又縁に立つて雨の降る小さな庭を眺めた。この三坪ばかりの庭には、去年の夏義男が植ゑた紫陽花が眞中に位置を取つてゐるだけだつた。黄楊の木の二三本に

霰のやうなこまかい白い花がいつぱいに咲いてゐるのが、隅の方に貧しくしをらしい裝ひを見せてゐたけれども、一年の内に延びてひろがつた紫陽花の叢がこの庭の土の上には一番に大きかつた。その外には何もなかつた。輕い雨の音はその紫陽花の葉に時々音を立てた。みのるはその音を聞き付けるとふと懷かしくなつて其所に降る雨をいつまでも見詰めてゐた。

義男がいつもの時間に歸つて來た時はもうその雨は止んでゐた。みのるは義男の歸つてからの樣子を見て、その心の奧に何か底を持つてゐる事に氣が付いてゐた。

「おい、君は何うするんだ。」

みのるが夜の膳を平氣で片付けようとした時に義男は斯う聲をかけた。

「何故君は例の仕事をいつまでも始めないんだね。止すつもりなのか。」

其れを聞くとみのるは直ぐに思ひ當つた。

一週間ばかり前に義男は勤め先きから歸つてくると「君の働く事が出來た。」と云つて新聞の切拔きをみのるに見せた事があつた。それは地方のある新聞で其れに懸賞の募集の廣告があつた。みのるが其れ迄に少しづつ書き溜めておいた作のある事を知つてゐた義男は、それにこの規程の分だけを書き足して送つた方が好いと云つてみのるに勸めたのであつた。

「もし當れば一息つける。」

義男は斯う云つた。けれどもみのるは生返事をして今日まで手を付けなかつた。それに義男がその仕事を見出した時はもう締めきりの期日に迫つてしまつた時であつた。その僅の間にみのるにはとても思ふ樣なものは書けないと思つたからであつた。

「何故書かないんだ。」

義男はその口を神經的に尖らかしてみのるに斯う云ひ詰めた。

「そんな賭見たいな事を爲るのはいやだから、だから書かないんです。」

みのるの例の高慢な氣振りがその頰に射したのを義男は見たのであつた。

みのるはその萬一の僥倖によつて、義男が自分の經濟の苦しみを免れようと考へてゐる事に不快を持つてゐた。この男は女を藝術に遊ばせる事は知らないけれども、女の藝術を賭博の樣な方へ導いて行つて働かせる事だけは知つてゐるのだと思ふと、みのるは腹が立つた。

「そんな事に使ふやうな荒れた筆は持つてゐませんから。」

みのるは又斯う云つた。

「生意氣云ふな。」

斯う義男は怒鳴りつけた。女の高慢に對する時の義男の侮蔑は、いつもこの「生意氣云ふな。」であつた。みのるはこの言葉が嫌ひであつた。義男を見詰めてゐたみのるの顏は眞つ蒼になつた。

「君は何と云つた。働くと云つたぢやないか。僕の爲に働くと云つたぢやないか。それは何うしたんだ。」

「働かないとは云ひませんよ。けれども私が今まで含蓄しておいた筆はこんなところに使はうと思つたんぢやないんですからね。あなたが何でも働けつて云ふなら電話の交換局へでも出ませうよ。けれどもそんな賭見たいな事に私の筆を使ふのはいやですから。」

義男は突然、手の傍にあつた煙草盆をみのるに投げ付けた。

「少しも君は我々の生活を愛すつて事を知らないんだ。いやなら止せ。その云ひ草はなんだ。亭主に向つてその云ひ草はなんだ。」

義男は然う云ひながら立ち上つた。

「そんな生活なら何も彼も壞しちまへ。」

義男は自分の足に縋つた體をその儘押返すと、みのるの傍へ寄つて來た。みのるは其の時ほど男の亂暴を恐しく嫌惡した事はなかつた。

「何をするんです。」と云つた絃を張つたやうな細い透明なみのるの聲が、義男の動悸の高い胸の中に食ひ込む樣に近くなつた時に、みのるは有りたけの力をその兩腕に入れて義男の胸を向うへ突き返した。さうしてから、初めてこの男の恐しさから逃れると云ふ樣な心持で、みのるは勝手口の方から表へ驅けて出た。

外はまだ薄暮の光りが全く消えきらずに洋銀の色を流してゐた。殊更な闇がこれから墓場全體を取り繞らうとするその逢魔の蔭にみのるは何時までも佇んでゐた。ぢいんとした淋しさが何所からともなくみのるの耳の傍に集まつて來る中に、障子や襖を蹴破つてゐる樣な氣魂しい物の響きが神經的に傳はつてゐた。

然うして絹針のやうに細く鋭い女の叫喚の聲がその中に交つてゐる樣な氣もした。それが自分の聲のやうであつた。みのるの身體中の血は動いた儘にまだゆら／＼としてゐた。何所かの血管の一部にまだその血が時々どんと烈しい波を打つてゐた。けれどもみのるは自分の心の顏を一つ／＼調べて見る樣なはつきりした氣分で、自分の頭の上に壓しかゝつてくる闇の力の下に俯向いてしばらく考へてゐた。さうして、その清水に浸つてゐる樣な明らかな頭腦の中に、

「自分どもの生活を愛する事を知らない。」と云つた義男の言葉がさま／＼な意味を含んでいつまでも響いてゐた。

みのるは全く男の生活を愛さない女だつた。その代り義男はちつとも女の藝術を愛する事を知らなかつた。

みのるはまだ／＼、男と一所の窮乏な生活の爲に厭な思ひをして質屋の軒さへ潜るけれども、義男は女の好む藝術の爲に新らしい書物一つ供給ふ事を知らなかつた。義男は小さな自分だけの尊大を女によつて傷つけられまい爲に、女が新らしい知識を得ようと勉める傍でわざとそれに恥ぢを與へる樣な事さへした。新らしい藝術にあこがれてゐる女の心の上へ、猶その上にも滴るやうな艶味を持たせてやる事を知らない義男は、たゞ自分の不足な力だけを女の手で物質的に補はせさへすればそれで滿足してゐられる樣な男なのだと云ふ事が、みのるの心に執念く繰り返された。

「私があなたの生活を愛さないと云ふなら、あなたに私の藝術を愛さないと云はなければならない。」

先刻義男に斯う云つてやるのだつたと思つた時に、みのるの眼には血がにじんで來るやうに思つた。

男の生活を愛する事を知らない女と、女の藝術を愛する事を知らない男と、其れは到底一所のものではなかつた。義男の身にしたら、自分の生活を愛してくれない女とは融合のない事かも知れない。毎日出て行く義男の蟇口の中に、小さい銀貨が二つ三つより以上にはひつてゐた事もなかつた。それを眼の前に見て上の空な顏をしてゐる事の出來るみのるは、義男に取つては一生を手を繫いでゆく伴侶の女とは思ひやらも無い事かも知れなかつた。

「二人は矢つ張り別れなければいけないのだ。」

みのるは然う思ひながら步き出した。初めて、凝結してゐた瞳子の底から解けて流れてくる樣な淚がみのるの頰にしみ／＼と傳はつてきた。

みのるの步いてゆく前後には、もう動きのとれない樣な暗闇がいつぱいに押寄せてゐた。その顏のまはりには蚊の群れが弱い聲を集めて哀

り卷いてゐた。振り返ると、その闇の中に其方此方に突つ立つてゐる石塔の頭が、うよ〳〵とみのるの方へ居膝り寄つてくる樣な幽な幻影を搖がしてゐた。みのるは自分一人この暗い寂しい中に取殘されてゐた氣がして早足に墓地を繞つてゐる茨垣の外に出て來た。其邊をうろついてゐたメエイが其所へ現はれたみのるの姿を見付けると飛んで來てみのるの前に其の顏を仰向かしながら、身體ぐるみに尾を振つて立つた。突然この小犬の姿を見たみのるは、この世界に自分を思つてくれるたつた一つの物の影を捉へたやうに思つて、その犬の身體を抱いてやらずにはゐられなかつた。

「有難うよ。」

小犬に向つてから云つて了ふとみのるの眼から大涙がみなぎつて落ちてきた。みのるは生れて初めて泣き〳〵外を歩くと云ふ樣な思ひを味ひながら、右の袂で顏を拭きながら家の方へ歩いて行つた。

八

みのるは外に立つて暫時家の中の樣子を窺つてから入つて行つた。茶の間の電氣を點けて其邊を見まはすと、其所には先刻義男が投げ付けた煙草盆の灰のこぼれと、蹴散らされた膳の上のものとが、汚らしく狼藉をしてゐるばかりで義男はゐなかつた。しばらくしてみのるが座敷の汚れを掃除してゐる時に、二階で人の寢返りを打つたやうなどしりとした響きが聞えたので、義男は二階に寢てゐるのだとみのるは思つた。腮の骨の瘦せこけた、頸筋の子供の樣に細い顏と頭を、上の方で組んだ兩肱の中に埋め込んで直な疊の上に寢轉んでゐる義男の姿がこの時のみのるの胸に浮んでゐた。

さうして、みのるの心は其の義男の前にもう脆く負けてゐた。自分が筆を付けると云ふ事が、義男の望む「働き」と云ふ意味になつて、さうして義男を喜ばせる一つになるならそれは何んの造作もない仕事だと云ふ樣な、女らしい氣安さに其の心持が返つてゐた。

長い間世間の上に喘ぎながら今日まで何も掴み得なかつたみのるの心は、いつともなく臆病になつてゐて、然うしてその心の上にもう疲勞の影が射してゐた。みのるは如何程強い張りを持ち始めても、直ぐ曉の星の樣にかうして消えていつた。さうして矢つ張り唯一人の義男の情に縋つて行かなければ生きられない樣な自らの果敢ない悲しみを、みのる自身が傍から眺めてゐる樣な心の態度で自分の身體を男の前に投げ出して了ふのが結局だつた。

みのるは其の翌る日から毎日机に向つて、半分草しかけてあつた或る物語の續きを書き始めた。兎もすると厭になつてみのるは幾度止さうとしたか知れなかつた。少しもそれに氣乘りがしてこなかつた。

今日まで書きかけて机の中に仕舞つておいた作と云ふのは、みのるの氣に入つたものではなかつた。自分の藝が一度踏み入つた境から何うしても脫れる事の出來ない一つの臭味を持つてゐる事をつく〴〵感じながら、とう〳〵筆を投げてしまつた其の書きかけなのであつた。だからみのるは後半を直ぐに續けて行かうとする前に、もつと其の前半を直して見なければならなかつた。みのるの自分の藝に對する正直な心が、自ら打捨つた作を其の儘明るい場所へ持ち出すと云ふ樣な人を食つた考へに中々陷らせなかつた。みのるは何時までもその前半を弄つてゐた。

「僕はいつまで何をしてゐるんだ」

それを見付けた義男は直ぐに斯う云つてみのるの傍に寄つて來た。

「到底駄目だから止すわ。」
「駄目でもいゝからやりたまへ。」
「私は矢つ張り駄目なんだ。」
みのるは然う云つて自分の前の原稿を滅茶苦茶にした。
「こんな事はね、作の好い惡いには由らないんだよ。それは唯君の運一つなんだ。作が駄目でも運さへ好ければうまく行くんだからやつて終ひ給へ。ぐづ〳〵してゐると間に會やしないよ。」
義男はみのるの手から弄り直してる前半を取り上げてしまつた。それを見たみのるは、
「書きさへすればいゝ?」
斯う云ふ意味をその眼にあり〳〵と含まして、義男の顏を眺めた。其の心の底には何となく自暴な氣分が浮いてゐた。唯義男の強ひるだけのものを書き上げて、さうして其れを義男の前に投げ付けてやりさへすれば好いんだと云ふ樣な自暴な氣分だつた。
「私が若し何うしても書かなければあなたは何うするの。」
「書けない事はないから書きたまへ。」
「書けないんです。氣に入らないんです。」
「そんな事はないからさら〳〵と書き流してしまひたまへ。」
「氣に入らないからいやなの。」
「惡い癖だ。そんな事を云つてる暇に二枚でも三枚でも書けるぢやないか。」
義男は日數を數へて見た。規程の紙數までにはまだ二百餘枚もありながら日は僅に二十日にも足りなかつた。義男は何事も一氣に遣つ付ける事の出來ない口ばかり巧者なこの女が、焙豆の豆が顏にぴんと痛く彈きかゝつた樣に癪にさはつて小憎らしくなつた。
「成程、君は駄目な女だ。よし給へ。よし給へ。」
義男は然う云ふと一旦取り上げた原稿を本箱から出してきて、みのるの前にはら〳〵と抛り出した。其の俯向いた眼にいつにもない冷たい蔭が射してゐた。
「止せば何うするの。」
みのるは机に寄つかゝつて頭を右の手で押へながら男の顏を斜に見てゐた。義男の顏は、眼の瞬きと、蒼い顏の筋肉の動きと、脣のをのゝきと、其れがちやんぽんになつて電光をはしらしてゐた。
「別れてしまふばかりさ。」
義男はぽんと女を突き放す樣に斯う云つた。
みのるが何も爲得ないと云ふ見極めを付けると一所に、義男には直ぐ明かな事情を感じずにはゐられなかつた。義男にしては二人の間を繋いでるものは愛着ではなかつた。力であつた。自分に持てない力を相手の女が持ち得るものでなければ一所には居たくなかつた。女の重荷を、殊にみのるの樣な我儘の多い女の重荷を引摺つてゐては、自分の身體がだん〳〵に人生の泥沼の中に沈み込んで行くばかりだと思つた。義男はもうこの女を切り放さなければならなかつた。——斯う云ふ時には例も手強い抵抗をみのるに對して見せ得る男であつた。直ぐにその場からでも何方かがこの家を離れゆくと云ふ氣勢をはつきりと見せ得る男であつた。そこには男が特にみのる一人に對して考へてゐる樣な愛なぞは微塵も挾まれなかつた。
「書くわ。仕方がないもの。」
みのるの眼にはもう涙が浮いてゐた。さうして其邊に取り散らかつた原稿を纒めてゐた。

九

みのるは唯眞驀に物を書いて行つた。自分を鞭打つやうな男の眼が多くの時間みのるの机の前に光つてゐた。みのるは其れを恐れながら無

暗と書いて行つた。蚊帳の中にランプと机とを持ち込んで暫時死んだ様に仰向に仆れてゐてから、急に起き上つて書く事もあつた。朝から夕まで家の中に射し込んでゐる夏の日光を、みのるは彼方此方と逃げ廻りながら隅の壁のところに行つて其の頭をさん／＼打つ突けてから又書き出す事もあつた。

さうして出來上つたのが締切りの最後の日の午後であつた。義男はそれにみのるの名を書き入れてやつて、小包みにしてから自分で郵便局へ持つて行つた。みのるは其の汗になつた薄藍地の浴衣の袂で額を拭ひながらこの十餘日の間の自分を振り返つて見た。男の姿に追ひ使はれた筆の先きには、自分の考へてゐる樣な美しい藝術の影なぞは少しも見られなかつた。唯男の鞭刑を恐れた暗雲の力ばかりであつた。そのやみくもな非藝術な力ばかりで自分の手には何が出來たらう。然う思ふとみのるは失望しずにはゐられなかつた。

それは八月の半ばを過ぎてからであつた。ある朝其の日の新聞の上に、ふとみのるの、心にとまつた記事があつた。みのるは義男が勤めに出て行つてから、家の入口の方へ釘を差しておいて自分も外に出た。さうして廣小路へ來ると其所から江戸川行の電車に乘つた。

色の褪めた明石の單衣を着て、これも色の褪めた紫紺の洋傘を翳したみのるの姿が、しばらくすると、炎天の光りに射られて一帶に白茶けて見える牛込の或る狹い町を迷つてゐた。敷き詰めた小砂利の一つ／＼に兩塗りの下駄が挾まるのでみのるは歩き難くて堪らなかつた。其の度に動悸が打つて汗が腋の下を傳はつた。地面から裾の中へ蒸し込んでくる熱氣と、上から照りつける日光の炎熱とが、みのるの薄い皮膚をじり／＼と刺戟した。みのるの顏は燃えるやうに眞つ赤になつた。

みのるは橋の角の交番で「清月」と云ふ貸席をたづねると、其所から江戸川端の方へ曲つて行つた。清月はその通りの右側にあつた。舊は旗本の邸ででもあつたかと思ふ樣な構造をした古い家であつた。みのるはその式臺のところに立つて、取次に出た女中に小山と云ふ人をたづねた。

みのるは直ぐに奥へ通された。がらんとした廣い座敷に、みのるは庭の方を後にしてこれから逢はうといふ人の出てくるのを待つてゐた。何所も開け放してありながら風が少しも通つてこなかつた。さうして日中の暑熱に何も彼もぢつと息を凝らしてる樣な暑苦しさと靜さが、その赤くなつた疊の隅々に影を潛めてゐた。みのるは半巾で額を抑へながら、せつせと扇子を使つてゐた。

煙草盆を提げながら小作りな男が奥の方から出て來てみのるの前に坐つた。瞳子の黑い睫毛の長い眼が晝寢でも爲てゐた樣にぽつとりと腫れてゐた。よく大阪人に見るやうに物を云ふ時其の口尻に唾を溜める癖があつた。笑ふと女の樣な愛嬌がその小さな顏いつぱいに溢れた。

小山はみのるの名前は知らなかつたけれども義男の名前は知つてゐた。手に持つてるみのるの名刺を弄りながら、小山はみのると話をした。

小山は自分たちの拵へてる劇團に就いて口を切つた。それからこの前の一回の興行はある興行師の手で組織された爲に世間から面白くない誤解を受けたりしたけれども、今度の第二回は酒井や行田と云ふ人の助力のもとに極く藝術的に組織すると云ふ事を長く述べ立てた。さうして、女優は品行の正しい身性のあまり卑しくないものばかりを選むつもりだと云

つた。滑らかな大阪訛が暑い空氣の中に濁りを帶びて、聞いた言葉をなよ〳〵とひゞかしてゐた。

小山は話をしてる間に、少しは分つた事を云ふ女だと云ふ様な顔をして、時々みのるの言葉に調子を乗せて自分の話を進めて行つたりした。

「然う云ふ御熱心なら、一度よく酒井先生とも行田先生とも御相談をいたしまして、其の上で御返事を差上げると云ふことに。多分よろしからうとは思ひますが私一人の考へ通りにも參りませんによつて、あとから端書を差上げると云ふ事にいたしませう。」

みのるは其れで小山に別れを告げて外に出た。

誰れもゐない家の軒に祭の提燈がたつた一つ暑い日蔭の外れに搖れてゐるのを見守りながら、みのるが漸と家へはひつた時は、もう庭の上にも半分ほど蔭ができてゐた。みのるは汗になつた着物も脱がずに開けひろげた座敷の眞中に坐つて何か考へてゐた。

夜になつてみのるは義男と祭禮のある神社へ參詣に出かけた。墓場を片側にした裏町には赤い提燈の灯がところ〳〵に、表の賑やかさを少しちぎつて持つて來た樣な色を浮べてぼんやりと滲んでゐた。その明りの蔭に白い浴衣の女の姿が媚いた袖の靡きを見せて立つてゐた門もあつた。通りに出るといつも寂れた場末の町は夜店の灯と人混みの裾の縺れの目眩しさとで新たな世界が動いてゐた。

二人は人に押返されながら神社の中へ入つて行つた。赤い椀を山に盛つた汁粉の出店の前から横に入ると、四十位の色の黒い女が腕捲りをして大きな聲で人を呼んでる見世物小屋の前に出た。幕が垂れたり上つたりしてゐる前に立つて中を覗くと肩衣をつけた若い女が二人して淨瑠璃でも語つてゐる樣な風をしてゐる半身が見えた。その片々の女は目の覺めるほど美しい女であつた。薄暗い小屋の中から群集の方へ時々投げる眼に、瞳子の流れるやうなたつぷりした表情が動いてゐた。艶もなく胡粉のやうに眞つ白に塗りつけたおしろいが、派手な友禪の着物の胸元に惡毒い色彩を調和させて、猶一層この女を綺麗に見せてゐた。鼻が眞つ直ぐに高くて口許がぽつつりと小さかつた。

「まあ美い女だわね。」

みのるは義男の袖を引つ張つた。

「あれが轆轤つ首だらう。」

義男も[illegible]いて出た。上[illegible]、肩衣をつけた女の身體が[illegible]に出した島田の女の首が人[illegible]を見下してゐる樣な看板がかいてあつた。義男はかうした下等な女藝人の白粉が好きであつた。其の女の顔に義男は心を惹かれながら又歩きだした。

二人は三河島の方を見晴らした崖の掛茶屋の前に廻つて來た。葭簀を張りまはした軒前で鬼灯提燈が下つて、サイダーの瓶の硝子や掻きかけの氷の上に其の灯の色をうつしてゐた。そこで燒栗を買つた義男は其れを食べながら崖の下り口に立つて海のやうに闇い三河島の方を眺めてゐた。この祭禮の境内へ入つてくる人々が絶えず下の方から二人の立つてる前を過つて行つた。

「あなたに相談があるわ。」

みのるは云ひながら、境内の混雜を見捨てて崖から下へおりようとした。

「何だい。」

「もう一度芝居をやらうと思ふの。」

「君が？　へえゝ。」

二人は崖をおりて踏切りを越すと日暮里の方へ歩いて出た。みのるは歩きながら酒井や行田のやらうとしてゐる新劇團へ入るつもりの事

を話した。行田は義男の知つてゐる人だつた。まだ外國から歸つて來たばかりの新らしい脚本家であつた。その人の手に作られた一幕物の脚本を上場する事に定まつてゐるのだが、そのむづかしい女主人公を演る女優がなくつて困つてゐると、晝間小山の云つた事にみのるは望みを繋いでゐた。けれども其所までは話さずに舞臺に出ても好いか惡いかを義男に聞いて見た。義男は默つて燒栗を食べながら歩いてゐた。

義男はまだ結婚しない前にみのるが女優にならうと云つて騒いだ事のあるのは知つてゐた。けれどもどんな技倆がこの女にあるのかは知らなかつた。その頃みのるがある劇團に入つて何か演つた時に一向評判にならなかつたところから考へても、舞臺の上の技巧はあんまり無ささうに思はれた。それにみのるの容貌では舞臺へ出ても引つ立つ筈がないと義男は思つてゐた。外國の美しい女優を見馴れた義男は、この平面な容貌よりも一層醜いみのるが舞臺に立つと云ふ事は、たゞ聞いただけでも恥しい冷笑だとしきや思はれなかつた。

「今になつて何故そんな事を考へたんだね。」

義男は後になつてからみのるに聞いた。

「先から考へてゐたわ。唯好い機會がないから我慢してゐたんだわ。」

義男は舞臺の上のみのるを疑つて中々其れに承知を與へなかつた。

「何故いけないの？」

みのるはもう突つかゝり調子になつてゐた。裸になつた義男は椽側に寢そべつて煙草を呑んでゐた。みのるは其の前にぶつつりと坐つて煮え切らない義男の容態を眺めてゐた。

「そんな悠長な生活ぢやないからな。」

義男は然う云つて考へてゐた。みのるが演劇に手腕を持つてゐて、それで澤山な報酬が得られる仕事とでも云ふのなら宜いけれども、海とも山とも付かない不安な界へ又踏み込んで行つて、結局は何方へ何う向き違つて行くか分らないと云ふ始末を思ふと、義男には却つてお荷物であつた。それに自分が毎日出てゆくある小社會の群れに對しても、それ等の人の惡い仲間たちに舞臺の上の美しくない、而も技藝に拙い女房を見られる事は義男に取つては屈辱であつた。そんな事をみのるが考へてる暇に常收入のある職業を見付けて自分に助力をしてくれる方が義男には滿足だつた。

生活の事も思はずに、斯うして藝術に遊ばう遊ばうとする女の心持が、又何日のやうに憎まれだした。

「君はだまつて書いてゐればいゝぢやないか。」

「何を書くの。」

「書く樣な仕事を見付けるさ。」

「文藝の方ぢやいくら私が考へても世間で認めてくれないぢやありませんか。今度はいゝ時機だからもう一度演藝の方から出て行くわ。私には自信があるんですもの。それに酒井さんや行田さんがステージマネヂヤならきつとやれるわ。」

みのるは眼を輝かして斯う云つた。みのるは實は筆の方に自分ながら愛想をつかしてゐたのであつた。それはこの間の仕事によつて自分で分つたのであつた。ひそかに筆の上に新らしい生命を養ひつゝあるとばかり自負してゐたみのるは、この間の仕事に其れがちつとも現はれてこなかつた事を省みると、自分ながら厭になつてゐた。けれども義男には然うは云はなかつた。何故ならあの時にみのるは義男に向つて「自分の大切な筆をそんな賭見たいな事に使はない」と云つて斷り返したのであつた。其の自分の言葉に對してもみのるには其樣なおめ〳〵

した事は義男の前で云へなかつた。
　自分ながら筆の上に思ひを斷つ以上、もう一度舞臺の方で苦勞がして見たかつた。新聞で見た新劇團の女優募集の記事はこの場合のみのるには渡りに船であつた。
「僕は君は書ける人だと思つてゐる。だからその方で生活を助けたらいゝぢやないか。第一そんな事するとしても君の年齡はもうおそいぢやないか。」
「藝術に年齡がありますか。」
「そりや藝術の人の云ふ事だ。君はこれからやるんぢやないか。」
「それならよござんす。私は私でやりますから。あなたの爲の藝術でもなければあなたの爲の仕事でもないんですから。私の藝術なんですから。私のする仕事なんですから。然う云ふ事であなたが私を支へる權利がどこにあります。あなたがいけないと云つたつて私はやるばかりですから。」
　斯う云ひきるとみのるの胸には久し振りな欲望の炎がむやみと燃え立つた。さうして自分を見縊るこの男を舞臺の上の技藝で、何でも屈服さしてやらなければならないと思つた。
「そんな準備の金は何所から算段するんだ。」
「自分で借金をしますよ。」

十

　みのるを加入れると云ふ意味のはがきが小山の許から來てから、間もなく本讀みの日の通知があつた。
　みのるの前に斯うして一日々々と新たな仕事の手順が捗つて行くのを見てゐると、義男は氣が氣ではなかつた。平氣な顔をして、何所か遠いところに引つ掛つてゐる望みの影を目をはつきりと開いて見据ゑてゐるやうなみのるの樣子を、義男は傍で見てゐるに堪へられない日があつた。
「舞臺の上が拙くつてみつともなければ、僕はもう決して社へは出ないからな、君の遣りかた一つで何も彼も失つてしまふんだからそのつもりでゐたまへ。」
　其れを聞くとみのるは義男の小さな世間への虚榮をはつきりと見せられた樣になつて不快な氣がした。何故この男は斯う信實がないのだらうと思つた。少しも自分の藝術に向つての熱を一所になつて汲んでくれる事を知らないのだと思つて腹が立つた。さうして其の小さな深みのない男の顔をわざと冷淡に眺めたりした。
「もし遣れたらいゝぢやありませんか。然うすりやあなたが私の爲に恥を搔かなくつても濟むでせう。」
　こんな言葉が今度は女の方から出たけれども今の義男はそれ程の角を持つてゐなかつた。女が派手な舞臺へ出ると云ふ事に、女へ對する淺薄な興味をつないで見る氣にもなつてゐた。
「君に其れだけの自信があればいゝさ。」
　義男は然う云つて默つた。
　清川でみのるは酒井にも行田にも逢つた。行田もみのるの見知り越しの人であつた。酒井といふのは、一方では、これから理想の劇團を起さうとして多くの生徒をごく內容的に養成してゐる或る博士のもとに働いてゐる人であつた。みのるはこの酒井のハムレットを見て、その新らしい技藝に醉つた事があつた。
　眼と鼻のあたりに西洋人らしい俤はあつたが丈の小さい人であつた。行田は圖拔けて脊の高い人であつた。いつも眼の中に思想を蓄へてゐると云ふ樣な顔付をしてゐた。默つてゐても頭の奧で笑つてる樣なぬつとした容態があつた。
　鋭くしやんとした酒井と、重く屈み加減になつてる行田とは、いつも兩人ながら膝前をきち

りと合せて稽古の座敷の片隅に並んで坐つてゐた。

其の中を俳優の小山は睫毛の長い愛嬌に富んだ眼を隅から隅へ動かしながら、その小さな身體をちよこ／＼と彈ましてゐた。

みのるの外に女優が三四人ゐた。どれも若くて美しかつた。早子と云ふのは頬は痩せてゐたけれども目を瞑つたりすると印象の強い暗い蔭が漂つた。さうして口豆な女だつた。塚子と云ふのがゐた。顏の輪郭の貞奴に似た高貴な美しさを持つてゐた。その中にゐて、みのるは矢つ張り行田の手で作られた戯曲の女主人公をやる事に定まつてゐた。

その女主人公は音樂家の老孃であつた。それが不圖戀を感じてから、今まで冷たく自分を取卷いてゐた藝術境から脱けて出てその戀人と温い家庭を持たうとした。その時に其の戀人の夫人であつた女から嫉妬半分の家庭觀を聞いて、又淋しくもとの藝術の世界に一人して住み終らうと決心する。と云ふのであつた。

他の俳優たちは誰れも其の脚本を笑つてゐた。他の俳優と云ふのは壯士俳優の三流ぐらゐなところから、手蔓のあるのをすぐつて來た群れであつた。其の中からこの脚本に現はれた人物に扮する樣に定められた男が二人ほどあつた。其の頭では解釋のしきれないむづかしい言葉が續々と出てくるので閉口して笑つてゐた。

みのるが詰めて稽古に通ふ樣になつた時はもう冷たい雨の降りつゞく秋口になつてゐた。雨の降り込む清月の縁に立つて、べろ／＼した單衣一枚の俳優たちが秋の薄寒さをかこつ樣な日もあつた。朝早く清月に行つてみのるが一人で臺詞をやつてる時などに、濡れた外套を着た酒井が頸元の寒さうな風をして入つてくる事もあつた。お互の挨拶の息が冷たい空氣にかじかんでる樣な朝が多くなつてゐた。行田も酒井もいつも朝早く定めた時刻までには出て來てゐた。さうして怠けた俳優たちがうそうそ集まつてくるまで、二人は無駄な時間を空に費してゐる事が毎日の樣であつた。藝術的の氣分に緊張してゐるこの二人と、旅藝人のやうに荒んだ、統一のない不貞た俳優たちとの間にはいつもこじれた紛雜が流れてゐた。酒井は殊にぽん／＼と怒つて、藝人根性の主張をやめないその俳優たちを表面から責めたりした。酒井の譯したピネロの舞臺は全部この不統一な俳優たちの手で演じられる事になつてゐた。それは「ちつとも藝術品になつてゐない。然うてん／＼ばらばらでは仕方がない。」と云つて一人でじりじりしてゐた。

けれども演劇で飯を食べてるこの連中は、酒井などから一々臺詞にまで口を入れられる事に就いて、明らかな惡感を持つてゐた。俳優たちは沈默の反抗をそのふところ手の袖に見せて、酒井の小言の前で氣まづい顏をしてゐる事が多かつた。

「初めからのお約束ですから、少々氣に入らない事があつても一致してやつて頂かなけりや困ります。どうでせう皆さん、もう日もない事ですから一つ一生懸命になつて臺詞を覺えて頂く譯には行きませんか。」

酒井の傍に坐つた小山が、こんな事を云つて口に皺を寄せながら向うに集まつた俳優たちを眺めてゐる事もあつた。

その中で女優ばかりは誰れも彼れも評判がよかつた。皆が舞臺監督の云ふ事をよく聞いて稽古を勵んでゐた。

「こんなに女優が重い役をやると云ふのは今度が初めだから、一つ思ひ切つた立派な舞臺を見せ

ていたくはない。女優の技藝によつてこの劇團の運命が定まるやうなものだと思つて十分に演つて頂きたい。女優と云ふものも馬鹿に出來ないものだと云ふ事を今度の興行によつて世間へ見せて頂きたい。」

酒井は斯う云つて女優たちを上手におだてた。

その中にゐて、みのるには何時もの惡い癖がもう始まつてゐた。自分の氣分がこの俳優の群れに染まないと云ふ事がすつかりみのるを演劇の執着からはなしてしまつた事であつた。みのるは芝居をする事がもう厭になつてゐた。さうして、何時もこの俳優たちの低級な趣味の中に自分を輕く落して突き交ぜようとする努めの爲にだん〳〵疲れてきた。淸月にゐる間の自分を省みると、そこには蓮葉な無教育な女が自分になつて現はれてゐた。

もう一つ厭な事があつた。

みのるの役のワキ役になる女優に錄子といふのがゐた。みのるよりも年嵩で舊俳優の中から出てきた人だつた。目の大きな鼻の高い役者顏の美しい女であつた。みのるはこの錄子と一所にゐる間は始終この女の極く世間摺れした心から妙に自分と云ふものを壓し付けられる様な自分の感情の沮喪の苦しみがつゞくのであつた。

錄子は女役者にもなれば藝妓にもなると云ふ様に世間を渡り歩いてきた氣の強い意地つ張りが、誰れに向つても自分の心持に反りを打たして、相手をぐいと押退ける様な態度を見せた。みのるはそれにちり〳〵して、この錄子を恐れた。さうしてワキの錄子がみのるの仕科の上につけ〳〵と註文をつけたりしても、みのるは自分の藝術の權威を感じながらこの錄子に向つては言葉を返す事が出來なかつた。

みのるは子供の頃小學校へ通ふ様になつてから、何年生になつてもその同じ級のうちにきつと自分を苛める生徒が一人二人ゐた。みのるは毎朝何かしら持つて行つてその生徒に與へてはお世辭をつかつた事があつた。さうして學校へ行くのがいやで堪らない時代があつた。丁度今度の錄子に對するのがそれによく似た感じであつた。

錄子は女主人公の戀人の夫人をする事になつてゐた。行田も酒井も「あれでは困る。」と云つて、その古い芝居に馴らされてしまつた、さうして頭腦のない錄子に手古摺つてゐたけれども、錄子はそんな事には平氣であつた。さうして演劇をするについては一生懸命だつた。

みのるはとう〳〵この錄子に負けてしまつた。さうして其の役を捨てると云ふ事を行田に申した。みのるはその時泣いてゐた。

「然うセンチメンタルになつては困る、今あなたに廢められては困る。」

口重な行田は一つことを繰り返しながら酒井を連れて來た。酒井は輕いところに中間になつて、

「今あなたがそんな事を云つては芝居がやれなくなりますから何卒我慢してやつて頂きたい。あなたの技藝は我々が始終賞めてゐるのですから、我々の爲にと思つて一つ是非奮發して頂きたい。私の方の學校で今へ ダを演つてる女生がありますが、それにもあなたの今度の技藝に就いて話をしてゐる位です。是非それは思ひ返してやつて頂き度い。」

酒井は如才なくみのるをなだめた。

けれどもみのるは何うしても厭になつてゐた。

この劇團の權威をみとめる事が出來なくなつたのと同時に、みのるは自分の最高の藝術の氣分をかうした境で揉み苦茶にされる事は、何うしても厭だといふ高慢さがあくまで募つてきて、誰れの云ふ事にも從ふ氣などはなかつた。

明日から稽古に出ないと云ふ決心でみのるは歸つて來てしまつた。

　けれどもみのるの眼の前には直ぐ義男と云ふ突支棒が現はれてゐた。この話をしたなら義男はきつと自分に向つて、口ばかり巧者で何も遣り得ない意氣地のない女と云ふ批判を一層强くして、自分を侮るに違ひないとみのるは思つた。けれども矢つ張り義男にこの事を話すより他なかつた。

「よした方がいゝだらう。」

　義男は簡單にかう云つた。さうしてみのるが想像した通りを義男はみのるに對して考へてゐた。

「私はもう何所へもゆきどころがなくなつて終つた。」

　みのるは然う云つて仰向きながら淋しさうな顏をした。

十一

　みのるの偽た事は、他から考へると唯安つぽい人困らせに過ぎなかつた。つまりは矢つ張り出なければならなかつた。

　初め義男はみのるに斯う云つた。

「自分から加入を申込んでおいて、又勝手によすなんてそれは義理がわるい。何うしても君がいやだといふなら僕が君の出勤を拒んだ事にしておいてやらう。」

　義男は然うして劇團の事務所へ斷りを出した。劇團の理事も行田もその爲に義男を取り卷いてみのるの出勤をせがんで來た。

　劇團の方ではみのるに代へる女優を見付ける事は造作のないことであつたかも知れないが、あれだけのむづかしい役の稽古を積み直させるだけの日數の餘裕がなかつた。開演の日はもう迫つてゐた。經營の上の損失を思ふと、小山は何うしてもみのるに出勤して貰はねばならなかつた。行田も義男にあてて長い手紙をよこした。

「みつともないから好い加減にして出た方がいいね。僕も面倒臭いから。」

　義男は斯う云つて、いつも生きものを半分弄り殺しにして其の儘抛つておく樣なこのみのるの、いら〳〵した感情を厭はしく思つた。然うしてこの女から離れようとする心の定めがこの時もその眼の底に閃いてゐた。二三日してからみのるは再び淸月へ通ひ出した。

　演藝の上でみのるの評判は惡くはなかつた。誰れもこの新らしい技藝を賞めた。けれども又、同時に誰れが見てもみのるの容貌は舞臺の人となるだけの資格がないと云ふことも明らかに思はせた。

　藝術本位の劇評はみのるの技藝を、初めて女優の生命を開拓したものとまで賞めたものもあつたけれども、單に芝居といふ方から標準を取つて行つた劇評は、みのるを惡く云つた。その態度が下品で矢場女のやうだと譏つたものもあつた。みのるの容貌はほんたうに醜いものであつた。無理に拾へば眼だけであつた。外の點では唯普通の女としても見られないやうな容貌であつた。

　みのるは自分の容貌の醜いのをよく知つてゐた。其れにも由らず舞臺へ上り度いと云ふのは唯藝術に對する熱のほかにはなかつた。そこから火のやうに燃えてくる力がみのるを大膽に導いて行くばかりであつた。けれども女優は——舞臺に立つ女はある程度まで美しくなければならなかつた。

　女は、そこに金剛のやうな藝術の力はあつても、花のやうな容貌がなければ魅力の均衡は保たれる筈がなかつた。みのるの舞臺は、ある一面からは泥土を投げ付けられる樣な嘲笑を受

けたゝであつた。

　みのるはそこにも失望の淵が横たはつてゐるのを、はつきりと見出した。みのるはある日演劇が濟んでから、雨の降り止んだ池の端を雨傘を提げて歩いて來た。今夜も棧敷からみのるの舞臺を見てゐた義男が一所であつた。

　みのるはこの時ほど義男に對して氣の毒な感じを持つた事はなかつた。義男はこの演劇が始まつてから毎晩芝居へ通つて來た。然うしてその小さな眼のうちは、他の批評を一句も聞き漏らすまいといつもおど〳〵と慄へてゐた。義男の友達も多勢見に來た。これ等の人の前で舞臺の美しくない女を見ながら平氣な顏をしてゐなければならないと云ふのは、この男にしては非常な苦痛であつた。技藝は拙くとも舞臺の上で人々を驚かせるほどの美を持つた女を有してゐる事の方が、この男の理想であつた。義男は其の爲に毎日出て行くある群れの場所にゐても、絶えず苦笑を浮べてゐなければならない樣な、苦い刺戟に出つ會すのであつた。

　義男も疲れてゐた。二人の神經はある悲しみの際に臨みながら、その悲しみを嘲笑の空の中にお互に突つ放さつとする樣な興奮を持つてゐた。

「今夜はどんなだつたかしら、少しはうまく行つて。」

「今夜は非常によかつた。」

　二人はかう一言づつを言ひ合つたぎりで歩いて行つた。毎夜舞臺の上で一滴の生命を絞り絞りしてゐる樣な技藝に對する執着の疲れが、かうして歩いて行くみのるを渦卷くやうに遠い悲しい境へ引き寄せていつた。その美しい憧憬の惱みを透して、譏笑の聲が錐のやうにみのるの燃える感情を突き刺してゐた。池の端の灯を眺めながら行くみのるの眼はいつの間にか涙含んでゐた。

「全く君は演劇の方では技術を持つてゐるね。僕も今度はほんたうに感心した。けれども顏の惡いと云ふのは何割もの損だね。君は容貌の爲に大變な損をするよ。」

　義男はしみ〴〵と斯う云つた。義男は自分の女房を前において、その顏を批判するやうな機會に出逢つた事がいやであつた。同時に、みのるがそのすべてを公衆に曝すやうな機會を作り出した事に不滿があつた。

「よせばいゝのに。」

　義男は斯う云ふ言葉を繰り返さずにはゐられなかつた。

十二

　僅な日數で芝居は濟んでしまつた。みのるが鏡臺を車に乘せて家へ歸つた時は、雨が降つてゐた。一座した俳優たちが又其れ〴〵別れようとする終りの夜には、誰れも彼れも淺い悲しみをその心の上に浮べてゐた。男の俳優は樂屋で使つたいろ〳〵の道具を風呂敷に包んだり、鞄に入れたりして、それを片手に下げながら帽の庇に片手をかけて挨拶し合つてゐた。この劇團が解散すれば、又何所へ稼ぎに行くか分らないと云ふ放浪の悲しみが其のてん〴〵の蒼白い頰に漂つてゐた。しつかりした基のないこの新らしい劇團は、もうこれで凡てが滅びてしまふ運命を持つてゐた。何か機運に乘じるつもりで、斯うして集まつた俳優たちは、又この手から放れて、然うして矢つ張り明日からの生活の糧をそれ〴〵に考へなければならなかつた。みのるは車の上からからうして別れて行つてしまつた俳優たちの後を見送つた。

　芝居の間みのるが一番親しんだ女優は早子であつた。新派の下つ端の女形をしてゐると云ふ可愛らしい早子の亭主が、みのると合部屋の早子のところへ能く來てゐた。早子には病氣があ

つた。昨晩血を吐いたと云ふ樣な翌る日は、傍から見てゐても其の身體がほそ〴〵と消えていつて了ふかと思ふ樣な、力のないぐつたりした樣子をしてゐた。毎日喧嘩ばかりしてゐるといひながら、矢つ張り亭主がくると髮を直してやつたり、汚れた襟を見直してやつたりしてゐた。今度の給金の前でよく小山と紛れあつてゐたのもこの單子だつた。みのるはこの單子が忘られなかつた。彼れを時其の内に遊びに行くと云つた單子は何日になつてもみのるの許へ來なかつた。

また、小さな長火鉢の前に向ひ合つて、お互の腹の底から一人の妻と顔を合ふやうな日に戻つてきた。

何時の間にか秋が深くなつて、縁の日射しの色が水つぽく褪めかけてきた。さうして秋の淋しさは人の胸に痕を吹くやうにばかり迫めてでもゐく樣に谷中の森はいつも隱者のやうな靜な姿を備へてぢつとしてゐた。その森にはもてから日に見えるやうに何所からともなく青い色が次第に剝げていつた。

二人の生計は段々苦しくなつてゐた。暫くなつてからの着物なぞはとても質屋へ見込みが立たなかつた。家の持ちたてには二人の愛情が濃い色彩を塗つてゐた爲に貧弱な家財道具にもさして淋しさを感じなかつたものが、別々なところにその心を据ゑて自分々々をしつかりと見守つてゐる樣なこの頃になつては、寒さのいつついきのこの空虛な座敷の中は唯お互の心を一層荒涼しくさせるばかりだつた。それを厭がつてみのるは自分で本などを賣つて來てから、高價い西洋花を買つて來て彼方此方へ插し散らしたりした。然うしたみのるの不經濟がこの頃の義男には決して默つてゐられる事でなかつた。

まるで情人と遊びながら暮らしてでもゐる樣な生活は、どうしても思ひきつて了はねばならないと義男は思ひつゞけた。七十を過ぎながら小遣ひ取りにまだ町長を勤めてゐる故鄕の父親の事を思ふと義男はほんとに涙が出た。只の一度でも義男は父親の許へ菓子料一つ送つた事はなかつた。義男だといつても自分の力相應なものだけは働いてゐるに違ひなかつた。それが何時も斯うして身慘めな窮迫な思ひをしなければならないと云ふのは、唯みのるの放縱がさせる業であつた。

義男は又、昔の商賣人上りの女と同棲した頃の事が繰り返された。その頃は今程の收入はがなくつてさへ、何うやら人並みな生活をしてゐた。――義男はつく〴〵みのるの放縱を呪つた。

この女と離れさへすれば、一度失つた文界の仕事ももう一度得られさうな氣もした。みのるが自分の腕に纏繞つてゐる爲に、大膽に世間を踏み出されないと云ふ事が自分に禍ひをしてゐるのだと思ふと、義男はこの女を逃げ出すやうにしても別にならなければならないと思ひ詰める事もあつた。

―何か仕事を見付けて僕を助けてくれる譯にはいかないかね。

義男は毎日の樣にこれを繰り返した。

遂に男の手から捨てられる時が來たとみのるは意識してゐた。

十何年の間、みのるは唯ある一つを求める爲に殆んど憧れ盡した。何かは知らず自分の眼の前から遠い空との間に一つの光りをもとめあつて、その光りがいつもみのるの心を手繰り寄せようとしては希望の色を閃引かして見せた。けれども其の光りには、なか〴〵みのるの手に火の輝きとなつて落ちてこなかつた。みのるは義男の心の影を通して、自分にばかり意味の無い人生をしみ〴〵と眺めた。

「何も彼も思ひ切つてしまひたまへ。君には運がないんだから。さうして君はあんまり意氣地がなさ過ぎる。君は平凡な生活に甘んじて行かなけりやならない樣に生れ付いてるんだ。」

斯う云ふ義男の言葉をみのるは思ひ出した。けれども、みのるは矢つ張りその一縷の光りをいつまでも追つてゐたかつた。遂に自分の手には落ちないものと定まつてゐても、生涯その一縷の光りを追ひ詰めてゐたかつた。然うしてその追ひ詰めつゝゆく間に矢つ張り自分の生の意味を含ませて見たかつた。

二人はある晩酉の市から歸つて來てから、別れると云ふ事を眞面目に話し合つた。

「第一君にも氣の毒だ。僕の働きなんてものは、普通の男の以下なんだから。僕はたしかに君一人養ふ力もないんだから一時別になつてくれたまへ。其の代り君を贅澤に過させる事が出來る樣になつたら又一所になつてもいゝ。」

これが別れると定まつた時の義男の言葉であつた。

「義男と離れたなら自分は何うしよう。何うして行かう。」

みのるは直ぐに斯う思つた。さうして自分の傍から急に道連れの影を失ふのが、心細くて堪らなかつた。今まで長く忘れてゐた自分の肌の温みを持つた柱から、辷り落されるやうな頼りなさが、みのるの心を容易に定まらせなかつた。

「メエイとも別れるんだわね。」

みのるは庭で遊んでゐた小犬を見ながら斯う云つた。この小犬は二人の長い月日を叙景的に繋ぎ合せる深い因緣をもつてゐた。二人をよく慰めたものはこの小犬であつた。みのるは思はず涙がこぼれた。

「あなたに別れるよりもメエイに別れる方が悲しい。妙だわね。」

みのるは戯談らしい口吻を見せてから、いつまでも泣いてゐた。

十三

みのるは一旦母親の手許へ歸る事になつた。義男はあるだけの物を賣り拂つて一時下宿屋生活をする事に定めてしまつた。

こゝまで引つ張つて來てから、ふとこの二人を揶揄ふやうな運命の手が思ひがけない幸福を、、すとんと二人の頭上に落してきた。それは、この夏の初めに義男が無理に書かしたみのるの原稿が、選の上で當つたのであつた。

それは、十一月の半ばであつた。外には時雨てゐた。みのるが朝の臺所の用事をしてゐる時に、この幸福の知らせをもたらした人が來た。その人は二階でみのるに話をした。その人が歸つてしまつてから二人は奧の座敷で少時顏を見合せながら坐つてゐた。

「本當にあたつたのかしら。」

義男は力のない調子で斯う云つた。

みのるの手に百圓の紙幣が十枚載せられたのはそれから五日と經たないうちであつた。二人の上に癌腫の腫物の樣に祟つてゐた經濟の苦しみが初めてこれで救はれた。

「誰れの爲た事でもない、僕のお蔭だよ。僕があの時どんなに怒つたか覺えてゐるだらう。君がとう／＼云ふ事を聞かなけりやこんな幸福は來やしないんだ。」

義男自身がみのるに幸福を與へたかのやうに義男は云ひ聞かせた。

「誰れのお蔭でもない。」

みのるも全く然うだと思つた。みのるはある時義男が生活を愛する事を知らないと云つて怒つた時、みのる自身は自分の藝術の愛護の爲にこれを泣き悲しんだりした。そんな事に自分の筆を荒ませるくらゐなら、もつと他の筆

の仕事で金錢と云ふ事を考へて見る、とさへ思つた。

　けれども義男に鞭打たれながらあゝして書き上げた仕事が、こんな好い結果を作つた事を思ふと、みのるは義男に感謝せずにはゐられなかつた。

「全くあなたのお蔭だわ。」

　みのるは然う云つた。この結果が自分に一つの新規の途を開いてくれる發端になるかも知れないと思ふと、みのるは生れ變つた樣な喜びを感じた。

「これで別れなくつても濟むんだわね。」

「それどころぢやない。これから君も僕も一生懸命に働くんだ。」

　選をした内の一人に向島の師匠もゐた。その人の點の少かつた爲に、みのるの仕事は危く崩れさうな形になつてゐた。義男は口を極めて向島の師匠を呪つたりした。さうして却つてこの人に捨てられた事を義男はみのるの爲に祝福した。他に二人の選者がゐた。その人たちはみのるの作を高點にしておいた。義男はこの人たちを訪ねることをみのるに勸めた。一人は現代の小說の大家であつた。この人は旅行で自宅にはゐなかつた。一人は早稻田大學の講師をしてゐる人で、現代の文壇に權威をもつた評論家であつた。みのるは其の人を訪ねた。

　義男はみのるが出て行く時に、みのるが嘗て作つて大事に仕舞つておいた短篇を其の人の手許へ持つて行く樣に云ひ付けた。その人の手から發行されてる今の文壇の勢力を持つた雜誌に、掲載して貰ふ樣に賴んで來た方がいゝと云ふのであつた。

　みのるは義男の云ひ付けを守つてその短篇を持つて出て行つた。今までのみのるなら、こんな場合には小さくとも自分の見識と云ふ事を感じて、初對面の人の許へ突然に自作を突き付けると云ふやうな事は爲ないに違ひなかつた。けれどもみのるの心はふと麻痺してゐた。

　みのるが訪ねた時、丁度その人は家にゐた。さうしてみのるに面會してくれた。

「あれは確に藝術品になつてゐます。いゝ作です。」

　其の人は瘦せた顏を俯向かしながら腕組みをして然う云つた。みのるの出した短篇の原稿もこの人は「拜見しておく。」と云つて受取つた。

　その人は女の書くものは枝葉が多くていけないと云つた。根を掘る事を知らないと云つた。それが女の作の缺點だと云つた。みのるは然うした言葉を繰り返しながら歸つて來た。さうして逢つてる間に其の人の口から出た多くの學術的な言葉を一つ〳〵何時までも噛んでゐた。

十四

「あの仕事にはちつとも權威がない。」

　みのるは直きに斯う云ふことを感じ始めた。片手に握つてしまへば切れ端も現はれない樣な百圓札の十枚ばかりは直ぐに消えてしまつた。けれどもそんな小さな金ばかりの問題ではない筈であつた。

　義男に強ひられて出來た仕事の結果は、思ひがけない幸福をこの家庭に注ぎ入れたけれども、そのみのるの仕事には少しも權威はなかつた。社會的の權威がなかつた。仕事の上の權威から云つたらまだ一部から非難を受けた演劇の方に、熱い血が通つた樣な印象があるとみのるは思つた。

　みのるの心は又だん〳〵に後退りして行つた。義男がさも幸運の手に二人が胴上げでもされてる樣な喜びを見せつけてゐる事にも不足があつた。二人の頭上に突然に落ちたものは幸運

ではなくつて、唯二人の縁をもう一度繋がせる爲の運命の神のいたづらばかりであつた。二人の生活はもう直ぐに今までの通りを繰り返さなければならないに定まつてゐた。

　みのるははつきりと「何うかしなければならない。」と云ふ事を考へた。もう一度出直さなければならないと考へた。空間を突く自分の力をもつと強くしなければならないと考へた。みのるの權威のない仕事は何所にも響きを打たなかつたけれども、その一端が風の吹きまはしで世間に形を表はしかけたと云ふ事が、みのるの心を初めて激しく世間的に搖ぶつた效果のあつたのはほんたうであつた。

　その後みのるは神經的に勉强を始めた。今までともすると眠りかけさうになつたその目がはつきりと開いてきた。それと同時に義男と云ふものは自分の心からまるで遠くなつていつた。義男を相手にしない時が多くなつた。義男が何を云つても自分は自分で彼方を向いてる時が多くなつた。みのるを支配するものは義男ではなくなつた。みのるを支配するものは初めてみのる自身の力になつてきた。よく義男の憎んだみのるの高慢は、この頃になつて義男からは見えないところに隱されてしまつた。さうして其の隱された場所でみのるの高慢は一層強く働いてゐた。

「僕のお蔭と云つてもいゝんだ。僕が無理にも勸めなければ。」

　から云ふ義男の言葉を、みのるはこの頃になつて意地の惡い微笑で受けるやうになつた。義男の鞭打つた女の仕事は義男の望む金と云ふものになつて報いられた。そこから受ける男の恩義はない筈だつた。又新らしく自分は自分で途を開かねばならないと云ふみのるの新らしい努力に就いては、男はもう何も與へるものを持つてゐなかつた。

　少しづつ義男の心に女の態度が染み込んでいつた。男を心から切り放して自分だけせつせとある階段を上つて行かうとする女の後姿を、義男は時々眺めた。あの弱い女がかうしてだん／＼強くなつてゆく――その捩ぢ切つた樣に強くなつた一つの動機は矢つ張り發表された例の仕事の結果だとしきや思はれなかつた。然うした自覺の强みを與へたものは矢つ張り自分だと思つた。

　けれども義男は何も云はなかつた。みのるの爲た仕事は何うしてもみのるの仕事であつた。みのるの藝術は何うしてもみのるの藝術であつた。みのるは自分の力を自分で見付けて動きだしたのだ。義男はそれに口を插むことは出來なかつた。義男は然う思つた時、この女から一足一足に取り殘されてゆくやうな不安な感じを味つた。

　ある時この二人の許へ訪ねて來た男があつた。これは義男と同鄕の男で帝國大學の文科生であつた。この男の口からみのるは何日か自分の作を選した眞實のもう一人を知つた。それは蓑村といふ新らしい作家であつた。新聞に發表されてゐた選者の一人は病氣であつた爲、その人の門下のやうになつてゐる蓑村文學士が代選したのだと云ふ事がこの男を通じて分つた。この大學生は蓑村文學士に私淑してゐる男であつた。

　みのるはそれから間もなくこの大學生に連れられて蓑村文學士をたづねた。その人の家は神樂坂の上にあつた。

　其の家へ入つた時、みのるは上り口の薄暗い座敷の中で箪笥の前に向うむきに立つてゐる男を見た。初めて來た客を奥へ通すまで其所に隱れて待つてゐる樣な容態があつた。其の障子が開いてゐたのでみのるの方からすつかり見

えた。

　昔はどんなに美しかつたかと思はれるいゝ年輩の女に奥へ通されて待つてゐると、今向うむきに立つてゐた人が入つて來た。それが蓑村文學士だつた。言葉の調子も、身體も重さうな人であつた。

　この文學士は作を選する時の苦心を話した。その原稿が文學士の手許にあつた時、夏の暴風雨と大水に出逢つてすつかり濡らして了ふところだつたのを、文學士の夫人が氣にかけて持ち出したと云ふ事だつた。その時崖くづれで家が破壞された爲この家へ移つたのださうであつた。

「あれを讀んだ初めはそんなに好いとも思ひませんでしたが中頃から面白いと思ひだした。けれどもね、百點をつけると云ふ譯にはいかないと思つてゐると、家へ有野と云ふ男がくる。それに話をすると其れぢや折角の此方の主意が通らないといけないから百二十點もつけておけと云ふんでせう。有野は自分に責任がないからそんな無茶な事を云ふけれども私にはまさか然うもゆかない。それで思ひ切つてあなたの點と他の人の點を二三十も違はしておいた。他の選者の點の盛りかたを見るとあなたは危い方でしたね。」

　文學士は、この女の機運は全く自分の手にあつたのだ、云ふ様な今更な顔をしてみのるを眺めた。さうしてその作の中からいゝと思つた所を拾ひ出して賞めた。

　みのるはこの文學士のどこか藝術趣味の多い言葉に醉はされながら聞いてゐた。さうしてこゝにも自分に運を與へたと云ふ様な顔をする人が一人居ると思つた。

　今噂した有野といふ文學士が丁度來合せた。その人は痩せた膝を窄める様に小さく坐つて、片手で顔を撫りながら物を云ひ〳〵した。

「けれどもね。けれどもね。」といふ口癖があつた。その「ね」と云ふ響きと、だん〳〵に顔の底から笑ひを染み出させて來る様な表情とに、人を惹きつける可愛らしさがあつた。

　みのるはこの中にゐて、久し振りに自分の感情が華やかに踊つてゐる様な氣がした。蓑村と有野は、各自に頭の中で考へてゐる事を、いゝ、いゝ、かんかんに口先きで話し合つては、又自分の勝手な話題の方へ相手を引つ張つてゆかうとしてゐた。みのるは其の兩人が一人合點の話を打つ突け合つてゐるのを聞いてゐると面白かつた。

　その内に蓑村の夫人が歸つて來た。昔の女形にあるやうな堅い感じの美しい人であつた。又其所へ若い露國人が來てこの夫人に踊りの稽古をして貰つたりした。

　みのるは逆上せきつた顔をして、夜おそくまで引き留められてゐた。さうして又大學生に連れられてこの家を出た。歸る時一所に出て來た有野文學士と、みのるは暗い露路の外れで挨拶して別れた。

　家へ歸つた時義男は二階にゐた。其所に坐つたみのるを見た義男は、その逆上の殘つた眼の端にこの女が亂れた感情をほのめかしてゐる事に氣が付いた。義男はこの頃にない女に對する嫉妬を感じながらみのるが何と云つても默つて居た。

「私が入つて行つた時にね、蓑村と云ふ人は上り端の座敷の隅に向うを向いて立つてゐたの。それがすつかり私の方から見えてしまつたの。」

　みのるはこればかりを繰り返して一人で笑つてゐた。

　その晩みのるは不思議な夢を見た。それは木乃伊の夢であつた。

　男の木乃伊と女の木乃伊が、お精靈様の茄

子の馬の様な恰好をして、上と下とに重なり合つてゐた。その色が鼠色だつた。さうして木偶見たいな、眼ばかりの女の顔が上に向いてゐた。その脣がまざ〳〵と眞つ紅な色をしてゐた。それが大きな硝子箱の中に入つてゐるのを傍に立つてみのるが眺めてゐた夢であつた。自分はそれが何なのか知らなかつたのだが、誰だか木乃伊だと敎へた様な氣がした。

朝起きるとみのるはおもしろい夢だと思つた。自分が畫を描く人ならあの色をすつかり描き現はして見るのだがと思つた。さうしてあれは木乃伊だと云ふ意識がはつきりと殘つてゐたのが不思議であつた。

「私はこんな夢を見た。」

みのるは義男の傍に行つて話をした。さうして、

「これは何かの暗示にちがひない。」

と云ひながら、その形だけを描かうとして机の前へ行つた。

「夢の話は大嫌ひだ。」

然う云つた義男は寒い日向で痩せた犬の身體を櫛で掻いてゐた。

（大正二年三月作）

◇

あきらめし後のはかなさ寂しさは風に吹かれて飛ぶここちする（勇）

これは女の方が男よりも上は手で、始終女に遊ばれたり、はぐらかされたりしてゐた男が、とう〳〵其の戀を思ひ切つてしまつたと云ふ經過の後なのであらう。「風に吹かれて飛ぶここちする」この感覺が、身惨めな戀の落魄者を連想させる。落魄した戀の魂が、砂まみれに乾いて、白つぽくなつて、ふは〳〵と彼方此方に小迷ひながら、行方も知らずに風に吹き飛ばされて行く、その姿を思ふと可笑しくなる。それを自分で何うする事も出來ずに、しよんぼりと立つて見詰めてゐる脱殼の男の姿は猶その上にも可笑しい。落魄した戀の魂のカルケーチュアをこの歌の上に見るやうである。

*

霜踏めば戀し汝はたはれ男とわれ怒らせて物云ひし人（寛）

寒い夜の別れ。而もその爭ひの後の不愉快さの中に無言で女と別れて來た、その夜更けの寒さの外に、一歩踏んで立つた時、今迄女と向ひ合つてゐた一室の灯の明るさが、男の幻にいかにも鮮やかに、温かに蘇生つてきた。外に霜の白いのを見る程、一層幻の灯の光りが身に染みる。男はぼんやりとその明るさを思ひながら二歩三歩と歩いて行く内に頻りに心弱くなつて女が戀しくなつて來た。思ひ上つた女の何時もの嫉妬から、今夜もその人は、幾人の女でも戀ふ事の出來るやうな不眞實な男」などと恨み罵つたので、男は侮辱的な怒りに物も云はずに出ては來たのだけれども、それもどうでも宜いほどに心弱く、たゞ女が戀しくなりまさつて來た。自分の心に物の碎片のやうに當つてくるあの尖げ〳〵した厭な女の感情の事も、男はこの時はもう忘れてゐる。さうして唯、執拗い戀着の中に女の顔と身體とが溶けて來て、それが男を甘やかす。――男も亦、我れからその幻影に甘やかされながら――霜の夜とこの感情との調和が、一層はつきりとその場の男の心の纎弱さを輪郭づけてゐる。

（「後のはかなさ」より）

炮烙の刑

一

室内の戸はまだすつかり閉ざされたまゝでゐたが、外はもう晝に近いやうな光線が、戸の隙間から障子の紙に漏れてゐた。家のものたちは疾うに起きて働いてゐた。然し何室にも物音も話聲もおこらなかつた。血を見るやうな一晩ぢうの主人の爭ひに氣も心も消えてゐる女たちは、唾を呑んで、その困惑しつゝある無智なこゝろの中に唯己れを埋めて沈默してゐるやうにひつそりとしてゐた。今日一日の間に、何か恐しい凶事がこの家に起るといふ豫表のやうに、家のなかは暗澹とした隈を作つて、どこも陰氣に閉鎖されてゐた。外には悲しい風が吹き暴れてゐた。

混沌と睡りに落ちてゐた龍子は、時々びくりとして目を覺ました。その度に動悸が高まつて、心臓から頭腦へ突き上る血の音が、枕に押附けた耳の鼓膜を破るやうに響いた。

突然、頭の上に押しかぶさつてくる眞つ暗な陰翳を見て、おどろいて覺めた時もあつた。目をつぶると陰翳は消え、目を開くとその陰翳は又かぶさつてきた。さうして、はつきりと目を見開いた時に、陰翳は一層濃くぱつと彼女の顏にかぶさつた。それは自分を覗かうとして近寄せた男の顏であつた。龍子は聲を立てて起き返つたが誰れもそこにはゐなかつた。薄暗い部屋の中は陰鬱に靜で、四方の障子や襖がぴたりと閉ててあつた。

今も龍子は何か打ち付けられたやうに思つて、おどろいて覺めた。やつぱり部屋の中は陰鬱に靜で何もなかつた。然しその時、隣りの室から起るある微な音を彼女は聞きつけた。それは紙に物を書いてゐるペンの音であつた。ペンの音は龍子の耳に、殺人を犯してからの男の呼吸のやうに、絶望と慘虐と悔恨との響きが打ち縺れ打ち縺れして、荒々しく狂的に絶え間なくつゞいてゐるやうに思はれた。

——慶次が何か書いてゐる。何を書いてゐるのだらう。——

龍子は顏を上げてあたりを見た。ペンの音が猶近く聞えた。あれは慶次が書いてゐるペンの音だ——龍子はもう一度強く意識して、さうして襖一つ隔てた彼方で物を書いてゐる慶次の姿をふと考へた時、さつきまでの男の恐しい激怒の形相が直ぐ彼女の頭に映つて、龍子の胸はどき〳〵と波を打つた。その鼓動が半身を延ばした彼女の股の肉から冷たい膝頭をふるはした。

龍子は書いてゐるものを想像することができた。慶次自身が云つたやうに、女を殺してからあとに殘しておかなければならないものを、彼の男は書いてゐるに違ひない。

斯うしてはゐられないのだと龍子は思つた。自分を殺さうとする彼の男の手から遁れなければならない。逃げなくてはならない。私は逃げる。逃げてやる。逃げおほせられないことはない。逃げてやる。——彼の男は決して女を許さないと云つた。女の罪惡を許さないと云つた。自分はあの男から、自分の爲たある一つの行爲のために、恐しい慘虐な報いを受けなければならないのだ。自分の爲たことのために、——自分の生の破滅！ それは自分の爲たことのために。——

龍子の半分眠りにおほはれた頭のなかに、ついさつきまでの激しい二人の爭ひが夢のやうに横かつてきた。昨夜一晩ちうの女のあの暴露の恥ぢ、懲罰的な侮辱――男は女を獸だと罵つた、獸のやうに女を足蹴にした。さうして散々に女を打つた。

「私は何をした？　どんな事をした？」

あの青年を愛すのも、慶次を愛すのも、それは私の意志ではないか。私は決して惡いことをしてはゐない。私は深く慶次を愛してゐた。私の爲たことが慶次の思ふやうに憎むべき罪惡だとしても、その罪惡の中にたつた一つの眞實があるではないか。自分がどんな事をしてゐる時でも、誰れよりも慶次を愛してゐたと云ふことは、たゞ一つの私の眞實であつた。

「あなたを愛してゐる。」

この言葉は自分の心にいつも眞實に生きてゐた。けれども慶次はそれも淫婦の戲言だと云つて罵つた。

「汝はそれを罪惡だと思はないのか。汝のしたことは何んなことだと思つてゐるのだ。關係したもおんなじだぞ。それを罪惡だと思はないのか。おれの前によく汝はその脣をさらしてゐられるな。なんと云ふ太々しい女だ。」

龍子はその言葉を繰り返して、喘ぐやうにくわつとした。血が逆つたやうに、空を見詰めた龍子の目の周圍が眞つ赤になつた。憎んでも憎んでも憎み足りない男に對する憎惡の念がつのつた。

「罪惡ぢやない。決して私はあやまらない。私はあなたに殺される。殺して下さい。殺して下さい。」

斯う罵つて男の怒りの前に身體を拋り付けたあの反抗が、總身の震ふやうな憤激を帶びて龍子の心に兆してきた。

なんと云ふ憎い男だらう。彼の男は私を殺すのだ。どうしても殺すと云つてゐるのだ。私は何をしたらう。どんな事をしたらう。何故私は男の怒りを受けて殺されなければならないのだらう。誰れも誰れも味ひ知らないやうな恐しい慘虐の手の中に、何故私一人が突つ込まれなければならないのか。どうしてあの男が、慶次が、長い間共棲にゐたあの慶次が、私を殺すと云ふやうな恐しい事をするのであらう。あの男の激怒を私には何うすることもできない。

背筋に嫉妬と激怒の錨を打ち込まれたやうに、私には其れを何うすることもできない。私は恐しい。私にはそれがどんなに恐しいことだか知れない。私はあれを愛してゐるのではないか。私は嘘をつかない。私はほんたうに彼の男を愛してゐる。だのに、何故彼の男はそんな慘いことを私にしようとするのであらう。あの爲に、私が他の男を愛した爲に。その爲に？

然し、私は彼の男の怒りが和らぐやうに、自分の爲たことを彼の男に詫びるやうな事は決してしない。それは厭だ。私の爲たことは、私の爲たことだ。私は決して其れを罪惡だとは思はない。私は最後まで、私の爲たことは罪惡ではないと云ひ張つて殺されるまでだ。人に殺されて死ぬと云ふ私の宿命なら仕方がない。私は死ぬまで彼の男を毒突いてやる。惡態を吐く。然うして殺されよう。

私は彼の男を愛してゐた。殺されると云ふことはどんなに恐しい事であらう。彼の男が私に摑みかゝる時でさへ私はあんなに恐しさに戰える。何故彼の男が私を殺すのだらう。何故？　私はこんなに恐しいのに、何故私を殺さうとするのであらう。私は恐い、殺されるのはいやだ。何うして慶次が、あの男が、私を殺さうとするのだらう。私は何をした？　どんな事をした？　私は殺されるのはいやだ。私は彼の

男を愛してゐた。

慶次が何か云つてゐる。私を見て笑つてゐる。あれはいつもの彼の男の笑ひ顔だ。何を云つてゐるのだらう。あれは怒つた時の顔でない。いつもの顔だ。おゝ。いつもの顔だ。あなたは怒つた顔をしてはいけない。決して怒つた顔をしてはいけない。其れはどんなに恐しい恐しい顔だか知れない。恐しい恐しい顔だか知れない――

龍子は、久物に脅かされて目が覺めた。覺めた瞬間、意識が、直ぐ鋭く室内の周圍の物音に向けられたけれども、何の音もなかつた。ペンの音を聞きながら自分は何か考へてゐたのだがと龍子は思つた。ペンの音は？と聞き耳を立てたが、ペンの音もやんでゐた。龍子は仰に寝たまゝ息を凝らして、何か不意におそつてこようとする不安な影をぢつと見詰めてゐたが、何の音も聞こえなかつた。階下の音が頭髪から足の爪先まで響いてゐた。その儘で二分ほど經つた時、室の入口の襖が突然にさしりと鳴つた。

慶次が立つてゐる――龍子は思はず夜着の上に起き直つたが、その足音は續いて階子段をしずかに下りていつた。彼女は片手で夜着の襟につかまりながら、身を伸ばして、階下へおりて行つてからの慶次の樣子を聞き取らうとした。階下からはそれぎりで何も聞えてこなかつた。龍子の唇は、冷たくいつまでも戰へてゐた。

彼女はもう寝てゐてはならないと思つて、手を廻して着物を捲きつけた紐などを解からとしたが、夜着を刎ねた肩先から、肉の痛みにしみこんでくる惡寒の心地わるさに我慢ができなくてその手をとめながら、床の上に坐つた儘で少時のあひだ凝としてゐた。頭が打ち碎かれてでもあるやうに、血がもや〳〵として、無感覺にづしりと腦が重かつた。肉が一層づつ層を盛つて腫れあがつてゐるやうに、痛みと痲痺が全身にひろがつてゐた。彼女は突然自分の生活の上に非常な激動の起つたことを思ひながら夜着の赤い色を見つめてゐた。

外にははげしい風の吹いてゐるのが龍子の耳にはひつた。龍子は今日は幾日だらうと思つた。しばらく考へてゐたが幾日だかはつきり分らなかつた。

龍子は立ち上つて、その邊に散らした着物の寝くづれたのを、紐をといて着直した。さうして女を呼んで、そこいらの戸を開けさせた。女は戸を開けてしまつてから龍子の傍に來て、心配さうな顔をして立つてゐた。

「慶次は？」

龍子は小さい聲で女に聞いて見た。

「どつかへお出かけになりました。」

龍子は思ひがけなかつたので、羽織を引つかけようとしてゐたその手を外して、女の顔を見た。然し直ぐにその行先が推量された。彼の男は兇器を求めて歩いてゐるのではないか――龍子の腦裡に、慶次の殺氣走つた形相がありありと映つた。

「さうだ。彼の男が歸つてこないうちに、今の間に此家を出て行かう。」

吹き荒れてる風に、一寸耳を傾けてゐるやうに見えた龍子の目は、力が漲つて強く光つてゐた。然う決心した刹那に、いきなり眞つ暗な闇の底によろめき入つたやうに、氣が一時に上りながら、ふと意識が暗くなつて行く一刹那がつかなくなつたけれども、直ぐにすべてが明瞭になつて、意識ははつきりした。心が明らかになつたと同時に、閃くやうに慶次の面影が浮んだ。彼女の考へが、すぐ、其の同じ方に向いてゐた。

「どこか[illegible]いてますか。」

龍子は何かぐつ〳〵してゐるやうに見えて、

女が早や茶器などを取り上げながら、斯う云つて聞いた。龍子は湯を沸かしておくやうに云ひ付けて、女を階下へやつてから、急いで室の隅の机の前に行つて手紙を書いた。

私は急にあなたにお別れをしなくてはならないのです。

何も彼も知れました。私があなたを愛したことを慶次はどんなに怒つたでせう。私は悲しい目に逢ひました。その上に彼の人に私に復讐をすると云つてゐます。さうしてあなたにも。

私は今直ぐ此家を出るのです。私は此家を出てから、真つ直ぐに朝鮮の父のところへ行くつもりです。あなたに一度お目にかゝつて、すつかりお話してから遠くへ行からかと思つたのですが、私はお目にかゝらずに參ります。いまお別れすれば、もう當分はお目にかゝれまいと思ひます。朝鮮まで行つてからの私は何うなるか分りません。

突然にお別れするやうになつたことを、どうぞ悲しまないでいらしつて下さい。お目にかゝらずに行つてしまふことを恨まないで下さい。私はいま、あなたに逢いて考へることが非常に悲しいのです。あなたにお目にかゝるのがいやなのです。落着いてから私はあなたにもう一度手紙を書くつもりでをりますが、これぎりで何も彼もお別れにしてしまひ度いと思つてゐます。あなたに差上げる手紙もこれが最後かもしれません、どうぞ何事も悲しまないで下さいまし。さうして、捨てて下さいまし。

龍子はそれを封筒に入れて名宛を書いた。華奢な優しい[illegible]の指先が、ふと龍子の目に見えた。姿の小柄な、光りを鬱悶しさうに見る瞳を持つた若い人の美しい眼、彼女は別れてゆく人を振り返るやうに、その男の顔を心に描いた。まぼろしの男の眼は龍子の心にさまざまな事を強ひようとしたけれども、龍子は、其れを避けて、その他には何も考へまいとした。

二

龍子は急いで支度をした。いつ、突然に慶次が眼の前に現はれても、それに對抗のできるやうな不貞腐れた強い意地を張りつめながら、僅なものを選り出して入れた小鞄の蓋をぴたりと閉ぢた。鏡臺の上の櫻草の花に、過ぎてしまつた平和な日の懐かしい思ひ出を[illegible]して、彼女の捨てて行かうとするその部屋のいろいろな影に、眺めた、[illegible]の色を描いてゐた。

龍子は出る時に、さつき女を呼ぶ時に見えなかつた飾りピンがそこいらに落ちてはゐないかと思つて、隣りの室を開けて見た。大きいピンは床の間の柱の前に落ちてゐた。それといつしよに、机の上に封書が一通横へてあるのが目に入つた。龍子はピンを拾つて、堪りきれないやうに其のピンで結髪の中心をとめながら、封書の上書を眺めた。その宛名は自分であつた。「野代龍子殿」と書いたその字は慶次の手蹟だつた。龍子は不思議に思ひながらその手紙の封を切つた。

何故、お前はあんな事をしたか。何故、あんな事をしてくれたか。私は斯う云つて繰り返すより仕方がない。

私にはもう怒る力もない。一時の怒りで私はお前を打擲し罵つたことを後悔する。お前のやうな弱いものに亂暴をしたことを私は自身に恥ぢる。私はそれを許してもらひたいのだ。

お前は自分の爲たことを罪惡でないと云つた。お前自身にとつてはその考へが正

當なのかもしれない。然し私はどこまでもあの男を大きな罪惡だと信じてやまない。お前は惡いことをした、お前は私のこの愛にそむいて、天地に憚るやうな大罪を犯した、それに違ひないと私は思ふ。

晩方になつて、私はお前の眠つたことを知つてゐる、私は襖の外に立つて長い間お前の呼吸を聞いてゐた。さうして私はお前を殺しても足りない惡い女だと思つた。お前は他の男の唇に觸れたその唇を私の前に持つて來て、さうして平氣でゐた。凡そこれほどの大きい罪惡があらうか。お前はそれを罪惡ではないと云つた。

然し私は何うすることも出來ぬ。戀愛と云ふ獨立な尊いものに對して、それを破壞した私もやはり罪人であるかもしれない。私はたゞ默してゐるより仕方がない。私はお前に恐しい制裁を加へようと云つて狂つたが、私にはお前に對して何も出來ないのである。私はお前を打つたことさへ後悔してゐるのである。私には私を何うすることも出來ないのである。私は卑劣な男だ。私は愚な男だ。けれども仕方がない。私にはお前を何うすることも出來ない。

お前は疲れて眠つたが、私は眠らなかつた。さうして私はいろ〳〵に考へた。お前を許さうとも思つた。心から許さうとも思つた。さうして、若しお前が喜んでくれるなら、私はお前と再び新らしい生活を立て直さうかとも思つた。過去は忘れよう。あの事件を忘れよう。さうしてお前にも彼の男を忘れてもらはう。

私は斯う考へて見た。

自分の行爲を罪惡でないと否定してゐるお前が、その罪を許されると云ふ事はお前にとつて却つて侮辱かもしれない。然し必らずお前は然う云ふに違ひない。

私はお前を許さうと思つた。お前に對する未練の爲に、私は斯う云ふ事を考へたのだ。けれども其れも私には出來ないのである。

私のこの嫉妬をどうしたらいゝか。

私はやつぱりお前が憎い。私は到底この嫉妬を忘れることはできない。現在二人の間にお前は男を見、お前[illegible]ながら、過去を忘れて舊の生活に返ると云ふことは私には苦痛だ。お前の一切はもう私のものではない。

私は恥ぢる。お前が私に向つて自分の行爲を罪惡でないと云ひ張るその大膽さに對しても、私は自分のこの卑劣さを氣恥かしく思ふ。

然し、私にはお前を何うすることもできないのである。

お前は私を愛してゐると云つた。然しお前の愛は二重になつて現はれてゐるではないか。私の愛は嘗てまだ、お前に對して二重の不義の影を見せたことはない筈である。

私はつひに徹底した手段をとることができない。私は何うすればいゝのか。私自身の上に斯う云ふ恐しい事實の起つたことを、私は何かの懲罰として、私自身に天から與へられた慘刑だと觀念して[illegible]すより仕方がないのか。

私はたゞ[illegible]りに戰へながらお前の肉體を見つめてゐなければならない。なんと云ふ苦痛だ。[illegible]

[illegible]

ない。私には堪へられない。私はお前に別れようと思ふ。お前が私に要求したやうに、私はお前に別れようと思ふ。私は東京を去らう。私は旅に出る。今からあてもない旅に出る。さうしてお前を忘れようと思ふ。

龍子は静に手紙を机の上においた。さつきのペンの音はこれを書いてゐたのだと龍子は思つた。身の縮むやうに狂暴にいとはしく聞えたあのペンの音が、しゆ、しゆ、と嬶子を柔らかにこくやうな優しい懐かしみを帯びた音になつて彼女の耳に返つてきた。さつきこれを書いてゐたのだ、この手紙を書いてゐたのだと龍子は再び思つた。直ぐ、いゝ、ぎしりと踏板の鳴つた音が、其の音につゞいて彼女の耳を打つやうに強く響き現はれた。彼の足音が、此家を出てゆく――私に別れてゆく最後の慶次の足音だつたのだと龍子は思つた。

龍子は少し唇を開いて、眼を見張つてゐた。机においた片手から肱へかけて、ふはりとして、力がなかつた。顔の中に廣漠とした白いものがひろがつていつた。空のまぼろしでもなかつた。野のまぼろしでもなかつた。たゞ際限のない廣漠とした白いものがひた／＼とひろがつていつた。龍子は其れを見つめた。行つてしまつた人の後を追ひながら、あてもなく呼び叫んでゐるいら／＼とした自分の聲がそれに反響してゐた。けれども、頭の中の白いまぼろしは闇として沈んでゐた。

龍子の心に、一時に悲しみが突つかけてきた。絶叫したいやうな悲しみが突つかけてきたけれども、革のやうなもので心臓を引き絞られてゐるやうな苦しさが殘つて胸が乾いてゐた。唇も眼も乾いてゐた。口尻から耳朶へかけての筋肉が引き吊るやうに思ひながら彼女は泣くことができなかつた。頰から喉へかけての肉の纖維がふるへてゐながら涙がのぼつてこなかつた。龍子は夢中に袂を額にあてて机の上に突つ伏した。自分の身を揉んで、揉んで、揉みぬきたいやうな焦つた心持に壓しつけられながら、龍子は袂をしつかりと額にあてて突つ伏した。

けれども、龍子は又直ぐに顔を上げた。さうしてあわてて立ち上つた。慶次を戀しく思ふこころが非と迫つてきて、彼女はたゞ一向きに何か思ひつめてゐた。額が眞つ赤になつて、血に乾ききつた眼のうちが險しい光りを含んで瞳子が濁つてゐた。

龍子は手紙をふところに入れて、慶次の跡を追ひかけるつもりで階下へおりて行つた。そこで出逢つた女に、慶次の出て行つた時間を聞いて見た。女は丁度その時から一時間ばかり経つと云つた。

「どんな風をして。」

「ふだんの儘で、外套を着て。」

「慶次は何所へ行つたのだか分らないんだよ。」

龍子は然う云つて女の顔を見た。龍子は偶然にこんな言葉が出たあとで、慶次は何所へ行つたのだか分らないと云ふ當惑が、初めてはつきりと彼女の意識に上つて来た。

「何うしよう。何方へ行つたのだらう。もう一時間も経つのではそこいらには居やしないだらうね。」

龍子は顛倒してるやうな震へた眼で、女に相談するやうに聞いた。

「直きに歸つていらつしやるやうな御様子でした。」

「いゝえ、もう歸つてこない。あの人は歸らないと云つて出て行つたんだから。」

龍子は然う云つて立つた儘考へてゐた。女には分らなかつた。女は落着かない主人の様子を黙つて打守つてゐた。

一停車場へ行つて見よう。彼所で聞けば何方へ

行つたか分るかもしれない。」

龍子は下女に相談するやうに斯う云つた。慶次が出てからの經過の時間が、まだ一時間ぐらゐだと云ふことが彼女には、また心頼みにもなつてきた。外へ出れば、きつと慶次に出逢へるやうな氣がした。もう一度逢つて、どうしても慶次に云はなければならないことがあると彼女は思ひあせつた。

彼女はさつき自分が捨てて行かうとしたこの家の留守を女にしつかりと頼んで、自分がこの儘、當分歸らないやうな事があつても心配してはならないと云ひ付けた。さうして少しの金を託けて龍子は家を出た。

龍子の家からＥの停車場まで十四五町ほどあつた。丘の上には雲を濾くやうに風が吹き立つて、龍子の着物はそつくり下から引き剝かれるやうに向ひ風に煽られた。ぼつりと立つてゐる郊外の家並びは、颯風に曝されて灰色にからからとしてゐた。空は果てから暗く蔽ひかゝるやうな不安な雲の中を通して、薄い冷たい日ざしが丘の上から下へその影を投げてゐた

彼女の頭の中は、ざいざいと鳴つた雑木の音に攪き亂されてゐた。龍子は丘をめぐる黑い樹に添ひながら時々息を切つて驅けた。

三

小さい停車場へはひつて、龍子が少時立つてゐると、奥から改札の男が出てきた。それは龍子の馴染の顔であつた。龍子は微笑しながらその男の傍に寄つて行つた。

この停車場は、單に郊外から東京へ通じる電車の乗場であつた。改札の男は附近に住むこの人等の顔には馴れてゐても、名前を知らなかつた。龍子が自分の家の名を云つて、一時間ばかり前にその人が此所へ來たか何うかを聞いて見たけれども、改札の男は分らないと云つた。龍子はその様子などを話して、この改札の男が馴染んだ乗客の顔と符合させようとしたが、この男には中々思ひ付かなかつた。やつと、半時間ほど前にそれに似た人が上野へ行く切符を切つたと云つたけれども、それも覺束ない返事であつた。

龍子はそれを頼りにして、自分も上野の切符を切つて電車の乗場へおりた。切符を手袋をはめた片手に握つて、龍子は柱の蔭に立つてゐた。

寒い風が龍子の裾を吹いた。丘の上の立木が根こぎにされるやうに烈しく左右に吹き靡されてゐた。龍子は、その雲に動亂する雑木林の死のやうな黑い影を見上げてゐると、厭世的な陰鬱した氣持になつて、悲しみが物の底からだんだんに解れていつた。涙が臉をついてあふれた。

龍子は足を動かしながらこの涙を紛らさうとした。後の腰かけに腰をおろしたり、立つたり、歩いたりした。それから又柱の蔭に立つて、自分のいまの狀態を、よく明瞭と考へようとしたりした。

けれども、一切が直ぐ渦になつてその考へを昏くしてしまつた。なんにも分らなかつた。たゞ暗い悲しみがあとからあとからと彼女をおそつた。彼女は涙の流れるまゝに任せて、顔を傾向けて、雑木林を見上げながら立つてゐた。

十分程して電車が來た。それに乗つたとき、龍子はふとこの電車の中に慶次がゐるやうな氣がした。空いた座席の方角とはまるで違つた方へ[illegible]つたにも拘はらず龍子は[illegible]直覺的に感じて、どきりとした。龍子にはそれがひどく悲しかつた。彼女の入口に立つた足がわくわくした。さうして、その中には人が僅かだつたほど恐怖に閉ざされたけれども、人目の[illegible]にゐ

た車内の人の注意が自分に向いたやうな氣がして、彼女はなかに入つた。一番端に腰をかけて、ショールで半面を埋めながら彼女は車内をそつと見渡した。

なかは隙いてゐた。宏壽に似たやうな男も見えなかつた。彼女はそれで安心して、走り出した電車の響きに、あらゆる感覺を揺られながら、感情の外部だけが何事もない平常に復つたやうな心持で、彼女は恍然とした。戸に遮られて、外の風が聞えないのは彼女にはよかつた。走り過ぎてゆく窓から見える森や林が、斯うしてゐると風をも受けてゐないやうに見えた。車内の人々の沈默してゐる姿も、靜に彼女の目にはひつた。

然しそれも僅の間であつた。上野まで出てから、何うして慶次の行先を見定めようと云ふ不安で、そのおちついた氣分は直ぐに破られた。的もなく探し歩くことはできなかつた。慶次の行つた先きを知る爲に、慶次の懇意な人たちに電報でも打つて見ようかとも思つた。然し、そんな人騒がせもできなかつた。なんの爲に慶次が家を出た？――然う云ふ事を人々に聞き探られるのが辛かつた。罪惡だと罵られた自分の行爲が、思ひがけなく自分において世間を狹くしつゝある事を彼女は氣付いて、いやに思つた。

何もかも、二人の間は破れてしまつたのではないか。それは自分が打破つたのではないか。最初思ひ決したやうに、自分は慶次から離れて、いつたん自分のやつた行爲のまゝに、明らかに自分の境涯を導いて行くのがほんたうではないか。何故私はそれを又裏返さうとするのだらう。慶次にはあの爲に、これから却つていゝ生活が表はれるのかもしれない。私はそれを妨げることはない。慶次の行くまゝに私は行かせておけばいゝのではないか。さうして、私は私だけの生活にはひつてゆく。それで二人の間が終つてしまへばそれでいゝのだ。

「私は何をしてゐるのだらう。」

龍子が斯う思つて自分の心を彈いた刹那に、慶次に對する戀しさが、火のやうに燃えた。その戀しさがすべてを打消してしまつた。唯、慶次に逢へさへすればいゝと云ふ子供のやうな願ひで、彼女の胸はいつぱいになつた。

さうして、うろ〳〵と慶次を探し歩いてゐる自分の姿を心に描いて、彼女は自然と涙ぐんだ。もしこれぎりで慶次に逢へない運命だつたら何うしようと思つた。然う思ふと彼女は猶更悲しくなつて、自殺と云ふことを思ひ耽つた。

龍子はほんたうに死ぬやうな氣がした。このまゝで慶次に逢へないなら、自分はきつと生きてゐるに堪へられないに違ひないと思つた。龍子は寂しくて悲しくてたまらなかつた。耳についてゐて離れないぎしりとなつた踏板の音を、彼女はまざ〳〵と繰り返しながら、悲しい思ひを我慢して唇を噛んでゐた。

上野に着くと、彼女は直ぐ思ひ付いて、大きい停車場へ入つて行つた。どの汽車かが發車する時であつた。人々がざわ〳〵と待合室から改札の方へ出て行つた。驛夫が、日光行の出ることを知らせて呼んでゐた。

龍子は唐突に柱の傍に立つて四邊の騷がしさに心を奪はれながら、彼方を向いて押してゆく群集の跡を見てゐた。荷物を抱へた赤帽が龍子の腕に突つかゝつて、その横を通つて行つた。

龍子はあの群集の中に慶次がゐるやうな氣がした。傍へ行つて探して見ようと思ひながら、つと前へ出ようとした時に、ふいと、龍子の立つた側面の待合室から出た男があつた。その男は黑木綿に模樣を革で張りつけた手提袋を、外套の下から出してゐた。その袋に見覺えがあつた。龍子は思はずはつとして、柱の蔭に身を隱すやうに後へ足を退いた。それは慶次であつ

た。

龍子の胸がどき〳〵と戰へた。血が一時に上つて彼女の顏は赤くなつた。瞬間に目の前の何も彼もが、粉碎になつて散らばつたやうな氣がした。彼女はしばらく、がらんとした中に一人突つ立つてゐるやうな曝された氣持でぢつとしてゐたが、思ひきつて半身を出して、もう一度今の場所を覗いて見た。慶次はそこにゐなかつた。目で探してゆくと、改札の近くに立つてゐるその後姿が見えた。

彼女は追ひかけるやうに五六歩前に出たけれども、立ち止つて慶次の後姿を眺めてゐた。慶次の姿はやがて群集の中にまぎれて見えなくなつた。プラットフォームの上を多くの人がばらばらと驅けてゆくのが、光景を遮つてゆく龍子の眼にはひつた。

龍子は後悔した。どうして傍まで近寄つてゆくことができなかつたのか、どうして氣後れがしたのか、自分にも分らなかつたけれども、瞬間に思ひ返して、心を急かしながら日光までの切符を買つて、直ぐその後を追つた。何の車室に慶次がゐるのかそれを知らうとして、龍子は車掌の前に躊躇してゐたが、發車を促されて龍子はあわてながら、そこから隔つた二等室にはひつた。

四

汽車は直きに動き出した。

龍子の乘つた室は中央にクッションの仕切りのついた狹い室であつた。彼方に平常の服裝をした僧侶らしい人が一人乘つてゐた。龍子の前に、お召地の袴をはいた大柄な男が外套を着たまゝで仰に寢てゐた。龍子は一尺とはなれない自分の膝の前に寢てゐる男が、唯、むやみと汚くてたまらなかつた。龍子は顏を外して、成る丈、その仰に寢てゐる脣のあつい男の顏が眼にはひらないやうにしながら、隅の方に自分の身體を壓しつけるやうにして腰をかけてゐた。

慶次はどこまで乘るつもりなのか、龍子には考へがつかなかつた。停車する每に、慶次の姿に注意しなければならないと龍子は思案して櫛をだして亂れた髮をかいたりした。

汽車は都會を遠くはなれるほど、停車場から停車場までの時間が長くなつていつた。窓から黄色く熟れた畑が見えた。森の樹が見えた。藪際の崖道に、こぼれるやうにぎつしりと栗の實がついてゐた白樺の老木があつた。其所で二人ふところ手をしながら眞つ直ぐに田圃道を驅けだして行つたりした。その突き當りに赤い鳥居があつた。

慶次も同じ汽車の窓から、それ等を眺めて行くのだらうと思つた。思ひがけなく慶次が停車場にゐた事が、彼女は今思ふと不思議なよろこびであつた。もう五分おくれたなら彼所では逢へなかつたのだつた。微妙なところに二人の運命の絲がつながれてゐた。二人の約束は永いのかもしれないのだと龍子は考へた。

汽車が震動する度に、慶次の身體もこれと同じ震動を受けてゐるのだと思つたりした。やがて、慶次の前に自分が立つ時の事を思つて、彼女は、初めて嬉しいと云ふ感情を味つた。もう何日にも、斯う云ふ優しく微動する感情を味つたことがないやうな氣がした。顏を合せて一度手を取り合へば、それで慶次の苦痛も消滅して行くやうな氣がした。すべてはこの刹那の爲しいと云ふ感情の中に、二人の間は溶けていつて了ふやうに思はれた。最初の愛の人形がつくられる。龍子は其れを夢みた。

龍子は停車する度に、窓をあけて下車する人を眺めた。[illegible]つていつた。僧侶らしい男は、もう餘程手前で下りてしまつて、

寢てゐる男ばかりが殘つてゐた。龍子は下駄を脱いで、クッションの仕切りを此方から彼方へ飛び越して、彼方側の腰かけへ行つた。さうしてそこに一人してゐた。昨夜から食をとらずにゐるのだけれども、龍子は何も欲しくなかつた。今日の日も、もう午後の三時を過ぎてゐた。

汽車が走れば走るほど、龍子の心は平淡になつていつた。大きな河が眠るやうに流れてゐた。影をかされて、曇つた西の空の果てに淡く、見えてゐた山の姿が、だん／＼に濃くなつていつた。山は北の空にも現はれてゐた。龍子はある限りのなつかしさで、その山の姿を眺めた。放膽な山の姿は、龍子の感覺を大きく新らしく伸んびりとさせた。龍子は初めて自由な氣がした。さま／＼の心勞がその心の底から消えていつた。山のこゝろが自分の魂に響きを打つてくるやうであつた。彼女の精神が自然と深く大きく明いていつた。

「なんて親しい色をしてるのだらう。」

龍子は然う思つて、空想的な代赭色の山の襞を眺めた。

氣がせい／＼とした。龍子は當分山を見て暮らしたいと思つた。誰れの顏をも見ずに、たゞ山を見て日を送つて見たいと思つた。さうして異所で靜に考へたい。一日でも落ちついた心の生活がして見たいと思つた。

龍子は無意識的に、停車すると直ぐ顏を出して、下りてゆく人々を注意した。乘車してからもう三時間くらゐは經つやうな氣がしたが、下りてゆく慶次の姿は見えなかつた。日光まで行くつもりなのかと龍子は考へて見た。それとも何所かの停車場でその姿を見紛つてしまつたのかもしれない。若し然うだつたら自分はこの儘一人で日光へ行かう。さうして、一人でゐて一人で考へよう。

誰れの顏も見ずに、誰れの感情にも煩はされずに、私は私の事をそこで考へる。――私は一人でよく考へなければならなかつた。私は私の行爲についてよく考へなければならなかつた。――

昨夜から彼女の上に起つた一切が、恥ぢを含んで靜に彼女の腦裡に上つてきた。屈辱が點々として自分の周圍に落ちてゐた。

Kと云ふ大きい町の停車場で汽車がとまつた時、龍子は、自分の車室より後方から下りた慶次が、自分の車室の前を通つてゆくのを見た。その姿を認めた時に、この儘で慶次に逢はずに別れて行かうかとまで、[illegible]きたが、龍子は衝動的な行爲で汽車を下へおりてしまつた。さうして、慶次のあとにそつと隨いて階段を上つていつた。四五人の人の足音に交つて、二人の足音が夜の上に呼應するやうに響いたけれど、慶次は振り返らなかつた。龍子はわざと後れて隨いていつた。改札口へおりるまでも、龍子はその傍へ近寄らないやうにして歩いた。切符を渡す時に、慶次は偶然後を振り返つて龍子の姿を見つけた。慶次は驚いた眼をして、龍子の顏を見た。

龍子はつゞいて改札口を出てから、慶次の傍に立つて、だまつてその顏を見つめてゐた。慶次の顏は眞つ蒼だつた。その顏が一目でやつれてゐた。

「何所へいらつしやるのです。」

龍子が徐な口のきゝ方で斯う聞いた。

「どうして來た。」

「あとから……」

慶次も自分の傍に立つた龍子の顏を見つめてゐたが、だまつて町の方を向いて歩きだした。龍子もそれに並んで行つた。大通りの彼方側に大きな宿屋の建物が幾棟かつゞいてゐた。その軒に灯がついてゐた。皮膚を切るやうな山の風

が龍子の顔と足を襲つた。龍子は寒さに身震ひしながら田舎の町の灯をめづらしく眺めたりした。日はまだすつかり暮れてゐなかつた。薄光りがいつまでも漂つてるやうに、屋根や地上が黄昏の色を弾ね返さうとして夕暮れの明るさを浮かせてゐた。

慶次はその大通りを右に折れた。慶次はその歩調を非常にゆるくして、ぶら〳〵と歩いてゐた。何か考へてゐるやうな考へてゐないやうな眞つ直ぐな顔の向けかたをして、時々、小さく溜息をつきながらこつ〳〵と云ふ足音を立てて歩いてゐた。道路の幅が狭くなつて、両側に軒の低い小さな料理屋がずつと並んでゐた。假名で家號を書いた看板の行燈が、薄赤い灯のいろを包んでその影が往來の地面を彩つてゐた。龍子はその灯の色を追ひながら、黙つて歩いてゐた。寂寥か、ぐん〳〵とその身體の上に現はれてきた。

料理屋の並んだ一部がつきると、小さな川が横に流れて、橋がかゝつてゐた。龍子はその橋を渡りながら空を見た。曇つた空は思ひがけなく半月がぼつとにじんでゐた。

あたりが暗くなつた。灯なども見えない暗い軒つゞきの町などを長く〳〵通つた。慶次はいつまでも黙つて歩いてゐた。龍子に一言も聲をかけなかつた。龍子は幾度も立ち止らうとしながら、無暗と引きずられてその後に随いていつた。暗い町が彼女にはたまらなく厭であつた。そこを何町か曲り〳〵して歩いてきた時に、緣日のやうに賑やかに灯の輝いた露店が、行手の四角の一角に見えてきた。闇の空間が明るく灯にぼかされてゐた。

やがて二人はその賑やかな市の立つてゐる横の通りを突つ切つて、又暗い町にはひつた。慶次は直ぐ足をとめて龍子の方を見た。さうして、嗄枯れた聲で、

「僕は用があつて妹のところへ來たんだ。」

と云つた。

龍子はそれで初めて思ひ出した。此町に慶次の妹が人に嫁付いてゐた――

「然しお前といつしよに今夜は其家へとまる譯にはいかない。お前もいやだらう。」

慶次は然う云つて少し考へてゐた。龍子は暗い地上に目を落してだまつてゐた。慶次の聲が遠くからひゞいてくるやうに思はれた。

「何所かそこいらの宿屋へでも行かう。」

慶次は斯う云ひきつて、又、あとへ引つ返した。龍子は其れに伴いて行つた。

五

停車場の附近まで引つ返して、二人はある旅宿にはひつた。通された室は二階の右の廊下を曲つた突き當りであつた。六畳の仕切りの襖に、墨で描いた四君子の唐紙の繪が一枚づつ貼つてあつた。龍子はコートもぬがずに、女中の運んできた火鉢の前に坐つて手を暖した。道の途中で紛れた二人がお互に見付け合つたやうな輕い氣持が浮いてゐたが、二人は長い間黙つて坐つてゐた。慶次は龍子の顔を見ないやうにして、俯向いて煙草を吸つたりした。電燈の灯が見知らない二人の人を咎めるやうに高い天井の下で空々しく輝いてゐた。

「もう歸らないつもりだつたんですか。」

「うむ。」

こんな簡單な言葉が取り交されてから、又二人は黙つてゐた。龍子はづき〳〵と頭が痛みだしてきた。女が入浴をすゝめに來た時、慶次は出て行つた。

室の周圍がひつそりとしてゐた。一つ二つ先きの室から、帳面の紙でも一枚〳〵と返してゆくやうな音が、時々静に[illegible]さうに聞えてきた。遠くに樂隊のはやしの音がしてゐた。ち

つと耳を澄ましてゐると、何とも云へぬノロマな樂隊の調子の中から出てくるドウンと響く奴隷の返事のやうな低い音と、ガヤ／＼してゐる雜音の中から特にある一つの聲の響きだけがいつしよになつて穪高く流れてるやうな群集の訛りの音とが縺れ合つて、田舍の町の散漫な空氣を搖つてゐた。龍子は今歩いてきた町の樣子を眼に浮べてゐた。暗い灯りが所々にあつた。小さな橋があつた。水の流れが黒かつた。黒い板塀が長く／＼つゞいてゐた。——その中を歩き廻つてゐた自分の姿と慶次の姿とを見つけ出して、龍子は物淋しい氣分にふさがれた。

　龍子は慶次のことを考へた。自分を見ておどろいた時の慶次の顏の表情——思ひの外に慶次の顏がやつれてゐた、と龍子はそれを哀れに思つた。慶次に逢つて、一言物を言ひ交したその時から、もう慶次に對する一種の反抗的な感情が極くかすかに兆し始めてゐたのだけれども、かうしてゐれば矢つ張り、猶一層に男を戀しく思つた。離れたくはないと云ふ肉に甘えた感情がひし／＼と迫つていつた。それに、久し振りで慶次と旅の宿に身を休めたと云ふ事で、彼女にある追憶が起つてきた。龍子はその昔の旅のこゝろを繰り返した。

　それからもう八年になると龍子は思つた。二人は東京を逃げて、京都の祇園の宿にかくれてゐた事があつた。丁度五月の初めであつた。圓山の公園に葉の出た遲櫻が咲いてゐた。毎日毎日雨が降つた。龍子は袷を着てゐた。——部屋の二方の白い壁に、洋館に見るやうな窓が二つゞつ切つてあつた。龍子はその窓に肱を突いて、石燈籠に降る靜な雨を眺めてゐると、その肩に慶次の手がかゝつて、いつまでも其の身體を押へつけてゐたりした。その座敷に添つた長四疊の室へ入つて、女中に京都風の髮を結つてもらつたりした。慶次の師匠が金を持つてたづねて來た時、龍子はその四疊の室にはひつて半日もかくれてゐた。龍子が女中といつしよに雨の中を清水へ參詣などしてきても、慶次はどこへも出ずに寢てばかりゐた。二人は其所で、どんな事があつても、きつと一所になると云ふ約束をした。どんな事があつても離れないと云ふ約束をした。

　それは二人の過去のおもてに貼りつけられた美しい繪の中の一つであつた。この繪ばかりは、時の力に蝕まれもされずに、いつも鮮やかな、緋桃の花のやうな可愛らしい色彩をかゞやかしてゐた。

繪の中に描かれた人物は自分と慶次の外にはなかつた。

けれども、繪は繪であつた。繪になつてしまつたのだ。その時の二人の呼吸も、その觸れ合つた唇もそれは再び繪の中から生きて拔け出てくる事はできなかつた。

龍子はそれからそれへと繪を追つた、さうしてぢつと見詰めた。見詰めても、見詰めても、繪は繪のまゝで卷き返されていつた。

「はひつてきたら何うだ。」

湯から上つて來た慶次が、龍子の顏を見ると斯う云つた。龍子は俯向いたまゝで頭を振つた。

　直ぐに食事の膳を女が持つて來た。龍子は今日一日何も口にしなかつた事を思ひ返しながら、箸を取つたけれども口のなかがはさ／＼してゐて味がなかつた。それで自分は好い加減にして、慶次が食を重ねてゆくのを小憎い氣持で眺めてゐた。

「食べないのか。」

慶次が中途で龍子に聞いた。

　食事が濟むと、二人は小さい火鉢に寄り合つて手をかざした。龍子はやつぱり、づき／＼と頭が痛んでゐた。それを堪へながら、妹のゐる

家は何處なのか其れを慶次に聞いたりした。慶次は妹の家の樣子などを話したり、田舍の町のわびしい光景などを語つたりした。その間々に、ぽつりと絲の切れるやうに話が續かなくなつて、お互に默つて考へ込む時があつた。

それは考へるのではなかつた。二人共昨夜からの激しい心勞と肉體の疲勞とで、まるで病的な睡眠が朦朧とおそつてくるやうな氣がするからであつた。然し龍子はそれが眠りがくるのだとは思へなかつた。時々意識が薄くなつてゆくのを自身に神經を働すやうにして、精神をはつきりさせようとした。さうしては慶次のやつれた顏を見た。慶次の默つてゐるのが龍子には苦しくつてたまらなかつた。けれども自分から口を開くことはいやなのであつた。それは、一言でも物を云へば、あの問題に觸れなければならないと云ふ事が煩はしいからであつた。

慶次は幸福のやうな氣がした。龍子が自分の後を追つてきたと云ふ事が慶次には嬉しかつた。これだけは紛ふべくもない女の眞實のやうな氣がした。もうこれで一切が濟んでしまつたやうにも思はれた。龍子の罪惡も、自分の嫉妬もあの激怒も、一切が過ぎ去つて了つたやうにも思はれた。過去が消えて、新たな愛の結び目が二人の間につながれるやうにも思はれた。

けれども、慶次は何か解決しなければならない事があるやうな氣がした。何か極めておかなければならないものが、あるやうな氣がした。二人の間がこの儘で舊に戻つてはならないやうな氣がした。それさへ極りがつけば其れですべては溶け去つてしまふのだと思つた。

其れは、たゞ一言の女の謝罪の言葉であつた。それさへ聞くことが出來れば、自分は全くよみがへつたやうな新らしい悅びの中で、女を抱くことができるのだと慶次は思つた。けれども龍子はいつまでも何とも云はなかつた。

「來る時に轢死者の千人塚があつたね。」

慶次がふいと思ひ出した。

「氣が付かなかつたわ。どこいらに。」

「餘つ程、此方へ來てからだ。」

しばらく、恐しい幻想がお互の瞳の中で映り合つた。龍子は慶次の顏を見詰めてゐた。

「僕はあれを見た時ぞつとした。」

「どうして。」

慶次はあとを云はずにゐた。さうして、今朝家を出てから、幾度も死なうと思つたほど自分の感情が女々しくなつてゐた事を考へてゐた。

憎むべき女！　慶次は心の中で繰り返した。昨夜のやうな狂暴な感情がふつと動いて、血が沸えた。

「どうして僕のあとを隨いてきたんだ。どうして同じ汽車に乘つてゐたんだ。」

慶次は龍子に聞いた。

「あなたを探しに上野の停車場へ行つたんです。然うしたら丁度あなたが彼所にゐたんです。けれども――」

龍子は斯う云ひかけて、あの時、何うしても慶次を呼ぶことの出來なかつた氣後れを、自身に考へて見ようとして、言葉をとめた。慶次はその時、初めて龍子の顏をしみ〴〵と見た。龍子の眼は充血して皮膚の荒れたその顏が赤味を帶びてゐた。皆しがざら〴〵と立つてゐた。丁度酒を飲み過した後の膚の荒れ方、その薄い皮膚を透して醜く現はれてゐるやうに見えた。

そこへ、男が寢臺を持つてはひつてきた。慶次が何か書いて男の前へ抛り出してやると、龍子は彼方を向いて、床の間の壁の隅を見つめてゐた。男が行つてしまふと、龍子は又膝を慶次の方に向けて、その顏をぢつと見た。

「あれぎりであなたに逢へなければ私、死なうと思つた。」

龍子は俯向いて呟くやうに然う云つた。その聲がふるへてゐた。

「何故だ。」

「あんまり戀しくつて――何うしていゝか分らなかつた。」

龍子の俯向いてゐた眼から不意に涙が落ちてきた。龍子は半巾を出してそれを拭いた。拭いても、拭いても、涙があふれた。

「あなたは何うしても別れようと思つたんですか。家を出てしまつて私を忘れようと思つたんですか。

慶次は返事をしなかつた。

「あなたには其れが出來るかもしれないが、私は別れるのはいやです。私は何處までもあなたの後を隨いてゆきます。別れるのはいやです。」

「けれども、お前が僕に要求したことぢやないか。お前は別れようと云つたぢやないか。お前はどんな事をしたんだ。考へて見ろ。」

「いゝえ、私は何うしても別れるのはいやです。駄目なんです。あなたに別れられないんですから。あなたとは別れることが出來ないのです。」

その聲が涙にふるへて、口惜しさうな息の彈みが絡んでゐた。あとを續けて何か云ひかけようとしたが、聲が嗚咽でふさがつてしまつて出なかつた。その胸が破れさうに波を打つてゐた。

女の興奮したこの言葉を聞きながら、慶次は腕組みをしてぢつと默つてゐた。

女は惡い事をしてゐる。自分を捨てて他の男を愛した。自分の想像もつかないやうな愛着の甘い言葉で、他の男のこゝろを惹きつけて、そして女はよろこんでゐた。それを自分が知つても女は平氣でゐた。自分の爲た事は自分の爲た事だと云つた。其れが面白くないなら別れよと云つた。――

龍子の行爲に對する極端な怒りと憎惡が、いきなり胸を打碎くやうに起つて、その脣がふるへた。

「お前は考へて云つてゐるのか。考へなしに云つてゐるのか。」

「私は考へて云つてるのです。今日私がどんな思ひをしたかあんたには想像もできやしないでせう　私がどんな思ひをしてあなたの後を追つかけて來たか。――」

龍子の涙は漸くきれて、その聲がはつきりしてきた。龍子は斯う云つてから、自分の聲が聞き聞れない――他人の聲のやうな氣がして、ふとその聲を怖んだ。さうして慶次の顏を見た。突然、はげしい力で彼女の肉の上にある慾望がおそつてきた。龍子はそれを何うすることも出來なかつた。四肢が釣れて呼吸が燃えた。龍子は脣を嚙みながらいつまでも慶次の顏を見据ゑてゐた。

「僕は何うしても別れようと思つたのだ。これぎりで逢ふまいと思つてゐたのだ。――」

「私を殺さうと云つたぢやありませんか。何故然うしないんです。そんな事を思ふなら殺して下さい。殺しちまつて下さい。私はまだその方がいゝ。あなたに殺されるか、もつとそれよりも酷い目に逢はしてもらつた方がいゝ。もうこの上もない慘虐な目に。――」

龍子は自分の手を握りしめながら、身體を慶次に突きつけて斯う云ひつゞけた。自分の身體ががじり〳〵した。自分の肉全體を燃え上る火の中に抛り込んでもらひ度いやうに肉が苛れた。

「燒き殺して下さい。」

龍子は底強い聲で斯う云つてその身體を慶次に摺りつけた。慶次の身體がその動搖を受けて彼方此方に搖れたけれども慶次は手を出さなかつた。

「僕には分らない。」

「何が分らないのです。分つてゐるぢやありませんか、私にもよく分つてゐる。」

「僕には分らない――僕は歸らないとは云つたが、然うぢやなかつた。僕は明日にも、今朝にも、引つ返さうかと思つてゐたのだ。何うしてもお前をその儘にしてはおけないやうな氣がした。」

慶次は險しい眼で龍子を見た。然しその口許に蒼い微笑が浮んでゐた。その微笑を受けた龍子の眼が瞬間的に侮蔑の光りを含んでじろりと動いた。龍子の心がすつと冷たく明らかになつた。龍子はしばらく口を閉ぢてゐた。

「どんな思ひをしてお前が僕のあとを追つてきたか――家を出てから僕がどれほどの思ひをしたか――お前には比べて考へることが出來るか。」

龍子はその言葉を、男の顏から嚙み味はうとするやうに、嘲笑を帶びた目で見つめてゐた。

「お前はこんな苦痛を僕に與へたのだ。僕はもう何うすることも出來ない。僕は幸福にはなれない。」

憎むべき女だ――慶次は再びそれを心に繰り返した。

「お前は僕の前に來て自分の行爲を悔いてるのか。」

「いゝえ、後悔なんかしてません。決して。」

龍子は冷たくから云ひ放つた。身體が斜になつて、少し慶次から退らせた左の肩が上つて見えた。

「後悔してゐないのか。然うか。それで凡てがお終ひだ。」

慶次は潰れたやうな聲で云つた。慶次は女の心の底に陰を卷いてゐるその敵意の情を見ることが出來たやうに思つた。この女を何うすればいゝだらう――慶次は女の髮を掴んだまゝ、ずん〳〵と深い底へ落ちて行くやうな重い陰鬱に捉はれながら、指も動かさずにぢつとしてゐた。

「私は今朝父のところへ行つてしまふつもりだつたのです。」

龍子の聲が低く寂しく響いた。慶次はふとその眼を動かした。

「あなたに殺されるのがこはかつたのです。こはくつて堪らなかつたのです。それで逃げて行かうと思つたのです。その儘で私がもしあなたの跡を追つてこなければあなたは何うするんです。」

「僕は東京へ引つ返してゐたかもしれない。いや、引つ返したにきまつてゐる。さうしてお前を探すだらう。」

「さつきKの停車場であなたを見かけた時も、私はあなたに逢ひたくなくなつたのです。その儘歸らうかと思つたのです。けれども矢つ張り尾いて來たんです。」

龍子は言葉を切つて、考へた。

「この事は後悔さへすればいゝんですか。あなたの前であやまりさへすればいゝ事なんですか。」

「さうしてくれなければ、僕はお前を許す事は出來ない。お前の眞實を認めることができない。」

「然うですか。私は許してもらはなくつてもよござんす。私は惡いことをした女のまんまであなたに復讐してもらひます。」

龍子は笑はうとしたが笑へなかつた。胸が迫つて涙がじり〳〵と湧いてきた。

「あなたにどんな目にでも逢ひませうよ。あなたの好きにして下さい。私の爲た事があなたにそんな苦痛を與へたと云ふことなら、あなたからどんな復讐でも受けませう。好きにして下さい。私、決して後悔してはゐないんです、自分

の爲た事を。

龍子は決心したと云ふやうな緊い顔付をして、その口を結んだ。

心を責める？ あの事が？

龍子は自身の心に聞いて見た。然うだ。確かにあの行爲が私自身の心を責めたに違ひなかつた。自身に責めたと云ふよりは自身に恥ぢたのである。それは、自分が愛の言葉を一方に注つてゐながら、自分の行爲を二人の男のどちらへも明らかにする事の出來なかつたのを卑怯だと思つて恥ぢたのである。一人に心を惹かれながら一人にも心を殘してゐたと云ふ事は、一人を欺き、一人を弄んだ事になつた。それが私の心を責め通してゐた。私は何方へ對しても惡いことをしたと思つた。さうして私は自分のいたづらを悔んだ。私は同時に兩方へ嘘を吐いた。私は同時に二人の魂に執着して、然うして同時にその魂を踏みにじつた。私が一方にこの肉を許さなかつたと云ふ事は何の條件にもならない事であつた。

けれども、その行爲を、私が慶次の前に懺悔をしなくてはならないと云ふ事はない。私は決してそんな事はしない。それは厭である。あの行爲も、私の男へ對する愛も、みんな私のものである。何の爲に私が慶次へ悔いの心を見せる必要があるのだらう。私はそれほどにしても慶次の心を求めようとは思はない。私はこの人も愛してゐる——と自身に思つてゐればそれでいゝのである。私は默つてゐればいゝのだ。後悔せよと云ふやうな事をこの人から強ひられるのは侮蔑だと思ふ。私はいやだ。慶次から何も許してもらはうと思はない。

龍子の方へ、だん／＼重たくその心の底に沈んで行つた。家を出る時、あんなにも慶次を戀しく思つた事を繰り返して悲しさが迫つた。涙がとめどなく流れた。復讐の爲得るまで、自分は慶次の傍にぢつとして見てゐてやる。どんな復讐でも受けよう。今朝のやうにそれを恐れて男の手から逃げようと思ふやうな卑怯な事は決してしまい。復讐がくるまで私はぢつとしてゐる。さうして默つて受ける。さうされた方が自分の立場が徹底して心持がいゝ。その方がいゝ。——龍子は然う思つた。

さうして、あしたの朝早く、一人して東京へ歸らうと龍子は決めた。

二人は長い間默つてゐた。風が廊下の雨戸をガタ／＼ふるはせた。痩せた女が用を聞きに來て直ぐ出て行つた。

「——何故そんな事をしたのだ。」

慶次がふッと途切るやうな聲で云つた。龍子は振り向かなかつた。この男にもう口を突く用はないと思つたからである。

「——可哀想だと思つてくれ、僕を。」

慶次の眼から涙が落ちてゐた。慶次は腕組みをしたまゝで嗚咽した。

六

慶次はまだぐつすり寢てゐた。

龍子は起きて廊下に立つて外を眺めた。向うに停車場の家根が見えた。その家根の後に山が見えた。空を切つてうねつた山の輪郭が龍子の眼のさきを遮つてゐた。空が鉛のやうに曇つてゐた。龍子は山を見た。それから、山と家根の間から一筋濃い烟が少し右にからんで立ち騰つてゐるのをぢつと見た。彼女の心は陰鬱であつた。あたりの風物と同じやうに、たゞ暗いものばかりが其の心を取り卷いてゐた。龍子は、また室内にはひつて障子を閉めた。

汽笛と、車の響音が遠く空を貫いて消えていつた。——男か女か分らないやうな子供の聲で、訛りの交つた音で唱歌をうたつてゐるのが、直ぐ階下から聞えてきた。周圍の室は昨夜

のやうにひつそりしてゐた。

龍子は慶次の方を見ないやうにして、夜着の裾のところに懷手をしたまゝで坐つてゐた。さうして、男の涙を見たあの瞬間からその情が夢のやうにくづれてしまつた事を考へてゐた。龍子は唯胸が閉ぢた。色も彩も消え〳〵になつたやうな寂しさが、打破られた戀のこゝろの上を果敢なく綴つてゐるのを彼女は自身に感じて、其れを靜にながめた。

龍子はそこに然うしてはゐられなくなつて、又立つた。立つて後の窓をあけて外を見た。この旅宿の一劃を廻つて流れる小さなながれが直ぐ目の下にあつた。きれいな水であつた。水がちろ〳〵と顫へて流れてゐた。

この水は何故あんなに顫へて流れるのかと龍子は思つた。龍子は又空を見た。空はやつぱり鉛のやうに曇つてゐた。それで身體をずつと延ばして、暗い外の町並みを眺めた。家號を假名で書いた小料理屋の紙行燈が一つ見えた。こゝの通りは、昨夜慶次と歩いたあの狹い横の通りなのだと龍子は思つた。こゝを眞つ直ぐに行けば小さい橋がある。あの橋の上で、雲ににじんだ半月を見付けたのだ——寒い風が肌を刺すやうに吹いた。龍子は窓をしめて、又暗い室内のなかに坐つた。黄色い夜着の縞と、脱ぎ捨てた辨慶のどてらの鼠いろが龍子の眼に、すぐ鬱陶しく映つた。

龍子は直ぐ汽車に乘つて東京へ歸りたくなつた。慶次の傍に一時間でもかうして坐つてゐる事が彼女には堪らなくいやな氣がした。それで慶次を起さうとして、そつちへ眼をやつたが、慶次のよく眠つてゐるのを見ると、この儘にしておいて、自分だけ此家を出ようかと云ふ考へがおこつた。龍子は階下におりて行つて、湯殿で髮を結んだり顏を洗つたりした。

「雪が降つてきた。」

「雪だな。」

然う云ふ聲が帳場の方でしてゐた。

二階に上つて來た時に、龍子は廊下に立つて雪を見た。つい今まで何も見えなかつた透徹した空間が、灰のやうにこまかい雪で埋まつてゐた。雪は風に飛びながら降つてゐた。

次ぎの汽車が出るまで、まだ二時間も間のある事を階下で聞いたので、龍子はその時間を何うしてまぎらさうかと考へながら、室内にはひつて衣服を着直したりした。慶次が起き返つて龍子の方を見た。

龍子はそれに氣が付いたけれども默つてゐた。慶次は床をはなれて、其れなり廊下の外に出て行つた。自分の何かしようとする事を、妨げる憎い影のやうな氣がして、龍子はその後を見送つた。

「何うしても歸る。」

龍子は然う決めて羽織の紐をむすんだ。

龍子が今から直ぐ東京に歸ると云ふのを聞いて、

「然うした方がいゝ。」

と云つた儘慶次は逆はなかつた。

「あなたは？」

「僕はこゝ二三日妹のところにゐようと思ふ。」

慶次は沈んだ聲で低く云つた。

慶次はさつき目が覺めてから、四五日龍子といつしよに旅で日を送りたいと云ふ事を考へてゐた。龍子もきつと其の企てをよろこぶだらうと思つた。旅にゐて心を紛らしたなら、自然自分の嫉妬も薄らぐだらう。龍子も自分の執念に煩はされることがなくつて、お互に暫しでも物忘れをした何事もない日に蘇ることができるに違ひない——慶次は然う思つて、新らしいよろこびに滿ちた眼を開けた。さうして床をはなれた——

それが思ひがけなく、龍子から東京へ歸ると云ふ事を聞いて、裂くやうに忽ち不快な聯想が起つた。疑惑の黒い雲がその胸にひろがつて、神經が脅かされるやうに戰へた。慶次の腋の下から冷たい汗が流れた。

慶次は荒んだ眼を伏せて、何か心に緘んでゐた。

「おや、然うなさい。私は家へ歸つて待つてます。」

龍子の聲が、平生のやうに明快に聞えたのにも慶次は反感が起つた。慶次は返事をしなかつた。

二人は又、膳を並べておそい朝の食事を濟ませた。時刻はもう午を過ぎてゐた。女が障子を開け閉てする度に、外の雪が見えた。雪は見る間に降りつのつてゆく樣な氣色を見せた。

「いつたん、他人を戀した女だ。」

慶次は絶えず斯う思ひを繰つた。――

龍子は無言でゐる自分の頭のうちに、ある煩悶が暗い陰を曳きながらそつと匍ひ擴がつてゆくのを感じてゐた。其の暗い陰のうちに、龍子の情緒をそゝる男の聲がひそんでゐた。光りを鬱陶しさうに見るきれいな男の眼がひそんでゐた。龍子はそれを自身の眼で追ひ除けようとするやうに、時々空を見て目叩きをした。龍子の胸は、だん／＼捨てがたい惱みに埋もれていつた。

「この雪に歸るんだね。」

突然、慶次の聲がした。龍子はぼんやりとして「えゝ。」と云つた。

急いで女の心に縋らうとするやうに、その聲がをのゝいて聞えたけれども、龍子は自分の心で其れを強くはね返してゐた。さうして、

「いゝえ、歸ります。あなたは後からいらつしやい、二三日宿るなら宿つて。――」

と慶次の顏を見ないで云つた。

慶次は何も彼も思ひ切つたと云ふやうに立ち上つて、窓の方へ歩いて行つた。そこを開けて、降りしきる雪を眺めてゐた。

先刻、龍子がそこを眺めて昨夜の情景を追想したやうに、慶次も軒の低い茶屋の並んだ町を見て、昨夜の事を繰り返した。自分はあの時、女を振り捨てゝ眞つ直ぐに行つてしまふやうなつもりでゐた。自分の後を追つてきた女の顏を見て、意外に思つたけれども、その女には再び物を云はないつもりで、此の町を歩いてゐた。自分は女の顏を見ると直ぐ女を捨てる覺悟をした。

慶次はその時からの自分の心の經路をもう一度引つ繰り返して辿つて見た。そこには、女の手でぐん／＼引つ張られて行つた卑劣な自分の姿が殘つてゐた。自分に對しては、肉のほかは何も持たないやうな女の姿が殘つてゐた。――

「僕は直ぐ妹のところへ行から。」

慶次は窓を閉めながら斯う云つた。窓から吹き入つてくる寒い風に、身震ひしてゐた龍子が若い顏を上げて慶次を見た。

何となく、これぎりで別れてしまふやうな氣がして、龍子はついと悲しさが迫つたが、それを抑へて微笑した目で慶次が自分の前にくるのを迎へてゐた。笑つた目の影に、微な憎みの影がたゝまれてゐた。

「お前は直ぐ行くのか。」

「まだ一時間ぐらゐ間があるでせう。」

慶次は女を呼んで、妹の住むA町まで車を賴んだ。慶次はそれぎりで物を云はずにゐた。

「二三日したら、ほんとに歸つていらつしやい。少し遠のいてゐた方がいゝでせうよ二人は……あなたもその間に考へて下さい。私も考へるから。」

龍子がこんな事を云つた。

龍子は慶次からはなれて、しばらく一人でゐたいと云ふ望みがいつぱいなので、却つて其れを都合よく考へた。今慶次とはなれて、一人になつてからの自分の前に、初めてはつきりと處決の姿が横たはるやうに思はれた。自分は其れを前にして誰れにも煩はされずによく考へることが出來ると思つた。その處決の姿がどつちへ現はれるかは分らなかつた。慶次への別離？新らしい戀への別れ？龍子は早く一人になりたいと思つた。この紛亂した感情を打鎭めなくてはならないと思ひつめた。彼女は沈み込んだ姿をして、慶次の前に坐つてゐた。

車が直ぐに來た。慶次は外套を引つかけながら、

「おや。」

と龍子に挨拶した。龍子は會釋をしたけれども、無暗に悲しくなつて言葉が出なかつた。自分の面に注がれた慶次の眼がちらりと光つて見えた。慶次は室を出て行つた。

七

列車は雪を衝いて走つてゐた。吹雪が見える限りの曠野をどこかへ引つ攫つて行くやうに見えた。森も、山も、原も、木も、吹雪に捲き上げられてはその姿を消していつた。時々河の流れが其の吹雪を破つて、鑛物のやうな結晶した黒い色を點出してゐた。龍子は窓に額を近寄せて、さかんな雪の姿を順々に見送つていつた。窓の外にこまかい雫が垂れてゐた。

どの停車場でも、人々が雪のかゝつた外套にくるまつて、彼方此方してゐた。吹雪を蹴つてきたと云ふやうな驕つた雄大な樣子振りで、列車が一々停車場にはひつていつた。さうして又吹雪を衝いて出てゆく列車の意氣横溢した姿を、停車場の人々は目を上げて一樣に見送つてゐた。誰れの眼も生き〳〵した力に滿ちた光りを滴らしてゐるやうに龍子に見えた。

何かをぢつと見詰めてゐるやうな眼をして、考へに耽つてゐる龍子は、時々窓に額を寄せては其れ等の景色に心を奪られてゐた。暖いスチームが彼女の足の爪先から胸に纏れまつはつて、クッションに身を落してゐる彼女の全身の血がぽつとりとしてゐた。この室には龍子の他には誰れもゐなかつた。

龍子は大膽に、ある思ひの中に其の心をすつかりと沈めてゐた。その思ひは、彼女の安らかな心を柔らかに、こは〲に、片端から食んでいつた。輕い囁笑の波が、彼女の血潮に動搖を與へてゐた。

「私を捨てないで下さい。どんな事があつても。きつとです。」

斯う云ふ男の聲が若やかに響いた。其れは誰れの聲であつたらう？龍子の血が、また柔らかに搖いだ。

「捨てやしません。あなたを捨てる時があつたら、私は自分を捨ててゐるでせう。」

龍子の耳に、又女の聲が若やかに響いた。其れは誰れの聲であつたらう？

女は鳩を袂で抱いてゐた。二人の周圍に集まつてきた澤山な鳩の中の一羽が、不意に女の胸に飛びついて絡んだのであつた。女はその唐突な鳩の愛におどろきながら、しつかりと抱きしめて鳩の嘴に接吻をした。

「早く、そのお米を出して頂戴。」

女が鳩をいたはりながら、その小さな頭を撫でながら、男に云つた。

男は硝子の蓋をとつて、其の中から米と豆を盛つた小さい土器の皿を取り出して、女の抱いてる鳩の傍に持つていつた。女はそれを受取つて、鳩に食べさせてやつた。男も嬉しさうに見

いてゐた。
「可愛い鳩ですね。」
「然うですね。」
澤山な鳩の群れが、泳ぐやうに二人を取り卷いて、くく、くく、とないてゐた。二人は鳩といつしよに遊んでゐた。その歸り途に男が云つた言葉があれであつた。女が返事をした言葉があれであつた。

龍子の思ひ出が、次ぎから次ぎと美しい色を含んだ靄の中に縺れては浮んでいつた。惱み深い男の心が、龍子の心に執拗くまつはつてきた。この頃になつて一層女から離れまいとして、しつかりと纏ひついてきた男の情念が、龍子の胸にいた／＼しい哀れさを帶びてはつきりと映つてきた。――憂鬱な眼をもつた男の大きな眼が、ふと彼女を覗くやうな氣がして、龍子ははつとした。誰れの眼であつたか、そのまぼろしの眼に覺えがなかつた。龍子の胸がかすかに動悸を打つた。自分はいま、眠つてゐたのではないかと思つた。然う思つて、龍子はいま迄の意識を探るやうに振り向いて見た。血を搖がしたある思ひが、夢でなく、彼女の腦裡に色を濃くして殘つてゐた。彼女はそれと心付いた刹那にたまらなく煩はしい氣がした。然う云ふ思ひに捉はれた自分が鬱陶しくいやな氣がした。けれども、然う思ふ傍から男の情念が、しみじみと哀れ深く彼女の心を襲つてきてはなれなかつた。龍子は窓の外を見た。雪が彼女の眼許を掠めて横に吹き過ぎて行つた。

中途から、この室に乘客が增してきた。煙草の煙が匂ひ強く室に流れた。新聞を返す音がひゞいた。太い男の話聲が龍子の耳に賑やかにはひつた。灯りが親しみ深い色を落して室内を照らしてゐた。外はだん／＼に雪の光りを殘して暮れて行つた。

ふと、龍子の心がぱつと開いて、急にその周圍が華やかになつていつた。自分の身體がいまそつくり自分のものだ、自分の精神がいまそつくり自分のものだ、と云ふ意識が彈くやうに強く起つた。彼女はまるで、この瞬間を何うしていいか分らないほど、その自由な氣分が嬉しくてたまらなかつた。何を思つてもよかつた。何を爲てもよかつた。誰れを捨ててもよかつた。誰れにそむいてもよかつた。誰れもの情念に自分の心を煩はされなくてもよかつた。自分を思ふものは、自分を思ふ人の心であつた。欺かれたと思ふものは、欺かれたと思ふ人の心であつた。弄ばれたと思ふものは、弄ばれたと思ふ人の心であつた――龍子にこれからの自分の生が自分の心のまゝに置いてゆくやうな氣がして、大きく、ひろくその心が擴つた。

東京もひどい雪であつた。汽車から下りた人たちは、停車場の一角に蝟集して、てん／＼に車を求めてゐた。雪の中に屯してゐる車夫は、どれも前幌を通して覗込みになかまで雪がいつぱい降り積つてゐた。車夫はそれを掃ひ掃ひして人を乘せてゐた。「白金三光町――」「神田の錦町――」然う云つて青い帽子を冠つた世話人が車夫を呼んでゐた。吹つ込む雪を避けながら乘客たちは難儀な姿をうろつかせてゐた。

龍子はつい其所の郊外へ行く電車の停車場まで車を求める譯にもいかなかつた。龍子は雪の中をそこまで驅けて行つた。僅の間に、髮も、きものも、足袋も、雪に濡れた。

電車が彼方へ着いてからも、龍子は自家へ行くまでの道を、雪を浴びながら、歩いて行つた。

郊外の道は布のやうに白かつた。歩を運ぶ度に駒下駄が着物の裾を咬へてざくり／＼と雪の中に埋まりつゝ行つた。全身に雪がかゝりなが

ら、額だけに冷たいものがちら／＼と降りかゝるのだけが感じられた。彼女の身體は温かであつた。時々、彼女は空を仰いだり丘から彼方を見渡したりした。雪の光りが何所までも展がつてゐた。こまかに際限なく降りしきつてる雪がその光りを透してぼんやりと見分けることができた。雪の降る下に、雪の積つた家根が薄つすりと浮んでゐた。

龍子はいつまでも、斯うして、ほつつき歩いてゐたいやうな氣になつた。駒下駄に力を入れては雪をしつかりと踏んで蹴つて歩いた。わざと深い呼吸をしては吹きつける雪に反抗した。然し、家へ着く頃には、その自暴な氣分が凝結してしまつて、息が切れて、その生氣が遠くなつてゆくやうな、何とも云はれないいやな心持になつてゐた。閉まつた門の戸をあけてはいつて、その入口の笹の雪がぱらりと額にかゝつたのを知りながら、玄關に腰を下した時は、半分氣を失つたやうな脈搏が、かすかに消えさうになつてゆくやうな氣持の中に、ぼつとしてゐた。

濡れたものを一切身體から脱つて、髪をといて龍子は自分の部屋へはひつた。室には明りがあかあかと點いてゐた。昨日の朝彼女がすべてを捨てて出ようとした時と同じ位置に、さま／＼なものがちやんとして動かずにゐた。鏡臺の上の油の壜も、細い肩をすぼめてその隅に明りを受けてゐた。彼女は泣きたいやうにこの室のなかのすべてが可愛かつた。

「お前たちはなんにも知らないだらうが、私は昨日から今日へかけて、生血を絞り盡すやうないろ／＼な思ひをしてきた。でも私は又此室へ歸つてきた。」

龍子はこんな事を思ひながら室の中を見廻した。さうして女中の揃へてくれた炬燵の中にはひつて寝た。久し振りで自分の夜具の蒲團のなかに包まつたやうな氣がした。自分の肌に馴染んだ夜着の柔らかさが、慰めるやうに彼女の身體にしつくりと纏繞つた。龍子は何も思はずに、明るい電氣の下で安々と眠りに就いた。

餘つ程更けた頃に、龍子は枕頭で何か音がしたので目が開いた。それは女中が手紙を持つて來たのであつた。手紙は安藤からよこしたものだつた。

「僕は一時から五時過ぎまでお待ちしました。どうしておいでがないのかと思ひ思ひ、よもやに惹かされて、一時間一時間と待ちくらして、とう／＼五時過ぎまでお待ちしましたがおいでがありませんでした。何うなすつたのかと思つて氣になつてをります。御病氣ではないでせうか。直ぐに御返事をお聞かせ下さい。さもなければ明日、もう一度彼の停車場でお待ちします。いらつしやれるなら、いらして下さい。僕は待つてゐます。」

然う書いてあつた。

今日はその日であつた。今日よく晴れてゐたら郊外を散歩する約束をしたのであつたと、龍子は思ひ出したが、手紙はそこに投げ出しておいたまゝで、又直ぐ眠つてしまつた。

八

翌朝龍子は割合に早く目が覺めた。外は晴れて、日光が雪の上に輝いてゐた。雨垂れが騒々しく家の周圍に音を立ててゐた。

龍子は身體に熱があつたけれども床を出て窓から青い空を見た。青い空はすつかり自身の口から吐き盡してしまつた白いものを、遙に見下して笑つてゐた。その面にいつぱいに光りがあふれてゐた。龍子はその光りを眺め／＼しながら、鏡の前に行つて自分の顔を映して見た。昨日も一昨日も、鏡に顔を映した時はあつたけれども、しみ／＼と自身の顔をよくは見ないやう

な氣がした。その顏は慶次のやうにやつれてはゐなかつた。眼に暗い影はあつたが、頰の肉も腮の肉も豐つくりと付いてゐた。血の色もきれいであつた。龍子は自分の手でその頰から腮の肉を撫でて見た。

しばらく龍子は明るい光線の射してゐる座敷の中を、寢衣のまゝで彼方此方と歩き廻つてゐた。ふと昨夜の宏三の手紙が目に入ると、それを取り上げて又讀んで見た。昨夜は何とも思はなかつた事が、今朝はひどく氣の毒に思ひ返された。雪の降る寒い停車場に、四時間も五時間も待ちつくしてゐた宏三の姿が、彼女の眼にあり／＼と映つた。

龍子は打つちやつてはおけないやうな氣がした。今日も、きつと又自分を待つてゐるのかもしれない。自分はそれを何うにかしなければならないと龍子は思つた。けれども然う思ふ傍から龍子の心にある殘忍な意地の惡い捨鉢な微笑が、忍びやかに浮んできた。

打つ捨つておけと彼女は思つたのであつた。彼女はこの手紙の一句々々から人の思ひを辿るのも面倒くさく、煩く、自烈度かつた。

「何うでもいゝ、何うでもいゝ。」

と龍子は胸の底で叫びつゞけた。これに就いて考へることは、丁度、露出した肉の上に物がひつたりと附着してくるやうな感じをさせた。

龍子は官覺的にその手紙を揉み苦茶にして端からぎり／＼と噛んでいつた。さうして、自分の仕出來したことが、仕出來されたまゝで横たはつてゐるのを、自分で嘲笑しながら冷たく眺めた。龍子はそこいらを開け放しておいて、再び床のなかに入つた。明るい光線が、粉を振りかけるやうに彼女の眼の周圍に注ぎ入つてきた。

龍子はうつとりと直ぐ眠つた。さうしてまざまざとした夢に入つていつた。それは全く夢とは思はれないほど明るく、幻の姿が動いてゐた。

龍子は丈の高い檜葉垣に添つてある露路をはひつて行つた。自分は入新井の宏三の家へ行くつもりで歩いてゐるのであつた。新築の家が五六軒、東に向き北に向きして一纏めに建つてゐるその一郭も、突き當りの格子戸の宏三の家も、事實の通りにその夢の上に現はれていつた。龍子は格子の前から裏に廻つて井戸端の方を見た。その井戸端に明るい日が射してゐた。そこで宏三の母親が洗濯をしてゐた。龍子が聲をかけると母親は自分の前に來てどうしたのかさめざめと泣いた。

龍子も悲しくなつてしばらく泣いてゐたが、自分は何時の間にか宏三の部屋に入つて、宏三と向ひ合つてゐた。宏三が頻りに立つたり坐つたりしてゐた。その素足があり／＼と龍子の眼に映つた。

龍子はひどく又泣いた。聲を上げて泣いた。

「あのお母あさんを見ると私はいつでも斯う悲しいんです。ほんとに何時見てもいゝお母あさんね。」

龍子は斯う云つたやうな心持で、いつまでも泣いた。さうして少しも泣いてゐない宏三が龍子には憎らしかつた。二人はその母親の事で何か云ひ爭ひをした。それは慶次の母親だと宏三が云つた。

けれども、龍子には宏三の母親としきや思はれなかつた。その顏も宏三の母親とおんなじ顏であつた。たいへんに暗い隅の隅の方に、その母親の坐つてゐる影が見えた。龍子は其所へ行かうとして立つたが、ちつとも歩けなかつた。龍子は、お母あさん。お母あさん。」と呼んだけれども、その母親はだまつてゐた。宏三は其の母親の傍に行つて何か話してゐた。

龍子は宏三がその母親と二人だけで話してゐ

るのが口惜しい氣がした。それで自分が何か云はうとすると宏三がいつの間にか自分の傍にゐて、自分の手を取らうとしてゐた。龍子はそれを頻りに拒まうとしてゐると、母親の顔と姿が直ぐ目の前に大きく出てゐたので、龍子は嬉しさに我れ知らず聲を立てながらその母親に縋らうとした。龍子の夢はそこで破れた。

何うしてあの母親を夢に見たのか龍子には分らなかつた。龍子は明るい座敷の中を目を上げて見た。そこに夢で見た母親の姿がはつきりと坐つてゐるやうに思はれて、なつかしいやうな氣味の惡いやうな思ひをした。

その時から龍子の身體に、壯熱が加はつて、龍子は直ぐにうと〳〵したが、午を過ぎた頃に龍子は客が來たと云つて起された。來た人は宏三であつた。龍子は床を出て宏三に逢つた。

階下の座敷に待つてゐた宏三の顔は蒼白かつた。宏三は何か急いてゐるやうな表情をして落着かない眼の配りかたをしてゐた。龍子の顔を見ると淋しく笑つて會釋した。宏三はマントを着たまゝで坐つてゐた。

「私は昨夜、殆ど寝なかつたのです。」

宏三は熱を帯びた眼を瞬き乍ら云つた。龍子は着物を曳き摺つたまゝで、其の前にしばらく立つてゐた。

「どうしました。」

龍子は別な事を云つてゐるやうな心持で宏三の顔を見た。急に悲しさが漲つてきたと云ふやうな顔をして、宏三は下をぢつと見詰めて物を云はずにゐた。

その表情が龍子の眼に映つた。この人は何をそんなに悲しがつてゐるのだらうと思つた。夢で見た宏三の顔が彼女の頭に浮んできた。龍子はやつぱり、ぼんやりと立つた儘で宏三の顔を見てゐた。

「上つては惡いと思つたんですが、我慢ができなかつたんです。――何うして昨日おいでにならなかつたんです。今日も。」

宏三は言葉を切つて龍子を見上げた。病氣らしいやうなその容態を見ると、又急にそれが氣になつた。

「どこかお惡いんですか。」

「えゝ、少し。」

龍子は宏三の前に坐ることができなかつた。その前に坐つてしまへば、自然と定まるものがあるやうな氣がした。それで何時までも立つてゐたが、今度は座敷の中を着物を曳き摺つたまゝまで歩き動いてゐた。

「手紙でも下さればこんなに心配はしないのに。」

宏三はその姿を見守りながら呟いてゐた。さうして、直ぐに立つて歸らうとした。

「歸るんですか。」

「えゝ。これで安心しましたから。どんなに心配したか知れないんです。ほんとに御病氣なら大切になすつて下さい。」

宏三は龍子が自分の前に來るのを立つた儘で待つてゐたが、龍子は遠くにゐて何も云はずに宏三の顔を眺めてゐた。

「急に上つたりして堪忍して下さい。ね。」

宏三は、自分の突然の訪問を龍子が氣に障へてゐるのだと思つた。それを許して貰はうとしてに甘えるやうに斯う云つた。

「惡かつたでせう。」

「いゝえ。」

龍子は頭を振つたまゝ遠くに立つてゐて動かなかつた。

「ぢや歸ります。」

宏三はひどく殘り惜しさうな顔をして部屋を出ようとした。と、急に、

「お待ちなさい。そこまで送つて行くから。」

と龍子が大きな聲で云つた。龍子はその儘二

階に上つて行つた。
龍子はぢきに支度をしておりて來た。考へ考へ歩いてゐるやうに、一段々々階子をおりてくるその足取りが鈍かつた。
「加減がわるいのでせう。外へ出てはわるかありませんか。」
宏三が、さも心配だと云ふ思ひをその言葉の調子にこもらしてゐるやうな云ひ方をした。さうして龍子の顔を覗くやうにした。龍子は返事をしないで先きに立つて外に出た。
雪溶けの泥濘道を氣を使つて歩いてゆくので二人は、やゝ長い間默つたまゝで過ぎて行つた。龍子はこの儘何も云はずにゐて停車場まで送つて行かうと考へた。何事も手紙に書いて送つてやればいゝ。然う思ひながら龍子はふと足をとめて、宏三の方を見た。宏三は直ぐにその方へ顔を向けて、龍子の何か云ひ出すのを待つやうな氣色を見せた。その唇が赤く美しい色をしてゐた。帽子を脱つてゐたので、長い濃い髪に日光がきら／＼と射した。龍子は思はず宏三に向いて笑みを漏らした。宏三は其れに微かな笑ひを返した。
が、その笑ひを見た瞬間に、龍子の胸に忽ち暗鬱なかげがさつと閉がつた。
「私たちはもうお別れしなくちやならないかもしれない。」
龍子は斯う云つてしまつた。宏三はある豫示を得たやうな閃きを含んだ眼をして龍子を見返つたが、龍子はその先きを續けなかつた。
二人は、戸をおろした掛茶屋のところを廻つて、丘の上に出た。その柵のところに立つて龍子は西の空を眺めた。空が見える限り晴れ渡つてゐた。雪の反射が目に痛かつた。小料理屋の紙行燈の出てゐた町の空も、晴れてゐるやうに見えた。龍子は一昨日の烈しい風の中をこゝを駆けて行つた自分の姿を振り返つて見て、苦しいやうな痛いやうな思ひに刺された。
「何かあつたのぢやないんですか。」
宏三が斯う云ひながら龍子の傍に身をよせた。
「これぎりお別れするやうな事があつたら、あなたはいやですか。」
龍子は遠い西の空を見ながら聞き返した。
「えゝ、いやです。」
宏三がはつきり云つた。
龍子は何も彼も云つてしまはうか、何うしようかと惑つた。けれども云ふことができなかつた。一昨日からの事を、すつかり話すことはできるにしても、自分が醜態を演じて行つたと云ふ事を宏三に聞かせるのがいやであつた。そこに思ひがけない自分の悲劇のあることを龍子は心恥かしく思つたけれども、何うすることもできなかつた。龍子はやつぱり西の空を眺めながら考へてゐた。
「あなたにお目にかゝることがいやになつたんです。この頃、むやみと。」
龍子はわざと皮肉に云つた。殘忍な、捨鉢な感情がだん／＼に兆して來た。龍子は嘲弄的な笑ひを胸の底に忍ばせながら、顔を宏三の方に振り向けなかつた。
「何故そんなことを仰しやるの。」
宏三は、其れをほんたうにしない樣な調子で、靜に云つた。いつものやうに、女の手の内に甚のやうに媚びようとする男のおとなしい感情がそこに現はれてゐた。それが龍子の神經的になつてる氣分にさはつて、逆上するやうにくわつとした。龍子は歩きだした。
「停車場まで送つて行きませう。」
「それよりも、今の事を聞かして下さい。何故然う云ふことを仰しやるのだか。」
「譯も何もないのです。」
と云つたが、思ひ返して、

「あの人はすつかり知つてるんです。」

と亂暴な調子で抛り付けるやうに云つた。

「然うですか。」

咄嗟に言つた宏三のその聲に、不安と絶望が交つて響いた。行く道に、日光が柔らかくほんのりと照りつけてゐた。時々、思ひがけないところから梢の葉がぱらりと落ちたりした。宏三はその話をすつかり聞かうとしたが、龍子は昨日のことも一昨日のことも口に出さなかつた。

二人の間が破れた——然う云ふ悲しみが、あとからあとからと宏三の胸を突いた。宏三はそれを龍子にも悲しんでもらひたかつた。それをせがむやうに、宏三は龍子の方を強く見た。さうして、その顔の上に少しでも感情の動いた色を認めたいと思つたが、龍子は冷たい——寧ろ憎々しいやうな硬い感じのする顔付でいつまでも口を開かなかつた。

「何かおつしやらずにはゐなかつたでせう。野代さんは。」

「ええ、云ひました。私は酷い目に逢ひました。殺すと云つたのです。」

その言葉から、宏三には二人の諍ひが聯想された。何事にもまだ練磨されてゐない宏三の初心な若い心が、恐しい一撃に逢つたやうに一時に戰へた。「殺す」と云ふ一つの言葉を、宏三はよく味ふことさへ恐しかつた。然う云ふ恐しい惡魔の手が、自分の爲にこの龍子の上に覆ひかからうとは宏三には思ひもよらなかつた。

二人は默したまゝで歩いて行つた。さうして停車場にはひつた。龍子は別れようとした。

「私はいやです、この儘でお別れしては。」

宏三はその手に取り付くやうにして、龍子をはなすまいとした。

「何うすればいゝのでせう。あなたは何うなさるのです。——今日はお留守なのですか。」

龍子はだまつてゐた。

「ねえ龍子さん。私は強情をしてゐるのです。私はもう親も家も思ひはしません。私はあなたの思ふ通りになります。あなたにはなれるのはいやです。」

宏三は彼方を向いて、白い半巾を出して涙を拭いた。其れを袂に入れてまた龍子の方を向き返つた。眼許が赤くなつてゐた。龍子はその眼を見入つてゐたが、龍子の顔には何の感動の色も出てゐなかつた。

「到底二つの道を同時にいらつしやる譯には行かない。どつちかを取らなければ。——」

宏三は云ひながら下を見て立つてゐた。龍子は停車場を出て行つて柵のところから方々を眺めてゐた。宏三に對する嫌惡の念が募つて來て、彼女はたまらなくなつたからであつた。何故そんなに宏三が煩く厭はしくなつたのか彼女自身にもわからなかつた。

龍子は遠い空に眼も心も放つてゐた。此處からこの儘に何所かへ行つてしまひたかつた。自分の仕出來した事の中からすつと逃れて行きたかつた。それは卑怯でもなんでも、逃れてゆくより他に道のないやうな氣がした。男の執念深いあの戀情も、誰れが燃やさせたのでもなかつた。それをひきだしたものは龍子であつた。龍子が男の心に絡んでいたづらにひきだした其の戀は、今は何うすることも叶はないやうに燃え立つてきた。龍子はそれをはつきりと、男の心から抉りだしてきたやうに現在の目の前で見た。

然し、私は惡いことをした、と云ふ自ら省みることさへも、もう彼女には煩くてたまらなかつた。

「煩い。煩い。」

彼女は自分の髪を掻きむしりたいやうに思ひながら樹にしつかりと掴まつてゐた。

「何うすればいゝのでせう。」
宏三の聲が耳近く聞えた。
宏三は唯斯う云つて龍子に急いた。二人の間の破れ――それは宏三には堪へられない悲しみであつた。龍子が自分の手に逃れて來てくれるより他には、宏三にはもう待つこともなかつた。それが唯一つの願ひであつた。さうしてそれに由つて、この戀は一層濃く強く實際的に結ばれるのだと思つた。宏三は、龍子が其れを決心しかねてゐるのではないかと思つた。
「何を考へていらつしやるのです。」
龍子はだまつてゐた。時々、後を停車場へ行く人が通つた。その足音が、二人の心を外へ向けさせて氣を散らさせた。二人は何氣ない顏で空を見たり、前面を見たりした。
「ねえ。何を考へていらつしやるのです。あなたを殺すと云ふなら私も一緒に殺されます。私はどうしてもあなたとはなれるのはいやです。そんな事はできません。もう私には。」
龍子の胸の底から突然に涙が催してきた。けれども龍子はそれを脣を嚙んで抑へてゐた。
「私はこの儘歸ることは出來ません。」
宏三は然う言つた。
電車が行き違つて通つて行つた。龍子はその儘默つて歸らうかと思ひながら、初めて振り返つて宏三の顏を見た。宏三の顏には龍子の心を惹きつけずにはおかないやうな哀れな悲しみが漂つてゐた。龍子はまた首を垂れて目を外した。
日光がよく輝いてゐた。その光りが幸福であつた。
「いつまで斯うしてゐても仕方がないでせう。今日はこれでお別れにしませう。」
龍子が優しく云つた。
「あなたは何うなさるのです。私はそれが心配ですから。」
「なにも心配をなさることはありませんわ。手紙でよく申し上げますから。」
龍子はそれだけ言つた。父のところへ行かうと決心したことが、最もいゝ順路な手段のやうに龍子の心に思ひかへされてゐた。明日にも、今日にも、自分はやつぱりすべてを捨てて遠い父のところへ行かうと考へてゐた。龍子の心に情趣を含んだ淡い悲しみが流れていつた。
「ぢや御機嫌よく。」
龍子が然う言つた時に、宏三が、ふと物に驚いた聲を立てた。
「野代さんでせう。」
宏三が息をつめるやうにして云つた。龍子は振り返つて見た。慶次が昨日の[illegible]をして、高下駄で泥の道を突つかけながら一二間先きを歩いて行つた。慶次は此方を向きもしなかつた。
「氣が付かなかつたんですか。」
龍子は宏三に聞いた。
「いゝえ。あなたを見に行きました。私の顏も見ました。」
宏三の顏が蒼味を帶びて、その眼が異樣に輝いてゐた。宏三は慶次の後姿から目を放さなかつた。
「ぢや、あなたはお歸りなすつた方がよござんす。」
龍子は強ひて押付けるやうに宏三に向つて促した。
「野代さんはまた何か仰しやるでせうね。」
「かまやしません。」
「私は野代さんにお目にかゝります。」
宏三が決心したやうに力を入れて斯う言つた。
「何のために。」
龍子は冷たい眼で靜に宏三の顏を見た
「あなたはお歸りになつた方がいゝんです。」
龍子は、宏三が次ぎに逢ふと云つたその言葉

から、あらゆる僭越の意味の侮辱を感じて、心が不快に曇つた。

「お歸りなさい。心配をすることはありませんから。」

龍子は口だけでなだめるやうに言つた。

「ほんたうに手紙を下さいますか。私は心配ですから。」

龍子は默つてうなづいた。宏三は龍子の手を取つて、何か訴へるやうに龍子の眼に見入つてゐたが、言葉には出さずに龍子の傍をはなれた。龍子は宏三をその儘にして舊の道へ引つ返して行つた。

思ひがけなく、慶次が道の角に立つてゐた。龍子はその顔を見た。殺氣を含んだその眼に打つ衝かつた時、龍子は其れをぢつと見返しながら、默つて行き過ぎようとした。

「何をしてゐたんだ。」

慶次は後から聲をかけたが龍子は返事をしなかつた。

「どこへ行くんだ。」

慶次が追ひすがつて龍子の腕を押へた。

「家へ歸るんです。」

龍子は[illegible]させて、その慶次の顔をぢつと見た。眼が[illegible]/\と彈んで、血が熱い潮のやうに身内を動搖するほどその顔を見てゐることが恐しかつた。それをぢつと我慢して、龍子は慶次の顔を睨みつめた。

「お放しなさい。何をするんです。」

龍子はその手から腕を拔からうとしてもがいたが、慶次ははなさなかつた。二人はその儘ずんずん歩いて行つた。

「汝が言つた通りに燒き殺してやる。」

慶次はうめくやうに低く言つた。その息が大きく彈んでゐた。龍子は默つて引きずられて行つた。恐怖が全身を襲つたけれども、龍子は非常な力でそれを押へつけた。

「どんな日にでも逢ひます。逢はしてごらんなさい。」

自分の人生に然う云ふ奇蹟がおこるのだ——龍子は冷嘲的に然う思ひながら空を見た。青い空は幸福に輝いてゐた。

（大正三年三月作）

◇

ああ接吻酒そのままに日は[illegible]かすめ飛びながら死せ果てよいま（[illegible]）

歡喜の一ぱいになつた時に人の感情[illegible]はす斯く叫ばずにはゐられなかつたのであらう。つい先き方まで愛し讃して眺め入つてゐた大きな自然も、今はある限りの價値を覺えたほど人の肉の歡喜に眩惑した。「すべてがこの[illegible]に亡くなつてしまへ。」この絶頂の戀の[illegible]喜の焦點が、宇宙のたゞ中に一點殘されるやうに——二人が眼前にひろがつた海も日輪も、空も小鳥も、この瞬間に絶滅してしまへ」と人は思はず叫んだのである。然しこれは決して放縦な肉慾から湧いて來た感情の[illegible]が叫ばせたのではない。官能の實感が叫ばした[illegible]はれた言葉ではない。肉に感じた甘い[illegible]ではなくて、本能の生命そのものの[illegible]とした、其の恍惚の刹那である。肉に觸れた時の、神秘的な愛感[illegible]殆んど懊惱と讃への嘆きになつて[illegible]ゐる。

（[illegible]）

榮華

一

ある程の物は一切失くし盡して手許には融通するものもなかつた。小松は野々瀨の所に行つて少しの金を拵へて貰はうと考へて、夜になつてから車で行樂町へ行つた。

主人の野々瀨は風邪を引いて二階に寢てゐた。

「大層御ゆつくりですこと。何方からかお廻りなすつたんですか。」

然う云つて出て來た妻の兼子は、この頃のやうな小松に對して外々しい風がなく、黑い意氣な顏に打解けた微笑を浮べながら、珍らしく取り持つやうな愛想を見せて云つた。

「いつたい、何方のお歸りです。お家からいらしつたんぢやないでせう。こんなに遲く。」

その笑つた眼には、小松の行つた先きを承知してゐると云ふ、意味があつた。小松はその返事を避けながら、兼子の茶をいれてゐる手許を眺めて茫然としてゐた。賴母しさうな兼子の樣子を見ると、久し振りに悠くりと、兼子にこの頃の打明け話でもしたいと思ひ詰つた心持になつて小松は落着いた。兼子は昨日酉の市に行つた話を賑やかにしてゐたが、ふと思ひ出したやうに簞笥の抽斗から風呂敷に包んだ染物を持つて來て小松の前に展げて見せた。

「あなたに戴いた彼品がこんなに美い色に上りましたよ。一寸見て下さい。私は色が黑いからと思つて斯う云ふ色に染めたんですが似合ひますかしら。」

小松が遣つた生地のお召を何か濃い色に染め上げたと云ふのであつた。小松はざつと手に取つて見て、美い色だと賞めた。兼子はまた、小松から先頃貰つたお召の一襲ねの仕立直したのを出して來た。

「澤山好いのを持つてゐながら、そんな丹精なんかして。」

と小松は仕方なく笑ひを見せながら、遠くから兼子の手にある品に眼をやつた。

六疊の方から茶の間に引つ張つて來た電氣が小松の頭の上に低く下つてゐた。小松は此家へ入つてから、電燈の灯しの下に來た時にその電氣の光りが眩しかつた。兼子が其れ等の物を再び簞笥へ納ひに行つた時に、小松は薄暗い六疊の方へ兼子を追つて行つて、其處で金の話をした。

「宜う御座います。野々瀨に話して來ませう。」

兼子は直ぐに二階へ上つて行つた。小松が茶の間の火鉢のところに來て、茶簞笥の上に載せてある赤い色の新らしい熊手を眺めてゐると、野々瀨がやがて下りて來た。小松の前に丁寧に挨拶をして、先刻兼子の坐つた後へ、褞袍を着た儘窮屈らしく坐つた。熱で腫れた眼をしてゐるので、輪郭のすつきりとした鼻の高い口許の締つたその顏が、ぼんやりと滲染んだやうな面影に見えた。野々瀨はその顏を灯りの方に背けて熱氣を鼻から吐いてゐた。

「風邪をひいたの。」

「えゝ。」

何か考へながら煙管で煙草をのんでゐた野々瀨は、其れを火鉢にはたく時に、

「一昨日、戸田の隱居さんが見えました。」

と言つた。

「何しに。」

「三重子さんが欲しいと云ふ相談で。」

小松は鬢搔目の綺麗な眼尻を上げて野々瀬の顏をぢつと見守つた。

「其れに、あなたの身持が相變らず惡いと云ふ事を聞いて、三重子さんをあなたに遣つておくのは、三重子さんの將來の爲に可哀想だと云ふ譯なんです。」

小松は不快さうに俯向いた。兼子が靜に二階から下りて來て火鉢に炭を足してゐた。

「いくら欲しいと云つても、私が離さなければ其れ迄ぢやないか。」

暫らく經つと小松は壓し附けられる苦しい感情の下から自暴に云つた。

「然しね。奥さんもよくお考へなさらなけりや。三重子さんを連れてこの先き何うしていらつしやるお積りです。ある物は失くなして了ふし、その日にも困ると云ふやうな場合になつて了つちやあなたは兎に角、三重子さんが可哀想ぢやありませんか。」

小松は自分の背に火の附くやうな不安な今の境遇を斯うして野々瀬にまざ〳〵と掘り立てられるのが辛かつた。其れで狼狽てて、

「其れは分つてゐるけれども。」

と云つて野々瀬の言葉を遮つた。野々瀬は口を噤むと苦い顏をして、兼子の注いでくれた熱い茶を呑んだ。其れでもぞつくりとお召づくめの小松の服裝を野々瀬は見下しながら、情事に惱み疲れた蒼白い小松の荒んだ頰に眼を送つた。柔らかな束髮の毛がさゝやかに其の頰に亂れてゐた。

「實際は、あなたの身に就いては私は一切口は出さない積りでゐたんですから、戸田さんの隱居さんが見えた時も、戸田さんからあなた方へ直接にお話があるやうに勸めておきました。今あなたにお目に掛つたから一寸お話が出たんですが。」

小松は默つてゐた。

小松の夫の戸田の生きてゐた頃、戸田の家に始終出入して其の事業の上では何時も番頭役を務めてゐた野々瀬は、あまり男前が好いので派手好きな夫人の小松と關係でもあるやうに、世間から言ひ立てられたりしてゐた。戸田が亡くなつてからも、皮肉な姑と横暴な弟夫婦に居堪れない思ひをしてゐた夫人の小松を慰めて、小松の危い地位を自分が蔭から固めてやるやうに野々瀬は力を添へてゐたけれども、氣隨な夫人の小松は、自分から外を遊び歩くやうになつて、道樂な良人と一緒に始終出入してゐた遊びの場所で、自分の顏の馴れてる儘に豪奢な遊びをしつゞけたりした。世間では、野々瀬夫婦が小松を取り卷いて其の手から金を散らさせるやうに噂した。野々瀬は然う云ふ噂を聞くと同時に戸田の家へも自分から足を遠退かして出入をしなくなつた。丁度戸田が亡くなつてから五年目に、小松が總領の準一だけを後に殘して、下の三重子を連れて戸田の家を出てからも、野々瀬は一切夫人には構はなくなつた。その頃小松が、或る役者と深い關係になつてゐると云ふ事も野々瀬は聞いてゐた。戸田の家を出る時に讓り渡された纏つた財產も、遊蕩に[illegible]した夫人が瞬く〳〵うちに遣ひ果して了つてから、度々兼子に賴んで物など賣つてゐる樣子も知りながら、野々瀬は小松の行末を冷淡に眺めてゐると云ふ風で默つてゐた。

何うしたのか今の野々瀬の頭に、然う云ふ戸田家と自分との間の昔の事件や情實の[illegible]が神經的に浮んでゐた。一つは亡くなつた戸田の主人への義理も盡したく、夫人の爲に心を碎いた過去の自分の眞心が感じ[illegible]に繰り返されてゐた。然う云ふ眞心[illegible]心に[illegible]落魄した夫人を見るほど野々瀬に今更のやうにうら寂しい思ひを與へてゐた。いまだに世間と

すな[illegible]な、[illegible]らしいところが其の窶れた姿の表情の何處かにも現はれてゐて、野々瀨の眼には、小松の俯向いた顏が可憐らしく映つて見えた。野々瀨は小松の顏から眼を外して暫らく物を云はなかつた。

「三重子さんの事は後にしても、今のお金の話をねえ。奧さんも差し迫つていらつしやる事なんですから。」

と兼子が口を出したが、野々瀨は重さうな頭を二つ三つ手で叩いてから其處をぐり〳〵と揉むやうにして返事をしないでゐた。

「家にも餘計なお金なんぞはありませんけれどねえ。何とかして。」

兼子が重ねて口煩く辭儀と深切とを生ぬるく見せて云つた。野々瀨はやがて兼子に鞄を取つて來させて其の中から五圓紙幣を十枚ほど引きぬいて小松の前に置いた。

「私も戶田さんへ出入してゐる時分には、大層金でも拵へてるやうに世間から云はれたもんですが、何う云ふものか矢つ張り斯うして貧乏してゐます、あなたにこれだけお渡しすれば後には何もありません。」

と野々瀨は笑つて云つた。寒氣がするから失禮をすると云つて野々瀨は直きに二階へ上つて行つた。

兼子と二人になると小松は[illegible]として兼子の顏を懐かしく眺めた。

「世間は何うにか斯うにかなつて行くもんですから、あんまり御心配なさらない方が宜う御座いますよ。あなたの樣に贅澤の染みた方に急に約しく〳〵しろと云つたつて其れは無理ですからね。」

兼子は酉の市で買つて來た五色の餅を出してきて其れを火鉢で燒き始めた。家にゐる婆やのことと三重子のことを、兼子は樣々と聞きながら、

「奧さんはまだお若いし、御容貌が美いし、何うにだつてなりますわね。奧さんなぞはこれから花を咲かせなさるんですから、決して御心配なさる事は御座いません。」

小松は兼子の云つてる言葉が賴母しく身に染みた。さつき野々瀨の前で壓されるやうに切なく思つた苦痛が消えて、小松の眼の前には昔のやうな華やかな世界が續いて見えた。暗い運命が何うしてこんな華やかな世界の中へ忍んで來られるだらう。——小松は自分が現在一段々々と沈淪して行くこの恐しい運命の底の方をわざと振り返るまいとするやうに、其の眼に反抗的な力を入れて空を見詰めてゐた。けれども、其[illegible]

「おや、また[illegible]を挿していらつしやいますね。」

兼子が小松の頭髮に目を附けながら云つた。

小松は手をやつて探つて見ると、[illegible]た金のピンに觸れた。小松は[illegible]其のピンを拔いて[illegible]に置いた。

「あなた、まだ其んなもの[illegible]していらつしやるんですね。」

「ほんとに。私すつかり忘れてゐた。其の[illegible]日髮を結つて插すんだけれども」

「其れを插していらつしやる樣ぢや、まだ〳〵當分賣り食ひをしていらつしやられませう。」

「いゝえ。何もありやあしないの。其れは全く綺麗に失くなして了つたの。これは忘れてゐたんですよ、何うかして。」

然う云つた小松の手には疾うから一つの指環もなかつた。

「矢つ張り呑氣ですね。其れだけお賣んなすつたつて、今野々瀨が御用立てした位、直ぐに出來ますよ。」

「何うせ要らないのだから預けて行から、野々瀨さんも要るお金だから、これで何うにかなつたら使つて置いて下さいな。」

小松は其のピンを錼子に其の儘渡した。
「何もないと思つて居ると、方々の抽斗からこんなピンがまだ〳〵出て來るでせうよ。」
と錼子は笑つてゐた。

二

まだ婆やのお德が、仕事をしながら起きてゐた。家の中の陰氣な曇りが、今まで浮いてゐた小松の興をつと醒まして、小松は腹立たしかつた。小松はお德の仕事をしてゐる傍に坐つて、まだ何かに誘はれてゐるやうに恍惚した思ひを殘しながら、何時ものやうに不機嫌な嚴しい顏附をして默り込んでゐるお德を眺めてゐた。
お德は五十と云ふ年の割には白髮が多く、それを櫛巻にして、滑らかに蒼白く膨れた顏を俯向かして、三重子の赤い胴着を縫つてゐた。兩袖の袖口を指の半ばまで被せて、萎けたやうに針を運ばしてゐる、其の大きな身體を見てゐると、小松はだん〳〵にお德が氣の毒になつて來た。その不機嫌らしい顏を見るのも今夜は別けて頼りない氣がした。さうして主人もお德も、長い間物を云はない時が經つてから、小松は漸と、
「もう寢ませう。」
と云つて着物を脱ぎ始めたが、お德がまだ起きてゐると云つて布を動かしてゐるので、小松は脱ぎかけた着物を長襦袢の上に羽織つたなりで火鉢の前に坐り直した。
「いま、野々瀬で聞いて來たが、戸田で三重子を欲しがつてゐるさうだよ。」
小松は其の話を思ひ出してお德に聞かした。この頃自分から口を利いても碌に返事もした事のない女だとは思ひながら、お德も我子のやうに可愛がつてゐる三重子の上を、お互に同じ心で語つて見たくなつて、小松は自分の手からはどんな事があつても三重子は離すものではないと言葉に力を入れながら又重ねてお德に聞かせた。
「準一を取つた上に、まだ三重子が欲しいつて、まあ何う云ふ積りだらう。戸田のお姑さんの我儘にも驚くのね。誰れがあの子を戸田にやるものですか。」
小松はお德の情を求めるやうに云つたけれども、お德は直ぐには其れには返事をしなかつた。
やがて、
「其の方がお孃さんの爲にはお仕合せで御座いませう。」
と云つた。
「戸田へ行く方がかえ。」
「然うで御座いますとも。お孃さんもあなたのお傍にいらつしやれば末は何うなるものか分つたものぢや御座いませんから。今の内にお祖母さまの方へいらしつた方がお仕合せで御座います。」
「然うかね。」
小松は微笑を含んだ儘で默つた。云ひ度い事が胸を突いたが其れは制して了つたと云ふ樣に、小松は一度動かした唇を閉ぢて俯首れてゐた。と、小松の眼に涙が溢れてきた。何とも知れぬ苦痛の涙であつた。その涙が暫らく小松の美しい頰に流れてゐたのをお德は氣が附かなかつた。
「あなたは面白い思ひをさん〳〵なすつた上に御苦勞なさるのですから、御自分では斷念もおつきなさるでせうが、罪のないお孃さんはお可哀想で御座います。これから先き、あなたと御一緒にどんな苦勞をなさるのか知れませんから。」
小松はお德の云ふ事を默つて聞いてゐた。
「どうせ私はあなたの御厄介になつてゐる奉公人で御座いますから、明日が日にもお暇が出ましても其れ迄の事で御座いますがね、お孃さん

はお可哀想です。」

お徳は野卑に言葉を尖らして、憎々しく一徹に物を云つてゐた。

お徳も小松が戸田の家を出て來る時に、三重子に隨いて一緒に出て來た女であつた。亡くなつた主人の弟夫婦を厭がつてゐたお徳は、小松と三重子と三人して一家を持つやうになれた事を思ひがけない自分の身の仕合せにして喜んでゐた。小松には一生樂に送れるだけの財産も附いて來た事を知つてゐたお徳は、遠い末には三重子に好い婿を取つて小松に孫の出來るまで永く奉公してゐたい願ひであつた。お徳は小松の孫を守する日を其の時から十何年の後に待ち數へてゐた。だがお徳の樂しんだ未來の幸福は、度を失くした女主人の放縦な生活が短い間にすつかりその夢想から打消してしまつた。

お徳はその時から小松を憎み始めた。お徳が幾代か生れ變つて其の僅な月給を其の儘積むとも叶はないやうな大金を、一二年ほどの間に一人の女の身空で忽ち遣ひ果たして了つたその冥利の恐しさを思ふと、其れだけでも女主人の上に何時かしら天の罰の廻つてくる事をお徳は考へてゐた。幼小な三重子に對しては、まるで母親らしい情愛も見せる事がなく、一人の役者に迷ひ盡して、すべてを失つてしまふ女主人は、やがて身慘めな境遇に落ちて行くに違ひないとお徳は信じてゐた。この頃小松が野々瀬の兼子に頼んで所持の物品を賣り始めた事に氣が附いてから、お徳は三重子の衣類を入れた簞笥だけには堅く錠を下して小松の手も附けさせないやうにした。斯うしてお徳はたゞ三重子を相手に不安な前途を想像しながらこの家に暮らしてゐたのであつた。

「三重子が可哀想だと云ふのは何故なの、何が可哀想だと云ふの、私はまだ、三重子にもお前にも食べるにも困るやうな思ひは爲せないぢやないか。三重子がどんな身慘めな思ひをしてゐると云ふの。お前もまた、其れほどあてにならない主人に勤めてゐる事はあるまい。さつさと暇を取つておくれ。」

小松は興奮にその頬を染めて、薄い脣を震はしながら口早に云つた。無智な、さうして世間の下層より外には住んだ事のない卑賤な老婆の僻んだ臆測や、片意地な考へかたが、小松の氣に觸つて、小松は赫とした。

「何もお前の世話になりはしない。お前は默つておいで、お前には何も解らないんぢやないか。」

小松は其の言葉の終りに、怒を抑へつけた力の外れた響きを籠らせながら横を向いて云つた。

「暇を出すと仰しやるなら、私はいつでも出て參ります。私はお孃さんの爲に今まで此家にも御厄介になつてをりましたんですから。」

鼻の先きの丸い、一度病んだ眼の小さく悄々とした、丁度木彫の媼の面を安手にした俤のあるお徳は、その顔を上げて縫物を片附けてゐた。やがて赤い布を小さく疊んだ上に、針箱と絎臺とを載せたお徳は、其れを持つて臺所の傍の三疊へ引つ込んで行つた。

小松は一人になると沈んだ顔をして其の儘じつと考へてゐた。お徳の三重子に對する餘計な愛情や、お徳の惡い僻みが、自分の三重子への優しいこころを少しでも傷つけたり、自分の不品行から、明日にも自分たちが差し迫つた境遇にでも落ちるやうに考へたりしてゐるお徳を、腹立たしく憎んだのも一時であつた。小松には、もうそんな事は何うでもよかつた。もつと他に考へなくてはならない事があつた。小松は其れを考へようとしたけれども、頭が重く塞がつて直ぐには思ひ出せなかつた。自分が三重子を連れて大阪の實兄夫婦の許へ身を寄せようと考へたこと

が、取り留めなく其の頭の中を往來してゐたけれども、小松はその外にまだ考へる事があつたのだと自分で自分の胸を詰るやうにした。

大きな海嘯の中に浚はれつゝ行くやうな生活——小松は氣が附いたやうに其の恐しい生活の行方を見た。榮華に耀いた小松の奢つた姿はその中に沒してしまつて、女の子供を抱へながら二人の口を糊するのに途方に暮れてゐる哀れな小松の姿が其の行方に現はれて見えた。

「なに。そんな事はない。」

と小松は思はず一人で呟いた。多くの男や女に取り巻かれて全盛を見せた華やかな貴婦人の姿は、若い昨日の自分の姿であつた。小松は昨日のその姿に執着して、窮迫した自分の現在を忘れて了はうとした。驕つた昨日の自分の姿に絶えず附き纏つてゐた當世の人氣役者の鯉三郎の姿を、小松は抱き附けるやうに思ひ描いた。鯉三郎とはまだ何時でも逢へる仲であつた。唯一人、自分に背向かない鯉三郎の姿を思ふと、小松にはまだ／＼榮華が自分の手にあるやうな誇りを覺えて、心が躍つた。

三

むら／＼とした小松の感情は、とても自分の家に暫時でも落着いてはゐられなかつた。荒い冬の風が日の當る窓を吹いて、紅葉の落葉が其れにがさりと音を立てて行く二階の一間に籠つて、午後までも寢てゐた小松は、其の室に物憂く起き上つて、今日も直きに夜の來ることを考へながら、侘しい心の遣り場のない思ひをして沈んでゐた。四五日前に有樂町から持つて來た金も、もう僅になつてゐた。その時ピンを置いて來た事を思ひ出して、小松は野々瀨の許へ出掛けて行く事を思ひ附いた。

もう一度鯉三郎に逢ひたく一昨日千卷へ行つて其の人を呼ばうとしたけれども、小松は逢へなかつた。

「あの人もあんまり義理知らずですね。明日こそ私がどんなにしても呼んでおきますから、是非。」

千卷の女將に斯う云はれて、其の儘歸つた小松は、何となく氣が結ぼれて昨日は其處へ行かなかつた。だが、今其れを思ひ浮べてゐると、小松は頻りに紅い燈の色が戀しくなつた。歡樂の情緒が、小松の戀に陶醉した胸を食むやうに亂して、直ぐにも千卷へ行つて女將のなつかしい顏が見たくなり、さうして其處で男を待つ間の甘い心に醉つて見たくなつた。小松は床から出て階下におりた。

階下には三重子が一人で菓子を食べながら坐つてゐた。母の下りて來た姿を見るとその傍に寄つて來て懷かしさうに母の顏を見上げてゐたが、小松はその頭髮に赤いリボンの結んであつたのを瞥りと眺めたばかりで、自分は湯殿の方へ顏を洗ひに行つた。

「三重ちやん。婆やは何處へ行つたの。」

小松はそこから出て來た時に三重子に尋ねてみたが、三重子は其れに頑是ない返事をしてゐるばかりで、お徳の行つた先きは子供の言葉では小松には想像することも出來なかつた。其の内には歸つて來るだらうと小松は思案しながら久し振に二階に上つて外出の支度をしたが、お徳は小松がその歸りを待ちかねる程、何時まで經つても歸つて來なかつた。

「三重ちやん、婆やは何處へ行くと云つてゐたの。」

小松が斯う云ひながら階下を覗くと、また其處の窓の傍で菓子を食べてゐた三重子は、

「知らないのよ。」

と、口の中で食物を含んだ聲で返事をしてゐた。

「何處へ行つたんでせうね。」

小松は階下へ來て三重子の傍に坐つたが、心が落着かなかつた。お徳は只の使ひで外に出てゐるのではないやうな氣がした。

「婆やは何時頃お家を出て行つたの。」

「さつき。」

「さつきと云ふのは何時ごろ。」

「ね。さつき。」

三重子は久し振りで母の片手に抱かれたのが珍らしくて、甘えてゐた。小松は立つて行つて三疊を開けて見た。三疊の戸棚にはお徳の所持のものが見えなくなつてゐた。

「婆やは出て行つたんだ。」

小松が呟いたその聲を聞き附けると、三重子は傍へ來て同じやうに三疊の内を覗いてゐた。

「婆やはね。お家へ歸つてしまつたんですよ、お母さんに默つて。」

「婆やのお家へ歸つたの。」

「然うよ。いやな婆やね。」

小松は先夜の自分の言葉を根に持つて、其れでお徳はこんな事をしたのだらうと思つた。がらんと空いてしまつた戸棚の中を厭な心持に眺めながら、小松は戸を閉めた。三重子の手を引いて茶の間へ小松は入りながら、急に人氣の失くなつた寂しさを覺えて、其邊の障子もはたはたと閉めた。

「私を困らせようと云ふのだらう。」

小松は三重子を誰れにも預けて行く事が出來なくなつた不自由を直ぐに思ひ浮べた。

「三重子を連れて出よう。」

小松は三重子の着物を代へさせようと思つて、三重子の簞笥の傍に行つた。この簞笥の鍵をお徳が始終持つてゐた事を思ひ出しながら、その鍵は何處へ置いて行つたらうかと、ふと簞笥の上を見ると、そこに鍵が乘せてあつた。

お徳が不意に居なくなつた事が、小松にはさまざまな不安を齎して來て氣が滅入つた。三重子を連れて外へ出るのも億劫になつて、小松は三重子の着物を着せ代へてやりながらも、外へ出る事を幾度も思ひ止まらうとして躊躇つた。母が默つて長火鉢の傍に坐つて考へてゐる傍に立つて、三重子もぼんやりと物を云はずにゐた。

「まあ、外へ出て見ませうね。」

思ひ屈してゐた小松は急に明るい顔になつて、彼方此方と馴れない戸閉りをして廻つた。表の戸も引き寄せたが、其れを用心よく閉りをするやうな注意も投げやつて、小松は三重子の手を引きながら何時か靜に暮れてゆく外に出た。途中から車に乘つて野々瀬の家に行くと、野々瀬は不在で[illegible]兼子が[illegible]いてゐた。

「珍らしいことですね。三重子さんをお連れになすつたの。」

兼子が階子の中途から顔を出して、階下の小松に聲をかけてゐた。そこから呼ばれて二階に上つて行くと、小松の顔を知つた女の客が二人と兼子と三人で遊んでゐた。

「みんな大分手負ひ猪ですから、新手が欲しがつてゐるんですよ。」

斯う云つた年を老つた方の女は、京橋の大きな西洋料理店の隱居であつた。もう一人の若い女は、兼子の古い友達で、人の妾をしてゐた。みんなは小松を取り持つてもてなした。三重子を兼子が抱きよせて、可愛らしい頰に自分の口を押し附けてゐた。其の三重子を、みんなが美しく可愛らしいと云つて驚いたやうに賞めそやしてゐた。

其の仲間に引き入れられて、二三番勝負をした小松は負け續けたので三重子を連れて暫らく息を拔きに階下へ下りて來た。もう灯りが點いて、下婢のおまきは忙しさうに臺所の方で働いてゐた。小松は一人で煙草を吸ひながら、おとなしくしてゐる三重子の頭髮の上に眼を落して

ゐると、丁度家のないものが子供を連れて斯う
して漂浪つてゐるやうな心細さを感じて來て、
不思議に胸が騒いだ。其處にも凝としてはゐら
れなかつた。小松は何うすれば好いのか分らな
くなつて、兼子を呼び立てた。
「ちよいと待つて下さい。」
手の離せなかつた兼子は、やがて急いだ風で
下りて來たが、三重子が倦きた樣子で立つてゐ
るのを見ると、
「あなた、三重ちやんがお邪魔なら、まきにお
宅へ連れさせませうか。」
と、小松の顔を見ながら云つた。
「實はね、後で[illegible]を出てしまつたの。其れで
私も困つたの。」
「お徳さんがお出ですか。何うしたと云ふんでせ
う。」
「先きの見込みがないから、心細くなつたんぢ
やないかと思ふの。この間も何だか愚痴を云
つて居たんですから、私も云はなくても好い
事を云つたりしたんで離れられなくなつたの
ね。」
「まだ出て行くとしたつて仕樣がないとしても、
あなたがお困りですわね。」
兼子は心配らしい顔付[illegible]
云つた。小松は兼子をわざ〱呼んでそんな
話をして見ても、自分の不安な胸はをさまらな
かつた。小松は默つて三重子の顔を見詰めてゐ
た。
「あの人たちも直きに歸りますからね。御ゆつ
くりなすつていらつしやい。後でよく御相談し
ますから。」
兼子は上から呼ばれたので直きに二階へ行つ
た。小松にもう一度遊び仲間へ入るやうにと云
つて、上から呼ばれたけれども、其れに交る氣
もしなかつた。さうして三重子がぐづ〱云ひ
出したので自分で連れて賑やかな表の方へ出て
見た。

四

三重子に菓子や玩具などを買つて與りなが
ら、電車の通る道をぶら〱と歩いてゐた小松
は、何處まで行つても自分から離れようとしな
い三重子が、だん〱に煩くなつて來た。小さ
なものを自分の手から搦き放したいやうに、
時々其の神經が苛ついた。大切さうに自分の人
差指に縋り附いてゐる三重子の身體を[illegible]
てやりたいやうに、小松は三重子に對して[illegible]
に出來ない不機嫌に心がむら〱と湧いてき
た。
三重子は明るい灯を遊びながら、何處までで
も母に附いて歩いてゐた。おそろしく贅澤な女
髪飾の長い袂の着物に、同じやうな被布を着
てゐる三重子に、襟巻もマントもなくつて、夜
風の寒さに其の顔を曝らしてゐた。小松は子供
の歩くよりもまだ遅く、鋪石の道を辿つてゐた
が、行き過ぎる人々の顔が灯りの影で自分をち
つと眺めつゝ行くのが煩くなると、思ひ出した
やうに足を早めた。どんな女でも自分を見れば
何か囁きながら通り過ぎて行つた。男たちも自
分の顔に眼を注ぎつゝ摺れ違つて行つた。小松
は三重子を引つ張つて、薄暗い裏路に入ると其
の道をどこまでも歩き續けた。三重子は小さな
足音を早めながら母の裾に縋るやうに附いて
來た。
「三重ちやんは野々瀬のをばさんのお家に一人
でゐられるでせう。」
電車の通る橋の上を通る時に母が三重子に聞い
た。遠いところに鮮麗なイルミネーシヨンが輝
く消えたり現はれたりしてゐるのを三重子は仰
ぎながら默つてゐた。三重子が返事をしない
ので小松も其れ限り默つてしまつた。
野々瀬の家へ引つ返して來ると、兼子が心配

してゐた。
「三重ちやん、疲勞れたでせう。」
鎌子は三重子を抱き取つて火の傍へ連れて行つた。女の客は歸つてしまつて、二階も靜になつてゐた。小松は何か落着かない心持で火鉢の傍に寄つた。
「ほんとに人困らせな婆やぢやありませんか。何う云ふつもりでせう。」
鎌子が最前の話を思ひ出して小松に云ひながら、三重子の冷たい手を指先で溫めてやつた。
小松は斯うしてる間も頻りに心が騷いだ。鎌子の顏を見てゐる事も厭になり、この家に斯うして坐つてゐる事も厭になつて、小松は一人で苛立つてゐた。ひどく薄暗いやうな氣のする灯りも陰氣で、小松は自分の身體の置きどころもなかつた。鎌子の思ひ出した婆やの事などは、もう小松は考へて見るのも物憂かつた。
「あなたは今夜出られないの。」
「出られない事もありませんけれど。」
鎌子は然う云つて小松を打ち守りながら、
「何處へ行くつもりでいらつしやるの。」
「寄席へでも行つて見ようかと思つて。」
「宜う御座んすね。お伴しませうよ。」
鎌子は三重子の手を放しながら云つた。
「兎に角お夕飯でも戴かなくちや。あなたもお腹がお空きでせう。」
「外で食べてもいゝから。」
と小松は直ぐにも外に出たい樣子で云つた。
「三重ちやんも。」
三重子がその話を聞いて口を出した。子供の心にも自分一人、此家に置いて行かれるやうな淋しい思ひをしながら、母や鎌子の顏を見上げて云つてゐた。
「連れて行きますとも。置いてなんぞは行きませんよ。」
鎌子がそは〳〵と立つて行つて、鏡臺を引き出して來た。
「髮でも搔いて。」
然う呟きながら鏡に向つた鎌子は、小松の方に氣が附いて、
「一寸、お直しなさいませんか。」
と云つて座を立たうとしたが、小松は自分はこれで澤山だと云つて鎌子の立つのを止めてゐた。
鎌子の支度が中々長かつた。下婢に熱い湯を取らしてすつかり髮の癖を直してから又、湯で顏を拭いたりした。その間、小松は欝陶しく重くなる頭を押へながら、一人で思ひに沈んでゐた。
後から行くと云つて鎌子と三重子を先きに出してしまつてから、小松は一人で木挽町の千巻へ車を走らした。鯉三郎に逢ひたいと云ふ他には、小松は何も考へてゐなかつた。車が何處を通つて行くかも知らずに、漸と千巻へ着いた時はまだ八時だつた。
千巻の女中のお勝は小松の來た事を聞くと、少しも愛想の惡い顏も見せずに座敷へ來た。あれから小松の來なかつた事などをお勝は云ひ立てて、
「お氣でも惡くなすつたかと思つて、心配してをりました。」
と云つて優しい顏をしてゐた。さうして座の方へ電話を他の女中に掛けさせたが、其の返事は來られないと云ふ事だつたと云つて、やがて女中が知らせに來た。
「來てくれなければ其れまでだから、もうあきらめませうよ。」
小松はお勝の前では冷たくはつきりと云つたけれども、未練なこゝろは直ぐにも小松をそこから歸らせなかつた。

「この頃、あの人を少しも離さずにゐる方があるもんですからね。病氣を病氣でせうけれども、矢つ張りそんな邪魔なんぞがあつて。あの人も一寸抜けられないのかも知れません。もう少し氣長にお待ちなさいまし。私が呼んで見ますから。」

女中のお勝は夫人が寒からうと云つて、八反の褞袍を着せかけたりして其の場を取り繕つた辭儀で慰めてゐた。板締縮緬に紫うらの炬燵蒲團の下には、火もよくおこつてゐた。小松が何も食べないと云ふので、今戸のお煎などを他の女中に持つて來させて熱い茶をすゝめながら、

「もう一度電話で樣子を聞き合せますからお自烈なさらないで、少し御辛抱なさいまし。」

と云つてお勝は座敷を外した。

[illegible]の間に市松を刻んで置いた炬燵に、電氣の灯が白晝のやうに照り返してゐた。小松は床柱に背中を見せて冷えた爪先を炬燵の中で温めながら、たつた一人で其の小座敷に稍々暫く[illegible]つてゐたけれども女將のおたけも女中も其れぎりで顔を出さなかつた。小松は其れから人たちを[illegible]ほどの[illegible]やうな[illegible]を失せた悄然として[illegible]きもせず默然と俯向いて自分の膝の上を見詰めてゐた。長い睫毛が頬に蔭を落して、苛つたせゝこましい表情が、その顔に現はれてゐた。ふと、衣桁に引つかけてあつた紺紫地のコートがするりと落ちた時に、小松はその物の影に驚いて衣桁の方に綺麗な目を上げたが、そこに落ちたコートを見ると、又悄然と肩を埋めて深い息を漏らしながら俯向いた。

いゝ、ふんだんに有る金を撒きちらしてゐた頃とは違つて、千卷へ來ても小松は自分から氣が退けるやうな思ひがした。昔は自然の贅の輝いてゐた服裝や持ちものが、やがては皆への遣り繰りからの見榮の贅をするやうに手許が詰り、今では其れさへも、思ふやうにはならなくなつて、斯うした乏しい服裝で通ふやうになつたのを、女將や女中たちに見透されるのも心苦しかつた。ただ其れも、今日一日だけだと思ふと小松は殘り惜しいやうな、其れでさつぱりと未練の取れて仕舞ふやうな不思議な思ひがした。鯉三郎がもし來なければ其れでも仕方がないと、小松は思ひあきらめながら、斯うした瞬間にもおちぶれた自分の姿が、自分の心の上にまざまざと現はれてくる其れが小松には悲しかつた。それで千卷に來ると同じでも、[illegible]やうな寛濶な心持で過したく、小松はこの家での長い間の馴染んだ遊びなどを繰り返して考へようとしたけれども、何となく地獄の底のやうな暗い冷たさが心の内に忍んできた。[illegible]をぱつぱつと投げて、自分の贔屓の男や女たちの世辭追從の前に、わざと寛濶に驕つてゐた自分の綺羅の世界は、いつの間にか厚い帳が自分との間を隔てて其れは遠い彼方へ退つて行つてしまつたやうな侘しさが小松の胸を腐らしてゐた。

自分を隔てた花の帳の蔭には、他人の榮華が充ちてゐた。さうして自分のたつた一人の鯉三郎をその榮華が犇々と取り卷いてゐた。嘗ては自分の榮華の[illegible]を翼のやうにして、その蔭に可愛らしく睦んでゐた美しい鯉三郎が、他の榮華の一人の手に、自分に見せたやうな媚態のかずかずを盡してゐる姿もその帳の内に見えた。斯うして自分とは何時の間にかすつかり離れてしまつた榮華の帳の内に、自分の忘れられない深い戀がその儘に消えもやらず殘つてゐる果敢なさ、小松のこゝろにしみじみとした。

「もう歸らう」

小松は誰れに云ふとでもなく、それを[illegible]かに一人で洩らして、[illegible]と息を吐いた。[illegible]の中にそ[illegible]きな[illegible]を[illegible]たせたまゝで、

一層周圍が森とした。床の間の[illegible]い小瓶もその[illegible]に[illegible]したやうに、[illegible]にうつつた[illegible]ちらついた。小[illegible]は、

「歸らう。」

と繰り返して再び[illegible]つて[illegible]を[illegible]れて[illegible]を上つた。[illegible]れもしない[illegible]を、[illegible]た。今夜に[illegible]つて女將の[illegible]も小松の心にさはつた。小松は[illegible]三郎にも、二度と[illegible]ふ[illegible]れの[illegible]もしなから、[illegible]に立つて行つてベルを押すと、そこへ來たのは女將のおなほであつた。

「まあ、どうも。お構ひも申しませんで。お勝は何ういたしましたの。あなたお一人ぎりでいらしつたんですか。」

細おもての細過ぎる面立が、年を老つて猶更平いちめんに摘めさうに細く凋びた色白の長い[illegible]を[illegible]に傾かして、何[illegible]、作法を[illegible]さないやうな[illegible]で[illegible]つて來たおなほは、小松の前に來ると[illegible]の[illegible]に[illegible]のやうに[illegible]つてしやんとしながら[illegible]をした[illegible]を[illegible]の方にあげて小さな丸[illegible]に結つてゐるので、拔衣紋に[illegible]丸くなつて見えてゐた。客の相手をしてゐたと見え、頰に[illegible]味が射し[illegible]の[illegible]。

「[illegible]たんで[illegible]らて[illegible]ますつてね。[illegible]たのたから、一寸[illegible]いますがね、あの人も[illegible]氣と云ふと[illegible]やうにやんちやんで、此方の云ふ事なんぞはちつとも[illegible]れないんですから、ねえ。」

と[illegible]。

「[illegible]になつて[illegible]

小松は[illegible]に[illegible]自分[illegible]る[illegible]をした。

「ほんとにお氣まづくさせてお歸し申しちや[illegible]も[illegible]になりますのね。いづれあの人の身體さ一[illegible]なりませば[illegible]に[illegible]を[illegible]申しますけれども。」

「また、そのうちに。」

小松は[illegible]となしさうな女將に送つて[illegible]に[illegible]千[illegible]を出た。

五

車の[illegible]千[illegible]の門を出て車の[illegible]に包まれてゐながらも、一度[illegible][illegible]は何[illegible]脣を嚙みしめて息をのんで寒さを耐へた。その脣が冷たかつた。[illegible]堅い繻[illegible]でその[illegible]に[illegible]の一點からも冷氣が全身を蔽した。小松に女將の[illegible]

外は薄紫の月光[illegible]た。[illegible]た。ところ／＼[illegible]に[illegible]小松[illegible]見えた。[illegible]にないやうに[illegible]た。小松に[illegible]來つた年の[illegible]を[illegible]めてゐたが、その[illegible]街の[illegible]てゐるのが、小松には[illegible]うに[illegible]氣で[illegible]なつた。[illegible]した[illegible]の下唇を沈みながらに走つて行くやうに、[illegible]が[illegible]い影を上からと被せて、折々小松の[illegible]を[illegible]何[illegible]

小松は[illegible]今夜[illegible]移つた[illegible]たが、其れは小松には[illegible]今

の袂へ千歳から歸つて一時も四五度もあつた往復の道にも記憶はあつたが、こんなに暗い街を通つたことはないと思つた。車はやがて一つの橋を渡つて行つた。

小松は眼を閉ぢて、車にぐつと凭れながら俯向いて暗い街を見ないやうにした。車は靜に搖れて、微みた寒さも小松の肌に落着いてきた。然うしてそつと顏を撫られるやうなその物懐い瞑目の、沈靜いた甘い囁きに、何時となく眞つ赤い滲染んだ歡樂の幻影が消えてしまつた。幻影はた〳〵に小松の閉ぢた眼の先きに髣髴と現はれてきて、暗い、紫の霧に圍まれた美しい鯉三郎の姿が幽かに其の中に浮んでゐた。鯉三郎のその眼付や熱心な媚かしさを睫毛に蔭らして小松の方を見詰めてゐた。現の戀を燃やさせるやうに執拗く小松の心を追つて其の眼はぢつと小松を凝めてゐた。

滑らかな頰の冷さ——小松は幻影の中の夢のやうな觸感にはつとして自分に返つて、眼を着いてゐたやうな暗い瞳を開くと、外の華やかな電氣の光りが電車と小松の車の上に溢れつた。小松はその思ひがけない光りを厭ふやうに暫らく瞑つてゐたが、一時に何か、微かに搖く前つたその意識は、又直ぐに幻影に浸みて、小松は暗い自動車の内で鯉三郎と並んで坐つてゐるやうな幻想の中に、男の外套の袖の衣摺れの音をはつきりと自分の耳に聞いたりした。

小松はふと、先刻千卷で自分が直接に芝居の方へ電話をかけなかつた事を悔いる心が動いた。たとひ電話口でも、一言自分の口から鯉三郎を招んだら、義理にも來られないと云ふ返事は自分に出來る筈はなかつた、と思つた。小松は、小娘でも爲るやうな、執拗い眞似を恥ぢる遠慮で、千卷の女將に何も彼も任せておいた事が今更物足りなく、せめて其の聲だけでも自分の耳に聞かうと云ふ焦れた思ひが募つてくると、小松は其の儘には居られない樣に胸が騷いだ。そこいらから自働電話を掛けて聞き合せようと思ひ附いた事一つにも、小松はもう上氣して急いで車夫を呼びとめた。

「この邊に自働電話は見附からないかしら。」

小松が然う云つた聲を聞くと、若い車夫は立止まつて一寸考へてから、後の方へ四五間戻つて暗い横町に入つて行つた。車夫は思ひ違ひをしたのと見えて、其の横町をずつと見渡してから、又一人で呟いて通りを引つ返して來た。小松はその往來を眺めると、そこは横町の外れであつた。車は暫らく掘の岸を走つてから往來を隔てた横町に入つて、そこで自働電話の小さな明るい建物を見附けだした。小松はそこから鯉三郎の自宅の方に電話をかけて見たが、鯉三郎は家には歸らないと云ふ返事であつた。それに落膽した小松は、無駄と思ひながら座の方の自分の贔屓の茶屋へかけて見た。鯉三郎の病氣の樣子など聞き合せたが、小松と聞いて電話口へ出て來た茶屋の主婦は、鯉三郎は病氣の爲に今夜の切も代つて貰つて早く歸つた樣子だと小松に告げた。

「あなた、もう些と早く電話をかけて下されば宜しかつたのに——今夜、お逢ひになる御都合でも？」

太い聲でのんびりした調子でその主婦は靜に小松に聞いてゐた。小松はこの戀の最初に此家で結ばれた種々な思出が絡んで、不思議に暫らく別れてゐた昔の馴染のものの聲をも聞くやうな懷かしさを心に染ませながら電話を切つて外に出た。

すつかり思ひあきらめて小松は再び車の幌の中に包まれた。華奢な男の美しい幻が小松の眼に浮んでは消えた。

「この頃あの人を厭はずにゐるわけがあるものですから。」

斯う云つた千卷の女將の言葉を繰り返して、小松は鯉三郎に溺れてゐると云ふ他の女の上を思つた。自分の膝の上に乘せた鯉三郎のしどけない姿を、他の女の膝の上に思ひ描いてゐると、小松は丁度敵しきれない大きな力にじりじりと詰め寄せられて來た時のやうな、不可抗な疲勞と慘さと悲しみとを一時に覺えて、心が萎えた。自分は遂に、紫軍の群から除けものにされて終つたと云ふ觀念が、又小松の胸に新らしく湧き返つた。

紅を引いた上を黛で描いた引眉毛——眉頭のところに一寸筆の穗の刎ねてるやうな紅の先きの出てゐる其の鯉三郎の眉や、羽二重で吊つてゐるやうな眼尻の上つた隈の鮮やかなその眼許、其れも長い睫毛に被はれて優しい流し目の一點が、人の視線の上にとゞまる可愛らしさなぞ、小松は取り留めもなく其れから其れへと記憶を辿りながら、その鯉三郎とも、これで愈々最後の別れだと、心の内で堅く思ひ詰めた。小松は心に何の悲しさも浮んではこなかつたが、其の陰氣に濕る心持が小松には鬱陶しかつた。

小松はこの儘、鉦子と三重子と待つてゐる銀座の寄席へ行くことも氣が進まず、何かに興を浮かして、この燻つた思ひを拂ひ除けて了ひたくなつて、其れから其れへとあわたゞしく思ひを移して見た。さうしてこの持つてゐる金を、何か品物に代へて、鯉三郎の不在へ屆けてやらうと思ひ附くと、小松は花が開いたやうにその笑みが心の中で溢れた。

小松は車を銀座通りに引つ返させて、唯ある角に車を待たせておいて自分は種々な店を眺めながら暫らく歩いた。薄暗い空に聳えてゐる大時計の塔を仰ぐと、十一時に十分前を指してゐる針が見えた。どの店も、大概は戸を閉して、小松の心に叶ふやうな品などの出てゐる店は見附からなかつた。小松は其れにも倦んで、又舊へ引つ返して來た。小松の頭は破れさうに痛んで、醉つてるやうに一足の歩行にもよろ〳〵とした。

眞つ直ぐに戻つて來た有樂町の家には思ひがけなく鉦子が歸つて來てゐた。

「三重ちやんがあんまり泣きますからね、あなたがいらしつたらと云つて、寄席の人に賴んで歸つて來てしまつたんですよ。今漸と寢ました。」

不機嫌な暗い顏をしながら鉦子は長火鉢の前で云つた。

◇

別れむとまづ云ひたるは君なりきとりとめもなきあらそひの後（晶子）

「戀は日毎ごとに女の[illegible]」と云つた。こんな戲談半分の言葉で、時にさへ、女は直ぐに、戀の大事を疎かにした言葉が平氣で云へるのである。其れを優しく恨みながら、女の心の拘りのないのを柔らかく非難してゐるのが歌のこゝろである。全く女は、直ぐにこの絶對へ言葉を持つて行く。どんな戲談の時にも、爭ひめかしい事がお互の口から出さへすれば——其れだけ女心から眞劍だとも云へるし、又輕卒だとも云へる。女は別れる氣なぞはなくつても「別れる」と云つて見る。「女が然う云ふ氣なら、よし、別れてやる」と男は心に思ふ。何うかすると、それが默つて女に別れて行く動機になつたりなぞする。何方へ行つても淺いのはたゞ張り女である。

（「愛かなさけか」より）

寒椿

私はあなたのお歸りになつたあとしばらく書棚の上の紅い山椿の花を見詰めて、ぼんやりと致してをりました。

この椿を此の瓶に插してから、もう十日の餘になりますけれど、蕾から蕾がだん〳〵に開いていつて、まだ何の花の一つも落ちないのです。插した最初にたつた一つ咲いてゐた花がすつかり萎んで、赤い花瓣をちぢらしてゐる他は、どれも蕊を露にして、一重の花瓣が反るやうにぱつと開いてゐます。葉つ葉の周圍の鋸齒に手がふれると切れさうなほど分厚な、重苦しい椿の葉の蔭に、うしろ向きになつたり正面を向いたりして、丁度その花の數が七つあります。

椿と云へば、まだ美しいうちに直きにほたほたと花が落ちるやうに思つてゐた私はかうして幾日經つても開いたまゝの枝にしつかりと附着いて咲いてゐるのを、不思議にしていつも眺めてゐたのです。

私は、いまも、そんな事を思ひながら色の褪せかけてる花の一つに指をふれて、わざと強いて見ましたが、程よい私の指先の力だけでは其の花は中々動きませんでした。私の一本の指の力がその花の萼をだん〳〵に押していつて花を扱き落しさうになつたとき、私は指をひきました。花は、咲けるだけ咲いてるのだと云ふやうな顏をして、薄赤い色をみなぎらしてゐるのです。——

あなたはさん〴〵、私に愚痴を云つてお歸りになりましたね。私に一肌脫いでもらはうとか云ふやうなことで、相談でもあるらしく飛んでおいでになつたのに、やつぱり、私の考へた通り、結局あなたはその女に對する愚痴を云つただけで、すご〳〵お歸りになりましたね。

やつぱりあなたは、其の儘で、その女から[illegible]の生殺しに逢つてゐるやうな關係に、日をお送りになるより仕方がないと私は思ひました。

「むかうの心持を徹底させるよりも、あなた御自身の態度を徹底させて、女に打つ突かつてゆかなけりや駄目ですよ。」

なんて私はあなたに云ひましたけれども、あなたにはそれだけの勇氣がお有りにならないから駄目です。あなたは、私が大層眞面目にあなたの愚痴を聞いて上げたやうに思つて、よろこんでいらしつたけれども、實を云ふと、私は別にあなたに同情なんかしてお話を聞いてゐた譯ではありません、唯、ちよいと粹がつて見ただけなのです。男の愚痴を聞くと云ふものは滿更いやなものではありません。他の女との關係をすつかり聞くと云ふことにも、おもしろさがあるし、その女に捨てられかけてる男が、それを愚痴にして、身悶えでもしたいやうな甘えた感情をもつて聞き人に縋つてゐる樣子は、丁度、おしろいの塗いてる役者の顏が、愁嘆で泣き顏になつた時に、ふと感じる衝動的の哀れさと同じやうな感覺を味ふことが出來て、いゝ心持なのです。情事の愚痴を云ふ男に、すつかりとおもひやりをもつたやうな眼を投げて、大人しく譯のわかつた心持で聞いて上げてる意氣な姐さんは、自分がお芝居をしてゐるやうに嬉しいものです。

まあ、こんな心持で聞いて上げてゐたのですから、あなたがしみ〴〵と喜んでいらしつたやうに、私がまじめにあなたの御しやることを判斷したり解釋したりしてゐたのではありませ

ん。さうしてお話を聞いてゐるうちに、私は女の方に同感を起して、あなたを捨てようとしてゐる女に無理がないと迄思ひました。

考へて御覧なさいまし、あなたと私とどれだけのお交際があるのでせう。ほんの僅なぞで五六度しきやお目にかゝつてゐないのぢやありませんか。そんな親しみの薄い私なぞに、どうしてあなたがそんな打明け話をなさらうとお思ひ立ちになつたのか私にはそれからして合點がまゐりません。斯う云ふことをあなたと關係のある其の女のかたがお聞きになつたら、どんなに怒るかしれません。あなたは其の女を侮辱したことになるのですからね。

女が祕しがくしにしてゐるあなたとの情事を、何の因緣もなく私なぞに打明けたと云ふことを知つたら、その女はどんなにあなたに對して憤りを持つことでせう。然う云ふあなたの心いきからして、私には見下げたものだと思はれたのですもの。

其のほかの、女に對するあなたのお考へなぞと云ふものも、ずゐぶん得手勝手なもので、

「こんな男ならいくらでも、玩弄にできるだけ玩弄にして抛り出してやれ。」

と私さへ思つたくらゐですから、其の女は、あなたに對して始終然うした態度を持つに違ひないと思ひました。

あなたは大人しくありませんよ。力もありもしないのに、男と云ふだけの價値もまた持つてはおいでなさらないのに、その女に對して中々男振つた考へを持つておいでのやうですね、第一あなたは、その情人を、

「いゝ、をんなか、いゝ、をんなか。」

と云つていらしつたが、其れからして私には癪にさはりました。男と女の異ひこそあつても、又色の關係ではあつても、女の方があなたよりは名譽のある人ではありませんか、地位を持つた人ではありませんか。社會的に云つてもあなたは、その人の下にならなければならないのぢやありませんか。其の人があなたほどの學識がなくとも又思想が淺くとも、兎に角あなたよりは世間的に働いてゐる婦人です。其の人の名を云つたら、世間の人は大概知つてゐるかもしれないが、あなたの名なぞを云つたつて誰れが知るでせう。そこから云つても、あなたはその女に敬意を持たなくてはならないのに、いゝ男振つた顏かなにかで、

「いゝ、をんなが、いゝ、をんなが。」

と仰しやつたのは、餘計なことだが私の癪にさはりました。

あなたと其の女との關係が八年だか五年だか知りませんけれども、その關係の間、私が表面的に知つただけでも、其の女は可なりな働きをしておいでです。さうしてあなたは、なんにもしてゐない。——

「もう少し勉強をしなくつちやいけない。もつと偉くなつてくれなくちやいけない。」

と其の女があなたに對して言ふと云ふ心持も、私にはよく分ります。あなたは怠惰者で、遊惰で、おまけにお酒なぞを飲んだりして、女にお小遣をせびつて、一向世間的に働かうとなさらない。其の女はもう餘つ程あなたに愛想が盡きてゐるのです。

もつとも、怠惰者ならなまけもので、それでもいゝでせう。あなたと云ふ人が、もつと、奴隸的な媚を保つことができて、さうして何から何まで、一々女の云ふ事をはい〳〵と聞ける人なら、又それだけに女の愛をつゞけ得られるだけの資格があるけれども、あなたは然うでもない。

なか〳〵我意が強くつて、相當に女に對して權利を要求していらつしやる。それがいけないのです。其の女を、

「そんなか、いゝ、いゝ、そんなか、」
と云ふ樣な心持をもつていらしつては、到底永久に其の女に可愛がられることはむづかしいでせう。
あなたに斷りもなしにだまつて、旅行をしてしまつたら、あなたが默つてゐれば、いつまでも手紙をやらずにおくといふ樣なその女の態度から考へても、その女はもうあなたを捨てたも同然です。いくらあなたが、
「私たちの戀の成立は、ことごとく淚だ。笑ひや[illegible]はない。」
と叫んでみた[illegible]で、いやになれば仕方がないでせう。捨てると云ふ事は力の強いものゝ方がすることで、捨てられると云ふのは弱いものゝ[illegible]です。
あなたは今、捨てられまいとして、その女に獅嚙みつかうとしていらつしやるところなのです。[illegible]、今までのやうに[illegible]しない。それがあなたには[illegible]ない、何うかして、もう一度女の心を[illegible]て見たい。——あなたは[illegible]てゐた[illegible]事はそれでしたか、然う思ひつめになる[illegible]なら——女に[illegible]して、どうしてもあなたにはその女から離れられないと云ふのなら、私なぞに、めそめそと相談をなさる暇などはないぢやありませんか。
「苦しくつてたまらないから、誰れかにこの苦しさを聞いてもらひたい。」
などとあなたは仰しやつたが、そんな卑屈な話があるでせうか。それほど苦しいならどしどし直接にその離れられない人に打つ突かつていらしつたらいゝぢやありませんか。あなたのなさることは、すべてが斯う卑怯なのです。あなたはその女を卑怯だと仰しやつたが、それはあなたの態度の方が卑怯です。
私なぞにそんな話をして、どれだけいゝ事がありましたか、意味がありましたか。結局なんにもならなかつたのでせう。あなたは唯[illegible]にいらしつたやうなものです。あの女とあなたとの間が、決して淫蕩な戯れごとから始まつたのではないと云ふことを吹聽にいらしつたのに過ぎなかつたのです。だのにあの女の心持が[illegible]になつてきた、女の心が解らないと云ふ[illegible]、あなたは、飛んでもないことまでおしやべりしていらしつた。——
そんな事を、他の女に聞かせる餘裕があるなら、あなたの今の問題をそんなに差し迫つたものぢやありませんね。
「女を殺さうとさへ思つた。」
なんて、おそろしく凄い文句をおつしやつたけれど、そんなに思ひ詰めたあなたが、私のところへ來て、おしやべりなぞが出來ますものか。
あなたは、そんな男の意地を出すだけが野暮です。すつぱりとあなたがその女から離れることのできないほどの未練があるなら、あなたはすつぱり自分を殺して、その女の力のかげに小さくなつていらつしやるより仕方がない、然うすれば、その女もあなたを可哀想に思つて、又愛がかへつてこないとも限らないけれども、さもない上は、その女はたゞあなたを煩く思ふばかりです。
あなたよりは物質的にも世間的にも女の方に力があるのだから、あなたは何うしても其れに屈從するより仕方がないとおあきらめなさるんですね。だんだん女があなたに飽きてきた以上、あなたは捨てられない算段をして、女に可哀想がられる工夫をなさるのが何よりです。あの女はあなたに對して、
「[illegible]な人だ」
と云つたと、あなたはおつしやつたが、女が

ら氣の毒がられるやうでは男もおしまひです。せめて、可哀想がられるやうでなければ、――

それだのに、あなたは、

「私は人を追ふことはきらひだ、追はれるならいゝけれども、追ふことはきらひだ。」

などと澄ましてゐたり、然うかと思ふと、

「いつしよになれ。」

と云つて女に要求したりするのです。いつぱし、あなたに取つては女を然うするだけの權利がありでもするやうに。だからあの女に猶さらあなたをいやに思ふのでせう。

あの女は獨身で、一本立でやつてゐる人だから、あなたといつしよにならうと、あなたと關係をつゞけてゐようと、その境遇か自由だけに何うにでも自分の思ふやうになる筈です。然うしないのはあなたが厭になつたからで、考へてもごらんなさい、事業やら交際やらで今日を多忙でゐるあの女が、あなたのやうな怠惰者を引き受けてさうして二人の生活を自分の手一つで支へてゆくなどと云ふやうなそんな馬鹿々々しいことができるか何うか……それは、あなたと戀の最初の何年か前ででもあるなら、然うした打算的な感情なぞは微塵もおこらなかつたかもしれないけれども、今では、あの女には色の褪めた戀よりも、やりかけた世間的の事業の方が大切に違ひないぢやありませんか。今更、働きもない、力もない、技倆もない、唯うそ〳〵としてゐる子供のやうなあなたなどといつしよになつて、つまらなく自分の價値を世間からおとしめられるよりは、獨身で、一本立で、可愛がるものは蔭で可愛がつて、表面は一人で働いてゐた方が、どんなに理想だかしれやしません。又あなたにしても、そんな事をあの女に要求するのは、あなたの心が見え透いてみつともない。まさか、あの女に一生養つてもらはうと思つて、あの女に執着してゐる譯ぢやないでせうけれど、今のあなたの境遇を考へると、まあ、ちよつと、そんな事が云つて見たくなりますからね。

「男を養ふつて、いゝもんですよ。」

私もあなたに斯う云つたけれども、女の心を脆く惹き附けることを知つてゐなくちや、男は女に養はせることは出來ませんよ。あれも男の一つの技術ですもの。あなたは、習つてもそんな技術は會得の出來ない質ですから駄目です。然うかと云つて、あなたは逆に女を脅迫することも出來ない男なんですからね。

もつとも、そんな人だからこそ、他人の私なぞのところへ來て、女の心がわからないと云つて泣き言をおつしやるんでせうけれど、あなたのやうな男には私には同情がおこらないのです。それでも、私はあなたをお氣の毒だと思つて、とう〳〵あの女はあなたを捨てるつもりだとまで、云ひ切らなかつたんです。あなたのお話を聞いてゐればあの女がもうあなたを捨てたも同然だと云ふことが分るのですよ。

「をんなの心がわからない。あのをんなは戀なんぞの出來ないをんなだ。」

こんな事を云つて、方々廻つてお歩きになるひまに、だまつて、靜に、あの女から離れて、あなた御自身の御勉強でもなさいまし。一年でも二年でも、十年でも、あの女の心が自然ともう一度あなたの上によみがへつてくるまで、あなたはぢつとして、遠くにはなれて、あの女の傍へよらずにあの女のことを思つてごらんなさいまし。そのくらゐの深い心持で、あの女の傍をはなれたなら、あの女は直ぐ、三日と日をおかずにあなたから新らしい戀を感じるにちがひありません。もしあなたの女に對する愛がそこまで男らしく徹底したなら。――

然し、そんな美しい純な愛があなたのお心のうちに爪垢ほどでもあつたらふしぎです。それ

お出来るやうな頼母しいあなたなら、私なぞのところへ来て、おしやべりをなさるやうな淺薄なこともしないでせうからね。そんな男らしい態度をとると云ふことは、あなたの夢にもごぞんじないことでせう。それも出来ず女のおもちやにもなりきれず、それでゐて、女には執着があつて其の女の弱い力には甘えてゐたいと云ふやうなそんな蟲の好いことを考へていらつしやるあなたは、何うしたつて女には飽きられるのが落ちですね——をかしかつたのは、

「少し技巧的にもつていつたらいゝでせう。」

と私が申したら、あなたは、

「一度操縦しようとしてしくじつちまつた。」

と云つて笑つておいでしたが、其の操縦しようとした場合は、どんな場合だつたか私にはちよいと想像もつきませんが、女に對して少しの技巧も持ち得ないあなたが自分より十歳近くも年上の女をいつまでも自分の手に引きとめておかうと思ふだけがコケですよ。その癖、

「戀をして見たい。こんどこそ僕にとつては眞の戀だ。」

などと、小憎らしいことを云つておいででしたね。

「こんな話をしてしまつて、私はきつと後悔する。」

から云つてお歸りでしたが、さぞ、今頃は御自分の淺墓な口を怨んでいらつしやるでせう。だが御安心なさいまし。私はぢきに聞いたことを忘れてしまひますから。

◇

君かへす朝の舗石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ（白秋）

讀み返してゐると、何時も別れに歸つて行く人と、見送る人と、何方もの上に靜な悲しみの印象が一様にひろがつて行く。然し其の悲しみは、戀人たちの心の最も奥底から絞られてくるやうな痛切なものではない。戀とするものの誰れでもの常習になつてゐるあの一種の情の切なさが、この朝も極めて平和なからに、癖の付いた悲しみだけをお互の思ひの上に殘して、晝のやうに別れて行くのである。其の靜な落着いた悲しみが、果物の露の滴つてくるやうに讀むものの胸へと染みてくる。——これ等は趣味の戀を思はせる。憧憬の匂ひだけの中に包まれてゐる戀を思はせる。恐らくこの人たちは相人の心を觀、考へることよりも、二人の戀の上に豐潤な情趣を求めることのみに忙しいのであらう。カーテンの色一つにもある晩の戀との配合を案じ、二人で取り上げる小皿の模様一つにもある朝の戀との配合を考へながら——さうして女も氣取り屋である。身體と心を装ふだけ、知識の油のついた氣取りを持つてゐる。「雪よ林檎の香のごとくふれ」斯う云ひながら戀人を窓から見送る人は、女がその氣取りを愛しながら、お互の別れの悲しみを情趣の快さの中に、雪の色のやうに蕩らせてゐるのである。

（[illegible]）

春の晩

一

幾重はふと雨の音に心付いて窓の方を見た。窓が開けはなしてあつた。いつの間にか強くなつた雨の餘沫が窓の敷居を濡らしてゐた。そこから見える夕方の雨の空に白絹のやうな光りがあつて、ぽち〳〵と雨の雫が水晶の點々を並べてゐる楓の枝の薄紅い芽の色に、その空の光りを映ろはせてゐた。垣根の傍の椿の花もあざやかに群つてゐる綠の葉の中からピンクの色を浮かしてゐた。幾重は立つて行つて窓から外を覗いた。

樹が雨に打たれながら、明るくぼやつとしてゐた。斜かひに見える軒燈の灯が艶消しガラスの球の中にほつかりと滲染んで、頬紅のやうな和らかい春の宵の色を包んでゐた。雨にむせてる丁字の匂ひが甘くなまめいて窓のほとりを流れてゐた。

幾重はしばらく立つた儘で、灯も花も綠も、蕩かすやうにさつと霞めて降つてゐる雨を見つめてゐた。しづかな、しつとりと强い雨の響きのなかに、何か女の胸を甘やかすやうに囁く秘密なものが含まれてゐた。幾重はその囁きにそそられながら、うつとりとした。

「なんて、いゝ雨だらう。」

幾重はしみ〴〵と然う思ひながら、いつまでも、雨の降るのを見てゐた。少し顔を上げて、家根より高いところから降る雨を眺めたりした。空の光りが優しくなだらかに雨のなかに溶けてゐた。幾重の昔の戀の思ひ出をどこかに隱して、春の雨は限りない情緒を織り込みながら生ぬるく幾重の白い額にしぶいた。幾重の前髮が、霧のやうなこまかい雫にはら〳〵と濡れた。

「なんて、いゝ雨だらう。」

幾重は然う思つては雨を見た。雨はさあと快い音を立てては、また忍び音に輕く降つた。幾重の心に、十何年も前の初戀人の若い姿がふと色めいて懷かしく浮かんだりした。思ひ合つたばかりで何うともならずに別れてしまつたある男の面影が、思ひ深くその胸に滲みでてきたりした。もう一度、こんな春の宵に逢つて見たい男が幾人かあつた。幾重はそれを一人づつ思ひ出して、浮氣つぽい春の香氣を含んだ雨の感覺を、しつとりと味つてゐた。

女中が何か運んで來たと見えて、後の方でかたかたと食器や膳の打つ突かる音がしてゐた。女中が低い聲で男に何か云つた。男が、

「いえ。」

とそれに返事をしてゐた。女中が行つてしまふと、

「幾重さん。」

と男が幾重を呼んだ。

幾重は、その男の聲が妙に氣に入らなかつた。自分の情趣をさまたげられたやうにいやな感じがして幾重はだまつてゐた。ぽつねんと腕組みをして、食卓の前に坐つてゐる男の樣子などを心に描きながらその前に坐らうとする自分の事を考へても興味がなかつた。男の前に行くよりは、かうして雨を眺めてゐる方がおもしろかつた。

「何うしたの。」

繁雄は立つてきて幾重と並んだ。その言葉の底に哆々つ子らしい怒りを持たせて、繁雄は幾

重の顔を覗いたりした。さつき逢つた時から、女の素振りが冷たいと思つてゐた。自分が何か一言云ふと、女は直ぐ小馬鹿にしたやうな皮肉な笑ひを眼に含んで繁雄を見たりした。いつものやうな、わざと愛着を装つた技巧的な優しみさへなくなつて、女は時々切ない溜息を吐いたりした。何も彼もうるさくてたまらないと云ふやうに、肩をさげて、澁面を作つた幾重は男の前で外見をしてゐたりした。繁雄には女の心が分らないやうな氣がした。繁雄はそつと自分の手を幾重の肩においた。

「いゝ雨でせう。雨を見てゐるんですよ。いゝ雨ねえ。」

「雨なんかどうでもいゝぢやありませんか。」

繁雄はつまらなさうに呟きながら、幾重と同じやうに雨を眺めた。雨はだん／＼輕く降つて、門の柳が可愛らしい青い芽をすんなりと靜になびかしてゐた。それが春信のかいた若衆姿のやうに、嫋やかな風情に幾重の眼に映つた。

「あゝいゝ雨。」

幾重は濕つぽくなつた襟元を弄りながら、座へ戻つて、女中が火にかけて行つた鍋の前に頰杖をついた。しばらく經つてから繁雄もそこに來て坐つた。繁雄は下を向いてぢつと目を落してゐた。

「食べませうか。」

幾重は優しく云つて、割箸を口にくはへて片手で割りながら男の顔を見た。男は漸く口をひらいてむつつりと、

「えゝ。」

と云つて自分も箸を取つた。今日は繁雄の顔の皮膚が黄色味を帶びて、眼のふちなどがきたなく見えた。いつもの赤い唇も白く乾いてゐた。幾重は又振り返つて窓の外を眺めた。雨がやみさうな景色になつて、外が少し小暗くなつた。離れの座敷の灯が、庭を越した彼方にぼつと白い障子に映つてゐた。幾重の柔らかい白い肉にまつはらうとするやうに、疲れたやうな春の匂ひに充ちた濡れた空氣が、彼女の方に微に動いてきた。

繁雄はいつものやうに、默つてゐた。女の前にゐても繁雄はなんにも話をすることがなかつた。幾重に手を取られゝば自由に其の手を任せるし、幾重が何か綾してやれば、それに對して女の愛に媚びようとする笑ひなぞを見せたりするけれども、あとは、感情が消えてしまつたやうに繁雄はいつも默つて、その表情を靜にしてゐた。

幾重はその石のやうに硬くなつてむつつりとしてゐる繁雄の顔を、時々ぢつと見つめてゐた。こんな時、幾重の方から心を誘ふやうにしてやるのだけれども、今夜は幾重にはそれが面倒臭かつた。

「あなたはいつも默つてゐる人ねえ。」

幾重はおもしろくもなささうに斯う云つた。おとなしいと云ふよりは、戀のシーンを解することを知らないこの男の生野暮な、女馴れない心持が幾重には殊に今夜はつまらなかつた。

「ほんたうに味のない人だ。」

幾重は心の中でつく／＼然う思ひながら、何うかするとあのきれいな眼が、皺んだ瞼になつてひどく醜くなるその男の眼を見てゐた。繁雄はほんたうに何も知らなかつた。それでも、幾重が相手にしてゐる時には、繁雄はその愛の中に包まれてゆからうとする心持を、僅ながらその動作の上に現はさうとしてゐるところが見えたりしたけれども、たゞ其れだけであつた。この媚びの裏に、女の思ひを前立たせるやうな、男の強い肉の魅力などは、微塵も持つてゐなかつた。女の眼の色に相槌を打つやうな官能的

な笑ひを投げることなどは、繁雄は夢にも知らなかつた。
　最初は、女のはげしい愛着にその心を巻き込まれて、見當がつかずにゐるやうな男のあわてた初心さを、幾重は可愛らしく思つたりしたけれども、今では、幾重のしびれきつた戀の情熱を、一層荒々しく反撥させてくれるやうな力を持つてゐない繁雄のすべてが、幾重は唯じれつたいばかりになつた。幾重にあてて書く手紙でも、繁雄はその言葉の上に、戀の情緒を沁みださせることを知らなかつた。堅い文字で、戀とか、愛とか、なつかしいとか、可愛がつてくれとか云ふことを、をかしいほど試驗の答案的に書いてあつた。
　幾重はその手紙をいやなものの一つにしてゐた。概念的にばかり使はれてゐる戀と云ふやうな字を幾重はいつもよくは讀まないやうにした。熱がないと云ふよりは、味のない手紙ばかり繁雄は書いた。
　幾重はいつも、繁雄のことを、綺麗なお木偶さんだと思つたりした。それから床柱見たいな男だとも思つた。稀には寄つかゝつて好い心持のすることもあるけれども、向ひ合つてはなんにもならなかつた。抱くにも纏れるにもなんの感情もおこらないほど、繁雄の戀はぶつきらぼうであつた。幾重はこの戀の相手に倦き〱した。さうして此方から、綾してかゝることにした。
幾重は好い加減疲れてしまつた。

二

　繁雄はだまつて、自分の持つてゐた本を繰りひろげて見たりした。さうして讀まないで、又閉ぢた。
　繁雄は口を結んでゐた。少し赤い眼許が、釣り上つたり、又撓んだりしてる筋肉の動きを、幾重は眺めてゐた。女から、何かしかけられることを、ぢつとして待つてゐると云ふやうな樣子があつた。幾重はわざと、冷たい顏をして卷煙草をふかしてゐた。
「すつかりあなたが倦きてしまつた。」
　今、斯う云はうかと幾重は考へた。
　いつものやうに、男が斯う云ふ風を見せた時に幾重がするやうな事をして見たとして、その先きを幾重は想像したりした。
　想像してゐるうちに幾重は猶更つまらなくなつた。
「さあ、歸りませうか。」
　幾重は然う云つて卷煙草を火鉢の中に投げ入れた。
「えゝ。」
　繁雄はおとなしくむつつりした返事をしながら、直ぐには立たなかつた。女のきび〱した冷たい樣子が繁雄には、始めてのことなので、さつきから何うしていゝか分らなかつた。幾重のちつとも優しくない皮肉な眼付が、繁雄には一層纖穗がなかつた。幾重は立つて支度をした、これから此處を出てから、又この人と肩を並べて、何も話をする事がないので、たゞだまつてぼつ〱歩く――さうして、とう〱我慢がしきれなくなつて、自分はいつものやうに、子供騙しのやうな甘つたるい言葉を、あとから〱と捨鉢に抛りだすんだらうと思ふと、幾重はうんざりした。
「雨が降るから直ぐ別れようぢやありませんか。」
　幾重は然う云ひながら先きに立つて室を出た。繁雄に別れたら、京子のところへ行つて見ようと思つた。
　京子――と思つたはずみに、幾重の胸に放埒な戀が燃えるやうにきざした。あの可愛らしい娘ごころを今夜一晩で何うにかしてやりたいと思つた。赤い色彩で埋つてゐる京子を、幾重

はどうしても今夜氣儘にして見たかつた。牡丹の花の崩れるやうに、自分の抱かうとする手に崩れてきさうな京子の風情などを描いて、幾重は自分の肉が震へるやうな氣がした。

京子はいつも締をかいてゐた。あんまり美しいので幾重が見初めた娘であつた。

幾重はふしぎな樂しみにそゝられながら、鳥料理の門の灯などをなつかしく眺めたりした。雨はやんでゐた。幾重は傘をさげて男より少し先きに步いた。

「ね、別れませう。」

幾重が繁雄と並んだ時に、幾重は足をとめて、斯う云つたけれども繁雄は、何か思ひ探るやうな眼を暗い路に向けて、それに直ぐとは返事をしなかつた。

路は駒下駄で步いても行けさうに見えた。明りが所々にありながら路が薄暗かつた。車宿の前に、車が往來の方に向つて並んでゐた。幾重はその狭くなつた通りを行く時に、だまつてゐる男の手をマントの上から押へた。

繁雄は手を出して、手袋をはめてゐる幾重の手をとつた。さうして、不器用な調子で、

「私がいやになつたんでせう。」

と云つた。

「なぜそんな事を聞くんです。」

いやになつたと云つたその言葉が、幾重の耳に不快に聞えた。

「いやになれば何うするの。」

幾重は意地惡く男に迫るやうに、腕を男にこすりつけながら云つて笑つた。雨上りの生あたゝかい風が、幾重の頰にさはつた。

「どうもしない。――」

繁雄は低い聲でそれだけ云つて、だまつた。

「いやになんぞなりませんよ。私はあなたが好きですもの。」

斯う云ひかけて、自分はまた、そろ〳〵何時ものやうに云はなくてもいゝことを、云ひ出すんだらうと幾重は思つた。繁雄が、時々笑ひながら、

「口から出任せを云つて。」

と云ふやうに、幾重はぞんざいに、色氣の多い言葉を繁雄に向つて出し〳〵した。

それは、いくらでも、どんな事でも繁雄になら云ふことができた。

「私を思つてゐた？　私の事ばかり思つてゐた？――」

「別れてゐる間でも、あなたは私の事を思つてゐるんですよ。寢ないで、寢ないで、私の事を思ひつゞけていらつしやいよ。忘れちやいけない。」

「ほんとにあなたは可愛い人ねえ。可愛い、可愛い、可愛い繁ちやんねえ。」

「私はあなたを何うすればいゝんでせう。」

幾重は立てつゞけにこんな事を云つたりした。いつも〳〵、お定り文句の甘い言を云つてゐると自分で思ひながら、幾重はよく斯う云つた。こんな事を繁雄の前で云つてる時は、歌ひ馴れた好きな歌を勝手に口にしてゐるやうで、心持が快かつた。繁雄はそれを嬉しさうにして聞いてゐた。

幾重の甘つたるい言葉は、どこまでが、ほんたうで、どこまでが、でたらめか、繁雄の若い心では判斷がつかなかつたけれども、それでも、それを戀の生命を絞つたやうな大切な言葉にして、繁雄は眞劍に自分の心に受け入れてゐた。

「私を思つてゐた？」

と幾重に口癖のやうに聞かれる度に、繁雄は力を入れて、

「えゝ。」

と返事した。

けれども何うかすると、繁雄の生野暮な心持

かつ、女におもちやにされる事を憤るやうな風に見えることもあつた。幾重はそれを知つてゐた。さうして、自分のやうな女に對して眞實な愛を要求してゐると思ふと、幾重はをかしかつた。

「私は浮氣ものですよ。」

幾重は嘲ふやうに云つたりした。

「今日あなたの事を思つてゐたつて、今夜は誰れに惚れるか分りやしない。よござんすか。」

繁雄はそんな事を云はれると、仕方なしに微笑んでゐた。その笑ひの影に頼りなささうな色をひそめてゐた。然う云ふ繁雄の顔付が、ひどく幾重の心に激しい愛憐の波を起すことがあるけれども、又、何うかすると、思ひきり殘忍に苛めてやりたいやうな氣のすることがあつた。

「譃。そんな事は譃。私はあなたが好きなんですもの。外に誰れも思やしませんよ。あなたの口許は可愛らしいんですもの。あなたの眼はきれいでせう。こつちをお向きなさい、よく見て上げるから。――」

幾重は然う云つて繁雄の顔を、兩手に挾んだり、然うかと思ふと、

「今日、ほんとにいゝ人を見た。私はその人が忘れられなくつて困つてしまつた。」

と云つたぎりで、いつまでも、冷やかに繁雄の顔を見つめてゐたりすることがあつた。

二人とも、何も云はずにぶら〳〵と歩いてゐた。灯の賑やかな、電車の通る大通りへ出ると、幾重はそこで別れようと思つた。

「ぢや、左様なら。」

繁雄は目眩しい、濡れた明りの色にぢつと見入りながら、中々別れようとしなかつた。

「もう少し歩きませう。」

繁雄は然う云ひながら立つた儘で動かずにゐた。

三

二人は大通りから暗い小路へはひつた。そこを拔けると、川端へ出た。川向うの灯が三つばかり、とろんとした光りを投げてゐた。川の水が黒く、静に流れてゐた。

幾重は水を見ながら歩いた。水は直きに河岸に並んだ竹材の置場や材木の置場などに隱れてしまつた。片側に黒い塀がつゞいたり、軒の低いしやれた格子の先きに、なまめかしい燈籠の灯がぼんやりと點いてゐたりした。

「二人つきりで、どこかを間借りして暮らしませうか。」

幾重はふいとこんな事を云つた。ある家の二階に、美しく灯の色が障子の嵌め込み硝子に映つてゐるのを見上げた時に、どうしたのか急に幾重の胸に、そんな二人の生活が空想的に樂しいものに思ひ浮べられた。

「さうしてね、私はあなたの顔ばかり見てゐるんです。いゝでせう。なんにもしないで、私はふところ手をして、あなたの顔ばかり見てゐるの。あなたは何うしてゐるでせう。」

繁雄は默つて笑つてゐた。

「やつぱりなんにも云はないで、だまりこんでゐるでせう。え？ だまつてね。」

幾重はつまらなさうに云つた。

けれども、胸のなかでは、その空想がだんだんに大仰になつていつた。ふところ手をして、男の顔ばかり眺めてゐる自分の姿が、おもしろい姿に、はつきりと描かれたりした。さうして、その相手の男がさつき料理屋の窓で顔を見ながら思ひ出したある中年の男になつてゐた。

思ひ合つただけで、その男とは何うもならずに別れてしまつた。男はまだ二十三四のやうに美しかつた。色が白くつて、面長な輪郭に意氣なところがあつて、いつも情事で苦勞してるやうな、女と遊び慣れた浮氣つぽい感覺がその顔

にあつた。

幾重はその男の家に遊びに行つたことがあつた。幾重は袷を着てゐた。五月の緑の刺戟強い日光が、その家の廣い庭園のうちにいつぱいに漲つてゐた。幾重はその男に伴れられて廣い庭の内を歩いたりした。さうして庭つゞきの藪の奥の方まで二人は入つていつた。子供を多く持つてゐたその男は、幾重を娘のやうに抱つて、後から輕く抱いたりした。竹の根につまづきさうになつたりするのを、男は、

「あぶない。」

と云つてその身體を優しく支へて笑つたりした。男の姿は緑の日の影に若く美しく見えた。

幾重はそこで藪蚊にさゝれて、頬のところが赤くふくらんだのを、室に歸ると、男は自分で香水を持つてきて、その刺された痕へつけてくれた。

「いゝ氣持でせう。」

男は輕く云ひながら、その時幾重の半巾を持つてゐる右の方の手をしつかりと握つた。二人はしばらく笑つた眼と眼を見交しながら窓のところに立つてゐた。

男の夫人がいやな顏をするので、幾重はちよいちよい其處へ行くこともできなかつた。男は身分があるので、幾重を連れて然う外を出歩くこともできなかつた。お互に、何か好い機會を待たうとするやうな默契を、心の中に秘め合つたまゝで、長い月日が經つていつた。幾重からは男の手許へ手紙を送ることもできなかつた。男からは今でも、思ひついたやうに、時々かすかな思ひを傳へてよこしたりした。幾重は思ひ切つてはゐながら、その男ばかりは心の奥から消してしまふことのできないほど、戀しい印象があざやかに殘つてゐた。唯、顏を合せるだけでもいゝから、一月に一度、二月に一度でも日を定めて逢つて見たい――幾重は然う思ひ詰めたりすることもあつた。けれども、あの男へは、そんな馴染みたことは云つてやれなかつた。思ひ忍ぶと云ふ事に、無限の戀の律が波打つてゐるやうにいつも時々深く思ひやられるのは、この男との陰のやうな愛情ばかりであつた。幾重は、何うかすると、その男への戀が、自分一生の間のほんたうの戀であつたやうに思ひ返されたりした。

幾重は一人で、樂しい追想に耽りながら、ふらふらと歩いて行つた。川の水が、ふと見えたりすると幾重はそこに立つて、黑い水をいつまでもぢつと見詰めてゐた。繁雄は煙草をのみながら、幾重と同じやうにそこに立つて水を眺めたりした。

「行きませう。」

繁雄は、あんまり長く幾重が立ち盡してゐると、直ぐ斯う云つて促した。

四

「ぢや左樣なら。」

幾重は暗い橋の角で、繁雄に云つた。橋の向うで、廣告塔のイルミネーションが、赤く青くくるくると廻つてゐた。電車がきしきしと云つて遠くを通つてゐた。空のまんなかのところに、星が群つて現はれてゐた。

「別れませう。」

然う云つて幾重の出した手を繁雄は取つた。

幾重は繁雄の顏をぢつと見た。帽子の庇の下から、きれいな眼が輝いてゐた。

「もう少し送つて下さいな、ね。どうせ家へ歸るんでせう。」

「くたびれてしまつたから。」

幾重はいやさうに云つた。命が重いとでもいふやうに、ステツキの先きを振つて、砂利を蹴り散らしてゐた。

「ぢや電車へ乘りませう、いつしよに。」

「まあ一人でお歸んなさいな。電車に乘つたつてつまらないぢやありませんか。あなたは默つてゐるんだから。」

繁雄は、幾重の手を搖ぶりながら、何か云はうとして、それで調子好く彈んで出てこないやうな、もだ〳〵した眼色をした。

「一人で歸るのはいやなのですか。」

繁雄は、うなづいてゐた。

「ぢや、お別れのしるしに。」

幾重は繁雄の手を自分の方へひいて、男の方へ顏を振り仰向けた。

「ね、いゝでせう。左樣なら。」

幾重は、繁雄と別れて、橋を渡り返した。

五

一人で歩いてくると、幾重は今別れた繁雄のことが、ちよつと身に沁みて、その胸からはなれずにゐた。暗い街の灯が、とぼ〳〵して少し幾重の心が滅入つた。

「京子のところ――」

幾重は然う思つたが、さつきほどの熱がおこらなかつた。幾重の殊に氣に入つたあの眼などを思ひ浮べて見たけれども、それに心が惹かれなかつた。京子に逢ひたいと云ふ興味がなくなつてしまつたので幾重は何うしようかとしばらく道の中途で思ひ惑ひたから、寂しい思ひをして歩いた。

行く道に、踊りの師匠の家があつた。舞臺を踏んでる可愛い足音が、二三人かたまつて喧ましくどた〳〵してゐた。その音が往來の方に響いてきた。三味線の低い調子がそれに交つてゐた。

幾重はそこから折れて、的もなしに長い間足に任せて歩いてゐた。どつちへ行けば電車の道に出るか分らずに歩いてゐるうちに、待合などの軒並みに並んでる綺麗な町へ出た。大きい門の中に植込みが奥深く見えて、金行燈の灯が美しく濡れてゐたりした。どの家も明るく、なまめいた灯が流れてゐた。幌を下げた車が一臺彼方向きにおいてあつた家の門も過ぎたりした。細い露路から、半玉が二人巫山戲ながら出てきた。友禪の上に一人は長い羽織を引つかけてゐた。腰高に端折つた赤い裾先きから、塗下駄を穿いてゐる眞つ白な足袋の恰好が、くつきりと出てゐた。褄と、足袋の甲との間が、毛筋ほどの差で、あざやかに線をきつてゐた。

幾重はその姿を見送りなどして、又、右へ曲り曲りした。小さい街に出た。崖の下に並んだ家、燈も點つてゐた。幾重は直ぐ眼の下の、家の灯を立つて眺めた。紙の蓋をとつたやうな切り窓から、その灯がゆるく漏れてゐた。

幾重はいつともなく、さつき繁雄に別れたところへ出てきた。電車が遠くの方に動いてゐた。幾重は電車の方へ歩いて行つた。

六

幾重は山の手のある坂を上つて行つた。そこいらの邸内や、道の傍に、大きい櫻がちよい〳〵あつた。櫻は、薄つすりとこまやかに咲いてゐた。空がだん〳〵に晴れてきた。

小さい溝に、板の橋を渡した兎ある門構への前までくると、幾重は、松の枝に遮られたその家の二階を見上げて立ち止つた。夜など來ると、よくその二階から琴の音が聞えたのだが、今夜はひつそりしてゐた。その雨戸はすつかり閉いたまゝであつた。高いところに電燈の輝いてゐるやうな、隈どつた明りの色がずつと並んだ障子に華々しく射してゐた。

幾重は京子がゐるか、ゐないか、と思ひながら、門のなかに入つて行つた。鈴を押しても押しても、いつまでも誰れも出てこなかつた。

幾重は自分で、格子をからからと開けて、土間に入つた。そこへ、いつもの婆あやが出てきて、

「おやまあ。」

と云ひながら、愛想のいい顏をした。

「いらつしやるんですか。」

「へえ。」

婆あやは然う云つて、膝を突いてゐた。

幾重は上へあがつて暗い玄關で、上に着てゐるものを脱つたりした。幾重が來れば、誰れも幾重を京子の部屋へはわざわざ案內しなかつた。幾重は構はずに、そこから廊下をぬけて、奧まつた京子の部屋の方へ、そつと歩いて行つた。

突き當りの丸窓が、薄暗くなつて、室內には誰れもゐないやうに靜であつた。京子はもう寢んだのかしらなどと思ひながら、右に曲つてその入口の障子を開けて見ると、京子はそこにはゐなかつた。誰れか人が來てゐたやうに、京子の机の横に、客の座蒲團が亂れてゐた。

今にこの部屋へ京子は戾つてくるのだらうと思つて、幾重はそこに坐つてゐた。人形やおもちやや本箱と並んでゐる違棚の前に、小[illegible]がお飾してあつた。床の間の上に、[illegible]を飾つた尺五の枠が二三枚立てかけてあつた。

京子のいつも敷いてる友禪の座蒲團の色彩が、こつくりと幾重の眼に映つたので、幾重はやがてその上に行つて坐つた。繪筆や、畫帖の雜然に散らかつてゐる机の上に、たつた一つ位置を異へてその角のところに置き放しになつてゐるやうな形で、載つかつてある小形の本があつた。きれいな藤原時代に見るやうな姬が扇で顏をかくしてゐる繪がその表紙にかいてあつた。十二一重の裾と、下げた髮とが亂れて、赤い色が毒々しく見えた。その上のところに何か洋文字が達者な筆でかいてあつた。

「The irresistible Argument.」

幾重はその字を讀みながら、そつと頁を開けて見た。

次ぎ次ぎと美しい繪が揃つてあつた。一敵しがたき論證―の繪が、白く、赤く、黑く、強烈な色彩が縺れ縺れして、描かれてゐた。女の肉の露な帶が解けて流れてゐたりした。女の肉の露な手が何かにのびて、何かに絡まつてゐたりした。櫻の枝の背景や、燈籠に燈の在る庭の圖かあつたりした。掛け蚊帳の上に女の簪が落ちてゐたりした。

丹次郎のやうな男や、久松のやうな男が澤山にゐた。鏡臺の蔭で、長い袖の中に顏を埋めてゐる美しい娘の、振り下げの鹿の子の帶が男の手の中に亂れてもつれてゐたりした。

幾重は一枚づつおもしろさうに繰つて眺めた。十四五葉で、その繪はおしまひになつてゐた。

見てしまふと、幾重はその本を舊の通りにして、再び表紙の姬の繪を見返した。さうして、洋文字を又口の中で讀んだ。

「一敵しがたき論證。―」

幾重はそれを繰り返した。

然し、直ぐに、誰れがこれを持つて來たのだらうと思つた。さうして、この机の上に乘つてゐるからには、京子はこれを見てゐたに違ひないと思つた。

「京子がこれを見た。」

幾重はふしぎな興味にそゝられて、しばらくぢつと、何か心に描いてゐた。

どこからともなく、ふだん京子のもののから匂つてくる香水の匂ひが、あたりを籠めてゐて、それが幾重の鼻にしみた。長い袂や、厚い褥を通して、幾重は京子の肌などを空想しながら、又、ぱらぱらと本の頁を繰つた。人間の呼吸がそこから響くやうに思つた。

七

そこへ婆あやが茶を運んできた。京子がゐないと聞いて、
「ぢや、お二階で御座いますよ。いらしつて御覽なさいまし。」
と云つた。
今夜は誰れも家にゐなくて、孃さんと婆あやばかり留守してゐるところへ、いつも來る原さんと云ふ男のお友達がいらしつた。
「その方とお二階にいらしやるのでせう。」
と婆あやは云つた。
「お知らせしませうか。」
婆あやは立ち際に斯う云つたけれども、幾重は自分で二階へ行くと云つたので、婆あやは又室を退つていつた。
これを書いたのは、その原さんだらうと思ひながら幾重は部屋を出て、廊下から二階へあがつていつた。唐紙がぴちんと閉まつて、上り口が暗かつた。
室内からその時、低い京子の聲がした。幾重はだまつて、その聲のした方の唐紙をあけて、室にはひらうとした。びつくりして振り向いたのは、座敷の隅にうづくまつてゐた京子であつた。原は其の後に手を下げて立つてゐた。
原は眞つ赤な顏をして、立端のないやうに、もだ／＼してゐたが、京子は直ぐに立つて、襟前などを直しながら幾重の方に向いてよろよろと歩いてきた。おしろいのついた顏が眞つ蒼で、眼ばかり赤くなつてゐた。大きく卷いてゐる束髮の鬢がくづれて前髮から額に輪のやうにかぶさつてゐた。
幾重は、なんと云ふ美しい顏だらうと思つた。身體ぢうの血を失つてしまつたやうに、京子は眞つ白になつた手を上げて、髮を撫で上げてゐた。脆い花片のやうに、白々と、消えさうになつてゐるその顏のなかに、睫毛の長いくるりとした可愛い眼が鋭く光つてゐた。
「いついらつして。」
京子は靜に斯う云つたけれども、息が彈んでゐた。幾重は原と云ふ男を見た。原は、座敷のなかに何もないので行き場がなかつた。それで障子をあけて廊下の外に出ていつた。髮の長い、眼鏡をかけた、口許に愛嬌のあつた顏が、幾重の眼に殘つた。
「原さん、いらつしやいな。」
京子は斯う云つておいて、幾重の袖に手をかけた。
「階下へ行きませう。」
京子は一生懸命な顏をして、無理に笑つて見せた。笑つてゐるうちに、その顏に生きた血が動いてきて、ふつくりした筋肉が、なだらかに弛んだ。匂ひと、柔らかさと、なよ／＼しさとで、京子の小さい身體が、ちよつと觸つても赤い色彩のなかに崩れてしまひさうに見えた。眼が情欲の詩のやうに燃えてゐた。
「美しい顏ね。なんて美しい顏をしてゐるんでせう。」
幾重は京子の顏から眼をはなさなかつた。京子はあわててその顏を袂でかくしながら急に階下へおりていつた。幾重は立つた儘で、今、京子のうづくまつてゐた座敷の隅を見た。電氣が疊を平らに照らしてゐた。その隅にはなんの影も落ちてゐなかつた。原はいつまで經つても廊下の外から入つてこなかつた。

八

幾重も階下へおりてきた。京子の部屋へは行かずに、緣から硝子戸越しに暗い庭を眺めて立つてゐた。外はくらくつて、なんにも見えなかつた。こゝにも丁字の匂ひがしてゐた。冷たく、すつきりと幾重の胸を清めるやうに、靜に

闇の外から匂つてきた。少時して二階から原の下りてくるやうな氣勢がしたので、幾重は京子のところへ行つて見た。
　幾重は入ると直ぐ、机の角のところに眼を送つた。本は其の儘になつてゐた。京子は机の上に突つ伏してゐた。肩上げのある荒い絣の羽織の襟が肩から少し落ちてゐた。おしろいのついた頸筋が、後れ毛でぼや〳〵と埋つてゐた。髪がすつかりくづれて右の耳前髪の方に落ちかかつてゐた。
「京子さん。」
　幾重が呼んで見ると、京子は直ぐに顏を上げて此方を向いた。その口が子供らしく笑つてゐた。
「氣分でも惡いんですか。」
「いゝえ。」
　京子は頭を振つて、さうして、机の角の本の表紙をぢつと見守つてゐた。
「お客樣がお歸りになりますが、宜しうござんすか。」
　婆あやが障子の外から聲をかけた。
「えゝ。」
　意外にはつきりとした大きな聲で返事した京子は、ふと氣が付いたやうに、その本を取つて急いで部屋を出て行つたが、直きに歸つてきた。
「The irresistible argument.」
　幾重は京子の顏を見ると、から云つて笑つた。さうして京子の手を取つて、自分の膝の前に引き据ゑた。仆れるやうに凭れかゝつた京子の身體を、幾重は力いつぱいに抱きしめて、その崩れた髪の毛に頰を押し付けた。
「ふるへてるぢやありませんか。」
　京子の身體が微に震へてゐる。京子は小さい口を結んで、魂の拔けてしまつたやうな眼で自分の膝の上を見詰めてゐた。
「ね、何うしたんです。」
　幾重は後から、京子の腕をとつて其の身體をゆすぶつた。膝の上に乘せた子供をいとしむやうに、京子の頰に、幾重は頰を寄せた。さうして、こはれかけてゐる髪のピンを一本づつ拔いてやつた。亂れ毛が、幾重の胸の前にずるりと落ちた。幾重はすつかり、その髪をほぐして撫でゝやつた。長い髪がうねつて京子の背中に波を打ちながら垂れた。幾重は、ぢつとしてゐる京子の惱ましいやうな呼吸を靜に聞いてゐた。さうして、斯うして京子を抱いてゐる自分が、まるで愛の絶頂にあるやうな氣がした。
　幾重はどんなにでも京子を可愛がらうと思つて身が燃えた。さうして、その irresistance な恐しい力に引きずられて、その迷蒙な慾のなかに醉ひしれてゆくものの狀態を、ひそかに見守ることのできる畸形な快樂を、幾重はうつとりと夢みてゐた。
　京子は幾重を送つて外に出た。送つてこなくてもいゝと云つて斷つても、京子は聞かずに出てきた。髪を下げた上から、漆黑の艶をもつた長いびろうどの襟卷をしてゐた。このびろうどの中から、京子の白い可愛らしい顋が括れるやうに現はれてゐた。
　夜の更けた外が、暗く暖かにひつそりしてゐた。柵に添つた柳が柔らかに色をかくしてゐた。美しい肉にかくれたある祕密の聲が、この暗い夜のおもてにいつぱいに擴がつてゐるやうに思はれた。幾重は興奮してゐた。幾重は京子の手を握つた。
「もう遲いからお歸りなさい。」
「えゝ。いゝわ。」
　京子はやつぱり隨いてきた。夜風の身に沁みるのが快い心持さうに京子は美しい眼を闇にさらしてゐた。その子供のやうな小さい顏に、

蒼い衰弱の陰を微に漂はしてゐる魅力に幾重は惱まされながら歩いた。

「美しい美しい、ほんとに美しい。」

　幾重はふと立ち止つては、しばらく京子を見詰めてから斯う云つた。さうして、幾度も、幾度もその頰に脣をよせた。

「ぢや、お歸りなさい。もうこゝまででよう御座んすから。」

「いゝえ、もう少し、電車のところまで。」

　京子は幾重の顏を見ないで下を向いて然う云つた。

「ごらんなさい。こんなに暗いんだから。」

　幾重がそこいらを見廻したので、京子も顏を上げてあたりを見た。

「電車が通らないわ。」

　京子は坂の下を遙かに見て云つた。そこに燈火があつた。闇にとざされた樹の陰影を受けて、赤い電燈のいろが夢におそはれてゐるやうな暗い隈のなかに輝いてゐた。

◇

胸は泣くこれは無盡に人ひとり思ふ力の
なきわびしさに（晶子）

戀の最初は其の感情だけでも一人を思つてゐられた。然し時が經つて、戀に馴れてくると、一人を思つて居ようとするのには意志の力が要るやうになる。兎もすればその一人の上から、心が他に紛らされ、外らされる。それを堅く自分の上に引き留める意志の力が要る。戀を意志の上に引据をようとする努力が要るやうになる。それに打克つた時に、もう永久動く事のない本當の愛が生まれる。其の時こそは幸福が來る。戀の地盤がこの人生の上に確かりと築かれる。――然し、歌はそこまで行かない途中の苦しみを云つてゐるのである。何うかすると他から向けられる愛情にうつかり乘せられるやうな事などがあつて、一人を思ふ心が鈍る。浮氣でも、いたづらでもないのだが、眞實と定めた其の一つのもゝを危く他の人に不純にされ、濁らされさうになる。その弱さ！　それを抑へる力のないわびしさ。それ故にこの人は泣くのである。「一人を思ひたい。盡きる時なく一人の上ばかりを思ひたい。」それが願ひであるのに、それが願ひであるものを、何故この心が他に動かされるやうな時があるのであらう。斯う省みて、深く嘆くこの女性の心は、素直にもいぢらしい優しさで充ちてゐる。

＊

わがおもひ君が思と逢はむ夜は旦を咲く
花紅おほからむ（薫園）

綺麗である。淡い情趣。幼なじみな詩の世界の空想――内容については別に解くほどの事もない。二人の思ひと思ひとが、何處かでひそやかに相逢ふ夜は、さぞ、明け方に咲く花は紅の色が多いであらうと云ふのである。

（「彼のはかなさ」より）

年譜

明治十七年

四月二十五日、淺草區藏前町に生る。俊子と命名。（舊姓佐藤）

明治二十三年

四月、淺草馬道小學校に入る。中途にして下谷根岸小學校に轉校せしも、後、再び復校す。通學の傍ら花川戸の師匠に就きて踊の稽古をなす。當時又黑岩淚香の飜譯探偵小說を耽讀し、殆んど見ゆるものを讀み盡せり。

明治二十九年

春、當時神田一つ橋所在の府立第一高等女學校に入學。樋口龍峽夫人かつみ、小橋三四子、閨秀畫家椎塚蕉華などと同級なり。

明治三十年

一級飛んで三年級となる。此の當時、尾崎紅葉の作品を愛讀し、文學に興味を持ちたる結果、友人と共に少女小說の如きものを書けり。

明治三十三年

三月、府立第一高等女學校を卒業す。

明治三十四年

此の年女子大學創立せられ、直に國文科に入學す。學科に對しては一向興味を感ぜざりしも、ミス、グリーンと云ふ英語の教師に會ふのが無上の樂みにて每日熱心に通ひ、青葉日記と題して其の教師に對する種々の感情を綴りたるほどなり。病氣の爲め一學期だけにて退校す。下谷七軒町より目白まで每日徒步にて通學の結果心臟病に罹りし爲めなり。

明治三十五年

四月、小說を書く志望を以て幸田露伴の門に入る。初め紅葉を崇拜し、露伴のものは一作も讀まざりしも、當時紅葉の『金色夜叉』が宮戸座に上演せられ、露伴の『髭男』が明治座に於て演ぜられつゝあり、紅葉は每日出張して嚴格なる干涉をなすに、露伴は一切無干涉なりと云ふ新聞記事を見て、其の人格を欽慕する餘り單獨にて其の門を叩きたるなり。當時用ゐし露英の號は、露伴より與へられしものなり。

明治三十六年

二三月の頃、處女作『露分衣』を、文藝俱樂部に揭ぐ。露伴側の人々の間に於ては好評を博したり。一葉女史の作品の如き文章體を以て書きしものにして、之を讀みたる泉鏡花は、此の人は才分ある人なれども、斯の如きものを書くは氣の毒なり。」と評せしと聞けり。其の後二三年間同一の文體にて書き續け、作品は『文藝俱樂部』及び『新小說』を主とし其の他三四の雜誌に發表せり。露伴は決して雜誌を讀ませず、古典文學のみを熟讀せしめたり。

明治三十九年

此の時代より自己の作風に對して非常に嫌惡を感じ、從來迪り來れる藝術上の道の誤れることを自覺す。書くことが眞實厭になり、新たに自己の進むべき道に就て煩悶す。遂に斷然筆を斷ち、文學以外、新しき藝術に向つて出でんと志し、岡本綺堂、岡鬼太郞、杉贋阿彌、栗島狹衣などを中心として組織せられし每日派文士劇の女優となる。

明治四十年

横濱の羽衣座に於て上演せられたる[illegible]二[illegible]の娘に扮したるが初舞臺なり。同年、

東京座に於て「[illegible]」を上演し、明治[illegible]
[illegible]に於て好評あり。其の後次々に[illegible]に出づ。傍ら市川久米八の許に通ひ、舞の稽古をなす。久米八と共に名古屋に赴き、末廣座に於て「[illegible]」を上演、[illegible]女[illegible]たり。當時市川華紅と云へり。―名古屋より歸京して川上貞奴の許に出入す。新しき劇場を興す計畫ありと聞き、自分の進まんとする藝術の爲めに何物かを得んが爲めなり。書き抜きをしてやつたり、帶を締めてやつたりなどす。其の中女優養成所が設立され、貞奴女優の選抜などを手傳ふ。其の事業を助くる傍ら、踊と鼓とを稽古す。此の間絶えず讀書を怠らず。新しきものは大抵此の時代に於て讀破せり。

明治四十一年

春、東京座に於て文士劇「其の夜の石田」を上演、狂女に扮す。舞臺に立つことは自己の内面的要求に合致せざることを自覺すると同時に、再び創作の要求の烈しき爲め、一時劇界を退く。五月、米國より歸朝したる田村松魚と、東京に於て結婚す。

明治四十二年

「大阪朝日新聞」の懸賞に應じて、『あきらめ』の一篇を寄稿、一等賞に當選し、賞金一千圓を得。

明治四十三年

それを動機として[illegible]を作ることに[illegible]しが、[illegible]に求めて、中村吉藏氏の[illegible]に投ず。[illegible]に於ける「波」の上演に際し、其の女主人公に扮し、大いに好評を博したれども、一度だけにて止める。七月、長篇『あきらめ』を金尾文淵堂より出版す。

明治四十四年

七月、短篇「美佐枝」を「早稻田文學」に發表す。

明治四十五年

二月、短篇「魔」を「早稻田文學」に發表す。此の一作に依り、新たに文壇に認めらるゝに至れり。四月、「[illegible]」を「中央公論」に發表す。

大正二年

四月、「木乃伊の口紅」を「中央公論」に。五月、短篇集「誓言」を新潮社より出版す。「誓言」「魔」「嘲弄」「惡寒」「離魂」『紫色の唇』「上方役者[illegible]」「その日」「おとづれ」「女作者」の十一篇を收む。中にも「誓言」と「女作者」とは共に「新潮」に掲げ好評を博したるものなり。七月、再び藝術觀上の動搖より三度女優として立つ決心を以て坪内博士の文藝協會に入らんとし、十日程通ひて止める。其の事[illegible]を[illegible]としたる短篇小說を「中央公論」に發表す。

大正三年

一月、「[illegible]」を「中央公論」に。四月、[illegible]集「[illegible]」を牧民社より出版。同月、「[illegible]」を「中央公論」に。[illegible]月、「木乃伊の口紅」を牧民社より出版す。[illegible]「暗い空」を「讀賣新聞」に連載す。七月、「奴隷」を「中央公論」に發表す。

大正四年

三月、「[illegible]」を「中央公論」に、「[illegible]の[illegible]」を現代名作集の一篇として出版。四月、「夜着」を「中央公論」に發表、「小さん金五郎」を情話新集中の一篇として新潮社より出版す。九月、「あきらめ」を植竹書院より、十月、短篇集「戀のいのち」を實業之世界社より出版。

大正五年

一月、「小[illegible]」、四月、「お松彦三」を「中央公論」に發表す。

大正六年

三月、「彼女の生活」を新潮社より出版。

大正七年

十月、渡米。現在バンクーバアに住す。

野上彌生子集

世阿弥のことば

わが風体をきはめてこそあまねき風体をも知りたるにてはあるべけれ。

野上弥生子

松屋製

(SMEP B…1) 10…20

小さい兄弟

友一の六つの夏は、幼兒から更に少年らしい時期に移り行かうとする一轉機として、彼の小さい關係に――三つ違ひの弟との關係上、可なりお兄さん扱ひにされる場合がありながらも、要するにその弟より稍大きい赤ん坊としか見られなかつた過去の平凡な生活の上に――著しい變化と様々な出來事や經驗を持ち來しました。繪をかく事、繪本を見る事、お伽話を讀んで貰ふ事、玩弄具を並べる事、弟ときみ――彼等の忠實な保姆――と鬼ごつこをして騒ぐ事、庭を驅け廻る事、ブランコや三輪車に乘る事、お天氣のいゝ日に電車道の方や、近所の墓地や田畝へ散歩に伴はれる事、その序に堀割の橋の傍に在るきみの實家の植木屋を訪問する事、弟とのちよつとした喧嘩、爭論、涙、和解、十時と三時との樂しみなお菓子――彼の今日までの生活はすべてこれ等の繰返しに過ぎませんでした。その他はたま〳〵の外出、子供日の有樂座を見物するとか、動物園に連れて行つて貰ふとかを、唯一の變化として、何よりも嬉しい事に數へてゐたのでありますが、其のうちに追々一人前の子供として、有らゆる欲望の擴がりかけた彼の心は、何となく今までの事だけでは滿足されない飽き足りなさを感じかけて來ました。單なる家の内外の驅け歩きや、母親と三つの弟ときみを相手の遊戯だけでは、到底洩らしきれない力の溢れがありました。彼はあてどもなく、何物かを求めようとする目を見張りました。而して巣の緣から高い大空や、自由な森や、野の方を思ひやる小鳥の心持で外界を覗いて見た時、其處には自分のまだ立ち入るを許されなかつた様々の世界のある事を發見しました。中でも最も強く彼の心を引きつけたのは、路傍や、人の門や、又は堀割の橋の上などにかたまり合つて、いつも愉快さうな會合を形づくつて騒いでゐる子供等の群でありました。殊にお稻荷様の横町と稱する、電車道から友一の家の在る郊外の静かな通りへ拔けようとする一筋の狹い路は、左右に植木の下職人や、工場通ひの人達の混雜した小家を持つて、結構な、敏捷な、愚直な、魯鈍な、あらゆる種類の小人間の巣窟でありました。友一は散歩の往き歸りなどに弟を負ぶつたきみに連れられてその傍を通る時、一種の緊張を感じないではゐられませんでした。彼は共鳴と好奇心と、同時に、警戒と侮蔑の入り交つた複雜な心持から、その群の方へ熱心な一瞥を投げて通りました。

―杉田・杉田！―

「やあ、赤いトルコ帽！」

人ずれのした、途上の小アナキストたち――一群は、自分の仲間以外の者に對しては、きつと執るべき態度の如く信じてゐた或る種の敵意と、嘲弄的の示威を、彼にも示す事を忘れませんでした。これに對して、背中の弟が、彼等の反感の的になつた赤いトルコ帽の頭をもたげながら、ぽかんとした無邪氣な驚愕を報いる間に、友一は我ともなく顏を赤らめて、足早に彼等の勢力範圍を脫しようと努めます。而してそれが成功した時、彼は怒と非難の面持できみに話しかけました。

『いけない子供達ねえ。惡口なんか云つて。』

きみは彼等が仕様のないいたづら子であることや、純良ないゝお兄さんにならうとするには、決してあんな子供達と遊んではならないの

だと云ふことを、極力制禁しました。さう云はれると、彼もそれを信じたが、併し、同時に、彼等を魅力ある好奇心の眼とする事を禁ずる事は出来ませんでした。彼等のがや〳〵した喧騒、乱雑な遊戯、喧嘩、噂話の中には、自分のまだ知らない珍らしい事、面白い事の無数が隠されてあるやうな気がしました。春の末から夏へかけての陽気に連れて、子供等の戸外の騒ぎが盛んになればなる程、彼等の事が何と多く目に触れました。

『一緒に遊びたい。あの仲間に這入りたい。』

彼は斯う云ふ言葉を口にする決心はありませんでした。又自分の此頃の理由のない不満や、あてどもない憧憬の心の底には、この一つの願望が横はつてゐるのだと云ふ事を、自分ではつきり意識するのでもありませんでした。にも拘はらず、彼の目は戸外の新たな対象――これまでは殆んど異邦人視してゐた一隊――の上を離れる事が出来なくなつてゐました。今までの自分は、自分が如何にも幼稚なものとして窃かに軽蔑してゐるこの弟と大した差異のない境遇に安んじてゐた事を恥ぢるやうな気が起りました。彼は何かにつけ兄らしく、年長者らしく、即ち優越者らしく振舞はうとしました。こんな心持から、彼は外出や旅行などもこれまで頼りにしてゐたきみやの保護を謝絶し出し、すべてに自由な独立した行動を取りたがりました。その一端として彼の自信ある決心を實行したのは、家から五六町の距離に在る郵便局へ、お父様の手紙を入れに行つた事でありました。

『お父様、僕が行つてよ。僕一人で行ける。きみやなんか来なくたつて大丈夫。』

彼は熱心に頼みました。今まではよく郵便局に従いて行つても、又赤いポストの側面にぐるりと廻転する玩弄具の様な面白い弧形の差入口に、手紙やハガキを投入れさして貰つても、直接自分に命ぜられた用事ではありませんでした。それを今度はどうしても自分の責任を以て果さうとしたのでした。彼は渡された二つの封書と、一枚の葉書を握つて駆け出しました。而して床屋の角を曲つたり、湯屋の横町を抜けたり、電車道の橋を渡つたりして首尾よくそれをポストに入れて帰つた時には、彼はいつぱし大した事を仕遂げたやうな得意と誇を感じました。且つ自分でさう感じたばかりでなく、父様やきみや達からもえらい事としてそれを褒められた時には、彼は目を輝かして悦びました。

この第一の冒険に成功して以後、彼は何となく一人身で自由に表を出歩く事に興味を覚えました。―お稽古の帰り、横町の小間物屋、文房具屋へ出るにも、きみや何んかに保護されてゐた時ほどに、悪童も嘲罵を浴びせない事が分りました。却つて三輪車などに乗つて其の中を疾驅して過ぐる時には好意ある歓声を浴びせかける事さへありました。と云つて、立ち止まつて、新たな遊び相手として、その仲間に投ずる程の勇気はまだ彼にはありませんでした。彼が斯うして出掛けて行く先は大概きまつて横町の傍に住むきみの實家でありました。

『おや、お坊つちやま、お一人でいらしたので御座いますか？』

植木畑の青い木立の間で働いてゐた家の人達から斯う驚いて歓迎される事が、どんなに得意だつたでせう。彼は帰ると、何処へ行つたのだらう、と云つて気遣つてゐる母親達の前で、すまし込んで報告いたしました。

『僕ね、きみやのお家まで散歩に行つて来た。』

丁度その頃でありました。或る日下町の方へ出掛けた母の伴代子が、赤いバンドのついた大きな太鼓を二つお土産として買つて来ました。これは其頃楽隊の真似ばかりして家の中を躍り

廻つてゐた小さい弟の眼みたいだつたのでありますが、友一も欲しがつてはと思つてお對に買つたのであります。すると彼は侮辱されたもののやうな不快な顔をして、

『お母様、僕もう太鼓つて時代ぢやないんですよ。』

と昂然としてその願望を拒絶しました。

曾代子は彼の自尊心と時代と云ふ言葉を使つた云ひ廻しに、つい微笑させられました。これはその他の印象とか感じとか云ふ言葉と共に、親達の會話の中からいつとなしに覺えて、彼自身では不自然な氣もせず、きみや弟を相手の遊びの間にも平氣で使つてゐる用語の一つでした。曾代子は彼の顔をつくづく見ました。而して、

『どなたでせう、そんな理窟屋さんは。』

と尋ねて見るやうに、默つてその姿を眺めやつた時、今更の如く自分の子供の大きくなつたのを驚き、心が湧きました。着物が薄くなつてから、殊にそれが目に立ちました。身體は若い植物の蔓のやうにのびのびとして、手にも足にも男の子らしい敏捷の美しさが現はれました。圓い顔——本能に近い、彼女の心待に育てゐると云ふ[illegible]な[illegible]——も、口などを結んで[illegible]をした表情をすると、あなどり難い[illegible]が生じました。汗ばんで眞つ赤に熟んだ顔に、褐色の柔かい産毛に蔽はれて果物のやうな[illegible]な血の色にだち、彼の順當な生き生きした成長をなしてゐました。取り分け最も大事な發育を遂げつゝあるものとして、まつ黒な濃い髮で、[illegible]に包まれてゐる頭部は、もう立派な完全な形に出來上つてゐました。前額から後頭部へかけての豐かなふくらみ、清の精緻な大きい耳、しつかりした線の[illegible]足、堅い頭動、どこにも危けな[illegible]じみた點は見られませんでした。

それは既に曖昧の域を脱して、人間界のあらゆる知識、思想の[illegible]に準備されてゐる一個の小さい庫——少年の完全な頭——でありました。曾代子はその兒の身體の逞しさを[illegible]な、遲滯ない發達と、近頃になつて漸く現はれて來た少年期の一種の[illegible]、[illegible]に思ひ合せると、もはやこの子供に對して今まで通りの取扱ひをする事は不可能だらうと云ふことを考へないではゐられませんでした。彼は生れ落ちるとから熱心に實行した特殊な待遇——一種の教育としての隔離法——を拋棄しなければならない時が來たのだと思ひました。彼女に取つては、これは可なりの不安であり、[illegible]であり、一種の悲しみでさへありました。

善良な話の外は聞かせまい、美しいものの外は見せまい、正しい言葉の外は[illegible]させまいとしての[illegible]な[illegible]法が、實際子供に取つてよい事か惡い事かは、彼女自身にすら突き詰めた所は分らなかつたが、若い母親の用心と無經驗から來た過大の恐怖が、その場合何の顧慮なしに彼女にその決心を起さしたのでありました。

『本統に私は無人島へでも連れて行つて育て度い位に思つてゐたのだ。』

曾代子はその時分の心持をふり返つて見ると、それからそれへと色々な問題に亙つて考へられるのが常でありました。

結婚は或る男と或る女との約束ばかりではなく、同時に自然と人間との契約であると云ふことを説いたのは、エミルの著者であつたと思ひます。地球上に優秀な人類を創造する神聖な道徳として、戀愛を宗教的の意義にまで引き上げようとした北歐の或る詩人や、戀愛について、結婚について、子供について、敬虔な豫言者的な著述は、近頃の若い女の[illegible]にはもう可なり親しくなつてゐます。一生涯を女性とは沒交渉に終つたツァラツストラの詩人さへ、眞の結婚、眞の戀、眞の子供の教育に就いては、

その時代の誰よりも進んだ意見を發表したと云ふ事は、嚴肅な皮肉として、それだけ又深刻な思索の過程を經た言葉として曾代子には考へられました。けれども、こんな說をよく知り且つ是認してゐる若い男女が、彼等の結婚の瞬間に於て、少しでも其の事に根深い思慮を費してゐるでせうか。彼等の結婚は大部分當面の戀愛を完成させるための形式として待たれ、急がれてゐるだけで、其の次に來るべき子供や、その子供の教育の事までも考へてゐる餘裕は恐らく無ささうであります。若しそれが戀愛結婚であればあるだけ、一層夢中であり、無分別であり、無思慮であるらしく見えます。その最初の貴重な創造物を、嬉しさと物珍らしさと、同時に稍迷惑さうな疑を以て、抱いてゐる多くの若い父母たちを、私達は私達の社會に見ないでせうか。

曾代子も殘念ながらその多くの親たちの中の一例であつた事を白狀しなければなりません。その上彼女の實家のその時分の狀態から、彼女自身子供と云ふものに就いて極端にまで無知識であつたので、倘更ら狼狽へました。彼女は何處から來たともなく自分の膝の上に落ちて來てゐる小さい新人を見て、途方に暮れました。何をどうしてよいのだか分りませんでした。小さい人が泣き出すと、自分も一緒に涙を流しました。譯も分らずぐづつたり、不機嫌であつたりする時には、悲しさ、心細さの上に、當てもない腹立たしさや、みじめさの思ひが入り交つて、ヒステリの發作のやうな不快な昏迷に陷ることさへありました。けれども、子供に對する母親の神祕な愛着の心は、そんな心持があればあるだけ、倘ほ活き〳〵した力と反省を以てその下から甦りました。何もかも可愛らしい。赤い產毛の一本から、小さい手足の爪先まで、皆んな可愛らしい。小さい蒲團、赤い枕、一つ身の着物、單に彼の物であるため、その周圍に在る爲ばかりに、特殊な魅力を持つて可愛げに珍らしい。その中に包まつてゐる小さい身體、小さい目、口、鼻、耳、有る事を知つてゐなければいつまでも氣がつかないかも知れない位、小さい小さいお乳、すべてが現實にあり得ないもののやうにさゝやかに巧妙に出來上つてゐるのをぢつと見てゐると、母親の心には、初めて人間の雛形を創造し得たプロメテウスの嘆美と驚愕が湧きました。全く、曾代子は何を見ても驚き賞でないではゐられませんでした。その小さい口がくしやめをしたり、目から涙が出たりするのさへ、さも〳〵不思議な氣がしました。それと共に、それ程巧妙に造られてある諸機關が、今のところ極めて幼稚で、遲鈍で、ほんの當面の生活に必要な作用だけしかなし得ない事を考へた時、創造者の周到な用心と遠大な計畫に新たな驚を感じました。若しこの出來上つた許りの初々しい諸機關に將來あるべきだけの發達が最初から備へられ、銳敏な官能が目醒まされてあつたとしたら、生れ落ちると同時に氣狂ひになる子供があるかも知れません。何故なれば、彼等が一年近くも封じられてゐた、狹い靜かな暗い部屋の中に較べては、その誕生の地は餘りに光明と音響と色彩と、その他千差萬別の複雜な事象に富み過ぎてゐますから。すべてが驚異であり、嘆美であると共に、絕大の恐怖と戰慄は、彼等の新らしい清淨な神經系統をめちや〳〵に亂り、惑はし、打ち挫くでありませう。たゞ長い月日の間に順當に馴らされなければならない、見せられ、教へられなければならないのだと思ふと、曾代子は本統に惧れ迷ひました。見せ度くない、聞かし度くない、覺えさせ度くない多くの事を、どうして防いだらよろしいでせう。二つ三つの頃の幼い淡い見聞は、特別に惡い事でさへなければ、成長した

後の發達し改善されて行く性情の上には、大した強い迹を殘すものでないとしても、曾代子の妙な潔癖は自分の大事な者をその中へ投げ出して置くに堪へなかつたのでした。

　曾代子がそれを防ぐために取つた隔離法は、忠實なきみの協力と、小さい弟と云ふ相手の出來た事に依つて、今日まで可なり完全に保たれました。幼稚園に入れる事さへしませんでした。カンガルーがその子供を腹の袋の中におつと庇つてゐるやうに、自分の家の生活と異つた生活、異つた思想、異つた言葉には出來得るだけ觸れさせまいとしました。同時にそれがいつまで實行さるべきものかに就いては常に注意を怠りませんでした。而して今その時機が來たのであります。埒の外されるのを待つて嘶き足掻く若い駒の心を曾代子は六つの子供に見出しました。

『友さん、あなたこれからおんもへ遊びに出てもよう御座んすからね、その代りいらつしやる時と歸つた時、お母様に御挨拶するのを忘れないでね、よう御座んすか。昨日見たいに默つて何處とも知れず行つたりしちやいけませんよ』

　或る日母から斯う云つて聞かされた時、友一は少し極り惡さうに笑つてうなづきました。前日、それも夕方近く、染井の方までぶら〳〵遊び歩いてゐてきみに探しに來られたのを思ひ出したのであります。でもそんなお許しがたうとう出されるまでの母親の込み入つた心持を察する事は元より出來ませんでした。

『僕ね、おんもへ出たつて惡い子供と遊んだりしないの。染井の中村つて兒ね、いゝ子なの。僕にガラスメンコを三つ呉れた。』

『中村さんつて何處の兒なの？』

『墓地んとこの石屋の子。』

　曾代子は自分の子供が石屋の子供達と墓地にすぐ接した石置場の、石塔や燈籠の蔭などで遊んでゐる有様を想像して見ました。これは彼が一個人として作る最初の對社會關係に外ならぬのだと思ふと、何んだか涙ぐまれるやうな可愛らしさと物珍らしさを感じました。

　嚴密な意味での第一步、十數年の後、一人前の男性として出るまでの豫習的の足迹か、もうつけられたのであります。何年續くか、何十年續くか、分らない、遙かな、複雜なその路には、善い事も惡い事も、美しい事も醜い事も、嬉しい事も、悲しい事も、あらゆる群の中を彼は通らなければならないでありませう。たとひどんな渦の中に落ち込まうとも、強くあれ、賢くあれ、正直であれ、愛と眞理を常に思うてあれ、少くともおん身を生みたる者よりも優れたる善き人間であれ。——母親の祈禱はいつも彼の上に在りました。而して、

『行つて參ります！』

　と家中に響き渡るやうな挨拶の叫をあげて、絣に麥藁帽の彼の小さい姿が庭口から出て行く時、戸外に彼を待つてゐる彼等の小さい世界を思ひやりました。

『どんな事をして遊んでゐるのだらう？』

　曾代子はその後姿を見送つて微笑しました。

　暑中休暇が來て近所の子供達がひまな身體を終日遊戲に委ねて暮すやうになつてから、友一の遊び相手も幾人か殖えました。大屋のうちの孝三さん、裏の髮結さんの家の巳之ちやん、德ちやん、順ちやん——斯う云ふ子供たちの名前が、彼の話のうちによく出て來ました。これ等は大概友一よりは二つも三つも年上の先輩であります。髮結さんの家の巳之吉はもう高等科の生徒で、隱然その團體の首領を以て任じて居りました。友一はこの巳之ちやんが何んでも知

つてゐる事、勝負事の強い事、敏捷な事、殊に飛行機の模型を作る事の巧妙なのに對して、深い敬意を拂つて居りました。同時に彼等に取つても、これまでは何かしら遠い隔りのあつた者を、自分達の仲間に見出したと云ふ珍らしさで、友一の加入は皆んなら滿足を以て迎へられました。

『お坊つちやん、遊ばないか？』

「お坊つちやん、蟬取りに行きませうよ。」

彼等は競爭のやうにして朝早くから杉田の家の黑い板塀の外へ來て聲をかけました。

『順ちやんと衛さんだ。』

友一は自分の訪問者の聲を聞きつけると急いで臺所口の方へ驅けて行きます。

『上つてもいゝのよ。お上んなさい。』

たまには斯うして呼び上げて暫く家の中で遊ぶ事もありました。彼等はこれまで立ち入る機會のなかつた友一の部屋へ、好奇心に充ちた顏をして這入つて行きます。

其處は女中部屋に續いた六疊の質素な一間で、壁と押入と板戸で三方をかこはれ、西側の一方が廣い窓になつて、座敷の庭の裏手に向いてゐました。それ故女中部屋との境になつた三枚の板戸を締め切りさへすれば、少し位飛ばうが、跳ねようが、角力をしようが、書齋や茶の間の方へは大した物音も聞えない安心な遊び場所でありました。壁の前の古本箱に詰まつてゐる子供の雜誌や繪本は、忽ちそこらぢう一杯に散らされて了ひます。それから玩弄具——鐵砲、背嚢、汽車、自動車、飛行機、大きな乘れる馬、友一にはもう目馴れて大して興味のない物までお客樣達には物珍らしげに持て囃され、いぢり廻されました。若しそれが内輪の弟との場合であつたならば、頑固に自分の所有權を主張して一騷ぎあるべきところを、彼は何處までも寛大に見のがして、すべてを彼等の手に打ち任せました。これは自分のお客樣を親切に歡待しようとして、彼が新たに覺えた主人役の雅量でありました。兵隊ごつこをしようと云ふ相談の整つた時には、

「順ちやんに此方の鐵砲を貸して上げませう。」

と彼は植木職人の家の黑い汚い子——いつも鼻汁を垂らしてゐるので「提灯ぶくろ」と云ふ綽號のついてゐる子供に、自分の何より大事がつてゐる新らしい鐵砲を貸してやりました。

けれども「提灯ぶくろ」はたとひお休みだと云つても、いつまでも斯うして兵隊ごつこをしたり、繪本で遊んだりしてるわけには行きませんでした。彼には自分より小さい弟妹の面倒や、その上にも內職の[illegible]して漸く暮らさうとする働き者のおつ母さんを助けて、時々赤ん坊をおんぶしなければならないのでした。他の仲間たちは皆んな自由に終日遊んでゐられるのに、自分ひとりそんな厄介な荷物を背負はされる事を、彼はいま〳〵しくも、悲しくも思はないではゐられませんでした。けれども、

「手前達が、よそのお坊つちやんと同じに遊ぶ氣だと量見が違ふよ。母ちやんだつて皆んなその通りで育つて來たんだもの。本統にさ、母ちやんなんか六つ位の時から守奉公に出た事なんぞありやしなかつたよ。まあ、貧乏人の子に生れたのがふしあはせだと思つて諦めるのさ。』

と時々しんみりした調子で云つて聞かされる母親の言葉が、妙に胸に應へてゐました。それ故、彼は自由に遊べない事も、鐵砲や飛行機を人並に買つて貰へない事も、もう自分の運命として諦めてゐる素直な稍陰氣な子供でありました。けれども、そんな仕事も報酬なしではありませんでした。彼は赤ん坊をおんぶする度に一錢づつ貰ひました。それが彼に取つてはすべての束縛を償うて餘りある嬉しい慰めでありま

した。

友一は赤ん坊を下ろした彼が、一枚の銅貨を握つて、横町の駄菓子屋の方へ駈けて行く時の、いそ〳〵した悦びの顔によく出逢ひました。

『順ちやん、何買ひに行くの？』

順ちやんは一相場で巨萬の富を贏ち得た成金のやうな得意な表情で、掌の中の銅貨を見せながら、何を買つたものかと云ふ事を友達に相談する時もありました。鐵砲玉を買はうか、豆ねぢを買はうか、それとも食物は斷念してめんこを買はうかと云ふ事が暫く二人の間に眞面目に考へられます。けれども終に買物が極まつたとしても、友一は彼と一緒に駄菓子屋の店先に立つ事をば憚りました。それは、何故か彼自身にもまだよくは分らないけれども、一してはならない事として、母親からきびしく戒められてゐた一つの事でありますから。

けれどもその駄菓子屋は友一に取つては一つの大なる誘惑でありました。今までは大概植木屋ばかりで、その他は土地の高くなるにつれて、空いた畑の一部から幾らかでもいゝ金を得ようとして彼等が急拵へに建てた長屋、青い木立などに圍まれた、すゝけた小家、斯う云ふ家並の中に派手な色彩の廣告ビラなどを軒にさげて、夜も電氣や瓦斯を幾つか明るく灯した一軒の家が、この不意に現はれた時には、彼一人に限らず、近傍のすべての子供等の間に、すばらしい一事件として取り離されました。全く子供達に取つては、この一軒の駄菓子屋は便利なデパートメント・ストアに外ならないのでありました。幾つかの銅貨を握つて駈けつけさへすれば、口腹の慾を充たすものは勿論、遊戯の道具、學校用品、彼等の必要なもの、欲しさうなものの悉くが手に入りました。

友一もこの店のお得意さんの一人でありました。食物を買ふ事はなかつたけれども、めんこ、しをり、繪紙、山吹鐵砲の彈丸にする兩端を赤く染めた山吹の心、夏先になつては蟬取りの竹竿だの、もちだのをよく買ひました。線香花火は殆んど毎晩のやうに買ひました。けれどもさう云ふものを買ひに行く時にはきつときみと一緒でなければなりませんでした。

『お坊つちやまがおいゝぜゝなんかお持ちになるものぢや御座いませんよ。』

きみは頑固に斯う云つて、一枚の銅貨をさへ友一の手には渡しませんでした。

母親も斯う云ひました。

『ねえ、友ちやん、店先にあれを買つてくれの、これが欲しいのと云ふんぢやありませんよ。きみやがちやんと心得てゐますからね。あなたは默つてきみやの買つて呉れるのを待つてゐればいゝのです。ね、分りましたか？』

友一には母親やきみがさも嚴肅な事のやうに說き聞かせる事の本統の意味か、よく呑み込めませんでした。他の子供達はあれ程勝手に使つてゐる金錢を自分だけが何故手にする事を許されないのだらう。色々欲しい物を比較したり、自由に選擇したりする事が何故いけないのだらう。實際あの店先に立つて、光るガラス蓋の中や、色んな商品の列べてある化粧棚や、天井から吊された紫の丸いゴム風船の群や、旗の束、その他、こま〴〵した色紙、南京玉などの入れてある淺い箱の物珍らしい誘惑的な陳列や、色彩をぢつと見てゐますと、家で買ふ積りだつたものよりも、ずつと欲しいものが、色々見つかるのでありました。友一にはあのガラス蓋の中に列んでゐる豆ねぢや、あんころが、毎日十時と三時に母親から渡される西洋菓子以上に、おいしさうなものにさへ想像されもしました。こんな心持のする時には、きみ達が常に下等な事としておとしめる他の子供たちの自由が却つて羨まれました。彼は自分の手におあしが皆

つて見たかつた。そしてあの店先に、

「おゝんなさい！」

と、威勢よく飛び込んで見たかつたのであります。

實際友一には、一錢づつしか貰へない、提灯ぶくろさへ、その點にかけては自分よりずつと幸福な子供のやうに思はれました。而してその貴重な一錢がどんな順序を經て順ちやんの手に渡つて來るかを考へた時、彼は一つの正しい論理的な斷定を得ました。

「順ちやんは赤ん坊を負んぶするからおあしが貰へるんだ。貰つたおあしは自分のおあしなのだ。だから自分で行つて好きなものが買へるのだ。」

斯う思つて來ると自分にも或る希望が湧きました。彼は或る日母親に尋ねて見ました。

「お母様、僕、邦坊ちやんをおんぶしたら一錢呉れる？」

「何故？」

『だつて順ちやんは赤ん坊をおんぶするから、一錢貰へるんだもの。』

彼はその事實から推した結論を話して、もし自分にも小さい弟をおんぶする事が出來たとしたら、同等の報酬が得られるかどうかを聞いて見たのであります。母親は笑ひ出しさうな、同時に泣き出しさうな表情をして、子供を眺めました。

「そんなにおあしが欲しくつて？」

友一はうなづきました。而してつけ加へました。

「お母様だつておあし欲しいでせう？　ねえ、あのお金入に大事に仕舞つてあるぢやありませんか？　だから僕だつて欲しいんだ。』

斯う云はれると曾代子は何と答へてよいか分りませんでした。もと／＼そんな束縛を與へたと云ふ事だつて、決して根深く考へた事ではありませんでした。惡く云へば東洋風の貴族趣味から來た一種の偏見に過ぎないのかも知れなかつたのでありますから。

曾代子は子供との色んな關係の間によく感じさせられる一つの事が、この金錢問題からも亦考へさせられた事を氣付きました。それは良人や自分の思想生活の上にはデモクラチックな傾向を多分に持たされてゐるに拘はらず、子供達の教育にのみは動もすると貴族的になり易いと云ふ事でありました。而してその貴族主義の非難者は乾度當の子供でありました。

曾代子は紫色の毛絲で一つの小さい巾着を編み、それに一錢銅貨を五枚入れて、友一に渡しました。そしてそれを渡す時、[illegible]云ひました。

「このおあしは使はないのよ。使ふとなくなりますからね。さうでせう？　何か買ふ時には又別にあげますわ。このおあしはいつまでもこのお巾着に入れて置くのですよ。」

これは、自分にもおあしがあるのだ、と云ふ安心を彼に持たせると共に、その金錢を利用して何物かを買はうとする習慣だけは當分つけさせまいとする苦しい企てでありましたが、友一はそんな事まではわかりませんでした。彼はただ悦びました。さうしてさも珍らしいもののやうに、五枚の銅貨を一つ／＼手に持つて、小さい皇室の紋章や、永久にほぐれる事のむづかしさうな異様な怖ろしげな圏になつてゐる龍や、菊花と桐葉との組み合せや、その周圍に鑄出されてあるむづかしげな文字やらをぢつと眺めました。これから先何十年か分らないが、彼がこの地の上にゐる間に悦びにも苦しみにも、恐らくは死の最後の床にさへも離るゝ事の出來ない因緣のものに、彼は初めて手を觸れたのであります。今の子供の心には元よりそんな自覺のある筈はありませんでした。けれども母親に

は、友一が彼の銅貨に見せて居る執着を、他は、人間と金銭との宿命的のつながりから来てゐるものの様で、妙に痛ましい無気味な気持がしました。同時にこの後どんな機会でどんな富が彼の手に落ちようとも、初めて母親から貰つたその小財産以上に満足な嬉しいものはないだらうとも思はれました。

彼は今、大得意でありました。而してその二三日は誰でも人の顔さへ見ると巣の財布の口を開いて自分の富を誇りました。彼はそれを貰ふ時母親との間に堅い約束をしたにも拘はらず、その金で色々な物を買ふ事を想像しました。ただ自分のものばかりでなく、弟へも、きみへも、何かを買つてやらうと云ひ出しました。きみには着物と指輪を、弟へはお菓子と玩具を約束しました。

「どうも有り難う御座います。指輪を買つて下さいますならば、ねえお坊つちやま、別誂へでなくつちやきみや一手には嵌まりませんから、どうぞそのお積りで。」

きみは自ら云つて貰はない前からお礼さへ忘れなかつたのでありますが、弟の邦夫はそんな贈物だけでは――それもいつの事だか分らない――満足しようともしませんでした。あらゆる行動に於て兄の模倣者であり、忠實な弟子である彼は、自分にもお財布が欲しくなりました。その中にがちやがちや鳴つてゐるおもちやのやうなおあしが欲しくなつたのであります。

「僕にもお巾着頂戴よう！」

彼は母親にせがみました。而してたうとう巣の代りに赤い毛絲の小袋を編んで貰ふ事に成功しました。けれども、

「邦坊ちやんはまだ小ちやいんですから、これだけでいいのよ。ねッ？」

斯う云はれて、その中に入れて貰つたのは二銭でありました。彼は、でも、金額の多少などには無頓着でありました。

「僕もあるの。まら見なちやい！」

彼は兄同様、得々と満足を以てその二銭を見せ歩きました。――態と、袋の口をぽつちりと開けて、大事な宝物のやうに翳ませて歩きました。斯うして、弟には何でもないより少い二銭も、兄に取つては素破らしく多い、豪気な二銭でありました。

「僕のは五銭だあ！」

彼は弟を尻目にかけながら、首をふつて威張りました。巣の巾着と赤の巾着と、めいめいの小さい胸をふくらましてゐる二人のこりオトエル。

友一はもはや一枚の一銭銅貨を握つて彼等のデパートメント・ストアに駆け付ける「提灯ぶくろ」を羨みませんでした。しようとさへ思へば自分にも出来るお金がありましたから。殊に友一に於て、金は一に對して常に無限に近い価値を有つものと思はれてゐましたから。

彼は時々袋の中の金を取り出しては一枚一枚と勘定して見たり、父母の上にばら撒いてみい、ここ代りに玩具にしたりしました。でも彼の感情の中にはそれだけではどうしても物足りない或る物がありました。

「これで何か買つて見度いなあ！」

この意志はあらゆる機会に彼をそそのかしつけました。それをしなければお金の持つ用途もない気がするのでした。けれども自分の手で物を買ふ事のなかつた習慣は、母親との約束――無断ではその金を使はないと云ふ――に於ても容易に使用者となる事から彼を縛りました。彼の金は暫くは無事に、貰ひ入れられた時と同じく五銭揃つて、小さい巾着の底にかたまり合つてゐました。

けれども絶えず人の掌から掌を渡り歩く運命を有つてゐるこの奇妙な金属の小旅行者たち

は、本來の宿縁から離れて彼等だけいつまでも其處に安易な宿に留まるわけには行きませんでした。終にその一群にも離散の日が來ました。彼等は現在の主人の赤い子供らしい手から、非常にかけ違つた、堅い、骨張つた皺だらけの掌の中へ移されました。

それはこの邊に折々廻つて來る、年寄つた、おいいしんこ屋のお爺さんの掌でありました。

全くこのお爺さんの出現は、近傍の子供達から大歡迎を受け、またその迎へられ方は、他の飴屋、しやぼん玉屋などとは少し違つて居りました。彼等よりもずつと親しまれ、尊敬されたのであります。何故なれば、おいいしんこ屋のお爺さんは、單なる物賣ではありませんから。此老人は子供達に取つては偉大な素破らしい藝術家でありました。彼等の望むあらゆる物體を、彼は立ちどころに造り出す事の出來る神秘な手を持つた彫刻家でありました。

「おいいしんこ屋が來た。」

斯う誰からともなくあげられる報告の叫は、あたりに群れてゐる子供達にすべての遊戯を拋たせました。彼等は蟬取りの竿をかついだまま、めんこを握つたまゝ、繩とびの繩を引きずつたまゝ、お爺さんの周圍に集まりました。

「蜜柑拵つておくんな。」

「あたい、寄鍋よ。蜜をうんとかけてね。」

「欲張つてらあ。」

「僕ね、一錢のお辨當。」

子供達は笑つたり騷いだりして、我れがちに註文を出しました。けれどもお爺さんの手が動いて、赤や黄や緑や紫の美しい材料を摘み始めると、彼等は忽ち鳴を靜めて、息を殺します。而して讚美と滿足に輝く目を集めて、お爺さんのしなびた二三本の指の間から現はれて來る、樣々な物の形を見守るのでありました。

友一も亦勿論このお爺さんの賞讃者の一人でありました。それに都合のよい事には彼の家の表門の傍に在る一本の椎の樹蔭が、きまつてお爺さんの屋臺を下ろす場所として選ばれる所でありました。それ故、此頃みたいに自由に一人歩きをしなかつた以前でさへも、このおいいしんこ屋だけは彼のお馴染でありました。お爺さんに取つても殊に夏になつてからは、暑い日射しを避ける自然のテントとして、その椎の綠蔭は他の何處よりも適當な場所でありました。

友一の空想が新らしい巾着とその中の銅貨の上をまだ離れなかつた頃の事でありました。丁度その時おいいしんこ屋のお爺さんが四五日ぶりで椎の樹の下へ現はれました。子供達はいつもの通り屋臺の周圍に群がりました。友一もいつもの中に交つて立ちました。而してお爺さんの巧妙な製作をぢつと眺めてゐると、すべてが魔術かなぞのやうに感じられました。作り出される物許りでなく、痩せた小さい、皺々ちやなお爺さんその人さへ、お伽話の中によく出て來る不思議な魔法遣じみて見えました。その他お爺さんの持つてゐるもの、その周圍にあるもの、屋臺の上に列んでゐるこま〴〵した道具の悉くが、異樣な、特殊な魅力を隱してゐるやうな氣がしました。友一は屋臺の抽斗の開く度に、好奇的な目を以てそつと中を覗いて見ました。

全くお爺さんのする事は不思議な驚くべき事ばかりでありました。ほんの一摘みの色のあるいいしんこが、彼の一寸した指の觸れ加減、鋏の入れ工合で、忽ち鳥になり、美しい花になり、可愛い兎になり、魚になり、獸になりました。

赤い耳のついた小さい鍋の中に列べられた鯛や、卵燒や、蒲鉾や、さしみは、本物以上に見事においしさうに見えました。實際、子供達はその上にどろりとした黑い蜜をかけて貰つて、添へてある楊枝で一つ〳〵突きさしてはぺちや

べちや食べるのでありました。髪結さんの家の巳之吉は、いつも好んでこれを買つて食べました。友一はたまに桃太郎だとか、鶏、犬と云ふやうな物を揃へて買ふ事もありましたが、大抵はお母様の意見でたゞしんこを買ふ事になつてゐました。それは家に帰つて自分の手で色んな形を造つて見るためでありました。

それを見て或る時巳之吉が忠告した事がありました。

「いゝ、いゝ、たゞしんこなんて詰らないよ。ね、お坊つちやん！　寄鍋になさいよ。そりや旨いんだよ。」

それに対して本人の友一が異存を答へる前に、おあしを持つてその時傍に附いてゐたきみが、すげなくその説をはねつけました。

「お坊つちやまは寄鍋なんか買ひませんよ。」

友一にはきみの其時の権柄らしいいひぶりが憎らしく、恨めしく思はれました。

今日も巳之吉は、いつものやうに一番に寄鍋を拵へて貰ひました。他の子供達もいろ／＼の註文を出しました。あれがいゝの、これにしろのと巳之吉の選択に任せる子供もありました。友一はそれをぢつと見てゐると、巾着の中にしまつてある五銭に就いての感想が、不意に烈しく起りました。それを使ふ具體的の順序まではつきり見えました。そのうちに兎と亀の一對を巧に造り上げたお爺さんが、それを一人の子供の手に渡すと共に、

『どうもお待遠さま。今日はお坊つちやん何にいたしませうね。』

斯う云つて親密らしく友一の顔を見ました。彼は妙にまごつきました。でもすぐとその後から非常に大膽になつて、

「お辨當！」

彼ははつきり、落ち着いた調子で註文しました。而して、その後から、

「二つよ。」

と附け足しました。本統を云ふと、彼はあの妙に臭い黒くどろりとした汁のかゝつたお辨當を、他の仲間達がするやうに悦んで食べて見ようとする丈の勇氣はなかつたのですが、それをわざと誂へたのは、平生の禁を破る一種の好奇心と反抗心からでありました。而して二つ頼んだのは、あらゆる食物や玩弄具の分配に於て、度外視する事の出来ないものとして習慣づけられてゐた小さい弟へその一つを贈るためでありました。

「四銭頂きます。」

註文の品が出来上ると、斯う云つてお爺さんからその代價を請求せられた時、彼は得意らしく懐中から例の財布を取り出しました。而してその中から一銭、二銭、三銭、四銭とおぼつかない勘定をして、銅貨をお爺さんの掌の上に載せました。

「邦ちやん。いゝものを上げませうか？」

湯殿の中で洗濯をしてゐたきみの傍に、丸裸になつて何か水いたづらをしてゐた弟を見出した時、彼は溝口の簾垂の外から斯う前觸して這入つて來ました。

「蟬捕つたの？」

弟はこの頃兄が表へ遊びに出る度に一二匹づゝ持ち歸つて與れる昆蟲の事だと想像したのであります。それでチ、チ、チ――と不意に鳴き立てる蟬を待ち受けて振り返つて見ると、兄は簾垂の横から覗けた首を振つて違ふと云ふ意味を示し、洗濯板の上におつかぶさるやうな姿勢を取つて、洗物に專念になつてゐるきみを尻目にかけながら、妙にやに／＼しました。彼は自分のした事が母やきみから何とか云はれないでは濟まないことを覺悟してゐたのであります。彼は、でもそれを旨く隠して了ふやうに企むほど狡猾ではありませんでした。彼はたゞあらはず

に浮いて草花を眺め、自分も湯槽の中へ這入つて行きました。而して大きな聲をして、

『はい、とみ邦ちやんに上げます。』

と云ひながら兩手に持つてゐたおしんこ細工の一つを金魚やボートなどの散らかつてゐる小さい湯縁の上に置きました。

『これ何あに？』

『お辨當よ。』

この問答は不斷きみの注意を惹きました。彼女は汗みづくになつた眞つ赤な顏を洗濯板からあげて、小さい二人の話題となつてゐる物を認めた時、威嚴を裝つた靜かな調子で咎めました。

『お坊つちやま、そんなものお買ひになつてよろしいんですか？』

『買つたつて僕食べるんぢやないよ。』

友一は突返すやうに答へました。

『だつてお坊つちやま、お母樣に仰しやつたのぢやないので御座いませう。默つてそんなものをお買ひになつちやいけませんよ。』

『いゝんだあい！　僕のおあしで買つたんだもの。ねえ邦ちやん。』

彼はいつぱしの理窟を列べながら、弟をも自分の味方に引き入れました。

『よく御座います。今にお洗濯がすみましたら、きみやがお母樣に云ひつけて上げますから。』

『云ひつけたつて困りやしないやうだ！』

彼は顎をしやくつて最後の毒舌を投げつけると、もうそんな話には關係しないと云ふ表情をしました。

『邦ちやん。またお湯に這入りませうか？』

斯う云つて裸になつて箱風呂の中へ飛び込みました。續いて邦夫の小さい裸體が、石鹸の泡だらけになつたきみの偉大な兩腕で摘み込まれました。

彼等は家の人達が輕便な銷夏法の一つとして毎日朝から溜かしておく、稍ぬるめな、心持のいゝ湯の中できやつ／＼と云つて騷ぎました。

『お兄ちやま、鵝鳥になつて御覽なさい。』

斯う云つて弟が賴むと、兄は答へます。

『それよりかもね、今度は河馬になるよ。』

友一は鵝鳥になつて兩手で水をかいて泳ぎ廻る代りに、大きなタウエルで頭を包んで、少し苦しいのを我慢しながらごぼりと湯の中から顏を出したり、沈めたりします。これが河馬でありました。邦夫は暫くは打ち興じて、それを見てゐましたが、其のうちに怖いと云ひ出しました。弟の眼には兄の顏が見えない變裝から、水に棲む動物の怪獸の怖ろしさが聯想されるのでした。

『河馬いやあよ、元のお兄ちやまにおなんなちやい。』

彼は鼻聲になつて斯う叫びます。友一がそれを聞いてごぼりと水から顏をあげて決して怖ろしい怪物でない事、彼の兄に相違ない事を示すと、弟の恐怖と不安は忽ち消滅して直ぐににこにこと笑ひ出しました。けれども兄のいたづら氣は、往々、本統に泣かせて了ふまでにならいなと滿足しないことがありました。

今日もさうやつて遊び戲れてゐるうちに、彼の心にだん／＼と殘虐を悅ぶ不思議な興奮に引きずり込まれて行きました。彼は河馬[illegible]にはしやぎ立つて騷ぎました。水鐵砲を橫取りしたり、瀨戸物の金魚をはね飛ばして毀したり、水の下からそつと手を忍ばして弟の足を引つ張つたり、顏を洗つてやると云つて目口を逆撫でに撫で廻したり、厭がる河馬を幾度も繰り返したり、有らゆる威嚇と、からかひと怖がらせを仕盡しました。きみの制止などは聞かうともしませんでした。弟がひい／＼叫べば叫ぶだけ、いよ／＼可笑しくつて面白くつて堪りません

でした。

劣弱者に對する侮蔑と、それを思ひのまゝに征服し、脅迫し、凌虐する事の不思議な興味と、自分に力あること、強者であり、征服者である一種の誇に蠱惑された彼は、恰も小さいヂュオニッスのやうに、まつ赤な裸體で湯槽の中を荒れ狂ひました。

「あんまりぢや御座いませんか、お坊つちやま？ 邦坊ちやまが蟲を起しておしまひになるぢやありませんか！」

見かねたきみが断ら云つて、洗ひ物を投げ捨てて救ひに近づいた時には、友一は一層躍起となつてゐました。彼は兩手で水をしやくつてはきみを目がけて浴せかけました。水は薄刃やうに迸りました。その中からやつと憐れな囚はれ人を救ひ上げるまでには、髮毛から、額から、着物から、きみはびしよ濡れになつてしまひました。

「本統、お兄ちやま、おんもへいらつしやるやうになつてから、お惡くなりましたね。」

彼女はたうとう本氣に腹を立ててぷつ/\云ひました。而して不斷から可愛い、可愛い、何より可愛い、大事なお坊つちやまと公言してゐる小さい邦夫に對して、一層あてつけがましい、誇張した愛撫を示しながら、茶の間の方へ連れて行きました。一人取り殘されてその有樣を見送らねばならなかつた友一の胸には、羨望に似た輕い痛みがありました。

「何んだい。逃げ出したぢやないか。やーい！」

彼は勝ち誇つた者の態度で、後からこんな嘲罵を投げつけたが、それはほんの虚勢に過ぎませんでした。彼は自分の身のまはりが急に索寞となつたのを感じました。風呂の中などに一刻も這入つてゐる氣はしなくなりました。彼はすぐ後から飛び出しました。而して濡れた身體を拭かうともせず、續く臺所の廣い板の間へ出て、足を踏み鳴らしながら怒鳴りました。

「着物を着せて呉れ。」

茶の間の方からは人の來る樣子もなければ、返事をするものもありませんでした。彼はもう一度怒鳴りました。一層大きな聲で、

「着物きせて呉れつてば。早くさあ！」

いゝ、からんとした臺所――全く廣い、疊にして十二三枚も敷かれる位の板の間――に立つて彼はさうやつて叫んでゐるうちに、湯殿での狂暴な興奮がだん/\醒めて來て、落ちつきのなくなつた、うつろな心の底には、一種の不安と狼狽が入れ代つて來ました。

きみが今までの事を、殊に無斷で巾着の金を使用した事の顛末を、母親に話さないでゐる筈はありませんから。それから引き起される訊問、懲戒、以後はそんな過失を繰り返すまいと云ふ宣誓の強請、友一にはそれがたまらなかつたのであります。思つて見るだけでも堪へられない、面倒な、且つ不見識な事でありました。彼が臺所で空威張をしながらぐづ付いてゐるのは、茶の間へ行くと、きつと然らいふ物の待ち構へてゐるのが分つてゐたからでありました。と云つて何の手應へもなく打ちやつて置かれるのも張り合ひがありませんでした。最後にはこれでもか、と云ふやうな一層激しい怒鳴を發すると共に、傍にあつた小さい金盥を取つて力一杯投げ出しました。

くわらん！ くわらん！ くわらん！ 金盥は大げさに悲鳴をあげながら、曲馬の道化者見たいに土間のタヽキの上をへうきんに轉げ廻りました。友一はそれを見ると不圖をかしくなりました。

彼はそんなものまで投げ出すに至つた自分の複雜な心持や生活からの出來事などは、その瞬間みんな忘れて了つて、タヽキの上にくるくる舞をした金盥のみが、たゞ一つの意識に殘りました。而してをかしくて/\堪らなくなつて、

裸體の手足をふりながらけら〳〵笑つてをりました。それ故、

『友さん、あんまりぢやありませんか？』

斯う云ふ銳い詰問を不意に耳許に聞いた時には、何を叱られるのか分らない、無心な、ぼんやりした顏でその聲の方をふり向きました。けれども向き合つた母親の、險しい、怒を帶びた表情を見ると、忽ち自分の立場がはつきり分りました。彼は顏を反向けて下を向きました。

『なぜ着物を着ないの？ 一人で着られるぢやありませんか？』

母親は裁判官のやうな調子で始めました。

『あの着物、僕一人ぢや着られないんだもの。紐が短くつて。』

『譃を仰しやいよ。今朝は一人で着たぢやありませんか。今朝着られたものが、今着られない筈はありませんよ。』

彼女は子供をこんな理窟責にしたつて、何んにもならない事を知つてはゐました。子供には子供の世界があり、道德があり、論理があつて、大人並のそれは彼等の前には何等の權威もないことを辨へてゐながらも、實際問題になつて何かの過失を責めるとか、亂暴を懲らすとかしなければならなくなると、ともすれば自分達の領域の論理や道德律を強ひようとしました。彼女は自分の手で出來る事をしないのは非常に惡い事だと云ふやうな事を大層らしく云ひ聞かせながら、即座に着物を着る事を嚴命しました。友一はしぶ〳〵湯殿の方へ引つ返して、竹籠の中から自分の短い白絣を引つ張り出して來ました。それでも直ぐ着ようとはしませんでした。

「友さんは何故着ないのです？ お母様の申してる事が分りませんか？」

母親が迫き込んで來れば來るだけ、友一は妙に反抗的な氣分になりました。自分の行動を監視してゐるやうな、その顏が不快でありました。

「だつて僕まだ拭かないんだもの！」

彼はこれを以てすぐ母親の命令を奉じない辯解にしました。全くまだ拭かなかつたのは事實であります。でも身體はもう疾くに乾いてゐました。どうしても拭きたければ、河馬になつて幾度も湯の下を潛つたその濃い坊主頭の、まだ幾らか濡れてゐる髮毛でも拭かなければならなかつたでせう。

「何んて強情だらう！」

曾代子は憎らしさうに眉を寄せてゐました。

長い押問答の後で、下手な着せ方でどうやら着物に身體が包まれて仕舞ふと、彼は茶の間に連れて行かれました。弟ときみは庭樹の青い陰影のさしてゐる縁側で繪などをかきながら涼しさうに遊んでゐました。でも、彼はすぐその仲間入をするわけには行きませんでした。まだ打ち解けぬ、嚴めしい母親の顏の前に坐らされて、彼が密かに懼れてゐたものに出逢はなければならないのでありました。

「友さん。あなたあの巾着のおあしでおしるこを買つたんですつてねえ。お母様へ默つてそんな事をなさつていゝのでせうか？」

母親が案外穩かな調子で出たので、友一も、素直に、すぐ、いけない事だと云ふ事を申しました。――どうしていけない事だか、本統のところは自分にも分らないのだけれども、とにかく無斷では使はないと云つた約束を破つただけでも惡い事でありましたから。

斯うして此審問はもう決してそんな事はしないと云ふ友一の誓言でたやすく終つたが、湯殿の中での邦夫に對する暴行事件は意外な騷になりました。彼は全然自分の罪を否認して、口から出任せに譃をついたり、小理窟を云つたりしました。

「僕、からかひ度くはなかつたんだけども、邦ちやんがいつまでたつてもお風呂に這入つてるんだもの。きみがいけないんだ、早く出してやればいゝのに、出ないんだもの。」

すべて斯んな答辯ぶりでありました。彼にはきみがその事件の證人として、一から十まで弟の味方に立つのが、腹立たしく、忌々しくてなりませんでした。それに對する反抗心から彼の云ふ事はいよ〳〵不條理になり、誠實を缺いて來ました。

「何故、あなた、今日はそんな出鱈目ばかし云つて胡魔化すの？ 大層いけない事なのよ。そんな事をなさるのは。」

曾代子はまつ青な顔をしておしまひには眞劍に怒り出しました。而して滅茶苦茶に腹の立つやうな、悲しいやうな、同時に情ない、絶望的な、奇態な情熱にかられて、思はず手をあげて子供を打ちました。それも、まつ黒い、艶々した丸い頭の頂上を。子供はわーッと聲をあげて泣きました。それを見て小さい邦夫もまたわーッと一緒に泣き出しました。彼の細々しい、優しい感情には、母親の狂暴な怒や、兄の痛ましげな泣聲がすべて恐怖なのでありました。それは、先刻自分が湯殿で蒙つた虐待に原因してゐるのだと云ふやうな事は、はつきり分りませんでした。その虐待の事でさへ、もう忘れてゐました。

彼自身にはたゞ叱られる兄が可哀想で、叱る母が怖ろしくて、事件そのものが悲しく、情なかつたのであります。兄が泣けば泣くほど、彼もせきあげて泣きました。曾代子は泣く二人を見て震へました。而して自分も亦大粒の涙をぽろぽろこぼしながら一緒になつて泣き出しました。それは複雑な涙でありました。子供に對する憐愍、謝罪、自分の險しい怒と發作的な暴行を恥ぢ、悔い、且つ嘲る心が、堅くふくれてゐた胸の中から、柔かい、緩い液體となつて流れ出たのであります。

「友さん！」

彼女はすぐその後から友一を招きよせて頸を抱きました

「さあ、もう泣かないでね。お母様が打つたのは惡う御座んしたからあやまります。ねえ、堪忍して下さいよ。」

友一は首をふりました。謝罪しなければならないのは自分だと云ふ事を彼はもう心付いてゐました

「惡かつたんだから、めんちやい！」

彼は心からさう云ひました。彼の泣聲は前半は驚と腹立であり、後半からは、もう正しい後悔でありました。その上悔悟の涙が彼を悲しませました。彼はもはや先刻の無法な惡戯つ兒ではありませんでした。今までの反抗や、虚勢や、欺瞞のあらゆる雜念はすべて心の表から振り落され、驅り出されて、やつと平生の溫良な友一に復したのであります。涙を透した後の感情は、より清淨にされ、より柔かにされ、より純粹にされました。彼は母に詫びたばかりではなく、弟にも詫びました。

「きみや、めんちやい！」

斯う云つてきみの前にも自分の度外れな惡戯を詫びました。謝罪しなければならない時には、召使の前にも頭を下げる事を彼はふだんから習慣づけられてゐました。

「えゝえ、お坊つちやま。お坊つちやまはそんなによくお分りになりますと、お母様だつてなんにも仰しやりは致しませんわ。ねえ、もうこれからはおとなになさいませよ。」

彼女はうるんだやうな目つきをして、彼の美しい一個の謝り方を悦つた時、みんなの心は本統に嬉しい暖かい或る息を吹き合ひました。

邦ちやん、今度は邦ちやんが兄に謝びませう。

友一はもう爽かな聲をあげて弟を誘ひました。

『えゝ。御本見て遊びませう。』

二人は列んで、寢ころんで睦まじさうに子供の雜誌などを擴げました。曾代子はその有樣を見てゐると、親身に可愛い氣が湧き起ると共に、彼等の無邪氣さとどんな感情にも決してぐづぐづ拘泥してゐないからりとした心持が羨まれました。而して今日の事で一番下司な愚かな役目を演じたのは自分であつたのを感じさせられました。

私は何をあんなに怒つたのだらう？　打たなければならない程の惡い事を本統にあの兒がしたのだらうか？

曾代子は考へて見ました。どんな惡戲をしようと、亂暴を働かうと、それは彼等の世界では容易に許さるべき事である。現にあれ程いぢめられて泣いた弟が、直ちにそれを許した最初の人でありました。——否、許すと云ふと言葉の意味から不遜らしく聞えるが、三つの邦夫自身にはそんな上手な態度は微塵もありはしません。彼の許し方は、もう少し純粹でありました。彼は直ぐに忘れてしまつたのでした。何故なれば、被害者は加害者と同じ世界の子供でありますから、その世界の合理、道德、制約に、困難なしに不平なしに適應する事の出來る素質を持つた同種族でありますから。

怒るのはその世界に適應し得ない大人のみであります。曾代子が怒つたのもその大人の一人だからであります。そしてその怒が、小さい彼等の本來の世界觀から云つてどんなに不當に、無理解に見えたらうと思つた時、今日の自分の仕方は兒が弟に加へた以上の暴行であつた事を感じないではゐられませんでした。少くとも自分の力と年齡を賴む事に於て。

惡戲や亂暴だけならそれほど怒りはしなかつたらう。あの兒がそれを胡魔化さうとしたのがいけなかつたのだ。手をかけるほど怒つたのはたゞそれ故なのだ。

曾代子の頭の奧でこんな聲がします。すると今一つの聲がそれに答へます。

それをあなたは嚴格な敎育と云ふ積りでせう。しかしあなた方大人は何んにも胡魔化さないでせうか？　そんな場合にも、またその他の場合にも、もつと上手に、もつと狡猾に、胡魔化さないでせうか？

曾代子は顏を赤くしなければなりませんでした。でも子供はこの時の母親を許して呉れるでありませう。彼女等がその子供に對いてゐる熱情は、さ[illegible]に[illegible]介在[illegible]費す暇のない位、本能的な烈しいものでありますから。母親は子供と親しい關係の接觸に在て、その子供が三歲の人間であり、或は六歲の人間である事を大抵の場合は忘れてゐます。彼女等の目には彼等はたゞ完き愛の對象としてのみ映るのであります。

それ故母親の愛情は、子供等のいたいけな姿やその幼稚や未熟を、憐れみ、いとほしむやうな、弱々しい情緒ではなく——それも心より加はつてゐるが——もつと〳〵强い打ちはまつた對等の愛であります。愛する者を愛するのであります。人間が人間を愛するのであります。それ故、怪我も憎も腹立も、悲しみも、すべてが眞劍になり、本氣になり、我ともなく手をあげる程の烈しい情熱にもなります。これは母親の「愛の盲目」であります。理想的な事ではないと共に又仕方のない事であります。もし母親にこの盲目的な情熱がなくて、子供等を絶えず小さい者だの幼稚な人間だのと遠くに見て、讓り、控へる程の距離が保てたなら、母親は保姆や家庭敎師と選ぶ所のないものになつたでありませう。同時にそんな冷たい手で立派な

よい子供を育て上げようとする事に、ラボラトリのフラスコの中から完全な靈魂ある人間を造り出さうとするのと同じではないでせうか。

曾代子にはこんな事が考へられました。

しかし彼女はこんな事を自分が子供を打つた云ひ譯にする錯りで考へたのではありませんでした。彼を打つた事は、どんな理由があつたにしても、すまない事でありました。無慈悲な且つはしたない振舞でありました。それも大事な頭を、右の手か左の手を打つ以上に無遠慮に打つたのでありますから。

『實際に、何故頭を打つたのだ。大切な神經機關の貯藏所を避けて、背中とか、腰とか、無害なところを打つだけの注意をなぜ拂はなかつたのだ。』

と云つて咎められたら、曾代子は斯う答へるより外に仕方がなかつたでせう。

『どうぞ、さう叱らないで下さい。その瞬間の母親に、頭部を避けて打つだけの餘裕があつたら、一度ふりあげた手をその儘下ろす事が出來たでせうから。』

その夕方、下町へ買物から歸つて來た良人を迎へて、食卓提灯などを吊した涼しい縁先で晩餐を取つた時、曾代子は晝の間の事を話し出しました。

『本統に私は氣が短くていけないわねえ。叱つたあとでは屹度自分の方が悲しくなるんですけれども。』

『ショウがこんな事を云つてるよ。怒つて打つなら子供を打つても構はない、冷靜な時に打つのは許されないつて。』

『ショウもそんな事を云つてゐますか？』

曾代子は團扇を動かしながらその人の、顎の長い、楔形の皮肉らしい顏を思ひ浮べました。

『何にあつて？』

『革命家の手記。』

曾代子は明日讀んで見ようと思つてゐました。そんな事から話がショウの事になつてその愛蘭人の名前が兩人の間に繰り返されました。すると提灯の下の仄暗い縁先で、線香花火に興じてゐた友一が親しい人の噂でもされてゐるやうに、おつときゝ耳を立ててゐましたが、

『僕知つてるよ。バーナード・ショウつて云ふんでせう？』

と口を入れました。父親は意外な風に小さい息子を見て笑ひました。

『どうして知つてるんだ、坊主は？』

『だつて、本棚の御本に書いてあるのよ、片假名なら僕なんでも讀めるんだもの。ねえお母様？』

友一は得意らしく母親を顧みてその證言を得ようとしました。曾代子はそれにうなづいて見せながら、

『友さんはそこいらの誰か見たいなの。西洋のえらい學者や思想家なら誰でも知つてるんですわ、名前だけはねえ。』

斯う云つて、父親と一緒に笑ひました。

彼は遊にあきた時分など、そつと隣の父の書齋へと上つて行きます。父母のどちらかが時々其處に見られました。彼は長い習慣によつて、その部屋の大きな机に向つてゐる時には、二人とも自分達の遊び相手にはならないこと、父母が妙に氣むづかしいのを知つてゐますから、靜かに近づいて、ほんの二言三言[illegible]たけ目をきゝます。それはいつも見る書物を、今日も貸して貰へまいかと聞くのでありました。それは不思議な繪、怖ろしい繪、面白い繪、[illegible]人つてゐる大判の[illegible]、[illegible]と、美しい[illegible]英雄の繪のある[illegible]でありました。もう一つは深紅な[illegible]表紙に[illegible]の[illegible]を打ち出した普通の[illegible]、[illegible]レー[illegible]插繪の

入つた大阪の「失樂園」でありました。

「これをおもちやにされちや、堪らないねえ。」

父親でも母親でも申し合せたやうに時々そんな勿體をつけながら、それでもよく貸して呉れました。自分で立つて大英百科全書の後の高い本棚から取り出して見ました。その書物を見ようとする度に友一が厭でも親達の許可を經なければならないのは、一つはそんな高い所にあつて、届かないからでもありました。

「お手々は綺麗ですか？ 拜見。」

斯う云ふ注意もその度に繰り返されます、彼は机の傍まで行つて兩手を顔の左右に開いて見せなければなりませんでした。母親は父親の場合より、より嚴格でありました。

もしその十本の指のどれかに、表の泥いぢりの名殘でもついてゐるようものなら、すぐと追ひ下ろされます。彼はその手を洗つて再び出直さなければならないのであります。こんな面倒な手續を踏まされても、友一は猶ほそれ等の書物には深い執着がありました。日輪の車を御するアポロン、ヘラクレスの冒險、黄金の鎧をつけたアキレウス、小さい壺の中から現はれた怖ろしい魔神、ドーヴァンの首、雲の如く大きなロック鳥、その足にぶら下つて空を行く冒險谷、美しいエデンの園、蛇の話を聞いてゐるエヷ、大天使の進軍、翼のまつ黒いサタン軍の奈落への退却、――斯う云ふ繪を彼は幾度繰り返し繰り返し見たか知れませんでした。お乳を飲まなくなつてからは、毎晩床に就いて眠に入る迄の時間を、母親からさう云ふ繪に就いて話を聞く習慣になつてゐたので、彼は年にしてはいつぱしの古典學者でありました。繪畫ばかりを見てゐる事にも頓て飽きて來ると、彼はそろ〳〵立ち上ります。而して、

「靜かになさいな。」

と云ふ注意を受けない範圍に於て、百科全書の廻轉書架につかまつて、くる〳〵と輕業のやうに廻つたり、でなければ本棚の前をぶら〳〵して書物の册數を數へます。その間に彼は、飜譯書の置いてある本棚の中の大概の書物は自分が十分よく知つてゐる片假名の知識で、背皮の文字を讀む事の出來るのを發見しました。彼はその時非常に嬉しく思ひました。而してさう云ふ書物を探し出して讀む事に深い興味を持ちました。トルストイ、ドストエフスキ、ニイチェ、バーナード・ショウ、イブセン、ブランデス――こんな綴の片假名が澤山見出されました。ストリンドベルクと云ふ名もその間にあつた一つでありました。

彼は或る時母親に聞いて見ました。

「ストリンドベルクつて何あに？」

母親は答へました。

「瑞典といふ國のえらいおぢさん。」

「兵隊さんなの？」

「さうぢやありません、文學者。」

「さう。トルストイみたいな文學者？」

彼はこんな風にしてそれ等の人々に就いて、おぼろげな概念さへ持つやうになりました。親たちは自分の小さい息子の頭の中に、桃太郎や金太郎の名前と共に、斯んな世界の思想家や藝術家の名前が無造作に一緒になつて這入つてゐるのを興がりました。

「驚いたね。いろんな事を覺えるんだね。」

彼等はその六つの子供の幼い、しかし吸收力の強い、腦髓のどの皺の裡にか疊み込まれてゐるこれ等の名前が、屹度何かの芽を吹く時のある遠い未來を思ひました。

併し斯う云ふ人々と共に一方には又尾上松之助、井上某と云ふやうな名前が、いつぱしえらいものとなつて覺えられてゐるのも事實であり

ました。この二人は、髪結さんの家の巳之吉の崇拜する名優でありました。從つてその少年の活動寫眞の話の熱心な聽手である友一には、まだ彼等の巧妙な演技を見る光榮を有しないながらも、すでに親しい贔屓役者となつてゐました。

「巳之ちやんはねえ、お父樣、今に活動の辯士になるんですつて。」

友一は何かの話から、遊び仲間の理想的人物を語りました。町長の息子の幸三さんは、すぐ近くの郊外電車の停車場の驛長さんを、また「提灯ぶくろ」の順ちやんは飛行將校を望んでゐました。友一自身は飛行將校にもなりたかつたし、軍人まがひの驛長の制服制帽にも心が引かれました。併し、今のところその二つのもの以上に彼を引きつけてゐるのは、表の〇〇――街道を毎朝市街の方へ疾驅して行く或る富豪の自動車の運轉手でありました。彼の幼い心は同じ乘物と云つても、自分の三輪車などとは比較にならない[illegible]偉大な黑塗の美しい箱、それが威嚇的な唸り聲を立てて、街路の砂を捲きあげ、通行人を追ひ散らして行く威勢のよさに眩惑されてゐました。同時にその車の中に乘つてゐるお爺さんの富などは問題になりませんでした。彼に取つてはそんな乘物をあの何んでもない、一個の車輪形のハンドルで自由自在に操縱することの出來る運轉手の神祕的な力のみが驚異でありました。彼はショファーと云ふ呼び名をも知つてゐました。

「お母樣、飛行機に乘るんだつて、初めは自動車で練習するんですつてねえ。巳之ちやんがさう云つてよ。巳之ちやんはねえ、飛行機や自動車の事なら何んでも知つてるの。そいでね、巳之ちやんは言葉はあんなだけれど、いゝ子供なのよ。幸三さん見たいにふざけないで。」

彼がもう何時となしに自分の仲間に對して一種の批評眼を持ち得るやうになつたのを、母親は悦びました。而して遊び仲間として、又その一團の先輩として、彼が可なりの影響を受けるらしい巳之吉の事を考へた時、その十三の子供が割合に出來のよい、善良な少年であることを知つてゐました。でも、彼の言葉は都會の職人階級の家庭の通用語だけに、極めてぞんざいで、粗暴であることは免れませんでした。たゞそれだけの事で彼等の可愛らしい無邪氣な交際を禁じるのは、極端にいへば、また困難でもあつたけれども、自分の子供の一良友たる資格に於て、それがその少年の一缺點である事は見逃がせませんでした。

全くのところ友一がこの頃表から輸入して來る各種類の粗暴な用語は、殆んど皆その少年及びその配下の者の模倣でありました。

「こん畜生！」

玩弄具か何かの引つ張り合に於て、彼は小さい弟にこんな呪詛を投げつける事さへ覺えました。

曾代子はその晩その事を云ひ出しました。

「巳之ちやん達は巳之ちやん達でようござんすわ。あなたまでが眞似をして、馬鹿野郎だの、彼奴だのつて云ふものぢやありませんよ。ね、そんなお言葉を使つてゐると、本統に下司な、憎らしい子供になりますよ。」

彼女は斯う云ひ聞かせながら、

「ですわねえ、お父樣？」

と同意を求めるやうに父親を見返りました。

「そんなこと云ふのかい、坊主？ いけないな。」

父親は母親の言葉を受けて一緒に非難しましたが、でもその調子は寛大でありました。友一はにやにやして、自分の額の上に微笑してゐる彼の眼を見あげました。子供に關する待遇法に於て父親の方が母親よりずつと自由主義者である事を、彼はよく知つてゐたのであります。そ

れ故父親の傍では、彼は何となく腰強くなりました。

『だつてねえ、僕仕方がないんだもの。』

彼はその時も一種の甘えと、訴への交つた驕つた態度で自分の辯護をしました。

『誰だつてみんなそんな言葉なのよ。僕だけ女の子見たいなこと云ふのは厭だ。喧嘩の時なんか負けちまふんだもの。巳之ちやんなんか、まだいゝのよ、お母樣。お稲荷樣の裏の子なんかね、そりや口が惡いのよ。この間なんか、幸三さんの事を大福野郎つて云つたものだから、幸三さん怒つて取つ組み合ひしたの。』

それは近所の人たちから「三角山」と呼ばれてゐる小さい森の中で起つた四五日前の出來事でありました。松、杉、櫻、その他の雜木を以て、黑く、高く擢んでてゐるその森は、都市の膨脹に連れて漸次に破壞されつゝある郊外の自然と、都會化と云ふその暴力に依つて痛ましく傷つけられた畸形な風物を想像させる一例でありました。三角山と云ふ名前も、一邊は郊外電車の堀割に沿うて居り、他の一邊は墓地へ通ずる大通りに面し、最も短い今一つの一邊は、市街電車の方へ行くために、堀割の橋を越えないで、一歩でも德な足を使はうとする通行者の共通意志に依つて、何時となしにつけられた小さい路のために、その森が一つの不等邊三角形をなしてゐるところから生じたものでありました。

そんな事情から、昔の暗い重々しい森林の威力は失はれて了つたが、木立が淺くなつたと共に日光が明らかに照り通し、下草も青々と陽氣な緑色に萌え擴がつて、明快な、小公園の風致を備へてゐました。實際その稜形の森一つに依つて、その一端から緩やかな斜面になつた堀割の土手、それにかゝつてゐる白く塗つた鐵橋、その向側の路に續くI男爵家の別邸の長い〳〵代赭色の煉瓦塀、これ等の對照は、その郊外の玄關をどれ程繪畫的にしてゐるか分りませんでした。審美的な鑑賞を別にしても、その森は附近の住民や通行者からいろ〳〵の意味で親しまれ、調法がられてゐました。殊に夏のうちは涼しい樹蔭を慕つて子守が乳母車を押して來ます。牛乳屋の若者が、配達車から取り出した一瓶の乳に咽喉の渴を癒しながら、青い草の上で一休みして行きます。町から歸りの馬子が荷馬車を樹の下に繋いで朝早かつた、不足の眠を償ふべく、その傍に横たはります。御用聞の小僧達も同じ仲間に這入ります。取り分け、子供達は自分達の繩張として終日其處を占領してゐます。

『三角山に行かうよ。』

一しきり家の周りでの遊びがすむと、みんな集まつて行くのは、その木立の中でありました。而して森の[illegible]な[illegible]の盛んな[illegible]の下で、有らゆる競技が始まります。その昆蟲狩は元よりとして、木登り、深い夏草の上での角力、斜面を[illegible]のやうにころ〳〵下まで轉がり落ちる競爭、または奧の方の一段根深い叢から、大きな青大將を突つき出して、寄つてたかつて叩き殺した上、下を走る電車を目がけて投げつける程の惡戲もしました。この騷が往々喧嘩口論にまで延長することは想像されるでありませう。中で、一番いたづらでもあり、喧嘩も強くつて横暴な振舞をするのは、例のお稲荷樣の横町の小アナキストの一群でありました。四五日前幸三との間に起つた取つ組合も彼等の中の性質の惡い一人の惡戲からでありました。

その子供は幸三の竿の後をつけ廻して、有らゆる手段で獲物の取れないやうに邪魔を入れました。又自分の方の竿が相手のよりも幾らか長いのを利用して、幸三の覘つて行く後から拔けがけの功名をしました。恰好な幹に取り附いてゐた一匹の蟬を目がけてそつと幸三が忍び足に

近寄るのを見つけると、彼はいち早く自分の竿を投げ出して、つる〳〵とその樹に登つて行きました。ヂ、ヂ、ヂ――と蟬は驚いてけたゝましく啼きながら飛び立ちました。

『芳公。きかねえぞ！』

幸三は汗ばんだ顔をいよ〳〵まつ赤にして、怒り出しました。

『威張るない！　なんだい！　一匹も取れねえ癖に。』

手の早い猾い芳公は口で答へるより先にもちのついた竹を振つて、力任せに樹の上にゐた相手の足をしよびきました。

『打つたな！　この野郎。』

芳公は鞠のやうに辷り落ちて、そのまゝ幸三に飛びかゝりました。二人は二匹の小犬見たいに組み合つて、上になり下になりしながら、草の上を轉がり廻りました。それを見ると、巳之吉やその他の僕方の兄さん株の子供たちが皆んな其處へ驅けつけました。

友一も人並に袋のついた竿をかついで巳之吉達と一緒に森へ來合せた一人であつたが、こんな騷になると、まだ〳〵無能な弱卒として後の方へ引つ込んでゐるより仕方がありませんでした。彼は半分呆れながら、それでも年上の遊び仲間達の、亂暴な行動に刺戟され、何となくむづ〳〵するやうな興奮を感じました。自分の味方のために、

『馬鹿野郎！』

と怒鳴つて聲援してやり度い氣もしました。同時に、そんな場合には母親から非難される種類の用語が、一番適當な威勢のいゝ言葉であるのを知つてゐました。でも彼は他の子供に對して、且つそんな遊び場でそれを實行する程に腕白でもなく、またそれほど圖太い惡戲の子でもなかつたために、家に歸り、自分の配下として權威を示すのに最も都合のよい弟に對してそれを試みました。

『僕の鐵砲舁いぢやいけないつて云つたぢやないの。馬鹿野郎！』

彼は有らゆる場合にその新用語を使つて、威嚇しました。小さい邦夫は、兄の想像する程にその言葉の威力を認めはしなかつたが、何度も繰り返されてゐるうちに、それが何か非常な惡口である事だけは分りました。それ故、彼は自分に投げられた言葉を兄にも投げ返しました。

『お兄ちやま、ばかやよ！』

『いけませんねえ。邦坊ちやんまでそんな事仰しやつて。』

母親が斯う云つて咎めると、彼は小さいみそつ齒を現はして、きやつ〳〵笑ひ轉げました。咎められゝば咎められる程、面白いのでした。

『御母樣、ばかやよ！』

『きみや、ばかやよ！』

丁度ふざけてゴム毬の投げ合ひつこでもするやうに、彼はその惡口を興がつて、笑つて、誰にでも容赦なく投げつけました。

『お父ちやま、ばかやよ！』

『チョン公、ばかやよ！』

斯うして終に家ぢうのものは、飼犬のチョンに至るまで悉く馬鹿野郎にされてしまひました。でも彼が云ふと、何を云つても可愛くなりました。どんな惡い意味の言葉でも、その赤い、い、い、ぽつちりした脣の間を通す間に淨化され、小鳥のお饒舌のやうな罪のないものになりました。それ位彼は幼い、いたいけな、小さいものなのでした。三つと云つても遲生れの上に、極めてぼんやりした性質らしく、その間拔けた單純と素直さは、きかぬ氣の、强い兄の――善惡共に追々と明らかに目立つて來たこの頃の彼の人間性に對して著しい對照を作りました。或る露西亞の作家が云つた「天國から地獄まで」の性格を、兄の方は既に完全に具備した一箇人であ

るに反して、弟はまだすべての種子の深く眠つてゐる小さい混沌のやうな氣がしました。

「この兒はいつまでこんな赤ん坊みたいな顏をしてるのだらう？」

父母は時々こんな事を云つてはをかしがる事さへありました。全く彼が在るべき以上に、幼く赤ん坊じみて見えるのはその顏の故かも知れませんでした。それは大體から云ふと面長なのでありますが、兩方の頰肉が金網の上のおかいちん見たいにふくれ出てゐるのと、少しおでこである爲に、圓い感じを與へました。目口は尋常でありますが、鼻は低くつて鼻筋の線も不明瞭であり、皮膚が赤白くつて、でこぼこふとつてるところは、何んだか洗ひ立てのじやが芋を聯想させるやうな顏でもありました。

「女の子でなくつて、まあよかつた。」

母親は彼の顏の話になると、よくさう云つて笑ひました。けれども「一生の曙」を象徴してゐるやうな彼の圓い頰の色には、どんな美人にもない清淨な艶がありました。その微笑はまだ天上の微笑でありました。玩弄具などを見て悦ぶ目の、青みがかつた清澄な彼の角膜に比べると、あらゆる目は慾に疲れ荒んで、血管の怒張した大人のそれは恰も無頼漢の目のやうに思はれました。

彼はまだ善惡とか正邪とか道徳上の面倒臭い比較觀念がなかつた許りでなく、靈的と物的との區別さへ持ちませんでした。

或る日の事、いつもの通りお八を貰ひに來た彼の手に、曾代子は一包の菓子を載せてやりました。

『これ何んでちよう？』

彼は斯う云つてにこ〳〵しました。その紙包の中から、どんなお菓子が現はれるかが、また樂しい待ち設けなのでした。捻つた白い紙をそつとほぐして見て、自分の大好きな唐まんぢうの三つであつたのを見つけた時、彼の顏は一層輝きました。

『あら、おまんぢうだ！』

彼は早速その一つに小さい齒形をつけて、端から食べ始めました。而して庭の方を向いて兩足を投げ出しながら、さもおいしさうに熱心に食べました。小さい子供が一人できげんのよい顏をして物を食べてゐる有樣は、母親の目には何か優しい言葉でもかけないではゐられない位可愛げに見えるものであります。曾代子は自分に背中を向けて無心に唐饅頭に食べ入つてゐる子供に微笑まされました。

「邦坊ちやん、お饅頭おいしうございますか？」

斯う云つて後から顏を覗き込むと、彼は母親の微笑に答へて自分もにこ〳〵しながら、

『おいちいの！』

と答へました。さう云ふと共に、今度は眞ん中から二つに割つた唐饅頭の一片を右手に持つて、電話の受話器見たいにそれを自分の右の耳へ當てました。而して一瞬時何かをぢつと聞く樣な表情をした後で云ひました。

『ねえ、お饅頭もおいちいて云つてるわ。』

彼は自分が食べて見ておいしく感じた故に、食べられる唐饅頭自身も、同じくおいしく感じるに相違ないと信じたのでありませう。

こんな例は倘ほいろ〳〵ありました。彼が今少し小さかつた頃、庭を散歩する度に垣根の隅にある一本の若い樫の葉が、深く彼の興味を引きました。下枝に五六枚房になつて垂れた葉が風に吹かれて動くのが、自分を招くやうに思はれたのであります。彼はその度に小さい手をあげてお出で〳〵をして樫の葉の挨拶に答へました。今では流石にそれ程でもありませんが、でも夕方など不意に氣まぐれな強い涼風が立つ

て、青い庭木が悉く吹きまくられ、動きゆらめくのを見ると、彼は面白さうに叫びます。

『木イ木かみんな踊つてる。』

茶の間の隅の長火鉢にぴち〱と炭の鳴る時、彼はまた云ひます。

『お炭か啼いてるわ。』

或る日、夕ぐれ、目覺めるばかり美しい雲のいろ〱が、西方の天一杯に撒き散らされた事がありました。

『何んて見事なのだらう。』

家の人々は口々に斯う云つて、みんな座敷の廊下に立ち列んで、その夕映に見惚れました。邦夫も母親に抱かれてそれを見ました。人々の顔に赤く落ちた雲の反射は、彼の圓い頰を彩り、無心な、同時に嚴肅な、その凝視の黒瞳に、一點の天の火を映しました。晝間のたゞ青く澄み輝いてゐた空には想像もされない、光と陰影の驚くべき交織、色と色の魅力的な紛亂の現出に呆れた眼は、彼がまだ知らないもの、又は見て不思議に思ふものに就いて、いつもするやうに母親に尋ねました。

「あれ、何あに?」

「夕燒けよ。」

「夕燒け、小燒け、あした天氣にな——れ!」

と傍から小さい兄が高い調子で唄ひました。すると邦夫は、

『あそこへ行つて見まちようよ。』

と云ひ出しました。彼の此の空想的な申し出は少からず母親を驚かしました。でも彼女は一瞬の躊躇もなくそれに贊成しないではゐられませんでした。

『えゝ、行きませうね。』

曾代子は心の底からさう叫びました。この小さい人間に連れられてなら、どんな境地へでも行けさうな氣がしたのでした。

自分の食べてゐる饅頭に、自分の舌と同じ味覺の存在を信じ、木の葉の搖れをさし招く手と思ひ、風に動く樹木を彼等の舞踏と想像し、火鉢の炭の啼く聲を聞き得る彼、夕映の雲の美しさにあこがれて、不思議な天の旅行を思ひ立つ彼は、三千年前の希臘人と變らぬ美の創造者でありました。森の老樹に美しいドリュアデスの群を棲まはせた彼等の想像力は、やがて庭の木立の舞踏を興がる邦夫のそれではなかつたでせうか。又彼が夢想した天上旅行は、ファエトンが父なるアポロンの二輪車に對して有つた憧憬に外ならないのであります。

曾代子には、近世の教育ありと云はれる人々が、彼等の僅かな科學と哲學とを以て無造作に交換した、無限の美しい世界が、この三つの子供の前には、尚ほ故障なく打ち開けてゐる事を、面白くも亦尊くも思はれました。——頭に得たものを、それだけ胸に失つたと云ふ恨みは、眞面目な大人の、折にふれて屢ゝ感じる後悔でありますから。

幼兒の如く神の國を承けざる者は これに入る事を得ざるなり。——馬可、一〇・一五

曾代子はこの耳慣れた基督の言葉の意味が、自分の小さい兒に依つてだん〱と本統に分つて來るやうな氣がいたしました。

『神樣。神樣。』

時々何かに感じさせられると、彼女はこんな事を云つて、その兒をかき抱きながら、家の中を飛んだり、反ねたりして歩きました。こんな瞬間に於ける、母親の複雜な心持を了解する力のない邦夫は、その度に何か面白いふざけでも始まつたかのやうに思つて悅びました。きやい、きやいと笑つて、はしやいで、抱かれた身體をゆすぶりながら彼は叫びます。

『お兄ちやまも飛んなちやい。』

兄はもうあばれする氣で、寢卷なんかして飛び出して來ます。すると弟は自分にも同じやう

にさせて見れと云つてせがみます。

『おや、待つてらつしやい。』

曾代子は彼を手から下ろして、望み通り頭の周圍に手拭を捲きつけてやつたりしてゐますと、いつの間にか自分も無邪氣な快活な氣分に引き込まれてしまひます。斯うして、三人の親子を一組とした奇體な馬鹿踊が始められました。他愛のない笑ひ聲と、どたん、ばたんする不器用な足拍子で、家ぢうの疊や、壁や、柱をびつくりさせながら。曾代子は人並外れた醜い、不恰好な女であつたから、彼女の踊は何かなしに太い丸たん棒がぴよい〳〵飛び反ねてゐるやうなものでありました。前後に踊り廻つてゐる二人の小坊主は、その樣子がをかしいと云つて、咽せ返つて笑ひました。彼女自身もそれを知つてゐるので、一層とぼけた眞似をしてふざけて見せました。でも、踊りながら、

『誰のためならこんな事をするだらう？』

と思つた時には、他愛ないその歡聲の中に於てすら、何となく苦笑しないではゐられませんでした。

『あゝ疲れた。もうお母樣は御免ですよ。今度はきみやが遊びますつて。』

斯う云つてその擒から脫けようとしても、彼等は中々逃がしませんでした。

『ぢや、今度はきみやも入れて動物園ごつこしませう。ねえ。お母樣は熊におなんなさい。きみやは象よ。』

『僕お猿だわ。』

邦夫は兄の指名を待つより先に、きやつ、きやつ、と云ひながら、あの公園の大きな金網籠の中の小猿に倣つて、皆んなを引つ掻く眞似をして騷ぎました。

きみは彼女の長い腕を顏からまつ直ぐに伸ばせるだけ前に伸ばして、象の長い鼻を型取り、それを二三度その儘ふら〳〵動かしながら、う、う、う――と唸つて彼等を悅ばせました。斯うなると曾代子も一寸でも熊にならなければなりませんでした。彼女はそこらをのそ〳〵と這ひ廻つた末、二人の前に進んで、

『今日は、今日は。』

と首を上下にゆるく動かして、間の拔けたお辭儀をして見せました。この獸が檻の中でよくやつてゐるこんな身振を、子供等は彼が自分達に示す親しい挨拶だと信じてゐました。この前動物園に行つた時には、北海道産の大きな黑熊が、何度も鐵格子の前に來てお辭儀をしたと云ふ事を、當分噂して嬉しがつてゐました。

『白い首輪だから、お母樣のは北海道熊ねえ。』

友一はこんな批評をして母親の熊を笑ひました。

斯うして夢中に遊び興じてゐる時、彼等は、「善」その物のやうに純粹で、快活であると共に、暴君の苛酷と無遠慮を持つてゐました。母親の權威とか尊嚴とか云ふものはこんな場合の彼等には何んでもありませんでした。單なる遊び相手、面白いふざけ仲間たる事に於ては、彼女もきみも彼等の目には同等でありました。惡くするとその愛犬たるヂョン公にさへも遇せられないのであります。

『ヂョン公。お廻り！　お廻り！』

『わんとお云ひ。も一つ、わん！』

斯うやつて緣側からその親しい友達に命ずるのと同じ心持が、きみを象に假裝させ、母親を熊にさせないではすまないのでした。お菓子の一片でも貰ひ出すだけ、まだしもヂョン公の方がこんな羽目に陷つた母親達よりは得でありませう。

併し本統を云ふと、彼等のヂョンは彼等の飼犬ではありませんでした。と云つて世間によくあるやうに野良犬の紛れ込んだのでもありません。もし假りにもそんなことを聯想する人があ

れば、その人は素性正しい、且つ彼等の仲間での紳士とも云ふべき温雅な、禮節あるヂョンを、侮辱するものだと云はなければなりません。

友一の家は通りからずつと奥に引つ込んでゐて、玄關から表門に達するまでには、花崗石の長方形の敷石の四十枚以上を數へなければなりませんでした。これだけ聞くと如何にも宏壯な邸宅のやうに思はれますが、事實は大違ひであります。その敷石はそれに添うて建つてゐる三軒の家と共同の通路であり、その門さへ、彼の父親の姓名一つのみを掲げて置く自由のない一種の共同門でありました。

三年前の春、友一の家が先の住居から此の奥まつた二階家へ引つ越して來た時、同じ構内の家の一つに、彼の母親の友達でN子さんと呼ぶ人の一家が住まつてゐました。ヂョンは實はその家の飼犬なのでした。單純と快活、且つ善良な氣質に於て全く同類を有つた子供と動物とは、すぐ親友になりました。而して敷石と門とお互に通ずる細く、いつの間にかその犬も彼のいゝのペットになつてしまひました。

「ヂョン公！ ヂョン公！ ヂョン公！」

斯う呼ばれて、彼は[illegible]をあちこちと驅け廻りました。殊にまだ表の世界を知らなかつたその頃の友一は、この動物のために幾らその生活を豐富にされたか分りませんでした。

「ヂョンヂョ公！ ヂョンヂョ公！ ヂョンヂョ公！」

彼は戯れにこんな呼び方をしてをかしがりました。どう呼ばれようと、彼の聲が庭の方に聞えさへすれば、ヂョンは何處からでもすぐと驅けつけ、敬畏と親愛のしるしとして舌をペラペラ嘗めたり、はしやいだ元氣のいゝ吠え方をして、友一の周圍を二三遍ぐるぐる廻つたりしました。

蛞蝓類にでも喰みつかれるやうな家畜の舌は、初めは友一を顫へ上らせました。でも慣れて來るとそれも面白い戯れの一つでありました。彼の子供らしい細い手は、柔かく、暖かい犬の舌の觸覺に快感を持つ程にさへなりました。時に依るとヂョンは後足だけで立つて、顔まで嘗めずりました。縁側に腰かけてからかつてゐる時などには、踏石に坐つてゐる犬の頭が、丁度彼の顔を嘗めるに都合のよい位置になるのでした。

「ほら御覧なさいまし。今朝ほどお顔を洗はなかつたから、ジョン公に嘗められたので御座いますよ。」

時々顔を洗ふ事を面倒がつて婆やを手古ずらせる惡い癖を、それに結びつけて彼女から冷かされると、友一は非常に自尊心を傷つけられる氣がしました。

「僕洗つたよ。きみやが行つちまつてから洗つたんぢやないか。」

彼はこんな嘘を反抗的にわざと言張つてつきましたが、でも小さい心の中では眞面目にその批評を許りました。

「今朝顔を洗はなかつたのを、どうしてヂョン公が知つてるのだらう？」

昨年の夏、N子さんの家は小石川の方へ引つ越す事になりました。從つて起つたのは、子供等と犬――その時分はもう小さい妹も十分彼とお友達になつてゐました――との不幸な離別でありました。

「厭だなあ、Nさん、なぜ引越しなければいけないの？」

彼はお隣りの若い叔母さんの袂を捉へすると、さう云つて不平を鳴らしました。

いよいよ引越しの日になるとN子さんの家の裏口――即ち友一から云へば、彼の家の眞ん前――に一臺の荷馬車が這入つて來たり、その他、不斷は押入や戸棚の中に閉ぢてゐた種々な家具や寢具が、家の外に運び出されて、繩で縛られたり、蓆で包まれたりする物々しい光景が

現はれました友一をして好奇の目を向けさしたそれ等の物は、同じやうに彼の友達の異常に鋭い神經を刺戟しないでは措きませんでした。

ヂョンは興奮した態度で、異様な諸道具の積み重なりの間を駈け廻り、嗅ぎ廻り、検査して過ぎました。運ばれる荷物を待つて木の下に繋かれてゐた荷馬車の馬に對しては、殊に示威的に吠えました、栗毛色の尻つ尾がその大きな身體から獨立した生物ででもあるかの如く、長い毛の房を振つて動く度に、一層勢ひ立つて吠えました。

彼の斯んな滑稽ないから騒を見て面白がつてゐた間は、友一の心にはいつも彼とその前庭で遊び戯れてゐた時の感情と異つた何物もありませんでした。少時間の後には、やがて別れ〳〵になるべき友達とも氣づかないかのやうに、彼等は常の通り、面白がり、笑ひ、ふざけました。

『ヂョーン公！ ヂョン公！ ヂョン公！』

斯う呼び立てる聲も元氣よく、爽かな調子に響きました。けれども荷物の取り片附かすんで、人々が段々とお別れの挨拶を述べに來るやうになると共に、彼の小さい胸にはあはれな震へが生じました。

『お坊つちやん、どうぞお遊びにいらつしやいましよ。ヂョン公が待つてゐますからねえ。』

みんな彼に對しては、ヂョンの事を附け加へるのを忘れなかつたのが、一層友一を感傷的にしました。彼は泣き出しさうな顔をして、返事もせずに家の中へ隠れました。

ヂョンは引越の最後のものでありました。荷物も人もみんな出て行つた後、たつた一人殘つてゐたN子さんの良人のTさんが、何んにも知らず、氣樂らしく植込の下に寝轉んでゐたヂョンを引つ張つて來ました。

『とても、結かなくちや駄目ですね。』

Tさんは斯う云つて用意してゐた綱を出して、それをヂョンの頸環に結びつけました。

『ぢや、左様なら。』

『左様なら。ヂョン公、はいちやい！』

終に別れの言葉が行く人と留まる人々の間に取り交されました。けれどもヂョンは動かうともしませんでした。頸環に綱をつけられるまで、何の氣もなくのんきにしてゐた彼も、今その綱を持つて強迫的に自分を引き立てようとする主人を見ては、一種の不安なしではゐられなくなつたかのやうに、彼は綱の引く力に抵抗するため、後半身と後足に有りつたけの力を籠め、踏み反らした前足の間に頭を落しながら、主人を見上げて[illegible]きました。その[illegible]な目には、主人の異様な扱ひに對する[illegible]求がありました。

『行くんだ、行くんだ。さあ、[illegible]ないか。』

Tさんが斯う云つても、その言葉を理解する能力のない不幸な家畜はたゞ悶えて啼きました。而してどうにかして逃れようとしたにも拘はらず、矢張り引きずられて行きました。

『たうとうヂョン公も行つちやつた！』

人々は庭に立つてそれを見送つてしまふと、落膽したやうにぞろ〳〵家へ入りました。默つて一緒に歸つて來た友一の目には涙がありました。何故とも分らない或る悲しいものが、胸一杯に塞がつてゐました。

『お家にも亦飼ひませうよ、ねえ、お父様！ 先のミナ見たいな犬が手に入るとようござんすわねえ。友さん、まだあのミナを覺えてゐて？』

母親は子供の心を當面の悲しい事件から轉じさせるために、先の飼犬の事などを話し出しました。それは純粋のスコッチ・コリ種で、褐色の房々した深い捲毛と、葡萄色の瞳、突き出た精悍な鼻、銀の棒を投ち切る如きカン〳〵した特長のある吠え聲を持つて、獅子のやうな威嚴を備へた優秀な犬でありました。けれどもハイ

ランドの牧場や、田舎の森林の生活に相應した彼の感情は、人の家の玄關先や、小庭の周圍におつとしてゐるには、餘りに野生的で、自由でありました。やり場のない彼の凡ての精力は、終に有らゆる種類の狂暴な悪戯となりました。而してお仕舞には誰からか故意に與へられたらしい、有毒な食物のために、家畜病院の一間で哀れな死を遂げました。貴重な鉢物を蹴散らされたとか、大事な花壇を荒らされたとか云つて、彼は近所の植木屋などに常に恨を持たれてゐたのであります。

いつまでも愛犬の死を諦めかねた家族の人々は、如何に願つて呉れた家に今一度頼んで彼の弟に當る一匹を貰ふ事に成功しました。兄弟は全くよく肖通つてゐました。

「また來やあつた！　先のと寸分違はねえんだぜ、おい」

先の犬の暴力に手古ずらされた植木屋の若者達が、恰も幽靈をでも見たかの如く、怖れたほどそれは肖てゐました。けれども第二の犬は兄よりも柔順に、主人に馴るよりも先に、その姿を隠しました。……この種類のよく知つてゐる人間かに、故意に盗まれて了つたのでした。

「もう飼ひものはよしませうね、幾ら苦勞するか知れやしない。」

死亡、失踪、その度に親身に涙を流したり心配したりさせられた家族は、それつきり――今度のヂョンと何時とはなしに知り合になるまで――可愛い家畜を持つ事を斷念しました。

例へば、遠い海や、戰場などへ行つたきり歸つて來ぬ人を、家で待つ者はどうしても純に死んだとは思へないで、いつかまた別れた時の通りの様子をして歸つて來さうな氣がすると同じやうに、女の家では、ミナは絶えず人々の記憶と幻影から離れませんでした。親たちは殊にその犬の事を忘れかねてゐました。今までヂョンに對して彼等がお子供たちほど愛を注ぎ得ず、何となく熱情のない可愛がり方であつたのは、ミナの幻影があつた為かも知れませんでした。實際、その外貌や、頭腦…代の自然人を見るやうな、自由な偉大な力の溢れてゐる點から云つて、ヂョンは決してミナに敵ではありませんでした。彼等の間には天才と凡庸との違がありました。

公平に云ふとヂョンは、寧ろ普通以下の見すぼらしい犬なのであります。身體も餘り大きくはなし、彼の唯一の上衣なる毛皮は、頭と、背中の一部と、左足の上の方に黄、黒斑を有つた白地であります。それも床の下などの狭い土の中に寝轉ぶため、白さえ決して純白に保たれないで、いつも汚れ滲んでゐるのも、彼をして一層貧乏臭く見えさせました。素直で、温順であるだけは何よりの取り得ではあつたが、それ以外には大した特長も見榮えもない犬で、若し何等の關係もなくそれを路傍で見たならば、きつと穢らしい老ぼれ犬として冷やかに看過されたかも知れませんでした。

『あんな犬なら捨つて來たつて幾らでもある。お父さんが今度いいのを探してあげるよ――』

父親が小さい息子の歓心を買はうとして、成りはやす言葉について、幸代子もヂョンが決して貴重な犬でないことを申しました。

『飼ふなら純粋に、犬な雑種はなく、ちや面白くないわ。ミナは立派だつたでせう。ねえ、あんなのをまた飼ひませう。』

皆んなから斯うミナ、ミナと昔の犬のことへばかり話を持つて行かれてしまふので、幼い吉の感情も自然とヂョンに離れて、……馴染の方へ……られました。

「僕ね、ミナの方が……よく覚えないのですが、

お二階の畫を見てるとよく思ひ出すの。』

二階の書齋には、父親の友達で、近所に住まつてゐた或る畫家の描いたミナの油繪が懸かつてゐます。これは家畜病院から連れて歸つて、お寺に埋めに行くまでの間に描かれた彼の「死の肖像」でありますが、突然の變化であつた爲に毛並や姿も大した衰へもなく、ぢつと目をつぶつてゐる樣子などは、庭の隅に日向ぼつこをして眠つてゐるかの如く、穩かな可愛い犬となつて居ります。

友一がこの油繪に依つて昔の愛犬が思ひ出されると云ふのは、本統は彼の幼い錯覺に過ぎないかも知れないのでした。何故なれば、彼の意識に上つて來るミナと云ふ一匹の犬は、決して過去の實在から得た記憶の像ではなしに、主としてその繪畫を見る事に依つて、又は家の人達からその犬の追懷を聞かされる事に依つて、拵へ上げられた幻影らしいのですから。

『僕お菓子を食べてると、よく飛びついて來つて行つちまつたのねえ。でもつて、僕泣いたでせう？』

彼は思ひ出したやうにそんな事も話しました。併し、それも本統の記憶ではなしに、矢張り母親から聞かされた事でありました。

『一郎坊ちやんよりもまだ小さかつたのよ、その時分のあなたは。をかしいやうでせう？　ミナの前に立つと、こんなに小さかつたのよ。』

曾代子は彼がいつぱし何んでも覺えてゐるやうな、滑稽な心得顏を微笑しながら、疊から一尺ばかりの空間へ平手を置いて、その頃の彼が如何に小つぽけなものであつたかを示すと、彼は有り得ない事のやうに、厭がつて、笑つて、否定しました。

『譃だい、譃だい。僕そんなに小つちやいものかつて！』

それから一時間ばかり後の事でありました。子供達は何かの遊戲にまぎれ、親達もめい〳〵の仕事にかゝつて、誰もヂョンの事など云ひ出すものもなくなつてゐた時、前庭の方から不意に聞き慣れた吠え聲が耳に入りました。

『おや、ヂョン公ぢやないか？』

母親が驚いて斯う云つた瞬間に、友一はもう廊下へ飛び出してゐました。

『ヂョン公だ！　ヂョン公だ！　お母樣、ヂョン公が歸つて來ましたよ！』

彼は氣の狂つた者の如く身體を振り動かして叫びました。彼は特別に犬の方へ呼びかける必要はありませんでした。ヂョンは彼の姿を見、彼の聲を耳にすると、[illegible]時に[illegible]しぐ[illegible]て來ましたから。[illegible]びつく。吠える。嘗て[illegible]と思ふと、ぢつとしてゐられないかのやうに[illegible]茶苦茶に廊下の前を[illegible]け廻る。鼻を鳴らす[illegible]をぴつたり伏せて、千切れる程尻つ尾を振[illegible]――言葉を知らないから、たゞ自分に出來得る限りの、表情と身振と聲のあらゆる方法で、再び彼等を見た嬉しさを表はさうとする家畜の心持は、其處へ驅け寄つた人たちに、深い感動を起させないではすみませんでした。美しい情熱の交流は人間と動物の差別を撤しました。人々はみんな涙ぐましい心になつて彼の泥だらけの手を取つたり、頭を撫でたりして悦びました。頸環にはTさんが引つ張つて行く時に結びつけた綱が、そのまゝ五六寸ほどちぎれたまゝ殘つてゐました。

『引つ切つて來たんですよ。本統にまあよく歸つて來たのねえ。』

曾代子は先刻友一の失望を紛らす爲とは云ひながら、昔の飼犬まで引き合ひに出して、彼を取るにも足らぬものの如く貶しめた事が淺間しくさへ顧みられました。若し人間が自分の蔭口を洩れ聞くやうに、ヂョンが先刻の噂を聞き得たとしたなら、彼は彼女等の輕浮と高慢を輕侮

したでありませう。

『ジョン公！　ジョン公！』

彼女は茶箪笥の抽斗から煎餅の袋を出して、自分でもそれを投げてやり、子供達にも投げさせました。椽に近づいて來る彼の灰色の眼には、一點の遲疑も畏もありませんでした。彼女はその善良な瞳の前に恥ぢました。

『大事にしてあげなさいよ、折角歸つて來たんですもの。可愛いぢやありませんか。ね、いゝ、ジョン公よ。』

彼女は今度は一生懸命で彼を褒める人になりました。友一は又友一で己惚れてゐました。

『ジョン公は僕の友達だもの。Tさんなんかについて行きやしないや。』

ジョン公が歸つて來たから預かつて置いてあります、心配しないやうに――と云ふ事を知らした友一からTさん宛のハガキと行違に、Tさんからも手紙が届きました。脅かしてもすかしても、ジョンはついて來る事を厭がつて、白山下まで行つた時に到頭綱を噛みきつて逃げてしまひました。途中は無事に歸り着いた事と信ずるから、お宅の方へ歸りましたなら、當分お世話を頼み度いと云ふ意味でありました。斯うして彼は公然とＮの家のかゝりうどとなつたのであります。以上の顛末は、でもジョンの愛が當然飼主たるＮ子の家に薄くつて、友一の方へ厚いと云ふやうな例證にはならないのでありました。何故なれば、彼は友一の家に纏はると同樣の親しみと忠實を以て、空家になつた元の家を守つてゐましたから。見捨てられた淋しい家の前に、彼は不斷と變らぬのんきな樣子をして寢轉んでゐました。家の人達が遊びにでも出掛け一時の留守を預かつて居るかのやうに。

『ジョン公には、つまり、人間のする引越と云ふものが吞み込めなかつたのですわねえ。』

曾代子達はいつぱしをかしい事のやうに云つてそれを笑ひましたが、その後からまたたゞ笑つてばかりはすまされない或る事を考へさせられました。時々の必要に應じて、自分達の寢る處まで移し動かさなければならぬ人間のあわただしい生活を理解し得ぬ彼等は寧ろ幸福でありました。且つ、犬には自由があり、その天賦の能力たる吠えること、主家を忠實に守る事に依つて、善き飼主から酬いられる權は豐かであり、彼等の小屋の藁の床は暖かであります。けれども、現代の多くの生活――ことに精神的の仕事に生きようとする或る一部の人々の生活には、外面的にも、内面的にも、犬の有つほどの安定があるであらうか。彼等は自分の天賦と信ずる仕事を專念にしたと云つても、それからは何等物質的の酬いも待ち設けられないでありませう。犬が門を守る代りに鼠を捕らされる樣な、不自然な、苦しい勞力を費してさへ、家畜の得るだけ容易い糧は得られず、彼等の有つ程の快い家は死ぬまで有たされないのでした。蟹が穴を探し廻るやうに、強慾な家主の建てた小屋から小屋を渡り歩かなければならない、知識的な勞働者の群！　彼等は或る點に於て犬よりも悲慘であります。曾代子はＮ子さんの家が決して道樂に引越したものでないのをよく知つてゐたから、ジョンが吞氣らしくその空家を守つてゐるのを見ると、淋しい心になりました。

秋が來ました。三角山の蟬とりがすいつちよ、いいいかちやかちやとりになつて、墓地の大通りの並樹に百舌鳥の伯母さん達のおしやべりが始まる頃になると、友一の生活にも亦少しの變化が起りました。彼はもう夏ほどには表の子供達と交際しなくなりました。他の子供達には學校が始まつて、朝から遊び出しに來る者がなくなつた爲でもあるが、主なる原因は一夏の經驗に依

つて、その遊び仲間のどんな者であるかを十分に知つたからでありました。以前は好奇的な目を以て見迎られた彼等にも、最早や大した興味を繋ぐ事が出來なくなりました。寧ろその粗野と無智とが彼のデリケットな性情を不快にさせました。

『あんな兒は、ねえお母様、隨分いけない事をするのよ。だから僕もう遊ばないの。』

彼は彼の年相應のよき判斷と識別を有つやうになり、未知の者を知つてしまつた後の落ちつきと冷靜を以て、以前の仲間を遁しました。三角山の奥には、一本の古い栗の木がありました。子供達はこの頃それを目あてに集まつて、まだ堅いいがを下から石だの竹竿だので攻撃する事を、新たな遊戯の一つにしてゐるのを友一は知つてゐました。でもこの事も彼を誘惑する事は出來ませんでした。

『お坊つちやん、遊ばないかい？』

『お坊つちやん、三角山へ行きませうよ。』

日曜日などに珍らしく孝三さんや順ちやんが呼び出しに來ても、彼は冷淡に拒絶しました。

『僕行かないよ。』

そんな時は彼は大概繪をかいてゐるのでありました。

繪を描くと云ふ事は、全く友一に取つては遊戲以上の樂しみな仕事になつてゐました。玩弄具やお菓子の一袋よりも、多くの場合寫生帖の一册、色鉛筆、繪具の一箱の方が彼にはより多く悅ばれました。斯うして三つ位の頃から描き溜めた素描やら、彩色やらの繪反古は、百冊近くの尨大な束となつて、首のとれた馬、破損した鐵砲、負傷した兵隊、その他のがらくた玩弄具と共に、彼の押入の奥に大事に仕舞はれてありました。

家族の肖像、茶の間、臺所、湯殿、井戸端、庭の樹、花壇、ヂョンの小屋、彼の繪は自分の周圍のものから始まつて、附近の景色、停車場、電車、汽車――あらゆる形と線とを平氣に易々と捉へました。父親はその藝術に就いて素人ながら可なりの能才を有つてゐましたが、曾代子は直線一つさへ滿足に引けなかつたので、小さい息子の有つてゐるらしい鋭敏な線の感覺を、彼女は實價以上にも賴もしがりました。

『あなたは繪を描いて居る時だけはえらいいのね。邦坊ちやんをからかつて泣かせる人のやうぢやないわ。』

又全く、廣い机に寫生帖を擴げて熱心に鉛筆を動かしてゐる時の友一は、弟と喧嘩したり、お菓子をねだつて甘えたりする時の彼とは別人でありました。母親もその時の彼だけは自分の有たない物を有つてゐる可愛らしい藝術家として尊敬しました。全く繪に沒入してゐる瞬間の彼は、見ても樂しさうでありました。唱歌などを鼻唄で歌ひながら、我を忘れた無心な顏をして、何時間でも彼は然うして描いてゐました。

描寫は素よりプリミチヴであるけれども正しく捉はれてあり、その線の一本々々はどんな大家でも有ち得ない確信と自由とで引かれてありました。その代り、それ以上殘酷な事も珍らしいでありませう。曾代子は彼女の肖像として彼から示されるスケッチに對して時々抗議を申込みました。でもカルル・エルドンの作つたストリンドベルクの胸像が、寫眞の彼よりは、より以上化物じみてゐながら、より多く藝術的でもあり、且つ正しくもあると同じく、乙御前に黑子をつけたやうな奇妙な顏を、自分の正當な肖像として受取らなければなりませんでした。父親の顏は、能の翁の上の後ジテの面の如くに描かれ、邦夫はお多福豆のやうな顏に、蚤ほどな小さい鼻が與へられました。きみは彼女の氣にしてゐる頰の贅肉を、餘り正しく描き表はされて、時々不平な顏をしました。ところが昨年あ

たりから彼の寫生帖に、そんな、小さな平和な繪畫ばかりではなくなりました。歐洲に突發した今度の大戰爭が、全世界の政治經濟、その他あらゆる社會問題に影響したと同時に、聯合軍側の一國の、首都の郊外に住んでゐるその小さい息子の描く繪畫にまで大なる變化を生じさしたのであります。彼の畫帖は、飛行機、飛行船、潜航艇、大砲、兵隊、[illegible]しのやうな兜を冠つたカイゼー――彼は聯合軍に屬する小國民ではあるが、カイゼーに崇拜者の一人であります――それから、その他のあらゆる戰鬪器具を以て充たされるやうになりました。且つ畫家たる彼自身が、描きながら同時に勇敢な戰鬪員として戰ふのでありました。彼は戰爭を描きながら、時々大變な勢で飛び上り、ありつたけの聲で叫びます。

「萬歳！」

「突貫！」

その筆は描き出さる、砲擊の破壊、ツェッペリン飛行船から爆彈投下に、彼に取つては單に重な事であるばかりではなく、正しく戰鬪であつたために、その畫帖、各ページは墨蹟淋漓たる大戰場となつてしまひました。ところが、すべての空想畫であると共に、繪畫、彫刻、音樂の如きあらゆる崇高なよい光景を描き出さうとするので、構圖も線も滅茶苦茶な亂暴なものになりました。それでなければまた彼の激しい興奮が適切に表はされなかつたのでした。

けれども彼の可愛らしい藝術としては、それは墮落であり、嘆ふべき混亂と邪路でありました。以前のやうに落ち着いて寫生をするやうにと云つて忠告しても、彼は聞かうともしませんでした。彼の畫帖はただ眼り奇怪な戰爭畫のみを以て埋められました。母親はどうにかして彼を正當な道へ引き戻す工夫はあるまいかといろ／\考へた末、或る計略を思ひつきました。それは戰爭畫を描いた時には、冷淡に看過して決して褒めてやらない事、今一つは彼女自らが寫生畫を描いて見せることでありました。彼と遊んでゐる時には、彼女はその積りで手當り次第のものを熱心に寫生しました。火鉢でも、鐵瓶でも、茶飲茶碗でも。するとその不正確な形、非藝術的な線が彼の嘲笑を買ふに十分でありました。

『お母様、まづいなあ！』

なまじ口を入れて母親の下手な繪を批評する熱心と共に、自分の優越を承認させようとする欲望を生じました。彼は皆代子の寫生するものを、自分も一緒に寫生し出しました。母親の工夫は成功したのであります。その上父親が新たに買つてくれた色鉛筆の一箱は、一層彼の製作熱を高めました。赤、綠、青、黃、紫、褐色の美しい獨逸製の色鉛筆、それを彼は夜は枕許に置いて寢て、朝目が覺めると、もう床の中から描き出しました。花壇のダリヤ、向日葵、百合、コスモス、カンナ、その他庭に集まつてゐるすべての秋の色彩は、次ぎ／\に彼の畫帖の中に這入りました。萎んだ後から後からビールの泡見たやうに吹き上つて來るカンナの眞つ赤な花瓣と、鮮明な綠を擴げてゐるその葉の對照は、取り分け彼の目を刺戟しました。彼のカンナの畫は優れて色彩的に、圖案的に出來上りました。

『お母様、散步しない？』

暇さへあつて母親を家の外へ誘ひ出す時には、彼はポケットにその色鉛筆と寫生帖を入れる事を忘れませんでした。この散步は大抵夕飯がすんで、それが自分の食事をしたり、臺所の後片附や、洗濯物を始末したりする一時間ばかりを利用してなされるのでありました。その間は皆代子が彼等のお守役として、[illegible]に[illegible]てられてゐました。

都子ちやん、[illegible]

あんよして頂戴な！」
邦夫は覺束ないこの約束を半信にならなつきながら、赤い靴を穿いて母親と兄の間に挾まつて出掛けます。彼等が然うして出掛ける散歩は、時間のきまつてゐると同樣にきまつた道順を有つてました。
彼等の家の門から西へ二三十歩の四つ角を、その儘左へ曲ると、孝三さんの屋敷の板塀に添うて、小さい坂路がS——墓地の方へ走つてゐます。親子は屹度その坂を下りて行きます。兩側に植木屋やその植木畑や、或るお醫者さんの別邸や、それに附屬した廣い、花の多い平庭などが打ち續いてゐます。而してある程の樹木が大きく茂つて、蔽ひ冠さつてゐるために、その一筋の古道は、幽邃な、趣の深い小徑となつてほそ〳〵と詩のやうに續いてゐます。けれども、一方が森めいた木立であれば、向側は明るい花畑であると云ふやうに、光と蔭の美しいシンフォニを作つて、通る人に危惧を持たせる程の暗さや陰氣さなどはありませんでした。曾代子には自分の住まつてゐる附近の自然は何處も皆好きでありましたが、この小さい裏路は取り分け氣に入つてゐました。其處を歩く度に、本統にいゝ道を歩いてゐると云ふ愉快を感じました。その路の間にあるものは、有らゆるものが暗示的で、彼女に何かを教へ、示さうとするかのやうであります。路傍の草でも、石ころでも、又頭の上の樹の葉でも、その中に啼いてる小鳥でも、そのずつと上に澄み照つてゐる青い空でも、特別になつかしく、有意味に彼女の胸に沁みました。書齋の中ではぼんやりしてゐた事が、この路に這入るとはつきりした正しい觀念に纏まる事も珍らしくはありませんでした。或る意味に於て、この路は彼女の三昧堂でもありました。
「いつ通つてもいゝ路ねえ、此處いらは！　靜かで、人が誰も通らないで。」
友一はどうしてその路がそれ程いゝ場所なのか、本統はよく分らないのでありますが、通る度に母親の嘆稱を聞かされるので、いつとなしに自分にも好きになつたやうな氣がしてゐました。
「いゝ氣持ね。うるさくなくつて。ねえ。」
彼は彼女の心持に共鳴ある同伴者として、似合はしい合槌を打ちながら從ひます。實際また斯んな隱遁的な場所や其處に在る植物の裡に藏されてゐる沈靜と平和と悦びは、彼の小さい心にさへも、否、三つの邦夫にさへも、十分に影響する力を持つてゐました。けれども二人に取つては、その興味を通り拔けて、右の方へ下りるN——田畝へ眞直に出て鬼ごつこをする事や、又は其處の牛小屋の牧場を訪問する事の方が、より以上の悦びであり興味であるのは勿論であります。田畝に下りないで左へ折れる時には、墓地に出て、それを一巡りすると、今度は三角山の方へまつ直ぐに歸りました。どの途を通つて見ても秋の色に染まつた田、木、草、そ樹の在るところに小鳥の歌、草、花、蟲、太陽はそれ等すべての地上にあるものを祝福して、蒼い高い空から金粉のやうな光線を降らしました。三人の親子もその天惠には洩れませんでした。彼等は身體いつぱいに美しい光を浴びて、頰をほてらしながら驅けたり飛んだりして歩きました。殊に犬——その散歩の度について行くことを怠らなかつたチヨンは、打開けた田畝や、森や、原つぱを見る事に依つて、未だ人の家に馴れなかつた彼等の野生時代の自由を恢復するかのやうに激しいふざけ方をしました。
「チヨン公、チヨン公、チヨン公。」
何かを見つけて崖の奥などへ這入り込んで行く彼を、友一は朗らかな聲をあげて呼び戻しました。斯んな騷で折角持つて行つた彼の寫生帖

は、一度も取り出されずにすむ事が度々ありました。

彼等はまた大根畑や葱畑の間に散在してゐる植木畑に立ち寄つて、ダリヤを買つたりもしました。苗木の手入などに來てゐる植木職人に白銅の二枚も渡すと、大輪の花を惜しげもなく切つて呉れました。

『友さん、持つて頂戴。』

斯う命ぜられてその美しい花束を持つて歸るのは友一の役目でありました。その時分には屹度邦夫が家を出る時の約束を無視して、平氣に母親の背中におぶさつてゐたものですから。

『あゝ重たい。牛屋さんに預けて來るとよかつた。』

それともこ、儘田畝に捨てて置かうかなぞとからかはれて、彼は母親の襟元にしがみ附きながら、兩足の赤い靴をぴよん／＼跳ねて笑ひました。

この散歩が母親とでなく、きみと一緒である場合には、彼等は墓地からまつ直ぐに三角山の前を通つてきみの家へ寄つて來るのがきまりでありました。

『おやお坊つちやま、いらつしやいまし。暫くお見えになりませんから、どうなすつたかと思つてゐましたよ。』

人の好い、子供好きなきみの母親は、いつも愛想よく彼等を迎へました。而してこの「暫く」と云ふ挨拶は、ほんの二三日を意味するに過ぎないのだと知つたら、どんなに屢々彼等がその家のお客さんになつてゐるかが想像されるでありませう。誰の子供時代にも、伯母さんとか乳母やとかの關係に於て、大抵一つづつは有つてゐる親しい、我儘の云へる茶の間を、彼等はその家に見出したのでありました。

『お茶頂戴よ。驅けつこして來たから僕喉が渇いちやつた。』

彼等は自分の家同樣の自由な振舞ひをしました。それがまた家族の人々を悦ばせる事でありました。全く人々は親身にその子供達を愛しました。

『お坊つちやまがいらつしやるでせうと思ひましてね、今日は婆やが御馳走を拵へておきましたよ。』

こんな事を云つて思ひもかけぬお汁粉などを侑められる事もありました。この家だけでは飲食が許されてゐたので、彼等は遠慮なく食べました。而して口のまはりをあんこだらけにしたまゝで歸つて來て、母親に報告しました。

『今日はお汁粉食べたのよ。でも餘りうまくなかつた。』

こんな往來の間に、彼等は彼等に興味の深い或る事が、その長火鉢のまはりで相談されてゐるのを耳にしました。それはきみのすぐ上になる二番目の兄が、停車場の通りに一つの店を出して燒芋屋を始めようと云ふ話でありました。其處は持主自身がその積りで新らしく竈の設備などしたのを、都合で人に讓る事となつた、それをその商賣に幾らか經驗のあるきみの次兄が引き受けたのであります。

『いゝわねえ、銀ちやんがお芋屋さんを始めたら毎日買つてやりませうよ。南京豆も賣るんだつて。僕にはうんとお負けしますつて云つたよ。』

非常に樂みな事を待受けるやうな顏をして悦んでゐる彼とは反對に、曾代子は少しそれを迷惑に感じました。また一軒我儘の云へる家が殖えた積りで、新らしい燒芋屋を訪問されては困ると思つたのでした。殊に其店の裏が直ぐきみの家へ續いて、庭傳ひに往き來の出來ることを聞いて彼女は一層困りました。若しそれを

ごたならば、裏の植木屋には自由に行かれて、表の焼芋屋には何故行つて悪いかといふ理由を第一に彼等は尋ねるでありませう。

　思想上の平民主義と、實行上の貴族主義との矛盾は、こんな小事件にまでも附き纏はりました。けれども曾代子はこんな場合に彼女がいつもするやうに、子供等の自然の判斷力と「慣れ」を待たうと思ひました。彼等の有つてゐるよい教養は、彼等自らを適當に振舞はせるでありませう。且つ又暫くするうちには焼芋屋も珍らしくなくなるでありませうから。

　開店の日は勿論第一番のお客様となる事を彼等は忘れませんでした。暖かい風呂敷包を抱へて歸つて來たきみが、珍らしいものを見て來た人の誇張した話し方で、芋竈の下を燃す次兄の不恰好な様子や、又はお客様との應對の武骨で、場馴れないのを笑ふのを聞くと、友一は自分も一緒に行つて見なかつたのを殘念がりました。

『僕今度買ひに行つちやいけない、お母様？　銀ちやんとこだもの。いゝでせう？』

　彼は栗芋のおいしさうな一つを握つて忙しく口に運び込みながら、どんな人が買ひに行つてゐたか、又はその新たな焼芋屋の主人が、妹のきみに對しても、有り難うございます、と云ふ挨拶を述べたかどうかを、好奇的な顔をして尋ねました。

『どうして、お禮どころですか。「ほら、早く持つて歸んな。」斯うでございますもの。一體商賣つて柄ぢやありませんから、銀ちやんは今に屹度すつていつて了ひますよ。』

　彼女は子供に答へながら、本統は主人に話してゐるのでありました。曾代子も彼等の兄妹に共通な、口の重い、のつそりした態度を知つてゐたから、その新店の男一人の武骨な商賣ぶりが想像されました。

『まあ折角始めた事だから旨く行かないかやねえ。』

　こんな話から、どうせ店を出すならどんな商賣を選ぶべきかが茶の間　問題となりました。自分の一身の處置と云ふ事に就いて、多くの考慮を費す年頃に達してゐたきみは、彼女が骨折つて溜めてゐる貯金を資本にして、小さい何かの店を持つ事を夢想する事もありました。

『何がよろしいでせうね、お坊つちやま？　何んでもお坊つちやまのお好きなものに致しますわ。』

『お菓子屋とね、そいから玩弄具屋と、そいから雜誌屋。さうすると僕みんな買つてやるからいゝね。』

　彼は斯う指を折りながら、それよりかも自分自らがお菓子屋になり、玩弄具屋になる事の、より便利であるのを考へました。

『お坊ちやまは？』

『僕、おかね屋さ。』

　政治上の意味から、日本國民のすべてに取つて大事な記念日となるべき、其年の十一月十日は、國民の小さい一員たる此の一人の子供に取つても、違つた意味で稀れな記憶すべき一日となりました。彼等はその日、父母に連れられて、且つ今まで乘つた事のなかつた珍らしい乘物に乘つて、賑やかな祝祭の町々を見物して歩いたのでありました。

『自動車で行くの？　嬉しいな！』

　豫てその計畫を傳へられた時には、友一は手を打つてそこいらを躍り廻りました。乘物に關する彼の理想に於て、自動車は飛行機と軍艦に次いでの大いなる夢想であり憧憬でありました。前に云つた通り、毎日表通りのO──街道を疾驅する或る富豪の華麗な車に對して、深

い嘆美を感じてゐたので、今思ひもかけず、自分自らがそれに乗る人になるのだと聞いては、彼に取つては、御即位式以上の事でなければなりませんでした。實際政治上の典禮の深い意義に就いては、彼は多くを知らないのでした。毎月買つて貰ふ數種の子供雜誌の十一月號に載せられた、その大典の擧げられるべき舊都の宮殿、儀式に列すべき諸官人の奇妙な昔風の服裝の寫眞、又は簡單な解說の文字などに依つて、何かしら賑やかな祭のある事だけはぼんやり分つてゐたが、大人達の云ふやうに、何故それがそれ程大切な目出度い事なのか分りませんでした。天子様と云ふものに、彼には何んだかはいり切れない觀念があるのでした。

昨日の新聞紙に掲載の[illegible]、國民的祝典の近づいた事を知らせ、何千年の間、純一な一系の血に依つて傳へられた古い神聖な帝位、及び今度の大典に依つて又一代を加ふべき帝位などに[illegible]して、愛國的の熱情と尊敬、[illegible]を書き連ねると共に、その光輝ある[illegible]の下に住む國民の幸福と感謝を[illegible]ないで、その佳き日を迎へるために凡ての準備の整へられつゝある事を、[illegible]な裝飾、篝火、行列などに就いて書き立てました。斯うして首都の眞ん中に起りつゝある騷の渦は、だん〳〵と弱い波紋になりながらも、郊外の淋しい通りにまで及びました。

或日の午後、友一は表から興奮した顏つきをして飛び込んで來ました。

『お母様、通りは大變よ。ずらりと提灯が出ましてね、幕が張つてあるのよ。そいからね、お稻荷様の角のとこには、提灯の門が出來ましたよ。造花の菊も飾つてあるの。お母様、いらして御覽なさい。そこいらの人達もみんな行つて見てますよ。晩にはね、あの提灯に灯がつくんですつて。僕その時行つて見てもいゝ？』

彼の心は單純でありました。その心持には新聞紙に書き立ててあるやうな政治的の意味などは微塵もあるのではありません。彼はお稻荷様の縁日を面白がるやうにたゞ面白がつてゐるだけでした。

祝日の午後に時過、曾代子は豫て打ち合せてあつた通り、夜の美しい灯を見せるために、彼等兄弟ときみとを連れて家を出掛けました。

途中で、女中から、日頃に聞かされた近所の表通りの裝飾を見る興味を持ちました。成る程家々に提灯が出てゐました。幕が張られてありました。けれどもその提灯は一軒にやつと一つか、二つ當て位づつの乏しい排列であり、幕は白と赤とたゞ二布きりの狹い帶で、支へに立て連ねた板の一枚を漸と蔽ふに過ぎない物でありました。彼がいつぱし見事なものの如く報告したお稻荷様の角の提灯の門と云ふのは、丸太を二本立てて、その上を[illegible]にして、その小さい屋根の下に、六つばかり提灯を列べたものでありました。幼稚な菊の造花が藁の屋根に飛び飛びに插してありました。曾代子は此れ等を見廻した時、何んとなく微笑まれました。その乏しい[illegible]ばかりの飾り物に對して、子供の悦び様の餘り大げさだつたからであります。しかし嘆賞者は彼ばかりではないと見えて、子供たちが二三人つれで、さも滿足らしいお[illegible]をしながら、軒並の提灯を數へて歩いてゐたり、近所の植木屋のお婆さんらしい人が、手を引いた孫らしい子供に國旗や幕を見せて、二人して嬉しがつてゐる有樣などが目に入ると、彼女の微笑は一味のいぢらしい、悲しい、同時に快い涙ににじんで行きました。

『あれ[illegible]ちやん一寸見よ。』

母親の日の中の[illegible]などには[illegible]な女一は[illegible]。其處で出逢つた女[illegible]を彼女に訴へたりしました。[illegible]は、洋服を[illegible]

して、母親に伴はれてゐる仲間に對しては いつもの如く馴々しく近づいて挨拶しようとはしませんでした。それは子供が彼等の交際の間に有つてゐる一種の禮儀でありました。その心持を解剖すると、羨望と羞恥の交つた遠慮でありました。友一も亦冷淡な態度を見せて通り過ぎました。何故なれば、彼等の持ち得ない樂しいものを持つてゐる其の日の彼は、彼等とは比較にならない優越者でありましたから。有樂座の前の廣場に待つてゐる筈の自動車、それを自由に乘り廻す愉快、賑やかな祝祭の光景、有らゆる期待と誇に充ちて、彼は冒險の途に上る勇士のやうな驕慢な悦を感じてゐるのでありました。

けれども頓て電車通りに出て、今一度正確な打ち合せをする爲に、母親が其處の自働電話から勤め先に居る父親を呼び出した時、友一は意外な失望を味はなければなりませんでした。夜の雜沓を警戒するために、自動車は大通りの通行を禁じられる恐れがあるから、馬車にすると云ふ事が傳へられたのであります。

『詰んないなあ僕、自動車でなくちや駄目だあ!』

友一は母親が電話の箱の中に這入つてゐた間に、其處の往來の花賣から洋服の胸につけて貰つた一花の日の紅い菊をいぢりながら、拗ねたやうに、鼻を鳴らしました。全く彼に取つては自動車に乘れないでは、斯うやつて出掛けて來た事も無意味であり、あれ程待遠に思つた今日の一日も、不斷の一日と何の變りもない、平凡なたゞの一日に過ぎないのでありました。彼の氣拔のした顏つきは曾代子を氣の毒がらせました。氣重い無精者の彼女が珍らしく今日のやうな事を思ひ立つたのも、小さい彼等を悦ばし度い爲ばかりでありましたから。

けれども、馬車だつて屹度面白いに相違ない。二頭の馬の威勢よく驅けて行く事を想像して御覽なさい、どんなに素破らしい事でせう、と云ひ立てた彼女の誇張的な說明は成功しました。然う云はれて見ると友一も直ぐとその氣になるのでした。

『さうね、僕馬車だつていゝな! でもね、馬車なら馭者のことショファーつて云つちやいけないのよ。お母樣知つてる?』

『生意氣云ふんぢやありませんよ。』

曾代子は彼の赤い頰をつゝいて笑ひました。彼も一緒に笑ひ出しました。彼は漸くまた元の勇氣を取り返したのでした。彼は今度はきみに抱かれてゐる郁夫を相手に自動車と馬車との優劣を論じ始めました。

『ねえ、郁坊ちやん、どつちがいゝ、馬車? 自動車?』

『僕ね、いゝ、いゝ、おんまに乘るの。』

『おんまの事云つてやしないよ。馬車か自動車かつて云つてるんぢやないの。』

『いやだあ、僕いゝ、いゝ、おんまだい!』

『馬鹿ね。』

彼は弟を尻目にかけながら小さい聲で母の耳許に囁き、微笑しました。これは弟の非論理を嘲ると共に、到底自分達――彼と母親――の對話に立ち入る資格のないものとして、憫れむのでした。

電話で手間取つた上、樂な座席の得られさうな電車を待つたりしたので、彼等が約束の場所で父親と一緒になつた頃には、最早祝祭の夜の夥しい灯が、街々を飾つてゐました。何處の道路にも群集がまつ黑に流れてゐました。

『僕馭者の方がいゝなあ! たゞ乘つてるだけぢや詰んないもの。』

燃ゆる灯に飾られたお濠端の奉祝門をさして馬車を驅けさした時、友一が第一に發した言葉はこの嘆息でありました。自動車に於て車內

の人の富貴、位階などには頓着なしに、只運轉手の神秘的な怪力を讃美し、あのぴかぴかした把手を握るの光榮を羨む事しか知らぬ彼は、馬車に於ても同様でありました。彼に取つては柔かい天鵞絨の壁の中に小公子を氣取るよりは、馭者でありたかつたのです。馭者臺に坐つて、今その男がしてゐるやうに、二頭の獸を轡の下に縱横に驅使したいのでした。

　有らゆる色と種類の灯に花と幕と旗の無數の連續に裝飾されてゐる町々は、その上に輝く星の圓天井を頂いて、一の大きな饗宴場の如く見られました。街路はその廣間であり、廻廊でありました。而して一隅をも殘さない位、無數の群集――市街の凡ての隅々から集まつて來た、自由な客人達を以て充たされてゐました。

　それは完備した人工裝飾のために、目の前の街路に對して、大地とか、土とか、石ころとかの野生的物象をすぐ聯想し難かつたと同じく、その群集も單なる人間と云ふよりは、「人間」と云ふものから出來上つた珍奇な祝祭的裝飾物の一種の如く感じられました。彼一連の馬車は、その賑やかな陽氣な裝飾物の間を、多くの木[illegible]門や、提灯の流れや、帳幕や、旗や、花の中をくぐると同じやうに、くぐり拔けて行くので、可なり不自由な驅け方をしなければなりませんでした。馭者はなるたけ隙間を見ては、電車道に這入つて行かうとします。すると、同じく遊覽のためらしい馬車や自動車も爭つてその容易な道を占領しようとして、其處には偶然の競爭が始まります。

「面白いなあ。負けるな、確かりやれ！」

　それは子供等にとつては意外な面白いものとなりました。美しい燈火と、群集と、きらびやかな光景に依つて興奮させられてゐる彼等は、自分達の乘物の後れない事を祈つて、箱の中から叫び聲をあげました。其處　車道に接近して、長い提灯行列の團體が、陽氣な樂隊を先頭にして、圓い、赤い提灯を打ち振り打ち振り幾組となく近づいて來ます。

「萬歲！　萬歲！」

　毎晩八時の時計が鳴る――同時に、寢卷に着換へさせられて、一合入の牛乳の瓶を抱へたまゝ靜かに眠に入る習慣になつてゐた三つの弟の方は、今宵の一夜は餘りに激しい變化であつたと見えて、お仕舞には、何かしら大きな力に壓服されたもののやうに、呆れた、ぼんやりした顏をしてゐました。彼は笑ひもしなくなりました。反對に兄一の方は何處までも強く、元氣でありました。

「萬歲！　萬歲！　やアまた來た。僕今度もつと大きな聲して怒鳴つてやらう。」

　銀座から上野の廣小路に出るまで、逢ふ程の提灯行列と彼との間には、斯うして盛んな歡呼の交換がありました。この瞬間の彼には、今日の祝祭、その裝飾、街々の群集の歡聲は、悉く自分の爲になされ、祝はれたのであるより以外に、何等の意味もないのでありました。

　彼は笑みくづれて悅びました。殊に評判の花電車がすれすれになつて通つた時には、彼の滿足は頂上に達しました。上野で遲い晩飯をすまして、淺草の大通りに向はうとした時でありました。曲りになつて未だ視野の外に在る彼方の電車道の方へ當つて、突然わーッと云ふ鯨波の聲が起りました。それと共に線路の左右に並立してゐた黑い人間の壁が急にざわめき立つたかと思ふと、曲り角にぱつとした強度の電光が放射しました。群集は歡聲をあげました。

「一郎坊やん、花電車よ。」

　きみの膝にぐつたりしてゐた小さい弟に、「動く面白いもの」の來た事を注意する間もなく、光の宮は現はれました。

「綺麗でせう？　ね！」

目の覺めたやうな瞳をして見守る邦夫の耳に斯う囁いた時、母親は、光明赫奕として……と云ふ謡曲「海人」の文句をふと思ひ出しました。その車の形容詞としては、恐らくこれ以上適當な文字はないでありませう。文一は今度は『萬歳!』も叫びませんでした。彼はその偉大な光力に威壓されたやうに、ぢつと息をこめて五臺の光の車の通り過ぎるのを見送りました。それが通り過ぎて了ふと、漸とほつとしたやうに、その時初めて、

『萬歳!』

と叫んで群集の合唱に加はりました。

曾代子は子供達——取りわけこんな騷を十分樂しめるだけに發達してゐる文一のためにした今日の企が、悉く彼を滿足させ、悦ばしてゐるのを、理由なしに自分達まで嬉しくなつて、他愛もなく笑はされてばかりゐましたが、同時に自分の大人としての理性や神經が、子供ほど無邪氣に、拘泥なく目前の樂しみに沒入し得ない事を、悲しまないではゐられませんでした。

馬車が群れの間に這入つて行く時、彼女はその中から自分達を的にして樣々の意味の言葉の發せられるのに氣付きました。それは提灯行列の團體が子供達に投げかけたやうな、罪のない歡呼ばかりではありませんでした。可なり非道い嘲罵と呪詛が交つてゐる事に心づきました。

『畜生!』

生れて今日までの彼女の身には、未だ誰からも受けた事のない、こんな種類の罵聲をさへたしかに聞いたのでありました。

『この中を馬車つて巫山戯てやがら。』

須田町の雜沓の間で、一人の勞働者らしい男の叫ぶのがはつきり耳に入つた時、曾代子は顔の赤くなるやうな氣がしました。彼等が斯かる呪の言葉を發する心理狀態はよく分る事だし、また自分がこんな乘物を用ゐたのは、珍らしい事をして子供達を悦ばせようとする無邪氣な好奇心と、彼等を怖ろしい混雜から救はうとしたに外ならないので、疚しい筈はないと思ひながら、矢張りいやな感じが伴ひました。彼女は祝祭の明るい灯の中から忌々しげな顔を振り向けた勞働者に向つて、

『すみません。』

とあやまりたいやうな氣持さへしました。曾代子はこの事から或る事をまで考へさせられました。それは二三時間の間にさへ感じさせられるこの心持を、絶えずあんな乘物を驅けさせてゐる貴人とか富豪とか云ふ人達に、一度も想ひ至る事がないだらうか、と云ふ事でありました。

家に歸り着いてその日の事を語り合つた時、曾代子はそれを良人に云ひ出しました。

『始終あんな感じを抱かせられるとしたら、たまらないでせうねえ?』

『そんな事を考へるのは平民だからだよ。貴族や金持なら平氣だらう。』

『神經が痲痺してるのねえ。』

『何あに、超越してるのさ。』

『超越も子供のやうに出來るといいけれど。』

一國の主權者の慶事を賀するために行はれた盛大な祝典も、畢竟するに子供たちに取つては彼等に面白い日を見せて呉れる一つのお祭に過ぎなかつたのでありました。それに附隨してゐる政治的の意味を、若し幾らかでも敎へ込まうとしたならば、——小學校に於てするやうな單なる注入知識でなく、若し觀念を根本的に分らせようとしたならば、——彼等の自由な心には樣々な疑問が生じたでありませう。而して日本國民の一人なる母親が、その國體及び政體上の遠慮から、說明に困難を來すやうな答辯が求

あられたかも知れません。何故ならば、彼等はまだ國家と云ふ自覺を持たないコズモポリタンでありますから。地上に現はれてから一人は六年と、他は三年にしかならない二個の生物に過ぎないのでありますから。

斯ういふ一個の人間として社會的生活を營むに當つて、最も密接な關係を持たなければならない政治的關心に於て、未だ全くまで自由思想家であつた彼等は、政治の外面的であると共に、内面的に深い交渉の存すべき宗教に對しても、極めて無拘束な考へ方ほか知りませんでした。その一個は、彼等の自由思想を[illegible]に顯はした政治上の或物に就いて[illegible]、たふ[illegible]――クリスマスに就て述べる[illegible]

[illegible]

けて見て悅んでゐる子供達の群、戸外の眞つ白い雪、橇、繪具を幾色となく使つて、成るたけ派手に、成るたけ目立つやうによく描かれてあるそれ等の繪畫は、子供の好奇心を牽き附けるに十分でありました。

トゥインクル、トゥインクル、クリスマス、
サンタ・クローズのお爺さん。
去年はお土産を有り難う。
今年も達者でおめで度う。

友一はこんな歌をすぐと覺えて、愉快さうに唄つて歩きました

チンクニ、チンクニ、カリチュニマチュ、
チャンタ・クヨチュのお爺ちやん。……

邦夫も後から續きました。[illegible]

[illegible]

でなきや[illegible]詰らないな。』

友一は母親に向つて不平を鳴らしました

『一體クリスマスつて何だか御存じ？』

曾代子は彼に說明する前に、聞いて見ようと思ひました。

『クリスト[illegible]日。ねえ、さうでせう？ 僕ちやんと知つてる。』

『おや、えらいわね。ぢやクリストつて何ですう？』

『西洋の[illegible]お父さんでせう。』

『何をした[illegible]お父さん[illegible]』

彼は[illegible]問はれて[illegible]考へました。[illegible]

[illegible]

はされる事が、六つの子供に取つては、彼の愛讀書の中の「綱綯ひのハサン」が魚の腹から出た一つの輝く石に依つて、忽ち百萬長者となつた以上の不思議な事でありませう。母親にはクリストをお伽話の一主人公と同樣の印象にはさせ度くないと思ふ心持がありました。と云つて、熱情を以て、

『神樣ですよ。』

と云ひ聞かせる程の信仰は自分にもありませんでした。けれども假令神樣だと説明したとしても、それは友一の頭の中では、耶蘇教での本統の意味の神樣とはならずして、異端の神樣となつたでありませう。何故なれば、現在の彼に於て神樣と云へば、ゼウスであり、アポロンであり、アルテミスであり、びつこのヘファイストスであり、白銀の甲冑を着けたアテナであり、その他の神話の神々でありましたから。

大空の太陽に天照大神とヘリオスの二つを矛盾なく聯想し得る彼、昔の印度の賢い太子の話も、エルサレムの厩の中の可愛らしい赤ん坊の話も、その儘話せば「千一夜」の幾夜かの物語と同樣の興味を持つより外知らない彼に就いて考へた時、それは彼一人のみの心境ではなくして、現代の日本の大部分の子供の精神的傾向――彼等の父母の社會に於ける、統一なき宗教觀念から影響された、特殊の考へ方である事を思はないではゐられませんでした。宗教的煩悶の最も激しい經驗を嘗めた偉人として、彼女等の耳に親しいトルストイなどに就いて見ても、彼の幼時に在つて、神と云へば直ちに耶蘇教の神であり、それ以外には如何なる神性も想像されなかつたでありませう。同時に後年の彼の苦悶精進、耶蘇教の信仰を度外視して單なる偏見としか見られない位狹義な、同時に、峻烈な、深刻な思想となつたのであります。トルストイに限らず凡て耶蘇教國に生れた程の者は、どんな大思想家でも耶蘇教の神から脱する事は出來ませんでした。思想に於てそれを脱し得た少數の人々さへ、感情の上では、襁褓のうちから滲みこんでゐるその一つの力を追ひ出す事はむつかしかつたでありませう。その點から云へば現代の日本の若い男女に依つて造られた家庭の中に生れた子供ほど、精神的に自由なものはないと思はれます。彼等の家は――友一の家も其の一例であります――耶蘇教のどの教會にも屬せず、佛壇もなければ、神棚もないのが、大部分であります。けれども當代子は、子供の心的生活の發達を防遏して淺薄な無神論者にしようとは夢にも思ひませんでした。若し、素直な、善き心を持つて育つて行く者が、神を見出さないと云ふ事は決してあり得ない筈だと信じました。何の神か分らず、又どんな形式に於てかも知れないが、併し生涯の或る時、屹度一つの神が彼に現はれるでありませう。最も理想的な事は今の特殊な、因はれない精神生活を善用して、自分の愛と、誠實と、謙讓の心を以て、新たな、自由な神の宮殿を、その心奥に創造することであります。若しそれがよく成されたならば、一見不幸なやうな時代的缺陷も――幼年時代に、固まつた一つの宗教及びその教義の約束を持たないと云ふ事も、――却つて偏見なしに、正しい神に結び付く因縁となるかも知れない。――彼女が斯んな事を考へた瞬間、或る聲が叫びました。

「それは皆んな空想だ。宗教と云ふものが元々偏見なしに存在し得られるものではない。偏見があればあるだけ、信仰も強められ高められるのではないか？　トルストイの偉大と深刻は、その偏見のためである事を思はないか？　殊に種子は搖籃の中の柔かい畑に――神の國から別れたばかりの沃地に――最も育ち易いのだ。而してその種蒔は大抵母親でなければならぬ。古

來てから、有名な宗教家、思想家に就いて考へて見よ。彼等に最も著しく宗教的感化を與へたものが、大僧正の說教であつたか？　又は母親が搖籃の上から唄つて呉れた單純な熱心な祈禱であつたか？　お前は自分にその種蒔となる資格がないから、餘計な理窟をこね廻すのだ。不信心者！」

　晉代子は自分がその聲の前に逃げも隱れもされぬ人間がある事を知つてゐました。而して彼女が時々失望した時に感ずる事――自分には子供を育てる資格さへ十分にないのだと云ふ事――を愧ぢないではゐられませんでした。

　いよ／＼クリスマスの日が迫つた時、彼女は子供達の望んでゐる事を父親に話して、外に出た序に何か彼等の好きさうな玩弄具を買つて來てやつて呉れるやうにと賴みました。父親はその日の歸りに明治屋に寄つて一番大形の靴下を一つと、その他珍らしい飾り物に這入つたクリスマス用の西洋菓子などを買つて來て呉れました。子供達は勿論非常に悅びました。取り分けても細工の大きな足を面白がりました。それは友一自身の足に比較してもゆつくり二倍もあり、邦夫の前では巨人の片足が現はれたかの如く偉大でありました。

『あら、こんな物が這入つてる！』

『どうれ、僕のにもそれあるよ！』

　兄弟は足の中から次々に現はれて來る玩弄具や、菓子などを見せ合つて面白がりました。出て來た物が偶然同じ物であつた時には、一層嬉しがつて騷ぎ立てました。

　母親は彼等と一緒になつてそれを悅んでやりながら、クリスマスの贈物と云ふ事に就いて簡單に說明しようとしました。

『西洋ではサンタ・クローズが持つて來て呉れるのよ。』

『えゝ、さうなのよ。』

『日本へは、そいぢや何故持つて來ないんでせう？』

『遠いからでせう。でもね、衛さんとこ見たいな信者の家は別なのよ。』

　母親と小さい息子たちとの間には斯んな問答がありました。兎に角それは西洋の習慣で、日本のお歲暮に當る贈物だと話して聞かされるのをぢつと耳傾けてゐた時、友一には少し心配になつて來た事がありました。

　友一は母親に尋ねて見ないではゐられませんでした。

『お母様、ぢや僕の紙鳶もう買つて下さらないの？　お歲暮に買つて上げるつて約束したんだもの。』

　その約束が若し今日の贈物のために帳消にされたのだとすれば、彼に取つては一大事でなければなりませんでした。母親は彼の本氣な心配顏を見て笑ひ出しました。

『どこの人だか知らないけれども、慾張り屋さんだことね。』

『だつて僕、紙鳶を買はなくちや詰らないもの。斯んな玩弄具なんか要らないや。』

　彼は今まで大騷してゐた父親からの贈物に、急にわざと冷淡な態度をして見せました。

『本統に要らない？』

『要らない。』

『然う？　ぢや、お母様が頂／＼わ。』

『要るんだ、要るんだ、要るんだ！』

　彼は母親の手許に飛び込んで行つて、彼女がからかひ半分に仕舞はうとしてゐた靴下をひつたくらうとしました。笑ひと叫と、而して甘えた訴への喜劇的な場面。――それはクリスマスの贈物とお歲暮の紙鳶とは別問題だと云ふ事が、彼女の口からはつきり證明せられた事に依つて、やつと納まりました。

『もう幾つ寢るとお正月？』

『三つ寝るといよ〳〵お正月よ。』

『さうすると僕七つになるのねえ？』

『あなたは七つ。邦坊ちやんは幾つでせう？』

『僕三つ。』

彼は小さい手をあげて、三本の指を示しました。

『さうぢやないわよ。邦ちやんは今三つだから今度四つになるんぢやないの。』

兄から斯う訂正されても、彼には三に一を加へる事に依つて四が生じると云ふ、數の原理が呑み込めませんでした。彼は矢張り頑固に主張しました。

『僕三つよ。』

暖かく火の起つた茶の間の火鉢を圍んで、こんな話が樂しげに取りかはされる頃には、約束の紙鳶は既に買はれて、部屋の壁に吊されてありました。昇り龍の一枚紙鳶は兄のであり、同じ繪の半枚紙鳶は弟のでありました。それはまだどちらも、二人の力には餘る程のものでありました。友一にしたところで、自分の手でその一枚紙鳶を高い空にうならせる事は覺束ないのですが、お正月の遊戯に必要な道具を持つてゐる事、それも人並に大きいものを持つてゐる事それ自身がたゞ滿足であり誇でありました。

母親の手に依つていつともなく整へられた彼等の新らしい着物、羽織、シャツ、ズボン下、足袋、履物の類は紙鳶と同じ意味に於て彼等の爲になされたお正月の準備でありました。彼等は新らしく買はれた小さい足袋、履物の一對を見てさへも、來つゝある珍らしい樂しみの日を聯想しないではゐられませんでした。彼等は愉快な、はしやいだ氣持で疊の青くなつた部屋部屋を飛び歩きました。菓子屋から運んで來た熨斗餅に歡聲をあげました。門松とお飾――藁細工の寶珠の玉のやうな下に、同じく藁の小さい瀧が二尺も流れて、それに伊勢海老だの、若布だの、橙だの、ごまめだのがくつ着いてゐる、本統に妙な面白いもの――の取り付けられた玄關を、わざ〳〵庭から外へ廻つて見に行きました。その他家の中のすべての方面に活動があり、裝飾があり、一寸した小道具、箒木、手桶、まな板、庖丁に至るまで新たにされてゐます。いつもは彼等の起す騷以外は、森閑として靜まり返つてゐる家の中の空氣が、何んとなくざわついて景氣立ち、何物かを迎へるために動いてゐる事が、彼等には最も銳敏に感ぜられました。而してその迎へられるものが「お正月」である事もよく分つてゐると同時に、その「お正月」が單に「時間」の概念であると云ふ事は到底考へられないのでありました。彼等に取つてはお正月は立派に人格化された一つのお客様でありました。

『そんなに兄弟喧嘩なんかしてるとお正月さまが參りませんよ。』

やゝもすれば大人達から斯んな警告を與へられるのも、彼等をして益々「お正月」を人格化させるに役立ちました。それが自分達と同樣の形體をしてゐるものかどうか、其處まで突き止めようとする思考の徹底は勿論なかつたけれども、兎に角何者かである事だけはたしかでありました。

お正月様は、何處から御座る。
ぶう〳〵山の下から。
羽根に羽子板、
重箱に餅を入れ、
山の芋を杖にして、
ひよつくり、ひよつくり御座る。

子供達は母親が幼い頃、今の彼等と同じやうな心持で故郷の家で唄つてゐたと云ふ、昔の童謠を教はつて唄ひました。

お正月様は、何處から御座る。
ぶう〳〵山の下から。

……………………

「早くお正月が來るといゝなあ！」

斯う云つて暮らして待つてゐたその日も、終に明日といふ時になりました。その晩の家は、頓て數時間の後に來るべき新らしい年を迎へるために整へたすべての準備を示し、何となく華かに晴れ〴〵しく見えました。部屋々々の灯も、不斷よりは多く且つ明るくともされて、床の間の飾への大きな白い餅、裏白、海老、黄橙の印象的な色を鮮明に照してゐました。その賑やかな光の中で、おせちの煮しめのついたお正月の食卓に並んだ時には、子供等の氣分はもう十分以上にお正月になつてゐました。

「きみ、今夜寝て、明日の朝目が覺めるともうあなたは七つよ。さうしていよ〳〵學校でせう。」

「行くよ。一人でも……少し遠いね。」

彼は市内の或る小學校にあがるために父の友達の家へ寄留といふ事になつてをり、學校までは彼の家から二町近くありました。

「行けるとも！　毎日歩いて行けるよ。」

彼は父母の愛を享けた數年の月日、何時とも今は自分の上に注がれてゐるのをはつきり感じると共に、何となく緊張した勇氣を示しました。實際またその決心も譃ではなかつたのであります。

お正月と共に色々嬉しい事が來るらしく感じられてゐる期待の中でも、その年から小學校に上るのだと云ふ事は、彼を悦ばせ、自分の成長と優越を自覺させる第一のものでありました。これまで巳之吉や、徳三さんや、順ちやん達の通學姿を見るにつけて、彼は自分の未だ經驗する事を許されない、學校生活を幾度夢想し、憧憬したでありませう。一緒に遊んでゐる時、彼等の前に何となく自分の幼稚とひけ目を感じさせられる一つの事は、彼等の皆んな持つてゐる經驗を自分だけがまだ持つてゐない——まだ學校に上らない——と云ふ事であるのを彼は知つてゐました。それ故、いよ〳〵一人前の小學生であり、自分が不斷眺めてゐる派手な色のソフト・ハットの代りに、金色の徽章の附いた校帽を戴けるのは、何よりの誇りでありました。

母親には彼の心持がよく分つてゐました。でも生れるとから今日まで一日も自分自らの養育と注意の外に置いた事のない子供——彼女の純粹な愛の的であり、或る意味に於ては、たゞ一人の弟子である彼を、見も知らぬ他人——どんな人柄を有ち、どんな教養を有してゐるかも知れない人——の手に渡すには忍びない一種の愛惜と不安がありました。

この稚い木の樹には、遺傳と周圍の感化、家庭の教養に依つて、様々な良き芽が一杯に吹き出してゐるのを母親は信じてゐます。けれども教師には、小學校教育には、一本々々の樹を尊重し、その芽に從つてそれ〴〵特殊な手當をして呉れる程の親切があるでせうか？　普通西式の庭園に於ける樹木のやうに、彼は他の若い立樹と並んで一様式の型を保たせられるために、金字塔形に、或は圓錐形に、又は正方形に、思ふやうに、無慙な刈りこみをされるでありませう。

母親はそれを思ふと怖ろしくなりました。

「一寸誰か生徒を極く少數にして、理想的な學校を建ててくれるとようござんすがねえ。」

彼女はその話になるとよく斯う云つたり、思つたりするのでありました。でも又一方の考へ方は彼女を非常に積極的にしました。

「本統に良い芽なら摘まれるものではない。芽は踏みにじられても、刈られても、その若い緑色の手を伸ばすであらう。少し位の暴力で、忽ち意氣地なく萎縮するやうなものなら、その儘無事に伸びたとしても、大したものにはなり

得ない筈だ。』

母親の心持には、獅子が兒獅子を谷底につき落して見るやうな、強い愛と覺悟がありました。

彼女はいよ〳〵入學期に達して、小さい制服なぞつけて、出かけて行く子供を聯想して見るだけでも、何んだか悲しくなるやうな氣がいたしました。家から家の外へ、近所の子供仲間から又學校生活の廣い仲間の間へ、だん〳〵と遠く〳〵擴がつて行く彼の世界に祝福あれ！

親達の斯んな思ひの前に、呑氣なのは獨り子供だけでありました。彼は明日に迫るお正月の樂しみと入學の期待に滿悅して、いつもより、より元氣よく活動し、且つ饒舌りました。

『ねえ、お母樣。邦坊ちやんはいつからお學校へ上るの？』

『邦坊ちやんはまだ〳〵。來年でやつと四つですもの。』

『ぢや幼稚園に入れてやるといゝわ。僕毎日一緒に連れてつてあげるから、ね。』

彼は弟を連れて、電車に乘せてやつて、而して自分でお金入からおあしを出し、切符を買つてやる事——自分達の場合に親達がして呉れるやう！——の順序を考へて、兄としての自分の優越と、如何にそれが親切な行爲であるかを思つて見て、愉快で堪りませんでした。

『險呑な附添だらうねえ。』

それを聞いて一番に笑ひ出したのは父親でありました。母親は邦夫に尋ねました。

『邦坊ちやん、お兄ちやまと御一緒にお學校へあがつて？』

『僕、お學校いや！』

彼は一言の下に拒絶しました。

『何故お學校いやなの。』

『僕動物園行くの。』

『なる程ねえ。』

父親が評してこんにやく問答と云つてゐる小さい邦夫との會話は、いつも斯うして一座の笑ひ聲と愛の感情の間に終るのでありました。

『いつまでも斯うして置きたい——ねえ、邦坊ちやんだけはもう大きくならないで頂戴よ、ね。』

曾代子は彼を抱いて頬ずりしました。この兒の顔を見てゐると、幾度もの苦痛を忍んで、小さい子供をあとから〳〵と産む事の出來る母親の、愛情と勇氣がよく分るやうな氣がしました。幾らこの純な可愛い境地に置いておき度いと願つても、いつまで三つにしておくわけにも行かないのでありますから。現に數時間の内に又一つの年を加ふべく、新たな時の流が迫りつつあります。

『さあ、さあ、早くお寢みなさい。お正月さまがもう染井橋まで來てますよ。』

彼等は斯う云はれて素直にそれを信じました。

『僕あした一番に起きるんだ。』

友一は誰よりも先に、その待ちつゝあるものに逢はなければならないと思ふのでありました。

新らしい寢衣に、新らしいシーツ。邦夫の枕許には程よく沸いた牛乳の一瓶も用意されてありました。

『お休みなさい！』

『お休みなちやい！』

兄弟は勢ひよく床の中にもぐり込みました。兄に取つては、可なり多事であつたこの一年の最後の時間を、平和に、健やかに、元氣のよい鼾聲の裡に送るべく——大きな宇宙の力に繋がる二つの小さい靈魂は、斯うして貝殻の様に並んで、新たな「時」の打ち寄する汀に眠りました。

（大正五年一月）

母親の通信

お母様――

この間、お兄様からのお手紙に、お母様が子供達のことを云ひ暮らしていらつしやる、赤さんがさぞ大きくなつただらうと懐かしがつていらつしやる、と書いてあつたのを見ました時、私は一度ゆつくり、小さい三人の此頃の生活を出來るだけ委しく書いてお目にかけようと思ひ立ちました。ところで、私はずつと以前からこの新聞へ何か書いて送るといふ約束がしてありましたので、斯う云ふ事を思ひつきました。その通信をこの新聞――九州の多くの家庭に購讀されてゐる新聞――の紙上に載せるならば、お母様の毎日のおたのしみになるばかりでなく、同時に私の長い氣懸りな文債をも果たすことが出來るわけだと。

これから彼等は毎日お母様の前に現はれることでせう。彼等の血色のよい、圓い頰を御覧下さい。此冬は殊に健康がよろしいのです。あのふざけ方を御覧下さい。それから又あのおしやべりを。泣いたり、笑つたり、轉がつたり、取つ組み合をしたり、どんな大騒を始めるか知れません。けれども私は信じます。彼等を愛するものに取つては、彼等の泣くことは彼等の笑ふ事に劣らないほど可愛い見物であり、彼等の涙は彼等の微笑と同様にいたいけな魅力である事を。ですから私は、おとなになさいましとか、騒がないでいらつしやい、とか云ふ訓戒や注意なしに自然の儘、飛んだり、はねたりしてゐる儘の彼等をお送りしようと思ひます。けれども、彼等が今日までにいつとなしに兩親から與へられた習慣、性癖、趣味――お母様、早いものではございませんか。友一はもう十になります。邦夫はもう七つです。生れて九ケ月にしかならない赤さんだけは、この心配からは遠いのですが――お母様が子供たちにあり度いと望んでいらつしやるそれと、全然一致してゐるか、どうか、たゞそれだけを怖れてをります。それ以外は、私はまあ大體から云つて安心してをります。彼等は、上の二人とも、正直で、善良で、健康でございますから。顔だつてさう醜くはございませんわ。

ねえ、お母様、私の子供たちはみんなよい子供ではございませんか。あの可愛らしさを見てやつて下さい！

と叫び度いのでございます。殊に赤さんの顔を見てゐると、斯う云ふ感情が劇しく起ります。

この赤さんを見て下さい。此の美しい、可愛い顔を褒めて下さい！

母親のこの強情は誰にも拒まるべきものではないやうな氣がいたします。私が赤さんを抱いてゐる時、その小さい人のことを挨拶に入れることなしに私に話し掛ける人があれば、その人は少くともその一瞬間はきつと私の信用を失ひます。

『この人は本統に愛すると云ふことを知らない人だ。』と。

全く子供を愛さないでものを愛すると云ふ事は決して出來ません。同時にまた愛すると云ふ事は眞にどう云ふものかを教へる最もよい教師は、子供以外には存在しないもののやうに思はれます。お母様、それ故、この子供たちがあなた

の両陛下に[illegible]、一般公衆の前に現はれる方は、決して[illegible]ではなからう、と信じます。人々を喜ばす感じある事、見る事、する事、その總すべての生活のうちに、人間が[illegible]から[illegible]つたには知らないが、この地上の長い旅行の間に見失つたり、落したりした多くのよい物を、再び見出す性[illegible]を有つ[illegible]だらう、と思ふからでございます。

今丁度お乳の時間になつて、赤さんは彼女の蒼いのふちの搖籃の中に、小躍りしながら私に近づいて參りました。お乳がすみましたらば、先づこの一番小さい人のことから書き始めませう。——

赤さんのことを話すためには、赤さんの善いいゝのうやの事から話さなければなりません。御存じの通り、上の子供は二人とも子守の手にかけた事はありませんでした。けれども小さいものが三人となつては、一人きりの女中ではとても手が廻りきれないので、今一人の使用人がどうしても必要となつて來ました。それは主に赤さんに關してふえた仕事を充たす爲に外ならなかつたので、私はたゞ漫然と子守娘でも傭へばよいと云ふ氣になつて居ました。出入の者の世話で十四になる小さい娘が傭はれて來ました。これまで一二軒子守奉公に上つてゐたこともあるとかで、幾らか小綺麗なだけで、さう悧巧でもない娘でありました。

よい[illegible]であつた。これで私も幾らか手がすけ[illegible]

私はその娘の、洗ひざらしの浴衣を着た痩せた背中に、赤さんを負んぶさしてやりながら、久しく思ふばかりで手をつける餘裕のなかつた仕事の方へ思を走せました。でも私の滿足はその瞬間だけでした。半日もたゝないうちに、私は自分の計畫の非常に粗漏であつたのを後悔しなければならなくなりました。

丁度暑中休暇で毎日うちにゐた兄のために、朝から活氣づいて、面白く遊んでゐた兄弟の遊が、この新來の見物人のために、——彼女は、機會のある毎にその地位を轉じようとしました。見物人から遊び手の方へ。後ではずつと大膽になつて、その支配者の地位にさへ、——意外な妙なものになつて行くのを私は見遁すことが出來ませんでした。彼女は兄弟に取つて譯の分らない振舞をしたり、禁ぜられてゐる下等な言葉を使つたり、正しくない狡い遊び方をしたりして、見る間に[illegible]と下等の世[illegible]しました。

[illegible]

またおもちやを[illegible]、彼女は勝手にいぢり廻すことに就いて私へ[illegible]來ました。彼は[illegible]と共同で[illegible]一間を有つてゐます。其處に、[illegible]入つた箇所で、珍らしい玩具や、或[illegible]など、すべて小さい子守娘にとつて[illegible]ゐるました。[illegible]ない家に[illegible]て、さう云ふものに對する欲望を[illegible]られて居た彼女の目に、餘りに恐ろしいもの[illegible]ぎたと云ふ事が、痛く私を打ちました。同時に、私は、[illegible]しにその部屋へ立入ることとか、ま[illegible]の玩具に手を觸れてはならぬとか、嚴しい禁令を彼女に課するには到底忍びませんでした。それは、[illegible]の三つ四つしか年の違はない子供と子供の間に、主人と奴隷の道德を想定する事でありましたから。と云つて彼女を二人の兄弟と安心して遊ばせられるやうな友達に作りあげるには、私はたしかに自分の娘一人を育てる位の愛と努力を費さなければならなかつたでありませう。それも成功しなかつたかも知れません。新たに作るのではなくて、作り直すのですから。

斯う云ふ意外な故障は暫く措くとしても、彼女の脊幅にしては割合に大きな赤さんが、窮屈らしく縛りつけられてゐるのを見るのは、私にはとても堪へられさうになくなりました。彼女は此の貴重な荷物をしよつた儘、何處へ飛び出すか知れたものではありません。何處かの涼しい木蔭で愉快な鬼ごつこの一つもするためには、背負つてゐるものをばそこいらの道ばたへ投げ出さないとも限らないでせう。

私は急に怖ろしくなつて來ました。

明けの日、お目見えの結果を見送つて來た世話人に向つて、私はたゞ、赤さんの守にしては彼女が餘り小さ過ぎるから、と云ふのを理由として、一緒に連れて歸つて貰ふ事にしました。この事を云ひ聞かされた彼女が、明らかに失望の色を見せると共に、拒絶された者の不面目を感じるもののやうに急に小さくなつてゐるのを見ると、私は何だか非常に殘酷なことをしたやうな氣がして、せめて最後に出來るだけのことをして、彼女を喜ばしてやり度いと思ひました。小さい兒童は私の勸めに從つて、彼女の目を引きさうな美しい布の附いた雜誌を二冊づつ彼女に贈りました。私は少しばかりの金と、一包の菓子をそれに添へました。それを包まうとして彼女の擴げた風呂敷の中には、寢卷や手拭や小さい櫛などと一緒に、赤や青の折紙が少しと、をかしな安の人形が丁寧にしまつてありました。

「おもちやを持つて歩く小さい奉公人。」

と云ふ姿が、私の痛々しい同情を呼び起しました。どんな理由からであるにもせよ、彼女がその儘落ち着くことが出來ないで、まだ知らない家の、知らない主人の手に送り出されることの不幸は、私の負ふべき責任でもあるやうな氣がしました。

私は彼女を臺所口で見送つた後、私の感情をのぶに洩らしました。而してものをよく考慮してかゝらなかつた後悔と失望を話して、今度は雇ふならば一人前の女中でなければならないと云ひました。それを聞くとのぶは彼女の希望を述べました。自分が赤さん附になり度いと云ふのでした。

「さうして呉れゝば何よりだけれども。だつて大丈夫かい。中途からお守さんはいやになりましたなんて辭職されては困るよ。」

「そんなことは決してございません。私は御飯焚よりも、赤さんのお守が致し度いのでございますから。」

斯うして、下働の女中がやがて見つかると同時に、のぶはすつかり赤さんの世話を自分の手一つに引き受けたのでした。この新らしい契約が私をどんなに安心させ、またどんなに悦ばしたかは、とても想像がおつきにならないと思はれます。それ程、私はこの三四年の間に見た彼女の善良と、生れながらの純眞な心にすつかり傾倒してゐるのでございます。私は彼女が四年前に初めて私たちの家に來た以來、今日まで彼女の怒つた顏を一度だつて見たことがありません。またその言葉、その行動に、一點の不正直をも、虚僞をも認めることが出來ませんでした。如何なる瞬間にも、彼女は常に素良で、快活で、素朴そのものの如くでありました。彼女はもう二十三でありますが、それにも小柄で、最後女の色白な、圓い顏をした[illegible]は、誰にも彼女の本當の年を云ひ當てさせる事が出來ない程若く、無邪氣に見えます。強ひて難を求めるならば、[illegible]など云ふ文字が彼女には得る位に優しい彼女の身體つきが、どんな多くの雜用にも堪へられる頑丈さと云ふ下女の必要條件を缺いでゐることと、同じ原因から怖ろし

く寢坊だと云ふ事だけでありませう。併し私は年に一度や二度病氣で寢る位の事や、朝二三十分おそく目覺める位の事は、彼女の優れた性質のためには悦んで我慢します。全く犢のやうな丈夫な下女と云ふものは、幾らかきつと不快な、尖々しい粗野と横着を有つてゐるやうに思はれます。のぶはさういふ連中に比較すれば、殆んどレディと云つてもよい程、しとやかで、鷹揚です。それがまた彼女には少しの氣取りでも、不自然でもない事は、彼女の明けつ放しな、子供々々した笑ひ聲を聞けばすぐと分ります。

彼女は全くよく笑ひます。さうしてその笑の仲間はきつと子供たちであり、その笑の對象物は、子供たちのちよつとした可愛い振舞とか、滑稽な話とか、でなければ、それに關聯するものであります。彼女の中にはまだ七つか八つの子供がゐるやうです。さうしてその笑は、お追從でもなければ、作り笑でもなく、彼女の中の子供が、子供同士の共鳴、同じ興味、同じ感激で、その儘飛び出して、大聲をあげて笑ふかのやうでありました。斯うして彼女と子供たちのゐるところには、必ずこの大陽氣な哄笑で、愉快な樂しい雰圍氣が作り出されるのでありました。勿論彼女は彼等の大好きなのういゝやであります。而して彼等の面白い遊や、またおどけた身振や、その他ポンチ人形の三角帽子が落つこちたとか、綿細工の犬と猫が角力を取つて、犬が負けたとか云ふやうな事が、彼女のからからした笑ひ聲の承認に依つて、いよ〳〵、素晴らしく面白い、滑稽な大事件となつて行くのであります。

彼女の渾名を一つ洩らしませう。それは兄弟の子供に依つてつけられたもので海月と云ふのです。彼女の前髪には後れ毛があつて、子供達と大騒をして遊んだ後などには、その後れ毛が海月の足みたいに彼女の白い、圓い額に垂れ下る事から生じた渾名でありました。彼女に對す、私の偏愛は、或る時、彼女を非常に美しい娘であるかのやうにさへ感じさせます。殊にその前髪の褐色の柔かい後れ毛に取り捲かれた、子供たちの所謂「海月ののうや」の額には、ヴァン・ダイクの筆に殘つてゐるチャールズ一世の皇后の額を聯想させる或る物があります。

斯う話して來ますと彼女がどんなに善良でまたどんなに快活で、且つ相當に美しい娘であるかおわかりだらうと思ひます。けれども彼女の身の上は大變不幸なのです。兩親もなければ、兄弟や姉妹と云ふやうなものも殆んどないのです。越後の田舍町の或る小さい孤兒院で育つたと云ふだけで、もうどんなに不仕合せなものかが、想像されることと信じます。いゝえ、その話を委しくお話したならば――いつかまたその機會がきつとあると信じますが――それが想像以上のものであつたのにびつくりなさるでせう。私は思ひます、それほど氣の毒な境遇に成長した人であるならば、たとひその人がどんなに陰鬱で、どんなにひがんでゐるにもせよ、またどんなに歪んだ人生の見方をしてゐるにもせよ、その不幸を思ひやる事に依つて容易に許されなければならない、と。ところで、彼女の場合はすつかり反對であります。彼女はその不幸の迹を額にも心にも微塵も留めてゐません。生れながらに惠まれた、彼女の透明な美しい心の上には、人爲的の不幸や災難の如きものは、輕い塵埃かなぞのやうに、その原質を損じる力なしに、たゞ表面に觸れたと云ふだけで、その儘滑り落ちて行つたもののやうな氣がします。どうか、これから先の彼女に、その不幸を償ふ程の仕合せがありますやうに！

赤さんはもう確かに彼女に強い偏愛を示します。どんな場合にでも彼女の姿を認めるや否や

や、まだ言葉の形を取り得ないをかしな叫び聲で呼びかけ、躍り上り、全身をさし出します。彼女の手と御飯焚のつねやの手とは、直に選擇されます。

「さあ、赤さん、電車ごうごう、へ乗りませう。」

斯う云つて二人が後向いて並べた背中にも、赤さんは鋭敏に自分のおんぶする背中を見出します。

「おゝ、お悧巧な赤さん。」

彼女は小さい彼を載せながら、一しきりそこらぢうを飛び歩きます。彼女はどんなに嬉しいか分らないのです。斯うしてこの小さい主人を愛する事、また彼から愛せられる事は、自分の特權のやうに思つてゐます。それと共に彼女は彼女の女らしい趣味から、赤さんの身のまはりについていろ〳〵な註文やら不平やらを持ち出して參ります。――もつときれいな帽子を冠せ度いとか、油屋さんがもう二三枚は欲しいとか、こんな着物はあんまりだとか。

「赤さんは何んでもお兄さま方のお古ばかりでお可哀想でございますね。」

これは彼女が毎日に繰り返す嘆聲であります。ですから赤さんは彼女の丹精でいつもおしやれがさしてあります。

さうですね。此處に彼の小さい肖像をスケッチして見ませう。

赤さんは、この頃はメリンス友禪のお胴着を重ねた派手な銘仙を着てゐます。――これも矢張りお兄さまのおさがりです。――おちやんちやんは大島絣です。――斷つておきますが、これはおさがりではありません。T家の叔母さまからの贈物です。――その上にタオル地の、緑と赤で格子縞になつた四角な涎掛をかけてゐます。帽子は毛絲で編んだ赤い三角帽子です。――これが彼の不斷着の中で一番よく似合ふ服裝です。その帽子の下に在る健康な、いつもよく笑つてゐる、而して幾らかおでこの、目のくる〳〵した圓い顏を想像して下さい。またその左右の袖から現はれてゐる、ぽちや〳〵した手頸と、直徑一寸二三分のうす桃色の掌を想像して下さい。それからまたその兩手の指の先についてゐる十の小さい爪をも。この手は、もう可なりいたづらです。障子を破く事も知つてをれば、兄さんたちの大事なおもちやをかき廻すことをも知つてをります。

「ほら、赤さんが來たよ。」

と叫ぶ聲は、そこいらに大事な玩具を擴げて遊んでゐる二人の兄に取つては、暴徒の襲來を意味するに外ならないものなのです。あらゆる警戒と防備で、この小つぽけな、併し怖ろしい一つの武器――それは彼に泣かれる事であります。あの全力的な悲しみの叫び聲には、流石の兄さんたちも急に降參してしまひます。あんな小さなものが、あんな大きな聲を出して、あんな涙を流して泣くと云ふことは彼等の正直な優しい心の到底見てゐられないものです。――を有つた敵を擊退しようといたします。結句の、い、うやの仲裁と嘆願で、赤さんの借り出すものは、その中での一番冷遇されてゐる、一番貧弱な、こはれかけの馬か何かの一つに極まつてゐます。

こんな場合は別として、二人の兄弟たちはもう十分この小さいものを愛する事を知つてをり、またそれを悅ばす方法に慣れてをります

「赤さん、赤さん、赤さん。」

彼等は彼等の有つてゐる一番優しい聲で呼びかけ、一番親しい笑顔で笑ひかけます。彼の賞讃を得るためには、彼等は踊り手にもなれば、また音樂者にもなるし、遂には即興詩人にさへなります。

赤さん、赤さん、

御覧なさい。

にやあにやを御覽なさい。
わん／＼を御覽なさい。
にやあにやも赤さんを見てゐます。
わん／＼も赤さんを見てゐます。
ぼつぼも赤さんを見てゐます。
　狆犬が踊り手になる時には、きつと踏臺が持ち出されます。――赤さんは大概おんぶか、抱つこで見物してゐるのですから、見上げて踊るやうになる不便を避けるために――兩足がやつと乘つかるだけの、その奇妙な小さい舞臺の上でちい兄さんがどんなにをかしな踊ををどることでせう。もし滑つて落つこちれば、つまり、それは一層面白い踊になるといふわけです。斯うして彼等のいろ／＼な努力も、赤さんの滿足な笑顏と、はしやいだ悦びの叫び聲で、十分報いられるのでありました。
　けれども、二人がこれ程に可愛がる事を知つてゐる赤さんでも、彼等の他の種類のペット――三匹の猫と二匹の犬――に比較して、どちらが彼等に大事なものであるかを尋ねるならば、彼等は勿論言下に猫を擧げ、若しくは犬を擧げるでありませう。赤ん坊がどんな面白い見物であるにしても、要するにその外觀は何等の珍らしい點もなければ、變つたことも見出されない、自分たちの小形な模型に過ぎないのでありますから。
　それに比較すると彼等の猫や犬はどれだけ特殊な、興味ある生物だか知れません。様々な美しい斑紋のある、滑らかな彼等の外套が、先づ十分嘆美に値します。どんな高いところから飛び下りても、またどんな早足で駈け出しても、決して音のしない、その四つの奇妙な球なりの足も、また何と云ふ不思議なものでせう。殊にその眼は彼等に取つては驚異そのものに外ならないのであります。兄弟はめい／＼一匹づつをその膝にかゝへ込んで、動物學者の細心と詩人の感激を以ていつまでもその二つの生きてゐる球を見詰めます。時に依つてそれはいろいろなものに聯想されます。青い海と、黄色い陸地と、黒い山とがごつちやに描かれてある、小さい地球儀のやうに想像される時もあれば、微細な青い蟲と黄色い蟲と黒い蟲とが無數に集まつてゐる不思議な巣のやうに見える時もありました。時刻に依つて大きくなつたり、小さくなつたりする瞳を、二人は猫のお時計と呼んでゐます。
『今、幾時？』
『猫のお時計を御覽なさい。』
中央の黒い玉が圓周から三分位のところまで擴がつてゐるのを見出した時が、彼等に一番嬉しい時でありました。それにお八つの時間の近い事を示すものでありましたから。全く、何と云ふ重寶なお時計でせう。
　犬に於ては、彼等はまた猫とは違つた種類のいろ／＼な興味を呼び起されます。彼等はその家畜の活潑な動作の中に強い勇氣を暗示されます。その威嚴のある、鋭い吠え聲は、殊に愉快であります。犬が地べたをころがり廻るのを見てゐると、彼等も一緒に轉がり廻りたくなります。吠えてゐると一緒に吠えたくなります。實際彼等はそれを行ひます。犬と同じに大きく口を開けて、ワン、ワン、ワンと全力的に吠えて見ます。而して舌をだらりと出して、喘ぐ眞似もします。その單純な心持に於て、またその正直に於て、向う見ずな空騷に於て、彼等は人間同士よりもその屋外の友達の方に、何程多くの共鳴と傾倒を有つて居るか分りません。
　同じ心持から、虎とか、ライオンとか、熊とか、象とかのやうな猛獸は、彼等には既に一種の英雄であります。同時に、彼等に對する子供の感情は、愛と云ふよりは、明らかに崇拜であり、興味から轉じて敬虔な憧憬になつてゐる

場合が屡々見出されます。最近の或る晩餐後のことでありました、お父樣は左右に坐つてゐた小さい兄弟を顧みて、斯う云ふ問を發しました。

「お前たちは大きくなつたなら何になる積りだね？」

兄弟は顔を見合せてにやりとしたまゝ默つてゐました。

「邦夫は何になる？」

「僕、何になるか分らない。」

七つの彼は、直ちに斯う答へて、非常に困つたやうな、間の悪いやうな顔をしました。父親のこの質問には理由があつたのでした。この頃Ｈ[illegible]の或る小學校で、同じ質問が生徒たちに對して發せられたところが、男生徒の一年生から三年生までは殆んどすべてが軍人志望であつた。五年生、六年生となると、親の跡を繼いで商人になると云ふのが多かつた。それに比べると女生徒の希望は非常に漠然としたものでえらい人になり度いとか、何でもいゝ事の分る人になり度いとか答へました。中には[illegible]になり度いと云ふ希望を述べた者もありました。――彼女の家は[illegible]でありました。[illegible]は[illegible]にあるけれども、好きな[illegible]がないからと云ふ理由で。

お父さまのこのお話は二人を笑はせました。而してその問題に對して熱心な注意を引起させました。併し軍人志望と云ふ彼等の心持は二人には到底同感されないものでありました。

「僕、軍人なんかいやだ、殺されるんだもの。」

好一は直ちに、明白に斯う反對しました。邦夫は矢張り默つてにや／＼してゐました。――焼芋屋も悪くはない、とでも考へてゐたのかも知れません。

『それぢや、好一は動物が好きだから動物學者になつたらどうだ。それとも動物園の技師の方がいゝかも知れないな。毎日好きな、いろんな動物が見てゐられるから。』

父親のこの勸告は意外な答辯を引出しました。彼は嚴粛に見える程の眞面目さを以て答へました。

『技師なんていやな事た。動物なら、なつてもいゝけれど。』

彼には一つの理想國があります。それは人間の一人もゐない動物や鳥類だけの世界であります。其處で彼は彼等のために[illegible]や黄金で立派な家を建てゝ與へるでありませう。而してあらゆる旨い食物と飲料を與へるでありませう。

さうすればお互ひ同士決して噛みあつたり、殺し合つたりしないですむから。其處は永久に平和で、永久に自由で、あるものはたゞ動物同士の無邪氣な快活なふざけか、でなければ勇ましい、敏捷な競技か、或は樂しい、智慧と趣味に充ちた集會であります。其處では小さい兎が獅子とじやれてをり、熊があの大きな掌で小山羊のために一かたまりのお砂糖を取つてやつたりします。象のをぢさんのところへは、お猿だの、狐だの、栗鼠だのが集まつて、彼の滑稽な昔話に、樂しさうな笑ひ聲をあげてをります。そこへ小鳥の音樂隊が賑やかに來ます。[illegible]の駝鳥が翼をふくらまして大[illegible]どりで得意に立つて歩きます。[illegible]と孔雀が踊り子です。彼にはきつとこんな世界があるやうな氣がします。何處か山の奥か、野原の末か、空の果か、――なければ高い雲の中にでも隠れてゐるやうに思はれて仕方がないのであります。これは彼の[illegible]チヨコレートや菓子類が夢と共に、常に彼の念頭を去らぬ樂しい憧憬であります。而て、小さいドン・キホーテが[illegible]と[illegible]と戦ふ理想の具體化であります。

同時にイスパニアのラ・マンチャの騎士が待ねてゐた[illegible]の役を勤めるものは、[illegible]

の邦夫であります。兄の理想と興味に直に共鳴する點に於て、また彼を絶對に信用してゐる點に於て、どんなに不平を云ひながらも、泣かされながらも、決して彼から離れられない點に於て、彼は何處までもサンチョ・パンサであります。否、物語の中の從僕の、人のよい狡猾と、露骨な間の拔けた打算を缺いてゐるだけ、一層好都合なサンチョでありませう。

斯うして結びつけられた二人の間には、二人だけにしか覗くことを許されない樂しい祕密の世界があります。彼等はその理想國を、いつでも好きな時に現實に創造することが出來ます。森の奥や、雲の中に想像したものが、一瞬間に容易に彼等の目の前に持ち來されるのであります。遊戯用のテーブルを擴ぐれば、忽ち廣漠たる原野が現はれます。その上に撒き散らされた紙細工の動物は、彼等の空想通りの動作を示し、彼等が話して貰ひ度いと思ふことを、雄辯に彼等に話してくれます。

『其處は海だ。』

斯うたつた一言云つて指させば、青い疊が波のだぶ〳〵打つ大海になるでせう。サンチョ・パンサは魚になつてその上を泳ぎ廻ります。彼等は壁の笑ひ聲を聞くことも出來ます。柱は常に注意深い見物人であります。庭の樹木は庭から話しかけます。茶棚の上の浮かれた茶壺の踊は、二人を笑ひころげさせます。――いよいよ調子づいて、兄が箒一本をかついで駈けて來れば、弟はハタキを持つて飛び出します。それで船辨慶のキリも演ずれば、一の谷の合戰にもなるし、またヘクトルとアキレウスの一騎打にさへなります。アキレウスの九枚の黄金の兜は、そこいらのパンの空袋かなんかで十分でありました。村の床屋の眞鍮の金盥が、マンブリノの黄金の兜となつた、丁度それと同じやうに。

彼等の斯う云ふ超自然的、超理性的の世界に於て、人間の大人と云ふものがどんなに不似合な立ち入り難い外國人であるかは容易に想像されるでありませう。どんな優しい母親であつても、親切な保姆であつても、その夢幻的な空氣の中に絶えず完全に溶け合ふと云ふ點に於ては、彼等の愛する犬猫、または小鳥の有する半分の調和をも有つことは非常な困難であります。御覽なさい。彼等の間に一匹の猫が坐つてゐると云ふこと、彼等の前を一匹の犬が駈けてゐると云ふこと、また彼等の窓に小鳥の籠がかかつてゐると云ふことのために、彼等は彼等の子供特有の光と可愛らしさを幾倍するか知れません。即ち、彼等の小さい心と、小さい生物の心が、一點の無理もない、自然な愛と善良とに依つて繋がれてゐる調和の形であるがために。

單に犬や猫に限らず、一般の動物に對する深い愛が、二人の兄弟の著しい傾向となつてゐるらしいことを見るのは、私としては大變に嬉しいことであります。

二人はすべての小動物に興味を持ちます。動物園に於ける大小種々の動物はもとより、庭に來る雀、蝶、とんぼ、蟬、または毛蟲、みゝず、蜂、蟻、蚤のやうなものまで決して虐殺いたしません。どんな微細な生命であるにもせよ、その生命の尊さを無意識に自覺してゐるかのやうに。――たゞ毛蟲だけは例外でありますが、それは寧ろ私の責任であります。私が若しその醜い姿に怖れないで、それを殺すことを止めたならば、二人は決して毛蟲とても殺すことをばしなかつたでありませうから。――夏になると、兄は蟻のために座敷の縁の下に砂糖を蒔きます。而して女中に賴みます、蟻にお砂糖がやつてあるのだからあそこの縁の下だけは掃かないやうに、と。而して彼自身は縁側へ長く寢そ

べりながら、その黒い勤勉な小動物の仕事を熱心に注意します。その瞬間、彼はもう蟻の王國に在るのでした。彼の空想の目は日本橋の河岸に並んでゐるやうな、澤山な、大きな蟻の倉庫を見ます。代々木の觀兵式に見るやうな整然たる蟻の軍勢を見ます。最後に怠けものの蟻が雪の中を食物に困つて貰ひに來ると、

「お前さんは、夏の間ぢう、のんきに歌ばかしうたつて遊んでゐたのぢやありませんか?……」

と云ふ名高いせりふで、その勝氣な、小さいおかみさんから極めつけられる劇的な場面までも。

弟と蚤の話は、また奇妙なものであります。彼はひどい蚤まけをするたちで、かゆいと云ひ出すと背中ぢう眞つ赤になる程かいて貰はなければ承知しない癖に、着物を脱かして探さうとすると、彼はその下許で大きな聲で叫びます。

「お逃げなさい。お逃げなさい。のうやに取られるからお逃げなさい。」

近くの電車通りに在る一軒の蛇屋を見舞ふことも、彼等の著しい[illegible]癖を證明するものでありませう。

彼等はその店の、蛇を入れてある長方形の箱の硝子戸に額を押しあてて、熱心な觀察に耽ります。あらゆる種類の蛇の、あらゆり形體と運動は、殆んどうつとりすると云ふ形容詞を用ゐてもよい位まで彼等を引き付けます。嚙まれゝば怖いかも知れないけれども、見るだけなら何んにも怖くはないものだ、と云ふのが二人の一致した意見でありました。邦夫は申します。

「可愛い顏をしてるなあ!」

彼は蛇をさへ可愛いものの中に加へてゐます。

彼等はまた自分たちの生れた年廻りから、その年を象徴してゐる動物に對して不思議な愛着心を有つてゐます。友一がどの動物よりも犬に特殊な親しみと愛を示すのは、戌の年に生れた爲であり、邦夫は同じ理由から彼自身と牛とは切り離すことの出來ない深い宿命的の因緣に依つて繫がれてゐると信じ込んでゐます。これは先にゐた彼等の仲よしのきみやの感化で、——東京生れのきみやは、何につけても年廻りとか、星とかを云つてゐましたので、——それが彼等の動物に對する好奇心と結びついて、斯んな特殊な思想を彼等に抱かせるやうになつたもののやうに思はれます。全く、彼等が自分自身を表象してゐると信じてゐる動物に對する態度は、そのものの主人であり、保護者であり、友達であると共に、そのものの弟子であり、下僕であり、——否、そのもの自身でもあるかの如く見えます。

「犬君!」

斯う呼ばれる時の「犬君」の滿足な笑ひ顏を想像して下さい。

「ネバ牛君!」

牛君は、兄の犬君に比較すると、大分粘液質らしい徴候を表はしてゐるので、その渾名の上にネバといふ性質形容詞を附せられて呼ばれてゐるのです。斯うして犬と牛を以て任じてゐる二人は、他の人達の表象の動物をも見出すのに非常な熱心を有つてゐます。お父様の年廻りが羊であることは、お父様が羊であることであり、私が酉であることは、お母様が鷄であることであり、[illegible]さんの[illegible]さんが午であることは、耀三さんが小馬であることであります。お父様より一廻り下の羊であるのうやは、

「お父様のお仲間だ。」

とか、また、

「午と午だから兄妹だ。」

とか云つて、彼等から特別の祝賀を受けます。同時に下働の[illegible]るべきさ

つかひでありました。彼女は巳の年生れである爲に。

彼等は家庭の人々のみでは滿足されませんでした。彼等はあらゆる人に就いてその奇妙な研究を續けようとしました。少くとも、彼等が同席することを許された程の親しいをぢ樣とをば樣たちは、悉く彼等の材料に供されました。

「をば樣は何の年なの？」

斯う云ふ突然の質問に、幾人の若いをば樣たちがどんなにびつくりさせられたことでせう。この勇敢な質問者は大抵、弟の方でありました。兄は幾らかはにかみ屋で、よその人の前では弟ほど大膽になれないのです。でも彼の沈默の中には非常な熱心と好奇心が働いてゐるのでした。彼は周到な注意を以てその人の顏から、形から、若しくば聲から、身振から、或るものを探し出さうと骨折ります。——即ち、その人から、その人を代表する何かの動物らしいものを見出さうとします。

斯うして彼等にはお猿のをばさまもあれば、虎のをぢさんもありましたが、殊に、あの植木屋のおぢいやが猪であつたことは、何と云ふ愉快な發見であつたでせう。今一つそれに劣らず彼等を悦ばしたことは、小さい〳〵可愛い兎を見出したことでありました。

昨年の春、丁度彼等がその奇妙な興味に一番強く囚はれてゐた時分でありました。或る日、兄のをば樣と呼ぶ方が、殆んど何年ぶりかで訪ねて參りました。をば樣はきれいに着飾つた小さい、末の娘を連れてゐました。久しぶりのをば樣に御挨拶をするやうに、またその小さいお客樣と一緒に遊ぶやうにと云つて彼等が客間へ呼ばれた時、直ちに二人の胸に共通の問題となつて起つたものは、あの女の子は何年の生れだらうかと云ふことでありました。二人はじろじろとその子の圓い小さい顏を眺めました。それからその目をお互ひ同士の上に落して、意味のある微笑を交換しました。兄は、でも例に依つて默つてゐました。弟が勇敢に進み出しました。でも、彼は流石に馴れないをば樣に直接に質問する程、無遠慮にはなれなかつたと見えて、私に向つて聞きました。

『お母樣、あの人は何の年なの？』

私は二人のその好奇心を手短かに話して、彼の質問の意味を解釋すると、をば樣は面白がつて笑ひました。さうして直接二人に向つて答へました。

『これは卯の年でございますよ。』

『それなら兎だ！』

これは今、二人に取つては意外に愉快でなければなりませんでした。さう思つて見ると、その女の子はどことなく兎じみて見えました。色白のまつ白いところから、目のくる〳〵してゐるところから、耳のぴんと張つてゐるところから。彼等は巧妙な砂金採みたいです。どんな砂の中からでもきつと幾らかの黃金を採し出します。——ほんのこれだけのこと、——ただ小さい娘の子が卯の年生れであつたと云ふことで、もう十分愉快で幸福なのです。をかしくつて面白くつて腹の底から笑ひ、こけられるのでした。

私は先刻、二人が猫と犬とを持つてゐると云ふことをお話しました。彼等と動物との間に在る特殊な親しみを斯う書いて來ると、當然の順序として、それがどんな方法で彼等の手に落ちて來たかを、お話しなければならないと思ひます。何故なれば、それを語ることは結句、彼等の動物に對する愛を一層明瞭にすることであり、同時にまたその愛に伴ふ努力の、興味ある記錄を示すことでありますから。

私は今一度申します。兄弟は三匹の猫と二

匹の犬を持つてゐます。けれども系統を云ふと、それは一匹も彼等のものではないと云ふことも出來るのであります。みいはお隣りのM家の飼猫でありました。彼女は境の建仁寺垣を越えては遊びに來てゐるうちに、彼等の款待の普通でないのをすつかり見て取りました

「みいが來た！　みいが來た！」

二人は大騒ぎをして臺所へ駈けつけます。菓子棚を探します。彼女を悦ばせるに足りるやうな肉の一きれか、菓子の一つを見出すまでは、どうしても氣がすまないのでした。王冠形のカステラの、飾りの花が一番大きいとか、またそれが稀であるとかの理由で、分配される時には可なり競爭になつたやうな菓子でも、彼女の前には惜しげもなく投げ出されました。彼女がだんだん大膽になつて食卓の下まで來て坐るやうになると、二人は旨しさうな肉をわざと膝の上にこぼしました。食べたくもないおさしみが懸賑つて要求されたりしました。「僕のお殘り」と云ふ名目で、彼女に喫べ度いためばかりに。

みいはよく時を知つてをりました。お八つの時分とか、また夕方何か旨さうなものゝ匂ひする頃とかになると、彼女はきつと出掛けて來て、特別に[illegible]のある、弾み／＼しい鳴き方をして、二人の後について廻りました。斯うして彼女は一日に何度二人を訪問したでせう。そのうちに、利に鋭い、抜目のない此の動物は、最後の決心をしました。それは云ふまでもなく彼女の舊主人を見捨てることでありました。彼女の態度は些かの未練もなければ、顧慮もない、敢然たるものでした。彼女は今までの自分の家を振り向かうともしませんでした。

「お宅のみいがうちへまゐつて歸りませんので、お預かりいたしてございます。」

と云ふ意味の挨拶を、共同の出入の商人の口を通して先方へ申入れてから、もう殆んど二年になります。

去年の春、彼女の子供が三匹生れました。彼女の産室は裏の物置部屋でありました。兄弟はその時まで何んにも知らされてありませんでした。たゞその時分になつて彼女が恐ろしく肥つたこと、にも拘はらず、動作が非常に大儀さうで、寝てばかしゐて且つ自分たちに對しても、ひどく無愛想になつたのに氣がついたのみでありました。でも彼等はすべてを病氣のせゐにしてゐました。

「みいは氣分が惡いのだから、いぢつちや可哀想よ。」

兄弟は斯う云つてお互ひに戒め合ひました。或る日、彼女が特別に意味のあるらしい、悲しさうな鳴き聲をして、何かを探し求めるやうに部屋から部屋をあちこちしてゐるところを、いやから抱きあげられて、裏の物置へ連れて行かれるのを彼等は見ました。自分たちの周圍のあらゆる出來事に關して常に偉大な劇詩人である彼等、又彼等の頭の中の詩の命題に、すぐれた、技能を有つてゐる彼等は、忽ちその物置を「病氣のみいの病院」として歌ひ、彼女が其處へ運び込まれたことを、「みいの入院」と名づけました。でも彼等よ、暫くみいには構はないでおくやうにと云ふ注意で、彼女をその病院に訪問することは禁じられました。が、明けの朝になると、どうでせう、彼女はもう退院してゐました。而し何となしに疲れた様子で、春の日、暖かい縁先に長く寝そべりながら、舌のブラシで彼女の上衣の掃除をしてゐました。彼等はみいが大變痩せたと思ひました。

「みいや、みいや。」

彼等は、病上りのものに對する親切な心遣ひから特別に優しい聲で呼びかけると、い、い、懐かしさうに彼等に鳴き寄りました。彼女は[illegible]も以前ほど大儀さうでもなければ無愛想でも[illegible]

ませんでした。物をやると驚くべき食慾を見せました。あゝ、もうすつかり全快したのです。それに、彼女が餘ほど頻繁に彼女の病院へ出入する事を續けてゐるのは何のためでせう。——このことが敏感な彼等の注意をいつまでも引かないでゐることは出來ませんでした。何だか分らないけれども、何かきつと其處に在るに相違ない。珍らしく、不思議な、面白い何物かが。

彼等の此の好奇心は、でも當分は滿足させられませんでした。——まだ餘りに小さいものに取つて、彼等の可愛がり方の猛烈過ぎることが懼れられたので、家の者はなるべく子供達をそちらへは行かせないやうにしてゐたのです。——けれども彼等の注意は機會のある每に、その物置部屋と彼女との間に繋がる祕密に向けられないでゐることは出來ませんでした。

兄が學校へ行つて、遊び相手を失つた邦夫が、赤さんのお守をしてゐるいゝのうやと庭でも歩いてゐる時には、彼の足は何となしにその方をさして運ばれました。

彼は古びた二枚の板戸の前に立ち留まつて、一瞬間、注意深く耳傾けました。みいは今この内へ這入つてゐるか、ゐないかと云ふやうなことが二人の間に問題になりました。いゝのうやが妙にこ〱してゐるのも、ます〱彼の好奇心をそゝるのでした。或時、矢張りさうしてゐるところへ、彼は突然その中から洩れて來る幽かな異樣な鳴き聲に依つて驚かされました。

『あれ、なあに？』

彼は疑惑と、同時に不安な期待を交へた表情でいゝのうやを見上げました。いゝのうやは矢張りにこ〱してゐて、而して落着いて、

『そつと開けて御覽なさいまし。』

と云ひました。彼は板戸に手をかけて二寸程引きあけて見ました。物置部屋の中は眞つ暗でありました。でもよく見定めると炭俵だの、盥だの、桶だの、その他いろんながらくたの積み立ててある中に、蜜柑箱位な大きさの、長方形の箱があつて、その中に何んだか白いものだの、黑いものだのが動いてゐるのを認めました。而して彼等は鳴いてゐました。彼が戸の外で聞いた、あの幽かな、小さい〱鳴き聲で。

『あれ、なあに？』

彼は、後に立つて矢張りにこ〱笑つてゐるいゝのうやをふり返つて、前と同じ質問をかけました。けれども今度はいゝのうやは中に這入つてよく見るやうにとは申しませんでした。

『今にお分りになりますから、さ、早くこつちへいらつしやいまし。』

と云つて彼をせき立てて、その場所を去らせました。彼も半分何となしに氣味が惡かつたので、おとなしくいゝのうやの言葉に從ひました。

けれども兄は、學校から歸つてきて、彼から其の報告を受取ると共に、思ひあたる事があるやうに感じられました。少くともその報告は、いつとなしに、また何と云ふ理由なしに、彼の頭の中に閃いてゐた一種の疑惑に、確かな形を與へたものでなければなりませんでした。彼はもう躊躇しませんでした。小さい背嚢を自分の部屋へ投げ込むとすぐ、庭へかけ出しました。——勿論小さい弟もその後から。

母親によく似た二匹の三毛と、一匹の白と、三匹の小貓を箱の中に見出した時の、二人の冒險者の悅と得意を想像して下さい。同時に、兄弟は、そんな暗い、汚い所に、彼等を置いておくのは非常に無慈悲な事のやうに感じました。彼等は早速自分たちの部屋へ移されなければなりません。而して泥だらけの箱やボロ綿の代りに、もつと上等な家ときれいな蒲團が與へられなければなりません。即ち彼等の小ささに相當するあらゆる小さな家具が調へられなければならないのでした。あゝ、それから移轉と同

時に、これから先き彼等の隣人となつて、親しい交際をしなければならない馬や、兎や、犬や、鷄や、その他おもちや棚のすべての動物と人形に彼等を紹介することを忘れてはなりません。いろ／＼忙しくなつて來ました。併し斯うして二人がごみだらけの物置部屋へしやがみ込んで、この樂しい計畫に夢中になつてゐるところへ、ねえやが現はれました。彼女は小猫を動かすことはまだ早いと云つて、驚くべき警告を與へました。

「こんな時分から餘りいぢり廻してゐますと、取られるかと思つて親猫が心配して、何處か見つからないところへ隱してしまひますつて。惡くすると、親猫が自分でみんな食べてしまひますのよ。」

これには二人ともびつくりして震へ上りました。そんな怖ろしいことがあつてはたまりません。その爲、彼等のすべての計畫は當分延期となることに決しました。

併し、彼等は長く失望してゐるには及びませんでした。間もなく、みいが母親の周密な思慮から、彼女の小猫を物置から運び出すべき時期が來たことを考へた時、最も安全な、居心地のよい隱れ場として選んだのは、彼等の部屋でありました。その時兄弟が理想通りの設備と待遇でその小家族を迎へ入れたことは云ふまでもありません。日當りのよい、その小部屋の一隅で、彼等は十分愛せられ、潤澤な食物を當てがはれて、平和に仕合せよく暮らしてゐました。小猫はみんな肥つて、器量よしでありました。もう鼠を取るだらうか、と云ふことがそろ／＼問題になりかけた頃でありました。豫てその一匹を貰つて呉れると云ふ約束の出來てゐたKさんと云ふお宅から、二三日のうちにお孃さんが取りに上がると云ふ通知があつたので、晩御飯の時に母は何氣なくその事を話し出しました。兩して鰹節でも附けてあげなければ、と云ふやうなことを話してゐますと、右隣りに坐つて箸を動かしてゐた友一がいきなり、

「わあーん。」

と泣き出しました。その聲が餘り大きかつたのと、その事の突然なのに、食卓のまはりの者は、ちよつとびつくりしたほどでありました。

「どうしたの？　何を泣くの？」

彼は、でも、一言も返事をしないで、益々ますます大聲を擧げて泣きつゞけました。兄が泣き出すと、きつと貰ひ泣きをする邦夫が、また一緒になつてしく／＼始めました。友一は猫のことを悲しんで泣くのでした。邦夫はそれよりも兄さんの泣くのが悲しくて、泣くのでした。どちらにせよ、二人の泣き方の大げさで眞劍なのは、お父様をも、私をも、途方に暮れさせました。而して子供の斯う云ふ思ひつめた感情の前には寧ろ恥かしいこじつけだとは思ひながら、矢張り「大人の理窟」を持ち出すこととなりました。私たちは、小猫が貰はれると云ふことは小猫に取つて大變名譽でもあれば、好都合でもあること、——何故なれば、來年またきつとみいがこれ以上の小猫、少くともこれと同數の小猫を連れて來るに極まつてゐるから。さうなれば、とてもすべての小猫を家に置くと云ふわけには行かないから——と話すと共に、Kさんのところへ引き取られる猫の幸福をありたけ數へ立てて、彼の悲しみを和げようと骨折りました。併し彼に取つてはそんなことは第二義以下の問題に過ぎませんでした。あんな小さいものを、親の傍から離して、——それもたつたひとりで知りもしない他人の家へやられると云ふこと、そのことが彼の感情に取つては一番大事な、一番悲しい、堪へられないことなのでありました。

「そんな薄情なことがあるものか。」

彼はこの通りの言葉を使つて、抗辯しました。私達は顏を見合せました。而して彼が斯んな美しい精神を有つてゐて呉れるのを有り難いとは思ひながら、でも矢張り「大人の理窟」を並べてどうにかして彼を納得させなければなりませんでした。――大人つて何といふいやなものでせう。――私たちはあの三匹の中で彼が一番いやだと思ふ猫をやつてはどうかと勸めました。彼は、どれもみな好きだと答へました。あのしろがうす汚い、あれにしたら、と云ふと、今度は向うの方から、

『しろは僕の猫だ。』

と叫んで、邦夫のしく／＼がたうとう本雨になつてしまひました。

終にお父樣がおもちやの猫を二人に一つづつ買つてやるから、と云ふ條件でそのむづかしい問題は漸く解決されたのですが、それでも友一の涙は長い間止まりませんでした。彼は泣きじやくりをしながら申しました。

『僕等のことを思ひ出して淋しがるに極まつてゐる。』

犬はタツと申します。矢張りみいと同じくM家の飼犬で、小型な、白と茶のポインター種であります。何か目の病氣を有つてゐると見えて、いつもしよぼ／＼した目つきをして、目のふちが赤く爛れてゐる上に、ところ／＼毛が脫け落ちて見るから貧弱な小犬でありますが、でも子供たちには彼の醜さなどは少しも氣にはならないのでした。何でもよいのでした。彼等はたゞ自分達の愛を投げかけられる目的物さへ見出せば、それで滿足なのでした。

『タツや！　タツや！』

彼等はそのうす汚い小犬をこの上もない物かなんぞのやうにちやほやしました。而して彼が遊びに來る度に菓子をやるとか、肴のきれつぱしを投げるとかしてゐた結果は、やがてみいの場合と同じものになりました。彼はもう歸らなくなつたのです。夜も子供たちの部屋の緣の下に寢ます。

『タツはお歸り、お歸り。遊びにだけ來ればよろしい。』

M家の思はくも憚られるので、私たちは斯う云つて追ひ立てようとしましたが、彼はもうすつかり兄弟の愛を恃んで甘えてゐました。少し位の威嚇は、却つて惡ふざけの機會を與へるやうなものでありました。

「タツは僕たちが好きだから歸らないんだ。」

彼等にはよその犬と云ふやうな區別はないのでした。彼を愛することは「動物の仲間」をもつて任じてゐる彼等の特權であり、また愛するものが愛せられる事は當然だと信じ込んでゐるのでした。

クマが彼等の犬となつたのも似たやうな順序でありました。數箇月前の或る日の午後、學校から歸つて來た彼は、書齋に居た私のところへいつもの通りに「只今」を云ひに來て、すぐその言葉の下から、

『僕、今日はほんとうに困つちまつた。』

と、さも／＼困つたらしい調子で云ひました。私はちよつと驚かされました。

『どうしたの？　忘れものでもしたの？』

が、どうでせう。彼は困つた／＼と云ひながら、妙に嬉しさうな顏をしてゐるのです。困つた風を裝はうとしながら、笑つてゐるのです。

『どうなすつたのよ？』

私がもう一度斯う聞き返すと、

『だつて、犬がついて來て仕方がないんだもの。崖の下のところからね、幾ら追つても／＼ついて來るの。僕、困つちまつた。』

『それで、どうしたの？』

『矢張しついて來たの。』

『おうちまで？』

『えゝ。』

この最後の一句は彼は出來るだけ遠慮深く、而して如何にも迷惑らしく云ひたかつたのでありませう。――よそのものを何でも引きつけてしまふと云ふ非難を家の人たちから大分受けてゐるのですから。――けれども表はれたものはすつかり反對でありました。漸く警戒を解いた。その顏を一目見ただけで、彼がその意外な獲物にどんなに滿足してゐるかが私にはよく分りました。

『飼主のある犬ぢやないでせうね？』

『まぐれ犬ですよ。頸環も何もないの。ひもじさうだから何かやつてね。』

私がペンを置いて立ち上ると、彼は素早く先に駈け拔けて、勢ひよくとん〳〵と階段を飛んで下りました。斯う呼びながら。――

『タツよかずつといゝ犬ですよ。大きくつて、まる黑で、まるでほんとうの熊見たいよ。』

その他、西隣りのルカスさんと云ふ、英國人の牧師の家のしろも、殆んど半分位は彼等の犬と云つてもよいほどに二人に懷いてゐます。これはしろと云つても荒い霜降のセッターで、タツとクマを二匹よせたよりもまだ大きい位の犬です。容貌は寫眞で見るポアンカレエ氏によく似てゐます。目の處が左右とも丁度黑い、圓い斑になつてゐるために、大きな褐色の目が、實際以上にぎよろりとしてゐるところまで、どうしてもポアンカレエ氏です。また彼の毛並の見事さは、フランス大統領の外套にしても決して恥かしくないものでせう。毛並が深くつて、濃くつて、房々してゐて、しなやかで、絹のやうな光澤を有つてゐます。それで先刻云つた通り霜降です。灰がかつた白地に樣々な形の黑點が、頭から長い捲毛になつた尻つぽの先まで、無數に散らばつてゐる素破らしい霜降です。彼が、その大きさと、その顏と、またその見事な毛並とで、のつそり、のつそりと步いて來る樣子は、ミリオネエルの老紳士と云つた風があります。氣取つてゐると云つてもよい位に落ち着き拂つて、ゆつたり構へ込んでゐるのです。その癖、子供たちの手から一枚でも多くのビスケットをせびり出すことにかけては、彼が一番熱心で、また一番巧妙で、また一番滑稽な馬鹿騷をもするのであります。彼の洩らしたビスケットは、きつとクマの口へ這入つてしまひます。現在の狀態では、タツが彼の正當な分け前を安心して受取られるのは、七月から九月一杯まで位でありませう。その間はしろはその仲間から姿を隱します。彼はルカスさんの家族と一緒に毎年輕井澤へ避暑に行くことになつてゐるのですから。

『もうしろが歸つて來さうなものだ。』

これは毎年暑中休暇が終る頃になると、一日に少くとも一度は子供たちの話題に上る期待であります。ルカスさんの家族はいつも長逗留です。山の上の別莊ではもうストーヴに火か欲しいだらうと思ふ頃まで歸つて來ないことがあります。去年は割合に早かつたやうでしたが、どうしたのかしろが見えませんのでした。のういやがその家のぢいやに聞き出して來たところに依つて、しろは病氣のために、歸京するとすぐ上野から眞つ直に築地の或る家畜病院へ送られたのだと云ふことが分りました。その報知は可なり二人を心配させましたが、同時に彼の置かれてゐる珍らしい環境を想像する事は興味の多いことでありました。二人は樣々な犬たの猫だのが、彼等の寢床に睡つてゐるところや、また診察を受けてゐるところや、お藥を飲んでゐるところや、また吸入をしてゐるところや、體操をしてゐるところや、すべての有りさうな光景

をお互ひの空想の中に描き出しました。二人はもう心臓ではなくて、非常な愉快を以て、熱心にそのことを話し合ひました。

『ねえ、お兄さん、犬のお醫者様つて矢張り犬なの？』

これはこの場合に於ける、邦夫の道理ある質問でありました。

茶の間の大きなテーブルの上に、手帖やら色鉛筆やらを取り散らして、二人で競爭で畫を描いてゐた兄弟の間に、次のやうな對話が始まつてゐます。——何から云ひ出されたことなのか、私も中途から聞いたのだから知りませんが、

『人間つて何でも殺して食べてしまふのね。』

から云つたのは兄です。

『さうね。牛肉だつて、お肴だつて、みんな生きてたものね。』

これは弟です。

『さうさ。野菜だつて生きてるものよ。植物にも生命があるんだから。』

『わかめなら？』

その朝のおつけの實はわかめだつたのです。

『わかめだつて生命がありますよ。海の植物なんだもの。』

家を建てる樹木にも生命があります。着物を拵へる材料もみんな生命のあるものから取らなければなりません。さうすると、他のものの生命を損ふ事なしに生活するにはどうしたらよいか、と云ふ思考が當然の順序として二人の頭の中に起つて來たのでありました。

『空氣は生命がないのよ。』

兄は今度は生命のないものを數へ始めました。弟もすぐ後から續けました。

『土だつて生命がないのね。』

『岩もないよ。』

『水もないのよ。』

『ぢや、土へ穴を掘つて、そこをお家にするといいんだな。そして水ばかし飲んでればいいんだ。でも雨が降ると困るなあ。』

『僕いいことがある。』

邦夫は彼の計畫をさも獨創を誇るもののやうに語りました。それは穴をすべて横穴にすると云ふ提案でありました。二人はこれで滿足しました。さうしてやがてその對話を終つた時分には、彼等のノートブックの面は、奇妙な穴居生活の住民のさまざまなスケッチで一杯に充たされてゐました。

これは彼等の對話のほんの一例にすぎません。私がすべての彼等の談話を書き留めて置くならば、その中から優秀な作品を選むことも出來るだらうと思はれる位、それは非常に精緻で、哲學的で、人生問題の根本に觸れたテーマが數多く見出されます。この間、二人は神様はどんな顔をしてゐるだらう、と云ふことを長い間討論しました。生命の問題、死の問題、富の分配の問題、王様と乞食の問題、その他、何故花が咲くか、星が輝くかの問題、——古來の哲學者や宗教家や社會政策家や、また多くの學者たちの頭に問題となつたものが、この小さい二人の兄弟にも屢々問題となつて現はれます。

彼等はそれに對して、彼等獨得の解釋をつけます。而して分らなくなると、みんな神様のところへ持つて行きます。

友一は彼の計畫に依ると少くとも千年位は生きてゐる積りらしうございます。いいえ、自分一人のみではいけないのです。彼の愛するのは、お母様、あなたでも、彼のお父様でも、私でも、邦夫でも、赤さんでも、またのうやでも、つねやでも、すべてのものが現在の狀態のままに健康で、若くつてゐなければならないのであります。私は彼にエンヂミオンの話をして聞かせました。「美」と「若さ」を永久に失はないでゐたい、と云ふ彼の望みは遂げられた。そ

の代りに彼は永久に默つてゐなければならなかつたと云ふ有名な傳記の名高い話を。

「僕、時々、目の覺めるエンヂミオンになり度いな。」

此處まで來て讀み返して見ますと、友一の學校生活が少しも書かれてゐないのに氣がつきました。このことは、學校がよく出來るであらうか、學校友達との折合は都合よく行つてゐるだらうか、と云ふやうなことを常々氣遣つて下さるお母樣に取つては、誠に物足りないことでございませう。それで、この長い通信を終る前に、私は是非この話だけは書き洩らしてはならないと思ひます。

一言にして申しますと、彼は學校に於ては至つて平凡な、何等の特色もない、たゞおとなしい一生徒らしうございます。いつでしたか、受持の先生に逢つて、彼の學校での行動をお尋ねしましたところが、學課もよく出來るし、それに正直でよい生徒だと云つて褒めて下さいました。その際に、非常に意外だと云ふことを何度も言はれたのが、思はず私を當惑させました。先生の仰しやつたその言葉と云ふ意味は、他の生徒に比べると幾らかのろまで、お人よしで、ぼんやりだと云つたのに外ならないのですから。私はそれを承認します。彼は家でさへ時々「甚六」さんと云ふ渾名を貰ひ出す場合がある位で、或る點に於ては、全くお人よしで、ぼんやりです。而して同じ年頃の子供に比較すると、お話にならないほど赤ん坊じみてゐます。これは要するに、彼が弟以外の友達を一人も持たない爲であらうと思はれます。二人は兄弟であると共に、一つ身の着物からの親友であります。眠るにも、起きるにも、遊ぶにも、食べるにも、笑ふにも、怒るにも、泣くにも、ぐづるにも、たゞ二人だけの相手で、一人が假りに二人になつて動いてゐると云つてもよい位なのです。從つて其處には自然の興味ある模倣が現はれます。――弟が兄の眞似をする、同時に、兄が弟の眞似をします。而して弟が幾らかませて行くと反對に、兄は逆に子供じみて行きます。

兄弟のこの強い結合に十分滿足してゐる友一は、學校友達と云ふものに對しても、非常に淡い感情と交渉しか持つてをりません。友達と云へば、同級の生徒が悉く友達でありますが、學校以外で行つたり來たりするやうな、特別の友達らしい友達はまだ一人もないのです。彼は自分からそれを求めようともしません。彼はどう云つて說明してよいか分りませんが、彼等と彼との間には、すべての物の見方、考へ方、感じ方に於て、或る點まで行くときつとずり違ひが出來るらしいのです。彼はいつも判斷に迷ひました。少くとも弟と話したり、議論したりする時のやうに、何處から何處までもぴつたり調子が合ふと云ふ譯には行きませんから。それ故、彼は學校仲間では語る方の人ではなくて、いつも聞く方へ廻ります。而してぢつと聞いてゐるといろ〳〵奇妙な、驚くべき、珍らしい話を聞き出します。Kさんの家の窓からは新高山が見えると云ふ話、Sさんは暑中休暇に汽船に乘つて房州へ行つたと云ふ話、Oさんのところへは魔法遣ひの持つてゐた金の杖があると云ふ話、Aさんのところの池には何百羽と云ふ鵞鳥がゐて、その中の一羽が赤い卵を生んだと云ふ話、Bさんのところのお祖母さんは今年百二十五で、それでゐておまんぢうを十ぐらゐ食べると云ふ話。――彼はものを疑ふと云ふことを知りませんから、話されたことはすべて事實であります。彼は何を聞いても感嘆します。而してこの面白い話を一刻でも早く、弟の耳へ入れて、二人でまた驚かし〳〵面白がらうとして、

大急ぎで、而して上機嫌で、すた／＼學校から歸つて來ます。

彼が學校へ上つてからまだ一月とたゝない頃の事であります。或る日、彼の受持の先生は生徒に向つて、

「みなさんは何のために學校へ來るのですか。」

と云ふ質問を發しました。指名された生徒は順々に自分の席に立ち上つて、得意らしくめいめいの抱負を述べました。えらい人になるためとか、學問をするためとか、お國のために盡すとか。――彼は自分の仲間がいろ／＼な立派な決心と希望を有つてゐるのを驚嘆すると共に、ひそかに大いなる怖れを抱き始めました。若し自分の名前が呼ばれたならば、どうしようかと心配したのでありました。何故ならば、何のために學校に來るのだか、彼はそんなことを考へて見た事は一度もなかつたし、急に考へて見ようとしても、少しも見當の立たない、よそ／＼しい問題でありましたから。が、彼は免れることは出來ませんでした。運命の質問は終に彼の上にも落ちました。彼は當惑して胸がどき／＼しました。機械的に腰掛から立ち上つたのは、立ち上つたものゝ、何と答へてよいか分りませんでした。

「僕、知りません。」

彼はやつとこれだけ云つて、顏を赤くして席に復しました。同級の或る者は笑ひました。彼は大變恥かしいと思ひました。

その日から三年の月日が立ちました。彼は今ではもうすつかり「小學校教育の型」と云ふものを呑み込んでしまひました。

「天皇陛下に對してはどうしなければなりませんか？」

と云ふやうな質問に對しても、直に、

『忠義を盡さなければなりません。』

と、望まれる通りの答、即ち滿點になる返答をする事が出來ます。が、今一度、學校には何のために來るか、と云ふ質問が繰り返される場合があつたとすれば、彼は矢張り當惑したでありませう。――以前程ではなくとも、また、

「僕、知りません。」

と云ふ代りに、何とかもつと如才ない返事を探し出すことが出來たとしても、心の中では非常に困るに相違ありません。白狀すれば、その問題に關する無確信は三年前と何んにも變りはないのですから。彼は決して學校が嫌ひだとか、面白くないとか思つたことは一度もないにきまつてゐます。いゝえ、彼は確かに人一倍強い知識欲を持つてゐます。知らないことを學校でいろ／＼と教はつて來る愉快も知つてゐます。併し、もつと遊ぶ時間がどつさりあつたら、更に／＼愉快だと思つてゐるでせう。

朝八時過に家を出て、歸ればもう三時です。お八を頂いてしまふと復習。それから算術の宿題が待つてゐます

「栗ハカタクシテ、クサラザレバ……」

と云ふやうな奇妙な文章も、口語體に譯されなければなりません。それがすむと今度は新らしく覺えた漢字の書取。――可哀想な日本の小學校の生徒、彼等はいつまでこの四角な、變手古な形象文字のお化けに威嚇されなければならないことでせう。――彼がその小さい書齋の中に隔離されて、いゝと云ふ字は亻であつたか、それとも彳であつたかとか、或は、ふいと云ふ文字の旁は㕣であつたか、それとも台であつたか迷ひぬいてゐる間に、庭の方からは弟の樂しさうな笑ひ聲が聞えて來ます。赤さんが何だか上機嫌らしい可愛い叫び聲をあげてゐます。その二つの聲を繋ぎ合せて、いゝやの美しいアルトが響き渡ります。タツとクマのバリトンとバスがそれに合唱します。すると、まはりの木立の中の雀たちまでが、日の暮れな

いうちに今一度、最後の一騒をするためにあちこちから寄り集まつて來ます。木の葉と云ふ木の葉が、彼等の、無數の小さい、青い手をさしあげて、その遊びに賛成の意を表します。午後四時過ぎの、稍黄色く年寄りかけた太陽のをばさんは、彼等の面白い競技の審判官でありませう。併し、私たちの氣の毒な小學生は、その時でも彼の小さい机から離れることは出來ないのです。彼はまだ、その上、

　規則を守れ。

と云ふ風な、修身の時間の時の訓話に基いて、一篇の綴方もおへて置かなければならないのです。而してこれ等の復習、豫習、宿題のすべてを完全に、滿足に終るためには、餘程手廻しよくするのでなければ、夕方の空の美しい雲の一片を、ゆつくり、のんびりした心持で眺めて樂しむ機會さへも失ふでありませう。

　或る信頼すべき博士の言葉に依ると、日本の小中學校の教科書の中から、厄介な時間塞げの學課――漢字や耳遠い文語體の記述と云ふやうなもの――を捨て去るならば、根本的の知的過程が今より二三年早く生徒の頭の中に取り入れられるだらうと云ふことです。私たちはそれを知つてゐながらも、矢張り自分の子供の肩の上にその餘計な荷物をしよはせなければならない現在の教育制度や社會狀態を悲しみます。

　お母様、併し私のこの言葉に就いて餘り多く心配して下すつては困ります。私の言葉は幾らか強く響き過ぎたかも知りませんが、當人はまだまだ至つてのんきに勉強してゐますのですから。さうです。いたしかけると、可なりねばり強く勉強します。それが一分間でも早くすむのを望むのは、寧ろ待つてゐる邦夫の方です。

『お兄さま、御勉強まだすまないの？』

　彼は何度も斯う云つては、硝子戸越しに偵察に出掛けて來ます。何と云つても彼にはその有力な仲間なしでは、心から面白い、勇ましい遊びは出來ないのですから。さうしてまた、その所謂勇ましい遊びが、往々勇ましい喧嘩にまで發展することも、お極まりの順序ではありますが。

　併し、昨日の夕方に起つた場面は少し風變りでございました。あゝ、斯んな事でさへも、立派な喧嘩の材料になるのです。

　二人はいつもの通りにくつつき合つてじやれてゐました。するとどうした機會からか、弟の三分刈の青坊主の頭の地に、粟粒ほどの白い斑々のあるのを兄が發見しました。

『おや、邦さんにははげがある。』

『はげなんかない。』

『あるぢやないの。それがはげと云ふものですよ。』

『はげぢやない。』

『はげだ、はげだ。』

『はげぢやないよ。はげぢやないよ。』

『ネバ牛、強情。ほら、耳の上のところに白いぶちぶちがあるぢやないの。それがはげよ。』

『これはおできのあとよ。』

『だからはげなのさ。今に御覽なさい、あのあさり屋のおぢいさんみたいに、頭ぢうつる〳〵にはげてしまふから。』

『あーん。』

　邦夫はたうとう泣き出しました。怖るべきあさり屋のおぢいさん、彼はもう殆んど七十近いかも知れません、痩せて、から〳〵して、それで人並よりは確かに五吋づつは長いその手足は、人間であると云ふよりは寧ろ巨大な蟲の一種のやうに二人の目に入つてゐるあのおぢいさん、そしてまた一週間に極まつて二度は臺所口へ現はす彼の不思議な、毛の一本もない頭、全く以前其處に毛が生えてゐたと云ふ痕跡さへ見出されない位完全にはげた無氣味な圓いも

の、――假りにもそれを自分の頭と同じカテゴリに入れて論じられる事は、到底忍べないことでした。邦夫の目の中からは泣いても〳〵盡きないほど涙が流れ出ます。

『お兄さまつたら、僕のことをはげだつて。そして、あきり屋のおぢいさん見たいなはげ頭になるつて云ふんだもの。』

斯う云つて、彼が泣き〳〵私のところへ訴へに來た頃には、原告は、彼のちよつとした思ひつきのいたづらが、餘り成功しすぎたのに却つて當惑して、何處かの部屋の隅を目がけてこそこそ逃げ出してゐるのであります。

あゝ、お母様、私に代つて可哀想な彼に、彼の頭の地に在る白い點は、彼の主張する通り正しくおできのあとであつて、決してはげではないこと、また、彼が百五十年生きるとしても、あきり屋のおぢいさん見たいなはげになる氣遣ひはないと云ふ事を證明して、彼の悲しみを慰めてやつて下さいまし。またそれの最も手近い方法は、有り合せの餅菓子の一つも、彼の涙に汚れた手に載せて下さる事です。その間、呪ふべきはげ頭の幽靈は悉く退散してしまふでせう。而して彼の目の前には天國が十ばかりも現はれるに極まつてゐます。

天國まで來れば、それで話は十分だと云ふ西洋の諺がございます。私も、もうこれでこの長い手紙をおしまひにいたさうと思ひます。若しこの手紙が私の期待してゐた半分でも、あなたのおなぐさみになりましたら、私は非常に滿足に思ひます。而して、また機會のあり次第、斯んな風な通信をいたしませう、と云ふお約束をいたしておいてもよろしうございます。

最後に、此の手紙は長くお母様のお手許に保存して頂き度い、と云ふ私のお願ひをお容れ下さいまし。而してあの小さい三人が一人前の青年になつて、あなたのところへ出掛けて行つて、いろ〳〵えらさうな事を云ひ出した時に、どうか取り出して讀んで聞かしてやつて下さいまし。――では、どうぞ御機嫌でいらつしやいますやうに。

（大正八年二月）

日記の中から（一）

某年某月某日

午前わりに落ちついた氣もちで机に向つた。しかし仕事は思ふほど進まず、午後まで續けて仕事をつゞけても、能率の點では大した效果はない。もし午前に少しでも書けたら、午後はまた何か讀みはじめることにする方よくはないかと思ふ。

これからは暖かくなるから、朝早く起き、朝食前に仕事をし、午後は樂な氣持で讀めるやうにし度い。讀書にはいくらか疲れた頭でも使用されるわけだから。

今日は午後岡倉覺三氏の『茶の木』をよんだ。いろ〳〵な意味で面白かつた。岡倉氏が多方面な知識と豐富な詩才を持つてゐられたのを知つた。しかしこれは西洋の讀者のために書かれたものであるから、私たちから見れば幼稚な、云はないでもよいことまで觸れてゐる。同時にまたその目的が一種生新な觀察や表現を生じさせてゐるのでもあるが。ところどころドグマもあるらしい。少くとも細川家の血達磨の芝居を例に取つて、藝術に對する一般の神聖な評價を高唱したのは見當ちがひではないだらうか。これ等は藝術を神聖視したのではない。忠義を神聖視したのである。

海神丸

十二月二十五日の午前九時、メイン・トップ・ギヤラント六十五噸の海神丸は、東九州の海岸に臨むK港を出帆した。目的地は其處から約九十海里の、日向寄りの海に散在してゐる二三の島々であつた。島からは、木炭と木材と、それから玄人仲間で五島以上だと云はれる非常に見事な鰑が出る。その他、何かしら海産物は一年中絶えない上に、往復に日数がとれないから、割のよい點では、これ位割のよい航海はなかつた。海神丸の若い船長はそれをよく知つてゐた。彼は阪神方面や中國筋を一廻りして來た後では、屹度この島の方へ舵を向けた。――島で丁度な荷物がなければ、[illegible]大隅あたりへ[illegible]であつた。

今度の航海は、[illegible]門司から積[illegible]後であつた。併しその[illegible]荷物の[illegible]、[illegible]日[illegible]なかつた。[illegible]されてある。島ならば、その間に一往復出來る譯であつた。本當[illegible]

で歸つて、正月錢を餘分に取つてやらう。これが彼の計畫であつた。たゞ殘念なことは、日が餘りに押し詰まつてゐるので、島の家々では正月の用意に既に幾つか早い船で整へられてゐるに相違なかつた。それで彼はいつも積んで行く酒とか、米とか、醤油とか、またその他のちよつとした雑貨類とかを、今度はすべて積まないで空船で出掛けた。

寒さは强かつたが、空はよく晴れ、風は追手で、門出の船には申分のない日和であつた。海神丸は六枚の帆を六枚とも一杯にふくらませ、漸く明るくなつて來た海の路を、大きな鳥のやうに輕く飛んだ。船の中では[illegible]それぞれ[illegible]仕事についてゐた[illegible]ふ[illegible]しくもなく[illegible]をした[illegible]の三吉は、大阪風な[illegible]の上に[illegible]を締め、後[illegible]の船長室に[illegible]小さな[illegible]で、[illegible]の支度をしてゐた。彼は[illegible]小窓の[illegible]にぶら[illegible]してゐる[illegible]ないものゝ[illegible]、[illegible]いてゐると何んにも變らぬ、平氣な、物馴れた風で、米を炊いだり、味噌をすつたりしてゐた。五郎助はメイン・マストの根元で、同じ服装で、捻鉢卷をして、大趺坐をかいたまゝ、鼻唄をうたひながら、船具の繕ひ物をしてゐた。八藏は舵を取つてゐた。この二人の若者はどちらも四つ五つ三吉より年上で身體も大きく、頑丈であつた。殊に舵を掴んだ八藏の太い眞つ黒な毛深い腕ぶしは、寄港地の居酒屋で、幾らか[illegible]のある彼が[illegible]相手かまはず振り[illegible]すときの强い拳を偲ばすに十分であつた。而して五郎助が船乗らしい亂暴さと共に、何處か拔けた様なところの見えるのと反對に、彼は一癖ありげな[illegible]ぬ顔をしてゐた。船長は今起きたばかりで、自分の部屋にゐた。それは入口が板敷になつた長四疊の細長い小部屋で、正面には一つの[illegible]な[illegible]おいてあり、その[illegible]は[illegible]と小さい[illegible]になつてゐた。それつきりで、[illegible]の中には何んにもなく、きちんと[illegible]に片付いてゐたが、たゞ頭の上の[illegible]に[illegible]した[illegible]の上に、大きな二つの小さい[illegible]てあつた。一つの[illegible]や、コンパス、[illegible]、[illegible]航[illegible]日誌や、その[illegible][illegible]になり[illegible]にも[illegible]あと[illegible]

皆揃つて並べられてあつた。またその棚のすぐ左手の壁には丙種運轉手としての町の水上警察署の認可證の木札が、小谷鑑五郎と云ふ彼の名前と、本籍と生年月日――それに依ると彼はまだ四十になつてゐなかつた――を記した面を裏にして釘で打ちつけられてあつた。

今一つの、寢臺に近い方の棚は彼等の仲間が守護神として崇めてゐる金比羅樣の神棚であつた。もう御燈明がともつてゐた。その灯は、昨日出帆前に供へたばかりの青々した榊や、小さい御酒徳利や、紅白の御幣の間で淨らかに瞬いてゐた。頓て船長はその棚の下に坐り、潮風に染まつた大きな荒い掌でぱち／＼と柏手を打ちながら、彼の毎朝の拜みをあげ始めた。彼は今度の航海の無事を祈つた。島々の積荷が計畫通りに行つて、よい正月錢の取れるやうにとも祈つた。また陸に殘してある家に就いて――家には年取つた兩親と、數年前に結婚してまだ子供のない妻があつた――祈ることも忘れなかつた。彼は彼等の仲間の傳統的な强い信仰を持つてゐた。氣紛れなあの風と、一寸したことにも直ぐ怒つて狂ひ立つ波を相手に暮らす自分等の渡世で、神樣の力より外に何が頼みになるものがあらう。この決定的な信賴は、一枚のお札の前にも、彼等を子供のやうに手を合させた。船長はいつまでも熱心に祈り續けた。その眞率なる祈禱の態度は、頭の上の燈明のほのかな光と共に、彼の海員らしい荒つぽい姿や服裝につき纏ふ、平常の感じとは別な、愼ましい、宗敎的な空氣でその小部屋を充たした。

どちらかと云ふと彼は小男であつたが、四角な打ち堅めたやうな身體と、ぎよろつとした大きな黑瞳と、黑い角張つた顎とは、精悍な野獸の或者を聯想させた。が、悧巧さうな廣い額や、締つた下品でない口許は、彼が決して猛々しいばかりの若者でないことを證據立ててゐた。鼻も卑しくはなかつた。さうして髮毛がまつ黑で幾らか縮れてゐるのや、日に燒けた耳から頰へかけての輪郭は何處となく三吉と似てゐた。着物は三吉やその他の若者と同じあつしを着てゐたが、三尺は彼だけは紺金紗の大巾物を締めてゐた。

『五郎助、おい、昨夜ン棕櫚繩アどきイ積んだンかア？』

船長は頓て部屋を出ると、マストの下の五郎助を目がけて行きなり呼んだ。

『わしや知らん、八が知つちよる。』

五郎助も負けずに怒鳴り返した。

『八、棕櫚繩アどきイ置いたンか？』

船長は身體を動かさずに顏だけ艫の方へ向けて怒鳴つた。

『表ン下へ入れチある。』

八藏の太いどすの利いた聲が、艫の場所から、怒つたやうに返事をした。が、彼等は不純に怒つてゐるのでも、喧嘩をしてゐるのでもなかつた。それは、平生波の音に打ち消されまいとして話すに馴れた、船乘特有の聲の調子に過ぎなかつた。船長はその棕櫚繩を見るために船首の方へ歩いて行つた。彼は丁度家の廊下をでも散歩するやうにのつそり／＼歩いた。下が船具の置場になつてゐる、船首の艙口に達した時、その四角の穴に身をかゞめる前に、彼は足をジップ帆の前に留めて、沖のぼうつと紫立つた水平線の上にぢつと目を据ゑてゐた。

『今日も西風が强いわい。』

彼はひとり言を云つた。

その内に三吉の手で出來上つた朝飯が、船での唯一の廣間である、船長室の隣りの船員室に運び込まれた。三吉は甲板に飛び出して、一人一人に怒鳴つて觸れ廻つた。

『おッさん、飯が出來たで。――五郎助、飯ウ

食はんか？』

　併し彼は二人を待たないで、自分だけ先にはじめた。さうして船乗仲間の自慢である沖の潮で炊いた味のよい飯を——彼等は陸の上の飯は水臭くて食へないと云ふ——大きな飯茶碗に山盛りによそつて、さも甘さうに、手ばしこく掻き込んだ。彼は八蔵に代つてやらなければならないのであつた。それ故、船長と五郎助が入つて来て、やつと一杯の茶碗を空にするかしないうち、彼は食ひ度いだけの飯を食ひ、吸ひ度いだけの味噌汁を吸つて、もう立ち上つてゐた。さうして戸の中から叫びながら甲板に飛び出た。

『八、さあ代るぞ。飯ア食うチ来い。』

　海にはもうあらゆる種類の船が朝日にきらめいて浮んでゐた。夜釣の船は一晩ぢう釣りためた獲物を町の朝市にかけるために、大急ぎで沖から漕ぎ戻つてゐた。反対に今からぼつ／＼漕ぎ出して、遠くの漁場で大物をねらはうとする漁船もあつた。その他年寄や、かみさんや、子供や、取り分け大勢の娘たちを船一杯盛り上るほど積んで——實際娘たちは、大きな粉袋や海草類の束の上にまで、ピラミッド形に乗つてゐた——漕いで来る大傳馬が幾艘もあつた。これはその海灣の左右の岸に並んでゐる漁村の部落部落から、町をさして出掛けて行く正月用の買物船であつた。——町は丁度沖を斜に受けて、海が圓く狭まつた奥に開けてゐた。彼等の船は見るからに陽氣でにぎやかであつた。殊に娘たちは、買物の話や正月の遊びの樂しい計畫をぺちやくちや喋り立てては、絶えずかけ構ひのない高笑ひを波に響かしてゐた。艪は大抵誰かの夫か息子が漕いでゐた。中には女ばかりで交る／＼立派に漕ぐ船もあつた。

　三吉はもう若い女の聲が耳につかぬ年頃ではなかつたので、これ等のにぎやかな笑ひ聲が聞える度に、舵を掴みながらその方の船に目を注いだ。何浦、何村の船だと云ふことがすぐ見分けられた。

　一二の見知り越の船ともすれ違つた。

『海神丸、何處イ行くンか？』

『島ぢや。』

『早う戻つチ来い。もう正月だぞ！』

　彼等は人々が町の往来で行き逢つた時と同じやうに、自由に海の上でも挨拶を投げ合つた。三吉は、向うの船の娘たちが一齊に此方を見てゐたので、常よりも一層大きく、不自然に怒鳴り返した。さうして舵をぎゆつと握り締めた。

　同じ濱の友達の釣船にも出逢つた。

『漁はどうぢや？』

『ちつたア釣つた。』

『一こん投げんか？』

『よッしや！』

　艪に廻つてゐた若者が船を漕ぎ寄せると、胴の間にゐたもう一人の方が、生洲から二尾の魚を掴み出して抛りつけた。三吉が舵機から駆け出した時には、海神丸の甲板には、青い大鯖が銀色の腹を返してぴち／＼躍つてゐた。一尾は、丁度飯をすまして部屋から首を出した五郎助が、飛びついて捕へた。

『こいつが二尾ありや、晝は御馳走が食へるぞ！』

　彼は魚を掴んだまゝ、大きな馬齒をにた／＼させて笑つた。

　が、四五事間たつて船が外海に出きつてしまふと、斯んな人間臭い光景は悉く彼等の周圍から消え失せてしまつた。見渡す限り今はもう太陽と大空と海とより外にはなかつた。それと共に、これまでは單に船の横腹でぴちや／＼舌打をしたり、舳にぶつ突かつてふざけたり、潮を持ちあげて騒いで見たり、いたづらつ兒らしい悪戯を續けてゐたに過ぎなかつた波が、急に裏切者のやうに態度を變へ、狂暴な姿で襲ひ

かゝつた。高さは、五六十米突のタンク以下ではなかつた。そのタンクが幾百と繋がつて、非常な長さになつて、一齊に轉がつて來る。而して船に近づくに從つて、脊伸びをして、膨れて、膨脹の頂點で、一瞬間、蛇が鎌首をもたげたやうな姿勢で、きつと身構へをしたかと思ふと、どどどーツと叫んでは船を目がけて雪崩れ落ちた。色も朝の落ちついた群青は全然失はれて、赤黑くどよみ、濁つて來た。――日向灘に近づいたのであつた。

　その時分から風も變つた。今までの北西が眞西になつた。それが非常な勢で吹き募つて、波と競爭で船を弄び出した。

『ちえツ、とんだお客樣ぢや！』

　海神丸の若者たちは舌打をして忌々しがつた。彼等は波なら大抵までは平氣であつた。どんなに狂ひ廻つても、甲板の下まで怒鳴り込んでも、結局波は根のない空騷ぎ屋で、船員たちの胃の腑を早く空にする位が落だと高はくくつてゐるが、風だけは決してさうは行かなかつた。さうしてこの海の暴君に仕へる方法は、悧巧な家來が人間の暴君に仕へる態度を、その儘學ぶより外に仕方のないことを知つてゐた。それは、抵抗せぬことであつた。怒るだけ怒らせておくことであつた。而して幾らかでもその怒をよい方に利用することであつた。海神丸は六枚の帆をそれ〴〵巧みに加減することに依つて、なるたけ輕くその暴威を受けようとした。けれども風は終日力を弱めなかつた。夜に入つて少し落着いたかと思ふ時分には、船は航路から遠く東の方へ流されてゐた。

『えれえ目に逢うたなあ！　本統ならもう今時分は島へついちよる頃ぢやアに。』

『さうとも。この調子ぢや明日もどげンもンかな？』

『吹きたけれや吹けぢや！』

　晩飯をすました後の船室で、かすかなカンテラの光に照らされながら、三人の若者はのんきに寢ころんでゐた。追手が續けば十時間に辷りつける島も、運が惡ければ三日や四日かゝることは珍しくなかつたので、一日流された位、氣にもかけなかつた。彼等は丁度陸の家で爐を圍んで話すやうな調子で話し込んだ。五郎助が、一番多く馬鹿話をした。八藏はむつちりして、をかしくもないと云ふ風をしてゐながら、猥らな話になると、達磨のやうな鬚面をにやりとさせ、目をぎよろつかせた。島のお婆んとこの椿餅の話も出た。が、重に島の女の話が多かつた。そのことだけは三吉にはすべて未知の世界であつた。それだけ初な好奇心をそゝられるのを、彼はまだ汚れぬ若者の氣恥かしさで隱へて、わざと船側の方へ顏を向けて聞かぬふりをしてゐた。五郎助がそれを冷やかすと、三吉は急に小犬のやうに飛び起き、顏をまつ赤にしながら、五郎助の胸にむしやぶりついた。

　その間、舵機の前には船長が立つてゐた。彼はすぐれた調馬師が馬の手綱を取る時の熟練でしつかり舵を掴み、實驗室の科學者の冷靜と注意で、深く空と海を見守つてゐた。月はないが星の美しい夜で、空はその光で一面に白い粉を吹いたやうな影を漂はせてゐた。そのために、まだ晝の怒を收めないで膨れた海は、一層もの凄く眞つ黑に見えた。時々、寒い木枯が、二本の帆柱と三枚の帆布の間を縫つて、鋭い、悲しげな叫び聲をあげる度に、星は黑い海の上で一齊にきら〳〵し、或る怖ろしい意味を暗示するかの如く瞬いた。船長は船乘だけが持つ、獨得な、遠見の利く目で、遙かに水平線と思はれるあたりを熱心に探つた。その線の上の西に面した一點に、ぼうつと彗星の尾を引いたやうな輝の現はれてゐるのを見つけた時、彼は明日もまた西風の強いことを覺悟した。

彼の觀測は誤らなかつた。夜が明けると風は昨日と同じ進路で、しかも昨日に倍する激しい勢で吹き出した。同時に船は夜の間に幾らか取り戻しかけてゐた航路から、瞬く間に押し返され、再び東へ〳〵と流され始めた。どうすることも出來なかつた。怖ろしい風力は、船員からすべての帆に對する操縱の技巧を奪つてしまつた。六枚の帆は、丁度恐い者に脅かされた子供の群のやうに、てんでにあわてたり、騷いだり、身悶えして叫んだりした。彼等は何度も危くなつた。それを皆んなで摑まつたり、ほぐれたりして逃げ廻つた。けれども終に大きな手は彼等に届いた。舳首のジップ帆がまつ先に吹き飛ばされた。帆柱からちぎり取られて、まつ黑な大空に散つて行つた時、それは一片のかんな屑以上には見えなかつた。二時間の後には、メイン・マストに張つた一番大きな帆が飛んだ。夕方には再び舳首の「ステイ帆」がなくなつた。暴風は夜に入つても止まなかつた。

この時分から船長はひそかに最初の計畫を變へてゐた。彼はこの儘風が凪いだとしても、島へ逆戻りをするよりは、土佐へ着けた方が得だと思つた。食糧にしろ、水利にしろ、其處まで行けば、絶對に不足する事はない。明日にも風が變つたら、一二日の内に土佐灣の東の半島に辿り着くことはむつかしくなからうと信じられた。たゞ正月の雜煮餅を食ひ損ふ若者たちの失望を思ふと、可哀想でもあつたので、彼は不斷よりは氣輕く、餘計な冗談口を利いたりした。

『五郎助、今度歸んヂ見い。道頓堀ンをなこかン子紙が來ちよるぞ。おれン天眼通ヂ當てたンぢやけン、間違ひはねえわい。』

『八もこれヂ中々口利きちや。今度一つ村會議員にでン出るがいゝ。おれが五郎助と一緒に運動しちやらうたら。』

『おい、治吉、珊瑚樹ウお土産イ持つチ歸なうと思ふなン、明日からン海ン底ウ見張つちよれ。此處ン近所は一面ン珊瑚樹林ぞ。』

こんな調子であつた。一體に無口で、それが自然の貫目になつてゐる彼も、場合で碎けると、誰も及ばぬ愛嬌と愉快を表はした。

幾らか騷ぎ氣味になつてゐた治吉も、彼の斯んな言葉を聞くと、平常の笑ひ顏をとり返した。五郎助も馬鹿のやうににこ〳〵した。たゞ八藏だけは佛頂面をしたまゝ、にこりともしなかつた。絶えず忌々しさうに、吹きめくる風と、果てしなく暴れた海と、物凄いちぎれ雲の飛ぶ大空を交る〳〵眺めてゐた。

四日目の朝になると風は北に變つてしまつた。これは土佐方面にかけた船長の希望を全然打ち挫いたものであつた。ひどく寒くなつて、一面灰色にかき曇つた空からは、時々霰が降つて來た。

『何ちふ天氣ぢや、こりや、霰まぢ降りくさつチ！』

八藏は舵を摑みながら、人でも怒鳴りつけるやうな聲を出してぷり〳〵怒つた。彼はこの三四日の忌々しい天氣に對する無しや苦しやを、飛んでもないその霰におつかぶせたのであつた。夜は船長の好みで、ほんの少しばかりあつた安メリケン粉をこねて、熱い團子汁が出來た。

『この鹽梅ぢや、うちの方は雪ぢやなう。』

彼等は茶碗をふう〳〵吹きながら、二言三言故郷の話をした。三日たてば元日だと思つたけれども、誰も長くその話題に觸れるものはなかつた。船に乘つた以上、何時何處に家はない。――船乘仲間のこの信條を少しでも亂す話は、殊に斯う云ふ場合には避けなければならない、と云ふことを、彼等は皆本能的に知つて居た。八藏さへ幾ら不平顏はしてもそれだけ

は破らなかつた。明けの日は寒さは幾分和らいだが、その代り空は一層險惡に曇り、波が氣狂ひじみて高くなつて來た。海はもう海ではなかつた。長い連峯と、底のない谷と、鋭い頂上と、山の背と鞍部とが入り亂れた。而も怖ろしく尨大な山岳帶に一變して見えた。その峯の一つに攀ぢ登る時、船は殆んど九十度に近い角度に傾いて躍り、落ちる時は辷り板から辷る子供のやうに、まつ逆樣に深い谷に轉げ込んだ。それを見ると厚い眞つ青な水の壁は、四方八方から崩れ落ち、その船を卷き込まうとする。船は卷き込まれまいとして、身をもがいて爭ふ。途端に噴煙のやうな潮の柱が、舷の眞つ下から湧き立ち、船は危く救はれたと思ふと、それはただ第二の峯の鞍部に乘りつけただけのことであつた。船は新たに頂上まで突き上げられる。また辷り落ちる。この轉落と昇騰は、目まぐるしい速度で繰り返された。而してその度に彼等の目の前には二つの相異なる水平線が現はれ、まつ白い水沫の外で相交錯した。一つは頭の上にあつた。今一つは足の下にあつた。

五郎助と八藏は舵にしがみついてゐた。彼等は波に浚はれないやうに、お互ひの身體をつないで、その綱をまた側の碇に縛りつけてゐた。彼等は雨天用の合羽を着てゐたにも拘はらず、それでも全身づぶ濡れになつてゐた。波は何度も彼等の頭の上を飛び越えた。しかも彼等はしよげてはゐなかつた。寧ろこの三四日にない位に活氣づいてゐた。八藏も決して今は不滿らしい澁面はしてゐなかつた。彼の鬚面は引きしまつて明るく、目は男らしい勇氣に輝いてゐた。捉へどころもなければ、目にも見えないで、それで彼等を好き自由に飜弄する風に比べれば、波はつきり正體を現はして挑みかゝるだけ愉快に戰へるのであつた。五郎助の顏さへ一人前の戰士らしく凜々しく見えた。

船長と三吉は、船具を流されぬやうに固めたり、水の侵入を防いだりするのに忙しかつた。波をくゞつて身を動かすだけ、たゞ舵にとりついてゐるよりは危險が多かつた。けれども彼等は八藏や五郎助の組に劣らず上機嫌に働いた。危險が多ければ多いだけ沈着になり、また素ばしこくなる樣にさへ見えた。餘り傾斜の甚だしくなつた船の安定を保つためと、今一つは三枚の帆を失つて、半分以上奪はれた航行力を償ふために、船首に錨綱を曳かせて潮流の中を流さうとした時には、船長は殆んど怒濤の間に身を逆にして働いた。三吉は船長の腰に結びつけた今一つの綱を、船首の太い鐵の環に縛りつけて、それをしつかり摑んでゐた。

「そら來た！　どつこいしよ！」

波が全身におつかぶさる度に船長は囃した。三吉も瀧のやうな水しぶきを浴びながら白い齒を見せて笑つた。綱は終に結びつけられた。今海神丸はその長い角を持つて不思議な鳥のやうに見えた。その鳥が、彼女の胸の下から湧き上る怖ろしい潮の塊りに突かれ、身を空に反らしてもだえる度に、角は蛇のやうにくねつて躍り上り、腹立たしげに海を叩いた。

波だけならそれでもまだどうにかなつた。けれども、夜明け方からその波に西南の强風が加はつて、殘つてゐた前部の廣い帆と、船首の最後の三角帆を吹き飛ばした時には、船長は今度の航海がいよ／＼困難に陷つたことを考へさせられた。けれども船がこの儘どうにかしてこの境遇に浮んでゐさへすれば、その内には天氣も恢復するだらうし、たとひ不運な風と波が續いて、船は打ち碎かれ、たゞ板子一枚きりになつたとしても、小笠原島通ひの船か、または自分と同じやうに航路を迷ひ出た何處かの船に見出されないとも限らない。――否、決してこの船がそれまで淺ましく潰れる筈はない。やつと

一昨年船下ろしをしたばかりの新造だ。その上金物でも、木材にも此の等級の船としては贅澤過ぎる位金をかけてあるのだ。——船長はこの點に強い自信をかけてゐた。それ故たゞ警戒を要するのはこれ以上遠く行かないことであつた。決して日本の領海を離れないやうにする事であつた。それに就いて最も怖ろしいのは、今吹き出した風であつた。若しこの風がこの儘の勢で二三日も續いて、船がそれに乘つて走つたとしたならば、彼等はどこの海の果へ吹きやられてしまふか分らない。でなければ顛覆してしまふに極まつてゐる。——

『三吉、鋸ウ持つチ來い。五郎助も來い。』

　この心配が船長に最後の決心をさせた。船員室の中でやつと一息入れてゐた二人の若者は、彼の叫聲でまた立ち上つた。彼等は船長と一緒に身體を結びつけた。斯うして三人で甲板に出ると、船長はメイン・マストの附け根を三吉の渡した。鋸で甲板とすれ／＼のところから挽きはじめた。彼はこれ等の不穩な作業をちつとも悲しむ風もなければ、周章てた様子もなく、丁度木挽が小屋で木を挽く様な態度で行つた。倒れかけた帆柱は三吉と五郎助とで受留めた。頂上に繋いであつたトップ・マストは、三角の小さいトップ帆と共に取り外して大事に仕舞ひ込んだ。本統を云ふと、船長は前部の今一本の帆柱をも切りたかつたのであつたが、それだけは思ひ留まつた。若し天氣が直つて、遠くに汽船の煙でも見えた場合には、その柱を信號臺として使ふ必要があつたから。

　夜が明けると珍しく南風になつて、波の高い割に風は凪いで來た。船長は昨日大事に取りはづしておいたトップ帆を前部の帆柱の上につけると共に、船首に曳かせてあつた錨綱を引きあげ、北に向つて幾分でも正しい進路を極めようとした。けれどもどこまでも運が悪かつた。午後になると、風は西北の暴風に變じ、その上凄まじい雨が土砂降りに降つて來た。これは三種類の敵が一時に襲ひかゝつたやうなものであつた。風の荒し殘した物は波が荒した。波の手の屆かぬところは雨が引受けた。色んなものが洗ひ流された。船首に置いてあつて、今日までどうにか無事であつた一樽の澤庵漬も、その日の波に浚はれた。何よりの打撃は、前檣の頂にとり付けたトップ帆が終に吹き飛ばされたことであつた。これで船には一枚の帆もないことになつた。斯うして海神丸はたゞ一本の帆柱を持つのみで、笹の葉一枚を水に浮べたと何んにも變らない、無能な、純然たる漂流船となつてたゞよひ始めた。

　その夜、三吉は米櫃の米がもう後一斗とは殘されてゐないことを叔父に報告した。

『よし！　そんなン明日かン粥にしよ。』

　船長のこの命令は八藏の激しい反對を買つた。

『今エなつチ、そげン物ウ食ふチたまるか！』

　彼は斯う叫んだ。今一度しけに逢へば到底助かる見込みはない。その上この天氣模樣ではいつ何時暴れ出さないとも限らないのに、米を食延ばして何を待たうと云ふのか。どうせ死ぬものなら出來るだけ旨い飯を食つて死なう。今の場合それがせめてもの樂しみだ。人間の樂しみと云ふ樂しみから隔離された、さうしていつ死ぬか分らない自分たちの、たつた一つの望みはそれのみだ。

『なら、五郎助、さうぢやねえか？』

『さうともよ。粥とにんじんはおいン、一番好かんもンぢや。』

　その好かぬものを食はうと云ふ人より、好きなものを食はうと云ふ人に同意するのは、この場合に取つては寧ろ當然すぎることであつた。

『五郎助、われまヂ何ちふこッちや、そげン極道ロウきいチ濟むと思ふのか？』

船長から斯ら睨みつけられると、五郎助は女の子が叱られたやうに顔を赤くして、それで憫みを乞ふやうににや〳〵した。が、八藏はどこまでも腰が强かつた。

『何がなんでン、死ぬ時イお粥腹ぢや死にたらねえけンな。』

彼は昂然として云ひ放つた。

『たつた七八日海の上をぶらついたチ、八、われやもう死ぬ時のことまヂ考へちよるのか？ けた糞ン惡い！ 何ちふ馬鹿たンぢや！ それヂ船乘面が出來た話か！』

船長は若者の氣先をへし折る積りで、わざと嚴めしく罵倒した。最後の一句は八藏に取つても一番痛いところを衝かれた筈であつた。けれども彼は默りはしなかつた。

『痩我慢を張つたチ何イなるか？ こげンしけイ出逢うチ、帆ぢやン、マストぢやン切つチしまうチ、その上何處とも分らん海まヂ流れチ來チ、何んぼ船乘でン生きちよられる道理はねえ。わしにやもうちやんと胸のりがしちよる。』

『それが臆病神の取り附いちよる證據ぢや。八、胸イ手を當てチ、ゆう考へチ見い。おれなざ、どげン目に逢うたチ死にやせんぞ。金比羅樣アついチござると云ふ氣ヂをるけン心丈夫なもンぢや。粥をすゝらうが、水を飮まうが、よしんばこの船が叩きこはされチ板子一枚にならうが、ぢつと辛抱しチ待つちよらにやならん。短氣を起しチ無茶ウすりや、何んぼう金比羅樣が助けうツ思うたチ、助かる前に自分たちヂ身を滅ぼしチしまふばッかりぢや。助かる命も助からんわけイなる。そげン馬鹿げたこたアおれにや出來ん！』

船長の言葉には强い信仰と飽くまで生きようとする者の烈しい願望が燃えてゐた。その話に一番打たれたのは、一番年の若い三吉であつた。彼の、ともすれば怯えようとする心は明るくなり、自分の叔父に對する新たな信頼と、一種の英雄崇拜に似た感激で、愉快にさへなつた。同時にその甥である自分が決して弱音を吹いたり、自暴自棄の心を起したりしてはならないと云ふ自尊心が、彼を雄々しく、また事實以上に落着いて振舞はせた。五郎助でさへも船長の言葉を成る程とは聞いてゐるらしかつた。たゞ八藏だけは最後まで主張を枉げなかつた。

『理窟ウ並ぶりや限りやねえ。わしやたゞ粥は食はんチ云ふだけぢや。』

彼等は夕飯をすましたばかりで、皆船室に集まつてゐた。常の航海なら、その部屋は毎晩彼等の娯樂室になつて、のんきな笑話をしたり、船乘仲間の流行歌をうたつたり、時にはまた五郎助の下手な義太夫がはじまつて、皆んなに腹を抱へさしたりするところであつた。今度でも初めの一二日は同じ狀態が續いてゐた。けれども不運な天候が長引くに從つて、その部屋の夜はだん〳〵淋しく、陰鬱なものに變つて行つた。船長は今はもう食後三十分とは落着いてゐないで、直ぐ隣りの自分の部屋へ引き上げた。後に殘つた若者たちにも歌ふ餘裕はなかつた。話も多くはしなかつた。天井から吊された角燈の暗い光の下で横になつたり、また一人ぽつんと趺坐をかいたりしたまゝ、三人が三人とも默り込み、めい〳〵の思ひに耽つてゐた。三吉や五郎助は、それでも頓ては普通の健全な眠に入ることが出來たが、八藏はいつまでも目をぎよろつかせてゐた。或るいら立たしい悔恨と、癒やされぬ不平がその眠を邪魔してゐた。

『馬鹿らしい！ 彼奴の辯口に引つかゝつチ飛んだ目を見ちよる。』

彼は家畜のやうに鼻を鳴らして怒つた。――

彼奴と云ふのは船長のことであつた。

一切の原因は、八藏が本來海神丸の乘組員ではなく、臨時雇の船乘だと云ふことにあつた。彼は隣村の者で、海神丸に乘り込んだのも、船がこの前門司に大豆を積みに行つた時からであつた。彼は今年はもうそれつきりで船を下りて、家で年越酒を飲み、搗き立ての正月餅をたらふく食ふのを樂しんでゐた。それを船長が無理に引つ張り出したのであつた。

『年寄や女子供ぢやあるめえし、今かン爐ばたヂ正月ウ待つちふこつがあるか。人かル笑はれらぞ。さあ、もう一遍行つチ來う。島なンほんの二三日ぢや。大阪船でン朝鮮船でンまだ一艘も戻つちよりやせんぢやねえか。あんなンが戻るまヂにや、こつちも戻られる。正月錢は半文でン多い方がよからうが。』

八藏は一旦坐つた家の爐傍を不承々々に立ち上つた。あの時何故頑張つて陸に留まらなかつたか。――それを思ふと彼は腹立たしくてならないのであつた。

『ふん、飛んだ正月錢ぢや。冥途の渡し賃にもなりやせん。』

彼の荒い執念深い心には、死の恐怖よりも、寧ろこの忌々しさの方が先立つて働いた。而してそれが彼の態度をだん／＼依怙地に、圖太くして行つた。船長にも憚らず突つかゝつた。――粥の問題はその一例に過ぎなかつた。

船長は彼の心持の變化を十分知つてゐたので、子飼の若者なら頰桁の一つもひつぱたかないではおかぬところを、彼には我慢した。この騷の內で醜い內輪喧嘩でもあるまいと思ふのであつた。たゞ今夜の態度だけには耐へかねた。それで彼は部屋を出る時嚴しい聲で三吉に命令した。

『三吉、八が食はんなル食はんでン遠慮は要らん。明日ン朝かン屹度粥を炊けや。分つたか？』

ドアを開けて自分の部屋へ入らうとした時、彼はふと或る事に思ひついた。餘つ程引き返して、三吉を呼んで注意を與へようかと思つた。けれども自分ながら餘りに卑しい想像に恥ぢてその儘にした。

夜が明けた。彼は矢張り手を盡さなかつたのを後悔することになつた。八藏はその朝に限つて一人で先に起きて、自分で飯炊をした。三吉や五郎助が目を覺ました時には、針のやうな堅い飯が三升釜に一杯盛り上がるほど炊かれてあつた。

併し粥を炊からが飯を炊からが、どちらにしても數日の後には彼等は何處を探しても一粒の米をも見ることは出來なかつた。ほんの島まで行く積りであつたので、初めから多くも用意はしてゐなかつた。それでも米は一俵近くあり、他には味噌が八貫ばかりと、里芋や大根や、菜つぱ類が一叺と、門司の食ひ殘しの澤庵が一樽――、波に淩はれたもの、――なほまた金比羅樣のお神酒と云ふ名でいつも少しづつ持ち込むことになつてゐる、彼等の晩の樂しみ酒が二升足らずあつた。米の盡きた後は、彼等は三度三度味噌汁に里芋を入れて啜つた。

今度は水が乏しくなつて來た。雨は最後の暴風雨以後はもう一度も降らなかつた。而して出來るだけ節約したにも拘はらず終に斷水の日が來た。もう半分飢餓狀態になつた彼等の咽喉には潮は通らなかつた。それは食道の乾びた粘膜を刺戟して、針で突き刺されるやうな疼痛を與へた。彼等は釜で煮たてて、一種の蒸溜法に依つて、せめて少しの水をでも手に入れようとしたが、それも成功しなかつた。その上天氣は順調に復して、每日青い空が續き、風もなく、波も穩やかで、暖かでもあつた。それだけ又、彼等にはいつ雨が待ち受けられるか見當が

つかなかつた。
　この時分から、船長は強い覺悟をした。若し今度の遭難が船乘としての自分の受けなければならない運命であるならば、悦んで受けてもよい。兄たちも皆んな海で死んだことだ。――彼の兄は朝鮮沖に漁に出たまゝ行方不明になつた。叔父は日露戰爭の時御用船に乘つてゐて、その船と共に沈んだ。――けれども、いつ死ぬとしても、せめて末期の水だけは飲んで死に度い。自分は兎に角として、あの若者たちにそれだけは十分飲ませた上で死なせ度い。彼はこれをこの頃の金比羅樣のお祈りに入れてゐた。
　すると一晩夢を見た。彼の前には象頭山の青々した山が聳えて、木立の間からは琴平神宮の莊嚴な宮居がちら〳〵透いて見えた。丁度中腹の噴水のあるあたりの景色が、殊にはつきりと見えた。噴水には水が涸れてゐた。此處にも水がないのだと思ひながら船長が悲しんで佇んでゐると、何處からともなく一つの聲があつて、
『水はあるぞ。心配することはねえ。腹一杯飲ましてやるから待つちよれ。ほら、この通りだ！』
と叫んだかと思ふと、涸れた噴水から、さつと一筋の水が噴き出し、見るまにそれは瀧のやうに四方八方に迸つた。船長は餘りの嬉しさに我を忘れて駈け寄らうとすると目が覺めた。まだ暗かつた。彼はこれが若しかしたら神樣のお告げと云ふものではあるまいか、と思ひながら、床の中で夜の明けるのを待つた。何んとなくよい事がありさうな氣がしてならなかつた。
　が、明け放れた朝は近頃にもました晴天で、何處を探しても雲の影一つ見えなかつた。これでどうして雨の降つて來る筈があらう。――船長はすつかり失望した。彼は昨夜の頼もしい夢の話を口に上せる勇氣さへなかつた。さうして泣き出したいほど落膽して、さう云ふ場合にはその表情を他の者に見せぬために彼がいつもするやうに、部屋に閉ぢこもつて寢臺に打ち倒れてゐた。併し彼はまだ諦めきれなかつた。それで時々甲板に出ては、目を八方にくばり、空模樣を窺つた。
　丁度午後の三時と思ふ頃であつた。――船の時計は、八角時計も、自分の懷中時計も波をかぶつて錆びたり、船體の動搖で針が留まつたりして利かなくなつて以來、船長はコンパスで太陽の位置を計つては、僅かに時間の見當をつけてゐた。――北の空に當つて一滴の墨汁を落したほどの小さい點が現はれた。彼の[illegible]探り慣れた目は、譯なくそれを見つけ出した。彼は直ぐ雙眼鏡を持ち出して一心にその一點をねらひ詰めた。同時に餘りの嬉しさに大聲をあげて叫んだ。
『見ゆるぞ！――皆んな來らい。見ゆるぞ！』
　すべての用事を失つて、今は毎日甲板に立つては當途のない船と島を探すのを仕事にしてゐた若者たちは、この聲に驚いて彼の周りに駈け寄つた。
『島か？』
『船か？』
　彼等は興奮して口々にわめいた。
『雲ぢや、雨雲ぢや！　雨が降るぞ、雨が降るぞ！』
　船長は殆んど我を忘れてゐた。若者たちはもうその時には彼から雙眼鏡を借りる必要はなかつた。一點の雲は忽ち鶩の翼位に育ち、續いて百疊敷の絨氈ほどに擴がり、その絨氈がまたくる〳〵と無限に廣く押し擴げられると見てゐるうちに、天の一方はまつ黑に塗り潰され、太陽は消滅し、それに代つて、風の一軍が空を占領した。それからまた半時間にもならぬうちに物凄い豪雨がやつて來た。船長をはじめ若者た

ちはこの瞬間にはすべての苦痛も、悲しみも、不幸も忘れ、瀧のやうな雨の中を躍り舞ひながら、水を集めた。もちろん飲みたいだけがぶがぶと飲んだ。夕方雨が上つた頃には、彼等は七八升の米櫃ぎ櫃一つに、一斗入の醤油の空樽二つに、四斗入の荷負ひ櫃一荷に、一升入の徳利三つに、その他船内にある容器といふ容器に悉く水を湛へることが出來た。

その後で船長は彼等に自分の昨夜の夢の話をした。

『一昨夜不思議があつチ見りや、まあ氣を落しちやならんぞ。金比羅様にた救りおれたちのこつや心配しチドさるのぢやけンの！　有り難う思うチ、皆んな信心をしチ見りい。』

彼は無邪氣な調子で、諭すやうに、また憫むやうにいつた。若者たちは感動した。八藏までが殊勝に頭を垂れて聞いた。

けれども若者たちは、この感激を長く持ち續けることは出來なかつた。水が豊富になつて彼等の苦しい戰ひが輕くなり、その上いつでも飲み度いだけ飲まれるといふことになると、神に對する感謝の念もいつとなしに消え、彼等の心はまた絶望的な悶えに返つて、一番恐いのは、船中の一切の用事に[illegible]心の[illegible]しやうがないことであつた。昔しの天氣でもいけなければ、それに敵對する必要上からでも却つて氣が引きしまつたかも知れなかつた。が、毎日美しい日ばかり續いた。明けても暮れても目に入るものは空つぽの無限に廣い二つの空間――空と海、その間にたゞ一つ大きな鉄のやうに留つてゐる太陽のみであつた。人間や、犬や、猫や、馬や、山や、河や、野原や、草や、樹や鳥や、あらゆる物象があれほど豐に充滿してゐた世界は何處に消滅したのか。――彼等は其處から追はれてもう何千年も經つたやうな氣がした。この空虚な思ひと、いつ其處から脱せられるあてもない、苛立たしい怒、悲しみ、嘆き。どの漂流船の船員をも半分氣狂ひにしないでは置かないその異常の怖ろしい發作が、今漸神丸にも襲ひかけてゐた。味噌と甲芋の量がだんだん乏しくなるに從つて、狀態は一層悲劇的場面を増して行つた。

船長は八藏の無謀な飯盗に懲りて以後に、殘りの食料を全部自分が保管して毎日の分量だけを、それも極度に切り詰められるだけ切り詰めた量を、その度に三吉に渡すことにした。これが八藏を憤らせた。彼は盗ふことをはじめた。丁度犬のやうに鼻をくんくんとさせて、當りをつけた場所を根氣よく探しあるいた。味噌の匂ひですぐ嗅ぎつけられた。所詮、船の中ならば、何處に隱してあらうとも、彼には自分の懷を探ると同樣に容易なわけであつた。船長は終に自分の部屋に持ち込んだ。自分がその場所を離れる時には三吉に番をさせた。

『畜生、おれたちには、醤ン洗ひ汁ンやうな味噌汁ばかり吸はしちよいチかン、自分たちゃ後デ二人デ好きなほど吸うたり、食うたりするに相違ねえ。そげン馬鹿々々しい話があつチたまるか。なう、五郎助』

『まあ、そげえ云うたチ向うは何んちうたかチ船長さんぢやけン仕樣がねえわい。』

五郎助のこの返事は一層彼を怒らせた。

『馬鹿たンが！　貴樣がそげン量見ぢやけン、二人かンおれたちが踏みつけられるッちや。へん、船長さんが何れたもンかッ！　たつた二艘五十噸で船長になれるなン、偉ンそだ爺ひでン、一人前らず船長ちや』

[illegible]丸は今の[illegible]が最初ではなかつた。彼は一の船は、三年前に大阪に生存者が[illegible]で行く途中、[illegible]で俄に淺水が入つて、船火事を起して[illegible]になつた。第二の[illegible]丸たる現在の船は、彼の[illegible]と[illegible]を知つてゐる島の問屋[illegible]

や、大きな商家が集まつて拵へてくれた頼母子講の掛金から出來上つたものであつた。一口二圓五十錢の掛金で、彼はほんの名前を連ねる意味で一口しか入つてゐなかつた。八藏の罵倒は之を意味するのであつた。

『何でンいゝ。おりや默つちやをらん。これかン船長に逢うチ、うんと云うちやる。われも一緒についチ來い！』

『ついチ行チ、おれイどう云へちふのか？』

『阿呆！――何んでンいゝけン來い。』

二人は立ち止まつて、ドアを開け、後の船長室に出掛けた。其處には三吉が一人悲し氣な顏で、足を投げ出したまゝ壁に凭りかゝつてゐたが、入口に現はれた二人の姿を見ると、彼の顏色がさつと變つた。部屋の寢臺の下の蒲團入には味噌と里芋が隱してあつた。若い三吉は或る怖ろしい想像に膽を消したのであつた。

『おツさん――、おツさん――。』

彼は野兎のやうに部屋から飛び出し、けたゝましい聲で叔父を呼び立てた。船首に立つて、いつものやうに島と船を探してゐた船長は、その聲を聞きつけると驚いて驅け戻つた。

『われたちや何事か！　二人揃うチ？』

彼は入口に立ち塞がつてゐる彼等を尻目にかけながら、立ち留まりもせずその儘ずつと奧へ通つて、金比羅樣の下に趺坐をかいた。

『話があるなン、まあ入つチ坐つたなルよからう。それとも坐つちよられンほづ急な用事でン出來たンか？』

彼は斯ら云つて一人でから〳〵と笑つた。この濶達な笑聲に一番に引き入れられたのは五郎助であつた。事實、彼は八藏がどんな重大な用事で自分まで引つ張つて來たか、その瞬間まで氣がつかないでゐたので、にや〳〵して、そのまゝ坐り込んで馬鹿話でも始めさうな樣子を見せた。八藏は忌々しさうに愚鈍な相手を睨みつけた。さうして自分だけは丸め込まれないぞと云つた調子で、猛々しく船長に突つかゝつた。

『わしたちや、食ふ物ウ分けチ貰ひに來たンぢや。』

『ふうん。』

船長は驚かなかつた。彼は鋭い目できつと八藏の鬚面を見据ゑながら反問した。

『と云ふと、味噌も芋も半分わけにしチ置からちふのぢやなう？』

『さうぢや！　こげン何處ン世界の果とも分らん海まヂ引つ張つチ來られチ、そン上食ふ物まヂお前と三吉にいゝやうにせられちや、死んでン浮ばれん話ぢやけンな。今ンうちイお前たちン分はお前たちン分、わしと五郎助ン分なまたその分と、苦情のねえやうに分けチくだんし。』

船長の鋭い鷹のやうな目の中がちよつと曇つた。『八、わりやこの體らくの中デ、おれたちが芋の一つでン餘分に食うちよると思ふのか？』と云つてゐるやうに見えた。が、彼は言葉には出さなかつた。

『よし！　それもよからう。早速分けちやるけン、われたちン入れ物ウ持つチ來い。』

五郎助は一つのざるを取つて來るために追ひ立てられた。すぐ持つて來た。それから船長の命令で三吉は蒲團入からすべての貯藏物を持ち出した。味噌はもう二百目足らずしかなかつたが、里芋は儉約して食べてゐたのでまだ三升ばかりあつた。彼はそれを一つ〳〵數へ上げてきつちり二等分した。その他に今一つ意外な分け前が附け加へられた。それは、三吉が急に思ひついて炊事場の隅から持つて來た梅干の種子であつた。船乘仲間では、梅干の種子を海に捨てることは天神樣が嫌ふと云ふ昔からの云ひ傳へを守つて、決して海の中へは捨てなかつた。海神丸でも勿論捨てないで、しやぶつた後の種

子は皆一纏めにして一つの空罐に入れてあつた。三吉の思ひ出したのはそれであつた。まだ幾らか鹽氣の殘つた、その梅の實の種子は、今の場合何よりの珍味であるべき筈であつた。數を見ると丁度六十あつたので、それも等分に三十づつ取つた。たゞ水だけはまだ十分あつたし、また雨が降らないでもないと思はれたから、今までの通り共同で使ふことにした、それで取引がすんだ。五郎助は味噌と里芋と、梅干の種子で八分目に滿たされた小さいざるを見ると、米の千俵も貰つたやうに嬉しさうにしてゐた。

『おい、おい、八！』

二人が船首に面した方のドアから甲板に出て行つた後で、船長は急に大きな聲で呼び留めた。八藏は振り返つた。ざるを抱へて先に立つた五郎助も、一緒にぼんやり顏を向けた。

『もう一遍念を押しちよくが、もうこれツきりだぞ。それが無うなつたチ、此處にやもうやるもなア何んにもねえのぞ。それこそ帆綱でン食ふより外にや仕方がねえのぢや。分つたか？　そンこつウ忘れのえぞ！』

八藏は返事もせず、ふゝんと云つた冷然とした態度で身を返した。船長は、二人の姿がすぐ隣りの船長室には入らないで、向ふの船首の艙口の方へ遠ざかるのを見送つた。彼はすべてを知つてゐた。これから彼等が何處へ住まはうとしてゐるかを。――また今一つのことをも知つてゐた。彼等の手に委ねた以上、食物は三日とはないことを。――併しこの場合、要求を拒むことは出來なかつた。彼等は當然分け前を取らうとするに外ならない。たとひ彼等の危い運命を延ばすためにしろ、無理にその權利を保留しようとすれば――それには一人の相手が餘りに愚か過ぎ、今一人はまた餘りに狂暴過ぎた。船長は八藏が怒に目がくらめばどんな無茶な眞似もしかねない男だと云ふことを心得てゐた。

彼は座に歸ると、三吉と向ひ合ひに足を投げ出したまゝ、いつまでも默つて考へ込んだ。この頃の彼はどんな時でも三吉だけには悲しみや絶望を見せないで、にこ〳〵した風を裝ふのが常であつたが、今日ばかりは隱さなかつた。二十日近くも伸び放題に伸びた髮と鬚で、船の者の顏が大抵變つた中でも、彼の變化は最も著しかつた。日に燒けて、たるみ一つなかつた額や頰の上に、幾筋も苦惱の跡がついた。痩せて青黑くなつた。たゞ變らないのは目だけであつた。目は寧ろ彼の強い意志を證明するランプとして、一層炎々と燃え續けてゐたが、それも今は窪んだ瞼に包まれ、からみ合つた上下の長い睫毛が、その下に圓い隈を作つてゐた。三吉は叔父の顏を見るに堪へなかつた。彼はこみあげて來る涙を脣にかみしめながらぢつとしてゐた。

間もなく海の入日時が來た。船は一しきり火に包まれた家のやうに眞つ赤に燃えた。たつた一本殘つて突つ立つてゐる舳の帆柱は、さながら火焰の柱であつた。焰の一片は開け放した戸口から船長室の中まで侵入した。そのさかんな光線も、室内の默り込んだ黑い二つの像に對しては、陰慘な妖怪じみた赤い背景を添へるに過ぎなかつた。

頓て入日は夕闇に代りかけた。それでも彼等は何身動きもしないで、暗い部屋に元のまゝの姿勢で坐つてゐた。――灯をつけぬことに彼等は既に馴れてゐた。油も、蠟燭も久しい以前に盡きてゐたのである。彼等はまた部屋の戸を締めようともしなかつた。これは彼等の苦惱が立ち上つてそれを締める餘裕を奪つてゐたゞけではなかつた。この邊の海の氣候は日本の六月より冷たくはなかつた。

この日以來、船は二つの家にはつきり分れてしまつた。八藏と五郎助は船員部屋を根城にし

て船首の甲板下に居り、船長と三吉は甲板の上の船長室と隣りの部屋を占めて船尾の方にゐた。仲たがへをした隣り同士のやうに、彼等は往き來もしなくなつた。船首の者等は甲板へ出ても決して船尾の方へは近づかなかつた。たゞ船尾の者だけは日に少くとも二三回は船首へ足を向けなければならない用事があつた。それは、雨の度に骨折つて溜めて來た水槽が、船首に置いてあるからであつた。水汲みには三吉が行つた。三吉は船首の艙口の緣を通る時、下の船室に大の字に横たはつたまゝ、ぎよろつとして彼を見上げる五郎助の目によく出逢つた。一日一日と日が經つに從つて、その目は一層もの凄く燃えて來るやうに見えた。三吉は何んとなしに怖ろしい者に追つかけられる氣がして、出來るだけ足早に其處を通つた。

「三吉!」

或る日、八藏は寝たまゝ大きな聲で三吉を呼び留めた。

『何んぢやい?』

三吉が立ち留まつて覗くと、薄暗い艙口の底で例の目がぎよろつと光つた。五郎助も一緒に寝ころんでゐると見えて、彼の二つの大きな毛脛が八藏の頭の上に投げ出されてあつた。

『われたちン處にやまだあるらうなう?』

八藏の聲は幾らかしやがれてゐた。

『何がや?』

『何がやた何か! とぼくるな! われたちや、おはたちと分けたよりや別イ隱しちよつたに相違ねえ。さうぢやろが? あん時イそれッ出さ せざつたンが、おれン拔かりぢやつた。』

八藏は實際無念さうに口惜しがつた。

『そげンこつがあるか。味噌でン芋でンあれだけかありやせざつたンぞ。おりや譃ウ云やせん。』

『屹度ぢやなら?』

『屹度ぢや!』

一瞬間默り合つた。それから八藏はまた改めて聞いた。

『それが本統なン、われかたにも、もう食ふ物アねえ筈ぢやなら?』

『あン時おッさんが云うたぢやねえか? 何んにもありやせん。おッさんでン、おれでン、こン一二日ア湯ばッかり飲んぢよるのぢや。』

斯う答へてしまふと三吉は急に悲しくなつた。彼は小桶を下においたまゝ、顔に兩手を當てて激しく泣き出した。

同じ狀態は八藏と五郎助の方へはずつと早く來てから、彼等が無理に分割させた食料は、船長の豫言より一日も長くは保たなかつた。彼等は最も激しい饑ゑに苦しみ出した。今では胃の腑は單なる内臓の袋ではなしに、それ自身で貪婪な口と怖るべき巨大な歯を持つた一つの怪物と一變したやうに見えた。彼はしつきりなしに食を求めた。一秒時もその要求を捨てなかつた。他の者達はおとなしく眠に就かうとする場合でも、その生物のみは眠らないで何かしら食はうとあせつた。幾らあせつても、求めても、一嚙みの食物すら運び込まれないことを見出す度に、彼は暗い胸腔の中で牙を鳴らして怒り、自暴自棄になつて荒れ廻つた。この騷で他の者の眠が皆妨げられた。——八藏でも、五郎助でも寝た間も餓ゑを忘れることは出來なかつた。とろ〳〵とすれば直ぐ食ふ物の夢を見て目が開いた。覺めてゐてさへ同じ幻覺に惱まされ續けた。彼等は彼等の三升炊の釜がぷう〳〵吹きこぼれてゐるところや、おいしい味噌汁の鍋がたぎり立つてゐる光景をよく夢見た。また眞つ赤な刺身や、旨さうな匂の立つてゐるねぎまや、ほんがりと狐色に焦げた燒肴や、うどんや、そばや、すしや、牡丹餅や、あらゆる食物を次々に目の前に思ひ浮べた。これ

等の幻覺の特長として、すべてが驚くべく大きく、嵩ばつて、豐富であつた。刺身は小山ほど盛り上つて見えた。寄せ鍋は洗濯盥より小さくはなかつた。また焼肴と云ふと、それが何尾となくあつて、いづれも目の下何尺と云ふ大物で揃つてゐた。彼等はがつ〳〵して、その集團の中に突入した。片つ端からむさぼり食つた。——

このまぼろしの食事は、彼等を一層空腹じがらせ、滿たされない餓ゑに對する苦惱と焦躁をます〳〵深刻に味はせるに過ぎなかつた。

『空腹じいなあ！——何か食ひてえなあ！——い、はもンすき焼が食ひてえ！——ぼた餅が食ひてえ！——なんでンかんまん、あゝ食ひてえ！——』

五郎助は泣くやうな調子で、こんな叫び聲をあげながら、部屋中をのた打ち廻つた。

八藏にはこれ等の食物以外に今一つの別種な物が記憶の底から現はれて、不思議な魅力で彼を引きつけてゐた。それは大阪の築港のごたごたした裏通りの一軒の肉屋の店先で、遠りすがりに見かけた牛の太い股肉であつた。彼は漁村で育つただけに、牛肉を一斤食べるよりは雑魚でも魚を選ぶ方で、年寄たちが四足物を忌むとは違つた意味で、自分から肉を買はうなぞと考へたことはなかつた。それが、奇妙なことに今になつて、その馴れない獸肉の味覺が彼を誘惑しはじめた。血のしたゝる赤黒い肉の塊が削がれて、金串の上でぢう〳〵焼けるところや、白い葱や豆腐やこんにやくなどと一緒に、旨さうに縮みかへつて煮えて行く光景が目の前にちら〳〵した。

『何んぼ旨えもンか分らん。肴よりも餘つ程旨かつたに相違ねえ。今まヂあれウ食はざつたンが殘念ぢや。』

水だけしか口には入れなくなつてから、もう氣重くだるんで來た身體を、大の字にそつくり返らせたまゝ、彼は明けても暮れても同じ食物の妄想に耽つてゐた。三吉が水汲みの度に彼の怖ろしい目を見つけたのは丁度その時分であつた。その目が一日々々と物凄く輝き出したことを感じたのも、三吉の思ひなしのみではなかつた。實際八藏は一つの戰慄すべき考へに捕はれ始めてゐたのであつた。

彼は一日に幾度か頭の上を通り過ぎる三吉を見てゐるうちに、自分の食物の妄想とその少年とを切り離して考へることが出來なくなつた。この頃は暑いため短いあついしになつてゐるので、下からだと一目に見通される三吉のすらりとした兩脚や、青いさるまたを穿いた、まだあんまり瘠せもしない娘のやうなむつちりした丸い股は、八藏の殘忍な興味をそゝつた。あの足の恰好から、股の附け根の工合から、人間も獸も變りはないのだ。——あの築港裏の肉屋の店先にぶら下つてゐた牛の股肉は、たゞあれよりかもつと大きいと云ふだけだ。——斯う思ひながら彼はぢつと自分の頭の上を通り過ぎる今一つの股と足に目を据ゑた。——その瞬間、店先の肉にさつと夕日が照りつけた。肉は、まつ赤な絨氈のやうに燃えた。八藏は歯をむいて、行きなりその大きな肉片に飛びつき、むさぼり食つた。が、それが本統に牛肉であつたか、または三吉の引き裂かれた股であつたか、彼の意識には區別がつかなかつた。

我に返ると流石に彼は自分の怖ろしい慾望に對して身を震はせた。

『こげンこつウ思うチ、おりや鬼イなるのか知らんぞ。』

彼はすべてを眠りに忘れようとして目をつぶつた。けれども餓ゑは熟睡させなかつた。その内に甲板の上を船尾からこちらへ歩いて來る三吉の足音が聞え出す。素足の力のない、[illegible]らか引きずる様な足音が。——その音がうと〳〵

してゐる耳に入ると、八藏の眼はひとりでにぱいいちりと開く。彼は頭の上をねらひ詰めて待つ。

そこへ旨さうな肥つた股と、すらりとした足が通り過ぎる。――彼は胴震ひをした。起き上るのが怖ろしかつた。それで飛び出して手當り次第に食ひつき度いほど空腹じかつた。彼は呻いた。獲物を見つけながら、見す〳〵取り遁した狼のやうに。

この怖ろしい發作は饑ゑに比例して進んで行つた。彼は自分で自分を制しきれなくなると、

『五郎助！』

と大きな聲で呼びかけた。

『何か話さうや。』

彼は談話に依つて紛らさうとした。けれども何を話すことがあらう。食物より外のことは口には上らなかつた。二人は知つてゐる限りの食物の話をした。

『わりや猿ウ食うたこつがあるちうたなら、五郎助？』

『去年疱瘡ン流行つた時、お呪ひぢやアちうチ、婆やんが食はしたンぢや。』

『どげン味のするもンか？』

『どげン味ちうチ、四足の味ア皆んな大抵似たもンぢや。』

『むじなは臭えちふぞ。』

『狸なン食へるがなあ。』

『蛇も旨えもンちふぢやねえか。』

『さうちふなう。日向ン山ン木挽に、眞蛇ウ取つちやかき燒しチ食ふが、鰻かルこうとてン及ばんさうな。』

『さうしチ見りや、生物なン此ン世界中ヂ食はれん物ア何んにもねえのぢやなう。』

『生物に限りやせん、昔の大飢饉の時にや、茅の根ぢやン、草の根ぢやン取つテ食うたちふぞ。おれたちでン、これヂ山の中でンうろついちよるなン、草の實ウ取つてン、木の根をほじつてン、何か食物はあらうがなあ。――さう、思ふと空腹じうヂ堪らン。』

五郎助はおい〳〵泣いた。

『五郎助、まあそげえ泣くな。おれが好いこつウ考へちよるわい。』

どんな好いことを考へてゐるのか。――八藏は口に上せて見て怖ろしかつた。が、彼はその話題を中止することは出來なかつた。

『五郎助、人間はどげン味のするもンぢやろか？』

『石榴ン實のやうン味がするちふぢやねえか。』

『おりやもつと旨えもンに相違ねえと思ふがなう。』

『さうぢやろか？』

『そりや左樣ぢやわい。猿でン、四足でン、あげえ旨えにイ、人間だけ旨ゥねえちふ筈アねえけンなう。おりや、牛肉よりやもつと淡白したもンヂ、肴イ比ぶりや、もつと脂があるちふところぢやねえかと思ふのぢや。』

『そんなン一番旨えもンの筈ぢや。』

『さうぢや、一番旨えもンぢや。』

『あゝあゝ。もうそげン話アしチ吳るんな。話が腹にたまりやせん。却つチ空腹じうなるばツかりぢや。』

『話ばかりぢやねえ、われン量見次第ぢや、そン一番旨え物ゥ二人ヂたらふく食はるゝのぞ。』

八藏は其處までの決心は自分ではまだしてゐない積りであつた。が、言葉が先にそれを極めてしまつた。すると不思議にも彼は何等の氣咎めもなければ恐怖もない冷靜さで話し續けられた。五郎助が怖ろしい企てに仰天して、

『何んぼ何んでン、おりやそげンこたアしきらん！』

と云つて怯えた時には、彼は相手の意氣地なさを嘲笑ひさへもした。

『ふん、弱蟲が！ 何もわれイ殺せちふのぢや

ねえ。彼奴が上ゥ通る時イ、たゞ呼び下ろせちふだけンこつが、何が怖いのか。」

「そげえ云うてン、三吉もむけえねえ(可哀想)ちやねえか？」

『何がむげねえもンか。船長と二人チ今日まチ彼猾いこつばツかりしちよる奴が。味噌でン芋でン、彼奴等おれたちン何倍も取つちよるんぞ。それだけでン殺しチいゝのぢや。――何んでンいゝ。われが怖いンなンわれにや賴まん。そン代り後チ何んにもやりやせんけン、覺えちよれ。」

　五郎助は今彼に突き放されて生きられようとは思はなかつた。彼は終に哀願した。

「まあそげえ云ふな、何んでンわれン云ふこつウ聞くわい。」

「そン言葉ウ忘れんな。」

『忘れん。」

　八藏は、自分に對しては三吉が何んとなしに本能的に警戒を怠らなくなつたのを見拔いてゐた。それ故五郎助を利用するのが必要なのであつた。その夕方、彼はそつと甲板へ出て行つた。彼等が斷續に使つてゐる大きな斧を持つて來た。斧は小さくはなかつたけれども錆びてゐて、その上切り倒した帆柱を薪代りに打ち割つてゐたので刃も缺けてゐた。彼は砥石を探す爲に血眼になつて船ぢうをうろついた。船尾の船底に、もう使はなくなつたがらくた類と一緒にころがつてゐた。この二つが揃ふと、彼は今度は部屋の隅に趺坐をかき、念入りに研ぎ出した。時々立つて舷側の高窓の下に持つて行つては、明るい星の光で刃を透かして見た。最後にそれは、部屋の片隅に突つ込んであつた帆ぎれのぼろの下に隱された。

　夜が明けた。八藏は今朝はいつまでも寢くたれてはゐなかつた。小早に身を起して、三尺をしつかり締め直すと、

「おい、五郎助、起けんか。」

　と呼びながら、仲間の寢ころがつた大きな身體を亂暴にゆすぶつた。同時にきつい壓しつけた聲で囁いた。

「しつかりせんか。もうぢき來る時分ぞ。」

　彼等は長くは待たなかつた。船尾の方には頓て三吉の聞き馴れた足音が起つて、それがだんだん近づいて來た。八藏の目は燃えた。が、彼は成るたけ平氣な態度を裝ふために、わざと舷側の方へ向いて趺坐をかき、朝の湯を沸かすやうな風で瀨戸の小火鉢に火を燃しつけてゐた。部屋ぢう煙がもう〳〵としてゐた。

　終に足音は艙口の上に來た。

『三吉！』

　八藏は素早く聲をかけた。

『何んぢやい？』

　三吉は立ち留まつた。起きたばかりで彼はまだ素つ裸でゐた。八藏は、そのふつくらした身體の肉置を煙の中から食ひつくやうに見上げながら、調子だけは快活に續けた。

「われイ里芋ウやらうと思うチ待つちよつたんぞ。取りイ來いよ。」

『今時どげン里芋があるゝもンか。いらぶかす(欺す)な。」

「馬鹿たンが。われウいらぶかしチ何イなるか。昨日ン夕方おれが砥石を探し歩いちよつたら、がらくた場ン叺ン中かル出チ來たんぞ。三つあつたけン、われにも一つやつちやらうと思うチ取つちよいたんぢやねえか。有り難う思へ。なう、五郎助。」

　八藏がすぐ傍にゐるらしい五郎助に保證を求めると、今度は五郎助の聲で叫んだ。

「三吉、嘘ぢやねえぞ。桜島の里芋があるんぞ。――久しぶりイ食ひたかろうが？」

　この最後の言葉が三吉からすべての推理力を奪つた。殊に、昨日の夕方八藏が何かを探し廻

つてうろついてゐたことは、彼もうすうす知らないではなかつた――彼は終に空の小桶を甲板に置き放しにして、艙口から彼等の部屋へ飛び下りて行くと、
「さあ與りいッそン里芋ウおれイ與りい！」
と泣くやうな聲でせがんだ。
「其處あるぢやねえか。」
「何處や？」
「そら、五郎助ン向側ンざるウ見い。」
『頻たうヂ分らんのぢや。』
三吉は目をしばしばさせてまごついた。その間に八藏の手にはもう斧が握られてゐた。三吉が彼の方に裸體身の背中を向けて、膝をついて、うす暗い艙側の隅に里芋を探し始めた瞬間、斧は振り上げられ、而して打ち落された。怖ろしい叫び聲があがつた。三吉は腦天を叩き破られ、頭から血をかぶつて倒れた。
斧が三吉の頭の後でぎらつとしたと共に、我を忘れてうつ伏した五郎助は、死骸の倒れた音で何んとなしにほつとして、おづおづと顔をあげた。が、血と無慘なその場の光景は彼の恐怖を十倍にした。彼はがたがた震へ出した。震へながら、ヂフテリア患者の咽喉から出るやうな聲で夢中に繰り返した。
「大丈夫か？――死んだか？――生き返りやせんらうなう？」
彼は肉の彈け出した鮪の頭のやうな、眞つ赤な血だらけな頭が、今にももくもくと動き出して、自分を目がけて、飛びかゝつて來さうな氣がしてならなかつた。
「大丈夫ぢや。もう死んだンぢや。」
八藏は平氣な積りでゐた。けれども五郎助に劣らず震へてゐた。實際、生きてゐる間は、鰯一尾以上の生物とも思つてゐなかつた、ちつぽけな三吉が、死骸となると同時に急に不思議な威力を持つて彼に迫つて來たのであつた。手向ひならば、どんな手向ひでも怖れはしなかつた。進んで、闘つて、打ちひしぐまでであつた。が、血だらけの、無言な、冷たい威壓に對しては闘ひやうがなかつた。それだけ怖ろしかつた。彼は一刻も早く後始末をしなければならないとあせりながら、手も足も動かなかつた。どうしてよいか分らなかつた。まして、何處の肉を側から、どちらの股を裂かうのと云ふ慾望などは、全然消滅して、たゞ我ともない戰慄と恐怖の中に數分間すべてを忘れて突つ立つてゐた――彼は斧をさへまた持つたまゝでゐた。
丁度その時、船尾の方で船長が甥を呼ぶ聲が聞え出した。
「三吉、三吉。」
叔父は頻りに呼んだ。死骸の側の二人はその聲に顔を見合せた。五郎助は一層震へ上つた。八藏は却つてその新たな刺戟で平常の意識を取り戻した。何をすべきかを直ぐ知つた。
『五郎助、立たんか。』
彼はうろうろしてゐる仲間をもどかしさうに叱咤しながら、それに手傳はせて、前に繩を隱しておいたぼろつ切れの中に三吉の死骸を卷き込んだ。あたりに迸つた血や、また自分の手や顔に飛んだ血は二人の古手拭でなすり廻して、それも一緒に死骸の下に押し込んだ。けれども斧は隱さうともしなかつた。八藏は血だけを手拭で拭き取つて、いざと云へばまた直ぐにも掴めるやうに火桶の側に置いた。――艙口からは、其處は見えなかつた。
船長は、三吉が水汲に出かけた時には、毎朝の例で金比羅樣の前に熱心に祈つてゐたので、船首に起つた出來事は何んにも知らなかつた。が、彼の可なり長い拜みがすんだ後まで、三吉がまだ歸つて來ないのを見た時、彼は何んとなく氣がかりになつて來た。それで彼は部屋の外に出て呼んで見た。返事がなかつた。帆を失ひ、

その他の種々な漁具も溶けてしまひ、一本の帆柱は根元から切り去られ、僅かに残つた一本が村端れの電信柱のやうにぽつんと突つ立つてゐるだけの空つぽな甲板は、一目で舳首まで見通されたにも拘はらず、三吉の姿は何處にもなかつた。が、たゞ一つの物が、遠くから船長の注意を惹きつけた。それは舳首の艙口の入口に置き放しになつてゐる三吉の小箱であつた。

あの小箱がどうして彼處にあるか？

この不審は激しく船長の胸を騒がした。三吉が水夫達の寝てゐる下の部屋へ遊びにでも行つたか――今の場合、ほそれは有り得べからざることであつた。況してや小箱が船首に近くでもあるならば、海に攫へた波浪がどうかしたはずみで海に近寄るとも考へられなくもないであらう。けれどもその場所には決してさうは考へられなかつた。それなら何故三吉を隠してただの小箱のみを残したか。――分けてもその場所は――人の姿を見せない無情な機械と、今一人の眠るやうな無責任、既に狂うて恐つたり、黒い口を、妖しくも開けてゐる危険な穴の入口に――一つの小箱をば船長の心を搬へ上らした。その瞬間、彼は人間がないものの恐ろしい渦にも怖ろしい記憶と、同時にその事實に近い洞察であつたか――容易に描き出すことが出来た。彼は、三吉の血みどろになつた死骸を見た。ばら／＼になつた手と足を見た。それから引き裂かれた肉を、その肉にしやぶりついてゐる二つの、真つ赤な血に染まつた人間の歯を。――彼は罪人が罪人を見抜くやうにすべてを見抜いた。――彼と同じく激しく、慄へてゐる一人であつたから。

彼は一刻も猶豫出来ないことを感じた。それで部屋に歸つて、常役用の短い銅鞭を掴むと、甲板、彼等の艙口へ突き進んだ。怒りの聲で呼うび叫びながら。

「おい、八、五郎助、三吉を出せ！――三吉ウ出せ！」

其時は下の船具部屋の二人が、死骸の後始末をし終つてから、まだ五分とはたつてゐなかつた。彼等は何の返事をもしなかつた。その沈黙が船長にますく怒りと恐怖を與へた。

「何故黙つてるのか？　三吉をどげえしたンか？　われたち二人が知らんちう筈アねえ――こら、おい、八蔵、出て来い。五郎助、われまデ何んでふこツてゐ　何故返事せんのか？　われたちや、おれの言ふン出来んやうン事ウしれよるンか？　こら、白状しよ！」

船長は地團駄を踏みながら銅鞭で艙口の縁を、打つ叩いた。すると終に八蔵の聲で怒鳴つた。

「八釜しい。――三吉がどげえしたか、おれたちン知つたこつか！　見えんなン自分ヂ探せ。おれたちや三吉の番をしちよりやせん。」

「なにや、八、われアそげン大けン口ウ利かれたわけか？――おれにや何もかも分つちよるのぞ。われたちや三吉ウ殺したンぢやらうが。さあ、どげえか？」

船長は憎みと復讐の念に燃えながらも、その儘飛び込んで行つて打ちかゝるほどの勇気はなかつた。それは求めて猛獣の穴に飛び込むに等しかつた。彼等は待ち構へてゐて、足がまだ艙底に達せぬ前に、彼をも三吉と同じ運命に陥れたであらう。船長は、どうにかして彼等を甲板に引き出さなければならないと考へた。三吉の死骸にその上のむごたらしい汚辱を與へさせないためにも、それが一番必要なことであつた。それにはたゞ一つの方法よりなかつた。船長は傲然な調子で續けた。

「ほら見よ、三吉が死んぢやねえか、何んぼわれでン、した事ウ[illegible]ふひきやう言ちす。まあ出らずへて見よ。[illegible]乗イならこツ[illegible]イ来つちよりや、どん人でン[illegible]見るなナ、よかか、出[illegible]

れ助け合うチ行かにやならんに、われたち二人や、この間ぢうから散々極道口ウ叩いチ、たうとうこげンこつまで仕出かした。おれも今日と云ふ今日は覺悟をした。われたちでン人まで殺しチおいチ、その儘にしうたア思うちやをるめえ。さあ、尋常に出チ來い。甲板に上つチ來い。今度はおれが相手ぢや。三吉ン仇打をしちやる。――何故默つちよるのか。何故上つチこんのか。――怖いのか。』

船長は今度は冷罵と嘲弄を浴せ出した。

『ふん。何んちふ兵兒きれか。われたちや二人ぢや。おりや一人ぢや。それイ何が怖いのか。そげン弱蟲ヂ良う人殺しが出來たなう？　よし、そんなン斯うしちやる。』

船長は摑んでゐた劍鳶をがちやんと向うへ放り投げた。

『さあ、もう素手ぢや、何んにも持つちやをらんぞ。また、われたちが甲板に上つチ、尋常に立合ふまぢや、おれン方から決して手出しやせんけン、安心しチ上つチ來い。八、五郎助。――何んぢや、それでンわれたちやまだ上つチ來きらんのか？――ふん、よく〳〵臆病者が揃うたもンぢやなう。口ばツかりいつも豪さうなこつを云ふチ、恥かしうはれえか？　卑怯者！　骨無し！　海月野郎！』

この時下では一つの葛藤が起つた。それは八藏が怒つて驅け出さうとする、それを五郎助が行かせまいとする、取つ組合ひであつた。これ等の船長の烈しい侮辱は、野獸の穴の入口で立てられる苦しい煙であつた。分けても平常から仲間の強者を以て誇つてゐる八藏の自尊心には到底我慢されない煙であつた。彼は終にからみつく五郎助を突き飛ばして、片手に斧を摑んだまゝ想像されない素早さで甲板に躍り上つた。

『さあ、もう包みも隱しもせん。三吉やおれたちが殺したンぢや。殺しチ食うちやろと思うたンぢや。それがどげえしたか？』

彼は却つて高びしやに食つてかゝつた。斧を振りかぶり、寄らば一打と云ふ身構で、船長を睨みつけて立つた形相は、もう人間ではなかつた。彼は人の心を失ふと同時に人の姿をも失ひかけてゐるやうに見えた。殊に人一倍毛深い、伸び放題に伸びた髮毛や鬚は、肉を失つて平常より一層大きく尖げ〳〵しくなつた眼と共に、彼の上半身を飢ゑたライオンの頭部に變へてゐた。而して咆哮に近い叫び聲で、尚ほ怖ろしい言葉を續けた。

『それが思いなら、何ん一ンいゝやン食ふ構や畏りい。さあ、畏りい。さあ出せ。さあ食はしい――食はしきるめえが！――何んにも有りやしめえが。どげえか！　おれたちや空腹じうチたまらんのぢや。死ぬほど空腹じいのぢや。――こげえなつチ人間でン何んでン構ふこつかあるか。おれたちや食はにやをられんのぢや。』

『われたちや生きながら餓鬼道に落ちたんぢや。』

この一言が船長の云ひ得た僅かな一言であつた。劍鳶は再び彼の手にあつた。

『そんなン、餓鬼道にや誰が落したンか？　皆んなお前のしたこつちやらうが？』

『おれのしたこつか誰のしたこつか見る人が見りや分る話ぢや。』

『ふん、狸奴！』

八藏は終に斧を打下ろした。

『畜生！』

船長は身を躱しながら叫んで、自分からも劍鳶を振りかざして打ちかゝつた。

二人とも普通の歩行では飢ゑてよろめく樣になつてゐながら、敵對では不思議な力が現はれた。

が、彼等は最早、戰はなかつた。丁度その時五郎助は甲板に轉かり上つて二人の間に飛び込んだ。彼は八藏の足にしがみついて叫んだ——

「八、止みい、そン手を下ろせ。——おれたちが惡かつたわい。三吉ゥ殺したなアどげえ考へてン惡かつた。——何んぼ空腹じうでン人間が人間を食ふちふ法はねえ。おれたちや量見違ひをしたンぢや。彼處イひとりヂ居つたら、おりや怖うなつた。三吉が幽靈になつチ出チ來るやうン氣がしチこたへんのぢや。さあ船長に謝罪つチ、もう皆んなヂ仲ゆうしうぢやねえか。——船長、どうぞ堪へチ下さいだんし。わしたちが重々惡かつたんぢや、こん通りイ手をついチ謝罪るけン、お前が堪へちやるちうチくだんし。さうチなけりやわしや怖うヂたまらん。」

五郎助は船長の前に身を投げ出し、濡た甲板の板にすりつけながら、咽び込んで怖ろしく泣いた。この涙に反抗し得る人間は決してなかつた。船長は六連發を下ろすと、いつとなしに目を濕ませて一緒にすゝり泣いた。八藏も謝罪の言葉は出さなかつたが、それでも默つて突つ立つて、頭をうなだれてゐた。

その夕方、三吉の死骸は殺された場所から殺ろされた[illegible]の手に依つて甲板に運び上げられた。叔父は一通の讀經もなしに葬られる甥のために、金比羅樣の御札を一枚死骸の胸に置いた。さうして血に染みた帆きれをその儘の經帷子として、その上を綱で堅く結ばれた上で、死骸は海に投げこまれた。

この出來事は大きな悲しみと共に強い恐怖を船長の胸に植ゑつけた。それは今度のやうな怖ろしい考へが假にも八藏の心に根ざしたとすれば、この失敗でそれがその儘消滅する筈はない。——飢餓が消滅しない以上。——而して今一度同じ事が企てられるとすると今度は自分の番だ。彼は斯う思つたのであつた。彼は臆病にはならなかつた。けれども平常の身體と違つて衰へてゐる上に、兎に角向うは一人ではなかつた。五郎助の涙は長くは當にならない。彼は八藏の一言でまたいつでもその相棒をつとめるに極つてゐた。若し不意に二人に打つてかゝられでもすると打ち勝つ自信はないと思つたので、船長は極度の警戒を始めた。彼は自分の部屋とその隣りの船長室のドアを内から全部釘づけにして、外部からは決して侵入されない樣にした。また自分も滅多に部屋を出る必要のないやうに、殘つてゐた水を二分して、自分の分け前をも部屋の板敷の上に持ち込ませた。それは荷ひ桶の方のと、醤油の空樽の方のと兩方殘つてゐた。空樽に詰めた方は醤油の鹽つ氣と匂が移つて味が惡かつたにも拘はらず、船長は自分にその方を取り、旨い方の水を八藏と五郎助に讓つた。斯うして彼の籠城の支度は出來上つた。

その後は彼は殆んど部屋にのみ閉ぢ籠つてひたすら金比羅樣を念じてゐた。幾ら諦めようとしても、また諦めきつた積りでゐても、その下から猶ほ生きようとする力が押し上つて來た。どうにかしたならば助かりさうな氣がした。今にも突然何處かの島が見えるか、何かの船が現はれて來さうでならなかつた。彼が釘づけにしたドアの一つを内から開けて、よろ／＼と甲板へ現はれるのは、斯うした思ひに居ても立つてもゐられなく感じ出す時であつた。それでも彼は油斷しないで、なるたけ八藏や、五郎助のゐる艙口から隔つた船側に近ついて、四方八方を熱心に探し求めたが、何んにもなかつた。相變らずの、見飽き果てた、空と海と太陽のみで、世界は空つぽであつた。彼はその度に絶望を新らしくしては部屋に引き返した。寢臺に運び上つて寢た。時に依ると一日も部屋から出ないことがあつた。けれども日に、一度は潮に濡れたけ

れども、破れないで完全になつてゐたので、日だけはよく分つた。それに依ると彼等は故郷の海岸を離れてもう四十日以上になつてゐた。彼は又時々風景や若い妻の夢を見た。目が覺めると氣狂ひになりさうなほど懷しかつた。船長は枕に顏を押しつけてはよく男泣きに泣いた。斯う云ふ夢の後では彼の氣持は平常とはまるで違つた程感傷的になつて、現在の孤獨の苦痛が一層胸を刺した。蟲とでも寄り合つて一緒に暮らしたい今の場合に、それも同じ運命を分け合つてゐる同じ難破船の上で、仲間同士が怖れ合ひ、怒り合つて別れ〳〵に住むと云ふのは何んと云ふ因果だらうと、彼はつく〴〵さう思つた。

『八よい、五郎助よい。話に來んか？』

彼は斯う呼びかけたい發作にしば〳〵襲はれた。が、その瞬間、三吉の血塗れの死骸が目先にちらついた。

漂流から丁度四十五日目の日であつた。一二日前から崩れかけてゐた天氣はこの日になると非常な强風になつて、雨は降らなかつたけれども、その代り船で育つた船長すら今まで知らないほどの大浪を作つてゐた。その一つは、部屋の疊の上に横になつてゐた彼が彈仕掛の機械からはじかれたやうにまつ直ぐに突つ立たされて、その惰力で向うの寢臺に膝頭を打ちつけ、その膝頭の肉を骨に達するまでゑぐられた程の激浪であつた。水を貯めた醤油樽は狹い部屋をごろん〳〵轉げ廻つた。船長は兵兒帶を解いてそれで身體を寢臺に縛りつけて、もう二度と彈き上げられない工夫をした。

それから間もなくであつた。五郎助の聲で、

『船長、船長！』

と叫び立てるのが、波の吶喊の合間に聞えた。その聲は終に釘附けになつた入口のドアをどんどん叩いた。

『船長、此處イ入れチくだんし、表ン方にや浪が打込んヂ居られんのぢや。どうず、わしたち二人ウ助くると思うチ入れチくだんし。』

五郎助は叫び續けた。船長はすぐには返事をしないで、ぢつとその言葉を聞いてゐるうちに、最も冷靜な分別を廻らしてゐた。彼は五郎助の言葉を信じた。この浪で船具部屋にゐられる筈のないことも分つてゐた。が、何故八藏は默つてゐるのか――このことは彼の注意を集めさした。が、眞逆にこの騷動の中で、大つぴらに、五郎助に前觸れをさして打ち込んで來る氣遣ひはなかつた。とすれば、彼等は追はれて巢を求めに來た鳥であつた。見捨てる譯には行かなかつた。船長は終に決心して身體を寢臺から解いて戸を開けた。五郎助が先に立ち、その後に八藏が默つて立つてゐた。

が、船長は直ぐには入れなかつた。

「此處イ入りたけりや入らしちやるけん、二人とも裸體えなつチ見よ。」

彼は反抗を許さない嚴格な調子でこのことを命令した。五郎助は直ぐあついしを脱ぎ、しやつとずぼん下を取つて猿股一つになつた。

『よし、入つてジいゝ。』

五郎助は許された。けれども八藏の方はいつまでもぐづ〳〵して裸體にならなかつた。

「八アどげえしたんか？　何故裸體えならんのか？」

船長は斯う促しながら、八藏のあついしの背中が何んとなしに不自然にだぶついてゐるのに目が留まつた。

「八、ちよいと見しい、われン背中ウ。」

彼は素早く手を伸ばして背中を掴んで見た。堅かつた。無理にあついしをめくると斧が現はれた。

「八、こりやどげえしたんか？　わりや何んの用がありやおれん所イ、斧ウ持つチ來たんか？」

船長は怒りと驚きに顔色を變へて叫つた。が、八藏は默つて聞かないで平然と答へた。

「わしかンどけえもする氣はねえけンど、先日ン今日ぢやけン、若しお前が鋼鳶でン振り廻しや、そン時にや何か無うぢや困るけン、持つチ來たんぢや。」

若しその言葉が眞實でなかつたら、それは譃でもしかねない事柄であつた。自分でもしたかも知れない、と船長は考へた。それ故彼は今一度[illegible]。

「眞實そン通りぢやなう？」

「眞實ぢや。」

八藏はきつぱりと返事をした。

「よし、そんなンわれン前で預らすりやよからう。」

彼はその後で、寝臺の下から取り出した鋼鳶とを手拭で包り、それを持つて部屋の外へ出て、八藏と五郎助が見守つてゐる目の前で、海の中へ投り込んだ。

「さあ入れ、そン代りをかしなことをすると聞きやせんぞ。」

四人の者は、[illegible]船長室の狹い部屋へ入つたままで寝た。三吉だけは[illegible]、寝臺の上の方の一つの寝臺と、船長の寝る所と、[illegible]に出る今一つの戸と、開くところは三つきりしかなく、それもきつちり隙間なく出來てゐるために、幾ら波をかぶつても、内側まで濡らされる心配はなかつた。けれどもその一室の起臥しは、船長に取つては怖ろしい生活であつた。彼は自分の[illegible]の加害者であり、同時にまた氣の[illegible]方一つでは、いつなんどき自分の身體に手を下さないとも限らない人間と、身體をすり合せて眠るのであつた。彼は[illegible]に[illegible]も氣を許さなかつた。また武器も斧と共に海に投げ込んだ鋼鳶のみではなかつた。彼は[illegible]を[illegible]にあつた出刃庖丁を別に[illegible]に持つてゐて、[illegible]の時には寝臺の[illegible]の[illegible]に今一枚[illegible]を敷き、間にその庖丁を隠して寝た。

「[illegible]見よ、突いちやる。」

彼は絶えずこの決心をしてゐた。

その内にまた水が乏しくなつて來た。この間の大浪の時に、船首にあつた八藏と五郎助の水[illegible]と共に流されて了ひ、[illegible]以後は船長の[illegible]してゐた[illegible]の水を、三人[illegible]であつた。その[illegible]は、三人が[illegible]てからは[illegible]なつたので、[illegible]の[illegible]に[illegible]ていた。[illegible]三人[illegible]上に横になつて、水を取りに行く時だけ這ひ出して行つては、茶飲茶碗に僅かに一二杯づつの水を大事に吸つた。

その水も頓て盡きる日が來た。

「たうとうこン儘え死んでしまふのかなう！情けねえことぢやなう！」

もうしやがれて、大きく出なくなつた聲をあげておい〳〵泣く五郎助を中央にして、船長は奥の寝臺に、八藏は入口の寝臺に、同じ嘆きと悶えに[illegible]し潰されて寝たほつてゐた。

「けれども思うチ見りや、おれたちが[illegible]のも[illegible]とも知れん。なう八、三吉ン[illegible]あけン目に逢はしたンぢやけン、何んぼ[illegible]信心が[illegible]ちやわい。あゝ、あけンことつせにやよかつた。三吉——許へチ哭りいや。どうず許へチ哭りい。おれたちが悪かつたンぢや。おれが八藏を留めきれざつたンが悪かつたンぢや。三吉、おれア[illegible]ぞ。」

五郎助は夜でも[illegible]に三吉のことを口に上せ出した。三吉[illegible]とするかのやうに、大きく見開かれた目[illegible]上になつて[illegible]あたりを見廻して[illegible]、[illegible]たりした。船長はそれを

聞くと何んとなしに怖ろしくもあれば、不運な甥を痛む心持を新たにされて悲しくもなるので止めた。

『五郎助、三吉のこたアもう云うチ哭ルんな。われがそげえ謝る氣がありや、三吉ンもうどげえも思やせんわい。皆んな因縁事ぢやと思つチ恨みやせんけン、もう云ふな。』

『船長、わしや三吉ウ殺したばつかりイ、死んでン地獄イ落つンのぢやと思ふと、死ぬるのが怖うチたまらんのぢや。』

彼の骸骨に近づいたやうな顔は、恐怖で震へてゐた。

『こげえ空腹じうチ、幾日も水も飲まん位なン、いつそ海にでン飛び込んチ、一思ひに死んだ方がましぢやと思ふけンど、そンこつウ思ふと死にきらんのぢや。怖うぢイ／＼たまらんがなあ！』

『まあそげえ心配するな。誰も一つぢや。』

船長は優しく慰めてやつたが、五郎助の恐怖は決して人事ではなかつたのであつた。平生は船乘の單純さで、船が沈沒すれば死ぬまでのこと、また先の世は船底の下に何處にでも横はつてゐる位にしか考へてゐなかつた問題が、この長い死との睨めくらの間に、だん／＼複雑な姿を取つて彼を脅かしてゐた。先の世は何處にあるのか、ないのか、地獄は、極樂は、子供の時から運命とか神樣とか、人力以上の特殊な偉大な力を信ずることに傳統的に結びつけられて育つた船乘の彼には、來世を受け入れることはむづかしくはなかつたが、それがどんな形象を取つて存在してゐるものか、自分は極樂にやられるか、地獄に追ひ落されるか、すべて分らなかつた。その分らないのが怖ろしかつた。彼は一生懸命金比羅樣にすがることに依つて、その恐怖から遁れようとした。終日祈つてばかりゐた。するとその祈は、先の世の怖ろしい地獄から自分を防いで下さるやうにと云ふ哀願のみではすまなかつた。彼に矢張り死なないで救はれてゐることを祈つてゐた。生き度い一念を捨てきれなかつた。

或る晩、彼はまた不思議な夢を見た。夢の中で金比羅樣が現はれて、サンフランシスコから石油を積んで歸る一つの汽船が、航路を誤つて明日あたり福神丸の近所を通る、救はれるならその船だ、若しそれを取り遁したらもう二度とさう云ふ機會はないぞ、と云つて聞かされたやうな氣がしたのであつた。船長は前のあらたかな水のお告のことを思ひ合せて、勇氣が出た。

夜が明けると彼は夢の話を二人にして聞かした。

『まあ、甲板に出チ見ようぢやないか。あン金比羅樣ン御示しやつたこつが、おれにやどうしてン嘘たア思はれんのぢや。』

三人は連れ立つて、久しぶりで甲板に出た。近頃珍しい上天氣で、透明な大空から降り注ぐ眩しい日光は、衰へた彼等の目を昏く、ちかちかと射た。が視力の調節が出來ると彼等は全神經を悉くその機關に集めて、思ひ／＼の方角を探つた。今三人に取つては自分達を取り卷いてゐる四方の海は、運命の關鍵であり、それを縁取る周圍の圓い一線は、生死を分つ目盛に等しかつた。若しその線のどの一點かに、ほのかな煙が現はれさへしたら。──彼等は氣狂ひじみた願望に燃えながら、ふら／＼する身體を動かしては、或る場所から他の場所へとよろめいて歩いた。僅か二三尺の位置の變化が、目に入る物を變へでもするやうに。而して其處でぢつと暫く立ち留まつて、眺めて、矢張り空つぽで何んにもないのに失望すると、呻いて、目を閉じて、また場所を移して行つた。一つしかない船長の雙眼鏡は手から手へ奪ひ合はれた。

終に、太陽が船の眞上に來る時分まで待つても何んにも姿を見せなかつた時、彼等は待ちあぐんだ。

『何んにも見ゆりやせんにイ、馬鹿々々しいこつウした。』

八藏はその不平と失望を一番に口に出して五郎助にもう船室に歸らうと云つた。

『さあ、もう去ならや、五郎助、いつまヂ待つたチ一つぢや。』

『去ならかなう、――情けねえことぢやなう。』

彼は甲板の上に突き立つたまゝ嘆いた。

『斯らなりや、神様も佛様も當イなつたもんぢやねえのぢやわい。そげン物ウ當イする方が馬鹿ぢや。』

八藏は明かに船長に當てつけがましく云つて、詰らない空騷ぎで、弱つた身體に目暈ひがし出したと不平をこぼしながら、一人で後甲板の船室の方へ歩いて行つた。五郎助は暫く後に殘つてゐたが、それでも三十分もすると、

『船長、もうわしも去ぬるで。――お前も入らんし。』

と誘ひながら、よろ〳〵と八藏の後を追うた。

船長は一人で默つて殘つてゐた。彼は今一度はつきり確かめて見ようとするやうに、前甲板のたつた一本殘つた帆柱の下へ這つて行つて、その柱にすがりついたまゝ圓い水平線の東から北を、北から西を、西から南を、熱心に探し求めた。

相變らず空つぽで、何んにもなくて、青く、遠く、無限に廣いばかりであるのを見た時、彼は帆柱の下に打ち倒れて聲をあげて泣いた。

『こげンいゝお天氣なン、助けてン助けられてン、何んぼ仕事がし好いか分らんと思うたに、よく〳〵運がねえのぢや！』

彼は口に出してくどいて、いつまでも一人涙に暮れてゐた。

それから幾時間たつたか彼は知らなかつた。眠つたとは思はなかつたけれども、眠つたのであらう。彼は一つの汽笛の響で目を覺まされた。

彼はまた夢を見たのだと思つた。けれども身を起して東の方の海を眺めた瞬間、彼の全身の血は一時に躍つた。

『船ぞ！　船が來たぞ！――八イ、五郎助――出チおんか？――』

船長は大聲をあげてわめき立てた。丁度彼と同じやうに疲れて船長室で眠つてゐた二人の若者は、この聲が耳へ入ると跳ね起きて甲板に轉がり出た。船は、――それも三本マスト、黒い立派な貨物船らしい船は、もう一海里とはない彼方に現はれて、且つ自分たちの方をさして近づいて來ることが分つた。

『好ら見よ。此方イ來よんのぞ。』

『本統ぢや、――來よる――來よる！』

『有り難えなあ、有り難えなあ！』

彼等はその方に頸をさし伸ばし、口々に悦んで、躍つて、終には三人ともしがみ合つて泣き出した。八藏さへも純粹な悦びと感謝に顏面を輝かして五郎助と共に船長に抱きついてゐた。船長とても、この大きな歡喜の前に何を思ひ、何にこだはる隙があらう。彼は二人に抱きつかれたまゝ、啜り泣きの合間に、

『嬉しからうが、八？　どげえか？　五郎助も嬉しいか？――誰でンこげン嬉しいこつがあるか！』

と叫んでゐた。が、彼等は幾ら夢中になつてゐても、この際一番に何をすべきか、と云ふことを忘れはしなかつた。二人の若者は船長の命令で船室に引き返すと、二枚の信號旗を持つて來て、豫てそのため許りに殘してあつた帆柱の上へ、それも大事に殘してあつた一本の綱で引きあげた。青と白とで元祿になつた旗と、白地に小さく赤い圓を染め出した三角の小旗が、[illegible]

頭に聞くと同時に、汽船の方では今一度高く汽笛を鳴らした。

「合圖があつたぞ、助けイ來チ呉るンのぢや！」

『どん／＼來よらあ。ほら、ほら！』

「金比羅樣！ 金比羅樣！ 皆んな、あなた樣のお蔭チございます。」

船長は帆柱の下へ坐つて、船長室の方を向いて手を合せて拜んだ。彼は悦びで我儘になつた子供のやうに、神棚の下まで行く氣にならなかつたのであつた。——片時もその救け船から目を放す氣にならなかつたのであつた。

その内に汽船はだん／＼近づいて、半町ばかりのところへ來ると、靜かに停つた。海神丸からはその船の甲板に大勢の船員たちの顏が現はれてゐて、珍しさうにこちらの方を眺めてゐるのや、また自分たちに對してこれから爲されようとする作業の準備やらが手に取るやうに分つた。頓てボウトが六挺のオウルで漕いで來た。船まで來ると、彼等はボウトを風上の方の舷側に寄せ、その舷側に、一筋の綱を結びつけてから、その綱を辿つて、一人の敏捷な顏つきをした三十恰好の船員が上つて來た。徽章に依つて、それは一等運轉手だと彼等には知られた。が、その運轉手は其處に三人の遭難者が口も利けなくなつて、かたまり合つたまゝ手を合せてお辭儀ばかりをしてゐる姿を見出しても、たゞじろりと一瞥しただけで、優しい言葉一つかけなかつた。彼は下のボウトの方へ向つて、

「氣をつけろ。」

「もつと離れた、離れた。波が高いぞ。卷き込まれるな。」

と云ふ風な指圖を冷靜に下してゐた。最後に、

「よし、大丈夫だ。オウルを渡せ。」

と命令すると、下から二本のオウルが差し出されて、海神丸の船側からボウトへ向けて橋が出來た。

「さあ下りた。その橋へ乘るんだ。」

船員はその時初めて彼等に言葉をかけ、嚴格な調子で促した。八藏はその言葉を聞くと待ち構へてゐたやうに、身を起して、左右のオウルを兩手で掴んで、躄者が這ふ樣にして下のボウトに辷り込んだ。けれども船長と五郎助はすぐ彼の後に續くことが出來なかつた。二人は腰が立たなかつた。幾らオウルの方へ這つて行からとしても、行けなかつた。五郎助は終に泣聲を出して哀願した。

「運轉手さん。すまンけンど負んヂ下りチ呉れんな。私ア腰が拔けたんぢや。」

すると運轉手は怖ろしい聲を張り上げて怒鳴りつけた。

「何んだ。一人で下りられなけりやア下りなくもよろしい。そんな奴ア殘して置く。」

二人はその威嚇にはつとした。途端に腰はひとりでに立つた。彼等は取り殘されてはたまらないと云ふ一心で、オウルにかじりついてボウトに轉がり込んだ。

本船の下まで辿りつくと、彼等は甲板に蝟集の顏が悉く驚きと好奇心とさうして幾分の憐みを以て自分たちを見守つてゐるのに氣がついた。どの人間の顏も皆畫に描いたやうに美しく見えた。懐しさは又それに劣らなかつた。彼等は對手構はず抱きつき度いほどの氣がした。けれども彼等は其處でも決して優しい聲では迎へられなかつた。

「おい、確かりしろ！ ぐづついてゐる奴ア構はず海の中へ放り込むぞ。」

一人の男が甲板の上から斯う叫ぶと共に上から一筋の綱が下された。その綱を船長の胸に卷きつけて一番に彼が引き上げられた。それから八藏と五郎助が同じ方法で順々に引き上げられた。その間ぢう彼等は怒鳴り續けられた。

一日を潰つてゐろ。開けるときかないぞ。確かりしろ」

三十分の後には彼等は三人とも甲板の上にあつた。――空と海と太陽ばかりのうつろな空間から、何を向いても何を向いても人間のゐる、而して血の臭のする世界へ歸つて來た。彼等が九州の海岸から出發した日から數へると、丁度五十九日目であつた。

汽船に乘せられてしまふと彼等は今までとは打つて變つた船員達の親切な手に取り卷かれた。醫者もゐた。その時彼等は初めて[illegible]された、長い間[illegible]コップに八分目ほど注いで入れてあつた[illegible]い液體は、[illegible]丸の船長が自ら中に斯んな旨いものがあるかと思いた程であつた。彼は生涯その一杯の旨い味を忘れなかつた。

船は[illegible]の貨物船で、船員の寝室より外に余分の寝臺はなかつたので、彼等は船員の寝室になつたところに席を取り、彼等は其處に假の寝室を作つて寝かされた。船員が一人づつ交代で彼等に附き添つて看護をした。他の船員たちもよく來ては親切な世話をした。二三日して彼等はよく食べられるやうになつた頃には、一人の船員が彼等の背にのびた髪の毛を刈つてやつた。それから身體も手足もアルコホルで拭き廻して、三人はどうにか元の人間の形を取り戻した。ただ顔色だけはまだ變へさせる事が出來なかつた。彼等の極度に痩せ衰へた身體には、打ち身の後のやうな紫色に變色して、皮膚のない骨ばかりになり、露出した神經はちよつと觸つても子供のやうに泣き叫ばせた。助けられた時に[illegible]もあつた、三人とも今に[illegible]の[illegible]人で、言葉も[illegible]ほどにきり出なかつた。

斯んな状態であつたから、船員たちには勿論、その三人の苦難から彼等の遭難の委しい話を聞くことは出來なかつた。が、彼等の方は意識は別に衰へてはゐなかつたので、その貨物船が何うして自分たちを見出したかを聞くことだけは出來た。それは壽丸と云つて神戸の或る汽船會社の船で、サンフランシスコからの歸途[illegible]へ向ふ途中、[illegible]も航海日數を超過させて、航路の外に出てゐたのだと云ふことが分つた。これは[illegible]丸の船長の判斷に符合することであつた。彼は今更のやうに[illegible]に打たれると共に、仲間の二人に囁いた。

「八、[illegible]、こン[illegible]を[illegible]かに思うちやならんぞ。皆んなあなた様のお蔭やさ、無事イ歸りついたなン、三人チお禮詣リイお四國ウしうならう？」

三人はそれを誓つた。

斯うしてこの船の野菜畑の寝室の上で十三晝夜を送つた後、明日はいよいよ横濱へ着くと云ふ報らせを得た時には、彼等は今更のやうな氣がした。午前二時過ぎには大島沖を過ぎてあつた。而して三原山の噴煙はかすかな黒い島影と共に、大洋の上に[illegible]いた[illegible]のやうに右手の方に眺められるのが[illegible]りであつた。彼等の側によく附いてゐた一人の若い船員は、彼等にその事を知らせて喜ばせ、同時に彼等に、若しその二つが彼等の目に入つたとしても決して悦び騒ぎ過ぎてはならないと云ふことを、堅く念を押した。

が、その命令は最も守り難い命令であつた。甚だその時刻が迫つて、何んでもない船員達まで、故郷に歸つた人のやうに自分の家の門を[illegible]だと同じ氣持で、そのか[illegible]を眺めて、[illegible]しい用事の為に手を留めて見ようとするやうな[illegible]に[illegible]れる時、この三人が悦びに何ら[illegible]をしてゐられる筈はなかつた。彼等は[illegible]の大きな、[illegible]た、[illegible]た[illegible]

とか、
『今日は馬鹿に煙が濃いね。』
とか口々にさゞめき立つてゐる、一つの賑やかなどよめきを耳にすると、どうにかして自分たちも見ようと氣をあせつた。けれども、彼等は身を起すことは出來なかつた。勿論まだ舷側まで步いて行く力はなかつた。彼等は非常な努力で、痛い身體をせめて左の方へ向け變へた。けれども島の影も、煙の末も、視野の中にはひつて來なかつた。
『見てえなあ、――ちよいと向らまヂ行きや見らるゝにイ！』
　五郎助は最初斯う云つてくどいてゐたが、どうして起きたか彼は終に一人で寢床の上に半身を起すと、今度はさも嬉しさに堪へない樣子で、しやがれた聲で叫び出した。
『構まん、構まん、島ぢやン見る沙汰入らん！ 明日になりや橫濱ぢや。何ンでンかんでン橫濱ぢや。さうなりや家イ戻つたンも一つぢや。船長、嬉しいぢやねえな。――八、わりやそげン顏ウしチ默つチ寢ちよつチ、嬉しうはねえのか。おりや思ふと嬉しうヂたまらん。寢ちよられン程嬉しい。躍りてえ程嬉しい。躍るぞ――躍るぞ――』
　彼は實際、寢床の中で左右の手を魚の鰭のやうに振りながら、上半身をゆすつて、氣狂ひじみた目を見据ゑて躍り出した。船長が驚いて、
『五郎助、わりや氣でン狂うたンか？ 先刻船ン人も云うたゑな、今ン身體ヂそげン騷ぎゥしチ、死んヂ仕舞ふぞ。』
と制しても、彼は耳にもかけなかつた。
『死んでンいゝ。何んでンいゝ。戻つたンぢや。明日ア橫濱ぢや。躍らヂ居らるゝか。』
　彼は尙ほ躍り續けた。その内にどうしたはずみかよろ〳〵となつたかと思ふと、五郎助の彈んだ身體は寢床から辷り出し、下の甲板の、冷たい鐵板の上に轉がり落ちた。船長と八藏は喫驚して、
『五郎助、とげえしたンか？ 早イ起けんか。』
『どつか打つたんぢやねえか？ おい、五郎助。』
と幾ら呼んでも、五郎助は返事をしないで、苦しさうに呻いてゐた。寢床の上の二人ははらはらして氣を揉んだけれども、寢臺は高いし、且つまだ身體の自由が利かないので、下りて行つて彼を救ひ上げる譯に行かなかつた。不意な驚きはその氣力をさへ奪つてゐた。せめて誰かに來て貰つてとあせつて、遠くの人を呼び立てるほどの高い聲には出なかつた。その上、常は傍を離れても二三十分置には必ず見廻つて來る船員たちも、明日の入港の準備に紛れて、姿を見せなかつた。それから二時間ばかり經つた後、やつと廻つて來た船員が、寢臺から轉げ落ちた五郎助を認めて、驚いて駈け寄つて見た時に、は彼はもう冷たくなつて息をしなかつた。
　明けの日の午前十時、海神丸は橫濱港に入つた。役人たちは後甲板の野菜畑に來て調べた。彼等は海神丸の長い漂流に對して強い好奇心と興味を以て、出來るだけ委しくその話を聞かうとした。が、その間にも彼等は自分たちの役目を忘れはしなかつた。大事な條々に就いては鋭い質問が發せられた。中でも最も嚴しい訊問の的となつたのは三吉の死のことであつた。
『病氣で死んだのだね？』
『左樣ヂございます。』
海神丸の船長は何處までも病死を主張した。
『どんな病氣だ？』
『食べる物がならなつたとこりイ持つチ來チ、熱病を煩らたんヂございます。』
『幾日位惡かつた？』
『さあ、四五日も惡らござりましたらうか。――ゆう覺えませんが。』

一五日目に死んだとして置から。それで水葬にしたんだね？」

一左様デございます。帆木綿に包んデ海イ投げ込みました。」

その時突然一つの激しい泣聲が八歳の寢臺から起つた。彼は仰向けに寢たまゝ、骨ばかりの兩手で顔を蔽うて、癲癇の發作の様に全身を痙攣さして泣き入つた。船員たちが近づいて、餘り興奮しないやうにと優しく慰めても、彼は耳にもかけないやうに、ます／＼咽び込んで泣き續けた。從人たちは彼は不運な仲間の死を新たに思ひ出して泣くのだと思ひ、その儘にして無遠慮に訊問を進めて行つた。たゞ船長だけには、八歳が急に何故泣き出したかが、よく分つてゐた。船長は寧ろ彼の現在の心持を憐んだ。何んにも心配することはない、と云つてやり度い氣さへした。けれども今それを口に出すことは出來なかつた。彼は冷靜な態度で、知らぬ顔をして從人の訊問に答へてゐた

あとがき

私が[illegible]であるH[illegible]の[illegible]町あたりでは、[illegible]から出てゐる[illegible]会人たちにがつたに父親や兄弟のことを聞いてはならない。うつかり聞くと、聞いた方で辛い氣持になる場合が多い。おやぢは朝鮮沖で船といつしよに沈んだの、兄貴は大阪通ひの石灰船の火事でそのまゝだの、と彼等は寧ろ平氣に答へる。

私がこゝに書いた物語は、これ等の海の悲劇の一つで、實話である。さうして船頭の實名はTと呼ばれてゐる男である。併し私は彼から直接この話を聞いたわけではない。弟が聞いて、その記錄に從つて書いたので、本筋以外の附加はすべて私自身の空想である。Tはこの出來事以來もう海は怖くなつたと云ひ、現在は陸で船道具の商賣をしてゐるさうである。どんな男か歸つた時一度逢つて見ようと思ひながら、まだ逢はないでゐる。弟なぞの噂話に依ると、横濱から歸つて救援に來た時分には、まだ、皮膚なども綺麗な紫色をして、人間の本統の顏色にしてゐなかつたと云ふことである。

日記の中から（二）

某年某月某日

今朝の新聞を見ると說教强盜なるものがやつと捕まつてゐる。二十八歳の左官職の男である。細君と二人の子供がある。巣鴨の向原に、六疊と三疊の家に住んで、近ごろは警戒がきびしいので、持ものを質においてかつ／＼暮らすと云ふ狀態であつたと云ふ。

斯んな男に東京ぢうの警察が威嚇されてゐたかと思ふと、むしろ滑稽である。私自身は世間がさわぐほど說教强盜なるものを恐れはしなかつた。今朝の新聞の記事をよんでも可哀想な氣がしたくらゐである。世の中にはもつとたちの惡い、憎むべき大泥棒が横行してゐるのではないか。この種の泥棒が親子四人でどうにか暮らして行く[illegible]るの金には、特殊[illegible]だとおもつて金のあるものが[illegible]へばよいのだ。泥棒も一種の職業なのだから。

大石良雄

元禄十五年二月上旬のことであつた。一つの史的事實に基いて說明すれば、播州赤穗の城主淺野內匠頭長矩が、殿中に於て高家の筆頭吉良上野介義央に刃傷に及んだ咎に依つて、內匠頭は卽日切腹、五萬石の封地は沒收せられ、後嗣に擬せられてゐた弟の大學は閉門仰せ付けられるといふ出來事があつてから丁度十一ケ月目のことであつた。

淺野家の城代家老を勤めてゐた大石內藏之助良雄は、當時池田何某と名乘つて住んでゐた京都在山科の郊宅の茶室で、その日大阪から原惣右衛門の手紙を持つて訪ねて來た大高源五を迎へた。茶屋風の釜のかゝつた爐を前にして、內藏之助は主人の席に着き、美濃の大判に認めた惣右衛門の長文の手紙を一枚々々熱心に讀んでゐた。彼は小柄で、身體に釣合つた小さい長目な頭をして、綺麗に結つた髮は稍〻縮れてゐた。顏は青白かつた、而してやつと四十を出たばかりにしては老けて病人じみてゐた。以前から餘り健康でなかつたのに、昨年の心配事でひどく頭を使つたのと、引續き憂鬱の折を過つたりしたのが影響してゐるのであつた。

惣右衛門殿の意見は、この間の會合で一通り分つたつもりであつたが、最後の一枚に目を通してしまふと、內藏之助は初めて目を開き、すべての紙を丁寧に疊めた。「書いたもので見ると、多人數の席上では知られなかつた周密な心遣ひが分つていろ〳〵參考になる。貴殿にもわざ〳〵御苦勞であつた。」

縞の着物に縞の羽織で、三十の若い商人らしく裝つた源五は、この挨拶に對して碎けた身裝とは不釣合な、正しく元の二十石五人扶持の小身者が、城代家老に向つた時の堅苦しいお辭儀を一つした。

「惣右衛門殿もこの間はちと意氣込みすぎて、條理を盡さぬ恨みがあつたと殘念がつてをりました。」

源五は態度の割に臆しないはき〳〵した話し方をした。整つた顏立で、眼に人の注意を引く賢さがあつた。彼は以前から內藏之助の氣に入りであつた。

「中々激論だつたからな。」

「あゝなりますと、言ふ方でも聞く方でも夢中でございますから。」

これは先月の十四日、故內匠頭の命日に當つて、京阪附近に散在してゐる同志たちが京都圓山に寄合つた時の話である。會合の度にいつも最後を沸騰させる彼等の重大な問題——復讐の問題は、決行期として豫定されてゐた主君の一周忌が近づいたのと、當日は時が時で、主君の不本意な切腹に對して、それから引き出された自分達の運命の淪落に對して遺憾を新たにされたし、遺恨の相手の上野介は無事に隱居が叶ひ、息子の左兵衛佐が家督を嗣いだことが知れ渡つた後であつたから、一層人々を興奮させ、日々に激しい意見が吐露された。これまで彼等の間に秘密にきしみ合つてゐたものが、明白に二つに分立しただけでも、近頃での興味ある會合であつた。それは復讐に對する自重派と急進派の拮抗で、內藏之助は同じく山科に住んでゐる從弟の進藤源四郎や、伏見にゐる叔父の小山源五左衛門と共に前者であり、後者は原惣右衛門が代表してゐた。この氣魄の強い五十五の老人は、

初めは山科組に近かつたのであるが、昨秋、大高源五と二人で出府して、江戸の過激な復讐論者である堀部安兵衛の一派に接近して以來、彼等の妥協のない行動に共鳴したのである。

この間の席上でも彼は盛んに反對派に挑戰した。併し個人としては惣右衛門は内藏之助に同情してゐた。彼の煮え切らぬ態度は、天性もあるが、一つは叔父の影響だと想像してゐた。それ故惣右衛門は今一度内藏之助に自分の所信を傳へ、純理論の見地から彼の反省を促さうと考へた。大高源五は惣右衛門の熱心な味方であつたが、今までの關係と、生來の圓滿な氣質から山科の家にもこだはりなく出入してゐたので、惣右衛門は手紙を書き、彼に託して内藏之助に屆けて貰つたのである。

『實にあ[illegible]申し上げるのが不躾であり、その決心をして參つたのではございましたが、あの[illegible]な方へ逸れ出したので、わざと[illegible]いたことを、と申すことで』

『[illegible]なしに[illegible]衛門へ[illegible]時、内藏之助の顔の上に不意に[illegible]色が浮んだ。その言葉には、[illegible]の代理で[illegible]に[illegible]、[illegible]したことを思ひ出させたのであつた。

『いや、この間は手嚴しくやられて大いに弱つた。』

内藏之助は隱さず打ち出して、鷹揚に笑つた。

『併しそれはそれ、これはこれで――』源五は自分の不用意な言葉の結果にまごつきながら、急いで話題を引き戻さうとした。『大事な目的を控へて、くだらない感情論をいたす者の氣が知れません。惣右衛門殿も自分等が大石殿に反對するのは、議論として反對するのであつて、それ以外の意味は微塵もない、申すまでもないことではあるが、その點は誤解下さらぬやうにと、堅く申しつかつて參りましたやうな次第でございます。』

『そんな心配は要らない。惣右衛門殿の[illegible]は、惣右衛門殿が考へてゐるよりわしには分つてゐる積りだから。たゞ併し折角の忠言ではあるが、この急進説だけは、この間も云つた通り、この儘ではいつも――』

[illegible]その問題に觸れかけて、内藏之助は[illegible]手を[illegible]、首を傾けた。[illegible]

[illegible]に[illegible]手[illegible]、[illegible]できれやうに[illegible]出した[illegible]に[illegible]を入るやうに默つた。座に面した二枚の障子には、早春の午後の日が明るくさしてゐた。鶯が山家らしく軒近くで、二人の沈默の中で、頻りに鳴いた。

併し源五は、斯んな場合の内藏之助には此方でぶつ突かつて行かなければ埒の明かないのを知つてゐたから、長くは默つてゐなかつた。

『惣右衛門殿にしても、また手前共に致しましても、徒らに事を急くのでは御座いません。定めて貴方で十分御了解のことと存じまするが、あなた樣は大學樣の御一身が何とかお極まりになるまで手出しは出來ないと[illegible]なさる。惣右衛門や手前共はそれを待つては却つて拙いと考へる。たゞそれだけの相違で――』

『左樣、意見の分れ目は其處だけだ。』

『若し一萬石にしろ、二萬石にしろ、大學樣に新規お取立の御沙汰が下り、[illegible]のお跡も立派に立つやうになつた上で事を擧げたのでは、お上を輕視した[illegible]とも見られ、折角開けた大學樣の御運にもまた[illegible]かと、手前共はそれを懼れるのでございます。』

『惣右衛門殿が[illegible]立つてゐられるのもその[illegible]そうだらう。』内藏之助は[illegible]いた手を前に[illegible]した手紙を[illegible]一度取り上げて、二三枚目の[illegible]を讀み返した。『併し、[illegible]お上を[illegible]

手にする仕事ではない。目當は上野介にあるのだから、大學樣の御落着を見屆けた後で事を起したところで、やり方一つでは大學樣にお咎めのかゝらう筈はない。だから諸君もどうか焦慮らないで貰ひ度い。而して大學樣に依つて幾分でも先君の御面目の立つやう、出來るだけの手段を講ずるのが、寧ろこの際の急務だ、と斯うわしには思はれるのだが、この考へ方が間違つてゐるだらうか。」

源五は返事の代りに凝と彼を見詰めた。高祿の家で太平の安樂な生活に馴れ、昨年の事變に遭遇するまでは、恐らく人生の苦味を少しも知らなかつた中年の男の、細い優しい眼、覇氣のない圓い鼻、柔和なだけに何處か締りのない口許、その容貌から身體のすべてに漂つてゐる消極的な、併し惡の分子だけは少しもない呑氣さと氣弱さの交り合つたゆつたりした樣子を見ると、源五は聲帶の後に突つかゝつてゐる激しい抗辯を――そんな夢をいつまで御覽になつてゐるお積りでございます、大學樣と吉良父子に對するお上のお仕打を比べて見れば、今後のことも大抵推量いたされるではございませんか――を、持ち出す勇氣はなかつた。

『それも一理ある御意見として、」源五は努めて平靜な調子を取らうと試みながら云つた。「惣右衞門殿や手前共が假に首肯を致したといたしましても、江戸の連中は決して聞き入れますまいかと思はれます。彼等はこの御一周忌までにはやると仰しやつたあなた樣のお約束を、守つて頂き度いと主張いたしてをります。而して手前共の態度をさへ手緩いと攻撃いたしてゐる位でございます。』

「約束を輕んずる譯ではない。併し斯う云ふ問題は、時の情勢で計畫通り行かないこともある。』內藏之助は云ひかけて、先刻の羞恥と同程度の心配をその蒼白な面の上に現はしながら聞いた。「最近に何か便りがあつたかな。』

『はい。』

源五はちよつと云ひ澱んだ。堀部一派の消息が、當然本部であるべき山科よりも自分達の方へ知られてゐることは、內藏之助に對する彼等の不信と背離を餘りに明瞭にする譯で氣の毒に感じたのであつた。併し相手は何等の蟠りもない鷹揚な尋ね方であつたので、源五は堀部安兵衞から二三日前に受取つた手紙に就いて話した。――

「上方の連中が何かと理窟をつけて事を長引かせるのは、百五十里も離れてゐるからだ。現在敵の家を目の前に見て暮らす自分達の氣持を思つて見ろと書いてございました。』

『――――』

「金を持つて呑氣に遊んでゐられる人や、醫者をしたり、商人になつたりして手まめに仕事にありついてゐるものは、いつまでも待たれようが、我々は初めから仇討專門だ。それを目的に去年赤穗で切る腹も切らずに生きてゐるのだから、これ以上ぐづ〳〵してはゐられない。』

『――――』

「これまで云つても尚ほ上方で腰が極まらなければ、もう當にしないでこちらだけでやつて見せる。決死の者が四五人も揃へばさうむづかしい事ではないと、斯う云ふ意氣込でございます。』

「そんな輕はずみな事をさせてはならぬ。」其處まで何等の抗議も意見も挾まないで聞いてゐた內藏之助が、その時明らかに周章てて遮つた。「先方でもあらゆる警戒を加へてゐる中に、四五人で目的が達せられるなどと思ふのは亂暴な話だ。』

「元より亂暴な話で。」源五はその言葉をすぐ取つて續けた。「併し、堀部は御存じの氣象で、場合に依つてはどんな亂暴もやりかねない男で

ございます。手前共がこの際事を急ぐのを得策といたしますのも、一つは彼等の亂暴を未然に防ぐために外ならないので、でなくしてその儘傍觀いたすならば、さうして萬一彼等の企が失敗に終るならば、二度と取り返しのつかない結果に陷るかと考へられます。」

源五の言葉は、不斷の愼しみと遠慮を珍らしく忘れる程強く激して行つた。彼は惣右衛門が手紙で說いてある筈の他のあらゆる急進說の論據に就いても、熱心に繰り返した。内藏之助はそれ等の意見に對して最後まで賛否を洩らさなかつた。而も冷淡ではなかつた。却つて忠實に相手の言葉に耳傾けながら、再び手を拱き、力のない弱々しげな眼で、當惑さうに疊縁の尖つた角を見詰めてゐるのを見ると、源五は同志の間に近頃恐ろしい勢で燃え上つてゐる一つの意慾を思ひ出した。この人を我々の統領に選んだことが果して賢かつたか。――意見の相違は相違として、源五は人格的には内藏之助の支持者であり、仲間の者ほど失望してはゐなかつたに拘はらず、この時だけは同じ感に打たれないではゐられなかつた。而して同時に知つた、自分の今日の使命が全然失敗に終つたことを。

源五はやがて歸り支度をした。いつもは用事がすんでも茶の相伴をしたり、俳談を戰はしたりして長座になつた。田舍に引つ込んで話相手に飢ゑてゐる内藏之助は、源五がその方面に嗜みの深いのを悦んでもとの地位以上に歡待もしたし、源五もそれに甘えて時には遊びの取り卷までしてゐたのであるが、今日だけは留めても依怙地に辭退した。

客が去つて暫くすると、内藏之助は庭に下りた。

この邸宅はもと伏見の或る商人の別莊で、内藏之助が昨年赤穗を引拂ふやうになつた時買取つたものである。長い間荒れてゐたのを、すつかり手入して立派な邸宅になつたが、殊に庭には惜まず金をかけてあつた。内藏之助が自分から樹木や石の布置を指圖したのである。梅の花がいつの間にか清楚な蕾を生つて、わざと等閑に伸ばした垣根の連翹に盛を競つてゐる。古い松の間に交つてゐる櫻は、次の爛漫を待ちながら、小指の尖ほどにふくらんだ蕾を、細く枝の表に群がらしてゐた。併しこれ等の花の樹木にも増して内藏之助が愛してゐるのは牡丹と菊であつた。赤穗の邸宅でも此の二つは毎年丹精してゐたから、移轉の時持つて來られるだけは持つて來た。而してその秋すでにすこやかな花を見せた菊に對して、この春を樂しみにしてゐた牡丹が、數日前漸くはづした霜除の下に、鮮明な薔薇色の芽を吹いてゐるのを見つけた時には、内藏之助は子供の如く悦んだ。今も庭に下りると、彼は一番に其處へ行つた。芽は最初の紅から黯ずんだ緑色に遷らうとして、瑞々した圓い突起に膨らみ、その中からやがて燃え上る豪華な花冠を約束するかの如く、麗らかな春光の下に輝いてゐた。内藏之助は庭下駄で、ゆつたりした足どりで、數列に足らぬ花圃を一巡した。彼の胸には先刻客室で源五と對坐してゐた間の憂色はもうなかつた。内藏之助はそんな事は考へようともしなかつた。源五がいつになく素氣なく歸つたことに對するむつとした氣持さへ忘れてしまつてゐた。この牡丹が故郷の庭にあつた日と變らぬ花をつけるかどうか、それ以外のことは念頭になかつた。平和な滿足と明るい外光が、一時前の物憂げな彼とは別人のやうに見えさせた。

その時ではあつた。東門の方から眉の太い、がつちりした一人の武人が、[illegible]

で、何か氣がかりらしく、急ぎ足で入つて來たと思ふと、自分の家のやうな無遠慮さで、聲もかけないで、つか／＼と庭の方へ廻つて行つた。

『や、これはようこそ。』

内藏之助は直ぐ氣がついて花圃を離れ、母方の叔父の小山源五左衛門の方へ歩み寄つた。

『今日は源四郎のところに用事があつて出掛けて來たのだが。』

源五左衛門はこれだけ云ふと、大きなぎよろとした眼であたりを見廻すやうにして、源五が訪ねて來たかと聞いた。

『お逢ひでしたか。』

『うむ。元慶寺の手前で見かけたのが慥かにそれらしいと思つたが、向うは氣がつかないやうだつた。』

内藏之助は先刻源五を送り出した茶室に再び叔父を案内して、手を高く打つた。細面の權高な顔をした妻のくり子が唐紙を開けて三指をついた。彼女はいつでも、亦何處からでも、のつそりと入つて來るその叔父の流儀には馴れてゐたから、知らぬ間に其處に坐つてゐるのを見ても驚きはしなかつた。それと共にこの叔父が抹茶の嫌ひなのをも心得てゐたので、すぐ引返して普通の茶道具を運んで來た。併し長居はしなかつた。この茶室で話されることは決して聞いてはならなかつた。聞いても聞かぬ眞似をしてゐなければならなかつた。

『源五は何しに來たのだ。』渇いた咽喉に一口がぶりと茶を通すと、源五左衛門は飛び着くやうな聞き方で聞いた。『この間おれ達にあれ程楯を突いておきながら、どんな顔があればやつて來られたのだ。』

内藏之助は彼が惣右衛門の使で手紙を届けて來たことと、その内容を手短かに話した。が、手紙そのものは、すぐ傍の袋戸の手文庫に仕舞はれてあるに拘はらず、見せようとはしなかつた。

『屹度、そんな事だと思つた。』源五左衛門は想像が當つた人の自己滿足で厚い角ばつた顎をうなづかせ、煙草入を取り出して、頑丈な銀煙管に一服吸ひつけた。『それで、どう返事をした。』

『どうと云つて、まだ返事は書かないでをります。』

『下手をすると後が面倒だぞ。』

『兎に角、今のところ私は自分の考を變へる積りはしてないのですから。』

『さうだとも、大きにさうだ。』源五左衛門は頻の言葉を聞いて安心したらしいのに、また、眉を動かし、それでも安心しきれないのか、一服、煙草盆の灰吹にぽんとよい音をさせて叩きはたき出した。『一體物の本を見ても分る通り、そんな一大事がさう一朝一夕に仕遂げられるものではない。時機の當來するまでは何年でも隱忍して待たねばならぬ。所謂臥薪嘗膽だ。いや、それまでにしてさへ運が悪ければ失敗しないとも限らぬ。それにあの連中と來たら、たゞ事をあげさへすればよいもののやうに心得てゐる。成功を急ぎ過ぎる。敵を侮つてゐる。吉良上野介は單に一高家ではなく、上杉家十五萬石の師がついてゐるのだと云ふ事を忘れてゐる。』

これは羽前米澤の藩主である上杉彈正大弼綱憲が上野介と父子の關係になつてゐることを指したのである。委しく云へば、もう十數年の昔話になるが、上杉家の先代綱勝は、妹の縁づいてゐる吉良家の饗宴で茸を食べたのが原因で急死した。その時綱勝には子供がなかつたので、上杉家では上野介の長男でやつと二つになつたばかりの息子を貰ひ受けて家督を相續させたのである。

『噂によれば、上杉家では高祿を出して頻りに武藝の者を召抱へて居ると云ふことだが。』源

五左衛門は新しい煙草と共に話をついだ。「この忙しい時期に、何の目的でそんな事をするか、誰が考へても大抵見當はつく。若い者たちがその點を深く考へず、がむしやらに功を急ぐのは已むを得ぬとして、惣右衛門までが先棒になつて騒ぎ立てるのは氣が知れない。年寄の分別を忘れた苦々しい話だとおれは思ふ。尤も惣右衛門も江戸に行くまではあゝではなかつたのだが。――何しろ向うの連中と來ては、無鐵砲の揃ひだからな。何か事がなくちやゐられないのだから始末が悪い。一つは自暴自棄になつてゐるのだ。これまでの職責の手前、今更どこかに奉公する氣にも行かなければ、把へ手もあるまいし、生活には困つて來る。金はなし。どうにかしなければ動きがつかぬ。で、あの連中は夜逃をする代りに仇討をやらうといふのだ。」

源五左衛門は自分のこの警句がひどく氣に入つたやうに、額の上と目の左右に深い皺を刻んで笑ひながら、兎に角彼等はそれでよいとして、こゝまで彼等の相伴をさせられては堪らぬと云つた。内藏之助にもまた決して彼等に乘つてはならぬと繰り返し戒めた末に、[illegible]を何に歸つた。

『[illegible]内藏助とでもやつて來ないか。[illegible]かよくなつたぞ。』

甥に送られて庭口で別れる時、源五左衛門は云つた。

『旨く參りましたか。』

内藏之助は尋ねた。叔父は庭に新しく池を掘つて、後の山から水を引かうとしてゐた。非常に豐富な水が筧から落ちるやうになつた、山水の清らかさは格別だと云ふやうな話をした序に、源五左衛門は山林のよい出物があるが、内藏之助に買つてはどうかと勸めた。持つてゐて損は行かぬ山だと云つた。而して斯んなことに抜け目のない彼は、立木の委しい見積りまで話して、

「――丁度あの見當だ。」

と持つてゐる扇子をあげて、庭の向うの空の下に、淡い藍色の弧を描いて横たはつてゐる山の裾を示して歸つた。それは[illegible]山であつた。内藏之助は、叔父の勸めに乘る氣は元よりなかつたが、その山の眺は奥に續く逢坂山一帶の連巒と共に、またそれ等の山々に附隨してゐる樣々な懷古的な情趣と共に、深く氣に入つてゐた。蟬丸の道行や一[illegible]の名所教で親んでゐる自然を、朝夕、目の前に見て暮らすと云ふことは、謡や能の好きな内藏之助には人一倍樂しかつたのである。

けれども叔父を見送つて居間に引き返した時の内藏之助の氣持には、そんな寛ぎはなかつた。先刻牡丹の芽を見廻つてゐた間の晴々した樣子も失せて仕舞つた。叔父が殘して行つたすべての言葉は、今日源五の訪問に依つて彼の心に投げられた暗い影を新たに思ひ起させ、それに一層の憂苦と困惑の酵母を加へた。本統を云へば、源五左衛門は内藏之助の好きな叔父ではなかつた。そのたい額や、厚い顎が表はしてゐる通りの確かり者で、世事にたけ、理財にも明るいやり手であつたが、彼の考へ方や行動には、正しいとか正しくないとかいふ意味とは別に、一種我慢のならないものが交つてゐた。にも拘はらず、割に早く父を失つてこの年寄を親代りに見なれた内藏之助は、彼の不快な壓力に對して奇妙に無力であつた。叔父の何かの意見、若しくば何かの批評が、力強い暗示となつて知らず識らず自分の上に働きかけるのを彼は感じた。例へば去年の兇變の際、殉死說から籠城說に、籠城說から開城說に、而して終に復讐說にまで轉々として變つた内藏之助の意見は、要するに源五左衛門の意見でなかつたとは云へなかつた。またその復讐說に就いて内藏之

助が急進派に與し得ない現在の氣持は、彼自身の心的經過の裡に有力な原因があるにしても、惣右衛門が想像した通り、この叔父の影響なしではなかつた。

『あの刺のある調子には閉口だが、叔父が江戸の連中を評した言葉は全然間違とは云へないかも知れぬ。』

窓の下に据ゑた小机の前に靜かに坐つて、惣右衛門の來書から二人の客の言葉を順々に反芻して見た時、内藏之助は矢張りさう考へずにゐられなかつた。彼等はたしかにあせり過ぎてゐる氣がした。その焦慮が彼等の云ふ通り見す見す敵の家を眼前に見てゐることや、敵と同じ土地に住み、敵が踏んだ土を踏むことの憤懣から生じてゐるならば別であるが、萬一にも叔父の皮肉な批評が當つてゐるとすれば、彼等の急進説の動機は純粹とは云へない。――併し嚴正に鑑別した時、眞に純粹な感情で復讐を急いでゐるものが果して何人あるだらう。内藏之助は今日連判狀に名前を連ねてゐる人々を略三つの仲間に分類することが出來ると信じた。第一は飽くまで忠義心でかたまつた人々。第二ははじめから復讐の決心はないのであるが、その實行までには多分大學の一身が有利に解決するであらうから、その時除け者にされまいとして加はつた人々。第三は單なる忠義心と云ふよりは復讐そのものに傳統的な美と憧憬を感じ、この機會に自分達の手でそれを實行することに依つて、無爲安逸な泰平の惰眠を驚かしてやらうと云ふ、冒險的な熱情から出發した人々。この三種類であつた。

『では、お前自身はどの組に屬してゐるのか。』

どうかするとこの自問が不意に彼の意識を脅すことがあつた。その度に内藏之助は他人から質問されたが如くひとり胸を躍らした。

『第一の組か。』

さうだ。斯う言下に呼ぶことが出來たら。併し、内藏之助の良心は、少くとも現在の氣持では、それを許さなかつた。

『では第二の組か。』

いや、今の自分はさまざまの迷を持ち、勇氣をも缺いでゐるとは云へ、彼等のやうな卑賤な心のないことだけは、誰の前にでも誓つてよい。

『殘つてゐるのは第三の組だけだ。』

これは江戸の同志が代表者で、自分にも同じ憧憬がないことはないにしても、純粹にそれのみだと云ふことは出來ない。斯う擧げて見ると彼の入る場所は何處にもなかつた。自分は正しく仲間はづれにならうとしてゐる――内藏之助は時々さう考へることがあつた。正直な告白が許されるならば、彼は忠義とか、復讐とか、家臣の義務とか、責任とか、これ等の煩しい響を持つて迫つて來る一切の言葉を、當分忘られるものなら忘れて仕舞ひたかつた。空虚な、何んにも背負はされない氣持で、あの向うの山でものんきに眺めてゐたかつた。また、あの山の後から昇つて來る玉のやうな麗らかな春日が樂しみたかつた。好きな庭いぢりに身を委ねて仕舞ひたかつた。丁度それをやりながらよく口ずさむ採菊東籬下、悠然看南山の氣持で、ひたすらに安易な束縛のない生活が送りたかつた。

斯んな心が何時からこれほど強く自分の中に成長して來たかは、内藏之助自身でも分らなかつた。たゞ去年の不幸な事件と痔の長煩ひに痛めつけられてから、精根の消耗したやうな疲勞を感じた。時に依ると彼はまだ衰弱から恢復してゐないと思ふことがあつた。少し無理をしても眩暈がしたり、動悸が激しくなつたりする。また同志の感情の不和や、意見の衝突や、取り分け目下鎬を削つてゐる自重派と急進派の拮抗の如き心配事はすぐと身體に響いた。彼

は絶えず藥を飲んでゐたので、居間にも、着物にも、持物にも、山茱萸と高麗人參とを一緒に煎じた持藥の特殊の匂が浸みついてゐた。

「お身體にはよくないと仰しやりながら、お酒を過したり、惡遊びをなすつたりしていらつしやれば、世話はございませんわ。病氣の方で輕くなり度くても、それではよくなりやうがない。」

妻のくり子は時々そんな皮肉を云つた。これも三分一ぐらゐに事實であつた。而も現在の內藏之助にとつては茶屋の灯や、美しい女たちの顏や、彼等の華い陽氣な笑ひ聲に、庭に向うの山々や、賑やかな祭日や、遠いおりや、瑞々しい牡丹の芽や、これ等のものと反撥しなかつたのみならず、彼の心を、自由な拘束のない樂しみの中に容易に誘ひ込んで貰れる點で、同一の價値であり、何等矛盾のない魅力であつた。生理的にだけ云つても、彼は女色に耽溺して、甚[illegible]は却つて健康な、而して更に明[illegible]に住してゐた。理性の事情か[illegible]運ぶのに都合よく出來てゐたのも、一つの原因でないことはなかつた。內藏之助には浪人の間散と金があつた。且つ同志の人々は、この間の席上で手腕をあげた一部の者は別として、彼の遊びは吉良方の穩密に對する巧妙な韜晦だと見なして呉れた。この是認は十五を頭に五人の子持で、利かぬ氣の八釜しい妻の嫉妬さへ容易に封ずることが出來た。內藏之助は何人にも辯解することも要らなければ、繕ふ必要もなかつた。吞氣に大つぴらに遊べば遊ぶだけ、彼の僞瞞は成功と見られた。この餘りに都合のよい結果は、生來の善良な內藏之助を、最初はまごつかせ、後めたがらせた。彼は恥なしにこれ等の默諾を利用することは出來なかつた。とは云へ、斯う云ふ場合に取つて、これほど調法な隱れ蓑はなかつたから、結句それを使つた。

併し斯んな胡麿化しがいつまでもほぐれないで續く筈はなかつた。この間の非難はすでにその徵候の現はれであつたことを彼は知つてゐた。同時にその破綻から避けるためには、生活を整理し、萎微した心を今一度引き締めて、最初の目的に急がなければならないこと、それが彼に取つて唯一の正しい生き方であり、また彼の分限に依る第一組の誠實な同志たちは、それを待ち切つてゐることをも知つてゐた。おれの立場は變だ。おれに反對してゐる連中が寧ろ好きで、味方が嫌ひなのだから。——內藏之助はさう思つて獨り心中で苦笑することがある。同じ意味で彼が眞に信頼してゐるのは自重派ではなくして、急進派であつた。何故ならば、前者の大部分は卑怯な日和見の徒に組み込めてゐたから。今日の客に就いて云つても、彼は源五を信ずるほど叔父を信じてはゐなかつた。叔父は今では復讐の問題を彼の新しい泉水や、若しくば內藏之助に買はせようとしてゐる山林以上に本氣に考へてはゐないことを內藏之助は察してゐる。彼が內藏之助の輕擧を戒める忠告や、急進派に對する苛辣な皮肉は、言葉だけの意味は間違つてゐないにしても、すべて本意から發したのだと見拔いてゐた。にも拘はらず、その叔父と行動を共にしようとするほど、それ程、彼の影響は根深いのか。さう許りではなかつた。同時にまた、源五等の急進派に與し得ない理由として、大學の問題を擧げたのは、嘘ではなかつたにもせよ、本統でもなかつた。原因は他にあつた。復讐の如き大事を決行するには彼は餘りに疲れ過ぎ、氣力を失ひ、退嬰的になつてゐた。考へるだけでも億劫で、非常な重荷に感ぜられた。先に述べた如く、出來ることならば、そんな事は當分忘れてゐたかつたのである。

その間にもたゞ一つ氣掛りな事は江戸の連中の行動であつた。安兵衞等は[illegible]に[illegible]いたと云ふ

やうに、この上の遲延に耐へきれないで彼等だけで事を擧げねばよいがと云ふ事であつた。さうなれば上方の急進派もそれと呼應して立つかも知れなかつた。最も確實性のありさうな十人ばかりを內藏之助は數へて見る事も出來た。でもそれ位の人數で、またその人々の手で成し得られる程度の準備で、果して目的が達せられるであらうか。その點ではただ叔父の暗示が働いた。當の上野介よりも上杉家の勢力が氣になつた。彼に容易に成功を信ずることは出來なかつた。この憂慮にはまた彼自身が彼等の計畫から除外される怖れが交つてゐなくはなかつた。その心理を露骨に解剖すれば、自分ではまだやる氣がないにしても、彼等だけにやらせるには忍びなかつた。殊に想像の如く失敗しないで見事に成功したとするならば。——復讐者の輝かしい名譽が彼等の手に占められ、その忠義や功績や勇氣が世上に喧傳せられる場合が生じたとするならば——それでも羨望や後悔なしに彼等の勝利に對し得るであらうか。否氣な無關心で超然と現在の安逸に淫つてゐられるであらうか。——一番よいのは、この際誰かを江戸にやつてあの仲間を說得させることであつた。而して今少し氣長に待たせることであつた。江戸の火の手が鎭まれば、此方も落ちつくに相違なかつた。そのうちには自分の健康だつて恢復するであらう。——良雄はさう考へた。問題は誰をやるべきかであつた。人選を誤ればわざわざ遣つた者が江戸の火の手を消す代りに、自分の方が却つて焚きつけられて歸るやうな結果となるであらう。原惣右衛門や大高源五の場合もさうでなかつたとは云はれないやうに。併し內藏之助は一人の最も適當な人物を思ひ浮べることが出來た。

永い春の日が暮れかけるまで內藏之助は居間から出なかつた。妻が夕飯の知らせを持つて入つて見ると、彼は手紙を書いてゐた。而して急な用事で赤穗までやるのだから、今宵の伏見の夜船に間に合ふやうに若黨の左六に支度をさせろと云つた。左六が飯を掻込んだり、脚絆や草鞋を揃へたりしてゐる間に手紙は出來上つた。道中の細かい注意と共に若黨に渡した書狀の表書には、達者なお家流で、吉田忠左衛門殿へと認めてあつた。

もとの足輕頭郡奉行の吉田忠左衛門は、食祿も僅に二百石で、中以下の低い身分に過ぎなかつたが、明敏で[illegible]し、殊に兵法に精しい[illegible]。其年[illegible]既に六十二歲であつたが、その智慧や經驗はさまざまな時に內藏之助を助けたので復讐の盟約が結ばれると、原惣右衛門や、その他の老人たちと共に一味中の長老として重んぜられた。

不幸な事件が一先づ片づいて、同志の者がそれぞれ京阪地方に身を潜めることになつた時には、彼も大阪に住まつてゐた。それが數ケ月前再び赤穗に歸つたのは、計畫が容易に實行されないこと、それまでには面倒な內輪揉めの生ずることを見て取つて、その渦を避け、靜かに形勢を觀望しようとしたためであつた。若黨の左六が持つて來た內藏之助の招きの手紙も忠左衛門は豫期しないことではなかつた。で、彼は直ぐ旅行の用意をした。

大阪まで船で、それから淀河を伏見まで遡るだけの便利な道順も、灘が荒れたり、丁度な便船がなかつたりすると、徒に日數を取るのであるが、今度はすべて好都合に行つた。赤穗を出てから三日目の朝には忠左衛門は既に伏見の船着場に下りた。伏見から山科までの距離は三里足らずである。その年になつてもまだ若者の

やうに強健な忠左衛門は、これまで内藏之助を訪ねる時でもこの間を馬にも駕籠にも乘つたことはなかつた。駕籠の方は素朴な氣象で嫌ふだけではなかつた。元來非常な大男であつたから、狹い乘物は窮屈で我慢出來なかつたのである。で、今日も忠左衛門は徒歩で、その長大な身體を質素な旅支度で固め、笠をかぶり、町から近所の村をさして行く物賣の商人や、重い荷を町の市場にかけ一日に歸り道にある百姓たちや、または京都見物の序に近くの三寶院まんだら寺から、有名な名所古蹟を殘さず見物して、故郷への土産話にでもしようと志してゐるやうな、暢氣な旅人たちの間に交つて、而して、彼自身もそれ等の道連でもあるかのやうな愉快げな態度で、古い灰白色の街道を東に進んで行つた。實際忠左衛門のその樣子からは、其年の不首尾な事や、復讐の計畫や、若しくば何十里の彼方から彼をわざ／＼呼び寄せた同志間の嶮徒などは想像されもしなかつた。一つは、どんな氣遣りた用事を控へたものでも陰氣な顏はしてゐられない位、その日が爽快な上天氣であつたせゐもあつたらう。歩いてゐると、笠の下の額で、細く顰つた、既に半白の霜の見える鬢の際に汗がにじんだ。忠左衛門は時に笠を取り、懷中から疊んだ手拭を出して、身體に相應して眼も鼻も口も大きい、老人らしい威嚴のある顏を拭いた。

二時間あまりで目的の村に入ると、やがて忠左衛門は街道を西に折れた。どれも似たやうな小高い松山と、竹林と、百姓家と、石灰色のよく耕された田畝と、些かな水の流と、それ等の間を通つて大石家の――現在の姓で云へば池田家の――白い土藏の壁を向うの木立の間に見出すまで、彼は今朝踏み出した時と變らぬ達者さで歩いてゐたが、その内に忠左衛門は急に何かに氣がついたやうに足を留めた。丁度幾つ目かの竹林に沿うて、一つの緩い傾斜面になつた原にさしかゝつた時であつた。斜面の五六本奥に入つた茅萱の叢の間に、二人の前髮立の少年が、道の方へ背中を向け、中こゞみになつて並んでゐた。大きい方の少年は吹矢の筒を持ち、小さい方は白い紙とそぎ竹で出來た矢を一摑み握つてゐた。二人はすぐ前の枸杞に似た灌木に群がつてゐる小鳥を狙はうとしてゐるらしかつた。終に大きい方の少年は、輕く身を屈ますやうにしながら筒を構へ、口を一方の端に當てた。ふッと低いうなりと共に白い矢が筒先から迸り出たのと、一羽の小鳥が枸杞の枝から落ちたのとは殆んど同時同瞬間であつた。

『うまい。』

忠左衛門は劍道のかけ聲のやうに後から怒鳴つた。二人の少年は不意の人聲に驚いて振り返つた。而して其處ににこ／＼して立つてゐる旅姿の忠左衛門を認めた時、大きい方の少年の顏はまつ赤に燃え上つた。

『お久しぶりで。』

忠左衛門は子供の大きく／＼なるには驚くと云つた風で二人に近づき、親しげに、而して改めて挨拶した。少年は内藏之助の長男の松之丞と次男の吉千代であつた。

松之丞は既に十五で、前髮がをかしい程大柄であつた上に、色々な出來事で大人びさせられた心と敏活な推理力を有つてゐた。復讐の問題についても、彼は無心ではなかつたから、左六が稽古にやられた事や、それ以來人目を憚る見える父の様子を、この年寄の訪問に結びつけて考へるのにむづかしくはなかつた。又それだけ彼はそんな小さい者と一緒になつて、――三つ下の弟は、十五の兄から見れば本當に相手にすべきではない幼稚なものであつた――吹矢などをいぢつてゐるところを忠左衛門に見られたのが心外でならなかつた。熱心に獲物を摑んだ

り、一人前に倫が使へたりするところが何故見て貰へなかつたらう。彼はこの屈辱を取り返すために、而してもう決して子供ではない事を表示するために、一生懸命大人ぶつて、遠來の客を家の方へ案内しながら、半分の口惜しさ、半分の恥かしさでむつつりしてゐたに引き換へて、茶目な十二の吉千代は、身體の僅かに三倍ある吹矢の長い筒をかついで、彼等の先に立つて驅け出した。珍らしい客を悅ぶ子供らしい興奮から、早くそのことを家の人々に知らせようとして。――

『成る程、成る程。』

例の茶室で、内藏之助から彼等の計畫の推移に就いて一通りの話を聞いてゐる間、忠左衞門はこの間投詞を單調に繰り返した。自重派と急進派の憂ふべき軋轢を話されても彼は成る程で受け、自重派がどう主張するか、急進派がそれにどう反對するかを聞いても成る程で受け、原惣右衞門の意見書を大高源五が持つて來たことや、またその源五に江戸から堀部安兵衞がどんなことを書いて寄越したかを聞いても成る程で受けた。併し、最後に彼等の過激な行動を防ぐために、出府して貰へまいかと云ふ、先に左六に託した手紙に既に十分に述べてあつた内藏之助の願望が、改めて懇ろな態度で持ち出された時、忠左衞門は初めて成る程を控へ、その儘口を閉ぢた。

『遠方を誠に御苦勞千萬で。――本來なら老人に斯う云ふお願をされることではないのだが、申した通りの事情で、他の者ではどうにもならないと考へられるので。この際枉げて一骨折つて貰へると非常に助かる譯なので。』

忠左衞門はこの信頼に對する答禮のしるしに半白の頭を輕く下げた。

『早晩誰も一度は行かねばならぬ土地ではあり、一足お先に集まつて何かお役に立つことがあれば、忠左衞門悅んで參りませう。これでも、二百里三百里の旅ではまだ若い者にひけは取らぬ積りですから、年が寄つてゐると云ふ御配慮は却つて心外千萬で。――』

態度の慇懃な割に、誰に對しても、ずばずばと明快な話をする忠左衞門は、不斷もさうではあるが、何か難問題の場合には殊に賴もしかつた。彼の口に上ると、どんなむづかしさうなことでも容易になり、明るく、希望ありげになつた。で、内藏之助もこの返事で一先づ安心すると共に、半分冗談の口調で云つた。

『いやどうも、自分で意氣地がないもんだから、つい。』

『さう申せば、お身體の工合は近頃如何で。』

相變らずはつきりしない旨を内藏之助が答へると忠左衞門は無遠慮にきり込んだ。

『ちと傾城買が過ぎますかな。』

彼は云つて仕舞つて、廣い額をゆすつてからからと笑つた。内藏之助は顏を赤くし、不意な初心らしいまごつきで苦笑したが、併し彼がその瞬間に眞に感じたものは羞恥ではなかつた。何が忠左衞門にその言葉を吐かせたか。單に彼の磊落か。でないとすれば、忠左衞門は自分の遊蕩の隱れ蓑を見透してゐるに相違なかつた。と思ふと、まだにこにこしてゐる、而して長い顏からの聯想で何處か怜悧な馬の感じのする忠左衞門の茶色の眼が眩しかつた。その一瞥の前にはもつと大事な秘密が暴露されてゐる氣がした。忠左衞門は既に何もかも悟つてゐるかも知れなかつた。自分が何故急進派に與し得ないかの眞の理由までを。――それでゐて默つて命ずる儘に江戸へ下ることを承知したのだとすれば。――内藏之助はこの推測をそのまゝ進めるに堪へられなかつた。で、彼は急いで話題を轉

することに依つて、不安な後めたさから遁れようとした。
「忠左衞門殿、實は江戸の行動に就いて斯う云ふ觀察を下したものもあるのですが。――」この前置をして内藏之助が話し出したのは、小山源左衞門が彼等に對して浴せたあの皮肉な批評であつた。「――つまり、彼等は非常に困つてゐる。どうにかしなければやりきれない状態になつてゐる。で、無計算に事を急がうとするのだと、斯う云ふので。」
「その傾向が全然ないとは申されますまい。」
忠左衞門は反對しなかつた。「併し彼等としてはさう見られるのは辛いところで、またそれだけに、最後まで行き詰らないうちにやつて仕舞はうと云ふ氣が強いかと想像されますな。――兎に角、理窟だけではこれは容易に解決されますまい。」
さう云ひながら、忠左衞門が初めて嚴肅な表情をその長い顏に浮べて默つたのを見て、内藏之助は彼を江戸に下すことを思ひついた時から用意してあつた或る提案に就いて、同時にそれはすべての場合、理窟で解決されないことを解決し得る唯一のものである方法に就いて、話し出さうとした。
『都合に依つては、非常に困るものは幾らかづつでも補助してやると云ふことにしてはどんなものかと考へてゐるのですが。――私自身の手でどうすると云ふ譯には勿論行かないが、他の事ではないし、僕の口から支給するとすれば、何とかならないことはない筈ですから。』これは昨年の沒落に際して、藩庫の在貨がそれぞれの使途に於て處分された時、主家再興費の名目で取り除かれ、以後良雄の保管の下に置かれてある、同志の者達は明らかに復讎の軍用金と信じてゐる金のことであつた。『これならば、幾ら貰はうと、誰に恩を着るでもなし、云はゞ先君から拜借すると同樣だから、彼等としても氣持よく受取れるだらうし、またそれに依つて過激な行動を防ぐことが出來れば、雙方好都合と云ふもので。……』
内藏之助はひとりで其處まで續けたが、忠左衞門が直ぐには贊否を表さないで、口癖のいい、成る程さへ控へて愼重に耳傾けてゐるのに氣がつくと、それ以上話すことが出來なかつた。何か云ふほど、結局自分の秘密の正體をさらけ出すに過ぎないやうな氣がした。忠左衞門は、積立費の提供の眞の目的が何處にあるかを看破してゐるのかも知れなかつた。――先刻の惧れが倍加されて後戻つた。
併し口を開いた忠左衞門は異議なく彼に同意した。さう出來れば自分の仕事も非常に仕易くなるだらうと云つたが、併し彼等を眞に落ち着かせるためには生活費の提供と共に復讎の期日を聲明することが必要だと説いた。
『御一周忌ももはや來月で、それまでに大學様の御一身がお極まりになれば結構ですが、でないとすれば、當分覺束ないと見なければなりますまい。
併し、幾らおくれても來年の三周忌までには何分の御沙汰があるだらうし、またそれだけは是非見屆けた上でと云ふのが、御承知の如く私の持論だから――』内藏之助は話しながら一つの苦しい塊りに咽喉を塞がれるのを感じた。彼は勇氣を以てやつとそれを應へつけた。『彼等にも無際限に待てと云ふのではない。ただそれまで辛抱して貰ひ度いと云ふのです。』
『御尤で。併し來年まで待つてそれでも御恩命に接しないとすれば大いに困りものですな。――その上彼等を喰ひ留めておくことは、忠左衞門もちとお受け合ひいたしかねます。』彼はその言葉と共に茶色の眼で凝と相手を見詰めて、きつぱり斷定的につけ加へた。『で、中間を取つ

て、來年の三月頃までに御沙汰が下れば結構、假令下らないとしても、それ以上は待たせないと致しては如何かと存じますが――是非さういふ事に決定して頂き度いもので。これを條件とすることをお許し下されば、忠左衞門責任を以て彼等を納得いたさせませう」

強い釘が終に打ち込まれた。内藏之助はこれに反對することはできなかつた。相談は極まつた。

明けの日忠左衞門は大阪に原惣右衞門を訪ねた。

惣右衞門はその頃天王寺に近い高津のごたごたした裏町の一つに住んでゐた。家族は初めから國に殘してあつたので、土地の遠縁に當る大持者をおいて朝夕の世話をさせてゐた。彼はまた近傍に集まつてゐる、あまり裕でない仲間の者達が、當座の生活費を得るために、一つは世を忍ぶ便宜のために、醫者になつたり、手習師匠をしたり、小商人になつたりしてゐるのに倣つて、自分も風變りな商賣をはじめてゐた。惣右衞門は傘屋になつてゐた。足輕頭で三百石の食祿を受けてゐた惣右衞門は、假令浪人したとて、一年に何本の傘でも賣らなければならないほど窮してゐる譯ではなかつたが、遠縁の男がその職に覺えがあつたのと、何か並べておけば、必要に應じて仲間の者を店の商賣客として自由に迎へることも出來たからであつた。實際今忠左衞門が、張り立ての傘を四五本軒下に擴げて、如何にも傘屋らしく構へた小さい店の中に入るのを誰か見てゐたとしても、年寄の田舍侍が傘の一本も買ひに寄つたとしか考へなかつたであらう。

「近頃店の景氣は如何で。」

「いや、存外儲かります。」

「初めからそれと分つてゐれば、一日持たせて貰ふところだつた。」

「なんなら今からでも結構だが。」

傘紙と、油と濕りの匂ひの混り合つたうす暗い二階で久しぶりの顏を合せた、二人の年寄は、先づ斯う云ふ挨拶で始めた。而してお互ひに自分達の言葉に興じて聲を立てて笑つたが、その快活な調子は、引き續いて生じた彼等の眞面目な對話にも悉くは消えてしまはなかつた。二人は同志の老人組の中では最も合口であつた。兩者も性格にはその年齡の七つの差と丁度比例する位の相違がなくはなかつたが、例へば忠左衞門が如何なる瞬間にも平靜を失はないのに對して、惣右衞門はどうかすると青年のやうな純眞な熱情に捕はれる傾向があつたが、これは却つてお互ひの友情の楔になつた分子も少くはなかつた。而して共通の鋭い洞察や諒解によつて、どんな重大な問題でも二人で話し合ふ場合には、しかつめらしく附き合ひをする必要はないといふ種類の友達に屬してゐた。

「話のやうだと、幾らはたから責め立てたところで、池久には當分やる氣はない、と見えるな。」

忠左衞門から、最近に内藏之助の使ひに來つた事から、山科での會見の顛末に就いて聞き取つた時、惣右衞門の口に何より先に上つたのは此の推定であつた。池久は内藏之助の今の池田久右衞門から取つた略名である。老人達はこれを一種愛稱の形で用ひたが、そんな時に限つて彼等の調子は著しく客觀的になり、内藏之助はもとの城代家老若しくは當面運動の主謀者とよりは、單に一廻りか二廻り年の若い、それだけ人生の經驗の足りない、一人の仲間として取扱はれるのが常であつた。

「併し、池久も今度の保證だけは反古にはしまい。」忠左衞門は、相手の如何にも年配な商人らしく剃り擴げた月代の下から、斜に額にかけ

て一本高く香爐の浮き出してゐるのを見て、內藏之助に對する不滿が存外根强いのを察しながら、わざと落ちつき拂つて續けた。「幾ら延びても來年の三周忌よりおくれる事はないのだから、まあ、それまで打つちやつておいて見ることだな。」

「そんな悠長な話では、此方は兎に角として江戸が承知しまいぞ。」

「それで承知しなければ江戸の量見が間違つてゐるよ。」忠左衛門はきつぱりと云ひ切つた。「わづか十ヶ月ばかしの辛抱だ。大學様のことがその前に極まれば、一年待たないですむかも知れない。それもたゞ待つてゐるではなく、困れば暮らしの方まで持たうと云ふのだから、文句はない筈だ。——或は池久頼むに足らず、世話にもなるまい、彼がぐづ／＼してゐる間に、此方は此方で軍資の急進派を糾合しにやつて見せると云ふのなら、それも一意見で面白からう。が、肝腎の軍用金は何處から降つて來る積りか知らねて。——幾ら堀部が八百八町を朝から晩まで驅け廻つて見たところで、そんな金が落ちてゐよう道理はなし、貴公にしろ、肝心の金が目に著けられたつて、藥種一軒づつ數へられるかどうか、先づ怪しいものだな。」

斷んな時の忠左衛門の舌鋒は、常よりも一層辛辣になつた。同時に、語尾には必ず彼一流の圓滑な高笑がくつ附いて、ひどくやつつけられた者ほど親しみを感じさせる魅力を持つてゐた。

「さうやられると一言もないが、」惣右衛門も虚を突かれて、一緒にかすかに笑ふ外はなかつた。「江戸にしろ、また此方の連中にしろ、池久の腰の据わり方さへ確かなら、半年やそこいら待つの待たないのと云ふ騒ぎでは勿論ない。何とか騒ぐ者があつたつて、抑へはつくのだが、この頃では御本家の意嚮が危かしいと云ふ評判だから、若い者がやきもきするのだ。それに就いて先達ても大高をやつて、池久に手紙で色々と云つて見たのだが、返事も寄越さないで、」

「そのことも聞いた。池久も心配はしてゐるが、あの性分で、貴公の意見を容れる氣はないにしても正面からはねつけられもせずと云ふ譯で返事がしにくかつたらしい。」

「さうかも知れぬ。併し池久の正直な腹はどうだらう。誓約の通り眞實今でもやる氣があるのか、ないのか。貴公は何と見る。」

「先づ四分六分と云ふ見當だな。」

「ない方が强いのだな。」

「さう思へば間違ひない。」

惣右衛門は低いうめき聲に似た溜息を洩らした。彼の顔の上にはもう今までの餘裕はなかつた。初めて骨な嚴しい表情がそれに代つた。

「併しこれは現在の話で、」斷んな場合に決して釣り込まれることのない忠左衛門は、相手の溜つきとは無關係に續けた。「今少し待つてゐるうちには、この割合は反對になるかも知れない。乾度なると思ふ。ならなければ無理にでもならせるやうに此方で仕向けて行くまでだ。

「さう、さう行けば結構だが。」

惣右衛門は容易に疑惑を捨てなかつた。それは內藏之助を見限る意味ではなく、彼の周圍の附き者が信用出來ないからだと云つた。その言葉が何を、また何を意味するかは二人の間には説明の必要はなかつた。が、內藏之助にどんな缺點があつたにもせよ、小山や進藤の徒を幕下に置いて彼を見ては無理が生ずると云ふ意嚮を忠左衛門は挾んだ。

「勿論、決して、」惣右衛門はそれを聞いて急いで自分の言葉の不足を補つた。「池久を彼等と同じ目で見る積りはない。たゞあの仁は池久に就いては、叔父の言動が可なり左右するのだから、その點を怖れるのだ。——云つて見れば、池久

を危むのはあの弱い性格を危むのだ。」
『ところが手前は反對で、池久はあの弱い性格で最も安全だと云ひ度いのだ。』
忠左衛門はその逆說めいた前置で相手を驚かしながら、自分の意見を解釋した。それに依ると、若し内藏之助が強い男で、自分の決心や欲望は人に何と云はれても平氣で押し通すやうな性格であれば、賴もしいと共に一面また危險でもある。例へば今のやうな動搖が彼に生じた場合、彼は勇敢に、仇討なぞはもう厭になつたと云ひ出さないとも限らない。さうなれば傍から騷いでもお仕舞である。併しあの内藏之助なら、腹の底では幾ら何と思つたにしろ、よしんば一年半年愚圖ついたにしろ、口に出して仇討は厭になつたと云ひ得る氣遣ひはない。――彼が叔父の影響から脱しきれないのも、要するにこの柔軟性に基くのであるが、考へ樣では、これも我々に利用されなくはないであらう。叔父に動かされることは、他の者にもまた、云ひ換へれば我々にも動かされる可能のあることを示すのだから。――併しこれ等の他に今一つ最も有力に彼を捕へて、どんなに藻搔いても復讐の問題から足を拔くことの出來ないやうに縛りつけてゐるものがある。それはあの保管金だと忠左衛門は云つた。

『大學樣の運動費やその他で幾ら使つたところで、またこれから先江戶を補助するにしたところで、あれだけの金が容易に失くなるものではない。それに池久のいゝところは、自分でそれをどうすると云ふことは、しろと云はれても出來ない性質だから、金はいつまでも手に殘る。殘つてさへゐれば復讐の問題はいやでも應でも池久の念頭を離れる氣遣ひはないし、云つて見れば番人が耳許について居催促してゐるも同然で、これより有效な監視はなからう。當分打つちやつて樣子を見てはどうかと云ふのも此處を考へての話で、そのうちに池久の腰の据わりもどうにか直つて最初の計畫通り一緒にやるとなれば、世間體も惡くなし、我々も氣持がよい。――いや、そんなことか問題ではない。世間體が惡からうが、氣持がよくなからうが、よしんばこの上二年三年待つことにならうが、立派に目的を遂しようとするには、是非池久を待たねばならぬ。打ち割つて云へば、あの金を自由にしなければならぬ。――と斯う手前は堅く信じてゐるのだ。』

惣右衛門は、相手が得意な兵法を講ずる時のやうな論調で、これだけのことを整然と理路を追うて話し續けるのを聞きながら、何か事ある度に彼に就いて考へさせられる一つのことを新しく感じてゐた。それは忠左衛門こそあらゆる意味に於て怖ろしい人間だと云ふことであつた。

月の末に、忠左衛門は他の一名の同志を連れて江戶に向つて出發した。内藏之助はこの種類の用事で一味の者を何處へかやる場合には必ず支給することにしてゐる旅費の外に、可なり纏まつた金を彼に渡した。十日餘りの旅行の後、忠左衛門は無事に江戶に着いた。而して、彼に託された交涉が圓滿に終了したことを、到着の知らせと共に報告して來た。

『これで當分いゝ。』

この報告が内藏之助に與へた祕密の安堵は、モヒ中毒の患者が、一本の新たな注射針をその肉に打ち込んだ時の滿足に稍近いものであつた。併し忠左衛門の方でも拔かりはなかつた。彼は出立前、同志の一般の意見をも聞き度いと云ふ理由で内藏之助に勸めて總會を開かせたが、それは結局、復讐に就いての今度の聲明を一同の前に改めて宣誓させ、二度と破棄する

ことの出來ないやうにさせたものであつた。惣右衛門を大阪に訪ねたのも一つはその下相談のためであつたから、彼の援助で目的は思ふまゝに達せられた。内藏之助にしてもそれは知つてゐた。同時に其處まで自分を持つて行つた忠左衛門が恨めしかつたのではあるが、兎に角危機は去つた。今後の數ケ月乃至一ケ年を、それに依つて彼は自由に殘すことが出來るであらう。内藏之助の現在の氣持から云へば、間もなく咲く筈の牡丹を、舒やかな心でゆつくり眺められるだけでも、それは何物にも代へ難き悦びであり、内藏之助はまたその悦びの價値を眞に知る者の悦びでそれを味はうとしてゐた。

彼は毎朝可なり寢坊をした。前から早起でもなかつたのが、病氣以後は殊で一層遲れがちになつたのである。眼を覺ます頃には日は高く昇り、一しきり朝の仕事のすんだ家の内がひつそりして、小さい子供たちの遊び聲一つ響かなかつた。併しこのしーんとした空氣は、斯んな場合に普通感じさせるやうな樂しい和らぎを内藏之助に齎しはしなかつた。却つて家が靜まり返つてゐればゐるだけ、彼はその中に不自然な或る冷たいものを感じた。綺麗に掃除の出來上つた茶の間が妙に澄み、同じやうに、全くその四角な部屋と同じやうに、またすつかり同じ調子できちんと朝の身仕舞の出來上つた妻のくり子が、彼の起きるのを待つて坐つてゐる。勿論まだ朝飯前である。子供達は兎に角として、妻がやがて起きる筈の主人に先立つて食事をするなどと云ふ事は、隣藩の家老の家に生れて、當時の女大學式で訓練された彼女には考へられないことであつた。併し其處は、他の種々な原因と一緒になつて、彼女を不機嫌にしてゐる。例へば内藏之助がいつまでも便々と寢てゐるのからして、彼女は氣に入らないに相違ない。つんと澄つた顏の下で、青白い顳顬が神經的に震へてゐるのが内藏之助にははつきり感じられる。──と、床から出て行くのが億劫な氣がする。でもそれ以上寢てゐる譯にも行かないので起き上る。顏を洗ひ、身體を拭き、それから、一日置に男髮の上手な若黨の左六に結はせることにしてゐる髮に丁寧に櫛を入れた後、やつと茶の間に入つて行くと、床の中で想像したと寸分違はぬ有樣が、嘘のやうに正確に彼を待ち受けてゐる。

「お早うございます」

「お早う。」

夫と妻は習慣的な禮儀正しさで、それだけ冷淡に、寧ろその冷淡をお互ひに意識しない位素つ氣なく定例の挨拶を交換する。食事が始まつてもこの調子は變らない。二人は默つて箸を動かす。併し内藏之助が默つてゐるのは特別に不機嫌なためではない。彼は生來口數が少なかつたが、家では殊に無口なのであつた。何か聞いたり話したりすることがあれば、妻から切り出さなければならなかつたから、くり子はいつまでも意地張つて默つてゐる譯には行かなくなる。で、二三の家事上の話がやつとその沈默を中斷する。内藏之助はその方面に關しては何もかも妻に盲從した。反對すれば面倒臭くなるのを怖れるためばかりではなかつた。彼は妻の手腕を信じてゐた。同樣にまた妻が武士の妻として、教養に於ても覺悟に於ても申分のない婦人であることを彼は知つてゐた。にも拘はらず、内藏之助が彼女に慊りなかつたとすれば、それはくり子が申分がなさ過ぎたからであつた。云ひ換へれば、二人はたつた二つしか違はなかつた。而して大抵な場合、年の多く違はない妻は夫に取つては姉であり、母親であると云ふことがいけなかつたのであるが、殊に昨年の事變は彼等の關係を一層險惡なものにした。妻は今内藏之助の監督者でさへあつた。彼女は夜間を

唯一最善な義務と信じ込んでゐる點に於て、それこそ眞に同盟の統領たる夫に盡してあらゆる期待をかけてゐる點に於て、同志中の誰よりも頑固な忠義者に劣らなかつた。これは内藏之助には堪らないことであつた。彼も彼の心の動揺が深くなればなるほど、彼の良心の苛責も一層烈しく身に迫つて來るのを感じた。——さうやつて食事をしてゐる間だつて、内藏之助は[illegible]から自由ではなかつた。

箸を置いて　暫くの間に[illegible]て用意されてある、持薬の煎じ薬を[illegible]で一杯飲むと、彼は既に出る。妻はもうゐない。彼女のゐないことは、最も適當な役割者から、忠義から、責任から、同盟から、彼を縛つてゐる一切の縁絆から一時逃れたことに等しい。さうだ。此處には何んにもない、誰もゐない。たつた一人だ。あゝ一つ！　彼は大手を擴げ、脊伸びをし、口を一杯に開いて、肺臟の底から思ふ樣叫び度い氣がする。實際やつて見る。たゞ聲をあげる代りに長い〳〵吐息をする。樂しい。春風が吹いて花が靜かに散つて來る。これも樂しい。太陽が麗らかに照るのも、鳥が囀るのも、向うの音羽山がいつに變らず長閑に霞んでゐるのも、悉く樂しい。殊に丹精の牡丹が、既に膨らまれるだけ膨らんだ蕾で、[illegible]の用心深い望を寄せ[illegible]、綻びさへあれば一齊にぱつと咲かうと身構へながら、切れ込みの多い葉の間に、[illegible]思ひ〳〵の姿を競つてゐるのを見ると、彼の満足は絶頂に達する。これで四五日のうち暖い夜雨でも來れば、翌けの朝こそは素破らしい光景を呈するであらう。想像しただけでも、内藏之助は快い陶酔に浸ることが出來る。

但し、[illegible]ばかりの散歩が終つて家に入ると、彼の[illegible]な夢は忽ち[illegible]い聲に依つて破られる。彼女は長男を呼び立てる。

『松之丞、松之丞。』

これは息子が父親から受けることになつてゐる論語を始める時だと知らせる言葉であつた。松之丞は母親の命令に從ひ、一冊の書物を持つて父親の居室に行く。書物は論語である。これは一家が赤穂から移つて來て以來、土地に適當な教師がなかつたために生じたことであるが、内藏之助に取つてはこの授業は今では段々と苦しくなつてゐた。論語の嚴正な實踐哲學は、彼の疲れた、ひたすらに安逸を求めてゐる心を苛んだ。取り分け此頃あたり、出掛けて、幾日か家を明けた後の講義は、弟子が他の者でなかつただけそれだけ辛かつた。で、丁度な來客でもあつて授業が妨げられると、彼は寧ろ救はれた氣がした。少し位いやな人間でもその時は歡迎された。

午後も午前と同じく散歩で過ごす[illegible]、夜は[illegible]が來れば[illegible]あつた。暇をかけてゆつくり[illegible]。而して其代の陶然たる心で[illegible]、[illegible]づ無事な一日であつた。どうかすると、[illegible]醉はその儘ぢつと落ちついてゐることの出來ないやうな[illegible]と、一種落莫とした、初老の[illegible]だけが[illegible]つてゐる[illegible]助は暗い穴の底に落ち[illegible]たも[illegible]ぶやうな[illegible]な、なんにも注文をつけない、[illegible]だけが、それを[illegible]ふであらう。但し彼が食膳の向うに見出したものは冷やかな、[illegible]とした[illegible]であつた。彼は立ち上る。[illegible]様子を見て取つて[illegible]が[illegible]る。

『お出掛けでございますか。』

『うん。』

彼女は左右に外出の用意を命じてから着換に手傳ふ。行先に就いては聞かない。その代りに云ふ。

『どうか氣をおつけになつて下さいましよ。[illegible]

純に、どんなことがないとも限りませんから。」

この言葉は、吉良と、同時に對する單なる注意に過ぎなかつたやうで、その實は内藏之助の思ひ出し度くないもの、せめてその時だけも忘れてゐたいものを、忽ち目の前に振り起させ、何處までも行くところまで持つて行かせようとするに等しかつた。彼は眼をしばたゝかせて鋭くした眼を妻に注ぐ。若し彼女が、自分の苦しい心を幾分でも讀み取つて呉れさへしたら。――でなければ、妻が心配して、寂寥しても出掛けさせまいとするやうであつたら、――併し――駕籠が來た、内藏之助に來る。

「行つていらつしやいまし。」

彼女は平氣とする口で、尖つた細い顎を玄關の方に向ける。

終に牡丹が咲いた。前に約束した頃よりは見事な出來であつた。内藏之助の滿足は云ふまでもなかつた。彼は他にゐても日に何度かは必ずそこに訪ねたことのない往來や親父の家を外出のために違つて、二人をあまり、庭内で散として用心した程であつた。而し又日を置いて行つたけの度を細にし、紙けられけし花見を續けて仕舞ふと、牡丹はやがて實へかけ、先に咲いたものから順々に散つて行つた。まだ匂やかな二三枚の花瓣が、金絲のやうな蘂と共に僅かにくづれて、花莖から根元の黒い土に落ち重なつたりするのを見ると、内藏之助は自分の胸の中からも同じやうな何物かがばらばらと崩れて行くのを感じた。内藏之助はくづるゝ花を眺めて毎日庭に立つた。

「牡丹もこれでお仕舞ひだ。」

さうして多分この生活も。――内藏之助は理由なしに、漠然とこんな氣がした。今にも、江戸から早打が何か報じて來る。事件が急轉する。人々が駈けつけて來て、否でも自分を引つ張り出さうとする。さうなつて、また彼等を拒み切るであらうか。内藏之助には自信がなかつたから、さういふ形勢になるのが何よりも怖ろしかつた。

實際江戸からはその後も便りは絶えなかつたが、内藏之助の心配したやうな事に就いては、當分は何んにも云つて來なかつた。彼は寧ろ吉良の動靜や、それに對してやつてゐる人々の働きなどを書いてあつた。同志の或る者は、吉手を求めて町人に扮し出入するに至る樣に商人になつた。この藏本は吉良の邸の屋敷の先住者で、建築を引き受けたのはこの棟梁であるから、彼に依つて設計圖を手に入れば、現在の吉良邸の最も正確な地理を知ることが出來る譯である。多分首尾よく行きさうだと書いてあつた。また二人の若い同志は、吉良邸の直ぐ近所に雜貨と雜穀を兼ねた小店を開いた。屋敷の小者や女中達がちよいちよい買物に來るやうになつた。警戒されてゐるにしても、下司の輕い口は何度有利な情報を洩らすに相違ないと云ふことも知らせて來た。

併し六月にかゝつた頃から、左衛門の手紙には内藏之助の心配したものが、噂を落し出した。彼は江戸が再び道を誤つて來たことを報した。直接の原因は、吉良上野介が息子の上杉綱憲の許に引取られる噂の來書に達するかも知れぬと云ふ、噂が傳はつてゐたからである。これは今までも屢傳はつて來た噂であつたが、最も安全な處に落ちつかうとするに外ならなかつた。さうなつては、大事であるから、是非その前にやつつけなければならぬ。この上愚圖ついてゐれば、吉良は手の届かぬ所に行つて仕舞ふと安兵衛は云ふのである。左衛門も、それが事實とすれば今度こそは進むことは出來ないから、内藏之助にもその積りで出馬して貰ひた

い、と書いて來た。

「米澤に。――ふむ、米澤に。――」

内藏之助は愼重に忠左衞門の手紙を繰り返した。而してその文字に落着する度に、彼の胸はひそかに怪しく震へた。若しこの遠隔の地に、誰も氣のつかないうちに、上野介が退隱して仕舞つたとするならば。――一歩進んで、それよりも遠い、無邊際に遠い別世界に不圖自然に消滅したとするならば、事情はどう變化するであらう。内藏之助は思ふべからざる事を思つた人の驚きで、あわてて揉み消さうとしながら、その考は烙印の如く胸裏から去らなかつた。で、彼は當面の處置に就いては何等の意見も發せず、たゞ退隱の噂の眞僞を知り度いと云ふ返事を出した。すると行き違ひに忠左衞門からまた手紙が屆いて、堀部安兵衞が上洛した、江戸の目下の事情は彼が詳細に話すであらうと云つて來た。

六月二十九日に安兵衞は京都に到着した。併し直ぐ山科を訪ねようとはしなかつた。彼は一番に大高源五に逢つた。而して内藏之助が忠左衞門の手紙を受取つて心待にしてゐた頃には、安兵衞は源五と共に大阪に在つて、原惣右衞門の寓居の、蒸暑い二階に三人で坐つてゐた。

「米澤行が見合せになつたらしいと云ふのは、必ず間違ひないだらうな。」

惣右衞門は、遠來の客の長い報告がとぎれるのを待ち受けて口を開き、その眞僞は何度念を押しても押しきれないと云ふ風で、相手の日に燒けた精悍な顏を見詰めた。

「それだけは大丈夫です。」安兵衞はきつぱり斷言した。「最初この計畫は彈正大弼と上野介とで目論んだことで、それを家老の千阪が聞いて、そんな事をして上杉家を騷ぎの中に捲き込むやうなことがあつてはならぬと、異議を申立てたため、已むなく中止となつたらしいのです。」

『多分それは事實であらうと手前なぞにも考へられます。』源五も持前の、殊に安兵衞の傍では一層物柔らかに見える調子で言葉を挾んだ。『この前の例もあることですから。』

『左樣。反對したとすればそれは刑部だ。あの男だけは、假令上野介が主君の生みの親であらうとも、大事の場合に上杉家と吉良家を混同するやうなことをさせる氣遣ひはない。』

今三人の噂に上つた千阪刑部は、上杉家とは深い血縁のある重臣で、當主の綱憲も彼の言葉だけは無視することが出來なかつた。前年の秋にも、綱憲は赤穗浪士の復讐から守る手段として、父を白金三光町にある上杉家の下屋敷に匿まつた。庭中に拔穴を作つて、若し浪士達が討入つても逃げ出せる仕掛であつた。併し軈て千阪が江戸詰になると共に、彼は今と同じ反對理由に依つて綱憲を說き、再び上野介を本所の邸に送り返した。源五が前の例もあると云つたのはこの事である。

「幾ら千阪が反對にしろ、二度まで斯う云ふ事があつて見れば、今後とても油斷は出來ません。いや、一刻も猶豫は出來ません。この上愚圖ついてゐるうちには、取り返しのつかぬ事件が突發するのは眼に見えてをります。」

安兵衞を驅り立てて夢中に火の玉のやうに江戸から飛び出させたのはこの一念であつたが、今一つ別に、惣右衞門に話すのは憚られたが、源五だけには同じ年配の心安さから打ち明けた祕密の原因があつた。それは内藏之助から出る補助金に就いてであつた。彼をはじめ江戸の同志の大部分はその金で確かに調法してゐた。それだけ、金さへ當てがつて置けばいつまでもおとなしく待つてゐると思はれるのが口惜しかつ

た。安兵衞の遮二無二事を急ぎたがる氣持は、一面、この恥辱から脫しようとする藻掻でもあつた。

『吉田はどう云ふ意見かの。』

惣右衞門は相手の機先を制するため、稍話頭をずらした。

『忠左衞門殿は、要するに兵法家です。』安兵衞は、この長老を大膽にもその一句で概括しようとした。『戰をしても理詰の戰で、陣を張り、與を揃へ、十分な兵糧と武器を揃へた上でなければ動くまいとする。併し目下の形勢に取つて必要なものは六韜三略よりは一口の劍だ。十人の孫子より荊軻、秦舞陽だと、實は出發の前夜にも大いに議論を戰はした譯ですが、愈〻我々が結束して立つとなれば、結局は反對しないに極まつてをります。』

『忠左衞門殿は、大石殿を除外してやると云ふことが、情に於て忍びないのではないだらうか。』斯う云ひ出したのは源五で、彼は重に安兵衞を相手にする調子で話した。『あの人だけは未だに大石殿に希望をかけてゐられるやうだし、少くとも今の我々ほど見限つてはゐないらしいからな。』

『或はそんな點もないことはなからう。』

安兵衞も否定しなかつた。たゞ惣右衞門だけは、若い二人が想像するやうな、そんな感傷的な理由から、忠左衞門が安兵衞の今度の即行說に同じないのだとは信じなかつた。江戸に立つ前、この二階に殘して行つた彼の言葉に就いて見ても、忠左衞門の希望が眞に何にかゝつてゐるかは明瞭であつた。でも惣右衞門はその話を其處で打ち明けようとは思はなかつた。それは話しやうでは誤解の起り易い問題であつた。所謂兵法家の苦肉の策であり、謀士の術數であつた。惣右衞門にしても、相手が忠左衞門であればこそ、どんな策を弄しても反對しないし、安心して任せて置けるのであるが、自分でやらうとは思はなかつた。寧ろ嫌ひであつた。彼が安兵衞や源五等の若い者と容易に意氣が合ふのも、この公正な、明るい、一本氣に基くに外ならなかつた。

惣右衞門が默つてゐるのを見て、安兵衞は何か他の心配と感違ひしたらしく、斯う快活に話し出した。

『なに、今になつてまで二の足を踏むやうな手合には、此方から御免蒙つた方がよい位です。手前は初めから云つてゐる通り、せめて十四五人、場合に依つては五六人でも立派に出來る仕事で、あとは幾らあつても足手纏ひに過ぎない。やつてよければ安兵衞一人斬り込んでゞも、上野介の白髮首一つ討ち漏らしはせぬ積りです。』

『大きく出たな。』惣右衞門は相手の廣言を面白がつて笑つた。『併し貴公だけは說明附だから、やつてやれなくもなからうが。――』

『いや、さう申されると、甚だ赤面の至りで。』

安兵衞は子供らしくまごついて黄ばらの襟をかき合せながら、併し、說明附だと云はれた一言は大いに嬉しかつたらしく、逞しい顏に並びのよいまつ白な齒を見せてにこ／＼した。安兵衞がまだ舊姓の中山氏を名乘つてゐた二十代の頃、高田の馬場で叔父の決鬪に助太刀をして、數人の敵を斬り倒したことは有名な插話であつた。

『兎に角、我々だけが功を私する結果になつてはならない。』惣右衞門は愼重を要するのはこの一事だと云ふことを最後に力說した。『いよいよ山科を見限れば見限るで、已むを得ない理由を明白にして改めて同志を募つた。贊成の意志ある者は一人も漏らさず糾合するだけの手順を踏んだ上でやるならば、惣右衞門と雖も諸君の計畫に同意することを敢て拒まない。』

『一味同意の儀は申すまでもない事です。』安兵

衛は惣右衛門の承諾に對して誓言するやうに答へた。『我々が忍び難きを忍んで今日まで待つたのも、云はゞ抜け驅けの功名を避けるために外ならなかつたのです。——でなくして、ただ目的を達すればいゝのなら、どんな方法でも取れたのだ、と實は大高とも話したやうな次第です。』

源五も友の言葉についてそれを敷衍した。

『その時斯んな論も出たのです。山科と分離して事を擧げるとしても、我々で功を私するのではない、功名の目的が二つに分たれるまでだ。詰まるところ、山科連は大學樣に依つて社稷を恢復しようとする。こちらは仇討專門でやつて行く。どちらが先に成就しようと功は同じで、嫉みつこはない譯だと。——なにしろ、その大學樣が長い大學樣だからなあ。』

その時三人は三人だけにわかる消息から微笑を見合せて笑つた。

安兵衛の上京と彼の企は頓て反對派の方にも傳はつて來た。何か生ずる度に一番に甥の樣子を探りに來る小山源五左衛門は、この時も早速内藏之助を訪ねて例の茶室に坐り込んだ。

『堀部のことならば、吉田から知らせて來てゐます。』

その報告を内藏之助が別に驚かなかつたので、叔父ははずみ抜けの形で、幾らか不平で云つた。

『何だ。知つてゐたのか。——ぢや、あの男の目論んでゐる事も勿論心得てゐるのだな。』

『えゝ。』

『それも忠左衛門から知らせてよこしたのか。』

『いや。一昨日でしたか、ちよつと他から聞き込んだのです。』

『幾らあの男が圖太くも、まさか自分で此處へやつて來て、これ〳〵だとも云へまいて。』

源五左衛門は、どんな話の時にも必ず一滴落さなければ承知しない毒を舌の先からしたゝらせた後、その餘滴を内藏之助に注いだ。

『それにしても吉田が委しい通知を寄越さないのはどうしたのだ。堀部が何の用事で飛び出して來たか分らない筈はなからうに。——本統に知らなかつたのなら迂濶千萬ぢやないか。そんな事をさせないためにこそあの男をわざ〳〵江戸にもやつてゐるのに、高い金を使つて何をしてゐるか譯が分らぬ。』

最初堀部の[illegible]時は、内藏之助にも叔父の[illegible]は[illegible]なかつた。にも拘はらず、[illegible]な[illegible]が、それ[illegible]た。安兵衛は[illegible]目的を[illegible]して來たのでなければ、上京後何かの[illegible]したかも知れない。それ故、[illegible]て來られなくなり、[illegible]であらう[illegible]傳言を[illegible]ることが出來ないだと。——内藏之助はそれに就いて[illegible]、後の成行を心配したりするよりは、その問題を叔父とそんな調子で話すことの厭はしさに堪へられなかつた。彼は[illegible]、それをいつになく[illegible]さうともしないで、素つ氣な[illegible]つちりしてゐた。併し叔父はそれ位でひるみはしなかつた。

『おれに云はすれば、奴等がやるならやらせて見るがいゝと思ふ。』源五左衛門は所謂奴等がその座に居て聞いてゐるかの如く、挑戰的な口調で續けた。『決して待ての中止しろのと云つてはならぬ。氣振にもそんな樣子を見せれば、奴等は一層増長する。打つちやつて置くに限る。いつも話す通り、先方には上杉と云ふものがついてゐる以上、どんな場合だつて大事な親

を五六人十人の素浪人に喰々と打たせて置くものか。誰が考へても明白な勝負だ。――俣今萬が一にも奴等の我武者羅が效を奏したところで、何もひけ目を感ずることはない。我々は大學樣を世にお出し申すと云ふ大役を控へてゐる。まだ閉門の御赦免さへないのに淺薄な騷ぎを起して、そのため御前途を誤つてはならぬから隱れたいと云へばそれでよい。これは口實ではない。大義名分だ。なう、左樣ではないか。

叔父がひとりで當惑にまくし立ててゐる間、内藏之助は默り續けた。彼は横向いて、暗い窓の外へ、いた角な襖を見詰めてゐた。叔父を諭すつもりはなかつたばかりでなく、内藏之助は叔父の顏を見度くなかつた。彼は知つてゐた。叔父がどんな腹の動かし方で、頭のしやくり方で話してゐるか。…お互ひの腹は分つてゐるのだから、まあ落ちついて話くすることだ。――それは頭の中で、叔父が其甥に投げかける合圖に外ならなかつた。同時に、内藏之助がその激しい嫌惡にも拘はらず、いつとなしに叔父の暗示にかかつたのは皮肉な現實であつた。

内藏之助は急に顏を上げた。彼は含羞を知つてゐた。而して今日だけは彼の心中に隱るまいとして口を開いた。

「兎に角今度のことに就いては今少し考へさして頂きませう。よく研究した上で穩かに對策を講じても遲くはないのですから。」

「何も考へ込む程のことではないぢやないか。」叔父は追求した。「問題は極めて簡單だ。奴等は別行動を取らうとしてゐる。結構だからやらせて見ろ。而して手も口も出すなと云つてゐるまでのことだ。」

「併し、そのことが隱しても、またどんな事情が彼等の態度を急に變化させたか、私としては眞相を確めるの必要があります。都合に依つては、堀部に逢つてもよいと考へてゐるのです。」

「何、堀部に逢ふ。」源左衞門は憮然として叫ぶやうに云つた。而して、茫然呆れて甥の顏を見詰めてゐるうちに、彼の驚きは怒りに、それから意地の惡い嘲りに變つて行つた。「併しお前が逢はうとしても堀部の方で御免を蒙ると云ふだらうよ。乾度さう云ひかねない。また奴等が今度のやうなことを目論んだ心が純に分らないのなら、おれが云つて聞かせるが、奴等はお前を、つまり我々を見くびつて馬鹿にしてゐるのだ。もう相手にしない氣なのだ。これ程明白に思ひ知らされても、まだお前は何か奴等に逢はねばならぬ用事があるのか。」

内藏之助は返事をしなかつた。併し、逢へばたつた一つの用事だと彼は思つた。叔父の云ふ如く彼等の方で避けたとしても、その用事だけはなくてはならないであらう。――内藏之助は何もかも打ち明けて仕舞ひたかつた。自分の正直な氣持を。その變化を。復讐の理想の理由を――それが出來ないとしても、せめてこれだけは云ひたかつた。――如何なる輕蔑にも甘んじて受けよう。見限されても仕方はない。ただ、自分をこの叔父と仲間扱ひにだけはして呉れるな。――と。

その晩のことであつた。既に寢床の中に入りながら、何か考へごとでもしてゐるやうに、いつまでも圍爐の音をさせてゐた妻が、すかたその手を留め、靜かに襖を開いて、隣りの夫に呼びかけた。

「あなた。」

「何だ。」

内藏之助も眠つてゐなかつた。妻は寢床の上に起き上つて、夫の方へ向いた儘答へた。

「江戸から堀部さんが見えてゐるのださうでご

ざいますね。』

『うん。』

妻は半分間ほど默つて、それから聞いた。

『お逢ひになりまして。』

『いや、逢はない。』

妻は半分間ほどたつた後、再び聞いた。

『家へはいらつしやらないのでございますか。』

今度は内藏之助の方が默つた。

『本統ならば、一番に訪ねて參りさうなものなのに――』

妻が續けかけたので、内藏之助はそれを遮つて、同じく天井を向いたまゝ答へた。

『女はそんな話には口を入れない方がよい。』

『それは仰しやるまでもなく存じてをります。ですから、今日まで幾らお聞きして見度いと思ふことがあつても口に出したことはなかつたのですが、場合に依つては伺ふだけのことは伺つて置かなければ、私の務がすみませんから。』

『それは何のことを云つてゐるのだ。』

『例へば、お召物のやうなものだつて、さあと云つては手が廻りかねますもの。他のことを何んにも話して頂からと申すのではございません。たゞそれだけ、どう云ふものがいつ頃要ると云ふことだけ、前以て仰しやつて頂き度うございます。』

内藏之助はくるりと向うむきになつて妻に背中を向けた。そのことでは晝間叔父から散々惱まされてゐるのに、夜、床の中でまで同じ論判を繰り返されるのは、我慢出來なかつたのである。併し、斯う切り出した以上、妻はいつも云ふだけの事は云はなければ止めなかつた。

『今ですから申しますが、昨年の暮あたりの噂では、多分御一周忌頃だと云ふお話でしたから、その積りで染めるものは染め、縫ふものは縫ふで、すつかり準備をいたしました。あなただつてそれは御承知の筈でございます。尤もあなたは、私が何を染めても縫つても默つて見ていらつしやるだけで、さう急がないでもよいのだとも、もつと急ぐのだとも、何とも仰しやりはいたしませんでした。けれどもあの時もしそれが分つていらしたのなら、而して一言さうと仰しやつて頂けたのなら、餘計な小袖を何枚もさう拵へなくともよろしかつたのでございます。でも、今はそんな愚癡を申してゐる譯ではございません。私はどんな時でも愚癡は大嫌ひでございますから。――たゞ、そんな譯で今までの支度では夏の役には立たないのですし、萬一暑いうちに江戸表へでもお立ちになるやうでしたならば、私の方でも新しく用意を致さなければ――』

『そんな必要はない。』

内藏之助はこれまで滅多に出したこともない鋭い聲を放つと共に、がばと反ね起きた。彼は妻を睨みつけた。

『でも――』

『いや、要らぬと言へば要らぬ。』

『――』

『――』

人の氣も知らないで。お前は殘酷な女だ。せめて眠る間だけでも、そんな話からおれを遠ざけては呉れられないのか。――日頃無言で、意氣地なく温順な男が、どうかしたはずみでまるで別の人のやうにかあーつと燃え上る、その一種の癇癖を内藏之助は持つてゐたが、丁度それが妻に對する鬱した憤りや、堀部等の企に依つて引き起されてゐる心配や、晝間の叔父の不快な訪問や、その他この事件の發生以來彼の心を苦しめてゐる、殊に誰に打ち明けやうもない秘密の煩惱と一緒になつて、自制を失つた、滅茶苦茶な激しい發作に彼を陷れた。實際生理的に病氣になつたやうに内藏之助は見えた。汗ばんだ顏がまつ青になり、小鼻の横には雀ん

だ黒い眼が現はれ、唇には色がなかつた。而して眼が怒りで動かなくなつたかの如くその中に凝と据わつてゐるのが、枕許の行燈の薄暗い光と、蚊帳の青つぽい陰影のために異樣に凄味を帶びて見えた。

妻は度膽を拔かれたやうな驚きと、一種漠然とした怖れを以て夫を眺めた儘、直ぐには何ともいふことが出來なかつた。彼女はこれ程まで逆上した夫をまだ知らなかつた。普通の場合であつたならば、また普通の妻であつたならば、どんな爭論でもこれで終つた筈であつた。併し彼女は強かつた。而して今夜は決心してゐた。

『では、これだけたつた一つお聞かせ下さいまし。堀部さん方が、近いうちに事を起さうとしていらつしやると云ふのは本統でございますか。』

「それは本統なら本統だ。」

内藏之助はふつきら棒に、情熱が一時に水に還つたやうな不思議な落ちつきを取り返して答へた。

「あなた御自身、お見込は。」

「分らない。」

『——』

「寧ろ必要がない。」

「それはまたどう云ふ譯でございませう。」

妻は嚴しく、氣負ひ立つて突つ込んだ。夫の意外な返事が今度は彼女の方を逆上させた。

「彼等は彼等、おれはおれだ。」

内藏之助は妻の釣り上つた眼を眺めて段々皮肉になつて云つた。

「そんな事を仰しやつて、あんな人たちの手で見事仇討がすんだとすれば、あなたの御面目はどうしてお立てになる積りでございます。」

「立つとも。立派に面目は立つ。我々は最初から彼等とは目的が違つてゐるのだから。我々は大學樣を世にお立て申すことが主だ。まだ閉門の御赦免さへないうちに滅多な事をして、御前途を誤つてはならぬから仇討には加はらないのだと——』

自分は何を云つてゐるのだ。——内藏之助は不圖一つの激しい恐怖に口を塞がれた。それは今日叔父が頻りに説き立てて行つた、而して自分をあれほど嫌厭させた言葉ではなかつたか。——それがそつくりその儘の自分の言葉となつて無意識に流れ出たことを思ふと、内藏之助は忌々しさを通り越して氣味が惡くなつた。今一度口を開けば、聲まで叔父のしやがれ聲に變つて仕舞ひさうな氣がした。彼は絶望して默り込んだ。妻が何か云はうとするのを打つちやつて、床に打ち倒れ、麻の小蒲團を顔の上に引きかついだ。

その日から五六日とはたゝなかつた。而して同じく夜であつた。既に堅く鎖した池田家の門を忍びやかに叩くものがあつた。若黨が開けに行つて見ると、吉田忠左衛門の長男で、父の後を追うて江戸へ一緒に行つてゐた澤右衛門が、旅裝束で汗と埃まみれになつて飛び込んで來た。主人と客はその夜いつまでも寢なかつた。明けの日になると、澤右衛門はこれから赤穗へ還つて江戸に引き返すのだと云つて暇乞をした。

澤右衛門が何か重大な報告を持つて來たことは、彼が立つた後の内藏之助の樣子で想像されたが、果してどんな用事であつたかは、斯んな場合いつもさうであつた通り、家の者には容易に分らなかつた。併しそれから二三日すると今度は意外にも今まで一度も姿を見せなかつた、それだけに不穩な物議を引き起した堀部安兵衛が、出し拔けに訪ねて來た。それはかりではな

かつた。彼は二度目に急進説と自重説の分裂から足の遠くなつてゐた大高源五を伴つて来た。その時分には事件は関係者の間に明瞭になつてゐた。昨年の事變以來、江戸の下屋敷に蟄居してゐた大學の運命が決定したのである。彼は閉門を免され、知行を奪はれた上、淺野の宗家に當る松平安藝守に預けられる事になつた。これは大學の前途を暗黒にしたと共に、彼に依つて主家の再興を圖ることを根據としてゐた自重説を根柢から覆すものであり、内藏之助自身から云へば、吉田忠左衛門を江戸に下す場合に與へた聲明の履行期が、今日まで辛くも避けて來たものが、終に到來したことであつた。安兵衛と源五の訪問は、この意味で彼には運命の正式な、素早い通告に外ならなかつた。

併しこのことが小山源五左衛門の耳に達した時、叔父は怒つて甥を訪ねた。

「何と云ふ圖太い奴等だ。」彼は行きなりさう云つて彼等を攻撃した。「我々を出し拔くやうなことを目論んで置きながら、斯うなつたからと云つて平氣で飛び込んで來られる義理か。おれなら門前拂ひを喰はしてやる。お前は寛大すぎるから、奴等が嘗めてかゝつてゐるのだ。」

「併し、あの連中は正直な立派な態度でやつて來たのです。」内藏之助は明らかに辯護しながら叔父に答へた。「此方に當分意志がないと見たから、違約の罪を犯して自分等だけで事を起さうとしたのだが、今となつてはその必要はない筈だ。今日までの事は水に流して一緒にやらして貰ひ度いと云ふのです。」

「蟲のいゝ話だ。家を建てかけたが材木が足りない。買はうにも金がないで、困つて愚圖ついてゐたところへ隣が火事で燒けた。丁度いゝ幸ひだから一緒に建てて呉れと云ふやうなものだ。お前ならその時どうする。」

「建ててやるのが本統です。約束がしてあつた以上は。」

『約束ならその前にも一度してあつた。御一周忌までにはどうにかすると云ふ約束が。――さうぢやなかつたか。併し我々はそれを取り消した。だから今度だつて事情に依つては取り消されない筈はない。』

叔父の言葉は一本の釘のやうに内藏之助を貫いた。本統を云へば、既に觀念して、素直に運命に從はうとしてゐる彼の胸にも、同じ考が時折忍び込んで來ないことはなかつた。併しこの時の内藏之助には、誘惑そのものよりも、それが叔父の口を通して現はれることが危險であつた。

「一體どんなことになつたのだ。」

内藏之助が話をつゞけなかつたので、叔父は自分で續けた。

「明日圓山で一度集まつた上で、最後の方針を極めようと云ふのです。」

「勿論お前も出るのだな。」

「私は主催者です。」

内藏之助はわざときつぱり云ひ切つた。これは弱い心を見透されまいとして、同時に決して出席しないであらう叔父へ、反撥心もあつた單なる誇張にすぎなかつたが、その不自然な調子が隱さうとした以上のものを露骨に出した。彼は自分の已むを得ない役割に對して、怒つて、癇癪を起してゐるかの如く聞えた。内藏之助は自分で自分の聲にまごついた。

叔父は斯んな時白ばくれることの下手な甥を寧ろ滿足さうに眺めた。鳥は狩り出された。併し火蓋を切る前に十分覘ひを極めようとするやうに、容易に口を開かなかつた。内藏之助の方でも今度は用心して滅多なことは云ふまいとしてゐた。二人は何度も傍まで押しつけられながら、お互ひに今日まで危く避けて來たものに、たうとうぶつ突かつたことを感じてゐた。

『さう云ふ話だとすれば、一つ遠慮なしに聞いて見度いが、』終に叔父からきり出した。『内藏之助、お前は本統にやる氣があるのか。』

内藏之助は返事が出來なかつた。この最も簡單な質問ほど、彼に取つて複雜な答辯を要するものはなかつた。叔父も強ひて求めようとはしないで、自分の言葉を續けた。

『それならば何も云ふことはない。お前の勝手にするがいゝが、その積りでもなく奴等に昇ぎ上げられて仕舞つたのなら愚の極だとおれは思ふ。いつぞやも話した通り、幾ら口で立派な旗印をあげたところで、奴等の腹の底は見え透いてゐる。あれで金でもあるか、新しく主取でも出來て安穩に暮らせる見込がたてば、誰が何をするものか。世の中を渡るには如何なる場合にも他人は他人、おれはおれと云ふ決心を失つてはならぬ。他人が病氣になつたからと云つて、自分までなるには及ばないと同じだ。お前は奴等のやうに貧乏ではない。また何處かへ御奉公でもする氣なら、立派な手づるは幾らでもある。それよりもこのまゝ此處に住みついた方が氣樂だと考へればそれも自由だ。思ふまゝに悠々と半生を樂しむことが出來るのに、何を好んで奴等の仲間に加はる必要があらう。おれなら、去年からこれまでに拵へ上げた庭一つを考へただけでも、到底そんな氣持にはなれない。』

叔父は陥穽の掛け場所をちやんと知つてゐた。斯う云つて甥の心を引きつけさうなものを見せびらかしてゐる間、彼のぎよろつとした妖がかつた眼には、自信のある、苛辣な、何處か唆しの籠つた、丁度催眠術師の凝視に似たものが現はれてゐた。

内藏之助は自然の警戒を以て、叔父の視線に曝されまいとした。而も彼の反向けた眼の前には、叔父の指摘した庭が、わざと明けた障子の間を通して、低い土塀の向うに、既に秋らしい風情を見せて奥深く續いてゐた。内藏之助は何故と云ふことなく、寧ろ叔父の一言のために、その上から眼を轉ずることが出來なかつた。ぢつと見てゐると、馴れ切つた珍らしくもない筈の自分の庭が、これまでにない別趣の魅力と價値を以て横たはつてゐるやうな氣がした。

叔父は暫くの樣子で自分の力の反應を確かめて安心したかの如く、今度は問題を變へて、内藏之助の保管金がまだどの位殘つてゐるかを尋ねた。内藏之助は云ひ度くなかつた。どんな不快な話でも、叔父と金に就いて話す程不快ではないのを彼は知つてゐた。にも拘らず、矢張り拒絶することが出來なかつた。で、心覺えの額だけを打ち明けると、冷淡につけ加へた。

『多分その位だと思ひます。案外に使つて、幾らもないのです。』

『いや、そんなどころぢやない。』叔父は却つて多かつたのに驚いたらしかつた。『それだけ殘つてゐれば大したものだ。奴等が何とか云ひながらお前を取り逃すまいとするのも無理はないて。』

内藏之助はその時はじめて隱さず顏をしかめた。話が豫想通りになりかけた。殊に叔父は、彼等の眞の目的は内藏之助自身ではなく、その保管金にあるのだと云ふことを、これまで力説してゐたのである。

『狙つてゐるものがなくて、どうして今日まで待つてゐるものか。』叔父はその時も斯う斷言しながら、『だから此方もその積りで、幾ら欲しがつたつて奴等の勝手にはさせない、と云ふ氣でゐなければ駄目だ。さうとも、その決心で握つてゐるものさへしつかり握つて放さなければ、今後のことはどうにでも出來る。大學樣の一件だつてさうだ。おれはあれで萬事終つたとは思つてゐない。これからの運動一つではまだどんな事が動かぬとも限らないし、それにつけ

て、非常なつもりはこれだからな。」彼は拇指と人差指で、商人のするやうな銭勘定を數へて見せた。「元來があの金と云ふものは、その目的で取り殘したものだから、他の事に一文だつて出す必要はなかつたのだ。これまで何とか云つては奴等に絞り取られたのが、おれに云はせれば馬鹿々々しい話で、——」

「いや、それは間違つてゐませう。」この時まで、胃弱性の胃液のやうに胸元にたまつてゐた嫌惡を、内藏之助は我慢することが出來なかつた。「あの金は決して大學樣のためにのみ殘したのではございません。口實は兎に角として、重なる目的は正しく復讐の準備金であつたことは、あなただつて御存じの筈でございます。ですから、筋を云へば、あの金が今まで私の手許に殘つてをるべきではなかつたので、それが殘つてゐるのは、私が意氣地がなかつたからです。復讐問題の起る度に、いゝ加減な謎をついて避けてゐたからでございます。」

叔父は切腹した内匠頭が、不意に生き返つたと聞いても斯うは驚くまいと思ふ驚愕をその顏に刻みつけたまゝ、甥を見据ゑた。彼は、何か生理的の變化でも頭の中に起つたのでなければ、甥が斯んなことを云ひ出す筈はないと思ふやうに、やつとものを云ふ[illegible]を取り戻すと、その疑ひを口に上せた。

「内藏之助、お前は氣でも狂つたのか。」

「——」

内藏之助にしても、その時そんな事まで口走るつもりはなかつた。自分自身でも氣がつかない間に、言葉が不思議な彈條ではじき出されたに過ぎなかつた。と、その無意識な告白は、今日まで彼の心に瓦斯のやうに壓搾されて、あらゆる機會に彼を惱ましてゐた秘密の苦悶に對して、一つの瓣の作用をつとめた。彼は不意に、異常な決心を以てすべてを打ち明けようとした。

「斯うなつた以上隱さず申し上げますが、私が今日まで復讐を延ばして參つたのは、口で標榜してゐた如く、大學樣の御前途を見屆けるためでは決してございませんでした。勿論よい御運の開けるやう、お互ひに出來るだけの手を盡したのは事實ですが、何かした程熱心ではなかつたので、と云つて臆病や卑怯からでもなく、云はゞ極く身勝手な、誰にも分らない我儘な氣持で愚圖々々してゐただけの事でございます。それを大學樣にかこつけて、都合よく誤魔化してゐたに過ぎません。大學樣御自身には元より、[illegible]に致しても、[illegible]の手に[illegible]、[illegible]儀でございますさうで、[illegible]に希望を捨てないと仰しやるならばそれも一法で、またそのために復讐に着手するのは[illegible]だと仰しやつても、あなただけの條理は立つ譯ですから何とも批評はいたしません。併し、私としてはさうは參らないのです。——これまでのことを正直に申せば、私は自分と云ふものを立て通し得なかつた、何と云つても、あなたに言はれると知らず／＼あなたの考へ通りに從はされてゐたのですが、今度だけは決心を變へない積りでございます。叔父さんも、ですから、これ以上は何とも仰しやらないで頂き度い。それに依つて私は今日までの不信實を償ふと共に、武士としての、人間としての面目を取り戻すことが出來るのでございます。」

半分夢中で、言葉を驅使すると云ふよりは言葉に驅使されながら、内藏之助は曾てない晴々しさと滿足を以て云ひ續けた。併し彼の悦びは、「その告白に依つて所謂武士としての、人間としての面目が取り戻されるためではなかつた。彼はたゞ叔父と手を切つたこと、あの灰色の凝視を以後は決して浴びないですむこと、其處に

發する忌はしい壓力から初めて自由になつたことが、この上なく嬉しかつたのである。

明けの日、重阿彌の廣座敷には約二十人の同志が集まつた。大部分は附近にゐた急進派で、自重派には多くの缺席者が現はれたが、殊に山科組は內藏之助を除く外、小山も進藤も姿を見せなかつた。會衆はこれ等の裏切者に對して割に無關心を裝つた。一つは同志間には親子があり、叔父甥があり、從兄弟同士があると云ふ風で、血族一致して加はつてゐる者が多い中に、內藏之助の一族からは同姓の瀨左衞門と云ふ老人がたつた一人出席しただけで、有力な叔父や從弟が揃つて裏切仲間に入つたことに對する一同の愼ましい遠慮であつた。內藏之助にはこの同情が後めたかつた。それはその事實をそれ程に恥ぢてゐたためではなく、反對に、彼等の背信は當然すぎることとして、咎め立てをする氣にもならない位冷淡になつてゐたからであつた。同じ氣持は會合そのものに對しても働いてゐた。前日叔父にぶつつかつた時には、原因は何であつたにしても、強い、燃え立つものが復讐問題に就いても積極的な宣言をさせたのであるが、叔父と別れたと同時に火は消えた。少くとも今の內藏之助には、復讐は熱情ではなく、單に義務であり、責任であり、運命との約束であるに過ぎなかつた。さうだ。今日の會合も約束だ。で、それを破らないために忠實に出席したまでであつた。この冷淡は、以前から自分の位置を濫用しない、彼の愼ましい性情に裏づけられて不自然には見えなかつた。而して內藏之助はどんな相談になつても決して反對しまい、皆んなの好きなやうにさせればよいのだ、と思つてゐた。事實この仕事は彼等の仕事であり、自分は統領の名前を貸してゐるに過ぎない、而も不都合な統領で、今になつて彼等に指圖がましいことをする權能はないと信じてゐた。で、議事は重に惣右衞門、安兵衞、源五等の發言と提案で滑らかに進行した。

『結構です、結構です。』

その間上座に、床柱を控へて鷹揚に坐つた內藏之助は、柔和な微笑で、何を云はれてもこの一語を繰り返した。

お晝頃から始まつた會合は夜に入つてまで續いた。復讐の最後の決議と共にそれに關する細目の打ち合せが悉く無事に終了した時には、老人達はこれでやつと死なないうちに本望が遂せられると云つて滿足し、若い者は若い者で、早くも敵の首を上げたかの如く勇み立つた。前祝の心と、今日の目出度い決定を報ずるために、夜の明けるのを待つて直ぐにも江戶表へ立たうとしてゐる安兵衞の行を壯んにする意味で、酒宴が開かれた。人々は深い悦びと一緒に深い感慨を以て杯を取交した。皆んなで內藏之助を取り圍んで斯んな氣持で酒でも飲むと云ふのは、幾月ぶりのことか知れなかつた。殊に急進派の連中に取つては、四五日前までは夢想だもし得なかつたことであつたから、彼等の歡喜は、軈て段々廻つて來た快い醉に連れて、ます〳〵高まつた。淺野家の[illegible]の喜多流を長く嗜んで、謠にも拍子にも練達してゐた一人の老人は、その時「羅生門」の小謠をうたひ出した。賴光の四天王が雨の夕に酒を汲んで賴光への忠情を讃美すると云ふその一節は、武士達の酒宴によく[illegible]はれる壯烈な小謠であつたが、時に取つて相應はしかつたので、一座は強い感動を以て耳傾けた。と、今度は原惣右衞門が急に扇を執んで立ち上り、「[illegible]」のキリを舞つた。一座は喝采を新たにした。舞ひ終つた惣右衞門が、扇子をたゝんで、座に歸つたのを見ると、隣のすぐ側に坐つてゐた大石瀨左衞

門が突然内藏之助に向つて聲をかけた。

『内藏之助殿も久しぶりで一つ如何で。』

『いや、どういたして。』

内藏之助は周章てて辭退した。併し血縁の親しみで無邪氣に持ち出された老人の所望は、忽ち一座の願望となつた。彼等は内藏之助が謠でも仕舞でも前の二人に劣らず堪能であり、以前は斯んな場合には氣輕に謠つたり舞つたりしたのを知つてゐた。

『またとないことですから是非どうか。』

さう熱心に勸めた人々の中には、織田信長が今川氏を討つ時、幸若の「敦盛」を舞つた話まで持ち出して、この席上で内藏之助に何か一さし舞つて貰ふことは、今宵の酒宴を一層有意義にするものだと信じてゐるらしかつた。惣右衛門達はまた惣右衛門達で、二人で露拂ひをしたのだから、横綱が出てくれなければ納まりがつかないと云つた。併し内藏之助はどちらにも頑固に手を振つた。

『幾ら云つても無理だ。斯う酔つてゐては聲が出ない。』

『ではお立ち下さればなほ結構で。』惣右衛門も久しぶりに快く酔つてゐるので、いつになくしつこかつた。『御不足でも手前共で地を勤めませう。』

『ます〳〵困るな。――どちらにしても今夜だけは御容赦を願ひたい。頼む。』

内藏之助は自分の拒絶で一座の興を殺ぐのを怖れながら、なんにもする氣にはなれなかつた。口で云ふほど酔つてゐるのでもなかつた。いつまで杯を重ねても、今夜の酒の味は徒らに舌を刺すのみであつた。内藏之助は朱塗の大燭臺をともし連ねた廣間で、人々の笑聲と歡語に取り捲かれながら、たゞ一人空山の洞に坐してゐるより淋しかつた。その寂寥と孤獨が何處から生じたかは、彼自身にも分らなかつた。仲間の者たちが最初の決心を搖がさず、今漸く目的に近づかうとして率直な悅びで夢中になつてゐるのが、自分の迷執の多い心に比べて羨ましかつたのかも知れなかつた。さうでないとは云へなかつた。而も決してそれのみではなかつた。内藏之助は膳の周りに集まつた杯を返すのをも忘れ、茫然と悲しげな面持で、前の燭臺の黃色く伸び上る焰を凝と見詰めてゐた。

内藏之助は朝になつて山科に歸つた。妻は相變らずきちんとして、でも、いつもよりはずつと愛想よく夫を迎へた。半月前の苦しい一夜以來、氣むづかしく神經質になつてゐた彼女は、この頃の形勢で望みを取り返すと共に、夫に對しても、償ひの意味で出來るだけ優しく機嫌を取らうとしてゐたので、會合からまつ直ぐに家に歸らなかつた不平なぞは氣振にも見せはしなかつた。

『昨日は如何でございました。』

『うむ。』

『皆さんお集まりでございましたか。』

『うむ。』

妻は着換に手傳へながらそれのみを聞かうとした。内藏之助が例の調子ではずみのない返事をしても、撓みはしなかつた。着換がすんで夫が居間に引き取ると、彼女は茶道具を用意してその後に從つた。

『それで、』彼女は程よい湯加減で一杯の香ばしい茶を拵へてから、再び同じ話題を持ち出した。『あちらへお立ちになるのはいつ時分でございませうか。』

『まだはつきり分らない。』

内藏之助はそれよりも茶の味の方へ心を引かれる、と云ふ風な答へぶりをした。

『幾らなんでも十日や二十日の猶豫はございま

すのでせうね。』
『あるとも。』
『それまでには間に合せなければならないものが、色々とございますものですから。』夫の晴の旅支度に就いてあれこれと女らしい思案に耽るかのやうに、彼女は暫く黙つてゐたが、その後で急に改まつた調子で言葉をついだ。『實はこの間から早く御相談申し上げたいと存じて居りましたのですが、松之丞のことでございます。』
『松之丞がどうした。』
『江戸へお連れになる前に、元服だけもすまさせて置いては如何でございませう。』
『――――』
張板の上に載せた薄い絹の一端が急に引つ張られたかのやうに、内藏之助の顔はいびつになつた。彼は瞬間、決定と共に必ず現はれるに相違ないと怖れたものが、口火を切つたのである。伜し、その方が江戸に行つた後も萬事好都合だといふ意味を妻が續けてゐる間に、彼はやつと落着きを取り返し、何氣ない、呆けた口調で遮つた。
『お前は何をいひ出したのだ。――松之丞が江戸へ何しに行く。』
『――――』
妻は今自分の聴覺に感じた言葉を、夫の口が眞に發したかどうかを疑ふやうに、彼を見守つた。
『おれは松之丞を江戸へ連れて行かうなどとこれまで考へたこともなければ、云つた覺えもない。』
云はれて見れば、長男の進退に就いて夫婦は何も話し合つた譯ではなかつた。寧ろ彼女に取つては相談の餘地さへない極まり切つた事實であり、武士の子と生れついた身にこれほどの名譽はない筈であり、同時に彼の名譽は父の名譽を二倍するものであるとして確信してゐたのであるから、夫の否定の意味を解することが出來なかつた。
『でも、どうしてお連れにならないのでございます。私はいつでもお伴おさせられるやうに支度をいたしてをります。』
『幾らその積りでゐたところで、あんな子供がどうなるものか。』
『松之丞は子供ではございません。あれはもう十五でございます。』
『だから子供だ。』
『他の十五の子供とは違ひます。脊丈だけでも普通の大人よりは二三寸も高い位ですし、あれで元服でもさせれば立派な一人前の若者でございます。』
『姿ばかり大きくとも、子供は子供だ。』
内藏之助は何處までも此の論據で押し切つた。今度の同盟のうちには、二十年以下の者はたつた一人、十七になる矢頭右衛門七が加はつてゐるだけで、それも加盟してゐた父親が病死したため、身代りとして、例外を以て入れられたのだから、十五の子供は問題にならない。却つて足手まといで同志の迷惑になる位なものだ。――内藏之助は斯う云つた。この云ひ譯はその場で思ひついたことで、而してその言葉を彼は妻よりも自分自身が信じ込まうとした。この確信のみが、十五の子供を死から救ふことが出來るのだと思つた。彼は、息子を殺したくなかつたのである。自分の運命は運命として、たつた十五年しか生きてゐない若い生命まで、一緒にむざむざ潰さなければならない筈はない。若しそれが武士の道でないならば、彼は百姓として生きてもよい。鍬や鋤は腰の大小が強ひるやうな辛い道徳は強ひはしない。一家の口を糊するに足る田畑と、一棟の茅屋と、その片隅の花畑と、幾らかの書籍と、それで晴耕雨讀の生活を樂しむことが出來るならば、千石二千石の武士は愚か、

午中の評定方衆の耳にはいりはしない——併しこの度選ばれたのは、彼等同盟に加盟する分日までの内蔵之助に對し、誰が誰か分らなかつたと同様に、彼の妻に分る筈はなかつた。彼女の健気な、賢い武士道的情操からすれば、或はその子は婢の子がどんなに小さくても許せると同じ意味に於て、假令一歳であつても立派に武士であつてし、また、なければならなかつた。それ故松之丞が十五であることが、決して加盟の妨げにはならなかつた。他に十五の子供がゐなければゐないほど、息子の名譽は増す譯であつた。殊に十七の他の若者のために作られた例外が、たつた二つ年下の、分けても城代家老の嫡男のために作られない筈はなかつた。

でもこの時の内蔵之助の態度には、これ等の抗議を正面から發することを許さないやうな、嚴しい決心が現はれてゐたので、妻は道を變へて云つた。

「さう仰しやればですが、松之丞は自分ではもう同盟に入つたものと極めて悦び切つてゐますのですから、お伴が出來ないと分れば、どんなに落膽いたしますか知れません。」

「諦めさせるのだ。」

『さあ、おとなしく諦めて吳れゝばよろしうございますが、——あんな性分ですから、仲間には加へられまいと云ふ意味を遠廻しに通じながら、急に思ひついたやうに、「丁度よい折ですから此室へ呼びませう。あなたからとくと申聞かせて下さいまし。松之丞にしても、一應自分の心持だけは聞いて頂きたいだらうと思ひます。」

内蔵之助は出來たら止めたかつた。が、云つた時には妻はもう立ちかけてゐた。而して廊下へ出て、

「松之丞、松之丞。」

と、いつもの特持らしい調子で呼んだと思ふと、鍵の手になつた長男の部屋から、丁度聲變りの途中の少年が持つてゐる、大人でもなければ、子供でもない、ぼつとりとした聲がそれに應じた。母は自分よりたしかに一尺は高い息子を引き連れて部屋に戻つて來た。

「あの、江戸のお伴の事だけれども、松之丞、」

彼女は息子がその場の空氣を直ぐ感じて、きちんと改まつて下手に坐つたのを見て始めた。「お父様のお話だと、中々むづかしいらしいのですよ。十五やそこいらでは却つて足手纏ひだと仰しやるのですから。——それでもどうにかしてお伴がし度いと思ふならば、今一度お前の決心のほどを聞いて、よく[illegible]下さい。」

「お父様、私もお連れになつて下さい、足手纏ひのお邪魔になるやうなことは決していたさない積りです。」

松之丞は兩手をついて、嘆願に眼を上げた前髪の頭を、正面の父に向つて下げた。

内蔵之助は妻の張つた罠にうまうまと引つかかつた。彼女が息子を呼んで來たのは、決して夫にだけ聞かせて貰はうとしたのではない、却つて松之丞から今一度直接に訴へさせようとしたに外ならなかつたから。これは松之丞に取つても何よりの機會であつた。彼は今度の事が起ると共に、自分の熱心な願望を父に打ち明けたくてならなかつた。併しこの數日の父は急を聞いて集まつた同志や、あらゆる關係の訪問客のために、朝から晩まで暇がなかつた。さうでない時には外の用事で家にゐなかつた。正直に云へば客の合間や、外出の送り迎への時に、何か話したさうな様子で近寄つた彼を、父の方で避けた點がないではなかつた。内蔵之助はその度に無意識に忙しさうに、取つ付き場のない、むづかしい顏をした。松之丞が今は邪魔しては惡いのだと思ひ、一つは父の嚴しい態度

に味する子供らしい氣おくれから、口に出せないで引つ込むのを見るとほつとした。彼は本統は息子を追つ拂つたのではなかつた。で、今さうやつて自分の前に兩手をついてかしこまつてゐる彼を見ると、あれほど追つ拂はう／＼とした怖ろしいものに、終にぴつたり追ひ詰められたのを感じた。

『松之丞、』父はどうにかしていま一度それを押し退けようとするかのやうに、重い說得の調子で始めた。『お父さんがお前に止めた方がよいと云ふのは、皆んなの足手纏ひだと云ふそんな消極的な理由ばかりではない。勿論その心配もないことはないのだが、それよりも他にいろいろ譯がある。――お前は何でも仇討さへすればよい。それが一番の忠義で、それより外にすることはないやうに思つてゐるのだらうが、必ずしもさうとは云へない。人間は一人々々の性が違つてゐるやうに、ものの考へ方や行ひを一概に律[illegible]、また同じ道に[illegible]い[illegible]仇討が一家の意義からと云つて誰も彼も仇討をしなければならない譯ではない。現に今度でも同盟を脫した人も少くないし、山[illegible]の叔父や[illegible]の叔父も[illegible]、それにはそれぞれの理由があるのだと思ふから、お父さんは驚きもしなければ、別に非難もしない。――』内藏之助はちよつと行き詰まり、咽喉に本統に何かが引つかゝつたやうに、苦しさうな空咳を二つした。非難されるなら、自分こそまつ先にされてもよいのだ。――彼は眼の前の妻子に胸の底を覗き込まれてゐる氣がした。『そんな譯で、お父さんはこの問題は誰に對しても極く自由に取り扱ひ度いと考へて居るし、またそれが本統だと信じて居る。殊にお前はまだ子供だから、今度のことは大人に委せて置いた方がよい。それで不名譽でもなければ、不忠にもなりはしない。先刻お母さんに話したが、例外として入れた矢頭の倅でも十七にはなつてゐるので、お前のやうな子供を誰も當にしてゐるものはないのだから。――』

松之丞は母と共に默つて、でも母の解せない不滿らしい顏とは反對に、如何にも父を信し込んで、自分を連れて行くまいとしてゐることだけは情ないけれども、その他は何と云つても父の意見であれば正しいと諦めてゐるかのやうに、しをらしい眞面目さで耳傾けてゐたが、父の最後の言葉――お前のやうな子供を當にしてゐるものは一人もない、と云ふ一句を聞きつけると、突然口を開いた。――

『お父樣、それでも殿樣だけは私を當にしていらつしやると思ひます。』

内藏之助は不意に何かからどしんと突き倒された感じがした。而して倒れながら、自分を倒したものをおづ／＼と見上げるやうな心持で、彼は息子を眺めた。松之丞は父の驚きには大して注意も拂はないで、續けた。――

『お父樣も覺えていらつしやるでせう。私が八つで初めてお目見えをいたしました時、殿樣から御馬を頂戴したことを。――あの時殿樣は、松之丞は何が一番好きかとお聞きになりました。馬が一番好きでございますと申したら、それでは一つ馬をやらうかなと仰しやいました。でも、私は直ぐあんな立派な月毛を下さるのだとは思ひもよらなかつたのに、[illegible]から届けて來たので吃驚しました。何といふいゝ殿樣だらうと思ひました。あれから私は殿樣が大好きになつたのです。この事は一生忘れまいと考へました。[illegible]方の復讐の噂を聞いた時でも、何より先にあの[illegible]ことが[illegible]に浮びました。[illegible]小さいけれども、あの馬の御恩返しに、乾度皆んなに[illegible]仇を討つて見せます、と心で殿樣に

堅くお約束をしてあるのでございます。』
　斯んな無邪氣な動機から復讐に加はらうとするものが他に誰かあるだらうか。――併し彼自身はそんなことは夢にも思はなかつた。彼は一生懸命であつた。その淺黒い、が、肌理がまだ荒れてゐないので娘のやうに滑らかな額は、純な感動で生き〳〵と赤くなり、母親似の切れ上つた涼しい黒瞳には少年らしい決心と率直さが溢れてゐた。而して如何にも晴れ〳〵と樂しげに見えた。七年前に貰つた一匹の月毛のために、今潔く身を捨てると云ふことが。――内藏之助は凝とそれを眺めてゐると、熱い潮のやうなものが胸の底から突き上げて來るのを感じた。彼はこの瞬間ほど自分の十五の息子をいぢらしく、可愛く思つたことはなかつた。またこの瞬間ほど自分の今日までの不決斷と逡巡が淺ましく顧みられたことはなかつた。どんな理由があつたにしても、此處では理由をなさなかつた。一切の口實と胡魔化しが、彼を救はうとしたことでさへ、この可憐な決意の前には醜惡に見えた。
　父が何とも云つて呉れないので、松之丞は切つた言葉を心配さうに控へてゐたが、直ぐ何か非常にいゝ事を考へついた樣に、彼は嬉しさうにこ〳〵して再び父を呼びかけた。
『お父樣、どうしても十五でいけなければ、私を矢頭と同じに十七にして下さい。皆んなが皆んな私の本統の年齡を知つてをりはしないでせうから。私は矢頭よりはずつと大きいのです。國元で馬の稽古に行つてゐた時分でも、私が大人並の鐙に乘れた後まで、矢頭はまだ短く吊つて乘つてゐた位です。矢頭が十七なら私は十九だと云つても威張れます。ですから――』
　併し松之丞はそれ以上自分が矢頭より脊の高い說明を續ける必要はなかつた。
『分つた、松之丞、連れて行く。』
　父は潰れた重い聲でそれだけ云つた。もう少し何か云へば、鼻柱に添つて左右の瞼の下まで一杯に漲つてゐるものが、堰を切つて溢れ出すばかりであつた。内藏之助は脣の兩隅を强く引き締めた。併しこのやつと持ち耐へてゐる眼が、彼の承諾に安心して、勇んで部屋を出ようとする息子の姿を見送つて、同じやうにそれを見送つてゐる、而してまた息子に劣らず滿足して上機嫌になつてゐる妻の白々した額にぶつかつた時、彼の心は寂しく苦笑した。――この女はおれと息子が討死したと聞いても、今の通り涙一つ落さないでゐるだらう。
　九月下旬、内藏之助は山科から京都に出て、四條の懇意な寺の境内に引き移つた。妻は後難を避けさせるため、離婚の形式で小さい子供達と共に實家に送り屆けられ、彼女の希望通り元服をすました松之丞は、數人の同志に伴はれて既に江戸をさして立つてゐた。内藏之助も準備が出來次第後に續く筈であつた。その爲に京都にも越して來たのであるが、支度が思ふやうに運ばなかつた。重に經濟的の原因であつた。彼の保管金はもう多く殘つてゐなかつたのに江戸では莫大な費用の要ることが分つてゐた。内藏之助は山科の家屋敷を、保にして金を借り入れ、道具類も金目な物は賣り拂はうとした。斯んな用事でちよい〳〵山科に歸るのが、現在の氣苦勞の多い生活の中で一つの息抜であつたのも事實であつた。彼は鳥が馴れた枝をさして戻る氣持で故園の門をくゞつた。
　家の處分もすみ、準備も一先づ整つて、やがて江戸に立つばかりになつた時、彼は、暇を盜んで今一度山科に來た。十月に入つたばかりの晴れやかな午後であつた。彼はいつも京都から戻

つた時するやうに、また此處に住まつてゐた間毎日してゐたやうに、兩手を後に組み、右の肩を心持上げて、小柄な身體の丸腰で、ゆつたりと庭を歩き廻つた。澄み透つた高い空の向うには、音羽山が秋らしく鮮くなつた線で、くつきり聳えてゐる。この山にもこれでお別れだ。――明け暮れ其處に立つて眺めて來た一年間の思ひ出が頭の中を通り過ぎる。いつも默つた、いつも親切な、それで彼の惱みと苦痛を誰よりもよく解して呉れた友達で此の山はあつた、と彼は思ふ。同じ追懷は周圍の到るところに見出された。一本の幹、一枚の踏石、垣根に徒らにくねつて花を咲した萩、いつの間にか廢屋らしく伸びてゐる屋根の草、その下にぴつたり閉まつた薄白い障子まで、散人の情なしには彼は見なかつた。而してその中に充ちてゐる、甘い親しみのある閑寂の味は、山茱萸と高麗人參が彼の病氣に於てさうであつた如く、惱みの多い彼の心に於て特藥であつた。彼はほつとした秋日の中に佇んで、しみじみとそれを味つた。奥深く、しんとして、透明だ。丁度頭の上の大空のやうに。世界はうごきもしない。――いや、たつた一つ、上で鳴いてゐるらしい微かな鳥音が、裏の方から時々聞えて來る。それとてもこの場の靜けさに相應はしい調子をつける分でも、亂しはしなかつた。彼は樂しげな恍惚した氣持でまた歩き出す。而してまた立ち留まる。一本のさし出た枝に早くも黄ばんだ木の葉を認めて。而してまた次の數分の後には彼は呑氣にしやがんで仕舞ふ。多分二三日前の野分に吹き倒された鷄頭のために、何か支へをつけてやらうとして。――彼はいつまでさうしてゐるのだか忘れてゐた。寧ろもつと多くのことを忘れてゐた。京都のことも、江戸のことも、兩方で自分をあてにして待つてゐる仲間のことも、――その中に交つてゐる、初々しい元服をすましたばかりの若い額を思ひ出さなかつたならば、彼は永久に其處から動かなかつたかも知れなかつた。

が、その時裏庭の方から重い足音がして、捻ぢ卷の左六が鍬を持つて現はれ、菊が掘れたから見て貰ひ度いと云つて來た。

『おゝ、掘れたか。』

主人はそれだけは忘れてゐなかつたやうに、直ぐ滿足さうにさう云つて、若黨と連れ立つて裏へ廻つた。青つぽい、突くやうな菊の薫か、掻き起された土のしめやかな匂に交つて其處にあつた。彼は、既に蕾になつた菊を、主のない庭に殘す代りに、京都の知友に形見の意味で贈らうとして、左六に掘らしてゐたのであつた。今一人の留守番の年取つた爺は、菰や荒繩を用意して、左六が掘り出す傍から、それを包んだ。固く根を固められた蕾の菊が、もう幾株か出來上つてゐた。

『もつと掘りませうでございますか。』

『いや、それ位で結構だ。』

内藏之助はこれ等の贈物の屆け先とその方法に就いて若黨に命じながら、凝と菊畑の緣に立つてゐるうちに、不圖、菊ばかりでなく、牡丹をも分け度いと思ひついた。自分は二度と見られない花でも、せめて親しい友が見て呉れるだらう。――が、そのために今一度來る暇はなかつた。内藏之助は京都に歸つた後、再び彼を取り卷いた現實の多忙の中から、茶の友で、同時にまた元の遊び仲間であつた友達の一人に手紙を書いた。それは招待された茶會を、旅立ち前の忙しさのため――彼は西國邊に引つ込むやうに云ひ觸らしてゐた――殘念ながら缺席すると云ふ斷りの手紙であつた。彼は追白に牡丹に就いて次のやうに書き添へた。――

「……不宜候得共ぼたん二三株其元へ御引取可被下候。御人可被遣候。」

片脚の問題

　或る日、私は知らない女のひとから葉書を貰つた。姪の十八になる娘が、子供の時分の過失で片腕をなくしてゐるが、讀んだり書いたりすることが好きである。素人考へでは中々文才があるらしいので、もしその方で身をたてることが出來たら非常な仕合せと思ふ。それについて意見も聞きたいし、委しい話もしたいから一度あつてくれまいかといふのであつた。
　からいふ申込は、少し氣のきいた作家なら持て餘すほど受け取るものらしいが、幸か不幸か私自身はめつたにそんな光榮には預からなかつた。殊に手紙でもなく單なる葉書で、それも往復葉書で、やつとそれだけ書いた、といふ風なたどたどしい文面を見ると、差出人の高山みねなる女のひとが、どんなひとだか見當がつかなかつた。幾ら眞面目に考へても、小學校をやつとすましたかすまさないかの人の文字であつた。所書を見ると本所二葉町とあつた。そんなところに住まつて、こんな文字を書く女のひとが、片輪の姪を文學者に仕立てようと企ててゐること、しかも擇りに擇つて私のやうな不景氣な、理窟つぽい作物のみしか書けないものを指導者にしようとしてゐることが、私の興味をひいた。で、まれに似たやうなことを頼まれても拒絶するのが常であつたが、その時だけは別な返事をする氣になつた。私は返信紙を割き、成りたけ分り易く假名を使つて、最初に先づものを書いて身をたてることのいかにむづかしいかを說き、それでもお目にかゝる分には一向差し支へないからいつでも來てくれるやうにと書いた。
　四五日するとそのひとは朝早く訪ねて來た。しかし正直にいふと、その時には私は相手の名前を忘れて仕舞つて、取次ぎの女中から通じられても誰のことだか分らなかつた。どこの方で、何の用事か聞き返さした。女中は今度は私から出した返事の葉書を持つて玄關から戻つて來た。
『あゝ、本所の、あの人だつたのね。』
『お通し申しますか。』
『お二階の方に。』
　私は紐を結びかけてゐた。で、客を案内しておいてお茶の支度をしてゐた女中に、鏡の前から聞いて見た。
『お二人。』
『いゝえ、お一方でございます。』
　私はかすかな失望を感じ、また失望を感じたことにかすかな後めたさを感じた。名前さへ思ひ出せなかつた癖に、それでゐて片腕の娘を見ようとした好奇心だけは忘れなかつたからであつた。手早く纏めて二階に行つて見ると、流行おくれの庇髪に結つた、色の小白い、太つたお神さん風な中年の婦人が、座蒲團も敷かず、遠慮深く部屋の隅に坐つてゐた。
『さあ、どうぞ。――そんなところぢや御挨拶も出來ません。』
　私はさういつて氣輕に自分からテーブルの方へ進み、相手をその向ひ側にひつ張り出した。
　話がはじまつた。問題の娘をいふのは、お神さんの連合の姪で、田舍の實家にゐるのだといふことであつた。お神さんと一緒に來たのかと思つた位であつたから、私にはちよつと意外であつた。
『田舍はどちらですか。』

「越後でございます、柏崎からずつと奥の方へ入りました、それはもうひどい山の中でして。」

今から十二三年前のことである。その山の中の村に貯水池を作る工事がはじまつて、掘り出された土はトロッコで運搬された。このことは村の一大事業であつたと共に、子供たちにとつてすばらしい出來事であつた。彼等は二本の鐵の紐の上をそんなに迅速に、魔法のやうな滑らかさで辷つて行く車に眼を見張つた。またもちろんその面白いものを自分たちでも利用しないではおかなかつた。彼等はせがんで空車に載せて貰つた。休み日で土運びが中止される場合には、トロッコは一んち村の子供たちの遊び道具になつた。親たちや、村の學校の先生たちが幾ら危險を話して聞かしても、誰も耳に留めるものはなかつた。お神さんの姪の片腕を引きちぎつたのは、このトロッコであつた。

「丁度姪の七つの時で、お祖母さんがお守をしてゐたのださうですが、何しろトロッコのことで、あつといふ間に轢かれたのださうでございますよ。その年寄があなた、まだ達者で今年七十三になります。そばについてゐてこんな生れもつかぬ片輪者にしたのだから、おれが無事なうちに、何んとか身のふり方をつけておいてやらなければ死んでも死にきれない、と申してをりますのでしてね。」

お神さんは歯切れよく話を進め、なほその娘は間もなく生みの母親にわかれて、今日まで三人もちがつた母親につかへなければならなかつたことや、その三人の母親の生んだ多くの弟妹の世話を、片輪の身でみんな引受けて來たことや、殊に右の二の腕から完全にないのに、どうしてやるのか人には見せないが誰もおよばぬほど裁縫が上手で、シンまで使へることや、しかし何よりすきなのは讀むことと書くことで、自分の悲しい身の上を訴へて來る手紙なぞは、皆んな貰ひ泣きをするほど上手にこまごまと書いてあるとお神さんは話した。

「そんな譯で、人並に嫁には行けませんし、何か一本立で暮らす道を見つけなければなりませんので、どうせやるなら好きなものでやつて行つたら、とかう考へましてね。」

好きなもので身をたてる。——おゝ、何んといふ美しい生き方であらう。さうしてまた何んといふむづかしい生き方であらう。今の世は、個人が好きなことを一生懸命にして、それで自由に生きて行くことを滅多に許さない。藝術の世界においては、殊に苛辣である。

私は尋ねて見た。

「學校は。」

「村の小學校を出ましたきりでございます。」

「ぢや、どんな書物を好んで讀んでいらつしやるのですか。」

「それがあなた、山の中の百姓家のことなら、どんな書物もこんな書物もありはいたしません。私の取ります「××倶樂部」や「婦×界」のやうなものを送つてやりますと、もう明けても暮れてもそれを讀んでは樂しんでをりますのださうでして、そのたびにお禮の手紙がまゐりますが、誰が見ましても、片腕のない娘が書いたとは思はれない位立派に書いてございます。」

「それでその方は御自分でもぜひ文學をやりたいと思つていらつしやるのですか。」

「いゝえ、さういふ譯ぢやございません。いはば私が考へついたやうな次第でして。——」

「失禮ですがお宅は何か御商賣でも。」

「まあ、ブリキ職見たいなもので。[illegible]を拵へてをります。」

その話から、お神さんは自分たち夫婦のことを語り出した。主人とお神さんはほんの一昨年一緒になつたばかりで、先のお神さんは大震災の時、被服廠で二人の子供と共に燒死し、主人

と木子だけが助かつたのださうであつた。

「そんなことで宅も涙脆くなつてゐまして、出來るだけのことはしてやりたいと申してをります。ですが職人のことで、お恥かしいわけですが字の方はちつとも讀めませんので、姪がさうやつて上手に書いて來ますとびつくりしてをりますのですよ。私はまたこれで、活動に一遍行くよりは雜誌の一冊も買つて貰つた方がいゝ位なんでして――當節は、何んでございますつてね、先生方はちよつとしたものをお書きになつても、大したお金になるのださうでございますね。」

私は一種變な恥かしさと共に、微笑を禁ずることが出來なかつた。お神さんの最後の感嘆は、本所のブリキ工場の一間に行はれた可憐な家族會議を私に分明に想像させた。腕はたしかだが、眼には一丁字もなく、それで大震災の影響ですつかり氣弱くなつた善良な親方と、二度目で甘やかされてゐる雜誌好きのこのお神さんとは、片輪の姪の將來について幾晩も智慧を絞つたに相違ない。さうして結句お裁縫でもなければ、ミシンでもなく、女流作家に仕立てようと決心したところに、私は「時勢」を見た。實際五六年前に、本所のブリキ屋の夫婦が、息子を小僧に出し、娘を髮結さんの下梳に住み込ませたと同じ目的を持つて、ペンを執る練習をさせることを思ひついたと、誰かに想像されたであらうか。

私の返事は葉書の繰り返しに過ぎなかつた。當人が自覺して望んでゐるのでもなく、才能も未知數である場合に、他から勸めるものとしては、且つそれによつてパンを得させる手段としては、藝術はいつの時代にも最も不確かな、危險な道である。また大した勞力も費さず金に代へられるやうな藝術は、決して本統の藝術ではない。話の模樣では、今からそんなことをすゝめるよりは、もつとよい讀みものでも與へて、便りない心を樂ませると共に、もし眞に才能があるとすれば、それが瑞々しく芽吹き立つやうにしてやることが必要であらう。――私はさう話した。今一つ「主婦の×」や、「××倶樂部」だけではあんまり可哀想だ、といふ意味をつけ加へたかつたが、愛讀者のお神さんを前にしては、さうづけ〳〵もいへなかつた。しかしお神さんはそれだけで私が賛成しないことは分つたらしく、主人にもその旨を傳へるからといつて、冷たくなつた茶を干し、座を辷つて、歸りの挨拶をはじめかけた。

「折角いらして下すつたのに。」

客を失望さして歸す時の、すまないやうな、罪な氣持から、私はふと思ひつき、急いで廊下に積んである古雜誌から四五冊を拔いて來て、序でもあるなら送つてあげてくれるやうにと頼んだ。

「左樣でございますか、まあ、こんなにいろいろ頂きまして、相すみませんですねえ。」

「讀み古しでよかつたら、いつでもおあげしますわ。」

「有り難うございます。でも、これだけあればあなた、當分讀むものにことを缺きはいたしませんよ。さぞ喜ぶことでございませう。」

お神さんは持つて來てゐた小さい手提の中から風呂敷を出して、雜誌を包んだ。では、左樣なら。――もうさういふばかりになつた。しかしお神さんは包みを膝の前に置いたまゝ直ぐには立たず、何かいひたさうにもじ〳〵してゐた。まだ用事が殘つてゐるのであらうか。私はお神さんの思ひきりの惡い口許を見詰め、默つて、そこから發する言葉を待つた。お神さんはこの誘ひに勇氣づけられたやうに漸く話し出した。

「こんなことを申上げて氣をお惡くなさるか知れませんが、實はお目にかゝるまでは、奧樣

がありまへのお身體だとは夢にも思つてをりませんでした。」

この意外な話は私をびつくりさせた。何をまたこの人はいひ出したのだらう。怪訝な私の顔つきにお神さんはやゝまごついたらしかつたが、それでも正直に續けた。

「いつかの主婦の×でしたかに婦人の作家の方の傳記が出てゐまして、それで見ましたらば、奧様は御病氣かなんかで片脚しかおあんなさらないのだけれども、立派に成功していらつしやるといふ風なことが書いてございましたのですよ。さういへば、あの屋吉さんなんていふ人も兩脚ないのだし、いろ／＼同じやうな境遇の方があるもんだと思ひましてね、姉のこともさういふ方に御相談して見たらまた同情も厚からうか、と實はさう思ひ込んでゐりましたら、ちやんと人並のお身體ぢやございませんか。――」

私が笑ひ出したので、お神さんも話してよかつたといふ風に一しよに笑つた。いふまでもなく、あの瀟洒な美しい松葉杖の閨秀作家と間違へられたのであり、またお神さんがなぜ私のやうなものを選んで訪ねて來たかの理由もそれで明瞭になつた。私は不具な姉のため、不具な作家に眼をつけたお神さんの思ひつきを賞讃すると共に、片一方しかない筈の私の足がちやんと二つ揃つて、階段を踏み鳴らし、座敷に入つて行つた瞬間のお神さんの狼狽を思ふと氣の毒な氣がした。

「では。――何かまた私でお役に立つことがあつたら、喜んでいたしませう。」

私は少しでも相手を慰めようとして心からさうつけ加へた。お神さんは禮をいつた。しかし私のどんな親切な言葉も、私自身の脚が一本紛失してゐる以上に、お神さんを滿足させはしなかつたであらう。

お神さんは思ひなしか、氣落のした淋しい後姿を見せて夾竹桃の下の門をくゞつて行つた。

日記の中から（三）

某年某月某日

S――昨日の運動會の骨休みで歸宅。弟たちは學校で、ひとり淋しさうにしてゐるので、いつしよに外出。鶯谷に下り、上野を拔ける。美術館前の芝生や噴水をはじめて見た。明るく、キチンとはなつたが、これが美しく、時代がつくまでには長い月日を要するであらう。

噴水と云ふものは、外國の寫眞にあるやうな、豐富な水のすがたを見せるならば綺麗かもしれないが、斯んなちつぽけなものでは、なんだか小便が垂れてゐるやうで、滑稽である。田舍の庭師が、築山、泉水、橋と定式通りの手法で庭を拵へると同じ行き方をこれ等の洋風庭園なるものはしてゐるのではないだらうか。……しかし、大抵のものは打つちやつておけば、時が美しく、自然らしくしてくれる。

いつもはさうは思はなかつたのに、美術館の家根がひどく無態で、單純すぎて見えた。飛行機の滑走場のかんじ。

曇つて、時々ぼやりと軟らかい日射が洩れ、またそれがかげると、細かい、霧にもならないくらゐな水滴が空氣に散る。斯んな日を私は好む。ことに大した用事も持たず、ぼんやり道を行く時には。

歸りには御徒士町から省線。改札口で鋏から落されたキップの小片が、うす桃色に、なにか花びらの如くタヽキの上に散亂してゐた。

縛られた者（對話）

兄　巨人プラミシュース
弟　巨人エピミシュース
女　パンドラ
愛の神　キューピット

兄と弟

兄　エピミシュース、お前はヂュピターが我々兄弟に贈るため、何か珍らしいものを拵へてゐると云ふ噂について、聞き込んだことはないか？

弟　委しくは知りませんが、サターたちがよくそんなことを云つてゐます。

兄　どんなことを？

弟　なんでもそれは「女」と云ふ新しい人間だと云ふことです。

兄　新しい人間と云ふと、我々の造つた人間とは違つた種類の生物でもあるのか？

弟　さうだらうと思ひます。而して非常に美しいものだと云ふ評判です。モデルはヴィーナスださうですから。僕には幾分その新しい被造物の想像もつくと思ひますね。僕等の造つた人間に似て、もつと優しい、もつと美しいもの、神々よりは女神に近いものと云ふのではないでせうか？

兄　さうかも知れない。

弟　兄さんはどうお考へになります？　若し本統にヂュピターがそれを僕等に呉れるのなら、僕は樂しみですね。白狀すると僕は兄さんと二人きりでは淋しくなる時があります。いら／＼したり、またその反動で陰鬱になつたりします。僕は兄さんを愛し、尊敬してをります。兄さんと一緒に人間たちのために働くのを悦んでをります。それでゐてこの感情の變化をどうすることも出來ないのです。雨で狩獵に出られなかつたり、仕事が旨く行かなかつたり、下等なサターたちの惡ふざけに惱まされたりした後は、屹度この發作が起ります。斯んな時にさう云ふ美しい話相手があつて、面白い話をしたり、一緒に美しい歌をうたつたり、踊つたり、同じ食卓でものを食べたりしたら非常に愉快だらうと思ひます。

兄　併しね、弟、美しいものが常に必ず愉快を齎すとは限らないよ。且つおれはヴィーナスがモデルだと云ふのが氣に喰はぬ。この頃のオリンパスの神々の生活に對して、おれは激しい反感を持つてゐるが、中でもあの女神なぞは一番たまらない嫌なのだからな。美しい姿だけを寫したのだと云へばそれまでだが、——併しそんなことより、ヂュピターがこの際何の必要があつて、女なぞと云ふ新しい生物をわざ／＼造つて我々に贈つて來るか？　と云ふことがおれには問題なのだ。彼の純粹な厚意からだとは受取れない。決してさうではない。寧ろこれには屹度何か惡い意味が附隨してゐるに相違ないと信ずる。さうは思はないか？

弟　と云ふと？

兄　ヂュピターは我々が以前程彼に信賴してないことを知つてゐる。可哀想な人間たちの味方になつて、彼の專橫に對抗してゐることを知つてゐる。若しおれにヂュピターの大事な

彼が祕密を握つてゐると云ふ證明がなかつたら、我々兄弟は夙くに彼に殺されてゐたかも知れない。併し彼はその祕密を聞き出すまでは彼に迂くも殺されない。それで表面平氣な顏をして我々にお愛想を云つたり機嫌を取つたりしながら、蔭では我々の邪魔ばかりしてゐるのだ。おれをお前に反かせ、お前をおれに裏切らせようとしてゐる。その離間を利用して祕密を嗅ぎつけようとしてゐる。今度の贈物に關してだつて、おれにはそれ以外の意味は認められないのだ。――惡くすると彼はおれの計畫を感づいてゐるのではないかと思ふ。

弟　さあ。――兎に角、そのために僕等があゝ云ふ二輪車まで作つてゐるとは夢にも知らないでせう。

兄　おれはそれが出來上るのが待ち遠しい！出來上りさへすれば、おれは直ぐにおれの冒險を決行するのだ。――人間たちのために甘んじて盜人になる。「天の火」を盜み出してやる。ヂュピターが人間をおれに造らしておきながら、大切な一つの贈物を拒むのは卑怯だとおれは信ずる。「火」を持たないでは人間は何をすることも出來ない。たゞ造られた儘の動く人形で、永久に發達することも出來なければ、進歩することも出來ない。況しておれの望んでゐるやうな立派な「文明」を將來この世界に築き上げさせることは思ひも寄らない。製作者の責任として、おれは度々ヂュピターとそれに就いて爭つた。氣の毒な人間たちのために熱心に歎願した。それを彼は肯かないのだ。おれは終に最後の決心をした。よし、呉れなければ取つてやるまでだと。

弟　ヂュピターは怖ぢ氣づいたのだと思ひますよ。人間が彼の豫期以上に出來過ぎたのです。彼等は實際元氣で、すばしつこくて、飲み込みが早いのですから。あれで神々同樣にすべての能力を傳授して仕舞つたら、最後にはどんな眞似をしでかすかも知れない、とヂュピターはそれで澁つてゐるに相違ありません。タイフォーンやブライアリュースの例もありますからね。

兄　彼奴等は暴力以外に何んにも持たない野蠻人だから駄目だ。ヂュピターに反抗するたつて、高が山の二つも積み重ねてオリンパスに這ひ上らうとした位が落ちやないか。併しおれの造つた人間は彼奴等とは本質的に違つた物だと云ふことを、ヂュピターは先づ知る必要がある。人間には智慧がある。造られた儘では滿足しきれない向上心と、輝かしい未來に對する憧憬の心を持つてゐる。正しい生活の欲望に燃えてゐる。假令ヂュピターに反抗しなければならぬ場合が生じたとしても、決してあの連中のしたやうな馬鹿げた眞似をする筈はない。おれはヂュピターが將來彼等を味方にするかしないかは、これからのやり方一つで極まることだと思ふ。それは彼等を自由に發達させることだ。出來得る限りの進歩を遂げさせることだ。何故なら、おれは、ヂュピターの新しい奴隷を造つたのではなく、彼の子供、彼の兄弟、彼の弟子、彼の友人、彼の助力者、彼の批判者として人間を造つたのだから。さうだとも！ 奴隷が要るなら今までのサターやサイクロプスで澤山だからな。――人間を正當に發達させることは、ヂュピター彼自身を發達させることだ。オリンパスの榮光を増し、彼の王國の富を大[illegible]を輝かせることだ。彼は[illegible]してこのことを忘れてはならない。然るにこの驕慢な暴君にはおれの云ふことが分らない。すでに束縛と壓制がはじまつてゐる。やつと出來上つたばかりの瑞々しい人間が、彼の暴虐の下に早く

も萎縮しようとしてゐる。彼は一つの火をさへ與へることを拒んでゐるのだ。エピミシュース、お前はおれの怒りを不當と思ふか？

弟　決して！　僕は兄さんの正しい精神があらゆる不合理を傍觀出來ないことを知つてゐます。またその美しい義憤があればこそ、人間たちはます／＼兄さんに服するのです。兄さんのやうな方に造られ育てられる彼等は幸福です。

兄　いや、彼等はまだ幸福には遠い。今の儘なら造られない方がいつそ增しな位だ。この狀態を變へ得るものはたゞ「火」のみしかない。「火」は闇を明るくするると同じく、彼等の現在の生活に光明を投げる。それに依つて彼等の智慧は今の千倍にも運用されるだらう。先づ地の底に隱れてゐる金と銀と鐵と銅が掘り出される。煮て煉り堅められた金屬は、彼等の現在の武器を鋼鐵に變へ、美しい黃金で飾るだらう。鋭くなつた鏃と槍は一層夥しい獲物を彼等に與へるやうになる。鹿でも、猪でも、もう生肉ではない。彼等は新しく作つた大鍋で味よく煮たり、長い鐵串で香ばしく燒いたりするだらう。夜も晝のやうに明るくなつた部屋の中で樂しい饗宴を開く事を知るだらう。かうして彼等は初めて穴の中の獸や木の枝の鳥と違つた生活を學ぶのだ。それが彼等の新たな智慧の始まりだ。彼等の目は本統に目を覺ます。手も足も本統の働をし始める。心臟の鼓動が變はる。一切の發達、一切の躍進がその日を境界として起るのだ。おれは屹度それをさせないでは置かぬ。おれの使命だ！　そのためにはチュピターと雖も容赦はしない。悦んで爭ふ。素直に渡さないから奪ふのだ。「火」が要るから「火」を奪ふのだ。それが假令彼の怖ろしい武器の雷電であるとしても、後へは引かぬ積りだ。よしそのためにどんな嚴罰を受けようとも、そんなことで屈しはしない。愛する人間たちのために受ける苦痛なら悦んで受けてやる。――エピミシュース、この大事な時機に際して、チュピターからの贈物を警戒なしに貰へると思ふか？

弟　仰しやる通りです。併し一方から考へれば、僕等が理由なしに彼の贈物を拒絶するのも、却つて疑惑を招きはしないでせうか？　僕は貰ふだけは平氣で貰つた方がよいかと思ひます。チュピターを油斷さす方便としても、それが得策でせう。

兄　お前は嬉しいのだな。

弟　兄さん――

兄　[illegible]しなくともよい。お前の目は[illegible]みを白狀してゐる。

弟　僕はたゞ、女、と云ふものがどんなものだか見度いだけです。知り度いだけなんです。

兄　――

弟　皆んな打ち明けませう。その贈物の話を初めてサターン達に聞いた時、僕の心は慄へました。實際それは今までにない不思議な經驗でした。その日から僕の前には非常に新しい樂しみなものが生じたのです。女、女、女――どんな物だ？　どんな物だらう？――僕は寢ても覺めてもそのことのみを思ひ續けました。それが完全に仕上げられて僕等のところへ贈り届けられる瞬間を想像すると、ぢつとしてゐられなくなりました。

兄　それで分つた。この間からお前の顏は不思議な輝きに包まれてゐた。お前の身體は輕く何時も躍つてゐた。お前の歌ふ聲は悦びの叫びであり、喘ぎであり、何物かを待ち悶える呼びかけであつた。お前の矢は的を外してばかりゐた。

弟　自分で自分が制しきれなかつたのです。

兄では、エピミシュース、その事はお前の自由に任せよう。おれは何事に限らず人から強ひられることが嫌ひだから、人にも強ひることはしない。

弟　誤解しないで下さい、兄さん。僕はたゞ正直に自分の心持を告白しただけで、必ずさうしなければならないと云ふ譯ではありません。兄さんが何處までも拒絶する積りなら、僕もそれに從ひます。

兄　いや、それではお前の感情に無理が出來る。乾度自然でないものが生じてお前を苦しめるに相違ない。それは避けなければならぬ。エピミシュース、お前は遠慮なく欲しいものは貰つた方がよい。見度いものは見た方がよい、知り度いものは知つた方がよい。それから超越するには先づさうするより外に道はない。

弟　それでは僕等がヂュピターの贈物を受取ることを兄さんは承知なさるのですね？

兄　さうだ。而してそれはお前のものだ。

弟　僕のもの！――僕一人の？

兄　一つの弓を二人で射ることは出來ない。――おれはそんな贈物には何等の好奇心もなければ、好奇心を持つ時間もない。おれは頭も腕も常に仕事のことで一杯なのだ。

弟　兄さんにさう云はれると僕は恥かしくなる。

兄　いや、お前はまだ若いのだから、おれと何もかも同じ行動をしろと云ふのはむづかしいことだ。――併しね、エピミシュース、その「女」なるものがどれほど愉快なものであるにしても、決して警戒を解いてはならないよ。夢中になつてはならないよ。我々に惡意を持つたヂュピターの贈物だと云ふことを一刻も忘れてはならないよ。おれの此の忠告は忘れないでくれるだらうな？

弟　大丈夫です！僕はそれを自分のものにして、一通りどう云ふものだと云ふことが分つたら、直ぐ興味はなくなると思ひます。

兄　或はさうかも知れない。それから今一つ約束して貰ひ度い。――我々の冒險をば、贈物の「女」が來たその日の夕方決行することにしよう。異存はないだらうね？

弟　よろしいですとも！

兄　それで安心した。たゞその「女」なるものが、まだ見もしない前から何故お前をそれ程引きつけてゐるかと思ふと、おれは氣がかりになる。決して尋常一樣の贈物ではないと云ふ怖れに打たれる。お前がおれに反對してまで何かを持たうとしたことは、曾てないことだからな。

弟　さう云はれると僕も少し氣味惡くなります。怖い氣もします。それだけ併し強い好奇心となつて僕を引きつけるのです。

兄　たゞ腑脱けになるなよ！それだけが肝腎だ。掴むならしつかりと急所を掴め。さうすれば蛇だつて噛みつきはしない。

弟　僕を信じて下さい！

兄　よし、その話はそれですんだ。今度はたゞ冒險さへ成功すればよいのだ。どうにかして旨くやり度いものだ。

弟　兄さんの計畫したことで成功しなかつたことはこれまで一つだつてないぢやありませんか？

兄　それはお前がゐておれを助けてくれたからだ。「人間」を造つた時だつて半分はお前の力だつた。おれがどんなにお前を頼みにしてゐるか分つてゐるか？

弟　僕の手足は兄さんの手足です。いつでも呼んで下さい。何でも命じて下さい。それが僕の名譽だと信じて下さい。

兄　分つた。二人で協力してうんとやるぞ！

弟　やります！　やります！

兄　乾度成功して見せる。おれの子供たち、待つてみろ！　燃ゆる火は頓てお前たちのものだ。あの天上の輝きが地上に降るのだ。お前たちの家の竈が一軒々々ヴルカンの工場の熔鐵爐のやうにまつ赤になる日が來るのだ。

弟と女

弟　パンドラ、もつと傍へ來い。おれの膝の上に抱かれてくれ。而してお前をもつとよく見せてくれ。お前の噂を初めて聞いた日以來、何百遍お前の姿を想像したか知れない。併し今となつて見ると結局なんにも想像しなかつたと同じだ。お前はおれの想像力を超絶してゐた。モデルのヴィーナスだつておれはお前より美しいとは思はない。何んと云ふ可愛らしい顔をしてゐるのだ！　何んと云ふ優しい姿をしてゐるのだ！――お前の髪毛に顔を埋めると、金色の靄に包まれたやうに目が眩む。お前の熱い息はおれを窒息させさうだ。さあ、もつと強く抱きしめさしてくれ。抱擁でおれのしびれた神經をはつきりさしてくれ。お前の額、お前の頬、お前の口、お前の顎、お前の咽喉、お前の頸、またおれの肩に絡みついたお前のふくよかな白い腕が、決して夢でも幻でもない實在のものだと云ふ事を、この燃ゆる唇でたしかめさしてくれ。

女　おゝ、私のエピミシュース、可愛い私のエピミシュース！

弟　おれのパンドラ、パンドラ、パンドラ、パンドラ！――何んと云ふ可愛い名前だ！　何んと云ふ幸福だ！　何んと云ふ樂しさだ！――パンドラ、着物を取つて了へ。ミューズ達が丹精を凝らした織物だつて、お前の薔薇色の皮膚より美しい筈はない。裸になれ。月が雲を拂つて完全な光輝と輪郭を現はすやうに、お前の全身を輝かせ。おれは何物にも汚されない造られたまゝのお前の本體が見度い。その忌々しい蔽ひの下に隱された肉の色がどんなに匂やかに美しいか、四肢五體を限る線の流れがどんなにしなやかに優しいか、場所に依つて高まり、場所に依つて窪む肉置の縺れが、どんなに珍らしい陰影を隈取るか、おれに見せてくれ。この手に觸らしてくれ。――おゝ、何んといふ形だらう！――何んと云ふ均齊だらう！――何んと云ふ調和だらう！――お前の全身は白く燃ゆる焰の柱だ。――香ばしい肉の殿堂だ。不思議な美の塔だ。――オリンパスの廣間に[illegible]て、お前の肩ほど圓くはない。サセスの島を繞る波の白い泡だつて、お前の胸ほど白くはない。ヘスペリディースの園の柘榴だつて、お前の乳房ほど豐かではない。またその乳房の左右から辷り落ちて、腰の上部で深くつぼまり、其處から再び新たにふくらみ出て、自然とふくよかな二つの腿の間に流れ込む曲線のうねりと、その交錯の美妙な陰影を、おれは何に譬へたらよいのだらう？　ミナーヴァの左手に輝いてゐる黄金の楯だつて、これほど見事な圓味はない。これほど誇りかな豐滿さはない。またお前の兩脚が優美なしなやかさと共にまつ直ぐな力強い直線で造られてゐることは、貴重な肉盤の支柱として最善の設計だ。でなければお前は大きな白い鳥となつて空に飛んで行くかも知れない。或はまた八月の夕方の虹のやうに、突然消えてなくなるかも知れない。その位お前は美し過ぎる。――何處へやるものか！　そんなことは考へられもしない。お前はおれのものだ。永久におれのものだ。斯うしてしつかりとお前を抱いて

ゐる時ほど、眞實におれのものを抱いてゐると云ふ氣のすることはこれまで何物にも感じなかつた。――パンドラ、おれの此の心持が分るかい？

女　それが自然なのよ。だつて、私は初めからあなたのものとして造られて、他の誰のものでもないのですもの。

弟　それは本統か、パンドラ？

女　何故そんなことを心配なさるの？

弟　お前はオリンパスでおれの兄のことを何か聞きはしなかつたか？

女　いゝえ、そんな方があるつて事さへ知りませんわ。ヂュピターが私に話してくれたのは、たゞあなたのことばかりですもの。あなたがどんなに若くて、どんなに美しくて、どんなに優しいかと云ふことばかりよ。

弟　ヂュピターは矢張りおれを愛してくれてゐるのだ。

女　それから、私はヂュピターがあなたの花嫁として造つた最初の女だから、この結婚が無事にすむことは何より滿足だと申しましたわ。

弟　それは何のことだ？「花嫁」？「結婚」？――おれには分らない。

女　私だつて分りはしないわ。でもあなたのところへ來さへすれば、自然に分る事だと申しました。そしてそれを祝つてやると云つて、ヂュピターからも、他の神たちや女神たちからも、色んなものを貰ひましたわ。

弟　みんな話してくれ、その時の樣子を。それから貰つたものを、何もかも。

女　ヂュピターは大層上機嫌で、さあ、おれが一番に―産む力―をやる。それでお前は最初の女であると共に最初の母親になるのだと云ひました。するとヂューノーは、では私はお前の夫が他の女に心を移さぬやうに妻の權威をやらうと云ひました。ミナーヴァは智慧をくれました。ヴューナスは美をくれました。ダイアナは貞操をくれました。アポローとマーキュリとマーズは音樂の才能と、家事を執つてのはしつこさと、事に臨んでの勇氣をくれました。おしまひにヴァルカンは、それならおれは贈物を皆んな纏めてしまつて置ける物をやらうと云つて一つの箱をくれました。

弟　それだな、お前が大事に持つて來た箱は？

女　えゝ。でもね、箱は神樣の贈物だけでは、まだ隙間がありすぎてがた／＼して困りましたの。――一番おしまひの、一番大切なものが入るまでは。

弟　それは何だ？

女　あなたの愛よ。

弟　おゝ、可愛いパンドラ！　それでお前の箱は一杯かい？

女　えゝ、えゝ、きつちり一杯よ。

（その時表の戸を叩く音がする。）

聲　エピミシュース！――エピミシュース！――約束の時だ。出て來い！

弟　おゝ、おれは忘れてゐた。お前の美しい身體の中にすべてを忘れてゐた。

女　あの聲は誰？　誰が呼んでゐるの？

弟　パンドラ、ぢつとしておいで。起きてはいけない。

聲　エピミシュース、どうした？　おれの聲が聞えないのか？

女　あら、あんなに叩いて！　何か云つてゐるやうだけれどもよく分らないわ。――行つて開けてあげませうか？

弟　いけない、いけない、いけない！――開けてはいけない。――

聲　お前の若い眠りがおれの聲のとゞかぬほど深いとしても、此の叩く音に目覺めない筈は

ない。――何故戸を開けないのだ？何がお前を躊躇してゐるのだ？――おゝ、それを思ふとおれは不安に襲はれる。おれの怖れてゐたことが早くも現はれたのではないか。――エピミシュース、しつかりしろ！　お前の使命を思へ。おれとの約束を思ひ出せ。

弟　おゝ、おれを確かり抱いてゐてくれ、パンドラ！　おれがわれを忘れて飛び出さないやうに、お前の腕で寝床に縛りつけておいてくれ。若しおれのこの手が、表の聲に誘はれて、ちよつとでも戸口の鍵に觸れたが最後、おれはヂュピターの謀叛人にならなければならぬのだ。――今まではおれは勇んでそれをなし得ると信じてゐた。併しその決心はお前を見た瞬間に消滅した。お前ほどの美しいもの、お前ほどの價値あるものを造り得たヂュピターの榮光よ、永遠であれ！――おれは決して彼に反抗することは出來ない。却つて彼の創造力の絶大と無限を讃美しないではゐられない。お前を抱くことに依つておれの心は謙虚を感じ、恥と怖が身を戰かす。殊にお前が他の誰のためでもなく、たゞおれだけの物として造られたのが事實とすれば、おれはヂュピターの特別の恩に感謝しないではゐられないのだ。

女　ヂュピターがどんなにあなたを愛してゐるかつてことは、誰よりも私が一番知つてゐますわ。――まあ、あの戸は破れはしなくつて？あんなに叩いて！　また何か云つててよ。――私よく聞いて見るわ。

弟　おれから離れてはいけないよ、パンドラ！――あの怖ろしい聲がおれの鼓膜を脅かさないやうに、お前の髪毛でおれの耳を塞いでゐてくれ。

聲　エピミシュース、アポローの二輪車は既に西の空に沒し去つた。後には「明星」の幽かな瞬きがあるのみで、天は今が一番ひつそりした空虚な時だ。ぐづ／＼してゐるうちにダイアナが星の處女軍を引き連れて現はれる。ヂュピターの饗宴からネクターに醉ひしれた神々の車が歸つて來る。さうなると幾ら注意しても我々は直ぐ見つけられてしまふ。天の道は眞直ぐで隠れ場がない上に、星の娘たちは鋭い目を持つてゐるから。それを考へると、斯うしてお前を呼びかけてゐる間も氣が急くのだ。エピミシュース、お前の正しい意識を呼び覺ませ！　理性に絡みついてゐる毒蛇を振り落せ。この冒險のために我々が今日までどんなに苦心して來たかを思ひ出して見よ。我々は乘物からして新しく造つた。どの神の二輪車よりも強い、ヂュピターの雷電にさへ挫かれない自信を以て造つた。またそれを曳かせるためには森の王なる六頭の黒い豹を選んだ。あの手に負へない獸たちを、今のやうにおとなしく轅に並ばせるまでの怖ろしい訓練を忘れたか？　我々は朝早くから夕方握つた手綱の見えなくなるまで、彼等を荒野に引きずり廻した。屈服させるか食ひ裂かれるかの試みを毎日續けた。やつとすべての用意が終つた。時は來た！　二輪車は二つの大きな輪を飛ばうとする時の鳥の翼のやうに立てて我々の乘り込むのを待つてゐる。六頭の豹は馴れきつた足並みで今にも驅け出さうと身構へてゐる。彼等の吼り聲と足踏みの音がお前の耳にも聞えぬ筈はない。待ち遠しがつて怒つてゐるのだ。今あの毛深い背中に一鞭當てれば、彼等はペガサスよりももつと早く飛び去るだらう。――おゝ、夕暮の銀色の雲は我々に道案内をしようとして長い旗を靡かしてゐる。エピミシュース、お前はこの豹の二輪車に打ち乘つて、渺茫たる大空の灝氣の道を、あの雲の旗に圍まれて天驅ける愉快を

恩はないのか？ 且つその勇ましい冒險は、慰みでも遊戲でもなく、我々の造つた人間の完成のために、製作者としての我々が必ず決行しなければならない神聖な遠征だと云ふことを思はないのか？ 若しお前が本統に人間を愛することを知つてゐるなら、おれをこれ以上待たせる筈はない。

弟　さうだ！ おれは矢張り行かなければならない。――パンドラ、お前の腕を離してくれ。お前の蠟のやうな厚い髮毛も、あの聲をおれの耳から防ぐことは出來ぬ。おれはたとひヂュピターの謀叛人と呼ばれ、愛に報いるに讐を以てする忘恩者と卑められても、あの聲に反くことは出來ない。それがおれの悲しい義務だ。

女　あら、どうなさるの？ 起きて何處へ行つておしまひになるの？――チュピターの謀叛人だの忘恩者だのつて、聞くだけでも氣がかりなのに、あなたが行つて了つて私はどうなると思つて？ あなたの賴りないハンドラを忘れないで下さい。私はあなたのために造られたので、あなたなしには生きて行く當てのないものだと云ふことを考へて下さい。まだ半日と御一緒にはゐないのですもの。それでもう別れて仕舞ふのでせうか？ いゝえ、いゝえ、そんな筈はないわ！ ねえ、どうぞお願ひです、何處へも行かないで下さい。あなたのパンドラをひとり殘さないで下さい。

弟　おゝ、可愛いパンドラ、泣かないでくれ。お前の涙はおれを氣狂ひにする。

女　約束して頂戴、何處へも行かないつて。――いつまでも二人で斯うしてゐるつて。

弟　それが出來さへしたら――

聲　エピミシュース、西の方が再びうす赤く輝き出したのは、兄に代つて夜の天を警固するダイアナの出現の近いことを示すのだ。さあ、もう一刻も猶豫は出來ない。――出て來い！ その戸を打ち破つて飛び出せ！ お前の平生の勇氣と誠實が、何物にも損はれてゐないことを見せてくれ。この冒險に於て、おれがどれ程お前の助力を必要としてゐるかを少しでも思ひ出してくれたら、決しておれを失望させる筈はない。

弟　おゝ、どうすればよいのだ！ おれはおれのすべき事が分らなくなつた。

女　あんな、誰とも知れない人の聲なぞに、あなたが迷はされるからいけないのよ。あの人は何處へ何をしに行かうと、一人で勝手にさせて置けばよいわ。私たちの係り合つたことぢやないのですもの。私たちは私たちだけで十分樂しく此處で暮らして行けますわ。ねえ、さうでせう？ 私たちの生活はこれから始まるのよ。本統に幸福な、樂しみの多い一日々々が。――私たちは二人を一緒にして下すつたチュピターに感謝しながら、仲よくこの生活を守つて行きさへすれば、それで他のことは何んにも考へる必要はないわ。あなたは毎朝早くから狩獵にいらつしやる。さうして獸たちを追つて勇ましく野山を驅け廻つてゐる間、私は家で絲を紡いだり、機を織つたりしますわ。私がどんなに美しい布を織れるか、あなたはまだ御存じないのね。仕事に飽きれば私は花摘みに行きますわ。向うの野原まで行くと、綺麗な花が澤山咲いてゐますもの。私は摘めるだけ籠一杯摘んで來てよ。而してみんな私たちの寢床に撒いて置きますわ。夕方あなたが狩獵から歸つていらした時、私たちの寢床が美しい花片と匂ひで包まれてゐるやうにね

弟　それはおれが夢見てゐた通りの生活だ。その儘の實現だ。――何んと云ふ美しさだらう！ 何んと云ふ樂しさだらう！

群　エピミシユース、もうこれ以上は待てないぞ！　これがおれの最後の呼びかけだと思へ。——おれとの約束を破つたお前、あの可哀想な人間を愛することを忘れたお前、卑怯な裏切者、乾度今日の日を後悔する日が來るぞ。苦しい悔恨がお前の踵を推く日を覺悟しろ。——併しおれはお前を憎みはしない。この破約と裏切が決してお前の本來の意志でないことは分つてゐるから。原因はヂ　ピターの贈物だ。すべての惡と背德が彼女と共に來たのだ。おれはそれを豫感してゐた。お前に與へられたおれの警告は、どうかしてそれを避けさせ度いためであつた。併し今はこれ以上立入つてお前の反省を促す時間がない。さあ、お別れだ。左樣なら！——毒された憐むべきエピミシユース、氣をつけろ！お前に背德と裏切を敎へた女から心を離すな！　人に敎へたことは彼女自身からも實行するに相違ない。而も師匠は弟子よりも巧妙にしてのけるぞ！

女　何か私の惡口を云つてるのね？

弟　あつ——二輪車が動き出した！——豹の群の咆哮に交つて勇ましい轟きが聞える。——高く、高く、天をさして驅けて行く——許して下さい、許して下さい！　この裏切者を許して下さい！

人間の群の祈禱

天地の造り主にして、神と人間との王なるヂユピターよ！

宇宙に於ける唯一の支配者よ！

どうぞあなたの尊い耳を、哀れなプラミシユースのためにする私共の哀願に傾くお借し下さい。

今や天の禁斷の火を盜んだ咎に依つて、コーカサスの嶮しい岩に繋がれた彼、重い鎖に身體を捲かれ、鋭い鋲に手足を釘付けられ、あなたから送られた赤鷹のために日夜その肝臟を食ひ裂かれてゐる彼を思ふ時、私共の身體は同じ苦痛に打ちひしがれ、心は同じ嘆き、同じ怖れに戰くのを感じます。

ヂユピターよ、私共はあなたの絕對を信じます。あなたの名に於てなされること、すべては眞理であり、犯し得ない律法であることを思ひ、如何なる場合に於ても服從と奉仕を怠らないものであることを誓ひます。併しながらヂユピターよ、私共は同時にあなたの寬大なお心を信じます。あなたの無邊際の愛は、どんな呪はしい罪へをも許さねばならぬことを知る故に、今プラミシユースのためにしようとする私共の僭越な願ひをもどうかお許し下さるやうに願ひます。——プラミシユースがあなたの掟を犯して[illegible]火を盜んだのは、あなたを蔑ろにしたのでもなければ、故意にあなたの權能を攪亂しようとしたのでもありません。彼の罪はたゞ彼があなたの命令を奉じて造つたもの——私共人間を餘り多く愛し過ぎたに外ならないのでございます。待てばあなたが悦んで下されたものを、待ちきれなくて摑んだだけでございます。

ヂユピターよ。どうかその一つのことをお心に留めて下さい。且つ彼が今日まで盡して來た數々の忠誠は、あなたの怒を和げるに役立たぬ筈はございません。あなたが造り上げたばかりの天と地に、良き形と良き生物を排置した彼の智慧、木には枝を、草には花を、鳥には翼を、獸には牙を、蟲には蟲らしい小さい脚を、それぞれに考案した細かい注意、また反對に巨人軍との戰に於ては、誰よりも大膽で花々しかつたその功績、殊にその時には彼は自分の一族を敵にして戰つたのでご

ざいます。最後にあなたの命令を奉じて私共人間を製作するまで、一つとして彼自身のためになされたものはなく、すべての仕事が悉くあなたに捧げた義務であり、あなたのために働くのを悦ぶ愼ましい奉仕に外ならなかつたのでございます。ヂュピターよ、この名譽ある功勞者が、ほんの僅かな性急から惹き起した過失のために、鎖に身を縛られ、鋲に血を流し、怖ろしい鳥のついばみに打ち任されてゐることが、彼の受くべき正當な報いでありませうか？　且つ如何なる殘酷な刑罰も、死ぬ身にはプルトーの領へ下るまでの苦痛として忍ばれませう。たゞ不死に生れたプラミシュースこそは、今の苛責が永久の苛責であり、嘆きも悶えも盡くる時なく打ち纏はる運命を思ひやつて下さい。

おゝ、ヂュピターよ！　尊き主よ！　あなたとても、これ程無慘な目に彼を逢はせる積りはなかつたに極まつてをります。どうぞあなたの怒を憐みに變へて下さい。今一度彼を自由にして、鎖も鋲もなくなつたその手足が、今後もあなたのために立派な仕事をなし得るやうにして下さい。彼の聲が今の痛ましい唸きの代りに、平生の晴々した響に返つて、今一度私共に呼びかけて來るのを聞かせて下さい。

弟と女

女　人間たちがまたお祈りをしてゐますわ。あの人たちはあれでもヂュピターを憚つて思ふだけの十分一も口に出してはゐないのね。でもあの眞劍な樣子を見ただけで、あの人たちがどんなにプラミシュースを崇拜してゐるかよく分りますわ。皆んなの眞心が溢れてゐてよ。ぢつと聞いてゐると引き込まれて一緒に祈り度くなるのですもの。ヂュピターの禁斷の「火」を盜むなんて、想像されもしない怖ろしい罪が、不思議と美しい、何か偉大な仕事のやうに感じられて來ますわ。考へて見ると、本統にえらいことをしたものですわね。

弟　さうだ。それだけは確かだ。――おれはプラミシュースとは意見が違つてゐる。彼の反抗的な精神よりはもつと謙虛な心持を愛する。ヂュピターに對しては絕對の服從と信賴を捧げることが、我々に取つても、あの人間たちに取つても必要だと云ふ信仰を持つてはゐるが、と云つてプラミシュースの偉大が分らなくはない。實際彼は彼でなければ出來ないことをしたのだ。何處までもプラミシュースらしいことをやつてのけたのだ。

女　さう云へば、あなたはプラミシュースのことをまだ一度も話して下さらなかつたのね。――彼があなたとどう云ふ關係でどうなつたと云ふことを。――この話になるとあなたはいつも避けようとなさるのを、私に氣がつかないと思つて？

弟　――

女　エピミシュース、あの晩――ヂュピターから私が初めてあなたのところへ贈られた晩、表の戶をあんなに激しく叩いたのは、あれは誰でしたの？

弟　パンドラ、お前の想像してるだらう通りあれはプラミシュースだつた。――おれの兄だつた。

女　お兄さんですつて――プラミシュースが？――あなたの？――まあ！――それでみんな分りましたわ。プラミシュースのことが問題になる度に、あなたが切なさうになすつた譯が。――また今日までどう考へても腑に落ちなかつたあの晩の不思議な訪問者のことが。

弟　さうだ。あの時は兄がおれを誘ひに來たのだ。我々はあの冒險を一緒に企てた。おれ

はプラミシュースと共に豹の二輪車を驅つて「天の火」を盗みに行く約束をした。おれはその仕事を名譽だと思つた。人類の幸福と將來の發達のために必要な冒險だと信じてゐた。おゝ――その信仰を一變させたのはお前だ！

女　堪忍して頂戴、エピミシュース！　私はあの時は何んにも知らなかつたのですもの。チュピターに反抗すると云ふことが、たゞもう怖ろしくてたまらなかつたのですわ。そしてあなたにお別れするのが辛かつたのですわ。――でも今の私はもうあの時ほど幼稚でもなければ臆病でもありません。あなた方の企がどんなに美しい動機から生じたか、チュピターがどんなに我儘か、判斷することが出來ます。プラミシュースの勇ましい冒險の價値が分ります。本統に、誰が聞いたつて胸の躍るやうな英雄らしい仕事ですもの。――あの人間たちの群があんなに氣狂ひのやうにプラミシュースを崇拜してゐるのも決して無理ではありませんわ。――あの人たちはあゝやつてコーカサスのお山まで巡禮に行くのですつて。あの山が新しくプラミシュースの祭壇になるのね。デルファイやドドーナにはこれから誰もお詣りするものはなくなりますわ。――エピミシュース、あなたは私を憎んでやしなくて？

弟　飛んでもない！　何んだつてそんな氣紛れを云ひ出したのだ？

女　岩に鎖で縛られ、禿鷹に肝臟をむしられる刑罰が幾ら怖ろしいにしても、プラミシュースが今受けてゐるやうな崇拜や名譽が、男の心を動かさぬ筈はありませんもの。

弟　パンドラ、それならお前はおれを知らなかつたのだ。おれはお前のために變へられた信仰を決して後悔してはゐない。チュピターの權威を尊びながら、お前と愛し合つて生きて行く。――現在のおれにはこれが最も自然な正しい生き方だと信じてゐる。以前のおれは餘りに兄に卽き過ぎてゐた。兄の思想がおれの思想であり、兄の生活がおれの生活であつた。それがお前に依つて、初めておれ自身のもの、おれ自身の道、おれ自身の世界が生じたのだ。これはおれに取つては如何なる名譽や崇拜にも代へられない大事な進步だ。それにどうしてそんな下らないことで兄と競爭する氣なぞ起すものか！　單に崇拜の點ならば、おれの方が彼等以上に兄を崇拜してゐるんだから。今度の冒險は別としても、兄は實際どれ程崇拜されてもよいだけの價値を持つてゐるのだ。

女　そんなに偉い方なの？

弟　チュピターは例外だが、そのほかのすべての神々とタイタン族と人間を通じて、プラミシュースほどの者をおれはまだ見たことがない。

女　みんな話して頂戴。あなたに似ていらつしやるの？

弟　おれよりはもつと大きい。

女　ぢや、もつと強いのね？

弟　もつともつと強い、而してもつともつと激しい。

女　上手に射て？

弟　兄の矢はおれよりも五寸がた長い。

女　二輪車は？

弟　他に誰なら六頭の豹を御せるものか？

女　それで醜くはないの？

弟　美しさならアポローにも負けはしない。

女　そんな人つて、あられるものかしら？――私そのお兄さんを見度いわ！

弟　おれの一番苦しいのは、それ程のプラミシュースが、彼に取つては名譽の刑罰であるとは云へ、奴隷のやうに鎖で捲かれ、手足を

血にして岩に繫がれてゐるのを知つてゐながら、おれの力でどうすることも出來ないと云ふことだ。殊にそのおれは何んと云つても彼から見れば裏切者だ。彼が戸を叩いた時、おれは逃げ隱れた。彼と一緒に行つて同じやうに岩に繫がれ、血を流し、禿鷹に肝臟を裂かれてあるべき筈を、お前と此處で平和に暮らしてゐる。——眞晝の山の日光が、鎖の喰ひ込んだ彼の裸身を焦がす時、おれは涼しい木蔭でお前の白い身體を樂しみながら水浴をしてゐる。山の夜の豪雨と嵐が彼の傷ついた手足を打ち叩く時、おれは安らかな寢床でお前の傍に眠つてゐる。——パンドラ、これを思ふとおれは堪へられない。いや、いや、もつと怖ろしい日が頓て來る。山の木の葉が落ち盡して、雪と氷がそれに代る日が來る。我々の寢床が幾枚もの毛皮で暖められる時に、兄は吹雪の寒風に曝されながら尙ほ岩に繫がれなければならない。霜は彼の髮毛を氷柱にし、雪は彼の身體を埋め盡すかも知れない。おゝ、それでもまだ彼の刑罰は終らないのだ。一千億度の霜氷を迎へても、決してその鎖の絕たれる日は來ないのだ。

女　いゝえ、いゝえ。エピミシユース、あなたは知らないのよ。プラミシユースさへその氣になれば、あの鎖は今でも絕たれるのですつて。

弟　どうして、パンドラ、そんなことがあり得る筈はない！

女　でも、あの人間たちは皆んなさう云つてゐますわ。ヂュピターはその條件として、プラミシユースから何か大事な祕密を聞き出さうとしてゐるのですつて。

弟　それならあの祕密のことだ。ヂュピターの王位に關する重大な豫言で、この世界ではただプラミシユースのみ知つてゐると信じられてゐるものだ。

女　屹度それなのよ。ヂュピターはそれを聞かしてくれさへすれば今直ぐにも鎖を解いてやるつて、何度もマーキュリを使にやつたけれども、プラミシユースが承知しないのだつて云ひましたわ。——エピミシユース、あなたが勸めにいらして見たら？

弟　おれに——このおれに行つて兄に逢へと云ふのか？——彼が誘ひに來た時には、あれほど卑怯な逃げ方をして置きながら、今無力な囚人になつてゐるからと云つて、平氣に訪ねて行けると思ふのか？　おれは假令裏切者でもまだそれ程恥知らずにはなれない。

女　あら、さうお思ひになるからいけないのよ。みんなお兄さんのためだと云ふ風に考へなければ。——若し、プラミシユースが何處までもヂュピターに祕密を明かすまいとするなら、せめてあなただけにまで話してお貰ひなさいな。而してあなたがプラミシユースの代りにヂュピターにそれを敎へて、お兄さんの赦免を願へばよいわ。さうすれば、プラミシユースは何んにも自尊心を傷つけないで、大威張であの鎖の岩から下りられるのだし、人間たちだつてどれ程悅ぶか知れないわ。

弟　いや、いや、それは不可能だ。兄は決して祕密を洩らしはしない。若し洩らしたとしても、おれがそれをヂュピターに賣つたことを知るなら、どれ程怒るか知れない。そんな卑怯な手段で赦される位なら、尙ほ一層強い鎖で一層險しい岩に繫がれよう、と公言するだらう。兄はさう云ふ氣性なのだ。

女　でも結局それでプラミシユースが放たれさへすれば、皆んなは大悅びをするのでせう。お兄さんを怒らすことが救ふことになり、逆ふことが守ることになるのですわ。

弟　これ程彼を愛してゐるおれが、彼の一番嫌

がることをしなければならないのか？――一つの裏切にさへあれほど苦しんだおれが、今一度彼に背くのか？

女　今一度プラミシュースを自由にするために。――今一度プラミシュースの智慧と勇氣を役立たせるために。

弟　今一度――今一度――今のおれには何より辛い言葉だ。それで唯一の希望の潜む言葉だ。

女　エピミシュース、その言葉を本統の悦びに變へることの出來るのはあなた一人ですわ。

弟　おゝ――クロソーよ、ラキシスよ、アトロポスよ。お前たちは餘りに無慈悲な運命を負はせてくれた。でもおれはお前たちを恨みはしない。これがおれの當然の分前なら從順に忍んで行かう。それよりもおれがお前たちに訴へ度いのは兄の身の上だ。どうぞ彼の運命を今以上に悲慘にはしてくれるな。おれが彼のためになさうとしてゐる苦しい努力にお前たちの手を借してくれ。おれはお前たちの嚴かな力の價値を知つてゐる。お前たちの承認なしでは、假令チュピターと雖も、プラミシュースの鎖の一つさへ解き得ないことを知つてゐる。その點ではお前たちは神以上の神、支配者以上の支配者だ。プラミシュースの運命を紡ぐ時、お前たちの神聖な絲に氣をつけてくれ。特別の愛と同情を忘れないでくれ。現在の不幸な黑い絲枠を、今一度明るい絲に捲き代へてくれ。解放の喜びで赤く染めてくれ。自由の黄金の色で塗つてくれ。

兄と弟

兄　やつと朝になるな。オーロラは太陽の二輪車を通すために、彼女の紅い門を東の空に開けはじめた。心の優しいあの女神は、毎朝おれの淺間しい姿を見る度に氣の毒がつて泣いてくれる。おれはこの繋がれてゐる岩の肌や、頭の上の木の葉や、足下の野原の草に明らかに彼女の涙を見る。けれども彼女は同情の言葉もかけなければ、慰めも云つてはくれない。何故だ？――チュピターが怖ろしいのだ。今少しするとアポローの二輪車がおれの傍に近づいて來る。彼の車の明るい輝はおれの殘酷な刑罰の光景を、いやでも彼の目の前に照らし出さないでは置かない。この太い鐵の鎖がどんなにおれの骨身を縛つてゐるか！　銳い鋲がどんなにむごたらしい血を手足に流さしてゐるか！――彼はオリンパスの廣間でたまに出逢つた時によくしたやうに、黒い大きな目を瞠つておれを凝視ては、一瞬間、痛ましいといふ表情が彼の美しい顏を暗くする。が、それつきりだ。彼は默つて、手綱を引き締めて、急いで車をやつてしまふ。何故だ？――チュピターが怖ろしいのだ。オーロラにしろ、アポローにしろ、又その他の神々にしろ、おれの冒險が決して私意に基いたものでないことを知つてゐる。またおれの受けつゝある刑罰が受くべき以上に過重である事を知つてゐる。併しながらそれに對して誰一人おれを辯護し、チュピターの不法な横暴を匡さうとする者はない。彼等は正義を說いて怒を買ふよりも、傍觀と阿諛で一身の安易を貪るに急なのだ。――いや、馬鹿々々しい！　あんな連中の同情や助力を夢想するほど、おれもたはけ者ではなかつた積りだが。この頃は餘程どうかしてゐるわい！　この皮膚に喰ひ入つてゐる鐵の輪が、おれの魂まで囚人根性にしようとしてゐるのではないか？――おゝ、おれの強い精神よ、堅い意志よ、不撓の氣魄よ、おれを見捨てるな！　不滅に生れついたおれの身體には最後と云ふものがないのだから、お前たちとの結

合も永遠無窮でなければならない。お前たちの城をしつかり守れ！　屈從や、怯懦や、さもしい妥協が忍び込む隙間のないやうに見張つてをれ！——世界が皆んなやつと目を覺ましかけたな。空の雲は一齊に輝く日で瞬き出し、大地は夜の蔽ひ物をはねのけた。狹霧の床の中から次々に起き出して來た小山よ、森よ、野よ、河よ、お早う！　まづ誰よりも一番に駈け出して來て、山の上からおれに飛びついて來る早起きの朝風よ、お早う！　皆んな何んと云ふ可愛らしさだ！　何んと云ふ上機嫌だ！　一日のよい營みが、今日もお前たちすべての上にあれ。——ヂュピターが初めて世界を造つた時、彼に力を借してお前たちの立つところ、擴がるところ、流れるところを工夫したのはおれだ。おれは最善を惜しみはしなかつた。併しあの排置が斯うまで調和し、お前たちがこれ程まで美しく成長しようとは想像しなかつた。お前たちを見、お前たちと共に暮らすことは、今のおれには唯一の救ひだ。ヂュピターはおれを人間から隔離させるためにわざと遠い刑場を選んだ。彼は鎖と鋲の痛み以外に、尙ほ孤獨と流竄の悲しみをおれに味はせようとしてゐる。氣の毒だが彼の企は失敗だ。お前たちと在る間、おれは決して淋しくはない。愛し得るものは樂しみ得るのだから。——でもお前たちとしては、ヂュピターの協力者であつたおれが、急に彼の囚人としてお前たちの前に繫がれてゐることは、非常な驚であるに相違ない。併し沈默の中にすべてを理解するお前たちは、何がおれを斯んな淺間しい姿にしたか、この急激な運命の轉落がおれの受くべき正しい報酬かどうか、分つてくれる筈だから、おれは安心してゐる。恥ぢも怖れもしない。お前たちも嘆かないでよい。決して醜い悲しみや騷ぎをしてはくれまいぞ。それよりはお前たちに適當な役目がある。おれの證人になつて貰ひ度いことだ。この刑罰をおれがどんなに男らしく引き受けてゐるか、毎日の激しい苦痛をどんなに強く堪へ忍んでゐるか、おれの口が唸き聲の外に一言でも弱い音を吐いたか、苦しい叫び聲の代りにさもしい憐みでも求めたか、それさへ見てゐてくれればおれは滿足だ。——さあ、頂上の岩に巢くつてゐる禿鷹奴が、目を覺まして舞ひ下りない内に、今一度お前たちの晴れやかな眺望でおれの目を慰ましてくれ、すが〳〵しい朝の大氣でおれの心を勇氣づけてくれ。——おゝ！——やつて來るな。あの物凄い羽撃きの音はどうだ！　巢を舞ひ立つのだ。彼奴等はおれの胸の肝で、生血に濡れた暖い朝飯をするのを悅んでゐるのだ。さあ來い。皆んな群がつて來い。貴樣たちの貪婪な嘴が終日むしり盡したつて、おれの肝臟は減りも瘦せもせぬ。一夜に完全な形と肉を取り戻すのだから遠慮は要らない。總がかりで飛びつけ。爪を打ち立てろ。齒の根に覺えがなくなるほど、存分に食つて見ろ。おゝ！——禿鷹の忌はしい叫びに交つて、聞き覺えのある懷しい聲がおれを呼んでゐる。——いや、そんな筈はない。斯んなところまで囚人のおれを訪ねて來る氣紛れ者があらうとは思はれない。

弟　プラミシュース——プラミシュース——プラミシュース！

兄　おゝ——あの聲は？——誰だ？

弟　私です。兄さん！　エピミシュースです。

兄　エピミシュースだと？——おれはそんな者は知らない。——そんな者がおれのところへ來る筈はない。

弟　どうぞさう云はないで下さい、兄さん。來られる筈のない私が恥ぢを忍んであなたの前に來たのは、よく〳〵來なければならない用

事があるのだと思つて下さい。――それにしても何んと云ふ變り果てたあなたの姿でせう！　あの額に渦卷いてゐた金色の卷毛は！　美しさと優かさで輝いてゐたあの立派な身體は！　完全その物であつたあの手足は！――岩の裂目の茨よ、お前の刺の引き縺らしてゐる髮毛がどんな賢い頭を飾つてゐたかお前は知つてゐるか？　無情な鎖よ、お前がバイソンのやうに絡みついてゐる囚人が、誰であるかを思はないのか？　鋭い鋲よ、お前が岩に釘づけてゐる手足が、今日までどんな偉大な仕事をして來た手足だかを考へようとはしないのか？　假令ヂュピターの命令であるとは云へ、お前たちに少しでも尊いものを知る明があつたならば、自分たちの冒瀆に慄へ上る筈だ。――あつ――禿鷹の群が胸に舞ひ下りた。まるで黑雲の一團だ。あの羽擊き！――あの叫び聲！――彼等は肉食の飽滿で氣狂ひになつたと見える。血の滴る嘴を爭つて臟腑に打ち込むあの有樣はどうだ！　引き裂かれる肉片のあの散亂はどうだ！――それを自分の目で見たものでなくて、どうしてプラミシュースの刑罰の苦痛を知る事が出來よう！　兄さん、あなたならばこそよくも忍んでゐられるのです。家から思ひやつた事や、道々想像して來た事は、陽氣な暇潰しに過ぎなかつた。

兄　お前の用事から聞かう。

弟　私は二つのお願を持つて來ました。――一つは恥づべき裏切にも拘はらず、私の變らない愛と尊敬を兄さんに認めて頂きたいのです。今一つは私の身の上にさしかゝつてゐる、怖ろしい破滅から私を救つて頂き度いのです。これがどんなに我儘なお願であるかは知つてをります。けれども兄さんの寬大な心は、この裏切者をも決して見殺しになさらないと信じます。どうぞ許して下さい。而して私を救つてやると仰しやつて下さい。

兄　話をはつきりしてくれ。

弟　問題はヂュピターの王位の秘密として知られてゐる、あの豫言に關することです。――ヂュピターはあなたから聞かれなかつたことを私に話させようとしてゐるのです。

兄　何んだと？

弟　同じタイタン族の兄弟と生れた中でも、取り分け一心同體の親しさで生きて來た以上、プラミシュースの知つてゐる秘密を、弟の私が知らない筈はないと云ふのです。何んと辯解してもヂュピターは信じません。あなたから拒絶された後、怒は今にも私の上に落ちて來ます。兄さん、彼の懲罰を想像して下さい。私は彼の追求から逃れる道はありません。と云つて、私がその秘密を知る道理のないことは、あなたが誰よりもよく御存じの筈です。

兄　それでおれに秘密を話させようと云ふのだな？

弟　私を助けて下さい。あなたの無力な弟を憐んで下さい。――今になつてヂュピターに秘密を洩らすと思へば、あなたの自尊心が忍びきれないことは分ります　けれども私に話して下さる分にはさし支へないではありませんか。私はそれを最初から知つてゐたものとしてヂュピターに告げませう。でなければ腹立ち紛れに私はどんな目に逢はされるか知れないのです。

兄　ふん、旨く巧らんだな。ヂュピターのもくろみさうな仕事だ。いや、いや、ヂュピターの性格を最もよく飲み込んだもののやりさうな細工だ。――だがまあよい。エピミシュース、ヂュピターの秘密がお前に取つてそれほど必要なら話してやるのは何んでもないよ。

弟　えつ、聞かして下さいますか？――兄さん、

有り難う！

兄　一說にはその豫言はチュピターの結婚と王位との重大な關係を說いたものだと信じられてゐるが、本統の秘密はさうではない。

弟　――續けて下さい。皆んな話して下さい！

兄　今後十三の世紀を重ねないうちに、チュピターは必ず彼の王座から逐はれる運命を有つてゐる、而も彼を滅ぼすものは神でも巨人でもない人間で、不倫で、東方の國に住む貧しい大工の息子だと云ふのだ。

弟　何んと云ふ豫言だ！　信じられない冒瀆の言葉だ。

兄　信じる信じないは別として、お前はそれをチュピターに傳へてやりさへすれば救はれるのだらう、お前の云ふ通りだとすれば。

弟　さうでした。私にはそれだけでよいのでした。――併し私は自分自身を救ふと共に、兄さんをもこの儘にしては置きません。兄さん、どうぞ私の最後の頼みを拒まないで下さい。この秘密を洩らす條件として、あなたの一生の不幸をこそを私にチュピターと約束して下さい。あなたがチュピターに降るのでもなければ、和解を求めるのでもありません。すべては私とチュピターとの交渉でするのです。私が私の手であなたを償ふのです。あなたはたゞ弟が兄を救ふだけなのです。あなたはたゞ時の來た時平氣でこの岩から下りて下さればよいのです。

兄　狡猾い客は一番大切な用事を一番後で云ひ出す。――エピミシュース、お前はその相談がし度いばかりにおれのところへは來たのだらう？　而して出鱈目を云つておれから秘密を聞かうとした。それを贈物にしておれの鎖を解かうとしてゐる。――何を驚くのだ。そんな事位おれに分らないと思つてゐるのか？　併し心配しないでよい。おれは怒つてはゐないから。お前の言葉は却つてお前の深い友愛を證明するものとして禮を云ふよ。

弟　兄さんにさういはれると僕は何んと云つてよいか分らない。あなたを騙せるものだと思つた自分が恥かしくなります。あなたの寛大過ぎるのが苦しい。――それよりは何故いつそ私の不正を責めては下さらないのです？　怒つても、罵られても、その方が僕には樂です。

兄　失つた一人の弟が今一度おれに歸つた悅びの中で、何を責めたり怒つたりすることがあらう？　エピミシュース、お前の兄の裏切から得た絶望や悲しみは、これで完全におれから去つたと思つてくれ。

弟　おゝ、私はたゞその裏切が償ひたかつたのです。その裏切のために自由に動いてゐる自分の手足が私を惱ませました。私はあなたの手足と同じやうにそれを岩に縛られる機會を無くした代りに、あなたの鎖をも必ず絶たうと決心したのです。私は白狀します。あなたの想像通り私の云つたことは皆んな嘘です。チュピターが威嚇したの、怒つたのと、そんなことは途方もないことです。それであなたを釣らうとしたに過ぎません。チュピターの秘密が聞きたいばかりに、あなたを偽つたのです。

兄　併しエピミシュース、お前はおれから聞き出した秘密を、實際チュピターに洩らす勇氣があるかい？

弟　その豫言にどれ程不吉な意味があるにしろ、私はたゞ傳へる者に過ぎないのですから、何も恐れることはありません。チュピターにしろ、豫言の言葉に對する怒りを直ちに私に移すほど偏頗ではない筈です。

兄　おれはそんな積りで聞いたのではない。エピミシュース、お前は自分のしようとしてゐる

ることの正しい結果を考へて見たことはないのか？　假りにヂュピターがお前の取引に乘つておれを許し、おれがまたそれを受容れてこの岩から下りるとして、後はどうなると思ふ？　冒險を企てなかつた前と同樣に我々二人が仲よくやつて行けると信じてゐるか？

弟　兄さんはそれを疑ふのですね。どうしてでせう？　私は私の裏切、私の虚僞、その他私の違つた過去の一切を許して下さると云ふ兄さんの言葉に希望をかけます。それで何故元のやうに暮らして行けないと仰しやるのですか？

兄　お前自身が既に元のエピミシュースではないから。――獨立性を持つたから。――おれの弟であるよりは、パンドラの夫であるから。――今一つの理由は、假令ヂュピターにこの鎖を絶たれたとしても、おれは永久に彼と仲直りは出來ないからだ。――彼の不正と暴虐が止まない限り、おれはいつまでも彼の敵だ。爭ふべきことは爭ひ、責むべきは責め、取るべきものは取る。「火」の冒險よりもつと怖ろしい冒險を企てないとも限らない。お前はその時おれのためにヂュピターを捨て得ると思ふか？　彼の忠實な信者となり切つてゐる現在のお前が？

弟　兄さん、私はあなたとヂュピターとの今後の關係をそれ程悲觀してはをりません。寧ろこの忌むべき事件はあなた方を前よりも強く結びつける機縁になるだらうと信じます。ヂュピターの仕事にとつて、殊に人間たちの支配に於て、あなたの力がどれだけ必要かと云ふことは、この際誰よりもよくヂュピターにわかつた筈ですから。あなたが囚はれた後の人間たちの狀態は、ヂュピターを手こずらしてゐます。彼等は自分たちのために得たあなたの罪を悲しんで、赦免の祈禱で氣狂ひのやうになつてゐるのです。誰一人仕事をする者もありません。野に出て働く者もなければ、畑に種子を下す者もなく、山へ狩りに行く者もありません。ヂュピターの羊を追うてゐた羊飼たちまで、羊を捨てて巡禮の群に入る始末です。この儘にしておけば人間の國の破滅は勿論、オリンパスの富まで失はれるのは目に見えてゐます。ヂュピターは威嚴の上から決して弱つた風は示さなくも、あなたと仲直りし度い意志は十分にあるのですから、今後は決してあなたの獻策を輕んじたり、要求を斥けたりする筈はありません。その點はどうぞ暫く私に任せて下さい。ヂュピターに從ふことがあなたに從ふことになり、あなたを愛することがヂュピターの誘惑に陥らないやうになる日を、私は何度來させて見ます。嘗て瞑想た人間たちを今一度結合にしたためにも、是非その日を作り出さなければならないのです。

兄　お前は詩人だ、併し夢を實現するものではない。おれはヂュピターが本質的に暴君であることを知つてゐる。自分で權勢を握るためには、親をさへ僻地に追ひ出した男ではないか。幾ら困つたと云つても、どうしておれに讓歩するものか。それ位ならあんな人間たちなんぞは皆んな滅ぼし盡してゐ構はないと云ふだらう。最初おれは彼奴を買ひ被つた。狂暴を勇氣と誤り、專横を英斷と解し、狡猾を智慧と考へた。巨人軍から攻撃されて、彼が牡牛の姿にまでなつてイシオピヤを逃げ廻つた時には、妙な俠氣から今一度彼を救ひ出してやり度くなつた。おれは同族とさへ戰つて彼を勝たしてやつた。それ以來の惡縁が我々を繋いでゐる。たゞそれだけだ。それ以上の交渉がこの後二人の間に起らうとは信じられない。いや、ヂュピターはその

羈絆さへ今ではうるさくなつたのかも知れない。成り上り者に取つては、昔の恩人は兎角目障りなものだ。彼のあらゆる陰謀は其處に原因を發してゐる。おれを孤立させ、手も足も出ないやうにして追つ拂はなければ安心されないのだ。丁度彼が父親のクロノスを王位から追つ拂つた傳で。——あんな魅力のある贈物を工夫したのも、それでお前を誘惑しておれに裏切らせたのも、みんなその爲だ。エピミシュース、この次はお前の順番だ。

弟　幾ら何んでも、それは兄さんの邪推がひど過ぎます。ヂュピターがさうまで我々を憎む筈は決してありません。この頃の彼を見ればよくわかります。兄さんの處刑以來彼は非常に氣が折れて來たのです。

兄　すつかり目を瞞まされてゐるな。まあ、さう思ひたければそれにして置くさ。併しタイタン族では我々二人のみがたゞ僅かに殘されてゐるのだと云ふことは忘れないね？　兄弟のアトラスは重い荷物で身動きもならぬ位置に立たされてゐる以上、ヂュピターに取つては居ないも同然なのだから、問題はたゞ我々二人だ。我々さへ片付けてしまへば、ヂュピターの煙たい不死身の者はもう一人もこの地上には存在しなくなる。タイタン族の完全な滅亡が來るのだ。ヂュピターがそれを望まないとお前は思ふのか？……愛する弟よ、氣をつけろ！　おれの鎖を解からうとあせつてゐるお前自身が、いつか何處かの沙漠の底へでも生埋めにされない用心をしろ。ヂュピターは巧妙にそれを實行するに相違ない。——おれの忠告を今一度繰り返す。曲者はあの女だ。パンドラに氣を許してはならないぞ！

弟　兄さん、外のことは何んでもあなたの言葉に從ひます。たゞ、パンドラのことだけはどうぞさう仰しやらないで下さい。自分の愛する者の惡口を、殊にあなたの口から聞くことが、私にどんなに辛いか想像して下さい。パンドラは決してあなたの考へてゐるやうな女ではありません。あなたは何んにも御存じないのです。彼女の美しい心は美しい姿に劣つてはをりません。パンドラはあの晩私を引き留めたことを今では後悔してゐます。智慧は彼女に正しい批判を敎へたのです。而してどんなにあなたの冒險に感動してゐるか、またどんなにあなたの今日までの功績を讃美してゐるかを知つたなら、あなたは決してあの女を傷つけるやうなことは仰しやらないでせう。

兄　そんな筈はない。——ヂュピターに造られた者がおれの肩を持つ筈はない。

弟　私は辯解する代りにお願ひします。あなたが自由な身體になつたらばどうぞ一番にパンドラに逢つてやつて下さい。私の新しい家庭生活を見て下さい。而してあなたの傷ついた手足を私たちの柔らかい毛皮で休めて下さい。あの女がどう云ふ女であるかは、その時初めてあなたに分りませう。パンドラの美しさと優しさは、私を樂しませてゐると同じやうに、あなたをも樂しませませう。あの從順を裏付けてゐる鋭い機智、愼ましさと共にあつてそれを損はない快活は、いつも私を笑はす通りにあなたをも笑はせませう。それにパンドラは料理が非常に巧いのです。私が狩獵から持つて歸つた獲物で、あの女はあなたの舌を悦ばせるやうなどんなおいしい御馳走でも拵へませう。パンドラの酒はまた獨得です。バッカス自身が絞つても、あれ程見事な風味はありますまい。實際その時の私たちの食事を思ふと、今から考へただけでも愉快です。兄さん、あなたは私のこれ程の嘆願を斥けはしないでせう。あなたの想像

の通り、ヂュピターが我々を陥れようとしてゐるのが事實なら尚更です。あなたは私を見捨ててはいけません。我々は共に住み、共に力を合せることが何より必要です。

兄　エピミシュース、それではハンドラがヂュピターの反逆者であるおれを憎んでゐないと云ふのは本統か？

弟　そんな事で僕が虚をついて何になります。憎むどころではない、ハンドラはあなたを崇拜してゐます。

兄　おれの話をしたのか？

弟　ハンドラは丁度人間たちがオリンパスの神々の話を聞く時のやうな興味であなたのことを聞いて悦んだのです。あの女は美しいこと、勇ましいことに對しては、驚くべき敏感を持つてゐます。あなたを見る機會は一度もなかつたに拘はらず、知つてゐることはすべてを知つてゐます。あなたが今日までどんな立派な仕事をして來たか、どんな優れた智慧と勇氣を持つてゐるか、どんなに強くどんなに美しいか……

兄　よし、それではつきり返事をする。――おれはお前がパンドラと一緒にゐる間は、お前と住むことは御免だ。

弟　おゝ――それはまた何故です？

兄　ヂュピターの陥穽が足許にかゝつてゐるのに氣がつかないのか？

弟　ヂュピターの陥穽？

兄　ハンドラがおれを愛し出したらお前はどうする？

弟　兄さん――

兄　お前を捨てておれを取ると云ひ出したらどうする？

弟　おゝ――

兄　お前はあの女をおれに讓つてまで、おれと共に住む覺悟があるか？

弟　いや、いや、パンドラは決してそんな女ぢやありません。幾ら兄さんを崇拜してゐるにしても、私を捨ててまで心を移すなんて、そんな大膽なことを思ふ筈はありません。あなたはもつとあの女の氣高い感情を信じて下すつてよいのです。

兄　おれはパンドラを信じないと云ふよりは、ヂュピターを信じないのだと云はう。あの女に依つてヂュピターのたくらんだ事に一つとしてよいことがあつたか？　その目的のために造られた以上、あの女は何事に對してもヂュピターの意志通り動かされるのだ。知らずして罪を導き、罪は罪として禍を醸すやうになる。どうだ？　おれを誘ひ出すことをお前に勧めたのも恐らくあの女だらう。

弟　さうです、さうです。おゝ！――

兄　おれから秘密を聞き出せと云つたのも屹度あの女だ。それをヂュピターに賣らせようとしたのもまたその女だ。おれの鎖を賭物にしてな。どうだ？　ヂュピターの陥穽は二重にも三重にもかゝつてゐるぢやないか。結局どの陥穽かにかゝれば、タイタン族の根は立派に絶てると云ふ魂膽だ。――最初ハンドラを寄越した時のことから思つて見ろ。おれに與れると云ふのでもなければ、お前一人を指したのでもない。わざと我々兄弟を名指して來た。不和の女神が面白半分に投げる林檎、丁度あれだ。ヂュピターはあの時おれたちが所有權に就いて爭ふのを待ち構へてゐたに相違ない。エピミシュース、お前はその危險な機會を今一度作らうと骨折るのか？――

弟　そんなことがあり得るだらうか？――

兄　おれを信じろ。

弟　兄さん、あなたの怖ろしい言葉は私を打ち挫いてしまひます。私の希望は消え、悦びは去り、在るものは絶望と悲しみのみです。

若し不死體でなかつたら、私は死を選ぶでせう。併しその運命さへ惠まれてない私が今後どうして生きて行くか、それを教へて下さい、命じて下さい。

兄　お前はお前の家へ歸ればよい。パンドラはおれよりもずつとよくお前を慰める方法を知つてゐる。

弟　おゝ——パンドラ！　パンドラ！　パンドラ！——昨日まであれ程快く響いてゐたこの言葉が、急に毒針のやうにおれの耳を刺すのはどうだ！——それでまだおれはお前を疑ふことは出來ない。お前の愛の中に、お前の美しさの中に、そんな邪惡の潛む場所があらうとは信じられない。いや、假令それが本當だと云つても、おれはお前を手離さうとは思はない。お前が怖ろしければ怖ろしい程一層お前が戀しくなりさうだ。

兄　安心してお歸り、エピミシュース、お前がおれを救はうとしなければ、お前の幸福も當分壞されないですむだらう。この上はたゞジユピターに[illegible]られる種を作りさへせねばよいのだ。

弟　それで、あなたの事なぞ構はずに、いつまでもこの岩に打つちやつておけと仰しやるのですね？　兄さん、私は自分の幸福さへ再び歸つて來れば、あなたのことなぞ直ぐ忘れてしまつて、パンドラと今まで通り暢氣に暮らして行けると思ふのですか？　それでは私をあんまり見くびり過ぎます。どんな幸福もどんな歡樂も、この岩に縛られてゐるあなたを思ひ出す瞬間、今後は皆んな私から去つてしまふでせう。殘るのは永久の嘆きと悲しみばかりです。——いや、いや、私は決心しました。その嘆きも悲しみも私は決して他處ではしない。あなたと一緒に此處でします。歸らないであなたと二人でゐるのです。幾世紀か、幾百世紀か、幾千世紀か、それは知らない。あなたの望み通りの自然な機會がこの鎖を解く日まで、私はあなたを離れないでゐます。

兄　愛するエピミシュース、お前の誠實に禮を云ふよ。併しお前は歸つてくれ。此處にゐることは出來ない。

弟　それはまた何故です、兄さん？　それさへあなたは僕に許さないのですか？

兄　おれのゐない間、お前はおれに代つて人間たちを指導する義務がある。さあ、落ちついて歸つてくれ。而しておれから訪ねて行く日を待つてゐてくれ。おれは屹度その日の來るのを信じてゐる。お前の所謂自然な望み通りの機會が到來するに相違ない。その時おれの鎖を絶つ者は、おれの不正に下らぬ意志と、苦痛に屈せぬ克己心を認めてくれるだらう。而して多分その者の手に落ちるに相違ない人間たちを、おれがどんなに強く愛したか、どんなに精巧に造つたか、またどんなに困難と戰つて教育したか、分つてくれるだらう。おれはその時滿足してこの岩から下りればよいのだ。

弟　あゝ——その日が來さへすれば！——

兄　ジユピターの王位の沒落の日がそれだ。——おれは豫言の中の大工の息子の手に希望をかける。若し若者がおれの鎖に氣がつかないで行き過ぎたとしても失望はしない。その後に來る者を氣永く待つだけだ。乾度來る。誰かしら來る。おれはそれを信じて待つ。

兄と愛の神

兄　エピミシュースは悲しみながらたうとう歸つて行つた。結局彼は落ちつくところへ落ちつくだらう。おれには我慢されないことでも、彼には我慢が出來る。おれなら[illegible]仕舞ふことでも、彼は微笑で見過せる。心の中

しさからでなく、素直さから自然に出來る。鈍感でなしに謙虛から出來る。この後の運さへ惡くなければ、彼だけはチュピターの毒手を免れるかも知れない。却つて彼の忠實な臣僚として重寳がられるだらう。それでパンドラと仲よく暮らして行く、——結構だ。エピミシュースに取つては決してわるい生活ではない。たゞおれにはそんな眞似は賴まれても出來ないだけだ。…

（その時突然頭の上で大きな笑聲が起る。）

兄　何者だ？　おれの頭の上でそんな無遠慮な笑ひ方をするのは？

愛の神　僕だ。僕が君を笑つたのだよ。

兄　ヴィーナスの小さいいたづら子だな。何を笑ふのだ？　おれの半分食ひほがれた胸の洞穴でもをかしいのか？

愛の神　ふん。手足を縛りつけられて、何處までが岩だか、何處までが身體だか見當もつかない化物見たいな君の胴體に、横穴の一つ位開いてゐるのは、いつそ似合つて見える位ぢやないか？　僕はそんなことを笑つたのぢやない。君があんまり偉さうな大法螺を吹いてゐるのが滑稽だから、それでつい吹き出したのだ。君は今までエピミシュースと話してゐたことを、僕が何んにも聞かなかつたと思ふのか？

兄　聞かれたのなら仕方がない。併しそれなら此處で道草を食つてゐる隙に、何故オリンパスへは飛んで行かないのだ？　今偶然君の耳が拾つたものをその儘チュピターの耳に屆けてやれば、おれは受け合ふ、彼が大事にしてゐる黃金の三脚器をよこせと云つても君は拒絶されはしない。

愛の神　安心し給へ。僕は僕の弓と矢に直接關係のないことには何等の興味も持たないし、また手出しもしないことに極めてあるのだから。チュピターに王位の祕密を賣りに行くより、此處で君の氣のつかない君自身の祕密を發き出してやる方が僕の天賦に近い仕事だ。——プラミシュース、君は何故あの人のよい弟に譃ばかりついたのだ？

兄　エピミシュースこそおれに譃はついたが、おれがエピミシュースに譃をついた覺えはない。

愛の神　反對だ。僕に云はせれば君こそ大譃つきだ。——君は先刻エピミシュースがパンドラに逢つてやつてくれと賴んだ時、それこそ望んでゐたところだとは何故云はなかつた？　どうだ？　そんな[illegible]な顏をするなら、もつと先のことから、順序立てて云つてやらうか。チュピターがあの女を贈物によこした時、君はエピミシュース以上に興味があつたに拘はらず、大きな[illegible]をふつて弟に讓つた。君は野心のために——君の言を借りて云へば、人間を愛する爲に——チュピターの不正と戰ふために——出し度い手を引つ込ましたのだ。それなら男らしく諦めをつけたのかと思へば、わざとあの女の贈られた晩を選んで冒險をやらうとした。あの皮肉なやり方は何んだ？　エピミシュースを怖ろしい「女」の誘惑から防ぐためだとばかり云へるか？　防がうとしたのは寧ろ君自身の身體ではなかつたか？　君は自分では手を出すのを怖れてゐる物を、エピミシュースが自然に無邪氣に取らうとしてゐるのを見ると、知らん顏が出來なかつた。そのさもしい嫉妬と強い誘惑、同時にそれを大びらに露はし得ない僞善が、あの狡猾い手段を君に工夫させたのだ。

兄　そんな馬鹿なことはない。君は何か成心を持つておれを惡く見ようとしてゐる。

愛の神　まあ續けて聞き給へ。どうせ褒めはし

ないのだが。それで、エピミシュースの裏切は見事に相い失敗さした。ハンドラは完全に弟の手に、嬉しい瞬間はひとり僕の上に落ちたわけだからね。これでも君は僕に嘲笑される理由はないと云ひ張るか？　また鎖に繋がれて君から宙にぶら下つた儘眠る時、エピミシュースの暖い寝床を一度でも羨みはしなかつたと云へるか？――それから善良なエピミシュースが眞劍になつて君を救ひ出さうと骨折るのを見ると、今度は氣が咎め出した。どうにかして彼の手を借るまいとした。またそれを正直に白状する代りに、持前の大言壮語で彼を煙に捲いた。逞しい働き手が来て鎖を切るまでは決して下りてやらないと公言した。序たから聞くが、その大工の息子とか左官の倅とか云ふのは、實際来る當があるのかい？

兄　確實来るよ。間違ひなく来る。

愛の神　さうか、それならいゝが、併しちよつとの事ではなささうだな。僕ならそんな者をすぐ待つてはゐない。下りられさへすればどんな手段でも拵へてやる。それを君が何んとか理屈をこねて躊躇してゐるのは、下りるのが怖くて無理にもかじりつかうとしてゐるとしか見えないよ。更に一層卑怯なことは君がハンドラについて云つた言葉だ。君は、若しパンドラがおれを愛し出したらどうする、と云つてあの可哀想なエピミシュースを懐へ上らしたが、あれは何故おれがパンドラを愛し出したらとは云はなかつたのだ？　それがあの際は自然な云ひ方ではなかつたか？――さあ、それ位云つてやつたら、幾ら誇大妄想狂の君だつて、自分がどれだけ嘘つきで、どれだけ大法螺吹きだか分つた筈だ。又さうやつて世界に於ける正義の唯一の戦士のやうな顔して岩にぶら下つてゐることが、どれだけ滑稽な醜態だか思ひ知つた筈だ。それでもわからぬと抗辯するなら、僕はまだ他にはつきり分らしてやる方法を知らなくはないよ。（キューピッドは弓と矢を取り出して覗ふ。）言葉は胸に落ちないことがあつても、僕の鏃で刻みつけてそれで感じない胸はない筈だからな。

兄　いたづらつ子、止せ！　何の眞似だ！　君は眼を遣つてゐる。君の弓矢は洒落者の女々しいキニシフ達の胸を的にして射る時が、一番似合はしい遊び道具なのを忘れたのか？

愛の神　ハ、ハ、ハ、怖くなつたな。

兄　いや、君の武器の名譽を思ふためだ。それは一番六づかしい的を射るのが自慢ではなかつたか？　射難い胸を射抜いてこそ値打だ。初めて名譽だとも云へる。面白い遊びだとも云へる。それをおれのやうに君に縛られて、身動きの取れなくなつた的を射れば何になる？　當らないのが不思議な位だ。それとも斯んな標的でも弓矢の手柄にしなければならぬほど君の獲物が乏しくなつたのなら別だが。――

愛の神　旨い！　さう云はれると僕はいやでもこの弓矢を使ふわけには行かなくなる。――それでは君が待つてゐると云つた日まで僕も待つてやらうよ。先刻の話の男が君の望み通り鎖を切る日が来さへすれば、その時こそ君は自由な肉なのだからね

兄　勿論だ。併しその男の出現とヂュピターの凋落とは同時だと云ふことを聞き洩らしはしなかつたらうな。オリンパスの神々の一員たる僕が、その時になつても暢氣にそんな弓矢の楽しみが續けてゐられたら結構だ。

愛の神　大丈夫、ヂュピターの凋落は僕と關係はない。僕の仕事は少くとも他の神々の仕事とは違つてゐるのだから。僕は永遠の子供だ。永遠に遊ぶことが特權だ。豫言の大工の

息子だつて、チュピターの玉座は奪つても子供の僕の遊び道具まで取り上げはしないに極まつてゐる。——ぢや左樣なら、プラミシュース！　その時にまた逢はう。——併しそれまでに僕の言葉が當つてゐるかどうか、ゆつくり考へて見るのも惡くはないよ。君の退屈を紛らすには丁度よい考案だ。（去る。）

兄　母親のヴィーナスに似て、それで全然違つた性格を持つてゐるのはあの小僧だ。オリンパスの神々の中でも、變り者だと云へばあの小僧が一番かも知れない。あの小生意氣な口のきゝ方はどうだ！　それで不思議と憎氣がない。私心といふものが微塵も見えない。何をしても、何を云つても、他の連中の持たない純な自由が溢れてゐる。生き〳〵していつ逢つても氣持がよい。併し彼奴が今日パンドラに就いてしやべつて行つたことは徹頭徹尾見當違ひだ。ひどい妄言だ。何んでも物事をヴィーナスの力に結びつけて考へたがる傾向は、流石にあの女神の子で仕方がないとしても、おれがエピミシュースと同樣パンドラに心を動かしたなんて、飛んでもない邪推だ。オリンパスの連中がやるやうに、あの怖ろしい湖にかけて誓つてもよい。おれはあの時は製作中の二輪車のことで夢中で、外の物に頭を向ける餘裕はなかつた。——それは、どんなものだらう位は時々考へても見た。併しそれとてチュピターが「女」なるものをどんな風に拵へ上げたか、それを見度いといふに外ならなかつた。單なる製作上の興味に過ぎなかつた。おれは從來の「人間」ばかりでは、世界は早晩困ることになる事のあるのを感じてゐた。彼等は餘りに力に富み過ぎて來た。牧場の仕事にも、畑の骨折にも、狩獵にも、その他の遊樂にも、使ひきれない剩餘力が生じて來た。この儘放任しておけば彼等はこれをお互ひ同士に注ぎかけて浪費するに極まつてゐる。爭ひに爭ひが續き、叩き合ひ、殺し合ひが始まる。結局は種族全體の滅亡に終る。その危險を救ふためには、彼等の有り餘る力を受容れて、他の新しい無害な勢力に變へるやうな役目を務める何かの生物が必要だと信じた。併しその存在にどんな組織と表現を與ふべきかに就いてはまだ定見がなかつた。神と女神との對立は當然一つの見本ではあつたが、近來のオリノパスの生活に對する反感がそれを否定させた。彼等を眞似度くはない氣がした。では何が最も望ましい典型か？——チュピターが「女」を造つてゐると云ふ噂を耳にした時も、丁度その要求があつたから、別種の好奇心でおれは聞いたのだ。少くともおれ自身は今日までさうとしか考へなかつた。それをあの小僧はあんな風な云ひ方で批評した。——假りにあの興味が單なる製作上の興味のみでなかつたとするならチュピターの陷穽は成功したのだ。——いや、おれは見事にそれを外し得たではないか？　おれはエピミシュースと爭ひはしなかつた。パンドラは初めから彼の物として讓つたではないか？——併しおれがあの「女」の事を其後も意識から消し得なかつたのは事實だ。エピミシュースを考へることは、パンドラを考へることであつた。あの晩、開かぬ戸の外に立つてエピミシュースを待つた間の心持は今でも説明がつかぬ。おれは弟の遲疑に依つて冒險の手筈の狂ふのを怖れながら、戸一重向うの光景を想像しないではゐられなかつた。彼に天職と義務を思ひ出させ、パンドラの誘惑から遁れることを勸告しながら、名狀の出來ない戰慄を感じてゐた。また裏切に對する危惧と絶望の中には一つの不明な激しい感情が交つてゐた。おれはそれ

を、ハンドラに對する愁であり、憎であり、罵であり、呪であり、それ等のすべての混合であると、今日まで信じてゐた。然るにあの小僧はそれを明白に嫉妬と呼んだ。──おお、若しそれが事實だとすれば、あの小僧はおれ自身にも知らなかつたおれを知つてゐるのか？　おれの意識し得ない意識を洞察し得たのか？──なんだか彼奴の云つた事が段々氣味が惡くなつて來た。相手にもならない子供の惡口だとばかり聞き流した事が、強く胸を刺すやうに感じるのは何故だらう？──若し彼奴のしやべつたことを皆んな是認すると したなら、そんなことがあり得ようか。斷じてあるべきではない。あの小僧が何んと云はうとも、おれの意識に明瞭に現はれないものが、眞におれの思考である筈はない。憚りながおれはさう云ふ。だがこの種類の感情にかけては、彼奴はあの弓矢の武器と共に母親讓りの不思議な力を持つてゐるのだ。あの小僧は蟲が林檎の皮の下に、水が河岸の砂の間に、潛り込むやうに安々と誰の胸の奧へでも潛り込める。その點ではチュピターと雖も、彼奴の敵ではない。たゞ僅かにミナーヷの銀の鎧のみが防げると云はれてゐる以上、いつの間にかおれの胸にも這ひ込んで、おれ自身でも氣のつかない、おれの曖昧な意識の祕密を皆んな嗅ぎつけたのだとしたら──それであんな輕蔑しきつた笑ひ方で笑つたのだとしたら──云ひ度い放題の惡たれ口を利いたのだとしたら──何んと云ふ恥辱だ！──何んと云ふ不名譽だ！──誰でもよい、あの小僧の饒舌つた言葉を皆んな嘘だと云つてくれる者はないか？　ユクザインの海の潮の遠鳴のやうに、永久におれの耳から離れないであらうあの笑聲をぴつたり塞いでくれる者はないか？　サイクロプスであつても構はない、おれは彼の一つの目の前に、出來たらこの膝を折つて頼むだらう。疑惑と昏迷に比べれば、どんな卑しい哀願でも増しだ。すべての誇と勇氣は失はれかけた。鎖は急に千倍の重さを加へ、鋲は新たな苦痛で肉を苛責み出した。一時間前までは誰にも恥ぢない、まだ何物にも悖れない名譽ある囚人だと信じてゐた自分が、世界で一番醜い、無力な奴隷に成り下つた氣がする。──運命の哀れよ。おれはおれの肉で貴くなるお前達の魂を、アンブロジアで養はれるチュピター一族のそれよりも惠まれたものだと信じてゐたが、今は

適當な肉を適當なときのみ食つてゐるのかも知れないぞ。斯うなれば遠慮は要らない。思ふ樣引き裂いてくれ。おれは寧ろそれを頼む。肉の苦しみは心の苦しみを幾らか紛らしてくれるかも知れない。──さうだ。おれの待つてゐる解き手が現はれるまで、おれはこの儘此處でこの苦しみを續けなければならないのだ。長い世紀の間、神と人間とはおれの淺間しい姿を見るだらう。偶にはおれの鎖と鋲のために憐れみの涙を催すものがあるかも知れない。併し彼等にはおれの苦痛と悲しみが今は何處にあるかを知ることは出來ないだらう。おれを解く者よ、お前だけはそれを悟つてくれるかも知れない。だがその事の爲におれを輕蔑しないでくれ。おれは誰よりも一番お前の輕蔑が辛い。──いや、いや、お前はおれを輕蔑する前に、乾度おれの善い裁き手になつてくれると思ふ。この岩の鎖を解くと共に、新しくおれの心を縛りつけた今一つの鎖からも、おれを解き放して異れると思ふ。おゝ早く來い！　おれの待つてゐる若者よ。待ち遠しいその日よ！　苦しみの多いその日までの世紀よ！

（大正十年三月）

腐れかけた家（三幕）

人物
塚本圭一　地主
龍子　地主の妻
芳子　地主の妹
牧田喬　龍子の從弟
近藤淸三　塚本家の支配人
平井治助　驛長
その他

場所
東北の農村

時
現代　八月下旬より九月上旬へかけて

第一幕

丘陵の中腹にある塚本家の邸宅。古風な、ペンキの剝げた洋館の一部が、後にくっついてゐる東北風の大きな母屋や藏と共に舞臺の左寄りに見えてゐる。洋館の中からはピアノの音がしてゐる。前は芝生と雜草の入り交つた廣い庭になつて、左手の森の方へ續いてゐる。正面にはカンナや葵の植わつた花壇がある。その側に自然木をその儘支へに利用した木の卓があり、同じく木株を利用した腰掛が二三ある。その腰掛の一つに芳子がかけて編物をしてゐる。美しいけれども瘦せた淋しさうな十九の娘。單衣に赤の入つた帶をしめてゐる。稍離れた下手に召使の老婢が奈良漬にする瓜を蓆の上に並べてゐる。東北の八月の透明な暑くない午後。

芳子　今年はお兄さんのシャツを皆んなほぐしつちまつたから、大急ぎで編まなけりや追つつかないわ。何んとか云つてるうちすぐ寒くなるのだもの、ねえ。

老婢　あなたは本統にお兄樣思ひでいらつしやいますし、外の者にはどうしてそんな根氣はございませんですよ。

芳子　根氣では婆やも負けやしないぢやないの。――よくまあ次々に色んなものを乾すと思ふわ。この間の杏がすんだかと思ふとまた瓜だから。

老婢　皆んな同じことでございますよ、お孃樣。一年ちう忙しい食物を家に絶やすまいといたしますには、あなたがさうやつてお寒い時の用意に編物をなさるやうに、それだけの手數を惜んではなりません。――それに當節のことでございますから、何か要ると云へば汽車で町に買ひにやつたつて半日もかゝれば買つて參りますやうなものの、あんな店ざらしの埃つぽい漬物や、ブリキ臭い罐詰物なぞ旦那樣方に差し上げる氣には婆やにはなれませんですからね。

芳子　さう云へば婆やが送つて吳れた乾杏や榲桲の砂糖漬は、寄宿舍でも評判がよかつたものよ。

老婢　あれもこれもあなた、皆んな亡くなつたお母樣の御傳習でございますよ。斯う申しますとまた婆やの愚癡が始まつたとお笑ひになりませうが、御先代の時分までは斯んなこと

は何一つ手落はございませんでした。尤もあなたのお母様つて方が人一倍丹念な方でもあつたのですが、先づ梅を漬ける、桃の砂糖漬をする。李や杏を乾す。生薑や薤を漬け込む。軈てこの奈良漬で瓜を割つたり乾したりの騒ぎがすむと、今度はそろ／＼秋の生りものの閑ひにかゝると云ふ鹽梅でございました。その外にだつて、それ澤庵だ、お菜漬だ、味噌焚だつて、一年ぢう何かしら漬けたり煮たりしてゐない時はないやうでしたから、忙しいことも忙しうございましたが、それだけ樂しみも多うございました。全く今では何もかも昔噺になつてしまひましたよ。奧様なんか婆やが杏の少しも乾したり、ほんの四五十本奈良漬でも漬けようとするのさへ、餘計なことのやうに思つていらつしやるのですから。──あの方はピアノをボン／＼鳴らす暇はあつても、瓜の乾加減はどうかと一言聞いて下さる氣はおあんなさらない。──

芳子　だつて婆や、お姉さんは東京の方だし、お兄様と結婚した後だつてずつと東京に住まつて、田舎の生活に丸つきり知つていらつしやらないんだもの、一つ家でこちらで暮らすやうになつたからつて、もとのお母様みたいにすつた通りのことをさせようと望むのは、望む方が間違ひだわ。

老婢　さう申せばまあそれまでですが。

芳子　殊に奧だつて今ではお兄さんとお姉さんと私とたつた三人きりで、お客様と云つても殆んどないし、使つてゐる者も以前の半分とない位だから、昔見たいに大げさに何か拵へたり仕舞ひ込んだりする必要はないのよ。若し必要があれば婆やなんかにやきもきさせるまでもなくお姉さんから進んでなさるわ。あんな氣の寛い、いゝ方だもの。

老婢　それはあなた、正直なところ、奧様は我儘もお强いし、時々癇癪もお起しになるが、根はさつぱりした毒のない方だつてことは婆やだつて存じてをりますよ。たゞ東京は東京、田舎は田舎でございますし、殊に斯う云ふ古いお家の仕來りと云ふものは何より大切でございますからね。

芳子　お姉さんがこはさなくたつて、そんな昔の仕來りなんか、もうひとりでにこはれかけてゐるぢやないの。

ピアノの音が止み、洋館の窓が開いて、龍子の上半身が現はれる。二十九。細面の[illegible]顔、蒼白い顔の色と大きな黒瞳に特色がある。芳子よりは華美な位な柄の單衣を着てゐる。

龍子　よつちやん、──お兄さんが歸つていらしたのぢやない。

芳子　いゝえ。どうして。

龍子　さうかと思つたから。──（龍子はこの言葉と共に庭に出て、瓜を見つける）婆や、斯んなものをまた此處へ擴げたのかい。

老婢　お晝からはこちらが一番日當りがよろしいものですから、ちよつと乾さして頂かうと思ひまして。

龍子　幾ら日當りがよくたつて、瓜を乾すのにわざ／＼座敷の庭先へ並べなくたつていゝぢやないかね。さつさと片附けてお仕舞ひ。本統にお前たちのすることつたら、庭の中も納屋の前も見境がないのだからやり切れやしない。

芳子　向藏のところだつてよく乾いてよ、婆や。私がこちらの端を持つて行つて上げるわ。

芳子筵の一方を抱へ、[illegible]ぶりに手傳ふ。

龍子　打つちやつて置きなさいよ、よつちやん。そんなことあなたが手傳はなくたつて誰か呼べばいゝわ。[illegible]

助――やを――たま――皆んな何をしてゐるのだらう。――何處にゐるのだらう。――呼んだ時すぐと返事をしたためしがない。

老婢　若い者たちは裏の坪で[illegible]乾をしてゐますのでせうよ。――お孃樣、相濟みませんね。

（芳子と老婢、瓜の筵を持つて去る。）

龍子　厭になつちまふ。明けても暮れても斯んな風で暮らすなんて。――東京を引き上げてから丸二年とたゝないのに、もう十年もこの山の中に燻つてゐるやうな氣がするわ。十年どころぢやない、惡くするとこのまゝ此處でお婆さんになつて、此處で死んで仕舞ふかも知れないのだもの。考へただけでも慄とする。――いゝえ誰がそんな事を我慢されるものか。さうとも、初めから田舍に來る約束で私たちは結婚したのではない。田舍の家は田舍の家、私たちは私たちで東京で暮らす筈だつたのだもの。今考へると、私は何故田舍へ歸るなんて御免だと、强情を張り通さなかつたのだらう。一つは田舍の本統の生活が、私には分つてゐなかつたのだわ。厭だとは思つてゐても、何處か小說や詩の中にあるやうな美しい暮らし方でもあるやうに考へてゐたゝが、間違ひの原因だつたのだわ。

（支配人の近藤淸三登場。五十年配の髭面の男。シャツに卷ゲイトルで山でも見廻りに行つて來たやうな樣子。）

近藤　旦那樣はまだ町からお歸りではございませんか。

龍子　やがて歸つていらつしやるかと思つてゐるのだけれど。何か用事。

近藤　はい。只今村長の上原の奴にちよつと逢ひましたら、彼奴怪しからんことを申してゐますので――恐らく奥樣はまだ御存じなからうと考へますが、旦那樣にはもう申上げてあると云ふ話で――

龍子　一體何の話。

近藤　それがその誠に不屆き千萬な申條で。――恐らく實行は致しますまい。恐らく口で云つて見るだけで――

龍子　ちえつ。あんたの恐らくが出だした日にや限りがない。要點を仰しやいよ。――要點だけ。

近藤　それはその、村外れの並樹を村會の決議で伐らうとしてゐるのです。

龍子　並樹つて、宅が生れた時お父樣が記念にお植ゑになつたのだと云ふあの桂のこと。

近藤　はい、勿論その桂の並樹で。――話に聞くと、何んでもあの樹にさう[illegible]には[illegible]えない樹ださうで、[illegible]らでも、あれで三十四五年からたつてゐますから、代るとなれば恐らく大した金目でございますよ。

龍子　でも何のために急にそれを伐るつて云ふのです。

近藤　村役場と小學校を改築するに就いて、適當な財源がないから、と斯う申すのですが、なあに、恐らくこれを口實に塚本家から寄附金をせしめようとする腹だと私は睨んでゐます。恐らくこの想像は――

龍子　呆れた根性ね、でもそんな權利がどうして村長だの村會だのつてものにあるのです。お父樣がお植ゑになつたのなら當然うちの所有ぢやないの。

近藤　ところが御先代の還暦のお祝ひの時でございましたか、あの並樹も周りの土地も悉く村へやつてお仕舞ひになつたのです。行く行くは公園にでもさせる積りで――

龍子　――でも、それなら尚のこと大事に保存しなけりやならない譯ぢやありませんか。それを伐るなんて、亡くなつた人の立派な感情を踏みにじるやうなものだわ。

近藤　全く仰しやる通りなんで、――この問題に限らず代々の旦那方の御恩を思へば、幾ら當節だからと申して彼奴等が斯んな不都合なことが云へた義理はないのです。分けても御先代は、村の事にはどれほど骨を折つたか分らない方でございますからね。やれ堤防が切れた、ほら河の橋が落ちた。何がどうした、斯うしたと云ふ度に悉く身錢を切つて世話を燒いたものでございますよ。誠に失禮なことを申すやうですが、塚本家が昔のやうになくなつたと申すのも、――それはまあ貴族院なんぞへずつとお出でになつて、物入も嵩めば、餘儀ない關係筋から縛られた點も十分ございませうが、村のために捨てた金だつて決して馬鹿には出來ないのです。それを思へば恐らく――

龍子　あの村長つて人は、初めから村の者なの。

近藤　左樣でございますとも。それもあなた、手前同樣ほんの水飲百姓の小倅だつたのでして。尤も子供の時分から中々喰へない奴で、親爺の手許は早くに飛び出してゐましたので、ですが、それが六七年前何處で何をして儲けたのか恐らく天道樣より外には誰も知らない金を持つてひよつくり歸つて來ると、田地を買ふ、町の銀行株を持つ、家を新築する、終には今では村長さんで大きな顏をして納まつてゐると云ふ譯でございますよ。――それも人の運で大いに結構だとして、たゞ私の癪に障るのは彼奴が何かと云ふとこの塚本家に楯をつくことなのです。今度のことに限らず、百姓たちが小作料のことなぞで今までにない小理窟をこねたりするのは、皆んな彼奴の仕業だと云ふことを私は知つてをります。自分だつて田地持の端くれの癖に、彼奴は百姓共を唆して、流行の小作爭議位やらせかねない奴でございますよ。

龍子　あんた知らないだらう。この春よつちやんが女學校を卒業して歸つた時、あの上原が長男の嫁に欲しいやうなことを云つて來たのは。

近藤　驚きましたなあ、そんなことがあつたのでございますか。何んと云ふ思ひ上り方だらう。身の程を辨へないにも程がある。――併し一體誰がそんな取次をいたして參つたのでございますか。

龍子　お仲人は驛長さんなの。

近藤　道理で。――あの風來者の幇間でもなければ、眞逆地着の人間がそんな馬鹿げたことを申して參る勇氣はございますまいつて。

龍子　だからそんな問題でも根に持つてゐるのぢやないかと思ふわ。でなけりや、何も特別この家に楯を突く必要はないのだもの。さうぢやない。

近藤　それも幾分手傳つてはゐませうが、根本は恐らく何んでございますなあ――近頃東京の雜誌なぞでよく申します階級意識と云ふ奴で。小金が溜つて、村長までなつて威張つて見たところで、御當家の前ではもとの水飲百姓の上原に過ぎないのが口惜しいのでございますよ。恐らくそれから何もかも始まることなんで、――併し昔の[illegible]長見たいな仲間ばかりぢやございません。村會の奴等の中には昔からのことを忘れない者も少しはあつていゝ筈ですから、私は彼奴等に談じてやる積りでございます。塚本家とこの村の義理合と云ふものを考へて見ろ、お前達にしろ、お前達の親兄弟にしろ、或は祖父母にしろ、どこの土地に生えた米を食つて生きて來たと云つてやります。小生意氣なことをするならしてもいゝから、先祖代々の胃の腑の中に詰め込んだものを吐き出してから、その上でや

つて呉れと云つてやります。

芳子が歸つて來る。

芳子　お兄樣が歸つていらしたやうだわ。

近藤　左樣でございますか。では私はちよつとお目にかゝつて。

近藤去る。

芳子　どなたか御一緒のやうよ。

龍子　お客樣。

芳子　下の坂をお兄樣と上つていらつしやるとこなの。洋服を着た若い方のやうだわ。この邊の人ではなささうよ。

龍子　――珍しいことね。たまにお客樣だと云へば、小學校の校長さんか、お寺の和尚さんか、驛長さんか、あの村長位に極まつてゐるのに。

塚本圭一、三十四五の中肉の善良らしい男。稍陰鬱な表情。鼠つぽい夏の洋服で下手から現はれる。

龍子　お歸りなさい。――どなたかお客樣ですつて。

塚本　あゝ、汽車で珍しい人に出逢つてね、無理に引張つて來たのさ。――誰だか當てて御覽。

龍子　出し拔けにそんなこと仰しやつたつて分りやしないわ。――どうしていらつしやるの。

塚本　噴井で顏を洗つてる。

龍子　でも誰だらう。眞逆東京の知つた方ぢやないでせう。

塚本　今に來るから待つた方が樂しみだよ。

龍子　勿體ぶつてどうでせう。――ねえ、よつちやん。

牧田喬、二十六七、都會の良家に育つた青年らしい溫雅と快活を備へた風貌、白ズボンに黑のアルパカの上着をきて、採集用の大きな胴亂を肩から吊してゐる。

龍子　まあ！――喬さんだつたの。――まあ、よくねえ。――まるで夢見たいだわ。

牧田　暫くでした。

龍子　二年ぶりね。――さう〳〵、これは妹です。――よつちやん、東京の牧田の從弟よ。

芳子　初めて。

牧田　初めて。

龍子　喬さん、宅は先刻實に勿體ぶつてね、誰を連れて來たか中々云つて呉れなかつたのよ。屹度珍しいお客樣だとは思つたけれども、眞逆あんたが來ようとは思ひもつかなかつたわ。

塚本　勿體ぶつただけの價値があつたぢやないか。

龍子　えゝえ、大ありだわ。――お父樣もお母樣も御機嫌でせうね。さう、結構ね。――だけども喬さんは何處へいらつしやるところだつたの。どうして宅と出逢つたの。

塚本　それが全く偶然なんだよ。今日は巡行で手間取つて、ぎり〳〵に停車場に驅けつけると云ふ騒ぎでね、周章てて汽車に飛び込んで不圖氣がつくと、二つ三つ先きの腰掛にかけてゐる若い人が何んだか喬君らしい。眞逆とは思つたけれども、後の恰好があんまりよく似てゐるので行つて見たら矢張りさうぢやないか。何處へ出掛けるのだと聞いたら、Y――溫泉に加納博士が來てゐられるので行くところだと云ふのでね、それならちよつと家に寄つて行き給へ、次の停車場で輕便に乘り換へれば一時間半とはかゝらない。實際此處まで來て寄つて行かないのは、門口を通り過ぎると同じぢやないか、と云つて、やつと連れて來たのだ。

牧田　あの乘換驛から斯んなに直ぐだとは僕は知らなかつたのです。

龍子　幾ら知つてゐたつて、宅に逢はなけりや

寄つて呉れやしないでせう。どう。

牧田　弱つたなあ。

龍子　皆んなさうよ。東京の人達つたら、私が斯んな田舍で暮らしてゐたつて、可哀想に、どんな樣子か見て來てやらうと云ふ親切氣のある人は、兄姉たちにも親類にも一人もゐないのだから。今度は喬さんが皆んなの代表でゆつくり逗留なさいね。大學なんかどうせ九月になつたつて本統の授業はないのでせう。殊にあんたは學生さんぢやないし、もう堂々たる助手先生なんだもの。

牧田　子供の時から、僕はあんたにかゝつちや叶はないんだ。

龍子　冗談はよしてさ、Y——温泉なら此處から四時間もあれば行けるのよ。ねえあなた。

塚本　四時間あれば十分さ。

龍子　だからどうしても行かなきやいけないのならいつだつて行けるわ。——でも温泉には博士だけ、それともお宅の方も御一緒。

牧田　皆んな行つてる筈なんです。

龍子　奥さんもお孃さんも勿論いらしてるのね。——まあ、それぢやあなた、喬さんを此處で横取りしちや惡かつたのよ。

塚本　どうして、

龍子　だつて喬さんは未來の奥さんのところへ行くとこなんですもの。

牧田　そんなことはありませんよ。皆んな出鱈目です。

龍子　いゝえ、隱したつて駄目、私東京にゐた時分に叔母様から聞いたことがあるのですもの。ダンスなんか上手で少しハイカラ過ぎるけれども、喬の今後のためには惡くない緣談だからつて。——さう云へば、よつちやん、いつだつたかの寫眞畫報に寫眞が出てゐたぢやないの。

芳子　さうでしたかしら。

龍子　あら、覺えてゐないの、洋服でラケットかなんか持つて。——活潑さうな美しいお孃さんだわ。

塚本　そりや氣の毒だつたな、そんな幸福な旅行だと知つてゐりや決して連れて來るのぢやなかつた。——併し喬君もいかんよ。さう云ふお目出度い話があるのに祕密にして置くから斯う云ふ手違ひを生ずるのだ。

牧田　困るなあ。實際まだ何んにも極つてる譯ぢやないんですから。殊に僕自身としては、結婚なんかよりもつと大事な仕事がうんとあるんですからね。

龍子　ぢや、まあそれとしといて、折角來て下すつたのだから、此方で暫く遊んでから温泉へ行くことになさいよ。少しは待たしてあげるのもいゝわ。

（近藤が現はれる。）

近藤　上原がお目にかゝり度いと申して參つてゐますが。

塚本　すぐ行くから部屋へ通しておいて呉れ。

（近藤去る。）

龍子　並樹のことでせう。近藤から聞いて腹が立つたわ。何んて人だらうとおもつて。

塚本　仕方がないよ。これからは色んな事が起きて來るのだ。喬君、君は植物で畑遊びだから讀んだことはないだらうが、エマスンの友達でソローと云ふ文學者の書いたものの中にね、斯う云ふ意味が云つてあるのだ。米國の鐵道の枕木の下には、一本々々に愛蘭土の勞働者の死體が横たはつてゐる。この死體が目を覺まして立ち上つて來た時が怖ろしい。——と。僕は大學を出て東京で語學の教師をしてゐた間に、幾ら新聞雜誌で勞働問題や、社會問題が八釜しく論じられてもそれ程には感じなかつたが、田舍に歸つて斯んな家で暮らして見ると、ソローの警句を痛切に感

じるよ。日本の枕木も身動きをし始めた。いや、もう立ち上つて叫び出したのだ。——十年前には臺所口から身をこごめて入つた男が、今では對等の客になつて座敷で威張つてゐる。而して僕を威嚇しようとしてゐる。彼奴も一箇の枕木なのだからね。——君もいい序だから、よく觀察して行き給へよ。研究室の顯微鏡の下の世界とは、また別趣の面白い現象がうんとあるから。

塚本去る

芳子　ぢや、私も。——お客樣のお部屋を掃除するやうに云つておかなければ。離室の方になさるでせう。

龍子　さうね。それから此方に麥湯でも持つて來るやうに云つて頂戴。

芳子編物を纏めて去る。引き違へに女中が藥罐とコップを載せた盆を持つて來て卓の上に置いて退く。

牧田　何か心配なお客ですか。

龍子　いゝのよ、氣にしなくたつて。（コップに麥湯を注いで與へながら）絶えず何かしらごたごたしてゐるのですから。——田舍の人つて、私は呑氣な人の善い者かと思つたら、まる一大違ひね。慾張りで、狡くつて、横着なんだもの。私もう愁々だわ、斯んなところで暮らすのは。本統に東京のことを考へると、何んでもいゝその儘飛び出しちまひ度いやうな氣のすることがしよつちうよ。

牧田　併し、斯んな立派な土地や山を持つて、先祖代々の邸に住まつて、誰に頭を下げるでもなければ、束縛を受けるでもなく、自由に好きなことをして暮らされるのだから、餘り不平は云へた義理ぢやないなあ。正直に云ふと、僕はあなたの田舍が斯んないゝ處だとは思はなかつた。單に景色が美しいばかりぢやなく、廣々とゆつたりして日本離れがしてゐる。僕は東北の旅行が初めてのせゐか、それを最も強く感じて自分までいゝ氣持ですよ。——人間だつて東京近邊の者なんかよりは朴訥で、あなたの云ふ人の惡さうなところは別にないらしいぢやありませんか。

龍子　初めてのお客樣は、申合せたやうに喬さんと同じことを云ふから笑止しくなつちまふ。皆んな見掛け倒しですよ。えゝ、さうですとも、何もかも！——あんたが重苦しいづうづう辯や、毛むくじやらの顏に瞞されて、この邊の者を朴訥な氣のいゝ人間のやうに考へると同じに、私たちを何不足ない大地主樣で、この土地なしの仕舞ひ者だと思ふのに、此處からずつと見下した田地だけでも、悉く、銀行の擔保に入つてゐると云ふことを知らないからよ。家だつてさうだわ、もう半分腐りかけて倒れるばかりだし、藏と云ふ藏は殆んど空つぽだし——

牧田　さう云へば斯う云ふ宏大な家は、昔の集合家族制度の標本的な遺物ですね。——一體建ててから何年になるのだらう。

龍子　そんなこと分るものですか。村の年寄達だつて知らない位なんですもの。——但し西洋館の方だけは、お父樣が第一期の貴族院議員で出ていらした時、東京の大工を連れて來て建てたのだと云ふから分つてゐるわ。

牧田　それだつてもう、四十年から經つ譯ですね。

龍子　ですもの、母屋は想像されるでせう。斯うやつて外から見てゐる分にはまあ我慢出來るわ。田舍で空氣の美しいお蔭で、白壁なんか何十年たつてもまつ白だつて云ふのですから。——でも一足家の中に入らうものならそれこそ大變、疊はぼこ〳〵だし、根太はゆるんでゐるし、屋根は腐つて雨は洩るし——一つにはあんまり廣過ぎるのと古いので、少し

位修繕したつては追ひつかないで風だから、ひどくなるばかりなの。それでも今はまだ極樂よ。その內に明けても暮れても雪が降る、吹雪が續いて、いつが晝だか夜だか分らないやうなまつ暗な家の中に、蟲のやうにぢつと凍えてることを考へて見て御覧なさい。殊に昨年は初めてだつたし、雪の重味であの古い家が變な軋み聲を立てて鳴るのを聞くと、本統に怖くなつて夜もおち〳〵眠れなかつたわ。お仕舞ひにはたうとう病氣にまでなつたのよ、喬さん。――私は東京のことを考へてはよく泣いたわ。而して私が斯んな思ひをして寒い國に來てゐるなんてことは誰も知らないのだと思ふと、悲しい傍から口惜しくなつたわ。――ねえ、さうでせう、東京の方では私が此處でどんな目に遭つてゐたつて、矢張り幸福さうで一番仕合せな結婚をしたやうに思つてゐるのね。

牧田　そりやさうですとも。塚本さんはあんな立派な方だし、殊にあなたに對してはどんな親切なあなたよりも親切だといふことを皆んな信じてゐますから。

龍子　それだけは違ひないわ。あの人はいゝ人で、私に對してこの上なく、して呉れてよ。――でも、さあ、何んと云つたらいゝかしら、兎に角塚本もこの田舍に歸つてから變つたわ。妙に陰氣になつて臆病で、東京にゐた頃のやうなさつぱりとしたところがなくつて――二人で夜なんか默つて坐つてゐると、私は不意にむく〳〵つとして、思ふさま小突き廻してやり度くなつたり、また急に可哀想なやうな情ない氣がして、一緒に聲をあげて泣き度くなつたりするの。一つは家がいけないのね。あの古つぽけた部屋や、まつ黒な天井や、苔でも生えさうな冷たい壁の中には、先祖から何百年と經つて來た變な濕しい、無氣味な空氣が詰まつてゐて、あの中に住む者の身體にいつとなしに浸み込むのぢやないかと思はれてよ。宅ばかりぢやない、あのよつちやんがさうなの。氣がつかない。

牧田　何んにも[illegible]。

龍子　誰だつてあんなに可愛らしいし、氣だても優しくて、いゝ娘なのだけれど、とても內氣で陰氣臭いつてないの。――私あの人たちを見てゐると、今に段々自分もあんな風になつて行くのぢやないかと思つて怖ろしくなるわ。私ならそれまでに氣が狂つてしまふに違ひないわ。――

牧田　馬鹿々々しい。默つて聞いてゐれば、あなたと云ふ人は何を云ひ出すか知れないんだ。

龍子　冗談ぢやなくてよ、私どうかすると本統に氣がちがひさうな時があるの。その時には私ピアノへかじりついて、何時間でも滅茶苦茶に彈つかき廻してやるわ。だつてさうでもしなけりやとても我慢出來ないんですもの。するとね、村の人たちは私が日本一の意[illegible]者でお引きずりで、贅澤で、ピアノでも彈くより外に暮らし方を知らないやうに云ふのです。何んと云つたつて、そんなことは構やしないわ。どうせあんな人たちにこちらの氣持がお分る筈はないんですから。でも口惜しいのは塚本までが妙に私のピアノで氣兼することなの。汗水垂らして田畑で働いてゐる人たちに對して、あまり贅澤らしく見えてはいけないかつて云ふの。まあそれがあの人の立派な所かも知れないけれど、一方から云へば、その氣の弱いところへ、百姓たちがつけ込むのだから自然[illegible]彈かないわ。ですから私には[illegible]。ピアノを彈いたからつて、何も村の人たちの仕事の邪魔になりはしまいし、第一私のピアノは實家から持つて來

たので、百姓たちの執念の籠つたお米で買つた譯ぢやないから遠慮が要るものですかつて。──當り前だわ、そんなことまでびく〳〵してちや堪りやしない。こちらで遠慮するほど向うぢやつけ上つて來るのですもの。奥に來てゐる村長の話たつて、喬さんなんか聞けば喫驚するわ。先代が公園にさせる積りで、土地までつけて村に寄附した並樹を伐らうとしてゐるのよ。

牧田　併し此處から斯うやつて眺めてゐると、あんたの云ふやうなことや、また塚本さんの云つたやうな心配事なんかありさうには思はれませんね。如何にも美しくつて、長閑で、平和さうぢやありませんか。そんな厭な話や不幸な爭ひは、何處か遠い別世界のことに過ぎない氣がする。

龍子　ふん、そりやあんたが仕合せだからだわ。Y──溫泉や加納さんのお嬢さんのことで一杯になつてゐるからだわ。それこそ私たちとは別世界にゐるからだわ。

牧田　龍子さん、それだけはよして下さい。先刻云つた通り僕はまだそんなことを問題にしちやゐないのだから。

驛長が制服で下手から入つて來る。六十を四つ五つ過ぎた位の老人。小男で、禿げてやつと一摘み殘つた灰色の毛髮を綺麗に撫でつけてゐる。いつも一杯やつてゐるやうな赤い顏。

驛長　これは奥様、──今日は誠に結構なお天氣で。──實は先刻御主人のお歸りを驛でお見受け申しましたので、お差間へなかつたらちよつとお目にかゝり度いと存じまして。──裏門から誠に失禮ですが、斯う云ふお邸になると、手前共と違つて表まで廻ればすぐ二三町から遠ふ譯ですからな、老人の無精でつい──

龍子　まあ、お掛け下さい、宅は丁度人が見えてゐまして。

驛長　いや、少しも急ぎません。この頃は驛も隙で極く呑氣にやつてゐますから。

龍子は新たなコップの一つに麥湯を注いで驛長に與へた序に、上手の森の方へ避けてゐた喬を呼ぶ。

龍子　喬さんも如何。

驛長　やあ──これはお珍しいお客様のやうですが、たしか先刻御主人と──

龍子　東京の私の身内の者です。

驛長　左様ですか、それは〳〵ようこそ。──私は平井と申しまして、（彼は大急ぎでポケツトの紙入から名刺を出して卓の上に差出しながら）當驛に勤務いたしてをります者で、御當家には何かと御厄介を蒙つてをります。どうぞ宜しく。

牧田　（同じく名刺を出して）私は斯う云ふ者です。

驛長　ほゝう。大學の植物研究室にお勤めと申しますと、いづれ博士で大學教授と云ふ譯でございますな。いや、誠に御名譽なことだ。奥さん、お樂しみでございませう。

龍子　何んだか分りはしません。

驛長　どうして、それはもう何より確かです。實は牧田さん、打明け話をいたしますと、私も初めから鐵道畑の者ではなく、これでも昔は東京の最も名譽ある學校に勤務いたしたことがあつたのでしてね。

牧田　はゝあ。

龍子　平井さんはね、一頃學習院へ出ていらしたのだつて。

驛長　はい、學習院でございます。丁度乃木將軍閣下があゝ云ふ事變でお亡くなりになつた直ぐ後で、元より斯う云ふ無學者ですから、教官なんて云ふ譯ぢやございません、ほ

んの生徒課の端役に過ぎないのでございましたが、併し何んですなあ、學校に勤める以上は何んと云つても學習院だとつくづく思ひますなあ。外のことはさて置き、たゞ生徒だけの側を云つて見たつてこれが悉くたいした子供ぢやない。ちよつと呼ぶ名前が一條！ 德川！ 近衛！ 前田！ 島津！ 毛利！ と來る。でなければ岩崎！ 三井！ 安田！――と斯うでせう。而も鍛冶屋の小僧を呼ぶやうに呼び捨てですから豪儀なものです。馴れないうちは自分で呼びながらぶるぶるつと胴震ひがした位で。――實際あゝ云ふ氣持はよその學校では決して味はれませんよ。あなたなんかも大學にいらつしやれば、將來まあ申分のない御身分と云ふものですが、併し機會がおありでしたら學習院だけには是非とも一度はお勤めになつて見ることですなあ。且つあなた方は私なぞとは違つて入るとなれば教官生活で、授業のラッパが鳴る、教室に入ると、すぐ出席簿で、一條！ 德川！ 近衛！ 前田！ 島津！ 毛利！――とやられる譯ですからね。

牧田　大變だな。

驛長　それに學習院教官の大禮服と云ふのは御承知か知れませんが、これがまた素破らしいものでして。

牧田　いや、知りません。

驛長　普通の文官の比ぢやないのです。御承知か知れませんが、學習院教官は宮内官ですからね、從つてその大禮服も式部官たちの着るやうな、金モールのぎらぎらする程くつ付いたあの種類の奴で――いや、あれを着た氣持は特別ですなあ。――尤も私は殘念ながらその資格がなかつたのですが。

女中の一人が下手から入つて來る。

女中　お風呂が沸きましたので、お客様にお入り下さいまし。

龍子　喬さん、入つていらつしやい。

牧田　僕なら急ぎはしませんよ。この邊は殆んど東京の秋だから汗も出ない位だ。

女中　あの、それから――晩のお支度に鷄でも拵へさせませうか、お嬢樣が伺つて參れと仰しやいました。

龍子　さうね、ぢや拵へて置きなさい。私も直ぐ行つて見ますからつて。

驛長　これは御用事のところを失禮いたしました。ではいづれ私は出直して參ることにいたしませう。

龍子　左樣ですか。奧のお客さんも頓てお歸りだとは思ひますが。

驛長　なに、どうせ只今は驛の方も閑で極く呑氣にやつてゐますから、また伺ひます。――牧田さん、あなたもどうか何んです、御散步のお序に驛の方へお立ち寄り下さいませんか。大いに東京話でもいたしませう。全く今日はあなたにお目にかゝつたお蔭で久しぶりに學習院時代を思ひ出して非常に愉快でした。ざつと二昔になりますからな。あの頃私が一條！ 德川！ 近衛！ 前田！ 島津！ 毛利！ 岩崎！ 三井！ 安田！ と呼び捨てにした連中が、今では悉く天下の公侯伯子男でなければ、日本一の大金持で威張つてゐるのですから、自分まで斯う肩身が廣いやうな氣持でしてね。――いや、また長くなりさうだ。どうもどちらへ上つても私は長つ尻でいけないつて、よく家内から叱られる譯でして。はつはつはつは。あゝ、さう申せば家内も久しく御無沙汰いたしてゐますが、いづれその内伺ひ度いと申してをりました。何とぞあしからず。――では奧さん、御免下さい。牧田さん、失禮いたしました。

驛長去る。

牧田　驚くべき存在だ。一體何の用事で來たのだらう。
龍子　用事なんか本統はめつたにありやしないのよ。たゞあんなお饒舌をしちや、村の重だつた家を順々に廻つて歩くだけなんだわ。
牧田　併し、あれは傑作ですね。（驛長の口眞似で）一條！　德川！　近衞！　前田！――
龍子　お止しなさいよ、馬鹿々々しい。――でも、今日はあれでまあいゝ方なの。どうかすると三大節の度に貰ふ打物の寸法まで聞かされるのだからやり切れやしない。――ねえ、喬さん、村の者は皆んな意地惡で、何に限らず私たちに楯を突かなけりや現代的ぢやないと思つてゐるし、さうでない者と云へばあゝ云ふ人達だし、その中にどうして生きて行けると思つて。これでも私は幸福な申分のない身の上だと云ふの。私の泣言や不平は皆んな我儘な暇潰しのヒステリだと云ふの。
牧田　その點は同情しますよ。併し――
　塚本が和服になつて上手の洋館の方から來る。
龍子　村長との話はどんなことになつたの。
塚本　うむ。それはまあゆつくり話さう。――驛長が來たつて。
龍子　えゝ、僕の學習院は喬さんすつかり當てられたとこなの。
牧田　正直に云ふと、僕はあの人は氣が狂つてるのぢやないかと思つた位です。學習上で何んとか云ふのですね、外の話は當り前で、或る特別の事になると、急に斯う發作的にクレージになつて來るのがありませう。
塚本　なに、あれで何處までも健全で、大眞面目で、且つ非常に得意なのだ。
牧田　さうだとすれば日本も賴もしい譯だなあ。――あゝ云ふ人物が存在する以上は、あなたの心配するやうな枕木の幽靈なんてものは、少くともまだ當分この邊には出現しさうもないやうに思はれますね。
塚本　いや、僕は專門家でないから思想界の複雜な現象に就いては斷言は出來ないが、現在の日本と云ふ國は世界のあらゆる思想の吹き溜りだと思ふ。僕が子供の時から雪に親しいから、この比喩が特にぴつたり來るのかも知らないが、まああの雪を見給へ。雪の吹き溜りと云ふものは廣い、平な場所にはめつたに出來ない、屹度山の蔭とか、野原の果とか、家の垣根とか云ふところだ。日本は地球上の位置からすれば、太平洋と云ふ廣漠たる空間のまん中にぽつんと一つ、垣根で、思想の吹き溜りには持つて來いの場所だから、世界の果からも古い思想から、世界の果からも新しい思想が堆積してゐる。丁度それと同じ意味でこの（日本の）田舍の眞中に應用される譯で――
牧田　おや、この田舍が日本の思想の吹き溜りだと仰しやるのですか。
塚本　まあさうだ。田舍は何處でも同じだが。――人間の側を舉げて見れば一層明瞭になる。昔から土地を一歩も離れたことのないやうな連中は、土の上にしがみ付いてゐるやうに自分の田舍にしがみ付いてゐるのだし、また村長とかあの驛長とかの手合は、散々世間の荒い風に揉み拔かれた末この吹き溜りに吹きつけられたのだ。だから學習院の下役を勤めたことを一生の名譽としてゐる善良な貴族崇拜者と無意識的な社會主義者と、決して一緒に存在される筈のないものが隣り合つて並んでゐる。――人事ぢやない。僕だつて結句同じ吹き溜りの仲間かも知れない。
龍子　厭な人、譬へにことを缺きはしまいし、何もわざとそんなことを云はなくたつて。
塚本　いや、つくづくそんな感じのする時がある。

龍子　なら私云つてあげる。あなたのは同じ・お仲間だつて吹きつけられたのぢやなく、自分から好んで吹き溜りの中に飛び込んだ方だわ。勝手に求めて苦勞してゐるのだわ。それも自分だけではなく、あんなに厭がつた――泣くほど賴んだ私を無理矢理引つ張つて來て一緒に投げ込んだのだわ。あなたの仰しやる吹き溜りの中に――底のない雪の穴の中に。

塚本　さう云はれるとお前には濟まないが、併しあの時は已むを得なかつたのぢやないか。親爺の死後、五六年も僕は家政を打つちやつておいた。人が善いだけで無能な近藤に任せきりで、何がどうなつてゐるのか皆目知らなかつた。正直に云ふと、知るのが怖ろしかつたのだ。

龍子　それでいよ〳〵歸つて來てあなたが御自分でやつて見たとして、近藤に任せてゐた時よりも何かよくなつたことがあるの。却つてわるくなつた分でも善くなりはしないのでせう。さうですとも、私たちは歸つて來ていゝ事なんてこれつぽつちもありはしない。雇人たちは私が田舍のことを知らないからつて馬鹿にして、自分たちで勝手な眞似をするし、村の者は村の者で、あなたの穩やかな氣質につけ込んで失敬なことばかりしてゐるのぢやありませんか。

塚本　それは仕方がない、一つは先刻云つた通り時勢だ。一つは僕が無能で德がないからだ。

龍子　あなたがそれだから餘計向うではつけ上るのだわ。あの人たちの狡いのや汚い根性が、時勢のせゐばかりにされるものですか。――でも、どちらだつて構やしない。私はそんなことを議論する積りはないのだから。ただ私の堪らないのは、そんな中で自分が暮さなけりやならないつてことだわ。今も喬さんにさんざこぼしたとこだけれど、考へれば考へるほど厭で〳〵、もう一日だつて我慢出來ないわ。ねえ、また東京に參りませうよ。――喬さん、あんたも勸めて頂戴。私を可哀さうだと思つて頂戴。

喬　――

塚本　心配し給ふな、喬君、この人は斯うなるとまるで赤ん坊なのだから。――今更そんなことが出來るか出來ないか、考へて見れば分るぢやないか。

龍子　出來ますとも。あなたがたつた一つ決心すれば、明日にだつて出來ることですわ。

塚本　何を決心するのだ。

龍子　皆んな捨てて仕舞ふのよ。持つてゐるものを皆んな。山も田地も斯んな家屋敷も何もかも。

塚本　――

龍子　あなたは二言目には自分の物だか銀行の物だか分らないつてこぼしてゐながら、そんな田地や山に何の未練があつて。屋敷だつてさうですわ。二十近くもあつて腐れかけてゐる部屋や、幾つあつても皆んな空つぽの藏を、どう云ふ譯で大事に保存して置かなけりやならないの。思ひ切つて投げ出して仕舞へばそれで私たちは自由になれるのですもの。あなたは今一度學校へ勤めたつていゝわ。さうなれば私どんなにでも質素に暮らして見せてよ。女中なんか要らない、私ひとりで働くわ。えゝ、働きますとも。斯んなところで斯んな厭な思ひをして暮らすことを思へば、何んだつてしてよ。――本統に一旦その氣にさへなりや、明るい、暢々した、思ひ通りの生活が待つてゐるのに、いつまでも此處に愚圖ついて、百姓たちを相手に怒つたり爭つたりして暮らすなんて馬鹿々々しいわ。ね。ですから決心して頂戴。今一度東京に出ると

約束して頂戴。――丁度いゝから喬さんに證人になつて貰ふわ。

塚本　お前の考へるやうに、さう物事が簡單に片附く位なら、僕は今日まで苦しみはしない。

龍子　さう。――ぢや矢張し駄目なのね。――私がこれまで云つたつて、私の云ふことより、あなたには田地や山や家屋敷の方が大事なのね。不斷いつぱし偉さうなことを云ひながら、自分で働いて食べるよりどんな不快な思ひをしても懷手をして樂をしてゐたいのだわ。地主樣の地位を捨てるのが惜しいのだわ。昔通りにあんな百姓たちを支配して威張つてゐたいのだわ。どの田地の小作料は安いの高いの、もつと負けろの負けないの、俵の目方が缺れたの缺れないの、狡いの狡くないの、胡魔化すの胡魔化さないのつて、そんなことで爭つたり喧嘩したり憎み合つたりして、あなたの所謂吹き溜りで一生埋もつてゐる積りなのだわ。

牧田　龍子さん、そりや餘り非道すぎる。――

龍子　何故。いゝえ、本統のことですもの。宅はそれが好きなんですもの。ですから好きな通りしてりやいゝ。――たゞ私まで御相伴は御免だわ。そんな吹き溜りの底なんかにどうしたら生きてゐられるものか。考へただけでも息が詰まりさうだ。――あゝ、誰でもいい、私を引つ張り出して頂戴。此處から引つ張り出して、――引つ張り出して。――（卓に凭つて慟哭する）

（幕）

第二幕

牧田の部屋になつてゐる離室。すべての造りが舊家らしいがつしりした立派さを持つてゐるが、壁の一部分は剝げ、唐紙は煤けた儘である。前面と上手の二方が庭。第一幕の舞臺面に現はれた洋館を、下手の廊下の端に見るやうになつた位置である。部屋の中には牧田が既にセルを着て、机代りに使つてゐる紫檀の卓を前にして坐り、周りに胴亂や新聞紙や書用紙を擴げて採集した植物の標本を作つてゐる。第一幕から二週間過ぎた日の同じく午後。塚本が下手の廊下から入つて來る。これも黑つぽいセル。

塚本　勉强なら邪魔だな。

牧田　なに構はないんです。この間から押し放しにしてたから、ちよつと纏めて見ただけで。（急いで散らかつたものを片附けながら）龍子さん、今日は如何ですか。先刻採集の歸りに例の並樹のところで町のドクトルの自動車と出逢つたから、またうちに來たのかと思つて喫驚しましたよ。

塚本　どこか奥の村の病家へ行かれたらしい。――あの院長が自動車を乘り廻すやうになつてから、我々田舍に住む者はそれでも大助かりだ。去年の冬龍子が病かつた時分には、まだ町の方も自動車が今程でなく、一々汽車で往診して貰ふ始末で閒だるつこくて弱つたものだが。

牧田　併し幾ら便利になつたからつて、あんな自動車にさう度々來て貰ふやうなことがあつては困りますねえ。僕に云はせれば、龍子さんは半分は自分で求めて病氣してゐるんだ。今度の病氣だつて此間のヒステリが原因なんだから。――本統なら僕は從弟としてあの人を辯護しなきやならないのだけれど、あれでは辯護の仕樣がない。御承知の通り大勢の兄姉の末つ子で、亡くなつた伯父伯母がこの上なく甘やかしたので、龍子さんには子供

の時分からあんな我儘な激しいところがあつたのです。その癖、正直な、曲つたことの嫌ひな美しい性質なんだけれども。――要するに我儘です。それだけは辯護の餘地がありません。僕はあなたがお氣の毒だ。

塚本　それは寧ろ僕から皆に云ふべきだと思つてゐる。偶然僕に出逢つて斯んなところへ引つ張つて來られたお蔭で、まつ直ぐにY――溫泉に行つてゐれば何んにも知らずにすんだごた／＼の中に捲き込まれたのだから。

牧田　いや、僕はあなたに此處に連れて來られたのを色んな意味で感謝してゐるのです。いいものも隨分採集出來たし、それに靜かで、涼しくて自然は立派だし、あなた方は皆んな親切にして吳れるし、すつかりいゝ氣持で。斯んな樂しい夏を送つたのは生れて初めてだと云つてもいゝ位です。實際斯んな美しい田舍を少し位面倒な人事問題があるからつて、あま頭なして歸る龍子さんの氣が知れない。あの人は何處までも都會人で、田園の生活と云ふものにてんで興味がないのですね。それはまあ已むを得ないとして、自分の嫌ひなものは悉く、無價値だと信じ込んでゐるのは非道い。――女は一般にさう云ふ傾向らしいけれども、兎に角我儘な偏見だ。

塚本　併しね、喬君、君の意見は要するに二週間のお客様としての意見で、實際この土地に住むとなれば、君だつて龍子に近い考へ方に變つて行くに相違ないよ。

牧田　――それならば、あなたは根本に於て龍子さんの考へを否定しないのですか。

塚本　さう云つてもよい。龍子としてあゝ考へるのは無理もないと思つてゐる。――それは君が云ふまでもなく土地は立派で、關東や關西地方に比べれば十分ゆとりがあるし、景色も雄大で美しい。この中で金と米と時間に不自由のない大地主樣で、周りの自然に釣り合つた悠々とした氣持で暮らすことが出來たら確かに惡い生活ぢやない。現に僕の家なぞでも代々それで暮らして來たのだらうが、併しそれは文字通り昔話で、さう云ふ地主の生活はもう存在してゐられなくなつたのだ。丁度封建制度の崩壞で、大名や武士の階級が六十年前に滅びてしまつたやうに、滅びようとしてゐる。嚴密に云へば僕の親達の代位で精神的には滅びてしまつて、今はたゞ制度の形骸が殘つてゐるに過ぎない。それも外から滅ぼされつゝあると云ふよりは内から漸次崩壞してゐるのだ。喬君、この意味が君に分るかい。

牧田　――

塚本　僕自身を例に取つて說明すればよく分るだらう。詰まり僕が、さあ何んと云ふかな、一種の傳統的な地主魂を失ひつゝあることだ。昔の地主たちのやうに頑張れないことだ。おれの土地の米を喰はしてやるのだと云ふ氣位になれないことだ。小作人たちをものを云ふ動物だと思へないことだ。彼等の額の汗が無視されないことだ。彼等は炎天の田の中で泥だらけになつて働いてゐる時に、自分たちは懐手をして家の中に籠つてゐられる、而も收穫となれば四分六分だ。この四分の權利が果して正しいかどうかに就いて疑惑を持ちはじめたことだ。――僕はこの前假に枕木のことを話したが、この幽靈は外から我々の戶を叩いてゐるばかりでなく、いつの間にか我々の心の中に忍び込んで内からも我々を脅かしてゐる。寧ろその方がこたへ方が深刻だ。

牧田　あなたの氣持はよく分ります。またあなたのやうな性格にあなたのやうな境遇にあれば、自然さう云ふ風に考へるのも無理とは

思はないが、併しそれでは餘りに苛し過ぎやしないかなあ。もつと吞氣な考へ方をしてもこの世界では十分許さるべきだと信じますが。——尤も僕は社會主義じみた書物なんか一冊も讀んだことはなし、從つて委しいことは元より分らないのだが、高等學校の寄宿舍にゐた頃、大學を出たら大いに社會運動をやるのだと云ふ男が同室に居て、議論だけは毎晩聞かされたものです。その男は僕が檢微鏡を覗いたり、日曜日になると胴亂をかついで出掛けたりするのを、時代に無感覺な閑人だと攻擊するので、僕はその度に云つてやりました。——僕の畑のことで話して見ても、この地上にはあらゆる種類の植物があらゆる生態を持つて生存することを許されてゐる。同時に彼等は悉く薔薇ぢやない、單に綠色の紐に過ぎない隱花植物もあれば、踏みにじられるためにのみ存してゐるやうな菌類や苔類もある。而もそれ等の菌類や苔類は決して美しい薔薇でないために、同じく薔薇は菌類や苔類でないために、その特殊性に依つて各自の生存價値が發揮されるのぢやないか。それで面白いのだ。人類のことだつて恐らく同じだ。然るに君の議論は地上の植物を悉く薔薇にしなければならない、寧ろ薔薇なる權利を持つてゐると主張するやうなものだと。——勿論どちらも高等學校の寄宿舍臭い無責任な議論に過ぎないのですが、併し僕は植物の一研究者としてこの根本の理論だけは今でも疑ひませんよ。——すべてが薔薇ではありえないと云ふことは。

塚本　それは或はさうかも知れない。併し當面の問題はすべてが果して薔薇であり得るかあり得ないかではなく、即ち實現の成否ではなく、苔自身が薔薇になり得る權利があると意識し出したことだ。云ひ換へれば薔薇が自分が薔薇であつて、彼が何故苔であるかを考へ始めたことだ。——これが僕を氣の弱い、無能な、意氣地のない旦那にして仕舞つた。その癖彼等と仲間になつて自分で鋤鍬を取る勇氣もなければ、體力もない。それどころぢやない、彼等のつけ上つた小生意氣な態度や、昔を忘れた橫着な言動が一々癪に障る。この野郎と思ふ。親爺たちなら斯んな時には毆りつけてやつたのだと思ふ。併し僕には決して毆れない。却つて自分で讓歩して彼等の蟲のいゝ要求を滿足させるやうな結果になる。それでゐて毆つた親爺たちの三分一も偉い旦那たちも、結局、地主樣だとしか思はれる譯ぢやないのだからね。

牧田　さう云へば、あの並樹の問題はその後どうなつたのですか。

塚本　僕は遠慮なく伐つて呉れと云つてゐるのだ。

牧田　併し惜しいなあ、あれまでになつてゐるのを伐るのは。この邊でこそ椎の樹は珍しくはないが東京なんかでは非常に稀ですからね。植物園に一本と、その外ではＮ侯爵の庭に一本、あの長い藻のやうな枝を垂らして立つてゐるのを或る機會に見たことがあつたが、樹はさう大きくはなかつた。それが此處のは並樹で、一町から續いてゐるのだから素張らしいものですがね。

塚本　どうも仕方がない。僕に金がないのだから。——君に話したか知らないが、村ではあの並樹の代償として僕から三千圓取らうとしてゐる。詰まり三千圓出せば伐らないで置いてやると云ふ譯だ。

牧田　それは彼等の態度も氣持よくはないが、併しそれであの立派なあなた自身に取つても思ひ出の深い並樹が助かるとすれば、三千圓は高價過ぎないのぢやないですか。僕なら買

ひますね。それが僕の場合で僕に金があると
すれば。

塚本　金があるとすれば――さうだ、問題はそれだけだ。ところで僕は最初云つた通り金がない。三千圓は愚かその十分の一、百分の一の金を出す餘裕もない。いや、五圓札一枚使ふのだつて滅多な使ひ方は出來ない位、僕は貧乏なのだ。

牧田　――

塚本　何故そんな顔をして僕を見るのだ。喬君、君は僕の貧乏を本統にしないのかい。

牧田　龍子さんもよくあなたと同じやうに貧乏だと云つてこぼしてますね。併しあなた方が二人で揃つて幾ら貧乏だ貧乏だと云つたところで僕は信じませんよ。要するに程度問題なんだから。――古びたつてこれだけの家に住んで、何千俵と小作米の上つて來る田地を目の下に見下して、あれだけ召使達を使つて、絹夜具にくるまつて眠つて、それで貧乏話をするのは矛盾の最も甚だしいものだと云ひ度くなる。

塚本　尤もだ。而も事實は怖ろしい貧乏なのだ。正直な比較が、村の中以下の農家の方が小作人等より內福な位だと云ふことが本統に分つたら君も驚くだらう。

牧田　ぢや僕に露骨な質問を許して下さい。あなたの程度の地主階級の收入は一體どの位なものなんですか。僕には見當がつかないから從つてあなたの貧乏だと云ふ意味が飲み込めないのです。

塚本　昔に比べれば四分の一もないのだが、それでも小作米から山林の雜收入を合せれば年に四萬圓位の金はまだ入つて來る。

牧田　――年收四萬の金があつて、それで貧乏と云ふなら――

塚本　待ち給へ。計算はまだすまない。――勿論それだけの金がそつくり僕のポケットに納まつて仕舞ふのなら申分はないさ。併しさうは行かない。僕はその中から租税と銀行利子だけで、三萬六千圓から拂はせられる。

牧田　あなたの話は僕には分らなくなるばかりだ。

塚本　併し僕の家の借金なんか筋がいゝからこの程度ですんでゐるのだが、同じ地主仲間で僕の知つてゐる男なんか銀行以外の借金の利子を毎月二千圓近くも拂つてゐるよ。皆んなさう云ふ狀態なのだ。この邊の古い家と云ふ家が。――餘つ程惡賢く立ち廻つてるか、さもなけりや、昔から蟲のやうに吝嗇にやつて來た家でもなけりや金なんかありやしない。喬君、君にも僕が並樹の買へない理由がやつと分つたらう。三千圓と云へば、僕の手に辛うじて取り留める一年の生活費に近いのだからね。その家に住んで、內實は兎に角表面は代々の村の旦那で、何か金のことになれば一番に絞られる、昔から家についてゐる交際がある。――とてもそれ位の金でやつて行けやしない。毎年足りないから足りないだ。而して段々マイナスが殖えて苦しくなつて行く。――

牧田　若しあなたの云ふやうな事情が本統だとすれば――いや、僕はもう疑はないんですが、併し何んとかならないものですかね。旨く整理するとかどうとかして。

塚本　整理する。――併しどう整理しようと云ふのだ。そりや買手があれば賣つてもいゝさ。それで借金を返して餘つた金で氣の利いた株でも買ふ。斯んな怪物のやうな古ぼけた大きな家の代りに、明るい住み心地のいゝ家を建てる。さうなりや雇人も一人か二人で澤山だ。で、花でも植ゑたり、書物でも讀んだりして暮らせりや理想だが、併し誰が買つ

て呉れるだらう。そんな纏まつた――百萬近い金の要る買物を。――先刻も話した通り最も可能性のある仲間の地主連は皆んな僕と同様に困つてゐるんだし、町の金持連に今更そんな古風な買物に手を出すものはなし。

牧田　――僕は初めてあなたの田舍を檢微鏡で見せられたのですね。

塚本　――龍子に云はせりや、自分は二年間毎日それを覗かされたと云ふだらう。それで癇癪を起して、檢微鏡を放り出すやうに、あの女は何もかも僕に放り出せと云ふのだが。――

牧田　あの時の調子には僕も驚きましたよ。まるで無茶なんだから。――尤も龍子さんにしても、半分夢中で腹立ち紛れに云つたんだとは思ふけれども。

塚本　併し本統を云ふと、僕の現在の苦しい境遇を脱するにはそれより外の方法はないのだがね。龍子の云ふ通り投げ出して仕舞ふ。一切のあらゆるものを銀行の處分に委せる。而して無一物になつてこの田舍から出て行く。――さうすりや小作爭議もなければ、村の者との不快な感情の葛藤もなく、殊に租税の納入期の度にみじめな姿で銀行に泣きつきに行つたり、利子の拂込で借金の上に借金を重ねたりする心配が悉く消滅する。初めて人間並に自由になるのだ。――それで龍子もあの時云つたやうな謙虚な氣持で新たに生きて行く決心さへつけば、僕等は今一度意義のある立派な生活が始められる。百姓たちから横取りした米を食はないですむだけでも、慥かに非常な愉快だ。――喬君、僕が斯んな生活を夢想しなかつたと思ふかい。龍子なんかに云はれるまでもなく、僕はこの二年間に五十遍位もそれは考へたことだ。而も僕には實行する勇氣がない。

牧田　誰だつてその衝に當れば同じでせう。そんな大問題が、龍子さんの考へるやうにさう無造作に決心される譯のものぢやないから。

塚本　さうだ、あの女は斯んな場合になると單純以上で、反對に僕は複雜以上だ。――第一僕はあれだけの土地や山林を、原價の五分の一にも當らない値で擔保流れにして仕舞ふのが惜しい。いや、斯んな云ひ方ぢや僕の氣持は云ひ現はせない。それは、僕の實行を妨げる重要な原因は、もつと根本的な、寧ろ運命的な心理だ。僕はあの先祖傳來の土地や田地をあらゆる爭ひと不快の根源として呪つてゐながら、一方ではそれに對して激しい愛着を感じてゐる。而も、これは東京に出てゐた時分までは意識しなかつた感情で、田舍に歸つて二年間この家で暮らしてゐる間に、自然に僕の胸に浸みついた所有慾だ。僕は先刻君に買ひ手がないから賣り度くも賣れないのだと云つたが、それも確かに事實に相違ないが、どうかして偶然有利な買ひ手が現はれたとしても、僕は直ぐ思ひ切つて賣つて仕舞へるかどうか自信がない。似たやうな感情はこの腐れかけた家に對しても空つぽの藏に對しても、やくざな召使たちに對してもある。それ以上驚くべきはあの小作人たちに對してさへある。

牧田　さうだとすれば、あなたの所謂地主魂は容易に滅びて仕舞へない譯ですね。あなたの感ずる愛着は結局その氣持に過ぎるのだと僕は思ふ。

塚本　さう云はれても仕方がないだらう。――全くそれは自分ながら不思議な感情だ。この古い家に根を下して、この田舍を世界にして百姓たちを相手に一生修羅を燃やして過すことを考へると怖ろしくなる癖に、この家と

この生活が實に自分にぴつたりしてゐる感じを拒めない。着ふるして、臭くなつて、氣にすれば一瞬間も身につけてゐられないやうで、それで我慢すれば何より着心地のよい古るシャツだ。自分のエレメントに附着してゐる氣持だ。――斯うして僕は年一年と貧乏になり、意氣地がなくなり、これ等の柱や壁が古い屋根の下で歪んだり裂けたりしてゐるやうに、家と云ふ振り落されない重味のために壓し潰されて仕舞ひさうな氣がする。

牧田　龍子さんの前ではあなたも神經を使ひ過ぎたんですね。さう云ふ風な行へ方をするのは。――斷らない、空氣と日光の中にゐりや僕ならどんな心配だつて傍から直ぐ綺麗に消えて仕舞ひさうに思へますよ。實際この頃の空の美しさは素敵だ。丁度東京の十一月上旬と云ふ感じですね。飽くまでまつ青で、澄み渡つて、それで不純の秋の天ほど冴え切らないで、どこか豐富な夏らしい匂ひが殘つてゐるのだから申分がない。僕は畫架をかついで出る度に、何んと云ふ美しさだ、と思はずに留まることがよくありますよ。而して一しきり探しものすますと、後の岡の芝草の上で休むのです。丁度あちらの芳子さんの部屋を見下すやうになつた崖のところで――

塚本　大きな胡桃の樹が二本並んでるところだらう。

牧田　さうです、あの胡桃の傍です。――これで僕は東京にゐるとタバコなんか喫み度いとも思つたことはないのですが、彼處で、胡桃の樹に凭つかゝつて、芝に足を投げ出しながら休んでゐると、奇妙に一本欲しいやうな氣がして――（立つて遊び棚から吸ひさしの袋を持つて來る）これは僕が生れて多分三度目に買つた煙草なんです。――彼處でこれをつけて、煙の中からあの美しい空を凝と眺めてゐると恍惚するほど幸福な氣持になるのです。――どうです。

塚本　僕は昨年久しぶりに雪の中で暮らして咽喉を惡くしたから、成るたけ喫らないやうにしたのだが（一本吸ひつける）――さう云へば君は來た時とは別人のやうないゝ血色になつたよ。毎日歩き廻るのが矢張りいゝのだね。

牧田　ことに顔と手頸が斯う云ふ色になつたので、兵隊のやうだと芳子さんは笑ふのです。――さう云へば、芳子さんと此の煙草に就いちや面白いことがありましたよ。僕は芳子さんには上の山の休み場所を秘密にしておいたのに、二三日前當てられつちやつたんです。何んでも婆やと二人してすぐり摘みかなんかに出掛けたんですね。すると芝の中へ吸殼があつたもんだから――

塚本　あいつもね、考へると可哀想だから何んとかしてやらなきやならないのだが。――打ち明けたところ、この田舎で今の狀態ぢや、結婚させようにも適當な家と相手が殆んどないと云つていゝのだからね。と云つて今少し上の學校をやらせようとするには、先刻話した通りの事情で僕の手許が苦しい。それに當人がどうしてもやり度い、と云へば、僕だつて一人きりの妹のことだ、どんな工面でもしてやるが。併し本來そんなたちぢやなささうだから、矢張り家庭を持たせてやり度い。――加納家との問題が君にないのなら、貰つて呉れないかつて云つたかも知れないよ。

牧田　――

塚本　併しそれはもう初めから諦めてゐるのだが、その代りお願ひがある。どうかあいつの問題を考慮に入れておいて呉れ給へ。いづれ龍子からも君のおつ母さんへ頼ませる積りだが、君の友人あたりでよささうなのがあつたら世話をして貰ひ度い。性質の惡くない男

なら誰でもいゝ。然は云はないから。――僕の口から云ふのは變だが、君も見る通りあいつは素直な氣の善い奴だから、どうかして幸福にしてやり度いのだ。僕はこの儘この家と共に朽ちるかも知れないが、あいつだけは明るい世界に出して仕合せに暮らさせてやり度い。――

近藤が下手の廊下から入つて來る。

近藤　旦那、失禮ですが。

塚本　何だ、云へ。構はない。

近藤　この間の約手のことで、町からやつて參つたのですが。

塚本　今日は金はないと云へばいゝぢやないか。

近藤　中々澁とい奴ですから。

塚本　兎に角一兩日中におれが出向いて型をつけるから、それまで待つやうにさせて置け。

近藤　では何んとか申して見ませう。――それから先刻驛長に逢ひましたら、この輕便鐵道の敷設十周年記念が丁度來春の三月になりますさうで――

塚本　その話なら分つてゐる。

近藤　左樣でございますか。

近藤去る。

塚本　この通りだ　裔君、どうかすると約手まで不渡になりかねない僕に、鐵道十周年記念のお祭騷ぎをやらせようとする。――この輕便と云ふのは亡くなつた親爺が敷かせたやうなものだから、僕は借金してもそれを記念する義務があると奴等は信じてるのかも知れないよ。

芳子が入つて來る。

芳子　お兄さん、こちら。

塚本　ゐるよ。

芳子　お姉さんがちよつといらして下さいましつて。

塚本　熱は。

芳子　昨夜からもうずつと平熱ですわ。

塚本去る。

牧田　お姉さんが起きつちまはなけりや、芳子さんが大變だ。

芳子　私なんにもしやしないんですもの。――お姉さんも、でも、今日は起きますつて――さうそ、忘れてゐましたわ、花が採つて來てあつたのに。持つて來ませうね。昨日の洗濯ものも乾きました。

芳子去る。

牧田　熱情を抑制し得ぬ者の如く、庭に下りて歩きながら　すべてが奇蹟だ。二週間前あの汽車で塚本さんと偶然乘り合すことがなかつたなら――一緒に誘はれてこの田舍に寄り道する氣にならなかつたなら――僕はあのひとの存在さへ知らないですんだかも分らない。實際東京をたつまで、斯んな感情が斯んな思ひも寄らない場所で突然自分の中に起らうなんて夢にでも考へたらうか。決して――決して。――それにしても先刻あのひとの結婚の話が出た時には面喰つた。僕は今少しで皆んな打ち明けて仕舞ふところだつた。また打ち明けて仕舞ひさへすれば即座に悅んで許されたのだつた。――併し僕はあのひとの大事な心臟を人傳に貰ひ度くはなかつた。貰ふならぢかに手渡しに貰ひ度い。それにあのひとが本統にどんな氣持を僕に對して抱いてゐるかは、塚本さんにも分つてゐる筈はないのだから。――若し何んとも思つてはゐないのだとしたら――あの優しさや親切は、あのひとの生れつき美しい性格の現はれ以上に意味がないのだとしたら――兄の承諾を先に得るのはそれを楯にあのひとの愛を強奪しようとするに等しい。――

芳子が桔梗の花と、外に一つの新聞紙の包みを載せた盆と共に疊んだ浴衣を持つて歸つて來る。

芳子　あら、お庭でしたの。――このお寢卷、糊が利きすぎて召し難いかも知れませんわ。

牧田　有り難う。（芳子が床の間の花瓶を廊下へ持ち出して桔梗を生けるのを眺めながら）あなたが採つて來たんですか。

芳子　えゝ。

牧田　婆やと。

芳子　いゝえ。

牧田　ひとり。――僕も行つて見度かつたな。

芳子　――

牧田　その新聞紙は何です。

芳子　大變なもの――屹度お笑ひになるわ。

牧田　どれ。（新聞紙の中から色んな植物が現はれたのを見て驚きながら）へえ、斯んなものをどうしようつて云ふんです。

芳子　あなたの眞似して押して見ようかともつて序に採つて來ましたの。これは。

牧田　つばめおもと。

芳子　おや、こちらは。

牧田　それは破れ傘と云ふ奴です。傘の破れた樣に似てるから。

芳子　さう云へば似てますわね。

牧田　芳子さん、あなたは斯んな採集なんかに興味があるんですか。

芳子　興味つてほどぢやないんですけれど、あなたがあゝしてお採りになつたものをきちんと整理していらつしやるのを見ると面白さうですもの。だつて私なんかしよつちう其處いらで見てる癖に、葉つぱや草で、本統の名前を知つてゐるのは殆んどないと云つていゝ位ですから。今にこれが押せたら、あなたの眞似して名前や採つた日を書き込んで、記念のために取つて置きますわ。

牧田　どういふ記念に。

芳子　――

牧田　それを云つて聞かして下さい。

芳子　――あなたに名前を教へて頂いた記念に。――

牧田　それだけなんですね。

芳子　――えゝ。

牧田　――あなたは東京へ出度いと思つたことはありませんか。芳子さん。

芳子　何故。

牧田　例へば何か今少し勉強するとか、――でなくとも――

芳子　本統は私東京へ出られたら、たつた一つ勉強し度いと思ふことがありますわ。

牧田　何がやり度いのです。

芳子　保姆の養成所へ入り度いと思ひますの。

牧田　――保姆の養成所へ。――幼稚園の先生にならうと云ふのですね。

芳子　いゝえ。

牧田　ぢや、どうして保姆の學校なんか志望するのですか。

芳子　皆んな話さなきや分りませんわ。云はゞ私の夢なんですから。――若し出來たら私この村に託兒所見度いなものを拵へて、百姓たちの子供を預つてやり度いと思ひますの。學校に出る位になればまあいゝのですけれど、百姓の小さい子供たちはそりや可哀想なんですから。――手のない家だと、赤ん坊なんか朝お乳を飲ませた後は、ほら、あのお飯櫃入れを御存じ。

牧田　圓い、藁で拵へた奴でせう。

芳子　あの中に入れて、這ひ出せないやうに蒲團やぼろつ切れで詰めをして、家ぢう田畝へ行つて仕舞ふのでせう。ですから晝休みにでも母親がお乳を飲ませに歸るまでは幾ら泣いてもひもじくなつても、誰一人見てやるもん

はないのですね。

牧田　ぢや、一緒に行きませうか、東京へ。——僕から話せばお兄さんは屹度承知するに極まつてゐます。

芳子　だつて、あなたはY——溫泉へいらつしやるのでせう。

牧田　いや、行きません。止めにしたのです。

芳子　まあ。——どうして。

牧田　それよりも僕と東京へ行くことを決心して下さい。而してどうしてもその美しい計畫を實現させ度いと思ふなら養成所もいゝでせう。如何にもあなたらしい優しい夢だ。——併し若し僕のためにそれを捨てることが出來たら、どうぞ捨てて下さい。

芳子　——

牧田　斯うなれば何もかも云つて仕舞ひませう。僕は東京を立つまでは、Y——溫泉に行く積りだつたのです。寧ろ行かなけりやならない事情になつてゐたのです。而して行きさへすれば、一二年前から話のあつた加納家との婚約が纏まる筈だつたのです。云はゞ、僕はこの暑中休暇をあの家族と一緒に過すことに依つて、その問題に最後の判をつくところだつたのです。——正直に云ひますよ。僕は相手の娘は非常に好きでもなかつた代り、嫌ひでもなかつた。今一歩深く僕の腹の底を打ち割れば、この婚約が自分の將來に有利な條件になると云ふ意識も確かに僕を左右したのですが、併し此處に來て一週間たゝないうちに僕の決心はすつかり別なものになつたのです。

芳子　——

牧田　先刻も僕は考へて不思議な結果に驚いたのだけれども、あの汽車でお兄さんに出逢つたこと、誘はれて偶然此處を訪ねたこと、而してあなたを見たこと——それが東京を立つまでは夢にも知らなかつた僕の新しい運命に僕を捲き込んだのです。さうだ、運命といふより外に言葉はない。二週間前僕があの夜行列車に乘らうとする氣を起した時から、運命は塚本さんと僕を出會させてあなたのとこへ連れて行くことを計畫してゐたのです。——芳子さん、僕と一緒に東京に行くのなら屹度塚本さんが許して呉れると云つた、僕の先刻の意味が分りますか。

芳子　——兄はあなたが好きで、あなたを信じ切つてゐるのですから。

牧田　ぢや、その愛と信用を塚本さんは具體的に示すことを望んだゞけだ、加納家との問題さへなかつたら、あなたを愛して欲しいのだ、と先刻云はれたのです。

芳子　——

牧田　僕はもう少しで何もかも云つて仕舞ふところだつた。加納家のことは最早や僕の氣持には痕跡も留めてゐないと云ふことだけ云つても、塚本さんを安心させられたゞけれども、我慢して默つてゐた。その前に僕はあなたに逢つて——

芳子　いゝえ、——

牧田　——

芳子　溫泉へいらして下さい。

牧田　——芳子さん——

芳子　いらして下さい。

牧田　何故泣くのです。若し僕を何んとも思つてゐないのなら——

芳子　いゝえ、それ位なら——それ位なら私なにも斯んなに——

牧田　ぢや、何があなたの承諾を妨げるのですか。云つて下さい。これ以上僕を苦しめないで下さい。

芳子　私はたゞ兄が可哀想でならないのですわ。

牧田　それはまた如何してでせう。お兄さんは僕たちのことが極まれば、誰よりも悦んで呉れる筈ぢやありませんか。

芳子　元より悦んで呉れますわ。本統にどんなに悦ぶか知れませんわ。私だつて――餘り仕合せ過ぎて夢見たいなんですけれど。――喬さん。

牧田　――

芳子　私が斯んなことを考へてゐるのを非道いと思はないで下さいね。私はお姉さんがいつまでもこの田舎にゐて呉れるやうにはどうしても思へませんの。何んだか東京に歸つて仕舞ひさうな氣がしてなりませんわ。若しそんなことになれば、この古い家に兄は獨りぼつちになるのですもの。誰も親身に世話をする者もなければ、話相手もなく、それに彼のことだつて段々厭なことがふえて來る中で、どんなに淋しく孤獨に暮らすでせう。それを思ふと、私まで兄を見捨ててこの田舎を出る氣にはどうしてもなれませんの。

牧田　併しそれはあなたの想像に過ぎないのだから――

芳子　いゝえ、自分の想像だけではすみませんわ、屹度現實に表つて悲しい目を見ますわ。――私は小さい時母に別れてあの昔風な婆やに育てられたせゐですか、物事をいつもさう云ふ風に考へる癖があつてそれがまた自分で怖ろしい位當りますの。何か悲しいことがありさうだと思ふと、屹度悲しいことがありますわ。反對に嬉しいことがありさうだと思ふと、また屹度嬉しいことがありますわ。――二週間前あなたがいらした日にもはつきりそれを感じましたの。何故と云ふことなしにあの日は朝から樂しみでしたの。何か思ひがけないいゝ事がありさうでなりませんでした。さうしたら兄とあの坂道を――

牧田　それでゐてあなたは二人の――若しさう云つてよければ――新しい幸福を育てようとはしないのですか。お兄さんのためなら僕をどんな目に逢はせてもいゝのですね。

芳子　堪忍して下さい。

牧田　殊に龍子さんが果してこの家を出るかどうか分りもしないのに、あなたが今から餘計な心配をする必要がどうしてあるだらう。皆んな馬鹿げた話だ。そんな下らない妄想の爲めに、運命に惠まれた幸福を逃がすことを、芳子さん、あなたは怖れないのですか。――お願ひだから今一度――

芳子　もう仰しやらないで。――この上私に切ない思ひをさせまいとお思ひになるなら、何んにも仰しやらないで頂戴。而して――初めの豫定通り温泉へいらして頂戴。

牧田　何んですつて。

芳子　あなたは矢張りさうなさらなけりやいけないのですわ。それで後々までお仕合せになれるのですもの。――私のために皆んなの羨むやうな立派な運をお捨てにならないで頂戴。私は――あなたにそれだけ思つて頂いたのでも勿體ない位なのですから。――この思ひ出を大事にしてあなた方のお仕合せを一生祈つてをりますわ。

牧田　あなたのその言葉が、僕に對してどんな侮辱だか分つたら――

芳子　――そんな怖い顏をしないで。――

牧田　僕はあなたが憎らしい。自烈度い。可愛い――（發作的に、緣側に並んで掛けてゐた彼女を抱く）

龍子　（奥の方で）よつちやん。――

芳子　（驚いて牧田から逃れながら）はい。

龍子　よつちやん。――よつちやんつてば。――どこ。――

芳子　はーい。

芳子急いで去る。牧田は縁側を離れて庭の一本の松の樹の根方に部屋を後にし兩手で頭を抑へて蹲む。舞臺三分間その儘。下手の廊下から龍子が入つて來る。右手に婦人物らしい白い洋封筒の手紙を持つてゐる。顏色の蒼白は一幕目よりも著しくなつてゐるが、病後の割には動作は敏活である。それが却つて病的に見える。

龍子　おや——（松の側の牧田をやつと見つけたやうに）そんな處で何をしてゐるの、喬さん。をかしな人。

牧田　もういゝんですか。起きても。（この言葉と共に立ち上りながら）無理をするとぶり返しますよ。

龍子　大丈夫。私本統は病氣でもなんでもないんですもの。それだのに家ぢう大騒ぎして。——自動車で町のお醫者まで呼んだりして。

牧田　そりや非道いや、龍子さん。熱が四十度近くもあつて、しつきりなしに痙攣を起したり、囈語を云つたりしたあなたが、病氣でないなんてどうしたら云へるんです。殊に皆んなのあれだけ親切な介抱をそんな風に云ふなんて、罰が當る。

龍子　さうね、それだけは惡かつたわ。言葉が過ぎたのだわ。お腹の中ぢやこれでも私ずゐぶん有り難いとは思つてゐるのよ。宅でも、よつちやんでも、あんたの見た通りなんですもの。——でも本統を云へばもつと打つちやつて置いて呉れゝば猶有り難いんだわ。何んにも構はないで、凝と一週間も默つて寢せておいて呉れりや、私の病氣なんかひとりでに治つちまふのだから。——でもそんな事もうどうだつていゝわ。まあお上んなさいよ。

牧田　何か用事なんですか。

龍子　東京の姉からこの手紙で、（部屋の中に卓を挾んで坐つた牧田に封筒の儘示しながら）あんたをいつまでも引き留めておいちやいけないつて云つて來たんです。私もそのことは氣になつてゐたんだから、明日にも出掛けることになさいね。——私もこの通り快くなつたんだし、あんただつて斯んな山の中にこの上ゐたつて仕方がないでせう。

牧田　——————

龍子　どうしたの、そんな顏して、默つて。——

牧田　僕は東京へ歸るのです。

龍子　——まあ、呆れた。温泉の方はどうする積りなの、それぢや。

牧田　あちらには行く必要はないのです。——多分加納の方ではもうゐないんだから。

龍子　私が寢込んだりしたのがわるかつたのね。でなきやあんたも今少し早く行けたのだから。——まつ直ぐ東京へ歸つたのかしら。

牧田　さうらしい。

龍子　何か便りでもあつて。

牧田　——

龍子　それぢやあんたも早く歸つた方がいゝわ。そして行違ひになつた譯をよく話すのだわね。——だけども、あんた、いつ此處を立つ積り、喬さん。

牧田　今夜すぐ立たうかと思ふ。何時の汽車がよかつたのかしら。

龍子　たしか、此處を九時過に出るのが本線の終列車に聯絡するのよ。

牧田　ぢや、それと極めた。

龍子　——喬さん。

牧田　——

龍子　私も歸るわ。

牧田　——たうとう、そんなことを云ひ出したんですね。——たうとう——

龍子　何んでもいゝから一緒に連れて行つて

頂戴。斯う見えても私はしんは疲れてやしないのだから、途中でまた不快くなつてあんたの厄介になるやうなことは、大丈夫なくつてよ。

牧田　僕はそんなことを問題にしてやしない。――併しまあ考へて御覧なさい、龍子さん。あんたが今度病氣したのだつて、僕が來た日に下らないヒステリを起して逆上したのが原因ぢやありませんか。それにまた僕が東京に歸ると云へば一緒に行かうなんて、そんなことを云ひ出された日にや、僕をきつかけにあらゆる悪いことが起るやうで、塚本さんに對して僕は申譯がない。少しは僕の立場も考へて下さい。――でなくとも、僕の一生の幸福はあんたに踏みにじられて仕舞つたんだ。

龍子　それはどう云ふ意味。――喬さん、加納さんの方が手違ひになつたこと。

牧田　そんな事ぢやない。

龍子　だけど、それ以外にあんたに不平を云はれることはない筈だわ。――それだつて私はあんたに何度も注意した積りよ。私の病氣なんか構はないで早く温泉へいらつしやいつて、――自分で勝手に愚圖ついてて、今になつて幸福を踏みにじられたもないもんだわ。

牧田　そんな事ぢやないつて云つてるぢやありませんか。

龍子　大丈夫よ、私東京に歸りさへすれば。――加納さんの奥さんと姉とは同級であんなに親密な間柄なのだから、どんな行違ひが出來たつて、私よく話して貰つてあげるわ。

牧田　澤山です。そんな餘計な世話を焼いて貰はなくたつて。――併しその話はよしませう。あんたには何んにも分りやしないのだ。

龍子　まあ。分らないのは喬さんの方ぢやありませんか。餘計な世話を焼いて貰ふまいなんて。――それ位なら幸福を踏みにじられたのつて、何んのつて不平を云つたり、怒つたりすることはないぢやないの。さうですとも。一體あんた何をさうぷり〳〵してゐるの、今日に限つて。

牧田　僕はあなたに怒つてるんだ。あなたの我儘に怒つてるんだ。自分一箇の感情のために皆んなを苦しめて、その上この家から飛び出さうなんて考へてゐるあなたに怒つてるんだ。

龍子　皆んなを苦しめて。――あんたはそれだけ考へて、私の方の苦しい氣持はてんで察しようともしないのね。斯んな田舎で私がどんな辛い不快な思ひして暮らしてゐるかつてことは、あんたにだつて分り切つてゐる筈ぢやありませんか。ようこそ今日まで我慢されたんだわ。――

牧田　ヒステリの繰り返しはよしませう。兎に角僕はあなたと一緒に東京に歸ることだけは御免です。斷じて。――歸るならあなたは勝手にひとりでお歸んなさい。

龍子　よござんすとも。結構ひとりで歸つて見せてよ。そんなこと云はれて誰が、一緒に行つて呉れたつて行つてあげやしない。――その代りあんたは明日にでもなさいよ、私は今夜立つのだから。

牧田　そんな亂暴な話はない。僕は初めから今夜立つことに極めてゐるんぢやありませんか。

龍子　だつて私が今夜にしたのだから、一緒が厭なら別な時にする外はないわ。

牧田　まるで氣狂ひだ。

龍子　――本統に私氣が狂ふのかも知れない。滅茶苦茶に淋しくつて、自烈たくつて、頭が苦つて、堪らなく悲しい。――

牧田　龍子さん。あなたはまだ病氣が快くな

らないんだ。この際今少し落着いて身體をよくする決心をしなけりや、取り返しのつかない結果になりますよ。それで旅行なんか思ひも依らない。——どうしても東京に歸つて見たけりや、もつと先きになつて、此方が雪になる時分避寒がてら行くことにしたつていゝぢやありませんか。僕は今はもう冷靜なんだから、あなたも眞面目に聞いて下さい。

龍子　有り難う。あんたがさう云つて呉れる氣持はよく分つてよ。でもね、喬さん、今度だけは私を留めないで頂戴。どうしても行つて見度いのだから。——行つて見なけりやならないことが出來たのだから。——

牧田　——

龍子　あんたに隱したつて仕方がないから皆んな話すわ。私が今夜どうしても行かうと決心したのは、二週間前あんたにこぼしたやうな氣持からだけぢやないのです。それだつて勿論消えやしない——消えるどころぢやない、もう我慢に我慢し拔いてゐるのだけれど、それと一緒に外の譯があるのです。——喬さん、あんたは岡村の久雄さんが朝鮮から歸つて、病氣で入院してゐるつてこと知らなかつた。

牧田　久雄さんが。——ちつとも知らなかつた。一體岡村の家は同じ親族でも妙に孤立してゐて、不斷どことも往來しないからそんな時いつでも分らないんだ。

龍子　そりやあの家が親類うちで一番貧乏なためだわ。——この姉の手紙だと、久雄さんは胸でも惡くしてゐるらしいのね。

牧田　向うでも可なり亂暴な生活をしてゐたやうな噂だつた。併し久雄君の病氣とあなたと何の關係があるのです。よしんば久雄君の病氣が輕くないにしたところで、云はゞ親戚の一人に過ぎない間柄で、あなたがわざわざ、而も今夜急に立つて見舞に行く必要はない筈ぢやありませんか。

龍子　さう考へるでせうね。あんたは何んにも知らないのだから。

牧田　——

龍子　喬さん、私は塚本の方から貰はれなかつたら、岡村に片附いてゐたかも知れないのよ。——假令塚本からの話があつたつて、あの時まだ丈夫にしていらした塚本のお父樣が貴族院議員でもなく、塚本家が大地主でもなかつたら、でなくとも、岡村の家に今少しお金があつて、親類の中でも幅の利く地位であつたら、私は今分塚本家に嫁つてゐなかつたでせうよ。

牧田　それに初耳だ。併しあなた自身の感情はどうだつたのです。それさへ確りしてゐれば、どうだつて自由になつた筈ぢやありませんか。

龍子　誰でもあんたのやうに云ふのね、斯う云ふ問題になると。——でも考へて御覽なさい。女學校を出たばかりで、夢と現實、見境もつかなけりや、どう生きて行かうと云ふ確かりした信念もない年頃の娘に、間違ひのない選擇がそんな場合つくと思つて。戀でもしてゐるのでない限り、決してはつきり極められるものぢやないわ——甘やかされた、氣苦勞のないお嬢さんに出來上つてゐればゐるほど、それは六ケしい註文ですよ。私にしたつて、どちらの方が好きだと云ふ氣持があつたのなら、例へば久雄さんを愛してでもゐたのなら、決して塚本に來やしない。どんなにだつて頑張つたわ。また私が厭だとさへ云へば、少し位の無理は家の人だつて通して呉れたに相違なかつたのだから。

牧田　そりや勿論だ。併しそれ位冷淡でゐられたのなら、今になつて——

龍子　何故そんなことを云ひ出した、と云ふのでせう。でもその時は冷淡と云ふよりは無頓着だつたと云ふ方がいゝのです。相手に無頓着であつたばかりでなく、自分の心の底に本統はどんな氣持が隱れてゐたかさへ分らなかつたのだわ。――たゞこれだけは忘れませんよ。丁度式の前で、暇乞に親類廻りをして岡村の家へ行くと、どこかへ出掛けようとしてゐた久雄さんに玄關でぶつつかつたの。多分今でもあの通りでせう。昔風で、うす暗くつて、正面に伯父さんの好きな何んとか云ふ坊さんの書いた額がかゝつて、古つぼけた衝立が立つて。――久雄さんはその儘引つ込むでもなければ、出て行くでもなく、間の衝立を楯に取つて突つ立つたきりもの一つ云はないのです。私はそれを見ると、何故とも知らず許して下さい――さう云つて謝り度いやうな思ひで一杯になつて。――若し母が一緒でなかつたら屹度あのひとの前に膝をついて謝つたわ。――母さん、私が今病氣してゐる久雄さんに逢ひに行かうとする氣持は、矢張りこの氣持ですよ。私はあの時云へなかつたことを、今云つて謝り度いの。私のために少しでもあんたの生涯を傷つけたことがあるなら、どうぞ許して下さい――つて。

牧田　それで分らなかつたことが分りますよ。何久雄君が何故あんな無茶な生活をしたか。何故人生の希望を捨てたやうな考へ方をするやうになつたか。――併しあなたが彼に對してさう云ふ感情を持つてゐるから、僕は却つて彼に逢はないことを勸め度い。あなたは屹度失望するに相違ない。

龍子　何故。

牧田　つまり久雄君は昔の久雄君ぢやないから。あなたのイリュージョンに殘つてゐる久雄君と現在の彼は別人なんだから。忌憚なく云へば、一個のやくざ者に過ぎませんよ。

龍子　どんなやくざ者だらうが、もつとわるい惡者だらうが、そのひとが自分を愛して呉れたつてことを女は一生忘れるものぢやないわ。――いゝえ、久雄さんのよくない噂が耳に入つたり、親類ぢうであのひとの惡口を云つたりすればするほど、私は段々辛い氣持になつたのだと云つてもいゝの。自分の罪をはつきり感じて來たのです。あのひとが可哀想で、濟まない氣がして――

牧田　それなら塚本さんに對してだつて同じぢやありませんか。今までのやうに單に田舍の生活に堪へないと云ふだけでなく、さう云ふ別な意味があなたの上京に加はるとすれば。

龍子　――

牧田　龍子さん、あなたはそれで濟まないとは思はないんですか。久雄君に感ずる罪を塚本さんには感じないんですか。

龍子　あゝ。

牧田　あなたがこの田舍の生活を呪ふ氣持だつて、前よりは僕にも少しは分つて來た。いや、僕はあなたから散々聞かされた不平以上のものを今日は塚本さんに聞いた。見たところこれ程美しい、これ程呑氣さうな田舍が、あらゆる苦しい問題で蔽はれてゐるのを知つた。それだつてあなたは厭がつて身震ひしてりやすむのだが、塚本さんは自分で矢面に立つて戰はなけりやならない。あなたはそれに對して同情はないんですか。久雄君に對してそれだけ道德的であり得るあなたなら、夫の現在の窮境と苦痛に對して無關心でゐられる筈はない。――それとも自分さへ逃げ出して逢ひ度い人に自由に逢ふことが出來りや、塚本さんや――あんな若い芳子さんを、何等の慰めもない今の淋しい境遇に打つちやつて置いても平氣なんですか。

龍子　よつちやんの話なら別だけれど、――塚本には、少くとも塚本のさう云ふ點には私同情はしなくてよ。しませんとも。――先に話した通り、今の境遇が本統に厭なのなら、宅は明日にでもそれを捨てられるのですもの。一思ひに投げ出せば自由になれるんですもの。それを私が幾ら云つたつて決心がつかないんぢやありませんか。自分で求めて苦しんでるのぢやありませんか。――あんたなんかには分らないのよ。塚本が斯んな場合どんなに愚圖で思ひ切りが惡いかつてことが。とても堪らないんだから。――大嫌ひ。

牧田　あなたの考へるやうに、世間のことがさう簡單に片附くものぢやありませんよ。塚本さんにしたつて――

龍子　もう澤山よ、塚本のことなら。――何んにも云はないで頂戴。默つて頂戴。――聞くほど癇癪が起るばかりだから。――

牧田　併し僕としては、あなたのそんな不合理な云ひ分を知らん顏して通させる譯には行かない。

龍子　なら仰しやい、幾らでも好きなほど。而して私だけを惡者にして、うんと塚本に同情しておあげなさいよ。さうすりや氣が濟むのだらうから。――但し私はそんなことを聞いてる暇はない。

　　龍子去る。

牧田　――たうとうあのひとの豫感が當つた。

　　近藤が入つて來る。

近藤　旦那は此方ではございませんでしたか。

牧田　いや。

近藤　それでは、と、洋館の方へでもいらつしやるかな。

牧田　あゝ、近藤君。（行かうとする支配人を呼び留めて）輕便の時間表がありますか。

近藤　はい。持つて參りませうか。

牧田　さうですね。本線の終列車に聯絡するのは九時何十分だか、それを正確に知り度いのだが。

近藤　それならば九時五分でございます。――それに乘りますと町に十時三十分に着きますので、本線の終列車に丁度間に合ひます。――ですが、お立ちでございますか。

牧田　都合に依つたら今夜歸り度いと思つて。

近藤　それは、それは。折角御滯在になつても斯んな田舍で、何のお慰みもございませんでしたでせう。――これで來月になりますと鐵砲打位は出來ますのですが。

牧田　鳥は澤山ゐますか。

近藤　昔のことを思ふと比べものにはなりませんな。それでも、つい七八年前までは、この後の山あたりで、時に依ると雉子なんか面白いほど取れたものですが、當節はそんな話をしたつて若い者は本統にしない位でございますよ。昔と違つて、百姓たちまで何か一理窟こねなけりや承知しない世の中ですから、鳥の仲間も段々狡くなつて何處にか旨く隱れるものと見えます。

　　塚本が入つて來る。

塚本　――近藤か。

近藤　これは、――先刻から實はお探し申してゐましたのですが。

塚本　何んだ。

近藤　例の並樹の一件で。村長の奴も少しは考へたと見えまして、幾らと云ふ金額は云はないことにするから、兎に角都合のつく範圍で引き取つて呉れまいか、と云ふ腹らしうございます。先刻ちよつとやつて參りまして――

塚本　その話ならもうすんでる筈だと云つて呉れ。

近藤　はい。

塚本　それ以上何か云つて來ても相手になるな。——兎に角おれはそんな話はもう澤山なんだから。

近藤　ではその積りにいたしまして。——牧田さん、何かお荷物でも梱りますやうでしたら、御遠慮なく仰しやつて下さいまし。

牧田　いづれ。

近藤去る。

塚本　喬君、いよ〳〵立つのか。

牧田　少し急だけれども、今夜立ち度いと思つてるんです。

塚本　龍子から聞くと、加納博士の方が行違ひになつたやうに濟まなかつた。僕が餘計なおせつかいをしたばかりで——

牧田　違ひます。そんなことは決してないんです。龍子さんが誤解してるんです。——僕は初めからY——温泉に行く必要はなかつたんです。

塚本　ぢや、それはそれとしておいて、——君が東京へまつ直ぐに歸るんなら、實は龍子も行き度いと云つてゐるのさ。

牧田　それだけはいけません、僕は一緒に歸ることは御免です。龍子さん自身にその理由は誰よりもよく分つてる筈なんだ。僕に先刻此處で直接拒絶つたのです。それにあなたにそんなことを云はせるのは狡猾だ。——恥を知れば決してそんな眞似は出來ない譯です。

塚本　いや、龍子は君と一緒に歸るとは云つてやしない。反對にあれの方でも何か癇癪を起して、歸つても君とは行かないと云つてる位で、これは僕一個の希望なんだ。君にしたつて、同じ歸るんなら下らない事に拘はらないで一緒に行つて呉れてもいゝぢやないか。

牧田　そんな事をしちや、僕はあなたに濟まないんです。

塚本　どうして。

牧田　これは龍子さんにも一番に話したのだが、僕が來たために次々厭な騷ぎが持ち上るんですからね。今夜でも僕が東京に歸ると云へば龍子さんも東京へ行くのだと云ひ出す、それぢや幾ら僕でも平氣にお伴をして行く譯には行きませんよ。

塚本　君の氣兼ねが單にそれだけの原因だとすれば——

牧田　——

塚本　まだ何かあるのかね。

牧田　——それだけです。——いや、それだけぢやありません。兎に角、僕は龍子さんの考へてゐることや、しようとしてゐることに贊成出來ない。我儘な間違つた行爲だと信じてゐるんですから、それを助けるやうな地位には幾らあなたの希望でも立ち度くないんです。

塚本　あれが我儘でないとは僕だつて考へない。併し一旦斯うと云ひ出した以上、あれは決してそれを枉げる女でないことは君も知つてゐる通りなんだ。

牧田　と云つて、その我儘を通させるのは、結局その行爲を是認することになるんだからいけませんよ。斯んな時には、失禮ですがもつとぴし〳〵やつてやる方が、あんな人には爲になります。自分がどんな無茶をしようとしてるか分らないんだから。

塚本　若し狀態が斯う云ふ狀態でなかつたら、僕だつて君の註文に負けはしない。どんな嚴しい夫にでもなつて見せるが、現在では殘念ながらその役目は僕には勤まらない。寧ろ意識して勤めない決心なのだ。

牧田　——

塚本　君の植物に就いて話せば、濕地やまたはあの果樹の植木などの種類を南の暑い國に持つて行つたつて育たないと等しく、柑橘でも

ナナは雪の降る土地では實らない。龍子なんかも丁度それだと僕はつくづくこの頃考へる。椰子やバナナに取つて熱と日光が必要であるやうに、龍子には東京の中流階級の空氣と養分が必要なんだ。多勢の知類や友達が必要なんだ。銀座の鋪石も、帝劇の廊下も、音樂會も、三越も必要なんだ。

牧田　さう云ふ生活なら、龍子さんには限らない。あなたにだつて、——また芳子さんにだつて必要ぢやありませんか。——これから世の中に出ようとする若い人にはより一層必要なんだ。それをあの人は自分さへよけりや他のことは考へようともしない。自分の我儘な行爲のためにどんな可哀想な犠牲者が出來るかといふことを夢にも考へない。——

塚本　併し、僕等は兎に角土地の樹木だ。——どんな苦痛や淋しさでも、龍子が此處で感ずる程には感じないですむやうに生れついてゐるよ。この腐れかゝつた屋根の下で、雪に埋もれて暮らしたつて平氣だが、龍子だけにはさうは行かない。單に生理的に云つてもあれをこの冬此處に置くことは危險だ。去年は殊に初めての寒さで、當人は氣がついてはゐないが確かにルンゲを犯されかけたんだからね。と云つて、やつと起きたばかりの[illegible]にひとりで旅行させられはしない。だから君に序に連れて行つて貰へりや大いに助かる譯なんだ。

牧田　さう云ふ譯ならば僕だつて厭とは云へないのですが、併しその前に僕は龍子さんに約束させて置き度い。春になれば屹度歸ると云ふことを。——僕の責任としても、それだけは念を押した上でなけりや。

塚本　喬君、そんな約束が役に立つと思ふかい。

牧田　ぢやあなたは——

塚本　僕は、いつ歸つて來るとも龍子に聞きはしなかつた。そんなことで押問答したり氣を廻したりするのが、この頃の僕には變に面倒臭いおつくうなんだ。これは決していゝ傾向ぢやない。僕の生活力が衰へ、その燃燒が鈍つて仕舞つた證據に相違ないのだが、事實だから仕方がない。この儘行けばじりじりと自滅するに相違ないこの家を、どうすることも出來ず手を拱いて見てゐるやうに、或は並樹が伐られりや伐られるに任せておく外はないやうに、龍子のこともなるやうにしかならないと思つてゐる。諦めてゐると云ふよりは[illegible]ね。

牧田　[illegible]ね。子供でもあつたら、と[illegible]何等の實[illegible]て深い意味を感じません。

塚本　[illegible]かい。

牧田　[illegible]、[illegible]の考へ方が今少し[illegible]すからね。

塚本　その點はあるかも知れない。併しそれにしても僕は子供があつて呉れりやよかつたとは思はないよ。

牧田　——

塚本　どうするのだ、子供の將來は。——斯んな時代に生れて來る子供は[illegible]。僕の肩にさへ背負ひきれない重荷を、僕の子供にまでおつ付けるのかい。——いや、おつ付け度くなくても、その家に生れて來りや否應なしに縛りつけられる重荷だ。僕がこれから一生それで藻掻き通すやうに、彼も同じ苦痛に生きて行くのだ。寧ろ彼の時代はもつと怖ろしいかも知れない。——もう澤山だ。斯んな腐れかけた家をしよつて生きるのは僕だけで澤山だ。——同じ意味で、龍子も強ひて此處に留まる必要はないのだから、兎に角連れて

行つて呉れ給へ。荷物なんかいゝのかい。何か手傳はせることでもあれば芳子を呼んでさせ給へ。

牧田 ——

塚本 (廊下へ出ながら)芳子はゐないか、——おい。芳子。

芳子 (奥の方で)はい。

　芳子廊下に現はれる。

塚本 喬君が今夜姉さんと一緒に東京へ立つのだから手傳つておあげ。

芳子 はい。

　塚本去る。

牧田 ——

芳子 お召は大きい方の鞄になさるでせう。

牧田 芳子さん。——(芳子が疊み直さうとした先刻の洗濯物をひつたくりながら)よくそんな事がしてゐられるんですね。

芳子 ——

牧田 あなたはさうやつて僕の着物を鞄に詰めて、平氣で左様ならを云ふ積りなんですか。

芳子 ——(泣く)

牧田 泣いてゐるよりこれから奥へ行つて打ち明けて仕舞ひませう。今ならまだどうにでもなるのです。僕は龍子さんに賴みます。どうか僕等のために東京に歸らないで呉れと、——あのひとは若しかしたら納得して呉れるかも知れない。——いや、乾度して呉れるに相違ない。さうすれば、あなたはお兄さんのために此處に殘つてゐる必要はないのだから。——

芳子 いゝえ、他の時ならだけれど、今日のお姉さんは多分誰だつて留めることは出來ませんわ。

牧田 ——そんな事が、あなたにどうして分るのです。

芳子 何んだかそんな氣がしますもの。——今朝まではそれでもお姉さんはいつもより機嫌がいゝ位でしたわ。お晝過ぎ東京から手紙が來たので——さうですわ、あの手紙がいけなかつたのですわ。それを見るとお姉さんは床の中で長い間泣いていらして、而して急に起きると云つて起きたと思ふと、たうとう私が心配してゐた通りになつたのです。ですから——

牧田 それまで分つてゐるのなら、あなたにだけ話します。想像の通りあの手紙がいけなかつたのです。あの中にあつた一つの報告が、この二年間龍子さんの胸に燻つてゐた火薬に最後の火をつけたのです。而して僕等の結婚を破壞しようとしてゐる。——併し芳子さん僕を信じて下さい。僕はそんなものは撥ね返して見せます。今一度あなたを迎へに來ます。あなたさへ待つてゐて呉れるなら——

芳子 ——

牧田 乾度待つと云つて下さい。——呉れるんですね。

芳子 ——(點頭く)

牧田 ——

　その時龍子が廊下から來て、部屋に入らうとして愕然として立ち留まる。併しその儘默つて去る。

(幕)

第三幕

　塚本家の母屋の一室、無装飾なだゝ廣い部屋のまん中に五尺四方もある爐が切つてある。[illegible]

手傳ひながら編物をしてゐる。第二幕の出來事——芳子が牧田と共に東京に立つた日の夜。雨が降つてゐる。

芳子　どうしてよく燃えないのかしら。

老婢　灰が濕けてゐますので、——何しろ九月に入つたばかりで、奥の爐を燃すなんてことは、滅多にないことでございますよ。

芳子　夕方から急に寒くなつたと思つたらこの雨だもの。お姉さんや牧田さん風邪を引かなきやいゝがと思ふわ。ねえ婆や。

老婢　それよりも婆やはお米の方が心配でございます。今の大事な時に斯んな陽氣ぢや實入りが半分から違ひますから。全く田舍で作の惡いほど情ないことはございませんよ。餘所の百姓も昔の作なら旦那方もお困りなさる。餘計な八釜しい事の起きるのも乾度斯う云ふ時に限ります。——尤も奥様見たいに東京に行つてお仕舞ひになれば、作が好からうが惡からうが苦勞知らずでいらつしやられませうが。——

芳子　婆やまで何を云ふの、他の者が云つたら窘めなきやならないのに。

老婢　そりやあなた、婆やだつて心得てはゐますが、奥様もあんまりでございますからね。昨日まで病い／＼で寢ていらしたものが、起きるとさあ東京だつて、何もかもおつ抛り出しで行つてお仕舞ひになる、あれぢや堪らないんでも旦那様やあなたに——

芳子　よしなさい、そんな話。それよりか今一度暖かになつて、豐年になつて呉れなきや困るわね。食べるものや着るものに不足がなければ、誰も八釜しいことを云ひ出しはしないし、皆んな仲よくして行けるのだから。

老婢　その通りだつたのでございますよ、昔は。——また昔話になりますが。——同じ百姓が、同じ土地で同じやうに働いて、當節は何故斯うせち辛くばかりなりますのですか、婆やなんかには譯が分りません。

芳子　おや、燃えて來たぢやないの。おや、お兄さんをお呼びして——（立つて上手の唐紙を開けて）やつと火が起きましたわ。いらつしやる。

褞袍を着た塚本が次の部屋から出て來る。芳子が座蒲團を持つてついて來て、正面の爐邊にいて座らせる。

塚本　斯うしてるとすつかり冬だな。雨よりは吹雪の音でもして來さうだ。

芳子　餘り急に寒くなつたので、お姉さんも風邪でも引きはしないかしらつて、話してたとこなの、

塚本　——

老婢　お茶でも入れて參りませうか。

塚本　茶もいゝが、酒はなかつたか。

老婢　さあ、奥の方の御酒は、ちつとも召し上らないから切れた儘だつたと思ひますが、

塚本　葡萄酒でもいゝ。熱い湯で割つて飲んで見よう。

芳子　おや嬢や、熱いのを持つて來るといゝわ。

老婢去る。

塚本　何んだかぞく／＼して、汽車の途中でこゐぢやない、こつちが風邪を引きさうだ。

芳子　——（編棒を動かしながら涙を落す）

塚本　芳子。

芳子　——

塚本　何を泣くのだ。

芳子　————

塚本　斯んなことになつて、お前も心細いだらうが——

芳子　いゝえ。——それよりもお姉さんがあんまりお淋しさうで——

塚本　おれは構はない。併しお前はおれとは違ふ

ふのだから、これから先どう云ふ風にやるかと云ふことも、この際よく考へて見る方がいゝ。而して何か希望があるなら遠慮なく云つて呉れ。おれもいろ／＼思つてはゐるのだが。

芳子　私のことなら心配しないで頂戴、お兄さん。別に希望なんて何んにもないわ。この儘お兄さんのところに一生置いて貰へれば――それだけが私のお願ひなの。

老婢が盆に葡萄酒の瓶と湯呑を載せ、藥鑵を下げて來る。

老婢　ひどい風になりました。

塚本　――暴風雨になつちまつたね。

芳子　――汽車も斷れな時は駄目でせうね。

塚本　――東京へおなさや遅くなつたな。――婆や、葡萄酒は無いのか。

老婢　温めてをります。お注ぎいたしませうか。（塚本はついだ葡萄酒の上に熱湯を注ぎながら――急に暗くなつたり、斷々な大暴風雨になつたり、この塩梅だと今年は碌な年ぢやございませんよ。

芳子　本統にひどくなるばかりだわ。――あれは何處でせう。あのどう／＼云つてるのは。

塚本　崖の崩れたところが何處かに溢れてるのだ。奥の方で召使たちの騒ぎ出したのを聞きつけて一渡り出したな。

近藤が急いで入つて來る。

近藤　飛んだ大雨になりまして。屋根屋が幾らたつても愚図々々して來ないものだから、どうも大分方々が――

塚本　少し位いぢつたつてどうにもならないのを見込んでゐるのだよ。

近藤　誠に不都合ですが、仕方がございませんから、ひどく洩るところは疊をあげろと申しておきました。

塚本　まあいゝさ。濡れて困る程の部屋もやどれもないのだから。

近藤　ですが、雪の來るまでには一つ思ひきつて修繕いたさせ度いものでございますな。昨年位の雪ならですが、この冬でもうんと降られますと、恐らく危い場所が出來てをります。

塚本　直ぐ潰れもしなからうぢやないか。――兎に角そんなことを氣にし出した日にや、一日だつてこの屋根の下には住んでゐられないんだから、まあ行くところまでこれで行くのだ。

芳子　おや。

老婢　どうなさいました。

芳子　此處も洩つて來たやうよ。

近藤　こりやいけない。――何か持つて來させなきや。（下手の入口から奥に向つて）おい、おい。こちらにもバケツか何か持つて來て呉れ。

老婢　皆んなあちらの部屋で騒動やつてるんですよ。私が取つて來ませう。

老婢去る。

近藤　お嬢様、こちらへいらつしやらないと濡れます。

芳子　大したことはなささうだけども。（編物を抱へて兄の右に移りながら）――ねえ、近藤さん、お姉さん方は頓て町に着きなさる頃かしら。何時の用意を何んにもしていらつしやらないのだから、どんなに困つていらつしやるかと思つてよ。

近藤　左様ですな。あれで本町へ移つてお仕舞ひになれば平氣でせうが、あの乗換へがひどく厭でございますからね。暗うござる時には誰も閉口いたします。

老婢小さい盥を持つて戻つて來る。

老婢　盥をさんおいてでございます。

塚本　暗くて來た。――この暗い中を何の用で

なさうな

驛長が入つて來る。低い背の肉の瘦せた體、日に焦けた顔、鐵道の制服で、程よい顔色になり、また一杯上機嫌であ
る。

驛長 今晩は、——悪うしい降りですね。お嬢さん、今晩は。——やあ、これは近藤君、今晩は。嬢やさんにはもう挨拶した筈だが、まあ今一度云はせて貰つて、ねえ、嬢やさん、今晩は。——

塚本 まあ、こちらへ。

驛長 こりや上座で恐縮ですな。主人の與へた上手の爐端に坐りながら。奥様もお客様も一時にお立ちで、急にお淋しうございませう。ちつとも存じませんで。驛でお話を伺つて吃驚いたしました譯でして。——そんな事なら案内もちよつとお見送りいたさせなきやならなかつたのですが。

塚本 從兄が歸るに就いて俄に思ひ立つたことなんです。

驛長 お連れとしてはそりやもうこの上なしで。——全く今度はお一人でなくて運がよろしうございましたよ。不馴れから兎も角ですが。幾ら奥様のやうな確かりした方でいらしても、今晩のやうな不測の事故の生じた場合には、御婦人にはお一人歸ではどうしても。

塚本 ——

芳子 ——

近藤 ——

巴章 ——実はその、大した事でもないのですが。

驛長 ——

芳子 何かあつたのですか、汽車に。

驛長 いや、お嬢さん、それ程御心配なさるには及びません。ほんのちよつと脱線いたしただけです。

塚本 脱線した。——一體何處で。——乗客には異状はなかつたんですね。

驛長 ございません。ですから奥様もちよつと吃驚はなさつたでせうが、まあ御無事ですんだのですから、御安心下さい。丁度A——驛に入らうとした時やつたので、例の轉轍機の過失らしいのです。

近藤 A——驛なら半分と云ふところですかな。

驛長 さうです。當驛と町の約中間です。

芳子 それで直ぐよくなつたのでせうかしら。

驛長 三十分近く遅延したらしいのですが、乗客の中には本線の乗換へに遅れないために、A——驛から自動車で町へ行つた者もあるさうですから、多分こちらの御心配はいらないではないかと思つてをります。

塚本 本當に知らせてくれてよかつた。

芳子 本當に、お嬢さんだけだつたらどんなに困つたか知れないわ。

近藤 夜も更けてこんなどしや降りの中で、そんな目にお遭ひになつちや奥様も恐いでせうから。

そつ——。

驛長 斯んな時に限つてまたやるんですからね。あの轉轍手と云ふ奴、多分酔つてゐたのでしやいませうか、斯う云ふ工合ですから。(以下大きな金火箸を取つて灰に線路の圖を引き、その金火箸を轉轍機にして話す)これが上りのホームの線として、これが下りのホームの線とすると、上りの時は轉轍機をこちらの方へがちやんと落す——いや違つた。こりや下りの列車だ。これが上りのホームで、これが下りのホームとすると、こちらへ落す譯だ。さうです。反對です。だから下りの場合にはこれが上りのホームで、これが下りのホームとすると、こちらの線路を塞げばいいので。——はて、違つたかな。いや今度は違ひません。これが上りのホームで、これ

が下りのホームだから――どうも甚が拙い。（急いで灰の上の線を掻き交ぜながら）兎に角そんな譯で、若い者が寝ぼけ半分にやると、ともすればしくじるのでして。停車場構内に生じた列車の事故の十中八九は、悉くこの[illegible]の過失に原因すると云つてもいゝのです。それに此處だけの話ですが、A――驛の[illegible]にこれが利く方でしてね、（左手の人差指と拇指で仕方をして見せながら）人間は極くいゝ男ですが、日が暮れりやもう醉つ拂つてるんだから、どんな事が起きたつて本統を云へば不思議はない位なんで。――そりや私だつて飲らない譯ぢやありません。正直に云へば、大いに好きですが、酒でしくじつたと云ふことはこれでも學習院時代から一度もありません。隠してありません。これだけは誰の前でも自慢いたしますよ。

塚本 [illegible]酒で何んだらうが、平井さんに一つあげるといゝ。

[illegible]子 [illegible]、そこにコップがあつたでせう。

（[illegible]右手の[illegible]を持つて）コップを二つ[illegible]に、一つを近[illegible]いて、それから[illegible]る。

驛長 これはどうも、何んだか催促がましいことを申したやうで恐縮ですな。

塚本 熱いのでなくて張り合ひがないだらうが。

驛長 いや、結構です。熱い方は家で飲るだけもう飲つて參つたので、この上は頂けません。――實は何んですよ、A――驛の椿事を直ぐお耳に入れたものかどうかと大いに迷ひましてね、幸ひお怪我がなくてすんだのだから、夜分わざ〳〵氣障りな話を持つて參るにも當るまいかと云ふ氣であつたものですから。――併し歸つて家内に相談いたしますと、そりやいけませんよ、お怪我がなかつたのだから幾らお知らせしたつて御心配なさる道理はないし、運惡くお怪我でもあつたのなら猶ほのこと内證には出來ない事だし、どちらにしたつて今夜これから出掛けていらつしやい、と云はれて見りやその通りで。全く女と云ふものは男の及ばぬ細かいところに氣のつくものでしてね。

近藤 いや、評判ですよ、驛長さんの奥さんのえらいつてことは。それに[illegible]さんのやうにお若いんだから恐らく申分なしで。

驛長 若いところぢやない、もう駄目です。すつかりあれも婆さんになつちまひましたが、それでも貰つた時にや私と十三から違つてたんで、近所[illegible]の云ふ通りよく娘のやうだと云はれちや、あれもきまり悪がつたもんですが、もう駄目です。すつかり婆さんになつちまひました。併し此處だけの話ですが、塚本さん、家内に就いては一つだけ私の自慢し度いことがあるのでして。――

塚本 はゝあ。

驛長 あれで家内は支那料理の名人ですよ。

塚本 それは知らなかつた。

近藤 私も初めてで。

驛長 これも學習院時代の昔話で、すぐ近所に私を大變贔屓して下すつた教官のお宅がありまして、家内が[illegible]心安くお出入りを願つてゐたのですが、その内に懇意な奥様方が一週に一度、教官のお家に支那人の先生を呼んで支那料理の稽古をすることになりましてね。家内もお手傳ひに上つてるうちいつとなし覺えたと云ふ譯です。

塚本 道理で[illegible]。

驛長 何しろ[illegible]直傳の北京料理で。それも先生がたゞの先生ぢやなく陸軍少將で袁世凱の[illegible]と云ふのですから豪儀ですよ。

塚本　――

驛長　つまり支那の陸軍少將が、袁世凱の沒落後日本へ逃げて來て、支那料理の先生になつた次第です。さう云はれて見ると何處となく違つたところがありましたよ。色の小白い、堂々とした大男でしてね。大きな肉切庖丁を器用な手つきで使ひながら、ちよつとそれを頸のところへ當てがふ眞似をして、（火箸でその仕方をしながら）「この首、漸う見えて三萬圓の懸賞ついてゐます」と云ふのが口癖でした。

近藤　偉いもんですなあ。

驛長　それで陸軍少將の隱し藝にしちや素敵もなく旨い料理でしたからね。家内は今でもよく云ひますよ。張さんの拵へたやうな兒豚の丸煮が今一遍食べられりや、いつ死んでも不足はないつて。――

近藤　奧さんも拵へようと思へば出來るんでせう。

驛長　さう云ふ兒豚つてものは特別の兒豚を選ぶので、田舍ぢや駄目だと云つてますがね。尤も、ものに依れば町から材料を買つて來さへすりや出來ないことはないので、ちよつとしたものはうちでもよくやつてゐますよ。――ところでこれはまだ內證の話なんですが、どこから洩れたか私の支那料理のことを聞いて敎はり度いと云ふものが二三ありましてね、村長のとこの娘とか、郵便局の若いかみさんとか、學校の唱歌の先生とか云つたやうなお歷々連中ですが、――お孃さんも何んなら一つ如何です。

芳子　有り難う。

驛長　實は牧田さんのいらつしやるうち、この支那料理で晩飯でもあげて大いに東京の話を伺ひ度いと思つてゐたので、今となつちや誠に殘念です。家內からも、それならそれのやうに早くなされればいゝのに、あんたは何んでもそれだから出來ることまで取り逃がす、と小言を云はれたやうな始末です。

塚本　牧田君も大學の方がおひ〳〵始まるので。

驛長　左樣でせうつて。立派なところにお勤めになつてゐればゐるほど樂は出來ませんですよ。併しこのことは牧田さんに初めてお目にかゝつた時にもお話したのですが、あゝ云ふ方には是非學習院つてものの味を一遍知らしてあげ度いと思ひましてね。勿論大學も結構です。所謂最高の學府で、この敎授先生におなりになれば申分はない筈ですが、學習院の味はまた一種特別です。いつも申す通り、生徒だけのことを云つて見ても、これが悉く、ただの子供ぢやありません、お互に呼ぶ名前が一條！　德川！　近衞！　前田！　島津！　毛利！　と來る。でなければ、岩崎！　三井！　安田！　と斯う云つた工合で、その氣位まで何んとなく違つて來るやうでもあるのですからね。

近藤　その話だけは何度聞いても偉いもんですよ、牧田さん。

驛長　自分でもこの話だけは何度自慢してもいい話だと信じてゐるのです、近衞君、德川君、自分のこの口で、一條！　德川！　近衞！　前田！　島津！　毛利！　岩崎！　三井！　安田！　と呼び捨てにした者が、廣い日本にも何人ゐませうかつて。――鐵道大臣だつてこの點ぢやおれには叶はないんだ、と私は女房に自慢してやるのです。さう云へば近藤君は學習院の校舍の寫眞を知つてゐますかね。

近藤　見たことはありませんね。

驛長　御主人は御存じでせう。

塚本　知つてます。

驛長　自分の略服を御存じですか。

塚本　いや、そんなものは知りません。

驛長　多分さうかと思ひましたよ。學習院の教官の制服と云ふと皆んな黒いのだとばかり考へてゐて、夏の略服があるのを知らない人が多いから實に不思議です。白地に黒の線のついた、海軍士官の服にそつくりの中々意氣なものでして、あれを着るとちよつと劍でも吊つて見度い氣持になりますな。黒いのよりは若くも見えます。私なんぞが着ても確かに五つ六つ若返るつて、女房がよく云つたものですが。――

芳子　――おや。

塚本　どうしたのだ。

芳子　――自動車ぢやないかしら。

塚本　自動車。

芳子　――私の氣の迷ひかしら。――雨ではつきりしないけれど、何んだかそんな音がしたやうだわ。

塚本　時節で自動車にしても、斯んな暴風雨の中を今時分やつて來ることは先づない筈だが。

近藤　さう申せばもう何時でせうか。

驛長　（時計の文字を覗いて）やあ、こりや大變だ、もう十一時になりますよ。今夜こそ長つ尻をしない約束で出て來たのだが、これはどうも。――

この時、間近の自動車の警笛がはつきり聞える。

芳子　矢張り自動車ですわ。――あら、うちに留まつたのぢやない。

塚本　――裏門だ。

戸を叩く音と人の呼ぶ聲が雨の中に聞える。

聲　（とんとん）――（とんとん）――開けて下さい。――開けて下さい。

芳子　牧田さんの聲だわ。

塚本　近藤行つて見ろ。

近藤急いで去る。

芳子　――

芳子續いて去る。

驛長　それでは私もこれで失禮させて頂きます。――いづれ何んでせう、脱線騷ぎでけちがついたので、改めて御上京のお積りで引つ返していらしたのでございませう。

塚本　そんな事かも知れません。

驛長　これでお出先に故障があると、後々まで嫌な氣持のものでございますからね。一度お歸りになつて、明晩にもまたお立ちと云ふことになればそれに越したことはございません。――ではどうかよろしく申上げて頂きます。お目にかゝつて御挨拶を申上げます筈ですが、お疲れのところを却つて御迷惑でございませうし、それに先刻も申しました通り今晩こそ長つ尻をいたさない約束で參りましたので、――あなただけの話ですが、家内は怒るとよく閉め出しを食はせますのでしてね。

塚本　いや、結構です。どうかお引き取り下さい。

驛長　左樣ですか、おやお言葉に甘えまして。いづれ家内も明日伺はせます。お孃さんの支那料理の[illegible]のことも、その時あれにお聞き下さ[illegible]いたします。どんな風な料理が出來て、どんなに旨くて、費用は幾ら〳〵と云ふ事まで、喫驚するほど細かに話します。

驛長去る。

塚本　堪らない、――落着出來ない晩だ。――併しあんな男でもあれよりは遙かに利口だ。[illegible]子は

濡れて死人のやうにぐつたりとなつた[illegible]子、芳子と牧田に支へられて下手に現はれる。

れる。

龍子　——大丈夫よ、もう倒れやしないから。

芳子　だつて危いわ。しつかり掴まつて頂戴。

龍子　先刻は自動車から急に下りたので、くらくらつとしただけですよ。

牧田　——歸つて來ました。

塚本　汽車が飛んだことだつたね。併しまあ怪我がなくつてすんで何よりだ。——龍子は直ぐ寝た方がよくないかい。

芳子　その方がよくてよ、お姉さん。

龍子　いゝのよ、大丈夫、もう何んともないの。

芳子　ぢや着換へだけでもしなけりや風邪引くわ。——持つて來ませう。

龍子　行かないで。——よつちやん。行かないで私の傍にゐて頂戴、——而して私が何故歸つて來たか聞いて頂戴、——あなた。

塚本　——……

龍子　私の代りによつちやんを東京にやつて頂戴。

芳子　——お姉さん。

龍子　——私はそのために歸つて來たのです。

塚本　出し拔けに何を云ひ出したのだ。

龍子　初めからのことを話せば、汽車が脱線した時でも私は引き返さうなんてことは夢にも考へはしませんでしたの。喬さんに自動車を見つけて貰つて、どんなことをしても町まで駈けつけようとしたのだけれど、驛を離れるか離れないにまた自動車がパンクして——（泣き出す）

牧田　矢張し寝た方がいゝでせう、龍子さん。その話は明日にでも落ちついてから十分出來るのだから。

龍子　いゝえ、止めないで話さして。——皆んな話して仕舞はないうちは、幾ら眠れたつてこの屋根の下で私が眠れると思つて。——私たちは代りの自動車が驛から來るのを、眞つ暗な百姓屋の軒下で三十分近くもびしよ濡れになりながら待つたのです。その時だつて、私は引つ返さうなんてことは夢にも考へはしなかつた。——自動車さへ來て呉れて全速力で駈けて行けば、結構間に合ふと信じてゐましたの。早く代りの來ないのが自烈度くてならなかつたのです。手繰り寄せるやうな思ひで待つたのです。でもそれ程にしてやつと今一度乘つた自動車が何の役に立つたでせう。——何んにも、——何んにも——なりはしなかつたのです。

牧田　M——の溪流に添つた新道が、ここで崩れて自動車が行かないのです。

塚本　——あの溪の新道は、急に大雨になると危いのだ。

龍子　それだつて私たちの前に出た二臺の自動車は、二臺とも通つて行けたのですもの。あの道はそれまでは無事でゐて、私たちが通らうとする間際になつて崩れたのです。もう一里足らずで着くと云ふところで。——目的の町の灯が、向うの雨の空にうす赤く映つてゐるのまでまざまざと見えてゐながら、私たちは進むことが出來なかつたのです。何んだか私たちを、——いゝえ、私を留めたのですわ。汽車の脱線したのも、初めの自動車がパンクしたのも、今また道が崩れたのも皆んなその爲だつたのですわ。——ねえ、あなた。さうでせう。さうだと云つて頂戴、私にはつきり信じさせて頂戴。

塚本　お前が引つ返して來たのは、それを信じたからぢやなかつたのか。

龍子　——信じました、その時は。——どうしても通れないと分つた時は。——それだつて、喬さんの打明話を聞くまでは、その儘この家

に引き返して來ようとまでは決心がつきませんでした。

塚本　――――

牧田　塚本さん、僕は本統は芳子さんを貰ひ度かつたのですが、芳子さんは拒絕したのです。僕はそのことを龍子さんに話して仕舞つたのです。――芳子さんは、龍子さんが田舍の生活に堪へ切れないで東京に歸るだらうと察してゐたのです。而してあなたを孤獨にしないために自分の幸福を犧牲にしようとしたのです。

塚本　僕のために犧牲にするには、芳子、お前の幸福は餘りに大き過ぎる。

龍子　いゝえ、犧牲にはさせません。――よつちやん、今云つた通りで、私はよつちやんのために歸つて來たのだから、安心して牧田さんと一緒にいらつしやい。

芳子　お姉さん――

龍子　私がお溫泉に行く途中この家に寄り道したのが偶然でなかつたのなら、私が今夜まつ直ぐ東京に行かれなかつたのも自分の運命ですわ。それをわたしは今夜はつきり感じたのです。而して自分は堅く決心したのです。どんなことがあつたつて、二度と東京に歸らうとは思ふまい。――この田舍の家を見捨てまい。――塚本の傍を離れまいと。――あなた、私を許すと仰しやつて頂戴。

塚本　お前は特別に僕から許されることはない筈だ。僕は承知の上でお前をやつたのだから。

龍子　私はあなたに譃をついたのです。――今夜の私は、この田舍よりもこの家よりも、何よりも先にあなたを見捨てようとしたのです。――あなたの知らないよその男の人に逢ひに行かうとしたのです。

　この瞬間、表の方に當つて激しく戸を叩く音が聞え、豪雨と疾風の間に異常な喧騒が起る。

戸を叩く音（とんとん）――（とんとん）――（とんとん）・（とんとん）――

塚本
牧田
龍子
芳子　――――

　近藤と老婢駈け込んで來る。

近藤　小學校が潰れかけたのださうでございます。――村の改築問題の起つてゐる二階建の方ださうで。

塚本　村の者は大勢來てるのか。

近藤　十四五人ばかり。――後を固めないと危いから材木を出して貰ひ度いと申して參つたのです。

塚本　要るほど持たしてやれ。――それから焚き出しの用意をさせなきやなるまい。

老婢　大釜の方で炊かせませう。――昔と違つて、斯んなことでなければあの釜もめつたに使ふことはないのですから。

　老婢去る。

近藤　併し村の奴等も蟲がよすぎて癪に障ります。この頃の仕打を考へて見りや、斯んな時だけ勝手を云つて飛び込んで來られた義理はない譯で。――それならそれのやうに、不斷から小生意氣な眞似をしなきやよろしいのですが。

塚本　まあいゝ、早く行つてやれ。おれも後から樣子を見に行く。――（近藤の出るのを待つて）龍子。

龍子　――

塚本　お前はこの家が今の小學校のやうに潰れる日が來ても、――僕には寧ろこの方が潰れない不思議な位だが――今夜引つ返して來たことを後悔しないのだね。

龍子　あなたさへ辛抱して下さるんなら。

塚本　おや、その辛抱をこれ以上する必要はない。お互に忘れて仕舞はう。――牧田、君達は明日立ち給へ、幸福に暮らし給へ。而して、時々はこの田舎の暮らすと云ふ生活の中で朽ちて行く僕等を思ひ出して哭れ給へ。

牧田　――

芳子　――

塚本　龍子があの調子だから僕は默ってゐた。だが、實際今夜がすむと村の者が後で云ふことは極まってゐる。僕が新樹を買はないのがいけないと。それがまた新らしく攻撃されるのだ。何かそのために今夜の暴風雨が起ったり、學校が潰れかけたりしたやうに云ひかねない。――併し何を云ったって、彼等が悪いんぢやない。皆な彼等が云ふのぢやない。悉く枕木の叫びだ。あの樹齢の唸り聲だ。

龍子　あゝ私はその中で一生住むために歸って來た。――

（幕）

（昭和二年五月）

日記の中から（四）

某年某月某日

をりやが昨日から風邪をひいて寝てゐるので、今日は下宿屋の掃除をする。はじめかけるといゝ加減には出來なくなるので、とうとう濡ぶきんまでかけた。しかし掃除をして不快になったことはない。一つは生理的の原因もあるだらう。禪宗の坊さんが、掃除を重な勤行にしてゐるのが十分理解される。

Y――學校より大きなコブを拵って歸宅。ふく木に乗ってゐて落ち、それに額をぶっつけたらしい。ふだんからのおデコが、その凄いコブで福助のやうになってゐる。氣分もいくらか悪いらしい。ホスピンをつけてあげる。

夜、父さんが下島先生に連れて行って下さる。水藥で罨法し、繃帯を白鉢巻のやうに巻き立てて歸る。

コブをこれ位に引き出さなければとれなくなるものらしい。私の頭の右の方がよく見てもぷくりと出てゐる。これは小學校を卒業した頃、目隠しになって、盲鬼ごっこをして遊んだ時偶々になり、校舎の柱にぶっつかったのである。それこそ眼から火が出るほど痛かった。今の瘤はその名殘りである。

Y――のコブを見て、ふとその時のことを思ひ出した。

某年某月某日

M――少年の父親が急死された時の話をきいた。

その時息子は二階に寝てゐた。夜中になにか急に胸を壓しつけられたやうな苦痛を感じた。平常は決して夜中に目を覺ましたことのない少年が、そのため目を覺ました。と、階下で人々が立ち騒いでゐた。丁度その時お父様が亡くなられたのであった。死の瞬間、いかに強く父が若い息子に心をかけたかがおもはれた。

年　譜

明治十八年
五月六日大分縣臼杵町に生る。本名ヤヱ。小手川角三郎長女、母マサ。兄一名、弟二名、妹一名。

明治二十四年
臼杵尋常小學校入學。

明治二十八年
臼杵高等小學校入學。
この後數年の間に久保會一氏宅に就きて「古今和歌集」「[illegible]」「源氏物語」「枕ノ草子」及び「四書」の素讀を終了したり。

明治三十二年
臼杵高等小學校卒業。英語を勉強す。
郷里の生活この年にて終る。

明治三十三年
上京。本郷の叔父小手川豐次郎の家に同居す。
明治女學校入學。

明治三十六年
明治女學校卒業。
同校高等科入學。

明治三十九年
明治女學校高等科卒業。
野上豐一郎に嫁す。

明治四十年
二月、處女作「縁」を、六月、「七夕さま」を、夏目漱石先生の紹介にて雜誌「ホトトギス」に發表す。

明治四十一年
これより數年間に寫生文派の影響を受けたる作品を「ホトトギス」「中央公論」「新小説」「國民新聞」等に發表す。「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「[illegible]」「羊羹」「飼犬」「夫婦者」「父親と三人の娘」「女同士」等。

明治四十三年
長男素一生る。

大正元年
次第に獨自の境地を開拓し、以後數年間に發表したるものに次の如き作品あり、「新しき命」「指環」「五つになる兒」「父の死」「小指」「閨怨」「運命」「[illegible]」「二人の小さい兒弟」「二頭の小馬」「助教授Bの幸福」「或る男の旅」「多津子」等、主として「中央公論」「新潮」「青鞜」「文章世界」にて發表せり。

大正二年
次男茂吉郎生る。
翻譯「傳說の時代」（バルフィンチ）を翻譯し、尚文堂より出版。（後改訂して、岩波書店より出版。）

大正[illegible]年
[illegible]「[illegible]」を「中央公論」にて發表、[illegible]後、[illegible]の新[illegible]に依りて[illegible]

庫に上演。）

戯曲はその外に『靈魂の赤ん坊』（二場）、『藤戸』（一場）『邯鄲』（三幕）『或る一組』（一幕）等あり。

小說集『新しき命』を岩波書店より出版。

大正七年

三男燿三生る。

大正九年

飜譯『ハイヂ』（スピリ）を此の年、『ゲスタ、ベルリング』（セルマ、ラーゲルレフ）を翌年、家庭讀物刊行會より出版す。

大正十一年

小說『海神丸』戯曲『綾の鼓』（「改造」）、對話『縛られた者』（「思想」）等。

『小說六つ』を改造社より出版。

大年十二年

連篇『澄子』『準造とその兄弟』『お加代』『狂つた時計』を「中央公論」に四回に分けて發表す。

大正十三年

『海神丸、其他』を改造社より出版す。

『ソーニャ、コヴァレフスカヤ』（飜譯）を岩波書店より出版す。

大正十五年

『眞珠』『參』『茶料理』『一樹の蔭』等を「中央公論」及び「改造」に發表。

戯曲集『人間創造』を岩波書店より出版。

昭和三年

長篇『眞知子』を向う三年間に亙りて、一『眞知子』、二『或るソシアリスト』、三『旦那様、子供、犬』、四『冷たい夢』、五『燃ゆる薔薇』、六『銀の獨樂』、七『彼女と彼』（以上「改造」）、及び八『血』（「中央公論」）と題して連載す。

昭和四年

『大石良雄』及び『海神丸』を『岩波文庫』にて訂正出版す。

昭和六年

『輕井澤夫人の手紙』（「週刊朝日」）。

——H・Y記

日記の中から（五）

[illegible]日。

朝八時すぎ、轟然たる音響とともに[illegible]が爆發。皆んなで戸外に出て見[illegible]て山は見えない。も[illegible]爆音の[illegible]やうな[illegible]を[illegible]ゐる[illegible]にはその度で釜の沸騰するやうな音[illegible]てゐる。そのうちパラ〳〵と霰のたばしるやうに小粒な砂と石が降つて來た。皆んな日傘をひろげたり、菓子折の蓋で受けたりしてそれを採集した。

もしこの目の前の山から凄い火焔が吹き出し、ラヴァが溢れ、砂礫がまつ赤になつて降るやうな騒ぎになつたらどうであらう。いやそんな狀態が[illegible]ないとも分らないのである。それだのに、人間はいよ〳〵恐ろしい瞬間にならなければ自覺しえないほど鈍感に出來てゐる。淺間山の爆發には限らない。これは死に對してもいひ得ることである。さうだ、私たちはいつ爆發するかもしれない死の前に、のんきに日傘をひろげたり、菓子折の箱を持ち出したりする遊戲心をもつてゐる。

中條百合子集

作家として困難な同時に
意味ある仕事はこれからだ。
自身の古典に向って何と
云はう。土台よ。しっかり
重みにこたへろ。

一九三一年二月

中條百合子

貧しき人々の群

序にかへて

C先生。

先生は、あの「小さき泉」の中の、

「師よ、師よ
何度倒れるまで
起き上らねばなりませんか？
七度までですか？」

と云ふ、弟子の問に對して答へた、師の言葉を御覺えでございますか？

「否！
七を七十乘した程倒れても
なほ汝は起き上らねばならぬ」

と云はれて、起き上り得る弟子の尊さを、此頃私は、しみじみ感じて居ります。

第一、先づ倒れ得る者は強うございます。倒れるところまで、グングンと行きぬける力を、私はどんなに立派な、又有難いものだと思つて居ることでございませう。

今度倒れたら、今度こそ、もう此れつきり死んで仕舞ふかもしれない。

が、行かずには居られない。行かずにはすまされない心。

ほんたうにドシドシと、

ほんたうにドシ／＼ドシ／＼と、眞の「自分」の足で歩き、眞の「自分」の體で倒れ、又自ら起き上られる者の偉さは、限り無く尊ばるべきものではございますまいか。

まだ心の練れて居ない、臆病な私には、若しや自分が、萬一倒れるかもしれないことを怖がつて、一尺の歩幅で行くところを、八寸にも七寸にも縮めて、ウジ／＼と意氣地なく、探り足をしい／＼歩きはしまいかと云ふことを、どれ位恐れて居るでございませう。

私は、もう一足踏み出して居ります。その踏み分けは、すかすかと度目を出さうとして居る今の私にとつては、決して心の痛まぬやうに嬉しいものではございませんで、又もとより滿足なものでは勿論ございません。

けれども、どうしても踏み出さずには居られない何かが、自分の裡に生きて居るのでございます。

假令よし、如何程笑はれようが、くさゝれようが、私は私の道を、只一生懸命に、命の限り進んで行くほかないのでございます。

自分の卑小なことと自分の弱いことに、いつもいつも苦しんで跼り居る私は、一體何度倒れなければならないのか？

それは解らないことでございます。

けれども、私はどうぞして倒れ得る者になり度うございます。地響を立てて倒れ得る者になり度うございます。そして、假令どんなに傷はついても、又何か摑んで起き上り、あの廣い、あの窮りない大空を仰いで、心からの微笑出來ましたとき！　其時こそどうぞ先生も、御一緒に心から點頭いて下さいませ。

一九一七年三月十七日　著者

（一）

村の南北に通じる往還に沿つて、一軒の農家

がある。人間の住居と云ふよりも、寧ろ何かの巣と云つた方が、餘程適當して居る程穢い家の中は、窓が少いので非常に暗い。

三坪程の土間には、家中の雜具が散らかつて、梁の上の暑さうな鳥屋では、産褥に居る牝鶏のクヽヽヽヽと喉を鳴らして居るのが聞える。壁際に下つて居る鶏用の丸木枝の階子の、糞や抜け毛の白く黄色く付いた段々には、痩せた雄鶏がちよいと止まつて、天井の牝鶏の番をして居る。

總ての物が、むさ苦しく、臭く貧しい裡に、三人の男の子が爐邊に集つて、自分等の食物が煮えるのを、今か今かと、待ち草臥れて居る。

或る者は、頭の下に敷いた一方の手を延して、燃え掛けの枝で、とろくなつた火を掻き廻して、溜息を吐く。或る者は、さも待遠さうに細い足をバタ／＼動かしながら、まだ湯氣さへも上らない鍋の中と、兄弟共の顔を、盗み視て居る。けれども誰一人口をきく者は無く、皆此上ない熱心さで、粗野な瞳を輝かせながら、只、目前に煮えようとして居る薯の事ばつかりを、考へて居るのである。

逞しい想像力で、やがて自分等の食ふべき物の、色、形、臭ひを想ふと、彼等の眠つて居た唾腺は、急に呼び醒まされて、忽ち舌の根にはジク／＼と唾が湧き出し、頬ぺたの下の方が、泣きたい程痛くなる。彼等は、頭が痛い様な思ひをしながら、折々ゴクリ、ゴクリと喉を鳴らし合つて居た。

子供等は年中腹を空かして居る。腹が張ると云ふ事を曾てちつとも知らない彼等は、明けても暮れても「食ひ度い／＼」と云ふ欲にばつかり攻められて、食物の事になると、自分等の本性を失つてがつ／＼する。

今も彼等三人が、皆同じ様に「若し俺ら獨りで、此丈の薯が食へたらなあ」と思ひ、平常は居なければならない兄弟共も、此那時には何と云ふ邪魔になる事かと、しみ／″＼と感じて居たのである。それだもんで、いつの間にか鶏共が俵の破れから嘴を突込んで、常に親父から、一粒でも勿體なくすると目が潰れるぞと、かたく戒められて居る米粒を、拾ひ食ひして居るの等に、氣の付かう筈はなかつた。

鶏共と子供達とは、各自に自分等の食物の事許りに氣を奪はれて居たのである。

所へさつきから入口の所で、ヂイッと此の様子を眺めて居た野良犬が、何を思つたか、いきなり恐ろしい勢で礫の様に、鶏の群へ躍り込んだ。

[illegible]らしい来[illegible]に[illegible]を[illegible]して居た鶏共は、此の意外な[illegible]の[illegible]に、[illegible]度[illegible]を抜かれた事[illegible]！　コケー[illegible]コー、コケーッコッコッ[illegible]と[illegible]を[illegible]様な悲鳴。バタ／＼バタ／＼と空しく羽叩きをする音など[illegible]、家中の[illegible]を[illegible]掻き[illegible]、[illegible]て居た塵は、一杯に[illegible]た。

餘り騒動が激しいので、却つて犬の方が閉口付いて仕舞つて、濡れた鼻で地面をこすりながら、鳥路々とそこいらの中を、嗅ぎ廻つた。横に垂れ下つた舌や、薄い皮の中から見えて居る肋骨が、ブル／＼震へたり、喘いだりして居るのである。

此の不意の出来事に、子供等は皆立ち上つた。そして、一番年上の子は、火の盛に燃え付いて居る木株を爐から持ち上げるや否や、犬を目がけて、力一杯投げ付けた。投げられた木株は、ヘラ／＼焔をはきながら、犬の後足の直ぐの處に、大きな音と火花を散らして轉げたので、低い驚きの叫びを上げながら、犬は體を長く延して、一飛びに戸外へ逃げ去つて仕舞つた。

木株の火は消えて、フーマーと、激しい烟が立ち始めた。

此の小さい騒ぎを挾んで、彼等の待遠い時は、極めてのろ／＼と這つて行つた。

けれども、漸々喧の中から、グツ／＼と云ふ嬉しい音がし始めると、皆の顔は急に明るくなり、凝視した眼が幾度も／＼蓋を上げては、覗き込んだ。

これから暫くすると、一番の兄は、まだ朝の食物があつた、こつちに、こびり付いて居る椀を持つて来て、皆の前に並べた。これから、此のほか／＼と心を有頂天にさせる様な香りのする薯が分けられようと云ふのである。

「一つ二つ三つ四つ、一つ二つ三つ四つ。」

彼は順繰りに分けて居たが、不意に、前後を忘却させた根強い利己的な誘惑に駆られて、皆の顔をチラ／＼と見ながら、弟達の一つ入れる間に、非常な速さで自分の椀に一つ丈余計に投げ込んだ。

そして、何気ない顔で、次の一順を廻り始めようとした時、

「兄にい、俺らにやよ」

と、其の時二番の弟が、強情な聲で叫した、彼の椀を、真剣をして睨をつきつけながら、兄に迫つて行つた。

兄は、自分の失敗の腹立たしさに、自棄しきつたやうな顔をしながら、突き出された椀の中に、小さい一切を又投げ込んでやつた。

けれども、初めに見つけたすぐ下の子は、兄のと自分のとを、しげ／＼見くらべて居た後、

「俺ら厭だあ！　お前の方が太つてらあ」

と云ふなり、矢庭に箸をのばして、兄の椀から其の太つた丸いのを、突き刺さうとした。

物も云はせず、其の子供の頰は、兄の平手で、二つ四つ續け様に殴たれた。彼は火の付いた様に泣き出した。そして、歯をむき出し、拳骨をかためて一番一つ餘計に食ふべえと思つた奴にかゝつて行つた。

それから暫くの間は、二人が巴になつて、泣いたり喚いたりしながら、打つたり蹴つたりの大喧嘩が續いた。仕舞ひには、何のために、如何仕ようとして斯那に大騒ぎをして居るのかも忘れて仕舞つた程、猛り立つて掴み合つたけれども、段々疲れて来ると共に、殴り合ひもいやになつて来た。気抜けのした様な顔をしながら、各自が勝手な所に立つて、互に極りの悪い様な、けれどもまだ負けたんぢやねえぞと威張り合ひながら、いつの間にかこぼれて、潰れたり灰にころがり込んだりして居る大切な薯を見詰めて居た。

皆、早く食べたい、拾ひたいと思つては居るのだけれど、思ひ切つて手を出しかねて居ると、喧嘩を始めたなかの子が、押しつけた様な小聲で、

「俺ら食ふべ」

とこぼれたものを、拾ひ始めた。

之を機に、他の者も大急ぎで拾つた。

そして、又更めて数をしらべて合ふと、今はもうすつかり仲が和らいで、掛け換への無い一箇の寶物を出來るだけゆる／＼と、しやぶり始めたのである。

此れは、町に地主を持つて、其の持畑に働いて居る、善助と云ふ小作男の家の出來事である。

（二）

丁度其の時、私は農場の小屋裏の空地に出て居た。ブラ／＼歩いて其處まで来ると、思ひ掛けず子供達の様子が目に付いたので、傍の木蔭からおかしな興味を持つて、眺めて居たが、そして薯の事から、喧嘩からすつかりを見て仕舞つたのである。初めの間は、私は只厭なものだ、浅間しいものだと思つて居たけれども、段々恐ろしい様になり、次で、たまらなく可哀さうになつて来た。彼等に對して一切の薯は、どれ程

勢力を持つて居るものか。若し私に出來る事なら、らんと腹になるほど御馳走を食べさせて遣り度いと云ふ様な心持も起つたけれども、到頭、私はどうしても彼の子供等と近づきになつて見ようと云ふ激しい好奇心に、すつかり打ち負かされて仕舞つた。

私は、さつさと獨りで入つて行かうともしたが、何だかばつが悪い。

向らがいくら子供達でも、何だか極りが悪い。で、私は誰か來て私を連れてつて呉れればと思ひながら呆やりと立つて居た。裏口からは、子供等が口の中で薯をころがしたり、互の椀の中を覗き合つたりして居るのがすつかり見える。

丁度好い鹽梅に、其時甚助の身内の者で、家が傍だもんで、日に一度づつ子供ばかりで留守居をして居る所を見廻つて居る婆が、いつもの様に手拭地のチャンチャン一枚で向うから來た。

私は早速婆にたのんだ。そして、初めて甚助の家へ入つて見たのである。そこいら中は思つたより穢く臭かつた。

私が戸口の所に立つて、内の様子を眺めて居ると、婆は、けげんな顔をして、ジロ〳〵私の方許り見て居る子供達に、元氣の好い聲で[illegible]、[illegible]

「おやんは今日も野良に行つたんけ？ おとなしく留守をして居よ。又飴玉や駄菓子買つてくれつかんな」

そして默り返つたまゝ、婆が何と云はうが返事を仕ようともしない子供達に、何か云はせようとしきりに骨を折つても、頑固な彼等は只、臆面のない凝視をつゞけて居るばかりで一言も口をあかうともしない。皆が、憎い様な眼をして私許り見て居るので、段々私は來ちやあ惡るかつたのかしらんと云ふ様な心持になつて來た。

婆は、しきりに氣の毒がつて彼れ此れ執成しに掛つても、子供等は一向其那事には頓着なく婆が所謂「せうし（恥し）がつて居ますんだ」と云ふ沈默を續けて居る。

私には、何故子供等がこんなに默り返つて居るのか一向譯が分らなかつた。それで、幾分蹴落される様な心持になりながらも、しひて微笑をしながら、

「父さんや母さんは？ 淋しいだらう？」

と、一番大きい子に云ふと、いつの間にか私の後に廻つて居たなかの子が耳の裂けさうな聲で、

「ワーッ……」

とはやし立てた。

私は非常に驚いた。同時に、胸がムカ〳〵する程不愉快を感じたけれども、もう一度私は繰返して見た。

「淋しいだらうね、誰れも居ないで――」

腹は立つたけれども、私にはまだ彼等を憫む位の餘裕はあつた。

年中貧しい暮しをして、みじめに育つて居る子に、優しい言葉の一つもかけて遣りたかつたのだ。が、それにも拘らず、

「おめえの世話にはなんねえぞーッ」

と云ふ、思ひがけない怒鳴る聲が、私の魂を動顚させる鋭さで投げ付けられたのである。

私は目の奧がクラ〳〵する様に感じた。

一瞬間に、今まであつた總ての事が皆譃だつた様な氣もする。

私は、何を如何する事も出來ずに只立つて居た。けれども、心が少し靜まると、ヂイッとして居られない程に不可解な憤怒や羞恥が激しく湧き立つて、非常に不調和な感情の騷亂は、肉體的の痛みの様に、苦しい心持にさせるのであつた。

私は寛容でなければならない。彼等から、歩立ち勝った者の持つ落着きを保ち続けようとする虚栄心が臆病になりきった心を鞭撻した。けれども空虚になった様な頭には何を判断する力もなくなり、歯がガチ／＼と鳴って居る。

此の意外な有様に、婆はすっかり[illegible]仕舞った。そして子供の手をグン／＼引っぱって下に坐らせながら私には、詫びる様な眼つきして、

「行きますべなあ、おめえ様、礼儀もなんも知んねえで、はあどうも」

と立ち上った。私も、もう帰る丈だと思った。

婆の先に立って子供等に背を向けた時、私は自分の上に注がれて居る憎しみに満ちた眼を思ひ、野獣の様な彼等の前に、どれ程私は臆病に弱く醜く[illegible]見えるかと思ふと、此のまゝ消え失せて仕舞ひ度い程の恥しさに、火の様な涙が眼一杯に[illegible]んで来たのである。

私はしを／＼と[illegible]木の[illegible]を歩いて居た。[illegible]に顔を見られるのも、目を[illegible]も堪らない心持で、スタ／＼と[illegible]いきなり後から[illegible]を立てて[illegible]て来た小石が、私の足元で弾んで、コロ／＼と傍の草中へ転がり込んで仕舞った。

ジャッと云ふ音が鼓膜を打つや否や、私は反動的に身をねぢ向けて見ると、またすぐ近くの甚助の家の前に、子供等が犇き合って立って居る。

年上の子供は、私が振向くと、手に持って居た小石を振り上げて、威す様に身振りをした。

私は、子供等の方を見ながらのろ／＼と移って木蔭へ身を引きそばめて、二度目の投撃を防がうとした。

私は、手頃りの荒い杉の太い幹につかまりながら、訳もなく大きな涙をボロ／＼とこぼしたのである。

（三）

何と云ふ事だ！

彼の時の様子を思ひ出すと、私の顔はひとりでに真赤になった。何故私は、あれ程の恥辱を受けなければならなかったか？　私が彼等に対して[illegible]した事が悪かったか？　私は[illegible]に悪い事は云はなかったと云ふ[illegible]ない。私は同情[illegible]。[illegible]に同情していたのだ[illegible]と思って居た許りだ。私には一寸も悪い心持はなかった。何処から何処までも正直な気持で居たのではないか？

私にはどうしても彼等の心持が解せない。其故彼の罵りに対しての憤りはより強く深くなる許りなのであった。

私は、お前方から指一本指される身ぢやあない。

人が親切に云ってやったのに石まで投げて、それで済む事なのか？

私は真剣に彼の子供達が厭であった。そして、又いつもの様に彼の時の[illegible]の時に上って小っぽけな可笑しい自分が、混ぜたらけの百姓共の嘲笑の種に引っぱり出されるのかと思ふと、一思ひに、彼の[illegible]も彼の子供達も一まとめにして、押し潰して仕舞ひ度い程な心持がしたのである。御飯も食べられない程私はくさくさした。

けれども、夕方近くなって、小作男の仁太と云ふのが[illegible]近くから話して行った事は、私に或る[illegible]を[illegible]た。

彼は、私共の[illegible]にある[illegible]に住んで居る[illegible]、[illegible]と云ふ事を持って居た[illegible]、[illegible]って居るのである

私は彼の衰へた姿をながめ、もう何も彼も運たとあきらめて居るより外仕様のない様な素振りを聞くと、ノト甚助の事を思ひ出した。

甚助は丁度此の仁太の様な小作男だ。

あゝ、ほんとに彼等は此那気の毒な小作男と子供達であつたのだ！ 此の思ひ付きは段々私の心から種々の憤りやなにかを持ち去つて仕舞つた。

けれども、後にはよく考へなければならない、悲しい思ひが深く根ざしたのである。

彼の男の子等は、今まで、其の両親が誰の爲に働いて居るのかを見て居たのか？

彼等の収穫を待ちかねて、何の思ひ遣りも、容赦もなく米の俵を運び去つて仕舞ふのは如何なる人種であるのか？

實世間の事を少しづつ見聞して、大人の生活が分りかけて来た彼等男の子等の胸は、両親に對する同情と、常に自分等よりもずつと餘計な衣類や食物を持つて居て、異つた様子をし、異つた言葉で話す者共へ對しての憎悪と猜疑で充ち満ちて居たのであらう。

俺らが大事の両親に辛い思ひをさせ涙をこぼさせるのは、あの何時でも其耳觸りの好い聲を出して、スベスベした着物を着て、多勢の者にチヤホヤ云はれて居る者共ではないか？ 親切らしい言葉の裏には依[illegible]、いつとはなく半分自覺的に注入され、町の人あ油断がなんねえぞと云はれつゝして居る彼等であらうもの、いきなり私が現れて、優しい言葉を掛けたからとて私を信じ得る筈はない。

彼等の頭には先づ第一に怨みが閃いた。

父上手え事云つてけつかる！

で、一時も早くこの小づらの憎い侵入者を驅逐するために、

、おめえの世話にはなんねえぞーッ！—

と叫んだのであつた。

彼等はもう、所謂親切は單に親切でないと云ふ事を知つて居る。

貧乏はどれ程辛いかを知り、其の両親へ對して生々しい愛情、一かたまりになつて敵に當らうとする一方の反抗心によつて強められた、切なる同情を感じて居るのである。

健氣なかい、眞の生活に備れようとして居る彼等に比して、私の心は何と云ふ單純な事であらう！ 何と云ふ臆病に、贅澤にふくれ上つて居る事であつたらう！

私は間違つて居たのだ。彼等總ての貧しい人々の群に對して、自分は誤つて居た。

私は親切ではあつた。けれども、自分は自尊と彼等に對する同情とを混同して居たのである。そして、自分自身を彼等から離れ、上に置いた者であることを思へば思ふほど一種の安心と云ふ—極く微かな小さな氣のつかない程のものではあつたが、—を感じて居たと云ふ事を否まれようか？

自分を彼等よりは、遙かに上だとは、ただの一度もなかつたか？

勿論、私は意識した傲慢な行爲をする程愚かな心事を持つて居るとは思はないけれども、長い間の習慣の様になつて、理由のない卑下や丁寧を何でもなく見て居たと云ふ事は恐ろしい。

私共と彼等とは、生きる爲に作られた人間であると云ふ事に何の差があらう？

まして、我々が幾分なりとも、物質上の苦痛のない生活をなし得る、痛ましい基となつて、彼等は貧しく醜く生きて居るのを思へば如何して侮る事が出来よう！

どうして彼等の疲れた眼差しに高ぶつた偏見を報い得よう！

私共は、彼等の正直な誠意ある同情者であらねばならなかつたのである。

世の中は不平等である。天才が現はれれば、

より多くの白骨が生れなければならない。豊饒な一群を作らうには、より多くの群が、饑餓の境に漂つて生き死にをしなければならない事は確かである。

世の不平等であるからこそ――富者と貧者は合する事の出來ない平行線であるからこそ、私共は彼等の同情者であらなければならない。

金持が出來る一方では氣の毒な貧乏人が出るのは、宇宙の力である。どれ程富み榮えて居る者も、貧しい者に對して、寛大であるべき何の權利も持たないのである。

斯樣にして、私は私自身に誓つた。

私は思ひ返した。

自分と彼等との間の、彼の厭はしい溝は速く掩ひ埋めて、美しい花園をきつと榮えさせて見せる！

（四）

私は、自分の生活の改革が、非常に必要であるのを感じた。そして、種々な思ひに滿たされながら、自分の今日までの境遇を顧みたのである。

私共の先代は、此のK村の開拓者であつた。

首都から百里以上も隔り、山々に取り圍まれた小村は、同じ福島縣に屬して居る村落の中でも貧しい部に入つて居る。

明治初年に、私共の祖父が自分の半生を捧げて、開墾した此の新開地は、諸國からの移住民で、村を作られたのである。南の者も、北の者も新しく開けた土地と云ふ名に誘惑されて、幸福を夢想しながら、故國を去つて集つて來た。

けれども、此處でも哀れな彼等は、思ふ樣な成功が出來ない許りか、前よりも、ひどい苦勞をしなければならなくなつても、其の時はもう年も取り、他所に移る勇氣も失せて仕方なし町の小作に一生を終るのである。其故彼等は昔も今も相變らず貧しい。

それぱかりか近頃では、小一里離れて居るK町が、岩越線の分岐點となつてから、めつきり總ての有樣が異つて來たので、此の村も少からず影響を蒙つた。そして、段々と農民の心に滲み込んで來る、都會風の鋭い利害關係の念と彼等が子供の時分から持つて居る種々の性癖が混合して、昔日の生活がより一層乏しく、濁りがちになつて來たのである。

村の狀態は決して、仕合が好いとは云へなかつた。長い間保つて來た狀態から、或る新しい狀態に移らうとする境の不調和が、全體を非常に貧しく落付かなくして居るのである。

けれども祖父はもう十七八年前に亡くなつて、丁度移住者もそろそろ村に落着いて來、生活が少しづつ、樂になつた時の樣子ほか見て居ない。

彼は、大體に滿足して、村の高處に家を建て、自分等夫婦は其處に住んで、田地の世話を燒いたり、好きな詩を作つたりして一生を終つた。

それで、後に殘つた祖母も、故人の志を守つて彼の遺した家に住み、田地を監視し、變遷する世から遠ざかつて暮して居るのである。

一年中東京に居た私は、夏になるとK村の祖母の家に行くのを習慣にして居た。そして、二月ほどの間東京では想像もつかない樣な生活をして居るのである。

私は村中の殆ど總ての者に知られて居る。東京のお孃樣が來なすつたと云つて、野菜だの果物だのを持つて來る者に對して、土産物を一つ一つ配つてやらなければならない。朝から小作男の陳情を聞き、年貢米を負けて貰ふ相談にのる。そこで、彼れ此れ云ふ[illegible]の面倒なの、とつさと相槌[illegible]して遣ると、大變[illegible]深い[illegible]い者の顏に私共を[illegible]めたてる。お世

癖を云ふ。
　私は皆にちやほやされながら、朝夕二度の畑廻りをしたり、池の慈姑を掘つたり、持山を一日遊び廻つたり、すつかり地主の馬鹿なお孫さんの生活をして居た。誰からも、干渉がましい事一つ云はれず、存分に擴がつて居たのである。
　それでも私は、尊さうにされて居た事等を思ふのは、今の私にとつては眞に恥しい。我ながら厭になる。
　何としてもどうにかして、村人の少しなりとも利益になる自分にしなければならない！
　それで、私は心の裡に種々の計畫を立てた。
　そして、土地の開墾等と云ふ事は——勿論其處が人間の生活すべき所として適當であり又、榮える希望もある所ならばよいけれども——冬が長く、地質も惡い様な所へ、貧しい一群を作つたとしても、矢張り非常に尊い事なのであらうか等と云ふ様な疑問がしきりに迫つたのである。
　開拓者自身は、或程度まで自分の希望を滿たし、喜ばされ、尚ほ其の村の歴史上の人物として稱揚されるけれども、はかない移住民として、彼の事業の最後の最も必要な條件を充たして、それに、澤山の貧しい者共は、ど[illegible]を得て居るか？
　開墾者にとつては、居なければならなかつた彼等でありながら、二十年近い今日まで彼等は只同じ様に貧乏な丈である。年中貧しく忘れられて死んで行く丈である。
　私は、祖父の時代からの澤山の貧しい者に對して、どうしても何かしなければならない。今日まで、すべき事は澤山あつたのに、臆病な自分が見ない振りをして來たのだと云ふやうな氣の濟まなさが、農民に對する自分の心を、非常に謙讓なものにしたのである。
　甚助の子が、私に惡戯をした次の日であつた。
　平常より早く目を覺まし、畑地を一廻りして來た私はほの〴〵と天地を包んで居る薔薇色の靄や、裸の足の上に朝露をはね上げて、生々として居る雜草の肌觸り、作物や樹木の朝明けの薫り等に、どの位慰められた事であらう！
　非常に愉快な心持になつて、女中に笑はれながら、大爐に焚火をしたり、入りもしない野菜を拔いて來たりして居ると、東側の土間に一人の女が訪ねて來た。それは、甚助の女房であつた。
　私に來て呉れと云ふので、出て見ると働き着を着[illegible]裸足で立つて居る。
　女は、私の顏を見ると、
「お早うございやす。昨日は、は、俺ら家の餓鬼共が飛んでもねえ御無禮を致しましたさうでなえ。おわびに出やした。これ！　こゝえ出て詫び云ふもんだぞ——」
　と云ひながら手を後に伸ばすと、廣い背のかげから、思ひ掛けず男の子が引き出された。
　彼は默つて下を向いて居る。赤面もせず、ウジウジもせず、ちつとも母親にたよる様な様子をしないでつくねんと立つて居る。
　女は、子供の方へ複雜な流し目をくれながら、しきりに繰返し〳〵勘辨してくれとか、自分等の子達は畜生同樣なのだから、どうぞこらしめにうんと擲つてやつてくれ等とまで云つた。
　けれども私は、人に餘りあやまられたりする事は大嫌ひである。自分の前にすべてを投げ出した様にしていろ〳〵云はれると、仕舞ひには、自分が恥しくなつて來る。何だか、如何にも自分が[illegible]じみて居る樣に思はれて、いつも母の云ふ、いくぢなしのお前になり終せて仕舞ふ。
　今も、その癖が出たとともに、もうどの子が

何をしたとか、憎らしいとか云ふ事は出來る丈忘れようとつとめ、又實際氣にもならなくなつて居るので、そんなにされる事は餘計いやであつた。

で、私が口を酸くして叱るのをやめろと云つても、彼女の方ではそれをあてこすりだと思つて居ると見えて、段々子供にひどくする。

「食らつてばかりけつかつてからに、碌なことー仕出來されえ奴だら。これ！ わびしな。勘辨してやつとよ、何とか云ひなてば―」

と、子供の腕を掴んで、小突いたり何かして も、子供の方でも亦強情なだんまりを守つて居る。

私には、甚助の女房がどんな心持で居るかよく分つた。分つた丈に、其那茸ほど芝居を見て居るのは辛い。

私の云ふ事等には耳もかさずに、怒鳴つて居た彼女は、

「これ！ どうしたんだ！ うん、[illegible]」

もうおれなんだけど―」

と云ふと、いきなり[illegible]、首筋が折れたかと思ふ程強く子供の首を[illegible]けた。

そして、

「どうぞ勘辨なして下さりやせ―」

と云ふや否や、

「行つとれ！」

と叫んで突飛ばした。

私は息がつまる位喫驚して仕舞つた。けれども、當の母親は滿足らしく笑ひながら小腰をかゞめて、

「お暇潰れでござりやした」

と畑へ出て行つた。

下女は彼女の後姿を見送りながら、

「甚助さん家のおつかあは利口もんでやすなりえ、ちやんと先々のことー考えてる」

と嘲笑つた。

（五）

村の四辻に多勢人立ちがして居る。

子供等や、笊を擔いだ男女、馬を牽いた他所村の者共まで、賤しい笑ひを湛へて口々に罵り騒いで居る眞中には、兩手に魚を一切づつ握つた男が、ニヤ／＼しながら之を内輪に[illegible]して立つて居るのである。

[illegible]大きな[illegible]ある女物の着物を着て、[illegible]で止めた丈で、[illegible]下つた合せ目からは、[illegible]い脛が覗いて居る。

[illegible]なりで[illegible]の様な髪には、木の葉や藁切れがブラ下り、下瞼に中圓の袋が下つて、青白い大きな目玉がこぼれさうに突出て居る。紫色の脣を押しあげて、黄色い縞のある反つ齒が見え、鼻の兩側の溝には膿物が出來て、其處ら一體に赤く地腫れさせて居る。

身動きする毎に、魚の臭ひや何やら彼やらがごつたになつて、胸が惡くなる様な臭氣を四邊にまき散らす。彼は「[illegible]」と云ふ氣違ひなのである。もう彼れ是れ五六年前に、氣が變になつてからは此の村にある家へは寄り付かずに、村中を廻つて歩いて、行く先き先きで筵を一枚貰つては其の上に寝て暮して居るのである。

どうかして氣に入つた所があると、幾日でも追ひ立てられるまでは、木蔭等に呆やり坐つて、犬の蚤を取つてやつたり、自分が坐つたまま手の届く丈草を一本のこさず拔いたりして居る。

犬が無上に好きで、あばれる[illegible]はちつともた[illegible]、村の者共は彼の姿を見かけ[illegible]ると捕へて、[illegible]なわるさをするので[illegible]と嫌つ[illegible]。

其の時も彼は何處から[illegible]日も[illegible]て來た[illegible]して居た。すぐ其處に[illegible]たい様な心持[illegible]て此處[illegible]、木[illegible]、[illegible]の犬に見つかつて[illegible]、早速

頸中を舐め廻された。それを彼は如何にも嬉しさうにして、たまつて犬の顔を見て居る所へ、

「薄馬鹿！　けえつたんかあ」

と叫びながら五六人の子供等が馳けて來た。そして、忽ち彼の體は暇で惡戯好きの者共に圍まれて仕舞つたのである。

皆は各自に勝手な惡口や戯言を彼にあびせながら、手に持つて居る魚を突つゝいたり、犬をけしかけたりした。

「う！　穢て。あげえに犬の舐めてる魚あ又薄馬鹿が食ふんだぞ。ペッ！　ペッ！　狂犬病さおつかゝつたらどうすつぺ」

「ひとー馬鹿にしてけつかる。もうとうに狂犬病さかゝつてつとよ！　此奴ぁ掛るにゃ命が二つ入用らあ」

「わはゝゝ。ほんによ。うめえや」

「おつとゝゝゝ」

人々は急に笑ひ出した。

下等な笑聲の渦卷の下を這ふ様にして、薄馬鹿の低い甘つたるい、

「へゝゝゝ！」

と云ふ聲が飛びはなれて不快に響き渡つた。

「厭んな事してけつかる」

「そんだら行げよ。おめえに居て貰はんとえゝ―とよーフ、、、、―

やー！　鮭が落ちんぞ。馬鹿！」

はゝゝゝ、

集つて居る者共は、下等な好奇心に動かされて、互に突き合つたり打ち合つたりして喚きながら、暫くの間大きくなつたり、小さくなつたりして居た。

けれども、段々人数も減つて來ると、前よりもつといやな顔をした薄馬鹿が、握つた鮭を落しさうにしてよろけながら、道傍の楢の大木の蔭まで來ると、赤ん坊の様にドシンと仰向けに寢た。そして、大口を開いて、鼻をグーグー鳴らしながら寢込んで仕舞つた。

犬がそろ／＼と首を伸して、彼の手に持たせたまゝ片端から鮭を食べ始めると、子供等は彼のした下等な身振りの眞似をしたりしながら、しきりに彼を起しにかゝつたのである。

一人の子は狐のしつぽで鼻の穴を擽つた。

蹴らうが怒鳴らうが、ゆさりともしないのを、圖に乗つた子供達は薄馬鹿を裸體に仕始めた。彼等は掛聲をかけながら、漸々肌脱ぎにさせた時、何時の間にか其處に居つて、様子を見て居た若い者がいきなり、

「そげえなことーするでねえぞ。天道様あ罰いおドしなさんぞ」

と眞面目に口を出した。

皆は吃驚して、惡戯の手を止めて男の顔を見に居た。すると、中でも一番惡戯らしい十四五の子は、口を尖らして、理窟をこね出した。

「わりゃあ朝つぱらから、おつかあに怒鳴られてけつかる癖にして、俺らの世話焼けるんけ？う？」

「おめえあの人知つてるんけ？」

一人の子がヒソ／＼ときくと、急にこの子は得意さうな顔になつて、冷笑的な口吻で叫んだ。

「うん、知つてつとも！」

水車屋の新さんてだなあ、おめえは。そんで北海道から、食へなくなつて、おつかあんげに居つて來たんだつて、こんねえだおめえのおつかあがいつてたぞ。いくぢねえ奴だて……

皆は聲をそろへて笑つた。

けれども、新さんは別に顔色も變へずに、

「覺えてかけするもんだぞ」

と云ひながら行つて仕舞つた。

それから一しきり、子供達は腹の癒える程妙な新さんを罵つたけれども、もう一旦やめた惡戯は又やる氣にもなれず、肌ぬぎにした薄馬鹿

を、各自が、
「俺らの知つたこつちやねーえぞ！」
と叫びながら、足つて蹴りつけて、ちりぢりばらばらに走けて行つて仕舞つた。

（六）

今年六十八になると自分では云つて居る善馬鹿のおふくろは、孫と一緒に或る農家の納屋の樣な所を借りて住んで居る。

家賃を拂はないで濟むかはり、まるで豚小屋同然な所で、年中蚤や南京蟲の巣になつて居る。

それでもまだあの狒々婆さま――彼女は顔中皺だらけの上に白髪を振りかぶり、胸から腰が曲つて何かする樣子はまるで狒々なので皆が彼女の渾名にして居る――にはよすぎるといふ程、善馬鹿の一家は、どれもこれも人間らしいのは居なかつた。

善馬鹿が、まだ彼樣にならないで、一人前の百姓で働いて居た時分に出來た、たつた獨りの男の子は、これも亦ほんたうの白痴である。

女房は愛想をつかして、何處かへ逃げ出して仕舞つてからは、善馬鹿と其の子を兩手に抱へて、おふくろばかりが、目を廻して居るのである。

もう十一にもなりながら、其の子は何の言葉も知らないし、體も育たない。五つ六つの子位ほかない體の上に、人なみの二倍もある樣な開いた頭がのつて居るので、細い頸はその重みで年中フラフラと落付いた事がない。そして、年中豆腐ばつかり食べて、他の物はどれ程美味しいものであらうと見向きもしなかつた。

彼は、自分の唯一の食料を、

「たふ」

といふ事丈を知つて居るので、村の者達は皆何かの祟りに違ひないと云つて居る。

何でも餘程前の事だけれども、町へ大層御利益のある女の祈禱者が來た事があつた。其の時、狒々婆も白痴の孫を連れて行つて見て貰ふとその女が云ふには、幾十代か前の祖先が馬の皮剝ぎを商賣にして居た事があつて、その剝かれた馬の怨靈の仕業なのだから、十圓出せば祈り伏せて進ぜるとの事だつたさうだけれども、彼に其の金の出せよう筈はない。それで、拂ひ落してもらふ事は出來ず、又もうそれつきり祈禱者にもかけず、自分でさへ出來る丈は忘れるしかくをして居た。

此の樣な有樣で、狒々婆はいやでも應でも食ふ丈の事はしなければならないので、他家の手傳ひや洗濯などをして廻つて居る。そして、三度の食事は皆どこかですませて、自分の家へは只眠る丈に歸るので、村中からいやしめられて、何ぞと云つては悪い例に引き出されて居た。

可哀さうがられるために、自分の年を二つ三つは多く云つて居るとさへ噂されて居るのである。

私は、只さへ貧乏な村人がおかげで、漸々どうやら露命をつないで居る家が殆どであつた。境遇上然うでもしなければ外に生きやうが無いのだから、只馬鹿にしたり蔑んだりする事は出來ない。もうよぼよぼになつて先が見えて居るのに、朝から晩まで他人の家を廻つて、氣がねな飯を食はなければならないのを思ふと可哀さうになる。

で、私は出來る丈家に用を云ひつけて、食事などもさせ、たまには古着や何かをやつた。彼女は私に對して[illegible]居るらしいけれども、[illegible]りな[illegible]

食べる物で、[illegible]

なく、[illegible]

そろと、ぐん〳〵持つて行く。そんな時に、若しやらない等と云はうものなら、もうすつかり不機嫌になつてポン〳〵ろく〳〵に挨拶もしないで歸つて仕舞ふのである。新しい着物でも着て居ると、一つ〳〵引つぱつて見ないでは置かない。

そんな事がほんとにたまらなく厭であつたけれども、私は、貧しい者の裡に入つて行から としながら、品振つて居る自分を叱り〳〵して漸々馴れるまでに堪へたのである。

善馬鹿のおふくろが、今までより屢々出入りする樣になると共に、段々村中の貧しい中でも貧しい者共に接する機會が多く與へられる樣になつた。

親父は酒飲みで、後妻は酌婦上りの女で、娘は三年前から肺病で、もう到底助かる見込みはないと云ふ樣な桶屋の家族。

中氣で腰の立たない男と聾の夫婦。

其等の、絶えず愚痴をこぼし、みじめに暗い者の上に私はそろ〳〵と自分の微かな同情を灑ぎ始めたのである。

もとより私のする事は實に小さい事許りである。私が力一杯振りしぼつて仕た事であつても、世の中の事に混れば、如何なつたか分らな〳〵なる樣なものであるのに、自分でも知つて居る。

けれども、私は愉快であつた。

自分に彼等の事を思つて居るのだと云ふ事丈でも、私はかなりの快さを感じて居た程である。

毎日々々を私は、新しく見出した仕事に沒頭して、滿足しながら過して居たのである。

けれども、たつた一つ私にはほんとに辛い事があつた。それは、善馬鹿の子の顏を見る事である。誰も遊び相手もなく、道傍の木になどよりかゝりながらしよんぼりと佇んで居る樣子を見ると、ほんとに私は苦しめられた。

何とか云つてやりたい、どうにかしてやりたい。私は眞個にさう思ふ。

が、彼の痩せた體や、妙に陰慘な表情をした醜い顏を見ると、何もしないうちにもう、堪らない妙な心持になつて來る。

彼の眼付はすつかり私を恐れさせる。私は、彼の傍を落付いて通る事さへ出來ないのであつた。

何だか今にも飛付いて頸を締められさうな氣がする。そして、コソ〳〵と出來る丈彼の目から避けて通り過ぎながら、心の裡には自分が何か彼にしなければならないと云ふ意識で、[illegible]ない、[illegible]した、[illegible]でない[illegible]のであつた。

萬一こんな方法によつて此の自分を思はれて居る子の親から、何かの[illegible]でも出される筈であるのを、傍の者が[illegible]して仕事の爲め[illegible]で、一生闇の世界で終つて仕舞ふ樣な事があれば、眞個に忌はしい事である。

今まで死なない所を見れば、何處かに生きる力は持つて居るのだ。

十一年保つて居た命の力は大きいものである。まして此處いらの、ほんとに人間を生長させるには不適當な樣な總ての狀態にある所では殊に然うである。

空想では有らうけれども、私は彼の靈と通つて居る何かが必ず一つはあるだらうと云ふ事を思ひ、それに對しての彼は聰明なのぢやあないかなどと思つた。

彼の親父は人間の仲間では氣違ひである。けれども犬と彼とはどれ程仲よく互に心を感じ合つて居ることか。

白痴の心は私にとつては謎である。分らなければ分らない程、私は何か有りさうに、どうにかなりさうに思はずには居られなかつたので

ある。

（七）

まあ何と云ふ素晴らしい。

朝だ！

はてしない大空の紺碧の擴かり、山々の森から銀青色の連り。

鶴か彼方の耕地の末でオパール色に輝いて居る。

あらゆる木々の葉が笑ひさゞめき歌つて居る上を、愛婚者の[illegible]が何と云ふ美しさで飾つて居る事だらう。[illegible]！ [illegible]の大好きなお天道様は、どんなに見事に光り輝いていらつしやるか！

眞個に立派なお姿でいらつしやる。

私は、昨日も今日も同じに、明く輝き渡つて輝いていらつしやるのを見ると、堪らなく嬉しくなつて来る。

「お早うございます、御天道様！

いつも御機嫌が好ささうでいらつしやいますね。

私も[illegible]ます、[illegible]して[illegible]で御目に掛れるのは有難う[illegible]ます。

どうぞ今日も[illegible]しく[illegible]。

私の立派なお天道様！」

風は、木々の葉の露を拂ひ落し、咽ぶ様なすがすがしい薫りを孕んで、むかうの雲から吹いて来る。

森の木々には小鳥が囀り、家禽の朝の歌は家々の[illegible]から響いて来る。

道傍の草叢の中には、[illegible]が赤く實り、野[illegible]の小さい花が[illegible]の灌木の茂みに差しかゝつて、小蟲が露に濡れながら這つて居る。

森の若葉の[illegible]れの音。

勇ましく[illegible]び立つ野鳥の群。

總ては目醒め動いて居る。

何と云ふ好い朝だらう！

私は、[illegible]に心を[illegible]せながら歩いて行つた。[illegible]を[illegible]し、草[illegible]を[illegible]り、[illegible]すると私は[illegible]の小學校[illegible]に出た。

[illegible]では[illegible]が[illegible]されて居て、[illegible]い[illegible]な教室の中には、小さ[illegible]色の黒い子供が[illegible]つまつて居るのが、外から見える。

私は[illegible]人[illegible]ない庭の芝草の上に[illegible]ながら自分の小學校[illegible]を[illegible]び出した。[illegible]の[illegible]び[illegible]が、[illegible]な[illegible]の[illegible]を[illegible]すなにたにつきり[illegible]ひ[illegible]すたびにつれて、[illegible]の時分、[illegible]へ来るとよく此[illegible]學校のオルガンを借りた事を思ひ出した

彼處いらの部屋らしかつたと思ひながら、一寸人の子供が立つたきり答へ窮して呆やり黒板を見て居る教室の中を眺めて居た。

すると、段々記憶が甦つて来るにつれて、最初に自分がオルガンを借りた時の様子がありありと心に[illegible]つて来たのである。

私はその時、白い透きとほるリボンで[illegible]の[illegible]にし、うす[illegible]色の着物を着て居た。

外國に居た父から送つて[illegible]た[illegible]を持つて、小學校に行つた。そして、たつた[illegible]居たまだ若い先生にオルガンを貸して下さいと頼んだのである。

今でも思ひ出す[illegible]の[illegible]、目の[illegible]い人の好さ[illegible]まだ二十[illegible]位だつた[illegible]は、私の様子をジロジロ見下しながら、[illegible]と[illegible]ませんと云つた。

[illegible]か[illegible]人に[illegible]、[illegible]れた[illegible]、れなくなる[illegible]まいと[illegible]ない内にオルガン[illegible]作[illegible]た[illegible]から、[illegible]を[illegible]し[illegible]。

私はすかなかつた。

私[illegible]つて[illegible]。

[illegible]もたま[illegible]。

そして暫くの間立つて居た先生はやがて少し腹を立てた樣な聲で、
「一體貴女は何處の人なんです？」
と云つた。
「私？　岸田の者だわ……」
たつた十ばかりだつた私はその時何と思つたのだらう！
「岸田の者だわ……」
私はどの位落付いて自信あるらしく云つた事だらう！　名を聞けばきつと貸すと云ふ事を明かに思つて、隨分としかゝつた心持で微笑さへしたではないか？
「あ！　然うですか。ぢやあ介意ひません。さあお上りなさい。」
と、導かれてどう云ふ滿足でもつてその鍵盤に指を置いたか！
今になつて私はその正直だつた若い教師を非常に氣の毒に思ふと同時に、私自身の態度の心持を堪らなく恥しくすまなく感じない譯には行かない。
小さい物も分らない私にまで、自分の理由のある出言を撤回した彼の教師が、あの若さでありながら平常からどの位、自己を枉げる事に馴らされて居たかと思ふと、ほんとに堪らない。
若し今の私がその教師だつたら？
私はどうしたつてきゝはしない。ましてそんな人を呑んで掛る樣な態度を見たら、どの位怒るか分らない。却つて叱つて／＼、叱りとばして追ひ歸すだらうのに。――
私は涙がこぼれさうになつた。
自分は缺點だらけな人間だけれども、そんな恥しい思ひ出にせめられるのは情ない。
重く沈んだ心持になつて、彼方の窓を眺めて居ると、子供達の頭の波をのり越えて、一つの顔が自分を見て居るのに氣が付いた。
其の顔は、殆ど四角に近い程顎骨が突出て、赤くムク／＼と肥つて居る。
非常に無邪氣な感じを與へる峯の太い鼻。睫毛をすつかり拔いた樣な瞼がピチ／＼として居る眼は、ふくれ上つて眼蓋と盛り上つた頰に挾まれて、さも窮屈さうに並んで居る。
私は、正直さうなどちらかと云へば愚直だと云へる程の顔をまじ／＼眺めて居ると、益々あの自分の我儘に己を枉げてくれた教師と非常に似て居る樣に思へて來た。
で、私は立ち上つた。そして、微笑を浮べながら丁寧なお辭儀をした。
私は滿足した。けれども、若者は[illegible]付いたり[illegible]妙な顔をして、[illegible]窓枠に[illegible]離れて、彼方に見えなくなつて仕舞つたのである。
彼は私がふざけたのだと思つたかもしれない。
けれども、これで、今も尚何處かの空の下に、此の同じ日光を浴びながら生きて居る彼の日の若い教師に對して、自分はしなければならなかつたものを、漸く果した樣な氣がした。
私は又幾分か心が安らかになつた。そして元來た道を戻つて、小川の所へ行つて見た。何時も誰かが魚を捕つて居る其處に今日は甚助の子供達が來て居た。
子供達は熱心にして居たけれども、流れの工合が惡かつたと見えて、網に掛るものは塵ばつかりである
暫くだまつて居た私はソト、
「ちつともとれないのねー」
と云つた。
其の時、初めて私が居るのに氣が付いたらしい子供達は皆ニヤ／＼しながら、顔を見合つて居たが、中の一人が、可笑しい訛のある調子で、
「ちつともとれねえのねー」

と口眞似をした。

此の悪戯はすつかり私を喜ばせた。

彼等がそんな事をする位私に、馴染んで來たのかと思ふと嬉しかつたので、私はしきりにほめた。

子供達は、私の笑ふ顔を薄笑ひして見て居たが、急に持つて來た鍋や鋤をとりあげると、何かしめし合せて調子を合せると一時に、

「ほいと！　ほいと！　ほいとほーつ！」

と叫んだ。

そして崩れる様に笑ふと、岸の粘土に深くついた馬の足跡にすべり込みながら、サッサと馳けて行つて仕舞つたのである。

私は、何が何だか分らなかつたけれども、果てもない川面をながめながら、非常に生々と快く響いた彼等の合唱を心の裡で繰返した。

「ほいと！　ほいと！　ほいとほーつ！」

私は小聲で口調みながら家に歸つた。

そして誰も居ない自分の書斎に來ると、彼の子等の仕た様に大きな口をあけて叫んで見た。

「ほいと！　ほいと！　ほいとほーつ！」

所へ、祖母が珍らしく妙に不愉快な顔をして入つて來て云つた。

「お前は一體何を云つて居るの？　そんな大きな年をして馬鹿をおしでない。」

私はちつとも知らなかつた。「ほいと」と云ふのは「乞食」を指す方言であつたのだ。

（八）

此の村の農民共は、子供の教育などと云ふ事を少許も考へて居ない。子供等は生み落されたまゝ、自然に大きくなつて男になり女になりして行くのである。

勿論彼等だつて子供は可愛い。けれども、すべて單純な感情に支配されて居る彼等は、子供を育てるにも、可愛いとなると舐殺しかねない程眞暗になつて可愛がる。

が、若し何か氣に入らない事や、憎い事を仕でもしようものなら、彼等はほんとに可愛さあまつて憎さが百倍になつて仕舞ふ。擲る蹴る罵る位はあたりまへで、ひどくなると傷まで負はせて平氣である。

そんな時は、子供だなどと云ふ氣持はなく、只憎らしい、只腹が立つ許りなのである。

其れ故、子供等は餘程健康な生れ附きでない、大抵は十にならない内に死ぬかどうかして仕舞ふ。

どんな木の實でも草の實でも、食べた、放題食べ、炎天で裸身になつて居ようと、冬の最中に水をあびようと、嚏一つしない人間が育つて行くのである。

病氣になれば、醫者にかけるより先づお禁厭をするので、腐つた水をのまされたり、何だか分らない丸藥を吞まされたりして、親達の迷信の人身御供に上るものは決して少くない。

體は丈夫に育つても、親達がその日暮しに追はれて居るので、子供を學校と云ふ處へはなかなかやられない。

女の子は早くから母親の代りをして家の事をとりしきつてしなければならず、男の子は必ず親達の世話や鋤の小仕事に使はれる。

小作の親達は、子供等が小作の境界から脱けられる丈の力をつけてやれないので、小作の子は小作で終つて仕舞ふのが、定りの様になつて居るのである。

うざ〳〵居る子供等は、段々衰へて來る親達に代つて、地主共の食糧を肥すべく育つて居る様なものである。

その様な様子なので、少し普通でない性格を持つた子は墮ちるなら墮ちる所へまで墮ちて、少し大きくなれば何處か好きな所へ飛び出して仕舞ふ。

ましで低能や白癡などはまるで顧みられない。村中の悪太郎の慰み物になつて居るより外ないのである。

其の善馬鹿とその子等も、村の者が笑ひのたねにこそすれ、心配してやる等と云ふ事は夢にも思はない。

善馬鹿の、名もない白癡の子は、豆腐を食べては子供等に馬の沓を押しつけられたり、髮が延びて居る所へ、藁切れを結びつけられたりして居るより外ないのである。

段々日數が經つて、少しつつ自分の願ひが叶ひさうになつて來るにつれて私は益々、白癡の子の事が氣になつてたまらなくなつた。

それで、私はどうにかして彼に近づかうとしたつけれども、それはなかなかな仕事で、私の變に臆病な心持が、どうしても彼の傍に私の足を止めて置かせない。四五度遣りかけてはやめやめして、到頭ある日の夕方、彼の傍に私は立ちどまつた。

大變な事でもする樣に、私の胸はドキドキした。私は、人が傍へよつても見向きもしない子供の顏を見ながら、何を如何云つて見ようかと云ふ事を散々迷つた。

けれども、どんな事を云つたら、子供の心を引く事が出來るか分らなかつたので、四苦八苦して漸々、

「どうして居るの？」

と云つた。

この一句が、口をはなれない内に、私はもう自分のやりそこないに氣が付いた。

どんな人でも、ぼんやりと、目にも心にも何にもたしかな物を見て居ない時、じつとして居るの？と云はれたら恐らく、答へに窮するにきまつて居る。

私は困つた事をしたと思ひながら樣子を見て居ると、彼は暫くたつてからのろのろと、顏を私の方に向けた。そして、非常に突出した、瞬きをする事の少い目玉を据ゑて、私を見て居る樣な位置になつた。

私も彼を見て居た。私は眞個に注意して、觀て居たのである。

さうすると、段々彼の顏付が凄くなつて、仕舞ひには、「彼の感じ」がそろそろと私の顏に乘り移つて來た樣な氣持がして來た。

もう、私は意地も我慢もなくなつた。そして、一散走りに家へ歸ると、力一杯顏を洗ひ、鏡を見つめて、漸々氣が休まつたのである。

最初の試みは、私の側の幻覺ですつかり失敗して仕舞つたけれども、それから二度目三度目になると、[illegible]

が、大抵[illegible]一緒に立つて居ても、何か云つて彼の注意力を[illegible]として見ても、一向效き目はない。

私は彼の周りを、常々廻りして居る樣な工合であつた。

善馬鹿の子に對しては、今に何も出來なかつたけれども、他の事は少しつつ好い方に向いて行つた。

足の裏の腫物のために惱んで居た百姓は、町の醫者に掛つて癒つた。

桶屋の娘へは、時々牛乳だの魚だのを持たせてやつた。

そして、ほんとに下らない事ではあるが、癒つた男が畑に出て居るのを見たり、甚助の子供が、遣つた着物を着て居るのを見たりする事は、無上に嬉しかつた。歩き出しの子供が、面白さに夜眠る事も忘れて歩きたがる通りに、私も一人でも自分の何かしてやる事の出來る者が殖えれば殖える程、元氣が付いた。又實際、どれ丈してやつたらそれで好いと云ふ見越しはつかない程、種々な物が乏しく足らぬ勝であつたのだ。

私は、自分の出來るだけの事を盡さうとした。

けれども、私は「自分のもの」と云ふ一錢の金も一粒の米も持つて居ないので、誰に何を一つやらうにも一々細君にたのんで出して貰はなければならない。

それが、私の仕ようとする事が多くなればなるほど屡々になり、隨つて段々たのむのが苦痛になつて來る。

が、然しそれは仕方がなかつた。私はほんとに、無盡な財産がほしかつた。そして、この村の中を驚くほど調つた、或程度まで樂な者の集りにして、貧しい者は人間だと思はない樣な者共の前に、突きつけて遣つたらと思はない譯には行かなかつたのである。

（九）

種々の新しい經驗が、私の心を喜ばせたり、驚かせたりして居る間に、たゆみない時の力は、せつせと眞夏のすべての樣子を育て始めた。

日光は著しく熱くなり、往還にたまつた白い塵は、益々厚くなつて一吹き風が渡る毎に、灰色の渦卷を起す。

麥燒きの煙が、青く活々した大空に立ちのぼり、輝かしい焔の上を飛び交ふ麥束や、赤く火照つた幾つもの顏が、畑地の彼方此方に眺められた。

前の池には、水浴をする子供等の群が絕えず、力強い日光の漲り渡る水面からは、日燒けのした腕、足が激しい水音を立てて出入し、鋭い叫び聲に混つてバシャ〳〵水のはねる音が遠くまで響き渡る。

森林は綠深く、山並みは明るく、稻妻は農民共を喜ばせながら、毎夕變化の多い雲間から、山の峯々を縫ふ。（稻妻の多いのは豐年のしるしだと彼等は云つて居る。）そして、家の四圍の耕地は美しい盛りになるのである。

總ての作物は殆ど實つた。

私の書齋から見える丈の畑地にも、豆、玉蜀黍、胡麻、瓜その他が皆熟れて、蕎麥の花のまぶしい銀色の上に、流れて行く雲の影が照つたり曇つたりした。

食べられる樣になつた杏、無花果などの果樹畑の傍から、ゆるい傾斜になつた南瓜の畑は、大きた葉かげに赤い大きな實が美しく、馬鈴薯は、收穫時になつたのである。

二人の小作男は、俵と三本鍬と「もつこ」とを持つて、朝早くから集つた。

葉のしなびかゝつた莖を拔き、その後を三本鍬で起して行く。

脊の低い、片目の男が、深く差し込んだ鍬をソーット上の方へ持ちあげて引くと、新しい土にしつとりと包まれた大小の實が躍る樣に轉がり出す。

それにつれて、思ひがけず掘り出された、小さい蟆共は、滑稽な周章て方をして、男達の股引に這ひ上つたり、さかさになつて軟かい泥の中に、飛び込んだりした。

私も裸足になり裾をからげて、一生懸命に藷掘りを始めた。

割合に風の涼しい日だつたので、仕事は大變面白かつた。

泥の塊りを手の中で揉んでは、出て來る藷を一つ〳〵もつこの裡へ投げて行くと、どうかした拍子に恐ろしく妙な物を、手の裡にまるめ込んで仕舞つた。

私は思はず大聲をあげた。止められない力で、グニャッとしたものをまるめるゝ、押し潰されてとび出したドロ〳〵に滑かな、腐つた藷が、手一杯について仕舞つたのである。

青黄色い粘液から、胸の惡くなる樣な臭ひが立つて、たまらない心持になるので、私は大

急いで、サク／＼な泥の中に兩手を突込んで、揉み落さうとした。
　けれども、前からの土がそのドロ／＼ですつかり固まり付いたので、なか／＼こする位では落ちようともしない。私は、もううんざりして、泣き出しさうにして居ると、笑ひながら馳けつけて來た男が、木の切れを横にして、茶椀の葛湯をはがす樣に掻き落してくれた。
「大丈夫でやす、お孃樣。命に關はる事ありやせん」
　私の周圍には、家の者だの傍の畑に居た小作共まで集つて、笑つて居たのである。
　ちよい／＼した物が收穫時になつて來たので、私共は毎日割合に農民的な生活をした。取れた物を小作に分けてやつたり、漬けたり乾したり、俵につめたりにせはしかつた。
　けれども、それにつれてほんとにいやな事も起つて來た。
　ちつとも氣の付かないうちに、畑泥棒に入られる事である。
　勿論此那事は、毎年の事である。決して珍らしい事ではないが、皆の氣持を惡くさせた。
　盜まれて行く物は少し許りの物であるけれども、自分等の盡した面倒だの愛情などを、取つて行かれるのが餘計腹立たしかつたのである。
　で、一日掛りで、一番よく無くなる南瓜に一つ一つ、大きな／＼番號をつけた。
　ふくれ返つた赤ら顏の上一杯に、「八」とか「十一」とか筆太に書かれて、ごろつとして居る姿は實に見物だつた。けれども、皆無駄骨になつて、翌朝になれば、中でも大きい方のが無くなつて居たりした。
　下女等は一番口惜しがつて、一寸でも畑地の中に烏鷺々々して居る者には、誰彼なしに、怒鳴りつけたり、小石をぶつけたりした。
　正直な彼女は、坐る時は何時も畑地に向いて張番をして居た。
　そんなだつたので、私などでさへ夜一寸氣晴らしに歩いて、うつかり畑に立ちどまつて居たりすると大きな聲で、
「だんだあ！　ぶつぱたくぞーツ」
と叱られた事さへあつた。
　處が或る非常に靄の濃い朝であつた。多分四時頃であつたらう。私は、例の通り何も知らずに寢込んで居ると、低いながら只事でない聲で、
「早くお起き。よ！　ちよつとお起き！」
と云ふ祖母の聲に呼び醒された。
　私は吃驚して飛び起きた。まだよく目が開かないで、よろ／＼しながら、
「何!? え？　どうしたの？」
と云ふ私を引つぱつて祖母は、雨戸に切つてある硝子窓の前に立たせた。
　初めの間は何にも見えなかつたが、段々目が確かになつて來ると、靄で曇つた硝子越しに、一箇の人影が南瓜畑の中で動いて居るのが見える。
「オヤ！」
　額をピッタリ押しつけて見て居ると、どうも盜つて行くものを選んで居るらしく、體が延びたり曲つたりして居る。
「もう朝だと云ふのに。まあ何て大膽な！」
　暫くすると、體は延びきりになつて、小路の方へ出て來た。手には大きな丸い物を持つて居る。
　南瓜泥棒は、歩き出した。そして、もう少しで畑から出て仕舞ふ所へ、スタ／＼ともう一つの人影が近寄つて行つた。それが祖母であるのは一目で分つた。
　私は、ハッとした。一體何をどうしようと云ふのだらう？　私は大急ぎで寢間着を脫いだ。
　そして、出て行つて見ると、それは又どうした

事だ！ 私が何とも云へない心持になつて、立ちどまつてしまつたのは、決して無理ではない。

赤地に白縞のある西洋南瓜を前にころがして、うなだれて立つて居るのは、彼の甚助ぢやあないか！

私は、自分の眼が信じられなかつた。又信じたくなかつたけれども、悲しい哉それは間違ひやうもない甚助だ。

私は、おづ〳〵彼の顔を見た。そして、その平氣らしい様子に一層喫驚したのである。

ほんたうに何でもなささうに彼は只立つて居る。只頭を下げて居る丈なのである。黙つて、祖母の怒つた顔を馬鹿にした様に上目で見て居る。

私は恐ろしい心持がした。彼はさうやつて立つて居る。が私共は此れから一體どうしようと云ふのだらう？

祖母も私も彼に何か云はうとして居る丈は確かだと思つた。

しかも、さも彼でも權利を持つて居る様に、又さも其れを振り廻して見たさうにして立つて居る自分等に氣が付いた。

祖母はきつと何か云ふのだらう。何か惡事だと云はれて居る事をして居る者を見つけた者が、誰でもする通りの、妙に慰む様にのろ〳〵と、叱つたり、おどしたりするのだらう。

けれども、彼は私共に見られたく無い所を見つけられた。それ丈でも十分ではないか？ 此上何を云ふに及ばう？ 千人が千人云ひ古した言葉を、クド〳〵と繰返して、荒立つた心持になつて見たところで互の心には何が遺るだらう。矢張り持ち古された感じが、さほどの效果もなく喰ひ入るばかりである。

私のする事は只一つだ。

何から先に云つて好いか分らない様にして居る祖母を、傍に引きよせて、私は一生懸命にたのんだ。

「どうぞそのまんま御歸しなさいまし。その方が好い―

―だつて……お前！―

―いゝえ！ それで好いんだから。きつと好いにきまつて居るんだから早くさうなさいまし。よ。早く！―

祖母は不平らしかつたけれども私の頼みを聽いてくれた。

「それを持つてお歸り。けれどもこんな事は、もう二度とおしでない―

と云つた丈であつた。

甚助は、さもかうなる事をちやんと前から知つてでも居る様に、何の感情も動かされないらしい顔をして、頭を一つ下げると、自分が買つたものの様に、ゆつたりと彼の南瓜を抱へてまだ人通りのない往還へ出て行つて仕舞つたのである。

私は、悲しいとも腹が立つとも云へない心持になつて居た。

けれども幾分の安心を持つて、

「私にはたつた一つの南瓜で、泥棒呼はりをする事は出來ない。」

と心に繰返したのである。

（十）

今まで、私が甚助の家族に對して仕て居た事は、たかが古着を遣るか僅か許りの食物や金を遣つた位の事である。

ほんとに小さい事であり何でもない事である。

第三者から見れば、總ての者には、皆世間並な、誰でも少しどうかした者の考へる事、爲る事で珍らしくも尊い事でもない、

私とても亦自分の僅かな施しから、大きな效

いを得ようとか、感謝を受けようとかは、ちつとも思つて居ないのである。

けれども、甚助のしたことは私に輕い失望を感じさせないでは居なかつた。何だか情無かつた。

それでも、只一つの事が、私を慰め力づけてくれたのである。それは、私が初めて自分の思つて居た通りに自分を處置する事が出來たと云ふ事だ。

私は怒りつぽい。ぢきに腹を立てる性分である。其故此頃では、どうかして餘り怒りたくない、寛容な心持で居たいとどの位願つて居るか知れない。けれども、自分の家に居て、弟達が何か自分の氣持を惡くする樣な事をすると、互の遠慮なさがつい怒らせる。それを今度は殆ど怒りを感じないで濟んだと云ふ事は、ほんとに嬉しかつた。

で、私は今度の事を、すぐと明るい方に許り考へたのである。此れからは、畑泥棒などと云ふ者は、影も見せない樣になるだらうと云ふ事は、決して空想許りではなく思はれた。

けれども、一日二日と經つまゝに、私の考へて居た事は、矢張り「實現し得ざる理想」――「お嬢樣のお考へ」に過ぎなかつたと云ふ事が分つて來た。耕地には前にも増して屢々多量づつの盜難が起る樣になつたのである。而も大びらに、生々した玉蜀黍が踏み折られて居たり、今までは無事で居た枝豆まで根こそぎ無くなつて仕舞つたり、家から遠くあなたにある池からは、慈姑がすつかり盜まれてさへ居た。

この有樣に私はすつかり間誤付いて仕舞つた。どうかして、誰一人厭な目を見ないで、納まりをつけて仕舞ひ度い。

けれども、これにはどうしたら好いのかと云ふ事になれば何一つ私には分つて居ないのである。

まるで、眞暗な中で、何處にあるか分らないマッチと手燭を搜して居る樣で、世馴れない心は、すつかり氣味が惡くなり、おびえて仕舞つた。

その上、何か一つ盜られる度に祖母が、さも辛さうに又皮肉に、

「今まではなかつたこつた。あゝほんとになかつた事だがねえ」

と、つぶやくのを聞かなければならないのである。

私は、自分の仕た事は間違つて居なかつたと斷言出來る。そして又、一方では、彼等が斯うなる樣に心を誘はれたのは決して無理ではないと思ふ。

然うすれば、結局どつちの遣り方が惡かつたのだらう？ 私は心の命ずるまゝにしたのだ。彼等も亦必要上、しなければならない樣な境遇に居たのだ。兩方ながら、然うしなければならないからしたのではないか？ 彼等もからならずには居られなかつたのだらうし、私も亦あゝしなければ居られなかつたのだ。或は、私の方からなる機會を與へた樣なものだから、間違つて居たかもしれないとも思つては見たけれども、然うだと斷定する事は出來ない。彼等が間違つて居たのかと云ふ事にも、然うにきまつて居るぢやあないか」とそれ程の斷言は下されない。つまり私には分らないのである。

此の事は、私に種々な事を考へさせた。そして、世の中のいろいろ事件が、所謂明快なる判斷力で、まるで何と云つて好いか素晴らしい無造作で、ドシドシと片づいて居るのが恐ろしいやうになつた。けれども、私は、この樣に種々の事が起り、考へずには居られなくなつて來るのは好い事だと、兎に角思つた。そして、起つて來る丈の事は正直に受け入れて、正

直に考へ感じなければならないと思つたのである。

その晩も私は獨りで自分の書齋に坐つて、彼れから此れへと考へて居た。外は非常に月がよかつた。で、いつもの樣に灯を消して、眞暗な處から世界の異つた樣に美しく見える、耕地の樣子や山並みを眺めながら居たのである。

すると、暫く經つてから、芝生の彼方の方から何か輕い音が聞えて來た。どうも何かの足音らしく調子を取つて居る。そして、其の草葉のすれる樣な、押へつける樣な音は、段々近づいて來た。

近づくに隨つて到頭それは人間が忍び込んで來たのだと云ふ事が分つた。

けれども私はすつかり安心した。何故なら、驚きの眼を瞠ぐ樣にして、小さい子供が長い竿を抱へて、抜き足差し足で入つて來たのを見つけたからである。

彼の行かうとして居る方には、家中で一番美味しい杏が、鈴なりになつて居る。

これで總ては分つた。私は、今まで居た所から少し奥に引つこんだ。そして、子供の仕ようとする事を見て居たのである。木の下まで忍び寄つた子供は、注意深くあたりを見廻した。生垣で隔つて居る部屋の方にまで氣を配つた。

けれども、猫でない彼は、眞暗闇の中に此の私が自分の一擧一動を見て居ようとは、まさか思はなかつたのだ。

やがて彼は腕一杯に竿を延ばした。顔をすつかり仰向けて、熟した果に覘ひをつけ、竿の先をカチ／＼と小さく揺ると、二つ三つポロ／＼と落ちて來る。

彼は二三度同じ事を繰返した。仕て見る度毎に結果は好いので、彼は段々勢付いて、子供らしい、すつかりそれに熱中した樣子になつて、四度目の時には、今までより餘程力を入れて枝を揺いた。

木の頭は大きく揺れた。そしてバラ／＼とかなり高い音を立てながら澤山な果が、下に居る彼の頭の上だの肩の上だのに飛び散つたのである。

彼は豫想外な結果にすつかり有頂天になつて、驚きと喜びの混つた、

「ヤーッ！」

と云ふ感歎の聲を、胸の奥から無意識に發した。

しかし、まだその聲の消えないうちに彼は自分の不用意に氣が付いた。急に自分の仕て居た事がすつかりこはくなつた。

今にも誰か出て來さうに思はれて來た彼は、せはしく彼方此方をながめると、いきなり體をねぢ向けて、大きな足音を立てながら、畑地の方へ逃げて行つて仕舞つたのである。

これを見た私は思はず微笑した。折角落した果を皆そのまんま殘して、自分の聲に嚇かされて逃げて行つた彼を見て、怒る事は出來ない。

何處の子だか知らないけれども、息を彈ませて家へ歸り付いた時、彼に遺つて居るものとては、果物の雨を身に浴びた時の嬉しさとその後のたまらないこはさ丈であらう。

愛すべき冒險者よ！　よくおやすみ　あしたもお天氣は好からうよ。

けれども、彼も亦私に辛い思ひをなさせる端貧しの一人だと云ふのは、何と云ふ厭な事なのだらう。

（十一）

或日突然私は桶屋から、彼の無心をかけられた。彼は、今までも餘り貧乏なので、困窮から種々面倒を見て貰つて居たのだけれど、村人の嫁を氣遣がつて、家へは餘り近づけられないで居たのである。

酒精中毒の樣になつて居るので、手はいつでも震へ顏中の筋肉が皆、顎の方へ流れて來た樣な表情をして居る。
　醉ふと氣が大きくなつて、殿樣にでもなつた樣に騷ぐけれども、素面の時はまるで馬鹿の樣に、意氣地がなくなつて、自分より二十近く年下の後妻に、音なしく使はれて居るので、皆の物笑ひになつて居る。
　その彼が、祖母が墓參に行つた留守へ來たのである。
　大の男がたつた五圓の金を貰はうとして、幾度お辭儀をし、哀れみを乞うた事か！
　彼は、命にかけてお願ひするとか、御恩は一生忘れないとか、それは〳〵齒の浮く樣に人を持ちあげた口吻で、
「お孃樣のお爲にやあ火水も厭ひましねえ、はい、そりやほんのことでござりやす」
と繰返し〳〵云つた。
　生れて初めて直接に金を借りようとする者の、極端に己れを低めた言葉態度を見た私は、妙な極り惡さと、自分自身の滑稽らしさとに苦しめられたのである。
　愚にもつかない讃辭を呈せられたり、おだてられたりするのを、別にどう爲ようでもなく、如何爲よう力もなく、聞いてすました樣子をして居る、こんな小つぽけな一文なしの私は、其れを知つて居て見たらどんなにみつともなくも亦、馬鹿らしく見えた事であらう。私は、前からよく女中に、私共の遺つて居る食物なども、大抵は彼等夫婦で食べて仕舞つて、肝腎の病人には屆かない時が多いと云ふ事を聞いて居たので、どんなにして遣つた所で、又飮まれて仕舞ふのが落ちだと云ふ氣がした。
　それに、何に五圓入用るのだかと云つても、はつきり譯も云はないので、益々私の疑は深くなつた。で、私は自分の金は一文も持つて居ない米喰蟲なのだから、今直ぐどうして遣る事も出來ないと斷つたのであつた。
　けれども、彼の方では、まだお世辭が利かない故だとでも思つたと見えて、思はず笑ひ出す程、下らない事まで大げさに有難がつたり、吃驚したりして喋り立てるので、私はもう眞面目に聞いて居られなくなつた。
　私は、笑つて〳〵笑ひ拔いて仕舞つたので、彼も何ぼ何でも自分の口から出まかせに氣が付いたと見えて、ニヤ〳〵要領を得ない笑ひを洩して、有耶無耶の裡に喋り損をして歸つて行つて仕舞つた。
　此の事は、初めから終りまで馬鹿々々しさで一貫しては居るが、彼は今無ければどうなると云ふ程でもない金を、若しあはよくば」と云ふ樣な下心で「せびつて見た」と云ふやうな樣子に氣が付くと、只の笑ひ事ではなかつた。
　若しも、私が出して遣りでも仕ようなら、誰も彼もが皆體の好い鴨りになつて仕舞ひさうだ。
　私のする事が、皆あまり嬉しくない結果許り生むのが、益々辛くなつて來たのである。
　兎に角、此等の事がある樣になつてからは、私の周りには、段々澤山「得なければならない」者共が集つて來た。
　小さい娘の見る狹い世界から拔けて居る事の、不利益を知る程の者は、何か口實を設けては訪ねて來るのである。
　只單と云ふ丈の樣になつた女房共の、騷々しい追從笑ひや世辭。
　裸足で戸外を馳け廻つて居た子供の、泥だらけな體が家中をころがり廻る騷ぎ。
　其等の、何の秩序も拘束もない亂雜には、單に私の毎日をごみ〳〵した落付のない樣にしたばかりでなく、家全體をまるで田舍のよく流行る禁厭所の樣にして仕舞つた。

祖母やその他家族の不平は、私一人に被さつて、子供が爐へ水をひつくり返したのも、下らない悪戯を、朝から聞かされなければならない事も皆私がこんなだからだと云はれなければならなかつた。

このやうな裡にありながらも、私は出來る丈彼等に好意を持ち續けようと努めた。

けれども、いそがしい仕事のある時、彼等の仲間になつて聞き飽きた、その當人よりよく知つて居る様な噂や繰言をぢいつとして聞かなければならないのは、ほんとにたまらなかつた。

どうせ、出された物だと云ふ様に、腹がダブダブするほど茶を飲み菓子をつまんで居る彼等を見ると、私はほと／＼途方に暮れた様な氣がした。

随分あきらめた様な、希望のある様な心持で、彼等が立つと、祖母がやる事にきめて居る着物の地を染めたり、絞つたりしながら、自分の仕て居る事が自分で分らなくなつて來たのを感じて居たのである。

（十二）

私の周圍が此の様な狀態にあるうちに、町の婦人達の間には、或る計畫が起つて居た。

町の東北隅に新教の基督教會がある。創立後まださほどの年數は經つて居ないのだけれども、繁昌すると云ふ點に於ては、成功して居た。

初めて此處に來た外國人の代には、眞面目な信者が少しづつ集る位の事で、至極目にも立たないものだつたけれども、すぐその後を受けて來た牧師は、非常に氣輕な男で「なあに貴女、私共だつて人間ですからなあ」と云ふ様な調子であつた。

それが、町の所謂上流婦人連の同情を得て「面白い牧師さんですわね」と云ふ事から、めつきり教會がにぎやかになつて來たのである。

そして、今では三代目のこれも恐ろしく人の好い愚直と云つた程の牧師が、殆ど女連の御蔭で維持されて居るやうな教會を管理して居た。

種々な意味で大切にされて居た先代は、去年の夏腦溢血で、ほんたうに天國に行けさうな死にやうをしたのである。

まだ割合に年も若く、絶えず東京風の裝に苦心して居る位の婦人達は、教會を一つの交際機關として利用して居た。そして或時は説教よりも互の身なりの觀察が重要な事であり、神の祝福を受けながら着物の柄を考へる事が大切であつた。そして如何にも「女らしいすべての點」を備へた會合が催されて居たのである。

處が、此の八月の二十四日が先代の牧師の初めての命日であると云ふ事は、何か變つた事もがなと思つて居る婦人連にとつては、此上ない機會となつたのである。花の日會などと云ふ派手な催しのある事を聞いて、胸をわく／＼させながらもぢいつと我慢して居た人達なので、何か記念の仕事を爲ようと云ふことは、一も二もなく贊成された。

そして、種々評議された末、終に故牧師が埋められて居るK村の貧民に、僅かづつでも、「ほどこし」を爲ようと云ふことになつた。

故人が、貧民救濟には、随分心を用ひて居たのだけれども、多用だつたり、基金が無かつたりして、意のまゝにはならないで終つて仕舞つたから、自分達がその遺志を繼ぐのは當然の事であると云ふのであつた。

婦人達は皆勢付いた。そして、早速寄附帳を作つて、町中の少くとも誰さんと云はれる程の人へは、殘らず配付して、お志の御寄附を勸誘したのである。

其の珍しい印刷物を手にした者は、皆様々の

思ひに打たれた。或る者は喜び、或る者は身に及ばない事ではあるが、どうかして仲間から脱けたくないものだと云ふ苦しさに迫られた。

町中は此の噂で一杯になり、町が始まつてから初めての事だと云つても好い位、女の人の仕事の稀な此の土地では、天道様が地面から出た樣な騷ぎであつた。

けれども、ぢきに種々な苦情が起つて來て、關係者を非常に困らせた。

それは、此那女が委員だとか何だとか、麗々しく名を出して居るのに、一體私はどうしたのだ、と云ふ樣な事から、誰彼の差別なく名を並べて置くよりは、會長とか副會長とかから、末は馳り使ひまで明かな役名をつけて置かなければ不可ないと云ふことである。殊に、その候補者の中には自分をも加へて居る自信ある夫人達は、熱心にその必要を稱へたのである。

女の仕事は兎角事務的でない、責任を感じないと云はれて居るのだから、私共は時局に鑑みて出來る丈完全な事をしなければならないと思ひますがと云ふことが、段々大きな聲になつて來たので、到頭すべてを選出する事になつた。これは益々町を只事でなくした。會長、副會長の望みのない者は、せめて一歩でも誰々の上に出ようとする。甲が思へば乙も競つて居るので、互の要求が衝突する。表面が平穩である所謂婦人のつゝましやかに被はれて居れば居るほど、內輪では青くなり赤くなりして、自分の良人は彼の人のよりは上役なのだからと、狹い郡役所の二階でほか役にも立たない權利までも利用して掛つたのである。そして、散々ごたついた末漸々役割りが定まつて、事がどうやら落着いた。勿論小さい不平は決して納まつた譯ではない。會長に選まれた婦人は、町で一番大きな病院長の夫人で山田院長夫人と呼ばれて居た。別に力量がある譯でもなしするけれども、若し彼女の野心を滿たして置かないと、あとの祟りが恐ろしいと云ふのが最大原因であつたのだ。

彼女は四十餘りの大變肥つて脊の低い人である。化粧に使ふ鏡は丁度胸位までしか映らないものだつたので、帶から上と下とはまるで別人の樣な恰好をして居る人である。大きな束髮と耳朶や頸がぶちまだらではあつても念入りな彼女の「ちつともかまひません」化粧と、大きな帶で坐つて居る時の夫人は、實に素晴らしいものだけれども、一旦立たうものなら中心を失つた樣に大きな重さうな、上半身は內輪にチョコチョコ運ぶ足では、體を支へ切れなささうだ。肩を互ひ違ひに前後に振る樣は、晴れの場所を通る時、極りが惡い樣な氣もするが、隨分得意の時に特別ひどくなつて、息のつまりさうな頭をフラ〱させ、千切れさうに體を振つて行く樣子を見ると、どんなに敵意を持つた者の心でも和らげられて仕舞ふ。彼女は、自分が押しも押されぬ會長樣と定まつてからは、もうすつかり落着いて、只人の口の端にのぼる類ない自分の令聞を小耳に挾んでは滿足げに、うなづいて居た。

そして町長の夫人が二年前に死去したのは、何と云ふ感謝すべき事かと、人知れず其の神に詣でたのである。若し、彼の夫人にひよんな事がなかつたら、今日自分はどうしてこの位置を贏ち得ただらう！　ほんたうに、まあ何と云ふ運の好い自分だらうか！　と。

斯樣にして、初めはさほど大仰にする積りではなかつた事が段々大きくなつて來たので、到頭奧樣達の手には負へない程になつて仕舞つた。

牧師は、朝から晩まで祈る暇もない樣にして、金の保管やら事務の整理にこき使はれて、

「それも道のためでございますわ、先生。」

といつも言葉を添へては、少し齒に合はない事々は、あらひざらひ、まるで川へ芥を流し込む様に押しつけられた。

額に三本ほど白い髯が戦いで、左の手の甲に小豆大の疣のあるのを一言口を動かす毎に弄るので、それが近頃では、大變育つて來た彼は、白木綿のヨレヨレの着物に襷をかけて、毎日をどれ程短く暮して居る事か！

婦人達は額を見合せる毎に、

「あれがすみますまではお互様にねえ、随分いそがしうございますこと」

と、自分等の間丈の符牒で話し合つては嬉しげに笑つた。

物見遊山に行く前の様に何だか心嬉しく、そはそはした心持で、わけもなくせはしがつて居るうちに眞に困り切つたことが持ちあがつて仕舞つたのである。

これは、どんなにしても、二十四日までの間には合ひかねると云ふ事である。

これには皆當惑した。泣いても笑つても、もう追付かないので、何もその日にきつかり出來ずとも、最も良い結果を得さへすれば、二日四日の日などを、故の先生は氣にも御止めなさるまいと云ふ事になつて、一週間の猶豫が善良なる故牧師の靈から與へられる事になつた。

婦人達の口は、暫く故人の厚德を稱へ、確かに天國に安まつて居ると云ふ斷言に忙しかつたのである。

いよいよ日が迫つて、寄附締切りの日には教會の内壁に紙を下げ、一々寄附金額を書き並べた。そして、その下に犇き合つて、

「あら！ まあ一寸御覽なさいましよ。彼の方はあんなに出していらつしやる——。流石何と云つても御暮しの好い方は違ひますねえ」

と感嘆する婦人達の間を、筆頭に、

「一金百圓也。會長閣下」

と書かれた山田夫人が、氣違ひの様に肩を振り振り歩き廻つて、何か云はれる毎に、

「いゝえ、どう致しまして。御恥かしいんでございますよ」

と云ひながら、一金百圓也を睨み上げた。

總ては驚くべき貴婦人らしさで進行して行つたのである。

（十三）

町の婦人達の間に、此の計畫のあると云ふ噂は、直ぐ私共の耳にも入り、次で村中に擴がつた。

日數が立つまゝに、段々其の事は事實となつて來たので、乾いて居る村の空氣は何となし、ザワついて來た。何處でも此の噂をしない所はない。

貧しい者共は、盆の遊びを繰越して、金も貰はないうちから貰ひ度い物の取捨選擇に迷ひ、彼處の家では俺ら家より餓鬼奴が澤山居つから、十分に貰ふんだらうと云ふ羨みなどから、今まで邪魔にして居た子供等を一夜の間に五人も十人も殖やし度い様な事を云つて居る。そして、只さへ働き者ではない彼等は、斯うやつて汗水たらして一日働いた幾倍かの物が今に來るのだと云ふ様な思ひに心をゆるめられて村全體にしまりのない氣分が漲り渡り始めた。

が、依然として、私の家には朝から日が暮れるまで、「行けば何にかなる」と云ふ者が、來つづけて居たのである。

何だか自分の副業の様にして、愚癡をこぼし哀みを求めて、施されると云ふ事は即ち、自分等がどうなるのだと云ふことなどを考へもしない、又考へる事も出來ない彼等を見ると、私は種々な事を考へさせられた。

「今度の事は好い結果を得るだらうか？」

此れが第一私の疑問である。而も直接自分自身が苦しめられて居る、疑ひなのである。

彼等は只買ひさへすれば好い、買れる分には、どんな物でもいやだとは云はない。

けれども、一枚着物を買へば、前からの一枚はさつさと着崩して捨てて仕舞ひ、餘計な金が入れば下らない物——着る事もない樣な絹着物だの、靴だの帽子だのと云ふ彼等の贅澤品をせつせと買つて、平常押へられて居る、金を出して物を買ふ面白さを十分に貪つて仕舞ふのである。

其故、五圓あらうが十圓あらうが、つまりは無いと同じ事で、その金で買つた物も、しばらくして困りきつては町へ賣つて仕舞ふ。

金も、物品も、その流通する間を一寸彼等の所へ止まるに過ぎない。

年中貧しくて、彼等には只、あゝ云ふ着物も買つたことがあつたつけ、あれ丈の金も持つたことがあつたつけがと云ふ記憶だけが、それもぼんやりと遺るばかりなのである。

私は此頃になつて、ほんとに難かしいものだと云ふ事をつくづく思つて居る。寛くすればつけ上る、嚴しくすれば怖ぢけて何を云つても返事もしない樣になるのは、彼等の通癖である。

婦人連が彼等にめぐむ事に若し成功したら？ ほんたうに、彼等の生活の足しになる事が出來たら？ それはほんたうに結構な事である。

けれども、私にとつては、只單純に結構な事ではすまないのである。

私は、自分を此の村に關係の深い、此の村に盡すべき事を澤山に持つて居る人間だと思つて居る。そして、少しづつでも仕出した仕事は、失敗しさうになつて居る。

其處へ、遠くはなれて、各自には別に苦しみもせず、さほどの感激も持たない人達のする事だ。彼等の上に非常に效果があるとしたら、此の自分は、どこまで小さな無意味な者だらう。

私は、彼等とはまるで異つた心持で、彼等の所謂福の神の御來光を待つて居た。

所へ、突然思ひがけない事件が持ち上つて、村中の者の心を動かした。

それは水車屋の新さんが豆の俵を持ち出して賣つて仕舞つたと云ふことである。其の二俵の豆は、勿論餘所から粉にする樣に頼まれたものなのである。

親の金を持ち出したり自分の家の物を盜んだりした經驗の一度や二度、持たない者のないやうな村人の事であるから、只それ丈の事なら、皆の茶話にも出ないで消えて仕舞つたゞらうが、新さんが名うての正直者で、おまけに又、これは名代の慾張りで種々評判を立てられて居る女なので、皆の好奇心を煽つたのである。何故か此裏には魂膽があると云つて、私の家へ來るもので新さんの噂をしない者はない程だつた。

私は、その新さんと云ふ男には、たつた二度ほか口を利いた事がない。隨つて、どんな男だか、はつきりは分らないが、内氣さうな低い聲で、大變丁寧に口を利く人だと思つて居た。私にも、彼の男がそんな事は仕ない、又出來ないと思はれたけれども、彼の實のおふくろが家へ來るたんびに、ほんたうに怒つて眞赤になりながら、

「俺らげの燒り損ひ奴にもはあ、ほんにこまりやす。おめえさまお聞きやしただべえが、飛んでもねえことを仕出來しやがつてからに……」

と、新さんがその豆を賣つた金で、町の女郎屋に五日とか六日とか流連けたと云ふことを、大きな聲で罵つた。で、私は親身の親の云ふこともまさか譃だとも思へず、さりとて新さんがそんな事をしたとも思へないで、半信半疑の裡に此の事の成行を見て居たのである。

一體、水車屋は、二年前に亭主が亡くなつてからよくない噂ばかり立てられて居た。

その時分からもう、北海道に出稼ぎに行つて居た新さんを呼びよせもしないで、自分獨りですべてを取りしきつて居るのも皆陰に操る者があるので、隣村の傳吉と云ふ同じ水車屋が、僅か許りの桃林も何も彼の自分の物にして、新さんを追ひ出しに掛つて居ると云ふことは、誰一人知らない者がなかつた。

新さんは、十六の年から北海道にやられて、此の五月になるまで、七年の間女房を持てる丈稼ぎためたら歸つて、おふくろにも樂をさせてやり、家の中をちやんとしたいと云ふことばかりを樂しみに、惡遊び一つせずに働いて居たのであつたさうだ。

處が運惡く肋膜病になり、醫者にすゝめられたので、久し振りに歸つて來た時には、八十圓の金を持つて來た。

[illegible]いに似合はず感心な事だと、私の祖母なども祝ひをやつたと云ふほど村中の者に尊敬されて居たのである。

けれども、一度借金の事から取り上げさせて時に狂氣になつた事があつてからと云ふもの、何でも中途でも金の事にかゝると、理も非もなくなる彼のおふくろは、病氣だと聞いて、厄介者が何しに來たと云ふ様に取り扱つた。

それが辛いので、新さんは、町の醫者に掛る入費や自分の小遣ひなどは皆自分の懐から出して、その上四十圓程の金をおふくろに遣りました。

けれども、時々不用心に胴卷を投げ出して置くと、僅かづつ中が減つて行くと云ふ事や、大の男をつかまへて、おふくろが何ぞと云つては打擲したり、罵つたりすると云ふことまで、私共の耳へ入つたのである。

それだもんで、村の者は新さんに同情をし、どうしてもおふくろには面白くない噂が立つので、新さんは板ばさみの辛い目に合はなければならなかつた。

處が、或る日急に新さんはおふくろから、豆を盗んで賣り飛ばしたと云ふ罪で攻めたてられなければならない事になつた。

正直な彼は大間誤付きに間誤付いて、一體何が誰にどうされたのやらまるで分らないので、返事も出來ずに居るうちに、おふくろの方では村中に此の事を云ひふらして歩いた。

どう考へても新さんには其の事が分らなかつた。何時か、そんな事でもあつたかしらと思ひ出さうとしたところで、まるで覺えはないしするので、煙の裡をでも歩く様な氣がして、何だか不安な、ほんたうに自分の身に後ろ暗い所でもありさうな目を送つて居たのである。

此の様な有様で、村中の者共は皆非常な興味を以て、事件の裏にひそんで居る事をさぐつて見ようと思つて居た。

私は何にも彼等に關して知つて居なかつたので、どう想像する事も出來なかつたけれども、どこにでもある世話燒きが、自分の本職の様にして、せつせと彼方此方から探りを入れ始めた。

さうすると、意外にもその問題の依などは初めから根もないことで、只謝罪金に今新さんの持つて居る金を、皆取りあげようとする方便に捏造されたものだと云ふ噂が、次第に事實として騒ぎ出されたのである。

新さんは、飛んでもない事だと思つて、おふくろを辯護し、その噂を押し消さう／＼と掛つた。

けれども、新さんの心は段々暗くなつて來た。自分の身が悲しく、ほんとに此のおふくろの實の子かしらんと云ふ疑ひも起つて來たのである。

私は青い陰氣な顔をした新さんが、一心配で餘計面窶れした樣な風で暑い日中被る物も無しに、村道をボコ〳〵歩いて居るのを見ると、ほんたうに氣の毒になつた。

けれども、二十三にもなつた男一人が、物の道理も分らないおふくろの自由にされて、苛められても恥かしめられても、只一言云ひ爭ひもせず、只彼女の辯護ばかりして居るのを見ると、妙な心持にならずに居られなかつた。

何だか、何處かに私共より偉い所を持つて居るやうな氣がして、どんなに氣の毒だと思つても、他の人々への樣に、僅か許り食物をやつたりする事は出來ない。

道でなど會ふと、私はほんたうに心から挨拶をして、丁寧に病氣の鹽梅を聞いた。

隨分氣分の惡さうな顔をして居る時でも、彼は、

「おかげさまで、段々樂になりやす」

とほか云つた事がなかつた。

（十四）

新さんの事があつたので、三十一日はかなり早く來た。二百十日前の其の日は、大變に朝から暑くて、鈍い南風が、折々木の葉を眠さらに渡つた。

平常より早く目を覺ました私は、何時もの散歩がてら村を歩いて見た。

家々はもうすつかり食事までも濟まして居る。前の廣場だの、四辻だのには、多勢の大人子供が群れてガヤ〳〵云つて騷いで居る。

けれども、私の驚いた事には、彼等の着物や何かが昨日とはまるで別人の樣に、汚くなつて居る事である。女達は、皆蓬々な髮をして、同じちやんちやんでも何時洗つたのか分らない樣なのを着て居る。裸體で裸足の子供達は、お祭りでも來た樣にはしやいで居るし、ちつとも影も見せない樣にして奧に冷遇されて居たよぼよぼの年寄や病人が、皆往還から見える所に出て來て居る。

桶屋でも、あの死ねがしに扱つて居る娘を、今日は、特別に表の方へ出して、襤褸々々になつた寢具を臆面もなく、さらけ出して置く樣子は、私に一向解せなかつた。

村中は、もう出來るだけ穢くなつて、それで居て私が今まで一度も見た事のない程活氣づいて居る。

けれども、見て歩くうちに、段々彼等の心がよめて來た。そして、人間もどこまで慘めな心になるものかと、恐ろしい樣な情ない樣な心持になつて仕舞つた。

私は、何だか自分の力ではどう仕やうもない事が、起つて來た樣な氣持になつて、家へ歸つた。

家の中は相變らず平和に、清潔に、昔ながらの家具が小ぢんまりと落着いて居る。

私は、折々縁側に立つて向うの街道の砂塵の立つのを見て居た。町から此の村へ來る者は、一人々々此處から見えるのである。

けれども、間近くなるまで、町の者らしい者は一人も通らなかつた。

處が、もう十一時頃になつて、澤山の人力車が列になつて暑さうに馳けて行つた。中には、種々な色の着物が見える。町の婦人達の仕事は、これから始まらうとするのであつた。

村の入口で婦人達は車を下りた。そして、會長夫人を取り卷いて、ガヤ〳〵歩き出しの相談をして居る周圍を、裸身に赤ん坊を負ぶつた子守だの女房共だのが、グルッととりかこんで、段々外側から押しつけ始めた。

貧乏な女共は、吃驚して町の「奥樣方」を觀た。

光る櫛の差さつた髮、刺繍だらけの半襟、又

は指中に燦き渡つて居る赤や青や白の指環をながめた。指環をはめて居ない人はない。皆手に小さく美しい袋を下げて居る。まあ帶の立派だ事！　どんな白粉ならあゝむらがなく付くのだらう？　あら！　あんな洋傘もあると見える！

　女共は頭が痛くなるほど羨ましかつた。同じ女に生れて、自分等のやうに死ぬまで泥まびれで居なけりやあならない者があるかと思へば、こんなお化粧をして、金を撒いて居られる人もある。

　何て立派なんだらう！

けれども……。

　女達が妙に思つたのは無理もない。町の奥さん方は、ほかに金ぴか〳〵で居ながら着物は皆メリンスばかりであつた。

　それは、「質素を旨とし衣服はメリンス以下なるべきこと」と云ふ條件があつたので、賢明なる婦人達は、その箇條を正直に最も適當に守つたのであつた。

　やがて婦人共は歩き出した。

　派手な色彩の洋傘が、埃だらけの田舍道に驚くべき行列を作つた

　第一に止まつたのは桶屋の所である。

　後をゾロ〳〵ついて來た者共は、先を爭つて間口一杯に立ち塞がつたので、妙に暗く息のこもつた様になつた部屋の中には、股引一つの桶屋と、破けてボロ〳〵になつた「ちやんちやん」を着た女房が、幽靈のやうな娘を眞中にして、ピッタリと御辭儀をした。

　會長夫人はふくみ聲で難かしい漢語を交へながら、今度の自分等の目的を説明した。

　桶屋夫婦は、何の事やらさつぱり分らなかつたけれども、只御辭儀ばかりをして居ると、會長夫人は一寸指で合圖をした。

　すると、中の一人が朱塗りの盆の上に大きな水引のかゝつた包みをのせて差し出し、集つた者どもの羨望の囁きにとりまかれて、桶屋の前に据ゑられた。

　彼等は、飛び付き度い程嬉しかつた。けれども、強ひて落着いて云へる丈御禮を云ひ御世辭を並べながら續けさまに頭を下げた。

　そして、仕舞ひには腹が立つて來て、

「人こけにしてけつかる。行げつちやあ！」

と怒鳴りたくなつて來るまで、婦人達はだまつて頭を上げたり下げたりさせて見て居たのである。

　終に婦人は歩き出した。彼等はホッとした。

　そして、まだ一人二人の女は自分の軒の前に居るのにもかまはず、桶屋夫婦は包みを兩方から引つぱつて、急いで間誤付きながら開けて見た。

　中には五圓札が一枚入つて居た。

　二人は札の面を見た瞬間、彈かれたやうに顔を見合せて、ニヤリとした。

「當分樂が出來んなあ」

「ほんによ。そんにこんねえだの帶も買えるしな」

　女房は云つて仕舞つてからハッと氣が付いて、娘の方を見ると、ぼんやり疲れきつたやうにして、揉みくちやになつた水引だの、「病人見舞金」と楷書で書いてある包紙を見て居る。

　女房はチョッと舌打をして、男に耳こすりをした。亭主もその紙を見て、娘を見て云つた。

「なあに大丈夫よ。奴にやあ分んねえ」

　娘は、暫くすると、よろ〳〵しながら臭い夜具を引きずつて、又暗くじめ〳〵した奥へ引つこんで仕舞つたのである。

　婦人達は、一軒々々に同じ文句を繰返しては、鷹揚に會釋をし、自分の品を上げるとも下げない程の同情を表した。

　そして特に會長夫人は、何時も「えゝ、さう、

さら、さら、さらですよ」と胸まで首を曲げて返事をする代りに、今日は默つて大きく頷く丈であつた。而も心の中では、あゝよし／＼とつぶやきながら。

一行は行く先々で感謝せられ尊敬せられ又驚かされた。

婦人達は皆、自分の仕事に滿足した。

「人にほどこしをするのは、何て面白いのだらう！」

けれども、段々疲れて來ると、同じ樣なお辭儀だの、御禮だのを聞くのにも倦きて來たし、自分等も一々丁寧に同情を表したり說明したりするのも厭になつて來て、仕舞ひには、會長夫人が一寸立ちどまつて會釋するあとから、直ぐ金包みを投げ込んで、先へ／＼と急行し始めた。

後について居る者共も、段々馴れるにしたがつて、婦人達に聞えるほどの惡口を云つたり品定めをしたりするやうになつたので、婦人達は、益々うんざりして來た。

喉が乾いたり、暑かつたり、化粧崩れに氣が氣でなくなつた一行が、皆いら／＼した氣持で或る百姓家の前に來かゝつた時、いきなり行手を塞いで燒け付く樣な地面に坐り込んだ者がある。

餘り突然な事に喫驚して、婦人達は後しざりを仕ようとすると、すぐ手近に立つて居た一人の裾を兩手で摑みながら、

「おつかねえもんぢやありやせん。どうぞ御願えを御聞き下されし」

と涙聲を振り絞つたのは、誰あらう善馬鹿のおふくろである。

婆の後には、善馬鹿と白癡の子がぼんやり立つて居る。婦人達は間誤付き、ついて來た手合は笑ひながら立ちどまつた。

狒々婆は軋む樣な聲を張りあげた。

「お情深え奥樣方！　どうぞ此の氣違え息子と、口も利んねえ馬鹿な餓鬼を御覽下さりやせ」

「どうぞ奥樣！　俺らが樣なものこそ一憫然がつて下さりやせ。どこに俺等ほど情ねえもんがありやすツペ。どうぞ御惠み下さいやせ」

裾をつかまへられた婦人は泣聲を立てて、

「まあ、どうしたのです。さあ、其處をお離し！　行きやあしませんよ。さあ早くお離しつてば！」

と、自分の方へ引つぱつても、

「いんえ、離しやせん。金輪際離しやせん。どうぞ聞いて下され。ほんに俺らがやうに……」

と尙強く握つて地面にへばり付いた。餘りの事に婦人達は、總がかりになつて、婆を離したり、騙したりしたけれども、なか／＼離しさうにもない。

皆が、梃摺り拔いて、着物の裾を引つぱり合ひながら、途方に暮れて居る樣子が餘り滑稽なので、周圍の者は、思はずドツと囃し立てた。

さうすると、いきなり人垣の間を分けて、犬の樣に飛び出した一人の男の子が、

「やーい！　やーい！　醜態見ろやい！

と叫びながら、手足をピン／＼させた。

甚助の子である。

其の一聲に、何か云ひ度がつてムヅ／＼して居た他の惡太郎共の口は一時に開かれた。

「弱えなあ。其那ぢやらくらした阿魔ッちよに何出來ッペ！」

「婆樣手傳つてんべえか！」

黄色い砂塵に混つて、ワヤ／＼云ふどよめきの中を、

「お情深え奥樣方！　どうぞ御きゝ下され。俺らげの氣違えと白癡野郎が……どうして生ぎて行かれますツペ！」

と婆の聲が、切れ／＼に歌の樣に響き渡つた。

婦人達はすつかり度を失つて仕舞つた。逃げ出したくはあつても、獸の樣な彼等に敗北して行くのは餘り口惜しい。皆興奮し、ヒステリックになつて一寸指を指されても大聲を上げさうになつて居ると、甚助の子は、呆やり立つて居る善馬鹿の耳端で何かさゝやきながら、妙な身振りをして彼を突飛ばした。

突飛ばされて、彼は眞直に婦人達の中に入つて、

「へ……。へ……」

と笑ひながら、見て居られないやうな樣子を仕始めた。

婦人達は恥かしさと、怒りで眞赤になり、袂を顏にあてながら、

「失禮ぢやありませんか！」

「餘りです！　何をするの？」

と叫びながら立ち去らうとした。

斯うなると貧民共の獸性はすつかり露骨になつて仕舞つて、大人までが聞くに堪へない冗談を浴せかけた。

會長夫人は氣が違ひさうになつた。そして涙を目一杯にためながら、傍の人から金包みを引つたくると、狒々婆の顏へギュー〳〵と押しつけて叫んだ。

「は、早く行つて下さい！　餘り、餘りひどい。さ！　さ！　早くつてば！　餘り……」

婆さんは漸々立ち上つて、善馬鹿を向うに突飛ばしながら、非常に落付いて、

「どうも御有難うござりやした。御かげさまではあ三人の命がたすかりやす。御恩は決して忘れましねえ」

と云ふと、三人一かたまりになつて、滿足げに行つて仕舞ひ、人々の騷ぎは餘程鎭まつた。

流石の婦人達も暫くは、氣抜けのした樣に立つたまんま、何うする事も出來ずに居た。

けれども間もなく、會長夫人は辛うじて其の威嚴を回復して、群集一同を恐ろしい目で睨み廻した。そして、默つたまんま皆の先に立つて歩き出した。

何と云ふ歸り道のみすぼらしさだらう！　甚助の子は遠くの方から、馬の古靴をなげつけたり、犬を嗾けたりしてついて行つたのである。

（十五）

町の婦人達は來た、金を撒いた、そして歸つて行つた。

只それ丈の事である。けれども其の爲に、狭い村中の隅から隅まですつかり掻き廻されて仕舞つた。

子供等は、盆着を着せられて、村に只一軒の駄菓子屋の前に、群がつてワヤ〳〵云つて居る。

大人どもは、貰つた金を、何にどう使ふかと云ふことで夫婦喧嘩や親子喧嘩をして、友同士の嫉みが向う三軒兩隣りに反目を起させた。

けれども、私の家だけは、相も變らず「繁昌」して居るのである。

一昨日と同じやうに今日も彼等は來た。が、大抵の者は小ざつぱりした裝をして、下駄まで餘りひどくないのを履いて居る。そして、町の婦人達の來てから歸つたまでの事を、細大洩さず話しては、あの、家まで聞えて來たほどのどよめきの最中に起つて居た事に對して、婦人達はどんなに、臆病に意氣地がなかつたかと云ふ事を嘲笑した。

裾にすがり付いて離れなかつたばつかりで、幾らかをせしめた狒々婆や、善馬鹿をそゝのかした甚助の子の事等は、さも面白い勇ましい事の樣に彼等を喜ばせたものらしい。

「あの婆樣もあけえな齢あして案外偉えねえ。あのときの醜態あ見せてあけたらござりやしたぞえ」

皆は、自分等の貰つた金高を爭つて私共に

聞かせた。

「俺ら五圓貰つた！」

「そんぢやおめえ、猾智でねえけえ。俺らなんかたつた三兩ほか貰んねえぞ」

そして、彼那大袈裟な前觸れで來て居ながら、たつたそれつぽつちづつほか呉れないで、有難がらせようとしたつて無理だとか、金の割當て方が不公平だとか云ふ不平が、彼女等が來ない前よりもつとひどく、町の者への惡感を强くさせた。

私は來る者每に今度幾らでも貰つて少しは樂だらうと聞いて見ると、うんと云ふ者は一人も居ない。

「俺ら見てえな貧乏のどん底さあ居るもんが、おめえ樣、三兩や五兩の錢い貰つたつて、どうなりやせう。嬶は何が買えてえ、御亭は此んが買えてえ。そんで先ぐはあ夫婦喧嘩で、毆り合つてる內にはあそのくれえの金あ、皆どうにかなつて仕舞ひやす。三日經てば、元の木阿彌で相も變らず泥まびれでやすよ」

それは、ほんとの事であつた。一週間も經たないうちに、町から入つた金は、又町へ吸ひとられて仕舞つて、彼等は又元の樣に三圓とまとまつた金は持たない樣になる。

一寸でも餘分なものが入れば彼等はせつせと何か買つて仕舞ふ。譯も分らず只ドン〳〵と買つた擧句は、元に幾らかの利子までつけて、町へ返濟して仕舞ふのである。

貯蓄の癖が付いて居ないので、どうしても蓄める氣になれない。まして、銀行とか郵便局とか云ふ所は、金は取りあげて仕舞つて只一册帳面をあてがふ所の樣にほか思はれて居ないので、あづける者などは殆どない。

だから、私共が溜めろと云つた所で、聞かれる事ではないのである。金を貰ひながら彼等はやつぱり私共で飮食ひし、平氣で何をくれろとか、どうして呉れとか云つて居る。

私は、自分の仕て居る事が極く小さな、例へば金をやるにしても一時にまとまつて一圓とはやらず、着物にしても、新しいのばかりはやらないので、却つて彼等の生活には、さほどの惡い影響も及ぼさないのだと思はないでは居られなかつた。

若し私が、頭割に百圓づつもやつたとしたら、彼等はその金の盡きるまではのらくらして暮して、又困つて來ればどうかしてくれろと、よりかゝつて來るにきまつて居る。彼等に對してする事は何時も何でも限りがない。例んば私が彼等の生活を助けようとして、自分の生計にも窮するほどになつたとした所で、彼等は矢張り何か貰はうとする。何か呉れる所だと毎日せつせと押しかけて來るだらう

町の婦人達の仕事は、豫想通り失敗したとともに、私には、自分は一體どうしたら好いのだ？と云ふ恐ろしい疑問が殘された。この氣持は、甚助い事の時にも私を苦しめたけれども彼の時は、自分のして居る事にかなりの自信を持つて居たので、幾分は勢付けられて居たのであつた。が、今度は、自分のして居ることが、どうもほんたうに好い事ではないやうな氣がしてならなかつた。

人が自分より力弱い者を憫れむとか、惠むとか云ふ時に、少し許りでも虛榮心を持たないだらうか？

勿論、すつかり世の中を悟つたと云ふやうな人は別かも知れないが、少くとも、私共位の程度の人間では虛心平氣に人を惠み、慈善を施すと云ふ事は、殆ど出來ない事ではないかしらん？

町の婦人達のした事などを見ると、慈善などと云ふものは、或場合には、惠む者が自分の金の自由になり、自分の勢力の盛な事を、自ら享樂

する方便にほかならない様にも思はれる。

少くとも、「ほどこす者」と「ほどこされる者」との間には、もう動かせない或る力の懸隔が起るとともに、自分等の位置から種々な感情が起つて來るだらう。

其故、私が隨分彼等に對して、丁寧であり謙譲であらうとして努めて居ても、何處かには矢張り「ほどこす者」態度がきつとあるのだ。

彼等の仲間にはどうしてもなれない。流れて行く物を拾はうとして、岸から竹竿を延して居るので、決して一緒に流れながら摑へようとして居ないことを自分で知つて居る。

縱ひ表面的には、畑へも出、收穫の手傳ひもし、同情もし、或る共鳴は感じて居ても、決して同じ者共とはなり得ないのである。

それなら、私がその同じ流れの中に漂つて見たらどうか！　なか／＼自分の消されない爲に人の事などは見ても居られなくなる。

岸から竹竿を延して居る今までにも私はあきたらなくなつて來たと共に、一緒に濁水を浴び、苦しまぎれに引つ掻き藻掻いて、手も足も出なくなつて終つて仕舞ふのは、只一度ほかない私の此の生涯に餘り慘めである。

て、私はほんたうに、謙虚になり丁寧になつて、何うも今の不平や恐れをなくするにはどうしたなら好いのか？　私は情ない様な心持になつて仕舞つた。

何處かで、

「お前の花園は一體どうしたんだ？　もうそろそろ芽生え位生えさうなもんだになあ！」

と嘲笑はれて居る様な氣もする。

けれども、私は諦めの惡い人間だ。どうしても、物をあきらめて靜かに落付いて、次ではそれも忘れて仕舞ふと云ふ事が出來ない。

それ故、世の中と云ふものは、どうせそんなものさ！　と落付いて仕舞ふ事が出來ないので、何時でも不平や、悲しい思ひや、苦しい思ひやをして、「賢明な人々」からは妙な同情を受けて居るのである。

今も私は何でもない、自分が小さいから丈の事だ！　と諦めが着かない。

如何にも私は小つぽけな細い聲を出して、何かゴト／＼云つて居るに過ぎない者ではあるけれども、もう直ぐの所に大層好い事があるのに、又その好い事も搜し手を待ちかねて居るのに、見つけられないで居るのではあるまいかと云ふ事がしきりに感じられる。ほんとに、只感じられて居るばかりな其の一重向うの何ものかを求めようとして、私は目を見張つたり、手を動かしたり、チーッと耳をすませたりして居るのである。

斯様な又新しく湧き出した望みに攻められて居る間に、村は又貧乏に戻る前の馬鹿らしい景氣よさに賑はつて居た。

村端れに酒屋が一軒ある。今まではさほど繁昌も出來なかつたのが、此頃になつてから急に客が殖えた。夕方になると野良から歸つた百姓達の中心になつて、一升と諢名のある桶屋だの甚助親子だのが集つて來た。

店先に床几を持ち出して、蚊燻しをしながら唄つたり踊つたりの陽氣さに、近所の女子供まで涼みがてらその周りに立つて見物をする。

善馬鹿は、何時も皆の酒の肴に惡巫山戯をされて居た。

其の晩も何時ものやうに酒屋は大騒ぎであつた。酒の香りに集つて來る蚊をバタ／＼團扇で叩きながら床几に寢ころんで居る者の中には新さんも珍らしく混つて居る。

皆が、漬物をつまんだり、盃を廻したりしながら、町の人達の惡口や愚にもつかない戯言を云つて、ワッ／＼して居る傍に、新さんは默つて、蚊が一面溺れて居る自分の盃を見て居

た。
「や、ほんに新さんが居たんだんなあ。餘り音なしいで皆んのー忘れて仕舞つたわえ、さ！　一杯明けな。酔へば天地あ廣えもんにならあ」
新さんは酒を飲まうともしなかつた。
けれども、今まで放つて置いた氣の毒さも混つて、皆は急に新さんに種々の言葉をかけた。
彼那化物豆なんか心配しないで、自分は自分でさつさと遊ぶなり、他處へ出るなりしろと力をつけながら、あの、子を子とも思はない鬼婆なんかぶんなげてやれとかなんとか罵つた。
甚助などは拳骨を振り廻しながら、
「お前さへウンと云や己が默つちや置かねえ」
とまで云つた。
チビリ〳〵と酒をなめながら、皆の云ふ事を聞いて居た一升は話の絶れ間を待つて、重々しく云ひ出した。
「一體なあ新さん。お前はあげえなおふくろー神様か佛様あみたえに思つてんが、第一の間違えだぞ。お前のおつかにしろ、どいつのおふくろにしろ、皆女子さ。どこの世界だて女子に違えはねえだ。悪えこつたつてすらあな。邪魔んなりやお前をぽん出さうともすらあな！」
「そらさうだべ。けんどあげえなこつて親子喧嘩しちや、親父にすまねえ。俺らせえ默つてりやすむこんだかんなあ、俺らそげなことをする氣はねえ」
「だからお前は佛性よ、めつたにねえ生れつきだんなあ。死んだ親父の云つた通りの事ー云つてんぞ」
「そいから見りやお前は、極道者だんなあ、一升」
傍から甚助が口を入れた。
「ほんによ。こげえな極道者の行く先あ大方定つてらー
「お前等今頃んなつて、そげえなことほざくんか？　のれえなあ。見ろ、俺らの傍にやもうちやんと地獄がひつついてら。外へ行ぎやうもねえぢやねえかあ！」
と一升は、自分の傍に坐つて漬物を食はうとして居る酌婦上りの女房をさした。
「ハヽヽヽヽ。ハヽヽヽヽ」
「好え氣になつて、ほざいてけつかんから恐ろしいや」
「さうともよ、好え氣になれんのも娑婆に居る間丈のこつた、なあ新さん。死んだ後のこと、俺らが知るもんけ！
あとは野となれやま・・・となーれ。
ヤ、シッチョイサ！
か。
「どうだ巧かつぺえ」
皆は破れる樣に喝采した。新さんは妙な笑ひ方をした。
「面白えなあ。踊りてえなあ。おや〳〵！」
甚助の子が、よろけながら立ち上つた時、向うから、これも微醉の善馬鹿が來かゝつた。
これで、すつかり元の樣に賑やかになつて仕舞つた。
彼は皆に呼ばれて、又二三杯のまされた。
「おめえ俺らと仲よしだんなあ。善！　踊んねえか？　面白えぞ」
甚助の子は、善馬鹿の耳朶を引つぱりながら、床几の周圍を引つぱり廻した。
「こりやうめえ、さ、踊れ。又酒え飲ますぞ」
「踊れよ、相手が好えや。ハヽヽヽヽ」
「そら踊つた、踊つた！」
單純な頭を、酒で滅茶々々にされた甚助の子は、氣違ひの樣になつて居た。
肌脱ぎになり、兩手に草履を履くと、善馬鹿の體中を叩きながら、譯の分らない事を叫んで踊り出した。
「や！　うめえぞッ！」

「そーらやれ〳〵。えゝか？　唄ふぞ！
ホラ！
俺らげー、畑でようー……
ホラ、シッチョイサ！……」
「ワーッハヽヽヽヽ」
「ハヽヽヽヽ。えゝぞッ！」
「ホラ、しっかり〳〵！」
善馬鹿は甚助の子に、ベチャ〳〵と草履で叩かれながら、着物の裾を兩手にとつて、ザラッ、ザラッと足から先に踊り出した。

（十六）

婦人達が去てから一週間はぢきに經つた。そして、村は漸々、元の陰鬱な貧しさに落付き始めた。畑の方も段々急がしくなつて來たので、自づと酒屋の床几も淋しくなり、下らないいざこざも少くなつた。

けれども、時の婦人達の記念として、善馬鹿はすつかり酒飲みになつて仕舞つた。皆の玩弄物となつて彼方此方で飲まされた爲であらう――

私共は、朝から晩まで、彼のだらしなく醉つた體が、泥まぶれ汗まびれになつて、村中をよろけ廻つて居るのを見るやうになつた。

彼は何處の家でもかまはずに、入つて行つては、

「酒えくんろー」

とねだる。

村道添ひの家で、彼に酒を欲しがられない家は一軒もなかつた。けれども大抵の家では酒を一滴か二滴垂らした水を遣つたのだけれども、彼は喜んで醉つて居たのである。

或る日の午後、私共は茶の間の縁側の傍に坐つて、胡桃を挽いて居た。すると耕地の方から、グルリと廻つて庭木戸の中へノッソリ入つて來た男がある。吃驚して見ると、善馬鹿だ。

私は何だか薄氣味惡くなつて、少し奧の方へ躄り込んだ。奧に居た祖母や其の他の者も出て來て、半ば氣味惡く半ば珍らしさうに、默つて庭に立つて居る善を見て居ると、暫くして彼は低い聲で可なりはつきりと、

「酒えくんろー」

と云つた。

下女は直ぐ立つて行つて、薄く酒の香ひのする水を、破けた飯茶碗に入れて來た。そして遠くの方から手をのばして、

「ホラ、此處さ置くぞ」

と縁側の端に置いてやつた。

善馬鹿は下女の手が引つ込むか引つ込まないかに、引つたくる樣にして、茶碗をとつた。そして、フー〳〵鼻息を立てて、喉佛をゴク〳〵云はせながら一滴もあまさず飲んだ後を、すつかり舐め廻した。

空つぽの茶碗を抱つたまゝいつまでもそこに立つて居る。下女は穢いから早く逐ひ出しませうと云つたけれども祖母は、狂人や何かにひどくすると、あとできつと「あた（仇）」をするものだからと云つて放つて置かせた。

私は久し振りで善馬鹿の顏をツク〳〵と眺めた。今日はどうしたのか、平常よりよつぽど、小ざつぱりとして居て、さほど臭くもなければ穢くもない。けれども、精神病者に特有な、妙に統一の缺けた手足の動かし方や、目の使ひやうが、却つて凄く見えた。そして、先達て中よりは、すつかり瘦せて、頰などはゲッソリこけて居る。皺も多くなつたし、全體に弱つて居る。矢張り酒等を飲んで、始終興奮狀態が續いて居るのがすつかり堪へて仕舞つたものと見える。

可哀さうな！　あばれる樣にでもなつたらどうするのだらう。

私はぼんやり母から聞いた北海道の氣違ひの話などを思ひ出して居た。すると、いきなり善馬鹿は、ニヤ〳〵しながら、

「飯が食ひてえなあ俺らあ」
とつぶやいた。
云ひやらが餘り子供のやうなので、私共は皆吹き出して仕舞つた。けれども、私は下女と二人で丼の中に飯と、晝に煮た野菜と漬物を一緒に山盛りにして又、緣側の端へ置いた。
彼は直ぐそれをとつた。そして地べたに坐りこむと足の間にそれを置いて兩手で、食べ始めた。丼の中ばかりを見つめて、ほんたうにガツ／＼とまるで飢ゑた山犬の樣にして、搔つ込んだのである。
見て居るうちに、私は淺間しくなつて仕舞つた。
獸より情ない姿だ。此那哀れな人間に生れる位なら、猫にでも生れた方がどんなに幸福だつたか分らない。彼にとつても、又彼の周圍の者にとつても、遙かにその方がよかつたのだと私は眞面目に考へた。そして、見て居るに忍びなくなつて、後を向いて又胡桃を搔き出した。パチ／＼云つて破れる殼から、薄黃色い果を出しては、挽き臼でつぶすのである。
暫くすると、薄馬鹿は食べて仕舞つて、立ち上つたらしい氣配がした。そして、よろけながら兩手に空の破茶碗や、丼を下げて、又耕地の方へ出て行く後姿を、私は、臼の柄につかまりながら、何とも云へない心持で見送つて居た。秋めいた、穩やかな午後の日射しが、彼の蓬々頭の上に靜かに漂つて居た。
暑さのためと、氣苦勞で、養生の行き屆かない新さんの病氣は、時候の變り目になつてからドッと惡くなつた。
體中が水腫んだので、立つて居る事さへ苦しい程なのを、家に居ればおふくろの厭味を聞かなければならないのが辛さに、跛を引き／＼あてどもなく步いて、林の中などに何か考へて居る新さんを見ると、村中のものは、ほんとに氣の毒がつて、どうにかしてよくしてやりたいものだと心から噂し合つた。けれども、この二三日はもうこれも出來ない程になつたので、家の陰の日もろくには射さない樣な四疊にごろ寢をして居る時が多くなつた。
部屋の直ぐ前から、ズーッと桑畑を越え、野菜の上を越えた向うには、林に包まれた墓地が見渡せた。
新さんは、足の裏に針の束で突つく樣な痛痒い痺れを感じながら腕枕して靜かに眺めて居ると、生々した日の下に踊つて居る木々の柔かい葉觸れの音、傍に流れて行く溝流れのせゝらぎが、一つ／＼心の底まで響き渡つて、口に云はれない憧れ心地になつたり、遣瀨なさに迫られて、淚組ましい心持になつた。
「彼の林の蔭にはちやんが居る」
新さんはさう思ふと、まだ親父の生きて居た時分の事々が、遠い夢の樣に思ひ出された。
自分が、まだ七つ八つの頃、あんなに早く死ぬなどとは、夢にも思へなかつた程、達者で心の優しかつた父親が、自分を肩車に乘せて、食ふだけ食へと桃畑の中を步き廻つてくれた時分の自分等は、どんなに幸福に、嬉しいお天道樣を拜んで居た事かと思ふと、飛んでも行き度いほどのなつかしさを覺えた。
それだのに此の廣い世の中に、たつた二人きりの母子でありながら、此頃の樣に譯も分らない事で、情無い行き違ひをして居なければならないのを思ひ、自分のもう到底癒りさうにない病氣を思ふと、本當に生きて居る甲斐もなくなつた樣に感じられた。
自分が居ておつかあの邪魔になるなら、今すぐからでも何處かへ行つても仕舞ふけれど、どうせは死ぬのも近いうちの事だらうのに、どうぞたつた一度で好いから七年前に呼んで吳れた樣に「新や！」と云つて吳れたら、どんなに嬉し

からう！

新さんは、北海道で時藏と云ふ男の所に居た時、仲間の男で十九になるのが急に病ひついて、たつた三日で死んだ時の樣子を、マザ〳〵と思ひ出した。

その男は死ぬ日まで、

―阿母さん！ 阿母さん、何故來ないんだ？ 俺りや待つてるんだぜ。

と云ひながら、生れてから別れるまで、つひぞ大きな聲さへ出した事のない程優しい母親の事ばつかり話して居た。そして、もういよ〳〵と云ふ時に、一度瞑つて居た眼を大きくあけて、兩手を一杯に延ばすと、

―阿母さん！―

とはつきり叫んで、そのまんま到頭駄目になつて仕舞つた時の、あの鋭い聲、あの痩せた手が新さんの目について離れなかつた。

何處の山中、野の端に野たれ死をしても、いまはの際に、おつかあ！ と呼んで死ねる者は、何と云ふ幸福な事か。新さんは、眞面目に自分の死と云ふことを考へて居たのである。

或る殊に暑苦しい日、朝から新さんは身動きも出來ないほど弱つて居た。

五月蠅い蠅を追ひながら、曇つた日であてどもなく、高〳〵、はてもなく擴かつた空を見て居ると、何處からか飛び込んで來た樣に、自分はもう生きて居られない身だと云ふ事を確かにハッキリと感じた。

新さんは、妙に笑ひながら、ムズ〳〵と體を動かして顏を撫で廻しながら、

おつかあ！―

とやさしい聲で呼んだ。

裏口の水音がやんで、濡手のまゝおふくろは佛頂面をして、

「何だあ？―

と入つて來た。

―いそかしかつへえかちよつくら坐つて、話してえんけえ？ 俺れえ話しときてえ事があるんだかなあ―

―何だ？ 早くぶつたらえゝでねえけえ」

―ま、一寸御坐りて。ほんに俺ら話してえ事がうんとある―

新さんは穩やかな愛情に滿ちた眼差しで、まじまじと怒つた樣なおふくろの顏をながめた。

そして、靜かに微笑して頭を動かした。

なあ、おつかあ！ 俺らおめえに相談しとかにやなんねえと思ふ事があるんだが……」

―…………―

―急にこげえなこと―云ふと、おつかあ氣い惡くすつかもしんねえが、俺らもう到底助からねえと思つてる。そんで、早く家の仕事うちやんとするもんを定めときね、誰でもえゝ。おめえのえゝと思ふ者を定めたがえゝと俺ら思つてる」

おふくろは妙な顏をしたが、いきなり大きな聲で怒鳴つた。

「なにいあてこすり云つてけつかる！ 他人な事世話燒かねえですつこんでろ、馬鹿奴！ 俺らに貴樣の心ん中が分んねえと思ふんか？―

まあ、そげえに怒んなよ、おつかあ！ 俺らあてこすりでも何でもねえ、只思つてること云つたんだ。……俺ら、北海道さ行がねえ前の事を思ふと、ほんに今が辛え。俺ら何んでもおつかあにつくさうと思つてんだ。どんなこつてもえゝ、おめえの思つてんこと―すつかり俺れに打ちあけてくんねえか！ なあ、おつかあ、俺らはもうどんだども生きらんねえ、そいつが願んだ。昔を思ひ出してくれねえか？

―なにい話してけつかんだ！ 駄目だえ、たまさらたてだまされるもんけ。面でも洗つて出なほせッちや―

どうすんやねえよ、おつかあ！ 俺らどう仕よ

うにも此の體で出來ねえな分つてんでねえけ。只俺ら皆分つて死にてえ。どうぞ昔のおつかあと俺で別れてえ、なあおつかあ？　此間の豆の事だて、俺らにやどうしても腑に落ちねえ」

「腑に落ちねえがどうしただ？　俺らおめえの云ふこたあ分んねえよ。馬鹿！　おふくろー惡者に仕ようとすんーやうな奴ー持つた俺れが因果よ。面白くもねえ。何とでも云へよ。俺れえ一人惡者になつてりやおめえは嬉しかつぺえなあ、おい！　嬉しかつぺえよ」

と神經的に涙をこぼし始めた。

嫁さんは情ない顏をして、默つて此の樣子を見て居たが、やがて蒲團の下から胴卷を出すと、

「おつかあ！　もうちんとばつかしだが、こりよおめえに預けとく。どうぞそんで埋めとくれ。俺ら持つてても何の益にも立たねえかんな」

と、母親の膝元に押しつけた。

おふくろは、一寸目を輝かせた。そして少し間が惡さうに、

「さうかあ」

と、云ひながら早速これを持つて、立つて滿足げに行く樣子を見送ると嫁さんは、嬉しさうに微笑して目を瞑つた。

「おつかあ！　おめえは決して惡え人ぢやねえだ。が、俺ら辛えや。昔のこと思ひ出すのが辛えや、なあおつかあ！　俺ら何ちふ浅ましいこつたつたらうなあ」

嫁さんの眼からは、瀧の樣な涙がこぼれた。押し切つた樣な苦しい啜り泣きの聲が、靜かな部屋に悲しく響き渡つたのである。

（十七）

都會から遠く離れた、名も知られない一小村落に起る種々の事件を包含して、秋は去年と同樣に、又百年前と同じ樣に育つて來た。

山並みや木々の葉に何かになつて來た秋の氣候と、まだどこやらに殘つて居る夏の餘力がともすれば衝突して、此の二三日の天候は非常に惡かつた。

廣い空一面に雨雲が漂つて、不愉快な濕氣が南風の生暖かい吹き廻しと、垂れ下つた雲の下で縺れ合つて居る。遮られがちな太陽の光りは、層雲の鈍色のかたまりに金色の縁取りをし、山並みを暗紫色に立木や家屋等の影を調はない形にくつきりと、乾いた地面に印して居る。

山から斜に這ふ風が、パーッと砂煙を舞ひ上げると、實の輕い作物が、ザワ〳〵ザワ……と陰氣な音を立てゝ騷ぎ亂る。雲の絶間から偶あらはれる晴朗色の空からは、折々鋭い稲妻が閃いて、其深い所で低い雷がド、、、、と轟いた。總ては物凄く、闇の中で明けて暮れて居る。

其の日に特に險しい天氣で、夕方になつてからは、恐ろしい風が吹き出したので、百姓達は皆非常な不安に攻められた。今最後の發育を遂げようとして居る總ての作物が、荒い風に奪ひ、强雨にたゝかれると云ふ事は憂ふべき事である。

で、彼等は田の見廻りや何かにせはしく、私共の畑も主人の小作男で、十分に圍はれたり突支ひ棒をあてがはれたりした。

早くから閉め切つた部屋の中にとぢ籠つて、次第に吹き荒れて行く戸外の雨の音を聞いて居ると、私共は皆何だか氣味惡くて離れ〳〵各自の部屋に落着いて居られない樣な氣持になつた。

家中は皆茶の間に集つた。

雨戸にガタ〳〵ぶつかつては外れて行く風の音、何處かの軋むキー〳〵云ふ響に交つて、怯えた樣な野犬の遠吠えが陰氣に凄く皆の心をお

びやかして、千切れて飛んで行つた。

風は次第に強くなつて來る。薄ら明りの空を走る雲の足なみが早くなるにつれて、東南の暴風は立木と云ふ立木、家屋と云ふ家屋の有らん限りを吹き倒さないでは置かないと云ふやうに吹き始めた。

砂煙が短い渦卷になつて吹き上り、人氣ない往還を彼方此方とかけずり廻る。樹木の總ては、其の頭を狂亂した樣に打ち振り〳〵、小枝は白い肌を生々しく引き裂かれて飛び、幹は苦しげに軋み唸り、鋭い悲鳴をあげて搖れて居る。家屋の角ではぶつかる風がわめき、白い葉裏をひるがへして揉まれる葉が種々な聲で泣き叫ぶ。――

天地が巨人の掌で只一揉みに揉みつけられるやうな夜の荒れの最中に、一つの細長い人影が靜かに落付いて、往還の角から現れた。

黑い影は靜々とその騷亂の裡を動いて行つた。

頭を前に傾け、手足が規則正しく動くにつれて、等しい歩調で、丁度車の上で動かされて居る人形の樣に歩く。彼は、此の四周の擾亂しつくして居る萬物の中に、如何程異樣らしく見えたらう？　壯嚴な枝葉に走る暴風にとつては、驚くべき反逆者である。

彼の延びた髮はさか立つて、一吹風が吹き拂ふ毎に、額に亂れかゝり着物の裾はバタ〳〵とあふられながら足に纏ひつく。けれども其那事は、何の邪魔にもならないらしく、人影は極めて沈着に、餘裕を持つて進行を續けて行く。

激しい風に卷き上げられた土砂が如何程打ちつけようが、上つて居る頭は決して下らず、露出した細い脛に芥が噛み付き、風の渦卷にとられようとする着物が、體中で暴れたりしぼんだり、はためいたりして居る。

けれども彼は只歩いて行く。行手には何の障害もない樣に、又あつたとしても其等を何の努力もなしに征服する事が出來る樣な勢で、ひた歩きに歩いて行くのである。そして、眞直に通つて居る道の曲り角まで來たとき、此の怪しい人影の行手に當つて、又他の黑影が現れた。

立ち舞ふ塵埃の霧の裡に、その丸くかゞまつた小さい姿は、まあ何と云ふ弱々しさでよろめいて來る事か！　全くその人影はよろめいて來たのである。

一陣の烈風が、すさまじい響を立てて地上を拂ひ去ると、弄ばれる枯葉の樣に前後左右に突上げられ押しつけられ小突き廻されて、今にも倒れさうなほどよろけ廻る人影は、暫く立ち淀んではフラ〳〵と又定まらぬ足元で離魂病者の樣に動いて居る。

兩手でしつかり額を掩ひ、道一杯に彼方此方へ吹きよせられ、吹きよせられて來た人影は、思ひがけぬ人の足音に驚かされたらしく、掌の中から顏を出して、暗と塵の幕を透して、來かゝる者を見ようとした。

絶えずよろけながら辛くも持ち堪へて居た者の前に現れた第一の人影は、どれほど恐ろしく偉大なものに見えたらう！

第二の影はよろ〳〵と片陰の木の茂みに身を潛めた。

人影を行き過ぎさせようとしたのである。

けれども、どうした事か、今まで正面ばかりを見て居た第一の影は、其の木立の前へ來るとピッタリ歩くのをやめた。そして、非常に熱心な態度で反對の方を見守つて居る。其處には、かなり多くの木々の梢に遮られながら、村役場の灯火が赤く〳〵、非常に目立つ輝きを以てまたゝいて居たのである。

第一の人影は、暫く全身の注意をむけて、其の一點の光明を凝視して居たが、やがて急に

身を躍らせ両手を宙に振りあげて跳ね上ると狂喜と喫驚の混同した樣な、非常に高く鋭い、

「ワアーッ!!」

と云ふ叫び聲を發するや否や毬の樣に走り出した。

二つに折り曲つた體、口を開き齒を露出した頭を前へ突出して、瞬きもせず、只一方を見守つて砂煙の裡を走る彼の體の周圍には、迅い風音がシュッ〳〵と後へ斷れ〴〵に取り遺されて行つたのである。

第二の影は又ソロ〳〵と歩き出した。

両手で顔を掩ひよろめく小さい姿は、風の嬲り者となりながら、次第々々に遠くなつて行つた。

（十八）

夜中の大風は曉方になつてから驟雨を誘つた。

降つたり止んだりする雨は、かなり激しく往還を洗して幾條もの小流れが道の左右に付いて、中央に二本通つて居る車の轍の跡の溝には、茶色の泥水がゴッ〳〵と云つて流れて行つた。

農民共は、皆家に籠つて鞋造りや繩綯ひに時を費して居たけれども、何かせずには居られない子供等の一群は、村端れの雜木林へ入つて居た。

其處には、秋の早い頃から名もない「きのこ」が澤山頭を出し、稀には「なめこ」が黄色な姿で小さい採集者を、得意の絶頂まで引摺り上げたりする事があるので、今日も子供等は、故意と險しい天氣に茸がりを始めたのである。

彼等は皆一生懸命に捜した。萱の刈跡を裸足の足の裏に擽つたく感じながら、グン〳〵林の奥へ〳〵と進んだ。

薄い紙を濡らして重ねた樣になつて居る落葉を搔き分けて爪の間に泥を一杯つめ込んだ彼等は、思はず摑んだ蚯蚓を投げつけ合つたり、松葉で擽り合つたりしながら、先を爭つて行くと、一番先に立つて林續きの墓地裏に入つて居た一人の子は、何物か急に見つけたらしくピタリと足を止めて、注意深く前方を透した。

此の樣子に喫驚した子供等は、皆馳け集つて、指し示された一點を搖れる梢の間から、ながめた。

其處には――葉の茂みが泡立つ浪の樣に崩れて居る間からは――白い模樣のある黒い布が旗の樣に、はた〳〵とはためいて居るのが見えた。

「何だつぺ? 何があげえにヒラ〳〵してんだつぺ!」

「ほんになんだつぺ? 行つて見べえか?」

「うん、ほんにそれがえゝさ、行つて見る。俺等此處え待つてら……なあ、源!」

「あゝ、ほんにおめえ行つて見ろ。俺ら此處に待つてら」

「何だ、俺れ一人で行ぐのけえ? 厭んだあ、俺れそげえな事、やんだあ、おめえ等も一緒に來よ!」

「俺等行ぎだくねえんだもん、おめえ云ひ出したのでねえけえ。なあ?」

「うん、さうともよ」

「さうとも。おめえ云ひ出したんでねえけえ? 行つてこーよ!」

「おめえ行つてこ。俺等此處で、待つてんべ!」

行つて見ようかと云ひ出した者はすっかり困つて仕舞つた。で、チッチノホー(じやんけん)して負けた者が行かうと云つても、何と云つても、仲間はきいてくれないので、到頭、彼が一番先に立つてそのあとから皆が付いて行くと云ふことに定まつた。

彼の小さい心は、好奇心と恐怖で張りきり、鼓動が耳の中でして居る様に感じられた。逃げ出したいほど気味は悪いけれども　もうかうなつたからには「弱え奴等」にアッと云はせるだけ強さうでなければならないと覚悟を定めて、彼は、肩を怒らし大股に進んで行つたのである。

けれども此の驚くべき勇士の決心は、赤肌をした松の幹の高い所に、二本の青い人間の足が、ブーラ、ブーラとして居るのを見出した瞬間、何の役に立つたらう！　彼はサッと青くなつて、跳び上りざま仲間へ向つて、

「首縊りだぞッ！」

と叫ぶや否や、蹴飛ばされた様に墓石の間をすり抜けて、往還の方へ逃げ去つて仕舞つた。

此の意外な一言に、他の子供等はどの位仰天した事だらう！

彼等は我を忘れて、種々な叫び声を上げながら、狭い小道を犇き合つて、我勝ちに此の飛んでもない場所から逃げ出した。

急に、ヒッソリ閑とした四辺には木立ばかりがざわめいて、少し許りの「きのこ」のさゝつた笊が、投げ捨てられたまゝ、揺れる二本の足の下で、風に煽られて居た。

子供等の先立ちで、村の男共は殆ど皆墓地に集つた。多勢一塊りになり、努めて付元気を出しながら嘘であれかしと近寄つて見ると、何事だらう！

ほんたうに首縊りだ。

額を手拭で包みガックリと項垂れた男が一本の縄に吊る下つて、壊れた人形の様に他愛もなく體中でブラ〳〵揺れて居るのではないか！

雨に濡れ一ピッタリと肌に貼り付いた着物を透して、気味悪く固まつた筋肉が明かに輪郭を見せて居る。

七八本づつ粘り付いて刷毛の様になつて突立つて居る髪の毛の上には、落葉だの芥だのが附いて居る。

彼等は今更胸を打たれた。

「一體誰だつぺ？」

皆はしきりに思ひ出さうとしたけれども、着物の模様にも體の形にも見覚えはなかつた。

もう七年前に或る百姓女が同じ墓地内で縊死したのを見てから、トンとこんな恐ろしい事には出會はなかつた農民共は、取りあへず何をどうしたら好いのか、サッパリ様子が分らなかつた。

蓑だの笠だので雨支度をした多勢は、黙り返つて茫然と、どうしても玩具とほか思へない様に風に弄ばれ嬲られて居る人間の體を見て居たのである。

赤土が雨に流されて、幾條も縞の出来た所には蹴返されて泥まびれになつた木の切株と、ふやけた片方の草履がころがり、地上から三四尺隔つて居る死人の裾から落ちる雫で、下にはポチ〳〵と丸い小さい穴が沢山出来て居る。

「早くおろさにやあなんねえ」

皆は同じ様にさう思ひながら、又同じやうに誰かが云ひ出す者を待つて居た。

大濤の様な音を立てて、風が梢から梢へと吹きめぐつて来る毎に、激しく動く體の重味で、あの細い縄がプッツリ切れ、ドサッと云ふと一緒に死體が落ちて来でも仕ようものならと云ふ恐れが、皆をすつかり怯えさせて居たのである。

手拭頬をした子供達は、自分をいつも擲つたり叱つたりするおつかねえ父親や兄いが今日は又どうした事か、手も出さないで只立つて居る丈だと云ふ不思議な様子にすつかり興奮した。

彼等は片隅に集つて、

「ちやんみたいな大人でもおつかねえんだな

あ。――」

「ほんになあ、矢張りおつかねえと見えら。」

とさゝやきながら大人共と死人とを見くらべて居た。

男の死骸が下されたのに、それからやゝ暫くして村に一人の巡査と[illegible]が來てからの事であつた。

突張つた體が戸板の上に置かれ、濡れて解き難くなつた手拭を長い事かゝつてどけると、傍に立つて居た一人は、思はず飛びしさつて、

「新さんでねえけえ？　う？　新さんでねえかよーッ！」

と、氣違ひの様な聲で叫んだ。

急に周圍はどよめいて、澤山の頭が肩越しに一つの顔を覗き込んだ。

「や！　新さんだぞ！　新さんだぞ、こりやあ！」

「どれ？　一寸どいて見れ。や！　ほーんによ！　こりやあ一體あーんとしたこつた！」

「あげえな親孝行息子を到頭あの鬼婆奴が、こげえな情ねえざまに仕くさつた！　さつさと斃れつちや、劫突張り奴！」

皆は、單純な心で死と云ふ事を恐れて居る所に、彼那に人の好いおふくろ思ひの新さんが、昨日まで口も利いて居たのが僅かの間にもうこんな情ない様子になつて居るのを見ると、もうすつかり氣落ちがして只無茶苦茶におふくろが憎らしい。口々に、まだ病氣の新さんがどんなにおふくろに虐められながらも親思ひだつたかと云ふ事を責め立てた。

「告發したら何と云ふ罪名になるでがせうな？　毆打致死でもあんめえし……」

集つた中での口利きが、得意らしく云つたけれども、まだ年若な無經驗らしい巡査は、間誤付きながら、かすれた聲で早く家の者を呼べとせきたてゝばかり居て、そんな事には耳もかさない。

一人の男は早速、大きな簑をガサ〳〵ガサガサ云はせながら耕地を越えて、水車屋の方へ馳けつけた。

水車屋の家は、向うに小さく見えて居るのに、行つた限りさつきの男はなか〳〵戻つて來ない。皆は矢張り新さんと同じ様な生れ付きで、人が惡く思へない性分だつた親父の事などを話しながら、折々手をかざしては、畑道を動いて來る人影に氣をつけて居た。

餘りおそいので、二度目の使が立たうとした時である。往還の向うから一人の婆が半狂亂の風をしてころがる様に馳けて來た。

[illegible]」

[illegible]なこんだ

[illegible]おふくろである。

まあ一體何と云ふなりをして居るのだらう？

白髮が蓬々とさかだつて、着物の袖が片方千切れて居るのも知らない様に、喉元でハー〳〵喘いで居るのだもの……。

「ま、善がおつかあでねえけえ。どうしただ。何い其様に狼狽てゝんだ？」

「誰だえ？　う？　首縊りしたなあ誰だえ？」

婆は、眞青な顔をして、皆を突きのけながら掛つて居た菰をまくらうとした。

「あんすんだ。新さんよ！　水車屋の新さんが可哀さうにこげえなざまになつただよ！」

「氣い落付けて、ゆつくら話しても分んでねえけえ。」

震へて居る婆を皆はなだめに掛つた。

「何に？　新さん？　水車屋の新さんなんけ？」

彼女は、がつかりした様に溜息をついた。そしてしばらくだまつて居たが、急に顔をしかめると、

「俺らげの善もな行方が知んねえ。そんに、今

朝俺らに、どこの奴だか知んねえが、おめえの馬鹿が隣の村の、沼つぷちとかで妙な風してんの一見たぞと云つて來たで……」

と云ひながら、ポロ／＼涙をこぼした。

死ぬ筈はないから安心しろ といくら慰めても、今度はきつと何か變事があつた様な氣がして居るからどうぞ死骸だけでも捜して呉れと、婆は皆の前へ土下座をするやうにしてたのんだ。

「彼奴の面倒よく見て置きでもしたら、俺ら案じねえ けれど碌に食も食はせねえで居ただから、俺ら恐ろしい。きつと死んだら俺ら怨んべえ。どうぞ、どうぞ、こげえにねがふもん！ 聞いてくんろーよ！」

皆は、矢張り此の二三日前からの天氣は只事ではなかつたと思つた。

「一夜のうちに、二人も人間が喰るたあ、何事だべ」

「碌くに聞かんねえ前世からの因縁事あ、恐ろしいもんだ」

「まつたくおつかねえもんだ。が、俺らの力ぢやどうにも仕様がねえだ、南無阿彌陀佛……」

「せめても極樂往生させてえもんだなあ」

集つて居た者の半分は、婆を連れて、陰氣にのろ／＼と、離れて行つた。

風が吹くたんびに、菰の端がめくれて、濡れしよぼけた着物だの、足の先だのの見える死骸の番をして、墓場の中に取り残された者共は、ほんたうに眞面目な心持で、よく寺の和尚が話す、前世の宿縁とか、極樂とか地獄とか云ふ事を考へると、何でも默つて堪へて居た新さんは、斯うして死んで行つてから、自分の見て來た事、されて來た事を一つ殘らず、人間一人や二人はどうでも出來る者に云ひつけるのぢやあるまいかと、思はれて來た。

そして、親切にした者には好い報いが來る様に、ひどくした者にもそれ相當な恐ろしい報いが降つて來さうだ。又新さんは降らせる力を持つて居るらしい。

「天道様あ罰い御下しなさんぞ」

とよく云ひ／＼した言葉も、思ひあたる。

皆は、こんなにも偉かつた新さんに、自分達はあんまりよくつくしてやりはしなかつたと思ふと、堪らなくすまなく、こはくなつた。

「新さん。よーく覺えててくんろよ、俺らおめえを憫然に思つてただが、俺ら貧乏だ、どねえにもすつこたあ出來なかつたただかんな？」

靜かな墓のもり上りに向つて、各自の心で、おそる／＼さゝやいたのである。

（十九）

村中は全く混亂した。

聞くもいやらしい首縊り！

まして、あの惡い所と云つたら爪の垢ほどもない新さんが、そんな情ない死にやうを仕ようとは……。

それに又、善馬鹿まで死んだらしいと云ふのだもの。

一體どうしたと云ふ事なんだらう？ かうなつて見ると、こなひだ中の空模様は、やつぱり凶い前兆だつたと見えるなあ……。

皆が同じ事許りを云つた。そして、思ひがけない時に、思ひもかけない人にとり付く死神。

時々は自分達も狙はれる事があるに違ひはないおつかない死神が、今は直ぐ體の傍に近よつて來て居る様な氣がして彼等は、戸外へ出るのさへもいやがつたのである。

私は、此の話を聞いた時、どうしてもほんとにされなかつた。

私の知つて居る中で、今日までに死んで仕舞つた人は指を折つて數へる程ほかない。私が生れた時の事を知つて居る人は、今も私を赤ん坊

の様に思つて可愛がつて居てくれる。そして、丈夫で勢よく働いて居るぢやあないか？

それだのに、善も新さんも、私がほんたうに知つてからまだ二月ほか經たないのにもう死んで仕舞つた。しかもこんなに急に、こんなに氣味惡く……。

一昨日まで私は善馬鹿が歩いて居るのを見て居た。

ついこなひだまでは「お早う。今日は工合はどう？」と新さんに挨拶して居たのに、其の新さんはもう死んで冷たくかたくなつて、直ぐ埋められて仕舞はうとして居る。——

私は、どんなに辛くともいやでも、死ぬなどと云ふことは思つても見ない、又思ひやうない此頃の生活を考へた。

廣い世の中では、一日に幾人人が死んで行くだらう？　十人死に、百人死に、千人死んで居るかもしれない。が、その中に私は生きて居る。しかも斯うやつて達者で、する事も澤山あり可愛がられて生きて居る。

私には總て消極的な考へが出來ない。

私はどんなに困つた事に會つても——勿論私の狭い天地で湧いたり消えたりする事は何でもない下らない事なのだらうけれども——どうにかやつて仕舞ふ。

死なうと思ふより先づどうして突き抜けようかと思ふ。そして、私は自分の頭の乾からび鈍くなり、もうほんたうに生きて居る意味がなくなるまでは、どんなにしてでも生き抜かうと思つて、思ひ定めて居るのである。其故私は、昔の婦人達の様にすぐ命を捨てる事は、どんなにしても出來ない。

私の生活に意味のある間は死ねない。

けれども私の今直ぐ傍では、かうやつて二人も死んで居る。而も皆尋常の死に様をしたのではないぢやあないか？

私が若し、あの夜彼の林へ行きかゝつて新さんの死なうとするのを助けたとしたら？

私は一生懸命に止めるだらう。體をなほして又働くやうにと云ふだらう。けれどもそれでほんたうに助けたと云へるだらうか。私には、どうしても、只あの時、あの木の枝から新さんを離した丈の事ぢやあないか。

私は新さんの一生を守つて暮す事は出來ない。年中心を勵ましつゞけては居られない。そして、僅か許り療治され、金をもらひ、貧しく辛く淋しい世の中に突き出された所で、何がうれしからう。

「俺れに救はれた。けれどもどう生ようと云ふのだ？　前よりも辛い思ひをし、苦しみもいいて生かして置かれる事にちつとも淋しくないのだ！　お前は一人の人間を助けたと云ふ事に滿足して、いつまでもたのしむだらうが、俺れはいつでも、「あの時死んだら」と悔まなくちやあならぬ」

私はほんたうに、若しあの時新さんを助けたところで、一生を確かに強く、虐げられずに送らせる事が出來なければ、何でもない事になつて仕舞ふ。

死なうとする者は救けるべきだと云ふ常套的な感情に支配されて、その者の一生を考へるより先に、自分の心に滿足を與へるのぢやあないか？

私は此處に思ひ至ると、今までの總てがグザグザに壞れて仕舞ふ樣に思はれた。

考へて見れば、私が今日までして居た事の大部分は人を惠むと云ふ事に餓ゑて居る心を滿たして居たのぢやあないか？　私は彼等に衣服をやり、金をやり、食物をやり、同情したが、それ等は、彼等の一生に對してどんな意味があるのか？

若し私がほんたうに、大きな愛で彼等を包み、

深い同情で引きあげようとしたのなら、新さんを死なせずに済んだらう！

善馬鹿を酒のみにしないで済んだのだらうに。――

けれども二人は、私がどうも出来ないうちに死んで埋められようとして居る。ほんたうに、私がどうもしないうちに、なる丈のことはちやんちやんとなつて仕舞つたのである。

新さんが、自分の命の尊さを知るまでに私が力づける事は思ひもよらない事であつた。

私はどうしても、彼等を真に愛しては居ない。又愛せない！　どうしたら好いのだらう。

私はたうとう失敗して仕舞つたけれども、彼等に對して何かしてやらなければならないと云ふ望みばかりが、どれほど私に情ない思ひをさせるだらう！

私は、お前方の前には、何の要領もない人間だつたのだ。お前方には、気に入らない事も馬鹿馬鹿しい事も沢山したかもしれない。私に、今まで植ゑつけられて居た所謂無智だとか見栄だとか親切だとか云ふものを、お前方の傍を思ふばつかりで、散々に打ち壊して、塵の様にしてしまつた。

けれども、その代りとして入れるものは何處にあるか？

私の手は空つぽである。何も私は持つて居ない。此のちつぽけな、みつともない私は、ほんたうに途方に暮れ、間誤付いて、只どうしたら好いかしらんとつぶやいて居るほか能がない。

けれども、どうぞ悄まないでおくれ。私はきつと今に何か摑へる。どんなに小さいものでもお互に喜ぶことの出来るものを見つける。どうぞそれまで待つておくれ。達者で働いておくれ！　私の悲しい友達よ！

私は泣きながらでも勉強する。一生懸命に勵む。そして、今度なうと云ふ時にでも好いから、ほんたうに打ちとけた、心置きない私とお前達の微笑み合ふ事が出来たらどんなに嬉しからう！　どんなにお天道様は御よろこびなさるか？

私の大好きな、私を育てて下さるお天道様は、どんなに、「よしよし」と云つて下さるか！　あの好いお天道様が……

善馬鹿の死骸は後になつてから見つかつた。

隣村の離れ沼に犬を抱いて彼は溺れて居た。

町中の小溝を行列が、遊んだ彼の亡い間を、出たり入つたりして居たと云ふ。

◇

「トロカデーロ」の喫茶室は昼でも人工の間接照明だ。眉毛を描いたピエロが赤絹の飾帯を横へたらしてロマンスを唄つてゐる。種々なサンドウヰッチ、菓子、果物サラドの全行程をリプトン紅茶とともに流し込んでる丈夫な群集にピエロが描いた細い眉をあげ乍ら顫音でロマンスを唄つてゐる。

だが、彼女の皮膚はきつと冷つこいのだ。それは若々しい彼女自身がしなやかな一つの楽器ででもあるやうにあゝやつて立つてヴァイオリンを顎の下へ當てがつてる工合でわかる。弓を運ぶむき出しの右腕の表情でわかる。彼女は近代女性の感覚で、ロンドン有数な喫茶室の第一ヴァイオリン弾といふ自分の職業を理解して居るのだ。

（「ロンドン一九二九年」より）

伸子

序

この小説は、大正十三年の九月から十五年の九月までの間に、一部分づつ「改造」に掲載されたものだ。

書き始めてから、終るまでの間に足掛三年經つて居る。其故、擱筆當時に見てさへも、最初の部分は、舊作の感があつた。其後、全體を一纏めにする爲にひどく時間をかけた し、印刷にかゝつてからも手間どり、今は事實上舊作になつた。然し、この作品は自分の生活と密接な關係のあつたものだし、作の上に年輪のやうに發育の痕跡が現れて居る點、自分は愛を感じて居る。

昭和二年十一月二十三日　　作　者

一

一

伸子は兩手を後に廻し、半分明け放した窓枠に倚りかゝり乍ら室内の光景を眺めて居た。

部屋の中央に長方形の大卓子があつた。枝形燈架の明りが、其卓子の上に散らかつて居る書類――タイプライタアの紫インクがぼやけた亂暴な厚い綴込、隅を止めたピンがキラ〳〵光る何かの覺え書――の雜然とした堆積と、其等を挾んで相對し熱心に讀み合せをして居る二人の男とをくつきり照して、鼠色の絨氈の上へ落ちて居る。

部屋中を輝かす灯が單調である通り、二人の男の仕事も單調で詰らなかつた。ホームスパンの服を着た、淺黑い瘠せた男が左手に綴込を持ち、眼を配り、頁をめくり、どん〳〵桁の多い數字を讀みあげて行く。向ひ合つて、伸子の父の佐々が椅子に淺くかけ、青鉛筆を持つて油斷なく數字をチェックして居た。彼は品のよい縞で變り襟のついた喫煙着を着けて居た。くつろいだ裝にも似合はず、彼はもう三十分以上その忙しい、機械的な仕事に沒頭して居るのであつた。

傍觀して居る伸子には、仕事の内容も、全く其をしなければならない必要も解つて居なかつた。彼女がおとなしく窓際に退いて眺めて居るのは、主として、子供のうちから父の多忙な時決して邪魔は出來ないものと觀念して居る習慣によるのであつた。けれども、彼女は段々彼等の活動の調子に釣込まれて行つた。強くも弱くもならない平らな聲が早口に、

「二八七、二六〇、五九三〇五、四二七……」

勤勉な紡績の唸りのやうだ。其につれ、佐々の青鉛筆は殆ど自働機的敏活さでさつさつ、さつさと、細かく几帳面に運動する。そこに自ら獨特のリズムが生じた。凝と見守つて居ると、機械の規則正しい運轉が人の心に與へる、力強い確乎とした、同時に精力的な充奮に似たものを感じるのであつた。

彼等は一息にふた綴大判の綴込を片づけた。そして、少しのろ〳〵と、三つめの薄い覺え書を讀み合せて仕舞ふと佐々は、如何にも重荷の下りた風で、

「やあ、どうも御苦勞樣でした」

と、頭を下げ椅子をずらした。

四邊には、一時に緊張の緩みが來た。伸子まで何となく吻とし、俄に外界の騷音が自分の背

後から幅廣く押しよせて來るのを感じた。丁度晩餐後、人の出盛る最中だ。彼女等の居る五階の直下に横はるブロウド街からは、絶間なく流れる無數の人間の跫音、喋り聲、笑ひ聲等が溶け合ひ混り合ひ、とりとめのない雜音の濃い瓦斯體となつて昇つて來た。夜の空まで瀰漫する都會の巨大などよめきを貫いて、キロロロロロ……と自動車の警笛が聞えた。燈柱の下で夕刊を呼び賣する子供の「パイパア、パイパア」といふ甲高い聲が途切れ途切れに聞えて來る。――ホームスハンの男は、手早く書類をまとめて自分の茶色い手提鞄に仕舞つた。そして、二言三言佐々と話し、伸子に遠くから挨拶すると、遽しく氣取つて出て行つた。佐々は戸口まで其男を見送つた。

　戻つて來ると、彼は美味さうに葉卷の煙を吹いた。

「さて――そろそろ出かけますかな」

　伸子は窓際を離れ、傍の長椅子に來てかけ乍ら、呟いた。

「本當にいらつしやる積り？」

「どうして？　[illegible]も行くんだらう？　さう返事をしてありますよ」

「私――やめたいわ」

「何故？」

「草臥れて居るの。――それに……[illegible]餘り面白くも無ささうぢやないの」

「ふむ……」

　佐々は、暫く默つて自分の吐く煙を眺めて居たが、軈て徐ろに云つた。

「一寸着物なんぞはそのまゝで結構なんだからおいで。――行けば何かしら行つた丈のことはあるものだ。それに僕の居るうち出來る丈人も知つて置かないと、いざといふ時一人で困るよ」

　今夜、彼女は父と二人、日本人の學生俱樂部で催される或集り、茶話會のやうなものに招かれて居た。最近故國から來た某文學博士を中心として打ち解けた集りをするといふ案内を貰つて居たのだが、伸子は一向好奇心が起らなかつた。彼女自身も紐育には新來の旅客であつた。彼女は、午後獨りで勝手の不確かな下街に買物に出かけ、神經を疲らせて歸つた。夜まで行儀を守つて人なかに居なければならないのは、彼女に少しうんざりなのであつた。けれども健康で活氣がある佐々は、伸子の引込思案を多くの場合うけつけなかつた。彼は、六十歳に近い老人と思はれない活潑さで、いつも伸子を引き廻した。それには、自分が滯留して居るうちに、地理も覺えさせ、交友も拵へて置いてやらうといふ心遣ひが潛んで居るのは明かであつた。彼は會社の用事で、僅か三箇月ばかり、此都市に來た。彼が歸つて仕舞へば伸子は獨りで居殘る豫定であつた。彼女は旅行の間、大抵いやでも父が行く處へは跟いて歩いた。市役所から、或大銀行の金庫の裡で、人間が金貨の山に埋まり血の氣のない指で金勘定をして居る、空氣の流通のわるい暑い部屋の中まで。土地不案内な、此といふ定つた目的も持たない伸子は、又、さうでもしなければ一日が永く、捨てられた石のやうに退屈したに違ひない。――

　今も彼女は確かに行きたくはなかつた。けれども、父が出た後、ぽつつり獨りで旅舍の部屋に十二時頃まで閉ぢ籠ることを考へると、それも餘りぞつとした役廻りとも思へない。

　伸子が足をぶりぶり愚圖々々して居る間に、佐々は其にかまはず活動家らしい足どりで寢室に行つた。間もなく、開け放した扉から、水のぽしやぽしやいふ音、齒刷毛を使ふ輕い乾いた音など聞えて來た。窓からは、宵つぱりな都會の賑な[illegible]の建物の屋根の頂に[illegible]の氣ぜはしい明滅、下界の燈火を反射して、ぼうつと

潤ひを帶びた黒い夜空の一部が見える。

伸子の胸にいきなり、

「おいてきぼりにされては大變だ！」

と云ふ、子供らしい切ない思ひがこみ上げて來た。

彼女は、いそいで椅子を立ち、父の後を追つた。佐々は、もう髮の手入れもすみ、部屋の眞中に立つて上着に片手を通しかけて居るところであつた。其を見ると彼女は慌てて云つた。

「すまないけれど一寸待つて下さらない？　私、欠張り行くわ」

伸子は早足に鏡の前に行つた。

佐々は、時計を見た。

「もう餘りゆつくりは出來ないよ」

「すぐよ、五分！」

伸子は、迅速に髮をなほし、小さなまるい茶色の帽子をかぶつた。

二

丁目が殖えるにつれ、人通りが減り、街が寂れて來た。

父娘は、陰氣に日隱しの下りた大きな飾窓について角を左へ曲つた。表通りから入ると俄に暗く、緩く爪先下りになつた鋪道の足許さへよくは見えないやうであつた。行手、大通りで一つ隔てた彼方がハドソン河で、時々鋭い夜の河風が吹きぬけた。河沿公園の葉のない樹木の間に冷たい蒼白さで瓦斯燈がぼんやり灯つて居るのが見える。

伸子は、寒さと淋しい處へ紛れ込んだ氣味惡さとで異樣な緊張を感じた。彼女は、我知らず強く父親の腕にすがりついた。

「――まるで暗いのね――見當がおつきになつて？」

佐々は、靴の踵の音をさせて歩き作ら、絶えず右側の家並に注意を拂ひ、幾分平生と違ふ壓へつけた音聲で答へた。

「もう少し先だらう。――然し斯うどれもこれも同じ形の家ばかりでは參るな。もつと街燈でもふやせばいゝのに……」

全く、左右には低い鐵柵と三四段の上り口を持つた狹い家の入口が、どれも此も同じ型で幾十となく並んで居た。鋪道のまばらな街燈の光は、一寸奧に引込んだ其等の質素な戸口まで屆かない。彼等は、段々佗しく感じ作ら、殆ど一軒ごとに薄暗い家の入口を覗いて進んだ。大抵いやになつた時分、彼等の前に、一つ明るく灯かげの洩れる弓形窓が現れた。窓帷の隙から、内部にあらつく男の聲や女の聲で判らない話聲が聞えて來る。

伸子は、父の腕を引いた。

「此處よ！」

佐々は、外套の襟を一寸直し、入口の段を昇つた。呼鈴を押した。短い、陰氣ない音が直ぐ、扉の彼方で鳴つた。伸子は、期待と好奇心を感じた。暗い横通りで變な不安に襲はれて來たところなので、彼女にはこの古くさい板硝子の嵌つた扉の一重彼方が何かの暖かさ樂しさを持つて居さうに思はれたのであつた。すぐ硝子に人影がさした。樫扉は内側に案外滑らかに開いた。扉をあけた男は、彼等を見ると更に入口を廣くあけ、改つた口調で挨拶した。

「よく被來つて下さいました。――どうぞ……」

佐々は玄關の間に入ると直ぐ外套を脱ぎ始めた。伸子は自分の周圍を見廻した。右の壁際に鏡つきの高い帽子掛があつた。左側には、葡萄葉の厚肉浮彫のある腰架が置かれ、其前から二階へ登る緩い階段が見上げられる。奧に重い垂帳で人目を遮つた開け放しの室があつた。その廣間から男聲ばかりの、壓力が籠つた談笑が響いて來た。其邊一帶、頑丈な茶色の樫の

圓柱や鏡板が艶々灯の下で光つて居るのが、伸子に快適な感銘を與へた。彼女の感覺に新鮮な一種の匂ひがその邊に滲みついてゐた。家具の塗出液のにほひ、煙草、羊毛ともう一つ何か乾いた皮製のものから立つやうなにほひが皆一つに溶け込んだ、男ばかりの住居らしい匂ひだ。

佐々の外套をたすけてぬがすと、扉をあけた男が云つた。

「――では此方へ、女の方も澤山來て居られますから……」

伸子は、輕く頭を下げる拍子に初めて其男の顏をはつきり見た 彼は白い低いカラアと黑いネクタイと黑い地味な少し手ずれた服を着て居た。陰氣な顏だが、闊みのある大きい顎が目についた。伸子は、階子を登り乍ら、

「安川さん、來て被在いますか」

と訊いた。

三十五六に見えるその男は、持ち前と見える低い調子で答へた。

「來て居られます」

二階へ登り切ると、一つの部屋の戸が半分開いて居て中から女の喋り聲がした。彼は、

「安川さん」

と聲をかけた。

「佐々さんが見えました」

中の話聲がぴたりと鎭つた。

「まあ! さうですか」

聲と共にやゝ前踞みな大股で、閾の上に安川の姿が現れた。伸子を案内した男は階下へ去つた。安川冬子は、伸子がある專門學校に僅の間籍を置いて居た時、上級の學生であつた。彼女は勤勉な學業の優れた生徒として誰にでも知られて居た。伸子は、一二度口を利いた位の間であつたが、此處で兎に角海の彼方からの友達と云へるのは彼女ぎりであつた。安川は、一年許り前から、C大學で教育心理學を專攻して居るのであつた。

安川は、珍しさうにじろ〳〵伸子を見た。

「噂はきいて居たけれど、私は一向外へ出ないから、ちつとも知らなかつたわ。よくいらしつてね。――いつ此方へ着いて?」

「三週間ばかり前」

安川は、學校時代と些も變らない、その變らなさに伸子が驚いたほど同じてきぱきした口調で訊いた。

「お父樣と御一緒だつて?」

「えゝ。暖市前」

伸子は、自分がこの女性達の前でまるで年少者扱ひなのを感じた。

「今夜も下に來て居るわ」

「さう。――いゝわね。今どこ? お宿は」

「×××ホテル」

「あゝ、私あすこならいつだつたか行つたことがありますよ。――皆さんに御紹介しませうね、こちらは高崎さん――高師をおでになつて家政學をやつて被在る。この方は名取さん――音樂が御專門――」

伸子は一人々々に向つて克明に頭を下げた。

一通りの挨拶、短い應答が終ると、伸子は失望といふか、意外さといふか、ぼんやり寥しい心持を感じた。居合せる人の中には一目で何處か好きになれるといふやうな人が一人も居なかつた。彼女等は、それ〴〵專門もちがひ容貌も違つては居るのだが、誰でもが確りものらしいところ、物質にも精神にも多忙で絶えず何かに追ひ立てられて居るといふ餘裕のない感じ。其等は、うるほひない身なりとともに、例外ない持ち前であつた。伸子は、傍の椅子の上に外套を脱いだ。

一日途切れて居た學校の話、留學生の噂が間もなく起つた。或人は、伸子に親切に話し

かけた。彼女は愛想よく其々答へた。然し、心が變に沈鬱になつた。仲子は、この部屋をこめて居る生活の狹い、暢々しない雰圍氣が何となく窮屈で馴染めなかつた。折角新しい自然や人間の生活の中に入つて來て居ながら、何も見ず聞かず、友達とよつても課業、課題、いそがしさ、又は、第三者には興味の起しやうもない人の噂しか出來ない海外遊學生の境遇に、仲子は恐怖を感じた。

縛りつけられた感じは、階下の廣間に出ても仲子から去らなかつた。

廣間の隅では佐々が機嫌よく安樂椅子に納まり、頻りに何か喋つて居る。

入口に近い垂帳の傍の柱によりかゝり、腕を組み、先刻彼女を二階迄案内した男が、もう一人の椅子にかけた男と話して居た。椅子にかけて居る男の膝には、場所柄になく白と黒との斑猫が、丸くなつて抱かれて居た。この男は打ち寛いだ風で、その猫の背を撫で〳〵物を云つて居る。家庭的な光景で、彼女にいゝ心持がした。仲子は、隣りに坐つて居る中西といふ、おそく來た、美しい、情の籠つた聲で物を云ふひとに、其男の名を訊かうとした。

すると、先刻の男が大柄な骨つぽい體をぎごちなく運んで來て彼女のすぐ前にある卓子の横に立つた。彼は、卓子の端で埃でも拂ふやうな手付をすると、低い聲で、

「今晩は――」

と開會の辭めいた挨拶をし始めた。圍りの幾つかの顔が聲の方へ振向いた。廣間ぢうのざわめきが鎭まつた。森とした寄木の床の上で誰かが椅子をずらせた。――改つた咳拂ひの聲がする。……

男は、伏目になつたまゝ、平凡に多數の人々の集つたことに對する滿足の意をのべ、松田博士への歡迎の言葉と紹介とを終つて席についた。松田博士は、懇篤さうな中老人であつた。彼は自席に立つて、座談的に藝術の郷土的特質といふ見地から、亞米利加の繪畫に就ての觀察を話し出した。

話しては、やゝ嗄がれた平坦な音聲で、常識的に話を進めて行く。仲子の興味は、又程なくそれに物足りなさを覺えて來た。彼女は、話をきゝ乍ら、向ひ側に並んで居る男達の顔を見較べ始めた。大概の男は廣間の右端に立つて居る博士の方に頭を振つて居るので、仲子の處からは澤山の顔の左半面だけが見えた。艶々した血色の上瞼の腫れぼつたい凡俗な顔、皮膚が黒ずんで目鼻立の粗い、恐らくは口中が臭さうな容貌、又は、顔から口の邊にかけて肉の薄い、粘液質らしいすべ／＼した皮膚の持ち主。――一寸した脚の置き方や、椅子の凭れ方が皆何處か隱れた性格の一部を現して居るやうで、仲子はこの見ものを面白く感じた。正面から覗た時は、怜悧さうに引緊つて居た或青年の顔が側面から見るとまるで魯鈍さを暴露し力弱く見えた。――仲子は不圖平生餘り見たことのない自分の横顔について微かな不安を感じた。順々に並つて、彼女と斜向ひになつて居る先刻の男、名も仕事も知らない中年の男の番が來た。

彼は椅子の奥に深く腰を落してもたれ、膝と見え確り胸のところに腕組みをして、うつむき加減になつて居る。先方から見られる心配ない一瞥を與へ乍ら、仲子は微かな戸惑ひを心の隅に感じた。彼の横顔には、此迄見て來たどの男達にも無い何かがあつた。他のどの男でも、面貌と體軀とは同じ力の密度――つまり胸のところにあると同じ血や肉で一くるみに出來て居ると感じられるのに、此男ばかりは肩幅のひろい北國人風な體つきと、その上にのつて居る顔との間に、妙にちぐはぐなものがあつた。足許

から同じ力を入れてずつと見上げて行くと顔へ來て急に視線が間誤つくやうな複雑なもの――地味さ、感傷的なもの、心持が暢やかに外部に發しきらず内攻して居るといふ印象を與へるものなどが、陰翳となつて、下唇の引緊つた蒼白い横顔にはびこつて居るのであつた。

伸子の視線は一二度後戻りをした。彼女の好奇心が、その陰氣な横顔に向つて動いた。彼の顔にあるものは、決して多くの人々の持つて居るやうな得意な男の快活さでもなければ、雄々しさでもなかつた。何か陰のものであつた。それは暗さに近い。視る度に、その陰翳は何處から來る何物なのかをひどく知りたい心持を起させる種類のものなのだ

松田博士の話は終つた。

四邊には以前より打ち解けた談笑が起つた。廊下の方の扉が開き、アイスクリームや砂糖菓子が運び込まれた。すると、伸子が好奇心を持つた男が再び立つた。そして新しい顔ぶれもあるから、順ぐりに自己紹介をしたらと思ふがと提議した。左様いふことの大嫌ひな伸子は、思はず救ひを求めるやうに遠方の父親を見た。父はその申出が、愉快さうに、一寸よい微笑を眼尻の襞にたゝんで聞かうとして居る

「それでは――請ふ隗より始めよといふことがございますから、失禮して私から申上げます」

彼は、佃一郎といふ姓名であつた。C大學で比較言語學を專攻し、古代の印度、イラニアン語をやつて居るのださうだ。國は裏日本で、研究の傍、Y、M、C、A、の仕事を手傳つて居た。彼は、

「私で出來ますことは出來る丈御相談にあづかりますから、どうぞ御遠慮なく仰云つて下さい」

と結んだ。

古代語の研究と、極めて實利的なY、M、C、A、の仕事との間にどんな心持の上の必然なつながりがあるのだらう。伸子は腑に落ちない氣がした。が、彼の專門の題目が漠然とした滿足を彼女に與へた。彼の顔に現れて居るものとその研究との間に性格的な關係をもつ何ものかを感じたやうに思つたのであつた。

後から立つた者は、殆ど皆、政治、經濟、社會學、法律等が專攻であつた。猫を抱いて居たのは、深田といふ植物學を勉強して居る人であつた。女達も、各々地位や目的を手短に述べた。伸子は極りわるさからぶつきら棒に

たゞ、「佐々伸子と申します。――よろしく」と云つた丈で坐つた。彼女は此等の人々を前に置いて、自分は廣い深い人間の生活を知りたいのだ、死ぬ迄に一つでも、よい小説が書きたいのだ、と告白する勇氣を迚も持ち得なかつたのであつた。

親娘は、十二時少し前に旅館に歸つた。

伸子が湯上りの部屋着で、晝間買つて來た細工のよい銀製の封蠟道具をいぢくつて居ると――其は歐洲戰爭の第五年目で、佳日處々に赤十字や戰地慰問の爲の慈善市があつた。伸子はその一箇處で、古風なその道具を見つけて來たのであつた――寢衣に更へた佐々が來て、

「明日の朝九時に佃君が來るから覺えて居ておくれ」

と云つた。

「佃さんて――今夜の？」

「うむ。――頼まれて來た南波の縣のことがどうも氣になるが、とても一人でやつて居られないから、あの人にちよつと手傳つて貰はうと思つてね」

佐々は、大まかに云つた。

「あの男は此方に大分永いらしいから、きつと何か手がかりを見つけて呉れるだらう。案外、いやその人なら知つて居るといふやうな者がな

いでもあるまい。……此席に人間のうぢや〳〵居る處で、何年も行方不明の男一人見つけようとするのは、何しろ一仕事だ！」

そして、

「早くお前もおやすみ」

彼はいかにも活動の後の睡眠を愉しむ風でさつさと寢臺に入つた。

三

次の朝、仲子はいつもの通り元氣を恢復し、爽やかな氣分で目覺めた。寢室の窓帷はまだ閉ぢたまゝであつた。窓帷の僅な隙間から、一本の震へる細い金線のやうな光線が、薄暗い部屋に射し込み、化粧臺の上の白粉壺に、小さい燃える炬火のやうな閃きを作つて居る。

彼女は、靜かな氣持で被布をはねのけて起き上つた。仲子は、首をのばし、彼方の寢床を眺めた。父は先に起きて仕舞つたと見え、床は空であつた。

仲子は、枕許の時計を見た。九時半になつて居る。彼女は、忽ち昨夜の約束を思ひ出した。――

彼女は、部屋着を羽織り、窓をあけた。今日もよい天氣だ。少し霧つぽい空で、朝日が暖かく十月下旬の街路や建物に輝いて居る。仲子は、格別急ぎもせず顏を洗ひ、髮を結ひ、衣服を更へた。彼女は昨夜と同じ、白絹のカラアのついたさつぱりした紺の服で廣間へ下りて行つた。

朝の廣間は澄んで清らかで、大理石の圓柱や熱帶植物の鉢植が、埃一つない空氣の中に納まつて居る。

仲子は、人影疎らな廣間を見渡した。食堂の入口に近い長椅子に並んで、父と佃とが話して居る。彼女は眞直其方へ行つた。

「やあ、起きたね」

彼女は父に朝の挨拶をした。そして、彼女の爲に、椅子を引きよせた佃に、

「ゆうべは失禮いたしました」

と云つた。

「私こそ失禮いたしました。お疲れになりましたらう」

佐々と佃とは、すぐ話を元に戻した。彼等は、南波武二を尋ねる廣告を日本字新聞に出すこと、佃が市の宿泊所の名簿を調べること等を定めた。

傍で二人の話を聞き乍ら、仲子は佃が此處へ來ても、昨夜彼女の目についた雰圍氣を顏や體に持つて居るのを感じた。その上實際やつて相對して居ると、彼には、彼女の貴い、溫い、漂つて居る情感を引きまとめて狭く何處かに引きつけるやうな處があつた。その引きつけられるやうに感じるものは何なのか。外面的なものでないのは明かであつた。彼の服裝は、今朝のはつきりした光の中で昨夜にまして氣が利いても見えなければ、上等でもなかつた。寧ろ貧しげであつた。容貌にしろ、それは美しき男性といふ範疇から遠いどころではない、燈火の反映の下で見たより一層陰氣であつた。其だのに、何故か彼には仲子に好奇心を起させるものがあるのであつた。――

話が一段落つくと、佐々は、

「どうです、一緒に茶でも上りませんか――實は我々もこれから食事をやるところですから」

と佃を誘つた。

佃は、一旦辭退したが卓子についた。仲子は、彼から、日本から來た勞働者が浮浪者になる經路や賭博狂の或男の話などをきいた。佃は話下手であつた。自分から話題を展開させる性質の男でなかつた。彼は、教室に出る時間の都合があると云つて、間もなく中座して歸つた。

伸子は、十一時前に下街に行く父と旅館を出て、一緒に地下電車の停留場まで行つた。其處で別れ、彼女は自分だけ、徒歩で美術館に行つた。

土曜、日曜以外、館内はひつそりして居た。右のとつつきに、ロダンの作品ばかりを集めた一室があつた。レムブラントの、花を持てる女の前で、イタリー人らしい一人の男がそれを模寫して居た。彼は熱心に、美術家らしくブラウズを着た背をかゞめ、原畫と自分の畫面とを見較べ見較べ細心に、神秘的な原畫の素晴らしい色調を出さうと努めて居るのだが、伸子の眼に彼のカンヷスは輪郭以外の何ものでもなく映つた。或畫商では雜誌の表紙にでも應用するのか、亞拉比亞人が、槍を振つて躍り上る畫面に跪つて居る姿を、石版刷のやうにはつきり寫して居る中年の女も居る。伸子は、輕い晝飯を階下の喫茶店ですまし彼方此方歩き廻つた。

もう歸らうといふ時、彼女は急に或事を思ひつき、もう一遍階上へ引きかへした。少時迷つた擧句、番人に訊き、伸子は一つの人氣ない陳列室に入つた。其處は古代波斯、亞剌比亞の繪畫や寫本などの陳列室なのであつた。繪畫、文字のほかに、土耳古系統の美術品として好んで居た精緻な唐草模様の銀細工、絨氈、碧と黒との釉薬の對照が比類なく美しい陶器などが、皆イラン人の製作であつたのに伸子は驚いた。彼女は、特に、入つて突當りの廣い壁に懸つて居る裝飾瓦に異常な懐しさと興味とを覺えた。貴人行樂の圖で、花の咲き滿ちた春の樹下に若い貴族の男女が語つて居、侍女が彼方から裳を春風に吹かれ乍ら酒瓶を捧げ來る樂しげな構圖だが、王女の下膨れに豐かな頰といひ、大どかな眉と云ひ、領巾をかついだ服の樣子と云ひ、所謂天平時代の風俗そつくりであつた。其ばかりではない。一面に吹き亂れた花の愛らしい形から、樹木、飛んで居る鳥の形、而も其等を彩るたつぷりした釉薬の黄、紫、緑、碧の見覺えある色に至るまで、寧樂朝の美術を回想させずには置かないものがある。

伸子は、體が熱くなるのを感じた。せはしく心の中で波斯、支那、日本と聯想が飛んだ――然し、直ぐその三つの間に正しい連絡を見出さうとするに伸子の東洋美術史は餘り貧弱であつた。

彼女は、熱心と好奇の現れた眼つきで、幾つもの硝子棚の陳列品を見た、頭布を巻いた、頭でつかちで眼ばかり大きな王が輿にのつて居る處や、狩獵の繪がある。餘白に記錄らしい文字があつた。けれども、朱や金で裝飾された、模様のやうな文字は繪がなければ伸子には何方が上か下かさへ見分のつかないやうなものであつた。彼女はこつこつ美術館の數多い石段を降り乍ら、彼那文字を誰が本當に讀むのかしらと怪しみおどろいた。

土曜日に、伸子は父と朝から郊外の知人を訪問に出かけた。

三時過に市中にかへつて來たが、佐々は夕刻まで下街で用事があると云ふので、伸子獨り先にホテルへ戻つた。昇降機の方へ行きかけると、誰かが彼女の名を呼んだ。振返ると、素ばしこさうな、雀斑顔の侍僮が驅けて來て切口上で報告した。

「お客様です。丁度今被來つて彼方に待つて被在います」

伸子は、誰だらうと思ひつゝ廣間に戻つた。見ると、昨日の婦人と同じ食堂の入口に近い隅に、佃が来て居る。彼の用向は直ぐ察しられた。彼が、自分のところへと定めたやうに一つの現實を内藏して居るのが、伸子に何となく彼の重々しさを感じさせた。伸子は、くつろいだ氣分で挨

捜した。

「今日は――。父はまだ歸りませんが、私で分りますこと？」

仲子は彼と向ひ合つて座をしめた。

「きのふお賴みを受けた新聞廣告を出すやうにして來ましたから、その受取を差上げようと思ひまして――」

「さう、どうも有難うございました」

仲子は渡された紙片を一寸見に手提の中にしまつた。佃はその手元を見守り乍ら云つた。

「それから――今朝ミルス・ホテル――お話した市營宿泊所ですが――あすこへも行つて見ましたが、近頃の帳面にその名は見當りませんでした。……三月分出して貰つてよく見たのですが、

「まあ、其那に一どきにして下さらないでもいいのに」

仲子は、彼がどうして其那時間を持つて居るか驚いた。

「うちの父はあゝいふいそがしがりやだから、頼ふ時は大急ぎにごた／＼お願ひするけれども、貴方は、悠くり、お暇な時にして下さればいいのよ」

「いゝえ、かまひません。きのふは午後すつかり空いて居た日ですから――ではどうぞお父樣がお歸りになりましたら、新聞には多分明後日廣告が出るとお話し下さい。――ミルスの方へは、又二三日うちに行つて見ませう、少し心當りもありますから……」

「どうぞよろしく」

――けれども、何となくこれぎりで立ち上り、左樣ならと云ふ氣がしなかつた――佃も、いそがないと見え、傍の小卓子に置いた帽子や手袋をとりあげる風も見えない。仲子は、やがて、

「貴方のやつて被在るイラン語といふの――まるで不思議なものね。きのふメトロポリタンに行つたので覗いて見たけれども、私にはどつちが頭だか尻尾だかまるで解らなかつたわ」

と云つて笑つた。佃も頭を振つて笑つた。その笑顔は、靜かな湖に漣が擴つて行くやうであつた。彼は、

「どんなのを御覽になりましたか？　卷物ですか、それとも石刷りですか」

と訊いた。

「硝子棚に入つて居る卷物――繪のあるの。――波斯人は今でも彼那字を使つて居ますの？」

「――字は大して違ひますまい。言葉の方は昔から大分違つて來て居ますが――字でも、大昔は彼那のでない楔形文字を使つたのです――」

仲子は、興味に牽かれて佃の顔を見た。

「そんな字で、どんなものを書いたんでせう、記錄や何かばかり？」

「いゝえ！」

佃は、力強く否定した。

「史詩や物語も澤山あります。――尤も、ずつと昔その楔形文字の時代は、王が他の民族を征服した短い記錄のやうなものが巖なんかに刻まれたものばかりですが――」

仲子は、話に身が入るにつれ、飾りつけなく、率直に口を利くやうになつた。

「字が段々複雜になり殖えるに從つて、種々な物語が書けて來たといふわけね。――どんな風な話が多いのでせう……どんな氣質が現れに居て？　書いたものに――」

「――さあ」

佃は考へて默つた。そして、どし／＼話さないので、少し仲子をもどかしがらせた後云つた。

「――大體から云つて悲觀的でせうね」

「人間を悲觀して居るの？――それとも時代の境遇を不平に思ふの？」

「あの國民は昔から種々な民族にいぢめられて來て居ますから、政治的に苦しんで居るのが多く原因して居るでせう」

「――……」

仲子は、彼の專門が學術上に持つ價値や、研究のめざして居る目的などを訊ねた。比較言語學は面白く彼女に思へた。民族の心理や社會組織、文明の消長と切つても切れない緣のある、活きた綜合的な研究の一分野として興味を唆るものなのであつた。佃は決して迷惑ではないらしい樣子で、丁寧に、然し何處やら言葉足らずに仲子の訊くことを說明した。彼は小さい手帳を出し、現代文字の標本を書いて見せたりなどした。

彼等は、二時間近く話した。佃は軈て見舞ふ病人があるからと云つて立ち上つた。

「――日本人の方？」

「えゝ、さうです。もう大分いゝのですが、毎日一遍づゝ行つてやることにして居るので待つて居るでせう」

丁度其頃、殆ど世界ぢうに瀰漫した惡性の感冒が流行して居た。紐育市中でも毎日夥しい患者が腦や心臟を冒されて死亡した。獨逸の潜航艇が、合衆國の沿海へ來て病菌を撒いて行つたなどといふ評判さへあるのは、仲子も新聞で知つて居た。

彼女は佃に笑ひ乍ら云つた。

「御見舞はいゝけれど、御自分で貰つて被來らないやうに」

すると、佃は案外眞面目に云つた。

「私は多分大丈夫でせう、三四ケ月前に種々な豫防注射をしましたから」

「まあ、どうして？」

「Y、M、C、A、の方から、佛蘭西へ行くことにしてすつかり準備した時させられたのです。窒扶斯や猩紅熱の。――だからうつりますまい」

彼は、重々しく云ひ乍ら、卓子の上から老書生らしい古くさい山高帽をとりあげた。

「それに、あゝ云ふ病氣は此方の心の持ちやうで違ひますよ」

どうして戰地へなど行く氣になつたのかと訊きたく思つた。仲子に何の說明も與へず、佃は丁寧に挨拶して、ぎごちない足どりで人ごみの間に隱れた。

仲子は部屋に歸つた。

閉め切つてあつた部屋には、午後の穩やかな斜光とともに、むつとするいきれが罩つて居る。彼女は窓を廣くあけた。そして、帽子をとり、外套を脫ぎ、先づ一休みといふ心持で、長椅子の上に橫はつた。

彼女の兩手は組合されて頭の下にあつた。その下には座褥が重なつて柔かく心持よく押しつけられて居る。肱かけの部分が高いので、長椅子は彼女の眼のところに程よい陰翳を與へた。暖かい……室內は絕對に物音せず、僅に、開いた窓から氣にならない程度に市街のどよめきが流れて來る……神經を撫で和らげられるので、仲子は眠いやうになつた。けれども、彼女は寢入りはしない。うつとりした眼をあけ、閃のない老いた午後の日光の遊んで居る白い天井や小紋模樣の澁い壁紙の上を眺める――考へる。何故なら仲子の心から、佃の古くさい黑い山高帽がまだ消えて居ない。……

佃に會ひ、彼と話すのは仲子にとつて興味でない事ではなかつた。旅行に出てから、彼女はそんな種類の話をする機會も對手も、佃に會ふまでは持たなかつた。佃の專門の研究について種々新しい話を聞くのは面白いのだか――仲子は考へた。彼は何故、あゝ何か特別な印象をひとに與へるのであらう　彼は、まるで流行に

反抗でもするやうに、猶太人の爺がかぶりさうな古びた山高帽を離さない。その山高帽のやうな特別さ、淋しいやうな滿ち足りて居ないやうな何かが伸子の心を牽くのであつた。彼がもう若くないのに貧乏しつゝそのやうな研究を仕て居るらしいのが同情を誘ふのであらうか。或は、自分が生活力の充實を感じて活々した女だから、逆に暗い彼の存在に興味を覺えるだけなのであらうか。――伸子は、くるりと長椅子の上で腹這ひになり考へつゞけた。

四

二三日置いて、佃は職業紹介所を調べた報告を齎して來た。

南波武二の消息は何處でも得られなかつた。佐々は、更に佃の友人を頼つて、中部の主な都會から發行される日本字新聞に同じやうな廣告を出すことを頼んだ。佃は、屢々其打ち合せにホテルへ出入した。又、伸子がふと話したC大學の講義目錄を持つて來て貸したりした。

佃がその印刷物を持つて訪ねて來た晩、伸子は父と、客があつて階下の廣間に居た。伸子は父達の會話を一向樂しんで居なかつた。老人の其客は、伸子がまだ十位の女の子ででもあるかのやうに時々じろ〳〵顏を永い間見ながら、口ではまるで彼女と無關係な、鐵の話をつゞけた。――ところへ、外套を腕にかけ、帽を手に持ち、陰氣な顏つきで廣間の端に佃が現れた。彼女は、活々彼を迎へた。佐々は、佃と東郷といふその老人の客とを紹介した。佐々は、持ち前の愛想よさで、頻りに客同士共通な話題を提供しようとした。佃も、丁寧な態度と言葉で佐々からの話、東郷のやゝ親父ぶつた質問に答へた。が、伸子には佃がちつともしんから愉快にその會話をして居るのではないことがはつきり感じられた。彼が、社交上の義務といふ風で應待して居ることが、伸子に不滿であつた。段々その無言の壓迫が堪へられなくなつて來た。彼女は、佃の態度に拘泥する必要が自分にあるのかないのかを顧みる暇なく、自分の場所から立ち上つた。そして、父と東郷に、

「一寸失禮いたします」

と挨拶をし、佃を、

「此方へ被來らないこと、目錄を持つて來て下さつたのでせう？」

と傍の卓子に誘つた。佃は外套の衣嚢からかなりの厚みがあるC大學便覽を出して、伸子の横に椅子を引きよせた。彼等の小卓子の上には後にある脊の高い、黄金色の笠のついた客室用ランプから穩やかな明りがふりそゝいだ。

彼女は目錄を繰り、面白さうな講義題目を見つけると、その評判などを訊いた。

「あら、こゝに貴方のがあつてよ。――先生、變なお名前ね、どれも――」

「あゝそれはペルシャ人です。シリア人の先生も居ます……ヨハナンといふのがありますでせう、その邊に――」

「――學生はどんな國のひと――」

「もう少し先の方……學生は今二人ぎりです、私と……」

伸子は頁を翻へした。成程、學生は二人しか居ない。佃と、ミセス、フロラ・シドニスといふ人と。

「その女のひとは、もう隨分永いこと勉強して居るんです。良人の人も矢張りC大學に居るさうです。論文を書きたいのださうですが、ドクタア、フォセットが弱いので思ふやうに進めないと、よく怒つて居ます――」

「ドクタア、フォセット、もう御老人？」

「さあ――五十六七でせう。ウヰスキイと煙草を餘り澤山飮むので、時々倒れます」

彼に三度目に會つた時からの疑問が伸子の

心に甦つて來た。彼女はきいた。

「ドクタア、フォセットは貴方を大事にして被在つて？」

むきつけな質問に佃は一寸間誤ついたやうであつた。彼は又、さあと躊躇した後不明瞭に答へた。

「特別大事といふやうなことが云へるかどうか分りません。ドクタア、フォセットは公平な人ですから――然し數がないし、滅多に此那學課をとる者はありませんから――兎に角よく飽きずにやつて居ると思つて居るでせう」

「――貴方この間、佛蘭西へ行かうとしたと仰云つたでせう？……その時先生は何て仰云いまして？」

伸子は、きゝ乍ら眞直に佃の顔を見、

「それはいゝ、すぐ行けと仰云つて？」

と云つたがまるで詰問でもするやうな調子なのにふと自分の惡い顔をして、言繕した。

「いろ／＼伺つて失禮したけれど……」

佃は、別に感情を害したらしくもなく、寧ろ伸子があつけなく感じた平坦さで答へた。

「ドクタア、フォセットは別に何とも云はれませんでした。先生は、私が一旦云ひ出したらきかない性を知つて居られますから――」

そして彼は、それが本當の親切だと信じて居る風で、

「夫人が大變よろこんで、わざ／＼毛絲で編んだもの等を贈つてくれました」

とつけ加へた。

「……………」

伸子には、教授夫人の鼓舞が、ありふれた愛國主義者の婦人らしくて不愉快に思へた。彼の周圍には、さういふ時、親身で何とか云ふ者は一人も居ないのだらうか。

「お友達も賛成なすつたの？」

彼は後じさりでもするやうに伸子を防いだ。

「――私は自分で自分のことを余り話さない方ですから……」

「それはさうでせうけれど――」

伸子は、彼と彼の周圍に對して何か激しく不服を感じた。

「――――」

彼女は、せきこんで云はうとした文句を制し、話を違つた焦點に移した。

「私、この間、貴方がそのことをお話しになつた時も、何だか不思議でした――別に強制的にそんな義務があつたのではないんでせう？」

「さうではありません。……私は、自分の好きなことばかり斯ういふ時して居るのは我まゝすぎると思つたから、苦しんで居る人の少しでも足しになるならと思つて決心したのです」

佃は、自信ある頑固さうな眼つきをした。伸子は、考へに捕へられた眼で凝とその眼を見かへし乍ら、開いたまゝのC大學便覽の上に兩腕を置き、のろい口調できゝ返した。

「自分の專門をつゞけて行くのが我まゝかしら……道樂ではないんでせう？　貴方のやつていらつしやること。本當に自分の仕事なら、私は我まゝと思はないわ……」

「――然し、世界中が苦しんで居る時……」

「私は事情が許す間本職をやめないでいゝのではないかと思ひます。だつて、戰場を驅け廻ることだけが人間の爲ではないでせう？　戰爭はどんなに永くたつて激しくたつて一時的の嵐だもの、私達はもつと眼を先につけてやつて行つていゝのだし、やつて行く／＼べきと思ふわ」

伸子は、佃が若し強く自分の考へに信念を持つて居るなら、彼女の此意見は彼を怒らせて置くまいと思つた。彼女は佃の言葉を待つた。

が、彼は、

「ふうむ」

と唸つたなり、何も云はない。

「――勿論、自分の專門に見切りをつけたのなら話は違ふわね、自分の仕て居たやうなことが現在にも未來にもまるで意味がないと思つたのなら……」

仲子は、第二のさぐりとして之を云つたのであつた。これが、佃の心の底にかくされて居る動機にふれ得るだらうかと。すると、彼は、彼に向つて眞直に進んで來た質問を躱し、極めて感傷的な語調で、獨り自分に呟くやうに云つた。

「どつちみち、私は先生の綽名通り苦行僧です。一生C大學の圖書館の御厄介になつて終ることでせう」

仲子は、引きはづされたやうな、驚いたやうな顏をして佃を見た。一生圖書館の厄介になるといふが、彼はその考へにちつとも光明や悅びを見出しては居ないでないか。悲しさうでさへある！ さけ難い運命だと歎息するやうでさへある。其なら、快活に、熱心に幸福を求める者らしく正直に振舞へばいゝのに、彼は、自分を閉鎖して居る。彼は、何故その大きな矛盾の裡に自分を置いて平氣なのだらうか。何故、どつちかに確り自分を据ゑて、日光をたつぷり、空氣をたつぷり、人間らしく活きようとする氣にならないのだらう。

仲子の若々しい感情は間誤つきと苦々しさと可哀さうさの混つた勢で佃に向つた。

彼の顏にいつも變らず現れて居る一つの表情――何かが足りない、心を風が吹き過ぎる、と云つて居るやうな表情――が、彼の全生活を支配するこの異樣なこんぐらかりの照り返しであるらしいのを仲子は初めて理解したのであつた。

安樂椅子に埋まり、いろ〳〵感じ乍ら、そのやうな佃の生眞面目な顏を見守つて居るうちに、仲子は、變に重苦しいやうな、焦立たしいやうな亢奮を覺えて來た。

彼女には佃がそんな風にして生きて居るのが平氣で見て居られないやうな氣がするのであつた。

五

十一月に入り、都會はすつかり初冬の景色となつた。

朝、ホテルの窓から向ひの屋根を眺めると、溶けた霜から湯氣ののぼるのが見えた。勤人や勞働者などは、皆同じ鋪道でも燦らかに日の照る側ばかりを選んで往來して居る。午後は殊に短く、夕暮が灰色に佗しくなつて來た。夜更けの芝居歸りなど、思はず外套の襟を立てて肩をすくめるやうな氣難かしい風が荒々しく市街を吹きまくつた。夏以降、一九一四年からの歐洲戰爭の終結が目に見えて迫つて來て居た。

十一月七日の午後、仲子は珍しく朝からホテルに引籠つて居た。

彼女は、晴れやかな晝間の光線を喜び戯れ乍ら風呂に入つた。それからこま〴〵母へ長い手紙を書いた。晝食を濟して再び部屋に戻ると、彼女は切手を貼るばかりの厚い封書の置いてある卓子を廻つて、ぶら〳〵其邊を歩き出した。まだ二時前であつた。食堂のかへり、彼女は切手を買つて來るのを忘れた。どうせ階下まで又行く位なら、今朝から一遍も外出しない、少し歩いて來ようか。けれども――何處へ？

仲子は、何かきつかけでもさがすやうに、窓をあけて往來を瞰下した。午後の日光が窓々の閉つた建物の眞正面を照し、軒蛇腹のところの厚い金商牌を埃つぽく輝かせて居る。歩道の赤白縞の日除の下を色彩の強い服裝をした女が靴の留金を燦かせて歩いて行く。藥種屋の硝子扉が日を照り返しつゝ開いた。中から二人づれ

の男が出て來た。一人が、伸子の見て居る窓の正面にある郵便箱に何か入れた。傍で一人が爪先をコト〳〵やつて居たが、やがて連立つと、几帳面に角を廻つて横町に見えなくなつた。尻を振るやうにしてきくりと曲つた後姿に、伸子は我知らず笑つた。空氣は暖かく乾き、輕やかで、ガッリンの匂ひが心地よく葉のない並木の梢に漂つて居る。伸子は、街路の活潑なにほひに心を誘はれた。彼女は窓をしめ、寢室に行つた。そして帽子をつけ、外套を着、さて扉つて出すべき手紙をとりあげた時であつた。

伸子は、異樣な音響を聞いた。何處か遠い處で一聲、急に、鋭く、長い尾を引つぱつて汽笛が鳴つたと思ふと、一時に彼方でも此方でも、太い、唸る、顫へる無數の汽笛が鳴り出した。音の林立といふ感じであつた。ボーボー空氣が漣のやうに揺れる。それに混り、ピーピー悲鳴のやうな他の汽笛が追つかけ追つかけ叫る。伸子は思はず手紙を握りしめて部屋の眞中に立ち竦んだ。何事が起つたのだらう！　彼女は、本能的に窓を押しあけ外を覗いた。パタン、パタン、あつちこつちの窓が同じやうな亂暴さで明いた。その刹那に見下したブロウドウエーほど、伸子は異樣に平らな小さい街路を見たことはなく感じた。太陽は先刻と同じ處にある。自動車は走つて居る。然しボーボー、ピーピー、音は火急な何事かを叫びつゞける。

伸子は、窓をすてて、廊下への戸をあけて見た。此方でも開いたり閉つたりして居る。先の部屋の前で、派手な部屋着のまゝの女が、兩手を引きしぼつて歩き廻り乍ら、ヒステリカルに何か叫んだ。――伸子は、その女でもよい、何が起つたのか訊きたいと思ひ、人影の見える方に向つて歩き出した。すると、ブズー、ブズー、昇降機が急速力で昇つて來た。ガチャン、網戸が開いた。中から、金扣鈕の仕着せ姿の男が上半身を廊下に突出し、片手をメガフォンに口の邊に當て、太い低聲で怒つたやうに叫んだ

「獨逸降服！　無條件降服！」

叫んで居る男の頭を打ち破りさうな勢で網戸が再びたゝき閉められた。ブズー、ブズー、昇降機はつと上へ向つてきり〳〵昇つた。

伸子は自分の耳が信じられなかつた。

「無條件降服……獨逸降服、……」

伸子に、膝頭がガク〳〵するやうな氣がした。彼女にもう一遍事實を確める樣に窓から外を覗いた。たつた一二分で、からも光景が變るものか！　何時の間にか、旅館の正面入口に大きな米國國旗がつり上げられた。向ひ側の藥種屋でも、或はその上にずらりと並んだ窓々からも、一齊に大小の國旗が今はもう凝として居られないと云ふ風に、ヒラ〳〵情に迫つてはためき出した。汽笛の音は益々入り亂れ、高まつた。伸子は感動から泣きたいやうになつた。街上を夥しい自動車が、悉く國旗を吹き流し、人間を滿載し、下街へ！　下街へ！　先を爭つて疾走した。パン！　パンパン！　その間に爆竹が鳴つた。

伸子は長椅子に腰を下した。

それにしても本當に血腥い殺人仕事は、これで永久に終つたのだらうか？

伸子は、平氣にされないやうな、わく〳〵切ない心持で又立ち上つた。彼女は出さうとして居た手紙を卓上に忘れたまゝ亢奮して部屋を出た。往來へ、往來へ！

六

昇降機の扉が開くのを待ちかねて乘込んだ伸子とすれ違ひに、黒い外套を着た背の高い男が、此も氣せはしさうに片側廊下に踏み出した。

が、入つて來た伸子を見ると、
「やー
と立ち止り昇降機へ後ずさりした。
亢奮のためにうつかりして居た伸子は、男の顔を仰ぎ見た。――思ひがけず平野と云ふ佐々の親しい友人の一人である。伸子は平野の手を強く握つた。
「――私共の處へ？」
「留守ですか？」
「えゝ。――私一寸其邊へ出て見ようと思つて」
「さうか、――ぢやあどつちみち階下まで行きませう」
平野はエレヴェータア ボオイに手を振つて合圖した。
「然し、此那時獨りで歩くのはよくありませんよ」
「えゝ。ほんの其邊―」
「其邊でも。――皆氣違ひになつて居るからね」
變にがらんとした廣間では、出るにも出られない侍僕達が、氣の立つた眼つきで彼等を見た。
「――どうします？ 留守に出て御父さん心配されやしないかな」
「帳場へ傳言を頼むつもりだつたんだけれど―
―凝として居ろといふのはちと無理かな」
平野はキラ／＼輝く眼で伸子を見、短く笑つた。
「ぢや、どうせ私も何だか落付かないから一緒に少しのして下街の様子を見て來ませう」
彼は帳場へ伸子の鍵をあづけるついでにノートを置いて來た。
「さあこれでよし！ と。今晩は一つ御禮にうんとお父さんに御馳走にあづからなくちやならないね―」
たゞさへ滿員の高架電車は、下街へ近づく一停留場毎に夥しい乘客を詰め込んだ。
「や、どうだ、この押しやうは！」
「グウヰー」
乘客の中で、豚の悲鳴を誰かが眞似た。ドッと笑聲。
「失禮ですが貴方日本の方ですか」
揉まれて落ちさうになる中折帽の庇に指をかけて平野に聲をかけた皺だらけの老人があつた。
「さうです」
「エヘン」
老人は亢奮の餘り頻りに咳拂ひをし、弱々しく震へる細い聲を強ひて張り乍ら云つた。
「實に今度の平和克復は、エヘン、我々實業國民として御同慶に堪へませんな」
平野は微笑し乍ら、
「いや實際何よりです。何しろ隨分待つた擧句ですからな」
と答へた。老人は其を聞いてさも滿足さうに頷き、猶も咳拂ひをつゞけた。
お祭り騒ぎの高架電車はレクタア街まで行つた。踏み躙られた構外で足元も見えないステイションの鐵階子を降りて街上に出ると、伸子は混亂に壓倒され、確り平野の腕につかまつた。巨大な煤けた事務所建築が、劇務にひしやげた鐵籠のやうに左右に迫つて屹立つて居る。數千の窓々が、一時に開いた心臟のやうに往來に向つて開けつ放しになつて居た。其だけでも既に稀有な觀ものだ。ガランとした其等の窓々から五色の紙テイプが吐き出され縺れ垂れ下つて居る。速記に使ふ黄色い紙、千切れた紐のやうな相場通信紙、一分まへまで、何等かの關係で金を意味した其等の紙屑を踏みつけ、歌ふ、笑ふ、旗を振る男女の群集が緩々練つて居る。事務所の内に人影の見える窓はなかつた。
或角で、車道の眞中に一臺電車が乘りすてられたまゝになつて居た。運轉手さへ姿を見せな

かつた。奇妙に無力なものに見えるその黄色い屋根の上で、二人の浮浪兒が口笛に合せて踊つた。

狩り集めの急造樂隊が國歌を吹奏し乍らやつて來た、人波の間で、

「さあ御祝ひのしるしに一本！　一本いかゞです。五仙！　五仙！　さあ記念に一本！」

兩手に各國の小旗を振りかざし拔目ない商賣をやつて居る男がある。

――自分だけ一足先に拔けたり、街路を突切るなどといふことは迚も不可能なことであつた。片手に小旗を高くさゝげ、片方では隣り平野につかまり、體の小さい伸子は前の人間の外套の背中に鼻を擦りつけさうにしながら押されて行つた。

彼等はひとりでにウォール、ストリートとブロウドウェイとの辻に出た。三方から潮のやうに寄せて來た大群集は、塵埃にまみれたウォシントン銅像の立つて居る廣場を中心として、どつちにも動かれず、渦卷いた。いかにも劇烈な商業地帶である下町らしく眞黒に太い柱列つきの建物の前で、一人の男が演說して居た。幾重もの群集に隔てられて居る伸子のところまではちつとも聲が屆かなかつた。たゞ熱狂的な身振で動かされる手や、禿げ上つた額が辛うじて隱見するだけだ。其が却つて天地に漲る異常な亢奮を代表するやうで、伸子に變に悲しい印象を與へた。此方では、乞食が手廻オルガンの把手にしがみついて、齒の浮くやうなワルツを軋ませて居た。それに合せ、若い、帽子もかぶらない男女が亂暴に舞踏して居る。

誰も誰もの顏が上づつて醜かつた。歡ばしい平和を迎へるらしい晴れやかで眞面目で美しい表情をして居る者など、男にも女にも、一人も見當らなかつた。一樣に動物的であつた。ギラギラ光る眼を据ゑ、口元には醉ひ癡れた薄笑ひと、更に貪慾に强烈な刺戟を追求してやまない昂奮を浮べて居る。もう自分達の亢奮の原因が休戰の歡喜で、あらうと宣戰布告であらうと構はない。欲するのはたゞ日常生活をでんぐりかへす熱狂だ。忘我に陶醉することだ！――そして前へ！　前へ！　と彼等は夢中になつて、腹で押す、肩で突く。一時停滯した人波は再びのろのろ動き出す。文明を爆發させた野蠻な力が露骨に四方から迫つて來て、伸子は怖ろしくなつた。

「ね、どつちかへ拔けられないでせうか、私歸りたい」

「待つていらつしやい。――トトトト、どうもこの騷ぎだからね、さ、今のうち！　早く！」

やつと向う側の歩道へすり拔けた刹那、右手の横町から、どつと喊聲があがつた。

「なに？　喧嘩？」

平野は、前の男の帽子の鍔に額をぶつけ乍らのび上つて見た。

「――偉いものを持ち出したぞ、カイゼルの藁人形を擔いで來たんだ」

苦心して、伸子は人の間から覗いた。成程、高い竿の先に、古洋服やボール紙で作られたカイゼルが見馴れた髭を傾けて擔かれて來た。胸に地獄へ行け！　と書いた札が下つて居る。擔ぎては、巧に竿を振り上げたり寢かしたりした。それにつれて、カイゼルは悲しげに面白可笑しい身振をする。大喝采の裡に、人形はわつさ、わつさと辻の中央に運ばれた。

「燒いちまへ！」

「さつさと巴里へ行つとくれ」

「軍國主義を燒きすてろ！」

上氣せあがり、舌がひりついた最高音で叫ぶやうに絕叫した。

「惡魔！　私共の子をかへせ！」

何處からか神經的な歡聲が起つた。カイゼル

の藁人形は數千の顔の上で愈々愚かな身振をした。第二の喊聲が廣場ぢうに轟いた。ぼーつと火の手の上るのが仲子に見えた。カイゼルの格子縞の襤褸を火が走つた。機械オルガンは國歌を鳴らした。青い薄い煙が、初冬の午後の透明な、やゝ物憫い空に靜かに昇つた。微かにきなくさい匂ひが四邊に漂つた。

七

仲子は、何となく滿ち足りない悲しささへ交つた心持で、三時間許り後ホテルに歸つた。彼女は、廣間で歸つて來たばかりの佐々と落ち合つた。彼の陽氣さは、傍から苦情の云ひやうない程天眞であつた。彼は、確かに三鞭酒の機嫌で聲をかけた。

どうしました！ おかげでいゝ見物が出來て結構だつたな。全く千載一遇の好機だ。これで御覽、もう一ケ月もおくれて上陸しようものなら、此那素晴らしい歴史的光景なんか一生見られなかつたことになる。——機會だ。平野君のおかげですよ——」

佐々は感激の遺つて居る熱心な早口で、自分が或實業家倶樂部の晝餐の席で汽笛を聞いたときのことを話した。

「まあ總立ちといふ形だ。何しろ聯合國の代表だと云ふわけで急に祝辭を呈してくれるやら、日本の爲に乾盃してくれるやら、——悪くない氣持でしたね。君は？ 事務所でしたか？ あの時」

「私は滑稽さ、バスの屋根で立往生に會つちやつて、此處へとび込んだんです——」

平野と三人で食堂に行く頃、今夜は特別に裝ひを凝した人群の彼方此方で今日の休戰報告は間違ひだと云ふ噂が傳はり始めた。ウオシントンの當局では、其那公報などまだ入手しないと夕刊で言明したのであつた。

けれども、夜に入つて市中の雜沓はそんな公報に頓着せず高潮した。

仲子は、晩食後、夜景を見に出た。自動車が前にも後にも動けなくなつた四十二丁目邊で彼女等は徒歩になつた。

白熱燈の下に、晝間より一層色彩の烈しい人間の狂態があつた。人ごみを、ふら〳〵に醉つた若い女が大股で歩き乍ら、短い棒切れでひよいと、先へ行く男の帽子を突きあげた。男は周章てる。女達は肩を振つて仲間同士ぶつかり合ひ笑ひ崩れた。軍服を着た兵士が、それこそ大醉して、逆に群集を掻きわけて來た。蹌踉として、据りのわるい首を搖つては不快に行交ふ女の顏を覗いた。が、いきなりどた〳〵とよろけると、仲子の直ぐ先に居た一人の大柄な女に眞正面から抱きついた。女は叫んで兵士の顏を打つた。彼は呻り、呟き、目を瞠つて更に女にとびかゝらうと物凄い面構をした。ぎつしり詰つた鋪道で、女は右にも左にも容易く身を躱すことが出來ない。黒い影が亂れ、男が怒つた聲で何か叫んだ。仲子は駭いて力まかせに父の腕を引張り、燈柱の影にかくれた。

「歸りませう。よ！ いやよ私、此那騷動——」

「ちと、百鬼夜行だね」

徹宵人通りと醉漢の大聲を仲子は窓の下に聞いた。

翌朝の新聞で、前日の報道は全く誤傳であつた事が判つた。本當の報告は、十一日の早朝までに、無線電信で戰地から傳へられる筈であつた。然し、一般は七日に受取つた休戰報告を疑はなかつた。彼等は皮肉混りに「政府はいつも事實より遲れて話す」などと云つた。

十一日の早朝、まだ寢床に居るうち、仲子は父に起されて公式の休戰條約締結報告の汽笛を聞いた。白い靄のこもつた寒い外氣を顫はせて、彼女の眠いうつとりした耳に、入混つた汽笛が

屆いた。汽笛の響は、眞面目で、落付いて、七日の午後いきなり空に向つて吹きつけたあの熱情を失つて居た。伸子の心持も同じであつた。感動の新鮮さの失はれた實際的な心持で中途までを聞き、やまないうちにまたぐつすり寝込んで仕舞つた。十三日には、休戰條約修正案が公表された。次で、大統領ウヰルソンが平和會議の爲佛蘭西へ渡航する計畫に關するステートメントが、喧しい論議の種となつた。

伸子は、殆ど官能に訴へるやうな人間精神の戰ぎを感じた。一九一八年の冬は、國家の心の上では春であつた。人間の社會が失つたものを新しい内容と信念で持ちなほさうとした。過去の總決算を濟せた社會は、深く疑ひ、強く建設し、少くとも世界を更に住みよい合理的な處にしようとする熱意が、嘗てない現實性を帶びて湧き上つて來たかのやうに見えた。伸子は、その刺戟を自分の胸に感じた。地平線に新たな光が閃き出した。その光は、如何那影響を自分の生活に與へるであらうか。……

最初、佃を佐々家の生活に導き入れた南波卓二の捜索は、終にそれなり不成功に終つて仕舞つた。けれども、いつの間にか佃は彼等にとつて内輪の人となつてその事の後に遺つた。土地馴れても居るので小さい便利が多く、佐々がちよい／＼した事をその後も賴んだ。その用向をもつて、佃は殆ど一日置き位にホテルに出入する。佐々の居ない時も屡々あつた。彼は、歸りを待つ間伸子と喋る。そのやうなことが度重なるにつれ、伸子は何時となし佃の身の上について細かい事まで知つた。佃は生れて直き實の母に死に別れた、後第二の母に世話を受け、二十越した許りの時或宣教師をたよつて、渡米して來たのであつた。それから凡そ十五年間稼いで勉强する生活を續けて來た。彼の、生活に對する抵抗力の强さうなところ、求めたところで經濟的にも時間的にも得られない社會の快樂に對して、ストイックな、同時に何か僻んだところのなくもない侮蔑を抱いて居るやうなところ、彼の身上話を聞けば、はつきりそれ等の心理的な原因が理解されるのであつた。然し、佃の魂は、それなら本當に氣强く、堅忍主義によつて朗かに安心して居たであらうか。

佃が足繁く父娘を訪ねて來、又三時間でも四時間でも飽きず伸子と話して居る。その裡に彼女は佃が自然に求めて居るものを告白して居るのを感じた。孤獨らしい佃にとつて、自分が幾分慰めとなつて居るといふ意識は、若い女である伸子にわるい心地でなかつた。彼に何か賴むこと、彼にとつて賴まれることは、たゞの事務打ち合せより何かほんのりした、人情の破片なのであつた。

――佐々の歸國すべき時が追々近づいて來る。伸子は獨り遣るなら遣るやうに身の振り方を決めて置かなければならない事になつた。何でもない問題と思つて居たのが、さてとなると彼女は容易に決定出來なかつた。父娘の間に、夜など折々話題に上つた。

「私ももう永くて後一ケ月居られるか居られないのだが――何か適當な家庭がないもんかね。ちやんとした處へ落付いて呉れなけりや、男の兒と違つて放つぽり出しても置けんし――」

「さうなの。私、男の子に生れてた方が餘程よかつたわ」

「ハッハッハ。母さんと二人でさう云つて居れば世話がない。――……チェットウッドさんのところで世話になるのはいやですか」

「さうねえ……」

チェットウッド博士はC大學の美術部の教授で日本の錦繪などに詳しかつた。佐々とは永年の知己なのではあつたが――。伸子は、自

レイスの肩掛をして、盛に政談を戰はして居た老夫人の險のある世話焼らしい顔つきを思ひ出した。

「私、閉口しさうだわ」

「ふうむ」

佐々も他に心當りはないらしかつた。そして、きまつて終りは斯うであつた。

「英吉利へさへ行つたらなあ、何の事はない、ミセス、レイマンが孫のやうにして萬事やつて吳れるんだが。――ミセス、レイマン――あの面白い書體でよく手紙をよこすお婆さん、お前も知つて居ませう？　私が居た頃、よくお前のよこす手紙なんか見せてやつたんで、今でもリットル、ノブはどうしたと云つて來る……」

伸子が落付き場の選定に苦しむのは、又他に理由もあつた。父について紐育へ來たのも、彼女は自分が欲する通りに生きて見る機會を得たいのが主な動機であつた。佐々の家で伸子は長女であつた。勝氣な母の多計代の私な大望の偶像にされさうなところがあつたり、中流家庭の娘として、伸子が望むだけどし〳〵人生に突入することを許さない制肘があつた。このままでは、自分が半分も生きるだけ生きて居ない。生活が未だ始つて居ないといふ意識が、少くとも過去三年彼女を苦しめつゞけて來て居た。伸子はその時西洋流に數へて十九歳と數ケ月になつて居た。父が旅行する、お前も一緒に行つてよい。……兩親が彼等の間でどのやうな相談をし、どのやうな意嚮でそれを決定したにしろ、伸子にとつては、親の家を離れて生活出來るといふ丈でも大したことなのであつた。

十一月十一日の休戰布告後はよかれ、惡しかれ劃時代的な社會の騷音が、ホテルの窓硝子を叩いて伸子の心へも傳はつて來て居た。自分も、今までの寒くもなければ暑くもない、閉ひの裡の植物のやうな生活は棄てたい。その望を遂げる爲に、此から半年なり一年なり身を置く環境の選擇は伸子にとつて難かしいのであつた。

大學近くのアパアトメントに部屋借をして暮して居た中西を訪ねて樣子を見などした擧句、伸子は遂にチェットウッド博士の意見通り、C大學附屬の寄宿舍に入る決心をした。その寄宿舍には安川も居た。

「――何も經驗だから結構だ。暫く居ていやになつたら又其時何とか思案もつからから、いゝさ」

「安川さんの話では夜芝居へなんか行くのだつて、斷りさへすれば許して吳れるのださうだから、私いゝと思ふの。たゞ聽講生にならなければ入れないんですつて――」

「それもよからう」

「……二三日うちに行つて見てきめるわ。――佃さんに來て貰つてよくて？」

「暇なら賴んだつてかまふまいよ」

佃とC大學の登記掛へ行つたのは、暖かく晴れた或月曜日であつた。彼等は學生等に混つて、公孫樹の植つて居るペエヴメントを彼方へ行き此方へ行きして登錄をすませた。若い女學生が本を抱へて元氣に髮を風に吹かれ乍ら歩いて居た。伸子は、

「私何だか少し樂しみになつて來たわ」

と、並んで步いて居る佃に云つた。

「やつぱり學校はいゝわね。可笑しいでせう？　斯那ところへ來ると私うんと勉强でもしたい氣になつてしまふの」

佃は、山高帽の頭だけを小さい伸子の方に傾け、軍隊教練を受けた人のやうに胸を張つて步き乍ら、丁寧に答へた。

「――おやりになつたらいゝでせう」

伸子は笑ひ出した。

「私のやうに樂しみずきの人間は迚も安川さん

のやうに勉強出来ません。――たゞ話はいろいろなものを[illegible]といふだけに――貴方[illegible]――何？
[illegible]
のやうなものです……」
「面白くて？」
「ええ……」
「たゞ[illegible]――[illegible]て貴方が御譯しになるの？」
「ずつと昔にフランス人で譯した人があるんです[illegible]
[illegible]ですか……」
[illegible]
なども見られた。
[illegible]
た。[illegible]
――どうなさいます？[illegible]すか」
「さうね」
[illegible]

野[illegible]中に感じた。
「――貴方御忙しいのぢやなくて？ 若し何だつたら私真直ブラ／＼歩いて帰りますから、どうぞ御自由に……有難うございました」
「いゝえ、[illegible]うせ午後明いて居るのですから」
[illegible]いないで[illegible]つた。
「では――リアーサイドハアヴにいらしつたことがありますか」
「いゝえ」
「ぢやあすこを抜けてホテルまで[illegible]りしませう」

八

[illegible]
ハドソン河に[illegible]。
[illegible]ハドソン河[illegible]
[illegible]一面霞んで居る。[illegible]
[illegible]

た鳥が一羽伴侶もなく翔んだ。仄かな水の匂ひが伸子に懐しく新鮮な喜びを感じさせた。
「――静かね」
「今一番人の出ない時間ですから」
[illegible]伸子に[illegible]、[illegible]は下街に向つて歩いた。
「[illegible]からもホテルからも近かつたのに、私ちつとも知りませんでした、こんなに好いところがあつたの。――散歩する場庭が殖えてうれしいわ」
行く道にもところ／＼に居心地よささうな芝生や植込があつた。
「この公園は小ぢんまりして居ていゝわね」
[illegible]
「[illegible]方では[illegible]でお歩きなさらない方がいいです」
と云つた。
「まあ？ [illegible]でも？」
「[illegible]でもない[illegible]から」
「あゝそれはさうね」
伸子は佃の注意の意味を諒解して素直に答へた。
「それは気をつけます――でも……日本の人は[illegible]
[illegible]

佃は一層疑はしげに、非常に意味深長に、
「さあ……」
と返事を躊躇した。
「まあ段々お解りなさいますでせう」
十分根據はあるのだが、禮儀上控へて置くのだと云つた風な佃の答へが仲子に好奇心を起させた。暫く默つて步いた後、彼女は訊いた。
「貴方は此方に居る日本の人のこといろいろ御存じ？」
「知つてゐる積りです」
仲子が繼いで云はうとするのを、佃は引つたくつて、
「大概狼のやうな者達ばかりです」
と短く斷言した。仲子は、思はず顏笑んだ。
「狼」――。
彼女は適度な散步後の氣輕な心持で、自分の室へ歸つて來た。馴れた無頓着で、いつも通り鍵を右に廻した。カチリ、變な抵抗が手先に傳はり、扉は開かない。仲子は屈んで鍵穴を見た。次で念の爲把手を廻して見た。戶は難なく內側に開いた。錠は掛つてゐなかつたのだ。女中でも掃除に來て居るのだらうか。――
仲子は、怪しみながら客間に步み入つて四圍を見廻した。すると、全く思ひ設けない佐々の聲が寢室の中から彼女を呼び迎へた。
「仲子か？」
仲子は、今までの爽やかに暢々した氣分が一時に飛去る愕きを感じた。佐々は今朝九時に彼女と佃と三人で旅館を出た。夕刻まで歸る筈がなかつたのに。――仲子は、急いで其方へ行つた。
「どうなすつたの？」
佐々は、寢臺の上に蒼ざめた額で半身起上つて居た。彼は仲子を見て、いつもの輝いた暖かい笑顏をしようとした。が、餘程氣分が惡いと見え、微笑は中途で消えた。父の眼に現れて居る不安を認め、仲子も不安な心配な心持になつた。彼女は、知らなかつたとは云へ自分が公園でぶらぶらいい心持に時間潰しをして居たのが濟まないやうになつた。
「いつお歸りになつたの」
彼女は、寢臺の端に腰かけて父の手を執つた。
「もう三十分ばかり前に歸つて來たのさ、急に。――どうも氣分がわるい。――ひどく頭痛がするし熱があるらしい」
「どれ」
仲子は、父の額に觸つて見た。かなり熱かつた。
「寒氣がなさる？」
「正金に居ると、どうもぞくぞくするんでね、此奴は怪しいと、いそいで自動車で歸つて來たのさ」
佐々は、言葉をきり、自分の容態を熟考するやうな顏をした。彼はやゝ強ひて冗談にまぎらすやうな調子で斷言した。
「感冒かな。――到頭とりつかれたかな」
仲子は、心の中が冷えるやうに慄えた。彼女も父の聲を寢室に聞いた瞬間其を思ひ、ぞつとしたのであつた。秋から流行して居る惡性の感冒は未だ猖獗して居た。多くの流行病は、終りに近い程病毒が輕微になる筈なのに、今年の感冒は逆であつた。澤山の新患者に澤山の死亡者があつた。一生懸命な泰然さで、仲子は、
「さうかも知れないわ。でも早く氣がおつきになつたから大丈夫よ。――氣を確り！」
そして、急に母親になつたやうな確乎とした快活さで、
「私はいい看護婦だから安心して寢かせて被在い」
と云ひ乍ら、手早く外の支度を脫いだ。
佐々は仲子の歸るのを待ち切つて居たらし

く、彼女が外套をぬぎに次の間へ行き、軈て戻つて手を洗ふ、その一擧一動を目で追つた。

「そこにあつたのか、私は又大きいトランクの方かと思つて探したが見つからなかつた」

などと云ひ乍ら、彼は自分から寢衣をくつろげ伸子に檢溫器を腋に挾ませた。

三十八度九分あつた。

「どの位あるかい」

伸子は檢溫器を振つて水銀を下して仕舞つた。

「——大したこともないわ……口がお乾きにならない？　オレンヂエードでも貰ひませうか」

暫くして伸子は云つた。

「澤村さんに來て貰ひませう。ね」

「……よかろう……」

佐々は伸子の顏を見るまでは氣を張つて居たらしい。心が弛むと口を利くのも大儀さうであつた。佐々は二つ重ねた羽根枕の上に火照つた顏をのせ、切ない息をついた。

澤村が來るまで小一時間病人と二人きりで、伸子は名狀し難い孤立感を覺えた。この大都會の生活と自分達の生存とは、いざとなると何と無關係なことか。周圍の冷然とした感じが伸子の心に徹へた。

九

佐々の病氣は、伸子も見當をつけた通り目下流行の惡性感冒の初期といふ診斷であつた。澤村は家庭醫らしい物馴れた調子で云つた。

「然し決して御心配なさるには及びませんよ。極めて輕微な兆候が現れたばかりですし、やつぱり斯ういふ病氣は、かゝる人の平常の健康狀態によりますからな。貴方なんぞ攝生はおよろしいし、痼疾はおありなさらないし——大丈夫、十日もすれば御全快でせう」

佐々は、ホテルでは不便だから、入院してもよいと云つた。

澤村は寢臺の傍に立つて居る伸子を眺め乍ら、

「立派な看護婦さんがおいでらしいから、却つて今お動きならん方がよろしいかもしれません。——尤も、家へ來ていたゞいた方が儲かりますかな、ハッハッハ」

と笑つた。

澤村醫師の處方の買物や[illegible]藥局へ藥とりに行つて呉れたりする人は佃しかなかつた。伸子は彼に電話をかけた。

佃は間もなく、藥品類の包みを抱へて現れた。

彼は伸子を助け自分の立場を理解して居るものの自信を以て振舞つた。佐々は、少量の葡萄液を飲んだ丈であつた。佃と伸子は食堂へ行つたが、華やかに裝つて談笑する人々、賑く食卓の光景は、今まで彼女の心に迫る力を失つて仕舞つた。佃は、

「餘り御心配なさらない方がようございます」

と伸子を慰めた。

「私は度々もつと惡い人を見て居ますから[illegible]ひます。眼がひどく血走つて居るだけでもすぐ見分けがつきますから、本當に御心配なさらないで大丈夫です」

四日間、佐々の病勢は[illegible]した。三日目などは側に見て居る伸子さへ息が樂でない程であつた。

病人は苦しさうであつた。咳は殆ど出ない、たゞ四十度を上下する熱と劇しい頭痛が襲ふのであつた。體の關節が悉く痛んだ、寢返りを打つのさへ一人では出來なくなつた。それでも、佐々は一言の苦痛も口には出さず、[illegible]へようとして居る。——父親は[illegible]

[illegible]

[illegible]にかゝつた。暗[illegible]と、[illegible]
に[illegible]て守るらしい父。いつか眠りに落ちた父の寝顔など、[illegible]見[illegible]る[illegible]、一しほ心を[illegible]つものがある[illegible]

[illegible]

[illegible]かあるし、[illegible]から[illegible]で[illegible]間に来、[illegible]そのやうな時、[illegible]ツ[illegible]が鳴るやうな音がして、[illegible]神経質になつて居る伸子は[illegible]して[illegible]てた[illegible]たりし[illegible]、[illegible]立つて境の垂帳の間からそつと病人を覗いた。又そつと垂帳を元通[illegible]に[illegible]人[illegible]が[illegible]く……[illegible]とともに[illegible]

すことが、伸子に何の不思議も感じさせなかつた。[illegible]

[illegible]分樂ですから、どうぞ御遠慮なく……伸子、よか……

[illegible]

かへ[illegible]

「さあこれで今度こそ大丈夫です

と[illegible]

「もう峠は立派に越しましたから、後は豫後ですが……

[illegible]奇心をもつて[illegible]見るやうにし乍ら、彼は[illegible]

[illegible]なも[illegible]又[illegible]

のです。──紐育の風は有名ですからな、どうもこれからは……」

[illegible]で起きて来た時、伸子は嬉しく、

「萬歳！　萬歳！」

[illegible]」

「よし〱」

[illegible]させた。

[illegible]嬉しい、安心した、[illegible]涙がはら〱[illegible]ら滅茶々々に父の腋の下へ自分の頭を突込んだ。

佐々は手[illegible]どつて快復[illegible]を[illegible]んだ。[illegible]分のところで[illegible]にならない日があつたり、時々また[illegible]しい[illegible]が再發したりした。佐々は、[illegible]あて[illegible]こそ[illegible]立つて次の間まで出て来た[illegible]、[illegible]日から、洗面所へ立つだけで矢張り終日[illegible]して居た。然し、いづれにせよ恐ろしい時は[illegible]去つた。[illegible]な人が彼の[illegible]の[illegible]に出

入り口へ[illegible]下車した。[illegible]び込まれる[illegible]必死に[illegible]って居た[illegible]に居た世間[illegible]、[illegible]見れば、一種[illegible]を、[illegible]から感じた。

此の[illegible]しい。伸子は[illegible]疲れ[illegible]た、十分眠つ[illegible]して居[illegible]ベッドに[illegible]ついたやうに[illegible]ついて居る事[illegible]して、七時[illegible]どうしても[illegible]ばならなかった。[illegible]

[illegible]

見[illegible]定であつた百十六丁目といふところで降りた。プラットフォームの[illegible]が、この[illegible]と降りた時と少し違って居るのを[illegible]、改札口を抜け街路に出た。街路を一瞥し、彼女はさてと途方に暮れた。街は百十六丁目に違ひないのだが、それがブロウドウェイでないことだけは確実であった。ステイションの[illegible]から[illegible]が見えるどころか、[illegible]の左右に並んで居るのは倉庫のやうなものばかりであった。[illegible]地下から吐き出された人間はさっき[illegible]の[illegible]を[illegible]って消え[illegible]て居るのは、紺ズボン[illegible]といふいでたちの男か、働き[illegible]だ。

伸子は[illegible]に向って[illegible]した。[illegible]は百二十丁目にあった。[illegible]を百二十丁目まで[illegible]れば、[illegible]ブロードウェイを繋ぐ[illegible]街[illegible]一人[illegible]、そして[illegible]アローウエイよーずつと前に[illegible]した。

ローレンス[illegible]にも[illegible]あるう[illegible]伸子の[illegible]になつた話にひどく同情して呉[illegible]居間は、研究[illegible]として[illegible]時間のうち一[illegible]自由[illegible]たらうといふ[illegible]彼女は、其[illegible]にミス、プラットといふ人のところへ紹介された。

十

ローレンス教授は、日光や鎌倉のことを、[illegible]甚[illegible]が悪くといふ[illegible]へないと思ひ出し、ローマ[illegible]寺院では、[illegible]の大使[illegible]で死ぬ人があると[illegible]に立つと[illegible]伸子は、話の[illegible]から[illegible]頭に[illegible]来た。[illegible]とは[illegible]までも[illegible]やうに[illegible]めつけられる感じであった。時を切ってその緊[illegible]なると、[illegible]なった[illegible]とすると[illegible]い、[illegible]た

[illegible]不自然に向かったか[illegible]たのだと黙って[illegible]よく[illegible]

伸子は[illegible]に出ると、[illegible]の方に歩き出した。[illegible]十一月の真昼だのに伸子[illegible]なって来た。背骨から全

身に關係し、種々な刺戟——自動車の警笛から、靴の小さい踵を傳はつて來る鋪道の堅さまで、皆惨らしい容赦なさで頭に響く。ちやんと眼を開いて居ようとするのが先づ努力であつた。行き倒れになる心配さへしなかつたら、一刻も早く、何處でもよい、暗い隅に頭を突込んで眠つて仕舞ひたい。……彼女は頼りなく弱々しい泣きたい氣分になつて或街角から電車に乘つた。電車は黄色い車體を悠長に日に照らし乍ら、少し走つたかと思ふとガタン、又ガタン、小五月蠅く一丁目毎に止り乍ら進む。簾を張つた冷たく堅い座席の上で、眼を瞑り、伸子は動搖につれてこみ上げる嘔氣をやつと堪へた。彼女は半分意識を失つたやうになつてホテルの部屋に戻つた。

寢室では、佐々が枕に凭れて起きかへつて居た。佃も居て、彼は壁の前に立つて何か話して居る。

伸子は、どちらをも見ず、

「たゞ今、」

と云つた。帽子を脱ぐと彼女はそれを放り出すやうに父のベッドの裾の方に置き、

「私氣分がわるくて仕樣がないの」

と訴へた。父の顔を見たら、泣きたい心が募つた。陽氣に喋べつて居た佐々は、伸子の泣聲で、本當に愕かされた。

「どうした—」

佐々は伸子の頸に手をかけて顔を自分の方に向けさせた。

—何といふ色だ、この顔は！　寒いのかい？　え？　何？　苦しい？　そりやいかん、直ぐおやすみ、さ、すぐ此部屋でお寢—

伸子は、それに答へずむつつりし、藪睨みのやうな眼つきで佃の服裝をじろじろ見た。彼女は、とつてつけもなく、

—馬にお乘りになるの？」

と訊いた。佃は上着だけ背廣を着、下にカアキ色の粗綾袴と膝まである長靴を穿いて居た。佃は伸子の問ひに却つておどろいたらしく、

—あゝこれはY、M、C、A、の服です」

と手短かに答へた。

「——おやすみなさるがいゝですよ。……疲れが出たのでせう、きつと——心配されたから」

彼に手傳はれて伸子は外套をぬいだ。

—さ、隣りへ來ておやすみ—

父は隣りにもう一つあるベッドの方へ體を動かして、その上覆ひをはねた。

—あつちがいゝわ—

伸子は佃に引立てられるやうに足を引きずり乍ら自分の寢部屋へ行つて戸をしめた。

—あ、どうか鍵をかけて仕舞はんやうに云つて下さいませんか—

といふ父の聲がした。

寢衣のつめたいこと！　シイツの冷やくすること！　冷たく、寒く、餘り寒いので、伸子はウリ、、、齒を鳴らし乍ら出來るだけ小さく自分の體を縮めた。頭が石になつたやうに苦しい、あゝこの頭を誰かに撫でて貰つたら！　もつと暖かく暖かく懸けものをかけて貰つたら、どんなにいゝ氣持になれるだらう！……、誰も居やしないし、此那懸けものしかありやしないし……寒い……濡れた兎だ。本當に濡れた兎だ。伸子は子供のやうに枕に顏をすりつけた。

「母さま……母さま……」

伸子は段々ぽーつとなり乍ら眼尻から涙を流した。

フツト伸子は我にかへつた。四邊はもう夜であつた。電燈が煌々とついて、父が和服のまゝ困つたやうに立つて居る。彼女は眩しさうに、寢返りを打ち乍ら、父もまだ無理をしてはいけない

のにと心配を感じた。それを云はうとしたが聲が出ない。父親がへりをしなほさうとしたはずみに、百尺もあるところを墜落したやうに頭が痺れた。再び混沌が來た。惡寒はやんだ代りに高い熱と痙攣が起つた。

體が妙に突き上げるやうな不可抗力でヒクリ、ヒクリ、そり返る。體ぢう噦をする。

伸子は其度に悲しげな、斷れ〴〵な叫びを上げた。彼女は何かに確り捉まりこの苦しい疲れる衝動を制したかつた。然し何處にも手應へがない。頭の裡も外もフラッシュライトに取卷かれて居るやうに一面の光の渦卷だ。その光の海は絶えず搖れる、閃く、走り廻る、いそがしい。明るい、明るくて苦しい。

「疲れるわ、私……眠らせて。眠らせて」

彼女は譫言を云ひつゞけつゝ、頻繁に引きつけた、意識が明るくなり暗くなりした。

午前二時頃、全く夢中な伸子がホテルから病院へ擔ぎこまれた。自動車の中で彼女は一度正氣づいた。彼女は自分が病院へ行く途中にあることを理解した。けれども誰が自分をこのやうに抱きかゝへ、頭にクッションを當てがつて居るのだらう、ゴロ〳〵して痛い眼を開き、薄暗い中で熱心に對手を注視した。佃であつた。彼は伸子が眼を開いたのを認めると、子供を賺すやうに彼女の體を膝の上にゆり上げつゝ云つた。

「苦しいですか？　もう少し我慢して下さい。今すぐ樂になりますよ。直きですよ……」

伸子は眞夜中に病室ですつかり衣服を更へさせられた。夜勤看護婦と入れ違ひに佃が入つて來た。彼は伸子の額を撫で乍ら、

「さあ此處まで來たからもう安心です。……安心しておやすみなさい」

と云つた。

「――大丈夫です、私が此處に居ますから――」

どうかしてぐつすり眠りたく、眠りで苦しさから逃れたい伸子は、眼を瞑つた。眠りさうになると痙攣が襲つた。體がびくりとする。その度に彼女は先刻と同じやうに呻いた。

「眠らせて……眠らせて……」

「あゝ眠れますよ、さあおやすみなさい」

伸子はいつかそれでもとろりとした。體の節々が溶ろけるやうになり、心が暗い遠い居心地よいところへ引込まれるやうだ。伸子は、髪のもしや〳〵になつた頭を枕に落し、一つ鼾をかきさうになつた。妙な感覺で彼女は半醒した。何かが額に觸る。不意に柔かく永く一つの脣が彼女の脣に押し當てられた。全神經が目醒めた。佃の存在が燒きつくやうに甦つた。伸子は體ぢうに新たな戰慄を感じ乍ら、再び氣を失ひ乍ら、佃の頸に兩腕を卷きつけ彼の脣に自分の脣を押しつけた。

誰かが、伸子の腕に觸つた。

「さあもう朝になりましたよ」

そして伸子の腕を佃からはなさせた。

「今度は私が居てさしあげます、この方もお寢みなさらなけりやなりませんですからね」

他愛なく枕の上に腕が落ちた。伸子は視點の定まらない熱にうかされた眼で看護婦を見た。室内に流れる冷たい灰色の拂曉の光線を感じた。伸子は反射的に呟いた。

「さう――朝になつた」

自分は眠つたのか眠らなかつたのか一向はつきりせず、たゞ一晩中熱の大波に揉まれて居たやうな心身の疲勞を極度に感じた。眠い、やたらに眠い。

「さう〳〵、いゝお孃さんですね、おやすみなさらなけりやいけませんよ」

伸子は、微かな歪んだ微笑を浮べた。佃の聲がした。

「——それでは又參ります。何か持つて來るものはありませんか」

重い睡眠の中へ引込まれるやうな感じと戰ひ、伸子は辛うじて注意をまとめた。

「ぢやあ箱をもつて來て——青い革の——櫛や鏡が入つてる。——それから、父樣によろしく。」

一服の丸藥をのまされた。佃はもう居なかつた。矢張り時間の知れぬいつか、嘔きたい程不味いコヽアを二匙のまされた。

伸子は不圖ひそ〳〵戸口のところで何か云ひ合つて居る人聲に目を醒した。夕方なのか四邊は薄暗かつた。其薄暗い中に險しい調子が響いて居た。

「どうぞ話はなさらないで下さい——」

「そんなことは私の自由です。私はちやんとあの人の父親からたのまれて出入することを許されて居るのです」

「えゝ、それはよく承知して居ます。ですから、御見舞にお入りになるのはよろしいが、どうか病人に口をきかないだけは注意して下さい。絶對に神經を休ませる必要があるのですから——」

佃が入つて來た。寝臺の上の伸子を見下し乍ら、彼は靜かに寝て居る人にでもいふやうに、

「どんな工合ですか」

と云つた。

「Oh! Please don't!」

伸子は彼が變に頑張るのが看護婦に對して恥しいやうな氣がし、訊かれてちつとも嬉しくなかつた。彼女は泣きたいやうな頭の中で呟いた。

「どうしてあの人は口を利くのだらう」

默つて居ると、佃はもう一度押しつけるやうにきゝなほした。

「いかゞですか、氣分は」

伸子は其に答へず、悲しげに咎めた。

「何故貴方はものを仰云るの？」

いきなり神經的な涙が瞼一杯になつた。伸子は滅入つた氣持を感じ乍らそのまゝ眠つた。

二

八階の頂上に寄宿舍の食堂があつた。其奧行は建物の幅の出張りにつれて奧の方へ擴つてゐる。今、晩餐の最中であつた。白布をかけた數十の卓子と、其を取圍んで坐つて居る夥しい娘達。ざわめき、陽炎のやうな話聲、笑聲、食器のふれ合ふ音等が空中へ鳴つた。伸子のところから大厨房に通ふ扉の一つが見えた。その扉は絶えず開いたり閉まつたりする。給仕盆を抱へた給仕女が出入りに靴の爪先で扉を蹴る度に、料理女の姿だの、大鍋のかゝつた料理ストオブだのがちらりと見えた。暖かい臺所の風も來る。

伸子の卓子は八人詰であつた。が、そこにはいつも七人しか居なかつた。彼女は今夜特別安川に會ふことを樂しみにして居た。咲子の顏を見たら、

「あゝお腹が空いた！」

とでも何とでも呑氣に喋つて、朝からの滅入り込みを退散させることを樂しんでゐたのであつた。

けれども、咲子は、一寸おくれて入つて行つた伸子を見ると、行儀よく二つの腕を胸の下で組み合せたまゝ輕く首を傾け、外國人の友達に相應しい通り、

「今晩は。——如何？」

としきたりの挨拶をした。

伸子は空腹でゐながら味のない夕食を食べ始めた。

その頃、[illegible]十一[illegible]で十九世紀
[illegible]が終ると、
[illegible]女は[illegible]・ホー[illegible]へ行つた。其
處は、[illegible]に[illegible]研究室
であつた。
[illegible]には[illegible]然、安川を
訪ねて[illegible]の美術倶
樂に音樂[illegible]ことゝで語
べて居た[illegible]の小りん
まりした[illegible]。大圖書館は
壯大な代[illegible]うでひどく落付
き[illegible]いたり
に來ることに[illegible]
伸子は、[illegible]
じつゝ[illegible]
に[illegible]た
役であつた[illegible]
[illegible]
[illegible]
始めた。
[illegible]
[illegible]止つた。
「あや——[illegible]」
伸子は[illegible]

づくめで、皮膚の美しい顔が[illegible]引立つて見える
珠子がそこに立つて居た。
「まあよくわかつたこと！　さあ」
伸子は中西の兩手を執つて、自分の隣りにかけさせた。
「いつ歸つていらしつたの」
「昨晩、十一時過に——」
互に顏を見合せ何となし彼女等は莞爾ついた。
「どうだつて？」
珠子は一週間ばかり前から、ボストンの許婚の處へ行つて居たのであつた。
「ようござんしたよ、こゝから行くとそりやあ[illegible]たわ、落付いて居て……
「[illegible]」
[illegible]れて來たばかりの[illegible]かせ乍ら、持前の[illegible]つた。
「[illegible]わ、今あの人そり[illegible]ところなのよ、出來[illegible]となか／＼なんです
でこ[illegible]大變ましになつたんですつて……」
[illegible]で、撫でるやうに眞[illegible]
「どうなの、[illegible]、あなたがたの方は……」
と[illegible]いた。
「…………」
伸子は、[illegible]るがりともつかない複雑な[illegible]げた。
「ま[illegible]ことだわ」
「——[illegible]ていらつしやるの？」
「今晩[illegible]らしいけれど——あゝ貴女御[illegible]よ、三人で——久しぶりだ[illegible]
「あ[illegible]たけれ——何時？／今……」
珠子は[illegible]を見た。
「今日はそうして[illegible]れないわ、これからブレンタノへ行かなけりやならないから。それより大事な[illegible]て來たのよ。あなたこの土曜日[illegible]こと？」
珠子[illegible]る横尾、樋口といふ青年等[illegible]と伸子とをオペラに招きたいといふ[illegible]倶樂部に彼等も居て、[illegible]日など聞いた。
「どうね」

「サムソンとデリラですつて――」
　曲目をきくと仲子は行つて見たくなつた。然し、土曜日と云へば誰でもが特別賑やかに過したい夜だが――佃は如何するだらう。彼一人放つぽり出して行くのも心殘りのやうな氣がして返事を躊躇して居る處へ、佃が入つて來た。仲子は挨拶がすむのを待ちかねて、佃に今受けた招待のことを話した。
「貴方どうなさること――私少し行きたいんだけれど……」
　立つたまゝ喋つて居る珠子や仲子にかまはず、佃は椅子にかけた。仲子の云ふことを仕舞ひまで聽くと、彼は不機嫌さうに、
「僕は勿論招ばれては居ないんでせう？」
　と反問した。珠子は喫驚したやうに仲子を見た。
「今度は私だけよ……若し貴方の方に豫定でもあるといけないと思つて、中西さんに待つてていたゞいたの」
　佃は二人の方は見ず、山高帽を片よせ書籍やノオトを机の上に並べ始めながら云つた。
「貴女がいゝと思ふ通りに返事なすつたらいゝでせう」
　佃と四ケ月の交渉の間に、仲子は度々このやうな言葉をきいた。彼女はいまも、それが初めてのやうな苦痛を感じ、
「……兩方いゝやうにした方がいゝぢやないの」
　と云つた。
「自分の判斷で返事をなさればいゝです。――然し……」
「なあに」
「貴女方には、横尾君や樋口君といふ人が其那によく判つていらつしやるのですか」
　珠子まで妙な立場へ引込んだので、仲子は切ない悲しい氣で一杯になつた。彼女はひずんだ表情になつて暫く默つて居たが、やがて思ひ切つたやうに珠子に囁いた。
「――私やめるわ、今度は。……折角だけれど……私かやめても貴女いらつしやる？」
「私の方は大丈夫よ」
　珠子は察しよい氣輕さで、元氣づけるやうに仲子の肩に手をかけ乍ら云つた。
「ぢやあ、その方がいゝかもしれないわ、あんなとこいつだつて行けるところですもの。よろしく云つて置きますよ」
　彼女等は入口まで連立つて行つた。
「約束があることにして置いて頂戴」
「さうしませう……」
　珠子は歩き乍ら不意に女らしい、氣のよい小聲で云つた。
「……佃さん、嫉妬があるのね、でもそれだけあの方の愛が強いんだから、あなた幸福ですよ」
　仲子は信じない顏をした。すると彼女はさも先輩らしい曖かさと押しつけとで、
「本當ですよ」
　と睨む眞似をした。
　仲子は机の前へ戻つた。佃は彼女を見もせず口も開かない。仲子はさういふ不自然さに、永く堪へられない性質なのであつた。彼女は、
「ね」
　と呼びかけた。佃は顏を擡げた。
「何ですか」
「――今のやうな場合ね、はつきり貴方の心持を云つて下さる方がいゝのよ、相談なんだから」
「貴女のいゝと思ふやうになさいと云つてはいけなかつたんですか」
「さうぢやあないけど……何だかあれぢやさつぱりしないぢやないの。口では好きにしろと云つて、樣子で迚も好きになんぞされないやうに爲さるのたんかいけないと思ふわ。――相談す

る以上貴方の心持を立てるつもりなんですもの」

佃は、默つて居たが、白眼勝の視線で斜に伸子を見上げ、愁訴するやうに云つた。

「私に行くなといふ權利のないのは知つていらつしやるでせう？」

伸子が涙組んで沈默して居ると、彼は急に焦立ち熱したやうに低い早口で呟いた。

「いらつしやればいゝですよ、いらつしやればいゝですよ。決して私のことなんぞ心配して下さらなくていゝのです」

「行きたいから行つて居るのぢやないのよ。——これからだつて度々あることだから……」

云ひかけた處へ、五六人學生が入つて來た。がら空きであつた室や後の大机に、各々彼等の席を占めた。伸子は、勢、口を噤まなければならない事になつた。

そのまゝ午後二時から、伸子はミス、プラットの處へ出かけた。

ミス、プラットは大柄な、何處かにダッチ風な重々しさを持つて居る人であつた。Yes と云ふ一言にも教育女らしいせはしい早聲ではなく、丁寧に字と字との間をのばして悠くり發音する。母親と下宿人とで生活して居る女教師の平穩な雰圍氣に、伸子にはいつも家庭的な慰安を感じた。

先週の火曜日、話が寄宿舍の事になつた。伸子は寄宿舍の生活には幾日經つても氣質的に馴染めないところがあつた。第一人間が多すぎる。伸子は半分冗談に、

「まるで蜂の巢のやうです。それに皆が女王蜂だから……」

と笑つた。ミス、プラットは、栗色の髮の濃い頭をかしげて考へて居たが、

「木曜日の午後からうちへいらつしやいな、氣が變つていゝでせう。お喋りでもしませう」

と云つた。その約束があつたので、伸子は、佃と氣持の行きがかりをそのまゝにして出かけたのであつた。

アパアトメントの扉を敲くと、ミス、プラットの母親が取次に出た。

「今日は」

「あゝ、今日は。ようこそ」

老婦人は、愛嬌よく伸子をホールに導き入れた。そして、正直さうな碧い眼に訝るやうな表情を浮べ、俄になつて居る囁聲で訊いた。

「今、生憎他に御稽古の方が見えて居りますのですよ、どんな御用ですか」

午後が暇なので招かれたと思つて居た伸子はやゝ意外であつた。

「今日は木曜日でせう？」

「えゝ確かに……」

「では、恐入りますが一寸ミス、プラットに私が來たと御云つて下さいませんか。御差支へだつたら、又出なほして構ひませんから」

入れ違ひに日本の羽織を羽織つたミス、プラットがいそぎ足で出て來た。彼女は、伸子が何か云ふ時を與へず挨拶し、自分の居間に案内した。

「もう三十分ばかりですから失禮ですが待つて居て下さるでせう？」

彼女は書棚を覗いた。そしてオウスティンの普及版を一冊とり出して伸子にあてがつた。

「これでも讀んで居て下さい。では一寸御免なさいね」

ミス、プラットの部屋の二つの大窓から、大學構内の空地の一部と、大學總長の邸宅の側面が眺められた。長椅子や寢臺の上には小綺麗な更紗や小蒲團があつて、落付いてさつぱりした部屋の飾りとなつて居る。伸子は、搖椅子にかけ、あづけられた本を讀み出した。

軈て廊下で別れを告げる聲、此方へ來るミス、

[illegible]れの[illegible][illegible]間[illegible]心持よく[illegible]ける[illegible]の人が來[illegible]ミス、プラットは[illegible]め[illegible]りで居たらしく、仲子に[illegible]へ去つてしまつた。[illegible]に[illegible]つふり[illegible]たなければならない。——

[illegible]、ぶら〳〵室内散策を始めた。前の空地に一本大きな冬枯れの樹木があつた。幹を逆にして空に沖らせたやうなその梢に、如何して遺つたかたつた一枚、眞赤な楕圓形の朽葉がひら〳〵動いて居た。それが透明な二月の碧空の前に、ぽちりと滴つた血のやうに美しく見える。

其を眺め、此を見して居るうちに、仲子は不圖自分が變に間の拔けた羽目に置かれて居るのに心付き出した。ミス、プラットはもうやつて勝手に彼女の稽古として居る。それなのに自分は大して居たくもない彼女のこの居間に、帽子を脱ぎ外套をとり、悠くりしなければならない命令でも受けたかのやうにぼんやり待つて居る。何の[illegible]に居るのだらう？仲子は、我[illegible]ッキリと[illegible]つた。——だが、本當に自分[illegible]しにこゝに居るのであらう？弟子ではあるが、彼女から呼んで置いて、斯うも續けさまに獨り放つて置くのは、變ではないか。仲子に適つた部屋を與へようと云ふ親切であつたら、何故前以て、彼女はいそがしいが獨りで何かして居るのならば、と云つて呉れなかつたのだらう。平常ミス、プラットはよく氣のつく人だ。其を思ふと仲子は神經的に居心地がわるくなつて來た。彼女は腕を組んで、質問をするやうに自分の脱いだ外套や帽子を見下して突立つた。……

さう云へば思ひ當る事がなくもなかつた。十日程前の事であつた。稽古の後で、ミス、プラットは誰からきいたのか、

「貴女この頃始終佃さんと御一緒ですつて？さうですか」

と訊ねた。仲子は左樣だと答へた。

「佃さんは以前高崎さんにも大層親切にして、一緒にいろ〳〵していらしつたやうですよ」

ミス、プラットの話しぶりに何か暗示らしいものがあるのを感じ、仲子は曖昧に答へた。

「さうでございましたつて。——彼からきゝました」

「元、西部の大學に居た時にも、何か婦人のことで面白くない事件があつたんですつてね——まあ謂はゞ紳士としての體面を失ふやうな——この間其那話をひよつときゝましたよ」

「あゝあの話でせう？夜何處かで泥醉して居た女の人を、警官が誤解してどうとかしたといふ……」

ミス、プラットは、

「佃さんが話しましたか」

と稍豫想外らしく云つた。

「えゝきゝました。——でも、何故貴女にそんな他人の噂を喋る必要があつたのでせう」

仲子は、輕い不快を現して云つた。

「噂なんぞは、そのまゝ本氣に出來ないと私は思ひます、無責任に事實を脚色するのが平氣な人も居ますから」

「さうですとも。私だつて決して全部を信じようとは思ひませんよ」

ミス、プラットは何氣なく話題をかへた。けれども、あゝ云ひ出した心持が、今日の奇妙な招待——まるで「部屋で靜かに獨り待つて居てご覧なさい、私に話すことがある筈ですよ」といふやうな處のある招待——になつたのではなからうか。

さう心附くと、仲子は、自分の子供らしい暗示に負け易い性質を見拔いたミス、プラットの、怜悧な仕かたが不愉快になつた。此那ことをさ

れないでも、彼女は佃とのいきさつをミス、プ
ラットに話して[illegible]といふ[illegible]になつて[illegible]
[illegible]愛して居るミス、プ
ラットに[illegible]いろ／＼打ちあけるに違ひないの
[illegible]、それは[illegible]
[illegible]
ちあけ話としてで、ミス、プラットは[illegible]
[illegible]として居るらしい、[illegible]
[illegible]ない。――
[illegible]
[illegible]
の[illegible]一切を話すとしても。――[illegible]
に、[illegible]して！　[illegible]して！
伸子は[illegible]、プラットが時間をすまし
[illegible]それから連立つてモウニ
[illegible]
の感情を洞察したらしい、[illegible]
[illegible]

二

[illegible]
[illegible]

にいやな[illegible]、いつかあるのか？
[illegible]
に[illegible]心に[illegible]して[illegible]
伸子の[illegible]純
に[illegible]持
つて寄宿舎に居る人は沢山あつた。寄宿舎の
[illegible]ド・プランマンは、[illegible]
[illegible]なく、さう
い[illegible]た
[illegible]に愉快さうに
[illegible]など[illegible]
[illegible]互の愛人同[illegible]にして
一[illegible]へなど出て行くのも
ある。

或時、安川が、
「[illegible]
ら[illegible]
な[illegible]
[illegible]に[illegible]友人に[illegible]
もますよ」
[illegible]
それで、[illegible]に[illegible]、そ
で[illegible]、
「[illegible]までもリパブリックね――」
と[illegible]つた。
「私はやり[illegible]、自分が好き、だから好
き。それでいゝわ」

伸子と佃との恋愛は、それにしても彼女の周囲にある[illegible]恋愛と比べて、比較にならない独特の暗さと切なさとを持つて居るやうに思はれた。病院へ行つた晩、佃は半ば夢中であつた伸子に接吻した。伸子は[illegible]彼の情熱の告白と感じて[illegible]た。彼に[illegible]再びそれから感情を元に戻すことは不可能であり、伸子にも出来ず、[illegible]に[illegible]れ[illegible]く互を思ふやうになつて来たのだが……恋愛[illegible]にこ[illegible]やうに[illegible]や不安や悲しさ[illegible]情を伴ふものなのであらうか？

自分が愛し愛される者を得たといふ確信は、[illegible]、伸子に、たつぷりした精神の落付きと希望とを[illegible]た。佃の方ではさうでなかつた。そして、[illegible]感情[illegible]まるにつれ、彼の[illegible]の[illegible]な[illegible]不安[illegible]て来た。それは伸子にも感染せずにすまなかつた。[illegible]た、[illegible]に高貴な輝きはなか／＼恵まれなかつた。

[illegible]人な[illegible]であつた。
二十[illegible]、伸子は[illegible]

餐に招ばれた。佃の知らない會社や公務關係の人々であつた。仲子の他に多く婦人達も出席した。翌日佃は異常に神經質になつた。

「貴方——私が昨夜行つたことで不愉快さうにしていらつしやるの?」

すると佃は眉毛の下から仲子を瞥見して云つた。

「何か其那わけがあるのですか」

「ほら! ほら! それが曲者よ」

仲子は、指をふつて佃を嚇す眞似をした。そして、云つた。

「これからもあることだからどうぞよく分つていらして頂戴……ね。私貴方を本當に思つて居るし、愛して居るのよ。だから、却つて誰と居ても安心だし大丈夫だといふ信念があるのです。——わかるでせう? 私の心持。私にはもう護り神があるの。本當に大切に思ふ人がある時、人間は自墮落になんぞなれやしないわ。それに第一お互の不面目よ、こんな何でもないことさへ平靜にとりあつかへないなんて」

佃は仲子の正視を避けるやうにし乍ら、譲らず呟いた。

「私は決して貴女がどうだといふのではないのです。貴女が私に眞心をもつて居て下さることは知つて居ます——けれども——貴女は人をすぐ信じる。世間の人間は決して表面から見るやうなものではありません。如何してさう安心して人とつきあへるか……それが不安です」

「人間を信じていけないものなら、どうして貴方を此那に信じることが出來て?」

彼女が移り氣でないと信じるのなら、佃は何を恐れて居るのだらう。珠子が云つたやうに嫉妬からであらうか。その嫉妬にしろ、自分の心持が分るなら、いらぬことだと仲子は心苦しく感じた。佃の知らぬ人とは會つてもいけない、交際してもいけない。——それでは餘り窮屈だ。仲子は狹量な佃が腹立たしくなり、一思ひに、自分は自分で彼の氣持を一々忖度などせず、自由に信ずるまゝに行動してよいのだと思ふこともあつた。彼も苦しむ丈苦しんで、自分のさういふ心持をどう處理すべきか會得すればよいのだ。熱つぽく殆ど決心に近いところまで行く、が、さう思ふ一方、仲子の心には忽ち彼の頭を抱きすくめ、接吻で被ひ、

「あゝよくてよ、知つて居てよ」

と云ひたいやうな情が燃え上つた。仲子には佃の苦痛が理解された。彼は三十五歳だといふことや、極めて貧乏だといふことや、地位のないといふこと、餘りいゝ評判でもないといふ事、其等を氣に病んで居るのであつた。それ等の事に煩はされつゝ、彼は仲子の若さ、無邪氣に牽かされる自分を苦しみ、自分の自信なさに苦しみ、幾重にも苦しい心持なのに違ひないのであつた。仲子は、どうかして自分の心を燃え移らせ、互に堂々とした生活に入りたいと思つた。彼等にとつて路はもう前にしか明いてないのは分つて居た。——佃は、然しどうしたら安心し、こゝまで來た感情を彼女とともに健かに育ててゆけるのであらうか。

考へて來ると、仲子の眼に涙が浮んだ。彼も結婚しなければ承知出來ないのであらうか。

三

人々は皆結婚する。男も女も結婚する。結婚といふことは、人間に眼と鼻とがあるやうに當然な人生の一つの約束のやうに行はれる。仲子はそれに對して何だかぼんやりした質疑とでも云ふものを抱いて居るのであつた。人間が家庭を欲する心持、又愛し合ふ男女が倶に生活したく思ひ、一組として扱はれたい心持の強いこと、それ等は彼女にもわかつた。佃に對して、仲子は、中世的なプラトニックな感情だけで居

るのではなかつた。いつか彼と自分とは肉體も一つにするであらう。一對の男女として取扱はれたら、如何那に何物か多いかといふ事は、今でも十分察せられた。然し、結婚といふことに到ると、漠然とした重苦しさ、狹さ、凡庸さ、不安の感がいつも伸子を襲つた。人間は結婚すると、何故あゝも、人生の或ゴウルに到したやうに落付いて、世間と調和的になつてしまふのであらう。多くの男女が、何か自分ならぬ者に導かれるやうにして、一生をいつの間にやら過して行く。自分が結婚し、そんな風に此世を送つて仕舞ふのは、伸子はいやであつた。結婚して子供が欲しいといふ氣もなかつたし、良人が所謂立身をして、某夫人と云はれたい慾も、彼女にはなかつた。人には個の仕事がある。自分には自分の仕事がある。そして、經濟的にも、伸子は彼を稼ぎてとしなければならない必要はなかつた。彼と生活をともにし、互に扶け合ひ、一緒にやつてゆきたいのは、たゞ、互の愛を自由に育てられる位置に於いて二人が、より豐富に、廣く、深々しく伸びたいからだけなのであつた。愛し合ふ男女にとつて、結婚が唯一のものなのであらうか。男女の愛は、本來が、さういふちよつと窮くるしいやうな性質のもの、なのであらうか。人生には何か、もう少し違つた形があつてもよかりさうなものだ、といふ氣が、結局にゆくと、いつも伸子の心に、強く生じるのであつた。

佃は結婚といふ字さへ自分の口から云ひ出した事はなかつた。けれども、彼は何と苦しむことか！その苦しがりやうを見ると、伸子は彼が、眞に求めて居るものの何かを、感じずには居られなかつた。彼が進んで云ひ出す權利を、自分自身に許して居ないので、猶更、その内に爭つて居る心持は、伸子に苦しく責任をもつてかゝつて來るのであつた。

四五日で三月にならうとする或晩のことであつた。

伸子は獨り部屋に居た。自習時間で、寄宿舍中、最も靜かな時刻であつた。時々、コンクリートの廊下を歩く、小さい靴の踵の音がするだけだ。朝子も机に向つて居た。綠色笠の讀書用電燈が、帳面の白い紙面や本の頁を森と照して居る。伸子は、ミス、プラットの處へ持つて行く爲に、竹取物語の一部を書きとつて居るのであつた。

物語は、元から彼女のすきなものであつた。自分から進んだ仕事だから、彼女は感興に滿ちて、日によると面白さにつり込まれ、文法の間違ひや、途法もない言葉使ひに頓着なく、沒頭するのであつた。けれども、今夜は如何も捗取らない。必要な表現が、彼女の貧弱な語彙に無いからばかりでなかつた。興味の湧く逆心を集注する熱が、何だか胸の邊で缺乏して居る、といふ感じであつた。伸子は、考へるにも字を書かうにも、自分といふ不存在の影が、假に薄くなりでもしたやうな手答へなさを、内部的に感じるのであつた。淋しいと彼女はさうなつた。

佃は紐育の北に在る或る市にＹ、Ｍ、Ｃ、Ａ、の用事で旅行中であつた。

その話をきいた時、伸子は寧ろ樂んで賛成した。

「結構だわ、行つていらつしやい。たまには別々になるのもいゝわ。氣が變つて——」

自分の心持を考へなほして見る事も、在結しかた時に休を寛へる事も、よいと思つたのであつた。最初の晩、伸子は夕飯後、廊下の奥間へ自分を訪ねて來る者がない、といふ安らかさで、早くから部屋着にくつろいだ。氣まかせに衣裳簞笥を片づけたり、讀書したり、久しぶりの獨居の樂しさは、魅するやうであつた。九

[illegible]時、伸子は[illegible]
れて居たやうに[illegible]の歎きが、[illegible]昇る
[illegible]
次の日、[illegible]日曜日までつゞくのだ。其
[illegible]ア、エレー。[illegible]
つ[illegible]そして、いつ[illegible]
つて見つた、伸子は、[illegible]とも言へず[illegible]
た、[illegible]
の羽ばたき、人の足音のしない[illegible]の、[illegible]
ぎるからんとした[illegible]とはからいふ[illegible]
ド、伸子は[illegible]にあるすべてのものを、[illegible]に新しく、珍しく感じて見た。

入口の扉が開いたり、近よる人の氣勢がしたりすると、彼女の[illegible]に[illegible]した、[illegible]

[illegible]

[illegible]なつた。

[illegible]を出て、ハドソン[illegible]の[illegible]を[illegible]したり、ブロウドウエイで買物をしたりした。そして、どうやら春になつたのだ。……

伸子は、自分の心の[illegible]を[illegible]ひ、一[illegible]になるだけの竹取物語を、やつと寫すと、いそいで[illegible]も待つて居るやうに、勢ひこんで机から立ち上つた。――[illegible]の中には、自分が居る積りだ。彼女の済むのを待つて居る者も無いしよう、やつと済んだ！ と、向つて云ふ者も無い。[illegible]の[illegible]は、[illegible]く[illegible]の[illegible]を鎔して居る。伸子は寂しい獸の仔のやうな[illegible]した[illegible]は、捨てゝ[illegible]すやうに[illegible]方の[illegible]を[illegible]の上で[illegible]の前へ[illegible]つた。

とつぷり暮れた暗い夜を通して、同じ寄宿舍の、壁のこに足を出した翌が見えた。灯のともつた[illegible]のやうに、[illegible]由の[illegible]あり、その内[illegible]は燃えて[illegible]いて居る。窓掛の引いてない一つの窓から、[illegible]つたやうな外[illegible]しに、若い女の頭や、白い上衣の肩があちら〳〵見えた。どの窓も[illegible]く、暖かくて、人に知られぬ[illegible][illegible]に[illegible]りに[illegible]るやうに見えた。伸子は羨し[illegible]、何でもよい、[illegible]、[illegible]作を鳴らし、自分を論らすこの寂しさを[illegible]りたい衝動を感じた。[illegible]の[illegible]の端に[illegible]かけ、[illegible]の[illegible]拍子をとりながら、鼻唄を歌ひ出した。これが自分の[illegible]だらうか？ 此那惨めな、弱い顫へ聲が？

[illegible]と[illegible]、[illegible]た。

伸子は熱し、[illegible]その抵抗力をも失つた。[illegible][illegible]、この心[illegible]らさうとしても[illegible]知つた。

[illegible]は、自[illegible]なしでは[illegible]ないのを知つた。この、[illegible]になつたやうな寂しさ、何をしても――路を歩いても、讀んでも――[illegible]ただ[illegible]に[illegible]ぶ不方便だといふ感じ、空氣まで妙に稀薄になつたやうな[illegible]、[illegible]でない[illegible]て見れよう、[illegible]、自分が[illegible]、このやうに彼に[illegible]、切ない思ひをして居るのを知つて[illegible]るであらうか。

伸子の眼の前に、佃の[illegible]が[illegible]つた。段々、それは大きくなつて來た。佃は、彼の、見[illegible]た古くさい山高帽を冠げ、伸子を見、近づき、よき微笑を浅した。伸子は、眼を瞑り、熱く、[illegible]く、[illegible]で顔へ[illegible]ら、幻の佃を抱きしめた。彼の顔の感触……彼の[illegible]――[illegible]かい[illegible]を撫でるとき[illegible]につたはる、その手觸り。伸子は呻くやうに彼の名を呟いた。

壁に頭を[illegible]、[illegible]して居た伸子は、ノックの音で我に返つた。

彼女は、いそいで兩手の甲で涙に濡れた眼

を擦つた。

「お入んなさい」

然し聲は聞かず、外から受付の少女が叫んだ。

「御電話ですから、廣間へ被來つて下さい」

「さうお、有難う」

誰から掛つて來たのだらう。仲子は怪しみ乍ら、氣のない樣子で身づくろひをし、階下へ下りた。廣間では、愉快さうな男女が、彼方此方に群れて居た。夜會服をつけた娘が三人、花束のやうにかたまつて、嬉しさうに恥しさうに、人中を抜けて出て行つた。黒い服をつけた觀客の老紳士が、隅の大理石柱の下に、話さしたさゞめきを眺め乍ら、作りつけた微笑を湛へて立つて居る。

仲子は、電話室へ入つた。彼女は、若し誰かに、何事か、揶揄かれるのだつたら[illegible]、と思ひ乍ら受話器をとりあげた。

「もし、もし」

「佐々さんですか、すぐ其方へつなぎますから」

向うで接續の聲がした。

「もし〳〵」

「もし〳〵……あなたは」

[illegible]に、[illegible]れ〳〵乍ら、一瞬[illegible]と、仲子は思はず、[illegible]に光を臺を握りつめてのり出した。

「佃さん？」

「佐々さんですか？　どうして居られます？」

仲子は、こみ上げて來る嬉しさと戀しさとで、口が利けなくなつて仕舞つた。やつと先方に聞える位の聲で彼女は、

「もし〳〵……もし〳〵……」

と囁きながら、動顚した熱い額を、ぐい〳〵送話口に壓しつけた。

佃の聲にも、優しさがあつた。

「紐育のお天氣はどうです？　此方はひどい吹雪ですよ――聞えますか」

仲子は靜まらない感動で、息づまつたやうな聲を出した。

「聽えてよ――よく、かけて下さつたこと」

「御一人ですか？」

「えゝ」

「つい先刻まで會議があつて、いそがしい思ひをしました。――餘りひどい天氣なので、――一寸どうして被在るかと思つて……」

「有難う」

仲子の胸には再び、火の塊りのやうなものがこみ上げた。出來ることなら一飛びに、彼の手許へころがりこみ、この我武者羅な熱情を、同じやうに激しい燃える彼の手で捕へ、締めつけて欲しい――言葉に言へない感情で、仲子は送話口に額を壓しつけたまゝ、默つて仕舞つた。

「もし〳〵」

「――なあに？」

「どうなさいました？」

「……………」

向うの端にも情の深い沈默が生じた。仲子は、夜の電線を傳はつて、まざ〳〵と迫つて來る彼の心持を感じた。その感じは迫り迫つて、二人を隔てる距離がまるでつまり、遂に、佃は、すぐ[illegible]まで來て居るやうにさへ思はれた。[illegible]て、佃から云つた。

「そろ〳〵時間になるかもしれませんね。――切りませうか」

「さう？」

「ずつと部屋ですか？　よくおやすみなさい。[illegible]明後日[illegible]ります」

「何時頃？」

「多分あしたの夜行で此方を立てるでせうから、夕方迄には着くでせう。夜おめにかゝります」

彼女はさやうならを云つた。そして、夢中で[illegible]にいつて[illegible]つた。

四

仲子は、其夜、殆どまんじりともしなかつた。

翌日は、陰鬱な小雨であつた。ミス、フラットの處から歸つて、玄關で洋傘の雫を切つて居ると、昇降機から安川が外出の支度で出て來た。彼女は仲子を見つけて聲をかけた。

「佐々さん、あなたこれから時間がありますか」

仲子は、昨夜からの絶えない内心の思考に囚はれ、ぼんやりした顔つきで安川を見上げた。

「なぜ？」

「若し何もないなら、一緒に百二十五丁目までいらつしやらないかと思つて」

「買ひもの？」

「えゝ、一寸」

仲子は少し歩いてもいゝ氣になつた。決めることは、既に昨夜のうちに決つて仕舞つた。

「ぢやあ一寸待つて頂戴。このごた〳〵あづけて來るから」

仲子は本や帳面を受付にあづけた。

近いからこそ細かい用を足すのだが、百二十五丁目邊は下等な街だ。塵埃、バナナや林檎の皮、貨物自動車の粗惡なガソリンの臭氣が街路に滿ちて居る。窓硝子が破れ、黄ばんだ半地下室に、靴直し、古着買、いかものの錺職が、鼠の巣のやうな店を張つて居た。寶石商の店頭に飾られた何百弗、何千弗と正札つきのダイヤモンドが、贋物としか思はれない場處柄であつた。

安川は靴を一足買つた。仲子はリボン一卷と、白レイス卓子掛と、可愛い家鴨の子の玩具を二つ買つた。安川は仲子の子供らしい買物を見て、

「可笑しな人ね、どうするの其那もの二つも」

と笑つた。

「可愛いぢやないの、まるで可愛い恰好だわ、佃さんにも上げるの」

仲子は、ふは〳〵手應へない紙包みを大切に抱へ、傘をさし、びしよ〳〵濡れた鋪道を戻つた。

眠らなかつた割に、仲子の心持は、はつきりして居た。永い間惱んで居た問題が、ひとりでに來るところへ來た。さういふ落付きがあつた。其は決して樂な行手を示しては居ない。自分に女性としての苦勞が始まるだらう。佃に協力する熱誠さへあれば、仲子は其を恐れる自分とは思はなかつた。彼がよし、と云へば自分の決心は出來て居る。仲子の胸には希望と一緒に、云ひ難い一筋の悲哀、不快な豫感があつた。

それは、當の事であつた。彼女は兩親を愛してゐたし、彼等が仲子の伴侶を想像すれば、凡そ如何那青年を考へるか、見當はついて居た。公平に云つて、佃は彼等の空想の中に現れるだらうどの人物とも、樣が違ふのは明かであつた。彼等は自分の決心を知つたら、驚き、不快を感じ、憤るかもしれない。否、憤るであらう、一應は。然し、自分は後に引くまい。最も惡い場合を考へて、其が假令一生感情上の不和の原因となつても。昨夜も、仲子はこの事を考へ、咽び泣いた。そして、どうか兩親も、自分の心持は理解して呉れるやうに。佃も、萬一運命がさう向いたら、彼等のよき息子となつて呉れるやうに、祈つた。

次の日、午後の五時過、佃から電話がかゝつた。仲子は、自分が行くから、七時頃圖書館に來て居て呉れるやうに頼んだ。

夕食を、仲子は儀式にでも臨んで居るやうに味なく、嚴かな氣持で食べた。部屋へ戻つて、子家鴨の頸に細いリボンの薔薇飾を結びつけ、薄紙に包んだ。髮に刷毛をかけ、帽子をかぶり、仲子はいつもより少し蒼ざめた顏で外へ出た。

前田の前に上つて、風もないしつとりした[illegible]
だ。匂ひを嗅ぎ[illegible]に、[illegible]しく[illegible]い
て居る。[illegible]の遠い先で、果てない[illegible]一列、
と、大圖書館の屋根が、[illegible]と[illegible]つた大學の
穹を抜けて、アヴェニュー・ホオルに行つた。佃
の姿は見えない。伸子は、圖書館へ行き、三
階の[illegible]の右側の戸を開けた。[illegible]ない[illegible]の下
に、[illegible]やうに並び、伸子の[illegible]は[illegible]く、
天井に反響した。[illegible]で、[illegible]から立
ち上つた音がした。伸子は足を速めた。佃は[illegible]
た。[illegible]だ。彼は入口の方を向き、來る伸子を
迎へるやうに、椅子の前に[illegible]手をかけ、立つて
居る。――何處か少し[illegible]れたやうな[illegible]を見
た[illegible]、伸子は、今まで[illegible]
事を立てて[illegible]折れるのを感じた。
[illegible]と、伸子に[illegible]
てかけた[illegible]
女は、薄い白い紙包みを出した。
「お土産、――あけて御覧なさい」
佃は、[illegible]、細く包んだ紐を、中
から出て來た手袋を見ると、一[illegible]
に[illegible]
「これは可愛い！ [illegible]どうしたのです？」
「[illegible]、安川さんと」

佃は、無骨に平らな指先で、ふはふはした和
毛を撫でたり、[illegible]の上を歩かせて見たり、[illegible]な
く子供等と戯れた。伸子は、その平和な頭を、
苦しい心持で眺めた。彼は、この自分が、次の
[illegible]に何を云はうとしてゐるのか、まるで知ら
ない。自分達の運命が、この數分に定らうとい
ふのに――
伸子は、[illegible]な[illegible]を切り出すに、一種の[illegible]さ
を感じた。彼女は伏目になり、佃の手に自分の
手を重ねた。苦しい感情の動悸が先に立つて、
舌が[illegible]つた。伸子は、だしぬけに彼の名
を呼んだ。
「――佃さん」
[illegible]いて[illegible]を見た。その眼と眼を見合せ
た途端、伸子は[illegible]むやうな、苦しげ
な顔をした。彼女は手を[illegible]し、[illegible]自分に
引寄せた。そして、[illegible]耳に口を寄せ、囁き
始めた。
「私ね……私ね……」
が、いきなり、伸子自身[illegible]しくなつた[illegible]
が、ひどい勢でこみ上げて來た。彼女は佃の
[illegible]に自分の顔を押しつけたまゝ、[illegible]けて
泣き出した。佃は[illegible]らず、周章てて、自分
の[illegible]から伸子の顔を離さうとした。

「どうしたのです？ え？ どうしたのです」
伸子は、一層きつく彼にしがみつき乍ら、途
切れ途切れに涙の間から囁いた。
「私ね……考へたの。……若し結婚するな
ら……私は……」
佃は、打たれたやうに體をのばし、ドッと両
手で伸子の顔を[illegible]て自分の前へ持つて來た。
伸子は、[illegible]、[illegible]へ[illegible]り、
[illegible]するやうに一氣に云ひ切つた。
「貴方とでなければいや」

五

リザァサイド、ドライブの[illegible]に、[illegible]
[illegible]まつた。[illegible]
[illegible]いた[illegible]をとりまいて[illegible]
に[illegible]、ハヤ[illegible]と、[illegible]
い夜[illegible]の中を散歩する人影もない。[illegible]と
ま、圖書館を出て此處へ來た。彼等は[illegible]に[illegible]
奮して居た。けれども、心持は眞面目で、寧ろ
沈んで居た。伸子の[illegible]に、
「此[illegible]ことがあり得るだらうか。[illegible]ことが
あり得るだらう――」
と[illegible]いて、[illegible]ように[illegible]を[illegible]めた。
[illegible]これは[illegible]

が何處にあらう：仲子は自分が、幸に誤らず、彼の內心にも在つた希望を切り出したのを知つた。

彼女は次第に落付いた。

「もつといろ／＼、聞いて戴かなければならない事があるのよ、少し步きませうか」

そこで、彼等は、この季節のこの時間では、往來も疎らなリヴァサイドへ來たのであつた。

仲子は自分が、彼那風に自分の心を打ち明けようとは思つて居なかつた。もう少し冷靜に、自分が其決着に來た心持の經路から、實際上の種々な相談をし、最後にあの一言を云はうと考へて居たのに、順序や考へなど、けし飛んで仕舞つた。今逆に戾つて、初めの方を彼に話さなければならない。

佃に腕を執られ、ゆる／＼石疊の廣場を廻り步き乍ら、仲子は考へ／＼口を利き出した。

「これから云はうとするのは皆、私の我儘なのよ。妙な工合で後先になつて仕舞つたけれど――でも大切な事だから、どうか聞いて頂戴。毎日の生活は、たゞ可愛いといふばかりで行かないことが、澤山あるから……ね」

「勿論さうです」

佃は熱心な調子で云つた。

「何でも云つて下さい。よく〳〵相談して、私は自分の力の及ぶ限りの事はします。この四五年、私は結婚といふことなんかすつかり斷念して居た。――實に思ひがけない――信じられない程です。――今頃――」

「私にしても其は同じよ。思ひがけないわ……でも、私――貴方の被在らない間考へて、かう定めたのも、私共の心に育つてるものを、眞直伸して立派なものにしたいからなのよ。ただ旦那樣と細君を作りたいからなんぢやあ本當になくつてよ」

「其は解つて居ます」

「お互が安心して、少しでも深みや廣さの增した人間になりたい」――若し心持の上で、故障なしにやつて行けるものなら、私は一つ家に住むといふことや、他のいろんな事なんか、如何でもよいとさへ思ひます。でも、貴方が安らかでないと、結局私も安らかでないから――」

彼等は數步沈默の裡に步いた。仲子は、訊ねた。

「――これが私の我まゝといふ處なのだけれど――貴方御自分の細君が、家のこと下手で、勉强したがりでも、平氣でいらつしやれる？――私は本當に貴方を愛してよ。けれども、仕事も愛して居ます。貴方と同じ位！ね、これは言葉で云ふと何でもないやうだけれど、我々が若し生活を一緒にするやうになると、なか／＼大變な事だと思ふの。私は――」

仲子は、勇氣を失ふまいと努力して、力一杯、佃の腕を自分の脇に壓しつけ乍ら云つた。

「迚も貴方に會はなかつた時の心持に戾れないと思ひます。だから、思ひ切つてそれを、育てるだけ育てて見ようと思ふ……其でも、仕事はすてられなくてよ。其だけは出來ない――一生碌なことは出來ないかも知れなくても、やめることは出來ないの。萬一其を止めなければならないなら……私――……左樣ならをするしかないの」

脣をかみしめ、仲子は辛うじて涙を隠した。

佃は、全身の身ぶりでその疑念を晴らさうとするやうに、心をこめて斷言した。

「其那心配こそ無用です。――貴女が大切に思つて居るもののあるのは判つて居ます。假にも貴女を愛して居る者が、どうしてそれを捨てろなどと云ひます！――私は自分をすてても、貴女を完成させて上げたい、と思つて居る程です。決して私は家政婦を求めて居るのではない……私は元から、何か自分の仕事を持つ女の

ひとを助けて、立派なものに仕て見たい、と云ふ考へを持つて居たのだが……力の足りないのが遺憾です」

伸子は嬉しさに思はず其處で棒立ちになつた。

「本當？ 本當にさうお思ひになるの？」

「本當です！ 御覧なさい」

佃も立ち止まり、伸子の兩手を、自分の二つの掌の中に握つて、彼女に顔を向けた。

「私の顔を御覧なさい。――嘘は云ひません」

「――有難う！ 有難う！」

伸子は、涙ぐみ乍ら、握られたまゝの兩手を強く強く振り動かした。

「本當に有難う！ どんなに嬉しいか、貴方にお解りになつて？ 有難う！ あゝ全く！ 有難う」

伸子は、楓の下の石の腰架に腰を下した。

彼女は、この美しい夜の自然に向つて囁き、「この御恩を、私に授けて下すつたのは、どなたですか。私は[illegible]、恵み愛されて居たのでせうか」と、感謝し度い程であつた。あゝ本當に、このやうなことに遇はうとは！ 伸子が涙を止めさへなかつたのは、[illegible]ばかりではなかつた。[illegible]

を以て、自分の心持を明言して呉れた歡喜である。あゝ！ 彼は初めて、男らしく口を利いてくれた。

佃は心配して、度々伸子を撫でた。

「大丈夫ですか？……餘り亢奮するといけませんよ」

「大丈夫よ、病氣になんぞなるものですか。……でもお互に、氣をつけて、丈夫で居ませうね、私共はどうせ貧乏よ。お互が助け合つて生活して行くのよ。私は親達から何も貰ふ氣はないのだから――勿論呉れるものもないけれど」

伸子は、二人の貧乏さへ、悦び愛するやうに笑つた。

彼等は歩道に降り、寂しい河岸か、夜氣を吹き過すのも、頓着なく歩いた。

佃は、やがて心付いて、時計を見た。

「九時半すぎて居ますが……いゝのですか」

伸子は、寄宿舎の出入簿に、圖書館と書いて来た。圖書館はもう閉まる頃だ。伸子は一寸考へた。

「――いゝわ、若しいけなかつたら、明日、ミス、[illegible]に理由を話したつてすむことですもの」

伸子の心は、[illegible]と一緒にいふ信念で勇氣に満ちた。けれども、晩くももう二時間ばかりで、佃と別れなければならないとすると、彼女には、心がかりな事がもう一つあつた。其は重大なことだ。佃も未だ其には一言も觸れない。伸子は、第一口を見出すに又新たな工合惡さを感じた。伸子はぎごちない風で、

「もう一つ大變なことがあるんだけれど――」

と云ひ出した。

「何ですか」

「……」

伸子はつい云ひ淀つた。

「何ですか」

「――……子供のこと」

「……解つて居ます」

「――どういふ風に？」

今度は佃が躊躇した。

「つまり……」

「私は、望んで、[illegible]な境遇で育てて[illegible]ないうち、子供は決して、何方にとつても幸福でない、と思ふのです。貴方の思つて在るのもそのことと？」

「さうです――仕事もあるし……」

「私――私共は、[illegible]やつと生活をするに[illegible]つて居ます、[illegible]な教育も、させてやれない[illegible]

になるのはいやよ。それに……私の心持の中に、何たふすらりと[illegible]になれないものがあつて——」

仲子は、低い聲で云つた。

「男のひとに、この可怖さが解るかしら……可怖くて堪らなくなるやうなものがあるの、本能的に——」

すると、佃はひどく散文的に云つた。

「何でもないでせう、其那ことは——」

仲子は、彼の情味の缺けた調子で、微に傷けられた感じがした。

「何でもない事とは思はなくてよ。私は、其那心持がし乍ら、此方の女の人達のやうに、さういふことを平氣で、純科學的に取扱へないこゝろ持が強くあるんですもの——自分や、何か斯ら晴れ／＼と高く美しいものに對して極りわるくて——ね。……私には二つとも本當の氣持だから——」

彼等は寄宿舍へ曲る横通りに出た。佃は、仲子を自分の心で被ひかぶせるやうに云つた。

「安心なさい。——私は貴女を苦しめるやうな事は決してしません。さういふ心持も、いつか變るかもしれないから……何も私は——解るでせう？ さういふことについても、少しは解つてゐるつもりです——」

今になつて、彼等は自分達が、かな氷のやうになつて居るのに心付いた。彼等は寄宿舍のすぐ前に在る菓子店に入つた。

佃は、もう灯を暗くした寄宿舍の玄關口まで、仲子を送つた。

六

冬と春との入れ換る三月だ。天候はむらになつて來た。朝ちら／＼粉雪が降つたかと思ふと、晝頃ぱつと日が照つて、夜は濃やかな霧が市街を包む。次の日は風が強く吹いた。喉が痛む程空氣が乾燥する。——晴れても曇つても、冬が日一日と溶け去る氣勢は爭はれなかつた。街路樹の梢は、いつか潤やかな撓みを持ち始めた。買物がてら通りを歩いて居る時など、不圖、高い高い塔の頂に、ヒラ／＼はためいて居る赤と碧の旗が目に留る。何もあるのではない。ただ、空高く見なれた一つの星條旗が飜つて居るばかりだ。けれども、人は、その旗の色や、その空から、今日ばかりはことさら何か閃く歡ばしさのやうなものが、自分の心にとび移るのを感じる。訝りつゝ瞳がなごむ。……其こそ春の遠慮深い先觸れだ。

其日も、[illegible]た時刻に、[illegible]や街道の[illegible]に歸つて行つた。仲子は、[illegible]人に[illegible]た。仲子は、思つても思つても思ひ盡きないものを、確り心の裡に抱いて、[illegible]坐つて居る樂しさから、[illegible]よく[illegible]つた。

二時から、ミス、プラットの時間があつた。けれども、前の晩、おそくまで佃と居た上、今日招かれたので、何も支度が出來て居ない。

五分程早めに着いたのに、ミス、プラットは、いつも彼女等の坐る側部屋の長椅子で、もう仲子を待つて居た。仲子は率直に云つた。

「——今日私は大變なまけやだつたのです。準備が出來ないで參りましたが、勘辨して下さいますか」

ミス、プラットは、房々栗色の前髮を仰向けて、仲子を見た。

「どうして？……まあこゝにお坐りなさい——」

背中に腕を廻して、彼女は仲子を、ぴつたり自分の傍に腰かけさせた。

「何故出來ませんでした」

「本當は昨夜する筈だつたのですけれど、餘りおそくまで佃さんと話したので、つい駄目。今

曾は阪部夫人におよばれだつたので、時間がございませんでした。……今日は何か話を口で申しますから、それをなほして下さいませんか」

「勿論それでかまひません……けれども」

ミス、プラットは、伸子の背中から手を離さず、却つて一層を凝と、情をこめて、自分の方に廻しつけるやうにしながら云つた。

「貴女は、この頃少し、いそがしすぎるのではありませんか？　いろ〳〵なことで……」

伸子は、ミス、プラットの聲に、眞實な憂慮があるのを感じた。

「氣付いて居りませんか？」

「さういふわけではないけれども……」

伸子は、この間から調つて居たことを、自然に話し出した。

「私は、先達から、佃さんと私のことについて、御心配いたゞいて居ることは知つて居りました……それで、私をお呼びになつたのも、その爲に關係がありましたのでせう？」

ミス、プラットは、何か獨特の顔をしきて、

「まあ」と云つた。

「さうだつたのです——貴女は悟りが早いかですね……」

伸子は、信頼に満たされて云つた。

「有難う、すつかりお話が出來て嬉しうございます。あの時はね、私の心持も定つて居ませんでしたし……それに、あゝいふ工合で貴郎こと云ひ出すのは、私いやだつたのです。

けれども、いつか時が來れば、そして必要なら、貴女はきつと、私に相談して下さるだらう、と思つて居ましたよ。私が、及ばず乍ら貴女の幸福を、心から願つて居ることは、知つて居て下さるのですものね」

伸子は默り込んだ。彼女達の並んで坐つて居る前方の白壁には、外の雪明りが映つて居た。雪解が速いので、どん〳〵立昇る水蒸氣の搖れが、明るく白い中にも見えた。伸子は困つた擧句、無技巧な、低い調子で云つた。

「——私は佃さんを愛して居ます」

「……さうでせう」

「……私共は婚約をいたしました」

「婚約を！」

穩やかであつたミス、プラットは、其時思はず顔を逸した程、驚愕の色を現した。

伸子は悲しい心持がした。自分が佃と婚約したということは、其程不快な、驚きを與へることなのであらうか。ミス、プラットは、續いて言葉を改めて、彼女に詫びた。

「御免なさい。餘り突然だつたので……本當に思ひがけないことです……貴女が……」

永い沈默が來た。ミス、プラットは暫くして、感動の餘り涙組んだやうに呟いた。

「貴女は本當に若い！　可愛い人です。私はどうかして一生幸福な貴女を見たいと思ひますよ」

彼女は、伸子を自分の胸に抱いて、額に接吻した。

伸子は魂にしみ徹るやうな痛さで、自分が初めて受けた祝詞ともいふべき、これ等の言葉の苦さを感じた。これは普通の婚約者が受ける祝福ではない。傷み、あはれみ、歎息する氣がかゝるではないか。伸子は、或場合には、更に此上、冷笑や輕蔑の加はることさへも、覺悟しなければならないのを悟つた。

ミス、プラットは訊ねた。

「貴女の御父様は、佃さんを御承知ですか」

「知つて居ります」

「言つてお上げになりましたか？　そのこと」

「すつかり書きました、詳しく。——それに、ずつと前からも、自分の心持は知らせてありますから……」

ミス、プラットは、[illegible]に、[illegible]にする

處があるのではないか、と危んだ。伸子には、何より其が辛く、彼の爲にすまなく思つた。彼が若し金持の息子なら、彼の名が紳士錄に載つて居たら、誰が其那ことを云ふだらう。假令、其男が、實際は騙してなぐさむ氣でなかつたとしても、世間は默つて居るだらう。佃はその點、證明さへ信じられ難い立場に居るとは！

伸子は、自分が卑められるやうに、苦痛を感じた。彼女は、頑固らしく云つた。

「ね、ミス、プラット。あの人を愛して居るのは私です。あの人を信じて居るのも私です。私は皆が、どんなにちやほやする人だつて、愛さないものは愛さない、信じられなければ信じません。けれども、私が愛し、私が信じたら、少くとも私に、その心持がある間動かせません」

伸子は、日暮れ近くまで、ミス、プラットの處に居た。彼女は、内心を吐露した一種の輕やかさと同時に、自分等の結びつきに對するやゝ憂鬱な感傷に滿されて歸つた。

七

日曜日、――伸子はミス、プラットと、市の繁華な場處にあるミセス、チヤアチルの茶に招かれた。

ミス、プラットは、

「面白いものですよ、紐育ではいつでも、最新な生活樣式や流行で皆が暮して居るやうに云ふでせう。處が、さういふ都會の眞中に、ヴヰクトリアン・エイヂの破片が、ちやんと、ミセス、チヤアチルといふ名を持つて生きて居ます。一度行つて見ませう、貴女が窒息しないうちに、きつと連れ出してあげますよ」

さう云つて伸子をつれて行つたのだ。伸子は、興味を以て、然し實に窮屈に、二時間其處で過した。彼女は、珍しい紋章學の話を、家柄の自慢と共に、ウールの靴下をはいて、薪をストウブに燃いて居るミセス、チヤアチルから聞いた。

五時過に、二人はC大學の集會所へ廻つた。Y、M、C、A、主催の、コスモポリタン俱樂部の日曜晩餐會があつた。世界各國から留學して居る學生の大多數が會員で、新世界主義を理想とする討論や研究、講演があつた。その前に、大廣間に幾列にも並べられた卓子で、簡單な食事をするのだ。

伸子は、規定通り、入口で渡された紙に、自分の名と國籍を書いて、胸にピンで止めた。今日は、食堂に大して面白い催しもない、と見え、盛會であつた。重たく扉が開いて、種々な國の男女が參集する。伸子はミス、プラットと、廣間の暖爐の傍に坐つた。伸子は、出入口に向つて席を占め、其となく人の出入に氣をつけた。昨日の夕方から、彼女は佃と會はなかつた。今夜は彼も來る筈だ。伸子が、大して氣もないのに來たのは、彼に會ひたいからだとさへ云へた。

大方待ちくたびれかけた時、伸子は思ひがけなく、期待したとはまるで反對の方角に、佃の姿を認めた。彼は、奥の男子控室のすぐ前で、玄關の方に向いて立ち、比律賓の青年と話して居る。話し乍ら、彼もちよい／＼外を氣にして居る樣子であつた。青年と別れ、彼は、癖のある歩き方で伸子の方へ來た。彼はまだ、伸子が、一團の人のかげになつて、ついそこの椅子に居るとは知らなかつた。段々近よつて、佃がその人むれの向う側を、自分を認めないまゝ通り過ぎようとした刹那、伸子は我知らず左手で、ミス、プラットの膝に觸つた。

「ミス、プラット」

聲が唇を洩れたと一緒に、伸子は自分の失策に心付いた。何といふ馬鹿だ！　ミス、プ

ラットはもう前から佃を知つてゐたではないか。彼を見た瞬間、何故か伸子は、改めてはつきり、

「ミス、プラット、あれが佃さんです」

と、告げ知らせたい烈しい衝動を感じた。考へる暇なく、ミス、プラット、と呼びかけたのだ。然し告げてどうしようと云ふのだつたらう。永年支那で傳道して居たといふ婦人と話して居たミス、プラットは、その間に悠くり頭を廻らして答へた。

「何ですか？　佐々さん」

呼びかけと、彼女の應答とに間があつたので、伸子はやつと愚かな混亂から救はれた。

「あゝ御免下さい。人違ひだつたのです」

餘興に、ポウランドの青年が熱情的なポロネイズを彈奏して、會は終つた。

九時少し過ぎた許りであつた。ミス、プラットは、佃と伸子に、自分の家に來るやうにと、頻りに勸めた。彼女はもう一人、佛語を教へて居る白耳義婦人と一緒であつた。

「よろしかつたらどうか來て下さいな。久しぶりで、日本の緑茶のおもてなし致しますよ。ね、いゝでせう？」

伸子は、斷[illegible]れるので斷れなくなつた。

彼等は四人で、ミス、プラットのアパアトメントへ行つた。

母夫人は留守であつた。彼女が獨りで茶器を揃へ始めたので、伸子も食堂へ出て行つた。

「お手傳ひいたしませう、このお湯をかけますの？」

伸子は電熱機のスヰッチを捻つた。外から歸つたばかりですぐ用を始めた故か、ミス、プラットは少し、せかせかして居た。彼女は菓子を鉢に盛り、客間へ運んで行つた。

戻ると、

「どう？　もう沸いたでせう？」

と、湯沸しに觸つた。かけて三分も經つて居なかつた。

「まだかけた許りですもの、もう少し待たなけりや駄目でせう」

ミス、プラットは、猶、掌でアルミニウムの光つた湯沸しの胴に觸り乍ら云つた。

「かなり熱くなつて居ますよ」

「外側だけでせう」

「ようござんすよ、もう！」

伸子は笑つた。

「大變せつかちで被在ること！　私、丁度よくして持つて參りますから、彼方で待つていらつしやるとようございます。わかつて居ますから」

彼女は、いつも物判りのよく、泰然として居るミス、プラットが、湯ぐらゐのことでせかつくのを、愛らしく面白く感じた。けれども、ミス、プラットは理窟なく、もう湯は沸いたと主張した。

「いゝんですよ、確かにわきましたよ。——御覽なさい、音がして居ますよ、おろしませう」

彼女の、聲や眼にある強情さが、ふと伸子を警戒させた。其は、早く彼方に行つて皆と一緒になりたい、といふ、子供らしい氣ぜはしさではなく、一徹な、何かに反抗するやうな頑張りであつた。

「では消しませう」

と、彼女はスヰッチを切つて客間へ運んだ。

湯は勿論なま溫きで、不味い不味い茶が出た。ミス、プラットもさすがに苦笑した。

「佐々さんに負けましたね、夏向のお茶が出てしまつて……」

伸子は、漠然、四邊に妙な雰圍氣の醸されてゆくのを感じ、居心地よくなかつた。ミス、プラットは、絶えず話題を提供するのだが、不自然な[illegible]があつた。彼女は、誰にともなく、ぽん

やうに話してすむ處か、故意に佃を焦點とした。

一々、

「佃さんはどうお思ひになります」

又は、

「貴方の御意見をおきかせ下さい」

佃は迷惑らしく、はき／＼した返事をしなかつた。而もミス、プラットは繰返し迫つて、調子をかへようとしない。

彼女が、

「佃さん、貴方の御専門は何でしたか、いつぞや伺つたんでせうけれども、つい失念して……」

と云つた時、佃は神經の焦立つた樣子を制さうともしないで、突き離すやうに答へた。

「別に面白くもないものです」

仲子が間から口を入れた。

「彼の專門は古代言語學なのです、特にイラン語の……」

そして座をとりなすやうに云つた。

「いつかよろしかつたら、御一緒に美術館へでも行つて見ませう、佃さんを說明役にして。——きつと面白いでせう」

すると、ミス、プラットは、自分の言葉で仲子を後に控へさせるやうにした。

「私は佃さん御自身からいろ／＼と伺ひたいのですよ。——それで……如何な目的で研究していらつしやるのです？」

座談ではない。詰問めいて居た。仲子は、何故今夜に限つてミス、プラットが變なのか、解らなかつた。はら／＼して居る仲子の注目の前で、佃は腕組みをし、益々不活潑な拗ねた風で答へた。

「研究の爲の研究です」

「……失禮ですが、私、それは遁辭だと思ひます。勿論、眞の研究が功利的なものでないのは知つて居ますが、研究の爲にする研究なら、猶更、其處にはつきりした御自分の、學問上の目標がおありでせう？　それが伺ひたいのですよ——。犬でさへ土を掘るのは、何か嗅ぎつけて居る證據です……」

「——失禮ですが、今晩、私は議論する氣分になりません。——又いつかゆつくりした時に」

「あら、私共はちつとも議論などしては居ませんよ、たゞ眞面目な話、ありふれたことをほんのちよいと本氣で話して居るのぢやありませんか」

ミス、プラットは、仲子をぞつとさせた笑顔で、傍の二人を顧みた。誰も、それに應じて微笑出來なかつた。彼女と佃との間に戰端の開かれたのは間もなくだ、仲子は初めて、ミス、プラットが、この話をしたさに、佃ぐるみ自分の家に誘つて來たことを諒解した。

「まあ、では、私は不幸にも貴方の御専門に就いて理解出來ないとして——これだけは伺へるでせう？　貴方が一人の人間として、人生にどんな目あてを持つて被在るか……」

先刻から、凝と三人を眺め乍ら、當惑して坐つて居た白耳義婦人が、此時口を出した。

「ミス、プラット、もうよろしいでせう？　餘り問題が——」

「いゝのですよ、心配なさらなくたつて——」

ミス、プラットは、佃を正面から見据ゑ、上體をぐつと椅子の上で立てたまゝ、きめつけるやうに云つた。

「私は自分の申すことを辨へて居るのですから。——佃さん、沈默も場合によつては、いつも黄金といふわけには行きませんですよ」

「……………」

「佐々さんは」

仲子は、豫想もしなかつた自分の名が引合ひに出されたので、眼を瞠つた。

「もう自分の仕事や人生に、或目標を立てていらつしやいます。貴方は何も仰云ることがない

のですか？ 仰云れませんか—」

伸子は、居たゝまれないやうになつた。彼女は、佃の態度に對する歯痒さと、それをわざわざ斯様にして、他人と自分との前に暴露させるミス、プラットの冷やかな畫策とに、むら〳〵とした。ミス、プラットが、斯うでもしたらと、伸子の爲を思つて、佃の赤裸な姿を曝させようとして居るのは、伸子によく判つた。「人前で器量を下げるやうな男！」ミス・プラットは、自分がさう思つて愛想づかしをすると思ふのだらうか。

執拗に默つて居る佃に向つて、ミス、プラットは平手打ちを與へるやうに云つた。

「仰云られないのは、貴方の人格が空虚な證據です。——理想も熱情も、思想もありはしないのです！ 貴方はそれで伸子さんに」

「——ミス、プラット！」

ミス、プラットは蒼くなつた伸子を見た。——彼女は神經的な身じろぎをして、口を緘んだ。

八

ミス、プラットの好意を、伸子は次第に重荷に感じた。ミス、プラットのやり方には、何か、伸子が素直になれないものがあつた。次の稽古の日、日曜の夜の事に就ては互に一言も云はなかつた。が、ミス、プラットは不圖、

「この間の晩、コスモポリタン倶樂部で、私心付いた事があつたのですよ」

と、云ひ出した。伸子は、帳面の上に兩手を置き、默つてミス、プラットを見た。

「食卓についた時、佃さんが貴女と私とに椅子をなほして呉れたでせう？ あのとき、彼のなほしかたが、貴女に對してと私に對してとは違つて居たのですよ——氣がつきましたか？」

伸子は、頭を振つた。

「いゝえ」

「私に對しては丁寧で、些も非難出來ない様子でした。けれども貴女にはずつとぞんざいに、片手でしましたよ」

ミス、プラットのところへ行くと、何か、此に類した話が出た。此迄一番樂しかつた時間が、さつぱりしないものになつた。ミス、プラットが、佃によい感じを持たないと云ふ以上の自分に對する偏愛が、伸子には苦しかつた。女らしく行届いた殘酷さで、佃の細かいあらまで云はれると、伸子は却つて反抗心に燃やされた。

紐育市からフランスへ出征して居た兵士の凱旋當日であつた。

寄宿舍は早朝から、殆ど空になつた。伸子は近頃、さういふ事に餘り興味が持てず、寄宿舍にとつて未曾有な朝の靜寂を樂しみ乍ら、部屋に殘つて居た。窓から見下す街路も人氣なく、日曜の朝のやうな感じであつた。伸子は、編み下げのまゝの髪の先を指に巻きつけ乍ら、窓際に佇んで、祝日らしい戸外の景色を眺めて居た。すると背後で、扉を敲く音がした。咄嗟に、佃が來た知らせかと思ひ、彼女は困却した。十一時頃から彼等は、ハドソン河を彼方に溯つて、永い散歩をしようと約束して居た。扉の方に歩き乍ら、伸子は、

「お入りなさい、——どなた」

と、聲をかけた。

「いらしたのね」

扉をあけて現れたのは、高崎であつた。

「まあ珍しいこと！ どうぞ」

高崎は、研究が家政學であつたし、或亞米利加人の家庭に寄寓して居たりする關係上、平生親しく往來するといふ間でもなかつた。

「よく早く御出かけんなつてね」

「えゝ。私この位普通ですわ——ついそばを通つたんで、およりして見ましたの」

高崎は、伸子のすゝめるまゝに外套の襟を開

いて、椅子にかけた。
「——外套なんぞ、脱いでしまひんなつた方がいいわ」
「えゝ、でも——さうも御邪魔して居られないから……」
小柄だが、たつぷりした黒い髪や、濃い眉、意志的な大きい口元など印象づよく、美しいところさへある顔で室内を見廻したり、伸子の健康をほめたりして世間話を始めたが、直子の様子には、何だか樂々しないところがあつた。何か心の中には、考へて來たことがあつて、それを切り出す前置きの爲だけに、實際の興味は大してないことを喋つて居る、其那ところがあつた。不安定な相互の心の狀態で數分經つと、直子は、
「實はね」
と、本論に入つた。
「今日およりしたのは、久しくお目にかゝらなかつたこともあるし、旁々少し、私の老婆心をきいて戴かうと思つて上つたんですよ」
「さうお、有難う。——如何那ことなの？」
「大したことぢやないんですけれどね……」
直子はその時、感情の動搖をまぎらさうとするやうに、手をあげて、一寸帽子をなほし乍ら云つた。
「貴女——佃さんと大變お親しくなすつて被在るんですつて？　此頃」
「さうよ」
「其について——貴女もきつと御承知でせうけれど、一年ばかり前、私大變佃さんに、いろいろ御厄介になつて居た事があるんですよ。勿論金錢上の事や何かではありませんけれどね、學課の手傳ひをして戴いたり、仕事を紹介して戴いたりして……」
直子は、云ひ出して仕舞ふと、彼女の確りした氣象を現して、澱みなく進んだ。
「本當に此方へ來てから、やつと御近づきになつただけのお友達ですけれど、年もとつて被在るので、私叔父さんにでも頼るやうな氣がしましてね。——かなり永いおつき合ひでしたから、私は、佃さんが人から彼此云はれなさつても、決して下等な方ではないのは知つて居ます。アパアトの部屋で、夜おそく迄二人ぎりで居たつて、其はちやんとしたものでした。其は私、誰の前でも、公明正大に云つて上げられるんですよ」
伸子は、聞いて居て、微笑ましい心持がした。求めもしないのに佃に與へられた信用狀を、企んだこともあらう。直子が佃の行狀を保證することで、間接には自分の潔白さをも力說するのが、伸子に、自ら微笑を齎したのであつた。伸子は、優しく相手の言葉を承認した。
「其那ことについて、私何とか思つたことはなくてよ」
直子は、輝きの出た眼で伸子を見た。
「貴女はさうですとも。わかつて居ますわ。ただ當時、隨分迷惑な噂を立てられたのでね、私自分に疚しいところは一點もないけれども、佃さんにもお氣の毒だし、自分も困るから、一先づおつき合ひを御斷りしたんですよ——お話しようと思つたのはね、佃さんにはね、私、今だつて好意を持つて居ますが、あの人、友達以上に入つてはいけまい、と云ふことなの……貴女がよ——きつと幸福に行きませんよ」
「さう？　何故」
「何故つて……私さう思ふんですもの」
「どんな根據で？」
直子は、自信ありげに答へた。
「あれ丈御交際しましたもの、少しは解つて居ますわ、決してわるい方ではありません、けれどもね……私はどうしてもさう思ふのです」

伸子は、云つた。
「貴女がさう仰云るのも、私には解る氣がしてよ。あの人の性質の裡にあるものがね。――さうでせう？　其はよく判つて居るのです。――私何も彼も分らない程、上氣せ切つて居るわけぢやないんですもの。――でも、貴女如何お思ひになつて？　私には一つの信仰があるのよ。――愛は人間を變へると思ふのです」
直子は、急に、漠然とした掴み得ない眼付で伸子を見た。
「……さういふことも、そりやあるかもしれないけれど」
「私きつとあると思ふの――つまり、境遇や何かの爲に下積みになつて居たいゝものが、眞當な光で育ち出すといふわけね」
「……佃さんは御親切だし……それは私たつて、あの方の人柄は認めて居ますわ」
伸子は熱心に云つた。
「私は、それに、たゞ元氣で快活で實際上手な生活の才能は、どうしても好きになれないのよ。人間の□しさも抜けて來る人でなくては詰らないわ、暗いところ、淋しいところ、其處も知つて居るか、眞面な時にさ、幸福ならし、さ、そこも判る……僕はそれは、暗い不闇にありすぎるといふ状態でせう？　私、あの人が其處を抜けて、段々確りした高い明るさを持つ。それをまるで期待して居るわけなの」
「……………」
直子は、さういふところへ來ると、伸子の心持が見當つかないらしかつた。彼女は溜息をついて、ぼんやり頷いた。
「でも、何故私のところへ、かうやつて、佃さんは駄目だつて云ふ方ばかり、來て下さるんでせう……あのひとの方も、こんななのかしら」
伸子は呟いた。
直子は軈て、自分の云ふ丈のことは云つたといふ實際家らしさで、袋や手套をかきよせた。
「兎に角、私いつかつから、思つて居たことを聞いて戴いて、さつぱりしたわ。用ひて下さらうと下さるまいと、矢張り申して仕舞はないうちはね」
直子は片手の手套をはめ終ると、
「とんだお邪魔を致しました。では又いづれね」
と、伸子の手をとつた。
「さう？」
伸子は、何だか變で、間の抜けた返事をした。
直子は、しやん／＼した足どりで廊下へ出た。
「左樣なら」
「さやうなら」
直子は、自分の良心的任務を果した、といふ信念に滿ちて居る風で、右手に袋を抱へ、左手を振つて、廊下を遠のいて行く。――角を曲る迄其後姿を見送つて、扉をしめると同時に、伸子は、何といふことなく、力無い歪んだ微笑を口邊に浮べた。
二週間もたないうち、伸子はもう一つ、不意な訪問を、不意な人から受けた。
或午後、一枚の名刺が渡された。田中寅彦と云ふ、伸子の父の友人の子息であつた。彼女は、其青年とは初對面であつた。伸子は、應接間へ降りて行つた。彼は、四角い室で待つて居た。いかつい、ぞんざいな調子で初對面の挨拶をすますと、彼はいきなり怒つたやうに訊ねた。
「きいふ或處で、貴女が佃君と婚約をするとか仕たとかいふ噂をききましたが、事實ですか？」
何用かと思つて居た伸子は、驚いて青年を眺めた。皮膚の淺黒い、□□□□的に眉の吊り上つたこの青年が、其事に何の關りがあるのだらう。
伸子は、不快を感じ、冷やかに答へた。
「何か貴方に關係がおありになりますの？」
「關係なんぞあるもんですか。僕はたゞ、自

分の親父と貴女のお父さんとが友達だと云ふ縁だけで來たんです——困つて居るのに注意をして上げないのは惡いと思つて。——佃君は傍觀者ですよ」

仲子は、正面から凝と田中を見つめた。

「何故さうお想ひになりますの？」

「さう思ふのではない、さうなのです！」

此等の訪問者以上、仲子の神經を疲らせるのは、佃の、再び懷疑的になつた感情であつた。グラント將軍の墳墓の周りを歩き乍ら話した夜の、熱の籠つた確乎たる彼は何處かへ消失した。佃は却つて、前より恐ろしく感傷的になつた。仲子は、外界から來る不安や不愉快さを、彼との對座で忘れ、互に勇氣づけようとした。

「ね、本當に私共は好い生活をしませう、自分達さへ動じずにやつて行けば、何が來たつて安心よ。ね、助け合つてよく仕あふ生活をしませうね」

佃は、喰ひつくやうに仲子を見守つた。そして、沈鬱極まる調子で呟く。

「どうかさうしたいものです。然し……分らない……時が萬事を證明するでせう。それまでば（二十一字略）です」

「——どうして？ 私共はもう決心したのぢやないの？ 決心したら決心し甲斐のあるやうにやつて行く丈ぢやありませんか、卑怯よ、今更そんな……」

彼等は、互に片時も離れられないやうに、益々執着を深めつゝ、絶間なく、さういふこぢれた熱情の衝突から涙を流し合つた。

復活祭が過ぎ、北方の氣が遠くなるやうな五月が來た。樹々は一齊に新綠に包まれ、溢れる日光を受けて歡び戰いた。空氣には、朝も、晝も、夜も、鼻翼を擽る若葉の香が滿ちた。郊外の林間では、腐つた去年の落葉の下から、種々な野花が吹き出した。夕暮、眠い靄がその上をこめると、沼地で、シュワア、シュワア、シュワア、シュワア、馬の毛の弓で胡弓をこするやうな、小動物の合奏が起つた。ツチョツチョッ、チュル……行々子が囀る。自然は夜ぢう、氣ぜはしい春のざわめきを聽いた。

仲子は、初夏の波に押されるやうに、自分達の運命に對して性急になつて來た。彼女は、よく夜通し眠らなかつた。

仲子は、大學の永い夏期休暇が始まるとすぐ、佃と一緒に、或湖畔の避暑地へ出發した。彼女は、その計畫に不賛成であつたミス、プラットや寄宿舍の監督等との、一切の交渉を、非難を覺悟して絶つた。

仲子等は、十月近くまで湖畔に居た。都會へ歸ると、彼等は、自分達の結婚を知人の間に通知した。彼女にとつて記憶すべき其日は、秋の細雨が市街を濡して居た。彼等は、晩餐に、ブロウドウェイの或料理店へ行つた。彼等は言葉寡に、食卓の上の飾電燈の輝きを見守つて居た。すると、仲子のすぐ背後の仕切りの向う側で、無遠慮な男の日本語がはつきり聞えた。

「おい、佐々仲子が結婚したつてさ」

別の嗄れた聲が應へた。

「へえ、……一體どんな奴だい」

「狆くしやんさ。——佃とか何とか云ふ亞米利加ごろとくつついたのさ！」

——仲子は、高く酒を啜る音を聞いた。

三

一

雨夜で、壁に行燈形の電燈のついて居る玄關

は陰氣であつた。古びた天井が低くかぶさるやうで、薄い絹の靴下一重の下に、疊がつめたくかたく觸つた。如何したのか誰一人出て來ない。屏風箱の置いてある狹い板敷へ來かゝると、ひよいと突當りの障子の戸から、女中の不用意な顏があらはれた。同人、父を先立てて來るのを認めると、吃驚し拔いたやうに、

「まあ！」

挨拶もせず、いきなり奥へ驅け込んだ。さらさらと爪先を摺るやうな聽きなれた母の跫音がした。仲子は、母が床についてゐると許り思ひ込んで居たので、その輕い速い熱心な足どりを聞きつけると、自分が歸つたときいて、元氣の餘り立つて來たのではないかと、ぎよつとした。仲子は、急いで厚い扉を開けようとした。向う側からも急にハンドルをガチャ／＼云はせ、戸が開かれた。女中と重なり合ふやうにして、多計代が出て來た。

「まあ如何したえ、仲ちやん！」

感に迫つた聲なので、仲子も言葉が出なくなり、母の手を握つた。

「大丈夫なの？ 起きていらしつて」

「あゝもう大丈夫だよ。――寒かつただらうね、……それでもまあよく無事で、」

仲子に、

「さあお床へ行きませう」

と、お召のどてらを羽織つて居る母の背中に手を廻した。

「もういくらでも悠くり話せるんだから」

母は、仲子が輕く押すのを拒むやうに、足に力を入れた。

「本當に大丈夫なの、心配しないでも。――大抵起きて居るのだから」

「――だつて――」

仲子は、疑問を感じて母の顏を見た。母は少し窶れ、髮も引つめにして居る。仲子は、小聲で訊いた。

「赤ちやんは？」

母は、微かに間の惡さうな表情で、

「いゝえ、其がね」

と、低いなりに確り云ひかけたが、

「いづれあとですつかり話すよ」

と囁くと、急に晴れ／″＼聲を張り上げて、下の娘を呼んだ。

「つや子ちやん、つや子ちやん、何處に居るの、お待ちかねのお姉ちやまがお歸りですよ」

そして、先へ立つて、父や弟達も居る部屋の戸をあけた。

「可笑しな子だこと、今朝から彼那に大騷ぎをして待つて居たのに。――火のそばへ行くといいわ。生憎雨降りでねえ、今日は」

仲子は、自分の生れた家へ、一年ぶりで歸つて來たのであつた。彼女は、座敷や廊下を歩き乍ら、何故だか親類へ客にでも來たやうな、一種のそぐはなさを感じた。仲子は、暖爐わきの長椅子にかけた。相對したもう一脚の方に父、弟が並んで居た。久しぶりで會つた懷しさは、互の胸に流れ合つて居たが、さて何から切り出さう？ 仲子は笑ひ乍ら、

「どうした？」

と弟に云つた。

「ふ、ふ、ふ」

僅の間に青年らしさの加はつた彼は、何か惡さうに、はにかみ笑ひをした。

父は、着物を着換へに立つた。母は、卓子の横に坐つて、食事の指圖をして居る。其の後の壁には、鮎の額が懸つて居る。其繪も、置棚の隅に積んであるビスケットの罐の工合も、昨年の七月、すが／＼しい或朝、遽しく眺めて出發した時のまゝのやうだ。其だのに、人と人との間には、やはり、口に云ひ盡せない多事な一年の月日が横はつて居るのを、仲子は感

じた。
大體、伸子の歸朝は、彼女自身にとつてさへ突然な出來事であつた。彼女はその年の内に歸らうなどとは、夢想もして居なかつた。彼女はつい十月の終りに、佃と結婚した許りであつた。大學に近い質素なアパアトメントで、新しい生活が、やつと始まつた處であつた。結婚に關して、兩親との間に繁雜な書簡の往復があつた。其中に紛れ込んだやうな一通の手紙が、伸子を驚かした。父から、母が來る十二月中に出産の豫定である事、兼て重症の糖尿病がある爲、醫師も營養については決して樂觀して居ない事、此際伸子が彼等の手元に居ないのを遺憾とする事、などを告げて來たのであつた。

伸子は、當惑した。彼女は兩親を愛して居た。彼等が自分を求めるのを、迚も冷然と排ける事は出來なかつた。同時に、佃との生活に十分未練があつた。佃は、今、C大學を去る事は不可能な狀態であつた。若し歸るとすれば、伸子は獨りで歸らなければならないのであつた。

彼女は、種々考へた末、到頭歸國することにした。自分と佃との別れは、これが最後となるのではない。けれども、母の命を誰が豫言出來るだらう。

伸子は、無理をして船室をとつた。十二月の荒い太平洋を横切つて進み乍ら、彼女は自分を待つて居るだらう母と、外國へ遺して來た佃の事とを思ひつゞけた。淋しい航海であつた。日本へ近づくにつれ、不幸が待つて居はしまいかといふ不安が募つた。横濱に入港する二日前、伸子は入港時間を知らせ旁々、安否を問ひ合せる無線電信を打つた。

丁度其夜、船では舞踏會があつた。十時過ぎ、伸子は、サルーンの胸欄から、下で舞踏する人々を瞰下して居た。船は盛に搖れた。音樂の間にドドドウと舷を打つ重い濤音とともに、ギギギと船全體を軋ませ、ぐうつと右にロールした。踊り手達は華奢な靴の踵の上で辷つた。ずる／＼辷り乍ら、女達は、覺えず對手の男に捉まつた。男は脚を踏張つて對手を支へ、踊りを忘れてどよめいた。不意なその辷りが餘興で、その度に崩れるやうな笑ひ聲、陽氣な女の叫び、拍手が人々の裡からどつと起つた。船内の廣間は暖かで華やかで、亢奮して居る。その浮々した歡樂と、外の暗い冬の海の咆哮とを對照して、伸子は鋭く感じた。

一人の侍僕が、その室の入口に現れた。手に紙切を持つて居た。夕刻から、返電を心待ちにして居た伸子は、その方へ注意をひかれた。侍僕は暫く踊る人群の間をぬけ、再び元來た處から外へ出た。手に紙片を持つたまゝだ。伸子は胸欄に沿つた低い椅子から、立ち上り、大階段の上まで出て見た。兩腕をぶらさげ、歩調に合せて器械にその體を、輕く肩で振り乍ら階段を登つて來た侍僕は、そこに佇んで居る伸子を見ると、職業的に容を改めた

——佐々さんで被在いますか——

——電報で——

——只今受信いたしましたさうです」

「どうも有難う——」

伸子は、直ぐそれを開き、立つたまゝで讀んだ

——ハハアンザンアンシンアレ——母安産安心あれ——。伸子は、自分の耳に、急に強く、空虛に、舞踏曲が響いて來るやうに感じた。二週間前にこれさへ來たのだつたら！　然し、伸子は自分の感情を克服した。

母の顏を見る迄、伸子はその電報の打たれた日に、弟か妹かが生れたもの、と信じて居たのであつた。

窶れこそ見えるが、勿論母の樣子は、一昨日新たな子を迎へた人ではなかつた。そして、何故彼女は、伸子がその爲許りに、彈んだ呼吸

も聞えるだらう程せき込んで歸つて來たのに、あゝ輕く、何氣なく云ひ紛らして仕舞つたのだらう。仲子は家ぢうの空氣に、急に歸つて來た者を整はない準備で迎へるざわめきばかりを感じた。母には、何の爲に仲子が今頃歸つたか、解つて居るのだらうか。——

仲子は、膝の上に抱き上げて居た妹を下した。彼女は、外に洩されない不滿の吐息を深く内に吸ひ込みつゝ云つた。

「さあ——そろ／＼着物着換へようかしら……」

彼女は立ち上り、外套にくるまつたまゝで居る自分を見廻した。

「これぢやあくつろがないし、何だか變だから。——私の着物は何處？」

二

「何しろ私が寢て居たから、どうも手の廻らないことと云つたら、お話の外だよ」

多計代は、卓子に兩手をついて立ち上つた。

「さつき温めて置くやうに云つたのだけれど、どんな有樣だか、」

仲子が出發する頃に普請中であつた部屋部屋が、すつかり今は住み馴らされて居た。母の居間に、手綺麗な四疊半になつて居た。低い茶室好みの襖が二人の背後で閉まると、仲子は、

「ねえ、どうしたの、一體」

と云ひ出した。

「何だか行き違ひがあるやうね」

炬燵の火加減をなほすのにうつむいたまゝ、多計代は答へた。

「あゝ。——實はお前が、此那急に歸らうとは思つて居なかつたのでね」

「どうして？」

仲子は意外なことをきくと思つた。

「あの手紙を戴くとすぐ電報を出したのに、着かなかつたの」

「私は父樣が其那ことを云つておやりになつたなんてこと、ついこの間までちつとも知らなかつたのさ。——けれども、今度こそ覺悟したよ。豫定より俄に早くなつたので、いざと云ふ時、産婆さへ來て居ないと云ふ始末だつたもの」

「いつだつたの？」

「十一月の二十八日——一月早かつた譯だね」

「……………」

仲子は何も知らず、其日、サンフランシスコに着いて居た。

多計代は、默つて居る仲子をしげ／＼見ながら云つた。

「でもまあ、仲ちやんもよく元通りになれたね、彼方で病氣をしたと聞いた時の私の心持つたらなかつたよ。あの時は、此方でも、家ぢう枕を並べて居る有樣でねえ」

多計代は、一寸言葉を途切らせた。

「其にお前……追々話して、お前の考へも聞かなければならないが……ひどい心配をしたよ」

仲子は、顏を赧らめた。

「遠くていろ／＼はつきりしなかつたから」

「其もさうだし、第一佃さんといふ人のことは、父樣から一寸伺つて知つて居る丈ぢやあないか、それもあゝいふ人のいゝ方のおつしやることだから當にはならず、妙なことは聞くしさ。——どつちみち歸つたら判ると思つて、本當に、私は待ちかねたよ」

母の調子は慈愛深く、恨み乍ら許して居る暖かさが籠つて居た。仲子は、初めて、自分が想像して居たとは全く違ふ意味で待たれて居たのを知つた。何だか家の氣分が、自分の心持としつくりしなかつた理由が氷解した。それと同時に、今迄、幾分[illegible]的な鋭さで緊張して居た仲子は、親の溫[illegible]湯のやうに自分を圍むのを感じた。多計代は、娘に對するといふより、寧ろ年下の若い女に[illegible]心ある揶揄をする[illegible]と云ふ

風に、笑ひを含んで云つた。
「――それでもよく感心に、一人で歸る氣になれたね」
「だつて大變だと思つたし……」
伸子は、母に面と向つて、佃の名を口に出す事を變に極りわるく感じ、省略して云つた。
「今はどうせ大學を離れられなかつたから」
「一人で歸つてよかつたよ、いろいろ相談しなければならないからね、家としても重大な問題だから。父樣はあゝいふ方だからお前には何にも仰云るまいが、大變だつたのさ、私ばかり――内と外でね」
多計代は、伸子が脱ぐ薄いブラウズや可愛いレース飾りのついた細々したものを、一々手にとつて眺めた。
「女のものは何處へ行つても綺麗だね、これは何と云ふもの？」
彼女は、出發の時、自分も一緒に手傳つてトランクにつめてやつたものを、伸子が身につけて居たのを認め、懷しさうに云つた。
「おや、まだそれを持つて居たの？」
「相變らず……着物なんぞ、向拵へなかつたのよ」
「私の上げた短册はどうなつたらう」
「あるわ」
多計代は、伸子が出かけるといふ朝「かなし子よまさきくてあれ海遠くわけへだつとも母見まもれり」といふ歌を一首、餞別として呉れたのであつた。
「奧樣」
女中がそのとき、襖の外から母を呼んだ。
「そろそろ御飯の御支度が出來ました」
「行かうぢやないか」
「えゝ。――でも赤ちゃんを見たいわ、前に」
「ねんねだらうよ」
母は先に立つて、廊下を一曲りした座敷の唐紙を開けた。電燈を一隅によせて、薄暗く覆ひのしてある下で、看護婦が洗濯物をたゝんで居た。小さい枕屏風にかこまれて、針さしのやうに膨れ上つた赤い蒲團がある。伸子は、抜足をして近より、膝をついて、すやすや睡つて居る嬰兒の顏を見た。小さくて、母似か父似かさへ判らず、妹といふ感じが適切にしなかつた。
彼女は、背後からかぶさるやうに中腰になつて覗き込んで居る母に、顏だけ仰向けて囁いた。
「名、何ていふの」
「ゆき子としたのだけれど――」
「お乳くさいのね」
皆の居る處に戻ると、父は機嫌よく冗談を云つた。
「やつと、出ましたね、大分因縁があつたと見えるな」
伸子は次第にくつろぎと樂しさが心や體にしみ込むのを感じた。

三

金屬の何かを、小さい槌ででも叩いて居るらしい、澄み渡つたカン、カンカンカンいふ連續的な音で、段々伸子は眼を醒した。人の手先が細かに動いて發する其音には濃やかさがあり、その音の爲に却つて朝の閑寂が増すやうであつた。伸子は、響の工合で、外は晴れて居るのを知つた。
今頃は、佃が何をして居る時分だらう。一夜明けた今朝は、自分の歸つて來た意識が鮮やかに迫つて彼女は淋しい心持がした。
「お早う」
母は、食事部屋の卓子で手紙を書いて居た。
「どうしたい、よく眠れて？」
多計代は筆を置いて、硯を片よせ乍ら云つた。
「久しぶりだねえ、此那にして御飯一緒にたべ

るのは。世間は淋しい位だよ、皆留守になつてしまふからね。——何をたべるかい」
「母様は何をあがるの」
「私はパンよ、この頃」
「ぢやあ私もさうするわ」
仲子は昨夜、母と床を並べて寢た。彼女達は眞暗な中でいろ〳〵話した。今朝も、母の話題は無限らしかつた。仲子も胸一杯あることはあるのだ。けれども、それ等はどれも母の經驗外のものだ。まして、
「ねえ母様、あの人今、どうして居るでせうね」
などと云へようか！　一番云ひたい事を控へて居る爲、仲子は窮屈であつた。多計代は、久しぶりで話對手を取り戻した悦びで、仲子のさういふ感情に無頓着に、さも愉快さうに云つた。
「可笑しいぢやないか、父様つたら今朝頻りに、仲子が昨夜何を話したつておきゝなさるんだよ」
「さうお、お父様を仲間はづれにしたからよ、きつと。——何て仰云つて、それで」
「何つて、話したことを又話して上げたの」
「滿足なさつた？」
「特別に私と寢たいつて、お前が云つたらう。だもんで何か——お前が身持にでもなつたのかと思つたつて仰云るのさ」
多計代は、さう云ひ乍ら、何と突拍子もない笑ひ話ではないか、と云ふ風に笑つた。
仲子は妙な苦々しさを感じた。若し、實際自分がさういふ體であつたら、このやうに、其那ことはあり得ないと思ひ込んで居るやうな母は、如何な顏をするであらう。彼女は、母の微妙な言葉の抑揚から、はつきり、自分の結婚が如何とられて居るかを理解した。昨日船まで出迎へに來て呉れた父が、そはついて、人目を憚るやうにして居たのと思ひ合せ、仲子は厭な心持がした。
「本當に世間なんて厭なものさ、お前のことが知れると、津村の奥さんなんか、ふだん足踏もしたことないのに早速やつて來てさ、それ見たことかと云はんばかりのことを云ふしね。會はなければ會はないで、猶更變に思はれるから、大儀なおなかを抱へて、苦しいのを堪へて、一々會ふ思ひつたらなかつたよ」
「あの方は我まゝ者ですからつて、泰然として居て下されば いゝのよ」
多計代は、仲子がさう云つただけで、自分の受けた苦痛に對して感謝しないのが、不滿らしかつた。むつとした調子で云つた。
「其はお前は遠くに居るんだし、すき勝手をして有頂天になつて居たんだから、泰然とでも何とでも出來るだらうが、私共は左樣簡單には行きませんよ。これだけにして居れば、少しは體面といふこともあるからね」
仲子は、兩親の心遣ひをおろそかに思つて居る譯ではなかつたが、さう云ふ風に云はれては心外といふ心持がした。
「いろ〳〵御心配をかけたのは本當に惡うございました。けれども、私は母樣をないがしろにして、あゝしたのではなかつたのよ。他にしかたがなかつたから——」
「さうは思へないね。すきな者なら好きでいゝから、もう少し、私共の顏を立てゝ呉れる方法もあつたらうぢやあないか。第一、私は一度も會つたことも無い人だし——眞に——」
多計代は深い疑ひを聲に現して云つた。
「その佃といふ男が私には疑問だよ。——私ばかりぢやない、皆疑問をもつて居る」
仲子はもういつの間にか、佃は「さん」づけにする價値ない者、と心にきめたやうに、佃、佃と呼び捨てる母の口調が、悲しく可笑しかつた。

「どうして？　細かく申上げたぢやあないの」
母は、鋭く仲子を見た。
「さうさ、お前は正直に云つてよこしたらう。けれども其はお前の見た――見たと思ふ佃さんだらう？　佃さんがお前に話して聞かせた事、だらう？　其が間違ひないその人の全部かい？」
仲子は、烈しい母の言葉を受け留めるやうに答へた。
「あの人は私に譃はつかなくてよ」
「どうかさうであるやうに祈るよ。一生のことだからね。――私だつて、お前の愛す者はそのまゝ信じ度いさ、お前が愛すやうに愛しても上げたいさ、出來ることならね。けれども、疑ひがある以上、私はその疑ひがすつかり晴れる迄は信じませんよ。――私の性質だから。――これまでだつていつも、私一人が憎まれものになつて、種々あぶない處を切りぬけて來たのだ」
仲子は、きつぱりした母の語氣に一種の壓迫を感じた。彼女が自分の意力で、今度のことまで、壞せば壞せさうに信じて居るらしいのが、仲子を不安にした。仲子は、反問した。
「母樣には何が一番疑問なの？――若し説明できる事ならした方がいゝわ。何故と云ふと……」
仲子は、豫期して居たものに愈々ぶつかつたのを感じた。
「今度のことは私、遊びではないの。萬一、母樣と私との意見が違つても、私の決心は變らないの。だから出來る丈解り合ひませうね」
多計代は、紅茶をさして、一口飲んだ。
「……いつかは話さなければならない事だから、それもよからう――皆は、お前が騙されて居ると云つて居るよ」
「あの人は、自分に何もない事を、初めから隱しては居なくてよ」
「隱さないといふ事で、お前の子供らしい歡心を買つて居るのさ」
「まさか！」
「おやあ何故、ちやんとした紳士らしく、お前が何と云つても、一先づは歸つて來てだね、私共の承諾を得てからにしないのだえ。――相當な親がついて居るから、どつちに轉んでも損はないと思へばこそ、お前を捉まへたのだらう」
仲子は、母の手をとつて、自分の手の中へ押しつけた。
「其は思ひ違ひよ、絕對に。それに斯ういふ事柄は、一方だけのものぢやない、私だつて、責任は半分あるのよ。第一、母樣のやうに考へたら堪らないわ、私なんぞ、その爲に騙さうと思ふやうなもの、何も持つてやしないぢやありませんか」
「……ものには程度があつてね、零に比べれば一でも、ある部になりますよ」
多計代は、手をとられたまゝ、氣を許さず、じろじろ仲子の顔や髮を眺めて居たが、やがて、
「だがまさか、大學に居るといふのは譃ぢやあるまいね」
と云つた。
「え？」
「いゝえね、佃といふのは、洗濯屋だつて云つた人があるからさ」
仲子は、深い憤りを感じ乍ら、これには眞面目に對手されず、
「何とも分らなくつてよ」
と答へた。
「若しかすると親類ぢうの洗濯ものを買ひしめる魂膽かもしれなくてよ」

四

仲子は、自分が變つて歸つて來たのを感じた。仲子の心と生活の中には佃といふものが加はつた。

兩親の方でも何かさつぱりしないものがあつて、元の伸子に對するやうな心持になり切れない。さういふ日が續いた。

日が經つにつれ、佃に對して多計代の感情が落付かず、混雜して居るのも、前後の事情に照せば無理ないと、伸子にも思へるやうになつて來た。伸子が平氣で云つてよこした事、佐々が話すこと、其等は、新聞だのその他から彼女の耳に入る噂とは、全然性質が反對なものであつた。自分の目で佃を見たことのない多計代が、その噂について彼を判斷してよいか分らず、彼女に知れて居るのは良人の好人物さや伸子の世間見ずで、一本氣な點ばかりであつて見れば、つい、一番[illegible]し易い佃を、不信と惡意とで考へる方に傾くのも、一應止むを得ない勢であつたらう。

けれども、伸子にして見れば、母が、娘の周圍に現れる男と云へば、きつと惡黨でもあるかのやうに、淺薄な猜疑心を抱くのに[illegible]しかつた。[illegible]、社會的常識を持たない爲、多計代は一層、彼女の疑惑を深めるのだと思ふと、伸子は公憤を[illegible]。

再び伸子が手許にかへつたことは、彼女にとつて勿論悦びなのであつた。差し向ひになると、伸子が留守であつた間の寂しさや苦勞を、話さずに居られないらしかつた。話せばどうしても佃のことに觸れずには居ない。佃の名が出ると、多計代は平靜を失つた。

父が會社に出勤した後の永い晝間は、伸子にはかなり重荷となるのであつた。

「伸ちやん」

多計代が居間から伸子を呼ぶ。伸子は大抵、自分の部屋に居た。母の憚りない呼聲が、ぼんやり彼女に迷惑な心持を與へる。が、伸子は直ぐ立つて行き、そして、母の居間の唐紙をあけた。

「何御用」

多計代は、膝の上に染物の色本を擴げて居た。彼女は明るい障子の方に本を近づけ、頻りに色を見わけ乍ら云つた。

「喜久屋が來たんだがね」

「何をお染めんなるの」

「山繭が一反あるから、羽織にでも仕ようかと思つて——どうも羽織は近頃と違つて、染の[illegible]いやね、氣に入つた色が無いねえ」

多計代は軈て、思ひ出したやうに伸子に訊ねた。

「さう云へば、お前の持つて行つた紫友禪の着物はどうなつたえ」

「あるわ」

「もうあれも着られまい、いい模様だが——」

「第一、色合に[illegible]、」

「どうする積りだえ、着物だつて少しはどうにか仕なくちやあなるまい」

「よくつてよ、……いらないわ」

「いらないたつて、さうもゆくまい。……ちつと、またあこれにでもして置かうか」

多計代は、女中に白地の反物と色本とを渡し、簞笥をしめ乍ら、次第に考へが擴つてゆく口調で呟いた。

「——一體、佃さんのお國はどんな處なんだらうね」

「さあ……何故？　まだ行つて見ないから私も判らないわ」

「だつてさ、妙なお國風だね、[illegible]やつてお前が歸つて來たら、一應何とか御挨拶があつて然るべきだらうと思ふね。——それとも何かい、佃さんは[illegible]に云つてやらないのかい」

「[illegible]こと知らないてよ」

多計代は、自尊心を傷けられたやうな皮肉さで云つた。

「——嫁の親から御挨拶申し上げる迄、默つてい

らつしやるといふわけだらうか――
「何と云つて來ていゝのか、見當がつかないから默つて居るんでせう。當人が歸つてでも來れば、きつとちやんとするでせう」
　伸子は仕方がないので、呑氣らしく云つた。それが多計代を不快にした。彼女は、
「お前がた同士は、それでもよからう、どうせ萬事普通と違ふのだから――」
　ハタンと環を鳴らして簞笥をしめた。
「けれども、私はこの間から考へて居るんだが、人並はづれた事が必ず正しいこととは定つて居ないからね。奇ばかり衒ふのはたゞの迷惑だよ」
「奇なんぞ衒つて居やしないわ。たゞ母樣と私とは性質も違ふし、ものの考へやうも違ふといふ丈ぢやないの……」
「おやあ、お前は一から十まで自分のすることは正しいと信じて居るのかえ」
　豫想もつかない事から、斯ういふ感情的な議論になることが多かつた。伸子も初めは、いつも節度を保たうと努めた。けれども、多計代の熾烈な、對手を容赦しない性格は、最後には伸子をも、むきにさせずに置かなかつた。むきになると、伸子も母同樣、屈しない激しい生れつきを現すのであつた。
　一月下旬の或日の事であつた。
　小さな事から、又議論が激して來た。伸子は殆ど困惑して云つた。
「私が歸つてから、同じことばつかり繰返して居るやうなもんだわ。――もうやめませうよ、ね。……私、母樣の御志はよく判つてゐます。けれども――斯う云ふ風に話すのはやめませうよ」
　すると多計代は上氣した頰で突つかゝるやうに、
「お前も變つたね――元は決して斯うではなかつた」
　と云つた。
「お互にどこまでも、意見を交換するだけの眞心と純粹さを持つて居た。それがお前の身上だつた。誰の感化だか知らないが、新しい態度だね……」
　伸子は胸の何處かを小突かれたやうに、感情が燃え立つのを感じた。多計代は、女ばかりか――或は娘に對して母ばかりが心得て居る本能で、いつも斯ういふ風に巧く、伸子の急處に毒針を突き立てた。そして、對手を猛々しくする。然し、その日は、伸子もやつと自分を制して答へた。
「私は決して責めるんぢやないの、たゞ、議論のための議論のやうなことは仕ますまいと云ふの」
「其が勝手だと云ふんです――自分は散々好き放題をして、親の顔に泥を塗る。然しお前は冷靜で居ると、其那態度が出來る義理かえ、抑々苦しい思ひをして、何のために外國へ遣やつたのか、少しは私の身になつても考へて見るがいゝ」
　涙をこぼし、口惜しさうにその涙を拭く多計代の、年の窶れの現れた指つきを見ると、このやうな事で云ひ爭ふ母娘の惨さが、伸子の心に徹へた。彼女は、向ひ合つて腰かけて居たのを立つて、母の膝の下に、絨氈の上に坐つた。そして、賺めるやうに、自分を理解させようとするやうに云つた。
「ね、母樣、それぢや一つ佃といふ人間を離れて考へて見て頂戴。どつか母樣の知つていらつしやる人の中で、私が愛してもいゝとお思ひなさるやうな人があること？　これまで私の周りに現れた人と、一人でも自由に交渉させていいとお思ひになつたことがあつて？　ないでせう。どんな人だつて、その人が私と深い交渉を

持ちさうになると、母様の目には價値ない者となつて仕舞ふんですもの」
「……大變な悪漢ですまないね」
ふいと傍を向きさうになる手をつかまへ、伸子は、
「其の意味ぢやなく、さ！」
と云つた。
「母様は大變、公平に云つて、一種の理想家すぎるのよ、私のことゝなると。──ね？ 私の仕事とか成功とかについて、どんなに御自分が澤山の希望をかけていらつしやるか──それは考へて下されば分るでせう？ 母様は、或點で御自分の生活では出來なかつたことを、私にさせたいと思つていらつしやるのよ、ね？ さうでせう？」
「それはさういふところもあるだらう」
多計代は、これに對しては、憤りも出來ないといふ風に答へた。
「大いにあるのよ。母様には、戀愛なんかから超越して、獨り高く澄したと云ふやうな、私を見て居るのが滿足なやうなところがあるのよ」
「一生を獨りで居ろと云ひやしません。いゝ人さへあれば、お前を崇敬して呉れる人がありさへすれば、いつだつて私はよろこんで迎へますよ」
「……結婚する氣持が──多分母様とは違ふのよ」
「それは仰云るまでもなくわかつて居るよ」
辛辣な調子に戻り乍ら、多計代は口を挟んだ。
「お前の考へはボルシエビキだ」
「──普通、娘さんはお嫁に行つて落付いて、良人と同化して、最も現在の社會に安定な生活を得ようとするのが目的でせう？ だから同じ階級、同じ傳統をもつた家、又は少しか或は澤山、運命が許す丈成り上ることを條件とする──違ふといふのはこゝなの……私は自分が育つたやうにして育ち、自分が見て來たやうなものばかり見て來た、その親達も母様達とそつくりだといふやうな男には、ちつとも興味を感じない。それどころか不安よ。だから私が惹きつけられるときは、いつでもきつとその點だけでも何か違つたところがある者だといふことになつて仕舞ふの。──お分りになる？……だから、佃がよい、わるいは抜きにしたつて、この點で、どうせ母様は滿足お出來なさらないだらうと思ふわ。私は野蠻人だから、生活だつて何だつて、自分の手で自分の欲しいのを掴んで見なければ承知しない質なのよ。……」
伸子は默つた。多計代も默つて居る。二人は永いことさうやつて、暖爐の低い焔が、時々ひら、ひら、燃え上つて、四邊をぼんやり赤く照す夕闇の中に居た。

五

空が晴れ渡つて、風が、椿の艶ある葉をゆるがして吹いた。
山吹がもしや〳〵茂り、小枝の折れ、落葉等、雜然と重なりあつて居る手入れされたことのない庭の隅に、杜若がぞつくり揃つた芽を出して居た。青々したその芽生えのところだけは、特別日光が溜るかと思ふ程、明るく美しく見えた。──暖かい。……眼を細め、その強い緑色の中にある明暗を眺めて居るうちに、不思議な烈しい感覺が伸子の全身を流れた。伸子は、喉につつかけて來るやうなときめきを感じ乍ら、力一杯のびをした。彼女は、拳固を握つたまま、その腕をぐるり〳〵と振り廻した。腕が白く光つて震へた。
風が又渡つた。──青竹の葉がさや〳〵と鳴つた。離れの叢蔭で、保が熱心に何かやつて居る。近より乍ら伸子は、
「何やつてるの」
と、聲をかけた。

「——來たの—」
あどけない生毛の渦卷のある横顏を見せ、保は、覗き込んで居る箱から目もはなさない。
「なあに—」
仲子は弟の肩越しに首を延した。それは二尺に三尺位の苗箱であつた。細かい〳〵黑土を見事に篩ひならした處に、四分程に延びた芽生えが、弱々しく、ひよろり、ひよろりと並んで居る。
「何の芽生え？……少し貧弱みたいね、いゝの、それで」
保は、初めて、
「ちつとも好かあないさ」
と、當惑さうな表情で仲子を顧みた。
「シクラメンの實生なんか、專門家だつてさう樂々ぢやあないのさ。だから僕なんか下手なのあたりまへなんだけれど……悲觀しちやふなあ」
仲子は、笑ひ出した。
「でも感心に、生えたぢやないの。——段々大きくなるんでせう？—」
「——解らないさ、其あ腐り易いんだもの。芽を出すに都合よく暖めると、すぐ泥に黴が生えちやふし。——困つたことに、ほら斯ういふの、ね、僕に勢がないでせう—」
保は、箱の隅の凋れた一本の芽を指さした。
「—何故斯うなるか原因が判らないの。泥や何か、本に書いてある通りに仕たんだけれど—」
保は十四歳であつた。彼は冬ぢう、この箱を縁側に持ち込んで火鉢を入れたり、硝子の蓋をしたりして、發芽を樂しんで居たのであつた。
思ひがけず相手が出來たので、保は盛にシクラメン培養のむづかしさを說明し始めた。此は生えても數年後でなければ花を持たない事、溫度と濕度の調節が蘭栽培に劣らず困難なこと。彼は、暇さへあると抱へて歩いて居る園藝の本からよくも覺え込んだ知識を、雄辯に、而も處々で子供らしくごちや〳〵にし乍ら話すのだ。
「ね、だから溫室なしぢやあ出來ないのあたりまへさ。——こなひだなんか僕の知らないうち、犬が足を突込んで、根こぎにしたりするんだもの—」
仲子は愛情から、短い受け答へをした。けれども、正直に云ふと、仲子は保の云ふ事を、半分も聽きしめては居ないのであつた。彼女の心持は朝から均衡を失つて居た。注意が散漫になつて苦しいので、部屋を出て來たのであつたが、三月下旬の[illegible]の間では、却つて彼女の内に[illegible]居る[illegible]い、激しい、同時に[illegible]い心持が漂ふやうだ。
仲子は、[illegible]を、ぐるりと風呂場の奥へ廻つた。石炭殼がザクリ、ザクリと大きな音を立てた。
「だれだい—」
「私」
ガラリと窓が開き、つや子が、
「お姉ちやまあ」
と目を覗かせた。側に多計代の縞の袢纏が見えた。
「保さんは？—」
「フレイムの處で頻りに悲觀して居るわ、シクラメンが腐るつて——」
つや子が、
「ね、お母ちやま、いゝでせう？　大丈夫だ僕もういゝのよ、ねえ、お母ちやま！」
と云ふのが聞えた。つや子は、兄ばかりの中に居て、自分のことを、僕、僕と云ふのであつた。
「駄目ですよ、又細谷さんを呼ぶやうになりますよ—」
「——何駄々こねてるの—」

外へ出たいつて云ふのさ、まだ起きて二日にしきやならないのに、外へなんか出ると又すぐごほん、ごほんになつて仕舞ふのに——仕様のない喘息やさん」

仲子は、ぶら〳〵其處から女中部屋の横へ出た。障子が麗らかに開け放され、すぐ窓際に、女中が向ひ合ひで縫物をして居た。二人ともうつむいて、焦茶地に黑く細かい絣の銘仙男物の着物と羽織を縫つて居る。それを見ると、仲子は制して居る感情が、その衣類に向つて迸るやうな動搖を感じた。佃の着物であつた。彼の歸る支度にきうやつていそいで縫つて居る。——

仲子は女達に氣づかれないやうに、客間の庭へ去つた。——

去年の十二月に歸つて來て以來、三月になるまで、時に仲子は、佃に會ひたく涙の出るやうなことがあつた。然し如何那に騒いだところで、彼の仕事に一段落つかなければ歸れないのだといふ諦めが、一種の支へになつて居た。ところが今度、佃は四月早々歸朝するにきまつた。特に三月十九日、彼を載せた船がシアトルを出てから、仲子は壓迫されて來た待ち遠しさで、潰れさうに感じだした。彼が横濱に着くまでの毎日が、恐るべき無聊、期待の餘りの、精神的不活潑のうちに過ぎた。

若し小遣ひでもたつぷりあつて、彼を賑やかに迎へる支度でも出來たら、仲子は大分助かつたに違ひなかつた。けれども、彼女には金などちつともなかつた。佃の旅費に、仲子は自分の力でとつた金の他、相當な額を兩親に出させて居た。

「私いろ〳〵、買ひたいものがあるのよ、お金頂戴」

などと、其故、云へる狀態ではなかつたのであつた。第一、佐々の家で、佃が數日中に歸るといふことを悅んで居るものは、一人もなかつた。夜など、兩親が何かひそ〳〵話して居るところへ、何心なく仲子が入つて行く。彼等は急に默り、

「何か用かえ」

と訊かれた。さういふ時、兩親は、親といふより夫婦として強く仲子に感じられ、悲しく疎外された感情が彼女を襲ふ。自然に現す道を塞がれたこの待ち遠しさで、仲子が獨り居に佃を思ふと、病的な熱さが心を苦しめるのであつた。

やつと二日になつた。その日は日曜日であつた。

眼がさめると仲子は、あゝもう今日一日だ！と思つた。今日一日……今日一日……その一日が何と自分を疲らすであらう！……仲子は人に顏を見られたり、口をきいたりするのがいやであつた。このまゝ寢て居るところへ、佃が急に入つて來てくれたら、どんなに嬉しからう。

憂鬱な位の機嫌で、仲子は食事部屋へ出て行つた。卓子の上に一人前の食器が出て居る。傍で多計代がカステラを切つて居た。

「——お客さま？」

「たてつゞけさ。——お休みでもこれだから、家にいらしちや何にもなりやしないね……」

「さう〳〵……」

と、多計代は急に、自分の前にある菓子折の包紙や水引をかきのけた。

「電報が來て居たよ」

「電報、」

「船からだらう、今そこに在つたのに……」

仲子は俄に動悸を感じ、一緒になつて其邊を探した。今になつて變事でもあつたのでは堪らない。

「名があつたこと？」

「さあどうだつたか……」

その落付きやうが、仲子には不自然に思へ、

不愉快であつた。電報は時事漫畫の下から出て來た。發信人ツクダといふ文字を見て、仲子は幾分安心した。

ニカゴゴニウコウとある。

「二日――二日つて云へば今日だわね」

「さうさ」

「變だわね……二日午後入港とあるんだけれど……」

時計を見、仲子は一どに遽しい困惑した心持になつた。午後といふだけでは、午後一時なのか六時なのかさへ判明しない。

「私、訊いて見るわ」

仲子は、電話かける間も心配なやうにして、郵船會社に問合せた。若い事務員が、ぞんざいに、

「今日入港します」

と答へた。

「何時頃？ 夕方ですか」

「いゝや、早いですよ、もう港外に居るでせう。お迎へなら早くいらつしやらないと駄目ですよ」

仲子は、妙な顏をして電話口から戻つた。

「――矢張り今日なんですつて……」

「何だい、その顏は」

多計代は、突立つて居る仲子を見上げて苦笑した。

「ぼんやり仕て居ちやあいけない、行くなら行くで、父様に申上げるなりなんなりおしな」

部屋で着物を着換へ乍ら、仲子は不意打ちの氣がした。如何に不意打ちにしろ、彼程待つて居た彼が一分でも早く着くなら、飛び立つ程嬉しい筈なのに――いざとなつて見ると、仲子は空想して居たやうな歡喜が感じられないので、意外な思ひがした。彼が到頭歸つて來る――然し見ないうちは、心にある彼、その彼が歸つて來るといふのさへ、變に信じられぬ。仲子は、十五年昔の或夏の曉方の光景を思ひ出した。五年ぶりで父が英國から歸朝するといふので、八つの仲子は夜眠らなかつた。其朝、吊ランプの下に鏡臺を出して髮を結つて居る母の後で、團扇で蚊を追ひ乍ら、まるで口をきかない母が平常と違つて、可怖かつた覺えがある。――仲子は今、其朝の、母の複雜な、妻としての感情が理解された。

櫻木町行の電車はすいて居た。彼等と向ひ合つて、外國商會に勤めて居るらしい中年の道樂者らしい男と、三十二三の夫人、あと數人の男が乘り合せて居る許りであつた。電車はタ、カタ、と搖れて、暖かい日光に輝いて居る、東京と横濱との間を繋ぐ雜然とした風景の間を疾驅する。

佐々は、衣囊から小さいノオトを出して見て居た。暫くして仲子は訊いた。

「何時？」

「――さあ、まだ二時位なものだらう」

彼は、時計を出した。

「ほう、十分過ぎて居る……案外かゝつたね」

佐々は、人さし指を頁の間に挾んで持つたノオトで、輕く外套にくるまれた膝を叩き乍ら窓外を眺めて居たが、不意に仲子の方に體を捩ぢ向け、低く情愛深く囁いた。

「――餘り亢奮しちやあいけませんよ、人が見て居るから……」

彼は元の位置に體を戻し乍ら、稍高い聲でつけ加へた。

「同情すべきさ、お前に上氣せられては參るからね」

「いや……父様」

彼等は櫻木町から俥に乘つた。亂暴な港の俥夫は胸をのめらせ、支那の苦力のやうに叫び乍ら驅け出した。

コレア丸は丁度、岸壁に横づけになつたばか

りであつた。

　ガングボートをとりつけるところで、コレア丸から乗出した水夫が大聲で合圖を叫ぶ。其に答へつゝ、數人の男が石壘の上で、車輪付階段を押して居る。それを待ち切れず、感動的な、せつかちな、傍の思惑などかまつて居ない求め合ひの混雜が、そこ、こゝで起つて居た。伸子は父の腕を執り、じり〳〵人波を分けて進んだ。眼では絶えず上甲板の欄干に沿うてびつしりと並んだ顔の列の中に、佃を見出さうとし乍ら。

　顔はいかにも澤山だ。それが重なり合ひ、帽子や外套の色にまぎれて、とても一つ〳〵、近眼の彼女には見分けられない。そのうち、迎へに出た方、出られた方、互に相手を見つけたと見え、嬉しさうにオーイ、オーイと叫んで帽子を振る男や、紋付の羽織で此方から辭儀をする婦人がある。船が大きいので、並んだ船客の顔は小さく、とりこめられたやうに見えた。伸子は悲しくなり、

「お見えになつて？　お見えになつて？」

　と、度々父に訊いた。

「――此那ごた〳〵の中に居ちやあ、向うから[illegible]い、少しすいた處へ出よう」

　彼等は、前へ〳〵と押す人なだれをよけて、稅關の倉庫近く立つた。視て居ると、上甲板から短い段を降りて、船首の中甲板へ出て來る一人の男がある。黑い外套――山高帽。伸子は覺えず體ごと右手をあげ、頭の上で熱心に振り動かし乍ら、父に告げた。

「わかつてよ、父樣！　あすこ、あの黑いの」

　彼も帽子を脫つて、彼等に向ひ、ゆるやかに大きく打ち振つた。更に強く、更に心をこめて手を振り乍ら、伸子は感動でぞつとし、涙を浮べた。

六

　自動車が、石垣について坂の角を曲つた。父と佃との間に挾まつて搖られ乍ら、伸子は家が近づくに連れ、深まる懸念を感じた。

　初對面の佃と母とは、互に如何な印象を與へ合ふであらうか。伸子は、つまらない事だが、佃の顔色が冴えないのも、少し心配であつた。彼が話下手で、自分から暢やかに話題を提供する質でないのも心配であつた。

　玄關に、母の指圖で、改つた顔の書生や女中が並んで出迎へた。佐々は、帽子を女中に渡し乍ら、ぎごちない空氣を掃ふやうに氣輕く云つた。

「何年ぶりです、靴をぬがされるのは。――君なんぞはもう、足から風邪を引く方だな。日本ではまだ〳〵この厄介はのかない」

　佃は、固くなつて、にこりともせず答へた。

「いゝや、かまひません」

　先に式臺へ上つて居た伸子は、彼の心に向つて合圖のスキッチでも押すやうに力を入れ、「樂に！　自然に！」と願つた。衣服を改めた多計代が、客間の入口に近い椅子の前に、彼等を迎へるために立つて居た。伸子は眞先に、

「たゞ今」

　と挨拶した。そして、佃を母に紹介した。

佐々が傍から其を扶けた。

「妻です。――佃君、――佃君には先も話した通り、いろ〳〵お世話になりましたよ」

「左樣ださうでございますね」

　多計代は、大柄な體に重々しく威嚴を保つた樣子で應答した。

「此度はまことに思ひがけない御緣でおめにかかることになりました」

　佃は、さういふ多計代の改つた應待ぶりを適當に受け切れず、ちぐはぐに、言葉足らず窮屈さうに答へた。

「お父樣には大變お世話になりました……どうぞよろしく」

「まあかけ給へ。……いや、草臥れたことでせう」

佐々は、妻に云ひかけた。

「佃君は大部船に弱いさうで、半分以上寢て來られたんださうだ」

「まあ、それは〳〵」

當人から何か言葉を期待するやうに、多計代は佃の方を見た。佃は、椅子の左右に肘をのせ、その手を胸の前方で組み、多計代を見て頷くやうにし乍ら、

「もう大丈夫でございます」

と云つた。

伸子は、父の椅子の背にもたれて立ち、この心理的對面のなりゆきを眺めた。母が佃に對してどう出てよいものか迷つてゐたのは、入つて來た時、彼女が立つて居た樣子で判つて居た。佃を尊敬し、或間隔を置いてものを云ふべきか、又は、伸子の配偶として、碎けて樂に取扱つてよい人間か。彼女はそれを是等二度の短い應待で試みたらしく思はれた。彼女は既に、舌で云へば厭な味のやうに、何かそぐはないものを佃から感じたのではあるまいか。――さもなければ、何故あゝ時々、綺麗な白足袋の爪先を、焦立たしさうに動かす必要があらう。伸子は、自分に不安を與へる眞白い生ものの耳のやうな其方を見ないやうにして、父に云つた。

「父樣、お休みになつてはいかゞ？　本當に有難うございました。――今日はね」

伸子は彈まない空氣を引立てるやうに佃に說明した。

「私が大寢坊をした處へ電報が來たのよ。だから慌てたと云つたらないの。父樣だつて不意の召集よ、ねー」

「あゝ。――然し日曜で結構だつた。――他の日は無茶に忙しくてね。君なんぞも當分、餘程氣をつけないと神經衰弱にかゝりますよ。外國は一般に規則だつて居るが、此方は生活のシステムも、プリンシプルもあつたものぢやあない。盲滅法、ごた〳〵です。――まあ家にかへつた積りで、暫くのんびりし給へ」

「有難うございます。いろ〳〵御面倒になります……」

風呂場に佃を案内して伸子が戻ると、多計代は、客間の入口に立つて、亢奮した顏付で良人と低聲に何か話して居た。

佐々は伸子と入れ違ひに書齋に去つた。多計代はそこで伸子をつかまへ、警告するやうに云つた。

「佃さんといふ人はいつも彼那顏色なのかえ？　――たゞの色ぢやないよ、あれは」

伸子は、餘り自分の豫想が當つたので、思はず無邪氣に笑ひ出した。

「船に醉ひつゞけて居たからよ、可哀想に――勿論林檎のやうな頰ぺたは、いつだつてして居ないけれど」

「――永く外國に居た人といふのはあんなもんなんだらうかね……變だね何だか――挨拶も人なみに出來ないやうでさ」

「母樣が餘り堂々挨拶なさるから面喰つたのよ」

佃が手や顏を洗つて來、果物や紅茶が卓子に出た時、伸子は、

「みんな被來い。お茶！……」

と弟妹たちを呼んだ。三人一どに來た。伸子は、

「和一郎さん、保さん、つや子ちゃん」

と順ぐり佃に紹介した。佃は、おかっぱで含羞んで居るつや子に、優しく笑つて、

「いらつしやい」

と兩手を差出した。

「さあ行つてだつこしておいたゞきなさい―」

皆が笑ひ乍ら見るので、つや子は、益々極りわるく、佃の方に行かうとはせず、

「お姉ちやま」

と伸子にからみついた。幼いつや子が佃の膝に行くか行かないか、冗談のやうな眞劍な注意で皆が見守つて居るのを感じ、彼女は、つや子が佃になついて欲しかつた。

「どうしたの？　つや子ちやん、だつこして御覽なさい。――そーら、お姉ちやまごと動き出したぞ……」

伸子は、小猿のやうにからみついたつや子を膝にのせたまゝ、佃の方へゐざり出した。つや子は、急に、ぎつしり兩手で伸子の頸にしがみついた。そして、息もせず、體ぢうを強ばらせ、足を疊に踏張つて抵抗した。肩に顏を伏せて居るので見えはしないが、いづれ眞赤に汗ばんで、わつと泣き出す一歩手前に相違ない。伸子は動くのをやめた。

「――まア、だめ……今日はおあづけ」

「この子は妙な子でしてね、つい去年あたりまで[illegible]は可愛がる、[illegible]にはかゝる、祖父の私まで嫌がつたので閉口しましたよ」

すると、つや子が、皆に背を向けて、伸子に抱かれたまゝ仔細らしく、

「キャンムシも―」

と小聲でつけ足した。初めて心からの大笑ひになつた。キャンムシは、神主のつや子語であつた。

十時頃女中が、

「お床はどう致したらよろしうございませう」

と訊きに來た。

「さあ……」

多計代は伸子を見た。

「お前の部屋でいゝんだらう」

「いゝわ」

「ぢやあ、いつものやうに――」

「あの、おかけものや何かはどれに致しますのでせうか」

多計代は、彼女の場所から動かず、當然それは伸子のすべき事だといふ風に答へた。

「さあ――何かあるだらう……。伸ちやん、お前行つて見てやらないぢやあ判りませんよ」

伸子は、默つて女中の先に立ち納戸に行つた。戸棚をあけさせた。

「それ……その絹のと八丈の」

女中に夜具を運び出させ、伸子は洗面所に行つた。電燈をつけ、鏡にうつる自分の顏を見守り乍ら手のひらで髪を撫で上げ、彼女は、寂しいやうな滅入つたやうな心持を感じた。これが、彼那に待ちわびた彼を迎へた心持であらうか。周りに人が多すぎ、氣疲れがし、伸子は有頂天な悦びより寧ろ憂鬱を感じた。彼女は電氣を消した。そして洗面所を出た。その時、彼方の部屋の扉が開く音が大きくした。體を半分廊下へ出し、うつむいて上靴を穿かうとして居る佃の姿が伸子の處から見えた。

「和一郎、一緒に行つてお上げ」

「いゝえ、一人でわかります――さつきも參りましたから……え？　大丈夫です……」

佃は、まるで伸子が其處に立つて居るのや、彼女の心にある慾望を透視して居るやうに、眞直暗い廊下を此方に向つて歩いて來た。伸子は、一瞬間前のしよぼくない自分を忘れた。彼女は嬉しくて堪らない惡戯小僧のやうに笑ひを殺し、四邊の暗闇まで一緒に脈打つて感じられる程胸をどきつかせ乍ら、そつと隅の木欄の側にかくれて立つた。

七

一週間ばかり後、伸子は佃と、彼の故郷の田舍へ歸つた。十日許滯在した。伸子にとつて

は楽しさと追憶との混り合つた旅行であつた。佃の老年の父や兄夫婦や弟など、肉親ではあるが、久しく別れて居て、全然未知な生活をして來た佃、又伸子に對して心遣ひするのがわかつた。菜の花盛りで、金色の花が高く〳〵咲き連なり、遠い白山山脈に照り映えた。古い村落には、狹い街道を挾んで黒板塀の家が並んで居た。淨土眞宗が非常に盛で、村の寺は倶樂部又は集會所であつた。家々には素晴らしい佛壇が飾つてあつた。其の大小が家の格を支配するといふ事であつた。

「この邊ぢやあみな、此那ものを大切にしてゐますのぢや」

伸子は珍しく思つて、金を打つた觀音開きの扉や内部の欄間に親鸞上人の一代記を赤や水色に彩りした浮彫で刻みつけてあるのを眺めた。爐の粗朶火に當つて居る老人は、寢所に入る前、必ず佛壇に行つた。燈明をあげ、肩衣をつけ、歎異鈔に類したものを唱した。そして口の裡で、

「南無、南無、南無」

と弱々しく稱名しながら戻つて來る。焚火で燻つた天井の大梁からは籾俵が吊下つてゐた。默つて焰をふく焚火を眺めて居る者達の、大きく重なり合つた影法師が板敷を這ひ、板戸の上で搖れ乍ら延びたり縮んだりする。生活全體が、その佛壇のやうに古風な傳統に滿ちて居た。

彼女達が歸つた時、東京ではもう櫻も木蓮も散り、楓が若葉を擴げ始めて居た。

伸子は、或日、片手で着物の裾を抓みながら、如露で部屋の前に水撒きをして居た。

天氣つゞきの上、彼女の部屋のまはりは、建増しの時地肌を荒されたので、乾きやうがひどかつた。雨に打たれることのない庇の下など、土は黄粉のやうにポク〳〵であつた。いくらでも水を吸つた。さつさと如露を動かすと、水滴がひろがつて土に落ちるとき、軟かい清らかな粒の揃つた音がした。すが〳〵しい土の香が立つ。伸子は段々あとじさり乍ら、一心に撒いて居た。

障子が開いて、佃が顔を出した。彼は、暫く默つて伸子のすることを見て居たが、

「それはぢきすむの」

と云つた。

「ぢきよ。——でも——やめたつていゝのよ」

「——お茶が欲しいんだが」

「ぢやあ一寸待つて、すぐ行くわ」

「此處で飲みたいんだがな」

伸子は如露の水を切つて、[illegible]に立つて居る佃を見上げた。

「——彼方へ行きませうぢやないの、ね？」

「…………」

佃は、沈默で不服を表した。

「お湯に出たつきりだから、少し行つて喋つて來ませうよ。あつちでもきつとお茶を上りたい頃よ」

「行つたつていゝけれども——永くなるんで」

「いやな方！　何とか彼とか、いつでも駄々ばつかりこねて」

伸子は、冗談に本氣を混へて叱つた。

「することもないのに、いそがしいなんて口實は通して上げないことよ！」

佃はまだ定つた職業はなかつた。旅行から歸つて後、伸子は二間續きの六疊に二つ机を置いた。彼はその前に窮屈に膝を曲げて坐り、履歴書を書いたり、彼方からのノオトを、漠然と整理したりして居るのであつた。初め、伸子一人の勉強部屋として作られた其等の部屋は、縁側つゞきだが離れのやうな工合になつて居た。藏前の廣縁と二階の裏階子とで、他の部屋々々から遮斷されて居た。袋のやうなたつた一つの

出入口を閉め切ると、前の庭を見晴す丈で、一日人に會はずに暮せた。伸子が佃と二人きりで居るには、其故、大層都合よい構造なのであつた。然し、實際そこで彼と暮すやうになつて見ると、伸子に其特典を却つて痛し痒しに感じた。何故なら、佃は只さへ引籠りであつた。伸子が種々彼の傍に小間使ひをすると、佃は仕方ない時しか部屋を出ない――例へば三度の食事時とか、湯へ行く時とか、電話とか、父がかへつた時とか。――

田舍へ立つ前、斯う云ふ事があつた。矢張り、彼が部屋で茶を飲みたいと云つた時であつた。伸子は何心なく、

「ぢやあ持つて來て上げるわ」

と云つて、食事部屋へ行つた。母が女中と夕飯の支度の打ち合せをして居た。彼女は伸子を見ると、

「何だい」

と尋ねた。

「お茶」

「――お湯あるかしら」

女中代は、手を出し、結構に動いた。

「あゝ丁度いゝ、沸いたよ」

伸子が盆を揃へる間に、彼女は自分で急須を揃へた。

「美味しい蒸羊羹があるよ、あれでも切らうかねえ」

ゆつたり茶を注ぐ母の態度には、伸子と一緒に茶を飲むことを樂しむ樣子がありありと見えた。伸子は三つ茶碗を並べたまゝ、部屋へ佃を迎へに行つた。

「いらつしやいよ、母様がその積りなんで私困るわ」

頻りに進めたが、佃は到頭動かなかつた。伸子は、已むを得ず戻つて、母に嘘をついた。

「今一寸手がはなせないんですつて。これだけいただいて行くわ……私はすぐ來るから待つてらして頂戴ね」

母は、遠慮なく皮肉に云つた。

「それは〳〵――新居暮しのやうで御不自由なことだね」

母は後を向け、小さな盆に湯呑をのせて居た。伸子は、自分達二人が愧しいやうな、大きな家の隅つこにいぢけてかたまつて居るやうな、いやな心持がした。部屋まで薄暗い廊下、伸子の感情は複雑に動いた。

――さういふ經驗もあり、彼女は、如露を元の場所に戻し、バケツを取り上げ乍ら、佃に云つた。

「私足がよごれたからお風呂場へ廻つて行くことよ、先に行つてて頂戴」

伸子は、裏から風呂場へ入つた。彼女はタタキで足を洗ひ乍ら、時々耳を澄して、自分達の部屋の襖が開くかどうか注意した。ことりともしない。伸子は足を拭いてから、襖前へ來て聲をかけた。

「どうなすつて？」

「居ますよ」

その返事で、伸子は襖を自分からあけた。

「――さあ、もういゝのよ」

佃は、まだ庭に向つた窓際に佇んだまゝ、顔だけ伸子の方へ向けた。彼の顔に陰鬱な樣子が現れて居た。迷惑げな、解つて居て呉れる筈ぢやあないか、といふ訴へを籠めた。伸子はその前に近づいて、低い眞面目な調子で云つた。

「ね、一つ家に居て、御飯の時しか顔を出さないといふやうなの、何だかよくなくてよ。一緒に暮す以上、打ちとけなければ、ね。だから來て頂戴――○村の家で此那ことないでせう？」

彼は、伸子に對する義務だと云ふ心持を示した聲で答へた。

「では行きます」

八

極く微妙な、神經的な不調和が、段々家ぢうに蔓り始めた。仲子は自分も其を神經で感じた。

夕飯の時、彼女は元したやうに料理の手傳ひをした。その間、佃は部屋に居る。卓子の支度が出來ると、仲子は、

「みんな彼來い！」

と呼んだ。彼女の若々しい聲は遠くまで響いた。裏庭に居た保も、和一郎も、つや子は勿論、

「御飯、御飯」

と叫んで、どた〳〵馳けて來る。仲子も、手を洗つて食卓に就いた。父や母も箸をとるばかりになつて居るのに、佃一人が揃はない。つや子は、

「お母ちやま、もう食べていゝ？」

と訊いた。仲子は氣が揉めた。其處へ、正面の戸をあけ、佃が、皆に向つて輕く頭を下げ乍ら入つて來る。――時間で云へばほんの一分か二分の待ち合せであつた。が、一番人目を牽きたい貴婦人は最後に、皆揃つた舞踏場へ姿を現す通り、其の場の氣分に、何か際立つものが生じた。彼だけ變に別者――お客として目立つやうな、其瞬間、あゝ彼がゐる、といふ事をぼんやりではあるが、皆が新たに感じなほすことを、仲子は感じるのであつた。仲子は、

「――どうなすつて？　おそかつたわね」

と云つた。彼から、お待ち遠でした、と云はせ度いと思つた。

「みんなお待ちかねよ」

佃は、二つの膝をかためるやうにして座蒲團の上に坐り、卓子の上を狹く見、不明瞭に、

「さう……一寸」

そして、父母の方だけ向いて挨拶した。

「失禮いたしました」

「いや。――どうですね、山崎さんの都合をきゝ合せましたか。今日倶樂部で偶然會つたから、又改めて話して置きましたよ」

……次第に食事は賑やかになつた。仕舞ひ頃には、仲子を除いた誰もが、初めの一寸した心持の引懸りは忘れて仕舞つた。然し、このやうなことは一度ですまなかつた。次の日、一日隔いて又次の日、その次の日、如何いふ都合か同じことが起つた。ぢき消える淡い感じが、度重なるにつれ明瞭になり、仲子にとつて一種惱しい豫感のやうになつて來た。食事時になると、多計代は制へつけた苛立たしさで云つた。

「佃さんには早めにお云ひよ、いつまでもお客樣みたいに皆を待たせないで」

「さうしませう」

「――一體、外國の大學なんかは、ひどく氣さくな青年らしい氣風だつて云ふぢやないか。あの人だつて、此處へ來てお前の手傳ひぐらゐしてもよささうなものだね、――二人の時でも斯うなのかい？」

仲子は、エプロンの紐を解き乍ら、酸いやうな笑ひで口元を歪めた。

「さうでもないわ」

「ぢや、いゝやうなもんだけれど……」

多計代は、それ以上云はず、卓子の花の工合をなほし始めた。古くなりかけた矢車草の葉をもぎ、少し上體を反らせるやうにして枝ぶりを見る。花いぢりは手先だけのことで、母の胸に云ひたいことが詰つて居るのを、仲子は直覺した。多計代は其きり何も云はなかつた。

數日で四月が終らうといふ日、仲子は從妹達と或友人の宅に招待された。曇つて居たが、艶のある灰色の空に、ねつとり濃い地上の青葉が美しい日であつた。四時頃、仲子が支度をしに洗面所に行くと、佃は、一緒に部屋を出て來て、廣緣の隅につくりつけた本棚の片づけを始

ゐた。その本棚は家族共同のもので、本と云つても碌なのは一冊もなかつた。古雜誌の仕舞ひどころであつた。幾年間かの婦人雜誌類が無秩序につめこまれ、それが崩れて、片方の硝子戸が開かないやうになつたことを、多計代が何かのついでにふと話した。伸子は、今彼の仕ようとすることを見て驚き、

「決して、貴方にしてお貰ひする積りで云つたんぢやあないのよ」

と、止めた。

「放つて置いていゝのよ、其那ことは。本當に必要なら、誰かにさせればいゝんですもの」

「一仕たつていゝでせう？　少しでも皆の爲になれば結構だもの」

「――氣晴しになさるんならいゝけれど……」

伸子は、行きかけ、襖を片手に握つた、そのかげから佃を見た。佃はぺたりと本棚に向つて板の間に胡坐を組み、もう戸をあけて、塵だらけの古雜誌を引出しては分類しだした。その後つきに、彼の心持を表するに馴れた伸子の眼を、捕へて離さない或ものがあるのであつた。危く、

「不機嫌？」

と訊きかけた。が、やめた。若し彼が不機嫌だとしたら、自分は友達へ行くのを中止にするだらうか？　否。鏡の前に戻り乍ら、伸子は、何時の間にかかういふ風に働くやうになつた自分の感情を省みて、憫笑した。――鏡の面に顔を近づけて白粉をつけて居る伸子の頭の裡を、斯う考へが靜かに重く進行した。そして、伸子は、斯ういふ一見けちな簡單さうな心の煩ひで、自分だけでない、結婚して居る多くの女が、氣を重くされ、不活潑になつて居るのを感じた。

支度が出來上ると、伸子は自分で自分の氣を引立て、氣輕く彼に、

「行つて參ります」

と挨拶した。彼女は、帶や着物をきしませ乍ら、胡坐をかいて居る佃の上にこごみかゝつて頬を觸れた。

「今夜は父樣もお留守だから、悠くり母樣と話でもしていらつしやい」

夜に入つて、細雨が降り始めた。九時頃になると、家のことを思ひ、落付けなくなつた伸子は、俥を命じて貰つた。晩春のしと／＼雨で、俥の中は濕つぽく、小暖かい、いきれと幌の匂ひとがした。それに、登りの坂が多く、手間どつた。歸つて見ると、玄關にはまだ燈が見えなかつた。

「父樣は？」

「まだお歸り遊ばしません」

奧へ歩き乍ら、伸子は、どうか母と佃とが睦じく話し込んで居る光景に出會ひたいものだ、と思つた。戸をあける拍子に、愉快さうな二人の顔が自分に振向き、

「おや、お歸り！――今お前の惡くちを云つて居たところだよ」

とでも云はれたら、如何なに樂しいことであらう！　本當に、如何なに樂しいことであらう！

暗い廊下で、伸子はひとりでに微笑しかけた。然しその暖かい想像は忽ちかじかんだ。――人間は、自分が棲息する家の空氣に對して、獸が巣の安全、或は近づいた危險を本能的に嗅ぎ分けると同じやうな直覺を持つて居る。伸子は部屋々々の鎮まりかへつた調子、何處からか流れ出て、廊下にさへ感じられる冷やかさに、用心を感じた。伸子は靜かに扉をあけた。

「たゞいま」

佃は其處に居なかつた。弟達も居なかつた。夜氣の裡に母一人であつた。伸子は、我知らず捜し求めるやうに室内を見廻した。

「雨になつて困つたらう？」

多計代は、顔を伏せ、時計を見た。

「いゝえ、俥をいたゞいて來たから……父樣ま

だだつてね―

「――今夜はきつと遅からうよ、例によつて焼物の御連中だから……」

彼女は、沈着な觀察的な視線で、コートの紐を解いたなりで坐つて居る伸子を見た。

「着物でも着換へておいで―」

伸子は素直に立つた。急ぎ足で、彼女は自分の部屋の襖をあけた。佃は机の前に居た。

「たゞいま」

「お歸り―」

彼は、入つて來た伸子に背を向けて坐つたまま、首も廻さず答へた。――これも自然ではない。何があつたのだらう――伸子は、母と佃との間に不快が流れて居るのを察した。伸子は、岩疊な無愛想な、自分の力では押すも引くも出來ない崖に、左右から挾み込まれたやうな困惑を感じた。

伸子は、着かへてから又母の處へ行つて見た。多計代は、彼女の來るのを待ちかねて居たらしく、いきなり制し切れない率直さで云つた。

「佃さんといふ人は餘程如何かして居るね―

この間から母の心に溜つて居たものが、愈々溢れ出した。

「さうお――何かあつたの」

多計代は、伸子を凝つと眺めた。

「彼方で聞いて來たらう？」

「いゝえ―」

「……斯うなのさ……―

話しかけ乍らも、多計代はさも厭はしさうな顏をした。

「――此那ことを繰返して話したりするのも大人氣ないやうで、本當に不愉快だがね……まあ初めから云はなければ解らないことだから。――お前が出かけて間もなく、あの人も獨りで淋しからうと思つて、お茶に呼んだのさ。丁度保やつや子は居ないし、いゝ折だからと思つてね、私はいろいろ二人きりで話す積りだつたんだよ。お前も知つて居る通り、私にはまだあの人と云ふものが、しつくり腹に入つて居ないし、此迄しんみり話す機會もなかつたしね――私の心持では、まあ隔意なくお前といふものに對しての意見も交換したかつたのさ、口の先だけでお母さまお母さまと呼ばれる許りで、妙に他人行儀な氣持を兩方で持つて居ては堪らないからね」

「さうだわ」

「私は馬鹿正直だから、きつと佃さんも左樣感じて、眞率な心持になつて呉れるだらうと期待したんだが――それも間違ひさ―」

多計代の顏に新たな腹立ちが迸つた。彼女はぼつと耳朶まで熱くした。

「――駄目だよ！ あの人は―」

「どうして？」

「どうしてつてお前……あの人はまるで冷淡だよ、ちつとも感激といふもんがない人だ。如何な無學な者だつて、此方が眞心を打ちわつて話せば本氣になつて來るのに、あの人つたら何て云ふのか――後じさりする許りなんだもの。たゞ自分は、お前の爲には如何なにでも盡す積りだ、自分は犠牲になる覺悟をして居る、と云ふ一點張りなんだもの。――何も私はいきなりあの人に犠牲になつて貰はうなんぞと云ふのぢやありやしない。氣違ひぢやあるまいし――お前の身も立つやうに、又あの人も工合よく暮させたい、其には、と思つて話し合はうとするのに、――問題にならないぢやないか」

母の氣象と佃の性質と、兩方知つて居る伸子には、これ等の不滿がよく理解された。母が、此程自分は衷心から話して居るのに！ と、熱した心のやり場がなく齒痒ゆがる心持は同情された。其かと云つて、伸子には、決して佃が悪いとばかり思へなかつた。彼女は中立的

に、
「あのひと口下手だから……」
と云つた。
「それに、私に就て話すとぶつたつて——誰しも一寸困るぢやあないの、何をどうするつて云ふ、具體的な問題が今ある譯ぢやないんだし……」
容赦ない母の一種の熱辯に狩り立てられて、捕へどころない抽象的な追求に對し、佃が頻りに、又これも、彼一流の激昂性で、犠牲とか努力とか云つたであらうのを思ふと、伸子は何だか情ない氣持がした。
「——……其はまあ、さうみたいなんだがね——あれは——もう夕飯時分だつたらう、あの人の處へ電話がかゝつて來たのさ。大分長く喋つて居たから、私もよせばよかつたのに、つい何心なく、何處からですつて訊いたのさ。淺草の親類です、といふのだらう？　ちつともそんな親類のことなんか聞かなかつたし、大厝下町だと思つたもんだから、おや／＼妙な處に被在るんですね、と云つてしまつたんだよ。すると、あの人はひどくむつとしたらしい樣子でね、顏色まで變へて『お母さまは、私が何か變なことでもして居るとお思ひになるんですか』と云ふぢやあないか！　私にはさつぱり譯が分らないぢやないか。それでも何しろ、たゞ事でない顏つきだから、よく／＼考へて見たらお前、——何かひどく邪推をして……」
伸子は、眉根の邊を引摚られるやうに感じ、きゝ乍ら傍を向いて、頰杖をついた。
「……私は、其那考へかたをするのは貴方の恥辱ですよ、と云つたがね……」
再び伸子が部屋に戻つた時、彼はまだ机の右にも左にも本を擴げて、その間に坐つて居た。彼の強情さうな盆の窪は、彼女に向つて云ふやうに見えた。「私は何を聞いて來たか知つて居ます。貴女は私を理解して吳れるだらう？……が、思ひたいやうに思ひなさい。私は辯解しません」
母から聞いたことを、再び口に出すことは堪へ難いし、部屋にその心持のまゝ居るのも切ないし、彼女は藏前の廊下へ出て、腕組みをし、體を左右にゆすり乍ら、そこを行つたり來たりした。高い天井から十燭の電燈が下の板の間を照して居た。正面に土藏の網戸が見えた。拭き込んだ廊下は足袋の裏に滑らかに堅かつた。此間にも滑つこかつたか、と驚かれる夜の板間であつた。伸子は、淋しいので、益々體を搖り動かして歩いた。

九

風呂場は湯氣で濛々として居た。伸子は、裾を端折つて、大盥の中でつや子の體を洗つてやつて居た。溶けた石鹸の匂ひや、水蒸氣の熱い濕つぽさが、衣服を透していやな氣持がした。
つや子は、大きなスポンヂに湯をふくませ、兩手で搾つて、自分のおなかへ上から湯をかけ乍ら、燥いで笑つた。
「お姉ちやま、見てよ、見てよ、おぼちよ（臍）にお湯がしみるわよ、ほら／＼」
多計代は、浴槽に浸つて居た。ふざけ過ぎるつや子に、時々、
「さう騒いぢやあ駄目ですよ」
と云ひ乍ら、伸子にぽつ／＼話す。佃の批評であつた。先夜佃が留守中、不快ないきさつがあつてから、彼女は、彼に對する遠慮や最後の敬意を失つたやうに見えた。彼女が佃に向つて、又は彼について話す時には、定つて輕侮や嘲罵の意の混つた、特別な調子が出來た。
彼女は、今も湯槽で、濡れた後れ毛をかきあげ乍ら云つた。
「まあいづれにしてもよ、人間といふものは[illegible]な

者はないからね、互に許し合ふとしても……私はあの人を見て、益々疑問に思ふやうになつたよ——三十——幾つかい？ 五か六だらう——兎に角その年まで純潔で居たなんて——何だか」

伸子は、

「そつち向いて、そつち向いて」

とつや子に背なかを向けさせた。そして、苛々しげに云つた。

「そんな話……今やめませうよ」

多計代は上り湯を汲み出して、顔を洗ひ乍ら、手拭の合間から亂れた聲で云つた。

「——考へて見ると、お前も全く女らしい人だね、好いとなると盲だもの——二人居る處を見ても、痛々しい位お前の方が餘計愛して居るのが解るよ……それでよければ何よりだがね——」

暫くして、彼女は又獨言のやうに呟いた。

「いつまで私がついて居られるわけでもなし——まあ若し一緒に惡くなるならなるで、お前が其だけのものだつたと、諦めるばかりさ」

大體佐々の家庭生活と、佃の性質との間には、相容れない多くのものがあつた。佐々の家は、伸子の父親の代になつてから、外にも内にも、稍物質的な繁榮を來した。勃興時代とも云ふべき家庭の空氣は、精力的で、排他的で、征服的で、餘り智的でない原始生命が充實して居た。皆がよく喋り、よく喰ひ、眠る。佃一人が屡々、腸を害し、皆ほど強大な食慾を持たない、といふ一事でさへ、彼がこの家庭にあつては、異分子であることを際立たすやうであつた。

家庭の雰圍氣の代表として生きて、動いて居るやうな多計代は、佃が恐るべき敵でもなく、然し同化もせず、どこまでも、その異分子のままに在ることが、神經に障つてならぬらしかつた。彼女は次第に苛立ち、伸子に、露骨な意地惡い言葉を浴びせた。日暮れ方、伸子は部屋にでも居ると、

「此那に急がしいのに何して居るんだらう——お姉さまを呼んどいで——つや子さん」

と云ふ母の聲がした。

「お姉ちやま、および——」

「はい、はい」

出てゆく伸子を、立つて待つて居て、多計代は、

「どんな用事があるのか知らないけれど、少しは此方も手傳ふもんだよ」

と云つた。

一人一人が殖えれば、臺所だつてそれ丈いそがしいんだから、さうお客様になられちや困るよ」

獨りであつた時のやうに、單純に、

「いやな母様！ ちつとも忙しくなんぞない癖に」

とは云へない。母は、伸子を奪つた佃に向つてのむしやくしや、彼に自分を奪はせた伸子に對する寂しさを、ぶちまけて居るのだ。伸子が、卓子の上など片つけるのを、多計代は眺め乍ら、

「一體、毎日何をして居るんだい、佃さんは」

などと云つた。

「本當に大學へ行けるやうになるのかい？」

「來週からですつて……」

「——ぢやあまあいゝけれど——人に訊かれても、何處へも出て居ません、ぢや困るからね、あの年で……お前からよくお禮を云ふやうにお云ひよ——お父様、あの御忙しい中を、この間だつてわざ〳〵津村さんの家までいらしつたんだよ、その爲に……」

佃は、大學へ通ふやうになつた。津村博士の研究室へ客員のやうにして、軈て彼の專門の講師にでもなるのであらうが、それで生活は立たない。彼は、在米中知り合つた人々に就職口

の紹介を頼んだ。その爲の訪問になど、彼は安心して伸子の部屋に納つて居る氣にもなれず、毎日晝間は外出した。夕方、佐々と前後して歸宅した。劇務に追はれて一日を過した老齡の佐々より、佃の方が、疲れた〳〵と訴へた。伸子は、それを侘しく感じた。

夕飯後、彼も暫くは一座に連なる。が、暫くすると、きつと、

「私は失禮します――少し仕なければならない事がありますから……」

と斷つて、獨り土藏前の部屋に引取つた。

佐々の家で、規則立つた勉强をするのは勿論樂ではなかつた。主人が讀書家でなかつたから、夕飯後から眠るまでの時間、家庭の内には陽氣な混雜があるばかりであつた。佃の、皆に混つて遊んで居られない心持、それは伸子に理解された。けれども、彼はどうしてか毎晩、默つて立つて行つてもよささうなのに、きつと、ぎごちない、

「[illegible]」

「[illegible]」[illegible]それは[illegible]で、自分だけ[illegible]、[illegible]だ、と、[illegible]であつた。彼が一人、皆に背を向け[illegible]〳〵引け、出て、閉め[illegible]て、

存氣に喋くつて居た連中は、何だか咎められたやうな重苦しさを感じ、一寸默り込む。――その微妙な數秒間の間隙が、伸子に切ない思ひをさせた。そこで、彼女は、

「――れ」

と、眞先にその氣まづい沈默を自分から破つた。

「一寸皆おきゝなさい、此話知つて居る？

或時巡査が、一人のこそ〳〵泥棒を捕まへました。交番に引張つて來て、散々擲つてから訊くことには、

『貴樣よくも此那恥知らずな事をした。馬鹿奴！　良心はどうした』

『何ですい？　旦那？』

『リヤウシンはどうしたといふんだ、人間は誰でも良心を持つて居るからこそ、惡事の出來んのを知らんか、馬鹿！』

『へえ――どうも……何です、わつしの兩親は十年前地震で潰れて死にやした』」

「なあんだ！　ハッハッハッ」

ハッハッハ。一緒に笑ひ乍ら、本當に下らぬ駄洒落だ、本當に下らぬ自分だ、と、伸子はこせこせ心遣ひをする自分に腹が立つた。伸子には、佃は[illegible]つて安心して、皆と喋つて居られない心持だが、部屋の机の上にのつて居るのは、決して大した仕事ではない。イランの語の詩の古臭い[illegible]譯を書きなほすか、下書きを敷いて、墨汁の[illegible]に筆を出し入れしつゝ、更に一通の履歴書を書いて居るだらうことが分つて居た。

✝

彼等を組む感情の渦卷が複雜で、强くて、伸子は日毎に苦しくなつて來た。彼女の性質は單純で、熱烈であつたから、外から來る刺戟、佃から來る刺戟、各々に全心で反應した。彼方へ打つかつて跳ねかへり、此方へぶつかつて跳ねかへり――伸子は落付いて仕事でもしたくなつて來た。佃が歸宅して以來、ちつとも整理されない感動や[illegible]が心の中にごた〳〵湧きかへつて居る。彼女は或日彼に云つた。

「――私少し落付いて勉强したくなつて來たわ――」

「いゝでせう、おやりなさい」

「引越ししなけりやならないわ、――でも」

「……………」

佃は疑はしげな、不安な顔付で伸子を眺めた。

「あゝ、違ふのよ、机だけ引越すのよ――こゝ、お互に出入りが邪魔だから、元の部屋へ行きたいと思ふの―」

すると、佃は暫く默つて居たが、伸子の手を執り、訊きかへした。

「本當に勉強のためだけですか？」

「もちろんよ」

然し、伸子はその刹那、心の底の何處かを、微小な、棒ふらのやうな疑問が閃き過ぎるのを感じた。――本當にそれだけかしらん？……伸子は一層快活さうに斷言した。

「もちろん、だから手傳つて下さる？」

「あゝ、手傳つて上げますとも」

もう二人ともセルを着て居た。彼等は伸子が、祖父讓りで使つて居る欅の机の兩端をかいて、庭づたひに、客間の横手の部屋へ運んだ。

「暗すぎませんか」

「――でもいゝでせう？　此處……」

客間と玄關だけが、昔、茶人の建てた時のまゝの建築で遺つて居る。その一部である古風な小庭に面したその部屋は、長年の塵を被つて柱さへ破れて居た。伸子は、新たに掃除した古疊の上に据ゑた机に向ひ、佃は、上り框に腰かけ――

「その松の下へ蕗の薹が出るのよ、春―」

「――おや」

「なあに―」

「蜥蜴―」

初夏の日が庭の苔に落ち、刷毛目ついた羽目の白壁を照すのを眺めつゝ、彼等は喋つた。

幼年時代の思ひ出が、この部屋に坐つて居ると、伸子の心に次々に甦つて來た。

夏、獨りで遊んで居た時、縁石に置いてある四角い瓦のやうなものを何心なくめくつた。下にこんもり、ぼく／＼乾いた土が盛り上つて居て、驚いたことには、そこに御飯つぶのやうなものが澤山あつた。蟻が周章てて駈け廻つて、その御飯粒を銜へ、サワ／＼音が聞えさうに、足を動かして逃げ出した。

思ひがけない光景に、伸子はびつくりした。が、見て居るうちに面白さが募り、彼女は、竹の棒で、もう一つ瓦を引くり返して見た。其處は空つぽだ。もう一つ。あつた！　あつた！　御飯粒みたいな物を見る瞬間の官能的なセンセーションを享樂しつゝ、暑さの中を次から次へ、瓦をめくつて歩いた。

伸子はその蟻の卵を懷しく思ひ出した。わくわくした少女の心持が、今、再び經驗されない透明な淸しさであつたやうに思はれる。

紙は展べられて居ても、そのやうな精神狀態で、伸子は現在の入り組んだ感情を、どう整理する手段も見出せなかつた。現在は、實生活の上で彼女の手に餘つて居ると同じに、伸子の力量以上の素材だ。

何ぞといふと口論となつて卷き上る騷がしい渦卷を避けて、佃は土藏側の部屋に、伸子はその小部屋に、多計代は眞中の食事部屋にと三方に別れて數日暮した。

「――居るのかえ？」

或午後、多計代が、低い襖に束髪をこごめて、伸子の部屋へ入つて來た。

「――案外いゝ風が入るんだね、こゝは……」

「下見窓のせゐね」

多計代は、他處の家へでも來たやうに、その邊見廻して居たが、

「佃、夕方歸るのかえ」

「さうでせう、別に何とも云つて居なかつたから……」

「そんならいそがないけれど……」

語調を更へ、やがて彼女は、

「私もこの間からいろ／＼考へたがね」

と云つた。

「……………」

「――おや／＼、まるでひとのことみたいな顔だね」

仲子は勢、

「何故なの」

と、云はずに居られなくなつた。

「何、御迷惑なら云はないだつていゝけれどもね」

「いやあね、何故なのよ」

「お前かたのことさ、いづれ。――あのひと、長男ぢやないつていふ話だつたね」

仲子は怪訝に思ひ、

「えゝ、何故？」

と、母の面を見た。

「ぢやあ他家へ入れるわけだね」

「さあ……」

「さうぢやないか、後繼者があれば、二男からは自由ぢやないか――實はね、いろ／＼お父樣とも御相談したんだが、どうせお前、離れられないんなら、一層佃を養子にしたらどうかと思ふんだがね……」

仲子は、

「――どうして？……」

と、目を瞠つた。

「――變ぢやないの、家にはちやんと和一郎だつて、保だつて居るのに――」

「それはさうさ、家のためぢやないよ、何も此那こと――お前達のために考へたことにきまつてるぢやないか」

仲子には、母の云ふ意味がはつきり飲みこめなかつた。飲みこめない乍ら、彼女は本能的に強い警戒を感じ、

「私達のためつて――私達は私達でやつて行けてよ」

と云つた。多計代は、齒痒さうに、

「だから、お前は世間知らずだと云ふんだ」

と、きめつけた。

「第一、考へて御覽、學校のことだつて、お父樣の紹介や何かがあつたからこそ、あゝやつて津村さんも直ぐ引受けて下すつたんぢやないか、それでなくて誰が素性も知れず、背景もない佃に、其那好意をしめすものか」

仲子は、十のものなら、大きな聲でこれは十だよ、十だからそのつもりでお受取り、と繰返し云つてからでなければ、十の親切を與へられないやうな母の性格を情なく感じた。餘りその聲が大きいのでつい、えゝ何だ！　と思つて仕舞ふ。今も、苦々しい氣持で、仲子は母の言葉に沈默で答へた。

「世間に對してだつて、佐々姓を名乘れば、どこの誰だか知れもしない佃で居るより、どんなに重味が増すか知れやしない。さうでもしたら、ちつとはあのひとの價打ちも出るだらう」

仲子は、むら／＼とし、

「そんな價うちなんぞ、つかなくたつていゝわ」

荒っぽく云つた。

「佃は佃で結構よ――人間の價うちなんて――そんなことで左右されないものよ」

「お前は今目が眩んで居るからね、さぞ立派な佃に見えるだらうが――」

多計代は、刺すやうに、悠くり云つた。

「さうでもしなければ、少し極りのわるい御仁體だよ」

「極りのわるい人なら人でいゝのよ。そんな――養子にするなんて……」

佃と自分に與へられた屈辱の感じで、仲子は顏が赧くなるやうであつた。彼女は、幾らか心を鎭め、母に說明するやうに云つた。

「母樣は、ちつとも私の心持がわかつていらつしやらないのよ。彼那に云つたぢやありませんか、母樣たちとは根本的に目的の違ふ生活を

する積りだつて――それに、佐々なんて、大きい口から見たら、やつぱり何處の誰だか判りもしない名の一つよ。佐々が通用する中だけ、母樣なんか動いていらつしやるからだけれど……」

「どうせ、そりや私は狹い生活しか知らないよ。だがね、事實が、今度の場合だつて證明して居るよ」

「――さうなら猶、私はいやよ」

「まあ、あのひとによく話して御覽」

多計代は、皮肉に笑つた。

「お前はいやでも、佃はいゝと云ふだらう」

其事について、仲子は佃に一言も話さなかつた。

數日經つた夜、佃も其處に居合せた緣側で、多計代が突然、その問題を再び取り上げた。

「どうだい――この間の話、勿論佃さんにもしたんだらうね」

仲子は不機嫌に、

「しないわ」

と答へた。

「…………」

佃が傍から訊いた。

「何です？」

「――……」

すると、多計代が、

「いろ／＼將來のことについてね、私達がいつまでついて居られるものでもないから、お父さんとも相談したことがあるんですが――仕樣がないぢやないか、仲ちやん」

仲子は、さすがに母も、いきなりは云ひ出せずに居るのに、好意を感じた。彼女は、

「だから、もういゝことよ」

と云つた。

「いゝですみますか」

庭を月が照して居た。八つ手や梧桐の廣い葉の面が、濡れたやうに光つた。反對の側の樹蔭、枝の奧は異樣に暗く、庭がいつになく迫る力を持つて見えた。膝を抱へてそれを眺め乍ら、仲子は母と佃との問答を、熱心に聽いた。佃は勿論斷るに定つて居る。斷るに定つて居る――

「さういふのが私共の考へなんですがね――」

軈て多計代が一段落で、佃の返答を求めた。

「尤も、仲子は貴方も御存しの通りの性質だから、まるで恥辱でも受けるやうにお腹立ちですがね」

仲子は、耳を裏向けにするやうな集注で、佃の言葉を期待した。

「――……」

「どうです、私共は貴方に假にだつて、決して惡いとは思ひません」

「――考へて見ていづれ御返事いたします」

仲子は、くるりと後を向き、

「そんなこと――考へないだつてもうわかつて居てよ」

と、叫ぶやうに云つた。

「貴方、そんな積りおありになりやしないんぢやないの」

默つて居る佃を見つゝ、多計代が云つた。

「お前は引こんでおいで――佃さんは佃さんの意見がおありだらう」

仲子は、皮肉さうに落付いた母の言葉で、絕望的な不安を覺えた。多計代は我知らず彼方にこづき、此方にこづきした佃を、今度は仲子ぐるみ、一層確り自分の手の下に結びつけて仕舞はう、として居るのだ。仲子は萬一其那ことになつたら最後だと思つた。何とかして自分を離すまいとする母の愛より、仲子は、生存の根柢を脅かされるやうな恐怖を感じた。佃が、即座に、一言の許に――仲子が豫期して居たやうに、その問題を笑殺して仕舞はなかつたことは、彼女にとつて深い不安であつた。

佃が立つて行く。踵にくつついて行つて、仲

なに、それ、貴方、本當に考へる必要のある問題なの」

と、立つたまゝ脊の高い彼の顔を見上げた。

「私――いやよ」

「…………」

「私共の生活といふものは絶對に無くなつて仕舞ふことよ、若し其那ことしたら」

「だから考へて見ます、と云つたでせう？」

「禮儀上の挨拶？　ぢやあ―」

「…………」

「えゝ、本當によ。私にだけ早くきかして。どつち？　勿論いや、ね―」

「ええ……然し――若しそれが貴女の幸福になるんなら、私は――どうせ捧げた體です」

十一

本心の明かでない、其癖善に對手の感謝を強ひるやうな佃の返答は、仲子の心を暗くした。此の曖昧な返事は、佃に對する母の辛辣な批評を自ら思ひ起させ、仲子を不安で苦しめた。貴女は、どうせ捧げた體です、と云ふやうな佃の言葉に醜味を感ぜず、そのまゝ受取る程幼稚でなかつた。同時に、恐ろしくて、それを彼の僞善的な云ひ廻しだけだとも思ひ得ない。而も、彼女の理性は、その返事が、非常に複雜な性質のもので、言外に、彼は養子になることを大して迷惑と感じても居ない――それどころか、或はなつてもよいのに、たゞ仲子の思惑を憚つて、淡然とした言葉で答へたと思へなくはないことを、告げ知らす。――

仲子は、第一、母の期待通りの返事を佃がしたことが、殘念であつた。母は、それ見ろと、内心思はずには居られないであらう。それ見ろと思ふことは、取不直、佃が、彼女の豫言通り處世術に惡狡い男で、利用する爲に仲子を結婚まで引きずつて來た、と云ふ推測を承認することになる。仲子は、二人の愛のため、此は思ふに堪へなかつた。佃の名譽の爲、自分の名譽のため、母の爲、人間の心に潛む眞の愛の純潔の爲、仲子はどうしても、此問題は成就させまいと決心した。

たゞさへ人を信じ得ず、時々自分の疑惑が實現するのを見て、一種の誇りさへ抱いて居る多計代は、更にその裏通りの人生觀を強めてしまふだらう。佃が、萬々一（實に萬々一、と渾身の力をこめて仲子は思ふのであつた）自分との結婚に不純な勘定を加へて居たとしたら、此世でそれは、さう易々のさばれない事を知られなければならない。仲子は、このやうに母と衝突し、周圍に反抗してまで、まともなものにしようと努力する愛が、單に佃が自分の愚かさにつけこんで、愛するやう努力するやうに仕向けてゐる結果だと、どうして思ひ得よう！

その晩、仲子は病的に切ない心持になつて、佃さへ颯爽とした態度であつて呉れたら、と思ひ、泣いた。生活に於て自分が孤獨である、と云ふ心持が彼女を泣かせた。

其後折々多計代が、

「どうなつたえ」

と云つた。

「駄目よ――無かつた話にして頂戴」

そして、仲子は佃にせつついた。

「早くはつきりした返事、してしまひなさつた方がよくてよ。本當に斷つた方がいゝんだから、分つて居るぢやないの」

仲子が居ない時、居る時でも、多計代は何かの機會で佃を捕へると、返答を求めた。

「貴方、あれ程、仲子のためになら何でもすると云つていらつしやるんだから、自分の面目を食むやうなことはなさらないでせうね。――ちや

んと、外國からよこした手紙だつてあるんだし……」

佃は總毛立つたやうな顔色と眼付とで、

「私の眞心は、きつと、今に判つて下さるでせう」

と、震へんばかりに云つた。

「私は、何でも堪へます」

然し、佐々の養子に成る、成らぬ、否とも應とも、それは明言しなかつた。佃は何故か、その點になると、非常な用心と頑固とで、自分の意志を明さなかつた。次第に業を煮やし、多計代は仲子の顔さへ見ると、そのことを云ふやうになつた。或日、仲子は苦しみに堪へられなくなつたので、到頭、

「何と仰云つても駄目」

と、宣言して仕舞つた。

「假令、佃がきいても、私がいやです。佃がどんな動機からにしろ、承知して御覧さい、後で、決してそれを愉快にお思ひになれはしない。私、そんな皆の生活の淨らかさを濁すやうなこと、決していや！」

事實さう展開すれば、仲子の云ふ通りに彼女の感情は動くであらうのに、多計代は揶られたやうに激した。涙をこぼしつゝ云つた。

「全く――全く親の心子知らずだ。――そんなに親を苦しめて何がいゝ。嫁に行けば、もう他家の人で、私が死んだらもうそれつきりだ、野たれ死をして、この上恥をかゝさないがいゝ！」

仲子も泣きながら云つた。

「ねえ母様、杉苗だつて大きくなれば別に離れて育つでせう？その通りよ、人間の生活も――ね、何年か後に、きつと母様は、私が此那に強情に云ひ張つたよさがお分りになつてよ。私だつて譯なく強情は張らないつもりよ」

傍に居た弟や妹は、一人立ち一人立ちして、部屋を出て行くのであつた。

母は、その間にも、法律上佃を入籍させる準備をして居た。仲子はちつとも知らなかつたが、机の前に居ると、

「お呼びでございます」

と、女中が來た。

「なあに」

多計代は、憤つて、何も手につかない風で坐つて居たが、

「佃といふ人は、恐ろしい男だね」

と云つた。

「どうして」

「どうしてつてお前、あの人はちやんと、養子になれないのを自分で知つて居るぢやないか」

仲子は譯が分らず、默り込んだ。

「此間父様が、會で井田さんにお會ひなすつたんだとさ、それで、佃を入籍させるについて、種々相談しておおきになつたら、昨日、戸主は養子縁組が、法律上出來ないことになつて居るつて、返事があつたよ」

佃は、岡本の二男であつたが、遠縁の佃の名跡を繼いで居たのであつた。

「本當にね、つい忘れて居たわ」

「まあ〳〵お前はそれでさぞ安心だらうが、私達こそいゝ面の皮さ、佃さん腹んなかで、さぞ可笑しくておいでだらう」

「眞逆。あのひともそれは氣がつかなかつたのよ」

「さうだらうか――怪しいもんだ。然しまあ、流石十五年アメリカを流れて來た人だけあつて、上手いものさ、否ですと一言、はつきり云つて仕舞へば、もう此處に息子顔をしては居られなくなるのを、ちやんと知つて居る」

「あゝ〳〵」

仲子は故意と大きな聲で歎息した。

——可哀さうに！　あのひと、悪口云はれる爲に生れたやうなものね——

やつと笑ひ乍ら、

——一人生れて、伸子の夫と成る匆れ、だわ——

戸籍の事情で、多計代の感情は一變した。彼女は、佃に狡しい打算がないのなら、その證據に、一日も早く佐々の家を出ろと云つた。

——お前もいやだらうが、私も隨分今日まで我慢して來たんだからね、直ぐ明日にも別になつて貰はう——

娘を愈々手許から奪ひ去られるといふ絶望を、多計代は涙と罵詈とででも現すしか、やり場を見出せないやうに見えた。彼女の誇強い氣質は、自分の悲しみを弱々しく認められ、同情されるに堪へないのだ。猛々しく熱情で自らを燃し盡さうとするやうに罵るのであつた。

——それやもう、お前には居るほど邪魔な娘だらうが、まだこの子が小さいからね、もう少し生かして置いて貰はう。さうやつて、私の運命の縮むのを見て居るのは、さぞ面白からうよ——

ああ、伸子は何と云つて自分の内の親愛を云ひ表してよいか判らず、泣いた。彼女は幼女時代から、母とは普通の親娘と違ふ情熱で結ばれて來た。互に強い愛と憎とを持ちつゞけて來た。母は女性として、伸子にとつて、或時は全き母であり、或時は友達であり、或時には競争者であつた。とにかく、母は伸子に向つて、存在のあらゆる角度を、生のまゝ、強烈に打ちつけて生きて來たのであつた。伸子にとつても、母は全力を要する生存の對照であつた——自分と母との性格の差を自覺し、生活態度を批判し、一言に云へば、彼女の模製でない一女性として自分を形造つて行く爲には、伸子は、生半可の力を費したのではない。普通、娘が母親に抱く懐しさ、休安と、正反對の生活燃焼の、異様な閃光が二人の間に在つた。今その門を經て次の生活門に移らうとする時、伸子の魂を滿す、この苦しい、この輝いた、追想の蝟集を、何と母に告げよう。そして又、伸子は涙の底に思ふのであつた。何と自分達母娘の愛は並はづれであらう、離れると云へばこのやうに全力的に傷け合ひ、はたき合ひ、つまりはその勢で離れなければ、離れることも出來ない程、深く愛し合つて居ると云ふ有様は。——

より情熱的で無い、平和的な佐々は、妻と娘とのこのやうな心的格闘に、手の下しやうがなかつた。彼は一方に妻を宥め慰め、一方伸子に心から歎息して訴へた。

「いつも家庭のトラブルを惹き起すのはお前だよ、何故もつとテンダア・ハアトになれないかい、愛を受け入れなさい。——平和に暮さう……え？　自分も人も苦しめる主義なんぞ捨てちまへ——

伸子は辛うじて、

——主義なんぞぢやあないのよ、父様——

と、云ひ難い悲しみで答へるだけであつた。

佐々も、心痛から、單純な實務家らしい怒りかたで、終には、

——さあ出て行け！　お前が親を捨てるなら、俺も子を一人捨てた。さあ、永久に出て行け！——

と、叫ぶのであつた。

四

彼等は引越した。家は、吉祥寺前の齋藤の離瓦塀と、葉茶屋の羽目との間の狭い露路の奥にあつた。両親の家まで、吉祥寺を抜けると十五分ばかりで行けた。

彼等が移つたのは、八月の暑い盛りであつ

た。伸子は、家さがしに毎日歩きすぎたので、熱を出し、床について居た。引越しの日も、彼女は寝床の上から、庭傳ひに佃夫が本箱を運び出すのを眺めた。

それが行つて仕舞つてから、伸子は、床の上に立つて、少しふらつき乍ら着物をなほした。母は、獨り、二階の緣側で長椅子に居た。凝と團扇を膝のところにあて、軒先から繁つた梧桐の青い葉の照りの下に、沈んだやうに横はつて居る。伸子は裏階子から登つてゆき、默つてその傍に佇んだ。母も默つて居る。餘程經つてから、多計代は、娘の方を見ずに訊いた。

「もういゝのかえ？」

「大抵いゝらしいわ」

二人はそれぎり、又言葉をとぎらした。さうやつて居てはきりがないので、伸子は、

「──ぢやあ……」

と云つた。多計代の顔に、引歪むやうな苦しげな表情が現れた。それを見ると、伸子は、自分も胸板を剝がれるやうな苦痛を覺えた。

「……行つて參ります」

迚も他の訣れの挨拶は出なかつた。明かに、今は涙を制しかねて居る母を、伸子は二目と見て居られなかつた。彼女の、咳拂ひとも何か云はうとする前ぶれともとれる暗い聲を後にし、どし／＼階段を降りた。足に力を入れ、一歩一歩降りる時自分の眼からも涙がこぼれた。下に降りきると、暫く堪へ難い心持で、彼女は手摺の柱に頭をすりつけて泣いた。別に暮すのは當然で、その上皆が希望したことだのに、不思議なものだ。自分の育つた家をいざ去るといふことは、此樣に悲しく辛く眞實別離の感が魂を貫いた。古びた家の柱等が急に目を覺し、出て行からとする自分を、愕いて見守つて居るやうにさへ感じる。伸子は今を境に自分が此處で過した幼年、少女時代の思ひ出のすべてが、家と倶に後に遺るのを感じた。自分は獨り去る。然し思ひ出はいつまでも、當時の新鮮さ、多樣さで、この家に生きつゞけ住みつゞけるであらう。左樣なら！　不思議な、明るい、暗い子供時代の生活よ、總て左樣なら。

其家は西向きで、崖のとつぱさきに立つて居た。午後になると、西日が小箱の口のやうに、たつた一方に開いた緣側からさし込んで來た。力一杯に、西日は部屋の壁際まで照りつけるのだが、それ丈風もよく通ると見え、伸子は大して暑くも感じなかつた。此那小つぽけな家、此那西日。伸子は珍しい心持で、暑くないキラキラした夏の斜光を浴びて坐つて居た。丁度、其年は、伸子は家庭の建設に邁進して居た。彼等は、貧しいポケットから捧へる最高を拂つて、やつとその不便な住居を手に入れたのであつた。

引越しのごた／＼も鎭まり、佃は朝毎、大學へか、さもなければ、その頃就職した私立大學へ出かけた。八時頃。それから夕方四時半か五時まで、伸子はたつた一人で暮すのであつた。永い明るい夏の日が何とゆる／＼經つことか。

或午後、伸子は八疊と六疊との境の開け放した襖によりかゝり、ウクレリーを彈いて居た。

例によつて、西日は、もう疊三分の一位のところまで、眩く躍り込んで居る。粗末な譜本を膝の前にひろげ、胡坐を組み、伸子は譜と首つぴきで、フラットの多い民謠を稽古して居た。

Hao, hae, haae……ハオ、ハエ、ハアエ……、ボロンボロンボロンと三重音の繰返しをつけるわけなのだが、伸子の指は、迚も、譜本の插畫に、頸から大花環をかけてウクレリーを彈いて居るハワイ青年のそれのやうには動かない。一つ位きつと、かんどころがずつた。或は押しが

むらで、肝心の音が鳴らない。伸子は、頭で拍子をとりつゝ、一二三、一二三、何遍となくやりなほした。毎日口を利く對手もなく暮すと、伸子はさうやつて、せめて樂器に合せてでも自分の聲を出したいのであつた。

ハオ、ハエ、ハアェ……

何と下手なことだらう。三味線のひける人は、きつと忽ち上達するに違ひない。熱心にやり乍ら、伸子の頭はこのやうな事を考へる。それればかりか、彼女はいつの間にか、隣家の物音を悉く聞いて居た。二軒長屋のやうな構造で、伸子の住居と隣家とは、羽目板一枚でぴつたりついて居た。まだ顔を合せたことはないが、その家には支那人一家が、日本人の家族と暮して居た。男の子に支那人の湯を使はせて居るらしく、バシャ〳〵水の音がした。

「坊ちやん！　さ、いゝお子、ね

日本の、家事をとり扱つて居る女の聲が表面は優しく、腹には何かして居るらしい情無さで聞える。何とか、言葉がちな支那語で、母親が息子にものをいひきかせるのも聞えて來る。伸子は、自分の樂器の音に邪魔され意識した。ふと支那語をいやにおとなしく聞きる——愈々喇叭をつけて而自につれ、伸子は目的のわからない憂愁に捕はれた。——捕はれたと云つては當らない、西日が餘りきついので、伸子の内心から憂愁が蒸發するとでも云ふやうだ。

別に家も持ち、佃は職業を得、先づこれで自分等の生活が豫定通り始まつて居ると云ふ譯だが——伸子は、然し、何だかその生活に、自分を馴らして仕舞ふことが出來ずに居るのであつた。例へば或一つの晩餐會がこゝにある。料理は勿論、金縁の獻立通りに燕尾服の給仕によつて運ばれて居る。招かれぬ客も居ないし、主賓が缺けて居るわけでもない。乾盃から卓上演說まで、總て遺漏なくプログラム通り運ばれて居る。而も、始めから終りまでその席に連なり、プログラムの豫定通りの進行の證人となつて居るうち、其會合全體の裡に、自分が何の趣味も意味も感ぜず、突然變な不安に促されて周圍を眺め廻すやうな場合がある。傍の誰一人、自分の感じるやうな屈託は持つて居ないと云ふ發見で、彼は自分を慰め得るであらうか。逆に、益々自分のその場にそぐはない感じを強めるであらう。

伸子もそれなのであつた。細君といふ席が、彼女にぴつたりしないのであつた。どうぴつたりせぬかといふ原因を一口に云ふのは困難だし、不可能なことでもあつた。それは奥深いところにあるだらうし、纖細な氣持のニュアンスなのだから。たゞ一つだけ伸子に分つて居たことは、生活が廻轉する幅の狹さ、重さ、若々しい柔軟性の缺乏であつた。是からこそ自分達の生活だ。さあ、私の愛する人よ、多くの希望をもつて生活に踏み出すと、いつの間にか生活の方が、牧場の柵かなどのやうに自分達をとりまき、伸子はその裡に、夫といふ何處やら頑張つて動かぬ者と、鼻をつき合せてしまつたやうに感じるのであつた。

佃は、そのやうなことはちつとも感じないらしかつた。前晩寢床の上で背中を丸め「軍は潰走した。我等は勝利を得、敵將五人を捕虜とし云々」と下讀みをして置いたラテン讀本を持つて出勤して行く、歸つて來る。遅疑なく明日の朝も出勤するであらう。彼に、伸子は自分の感情を訴へるきつかけを見出せなかつた。それに、彼女は、自分達の經て來た感情の溢れた時々を回顧みた。互に知り合つてから今日迄、彼等に波瀾が有り過ぎた。周圍と戰ひつゝ互の愛を見失ふまいとする熱中、彼を守り自分を守る努力、いつもそれ等が、伸子の心は緊張しつゞけ、緊張させつゞけたのであつた。それ

等が無くなつたので、自分は張合ぬけがしたのであらうか？ 平和に處す法を忘れたアマゾンに、自分はなつたのであらうか。仲子は、そのやうに考へる時もある。然しその考へは、目前にある生活とそぐはない感じを、消す役には立たない。……

仲子は、ウクレリーを袋に仕舞つて、立ち上つた。

二

仲子は、臺所口に錠をかけて外へ出た。表の大通りでは、電車が喧しい軋りを立てて、埃の中を走つた。吉祥寺山門前の、甃のところでは、三人の少女が唄に合せて毬をついて脚の下を潜らせて居た。仲子は、鐘樓の傍を、裏通りへ拔けた。斜にもう一筋、ごた／＼した大通りを横切つて、靜かな屋敷町に出た。彼女は散歩がてら、母やつや子に會ふ積りなのであつた。

門の修繕で、左官が入つて居た。木の船の漆喰を、詰らなさうに小僧が攪きまぜて居た。つや子は、書生の手につかまり乍ら、氣をとられて其を見て居た。仲子は遠くからその恰好を見、思はず笑つた。書生がそれを見つけ、つや子に何か云つた。つや子は、ぴよいと顏をあげて、往來をゆつくり來る仲子を認めると、

「やあ、お姉ちやまあ」

と、とびついて來た。

「お母ちやまは？」

「いらしつてよ。おねえちやま、何故もつと早くいらつしやらないの、こなひだ、ぢき來るつて云つたのに」

「うん……」

仲子は、つや子を助けて、蓙や板切れの間をまたいで通つた。つや子は、仲子の袂の先を引かついで歩き乍ら、じろ／＼姉の手元を見て笑つた。

「はあ、見つけたな、おずるさん」

「うん、僕ちやんとわかつたの、だつて、この間仰云つたでせう？」

「――でもこれは違つてよ」

仲子は、空恍けて云つた。

「たゞの古新聞」

「譃ら！ わかつてよ、ちやんと見えるわよ、コドモノクニよ」

玄關に女下駄が揃へてあつたので、仲子は木戸から庭へ廻つた。西洋間の窓のアスパラガスの鉢植の陰に、客の小ぢんまりした束髮の後つきが見えた。七月、細々に入組ませるさせないといふ事で兩親と衝突した時、仲子は、あの窓のところに立つて汗と涙とを流した。仲子は、その時の自分の激しい言葉をはつきり思ひ出した。あれはもう過ぎたこと、生活は違つた容貌を持つて今流れて居る、さういふ感じが強く仲子をうつた。

つや子と芥かくしをして居ると、客を送り出した母が、窓から首を出して仲子を呼んだ。

「二階へおいでな」

登つて行くと、二間ずつと通して襖をあけ放ち、廣い方に緋の毛氈を敷いてあつた。大きな盆に、繪筆や筆洗繪具皿などをのせてある。多計代は、毛氈の上で唐紙を裁つて居た。仲子は、その光景を見ると、

「おや」

と云つた。

「繪の御稽古？ 泉さんがいよ／＼來て下さるやうになつたの？」

「あゝ。何だのかだのと例によつて、なか／＼捗取らなかつたのだけれど、やつとね、今日で二度目さ。この年で始めたんぢやあ、どうせ本ものになりつこはないから、せめて色紙ぐらゐ間誤付かないやうになれば大出來としないぢや

あね」

繪でも習はうと思ひ始めた母の心持を、伸子はいとしく感じた。

「それで結構ですとも！　打ちこんで稽古するものが出來ただけで萬歳よ、――どれ？　この前のは……一番初めの……」

「何しろ、何年も繪筆なんぞ持たなかつたから、からきしさ。小蘋さんの頃からずつとやつて居たら、どうしてこれだつて今頃は、小何とかだよ」

多計代は、自分の氣焔に興じたやうに、晴れやかに大笑ひした。屈託ない笑ひであつた。伸子は、繪の稽古が此節に心に影響するものかと、一寸感動した。伸子は以前から、母が和歌でも本氣でやればよいと思つて勸めたこともあつた。その方に却つて才能がなく、繪になつた。學校時代の若い時、野口小蘋に好意のある指導をされた、それが因縁になつて居るのだ。

多計代は、大色紙ぐらゐの唐紙に竹を描いたのを見せた。

「どうだい」

そして、自分も傍から覗き込んだ。

「かうと頭では分つて居るけれども、いざとなると、筆か何かもいふことを聽かないでね」

「ハヽヽ。まるで十年か二十年おやりになつたやうね、ハヽヽ、筆がいふことをきかない、は蟲がよすぎるわ」

「又ひやかす！　どうせお前には偉いよ。――それは冗談だがね」

多計代は、泉さんの繪を出して見せ、それについて二三批評した。

「如何思ふかい？　氣魄が無さすぎるだらう、私は玄人になり過ぎて、かじかんだやうなのは嫌ひさ」

伸子は、違ひ棚の下に、見なれない螺鈿の支那の、小箪笥が置いてあるのを見つけた。大膽な柘榴の實の圖案だが、象眼した貝の色が、深味もあり厚みもあつて、素晴らしく立派であつた。

「いゝのね、いつお買ひになつたの」

多計代は、竹の清書でもするのか、片手を毛氈について、筆に墨をふくませ乍ら、

「え……」

と、生返事をした。

「どれ？　あゝ、それかい、綺麗だらう？　例によつて父様のどらさ。私の道具箪笥にしろつて、下すつたの」

伸子には、夜、父がわざと知らん顏で、其大包みを部屋に運ばせて入つて來た樣子が、見えるやうであつた。

「相變らずフェイスフル・ハズバンドね……親切にして上げないと罰が當るわ」

「……私も近頃はさう思ふよ」

多計代は、首を曲げて、自分の描いた細竹の枝を眺め乍ら、緩くりいつた。

「近頃は全くいゝ父樣さ、私もお氣の毒だと思ふやうになつた……相變らず癇癪はひどいけれどね……」

「元からいゝ夫ちやないの」

「若い頃の氣むづかしかつたことと云つたら！　伸ちやんなんか知らないさ。……だけれども、まああれで、父樣もごく純な人だつたから持つて來たのだね。それでなかつたらお前……今になつて、いろいろ男の人を見ると、つくづくさう思ふよ……何なんかとは比べものにならない純粹さがあつたよ、確かに」

段々形になつて來る竹を眺めながら聞いて居た伸子は、女らしく自分の夫自慢をする母の調子の朗かさに愉快を感じた。だがほんのぽつちり、極くぽつちり、佗しくないこともない。――伸子は、自分が妻になつて、姉の罪のない夫自慢をきいて居るやうな傍ら心になつた。

「…まあ何ね、父様があれだけ愛していらつしやることが確かだから、母様もいろ〳〵強さうにしていらつしやれるやうなものね。土臺が大丈夫だから、安心してその上で跳ねられる…さうぢやあないこと？」

「さあね…そんなものかね」

階下で、二人は茶をのんだ。紫也の話をして居ると、如何かした喉がいらつき、仲子は顔を顰めて咳拂ひをした。すると茶飲茶碗を口の傍へ持つて行きかけて居た多計代が、手を止め、じろりと仲子を見た。

「おや、そつくりだこと！」

仲子は、無邪氣な氣持で訊きかへした。

「なにが？」

「咳拂ひがさ、お前の。佃もそんな、乙う氣取つたやうな咳拂ひをするよ」

仲子は、澁い、辛うじての薄笑ひで脣を歪めた。

「…いやあだ、偶然よ」

「さうぢやあないよ、そつくりだよ、だつて…」

仲子は、厭はしさうに、然し穩やかに云つた。

「さう一々神經質に穿鑿しないで頂戴よ、私は何の氣なしにするんだから―」

仲子は、和一郎が此頃凝つて居る寫眞の、誂物印畫を一枚貰つて歸つた。

夕飯の時、仲子は佃に話した。

「今日はね、おひるつから動坂へ出かけたのよ、そして一つ、新しい發見をして來たわ」

佃は、興味もなささうに、

「へえ」

と云つた。

「なんです」

「母様についてよ、少し違つた考へかたになつたの。これまで、私子供の時からの癖で、母様の云つたり仕たりなさることを、餘り重大にとり過ぎて居たのかもしれないと思ふのよ」

仲子は、今日印象を得て來た母の心の單純さ正直さを說明した。

「だから、いろんなものが―優しさでも、意地わるでも、その時々によつて聯絡なく、率直に無技巧に出るのね、きつと。どうしてやらうとか、斯うしてやらうとか云ふやうな計畫的なものはないのよ、さうお思ひなさらないこと？」

仲子は、動坂から歸る途々其等のことを考へ、平和に至る道を見つけたやうな心持を感じた。母との交渉は、彼女にとつて絕えざる重荷であつたが、そこに、理解を單純にする一見地が出來たやうで、仲子は淸らかささへ感じたのであつた。佃もさう分れば、氣の持ち方も違ふだらうと、仲子は樂しい期待をもつて其を話し出したのであつた。けれども、佃は、無感動の狀態から出なかつた。彼は、小楊枝を使ひつつ、額の上に皺をよせ、斜に仲子を見上げて答へた。

「僕は批評しませんよ」

「批評ではなくよ、見かたよ。どうせ私共は一生無關係にはなれないんだから、なるたけ賢い理解を持つ方がいゝと思ふの、お互の爲に…好意のある、けれども、うにてな心の持ちかたね…」

「―まあ、分る時が來れば分りませう」

さう云ひ乍ら、彼は、顏に一種特別な―餘り高貴でない表情を浮べて、指の節を一本づつぽき〳〵折り鳴らした。仲子は、眼を逸し切ないやうな顏をした。佃が、一般に、人間的興味のある活々した話題を好まないのが、仲子に不滿なのであつたが、其にも增し、彼が、氣のない、一寸面倒くさい時、ぽき〳〵指頭の平たい、無骨な指の節を鳴らすのが、仲子には厭なのであつた。彼は、近頃其を始めた。その骨の鳴る音をきくと、仲子は氣が滅入つた。

「恐ろしい。彼も指をぽき〳〵折る。カレーニンも、冷淡な、いやな顔をして机の前で指を鳴らした。彼はカレーニン的なのだらうか？ では？」

伸子は、今も衝動的に、「やめて」と云はうとして片手を延した。が、譯の分らないものに制せられて默つた。彼はもう一度鳴るだらうか。

――伸子は、自分に對して他處々々しい、暗い、苦痛を待つやうな氣持で、彼の手元を見守つた。

然し、彼は其に心付かず立ち上つた。そして、机の前で、勤め先から持つて來た風呂敷包みを解き出した。

伸子は、母のところで見た朝鮮の小筆筒のことを思ひ出して、云つた。

「蝶貝でも隨分いゝ色のあるものね、繪具箱にするんだつて、まるで大きな蛋白石を嵌め込んだやうなのを見て來てよ――今日」

「ふうむ、よつぽどするだらうね」

「――さうね。……ほら、よく水色つぽいのや薄い紫色みたいなのがあるでせう？ そんなのとはまるで違つて複雑なの、光りかたが。……縞みたいだつたわ」

けれども佃には、それの話題に關係なく、机の上の原稿やペンを片よせ、やゝ唐突に云つた、

「あれを見て置いて呉れた？」

「えゝ」

「どう？」

伸子は、

「さうね」

と云つた。

「持つて來るわ、とにかく」

佃は、彼の専門に屬する小著書の下拵へをして居た。通俗的な、波斯文學概論であつた。伸子は、丁度その目的に適つた素人讀者の代表として、選ばれたのであつた。伸子は、一寸程厚い原稿を、自分の机の抽斗から持つて來た。

佃は、自分の仕事に對する、親しみの現れた手つきで、ぱら〳〵頁を翻した。

「何か苦情がある？」

伸子は、彼の氣を挫く氣はなかつた。佃が、重い筆を働かして、其丈の仕事をしたのは、彼女も健氣と感じて居るのであつた。

「苦情は大袈裟だけれど、もう少しどうにかした方がいゝと思ふところはあるわ」

「どこ？」

「紙が挾んでありやあしないこと？ 説明が足りないのよ、處々。まるで豫備知識のないものが讀むと、物足りないの。それに何といふか、材料の底まで、たつぷり筆が届いて居ないやうなところがあるやうな氣がするんだけれど……」

佃は、辯解的に云つた。

「そりやあ、小説のやうなものとは違ひますよ。面白いものぢやないに決つて居る。――何しろ片手間にや……材料を整理するだけだつて、容易ぢやあない」

「さうよ、だから猶更、いゝものに仕上げなくてはね」

伸子は、働りつゝ、奥から閃くもののあるのを自覺して云つた。

「仕事から云へば、學校の先生よりこの方が貴方の本道なんだから、云ひわけをしないですむやうなものに仕上げなけりやあいけないわ」

彼等は、原稿について、暫く話した。昨日の午後、今朝と、其を讀み乍ら感じたのだが、伸子は、其を書いたのが夫だからと云つて、自分が些も寛大な批評者となれないのを知つた。却つて、慾が加はるせゐか、敏感で、氣むづかしくなつた。凡庸な小冊子の著者によくあるやうに、常套語を平氣で數多く使つたり、廻りくどくて、明快な思想も感情もない文に出會ふと、伸子は悲しみと腹立たしさを一緒くたに感じた。

「駄目、駄目、これはなあに？」

禮儀も何もはね飛ばした癇癪を破裂させない爲に、仲子は、それが下書きだといふことや、夫の初めての試みだといふことを、絶えず念頭に置く必要があつた。同時に、彼女は、自身に對して疑ひをもつた。心の優しい人といふものは、斯ういふことに對して此那氣持は持たないのだらうか。自分が見榮坊で偏狹な故で、斯樣な、謂はゞ特殊な文學的感覺の缺乏を、此程苦にやむのだらうか。——

佃にも、種々理窟があるので、彼等は數度、重苦しい沈默に陷つた。一區切すんだ時、仲子は吻として云つた。

「あゝ、やつとすんだ！　頑張りの寄り合だから大變だ」

彼女は、手を延して、赤インクの栓をした。

「さ、一寸息ぬきに喋らない？」

「喋つてもいゝが——動坂で十分樂しんで來たでせう」

「樂しんでなんか來やしないわ、別に。貴方と外の者とは違ふぢやあないの——何か珍しいこと無かつた？」

「さあ……。ぢやあ斯うしよう」

佃は、いゝ思ひつきだといふやうに云つた。

「どうせ、たゞ喋つて居るんなら、喋りながらこれをつけませう、ね？……頭を使ふことでもないからいゝでせう？」

彼は、机の上から、下積みの茶表紙の小帳面を引出した。仲子は、其を見るとふざけたやうに、

「ふあ——」

と、閉口した。

「閻魔帳？」

仲子は、冗談の下に本心を現して云つた。

「樂しみたい、あゝよし、小遣帳——洒落にもならないわね」

佃は、落付いて小遣帳に日づけを記入し乍ら、じぶくる仲子に教訓するやうに云つた。

「何年もあとで見ると、その頃の生活が分つて面白いものになりますよ。今日は——と、パン十五錢……多賀君の送別會費三圓。君の方は？」

仲子は、興ざめ乍ら答へた。

「——つや子にコドモノクニを買つて行つてやつただけ」

仲子の部屋は、北向の三疊で、曇硝子の障子が二枚たつて居た。上一枚は透徹る硝子で、葉茶屋の土藏だの、穢いトタン塀の天邊、自分の家の古びた庇などが、何時も同じ光線の中に見えた。其處から、空は見えなかつた。曇硝子の上に、前に住んで居た子供の、太い鉛筆の、終りになる程大きい、亂暴な惡戯書があつた。

5×82+1.1+000

三

彼等の家には、訪問客といふものがなかつた。

高等教育を、日本で受けなかつた故であらう、佃に友達と呼ぶ者は殆どなかつた。

佃は、夜よく近所へ散歩に出た。仲子もついて出た。彼等は槇や檜葉類を少しづつ買つた。それ等を、西日のさす崖ぶちや、むき出しな格子の左右に植ゑた。其邊は、遠くに小石川臺の梢を望むぎりで、立てこんだ各々の家には、木らしい木の生える餘地も無かつた。槇は露路の中で、青々と、子供の目を和くらしかつた。午後、小學校のひけ頃になると、男の子たちが、其二本の、四尺たらずの槇の周圍に、いつとなく集つた。

「おい、何だい、この樹」

「松だよ」

「違ひますよ、松ぢやあねえよつと。松の葉は觸るとちくちくするよ」

ひつそりしたかと思ふと、いきなり一人が叫んだ。
「あら！　あら！　わあるいの」
するともう一つの、ひそ〳〵聲が臆病らしく云つた。
「叱られるよ」
佃が家に居ると、仲子は惱ましい思ひをした。彼は、其那聲を聞きつけると、大人對手のやうに險しい顏つきになつた。そつと下駄を下げて來て庭へ廻し、板塀について居る切戸へ忍びよつた。彼は音を立てずに掛金をはづすと、突然姿を現し、物も云はずに子供達に向つて近づいて行つた。ひそ〳〵して居た連中は一目散に逃げ出す、狹い露路に入り亂れて響く跫音が、子供の本氣な恐怖を語つた。度重なると、滑稽を越えて、仲子は實に寂しい、淺間しいやうな氣がした。
「仕方がないのね、珍しいからよ、——庭へ入れたりおいゝわ」
佃は亢奮しつゝ、神經質な焦立ちで、
「折角ひとが植ゑたものを、荒るなんて怪しからん。僕はなかへは入れませんよ、決して—」
仲子は、彼の、頑固な所有慾といふやうなものを感じるのであつた。

散歩に出て仲子が買ひたがるのは植木より本であつた。古本屋をよく見た。何か目につくと、彼女は其をぬき出し、
「これ」
と夫に示した。佃は、その本を手にとつて、あつちこつち返して見て、訊きかへした。
「是非なくてはならないもの」
その調子が、仲子をしよんぼりさせた。彼女はあきらめて本を元の處に返した。
「——ぢやあ又にするわ」
仲子は、買つても、買はないと同じやうに、さつぱりしないのを知つて居た。彼女は、夫婦として暮して見ると、佃が、元からたつぷりしない暮しを經驗して居ながら、馴れ、大膽に快活に、其を支配することを知らないのを意外に感じた。
仲子は、大概家に居た。本を讀んだり、崖下に井戸がある、その井戸端で、長屋の女達が喋るのを聽いたりして居た。永く一日が過ぎる。彼女は、佃が歸るのを待ち切つた。彼女は、堤を切つたやうに話したがり、彼にも喋つて貰ひたがつた。けれども、佃は、仲子が面白がる事を、餘り面白いとは感じないらしかつた。餘り身を入れて聞かなかつた。氣が乘つて彼の話すのは、多く勤め先の出來事、同僚の噂であつた。佃は、低い、これはお前にだけ話すのだが、と云ふ意味を示した聲で云つた。
「今日、幹事のところへ用があつて二三度行つたら、×君が、私に小さい聲で、幹事に何か御用ですか、と訊いた」
「ふうむ、それで？」
「私は、えゝ一寸相談がありますと云つただけだか——皆氣の毒に神經質だ。私なんか幹事だらうが誰だらうが、平氣で行つて話すから、きつと皆、意外に思つて居るんでせう」
佃は、それが得意でなくもない。——
「ゴーゴリね」
と笑ふが、心の裡で仲子は、夫もその中で、明かに小勤人の一役を受持つて居るのを感じ、彼が其を不平ともしないことに哀愁を感じた。
秋が進んだ。庭に、月がさした。その月の光は崖下の櫛比した屋根々々を照し、終夜、床下で蟲が鳴いた。霜が下りるやうになつてから、まだ暗い午前六時頃、寒く凍つた道路を、工場へ出かける人々の朴齒の音が、仲子の寢て居る枕に響いて來た。
仲子は、段々自分の心に切ない渇望が溜つて來るのを感じた。彼女は毎日絶え間なく飢ゑて

居た。それ等は、誇るに足る程高い程度のものではなかつたにしろ、内的に育つ盛りの若い仲子にとつて、食物と同じに必要な藝術的雰圍氣の缺乏が、深く彼女を苦しめた。佃は、長年アメリカの女の生活を見馴れて居たから、寢たい丈仲子を眠らせた。日常の買物も自分で厭はずした。臺所さへ仲子一人でぼつねんとしないでよかつた。然し、眠り足りたスポンヂのやうな頭腦で、貪り讀み、感じ考へたとしても、それを共に語るに誰が居よう！　佃は、近頃のやうに生活が定つて仕舞ふと、ちよい〳〵した此までの精神上の荷物を、何處へか卸して仕舞つたやうに見えた。——彼の文學は、數年前の貯藏であるシエクスピア、ベーコン問題から進まず、雜誌さへ、恐らく一冊以上目を通す事はなかつた。彼は、それでも本能的に教師らしいところがあつて、うまく仲子の突撃を躱す手練はある。——これは何と異樣な孤獨だらう。仲子は恐ろしい絶望的な寂寥に打たれて、激しく泣き出すことがあつた。

「あゝ、何故此那に寂しいの？　寂しいの？……」

「もう少し、どうにかしませうよ—」

佃は、當惑し、眉をひそめ、仲子を抱いて背を撫で乍ら、なだめるやうに頭をよせて、繰返し繰返し囁いた。

「其那に泣くもんぢやありません、ね、今によくなる。——今に馴れます」

その馴れるといふ事こそ、何より仲子が可怖がつて居るのであつた。人間が、飼はれた獸と同じやうに、軈てはどんな境遇にでも馴れるといふ事實は、悲しく恐ろしい。自分も、今に矢張り、この生活に馴れて仕舞ふのだらうか？　そして、幾年か經つうちには、趣味も、情熱も失ひ、最初成らうと目ざして居た者とは似ても似つかない者になつて、さうなつてしまつたのさへ知らず、一生を終るのだらうか？　仲子は、目に見えないうちにすぎ去る生活を惜しみ、不安に襲はれた。——

三月になつてから、或日、動坂へ行つた。親戚の子供が來合せて賑やかであつた。皆を集めて、和一郎が寫眞をとつた。其がすむと、和一郎は仲子だけを、又別に迎へに來た。

「今日は光線の工合がいゝから、姉さんだけでもう一枚とらない？」

「さうね」

仲子は、元來他處ゆきになつて、商賣人に寫眞をうつされることが嫌ひであつた。彼女は、弟にすゝめられると、近頃自分がどんなに見えるか、と好奇心をもつた。

「おやあ、とつて貰はうかしら……でも、ぼやぼや幽靈みたいなのはいやよ」

「大丈夫さ！　此頃天氣にしくじるなんて、決してありやあしないさ」

仲子は、弟と連立つて客間の庭に立つた。

そして、木犀の前に立つた。

數日後行くと、其が現像出來て居た。

「丁度乾かしたところよ、もういゝだらう」

仲子は、一緒に和一郎の仕事部屋へ行つて見た。洗濯場の奥を區切り、藥品を澤山並べた小窓の處に、印畫が乾かしてあつた。

「まあ何枚もあるのね、皆あの時の？」

「ううん、あとでつや子と大學の御殿へ遊びに行つた時のもある。——こなひだのだけぢやあ、まだフヰルムがあまつてたもんだから」

「どれ……拜見」

「これが大學で撮つたの」

つや子が、兄とふざけて、笑ひ乍ら此方を向いて來るところを、不意に撮つたと見え、手脚の動きが律動的で美しく見えた。

「これがこなひだの。元ちやんが少し動いたんでぼやけちやつた。——姉さん一人の方がいゝや」

「さう？」

伸子は、セピアにやきつけた一枚を渡された。印畫としては綺麗に仕上つて居た。けれども、最初の一瞥で、伸子はその寫眞が、自分に相違ないのに、すらりと承知出來かねる變な感じを受けた。自分と思つて居たのとは何處か違ふものが、正面を向いて兩手を束ねた顏に漲つて居た。こんな太い縱の陰翳が、二本も、元から自分の眉の上にあつただらうか。老けた、複雜な、險しい顏つきであつた。其だのに、口許ばかりに、穩かに／＼と、取繕はれたやうな微笑があつて、醜い顏であつた。

「私の顏本當に此那？」

きゝたい位であつた。

伸子はつく／＼自分の顏を眺めた。

いつまでも默つて居るのを、和一郎は、寫眞に不滿なのだと思つたらしい。彼に辯解的に云つた。

「もう少し、今少し大人しくてもよかつたな、この次、又やきなほして上げませうね」

「これで結構よ、有難う」

伸子は、寫眞を、もう一遍見なほし乍ら、云つた。

「よく／＼はつきり撮れて居るわ」

四

高臺の濃やかな青葉と其を透す日光の美しい氣候が來た。崖ぶちの、彼等の家で、生活は相變らず單調であつた。生活は狹く無感情に廻轉して居る。伸子は、不可抗力にそ[illegible]に卷込まれて居ながら、いつまでも不注意で、抵抗を失へなかつた。伸子の氣分が平和なのは、二人が別にこれと云ふ話もせず、笑ひもせず、ぼんやり縁側に腰をかけて、樹でも見て居る時であつた。丁度、二匹の犬が、日向で前脚を延し、その上に顎をのせて、うつら／＼して居る時のやうに。けれども、その眠つたやうな平穩は、いつも永續きしなかつた。先づ、伸子が自分達の有樣に、云ひやうない物足りなさを感じ出すのが常であつた。これが二年前、あのやうな熱情で生活し始めた男女の有樣であらうか。

よき結婚生活といふ、あの時分の標題は、勿論全然無くなり切つて居た譯ではない。伸子が、自分の感じる不安について彼に話せば、彼は立所に、その標題を再びとり出した。それで彼女を安心させようとした。然し、それとても、近頃は何と疑はしいものになつて來ただらう。伸子は、夫が、言葉でする愛の誓で、愛す愛すとだけ云へば萬事解決する、と思つて居るのが味氣なかつた。愛しても食物はいるやうに、愛しても、伸子には活潑な生存がいるのであつた。毎日、細かいことでは、互の心に[illegible]て、まる[illegible]放[illegible]とり[illegible]はず、伸子がやり切れなくなつて涙をこぼすと、急に熱烈に、これ程愛して居る心が通じないかと訴へられる。——伸子は、途方に暮れて云ふしかなかつた。

「ね、かういふことは、言葉に現せない毎日毎日の感じから來るのよ……貴方のはまるで、一旦自分は愛してゐると思ひ込んだら、頑固に思ひ込む程度の強さを、愛の強さだと勘違ひしていらつしやるやうね」

「あゝ、其那皮肉を云ふ！　ちやあさう思つていらつしやい」

其故、犬のやうにたゞ並んでゐるのが侘しくなり、

「ねえ」

と呼びかけはしても、彼女は大抵あとの言葉を云はず仕舞にした。彼はそれを怪しまうともしない——是か、平和な家庭生活といふものであらうか。

伸子は、沼に浸つて居るやうな生活氣分に、堪へ難くなつて來た。

外の世界は五月だ。明るい潑剌とした五月だ。自分の心も曾てはこのやうでなかつたか？

初夏の空氣が充滿して來るにつれ、旅行に出たい渴望が募つた。出かけると云つても、伸子に心當りは、一箇所しかなかつた。其は、祖母が一人住居してゐる東北の田舍だ。其處なら、佃も承知するに違ひなかつた。彼女は、仕事をしたいといふ理由で、佃の承諾を得た。

農繁期なので、東北本線の急行はすいて居た。伸子は、日のさし込まない側の、居心地よい場所をとることが出來た。汽車に乘りたての騷然とした氣持のうちに、埃々して不潔な大都會の外郭を拔け去り、追々田舍が車窓の外に開けて來ると、伸子は、名狀し難い廣々とした快さ、落付きが、心に滲みて來るのを感じた。田畑の上を、電信柱や人や森が、スイ、スイ、來ては飛び去る。伸子は、其にも子供らしい愉快を感じた。程よい動搖や規則的な車輪の響が、彼女の神經を鎭めたのだが、伸子の心には何かそれ以上、うれしさがあつた。うれしさ、悅ばしさ。たゞ違つた景色を眺めつゝ旅行するだけの樂しさではなかつた。自分の體を壓へつけて居たものが、やつととれた、アヽ！　と、初めて周圍を暢々見廻した刹那の爽やかさなのであつた。伸子は貪るやうにその心持を味つた。此のこだはりなさ！　こんな自由な豐富さ！　この、力が漲つて來る洋々とした心持。――

沿線の風景は、伸子にとつて、子供の時からの知己であつた。列車は那須野ケ原にさしかゝつた。一面若葉をつけた倭樹林の間を、汽車は走つた。それ等は、綠の波のやうに、列車の左右で泡立ち戰いだ。大氣の澄んだ地平線の彼方には、日光の山々が、巓の雪を燦かせて、聳え立つて居る。若し人か四邊に居なければ、心をこめて兩腕をこの山々に向つて延したい程感動を覺えた。彼女は、再び自分に還る生活を感じ、勇しく疾び駈ける馬に立ち騎りでもして居るやうに、確り、窓に向つて兩脚で突立つて、遠い〳〵山巓を眺めて居ると、車體の搖れと自然との交感が音波のやうに錯綜して、伸子の全身に音樂的リズムがこみ上げて來た。

シュッ　シュッ、カ、カ、

（――然し、彼の山々は――）、いきなり、疊句が記憶の底から浮み出て、その後にとびついた。

シュッ　シュッ　カ、カ、――然し彼の山々は――

シュッ　シュッ　カ、カ、――然し彼の山々は――

――彼の山々は――

伸子は自分の亢奮に驚いた。自分はこのやうに野原や山々へ、ノスタルヂアにかゝつて居たのだらうか？　そして、又何と貪慾に、自分は自分の自由を享樂して居ることであらう。伸子には、夫をつれて來て、この悅びや鮮やかな自然の印象を分ちたい氣持が起らなかつた。彼女の氣持は逆であつた。彼女は、この山々を、この倭樹林を、自分だけで眺められるからこそ、嬉しいのであつた。傍から誰にも妨げられず、心全面で眺め、味ひ、感覺する、その快さこそ、實に彼女に、久しく失つて居た自由の蘇生を感じさせるものなのであつた。

五

家ぢうに鏡は、たつた一つあるきりであつた。水銀に縛の入つた古い掛鏡が、流しの横の柱に懸つて居た。田舍へ來てから、伸子は每朝顏を洗ふ時、氣をつけて其鏡を覗いた。日によ

り、或は光線によつて、起きぬけの額がすらりと晴れて見えると、伸子は其日一日、正しい心で暮せる瑞相のやうな喜びを感じた。何の工合か、陰翳が濃く現れて居ると、暫く陰氣になつた。彼女はそこを幾度もこすつて、もう一生この襞はつききりなのだらうかと思つた。

　祖母は女中と、おとよさんと云ふ、元は他人だが今は遠い親類のやうになつた婦人と、三人で暮して居た。伸子は毎日野天に出て、祖母と二人で庭樹の刈込みをした。柊や生垣の檜葉などが、春の芽をがむしやらに延して居た。冬越ししてもさく\/になつた野馬の毛を刈るやうに、それ等に手を入れるのだ。木鋏で刈り乍ら、伸子は祖母と種々なことを話した。

「これからはなか\/いそがしいどんだ。茶はつまなけりやならないし……何故なわけか、茶を摘へる男が年々減つて、錢を出してもはあ來てがないから、來年はもう、茶は製しないかも知れない」

「樂しみでもないんならお止めの方がいゝわ、どうせ、手間をかけるだけ澤山もとれないんでせう」

　緣側にべしやんと坐つて、胡桃をむいて居るおとよさんが口を出した。

「御隱居さん、そりやお氣をおもみなさるんでね、はたでお氣の毒でございますの」

「呑氣に遊ばせよ、もうおばあ樣なんか、いろいろの樂しみだけを仕事になさつていゝお年よ」

　祖母は少し太い小枝を挾み當て、弱々しい腕に力を入れやつと剪んで、答へた。

「空家のやうにしては置かれまいつちえ」

「——東京へいらしちまへばいゝわ、何も世話なんかなさらないですむから……いゝ御隱居所になつてよ、小ぢんまりした。——今度私と一緒にいらつしやい」

「……ふむ」

　祖母は考へ乍ら、おとよさんに經木の鍔廣帽を出させた。

「日がてりつけて禿があついどんだ。——お前達、二人で住めばよかろ」

　伸子は離れて、自分の刈つた楓の枝ぶりを眺めた。

「何處へ？　御隱居へ？」

「さうよ、そしたら家賃なぞ、馬鹿々々しく出さないでよからうちえ、おれが住むよりその方がやくに立つになあ」

「其んなこと駄目よ、おばあさまのために建てたんですもの……」

「おれが住まはせろと云つたらよからう？」

　伸子は、陽氣に笑ひ乍ら云つた。

「有難いけれどお斷りするわ。叱られるとこはいから」

「……おれのやうな田舍婆が行つたら、さぞ笑はれつぺなあ。——ほんにおれなんぞお國風で、稼ぐことばかり敎へられ、字も書けないで、今になつてからはあ口惜しいことよ」

　祖母は茶の間に、人に會ひに引込んだ。おとよさんは緣側に腰かけて居る伸子に云つた。

「本當に御隱居さんも、あちらへ御一緒におなりなさるとようございますのにね。……なかなかその氣におなりなさらないんですものね。貴女、よく勸めておあげなさいませよ。貴女の仰云ることは不思議におきゝになりますもの」

「……今度もたのまれて來たのよ、お連れしろつて……」

　おとよさんは語勢をつよめて、

「是非さうなさいませ」

　と云つた。

「——それは、私が斯うやつて御厄介になつて居りますうちは、及ばずながらどんな御世話でもしますが……私も……」

彼女は少し顔つきをかへ、笊の中を見た。

「いつまで斯うして居られますか分りませんし—」

彼女は中年まで小學校の教員をしてゐた。それから結婚し、その夫に二年前死別したのであつた。

「何かお話があるの？」

「え……少し……いろいろ私も先々のことを考へますもんですから——」

暫くして、およよさんは伸子に訊いた。

「もうどの位いらつしやるお積りですか」

「さうね」

伸子は足をぶらぶらふり乍ら元氣ない笑顔をした。

「當なしよ、歸りたくなる迄居るわ」

およよさんは、ちらりと女らしい偸見で伸子を見た。

「……佃さんが何でもよく御解りですから、伸子さんはお仕合せですわ」

「…………」

「……よくお獨りでいらつしやいますことね、男の方だのに。お手紙參りますか」

五日ばかり前、彼は、伸子が滿足するだけ逗留すればよいこと、彼は彼の愛が理解される時を樂しみにいくらでも待つ、と云つてよこした。その手紙を貰つた時、伸子は嬉しいより腹立たしく、淋しかつた。彼は、勿論伸子が仕事など出來ず、遠いところで彼に心を捕はれて暮して居ることを知りつゝ、それには一言も觸れず、自分の堅忍を體裁よく示して居た。伸子はそれつきり、細かい手紙も書かないのであつた。

それから二三日後の或晩のことであつた。低い生垣の外から、

「伸子さん、伸子さん」

甲高に呼ぶ女の聲がした。

「其處にいらつしやるの、伸子さんぢやありませんですか」

伸子は其時、東京から送つてよこした新聞を皆に讀んで聞かせて居た。外は暗く、頭の上に電燈があるので、伸子の方からは誰も見えなかつた。

「どなた」

「誰だごんだ？　今頃」

祖母が外をすかしながら呟いた。

「私、飛田です。そちらへ廻つてようございませう」

「——どうぞ—」

飛田は三保といふ名で、東京の會社員と結婚して居る此村の人であつた。伸子と親しい間柄ではない、寧ろすきでない間であつた。何時此方に來たのだらう、何故出て來たのだらう。一人だと思つた三保が、中の口で下駄をぬぎ乍ら誰かに云ふ聲がした。

「さあ、お前もお上りよ、何故？　大丈夫よ！」

伸子は立つて見た。式臺に上りかけた三保の後に、地味な女が一人、暗い中で佇んで居た。そして、ひどく遠慮し、もう夜が更けて居るから、このまゝお暇すると云つた。兎に角三人上ることになつた。二人の女は、三保の妹とその友達で、三十近い人々であつた。三保はけばけばしい大島の着物を着、騒しい調子で挨拶した。

「私ね、昨晩おそく來ましたんですよ。今日はこの人達と一日喋つて、さつき大神宮樣の方へ散歩に出ると、玉が間い抜けた顔をして、伸子さんが來ていらつしやる、つて云ふんですもの。頓馬ねえ、早くさう云へば何をおいても上つたのに、ぢやあ是非これからお目にかゝつて來るつて、上りましたのよ、本當に田舍の人つたら、氣が利きませんね、頭がないつたら、ありやしませんわ、で、貴女はいつ？　いつおいでになりましてすの—」

「さうね、もう十日程になるかしら—」

伸子は三保の辯舌に後退りするやうな氣がした。
「いつ迄何か、お書きになつていらつしやるんでせう？」
「いゝえ、どうして！　のらくらよ」
「私もふだんはいそがしうござんしてね、お父樣が有難いことに、私のしたいことは何でもしろ、と云つて下さるんで、この間ぢうはお習字をやつて居りますし、お花の稽古はする、家のことはする、間には赤ちやんまで拵へなけりやあならないんですもの、ハヽヽヽヽ、大いそがしですわ、ハヽヽヽヽヽ」
丸髷に結つて、内氣らしく默つて居た三保の妹が苦笑ひをして、
「まあ」
と云つた。
「だつてさうぢやあないの！　ねえ――なりか、寅田が嬉しがつてくれませんわ」
三保のヒステリツクなのが誰の目にもついた。彼女は、何かに憑かれたやうに、白粉を濃くつけた顏の上に眼を光らせて、一人で喋つた。二人の同伴者が止めまいとした理由や、迷惑さうに默つてちよい／＼伸子を見たり、三保を見たりして居た理由がわかつた。氣が變になりかけて居るのかと、伸子は少し不安を感じた。
「――この頃はずつと御丈夫？」
「いゝえ、貴女、ひどい目に會ひましてね――」
三保は婦人科の病で手術を受け、退院するとすぐ此方に來たのだと云つた。
「お父樣と居ると、ね、ほら、どうしたつて貴女――」
伸子は、三保の氣持がどうかして居て、何を云つても性的なことの方にひきつけるので、默り込んだ。二人の連れも其が氣遣ひらしく、
「――そろ／＼失禮しませうよ」
と頻りにすゝめた。
「又ひるま、ゆつくり上つて御話するとしてね、御隱居樣ももうおやすみの時刻でせうから――」
「さうしませう……伸子さんはいつ迄此方です？」
伸子はおとよさんに答へたと同じ返事をした。三保は、
「まあ！　あんなこと仰云つて！」
と叫んだ。
「旦那樣を放つて置いて、旦那こと仰云る奧樣がありますか……一人で置いちや第一あぶないぢやありませんか。よく辛抱なさること、うちなんか」
「さあ行きませうよ、姉さん」
門の方へ出て迄も、三保の盛に喋る聲がした。やゝ暫くして、祖母がさもげんなりしたやうに云つた。
「何だべ、あの女！」
伸子はその調子の滑稽さにつられて笑ひ出した。――が、普通夫婦と云ふものは、本當に三保が云つたやうなものなのだらうか。さういふ疑念が伸子の心に生じた。彼女は、自分達夫婦が別々に旅行することについて、三保の云ふやうな危險は、全然感じることさへ知らなかつた。
伸子は寢ながらもそれを考へ、自分に不安や嫉妬を起させない佃の性格を却つて物足らず感じた。佃の身持の堅さは、人間の面白さ、愛らしさなどに魅せられることの少いところから來て居るやうに思はれたのであつた。

六

おとよさんはよく小一里ある町まで買物に出た。彼女は其度、伸子に用を訊いた。伸子は男物の單衣を買つて貰つた。其を仕立てさせて佃に送つた。祖母はおとよさんが出かけると、
「――買物ばかりぢやなからう、又新町へよる氣

なごんだ」

ひそ〳〵聲で、話對手かた〴〵一緒に縫物をして居る近所の老婆に云つた。

「さうよしか。…でもおとよさん、ほんとに若く見えるない、三十一寸出た位で通るものなし、…父いゝ旦那樣がすぐ見つかることよ」

祖母は、老年で震へる指先に針を持つてめどを通し乍ら、年とつた女の底意地わるさで、

「俺がおとよさんだつたら、四十越して嫁さるなんぞ厭だなあ、今の者は年とつても一人で居られないかしらて…」

「ほんによ、…フヽヽ」

仲子は、おとよさんが行先に不安を感じて、養老保險でもかけるやうに、結婚しようと焦つて居るのが歯痒くもあり、哀れでもあつた。それを、目引き袖引きする、無智な年とつた女共にかこまれて居る彼女の境遇に同情を持つた。

彼女は祖母に、

「おばあさまは何とつたつてあのひと、一生仕合せに暮させること出來やしないんだから、五月蝿く彼此仰云らない方がいゝわ、誰だつて仕合せを見つけて居るんだからね」

すると、祖母は妙に捩くれて述懷し始めた。

「――おれなんぞ、本當に不仕合せな生れとでも云ふんだらうなあ、若い時は若い時でお前のお祖父さんが事業々々で貧乏するし、年よりや年とつたで、息子にまで嫌はれるし…お前に會ふだけがおれあ樂しみなごんだ」

さう云つて、彼女は涙をこぼした。

おとよさんは、仲子と下手な五目並べなどしながら、身の上の不安を訴へた。彼女は新町にも、從つて町への買物にも、程なく出かけなくなつた。後で、彼女は、緣談が持り上つて居た歯科醫と會つて、自分から斷つて來たことを話した。――仲子は、女性の生活の樣々な、然し一樣に思ふやうには行つて居ない標本を眺めて居るやうに感じた。祖母にしろ、おとよさんにしろ、皆暮したいやうには暮して居ない。其でも生きつゞけては居る。どんよりと蠢き乍ら暮して居る。仲子は自分が、生活の不滿に降參しないのを賴もしく思つた。彼女等を見て居ると、仲子は、しんから斯う云ふ生活をしたくなく思ひ、邪魔は除け、根氣よく人生にぶつかつて、斯うと思ふ生活を開かうといふ熱意が湧くのを感じた。幾代かの家族の中に、せめて一人位、愉快に一生を回想出來る女があつてもよいではないか?

六月の中旬に、和一郎が徵兵適齡で、檢査を受けに來た。彼等は、さう澤山はない仲よい姉弟の一組であつた。仲子は、久しぶりで彼と數日田舍で暮せるのがよろこびであつた。和一郎は、近年肋膜を患つたので、乙種か、丙種かもしれなかつた。其故この滯在は、猶心輕やかであつた。祖母の簞笥の抽斗に、古い風月の菓子箱があつた。昔の寫眞がしまつてあつた。仲子の、生れて百日目といふのだの、少し大きくなつて、和一郎が天鵞絨の水兵帽をかぶつて乳母に支へられて居る横に、仲子が姉らしく澄して立つてゐるのだの。祖母は、ほく〳〵して、今は大きくなつた彼等に其等を見せた。

「おや、此那のがあつたかしら…この時分ぢやなくて、ほらよく人攫ひが來るつて、可怖かつたの。――吉さんを送つて行つたかへり、坂の角から、貴方をおんぶして、夢中で家まで駈けて歸つたことがあつたぢやないの」

「本當ね、滑稽だな。だがあの時は本氣で可怖かつた、姉さん、まるで一生懸命なんだもの」

「今度は、和一郎が姉さんをおんぶしてやらにやなるまい」

「――こんなでかいの? 參つちやふなあ」

「ハヽヽヽ」

祖母が居ないと、彼等はもつと打明け話をし

た。和一郎は、戀愛模索時代であつた。憧憬、不安、熱情が、時々激しく彼の精神を搖ぶるらしかつた。彼は、自分の細かい心理狀態や、豫備校の學生仲間にある、特殊な、彼自身の趣味とは全然合はない戀愛病的雰圍氣などについて、信頼に滿ちた穩やかさと、若々しい正直さとを以て話した。伸子にとつて、話題は自分達と違ふ世界に屬することなので、深い興味を感じた。が、それより彼女の心を動かしたのは、和一郎が、今も子供時代からの結びついた氣持を失はず、自分だけには直截に、幾分頼りにさへ思ふらしく、其那ことも話してくれる心根であつた。伸子は、その信用を、寧ろ力にあまつて感じた。

和一郎は、櫻坊の種を、口から出すと、海に小石を投げるやうに、庭に遠く放り乍ら、云つた。

「―……姉さんなんか、僕達みたいぢやないんだらうな、きつと―」

「―さういふことについて？　ちやんと解つたり落付いたりして居ると云ふの？」

「うん―」

「―結婚して居るから？―」

「―さうばかりでもないけれど―」

「若し、結婚して居るからさうだらうと思ふんだつたら、間違ひだわ……結婚は結論ぢやないもの、出された試驗問題、それもなか〳〵手硬いの……」

伸子は、我知らず暗示的な微笑を浮べた。和一郎は、睦しいやうな複雜な表情をした。

「―妙なもんだな。僕、級の奴の氣持なんか、一言喋らせりや大抵分つちやふんだけど―全くお孃さんには參るなあ、妙に手應へがなくて、ふは〳〵で、直ぐ目から水は出すし……」

伸子は、和一郎の表現に愛情を感じた。

「―色どりの派手な空氣見たい？」

「まあさうね―それに友達同士の話なんか、僕閉口しちやふさ、傍で聞いて居ると……他愛なくて……心配になつちやふ」

間を置いて、伸子は訊いた。

「あのお孃さん―よく寫眞なんか撮つてあげてた―あのひとどうした？　矢張り遊んでゐる？」

「あゝ、あのひとはよくない」

和一郎は、淡白な調子で、はつきり答へた。

「―先、鞦韆しに來て居たんでせう？　僕、何だかよくない性質がありさうな氣がしたもんだから―姉さん、どう思ふ？　上目で人を視るなんか、陰性で、僕嫌ひさ」

伸子は、センチ・バンタルであつた彼が、いつか先存適應者らしく足許の確かさを持ち始めたと思つた。

「……なか〳〵確りして居るのね、私より偉い」

「其那ことないさ」

「本當！―生れつきで仕方ないが、私みたいに忽ち空想するのもよしあしだ」

伸子は、ぼつり〳〵、獨言のやうにつけ足した。

「―私だつても見えるのは見えるんだけれど、何かの廻り合せで好きになると、『それはさうだが』と思ふのね、嫌ひなところなんぞ消える筈だと思ひ込むのね。……處が消えなんかしない、實際になつて見ると。其でがつかりする位なら、貴方みたいに、初めつから蜃氣樓なんか見ないやうな性の方が、却つていゝかもしれない―」

床に入つてから、和一郎は伸子も知つて居る或娘について、彼女の意見を訊いた。伸子は何故ともなく、彼の興味が今はその少女にあることを覺つた。彼女は、少し返事に困つた。彼女の印象によると、その令孃は、先刻和一郎が

誇示した、派手な色どりの空氣ばかりみたいな少女でない代り、飾り鮮やかな、愛らしい處もない、つまり、平凡すぎる生れつきに思へて居たのだ。隣室に電燈をつけてあるので、薄明りが境の欄間から天井にだけさして居た。

「どうつて……ごくあたりまへぢやあないこと……だけれど私、自分が其でいゝ加減いやな思ひをさせられたから、彼此云ふのいやだ」

それにつけても伸子は考へた。自分と佃との交渉が始まつてから、何と澤山、反佃の言葉をきかされたことだらう。云ふ人々の目的は、自分に佃を斷念させたい爲であつたらうが、事實はさうならなかつた。逆に作用した。彼女は、萬一和一郎に戀愛問題が起つたら、せめて自分だけは、本當に何等かの言葉が彼から求められる迄、よき沈默を守りたいと思つた。この弟はどんな戀愛をし、どんな結婚をするであらう。成人して居る彼は、姉の戀愛や、結婚生活を何と感じて、見て居るであらうか。伸子は不圖好奇心を覺え、半ば笑ひ乍ら、

「若し貴方結婚するとしたらどんな人がいい？」

と訊いて見た。

「さあ――分らないな。僕達の心持、さういふ實際問題までまだ行つてないな」

「まあ、急ぐべからずだ」

「うむ」

和一郎は眞面目に返事した。

「僕もさう思つてる」

軈て、彼は少し工合わるさうに、然し、深い興味をもつて居るらしく云つた。

「佃さんなんか、どんな氣持で結婚したんだらうな」

「本當にね」

或デリケートな感情から、伸子は其以上云はなかつたが、それこそ、彼女の心に在る問ひの一部分であつた。佃は、どんな心持で結婚し、その結婚生活を導いて行く積りなのであらう。伸子には、それが確り摑めなかつた。例へば、斯うやつて、自分を田舍へ寄來して置いて呉れる彼の心持にしろ、彼は、伸子になら何をされてもよい程溺愛して居るから、放つて居るのであらうか。又は、仕たいことをさせて置けば、軈ては飽きてかへつて來るさ、と餘裕をもつて居るからなのであらうか。伸子は、そのどちらもが混り合つた心なのだと思ふのだが、さういふ工合に彼女を扱つて、彼は、さてどんな生活に二人で達さうと思つて居るのであらうか。窮極へ行くと、いつも伸子は分らなくなつた。口にこそ明かに云へないが、彼女は、自分の達したいと思ふ生活の核心になるものは、感じて居た。彼にそれがあるとすれば、感じ程速いものはない。何處からか、必ず、眞に伸子の心にも通じて來て、彼女の失望を救はないと云ふ事はあるまい。

その證據には、（伸子は考へる、考へる、彼が、自分を愛すなどとは唯一言も云はないうち、自分は、彼が愛すのを感じたではないか。――

自分等二人を嗤ふやうに、伸子は、又斯うも、この頃は思ふ折があつた。――是等は、みんな自分が勝手に考へ、勝手に苦しんで居るだけのことなのだ。彼には、何も複雜なことは無いのだ。全く――彼が自分でいふ通り、彼には何もい、い、無いのだ。

幻滅の痛みを、徐々自分に思ひ知らさうとするやうに、伸子は、もつと、もつと澤山、自分と彼について侮蔑的なことを考へた。然し、彼女はよく知つて居る。自分の心は其を本氣にはして居ない事、そして、萬一他人がその半分のことでも彼について自分の耳に囁いたら、其奴と絶交するであらうことを。打たうが蹴らうが、彼はもう彼女の一部であつた。自分に痛みと苦

しみとを感ずることなしに、伸子は、彼を小づくこと一つ、出來はしないのであつた。

やゝ暫く經つて、伸子は不圖和一郎の聲をきいたやうに思つた。夙に眠つたと思つて居たのに。——伸子は、そつと、

「起きてたの」

と聲をかけて見た。和一郎は返事せず、ムニャムニャ譯の分らない言葉を呟いた。寢言だ。伸子は暗闇の中で、自分に向つて笑つた。彼は眠り乍ら、舌で乳を吸ふやうな音を立てる癖があつた。和んだ心持で耳を傾けて居ると、和一郎は急にはつきり、

「あ——」

と、長く引張つて溜息をついた。伸子は反射的に片肱つき、起き上つて彼の顏を覗き込んだ。夢中にしては溜息に實感がこもり過ぎて居た。眠ることは、只でも眠つて居た。彼はもう一度あゝと短い吐息をつくと、今度は低い迫つた聲で、

「あゝ、何苦しいなあ——何苦しいなあ」

さう叫び乍ら、彼は胸の上に載せて居る兩手の指先を、細かく、もぐやうに動かした。計らず、彼の暗い魂の裂け目を見たやうに感じ、伸子は愛と痛みとを感じた。彼女はそつと、目を醒さないやうに片方づつ、胸からおろしてやつた。大きな、暖かい、重たい手であつた。彼は、何も知らず眠りつゞけた。

和一郎が歸つて仕舞ふと、森閑とした生活が戻つて來た。伸子は里心づいた。夕方、村に、焦臭い霧が低くこめる。山裾の町の電燈が、點々と燦き出すのを、廣い耕地越しに縁側に立つて眺める。東京の街々を包んで居るだらう騷音、押し合ひ、けたゝましく交通機關が往來する光景に想ふと、そこに温かい人間の息と、生活の犇きのあるのを感じ、伸子は、今直ぐにでも俥を呼ばせたいやうになつた。彼女は、雨戸が閉り、すつかり夜になりきるまで、ひどく落付きを失つた心持になつて苦しむのであつた。十燭の電燈が、黒光のする茶の間の板戸をテラ〳〵輝かすと、田舍の眠たい、永い宵が伸子を鎭めた。祖母、おとよさん、女中、各々の膝を振り返りもせず、靜かに絲を巻いたり、針の錆を落したりして居る。彼等の上には、チクタク、チクタク……

生命の流れの寂として充實した感じが、屢々伸子を動かした。夫は、このやうな夜、彼の机に向つて、一人何をして居るであらうか。彼のところにも、この靜寂がありさうな氣がした。

伸子は、大きい小さい幾多の反動を經驗した後、段々、佃は佃として生きる場所があるのだ、と思ふやうになつて來た。世界には、無數の、何でもない男といふのがある。その一人で彼があつたとして、何の惡い事があらう。自分が、彼から期待したものを得られないと云つたつて、それは、自分が惡いのではないか。伸子は、小さい自分の灯の下で考へた。彼自身が、現在の生活に滿足して居るとしたら、それを妨げる權利が自分に與へられて居るだらうか。自分のオリヂナリティーの缺乏にも苦しまず、日本へ波斯研究の爲の本を集める仲立ちとして、彼が存在することも、或は意味のない事では無いかも知れない。彼は、伸子に突つき動かされなければ、彼の立身の希望と、日常の習慣と、堅忍の美徳の中にあつて、幸福なのであらう。——

動坂の家で、多計代の熱情や、伸子の、激しく彼をゆすぶる情に攻め立てられた佃を思ふと、伸子は變な氣がした。彼は全く困つたであらう。急に違つた仲間に入つて來て、前後から吠え立てられた、小膽な一匹の犬のやうに。

けれども、これから、伸子はどう自分の將來して暮して行つたらよいのだらう。彼の幸福の

種類は仲子のいるものではなかつた。夫が滿足して、その幸福を食ふのを傍から眺め、自分は食はず、微笑んで居るべきなのであらうか？　仲子は食ひたい人間であつた。きびしく空腹を感じる人間であつた。食はずには居られない人間であつた。仲子は、自分は自分で、彼の横で、欲しいものを見出すか、拵へるか仕なければならない立場に置かれた女であることを、知つたのであつた。賴めば、夫は彼の分を分けて呉れるだらう。然し、仲子にそれは食へなかつた。彼女は、もつと淸潔なものを欲した。

仲子は、これまで自分の心にあつた樣々の思ひ違ひ、子供らしい夢想、あれがたつた二年前と思へない程若く、稚く、夢中であつた自分の信賴などを思つて泣いた。けれども、泣きつゝ、人生の結局の譃りなさといふやうなものが朧氣乍ら感じられ、仲子は新しい勇氣を得た。消えるものはどしどし消えろ。遺るものなら自ら遺る。No sentimentalism.――然し、是まで自分が強ひても描かうとして居た夫といふものと、これは別れだ。

彼女は、一つ、夫をお客に置いても窮屈でないだけ廣く、さつぱりした心の宮を建て度い、と思ふやうになつた。自分に本當の生きる力があるならば、どうして其が建てられないと斷言出來よう！　そして、自分の矛盾に自分で憫笑し乍らも、仲子は、さうやつてやつて行くうちには、佃とて木の根つこではない、いつかは少しづつ變るまいものでもないと、希望を抱きなほすのであつた。自分が雄々しくならうとする決心、それが無駄でないといふ信念も、結局は最後に來るその芥子粒ほどの望によつて、全體命づけられることを、仲子は否めなかつた。

仲子は、佃のところへ手紙を出した。彼女は歸りたくなつたこと、彼が留守でも家へ入れるやうにして置いて欲しいことを知らした。佃から、仲子が歸らうとして居た日には、夜外出するから、その翌々日にするやうにと云つて來た。臺所の入口で、受取るなりそれ等の文句を讀み終ると、仲子は、體の內部からせき溢れたひとりでの勢のやうなもので、そのハガキを破いた。彼女は、もう歸ると定めた日を、翌々日まで延したりするのは厭であつた。

七

その夏、仲子は久しぶりで短い小說を一つ書いた。春から計畫して居た長いものは、內部的に不足なものがあつて遂に出來ず仕舞ひであつた。結婚してから、仕事が出來ないことが絕えず彼女の氣を重くして居た。それが、田舍に行つて居るうちに、幾分心の持方が變り、兎に角集注して四五十枚のものが書けた。出來榮よりも、書けたといふそのことが、仲子にとつては一つの吉祥であつた。仕事が出來るといふことは、自分や自分の周圍の生活に對して、曲りなりにも一つの精神的足場の持てる證據ではなからうか？　その足場が持てさへすれば、自分が田舍で、歎きと勇氣との縺れ合つた感激の中に思ひ定めたこれからの生活法――心持の上では、夫にたよらず自力で立たうといふことも、萬更見込みないことも思はれない。――仲子は、自分の心持が其處へ來る迄の、渾沌と動搖した氣持を書いたのであつた。其作品は、文學的には大して重きを置かれて居ない、或政治雜誌の附錄に載せられた。

揭載號を送つて寄來した日であつた。仲子は、活字になつた自分のものを讀みかへし乍ら、机の前で考へに耽つて居た。すると、表の格子戸が開いた。仲子は獨りつきりで居る晝間、がらりと格子の音がすると、四邊の空氣を衝き動かされるやうな不安を感じた。そのやうにして來るのは、乞食聲を出す、押强い物賣り

が何かに定つて居た。障子をあけかけたが、土間に立つて居る者を認めると、

「なあんだ！」

と、現金に聲まで變へて、伸子は嬉しさうに立ち上つた。

「いやなひと！　誰かと思つたぢやあないの」

和一郎であつた。

「今日は。——一寸本當のお客の眞似をして見たのさ」

「……有難う……」

「おあがんなさい」

伸子は、彼の躊躇するらしい樣子を訝つた。

「何故？　いそぐの？　それともオウトバイが心配？」

「そりやあいゝけれどどれ、今日は迎へに來たのよ」

「……——でもいゝぢやあないの」

和一郎は上つたが、落付かなかつた。彼は、

「いそかしい？　來られない？」

と訊いた。

「——行かれない事はないけれど……何か用なの？」

彼女は、呼びつけられるのはすきでなかつた。例ひ、その日出かける氣で居ても、不意に誰かを迎へによこされ、今直ぐ來いと云はれると、氣が澁るのであつた。

「お母さんが、話があるんだつて」

話があるといふのは多計代の慣用手段なので、云ふ和一郎も、聞く伸子も、思はず一種の可笑しさを感じて笑つた。

「そりやあ、話があるには定つて居るけどさ」

「今日は、でも少しむきよ」

「何なの」

和一郎は、云ひ難さうに、不器用に云つた。

「姉さんが今度書いたもの、それを讀んで、文句があるんだつて」

「ふうむ」

伸子は、心の中で一通り考へ、一箇所だけ、其かと思ふところを思ひあてた。それは、主人公の女の夫に對して、女の母が、或反感、敵意に似たものをもつて居ると云ふ僅の部分であつた。若し母が何か云はうとするなら、恐らく其處以外にはあるまい。

「ぢやあ行かう」

伸子は立つて支度をした。彼女は、早くこじれないうち、互にさつぱりするのが肝要と思つた。心持の上で、迷惑を受けずにはすまされまい父や、和一郎も氣の毒であつた。伸子は短いノオトと鍵を隣りに賴んで出た。

多計代は、氣輕く平常通りな伸子を見ると、

「——おいでなさい」

と、蟠りのある調子で迎へた。

「今日は」

母は、自分でせず、女中を呼んで茶を入れさせた。

「其處いらに、長崎のカステラがあつたやうだが……よかつたらお上り」

伸子は、母が、深く考へた結果或不愉快を抱いて居るのではなく、感情的にむしやくしやし、そのむしやくしやを、自分から棄てまいと、重々しく仕て居るのを感じた。

「何かお話があるんだつて？」

「……もうわかつて居るだらう」

「……和一郎が一寸話したけれど、細かくはわからないわ……何もまだ伺はないんだもの」

「——自分の書いたものだから、お前にや勿論わかつて居るだらうが、今度のは一體、どう云ふ積りで書いたのかい」

伸子は、氣まづさを我慢して、丁寧にモウティブの説明をした。然し多計代は、其を皆までしんみり聞きしめず、

「そりやあ、お前の理窟はどうでもつくだらう

おねー
と云つた。
「――理窟ではない、私の本當の心持よ――實はね、昨夜、澤谷さんが夕飯に來て、お前の今度書いたものを讀んだかと訊くから、ちつとも知らないと云ふと、奧さんのことが書いてありますよ、と云ふんだらう。どうせ碌なことぢやあるまいと思ひ乍ら、直ぐ買はせにやつて讀んで見ると――私は、何も活字にまでして、お前に赤恥を搔かされなければならないやうなことをした覺えはないよ」

仲子は不愉快になり、同情的な氣分を失つた。彼女は、自分の心を第三者として觀る習慣のない母が、問題は、例ひたつた二字の形容詞にすぎないとしても、自分を餘り芳ばしくない心の狀態で書かれたと思つたら、事實であれば一層いやに思ふのは無理ないとさへ思つた。其故、その厭はしさは厭はしさとしても、仲子が其作を書いた衷心の事情が分れば、或諒解が得られるだらうと、多くの口數を利いたのであつた。けれども、母の言葉で、仲子は索莫とした氣持になつて來た。知識階級の青年らしくもない澤谷の態度も、いやであつた。母の、それに動かされ方もいやであつた。仲子は、默りこんで、冷えた茶を啜つた。

「……そりやあ私はお前の親だから、私さへ、踏臺になつて居ればお前がよくなる、とでも云ふんなら、どんな目も辛抱しますよ。土足にかけられても、喜びます。けれども、恐らく其那ことはあるまい――たゞさへ、どんな工合だらうと世間から目をつけて居るのに、何も、それ見ろ、と思はれるやうなことを、自分から書かなくつてもいゝだらう」

彼女は、女らしい毒々しさでつけ足した。

「――それとも、何かい、お前の得にでもなるやうなことがあるのかい」

仲子は、相手が母でなかつたら、何と云つたか知れない勢で、

「おやめなさい」

と遮つた。

「さういふものの云ひやうをし始めたら、仕樣がないぢやありませんか」

多計代は、仲子の顏を見、幾分弱く云ひ張つた。

「……だつてさうぢやあないか」

彼女は、それから長く、亢奮した心のめりはりに引摺られ乍ら、仲子が佃との關係で彼女にかけた苦勞を思ひ知るべきだといふことや、仲子の藝術が、目に見えて墮落し始めたといふやうなことを攻撃した。仲子は、議論がましい其等の言葉から、眞心を打つものを受けられず、喰ひ違つた氣持で歸つた。

六日後、動坂から又迎ひが來た。土曜日であつた。今晩は、是非佃と二人で來て吳れといふ口上であつた。先日仲子が呼ばれた時、多計代は、いづれ、佃も呼んで話さなければならないが、と云つた。用事は其事なのであつた。仲子は、自分が書いたものによつて惹き起されたいざこざに、佃を卷き込むのは眞に厭であつた。氣の毒でもあるし、此處だけは自分の世界と思ふ心の中へ、どた〳〵多くの者に踏込まれるのが辛かつた。佃は、勿論讀んだに違ひないのだが、其について彼女には、一言も云はなかつた。

動坂へ行くと、二人はいきなり二階に通された。繪の稽古の赤毛氈などすつかり片づけ、隅の螺鈿の小箪笥だけが、遠い燈火に燦いて居た。母が上つて來て、床の間の前に、一つだけ離して置いてある座蒲團の上へ坐つた。仲子は、圍りから壓しつけるやうな扱ひ方に對して、反撥を感じずに居られなくなつた。世間話を一つ二つして、多計代は、

「わざ〳〵貴方までお呼びしたのは、他のことぢやありませんが」
といふ風に切り出した。
「この間は、何だかぐづ〳〵で伸子を歸してしまひましたが、私は、あれからずつと考へつゞけて、夜も碌に眠らない程だつたのです。いづれ、伸子からおきゝでしたらうが、貴方からも、意見をおきゝしたいと思ひましてね」
「お迎へだつたから佃も上つたんだけれど、これは、母樣と私だけが話してすむ事と思ふわ、佃は、關係のない人でせう」
「さうは思へないね……佃さん、貴方もお讀みでしたらう……どうお考へです？」
伸子は、夫が答へる顏を見て居られず、暗い廊下の障子の方を眺めた。
「……私は、御承知の通り、このひとの書くものには、絕體の自由を認めて居りますから……」
伸子は、自分に有利な辯明だのに、何故か、この寬大らしい返答から眞實を感じず、夫の狡さのやうなものを感じた。滑つこい、解つたやうな解らないやうなこの答へかたに、時によつて、伸子自身にも向けられる夫の道德となることを彼女は感じ、半ば[illegible]つて居る[illegible]が沈んで行くやうに思つた。何を書かうと、彼女の自由です――その自由を私は認めて居る。其故、書いたものは飽くまでも書いたもの。そこに、どんな苦しみや涙があらうとも、それは、自分や互の生活に全然關りない彼女の書いたもの――ほう、何と胸に滲み徹る、冷たい寬容さ！　伸子が、このやうな思ひをつゞけて居る間に、多計代は話を進めた。
「――それはさうでせうが……私はこの間から考へて、どうも伸子が今度あれを書いたのには、譯がありさうに――まあそこまで行かないにしろ、何か感化がありさうに思はれて來ましたが――さうぢやありますまいかね、公平に云つて」
佃が怪訝さうに、訊きかへした。
「どういふ意味でせうか」
多計代は、佃に答へず、伸子に向つて云ひかけた。
「ね、さうぢやあないかい、伸子、よく良心に手をあてて反省して御覽――お前も、苟も文字を書く人ならその位は分るだらう」
伸子は、既に此等の押問答に、云ひ難い嫌惡を感じた。不快な、何だか心の底に觸れない、殆ど不必要と思はれる言葉をぐん〳〵つみ上げて行つて、結局何をどうしようとするのだらう。
「つまり、どういふことを仰云るの？」
多計代は、激しい眼つきで伸子を見た。
「云へと云ふなら云つてもよいがね――餘り佃さんにお耳ざはりがよくあるまい」
「何なの」
「――一言で云へば斯うさ、あれは、まあ全部ではなくても、私についてのところは、どうもお前が佃さんに、暗々にでも唆かされて書いたとしか思はれないのさ」
「……………」
「どうだい？」
「……………」
多計代は、居住居をなほした。
「これは、尤も私だけの意見ではない――皆もさう云つて居るんだが……」
「――――」
夜の廣い疊の上に、明るさ、皆の口を噤んだ沈默が、寂々と漲つた。伸子の心の中もその通りであつた。彼女は悲しくも、腹立たしくもなかつた。その程度を越して、[illegible]まで傷けられた感情で冴えかへつた。
多計代は、
「默つて居ちやあ分らないよ」
と云つた。硬ばつてしまつたやうで、伸子は

口も利けなかつた。

「……私の考へ違ひだつたらあやまりますがね」

暫くして、仲子はかすれたやうな聲で咳拂ひし、夫に云つた。

「……貴方、あつちへいらしつて頂戴」。

母が佃に謝れる譯はない。佃が、自分の夫となつたといふだけの因緣で、このやうな屈辱を堪へる譯はない、と仲子は思つた。

「いらつしやい」

佃は、腕組みをしたまゝ、

「うむ」

とうなつた。彼が不決斷で居るうちに、多計代が、

「話もすまないのに、お前の勝手でそんなことはさせられません」

と、云つた。

「——でも母樣は、後へ引けない方でせう？」

「引くわけがないから引かないのです、——お前のやうに自分が惡いと思はない者はない！」

激情的な意地張で、多計代は仲子に謝れ、謝れと強ひた。これから一切、家庭に關するらしいことは書かないと誓へと迫つた。それは仲子にとつて、不可能なことであつた。今、假に氣やすめの謝りや誓をしても、それは、いつか必ず破れる事だ。又、仲子には、自分が、母の強調する意味で惡いとも考へられなかつた。氣の毒なことと惡いこととは自ら別に思へた。それに、多計代の方から亂暴に與へた數々の言葉に對して、母の云ふことだからと折れる度量は、仲子には持てなかつた。

「では、どうしても自分の云ふことは枉げないと云ふんだね」

「——お座なりを云つても仕方がない……」

「ぢやあ仕樣がない、お前と私とは根本的に相容れないのだ。——さういふわけなら」

多計代は、改めて決定的に宣告した。

「以來、出入りしない事にして貰ひませう。その方がお互の爲だし、佃さんもいゝでせうから……」

彼女は、終りの方をやつと云つて、顎や脣を震はし乍ら顏をそむけた。その打挫けた横顏を見て居るうちに、仲子は、母が哀れになつて來た。彼女には、母が其那ことまで云ひ出したのは、決して永續的な考へからでなく、當人こそ思慮の結果と思ふだらうが、實は強烈な感情の刺戟を好む、激し易い性質から出たこととしか思はれなかつた。これでもか、これでもか、と押して來た自然の勢で、或は意識せず、其那斷定的なことまで口にしたのではなからうか。母には本當に、自分の云ふことの意味が解つて居るのだらうか。仲子は、自分が、謂はゞ勘當されるといふことより（此は何故かちつとも實感に訴へて來なかつた）母の、自身の激越性を制御出來ないやうな姿を見ることの方が堪へ難かつた。彼女を不幸な人と思ふ氣さへした。仲子は、優しく、

「まあ、さう一飛びにお考へにならないでもいいわ」

と云つた。多計代は、其を辱しめのやうに感じたらしく、涙をはら〳〵こぼした。

「私に迚も其那ことは出來まいと高を括つておいでだらう。——私にも覺悟といふものはあるからね。さう見くびつては貰ひますまい。一旦云ひ出したからには、……會ひたくて、死にさうになつたつて、願つて來て呉れとは云ひません」

空虚のやうな靜寂が擴がつた。すると、いきなり、佃が儀式張つて疊に手をつき、母に挨拶した。

「——では已むを得ませんから……どうぞ御體をお大切に……」

伸子には、すべてが信じられず、わざとらしく、空々しく感じられた。何でもない筈のことを、行きがかりで、仰々しく、悲壮らしく振舞つて居るやうな滑稽さ。同時に何とも云へずがらんどうな、火が消えたやうな氣持。——伸子は坐り込んだまゝ、この妙な心持に沈んで居た。母は傍で、兩肘で固く自分の胸を抱き込むやうにし乍ら、凝と前方を見据ゑて動かない。——

佃が立ちかけて、伸子を促した。

——ぢやあ……失禮しませうか……大分夜も更けたから——

伸子は、佃のわざと低めた聲や、いかにも自分のものといふやうに彼女を見る眼つきが、何故か五月蠅かつた。[illegible]却つて母の心持と相通じるやうな、錯倒した感情が生れた。

二階を降りようとして、伸子は階子口でよろけた。佃は、痛い程彼女の腕を捉へて支へた。

八

目を醒すと、佃は疾に起きて、縁側に居た。秋らしい晴天で、乾いた樹木の葉か、空の高いところで鳴る音がした。伸子は、體ぢう非常にだるかつた。——床の中で頭を持ち上げる氣が拔けて居た。彼女は寝たまゝ、高臺の方の秋空を眺めた。實に澄んで居る。此那空を、これまで見たことがあつただらうか。寝て居る部屋を通して、その碧い空から、清々しい力ある九月の風が吹いて來た。無碍な、其故、ひとしほ魂にしみる寂寥で、伸子は思はず眼を瞑つた。

昨夜、一時頃歸つて來てから今朝まで、伸子は殆ど物を云はなかつた。寝しなに、佃が着物を着換へ乍ら云つた。

——あゝあ、——まあ仕方がない、人間は二つの體には仕へられないから——

……貴方だつて私の神ぢやない——

床に入つても寝つかれず、異樣な寂しさであつた。伸子が、夫である佃と、自分達二人の生活に對して抱いて居る氣持が、若し彼に分つて居たら、あゝは云へなかつたであらう。伸子は、膝頭から打ち明けずにこそ居るが、母が嫌ひ嫉し憤るやうなものは、何一つ持つて居はしないのだ……目が醒めても、そのやうに思ひ乍ら何時となし寝入つた夜明の淋しい心持が消えなかつた。瞼から日の光がさすと一緒に、その淋しさが、一際心の底にしみるやうであつた。

——起きた？——

佃が來て、寝て居る伸子の額にさはつた。

——工合がわるいの？——

——大丈夫」

——醫者呼びますか」

「いゝのよ、本當に。……一寸へばつただけ——」

一日伸子は横になつて居た。

二日三日と經つうち、伸子は恢復した。氣持の上で、新しい一つの添へものを持つて恢復した。それは、これ迄にないさつぱりした氣持、輕やかな氣持に、不斷の淋しさが加はつたもので、田舍から歸つて後ずつとある彼女の、自分でしやんと立つて行かうとする欲望と眞面目に結びついたものであつた。伸子は、次の小さな仕事に着手した。自分の神經を引締めて呉れる點、この外見不粹らしいことも感謝してよい氣がし、伸子はしんみりとした元氣があつた。彼等は、その夜以來、離婚のドの字も口に出さなかつた。

月が變つて直ぐの或日のことであつた。伸子は思ひがけず、玄關に和一郎の聲をきゝつけた。伸子は、元氣な彼の顏を見ると、思はず自分も男の子のやうに、

——やあ——

と、よろこびの聲をあげた。

「どうした？」
「姉さんもどうした？」
「この通りよ」
和一郎は、仲子の顏や、勉強のために散らかつて居る四邊の樣子を見廻し、
「ぢやあ結構ね——」
と、はじめて坐つた。二人は三時間ばかり、とりとめなく愉快に雜談した。和一郎は、やつと來年の春、或專門學校へ入る氣になつたと話した。
「——どんな奴だつて、中學を出たばつかりにすぐ悅んで、上の學校の試驗なんぞ受けるんぢやあないと思ふな。第一、何が自分の好きな仕事か、大抵は分らないし、氣持だつて適當ぢやあないもの——」
歸りがけ、向うをむいて靴をはきながら、和一郎はさりげなく云つた。
「ゆうべ、お母さんが僕に、この頃ちつとも姉さんのところへ行かないやうだね、つて仰云つた」
月半ばに、仲子は、思ひがけずおとよさんの訪問を受けた。祖母がいよ〱隱居所へ來たので、その伴がてら上京したのであつた。
「御隱居さんも是非いらつしやりたいつて仰云いましたけれど、今日はまだお疲れだし致しますからね——」
おとよさんは、物を云ひ乍ら、しげ〱仲子を見て居たが、急に、
「私、さうやつて御元氣にしていらつしやるのを見ると、却つてお可哀さうで」
善良な、小皺の多い顏をさつと赧らめ、袂のかげで泣きだした。
「何でもよくおわかりの方々だのに、本當に、どうしてね。——私お話を伺つて、何とも云へない氣が致しましたよ」
仲子は、おとよさんの一途な歎きに、濟まない極りわるい思ひをした。彼女は、おとよさんを慰めるやうに、笑ひさへ浮べて云つた。
「大丈夫よ、あなたにまで其那に涙なんか出されると、私困るわ。今に何とかなるから安心して頂戴」
「どうぞね、あなた、實の親子でいらつしやつて、其那ことつてあるもんでございますか」
おとよさんは眞心をこめて云つた。
「それは、奧樣から御覽になれば、佃さんにもいろ〱御不足はありませうが、その爲に貴女までね……御氣象の確り遊ばした方ですから、御無理もないかも知れませんけれど……」
母は、おとよさんになど、[illegible]の[illegible]内を、實際在つたとは違つた風に説明してゐるらしかつた。仲子は、
「佃は無關係だのに、卷添へをくつたのよ」
と說明した。
「私の書いたものがお氣に觸つたの」
なか一日置いて、つや子が書生と遊びに來た。保が花壇の花を持つて來た。弟妹達が、此迄よりずつと頻繁に來るやうになつた。仲子はその陰に母の心持を感じた。彼等がかへると、彼女はきつと、斯那やうにきくだらう。
「どうだい、姉さんいらしたかい、面白かつたかい？」
保は保らしく、つや子はつや子で女の子らしく、其に答へるだらう。すると、母は又、重ねて訊くに違ひない。
「姉さん何をしてゐたかい？」
最後に偶然さうに、然し特別な關心で、
「佃さんは居たかい？」
或は、
「どうして居たかい」
などと訊くのではあるまいか。相手が無心だから、彼女は詳細に觸れられず、いくら訊ねてもきゝ足りなく思ふのではあるまいか。弟

や妹が歸つたあと、伸子はよく其那情景を空想した。

佃はつや子や保の來るのが五月蠅いらしかつた。つや子が彼の頸にからまつて、

「ね、一緒に遊びませうよ、お姉ちやまと二人ぢやつまんないから、よう—」

と甘えたりすると、彼は體を堅くしたまゝ拒絕した。

「今僕はいそがしいから駄目です」

勤めから歸つて見ると彼等が居る。彼は人に馴き來ないだから無理もないが、恐怖した顔つきで彼から離れる子供の姿を見るに忍びず、伸子は夫に云つた。

「貴方いろ〳〵癪に觸るのに尤もだけれど、子供は知らないんだから、今まで通りだと思つてるのよ。——あの時堂々云つておやりになる方がよかつたわ、ちびにやつ當りするより—」

すると佃は、自分にかけられた寃罪に驚いたと云ふやうに、

「何時か其那ことしましたか—」

と反問した。

「ね、私、貴方が動坂の連中、家へ入れないつて仰云つたつて仕方ないと思つて居るのよ。でも話して居る以上——」

佃は彼として正當な感情さへ公然とは主張せず、例へば、貴方怒つたでせう、と云へば、いや、と云ふのであつた。伸子はその時の狀態を、彼のために解剖し、夫が自身の心持を正面から認めずに居られないやうにした。佃は同意も否定もせず、終りまで伸子に云はせ、軈て怨むやうに云つた。

「それはみんな君がさうだと思つて居ることです。僕の眞心とは違ふからそれだけ斷つて置きます」

「ぢやあ貴方の氣持はどんななの。ね、どう違ふの？」

「——私が上手に話せないのを知つて居るでせう。いつか分つて呉れると思つて居ます。本當に私を愛して呉れる人には分らなくちやあならない筈です」

伸子は此那とき、思はず力を入れて自分の額をぎう〳〵擦つた。「さあ、可哀さうな奴！　又鐵を碓すな」彼女は其那とき口笛をふきたい氣になつた。だが、それは鳴らなかつた。

九

十一月に入ると、様々な原因から、伸子は時々、心の平靜を失ふやうになつた。

動坂とのいきさつは、あれぎり、弟や妹や稀には祖母が來るぎりで、一向變化しなかつた。九月から、まる二月經つたばかりなのだから、其は寧ろ當然であつたが、伸子に辛く思はれたのは、十二月が近づいたといふ豫想であつた。日本の家族的な習慣で、どこでもさうであるやうに、十二月の大晦日は、伸子の兩親の家でも、一年中で一番賑やかな日であつた。いつからさうなのか思ひ出せない頃から、伸子がこの祝ひ日には女主人役であつた。皆が忙しく働いて居る間に、伸子は花や蠟燭の灯や贈物やらで卓子を飾つた。閉め切つて置いた部屋の扉を、

「さあ！　お入り下さい—」

開けた時の嬉しさ！　子供らしい瑞々しさは、いつも、彼女を有頂天にした。家中が彼女と倶に喜んだ。その單純な樂しみを、今年は家ぢうが持てない。大晦日は滅入つたものになるだらう。伸子は、いつそ親や弟妹が東京に居なければよい、さもなければ自分達が東京に居たくないと思つた。

さういふ或日、伸子は庭の隅で一本の菊をいぢつて居た。泥鉢の、夜寒の菊ではあつたが、純白な花に十一月らしい芳香を放つた。凋ん

だ花を鋏で剪つて居ると、露路に俥のベルが聞えた。仲子は枝折の切戸をあけて見た。祖母が俥から降りた。仲子は、

「おばあさま、こつち、こつち」

と手招きをした。そして、俥夫に云つた。

「かへりはこちらでお送りするから、歸つてよろしい」

祖母は珍しさうに、

「ほう、こんなところに木戸があるのか」

と、見廻し乍ら、草履をふんで庭へ入つた。

「今日は買物を少ししようかと思つて出たが、はあ、俺にや分らないからやめにして、茶をよばれに來たごんだ」

仲子は笑つた。祖母は、俥を命じさせるとき、きつと、仲子のところに來たいとは云はず、本郷通りへ呉服ものを見に行くからとでも云つたのだらう。その、せずともよい云ひわけを、彼女は仲子のところに來て迄云ふのだ。

「お茶ぐらゐはいくらでもさし上げてよ。――けふは一つ、菊見の眞似でもしませうか」

仲子は、縁側に、座蒲團や茶を出させた。

そして、祖母をかけさせ、自分も傍で、さも宏大な花壇でも眺める振をし乍ら、

「――さて、いゝ眺めぢやなう、見渡す限り千本白菊の眞盛りだ」

祖母は美味しさうに深く煙草を吸ひ込み、さて吸殻をはたき乍ら、くす〳〵笑つて揶揄つた。

「……俺の眼がなじよになつたか、菊は一本しか見えないごんだよ」

「――駄目よ、おばあさまつたら。もつと在るつもりよ！　もつとある積りよ！」

傍から、きよが、白い瀬戸ものの大きな義歯をがたつかせて、愛想笑ひをした。

「奥様の面白いことを仰云いますこと、ほゝゝほ」

二言目には奥樣々々と呼ばれる度に、仲子は、體の何處かを、鄭重に指の先で引張られるやうな、工合のわるい氣がするのであつた。祖母は上機嫌で、國技館の菊人形の噂をした。彼女は、やがて、足先が冷えると云つて、家に上つた。

「――俺も若い頃にやあ、どんな女にもまけなかつたが、斯うなつては死ぬばかりだなあ……針のめど通すに縫ふ程かゝるごんだ」

皆が、八十の祝ひを、來年の正月早々しようと云つて呉れるが、無駄な費えだと云つた。

「其那こと位してお貰ひになつて結構よ、皆だつてよろこぶわ、是非なさいませ、私も何かお祝ひしてよ」

「有難いことはことだが……」

祖母は、彼方へ立つて行つたきよに聞かすまいと、四邊に眼を配つておろ〳〵囁聲になつた。

「……お前等、今見たいな役たいもないことして居ちや、おれ、そげなことして貰つても、一向詰らないごんだ。――お前來られまいちえ」

仲子は困つた。彼女は曖昧にうなつた。

「うむ……」

「なじよな譯か知らないが、やくたいもないごんだなあ」

きよは、平常話相手のない故で、祖母が來ると、よく喋つて相手をした。自分には男の子がなく娘ばかりだとか、其故、

「何の役にも立ちませんのよ、くれてやつたものでございますから」

とか。祖母はそれに答へて、自分は三人息子が居たのに、たつた仲子の父一人になつたとか、孫が他の娘のもまぜて何人あるとか話した。彼女は、

「孫は大勢あるが、これが子供のうちから馴染んで居る故か、一番めんごいことよ」

と、仲子を見た。

「もう死ぬ〳〵と思ひ乍ら、やがて曾孫まで見るかも知れないなあ……」

祖母は樂しさうに下唇をたべ乍ら、何か考へて居たが、眞面目な顔つきになつて呟いた。

「……お前、見たとこ倒れで、丈夫でないかしらて……」

「なぜ？　丈夫よ」

「何して子が出來なかろ」

昔ものらしい遠慮なさで、祖母は續けた。

「今の若いものは、嫁入るとすぐ子を産むぢやないか」

「いやあね、どうでもいゝわ、其那こと」

「弱かあるまいかと思ふからさ……さう云へば佃さんは顔色がいつもよくないな、佃さんが子種なしであらうかしらて」

伸子は、本氣になつて、

「やめて頂戴、其那話」

と遮つた。彼女はいやで、涙が出さうであつた。子の話に、いつ、だれにされるのもいやであつた。まして祖母のやうに、まるで飼牛か何かのやうに話されては堪らない。いそいで話題をかへようとすると、きよが傍から、一種の笑ひを湛へ乍ら、ずつと祖母の方へ頭を延し、耳の遠い人に物でも云ふやうに、大きな聲で云つた。

「御隱居樣、御心配なさることございませんよ、もうぢきお目出度でございますよ――はい」

そして、伸子の方に、いやに心得て居るといふ風な笑ひを含んだ横眼を使つた。何といやな婆！　厭がるのを知つて居ながら。――きよが、其那ことを豫言めかしく囁いた意味が、伸子によくわかつた。彼女は女のさとさで伸子の定りが半月も遲れて居ることを知つて居る、と仄めかしたのだ。祖母は、たゞ漫然と、

「さうかなあ」

と答へた。

伸子は、祖母が頭巾をかぶり、俥に乘つて歸つてからも、不愉快な心持から自由になることが出來なかつた。きよが云ふまでもなく、伸子はもう十分、自分の體の小さい變調に神經質になつて居るところであつた。數日來、折々動物が感じるだらうやうな不安が彼女を襲つた。伸子は、母親になるといふことが既に恐ろしかつたし、この、生活に疑問だらけの時、その生活に自分を縛す權利を持つて居るかもしれない子供を持つたら、如何なるであらう。

次第に薄暗かりの濃くなる柱に靠れ、伸子は種々考へ、沈んだ。自分の心の奧深くさぐつて見ると、結婚する時、佃に念を押した一つの約束――自分は決して母になりたくないといふ――も、微妙な女の性の直覺とでもいふものが働いて居たのかとさへ思はれた。伸子が理性で附けた理由は、自分の仕事であつた。けれども、今、自分の心を凝とさせないこの嫌惡と不安は、そんな主知的なものではなかつた。もつと本能的だ。何か本能が、不安を絶叫して居る。若し夫として佃を敬愛して居ても、このやうな暗憺とした恐怖を覺えるであらうか。佃を夫とする刹那、自分の裡にある女性が、彼を父としては承認出來ない者だと見拔き、拒絶したのかもしれない。そして、あのやうな警戒を敷いたのではあるまいか。その人の子を持つことは厭だ。けれども夫にはする。……

複雜な感情から、伸子はその夜二人きりになつた時、夫にそつと訊いた。

「ね、貴方子供欲しくおありなさらない？」

佃は指を櫛のやうにして頭を搔いてはスーと毛を梳き、拔けた毛を眺め乍ら大きな聲で答へた。

「子供なんぞ五月蠅くて仕樣がありません」

そして、

「大分拔けるな」

兩手で頭を掻き、雲脂を自分の胡坐の上へ落した。

五

一

上野には博覽會が開催され、英國皇儲が來遊されるといふ、事の多い三月下旬であつた。うら〳〵と體も心も包むやうな光線が、縁側一杯に部屋の中まで射し込んで居た。

直き七十になる佃の老父は、

「同じ日本國中でも違ふもんぢやなう。……私が彼方を立つ時は吹雪ぢやつたに――東京は、はやすつかり春ぢや」

眩ゆさうにその日ざしを眺めつゝ云つた。

「……今日は特別ね、……」

伸子は眞正面から日を受けて居る顏を伏せるやうにし、傍の老人を顧みた。

「――まあ、お髯の光ること」

老人は自分から胸元を見下し、指を擴げて裏から白髯を扱いた。長い白髯は春の光の中で、支那素麵のやうに淸らかに輝いた。

「何でお洗ひになりますの？」

「玉子の白味で洗へと云はれてな、伸したては珍しいもんぢやで根よくやつたが、私のやうに山歩きの好きな者はどむならん――髯も日に燒けます、すぐ又、しよむない色になつてしまひをる……」

……長閑だ。……伸子は、自分の祖父と日向ぼつこでもして居るやうないゝ氣持であつた。

襖をあけて佃が入つて來た。

「一寸電話をかけて來ます」

「ほう」

「何か用はありませんか」

「さて――どうでわが身も、後で何處ぞへ出んならんと思うとるさかいに……」

伸子は、佃の着こんだ厚い黑マントや、毛絲の襟巻を見て笑つた。

「――あついことよ、其ぢや、外は」

「そんなことはありません。――ぢや一寸行つて來ます」

日當りのよい部屋から來ると、暫くは物もよく見えない陰の四疊半で、伸子が洗濯物を仕舞つて居るところへ、佃が手間をとつて戻つて來た。老人は、獨り八疊の方で新聞を讀んで居た。その方へ行かず、彼は、

「たゞ今」

と云ひ乍ら、伸子の後に立つた。

「おそかつたわね、郵便局？」

「――いつものことだのに、若い者が計算をぐづぐづして居るから」

「電話だけぢやなかつたの？……」

伸子は振り向いて夫を見た。彼の顏が、何かぼんやり、感情を現して居るやうに見えた。

「どうして？――只今をしていらつしやいな―」

佃はぐるり、ぐるり、自分の首の方を廻して襟巻を脱ぎ、

「――會社に電話をかけて來ました」

と云つた。伸子の父の會社といふ意味であつた。

「何か御用だつたの？」

「――金曜日の夕方から親父と一緒に上りますが、御都合はどうか、伺つて見たんです」

伸子は不意打ちを喰つたやうな變な顏をした。

「そしたら？」

「多分いゝとは思ふが、確かな返事は明日するから、又電話をかけて見て呉れろと仰云つた」

「――」

父の性質で、左樣しか返事出來なかつたのが、伸子に察せられた。

其にしても、何故電話をかける前に、一言相談して呉れなかつたゞらう。家を持つて初めて滯在に來た老父に、去年の秋以來の、佐々との不快ないきさつを知らせたく無い佃の心持は、伸子によく分つた。尋常に、妻の兩親にも會はせて歸したいのは、自然なことであつた。けれども、佃は、去年往來を絶つたまゝ、何の諒解もなく今日まで來て居た。祖母の、理窟ぬきに懸命な心遣ひに動かされて、伸子だけ、春から、たまに出入りし始めた。歪んだ關係であつた。和解の出來て居ないところへ、出しぬけに電話一通の、而も押しつけがましい氣もしないではない前觸れだけで、老人を連れて行かうとする佃の態度には、缺けて居るもののあるのが感じられた。

鍵の手になつた緣側の彼方では、老人が背中を日に暖め乍ら、二人の聲を無心に聽いて居る。伸子は云ひたいことの半分も口に出しかねた。

「私に云つてからにして下さるとよかつたわね……其だけおや濟まなくてよ」

彼は、默つて伸子と眼を見合せて居たが、軈て、

「まあいゝ」

斷念したやうに云つた。

「明日又かけて見りや分るでせう」

そして、座敷へ去つた。父子の話聲がした。

「今日は一つ上野へ出かけませうか」

「偉い人なこつちやらうな、然しいつと云うて、すいた時はあるまいから——」

老人は乾いた咳をした。

「……伸子さんはもうおいきたのか？」

「まだです……餘り好きでないんでせう」

「おいきたらいゝだらう。折角天氣も此那ぢやし……」

伸子は一緒に、博覽會見物に出かけた。青山御所の土手に蒲公英が咲き、濠端の櫻が八分通りの見頃であつた。電車に、揃ひの花簪と手拭をつけた田舍の見物人が乘り合せた。

會場で、老人は、各縣から集つた材木や農産物に、深い興味を覺えるらしかつた。

「同じ農業と云うても、近頃は私の若かつた頃とは萬事ころりと違ふな。稻の種類も、こんなに今は澤山になつたが、眼目は何かと云ふと、早う、澤山收穫せうと皆が狙ひをる。——早う、澤山穫れる種類ほど、味ないな、どうも……」

古風な毛皮帽をいたゞき、二重廻しを着た白髯の老人と、悠くり、材木の間や赤リボンのついた壜づめの麥粒の見本などを眺めて歩くのは、伸子に珍しい樂しい感じであつた。けれども、佃は氣をせき、老父や伸子の先に立つて歩き、ともすると一人離れた。はぐれまいとするので、彼等二人もひとりでにいそぐやうになつた。佃が、

「こゝも見ますか？——彼方と同じやうだな」

と云つて立ち止りかけると、老父は遠慮さうに、

「もうえゝにしよう、なんぼ見ても、まあ、大同小異と云ふもんぢやろ」

などと、自分もすどほりに通り過ぎた。

「なるたけなら、第二會場の方も今日見てしまひ度いと思ひますからね」

伸子は、老人が氣を張つて足を早めたり、見たいかも知れないのに、强ひて詰らないものと定めてそのまゝ過ぎたりするのを見ると、氣の毒でたまらなかつた。土産品にもなるやうに、ゆつくり、滿足に、見物させたかつた。彼女は杖かはりの洋傘を持ちなほし、佃のあとに跟いて人波をかき分けようとする老人に云つた。

「私共は、悠くり行きませうよ、迷兒になつたつて大丈夫よ……いそぐとお疲れになるから」

池の端で、彼等は商店街に入つた。舞臺には、

椰子の生えた海邊の背景が置かれ、その前に裸體へ草の腰蓑だけをつけた女が二人現れて居た。黒い剽悍さうな縮毛の頭に花環飾りをのせ、胸にも同じやうな花飾りを吊つて居る。傍に腰かけた黒人の男の音樂者が、白ズボンの片脚でドタ〳〵床を鳴らしつゝ、バンジョーとウクレリーで、南洋的な、官能的な音樂を奏す。其に合せ、女達は並んで手を叩いたり、足ぶみしたり、腕を動かしたりしながら、ぶる〳〵、うね〳〵體中の筋肉を顫はせた。三十越して見える肥つた方の女の體は、特別人間離れしてよく動き、腰蓑の上につき出ただぶ〳〵の腹などは、遠くからでさへ、上へ下へ、右、左へ、音樂につれてくねくり廻るのが見えた。舞臺の端に「埃及筋肉顫動ダンス」と書いた札が出て居た。

「變な踊りぢやなう――」

仲子は笑つた。野卑だが、得意になつて、腹など妙に動かして見せるところ、子供らしい感じで仲子は可笑しかつた。

佃は、默つて見て居たが、軈て、苦々しげに呟いた。

――下劣だ――

舞臺の上の裸の女達は數百人の見物に面しても、故郷の海邊に居ると同じに、呑氣で、野生であるらしく見えた。歌を二言三言唄ひ乍ら仲間同士巫山戯るかと思ふと、急に自分の商賣を思ひ出したやうに本氣に、熱心に、腹や腰を蜒らせた。

彼等は、七時頃疲れて家へ歸つて來た。

二

羽織を着換へただけで、仲子は臺所を始めた。食器を洗つて居ると門が開き、誰かが臺所の横窓の下に來る氣勢がした。

「今晩は――」

仲子は曇硝子の障子をあけて、外を覗いた。片側りで女の横顏が見えた。

「今晩は」

「あの、お向うの山下でございますが――先程佐々さんから御電話でございました。御留守でございましたからさう申上げましたら、お歸りんなつたら直ぐ彼方へ掛けるやうに、と仰云つてでございました」

少女は、成程、山下の女中であつた。

「まあ、さう、どうも有難うございました。おいそがしいところを度々、御苦勞さま」

――この取次は、仲子にとつて、不意なやうで不意でなかつた。晝、佃から、會社へ電話をかけた事を告げられた時から、彼女は豫期して居た。何とか動坂から云つて來るに違ひない。今日中でなければ、きつと明日。重苦しい感情を作つて、博覽會場を歩き乍らも、考へて居たのであつた。

仲子は、

「動坂から電話がかゝつたんですつて」

と云ひ乍ら八疊へ行つて見た。老父と夫との間に、東京地圖が擴がつて居た。頭をさしよせて何處か郊外の部分を說明して居たらしい佃は、一角處を指で押へたまゝ、顏を擡げた。

「…………？」

「さつき。――歸つたら直ぐかけろと云ふんですつて……」

彼は早々しく、何氣なく答へた。

「――かけて來たらいゝでせう？　其なら」

仲子は、その聲をきいたら、變にいやな心持になつた。

老父が眼鏡をはづし乍ら、二人を見較べた。

「何ごとぢやろ、今頃」

「さあ……」

仲子は下駄をはき乍ら、佃が何とか面倒さうに一口說明し、直ぐ地圖に戻つて行くのを聞い

た。

電話には多計代が出た。伸子が思つた通りの用向きであつた。

「父様がおかへりになつて初めて話を伺つたやうなわけでね、是非話したいことがあるから、今から來て來れないかい」

伸子は電話口で當惑した。

「もうおそいし、今日は博覧會のお伴をして草臥れて居るから、明日ぢやあいけないかしら」

彼方では、電話の傍に父も居るらしい様子で、伸子の云ふことを繰返す母の辞がした。

「それでもいゝけれどもね、明日私は[illegible]に行くところがあるんで、都合がわるいし、金曜日と云へば——左様だつたらう？——もう日もないしするから、その前に、すべき話はして仕舞はないと、お前も迷惑だらうと思ふから……」

「——おやあ上りませう……少しおそくなるけれども」

伸子は、淋しい暗い裏通りを、一跨ぎで自分の家へ戻つて来た。扉をあけると直ぐ、老人が[illegible]に不安さうに訊ねた。

「何事でした？　御病人か？」

伸子は、[illegible]、

「いゝえ、さうぢやありませんでしたけれど……たゞいま」

彼女は輕く老人の前に手をつき、頭を下げた。そして、二人のうち、孰れへともつかず云つた。

「……私、これから動坂へ行つて來なければならないんだけれど……」

佃は、萬事事情を承知して居る者の不自然な冷淡さで、

「さう」

と云つた。

「そんなら、寒くないやうにしていらつしやい」

「——御苦勞なこつちやなう、今頃から……」

伸子は老人が、心の中では、何事だらうと深く訝つて居るのを感じた。彼は、[illegible]から、其を口に出さないだけなのだ。伸子は、それを知らない振りで出かけるのを、辛く感じた。

「……歸りがきつとおそくなりますから、どうぞお先へおよつていらして下さい」

伸子は、自分の部屋へ來、衣桁にかけて置いた羽織に再び手を通した。[illegible]のコートを出した。手袋をはめ、仕舞ふまで、伸子はわざと時間をかけるやうにして、夫を心待ちにした。老人を、[illegible]して行くことも、[illegible]れて[illegible]電車で一人ぼつち行かなければならないことも、その先にある用件も、彼女を[illegible]げさせた。彼女は、きつと佃がこちらの部屋に來て、出かけるまへに、一言或は一目、彼女を[illegible]まして呉れるだらう、と期待して居たのであつた。襟巻をするばかりになつて、伸子は部屋の眞中に立ち澱んだ。佃は、老父に[illegible]をすると思はれない用心からか、いくら待つても來る様子がなかつた。伸子は、

「一寸」

と、高く夫を呼んだ。

「——電車の切符はどこ？」

彼女の願ひ通りに夫は此方へ來ず、八疊に居るまゝ答へた。

「外套の、いつものポケットにあるでせう」

外套は玄關の折釘に下つて居る。伸子は仕方なく玄關に出た。

「——おやあ行つて参ります」

「何時頃歸る？」

「今時分から行くんですもの……でも歸つては來てよ、どんなに晩くなつても」

三

伸子が動坂の家を出たのは、十二時であつた。[illegible]

急に低くなつたやうに思はれる深夜の電車道の上を、悠くり驅け乍ら、彼女は俥夫とたまに口を利いた。

　動坂から赤坂まで、俥では長い道中だ。彼女は揺られて行くうちに晝間の疲勞が出て、眼を瞑りたくなつた。次に目をあけた時、俥は牛込見附にかゝつて居るらしく、松――松――行つても行つても太い松の幹ばかりであつた。提灯が瞬く。ゴム輪が、プッ！　プッ！　微に小砂利を飛ばす。……

　がく〱俥を揺られ乍ら、仲子は、いろ〱兩親の云つたこと、その他を思ひかへして居るのであつた。

　佐々の兩親の云ひ分は尤もであつた。佃が、もう先の長くもない父親に、落膽させまいとするのは無理もないが、これ迄の事は如何するか。一旦足踏しなかつた以上、何とかけぢめをつけるべきであらう。自分の都合によつて、電話一つでどうにでもなると思ふのは間違つて居よう、と云ふのであつた。その點は仲子も同感であつた。

　佃が隱して電話さへ掛けなかつたら、彼女も、何とか少しは彼の威嚴も傷けない行動をとらせることが出來たのだ。今でも、仲子には、何故夫が自分に默ってそんなことをしたか、心持が理解出來ず、居心地わるかつた。

「今度のことに限らず、佃さんのすることは正々堂々として居ないよ――、古いことを云ひ出すやうだが、引越しの時にしろ、何故、いつもお前をお先棒に使ふのだらう。――あの時だつて、私共は隨分不愉快だつた。佃さん、自分ぢや出入しないが、必要とあればいつもお前を先に立てて、此方を利用するぢやないの――私共は、お前が、今夜だつてさうやつて、お人好しに遙々よこされて來るのを見れば、厭だと云へやしないぢやないか」

　引越しの時、と云ふのは斯ういふ譯だ。片町の、あの西日の壁まで差し込む家に、彼等は二月まで暮したが、或日、よろづ案内で、赤坂の便利な位置に、廉くて手頃な貸家のあるのを見つけた。佃の勤め先に近くもあつたので、仲子等は直ぐ見に行つた。電車から一町餘りしか離れて居ないが、靜かな裏通りの垣に蔓がからんで居る、古い家であつた。隨分ぼろ家であつた。でも、狹い空地には楓や薔薇が生えて居て、どこやら落付いた趣もあつたので、借りることに定めた。引越しの手傳ひ、大工等急に入用になつた。夜、

「どうしませうね」

　仲子が夫に相談した。

「トラックいるでせう？」

「さあ――たゞ馴染のないところへ云つても、たかくとるばかりだらうし――動坂に出入りの、あるでせう」

「そりやあるわ」

「一つ、それをきいて見ていたゞいたらどうだら、電話で」

「今夜？」

「早い方がいゝでせう」

　佃は近所の自働電話まで、仲子を連れて行つた。佃は電話箱の外に待つて居た。仲子が、

「あゝ、母様？　今日、急にいゝ家が見つかつたの」

　其那調子で、運送屋その他のことを頼んだ。動坂では、兎に角仲子の頼みを承知して呉れた。彼女が電話を切つて出ると、佃が、

「どうでした」

　と云ひ乍らよつて來た。

「いゝつて」

　佃は滿足さうに、

「――君がかけた方がいゝ、だから……」

　と云つた。

その事を、云ふのであつた。が、伸子には、自分があの時、いゝつて、と答へた、満足の心持をはつきり思ひ出せるので、悪いのは佃だけと思へなかつた。伸子がしやんとして居たら、動坂へなんぞ頼むのやめませう、と云つただらう。それだけ佃の信用は救はれただらうのに、伸子も同じやうにづぼらで、いゝ氣であつたから、少し工合悪いなと思ひつゝ、持ち込んで仕舞つたのだ。伸子は、母にその事を云はれた時、憎しく、自分に腹立たしく感じ乍ら、
「私も悪かつたんだわ、それは……」
と云つた。
「私が、いけないつて、云ふべきだつたんだから」
「そりやさうさ。だが、お前と佃さんとは十五も年が違ふんだし、男なんだからね、一人前の。外であの人のする事を、一々お前が自分の責任には仕切れないから云ふのさ」
佃は、その時、伸子の重くのろい自己反省にふさはしく、悠くり〱、御所傍の暗い坂を登つて居た。伸子は、心持に遣さの足らぬ、理想では颯爽とした生活態度を心がけつゝ、實際事に當ると兎角ぐや〱な自分を明かに見た氣がし、陰鬱であつた。佃もぐうたら、自分もぐうたら。似た者夫婦。伸子は、自分等に忽然とした氣になつて、其那ことを考へつゞけた。
がくん。急に梶棒が下り、伸子は、正氣に還つた。俥夫に心づけをやつて、門の鍵を下した。門燈と格子の外の灯が灯いて居るだけで、家ぢら、隣近所、寝鎮まつた氣勢が、夜半の暗さの中に漲つて居る。伸子は、音を立てないやうに玄關へ上り、外からの薄明りでコートを脱いだ。さつと一條、右手の襖の隙から光がさした。佃が目を醒したらしい。伸子は、そろりと後手で襖をしめ、夜具の裾を廻つて夫の枕の傍に坐つた。囁聲で、
「たゞ今」
佃は、一眠り熟睡した擧句の、暖かさうな頰の色を枕に横へて居た。
「おかへり……どうだつた？」
「――貴方明日おいそがしい？」
「何故です」
「動坂ね、私の考へた通りの意見なの。あの電話だけでは、押しつけられるやうで厭だつて云ふ――折角お父さんをお呼びするんなら、その前に一度貴方に會つて、さつぱりして置きたいつて云ふ譯なの――貴方明日一寸いらつしやらない？　私と」
佃は低く、傷けられたやうに、
「私にあやまれと仰云るんですか」
と、上瞼を釣らすやうにして伸子を視上げた。老人を起すまいと、聲を苦しい位下げて、小さい聲を出して居る伸子は、力一杯頭を振り、眉を顰めた。
「違ふわ、あやまれなんて云ふんぢやないのよ、たゞ會つて口を利いて、お互に――まあ、さつぱりしようつて云ふだけなのよ。その方が自然だわ、實際。喧嘩別れみたいにして半年以上居たのに、いきなり顏を合せたんぢや、貴方だつて自然に喋れないでせう」
伸子は夫の耳に唇をつけて囁いた。
「貴方の心持、あつちだつて解つて居るのよ」
佃は、白い枕の上に仰向き、黙つて天井を見て居たが、軈て上を向いたまゝ唇も動かさず云つた。
「さうすれば君が幸福になると云ふんなら、行きますよ、私は何でもする」
伸子は、喉へものを閊へさせたやうな表情になつて、夫の仰向いた顏を見下した。苦しい昏迷が彼女を襲つた。佃は、何と變な辯、或は考へかたをするのであらう。一昨年の夏、動坂に居た頃、彼を養子にするとか、しないとか、誰く採

めた事があつた。あの時も、佃の返事は、仲子に對しても、仲子の兩親に對しても、その「私は何でもする、仲子の幸福になることなら何でも仕ます」一點張りであつた。仲子は其をどんなにか苦しんだ。

「ね、貴方のそんな態度、ちつともすべてをよくしてやしないのよ。私の幸福は、貴方が勇ましく拒絶して下さることよ」

彼は、それに對して、

「あゝ、そんなに泣かないで下さい、私はこんなに君を愛して居るのだから、仲子！ 仲子！」

一晩ぢう愛を誓ひ、仲子を撫で、然し、彼は決して、明朝直ぐ兩親に離緣を與へることはしなかつた。その事で、仲子はヒステリーを起す程苦しんだ。養子問題はこのうち有耶無耶に消滅した。當時の混亂した心の苦痛が今甦つて來て、仲子は、又同じことが始まつたかと恐ろしくなつた。彼女は、

「私の幸福つて——妙ね、何だか—」

と、切なく、皮肉な吐息を洩した。

「そんなこと抜きでも、あたりまへぢやないの——つまり、貴方として一足飛びのことなすつたから、順序を踏みなほすと云ふだけぢやあないの」

「……………」

佃は不見げに上を向いたまゝであつた。

—いやならいらつしやらないだつて、勿論私は平氣よ

仲子は熱心に囁いた。

「あやまる必要なんか、決してありやしなくてよ、貴方に。動坂が抑々提案を云つたんだから。—お父さんにすつかりお話しして、行くのなんかやめませうよ、ぢやあ、ね？ 却つて立派かもしれない、その方が……」

佃はやはり沈默して、天井を見て居る。

「ね、そつちばかり見て居ずにさ……何故默つていらつしやるのよ」

「だから——君が望むんなら行きます、と云つて居るでせう」

「其那の、いや」

「どうして」

「だつて——貴方、あんな風に電話かけたつきりで、すらりと運ぶと思つていらしつたの？ それで、はいと承知すると、思つていらしつた？——正直に云つて」

「…………」

歸途、俥の上で思ひつゞけて來た自分等に對する叱責、佃の、いつも仲子を苦しめるその妙な心持の持つて來た、[illegible]する氣持で、仲子は云つた。

「本當を云へばさうぢやないでせう？ それなら、いづれ仕なければならないことぢやないの、私の幸福のためにするんぢやない、實際の行きがかり上、必要だからするのよ。それで又、いいんですもの——いやに恩になんか、きせつこなし」

「——貴方が行けと云ふから、私はそれに從ふだけです—」

「私、行つて下さいと云ひやしなくてよ、御自分が折れて出るの癪なら、動坂へなんか、行くのやめとしまひなさいつて、云つて居るのよ。お父さんに體裁のいゝところを見せて、安心させたいなら、仕方がない、行く。どつちかぢやないの。御自分はどつちがいゝのよ、本當に！」

「…………」

「——貴方、本當に變だわ」

仲子は苦い汁のやうな涙を滲ませた。

「もう少し素直だつてよかないの。へまをするより餘程いやだ」

「行きますよ、だから」

「行く、行かないなんか、どうだつていゝわ、さう云ふの私腹が立つのよ。貴方みたいに、何で

も誰かの爲にしなけりや氣のすまない人、珍しい」

翌朝、老人にお早うと云ふ時、伸子は極りわるく、平氣にして居るのに努力がいつた。老人の智慧で、老父はいつも通り穏やかであつた。けれども、眠ざとい年寄りが、物音で目を醒し、納戸一つ隔てたばかりの彼方の部屋で、伸子がいろ〳〵云つたり泣いたりしたのを聴かなかつた筈はない。

その日、動坂に行く行かないに就て、伸子はもう何も云はなかつた。一時過ぎると、佃が、

「――今日、動坂へ一寸行つて來なければならない事になりましたから、一人で明治神宮へでも行つて呉れませんか」

と云ひ出した。

「ほゝう――矢張り誰ぞ惡かつたのか」

「お母さんが一寸――大した事ぢやあないんです」

「それなら結構ぢや。――神宮橋はぢきぢやつたなう――あの邊なら、若い頃よくぶらついたもんぢやで分つとる、あすこいら見物して來るさかい、心配せいで、ゆるりと行つておいで」

「ぢやあ――」

佃は伸子を促した。

「髪はもうそれでいゝの」

動坂に彼等は夕方まで居た。佐々も歸つて、居合せた。伸子にとつては、辛い陪席であつた。圓卓子を中央にして、大きな安樂椅子に佐々、向い合つて母、佃はその間に坐つて、ぽつ〳〵話が交されたのだが、傍から聞いて居る伸子には、三人の心持が融合しないのばかり感じられた。佐々は、天性面倒な論議や衝突は嫌ひであつた。どうせ縁がある以上、圓滑に納めて行く意嚮だ。其故、穏やかな常識的な言葉しか洩さない。多計代は、勿論結局妥協するしかないのを知つて居るが、夫――佐々の微温的態度も歯痒し、佃のさつくりしない心持も不快、自分が本氣になれない焦立たしさも蟠つて居て、兎もすると小競合が、佃との間に再燃しさうになつた。

「多計代もこの機會に、將來圓滿にやつて行くやうにしたいと云ひますし、どうか私もさうしたいと思ふので――」

「お母様が、さう思ひかへして下されば幸です」

「私は、何も自分が惡いとは思つて居ないんですから、思ひかへした譯ではありませんよ」

多計代は、腹立たしげに云ふのであつた。

「貴方がお父さんといらつしやりたいと云ふから、それなら、何とかお話があつて然るべきだと思つて來て頂いたわけです」

佐々が、雙方をとりなすやうに言葉を挟んだ。

「まあ、互に家族となつた以上、出來るだけ誤解のないやうに、平和に暮さなくちやならんのだから――論判してはきりがない」

丁度、焦點の合はないレンズで映す活動寫眞を見て居るやうな切なさであつた。三つの心が、近より〳〵、やつと一つの影像になり切れさうになると、ぶる〳〵輪郭が震へ始め、又、ぼーつと散つて、三重にぼやけて仕舞ふ。對談は愉快な諒解によつてではなく、言葉の循環に倦怠して、打ち切られた形であつた。

佃の老父は、初め通り金曜日の晩食に招かれる事になつた。

往きも伸子は快活でなかつたが、歸途は一層氣が重かつた。總てのことが晴れやかで無いといふ感じが、深く伸子の心を壓へつけた。佃、自分、佐々の兩親といいきさつでは、衝突しても和解しても結局何にもよくならない氣のするのは、何故であらうか。ふつ切れたところが、一つもない。善も惡も、のび切らず、伸

子に解釋のつかぬ曖昧なものに覆はれて居る。

老父はまだ歸つて居なかつた。佃は平常着に着かへ、さも、のう／＼したやうに自分の机の前の椅子に體をなげ下した。彼は、體中で伸びをし乍ら、後の仲子に云つた。

「やれ／＼、これでやつとすんだ。――私が死んだ母親のことを云つたら、お父さんは泣いていらしつたね、お母さんは泣かれなかつたが……お父さんは確かに涙をこぼして居られた」

彼はそれを、悠くり思ひ出して、自ら後味を樂しむやうに云つた。その特別の調子が最初仲子の注意を牽き、次で恐怖を喚び起した。

「――――」

仲子は何か云はうとして口を開きかけたが、そのまゝ默つて息を吸ひ込んだ。彼は、では、しんでは其那に冷靜に、效果を見守る餘裕をもつて、あれをやつたのであつたか。――佃は、自分が五つの時生みの母に死なれた事、その限りない淋しさを、仲子の兩親を愛し彼等からも亦愛されることによつて充さうと、どんなにか樂しんで居たのに、圓滿にゆかず、此那遺憾なことはないと、自身あのやうに涙に咽んで云つたのに。――さうであつたのか。……仲子は、大聲あげて笑つてやりたかつた。同時に佃を打ちのめしたかつた。荒々しい自棄が、彼女を吹き捲つた。佐々も仲子も、その哀れつぽい述懷にうまく引きこまれた。多計代さへ、それからは少し調子が和んで、ずる／＼に、「では」と云ふやうなところで落付いたのであつた。

四

仲子は老人や夫と一緒に、大抵毎日、何處か見物に出歩いた。泉岳寺へも行つた。博物館のやうに大きな硝子張りの棚があつて、古びた義士の衣類、筆跡など陳列してある。

大石内藏之助使用の扇などを眺めて居る最中、仲子は、「斯うして居ていゝのか」と、鋭い疑問を自分に感じ、氣が遠くなるやうな苦しさを覺えた。佃は、先達て、佐々から歸つて自分の云つた言葉が、どんなに仲子の心に致命的なものであつたか、全く心付かないらしかつた。仲子は、あれから、一層明かに佃と自分との生活の裂目を感じ通しで、不安が續いた。深い處から湧く「斯うして居ていゝのか」と云ふ疑ひは、空中に囁かれる聲のやうに、屢々、思ひがけぬ處で、彼女の心を掴んだ。それを感じると、二つ三つ息をする間、仲子は自分が居る場所、して居ることとの知覺を失ふやうな内面の緊張に捕はれた。

獨りで居ると、その疑問は猛大聲で叫んだ。直ぐ返答を要求して、仲子を攻めたてた。仲子の理性は、其に對する答へを出して居た。けれども、まるで逆な力があつて、自分に向つてさへも、それを言明させまいとする。――然し、仲子は、佃の妻として生きることの恐怖を新たにした。彼女は、斯ういふ状態が一生つゞくと思ふのさへ、恐ろしかつた。

晩春らしく、埃つぽい風の吹く午後であつた。雨戶のしまつた隣りの家の軒下に、何か小さい赤い布が乾してある。暖かく、乾いた風が吹くごとに、細い竹竿ごとその赤いきれが動いた。其處の小庭と軒先だけ日かげで、ひつそりして居た。机に頰杖をついてその樣子を眺め乍ら、仲子は決斷のつかない苦しい思ひに耽つて居た。佃も老人も、各々の出先に赴いて、家には彼女一人であつた。

「御免なさい――おいでですか」

思ひがけず横田が來た。

「まあ珍しいかた、――どうぞ」

横田は、どこか變つた男であつた。彼の妹が、仲子の父の會社に勤めて居た青年と結婚した。或時、その夫婦が、兄である横田をつれて

來て、紹介した。駒込に暮して居た時分のことであつたが、それから、極くたまに、數時間立ちよつて喋つて行つた。彼自身の話によると、種々語學が出來るので、つい、創作より飜譯をするのでいけない、と云ふ境遇に居るのであつた。彼は玄關の隅にイムバネスをぬぎ作ら、耳が少し遠いので首を曲げ、丸い背をかゞめるやうにして伸子に訊いた。

「お一人ですか？　佃さんは？」

「今日は一寸出かけたの、でも直きかへるでせう」

「休みでせう、まだ」

「えゝ。近いうちに學校へ宮樣がいらつしやるんですつて、その相談よ」

「あゝ」

横田は大きく頷き、

「さうですか」

猶幾度も自分自身に合點をした。彼の癖であつた。彼は頻りに伸子の机の方へ目をやつた。

「近頃何かお書きですか」

「何にも――貴方は？　おいそがしいの」

「下らないことにいつも追ひ廻されてね、どうも―」

「飜譯――面白いものしていらつしやる？」

「――別に、大して面白いつて云ふものでもありません。……そりやあ、たゞ讀んで居りや面白くも樂しくもあるけれど、譯さなくちやあならないとなると、ぞつとしませんね」

彼の體格に比べると、どこやら弱い笑聲を立てた。

「今、なに―」

「即興詩人です……私は、あれの原本を、第一版で持つて居るんだが……面倒くさいんでね、獨逸語のと對照してやつて居ます……」

「あの人の自敍傳と云ふの――面白いでせうね、およみになつて？」

「あゝ、――何とか云ふのがありましたね」

彼は傍机に、丸善の包紙のまゝ、一冊の本が載つて居るのを見つけた。

「何です、あれは」

伸子は笑つた。

「目が早いのね」

雜談の末、彼は、

「どうです、家をお持ちなさると、仕事をするのがなか／＼困難でせう」

と云ひ出した。

「――男のひとは、どう？」

「さあ、どうだかな、私は經驗がないからわかりませんね、だが――勿論負擔が殖える點はわるいが、概して落付けるらしいですね」

そして、横田は、例の癖で獨り幾度も頷いた。

「それは、ちやんと奥さんが、獨身時代よりよく世話をしてあげるからでせう？　氣持のゆとりも出來るわけね――女の人の方は、立場が何と云つても逆だから」

「いけませんか？　どうも」

伸子は、變に自分の言葉に責任を感じた。

「斷言は出來なくてよ、絶對に駄目だなんていふ。――けれども、何て云ふか、男の人は大になつたつて、どこまでも、その人で通るでせう。細君は何だか、生れつき以外に、細君的屬性とでも云ふものが要求されるみたいね。細君業は、女の適應性を極端に發達させる點で、危險ぢやないかしら？……「私」といふものがなくたつて立ちゆくんだから可恐いでせう？」

冗談めかして云ひつゝ、伸子は、心にひろく女性の寂しさといふものを感じた。

「――難かしいもんだな」

「――誰でも一應むづかしいとは知つて居るけれども、實際になると、愈々複雜ね。だから獨身がいゝつて云ふわけかもしれないけれど――

仕事の爲に、リイへもしないなんて、時間ぎごちないの、私には出來ないわ。——男女に關らず、まあ普人にとつて自然な、自由な生活をして居る人は少いのぢやあなくて？ 勇氣がいるもの」

「さう——さうです、窮屈たおんな、特に日本ではね……全くさうです」

其様なことを話して居るところへ、佃が歸つて來た。伸子は玄關へ出た。

「横田さんが來ていらつしやつてよ」

「あゝさう」

佃は、眞直横田の居る部屋に入つて行つた。

「いらつしやい」

「やあ——お留守に上つて居ました。いかゞです？ おいそがしいらしいですね」

佃は、深く椅子にかけ、上體を捩つて片肱をかけ、椅子の背を抱へこむやうな恰好をした。

「いやどうも——相變らず貧乏暇なしで弱さつて居ます——貴方はよく肥つておいでですね」

新しい茶を持つて入つて來た伸子には、その言葉が何だか角々して、相手を傷けるやうに感じられた。

「——ぢやあ、貴方や私は得な性分でいゝわけね……」

横田は聲を出さず、はあと口を開いて齒をむき、笑ふやうな顏をした。つぎ穂ない沈默が生じた。用談でも切り出されたなれば、伸子は落ちつかないやうであつた。横田は額を顰め乍ら、懷をさぐつて、原稿紙の疊んだのをとり出した。

「——若しお暇があつたら、一寸お聞きして見ようと思つたんですがね——これ……」

「なんです——希臘語ですか」

「こんな妙なことだらうと、見當につけて居るんですが、どうも曖昧だから」

「詩らしいですね——何かに引用してあるんですか」

横田は伸子を顧みて、

「どうも西洋の學者は、何ぞと云ふと直ぐ羅典や希臘をかつぎ出すから厄介です」

と笑つた。

「おいそぎですか」

「いや、いそぎません」

「ぢやあお預りして置きます」

又話が途切れ、居心地わるくなつた。横田は、

「どうぞよろしく」

と程なく歸つた。

見送つて再び部屋に戻つた。佃は横田の置いて行つた原稿を手にとり、立つたまゝ見て居たが、ふんと云ふやうな表情で、手近い本棚にのせた。伸子は何だか嫌な氣がした。

「大丈夫？ そんなところへ置いて」

「大丈夫ですよ」

佃は伸子がそんな細事を氣遣ふのさへ不愉快らしく、云つた。

「いつ頃から來て居たの？」

「何故？」

わざとらしい訊きかへしが、殆どひとりでに伸子の脣を辷り出た。

「何故つて——又僕の邪魔をしたと思ふからですよ、下らないことつきや話もないのに」

——伸子は皮肉な顏をして、肩をゆすつた。彼女は意地わるい心持になつた。佃は、彼女の友達が來ても、恐らく唯の一度もと云つてよい位、愉快な對手となつた例がなかつた。彼が席に現れると來た人は歸り支度をする。女の人でも、それは同じであつた。今も、彼は明かに心穏やかでないのだ——不思議な、伸子に責任はない理由で。それをまともに表さず、親切らしいお爲ごかしの云ひかたを、又してもする。彼女はいきなりつきとばすやうに、

「ちつとも邪魔ぢやなかつてよ、面白くてよか

つたわ—

と憎らしく口答へした。佃は、反感を沈默に裝して、着物を着換へに行つた。伸子は、愛情からでなく、腹立たしさ、厭さ、憎らしさ、それ等の感情で對手から離れられず、自分も佃の後を跟いて行つた。本當は横田に對して、彼女の心持にはもつと複雜なのであつた。彼が頻りに机の方ばかり氣にするのや、妙にきゝたがりのやうな處があるのなど、彼女は好きでなかつた。それでも、夫のさう云ふ口の利きかたが、伸子の神經を害つた。伸子が居るのを知り乍ら、知らないやうに洋服を脫ぎ、それを衣裳簞笥にかけて居る佃の、強情さうに太い耳の後の骨を見て居ると、彼女は、盲目的に衝動がこみ上げて來るのを感じた。あゝこの平氣さうな様子！　いぢめて、いぢめて、本音を吐くまで參らせられたら、どんなにすつとするだらう。こんな澄した彼でない彼、こんなぬらりくらりした彼でない彼、その彼が見たい！　その彼が欲しい！——しぶとく、叩きのめされても此處は退かないぞ。猛々しい情熱で、伸子は心が暗んだ。相撲つて[illegible]しい二つの[illegible]が、中に感じ、裂けさうであつた。何處かで、熱心に、止めた方がいゝ、さあ、彼方に行かうと[illegible]いてゐる。それを見向きもせず、手を振り拂つて、ひたむきに、ひたむきに、喧嘩したがり、喰つてかゝりたがつて居るもう一つのもの。自分も彼も[illegible]にし、樣見ろと叫びたい程の[illegible]しさ。——佃は着換へをすますと、彼一流の利口さで、口も利かず、振りかへりもせず、靜かに納戸を去つた。伸子は、急に名狀し難い空虛を感じた。自分と彼とに對する悲しみが彼女を壓倒した。伸子はそこに立つたまゝ、歔欷いた。

程なく、佃の老父が歸宅した。

伸子は臺所へ入り、魚を煮はじめた。火氣で蒸し〳〵する[illegible]の空氣は、[illegible]しい伸子の心をとり卷いて、益々彼女を[illegible]した。

伸子には、今、別な悲しみがあつた。若しこれが、一年前のいがみ合ひであつたら、自分はこのやうに、嫌惡と暗さに滿ちた心で、而も頑固に獨りを守つて、[illegible]くれて居たであらうか。伸子は、佃の言葉を素直に受けられなかつた自分の心持の[illegible]にても、きつと彼に謝らずには居なかつた。夫のところへ忍び寄り、一寸一寸、一言——

顔をかに[illegible]でもしたであらう。其後、彼女は[illegible]も、喧嘩の前よりきつぱりした心地になれた。

伸子は今も、自分の太々しさは十分知つて居た。自分が、鬱積して居る苦しさから、直接の原因以上に、ひどく刺戟されたことも解つて居た。

けれども、彼女はどうしても、元のやうに、佃にそのやうな心持を話し、又詫びたりする氣になれなかつた。自分が彼のところへ行つて、そのことを話せば、佃は、如何にも伸子が自己省察をし、後悔するのが當然で、彼もそれを豫期して居たかのやうに、彼女の告白を聽くだらう。そして、自身の心には一つの鞭をも加へず、寛[illegible]なきやうに、彼女に[illegible]を與へるに違ひない。

それを思ふと、伸子はむか〳〵とした。偽善的な佃の心の姿勢が、伸子を窒息させるやうであつた。

鍋の下に搖れる瓦斯の焔を見つめ、考へ沈んで居た伸子は、自分等二人の男女の生活の恐ろしさで[illegible]が震へるやうになつた。

自分の前に、次第に廣く擴がつて來た道は何であらう。一人の女が、人間で無くならうとする道ではないか。彼女が、生活に[illegible]けることのやうな苦痛、切なさ、齒痒さから、假令どんな外

形上の我儘をしようと、蓮葉な擦れた女になり下らうとも、佃は依然として、見たところ非の打ちどころない、寛大な、忍耐強い夫の役割を演じつゞけるだらう。

伸子は絶望と恐怖とで涙をこぼした。永い、しづかな、地にもぐり込みたいやうにそれは悲しい涙であつた。

五

英國皇儲の來遊は一般的な好意を呼び起して居た。馬場先に大きな歡迎門が出來た。夜はアーク燈の光で、ぞろ〳〵通る人間も、お濠の松の枝ぶりも、いつもと違ふやうに見えた。佃の老父はその賑はひを見物してから、田舍の生活に役立つ、實用的な手土産をもつて歸國した。

窓をあけ放して置くと、夜氣とともに、春の土のにほひや若葉の匂ひが、明るい部屋に流れ込んだ。

老人が去つた後、宵は長く感じられた。佃は、さういふ夜、部屋の眞中に胡坐をかいて、外國から來た書籍包みを開いて居た。伸子は側で、解きすてられた紐や紙を始末して居た。界隈がしづかなので、彼女がたゝむ厚い包紙の、ゴハゴハいふ音ばかり耳立つた。

「——彼方の机に送り狀があるから、とつて來てください」

伸子はそれをとつて來た。彼は一旦卓子につみ上げた本を、一册づつその送り狀とてらし合せ始めた。伸子は凝とその樣子を見て居たが、

「——ねえ」

と聲をかけた。彼女はこの呼びかけを、なみなみならぬ心持でしたのであつたが、佃は手許の仕事に氣をとられ、うつかりした調子で答へた。

「何ですか」

「相談があるの」

「なんです」

「ねえ……夫婦の生活といふものは斯うといふ形しかないもの？」

「さあ……、どう云ふ意味で云ふのか知らないが、さうでせう」

「もつと自由ぢやいけないのかしらん」

佃は本を手にとり上げ乍ら、警戒するやうに伸子の顏を視た。

「何故？——何か違つた形が必要なんですか」

「私——當分私共別々に暮して見たらどうかと、此間から思つて居るの」

「私はちつとも其樣ことは必要だと思ひません」

斬りすてるやうな語勢であつた。

「だから御相談なのよ、お父さんがお歸りになつてから、悠くり相談していたゞきたいと思つて居たの」

以前から、別々に生活して見るのもよいのではあるまいか、と思つたのは屢々であつた。最近、彼女には、さうでもして見るしか新生活の拓けやうなく感じられて來た。自分達夫婦の、生活態度の違ひを、抽象的に批評したり主張したり、其那ことで實生活が寸毫も變化しないことを、伸子は經驗で知つた。佃は生活の對手として、さういふ種類の人ではなかつた。彼は、獨特な消極さで、強い生き手であつた。

生活を一緒にして居て心持を影響されまいなどと云ふのは、出來ない相談であつた。先、田舍で考へたやうに、彼には彼の生きる場處がこの世にあるといふ考へも、一緒に暮して居ては、その平和的な微溫さを保つて居られなかつた。

一人の人間として、自分が愧ぢ卑しむ行爲をも、それが夫だといふ許りに共犯者になることは、伸子に堪へ難かつた。彼の考へかた、彼

の生きかたに釣り込まれまいとして、勢、伸子は批評的になつた。批評的になつた瞬間、彼女は冷酷な傍觀者に、一箇の、自分とは正反對の方角に生きようとして居る男を見た。

その男は夫だ。彼と自分との間に、欲情の交換はある。然し、美しい眞心と、よく生きようとする張り合ひ、其があればこそ生きる望みは、滿される見込みがない。——伸子は、それではやつて行けないのであつた。まして、個の誠意にさへ信用を失つた今、夫であり妻である約束、それが何の權威であらう。夫婦だからと云つて、無理やり一まとめの形を繕はず、一人々々それ〴〵に生きるところを生かしつゝ生活したら、彼も自分も、自然になれるのではあるまいか。伸子は夫の反對は覺悟で、相談を持ち出したのであつた。

「——勿論それは結構よ。けれどね、病氣になれば、私共看護もするし、病院へも入るでせう？　結婚生活も病氣なのよ、私共のところでは——」

佃は、不快な話が出るといつも現す樣の横皺を、深く額によせた。

「私には解りません——それに、始めから幾度も云つてある通り、君は自由です。飽くまで自由なんだから、どうでも、好きになすつたらいゝでせう——私に其那ことは出來ません—」

伸子は自分の考へを說明した。彼女は、別々に生活すると云つても、赤坂へは行かない積りであること、經濟的には佃に厄介をかけない積りなことを話した。

「——本氣で、各々が自分の心に正直な生活をし始めたら、この、變に嘘だらけのやうな暮し方の、兎に角一部分だけでも、さつぱりすると思ふのです。さうお思ひなさらない？　私共は、本當によくない胡魔化し暮しをして居るのよ—」

佃は頰桁でも打たれたやうな眼をして、伸子を見据ゑた。

「我々が、どんな罪を犯して居ます？　少くとも私は、誰にいつ呼び出されてもいゝ、潔白な心持で君を愛して居るし、生活して居る—」

「でも……私が嘘だらけの生活と云ふのはね、斯ういふ點なの。一つの例を云へば、私共は……」

自分の云はうとすることに怖えたやうに、伸子は思はず躊躇した。が、直ぐ早口に續けた。

「私共は——もう永いこと腹の中で衝突して居てよ、勿論、貴方は其を御存知だわ。でも、まるで、斯うやつて私が切り出すまで、知らん振りぢやあないの？　何故？　私はね、さういふ貴方が——其で——……怖らしいの。さう感じ乍ら、私は又私で、近頃は何だか正直に、貴方に其那ことが云へない——こじれて居るの。其那にもだ〳〵し乍ら、綺麗な顏をして、旦那樣、奥樣になつてすまして居るのは、私恥しいのよ、全く—」

佃はもう本統などかまはず、腕組みをし、微かに唇を震はし乍ら、壓しつけるやうな聲で云つた。

「——私が、此那に眞心をかけて愛して居るのに、苦しめるのは全く君の方です。——然し、別に暮すなんて云ふことは絕對に出來ない—」

夫の口から、すら〳〵眞心とか愛とか云ふ言葉が出るのを、伸子は、間の惡い疑はしい心持で聞いた。彼女は、

「何故絕對に出來ないの？」

と云つた。

「夫婦は夫婦なのよ、たゞ生活法だけ、二人の書生にかへつてやりなほして見るのよ—」

「出來ません！　考へて御覽なさい、假にも教壇に立つて教へる者が、其那ことで、どうして人に顏向けが出來ます？——折角、理想的な結婚だと思はれて居るのに—」

——それは違ふわ

仲子は熱心に、夫の言葉を否定した。

「私はさうは思はないわ。第一、私共は、如何人に思はれたい、といふ爲に生活して居やしない。又、顏向けが出來ないなんて云ふのは、却つて、このまゝ二人で、なり下つてこそよ。若し本當に、私共の繋りにちよんびりでも理想的なものがあるんなら、それこそ、形なんかに拘泥しないで、生活の内容を進めて行けるだらうと思ふわ。——ね、私共本當にほかの夫婦みたいに、とぐろ卷いて暮す爲に生きてやしないのよ」

永い沈默の後、佃は、仲子が意外に感じた平靜さで、寧ろ彼女を劬るやうに反問した。

「——ぢやあ君は、暫くでも別に暮したら、二人の間がきつとよくなると云ふ、信念がありますか」

「……………」

其はある、と仲子には答へられなかつた。佃のいふ意味では、よくなるかもしれず——惡くなるかもしれない。けれども、それが各々を天性のまゝに還すのだとしたら、つまり、よいことになるのではあるまいか。結婚生活の習俗だか、蒙昧だか、ごた〳〵したものの大掃除だ。この繋りから一生自由になれないと思ふやうなでさへ、佃に反感が起り、憎惡を感じるやうな立場は、互の爲に堪へ得ないのであつた。

佃の意見は、全然逆であつた。不自由であればある程、嫌なところがあればある程、一緒に生活しなければならない。近くに居て、互に日夜糺し合ひ、矯正し合つてこそ夫婦だ、と云ふのであつた。

夫がさう云ふのをきくと、仲子は胸の中が熱くなるやうに感じた。顏色をかへ、彼女は摑みかゝるやうな眼で彼を見た。

「貴方は、ぢやあ、いつか一度でも、私が伺ふことに、淡白に、男らしく、返答して下すつた事があつて？ 自分の間違ひを、内心でだけでも、正直にお認めんなつたことがあつて？」

仲子は彼を見据ゑて、瞬きもしない眼から、ほろ〳〵涙をこぼした。

「さういふところが、我〳〵の生活の地獄よ。貴方は、私が腹を立てて、つい失禮なことを云つたり、仕たりしちまふまで、冷淡だつたり、狡かつたりなさる。あとで、私がそのことを謝ると、御本當の理窟まで私が引こめでもしたやうに、御自分の方はそれなりけりぢやないの。貴方のは言葉だけよ——言葉だけです。それで、本氣な生活が出來ると思つていらつしやるの？」

仲子は袂で自分の顏を拭いた。

「……私は馬鹿だから、いつも、今度こそは、今度こそはと、思つて居たけれど、もう、いや！」

佃は眉を寄せて、頭を、さも痛ましいと云ふ風に振り乍ら云つた。

「——僕の眞心をどうか信じて下さい」

「信じられないの……信じられなくなつたの、此頃」

「あゝさうだらう、さうでなくて其那……」

一時間にも感じられた數分の後、佃は改めて初めの問題に立ちかへつた。

「では——どうしても、別に暮したいと思ひますか？」

聲の裡に閃くものを感じ、仲子は本能的にはつとした。彼女は濡れた瞳で夫を見上げた。蒼白い、疲れた表情で彼は顏を反け、仲子の返答を待つて居る。仲子は、自分の一言が何か運命的な反響を、夫の裡から引出さうとして居るのをはつきり感じた。

「——その方がよくはないかと思ふの」

泥濘を歩くやうな重さで仲子は云つた。それをきくと、佃は椅子の上で、それでよし、と云ふ風な身じろぎをした。

「――ぢやあ仕方がない――一緒に生活出來ないんなら……別れませう」

「……」

籐椅子の肱かけのところに頰杖をついて、默りこくつて居る伸子の顏を、今度は佃の方が覗き込むやうにして續けた。

「ね、さうしませう、左樣するしか仕方がないでせう。――私に總てをすてて田舍へ引込みます。――實に、實に殘念だが止むを得ない――」

伸子は不可抗な力に釣られて、自分の心が一歩ふみ出すのを感じた。

「其とこれとは別問題よ」

「どうして？　どうして別問題です？　私には全部です。――だから君になんぞ解らないと云ふんだ。此那ことを云ひ出す位なら、何故、何故」

佃は、伸子の手をいきなり捉まへると、自分の手も一緒くたに持ちそへ、膝を滅茶々々にかきむしりつゝ、烈しく歔欷し始めた。

「一晩あつから、ずつと[illegible]て居なかつたんだ……」

六

潤ではしく／＼になつた、[illegible]んで蒼白な顏、溺死人のやうに、額に引かぶつた髮、髯。それを思ひ出すと、伸子は二三日經つた後でも、ひとりでにぞつとした。そして、落付かない、變な氣がした。恐ろしい眞實を瞥見したやうにも思はれ、芝居と思はない芝居を見せられたやうでもあり――佃に、この懷疑の責任はあつた。伸子は、男は女より、誠意をもつてしか涙はこぼれないものと思ひ込んで居た。それを、彼が、いつぞや動坂の親達に示した感傷的の涙で、伸子に強い感銘を與へて仕舞つた。

翌朝、佃が、伸子の起きないうち、机の上のコップにさして行つて呉れた季節はづれの櫻草の花、その花からも、伸子は其に似た感じを受けた。その櫻草は、裏の竹垣の下に先住の人が忘れて行つた根から、さゝやかな薄桃色の花を開いたものだ。伸子は、自分に向つて何だか表情して居るやうな可憐な花を、見るのもいや、どけて仕舞つてもすまない、中半な心持で、永いこと眺めた。

兎に角、伸子は金しばりのやうな佃の摑みを全身に感じた。根本は何であれ、彼は自分を離したくない、占有から解きたくないのだ。

伸子に、彼を切れないであらう氣持も、通して居ない譯ではなかつた。二人が結婚してから、彼ばかりいゝ目を見て居るどころか、普通から見れば、伸子は隨分、我まゝな女房であつた。彼を一人殘して旅行に出た。寢坊であつた。伸子には、さういふ日常の些細な自由をさへ、妻となれば大特權のやうに貼紙つきで與へられるといふ云ひ難い憂鬱、夫が、其等さへ與へておけば、不滿を云ふべきものもないやうに、他を省みない魂の孤獨さがあつた。これは勘定の外にするとしても、彼が、結婚について周圍から受けた批評は我慢ならない事が多かつた。佃は、最初から愛なくて伸子を瞞し、自分の社會的地位を作らうとしたやうに云はれた。彼としては、今、伸子と別居し、世間に家庭生活の破綻を示し、從つて自分に加へられた評言を事實で裏書きするやうなことは、全く苦痛であらう。結婚生活を形に於てだけでも成功させ、それ見ろ、と冷評を覆してやりたい――ほんものの愛のあつたことを後からでも思ひ知らしてやりたい。

悲しいことに伸子の感じるのは、彼の、その、ほんものの愛があると思ひ知らせたい、と云ふ二次的な意欲であつた。太陽のやうに捕へ得ず、而も、四時明るく、暖かく、ふれる心を生かす愛そのものゝ流露より、伸子と自分で形

造つた生活の組織を、中折れさせまい、ものにしようとする、中年の男の實際的な固執ばかりが、金梃のやうに感じられるのであつた。仲子に疑ひなく感じられる彼の眞情はこれ丈であつた。

仲子は、折があると、有耶無耶に終つた話を復活させた。……種々の方面から。

「――私共は、自分達といふものを間違へて考へて居るんぢやないかしら。貴方、私の爲にだけ生きて居ると仰云るけれど、お互に其那生活力の弱い者同士？ 私は、初めつから云ふやうに、生活そのものを愛して居るのよ。――若し、貴方が其那氣の弱い、生存力の稀薄な人なら、彼那に若いうちから苦勞して、自分の路はつけて來られなかつただらうと思つてよ。貴方は、やつぱり、自分を強く守つて生きる性の方なのよ。それを、不自然で、又不必要なほど、私の爲、私の爲、と云つて下さるからいけないんぢやないかしら。生れつき通りになりませうよ。ね、さうしたらきつとさつぱりしてよ。二人の間も晴れ〴〵してよ。貴方は貴方として、十分生きる權利を、正面から主張なされぱいいのよ」

佃の返事は定つて居た。

「どうにでもお考へなさい。私の本性はこれきりだ。――私の覺悟は、もう結婚する時から定つて居る。その決心を、自分がいゝと思つた時に實行するだけです」

決心といふのは、死ぬとか、すべてを放棄して田舍に引込む、とかいふ意味なのであつた。斯樣な言葉も、仲子は、どこまで本氣にすべきか判らず、默り込むしかなかつた。本當かと思ふと可怖かつた。この心理的嚙合ひは、どちらかが死ぬまで、では續くのか、――然し、脅かされて居るのかと思ふと、仲子は、莞爾笑つて片足引き、お辭儀をし、

「さうお、ではどうぞ」

と云つて見たいやうであつた。――

七月になつた。

佃は、勤め先から、關西へ出張することになつた。短い旅行の爲に入用なものが、ちつとも揃つて居なかつた。互の間が不穩な、底鳴りのして居る有樣ではあつたが、その爲却つて、みつともない旅行はさせ難い氣がした。仲子は、或日僅の金を持つて、來合せた保と三越に出かけた。暑いが、さつぱりした風に吹かれて三越の赤い旗が、愉快に蒼空に飜つて居た。

一時間ばかりで買物が濟んだ。

「どうする？ これからすぐ動坂へかへる？」

「僕どうでもいゝや」

「又赤坂へ歸るとおそくなるだらうから――ぢやあ少し銀座でも歩かうか」

保はひどく嬉しさうに、大莞爾々々で合點した。

彼等は資生堂でアイスクリームソーダを飲んだ。仲子はストロウを二本とつて保に渡し、自分も同じだけのストロウをコップにさした。

「やつて御覽なさい、この頃流行る飲み方。――一本の方を吹いてよく泡を立て乍ら、もう一本の方で飲むの」

保は、何の氣なく、

「ふうむ」

二本一度に脣へ當てがはうとしたが、

「やあ！ 怪しいぞ、怪しいぞ」

と、手を離した。

「すまないが、僕、よく分らないから、姉ちやん一寸先へやつて見せてよ」

「何でもないわ、ほら」

仲子は、コップから溢れる程、ソーダの泡を立てゝ見せた。

「――本當？」

保は、少年らしい眞面目さで覗いたが、泡が立つて居る時には、もう一本のストロウを黄色の液體が昇つて行かないのを發見すると、本懐さうに體を揺つて、ふきだした。

「ほうら！　だから僕、變だと思つたのさ、息を二つに分けて使ふなんて――」

仲子も笑ひ出した。

「でも、すぐ變だと思つた？　私は本當にやつて見ちやつたわ」

「いつ？」

「ずつと先、西洋のお爺さんにかつがれたの」

保が上野行に乘るのを見送つてから、仲子はライオンの前から電車に乘つた。早い午後で、車内は空いて居た。仲子は包みを膝の上にのせ、開け放した窓から濠端の景色を眺めた。夏らしく、透き徹つた明るい西空であつた。重い、石垣の面と色、芝生、欝蒼と綠濃い老松などが、潤やかに曲折した水と照り映えて、如何にも日本的な美しさに充ちて見えた。仲子の、さつきからの名殘りで、表にだけ明るさの漂ふ、沈んだ心持に、この眺めは快適であつた。

向う側に、一人の女の人が腰かけて居た、三十七八の品よい夫人で、もののいい、黒つぽい服裝、軟かさうな髮の毛から下駄の爪先まで、落付いて素直な感じであつた。膝の横にある洋傘も黒であつた。内端な裝から、身嗜のよさや生來の寛容さが、一目の中に輝いて居た。ゆつたり正面を向き、やつぱり窓外を觀て居た夫人は、仲子が見たのに心付いたらしく、極く自然に彼女の方を見た。計らず眼が合つた。それが何とも云へず朗らかな溫かい見かたであつた。――瞳が微かな茶色で輝いて居るのまで、懷しく目に止つた。

時々其夫人を眺めるうちに、仲子は、一種異樣な心持になつて來た。その夫人の心の狀態がいゝのが、仲子にひた／＼と感じられた。そして、奇妙にも、自分が傍によつて行つて、その豐かな手に自分の手を當て、一言、

「ね、私……」

と囁きさへすれば、この頃の心の苦しさ全部が、たちどころに對手に通じさうに思はれて來た。そして、奇蹟的に、自分の行詰つた、切ない境遇が展かれさうでならない心持がする……

仲子が度々見るので、夫人の方も、彼女にやや特別な注意を拂ひ始めた。茶色がかつた瞳が、微かな、朗らかさで、時々彼女の横顔にふれた。仲子は、視線に撫でられると云ふ、文字通りの感覺をおぼえた。今席から立ち上らうか、今立たうか、苦しく胸がどきついた。そんな事は、恐らく自分に出來ないことを、仲子は知つて居る癖に、夫人から注意をひき離すことが出來なかつた。ロシアの小說に、よく汽車でいきなり隣りの人を捕へて男が身上話を始めるところがある。半信半疑で讀んで居た。さういふ男の、哀れな、胸一杯の心持、それがこの氣持なのだと、仲子は思つた。

自分の降りる場處へ來た時、仲子は、吻とした。歩道へ出ても、何、心持の揺れが遺つて居た。彼女は、自身の驚きを振返つて見るやうな心持で、停つて居る電車の窓を見上げた。カーキ色の軍服の背中で、夫人は見えなかつた。

「――手紙下さること？　動坂の方へ――」

「さあ……其那暇があるかどうか……私の手紙なんぞ詰らないでせう――」

翌々日、佃は旅行に出發した。仲子は動坂へ行つた。

七

其樣ことを云つて立つたが、佃は、時々仲子

へ便りをよこした。景色を、自分で寫生したハガキが多かつた　簡單に、その日の天氣のよし惡しなどだけ、書いてある。彼は、自分が旅行して居る間に仲子の感情が推移することを、期待して居るらしかつた。實際、仲子も、毎日相剋の狀態で佃と狹く暮して居るよりは、精神に餘裕が出來た。動坂の家は、暑中休暇で、がら空きであつた。多計代は子供つれで、田舍へ避暑して居た。のこつて居るのは、父と仲子だけであつた。それも仲子に休安を與へた。

　或朝、風通りよい入側のところで、仲子は、浴衣地や海苔の罐などを、大きなバスケットに詰めて居た。晝頃の汽車で書生が田舍へ行く。それに持たせてやる品々であつた。佃のところから來たハガキが、傍に散つて居た。今朝のは、奈良からであつた。眼ばかり大きい大きい鹿と、鳥居が描いてあつた。

「昨日寸暇を利用して、奈良を俥で一巡しました。春日神社の森の中は、別天地のやうに涼しかつた。鹿がやさしい顏で幾匹もよつて來ました。此那優しい動物なら足の痛くなるやうなこともあるまい」

　仲子はその文句を讀んで、苦笑した。保と三越へ行つた日、歸つて見ると左足に鼻緒づれが出來て居た。素人療治をし一層ならせにこじれて、仲子は、この頃毎日病院へ通つて居るのであつた。鹿が痛い蹄の先を自分のやうに繃帶され、のたり／＼歩く恰好を空想すると、一寸滑稽であつた。が、荷作りの合間にもう一度讀みなほすと、仲子は何だか、單純に可笑しがれなかつた。此那優しい動物なら云々。仲子が優しくないと云ふ心があるのであらう。彼らしい感じかただ、と、仲子は思つた。優しさなどといふものも、彼にすれば、愛と同じに消耗しない固形物のやうな存在に思はれるのであらうか。

　仲子は着物を着換へ、病院へゆく支度をした。俥に乘りかけて居ると、遽しく、廊下を女中が驅けて來た。

「あゝ、一寸！　お電話でございます」

「どなた？」

「柚木さんと仰云いました」

　仲子は急いで電話口へ戻つた。柚木さんと云ふのは、仲子の師ともいふべき、老博士に逢ひなかつた。彼女は、動坂へ來るつい前日、長い手紙を出した。彼女は、昨日今日生理的に持ち堪へ切れず、譫言に出さうになつた內心の苦しさ、自由な生活への憧れを、その手紙へ吐露したのであつた。

　先方は夫人であつた。

「もし／＼、仲子さんでいらつしやいますか、あのう、宅の代理でございますが、御手紙は確かに拜見致したさうでございます」

　仲子は夫人に對し、或極りわるさを感じた。彼女は無器用に禮を述べた。

「それでね、早速御返事申上げるところでしたが、丁度興津へ參つて居りましたもんで、失禮致しました。——貴女、明日やはり其方においでですか」

「はあ、當分こちらに居りますが」

　若し仲子が在宅なら、面會したいから、柚木先生自身、仲子のところに來て下さらうと云ふ言傳であつた。仲子は恐縮した氣持になつた。

　彼女は、今は足の工合が惡くて駄目だが、早晩、自分で上らうと思つて居る旨を云つて辭した。

「でも、どうせ小石川についでがあつて出ますのださうですから……」

　では、どうぞと、仲子は電話を切つた。

　病院は、月曜日で、特別混雜して居た。控室は暑苦しくて居られなかつた。廊下の突き當りに一つ窓があつた。そこから、裏庭の汽罐室

や、その周圍の空地が見下せた。其處を、岡持を下げた褐い出前持が通つたり、二の腕まで出した元氣好い看護婦が時々姿を見せた。看護婦は上草履のまゝ、石炭殼の上を、ひよい、ひよいと飛び越えて斜向うの別棟の入口へ姿を消す。白い短い裾の下に赤いスリッパの先が見えるのなど、病院らしい美しさがなくもない。そんな光景を伸子は永い間見て居た。やつと控室の人ごみの中から、左手に帳簿を持ち、伸子の馴染の看護婦が出て來た。

「――どうもおまち遠さまでした。どうぞ――」

唇の薄い、いつも物ぐさい風で患者を扱ふので、伸子が嫌ひな醫者が、其日は當番であつた。彼は伸子の挨拶に、

「や――」

と鼻の先で答へ、ちよいと人差指を動かした。繃帯をとけと云ふ合圖であつた。彼は指の先で、二ヶ所、患部を押した。

「きのふの通り――」

看護婦が、椅子で、石膏の型でも作るやうに、べた〳〵伸子の耳一杯軟膏を塗りこんだ。其をやつて居る間に、白いカアテンで仕切つた隣りの區切りの中へ、眼と鼻と口のところだけ、穴をくり拔いた、頭から繃帯の男が呼び込まれた。

伸子は陰氣な表情で、厄介な荷物のやうになる足先を見守つて居た。彼女の裡に、その間にもこびりついて離れない或錯綜した感情があつた。明日、柚木先生が來て下さる――來て下さる――それに對して、自分には、恐縮と厚意を有難く、重く感じる心持しか起らないのが、出かけ電話を切つた時から、伸子のこだはりになつて居るのであつた。

柚木先生へ送つた手紙に、伸子は、佃と結婚してから、自分以外の者に打ちあける其が最初の、不滿と疑惑とを、包むところなく書いた。數年來心に溜つて居た勢が、先生を少なからず動かしたらうことは、伸子に推察された。先生は、彼女が伸るか反るかの瀬戸際に居るのを知り、其危機を最も適當に處置する、具體的な相談相手になつてやらうと、明日來て下さるに違ひないのであつた。自分の樣子はどうであらうか。伸子は、我ながら自分の精神の不活潑なのに、愕きを感じた。電話を聞いた時、彼女は、この親切を力綱に、一つ潔く、率直に、自分の計畫を實行しようと云ふ、頼もしい勇氣を感じるどころか、却つて、後じさりする怯懦な自身を感じた。先生の訪問によつて、事態が一變しさうな不安、まだ、其處までは決定前でありたくない未練。遂には同じ結果になるにしろ、先生の言葉に從つてした事だと、後でその意識に苦しみさうな自分の性分。理窟から云へば、抑々其なら何故、何の責任もない柚木先生に其那手紙を出したか、といふことになつた。書き乍ら、泣いて自分の苦しみと憧れとを訴へずに居られなかつた心持。それも、伸子は自分を僞つて居たのではなかつた。心が、燃えて、燃えて、我慢出來ずに其を命じたのだ。其かと云つて、現在の、この踏んぎりのつかない、無いとわかり切つて居る筈だのに、何か大切なものを見失ふのではあるまいかと、今更遅疑する心の狀態も、噓ではない。動かせない本心の兩端なのであつた。

翌朝、約束の時間に先生が見えると、伸子は、愈々愚かな氣後れを感じた。いつそ、病氣にでもなつてしまひたい氣がした。片方の足を厚ぼつたく繃帯し、そのやうに纏れて居る伸子が、惨めな有樣に見えたのだらう、先生は、老年で幾分嗄がれたが、光澤のある音聲で、懇ろに彼女の健康を尋ねた。

「五月蝿いものです、宅の家内なぞも、矢張りそれに類似のもので永く閉口しました。……ところで、あのお手紙は細かく拜見しましたが……」

何ですか‥‥何さんは、何處へか‥‥御旅行ですか」

仲子はぶきつちように、必要な答をした。

「あゝさうですか‥‥」

先生は安樂椅子の奥によりかゝるやうにし、考へ乍ら、右手の指で輕く、既に白い髭を撫でた。

「お手紙で、實は意外に驚きましたやうなわけです。御母堂は初めつからなか〳〵御心配で、種々お話もありましたが、貴女も御婦人である以上、一度は家庭の人となられるのも結構だらうと申して居た次第ですが‥‥御兩親にはもうお話しですか」

「‥‥まだでございます」

云ひ終るや、仲子は何とも云へない極りわるさに襲はれた。彼女は、自分が答へた瞬間に、それが先生にとつて案外なものであつたこと、同時に、先生の心の裡で、この問題がすつかり初めの重さを失つて仕舞つたことを、直覺したのであつた。仲子は、自分のぐうたらな態度の故で、先生が自身の親切心まで愚弄されたやうに感じられたら、それこそすまないと思つた。彼女は謝罪するやうに云つた。

「本當に筋違ひのことで、先生に御心配おかけ申すべきことでないのは、よく承知して居りましたのですけれど‥‥」

「いや、決して其那御遠慮には及びません。力の及ぶことは何なりお役に立ちませうが――」

最初とは、明かに變つた微かな氣輕ささへ含んで、

「では、何ですな、まだはつきり斯うと、實際の計畫はお立てでないんですな」

仲子は、意氣地なさを、座に堪へない程自覺しつゝ、ありのまゝ答へるしかなかつた。

「手紙で申上げましたやうに仕ようと、考へては居りますのです。迚も今までのまゝでは、やつては行けませんから」

「然し、このまゝずつとお別れになり切り、と云ふわけでもないですな」

「‥‥どうなりますか」

柚木先生は、

「いや」

と、仲子の方にこゞんで居た背を延し乍ら、云つた。

「何つて安心しました。御手紙の様子では大分御苦しみのやうだし、御悧發でも御婦人だから、萬一ひよつと何事かあつてはと、老婆心を起したのですが――その位考へる餘地をお持ちなら、大丈夫です」

仲子にとつて、此等の言葉に苦しさを増すばかりであつた。氣でばかり思ひつめ、結局實行し得ない優柔不斷を、體よく指摘されたとしか感じられず、情なかつた。けれども、柚木先生は、其のやうな仲子の心持を、まるで心づかないやうに、次第に快活に話し進めた。

「‥‥貴女の御決心はなか〳〵健氣ですが、お若いし、御婦人の身で獨立の生活を營まうと云ふのは、事實容易ならんことです。御當人は確りして居られても、俗世間と云ふものは五月蠅いものでしてね‥‥御熟考なさるが肝要です。幸、立派な御兩親がお揃ひだから私も安心だが」

其那、世馴れた人なら誰でも云ふことを、先生からきゝたくはないのだ、と云ふ聲が激しく自分の内に起るのを、仲子は感じた。其なら、何と云はれたいのだらう？ 彼那佃みたいな奴は、今直ぐ、たつた今棄てて仕舞へ、と云つて欲しいのだらうか？ それとも、飛んでもない事だ、一生從順な、盲目な妻で過せと、どやしつけられでもしたいのだらうか。結局、自分の心が先生に左様しか云はせないのを知りつゝ、仲子は、何か天啓的な一言、心境に大變動を捲

き起す霹靂的な一言を渇き求めた。

一かういふ事は、複雑だし、一生の問題ですから、考へて損と云ふことは決してない。一朝一夕には定らんものです。……又、では、何か私でお役に立つことでも出来ましたら、御遠慮なく仰云い。及ばず乍らお力になりませう一

紺の羽織を勢よく撥ねて椅に乗つた先生の、几帳面な、

「どうぞ御母堂にもよろしく」

と云ふ挨拶に、丁寧に頭を下げると、伸子は、急に悲しくて堪らなくなつて来た。先生の好意も、自分のよい生活に入りたい熱望も、自分から出たずる／＼べつたりで、取りかへしつかなく滅茶にして仕舞つた気がした。伸子は、この問題では、もう二度と先生を煩はせなくなつたのを感じた。

八

七月下旬になつて、佃から、帰京する通知があつた。この夏は、伸子が動坂に居たので、妻や下僕達の留守の毎晩を、佐々は、比較的無聊を感じずに過して来た。彼は二十六日に帰るといふ佃のハガキを見ると、云つた。

「……さて、それでは私も十日ばかりKへ行つて来ようかな。お前も、すぐ赤坂へ帰らなけりやあなるまい一

伸子は、父の足許で、低い足台に腰かけ、団扇で蚊遣の煙を、彼方に煽いだり此方へ靡かせたりし乍ら、ぼんやり答へた。

「さうね……帰らなけりやあいけないかしら」

「まだ病院へは、毎日行かなけりやあならんのかい」

「その方はもう大分いゝの、大抵なほりかけ」

「その方はいゝ、が、ぢやあ、他にどつか悪いところがありますか？ 貧乏病なら、私が癒してやらうか」

一違ふわ一

父娘は肩を揃へて笑つた。不図、伸子は寂しさうに呟いた。

「私も、父様と一緒に行つちまはうかしら」

「Kへか？ 然し私の方はまだこれでなか／＼いつ行けるか分らんよ一

伸子は、赤坂へ帰るのが、どうもいやであつた。部屋々々の様子や、其裡で反復される日常生活を想ふと、圧せられるやうな気がした。自分を離さない鉄の機械の間へ、挟まりに戻るやうにさへ思はれた。佃の着く晩は病院へ行く日なので、伸子は赤坂に戻らないことにきめた。佃は、信州の方を廻つて十時過上野に着く予定なのであつた。

「斯うおし、ぢやあ。鈴木がどうせ暇だから、停車場まで迎ひに出して、此方へ来て貰ふやうにすればいゝ。夕飯を皆でたべてから、後はお前達二人の都合にすればよからう一

例刻に病院から帰ると、玄関の沓脱石に、黒革の半靴が、きつちり揃へてあつた。伸子には、この艶々した黒靴が、妙に人格を持つて居るやうに感じられた。伸子は、感情をもつて、自分の草履をその傍に脱いだ。

一おかへり遊ばせ。――佃さんがおいでゝございます一

客間へ真直行つた。佃は其処に居ず、食事部屋の出窓に腰かけて居た。上着を脱ぎ、カラアをとつた白襯衣の姿で、窓に屏風様に当つて居た。彼は伸子を見ると、組んで居た片脚を下して、つい先刻別れて帰つた人のやうに、

一たゞ今」

と云つた。

「足はどう」

顔の邊かあつさり日に焼けた彼は、殊に、改つた、探るやうな表情を浮べた。伸子も、同じ真面目な様子で、黙つて夫に片手をさし出した。

―暑かつたでせう？　あつちは―

「あゝ、大阪は隨分暑かつた。宿屋はよかつたけれど」

伸子は彼の横に並んで腰かけた。佃は、頭を反らせるやうにし、しげ〳〵伸子を見守り乍ら、低い調子で訊いた。

「どうです？―」

彼女の心は如何な工合かと云ふ意味なのを、伸子は直ぐ飲み込んだ。伸子は、一どきにこみ上げて來る情愛と、激しく彼を反撥するものとを感じた。伸子は當惑し、首を曲げて、どちらにでもとれるやうに脣をまげた。

「――今夜一緒に歸りませう」

伸子がはか〴〵しく返事をしないので、佃は彼女を抱へ込むやうにして顏を近づけ乍ら、繰返した。

「ね、歸るでせう？」

即答が出來ないので、伸子は、つけ元氣で彼の手を執つて、引立てた。

「――兎に角、まあお風呂でも浴びていらつしやいな――さつぱりなさらないでせう？」

浴衣を出して、佃を風呂場へやつた。伸子はその間に、自分も着換へをし、さつぱりと髮に刷毛までかけて來た彼と、向ひあつて、矢車草の大輪花のある客間で、冷たいものを飲んだ。伸子は、簡單に、彼が留守中あつたことなどを話した。が、彼女は、その間ぢう、自分が佃に對して變つたものになつたといふ意識で攻められた。元、二十日も旅行して來た彼を、自分はどんな大喜びで歡迎しただらう。彼女は、喜んで、喋つて〳〵、うるさい程つきまとはずには居られなかつた。姿の見えない處から、彼女の聲をきいただけで、もう嬉しさで有頂天な伸子の心が見徹せただらう程、單純で、混りけなかつた。今、自分が左樣でないのか、伸子自身、よくわかつて悲しい程であつた。分裂したやうで心が統一して働かず、夫の、親しい者のやうな、あかの他人のやうな顏を見ると、安心して可愛がられてよいのか、憎んでよいのか、決心のつかない氣まづさに捕はれた。佃も同樣の感じで、本當の調子になれないのを、伸子は心づいた。奇怪なことに、彼の顏を見ず、窓のそとの青葉でも眺め乍ら喋ると、話はなだらかにいつた。ふと眼がかち合ふと、疑ひに滿ち、相對峙して讓らない二つの心が、稻妻のやうに閃き、角力はうとするのを、互に鋭く感じる。其那瞬間、言葉は空虚に感じられて恥しい。二人は自然默りがちになつた。佃は、歎息するやうに呟いた。

「――旅行でもして來たら、君の心持もその間に變るかと、樂しみにして居たんだが……何にもならなかつた―

―ね―」

泣き出しさうになつて、伸子が云つた。

「自分だつて厭よ、此那の――本當に厭！……でも、どうにも仕方がない。貴方、御自分にわかる？　貴方が、どんなに可愛くて、憎らしい、憎らしい人だか―」

伸子は、にくらしーい―と、節のつく程力をこめて云つて、涙を落した。

三時頃、親戚に泊りがけで行つて居た祖母が歸つて來た。程なく父も歸つた。彼等はやつと救はれた。父はアイスクリームの瓶を、伸子に振つて見せた。

「ほーら！　いゝだらう？　佃君歡迎の意を表してね」

椅子から立つて、挨拶した佃に向つて、彼は愛嬌よくつゞけた。

「ホテルででも晩食をやらうかと思つたが、考へて見ると、君はずつと洋食攻めだつたらうと思つてね。まあ今夜は一つ、胡坐でくつろいだ方が却つてよからう」

食卓で、父と佃とは種々の關西の都會について話した。祖母は、息子や孫夫婦にかこまれて、至極滿悦に見えた。彼女は突然、

「貴方、御影へおいでんなつたかい？」

などと佃に訊いた。

「あすこはいゝところだない。知つてる者があつて、五十日も厄介になつて居たが、つい近くに、えー、何ちふ名だつたか——なかに髮結の店までである温泉があつてない——省三、お前覺えないごんだか？」

「温泉と云へば…お父様、近くで何處かいゝ温泉は御承知ありませんか」

食事が終る頃に、佃が訊ねた。

「ありふれたところでは、箱根や伊豆だが——」

佐々は東海地方の温泉を、二三擧げた。

「おでかけですか？」

佃は曖昧に答へた。

「えゝ…考へて來たことがあるもんで…若し、適當な講演の暇に遊ぶところでもありましたら、一寸出かけようかと思ひます」

黙つて聞いて居た伸子は、思はず注意を凝して佃を見た。佃は、どこまでも、顔さへ父の方にだけ向け、父と二人の話にして云つた。

「どうせ旅行しついでですから、十日ばかり行けたら行きたいと思つて來たのです」

「ほゝう！ それはいゝ計畫だ。君の體にだつて有益ですよ、是非いらつしやい。温泉はいい——」

父一流の耳學問の廣さで、温泉による天然療法の價値を論じた。

伸子は、思ひがけなさや、佃が何故、直接自分に云つて呉れないかと云ふ疑問等感じたが、次第に大体に其等を忘れて、嬉しくなつて來た。伸子は生來、旅行ずきであつた。結婚する前には、おとよさんと、範圍は狭いが、よく出かけた。温泉も一つ二つは知つて居た。佃と生活するやうになつてからは、彼の職業の關係と氣質から、三日四日の小旅行もしなかつた。夏、佃の生家へ行つたぎりであつた。そんなのに、多勢の家族の裡に入り、違つた周圍で、東京に居ると同じ生活の反復にすぎなかつた。

本當に温泉へ行くと云ふなら、それは伸子にとつて、初めての旅行らしい旅行なのであつた。宿屋に二人ぎりで暮すこと、それも彼女の空想を喜ばせた。父の云ひぐさではないが、山々や、温泉の空氣や、さわやかな朝の目覺めが活潑に、二人の苦情が、一寸喧嘩すれば直に忘られるやうな気持にも連れ出したら、何と素晴らしいことだらう。どんなに仕合せなことであらう！ 佃も同じ考へなのだらうと、伸子は駭きと悦びとを以て推定した。彼女は心を打ち開いた調子で、アイスクリームをたべて居る夫に云つた。

「——本當なの？ そのお話——」

「行きますか？」

「えゝ、行つてよ！」

「ぢやあ、早速電報で問ひ合せて見ませう」

佃は、事務的な口調できゝかへした。

「然し——もう行つていゝんですか、病院はやめていゝかどうか」

伸子は、それで中止されては大變といふ勢で遮つた。

「勿論大丈夫よ。でも、明日念のためによく伺つて來るわ。——大丈夫に定つて居るから行きませうよ、ね、やめないでね——」

九

正面には淺間が空氣を壓いて、噴火山らしい濃い小豆色に聳え立つて居た。其の裾か、ずつと立ち罩つて居る。煙草畑、落葉林、とうかと思ふと、又煙草畑。勾配が急になるにつれ、左右は青木ケ原の寂寞な地平線の眺めが、數十里

の彼方まで擴がつた。仲子等の自動車は、そこを底力の籠つた爆音をたて乍ら、ひた押しに登つて行く。午前五時の露つぽい空氣を裂いて疾走するので、太陽は上つて居るが、仲子の頰や脣がひや〳〵で、强ばるやうであつた。

橋を一つ渡る。くの字形に崖に挾まれた急坂を登り切ると、行手に古風な溫泉町が現れた。坂沿ひの兩側に、宿屋と土產物を賣る店とが軒を連ねて居た。道の眞中に白く湯氣の立つ溝があり、高く湯の香が四邊に漂つて居た。自動車が軒下をすれ〳〵に通り過ぎる、どの宿屋でも、もう寢て居る客など一人も無く、活氣づいて居た。からりと明け放した手摺に浴衣を干して、部屋には一杯朝日がさし込んで居るところ。着いたばかりの客が洋傘を顎の下にかつて、彼等の自動車を目送する樣子。土產物屋の店頭に、粗末な赤や綠で塗つた刳物が並んで居る。それも田舍つぽく、陽氣な湯町の朝景色であつた。仲子は氣のりがして、部屋の無いことも大して苦にしなかつた。其年は、夏休みぢう特別なこみかたで、仲子等が着いた時でさへ、吉田屋の店先には、二十人ばかり溢れた新來者が居る有樣であつた。彼等は一晩、吉田屋の番頭の家で過した。吉田屋の筋向うにある土產物屋の一つで、表で商ひをし、二階をさうやつて夏場の溢れ客のために使つて居た。岡持を下げた吉田屋の若い者が、朱塗の膳など運ぶのが見えた。彼女等は、そこにさへ場所がなく、店の直ぐ裏の座敷に置かれた。納戸の暗いところに、桃色の兵兒帶が見えた。夜、こちらの電燈を消したら、店の灯で、刳物の茄子の影が障子に映つた。

やつと明いた部屋も、本來は小林區の役宅の一部であつた。

「でもいゝことよ、却つて靜かでいゝわ、山家住居で……」

八疊と六疊とある。八疊の方が彼等の室になつた。六疊は見晴しがある代り、直ぐ堤下が道路で、絕えず通る浴客から部屋の內部が見透しであつた。八疊の方は、細長い空地越しに役宅の主屋と向ひ合ひ、左手は熊笹の茂つた斷崖であつた。そこに、田舍の溫泉場らしく湯の樋が通つて居た。熊笹の間には、龍膽の花が山氣に濡れ乍ら咲いて居た。――

高原的な綠木のざわめき、輕快な空氣。自動車で來る路々も、仲子は殆ど官能的な解放を味つた。自然には、人間を元氣づける元素が、特別多いやうであつた。仲子は、ひとりでに活潑になりたい欲望を強く感じた。彼女は、自分で注意深く、その快活さの量が增すのを、計つて居るやうなところがあつた。段々、段々、この元氣が溢れたら、夫と自分との間に橫はる種々な障が、或は流されて仕舞ふかもしれない。……もう少し……もう少し、……。彼女が佃に、

「ね、其那詰らなさうな顏してないで、これでもしませう、ね」

とトランプを出す時、又は、

「ちよつと！　こんな花があつてよ」

と呼びかける時、仲子は大抵、內心で、その快活メートルの下降を豫感して居る時であつた。けれども、佃は、仲子の其那誘ひには、溫泉場へ來ても家に居る時同樣、なか〳〵のつて來なかつた。爪を剪り乍ら、仲子の云つたこととは違ふ返答、

「――到頭今年の夏は何も出來なかつたなあ」

などと呟いた。

「何か豫定がおありんなつたの？」

「自分の時間と云ふものは夏休みしかないんだから、勿論仕たい事はいくらもありましたよ」

散歩して、見晴し臺へ行つて見ると、射的場の前に、若者が群つて笑ひ興じて居た。自然

石の涼亭に、晴れやかな様子で、一組の夫婦が前の廣場を追つかけつこして居る子供を見て居る。ぞろ／＼、仲子等の前後を通りぬけて、芝生の間の徑を、遠い遊園地の方へ行く人々。皆が心輕げで、自然の潤さ、そこに小さい人間の雜沓を、氣易く樂しんで居るやうに見えた。仲子も、さういふ人々に混つて歩いて居ると、心が、單純に悦ばう、悦ばうと彈むのを覺えた。そして實際、彼女は射的場でキルク玉を打ち放つ程罪ない心持にもなるのであつたが、それはやはり一時のことにすぎなかつた。

部屋にかへつて夫とさし向ひになると、氣重さが彼女に迫つて來た。多勢の人中に居る方が淺さといひ、戸外の明るさの中にあつても、彼等は互に今游ぎ合つたいゝ心持で居るかと思ふと、忽ち離れ〴〵になつた互を感じ、寂しい切ない思ひを感じ合つた。何とも云へない焦々しさが、そのやうなとき、仲子を苦しめた。彼女は喘いだり、佃に意地わるい小言を云つたりした。

夕飯前、風呂から出て來ると、佃が縁側に出て庭にむかつて居る女中と話して居た。

「おや、日歸り出來るね」

「えゝ悠くりでございますよ、少し早めにお出かけんなれば―」

――どういふ風に行くのかね、こゝからだと

――殺生石の横から上るのかしら」

「左樣です。彼處に一寸急な處がございますが、直ぐ本道へ出ます――大勢さんおいでですから、そこまでいらつしやれば、自然と頂上までお登れなさいますですよ―」

―どこ？―

―折角來たんだから那須へ登りたいと思つて―

朝飯を食べ乍ら佃は仲子に云つた。

―君はどうせ駄目でせう――待つて居てくれますか―

―さうね――待つてたつていゝけれど……」

一日ぼつねんとして居ることを思ふと、氣が進まなかつた。

―何里あるの――行けたら私も行きたいわ―

―上下三里ばかりださうだが、ずつと登りつゞけだから――どうかな――

―行くわ、ぢやあ。ぼつつりこゝに居るより行つた方が増し―

佃は進まなさうであつたが、仲子は膳を下げに來た女中に草鞋と結ひつけの紐を賴んだ。

起きた時分には霧があつたが、八時過ぎると素晴らしい天氣になつた。樹間の山道から本道へ出た登山路はすつかり開けて居た。女連れや子供づれの湯治客が、暢氣に熊笹の間を縫つて行くばかりではない。二間半程の道の一方によせて、トロッコの軌道が敷けて居た。

「まあ、ずつと上まであるのね、何が通るんでせう」

十五ばかりの少年をつれ、中齒を穿い男が、仲子等の横を歩いて居たが、

「よく開けたもんですなあ。このトロッコで硫黄を麓の工場迄降すんです――餘程の産額になるらしいですよ」

と、それをきゝつけて云つた。

登るにつれて、脊の高い樹木が茂つた。日光が暑くなつたので、仲子は洋傘をさした。笹の繁つた山腹、キラ／＼碧い夏空の下で、たつた一點赤い自分の洋傘の色は、どんなに活々美しく見えるだらう。仲子は、子供らしい物珍らしさで亢奮した。風景も、湯本までは自動車から眺めたより、此邊はずつと雄大であつた。紺靑の緩やかな峯山が、目路を遮る何ものもなく、波うちつゞく。遙か／＼下界に、八月の熱氣でぼーつと、水色がかつた黄味色に霞んだ地平が見晴せた。遙の下に向つて行く人の姿が見え

ず、時々話聲だけ聞える。その人聲が、山路の明るい靜寂の深さを感じさせた。
　彼等は大丸といふ、山の裾の溫泉で晝飯を食べた。どん／＼、川になつて流れる野天の溫泉の巖の間に、大勢の男女が裸で入つて居た。繪のやうな光景であつた。
　そこから四邊の景色が一變し、火山道になつた。笹の處々に、眞白く曝された枯木の骨が無殘に中折したまゝ、ぎざ／＼突立つて居る。路端の僅かな平地に、硫黄採取人夫の掘立小舍があつたりして、いかにも工業山の雰圍氣であつた。仲子は大丸を出る時、娘づれの親切な紳士に貰つた杖を突いて、手間どつて登つた。やつと頂上が見えた。その前にもう一つ急な登りがある。仲子は汗だく／＼になつて、その手前で立ち止つた。
「一寸休ませて！」
　佃も、大丸に着く前から上着を脫いでしまつて居た。それでもびつしより汗が滲んだ。
「日かげがないからひどいのよ、あ、涼しい風！――」
　いゝ心持で風に當つて居るうちに、仲子は段々、噴火の音が氣になり出した。硫黄運びのトロッコも、頂上近くでは山腹の彼方側を下りると見え、登山道の上にも下にも、人間の姿が無かつた。燒土ばかりのところを、蜒々唯一筋の細道が三斗小舍の方角に消えて居る淋しい行手。下の遠い山並。それ等は凝と午後二時の太陽に照りつけられて居る。石ころの轉がる音もしないところへ、巨大な鞴を吹くやうな、噴火口の唸りだけが聽える。音は強くも弱くもならず、のそ／＼して居ると、ハタとその唸りが止んで、山ぢら爆發でもしさうな恐怖を仲子に與へた。
「行きませうぢやあないの」
「うむ」
　道の嶮しさ、自然から受ける威壓。二人は默つて、一氣に坂を踰えた。
「やつと來た！　よく我慢しましたね、私は、きつと中途で引きかへすことになるんだらうと覺悟して居た」
「登りかければどうにかして登るわ」
　噴火口は、頂上の横穴のやうな處にあつた。灼熱した硫黄が、燃え立つラバとなつてそこから流れ出して居る。その焰色の周圍に、冷却した部分が、世にも鮮やかな黄色の鐘乳石のやうに凝固して居る。限りない盛夏の碧空、その硫黄の色、強烈な配色であつた。硫黄採りの男が數十人、或不安に默り込ませられたやうに、眞面目に働いて居るのが、荒涼として長い山の斜面に見えた。
　往きの半分の時間もかゝらず、彼等は峠の小休茶屋まで還つた。
「あら、店をしまつたのね、休みたかつたのに」
「天氣がわるくなつたからでせう、まあ、ずつと歸らう」
　霧が深くこめて來て、自分達が降りて來たばかりの山巓を振返つても、もう見えなくなつた。
「下は雨でせうか」
「さあ……風があるから大丈夫だと思ふが」
　下りの勢で、歩調を揃へとん／＼下りて來るうちに、ポツリと顏に當るものがあつた。
「……降り出してよ」
「夕立でせう」
　ポツリ、ポツリ、段々雨粒が繁くなつて來た。仲子は赤い傘を擴げた。
　高い山を覆ふ雨は一町位で、上と下との雨量がまるで違つた。半分ばかり下りて來ると、もう其邊は大雨であつた。赭土道が泥濘になつて居た。雷が鳴り、笹の中から亡靈的に突立つて居る白い死木に稻妻がひろく閃く。仲子はぞつとした。

「この方が早く歩けていゝ」
佃は伸子の腕を自分の腕にかけさせた。
「もう直きだから、大丸で雨やどりして行きませうね」
伸子の紅い日傘など、何の役にも立たなかつた。透綾の着物が肌まで濡れ徹つた。水を吸ひ込んだ草履が重くふやけ、ビシャツ、ビシャツと、伸子の足の下で泥を跳ね上げた。
「やまなくてよ、これは――雲がどつこも切れて居ないんですもの――本當に、一寸大丸によつて行きませう」
「…………」
佃は歩調を速めた。伸子は小走りになつて彼に調子を合せ乍ら、又云つた。
「雷が、私閉口よ、全く。――おいや？　よるの」
「大丈夫ですよ、雷は遠いもの」
「……でも、私本當に一寸やすみたいのよ、氣持が惡いから」
大丸へ曲る角の横に出た。伸子は、佃の腕を引いて立ち止つた。
「どうしてもいや？」
「眞直行きませう、ね、休んだつてつまらない」
「混んで居るから！」

佃は曖昧に鼻を鳴らした。
「兎に角――さ、歩きませう」
此那に體まで濡れ透つたのに、何故大丸で雨宿り位してはいけないのか、伸子に夫の心持が分らなかつた。彼女は、わけも云はず無理にさうされるので、猶不滿であつた。金の持ち合せがないのではなかつた。……
大丸を過ぎると、先が白く重吹いて見えない程の大雷雨であつた。山ぢうの篠を横なぐりにしてどつと吹き降るので、傘がパラシウトのやうに風を孕んで、伸子を體ごと吊り上げさうにした。或角でひよいと石に爪先を取られた機勢に、伸子は惰力で、はつと思ふ間に兩膝ついて轉んだ。腕をつないで居た佃も、釣られて中心を失つた。立ち直らうとして、彼は伸子の背中に片足突きかけて飛び越し、辛うじて膝をつかずにすんだ。
伸子は一里半の山路をづぶ濡れで下つた。
山には秋が早く來て、夏の終りらしい豪雨がその日から屢々あつた。
「ほう！　こりやあしどい！」
合羽をかぶつて、番頭が飛び込んで來た。
「――……どうも近年にない荒れでございますね、全く番頭泣かせです」
下の川が水嵩を増し、凄じい響で流れた。晝頃から雨を衝いて、頻りに人聲が右往左往した。緣側の雨戸のすきから覗くと、蓑をつけた人足が瀨の勢で上から流れて來る石をよけに働いて居た。
大雨に暗く降りこめられるのも、伸子にとつては變つた趣であつた。雨戸一重裏の崖で、熊笹に雨の飛沫く音がした。量の殖えた温泉がごく／＼咽んで筧を走る音。雨の中に、湯の香がいつもより強く漂つた。子供の時分、夏の嵐を踏臺に乘つて、無雙窓から熱心に眺めた伸子は、懷しくそんなことを思ひ出したりした。
佃はそのやうな一日、物懶げに財布を出して、机のところで錢勘定をしたり、晝寢をしたりした。伸子、
「何かして遊びませうよ」
と夫を促した。
「折角樂しみに來たんだから、まあ出來るだけ愉快にした方がいゝわ」
すると、佃は咎めるやうな眼付で伸子を眺め、きゝかへした。
「――たゞ樂しむ爲にだけ、來たんですか」
思はず眼が喰ひ合つた。伸子は鋭い恐怖あ

いたものを心頼に感じた。

−どうして？ 逢ふの？−

−私は、あなたの足の爲に、いゝだらうと思つたから來たんです−

仲子は、自分達の間に危いながら燃えて居た蠟燭の灯が、フッと吹き消されたやうな寂しい心持がした。

−それで、こなひだも、大丸へよつたりしちやいけなかつたの？−

佃は、然し默り込んで、其には答へなかつた。

そのやうな感情の齟齬が、歸るまで、遂に彼等の間から消えなかつた。七日居て、彼等は謂はゞ喧嘩別れのやうに、佃は東京へ、仲子はKへと、別々に立つた。

佃の黑い制服の肩を窓から見せ、汽車が動いた。自分の乘つて居る汽車も動いて、互に反對の方へ行く。──仲子は、再び歸ることのないところへ向つて動き出したやうな心持であつた。

六

一

廣い蚊帳の中で、寢ながら仲子は、ぽつり、ぽつり、母と話して居た。四邊には、涼しい田舍の夏の闇があつた。

−だからこれで、夫婦なんていふものは難かしいものさね……

悠くりした多計代の聲が、高い天井の方からのやうに響いた。

−性質が違ひすぎてもいけないし、さりとて、餘り氣同士では丸く行かないのはあたりまへだし。──お前なんぞは、傍で見て居ると、どうしても自分より弱い、卑屈なやうな處のある者を選ぶ傾きだね」

仲子は枕の上で仰向き、眼をあいたまゝ、組合せた手を頭の下にやつて居た。

──さうかしら──私、自分が弱いと思つてよ、例へば佃とのことにしろね、私が、もつと圖太く腹を据ゑ切つて、あのひとをコントロウル出來れば、狀態は變るのよ。──あのひとは芯の極く強い──何か、兎に角私の手には負へないところがあるわ」

「そりや世間を見て居るもの、……お前をどう動かす位のことは、ちやんと心得て居るさ」

−私には、底の知れて居る體裁のいゝものを、表面でやりとりして置いて、その間に、ぐんぐん此方をのして行くと云ふやうなことが出來ないんでね、眞正面でない心の關係は、私に持ち切れない。其なら、一刀兩斷な態度をとるかといへば、又さうも出來ず……勝氣などこだやないわ−

「人によつて違ふもんだね」

多計代は、俄に力をこめた聲を出した。

−私なんかだつたら、一思ひに、思ひ切つちやふね、自分を眞から愛してくれもしないやうな者に引きずられて行くなんて、考へただけだつて堪らないことだ。

仲子には、佃に、自分に對する微塵の愛もないとは思へなかつた。彼としての關心は、──少くとも男が自分の妻になつて居る女に對して抱くだけの心持は仲子に對してもあつた。──それが判つて居て、自分がその人情に安じられないから、仲子は悲しく苦しいのであつた。

「だつて──其ぢやあ自分の心持はどうするの、相手が本當に愛さない、其なら、つて自分の愛が急に消え切る？ さう都合よく片づかないから、切ない思ひをするんぢやあないの。つまり云へば誰だつて對手の愛を苦しむんぢやあなくて、自分の心にある愛を苦しむ方が多いんだわ」

「ぢやあお前――まだ佃を愛して居るの？」
隙間風のやうな寂しさが仲子の心を通つた。
世間の、一度結婚してそれが破れ、親の家に戻つた娘が一人殘さず經驗するだらう憂愁の源が、母親の單純な質問の中にあつた。
仲子は、程經つてから云つた。
「私にはね、どうしても、普通の結婚生活がやつて行けないからつて、殘つて居る好意や愛まで打殺さなけりやならない譯は決してない氣がするの。何もこれまでの夫婦がさうだつたからつて、眞似をするには及ばないんですものね、組立てるにだつて、解すにだつて、めいめいのやり方つてものがあつていゝわ」
「佃といふ人に其那ことは解らないよ、――初めつからお前――目的が違ふんだもの」
「それなら其でいゝのよ、私と生活して何かいゝことがあつたんなら、私それで滿足よ。だから、別々になればどう斯うと自棄みたいなことを云つてさへ呉れなければね。――私自棄ほど嫌ひなものないわ、世の中に自分が其那外道人間を一人作るのかと思ふと、ぞつとして、勇氣も何も失つて仕舞ふのよ」
「…………」
微かに、多計代の起き上る氣勢が闇の中でした。仲子は、頭を母の方に向けた。
「なんなの？」
「いゝえね、少し涼しすぎるやうだから羽根蒲團をかけようかと思つて――お前はどう？　それでいゝかい？」
仲子は、麻の小夜着をかけた胸をたゝいた。
「大丈夫よ」
多計代は、
「田舍は此だけ違ふんだねえ」
年よりらしく呟き乍ら、又寢た樣子だつたが、いきなり思ひ出したやうに聲高く云つた。
「なあに、どつち道心配することあ有りやしないよ」
「何が？」
「あのひとの云ふことをさ」
「どういふ意味で？」
「だつて判つて居るぢやあないか。死になんぞする人ではありませんよ。其那若々しい馬鹿ではないよ」
「――さう高は括れないわ」
「ぢやあ、見て居て御覽！」
多計代は、嬉しさうな、挑むやうな聲を出した。
「若し本當に其那人だつたら私はあのひとを見あげるよ。どんなにでもして私の不明を謝さう」
――仲子は、いやな心持になつて默つた。つい本氣になつて種々話した自分の淺墓さが不快になつた。一人の人間の、生き死にを、このやうにして話すのは恐ろしいことだ。仲子は、小夜着を顎の下まで引きあげて寢がへりを打つた。多計代は、仲子が眠たくなつたのだと思つたらしく、
「――そろそろ寢ようかね」
と欠伸まじりに呟いた。
「空氣がいゝ故と見えて、こつちへ來たら不眠なんぞすつかり忘れたやうになつて仕舞つたよ」
「…………」
「ぢやあ、おやすみ」
「――おやすみなさい」
十分もしないうちに、母の苦のなささうな平らかな寢息が聞え始めた。多計代は、仲子が久しぶりで自分と數日暮して居ることで滿足しきつて居るやうに見えた。仲子がどんな心持で來て居ようとも。仲子は、目をあいたなり、たゞ一つの細い寢息を凝つと聽いて居た。その音に引かれ、洪水のやうな周圍の闇や先刻からの澁い

氣持が、規則正しくさしたり退いたりするやうだ。彼女は、そつと寢床を出た。蚊帳の裾が、涼しい籐の敷物の上に落ちて重い音を立てた。

廊下を行くと、燐光のやうな月の光が、閉め連ねた障子の面に照つて居た。仲子は、雨戸に切嵌めた硝子窓に、額を押しつけて外を見た。庭ぢうに月がさして居る。その中を歩いたら髮に燦く液體がねばりつきもしさうな光波につゝまれ、圓い躑躅や檜葉かくつきりと黒い影をしたがへて鎭まりかへつて居る。樹や芝生が夢幻的に、生あるもののやうに思へた。この月夜には、人間の靈魂も遠くたやすく傳はりさうだ。何百里も隔れたところで、妻である女とその母とが、あんな會話をした。それがこの夜、若し佃の魂へ響いて行つたら、彼はどんな心地に打たれるであらう。

仲子はむきになつて、二三度、力一杯月光の漲る硝子の面をこすつた。雨戸を拔け、月光に浸つた夜氣の中へ泛み出して行く魂の波動を、いそいでごちやまぜにして、遮り止めようとでもするやうに。

二

十月になつて、仲子は東京へ歸つた。一月半ばかり前、佃と那須へ行くに同じ線を北に向つた時分と、風景はすつかり違つた。一面秋であつた。

上野の構內に列車が入ると、赤帽を呼ぶ爲に、仲子は早くから窓をあけ、プラットフォームを見て居た。發車する汽車が向ふ側に入つて居て、その方の見送りや貨物の積込みやで雜沓する中に、數人の出迎へ人が、今停車しようとする此方の客車一つ〳〵に注目して佇んで居た。其群の中に、仲子は思ひがけない横顏を認めた氣がした。佃そつくりの、外套を着て山高をかぶつた男が、人待ち顏に立つて居る。彼女の着く時間は手紙で知らしてあつた。仲子は、體ぢう、ぽつと熱くなつた程感情を動かされた。彼が來て呉れたのだらうか？ 彼だらうか？ 彼が來て呉れるとは思ひがけない！ 仲子は一層窓からのり出した。彼女は、その佃らしい横顏に向つて、合圖のつもりで手を振つた。が、仲子の目的の人の注意は引かず、赤帽が、まだ惰力で辷つて居る列車の窓下に駈けつけて來た。

「何個です？ これだけですか」

仲子は、聲の屆かない處に佇んで居る、その人影を見失ふまいと其方に氣をとられ乍ら、トランクを渡した。

「何番？」

「二十八番」

足早に、仲子は其人が立つて居る柱の處まで進んだ。愈々夫かと思つた時、ひどい動悸がし、口をしやんと結んで居られない程であつた。嬉しい言葉をもどかしく[illegible]し、一直線に三尺ばかりの距離まで來て、改めて其の顏を見なほすと彼女は、變な、泣笑ひのやうな微を口に漂はし、ふいと傍に逸れた。

佃ではなかつた。——

改札口まで、今度は悠くりコンクリイトの上を歩き乍ら、仲子は、彼那に迎へられて歸る人は、何といふ幸福だらうと沁々思つた。考へて見れば、夫が迎へに出て居て呉れようなどと空想したのが、抑々間違ひであつた。彼は、仲子が東京から何處へか行つたり歸つたりする時、決してステイションまででも、來たことはない人であつた。其上、歡んで迎へて呉れと要求もされない心持であつた。去年の初夏、同じ田舍から、同じやうにして歸つて來た。その時と感情は全然違つて居た。それは、仲子によくわかつて居た。今度、仲子が歸つて來たのは、どうして夫婦の關係を立てなほさうかと思ふより、その關係を、最も合理的に更へるには、

何うしたらよからうといふ考へに押されてであつた。互の運命に對する恐れも深くあつた。特に佃の側に對して、如何なに救ひがたいものとなつては居ても、伸子は、夫との絆にまだ愛があつた。他人にその始末をつけて貰はうとは、絶對に思へなかつた。せめて自分達の意志と、後に悔ない必然とで、破れるものなら破りたい。さういふ心持なのであつた。其那筈はないと心得て居ながら、佃の靴があがる時、伸子はもう一遍、水のまかれた日光のさゝない三和土の上で、小荷物運搬の手押車をよけよけ、かたまつて居る鉢か盆栽の中を物色した。佃そつくりの横顔を持つた男は、もう其邊に見えなかつた

伸子が歸つて間もなく、たゞ日休みの日があつた。

伸子は、緣側に座蒲團を持ち出して居た。秋晴であつた。躑躅の横に、先住の人の置いて行つた薔薇か、小さい鮭肉色の花を、二輪つけて居た。薔薇の木の後は古い竹垣で、その裏に、更に古びた隣家の羽目が高く見えた。羽目は黒いが、永年の風雨に曝し、黒さも薄墨色にぼんやりしたところへ、綠つぽく細かい黴が、蝶の翅の粉を撒いたやうに滲みついて居た。その背景の地色の前に、黄がかつた二輪の薔薇は、鮮かに美しく見えた。艶ある濃い臙脂の纖い枝の色、夜の霧に蝕まれ始めた葉の色。荒廢した黒い羽目に、此より優れた飾りはなく、秋の薔薇の花にとつても此調和に優る周圍は無いと、思はれた。

伸子は、快感をもつて一隅の詩情を味つた。世の中の美しい人達は、何故このやうな裾模樣を着ようと、思ひつかないのであらう。立派な衣裳と云ふのは、このやうに、計らず印象にのこされる自然の完成した美を、とり入れたものではあるまいか。

すると、其時あちら向きになつて、一本の松の樹の下を掃いて居た佃が、伸子の方を顧みた。

「どうです？　面白い？」

「これ」

伸子は、薔薇から目を離し、先刻から片手に持つたなりで居た本をあげた。

「——冒險物語よ……浪漫みたいな書き出しだわ」

「でも、古い人でせう、その著者は……」

「古いことは古いらしいわね——」

伸子は、緒言のところを披した。

「四世紀頃ですつて」

「ふうむ……」

佃は、それはそれで打ち切り、十坪ばかりの庭の庭石の眞央に立つて、彼方此方を見廻した。彼は何か見つけ、不興げな表情でつくばひの傍へ行つた。

「仕樣がないな——又此那足跡をつけて居る」

彼は、スリッパの古いのを穿いた片足で、ぺたぺたと一箇所を踏みつけた。

「とよ！　とよ！」

木戸から、とよが首を延して、

「お呼びになりましたか」

と云つた。

「——お前今朝、下駄でこゝを踏んだかい？」

「……さあ」

とよは、緣側に居る伸子の方に流眄をし、困却したやうに、佃の踏んで居る場所へ目を落した。

「滅茶々々に歩かないで呉れ、私ばかり、一生懸命に掃除して居るんぢやないか」

「はい」

「——花鋏をもつて來て呉れ」

鋏を受取り乍らも、佃は念を入れて、足跡のことを繰返した。伸子は、傍に居て、妙な極り

惡さを感じた。自分達夫婦の、さつぱりしないいきさつの飛沫を、女中が受けてゐるやうに思へた。

花鋏で、佃は、折れて枯れたまゝ下つて居た松の小枝を剪つてから、薔薇の木のところへ來た。八つ手の下を潜つて、横手から、彼は、吹かずに萎れた蕾を挾み始めた。伸子は默つて見て居た。佃は、段々鋏を入れ、伸子が、さつきから心をひかれて眺めて居た、二輪の、半開の花をも剪らうとした。

「あ、それはやめて下さらない。綺麗だから」

「かうやつて置いても直き駄目になりますよ。剪つてさしたらいゝでせう」

「でも、剪つちや、まはりの樣子が違つて仕舞ふから——いゝんでせう？　さうして置いたつて」

佃は、捕へたその枝を離さず、云つた。

「永く花を置くと幹が痛むから剪らうと思ふだけですよ」

伸子は、言葉に出すと氣障なやうで、その二輪の黄がかつた鮭肉色の薔薇が、その背景あつてこそどのやうに風情に富んで居るか說明出來なかつた。

「本當に、さうやつて咲いて居るといゝのに！」

「ぢやあ止めませう——do as you please.」

ふてた顏で再び八つ手の下を潜つて出て來乍ら呟いた。

「——こんな花！　もつと〳〵綺麗だつた時には見る人もなかつた」

この木一杯に薔薇が花をつけて居た頃、三十日も前になるだらう、彼女は田舍に居て、夜毎に耳だつ廣い蟲の音と、黄色くなつて來る庭の芝を見て暮して居た。その間の氣持や、今自分達二人が、透明に秋陽のさす庭で、薔薇を剪る剪らぬと云ひ縺れて居る心持。烈しく愛し合つて居た筈の二つの心が聯絡を失ひ、たゞ、離れ切れない消極の力だけに牽かれて、互に牽きつ牽かれつして居る狀態が、切なく伸子に迫つた。これから何年か經つた後の或秋晴の日、偶然今日の些細なこの情景が、記憶の底から浮び上ることがあつたら、緣側にかうやつて坐つて居た自分、庭に居る佃の姿、美しかつた二輪の薔薇は、何を自分に語るだらう。

翌朝、黎明に、伸子は硝子戸から庭をすかして見た。薔薇は露に濡れ、うなだれながら、色鮮かに、昨日と變らず咲いて居る。その無心な鮮かさ、淨らかさが、異樣に伸子の心を傷ませた。彼女は眼を逸すやうにして通り過ぎた。

三

夜の八時。スミルノフが、ハフイズの詩を音讀して居た。後について、佃が抑揚を注意し乍ら、一節づつ讀んで行く。——喉音の多い、單調な二つの男の聲は、四邊の空氣を重く感じさせた。

スミルノフが低い聲で何か云ふのに對して、佃が、せはしなく、重ねて、

「Yes, yes.」

と答へる聲も聞えた。——總てそれ等は惱ましい。伸子は、部屋の中を、彼方此方動き出した。

歸つていくらも經つて居ないのに、伸子は、數日來、一種情熱の足りない自己嫌惡に陷つて居た。

今度歸つて、伸子は、夫がもう自分をなみの女として扱へなくなつたのを知つた。持てあまし、要點が捕へられず、恐れるべきなのか、憐れむべきなのか、兎に角觸らぬ神に祟りなし、さう、きめた風に感じられた。田舍に居た間のことについては、伸子の方のことも訊かないと同時に、佃は、自分の方の生活についても一切話さなかつた。

一歸つてさへ來れば、いつでもウエルカム・ホームですよ。ベイビー」

然し、本當の嬰兒のやうに、無垢ではない。伸子は女で、彼の妻であつた。彼等の間では、夫婦關係も、自然さを失つて居た。家族主義的な希望もなければ、原始的な慾望の燃え上りから生ずる、淨らかな力も缺けた。佃の、何だか卑屈な、或時にはさういふ行爲さへ、伸子の爲と云ひたげな感情を感じるのは、伸子にとつて苦しく、屈辱であつた。彼女は、ひとりでに湧き溢れて來る自分の、若い、潑剌とした愛撫されたい慾望さへ、其那時は憎く、口惜しく、悲しかつた。二度と還らない若さにまで、不合理な羈絆を感じさせる夫を恨んで泣いた。二人の關係が、惡いのだ、間違つてしまつて居るのだ。伸子には、さうとしか思へなかつた。一人々々離れて見れば、大して惡い者でもなく、邪惡なものでもない人間同士も、或る關係の下に置かれると、別人になる――何よりも其處を正すべきなのは彼女自身偏りすぎてゐた。

田舍から歸る決心をした時、伸子は、自分が佃のことを考へてゐると思つて居た。最上の解決を得たい、彼らに生活を破りたくない、よい動機で、歸るやうに思つた。ところが、自重するばかりではないらしい不決斷で、毎日を消して居る自分を顧みると、伸子はかうやつて歩き廻らずに居られなくなるのだ。

佃は、彼一流の忍耐と狡さから、形式上、昨日のことは昨日のことと、しようとして居るのは明かであつた。これで行くなら、まあそれでよい、さう云ふ考へ。自分は自分で、知らず知らずそこにつけ込んで居るのではないかといふ氣がして來た。彼を攻めつゝ、結局、勇氣の足りない自分を預けて居るのではないか。

伸子は、よくあるやうに、他に新たな戀人が出來たので、やつと境遇を更へた、然し、或男の妻である點では以前の反覆に過ぎない、男から男へ移つたといふだけのやうな生活法には、疑ひがあつた。彼女は、佃と誰かを比較して、結婚生活がいやといふのではなかつた。相互の性格によつて種々生じる不都合と、一般に、結婚生活のしきたりとでも云ふか、一般男女間に通用して居る生活内容の感じ方、生かし方に、納得のゆかぬ點々を見出して居るのであつた。佃は、伸子にとつて最初の夫であつた。そして、恐らく最後の夫となるらしかつた。伸子自身、もつと違つた女に生れ更るか、或は一般の性生活の常識が、或點變化でもして、もつと無理なく、ならなければ。つまり、伸子にとつて、佃と夫婦生活がやつて行けないのは、たゞ對手が佃だから云ふだけの理由では、ないのであつた。面倒に云へば、佃といふ男、自分と彼との結合生活に導き入れられた、彼女に辛抱ならぬ中流的な精神や感情の不活潑さ、貧弱な僞善、結局は恩給主義と引きかへになるのが樂しみらしい所謂仕事の態度、それ等と迚もうまく調子を合せては行けない自分を見出したといふことになるのであつた。其故、伸子は佃に對して、混りけのない一面の氣の毒さがあつた。彼だけこの世でさういふ生活を欲し、無批判なのではないから。彼女は、自分の欲するそのものが彼にもいると信じて、彼に結びついた、がむしやらな熱情を詫びることは出來た。然し、一人の人として伸子は赦しさなく、自分の主張を實行する心のよりどころがあるのであつた。

其だのに何故ぐづ／＼せずには居られないのだらう？　愛の故か？　たゞ數年間夫婦として暮した習慣によつてであらうか、又、人間は悲しい生物で、離しても一本能でも互の間に好意が殘つて居るうちは、せめては其をかたみとし

て互にわけ、別々に生きるといふことの出來ない關係なものなのだらうか。心理的に暴力が加はらなければ――例へば誰か一人の男が現れて、自分を佃から奪ひ去つてでも吳れなければ、自分の處理がつきかねるのだらうか。

底の底を割つて見れば、自分の働き一つで生きて行かうとする將來へのたじろぎが微塵もない、とは仲子に思へなかつた。佃がこの微妙な弱さを氣付かないとも考へられない。彼が、腹では、仲子がいくらいきり立つても、なにいざとなつて見ろ、と見とほしつゝ、ベイビ、ベイビと甘やかす生活――。仲子は堪へ難い何ものかから身を防ぐやうに、兩肩をすぼめた。

不意に、匙が紅茶皿にぶつかる亂暴な音がした。向うの部屋では、いつか音讀が止んだ。飮物を運ぶ足音がした。――もう濟んだか。仲子はこの部屋に居るのが厭で堪らない心持がした。夫と口を利くのが苦痛であつた。どつか、暗い、人の居ない隅つこに早くもぐりこんでしまひたい。世の中が變つて仕舞ふ迄寢通したい。……襖が軋んで開いた。板の間を踏んで來る音がする。仲子は咄嗟に、部屋の外の濡緣の方を見た。

「隱れたい!」心臟がその思ひで獸のやうに鼓動した。この衝動は、然し、仲子自身にさへ突拍子なかつた。何故?身動きする間もなく襖が開いた。仲子は、自分に喫驚した顏をそのまゝ、入つて來た佃に向けた。

佃は何か怪訝さうに、椅子の背を摑まへて突つ立つたまゝで居る仲子を見た。彼は手に淺い箱を持つて居た。仲子は喉の乾いたやうな聲で、

「なにか御用」

と自分から訊いた。

「――ミスタ、スミルノフがこれを下さいましたよ……」

佃は、何か異常な空氣を嗅いだといふ風に仲子を上下に眺めた。

「――來ませんか。こつちへ」

仲子は背につかまつたまゝ、横からその椅子にかけた。

「――私變なの、今夜。――失禮するわ。よろしく、どうぞ」

彼は箱を仲子の膝にのせて去つた。それは波斯棗の砂糖づけの箱であつた。

四

十二月に入つた或晩であつた。

仲子は女中部屋に坐つて居た。三尺ほど離れて、とよが、血色よく胸の張つたルノアルの田舍女めいた妻で、せつせと毛絲をまいて居た。壁に新聞雜誌の美人畫などがはりつけてあり、赤い襟が揮發油で洗つて窓の上にかけてある。仲子は心持よく手を動かして居た。小さい時分、母の前に坐つて絲を卷く手傳ひをした。仲子は、しんなしに綺麗に卷いて一杯種々な色をとりまぜ入れてあつた小間絲の箱を思ひ出した。それが樟の用簞笥に入つて居た。抽斗をあける時、ぷーんと樟の香がする。母はいくつ位であつたら?彼女はどこか和やかな心持でさへあつた。

「とよや、いつもはどうして居たの。一人で出來たの?」

「普通の絲なら引つぱつてかたく卷いても平氣でございますから、一人で出來ますんですけれど」

とよは仲子が飽きたと感違ひをし、急に手を急がせた。

「いゝのよ、ゆつくりで。私も面白いから――これからも云へば手傳つてよ」

「有難うございます……」

とよは何か、微かに表情をした。仲子はそれを感じ、笑ひに紛らして云つた。

「――もつとも、私みたいに家に居付かない人

を當には出來ないね」

　四オンスめの絲が五六本、細いわくになつて仲子の手頸に絡みついて居る時、佃が部屋から呼ぶ聲がした。とよはあわてて頭を下げながらゐざりよつて、毛絲をとりのけた。

　佃は机の前に居た。

「何御用？」

「――一寸」

「何なの――」

　仲子は机の横に立つて夫を見た。佃は顎に毛布を巻きつけて居る體を椅子の上で反すやうにして、仲子を凝と眺めた。眉をよせ、額を皺にし、悲痛な眼付で猶も見ながら、垂れて居る仲子の手を執つた。仲子は彼のさういふ表情が何となく居苦しかつた。

「何なの、御用は」

「――今夜は少し眞面目な話があります」

　仲子は佃の執つて居る手を引込めた。

「おやあ――一寸待つて頂戴ね――」

　仲子は隣室へ椅子をとりに行つた。行き乍ら、苦しいやうな、見當のつかない不安なやうな氣がした。何を彼は云はうとするのであらう。

「少しそつちにやつて――さう、有難う」

　仲子は斜に彼と相對する位置に椅子を置いた。

　佃はやゝ暫く、沈默したまゝ腕組みして居たが、やがて傍から、四つに疊んだ懷紙をとり出した。彼は其を仲子に渡した。

「――いやだらうが見て下さい――其那ものが昨夜出た」

　仲子は、開いて見た。ぞーつとした。一度伏せ、更に見直した。紙の間に、黝みかゝつた桃色の、花瓣が破れた大輪朝顔の押花のやうな血痕がついて居た。

「いつなの？　昨夜？」

「風呂を出てから――こゝへ來ると變にむせるやうになつたから、それに唾をとらうとしたら其那ものが出た」

「今日は？」

「何ともない」

　仲子は紙を机の上に戻した。

「變ね――兎に角安靜にして居なければいけないわ――何故默つていらしつたの。鹽水がいゝのよ、直ぐ其時飲むと……」

　佃は又、仲子の手をとつた。

「――私は永い間、隨分無理して來たから、きつと永いことはないと思つて居ました。日本へ歸つたら、きつと如何かなるだらうと思つて居たのに、よく今日まで保ちました。――君も、隨分苦しんで居るのは知つて居るが、せめて私の生きて居る間は――さう長くもないのだから、一緒に生活して欲しいと思つたので、いろ／＼云つたが――もう止める權利がなくなつた。――どうか――自由にして下さい。私はもう、決して引き止めませんよ」

　仲子は、見たものからは或程度動かされて居た。けれども、佃の云ふことは、感傷的すぎて聽えた。考へて居ると、彼は益々、仲子を手ごと自分の方に引きよせ乍ら、訴へるやうに云つた。

「――本當に遠慮はいりません。斯ういふことになれば、私は、先からあゝいふ話が出て居なくたつて、自分の傍に置かうとは思はないから……ね」

　仲子は猶、默つて居た。佃は長く仲子を凝視めて居たが、軈て、

「――あゝ」

と吐息をつき、椅子の背に凭れた。彼は感慨に堪へぬやうに頭を振つた。

「到頭來たか……」

　仲子には佃の云ふことが、何かぴつたり來な

かつた。病氣は病氣で別問題といふ氣か、ひどくはつきりした。病氣になつたから去つてもよい——彼の提議には、何か矛盾した、悲痛感に驅られた氣ぜはしさがあるやうに、伸子は感じた。

「——だつて——さうせつついて考へるには及ばないぢやないの。第一、病氣だつて何なのか、まだ定りもしないのに——」

伸子は、卻つて彼を云ひなだめようとするやうな餘裕ある心持で、笑さへ浮べた。

「あとで貴方の思ひ違ひだつたつて騷ぐやうなことになつたらどうなさること？」

「其那ことは決してない——私にはよくわかつて居ます」

「考へて御覽なさい」

伸子はいつの間にか、佃の腕を着物ごと抑へつけた。

「假に女中だつて、病氣の主人を置いて出られるものではなくてよ。——出來ないことは仰云らない方がいゝのよ」

「出來ないことぢやあない」

「どうして？　貴方は本當に、私が悦んで云ふ通りにすると思つていらつしやる？　兎に角、まだ何も仰々しく云ふ時ではないわ。——明日津山さんをお呼びしませう」

これは不思議な感情であつた。時には殺して仕舞ひたいと思ふ佃、この關係から逃れたい、逃れられたらどんなに嬉しいかと思つて居る伸子の心に、次第々々に悲しい歡びとでもいふやうなものがさしよせて來た。彼女は靜かに云つた。

「——何が仕合せになるかわからなくてよ。……私共はこの頃、ひどい貧乏人だからね——心が——だから、何だつて役に立てようと思へば立つかもしれなくてよ」

佃の病氣が生活の目標を變へ、從つて二人の心持にも變化が起り、互の生活に圖らず新生面が開けまいものでもない氣が、ふつと伸子にはした。少くとも、病氣を癒さうといふ共通の目的が二人に授かる。——

卻つて、活を入れられたやうな心持で、伸子は椅子をずらした。

「大したことでないには定つて居るけれど、もう横におなりなさい」

佃はすつかり悄れ、伸子の云ふなりになつて床についた。

「さあ、元氣を出して！　昔の人みたいな考へ方は駄目よ。若しさうなら水野さんのお弟子にならないわ」

水野といふのは、紐育で知り合ひになつた高等工業の教授であつた。染色研究に來てゐるうち、肺を冒され、ひどい喀血をした。夜はすぐハドソン河向うの療養所に入り、一年程絶對的な休養をして、すつかり固めた。十月中旬市に歸つて來た時、伸子も初めて紹介された。その時、彼は久々で日本語を話す愉快さと、一つの事業をなしとげた人間の計り知れない滿足とを以て、一晩ぢう、自分の病氣と恢復の手當、經過等を彼等に話して聞かせた。

その時の話の中から覺えるともなく覺えて居た注意によつて、伸子は佃の床の中に湯たんぽを入れ、火鉢を部屋から出した。そんなことをし乍ら、彼女は、水野が、

「庭にラズベリーの繁みがありましてね、雪が積ると駒鳥が遊びに來い〳〵しましたよ」

と、如何にもその光景に慰安されたらしく、追懷して話した調子を思ひ出した。

五

伸子は自分の机にかへつて、津山へやる手紙を書いた。

「一昨夜、血液の混つた咳が出たと云ふの

で大層氣にして居ります。何卒一度御來診下さい」

彼女は、

「とよ」

と呼んだ。

「これを、明日の朝九時に學校へ屆けて御返事をいたゞいて來て頂戴、間違ひなくよ」

津山は佃と同じ學校の校醫であつた。

翌朝早いと思つて、伸子もその夜は早寢にした。佃はいゝ工合に熟睡して、伸子が入つて行つたのも知らず、微に鼾をかいて居た。

横になつて見ると、伸子は、自分が極めて平靜な積りにも拘らず、底では亢奮してゐるのを知つた。夫を落膽させまい心持があつたと見え、何だか病氣も判らなさうに云つたが、伸子に其がコンサムプションであらうことは殆ど疑ひなかつた。彼が二十代に痔瘻を患つたことのあるのを聞いて居た。始終胃腸に苦情があつた。彼の生國は國別にして一番、さういふ患者の多數なところであつた。然し、さう激烈ではなさゝうだし、彼はもう四十になつて居るのだから急變はあるまい——斷片的な知識で、伸子は大體の結論をつけた。

それにしても、伸子は自分がこの事を案外の不幸と感じないのだらうか。伸子は怪しんだ。暗闇に横はり、斯うして彼の寢息を聽いて居る。——騷ぎ立てる程特殊な驚きも、急激な歎きも傳はつて來ない。同時に、あれ程執念深く互の間にある確執が、今夜だけにしろ、すつかり消えたやうなのに伸子は氣づいた。中和した狀態であつた。——彼が、夫婦といふ關係をとりのぞいても、人として、健康な自分の助力が入用になつた故だらうか。

Pity…… pity akin to love……

線香花火のやうに其等の文句が點いたり消えたりした。伸子は、彼が事實をかくして居た一日の間の心持など考へ、森とした氣持になつた。

伸子は、寢がへりした。佃も此方を向いて眠つて居るらしい。彼のはく息が二つの床の中間で自分の息と入り混るのを、伸子は寒い夜氣の中で感じた。その感じは異常に鋭い意識を伸子に呼び醒した。伸子は思はず息をつめ、愕きを感じつゝ、闇の中で眼を瞬つた。彼女は、永いこと無意識につめて居た息をはき出すと、次の吸ひこみを自然にそつちを向いたまゝでは出來なくなつた。伸子は、出來るだけそろ／＼蒲團の中で仰向きに向きなほつた。伸子は、自分に對し皮肉な心持になつた。

朝になつて、伸子は夢を見た。

佃が血を出したと云ふので、自分が醫者に電話をかけて居るところだ。何處の電話か、受話機を握つて居る手のひらの感觸と、送話口の光つたニッケルだけが、はつきり見えて居る。傍に、そこの女中が縞の着物を着て立つて居る。自分は無智な女中に、佃が血を出したと云ふのをきかれるのがいやで、送話口へ延び上り、懸命に、

「佃が blood を出しました」

と云つた。

それぎりで目が醒めた。醒めた後までも、其 blood と氣をつけて發音した舌の感じが、變に現實的に殘つて居て、伸子は悲しい心持がした。

津山は一時前に見えた。佃は細かに、容態を說明した。すつかり、醫師と患者といふ態度であつた。

「それは御心配でせう。然し、長い時間に亙つて聲を出す職業——お互のやうにね——よくやられますよ。結核でなくとも。それに何です、X光線ででも見れば、十人の中七八人までは痕跡を持つて居るもんですからな。つまり

無意識の中にかゝつて、無意識の中に治つてしまつて居るのです。人間は此で、なか〳〵うまく出來て居ますよ」

彼は、血色のよい、然し神經質らしい手つきで、聽診器を出した。

「どれ――一寸拜見しませうか」

佃は本氣な顏つきで、襯衣を脫いで胸部を出した。どこにも病氣などなささうに、胸郭の廣い厚い胸であつた。

「――確りした骨格ですね」

醫師は、精神療法として、佃の皮膚に指先をふれ乍ら云つた。

「ほら、貴方の皮膚はかうやつて見ると、十分脂肪もあるし、血色もいゝし、彈力もありませう。どうして、本ものとなつたらかうは行きません」

「大きい息をして。小さい息をして」

「大きいのをもう一つ」

仲子は傍で見て居て、そのとき、夫がしんから哀れになつた。津山に命じられる通り、彼は眞心こめ、眉を上げ、大きい息を吸ふ。氣をつけて小さく息をする。仲子は、彼が此那に眞劍で全心的なのを、どんな場合にも見たことがなかつた。彼も生きたいのだ。其でこそ正直だ。

仲子は、鼻のしんが酸つぱく、しみるやうになつて來た。手洗ひを用意して戻ると、もう佃は着物を着かけて居た。

「いかゞです」

アルコホルの香のする脫脂綿の小片で、聽診器を目立たぬやうに拭き乍ら、津山が答へた。

「別に私は異常を認めませんね、一寸――ほんの一寸、左の方に雜音があるやうな氣もしますが、その位のことは、一時的に誰しもあり勝のことですから」

佃は、今朝から自身を非常に劬り、聲さへ力を入れて出さなかつた。彼は、津山の診斷だけでも勢づいた。

「――有難う。――色のついたものなんか出たんで、すつかり喫驚してしまひました」

「さうですね、素人の方は。然し却つてその方が安心ですよ、早く氣をつけるから……」

仲子は、お手洗ひを、と云はうとして、思ひついた。

「恐れ入りますけれど、お次手に私も一度御覽いたゞいて置きませうかしら」

仲子は何處にも異常なかつた。津山は、明日Ｋ病院の呼吸器專門の人と、又來ると云つて歸つた。

「御覽なさい！　私の云ふ通りでせう」

仲子は醫者を送り出して來て、云つた。

「――いや、然しまだ判りません、專門家が見ないうちは」

「いやね」

と仲子は笑つた。

「ヒステリーのお孃さん！　重くないとお氣に入らないの？」

然し、其夜寢ようとして、夜具を引上げた拍子に、佃は又少量の血液を出した。彼は精神感動の方が強くて、眞蒼になり、氷のやうな四肢を震はせた。

六

日曜日に、仲子は動坂へ行つた。門に自動車が止つて居た。仲子は玄關で訊いた。

「お客樣？」

「須田のお孃樣がたがいらつしやつていらつしやいます」

「父樣は？」

「お客樣でございます」

「あゝ別なの」

煖爐の傍に、須田の三人の子供と、三人の仲

子の弟妹、母とが居た。彼等は、前ぶれなしに入つて行つた伸子を見ると、一どきに、それぞれの聲で、

「わーッ」

と歡聲をあげた。

「こんちは、丁度よかつてね。私達一時間許り前來たところよ」

「おあつらへむきだつたね、さつき電話でもかけて見ようつて、云つて居たところだつたよ」

「さう。——暫く」

伸子は手袋をぬぎ乍ら、従妹たちに挨拶した。

「久しぶりね。この前、禪ちやんの御結婚の時會つたぎりね」

「だつて伸ちやん、ちつとも來て下さらないんですもの」

割込んで腰かけると、カアテンの仕切から、つや子がこつくりしたいゝ黄色の毛絲のスウェータアを着て出て來た。

「姉ちやま、泊る？ 今夜」

「さあ——。つやちやん今日はおしやれね、どうしたの？ そのスウェータア」

「鈴ちやんが編んで下すつたの」

「いゝ色だね、子供には其那色もいゝと見えるね」

「つや子は髪が黒いからなほ似合ふ、つやちやんは何を御禮するの？」

つや子は考へて居たが、極り惡さうに、

「僕も編んだげるわ」

と答へた。すると、保が、頓狂に振向いた。

「え？ 君が編む？ つや子の編んだ袋ね、僕見たけど、まるで貧弱つたらないの。赤くて、小ちやくて、穴だらけよ」

皆がふき出した。高い窓から霜げた讓葉の梢が見えるのが、冬の日曜らしく長閑であつた。

伸子は、三十分ばかりして、母に訊いた。

「私父樣に伺ふことがあつて來たんだけれど——お客樣ながいの？」

「さうだね」

多計代は時計を眺めた。

「おや、もう二時間餘になるね、もう直きだらう、何か會社の方の關係らしいから。泊つてつたつていゝんだらう、今日は。さうおしよ」

伸子は蒸しずしをたべながら、

「今日は迚も駄目よ、御病人だから」

と云つた。

「へえ」

多計代は意外さうに訊いた。

「佃さんかえ？」

「こなひだから寢て居るの」

事もなげに、多計代は呟いた。

「又例のおなかだらう。相變らず弱いねえ」

「おなかぢやあないのよ、今度は。——」

其處へ、父が入つて來た。

「やあ。來たね」

伸子達は、揃つてぞつくりと立ち上つた。

「今日は」

「こんにちは、伯父樣」

「こんちは！」

父はおどけて、眼鏡を鼻の先にずるこかせた。

「こりや大變だ！ うちの子が倍になつたぞ。どれがとれだか見分けがつかない」

騷ぎが鎭まつてから、伸子は父に訊いた。

「父樣、いつだつたか、いゝ寢臺のカタログを見ていらしつたことがあつたわね、あれ今でも在ること？」

「さあ——探せば勿論あるが——買ひますか」

「一つ欲しいと思ふの」

彼は暖爐の火をほげ乍ら、

「一つ？」

ときゝかへした。

「——どうせ買ふなら二つがいゝだらう？ 健

康的ですよ——うちも、頑固婆さんさへ承知してくれゝば寢臺にするんだが」
　仲子は來た用事をきめたく、冗談にのらずに續けた。
「佃が少し工合わるいんでね、疊の上に寢て居られると歩くに氣がねだから、一つだけさし當り買ひたいのです。——何處？デスクの中？」
　仲子の後について、父もデスクのところに來た。
「其處ぢやあるまい、そつちの綴込の中だらう。Bのところを見て御覽」
　彼等はカタログを見つけ出し、子供達がダイアモンドをして居る傍を拔け、暖爐の前にさし向ひに坐つた。父は心配さうに見えた。
「どうしたんだね、一體、ずつと惡いのか」
　仲子は腹案を立てて來た通り、輕く答へた。
「無理をしたと見えて喉の奥をわるくしたのよ。一學期位休養すればいゝんですつて」
　母が、むからから、見徹すやうな表情で自分の云ふことを聞いて居るのを、仲子は感じた。
「其りやいかん。醫者は誰か信用のある人を頼んだかい」
「父様御存じでせう。Kの芹澤さんといふ人」
　仲子はカタログを檢べ、店へ電話をかけた。
月曜に屆けるといふ事であつた。佃は、三度目の精密な診察で、初め怪しかつた通り、左に輕微な浸潤のあることが明かになつたのであつた。けれども、仲子は、萬已むを得なくなる迄、彼の病狀の詳細は兩親に告げない積りであつた。そろ〳〵かへらうとして居ると、女中が呼びに來た。
「奥様が、一寸御炬燵へいらしつて下さいましつて——」
　仲子は、用向が直覺され、いやであつた。澁々襖をあけると、多計代は炬燵に當つたなり首だけ振向けた。
「時雨て來たね、何だか。——あつちぢや、がやがやして困るから、一寸話したいと思つて」
　仲子は膝を入れた。
「佃の病氣についてだがね。——本當に大丈夫なのかい」
「なにが？」
「——單純に喉なんかぢやあるまい？」
「何故？」
「いつか來た時の顏色は、どうもたゞぢやあないと思つて居たもの——」
　仲子は、母に幾分の安心を與へる義務を感じて、
「——いづれにしろ、ひどい心配な事はないのよ。——私がこんなにぴん〳〵して居るんだから、大丈夫な證據ぢやあないの。たゞ、寒さに向ふ時候だから大事をとるのよ」
　と云つた。
「お前のぴん〳〵は當にならないがね——何しろ困つたものだ——それで何かい、本當に一學期位で元通りになるのかい？」
「多分ね」
　仲子は暗い顏で笑つた。
「そりや人間だから分りやしないけれど」
「然し、若し佃が結核ででもあるんなら、それを默つて結婚するなんて、罪惡だね」
「假にさうとしたつて、前からあつたんぢやあないでせう。さう考へるのは酷よ」
「お前だつて、折角健康なのに——何をするんだつて體が資本だよ。國の父さんのところへは云つてやつたかい？」
「其那必要はないのよ、まだ」
「だつていろ〳〵……」
　金のことであるのが仲子に推察された。
「本當に大丈夫なの、——」
　仲子は炬燵蒲團をはねた。
「ぢやあ今日は失禮するわ、いろ〳〵有難う」

「さうかい」

多計代は未練らしく自分も立ちかけた。

「本當に氣をつけなけりやいけないよ。お前まで變なものを背負ひ込んだら、家ぢやお斷りだよ」

部屋を出がけに、彼女は皮肉に呟いた。

「――まああの人にすれば、却つて都合がいゝといふもんだらう。斯うなると、出ろと云つても出られるお前ぢやないんだから……」

伸子は母が憎々しく、然し眞實を言ひ當てたのを感じた。

七

重いスープ皿を載せた盆を持ち、伸子はそつと唐紙をあけた。

一切炭火が入らないので、室内の空氣は清らかで、すがすがしかつた。硝子戸越しの晴らかな日光が寢臺の金具に輝いて居た。

「いゝ空氣ね、こゝは。――頭がすーつとするやうよ」

返事がない。――伸子はしまつたと思つて、首をすくめた。佃は眠つて居ると見える。

伸子は靜に寢臺に近よつた。

音を立てないやうに側の小卓に盆を下し、枕の上を覗いた。彼は眠つて居るのではなかつた。仰向いて天井を眺めて居る。脣を引締め、上瞼を引きつらすやうな眼つきで、一點を凝視して居る。何かと思ひ、伸子は自分も一寸天井を仰ぎ見た。

「どうなすつて」

「……………」

「――眠つていらしつたの？」

佃は、のろのろ眼球を伸子の顔の上に動かし、悲痛なやうな、訴へるやうな眼差しで、元氣に立つて居る伸子を眺めた。

「――眠つてなんか居たんぢやありません」

悲難を含んだ語勢に、伸子は初めて、佃が、彼女から見えなかつた側の手に小型聖書を持つて居たのに氣付いた。伸子は、それを見ると説明しがたい不快を感じた。夫が床についてからもう數回彼女はこんな情景を目撃した。その度に、同じ新しい鋭い全身的な不快が伸子の胸に湧いた。慢性腎臟炎にかゝつても、佃はやはり聖書を片手に、このやうな表情をするであらうか？　日本へかへつてからは、平常聖書など讀まず日を送つて居た佃が、床についてから、自分を最も不幸な境遇に陥つた者らしく考へて、殊更に聖書をひねくるのが、伸子には、慘めなやうな、恥かしいやうな、堪らない心持なのであつた。伸子は、自分の感情を抑し、何も見なかつたやうにスープをすゝめた。

「さ、熱いうちに召上れな。冷えたら、クックがクックだから仕方なくなつちまつてよ」

佃は、伸子の明るさを撥ねかへすやうな眼付で、寢臺の上に起きなほつた。默つて匙をとつた。義務のやうにスープを吸ひ乍ら、白眼のはつきりした神經質な視線を時々あげて、傍の伸子を見た。

伸子は、何か自分が理由の分らない詰問でも受けて居るやうに窮屈を感じた。

「どうなすつたの？――工合がよくないの？」

「いゝや」

「――ぢやあ氣を引立てて召しあがれ、ね。貴方なんぞもう恢復期よ。何も滅入る必要なんかないのに――平靜で居る方がいゝのよ」

「――有難う……美味しかつた」

佃は皿をかへし、サーヴィエットで口の邊をふき、云つた。

「氣の毒です。……君は健康だし」

「どうして」

「此方だから――私が」

「――病氣のこと？」

佃は、返事の代り太い吐息をついた。
「――そりや誰だつて病氣より健康の方がいゝわ、でもお互になつたら仕方がないし、最もよく治すやうにするだけよ。そりやかまはないけれど――何ていふか……」
仲子は、皮肉にならないやうに云つた。
「氣の持ち方とでもいふか――何故かういふ病氣、他の内臓の病氣を扱ふやうに扱はないんでせう。――危險がない程度なら、却つて頭がよくなつていゝ位に、ぐんと思つてしまふ方がいゝのよ」
「――兎に角、幸福な人間はならない病氣だ」
今度は仲子がどんより、恐怖を以て徐ろに彼を見下した。……これは一つの暗い啓示であつた。仲子は夫の病氣は病氣と思つて居た。佃は單純にさうは思つて居なかつた。仲子が生活に落付けないで彼を苦しめるからだ、と云ふのだ。――
皿を抱へたまゝ、仲子は凝と立つて居た。彼の女は、此處まで來ても遁路のなかつたのを知らされたやうな沈着を心に感じた。病氣に、心と心との撃ち合ふ音のない爭ひを熄めさせる力は、なかつた。
夫が今は病氣だから、ひとりでに劬り助けて居るが、つきつめたところへ行けば矢張り彼を受け入れて居るのではない。同じやうに、佃も内心では絶えず仲子をこのやうに攻めて居るのか。
仲子は、暗憺とした心持で臺所へ行き、默つて女中に空のスープ皿を渡した。
何心なく喋り乍ら、佃の枕の工合をなほしたりして居る瞬間、仲子は不意にこの事を思ひ出すことがあつた。心が眼を瞠つて、氣輕さうに物を云つて居る二人の心底の恐ろしい暗さを照した。――仲子は急に苦しくなつて、唇が竦むのを覺えた。自分が佃に行屆いた看護をしようとするのも、愛からではない。自分が冷酷でありたくない――つまりは自己滿足のためだ。仲子にさう囁くものさへあつた。自分がもつと生一本な人間であつたら、このやうな仁者ぶりは蹴とばしたらう。
全く自然にやりかけて居た自分の單純な行爲まで、變に僞善的なところがあるやうに思はれ、仲子は苦々しく痛む心で、いそいでやりかけのことを片づけて仕舞ふ。佃に其が、仲子のむら氣、面倒くさがりとしかとれないのがよくわかつた。仲子は悲しかつた。自分が佃でも、憎らしく感じるだらう――これは切ない事であつた。
或宵、仲子は暫く自分の部屋に入つて居た。氣がつくと、家ぢうひどく森として居る。彼女は一寸耳を欹てて見た。自分の部屋だけ殘して、周圍が消え失せたやうな靜けさだ。仲子は、不安に襲はれた。體で椅子を押しのけ、立つて隣の唐紙をあけた。スタンドが灯つて居た。寢臺の蒲團は、内に横はつて居る人間の體なりにもり上つて居る。何の變りもない。――仲子は、何の爲に其那不安に掴まれたか、可笑しくなつた。寢臺の裾の方の壁に、大きい自分の影法師を映し乍ら、仲子は部屋に入つた。が、夫の様子を見ると、言葉が塞がれた。
彼が聖書を讀む――どういふ心からであらうと、其をとやかくいふ權利が自分にないのは、仲子にわかつて居た。明るく讀まうと、感傷をそそるやうに讀まうと。然し、世の中には、神經に徹へるやりかたと云ふものがある。例へば同じ物を食ふにしても、見て居ると腹が立つて來るやうな食ひかたといふのがある。この聖書で、佃は、何を自分に思ひ知らさうとするのか。
仲子は、佃の顔を見下した。彼は、仲子に見下されて居ることも、その視線には、足踏するやうに強い感情がこもつて居ることも恐らく感

じて居るのに、睫毛一本動かさなかつた。強情な凝視を、足下の壁から離さない。伸子は次第に辛抱しきれなくなつた。彼女は低い、ひしやげたやうな聲で云つた。
「それをこつちへ頂戴——お願ひだから……」
彼女はさう云ひ乍ら手を延した。
「……………」
佃は、蒲團から出して聖書をもつて居る手の拇指がまむしになる程力を入れて其を持ちなほした。伸子は荒々しい心持を制せられなくなつた。
「——頂戴」
彼はよこすまいとする。
「頂戴」
あゝ、自分は何を仕ようとするのか。佃の體に惡い。恐ろしいことになるかもしれない。恐ろしいことになればいゝのだ、一思ひに！ 一思ひに！ 佃は蒼白な顏で伸子を睨み据ゑたまゝ、手を上げたり下げたり、渡すまいとする。伸子は其を本氣で追ひ廻した。追ひ廻すうちに、伸子は、自分等が可怖くなり、涙をぼたぼたとこぼした。
「頂戴つて云ふのに！ 下さりさへすりや何でもありやしないぢやないの！」

奪ひとつた聖書を伸子は、寢臺の下にたゝきこんだ。彼等は二人とも泣いた。

八

二月下旬に、佃の健康は、學校へ出勤しない事、朝おそくまで寢臺に居ること、夜外出出來ないこと位で、殆ど平常に復した。
冬枯の庭はいつか潤ひ、こまかに木の枝などを眺めると、仄かな艶や芽のふくらみが優しい早春を感じさせる日であつた。
佃は、井戸の横で、木戸の繕ひをして居た。厚く着ぶくれ、スキーにでもかぶるやうな毛絲帽を耳まで引つかぶつた彼の様子は五十位の年寄に見えた。
「——其那に力を出していゝの？ 私が打ちつけて上げませうか」
「何、大丈夫です、此位。——一寸針金を持つて來て」
伸子は、納戸へ行きかけた。
「あゝそれから時計を見て下さい、机の上にある」
伸子は、針金の束と、針金切の鋏をもつて戻つた。
「一時十分前よ」

「もう？ ぢや支度しなくちやあ」
佃は、いそいで仕事をしまひかけた。
「——何處かへいらつしやるんだつたの？」
「えゝ、君も支度して下さい」
「出しぬけね」
伸子は、とよを顧みて笑つた。
「そんなら早く仰云ればそのやうにして居るのに。おしやれで二時間もかゝつたらどうなること？」
伸子が着換へをして居る部屋へ、佃も手を洗つて來た。
「和服にしよう」
「さうお——和服つて、いつものつきやあなくつてよ——一體どこなの、行くところは」
「いゝんです、このまゝ行つたつてかまはないところなんだ」
「どこ？」
「行けばわかります」
「動坂」
「いゝや」
「——知らずに行くのでいゝところなの？ 面白いところ？」
「さあ——多分さうだらうとは思ふんだが」
夫の傍に、是非や何か[illegible]乍ら、伸子は、

頭の中でこれから自分達の行きさうなところを方々さがした。

「ね、一字だけ云つて。當てるから」

「行けば判りますよ」

此那ことは、彼等が結婚して以來、初めてのことであつた。佃は興にのることなど、樂しい不意打ちで對手を悅ばせる計畫をするといふことなどない人であつた。他處へ行つても、豫定の時間に歸ることを忘れない人が、珍しいことだ。

彼等は近所から電車に乘つた。

——本郷……肴町……二枚。

肴町……。仲子は、佃の隣に腰かけ、眼をしばたゝくやうにして考へた。彼等の交友範圍は狹かつた。二人で訪ねて行く處など、決して思ひ出せない程はない。肴町——仲子は覺えず、

「あゝ、わかつた」

と、口に出した。

「わかつてよ」

佃は、正面を向き、外套の下で腕組みしたまゝ訊きかへした。

「どこ?」

「でも、やつぱり確かぢやあないわね……阪部さんかと思つたんだけれど……東京に來ていらつしやるんでせう、あの方、今——どつか——大學正門邊なんぢやあなかつたかしら、宿が……」

佃は、どつちにでも取れるやうに笑つた。

「ちやあさうしてお置きなさい」

阪部は、地方の大學に植物學の敎鞭をとつて居る彼等の親しい友人の一人であつた。上京すれば會はない事のない間柄であつた。

案の定、佃は、大學正門前へ來ると立ち上つた。

「降りませう」

そして、果物屋の横を眞直に入つた。或西洋料理店の前に、白服、白前垂に大きな料理帽をかぶつた料理番が立つて、ぼんやり彼等を眺めた。少し先の軒の前に風船屋が出て居た。仲子は、穩やかな午後の往來を、複雜な心持で歩いた。夫婦とは、或は人間の生活とは、何と妙なものであらう。この間の晩あのやうに泣いた二人が斯うして連れ立つて歩く——前ぶれなしに、阪部訪問になど自分を連れ出す氣になつた夫の氣持が、仲子には、或思ひ遣りを起させた。

本郷臺を、小石川の方へ下る坂の右側に、御下宿、と書いた中古の看板をかけた門があつた。

佃はそこを入つた、膳を捧げて通りすがつた女中に、彼は聲をかけた。

「おいでですか——阪部さん」

「はあ、どうぞお上り下さい」

女中は、仲子を案内し乍ら、スリッパを二足揃へた。佃は、案内を待たず、どん〱自分で中庭を廻つた廊下を進んだ。

「まあ! いつの間にか彼處へ來つたことがあるのね」

その聲を合圖のやうに、廊下が鍵のてに曲る角の柱の下へ、阪部が姿を現した。

「やあ」

「よくいらしつたね、さあどうぞ」

阪部の部屋は、窓から坂の下の樹木や屋根の見晴らせる、靜かなところであつた。仲子は、その窓に腰をかけた。

「割合いゝお部屋ね、餘り下宿らしくなくて」

「——昔、私がまだ書生の時分から知り合ひでね、こゝの親爺は大の阪部黨ですよ」

阪部は自分で茶を入れながら、佃に訊いた。

「どうだね、ずーつと順調かね」

「うむ。もう自分ぢやあ何ともないやうだが、こゝ一月一杯我慢しませう。——然し氣になつてね」

「はゝゝ。勤人根性といふ奴があつてね、出るべき時に休んでは、休みも休みにならないといふ譯か――まあ、休める時にうんと休んで、潛勢力を貯へることだね」

仲子は、阪部にだけはどんな口も利いた。

「ね、阪部さん、今日はどんな素晴らしいことがあるの?」

「どうして」

「だつて――二人で牒し合せていらしつたんでせう?」

「これは弱つたね、はゝゝ、何か、では特別な趣向でも凝らすんだつたが、もう間に合はない――晩の御馳走で勘辨して下さい」

阪部は、[illegible]、眼尻に小皺のある眼で、しげ／＼仲子を眺めた。

「――貴女は相變らず元氣ですね」

仲子は、顔を赧めさうにして、[illegible]を開けた。

阪部は、彼女の心持を見抜いたやうに直ぐ押しかぶせて、

「いや、元氣な事は結構だ」

と云つた。

「誰だつて、生きて居るものに元氣なのは自然だ。貴女の元氣は、見やうによつて、一種異なる天の[illegible]みたいなもんですよ」

去年の夏、丁度佃が關西方面に旅行中のことであつた。仲子が動坂の家から病院通ひをして居た頃阪部が上京した。彼は赤坂の家の留守番から二人の消息をきゝ、動坂へ訪ねて來た。仲子は、父親にも紹介し、三人で夕飯を食べた。その時、彼等は、主として、C大學に居た頃のことを話し合つて興じた。

仲子は、

「貴方もあの頃は、今のやうに大家ぢやなかつてよ」

と笑ひ乍ら云つた。

「一生懸命だつたわね。ほら、あの黴だらけの林檎を大事にしていらしたこと!」

「ふむ」

阪部は、顯微鏡を覗きつけた眞直な平らかな視線でやゝ暫く仲子の顔を見て居たが、突然云つた。

「――貴女――こんなことを伺ふのは失敬かもしれんが――幸福ですか?」

仲子は、いきなり苦しい胸の眞中を、すばりと射られたやうに感じた。けれども、彼女は或恥かしさから笑ひ乍ら云つた。

「――其那らしい細胞の變化が現れて居ること?」

「……貴女に無駄なことはなからう、――結構だ。まあやれるだけやることだ」

矢張り、笑ひ乍らだが、仲子は思はず涙を泛べた。彼女に此那風なことを、此那工合に云つた人はなかつた。――

仲子は今阪部に會つて、再び其時の心持を思ひ出した。

「――今年は雪が降らないと云へば――」

阪部は、日本服で別人のやうに見える背を丸めて、机の下から厚い紙挾みを引き出した。

「今度はこれを印刷することも一つの用で來たんだが」

仲子は、菓子鉢や茶器を片よせた。

「專門的に云ひ出すと、又面倒くさいことになるんですがね、つまり、要點は寫眞が說明して居るだけだ。――先づ、これが――何と云ふかね、序論かね」

其は、櫻に似た一本の樹の寫眞であつた。眞直に幹を延し、左右ゆつたり枝を張り、花をつけて居る。仲子等は默つて眺めた。

「次は、これ」

「――嵐のあと? 電線が切れて居るし、家は倒れて居るし」

阪部とでも話すよりはきゝ役の佃が訊ねた。

「何處？　滿洲邊らしいね」
「あゝ北滿洲ね。ひどい有様でせう、毎年或期間朔風が吹く、それは此那勢だといふことを示したもの」
　次のは、幾本もの大木の梢が皆一方へ捩曲げられ、片側は丸坊主に枯れたやうになつて居る寫眞。
「——關係がわかりますか？」
　仲子は面白くなつて來た。彼女は、熱心に見較べ、
「えゝ、判つた！　判つた！」
　と叫んだ。
「其から」
　六枚の寫眞は、毎年の季節風の爲、滿洲の或地方の樹木が發達を阻止され、一定の法則をもつて變化する。畸形になる。その經過の研究なのであつた。
「——これは、ずつと先に集めて置いた材料でせう？」
「——十年近くなるかね」
「……然し、同じ研究でも君のはいゝね。僕の方はやり切れない。何しろ事實材料をディッギング・アウトするのだからね」
「日本ぢや駄目かね」
「——貧乏暇なしさ、食はなけりやならないからね」
　寫眞を又繰返し眺めて居た仲子が云つた。
「——食べなけりやならないのは誰だつて同じよ。十人の中九人九分までさうだわ」
「さうです」
　佃は、不意な仲子の言葉で、感情を害したらしく云つた。
「然し、僕の研究では、教師にもなれないからね」
「自分の專門で教師をしたつて君、樂ぢやあないよ。いつでも、自分の力以下の學生對手でやつて行くのは。——それにやつぱり本當のラバラトリー・ウォークは別さ。——却つて、別のことを講義して本職は本職でこつ〳〵やる方が純粹な樂しみがあるかもしれん」
「——時間がないね、實に」
「何時間です？」
「十一時間」
「其ならまだよろしい——」
「——僕の方の仕事なんぞは、一言見つけるに、一日どころか三日四日かゝつても駄目なことがあるんだからね」
　仲子は、專門如何に拘らず、熱のこもつた仕事ぶりに刺戟さるる性であつた。阪部の、兎に角ものにして行く、努力を見たばかりの時、夫、自身の仕事についての愚痴が、彼女の仕事魔とでも云ふやうなものにさはつた。
「まるで、それでは仕事の出來ないの、阪部さんの責任みたいね……」
　其處へ、仲子さへ豫期しなかつた工合に、こんぐらかつた夫婦の鬱積が絡まつた。
「だから、私の云ふ通りになさるといゝのよ。さうすれば、學校は研究の云ひわけ、研究は學校の云ひわけ、と云ふやうな面倒なことにならなくていゝわ」
「全く面倒だね、はゝゝゝ」
　阪部がとりなすやうに笑ひ出した。
「何です？　仲子さんの云ふ通りと云ふのは——」
　仲子は、表面明るい快活さで、すらりと云つた。
「私がいゝ提議をしたのよ。もう、旦那樣、奧樣で、何一つ祿なこともしない癖に體裁だけ意義あるやうに構へて居るのは澤山になつたから、元の書生にかへりませう、つて。いゝでせう？　そして、二人で、本當に自分の力を活かして遣れるところまでやつて見れば結構だわ、ね……」
　輕く切り出したのが重々しくなり、仲子は悲

しげな顔をした。彼女は、自分に此那話をさせようと佃が此處へつれて來たのでないのはよくわかつて居た。こゝに夫が居なかつたら、彼の顔、彼の癖、ぼき〳〵節を鳴らす手の指が見えなかつたら、恐らく自分は此那ことは云ひ出さなかつたらう。伸子には、特に其が苦しい心持を起させた。彼女は、むつつり黙り込んだ。

佃が、溜息と一緒に、

「――なか〳〵むづかしい」

と云つた。

「我々は互に仕事があるからね、どうも――」

阪部は、そろ〳〵日のかげつて來た部屋の火鉢に火をついだ。

「――其だけなら、初めつから諒解し合つて居ることなんだから割に造作ないだらう、もつと、こりや根だね。――根が大事だよ」

阪部は、暫く考へ續けた。

「又植物をかつぎ出すが、何だね、或草や木が生きて居られる、――最も自然な、状態に於てだね――陽光といふのはきまつて居るね。地面の上でさへあればいゝといふわけにはどうも行かんらしい――或草は、北緯何度の地帯でしか生育出來ない、或は、赤道附近でしか生きられない、人工で温室に入れたり他の方法を用ひたりして枯れない丈には保てないこともないさ。けれども、悲しいことには、さうされて生きる植物は實らない――繁殖出來ない。――こゝが恐ろしい點だよ。人間も、どんな境遇にだつて、或程度までなら生理學上の命だけは失はずに生きられよう。が、地味が本ものでないと實らない。理想論だが、何だね、能ふべくんば、人間互にその本ものの地味を作り、又與へたいもんだと僕は思ふな。斯ういふ話になつたから率直に云ふが――まあ、君等も――強ひて一つの小さい、體に合はない植木鉢の中で揉合つて居なければならない事もなからうさ」

佃が歯の間から呟いた。

「理想はさうだらう――然し私には出來ません――さういふもんぢやない」

「何が――伸子さんの云はれるやうなことかい？」

「さうです」

「……翔びたい鳥を精一杯翔ばせて見るのもいい氣持だらうと私は思ふなあ」

伸子は、阪部が明かに自分に好意を持ち、加擔して居るのを感じた。彼女の感情が動いた。好意は嬉しかつたが、阪部にいゝ氣持さうに其那ことを云はれて居るのが苦痛になつた。

「いゝことよ。議論で決定することではないの。とんだ捲き添へにお會はせしちやつたこと」

彼等は五時まで話した。

「折角だから夕飯を何處かで食べよう」

「まだ夜おそくなれないから、今日は失敬します。家へ來てくれ給へ、家ならいつまででもいい」

廊下へ出ると、阪部が立ち止つた。

「あゝ一寸待ち給へ、あげるものがある」

阪部は、下駄を廻してくれと云つて、中庭へ下りた。戻つて來た時、彼の手頸三四寸、水につかつた部分だけ、冷たさうに眞赤になつて居た。

「なに

「東京では珍しいものです、毬藻」

玄關の板敷に立つて、彼は帳場から出させた紙でその緑天鵞絨でこしらへたやうな丸い藻を包み、伸子に渡した。

九

縁側に手をついて、伸子は脊の高い硝子壜の中を覗いて居た。壜の水に阪部のくれた毬藻が沈んで居た。

「何だかこれ色がわるくなつて來たやうね、

「[illegible]らないわかりもないの」
「さうですか」
「そんなにいつまでも[illegible]な内にあるもんでせうか」
「さあ……」
間を置いて、伸子が訊ねた。
「阪部さん南洋へいつお立ちんなるの？」
「まだ一二ケ月あるんでせう、まだすつかり決まつたわけでもないんだらうから」
伸子は、水をとりかへた硝子壜を日向へ置いた。
「……貴方、阪部さんをどうお思ひになること」
佃は、伸子の眞意を讀まうとするやうな用心深い表情をした。
「貴方の思ふ通りでは、どう？」
「さあ、相變らず彼の男でせう」
「貴方の心持、變らない？ 先と」
佃は、案外さうな、咎めるやうな眼付できゝかへした。
「どうしてです？」
伸子は、先日阪部を二人で訪問してから、友情の一部に變化が生じかけて居るのを感じて居た。彼女には、其が三人の爲に遺憾であつた。一半は自分の責任であるといふ感情もあつた。

彼女は佃にぶちまけて、あるなら不快を洩して欲しかつたのであつた。
「本當に今まで通りな……」
「さうでない譯がないでせう」
四月の新學期から、佃は出勤し始めた。初めて出かける朝、去年の暮頃のまゝの服裝で彼が靴をはく後に立つて見送りつゝ、伸子は感に打たれた。佃にとつても、伸子にとつても、彼の病氣は一時的な而もたゞの病氣でしかなかつた。病氣だけよくなつた。元の彼になつた。見馴れた制服を着た元のまゝの彼に。その姿を見ると、自分の胸に底潮のやうな悲しみと嫌惡の湧き起る彼に……。
「行つていらつしやい」
頭を下げたが、彼女は直ぐ其場から勢よく立てなかつた。
夫に對する愛と憎の輾轉反側が伸子の心に又力を盛りかへした。彼女はどこに居ても落着かなかつた。其故何處にか心の休息所を欲して動き廻る。
伸子は、動坂へ屢々行き、泊つた。
或日、佃から動坂に居る伸子へ電話がかゝつて來た。

「明日歸られますんで、[illegible]二十八日に急き立つと云つて來たから、[illegible]でも一緒に住たいと思ふ」
翌日、彼等は二人で夕食をたべに出かけた。
すつかり初夏であつた。夜空に、街路樹が軟らかな若葉をそよがせて居た。彼等は、先日やゝ氣まづく別れた蟠りなどを忘れ、愉快に喋つたり散歩したりした。伸子はその夜は赤坂へ戻つた。
朝になると、昨夜は星が綺麗に見えて居たのに、小雨が降つて居た。その中に、とよが、傘もさゝず、池を覗いて居た。
「どうしたの？」
「金魚が一匹妙なんでございます」
「どんなに？」
「今朝起きて見ますと、一匹やつと游くやうなのを、皆が後からせッせと追ひ廻して居りますから、弱つたのを助けて游がせてやるのかと思つたら、いぢめて居りますんです」
とよは、
「ほら又！ 叱つ！ 叱つ！」
と水の上で手を叩いた。
「何故いぢめるんだよ、可哀さうに」
伸子も手傳つて、弱つて居る金魚だけ別にし

ようと、撓渊をさがしたが見當らなかつた。

「斯ういふものは妙だね。こなひだ夜、一匹犬が自動車に轢かれてキャン／＼鳴き乍ら逃げるのを、矢張り多勢ほかの犬が追つかけて咬みついたの見たよ」

そんなことをして居るうちに、仲子は、この間ぢう緣側に置いてあつた筈の硝子壜が見えないのに氣づいた。

「おや、あの壜どうした」

「どの壜でございます」

「あの、青い眞圓い——ほら、この間私が鋏で散髪してやつた、圓い藻の入つて居たの」

三月程經つうちに、毬藻は段々青々した初めて色を失ひ、水を透して見ると、球狀の周圍に、ホヤ／＼水あかのやうなものが認められるやうになつた。この前、動坂から歸つた時、仲子は、

「これはいけない、枯れ出した。一つ散髪をやつて見よう」

と、とよに手傳はせ、藻の表面の老廢物を丁寧に剪んだ。

「これでございましたかしら」

とよが慌て、叱られる覺悟といふ風で、空つぽの、乾き切つた壜を持ち出して來た。

「無いの？　藻は」

「こなひだ、旦那樣が溝にこれをおあけんなつていらつしやいましたけれど——お棄てになりましたんでせうか」

仲子は默つて、暫くとよが雨空を鈍く反射させ乍ら手に持つて居る空の硝子壜を見て居た。

「もういゝ。ぢやあ」

とよが、詫びを云ひさうにした。とよの責任でないのは分つて居た。仲子は急いで顏洗ひに去つた。

——仲子はあの毬藻が好きであつた。珍しいその藻の生活狀態を、阪部から說明されたからばかりでなく、形も色も愛らしいものであつた。佃が誰かから貰つたものだつたら、さうむざ／＼棄てなかつたらう。仲子はさう思ふと惜しい氣がし、命ある毬藻が哀れにさへ感じられた。昨夜彼はそんなことは一言も云はなかつた。仲子が阪部に、毬藻の怪しくなつて來たことを話して居たのに。

二時過、仲子は家を出て丸善へ行つた。昨夜、阪部が、今日丸善へ參考書を註文しに行くと云ふ話が出た。

「丸善——私も何か見に行きたいな」

すると、佃が云つた。

「行くなら、こなひだ送つて貰つた中に返すのがあるからとりに來いと、杉君に云つて下さい」

出かける迄毬藻のことが仲子の心にこだはつて居た。彼が故意と棄てたとはつきり分るのが實にいやであつた。彼女は暫く躊躇した。けれども考へて居るうちに、彼女は拘泥して居る自分が腹立たしくなつて來た。彼女はとよに、

「おかへりになつたら、丸善で阪部さんと何か上げるものを見つけてから、動坂へ行つたと申上げておくれ」

と云つて出た。

丸善の二階へ昇つて行つて見ると、阪部はもう數冊の本を選び出し、番頭と何か話して居るところであつた。仲子は先づ夫の傳言を果した。阪部は植物學を通俗的に書いたいゝ本を仲子に示した。

「——かういふ風な書き方は、我々大いに學ぶ必要があると思ふが、どうです」

「植物の生活」ファブルが子供の爲に書いた著作にどこか似た文章であつた。仲子は、別な棚で自分の欲しいものを見たが無かつた。阪部が航海中讀むやうにと一冊の本を買ひ、一時間程で丸善を出た。

朝からの小糠雨はまだやまなかつた。全市が

一枚の濡れた大外套のやうだ。それから、濕つぽい、ねばつく露が立つて、遠方の高い建築物をぼやかして見せた。傘を擴げたなり高くかゝげて、向ふから來る人々と衝突するのを避け乍ら、阪部が、

「さて、どうします」

と伸子に尋ねた。

「いやなお天氣ね——これでは歩く氣もしないわね」

「どちらへ歸ります？」

「私？　今日は動坂」

「ではお茶でも飲んでお別れしようか」

彼等は、ある家族的喫茶店へ入つた。阪部はいつも話好きだが、其日は特に話題が盡きなかつた。彼がいつか書きたいと思つて居る、さつきの植物學のやうな本のこと、今度の南洋旅行で、附屬的な收穫としたい或人類學上の興味ある計畫について。伸子が阪部と話していつも面白いと思ふのは、彼が一種綜合的な天質を發露させて植物學に携はつて居る點であつた。彼が變形菌のことを話せば、必ずそれはどこかで今日の生きて居る人間の社會生活と關係を持つ結論に達した。檢微鏡的報告に終らなかつた。そこに彼の話の活々さと魅力があつた。喋つてゐるうちに、はつと、店內の電燈がついた。大理石の卓子や、鏡を嵌めこんだ柱が、俄に夜の銀座らしく輝き出した。

「——さあ、そろ／＼動き出しませうか」

「あゝ大分今日は喋りましたね」

阪部は時計を見た。

「何時？　四時すぎたでせう」

「二十分です」

彼は勘定をし乍ら、考へて居たが、

「どうです、どうせ食べなければならんものだから、夕飯を近所ですませませんか」

伸子は、

「さうね」

と云つたが、

「——からなさいな。若し貴方が明日立つのに一人ぼつちであがるのお厭だつたら、動坂へいらつしやい。今日は父も歸る日だから丁度いゝわ」

阪部は、伸子の心持を理解したらしく、

「——成程」

と云つた。

「佐々さんにお目にかゝるのも愉快だな、ではさう願はうか——突然でかまひませんか」

「いゝでせう。——よそへ行くよりよくてよ」

伸子は、動坂の家へ電話をかけた。阪部は、途中で、何かの話の端につけ、

「——今日のことは——まあ云はない方がよからうな」

と獨語のやうに云つた。

「何のこと」

「いや、この間の樣子でも、佃君は一種の病人ですよ、精神的に——。だから、病人には病人を扱ふ心掛が必要だらうと思ふ。つまり、聞かせる必要のないことまで聞かせるに及ばないといふのです」

「——……」

其は不愉快な注意であつた。伸子は、阪部からそのやうな言葉は豫期しなかつた。

阪部の言葉は印象濃く、數日經つた後まで彼女を滅入らせた。阪部との遠慮無いつき合ひを、伸子は數年來安心して樂しんで來た。彼と話すことは面白く、刺戟された。彼も、伸子のやんちやや知識慾やを、樂しんで居たらしかつた。親しい年の差の多い叔父姪のやうないきさつで、極めて自然に彼が好きなのに、何だか警戒的にならざるを得なくなつた。毬藻をくれた者と、其を棄てた者との、男の本能が、呑氣に

甘たれて居た自分を挾んで暗默の裡に對抗したのかと思ふと、仲子は侘しく感じた。自分は、何方につく者でもないのに……

妙に寒い日が續いた。仲子は腸の工合を惡くしたので、猶元氣がなかつた。仕事がちつとも出來ず、彼女は、單衣の上から母の羽織を借着などし、家の中をうろついて暮した。

或日仲子は珍しく、今日こそ、と意氣ごんだ氣持で床を出た。彼女は、紺絣の元祿袖の着物で、どた〳〵食堂に行つた。珍しく兩親が卓子に向つて居た。

「——お早うございます」

云ひかける仲子に向つて持つた新聞と一緒に手を振り、多計代が空虛になつたやうな聲で云つた。

「えらい事が出來たもんだね」

見ると、父も別の一枚を讀み乍ら、いつにない表情で居る。仲子は、その肩越しに紙面を覗き込んだ。三段ぬきの大見出しが瞳に映ると、仲子は、頸から鳥肌立つやうな打撃を受けた。彼女は、そこに坐つてもう一枚を擴げ、一氣に讀んだ。讀む字はわかるのだが、字面から來るものが多すぎ、理性から溢れるといふ心持であつた。尊敬されて居た文學者が或夫人と自殺した事件が報道されて居るのだ。仲子は讀みなほし乍ら、何とも云へぬ悲しみと畏怖で震へるやうになつて來た。口が利けなくなり、彼女はやつと物を云ひ出した兩親を置いて部屋を出た。

×氏は、四十歲を餘程越した上流出身の、教養と才能と同時に人間的敏感さを多分に持つた藝術家であつた。理想家で、愛妻を失つてから二人の兒の父とし、孤獨を守つて生活して居た。作品の詩趣と、その特殊な境遇が種々の方面に若い女性の崇拜者を作つたが、仲子はさういふ側からでなく、反對に、更に偉大な人及び藝術家として自分を完成させる爲、彼が激しく行つて居るらしい内面的爭鬪にひどく心を牽かれて居た。最近書かれた長篇が、仲子に多くさういふ點での暗示を與へて居た。彼女の理解した×氏は、この一二年間に、必ず運命的な轉向を藝術上生活上にしなければならない時期に迫つて居たのだ。其處を、ぐんと！そしたら彼は第二の天から、第一の天へ昇り得るであらう。仲子は其時をどんなに心待ちにして居たであらう。仲子は、藝術家の運命、特色ある性格と環境との喰み合ひを、よそごとと思へぬ年齡になつて居た。彼女は、待つて居た。そして、見て。——

その期待のたゞ中に、今日の報道が齎された。全然、夢想もしない形で。彼は飛んだ。上へか？　下へか？　仲子が全心に感じ得ることは、その疑問に對する理智的な返事ではなくて、彼は左樣した。彼は僞りを云ふ人でない。さういふ恐ろしい確認ばかりであつた。事件には人を沈默さす誠實の威力があり、超人力の何ものかがある。それが仲子に苦しい。ひどく苦しかつた。自分といふ、現在搖れて居る弱い存在の根にまで響が傳はつた。

仲子は、食事が出來なかつた。一日、感動に漂つて一人坐つて居た。その夜、努力したが眠れなかつた。涙が出る以上の緊張が精神を摑んだ。

告別式が翌日の午前にあつた。仲子は、父と共に連つた。白布の敷かれた上を祭壇の前まで進み、夥しい白花に覆はれた柩の一枚の寫眞で再び故人の温容に接すると、きのふ新聞を見た時と同じ、それ以上の苦しさが新たに彼女をしめつけた。——彼は飛んだ。上へか？　下へか？——涙がこみ上げて來た。外側の關係から見れば、彼女はそのやうに泣く程故人と近い者ではなかつた。式に列して居る親族の前に、仲

子は極りわるかつたがその涙を隱すことが出來なかつた。

七

一

電車が九段坂とお濠との間の狹い軌道を、のろのろブレーキをかけて下り始めた。三分の一ばかり進んだ時、前方から、手に赤旗を持つた男が小走りに驅けて來た。運轉手に向つて何か叫んだ。運轉手は、いそぎ兩手で更に強くブレーキを締めた。電車はいやな軋みを立て乍ら、勾配の急な坂路の不安定な位置に停つた。

「何だ、どうしたんだ」

車掌が、下りて行つた。數人の男が、ざわめいて窓から無理に前方を覗かうとした。

「爆破作業の爲、三十分停車いたしまアす」

「——なあんだ——」

と、氣色ばんだ男達は當がはづれたやうに席に復した。

車内は、一時森とした。軈てぼつぼつ話聲が起つた。關東に大震災があつてから一ケ月餘經つて居たが、東京人は、まだ當時の亢奮からすつかり回復して居なかつた。人は、寄り集ると火の手の工合だの避難の相談などをせずに居られなかつた餘勢で、お喋りになつて居た。纏りない雜談が、見も知らぬ乘客同士の間に交され始めたが、中で一際高い嗄れ聲が伸子の注意を牽いた。其男は、明日公判のある甘粕の行爲を、日本男子の龜鑑だと極力賞揚して居るのであつた。ひどく挑戰的な憎々しい調子で、熾に社會主義者はどしどし殺しちまへと云つて居た。露骨な故意とらしさを不快に感じるのは、伸子ばかりでないらしかつた。彼女の前に居た若者は、無視しようとしても耳に入る文句に焦々し、靴の爪先をばたばたやつて居たが、遂にくるりと窓の方を向いて濠を見下し乍ら、トラヴアドウレを口笛で吹き出した。晴れた十月の午後の日光が、神田の平らな燒跡一帶を照して居た。

「——ちえつ」

やがて立つて居る伸子の背後で、舌打をする音がした。

「たまんねえな、根が生えちやふぜ」

伸子は時計を見た。もう三十分は十分經つて居た。

「ドカンて云はないうちやあ何分經たうが立往生だよ。下りちやはうよ、何でもありやしねえや、たつた三町場ぐれえ」

その後の空いた席に、彼女は腰かけた。後の高い煉瓦崖にじりじり反射する秋日和で、日除け扉を下した其方側はむつとする。隣に、ネクタイなしでソフトカラアに穢れた夏服をつけた薄禿の男が居た。左の手に手帳を持ち、短い鉛筆の先を舐めては、文章の推稿をして居た。講談本でも讀むやうに節をつけて繰返し自分の書いた文をよんだ。

「一度肉體死スルヤ、其靈魂ハ、遊行シテ——遊行シテ……と」

そこで行きつまり、更に初めから「ヒトタビ、ニクタイシスルヤ」飽きず反覆して居る。——反動主義の男は、相手がないのでいつか靜かになつた。

いきなり、ドドーン、と地を震はせて爆音が轟いた。電車の窓硝子が一どきにビリヽとした。

待ちくたびれ、ぼんやりして居た乘客は、俄に活氣づいて窓外を見た。半分燒け遺り、孤獨に突立つて居た煉瓦の大建築の殘骸の横から、濛と黄色つぽい大きな煙が昇つた。續いてもう一つ爆音。悠々と立昇つた煙が、まだ棚び

いて居る前の煙と重々しく合した。煙が散ると、もう、先刻の高い建物は跡かた無くなつて居た。空の廣さ、日の輝きが異様にはつきり感じられた。雄大な寥しい光景であつた。

不圖、女の泣き乍ら何を云ふ聲が伸子を篤かした。氣がつくと、彼女の隣に、三十五六の窶れた女が包みを膝に抱へて腰かけて居た。ドドーンと爆音がした瞬間、その女は居たゝまれないやうにきよろつき、誰にといふ當もなく、

「こゝに居て大丈夫でせうか、ね、大丈夫なんでせうか」

と口走つた。その聲が、泣き乍ら唇を吸ひこんで喘ぐやうに響くのであつた。

「――皆さんがいらつしやるから大丈夫なんでせう……」

然し、ドドーンと土煙が彼方に聳ると、彼女は再び怯えて自制を失つた。

「あゝ、本當に大丈夫なんでせうか―」

伸子は、自分まで悲しいやうな慘めな氣がした。

「大丈夫ですよ。あれは工兵が仕て居るんだから――安心なさい」

殆二十分頭上に待たれ、電車はやつと走り出した。

伸子は道坂へ古本屋を買ひに出かける途中であつた。彼女は直接震災に遭はなかつた。けれども、廢墟になつたやうな大都會の光景が、強く彼女の心を捉へた。反動的な生活力が市民の總てを捕へた。彼女も、今まで失つて居た生存感の凝集を感じ、數人の女性と震災罹災者慰問の仕事に携はつたりして居たのであつた。

結婚してから四年間、彼女の生活は内面的に、夫との組み打ちの連續であつた。ひどい機械の音ばかりする工場に四年働いた人間は、きつと鼓膜が變になつて、普通の物音など聞えないやうになつて仕舞ふだらう。伸子の精神狀態も全く危機にあつた。次第に緊張し張り切つて來る心の苦痛で、彼女は一種の偏執狂になりかけであつた。一人静かに居る時、彼女は、この生活がいつまで續くかと云ふ恐怖の魂にであつた。もう涙など落ちず、冷靜と云へば極落付いて、如何して此處から逃げ出さう、本當に、彼は自分で云ふやう、おきに死ぬだらうか、死ねと大變自然に片ついてよい、――そんなやうに考へる。執念く、一日もう飽きず、そのやうなことを思ひつゞけた。その癖、逃げるなり逝げる實行方法を計畫するかと云へば、伸子の精神からは、健全な意志が腐れ落ちたやうな有樣であつた。彼女に決心といふものは殆ど何一つ出來なかつた。たゞ思ふ、思ふ。彼女は夢の裡でさへ、そのやうに思ひ惱んで居るやうな自分をみた。

その夏、伸子は、佃に連れられて彼の故郷に行つて居た。二階を自分の部屋にして居たが、そこは二階と云つてもちやんとした部屋ではなく、唯ほど屋根裏の物置であつた。厚い板の床の上に疊を五枚敷き並べ、彼女はその隅に机を置いて暮した。窓からは一間の小窓があり、そこから大櫻の木の梢が見えた。その櫻の木に幾百油蟬が鳴いた。一面の青葉で、日中は一寸その葉も動かぬ、もーつと氣の籠つた八月の暑さを、その蟬の聲は更に重く暗くした。伸子は流れる汗を手拭にふきふき、病的な氣質で其日々々を送つて居たのであつた。

計らず、震災は伸子を、そのやうな意志喪失からひどい力で掴み出した。驚きは、先づ彼女を追ひその足の上に立ち上らせた。次で、普通的な生活の健全ななほしの要求が、彼女の心でも火を燃す種となつた。――九月の或日に、頭の底から本當まで彼女に蘇つた。途中、九月ま

で來て、來た方を顧みた時、荒涼とした焼跡の東京が面をあげて仲子に迫つた。その感動を、彼女は忘れることが出來なかつた。
　その秋、仲子は實感をもつて生命の能量を知りなほした。

二

　十月の或朝、飯をしまふと、佃が、
「そこいらで壁に貼る紙を買つて來てくれませんか」
と云つた。
　赤坂の家は、地震の時處々の壁が落ちた。そのまゝ月が更つたのであつた。
「素人ぢや無理でせう、今になほしに來てよ」
「やつて仕舞ひませう――いつ來るか分らないんだから」
　仲子は、佃が指圖した色の紙と糊とを通りへ出て買つて來た。あぶなかしい經師屋が始まつた。疊の上に新聞紙をひろげ、仲子が糊をつけた紙をつまんで渡すと、椅子にのつた佃が壞れた壁に貼りつける。午前と午からぢう其仕事をした。仲子は常からさういふ仕事は直き厭になる性分であつた。
「もう今日はこれだけにして置かない？」
　彼女は一二度區切りに來た時云つた。佃は、先、庭へセメントの池を拵へた時もさうであつたが、働きを程々でやめるといふ事の出來ない人であつた。やり出すと、自分も傍の人間もうんざりし切るまで頑張つてやる。その時もその傳であつた。すると、敷石を靴で來る跫音がした。仲子は糊刷毛を手に持つたまゝ耳を澄した。
「――御免なさい」
　仲子は、其聲を聞くと、糊をといてある丸盆を飛び越えて玄關へ出た。
「姉さん居る？」
「居るとも！」
「やあ――今日は」
　和一郎が來たのであつた。和一郎は九月一日に小田原から鎌倉へ行き、五日まで生死不明であつた。中旬になつて、やつと軍艦で歸京した。赤坂へはそれから初めてであつた。
「――大變なのね、上つてもいゝ？」
「さあ〳〵、いゝとも――和一郎さんが來たのよ」
と、仲子は働いて居る夫に聲をかけた。和一郎は、仲子の後について、一杯とり散らした新聞紙をよけ、爪先立つて奧の座敷へ入つて來た。
「今日は――」
「いらつしやい」
　佃は、和一郎に背中を向けて椅子の上に立つたまんま、一言挨拶したぎりであつた。――仲子は、感じたものがあり、和一郎を隣りの部屋につれ込んだ。
「お茶が入つてよ、いらつしやらない？」
「私はいりません」
　時々夫の様子を見に行つては、仲子は和一郎と久しぶりでいろ〳〵喋つた。何といふことなく話はつきず、彼が訪れて呉れたのは嬉しい。佃が壁貼りをやめて、せめて、茶の一杯も仲間に入つて飲んでくれたらどんなに和一郎も自分もくつろげるだらうかと、仲子は殘念に思つた。佃が働いて居るといふ意識が彼等の樂しさを曇らした。やがて佃は、腋の下へ紙の卷いたのを挾み、上に糊盆をのせた踏臺を持つて、彼等の居る六疊へ入つて來た。
「一寸どいて下さい、ついでにこゝもやつてしまひたいから」
「――本當にもうおやめにして悠くりしませうよ、ね？　折角和一郎も來たんだから」
　仲子にすれば、今日一日壁から風が入る位平氣なのであつた。けれども佃は、自分で茶盆な

どを片よせて、新聞をひろげ始めた。
仕方なく、彼等は、
「さあ、逃げ出し〳〵」
と、今度は茶の間へ行つた。和一郎は椅子にかけて居る。境の障子をあけて話し乍ら、仲子は臺所で働き出した。弟が無事であつた心祝ひのつもりが彼女にはあるのであつた。
「何か註文ないこと？ 今日は少し御馳走してもいゝわ」
「素敵だな——何でもいゝや」
「玄米でげつそりして居たんでしよ」
「うん、もう平氣。——僕ね、一緒に食べさへすりやいゝんだから、餘り姉さん心配しない方がいゝや。一人で大變だもん」
「何にしよう、この邊ちつとも美味しいものなんぞないのよ」
ところへ、佃が入つて來た。が今度は改めて斷りもなく、彼は片端からどし〳〵黄色い壁を落しだした。和一郎は默つて立ち、八疊へ行つた。其處も疊に新聞が敷き散らされて居たので、彼はやむなく椅子を緣側に出したらしい。臺所と茶の間の境の敷居の上に佇んで、佃の喧嘩ごしな樣子を見上げ、仲子は夫の氣持を推察するに苦しんだ。佃は、和一郎にまでやつ當りするどんな理由を持つて居るのだらう。仲子は不本意であつた。
「こゝは私いつか自分でするから今日はやめて下さらない？ 家ぢう、御飯たべる所も無くなつてしまふから」
「御飯なんかまだ食べませんよ」
彼女は思はずむつとしたが、和一郎に聞かせたくなく、きつく踏臺に乘つて立つて居る佃の洋袴のポケットの處を引つぱつた。
「なんです？」
仲子は、夫の耳に仰向き、小聲で、
「ね私、今日和一郎に悠くり御飯をたべさせてやりたいのよ。歸つて初めて來てくれたんだから。——お願ひ、ね？」
佃は躊躇する氣色だつたが、再びくるりと壁に向つて立ちなほつた。そして仲子の囁に答へる代り、高く聞えよがしに獨言した。
「——いつも食べるばつかりに來たつて何にもなりやしない！」
仲子はやつと堪へた。憎惡と涙が心に溢れた。彼が反感から、——仲子が佃より弟をちやほやすることに對する反感か、或は和一郎の氣兼ねをしない親しさを曲解した反感からか、わざと部屋々々を引きちらかし、和一郎と彼女に落付く場所も失はせるのだと感じずに居られないやうになつた。和一郎迄何故其樣に扱はれなければならないのか。佃の背中を睨みつけ立つて居ると、やゝ荒々しい跫音で和一郎が八疊から出て來た。
「僕歸る」
仲子は、喉がつまつたやうで返事が出なかつた。
「……………」
「飯なんぞいるもんか！」
和一郎は帽子かけから帽子をとつて被り、靴をはき始めた。仲子の前には和一郎がこゞんで居る。直ぐ左の柱はづれに、踏臺に踏みひろがつた、佃の二本の脚が見えた。仲子は、どうして呉れる、といきなりその脚を拂つて引つくりかへしてやりたい激情を覺えた。靴をはき終り、和一郎は、仲子を見て、
「左樣なら」
と云つた。もうそれは七時近くであつた。實に堪へ難く、彼女はやつと云つた。
「又ね、ぢやあ。——御免なさい」
格子が彼の後にしまると、仲子は涙が出て仕方なかつた。和一郎が若しか金を持つて居なかつたらと思ふと仲子は猶堪らない心持にな

つた、彼女は踏臺から佃を無理やり引きずり下した。彼女は烈しく云ひ爭つた。佃はさうなると、例によつて、

「其那氣ちやあなかつた——」の一手で仲子が疲れ切るまで己を守つた。

——其時のことを後から思ひ出すと、仲子は佃の心の寂しさ、自分の寥しさが心に迫るのを感じた。仲子は自分の悲しみや、怒りが間違ひであつたとは思はなかつた。たゞ自分の氣持の一重底に流れて居るもの、それが寥しい。それは、いつの間にか自分には夫の佃より、再び血族の父や弟の方が可愛く大切になつて居るといふ、新たな自覺であつた。

四年前、彼等の戀愛の初め、結婚しようとする時、如何なに自分が兩親其他に反抗したか追懐がはつきり仲子の心に浮んだ。彼女はその頃、血に傳はる種々な傳統に形と精神とで反抗し、自分だけは別種な、もつと自由なもつと確乎とした生存になりたいといふ大望を抱いて居た。段々結婚といふ接木が不成功であることの證明された今、又自ら血が血をよんで自分は血族の裡に牽きつけられようとするのであらうか。本能の不思議な力。然し、仲子には、努力して出て來た處へ再び舞ひ戻らない信念はあつた。蛇はどんなに傷いてももう去年のぬけ殻へ二度と入つて行くことは出來ない。……

三

年が更つた。

四月に入つてから、或る日、仲子は楢崎の書齋で喋つて居た。書齋の窓から田端の高臺が見晴された。數日來風が強く、やつと其日和いだ日光と風景であつた。

「眺めが變つたことね、この前上つた時分から見ると——」

「さうでせうとも。もうすつかり春ですよ」

佐保子は正面の椅子から立ち上つた。そして仲子に横顔を向け、硝子の外を覗いた。

「木蓮どうしちやつたかしら——この間ぢう、彼方の部屋に坐つて居るとそれは綺麗でしたよ、早く來れば見られたのに」

束ね髪だが、蟀谷のところで鬢の毛が張り出し、古典的な横顔に美しい趣を添へて居た。

やゝあり、仲子が云つた。

「——でも貴女は一種の力をもつていらつしやるのね」

「ほ、ほ、ほ」

佐保子は特徴ある笑聲を立て乍ら、又元の場所へ戻つて來た。

—大變なことになつたのね

「でも、左様思ふわ、嘘に負けたのとこ、は、ぐうたらな氣持のまんまでは上れないやうな處があるわ」

「窮屈なのよ、世間知らずだから、——皆それは間抜けなんだもの」

佐保子は仲子より十幾歳か年長で、文學上の先輩であつた。女學校の四五年時分から仲子は彼女の制作に親しんで居た。自分が此から進まうとする道に既に踏み出して居る先達、さういふ意味で尊敬と刺戟を感じつゝ數年經た。ところが偶然の機會から交際が始まつた。互のよいところで鼓舞し、仕事で勵み合ふといふ種類の友愛が醸された。佐保子が永年の間種々の困難や苦痛と默つて鬪ひつゝ、撓まず藝術を研いて行かうとする努力の姿は、仲子にとつて少なからず藥であつた。結婚してから生活がたく〱になり、何にも出來ない時心が愚癡で漲つても、仲子は佐保子に其を迚も訴へ得なかつた。佐保子はもつと辛さを知つて居るかも知れぬ。其をあのやうに確り堪へてやつて行くではないか。さう思ふのであつた。

話のつゞきで、部分的にさういふ心持を告げ

ると、佐保子は、
「あなたなんか買ひかぶるのよ」
と、しんみり笑つた。
「――でもね、今は私或程度まで生活といふものを客觀的に見て落付けるやうになつたけれど、斯うなる迄には昔持つて居たよいものも澤山失つたわ。――人間といふものは一つ得る爲には何か他の一つを犧牲にしなければならないものなのね」
佐保子は、その頃ロシアの貴族出身で、十九世紀末歐洲で最も尊敬された女流數學者、並に作家であつた或女性の傳記を飜譯して居た。
「どうなすつて、飜譯――おすみになつて？」
「あゝ、もう直き出ますよ、出たら是非讀んで下さい。私がソーニヤを愛さずに居られないわけがわかりますよ。本當に我等の女性といふ氣がしてよ」
扉をノックする音がした。
「はい、お入り」
若い女中が、仲子に挨拶し、取次いだ。
「吉見さんがいらつしやいました」
「まあ」
佐保子は椅子の上で體を搖るやうにし、仲子を顧みた。
「珍しい人が見えたこと、今日はいゝ日ね、好きなお客さんばかりあつて。――仲子さん、かまはないでせう？」
「――――」
吉見といふ人が女か男かさへ見當つかず、仲子はぼんやり、
「どうぞ」
と云つた。
「ぢやあ、こちらへ。そして美味しくお茶を入れて來て下さい」
女中が扉をしめて去ると、佐保子は、やゝ蒼白い皮膚の下から悦びが照り出すやうな表情で、仲子に說明した。
「私の古い〳〵お友達なのよ、一寸變つたところがあるけれども　それは心が淸い人、率直で。――やつぱり一年に何度といふ位しか來てくれないけれど、貴女にもきつといゝお友達ですよ」
直ぐ階段に跫音がした。ノック。扉が開き、好奇心と期待とを佐保子の言葉から感じた仲子の前に一人の女が現れた。
「こんにちは」
「今も惡くちを云つて居たところよ、あなたが稀にしか來てくれないつて」
「あなたの方がもつとひどいぢやありませんか、こないだ來てくれたのが初めてだもの」
二人の話しぶりには、仲子と佐保子との間にある氣分と異つたものがあり、仲子は思はず微笑して、問答する彼女達を見守つた。
「御紹介しませう、佐々仲子さん、こちらは吉見素子さん、お父さんの脛かじりのいゝ身分の人ですよ」
素子は、
「變な紹介だな」
と云ひ、苦笑した。
「これでも食ふだけは自分でどうにかして居ますよ」
「――×××の編輯をして居なさるのよ」
仲子は、思はず素子の顏を見た。我儘つ子らしい、感情家で勝氣なところがあるらしい素子の第一印象と、彼女が一度だか見たことのあるその時代にすてられたやうな或團體の機關雜誌とは、凡そかけはなれたものに感じられた。
素子はてれたやうに、
「いやんなつちやふな」
と、紅くなつて笑つた。仲子も笑ひ出した。短くなつた素子の斷髮、小麥色の肌理の滑かな顏付に、ひどく稚い純な輝りを添へた。

「――あれ、つまらない雜誌ね」
「えゝ。金をかけないんだから迚もいゝものは出來ないんです、潰した方がいゝんだけれど……」
大阪鮨をたべ乍ら、佐保子が云つた。
「私ね、そりや出不精で不忠實な友人なんだけど、この間不圖吉見さんの家を訪ねたのよ。そしたら、この人は、大きな〳〵實に堂々たる机の上に山ほど物をつみ上げて、ほんのこれぼつちの」
兩手で、五六寸の幅を拵へた。
「隙間で何かして居るんですもの。――滑稽な人ね、あの落付く二階へ彼那立派な調度があれば、私だつたらそりや勉強して見せるわ」
「二階を借りてらつしやるの？」
――
素子が口を開かない先、佐保子が教へた。
「いゝえ、ちやんと一軒占領して居るのよ、自分は二階へ納まつて下に夫婦を置いて居なさるの」
「いゝのね、羨ましい位だわ」
「御覽なさい、伸子さんでさへさう云ふでしよ。何と辯解したつて、いゝ身分なのですよ」
素子が着物や帶、細々した紐などを或趣味で選び、身につけて居ることが一目でわかつた。このやうな服裝の出來る、そして專門は露西亞文學の、獨りで一軒の家の主人となつて自由に暮して居られる女性の生活が、伸子にはひどく悠々獨立的なものに想像された。
五時頃、佐保子が、
「伸子さん、悠くり出來るんでせう」
と訊いた。
「えゝ、今日はすつかり樂しむ積りなの」
「では、皆で自笑軒へでも行きませう、父さんの都合を一寸訊いて見て」
先へ出かけることになり、三人は、昔風な植木屋などの未だ殘つて居る夕暮の田端の通りを、茶料理までぶら〳〵歩いた。途中、或寺を通り拔けた。素子が、
「こゝを雪の朝通つたことがありますよ、あなたのところへ泊つた朝早く」
と邊を見廻した。
「さう〳〵、いゝ雪見をしたつて、――五時頃ぢやなかつたの？ 私びつくりしましたよ、餘り早くかへつてしまふんだもの」
自笑軒で、奥の茶室に通された。伸子は地震後は初めてであつた。壁など處々痛んでは居たが、隅に貼りまぜの小屏風などを置いた部屋の樣子は惡くなかつた。三十分程遲れて、楢崎も來た。
「もう暗くて見えないかな、多分この庭の奥に何か祭つてあつた筈だが――」
大觀（多分）が或、好い晩こゝの家で醉ひ、興にのつて低い白土塀に墨繪の竹を描いたとかいふ庭が彼方にあつた。
酒を飮む人がないので食事は直きすんだ。殆どあつけない位であつた。
「たゞむしや〳〵食ふのは何だか不風流で手持無沙汰なもんだな」
「いやに、又拗らせるんですね」
皆笑つた。
歸り、玄關から暗い門までの飛石を、女中が先に立ち雪洞で足元を照した。
又田端の通りを、今度は停留場の方まで四人一列になつて歩いた。人通りがなく、少しの風が出て、呉服屋の幟がはためいて居た。伸子は萬世橋まで素子と一緒の電車で行つた。伸子は赤坂へ、素子は牛込に歸つた。

四

十日餘り、伸子はいゝ季節なのに拘らず、引籠つて暮した。楢崎へ遊びに行つた前日、一通

り書き上げた小說を書きなほして居たのだが、書き足りない氣持、心全體が流露し切つて居ない意識、從つて、自分の本當の内的な發育の上には大して意味のない作品といふ氣が書き終ると強く遺つた。伸子は、其小說で、ほんの端つぽを掠め、技巧的に曖昧に自分の結婚生活の内部に觸れた。書き上げて見ると、伸子は種々自分の虛榮心や綺麗ごと好きな弱い根性やに心付いた。細君として實際自分が泥濘でばた／＼やつて居る間は、迚も素直に、自身陷つて居る泥の穢さ、自分の馬鹿さなど自分に向つても承認し得ない、女らしい小さい意地が突張るのを感じたのであつた。

一蹴りきつく地面を蹴つて、海に躍り入るやうに仕事の内に飛び込み、頭から足から揉まれ洗はれ、すつきり更新した自分になりたい慾望が、却つて伸子の内に激しく募つた。心が離れきつて居る佃と殆ど形だけ夫婦らしくして居るのも、伸子は、つまり自分の卑怯さからだと明かに感じるやうになつた。これまで彼女は自分のそのやうに不決斷な氣持を、愛すべき未練や、彼を最小限に痛手ですむ方法を見出したいと思ふ、自分の好意に原因して居るやうに思はねでもなかつた。今考へると、然しそれも、主我的なものを含んで居ると思はれた。つまり、自分は出來るだけ氣樂に、妥當な理由をつけ、彼からも他の周圍からも、餘り惡い子と思はれないで目的を達したいといふ、蟲のよい魂膽があつたのではなかつたらうか？　佃が自分にとつてどのやうに不滿な夫であるかを說明するより、伸子自身先づ、私はもう彼が愛せない、どうしても厭であるのは厭だ、と宣明する勇氣だけが必要なのだ。どんなに賺されても、忠實な彼の妻として生涯を過せないのである以上、そしてそれを自分で評價し信じて居る以上、何故、憎まれても、エゴイストと云はれても泰然たる覺悟をしないか。——自分の内に、佃の受けるだらう同情（世俗的なものと判り、本當の價値は認めない癖に）に對する嫉妬が在るらしく、其を思ふと伸子は我を卑んだ。

ふらりと其處へ素子が、訪ねて來た。伸子は意外な、嬉しさを感じた。先夜、近いうちに行きませう、訪ねませうと別れたのであつたが、素子が約束を、さう早く果さうとは思つて居なかつた。

「——やつぱり先を越されたわね」

「不精なんですね、あなたも……」

「ひどいの」

上りながら、素子が、

「いそがしいんですか」

と訊いた。

「もう暇よ」

「少し出ませんか。若しよかつたら散歩に誘はうと思つて來たんだけれど——」

伸子は素子に待つて貰ひ、支度をして家を出た。日傘なしでは眩しい位快晴であつた。二人は晝飯前であつたので、初め銀座に行つた。輕い食事をすませ、素子が用事のあるK新聞によつてから、帝國ホテルの横を通つて日比谷公園に入つた。

「日比谷は珍しいわ。何年來ないかしら……」

素子が吃驚したやうに聞き咎めた。

「——其邊に出ないんですか？」

「此邊ところ、一人でてく／＼歩いたつて仕樣がないやうなもんぢやないの」

内幸町から入る門の附近には、まだバラックが大通りの樹蔭に軒を並べて居た。食物ばかり賣る店が續いて居た。「一寸一杯酒肴アリ」立看板がある。汁粉雜煮、リンタン屋。汚水を流す溝や不完全な炊事場から蒸れ臭い不健全な臭氣が、塵埃で白つぽくなつた春の並木道に

漂つて居た。伸子がよく子供の時分、大きなリボンをつけて遊びに來た瓢簞池の傍に出た。葉の青々した篠懸の下に池に向つて空いたベンチが一つあつた。いゝ加減歩いた彼女等は其處にかけた。

「もう傘なしぢや無理だな、あついでせう」

素子は持つて居た雜誌で扇を使ふやうにした。

「でもいゝ氣持だわ、――鴨がまるで愉快さうよ、御覽なさい」

バラックがある故か日曜でもないのに四邊は割合人出であつた。青菜色の勞働服や法被姿の男が多かつた。彼等は煙草を吸つたり、新聞を見たりし乍ら、池の周圍のベンチ、鐵柵の上などに休んで居る。地震の時、水禽を獵つて食べて仕舞つたといふ話の池には、今日水がなみなみと漣立つて居た。キラ〳〵日光が搖れる。水面に二羽の鴨が盛に游泳して居た。彼等は時々、急に卵色の蹼が見える程伸び上つて威勢よく羽搏きした。水がバシャ〳〵散る。水の重吹の上に、瞬間低い小さい虹がぼんやり立つた。無心な、熱つぽい、美しい樣子であつた。

直ぐ傍に印半纏の男が居たが、伸子は寛いだいゝ心持でいろ〳〵素子と話した。多くの場合、伸子が切り出す廻り合せになつた。チェホフのこと、西鶴のこと、金槐集のこと。金槐集は最近に讀み、實朝が鮮かに甦つたので、伸子は熱心に其に就て喋つて居たが、突然妙な顏をして言葉を途切らせた。

「一寸――私さつきから間違へて居やしなかつて？」

「名ですか？」

「タメトモつて云ひやしなかつたこと？ 一度か二度――」

素子は、はははゝ笑ひ出した。

「何だか變だと思つた！」

「皮肉やね、默つてにや〳〵して居るなんて法はないわ」

自分も笑ひ出したが、伸子は極りわるく感じ、少し赧くなつた。

「――本當に、あなたが云つたんで、あゝさうかと思つたんですよ、どつち道話は分るからいいぢやありませんか、名なんぞ」

思ひ出すと、二人でこの失策を笑ひ〳〵、彼女等はそのベンチに二時間ばかり居た。

「あなたはどう？ 私はね、散歩しても同じ路を往きも歸りも通るのが大嫌ひですよ、どうにかして別の路を歩かないぢやあ氣がすまない」

櫻田門の方へ拔ける道を歩き乍ら、素子がさう云つた。其が好みにはつきり出て居るところ、いかにも素子らしく、伸子は面白いと思つた。

櫻田門で電車を待つたが、なか〳〵來ない。間もなく日比谷の交叉點に故障があることがわかつた。西日が、からりと打ち開いた廣場を照し、停留場に待つて居る人物の輪郭が小さく見える。其處から、濠を傳つて彼女達は三宅坂まで歩いた。柳の下を歩いて居た間、日比谷の方から追拔く電車は一臺も來なかつた。

伸子はその散歩でも、少なからず元氣づけられた自分を感じた。

五

伸子は或日動坂へ行つた。母は留守であつた。彼女は其を知ると、庭木戸から隱居所の緣側に廻つた。針箱が出て居るが、祖母の姿は其邊に見えなかつた。

「お祖母さま」

二聲ばかり呼ぶと、臺所から祖母が、

「誰だあ、つや子か、あかれ」

と云ひ乍ら出て來た。針箱の前に、もう上りこんで居る伸子を見出すと、彼女は一寸當惑し、

「お前かしふア」
と笑つた。
「いつ來た？　おゝかさゝ生憎出かけたごんだ」
「今日はお祖母さまに用があつたの」
「さあ、おしき」
祖母は、自分が寄の字の祝の時貰つた厚い緞子の座蒲團を火鉢の向う側に置いた。
「おら、きのふ須田から歸つて來たばかりだごんだ。——あすこでもはあ、これから何じよにして行くか困つたもんだなあ、考へておら昨夜睡れなかつたごんだ。」
祖母の二番娘、伸子の叔母が須田の細君であつたが、地震の時壓死した。あと總領の女學校を出たばかりの娘が世話を燒いて居るのであつた。
「——仕方ないから、家政婦でも置くのね」
祖母は其に答へず、熱い茶飲茶碗を兩手の間に挾むやうに持ち、一口啜り、
「おら、地震この方、只さへ耄碌して居たのが猶更耄碌したごんだ。お靜にや死なれるし、保科は死ぬし　何しておらのやうな在り甲斐なしのがいつまでも死なないかと思ふ」
去年の九月、祖母は東京で、目のあたり血をわけた娘や孫の死を經驗したのだ。伸子は、哀れに感じて述懐を聞いた。
「そろ〳〵時候もよくなつたから、お祖母さまKで悠くりしにいらつしつたらどう？」
「さうよなあ、見に行かなけりや草屋にして置くなあ」
「私近くに行きたいから、一緒にいらつしやらない？」
意外さうに、祖母は伸子を見た。
「ほんたうか？　お前が行くならおらも行きたいごんだ」
「私もいゝわ。お祖母さま、いつがよくて」
「今日でなければ、おらいつでもいゝが——」
祖母は、急に年寄らしい氣ぜはしさで煙管をはたき乍ら、聞いた。
「——家の方はなじよにする？——佃さんにお訊きしたのか、お前」
「それはいゝのよ」
伸子は祖母の心配を遮る爲、簡單に輕く答へた。
「私、來月早々立ちたいから、おや、お祖母樣そのお積りでいらして頂戴」
頭に力を入れ、確り合點しつゝ、滿足さうに祖母は、
「よし」
と答へた。
母の歸るのを待たず、伸子は家を出た。停留場の傍にメリンス屋があり、店頭に正札つきの友禪を吊つて賣つて居る中に、一つ目についた柄があつた。價もやすい。思ひ立つて、伸子は其を一丈切らせた。彼女は遠くから華やかな臙脂の模樣を見て居るうち、田舍の家では、夜具の肩當も座蒲團も、何も彼も赤と黒づくめの色彩なのを思ひ出したのであつた。
佃が、伸子より少し前に歸宅して居た。彼は、顏を見ると直ぐ、
「動坂へ行つたんだつて？」
と訊いた。
「えゝ」
「電話でもかゝつたの」
「いゝえ、さうぢやなかつたけど——誘ひに行つたのよ、お祖母さまを」
「——へえ……」
「私又Kへ行きたいから誘ひに行つたの」
佃は厭な顏をして默り、此方向いて居た顏を机の方に振つた。行つてもよくつて？　或は、ね、いゝでせう？　と自分がいふのを待つて居る佃の期待を感じたが、伸子は意識して沈默を守つた。伸子の心に、捨身になつた結果生じた餘

裕のやうなものがあるのであつた。
　暫くして、佃が露骨に喧嘩つぽい調子で詰問した。
「――氣を換へに行くんですか、それとも別れる爲に行くんですか――此方にも都合があるから聞かせて下さい」
　語氣は激しいやうであつたが、其を本氣の本氣で佃が云つて居るのではないことを伸子は直覺した。これまで、いつも自分が間拔けに佃のいふ言葉を最大限に受け、其場で結着をつけようとした爲失敗ばかりした。伸子は其に氣付き、妙な笑を浮べ乍ら逆に訊いた。
「――貴方はどうお思ひになるの？――」
　佃は、自分からは何方　見當をつける冒險を敢てしきれず、憎しみをこめて横目で伸子を睨んだ。其顏を見ると恐怖の代り彼女自身を愕かして、切れ〴〵な輕い意地惡な嗤ひが勃發した。彼女は毒々しいところのある優しい聲で悠くり云つた。
「――憎らしい？――」
　佃は體の何處かを突刺されたやうな恐しい表情をした。夫の苦しみが伸子の魂に焙りついた。あゝ、彼は苦しいのだ、苦しいのだ。然し、伸子は夫と自分とを刻む苦痛に醉つたやうになつて、口許に凍つた微笑を漂はせ乍ら、さも好いことでも告げるやうに、一言々々はつきり、
「――私も憎らしくつて憎らしくつて堪らないの、貴方が……食はれて居るやうな心持……」
と囁いた。むせ返るやうに、佃に對する憎惡と自己嫌惡がこみ上げて來た。伸子は目の前が暗くなるやうな心持で部屋を去つた。
　七日か八日にKに出發する豫定であつた。佃は例の如く毎日學校へ出てゆき、夕刻かへると、見ぬやうにして必ず其となく部屋の樣子をうかゞつた。伸子が旅行の支度を今日はしたか、如何なにしたか、と思つて、彼は歸つて來るのであらう。段々日は近づくのに、何一つせぬ彼女を待切れなくなつた彼は、或日、
「本當に行くんなら支度したらいゝでせう――」
と、氣を引くやうに云つた。佃がさり氣なく、然し荷物はどんなかと思ひ乍ら我家に歸る氣持を感じる丈で、伸子は既にいゝ加減參つて居るのであつた。彼女には、仰々しく支度するだけの元氣がなかつた。伸子は憤つたやうに、
「騷ぐほどのものはいらないのよ、私のことだから」
　と、ぶつきら棒に答へた。ぼんやりと主婦が居なくなることを嫌つた女中が、教育のある[illegible]わかりのよい女であつたに拘らず、何だか落付かなさうに、心の不安を隱して働いて居るのも伸子には辛かつた。一つの家庭が潰れようとする前の、壓迫的な緊張的な雰圍氣。――
　愈々明日立つ筈といふ前日、伸子は十時頃目を覺した。彼女は床の上に起きなほつたまゝ、暫く空になつて居るもう一つの床や椅子から見える狹い庭、竹垣などを眺めて居た。隣りの細君かその言葉だけはつきり、
「又この頃ぢや小紋流行ですね――」
と喋つて居る、高い粗野な聲、朝の疊のひつそりした感觸などか、異樣に鮮かな和みをもつて伸子の心に寫つた。總て見馴れて居るものだ。總てを最後に見るといふ氣がした。この疊の上で朝目を覺した時「あゝまだこゝに居るのか」と云ひ難い苦惱を感じたのは幾度であつたらう。自分の苦しんだところだといふばかりに、先づ生活は不思議なものだと伸子は思つた。其處が家からさへ去り難い思ひをさせられる。何でもなく竹垣の根元の萬年青などが印象の眞正面に立つた。――伸子は、夫の居ない時、一人靜かに家を出て行くつもりなのであつた。本當に自分の持つて生れたよいところ、わるいところ、

全存在を傾けつくして愛し憎んだ佃であつて見れば、不圖思ひ出した石ころ一つにも繋つて、彼が或時斯う云つた聲、あゝ自分を視た眼付が思ひ出せよう、ではないか。佃も其と同樣に、自分の細かい事まで思ひ出すであらうと思ふと、伸子は、一瞬に互の五年の生活がたゝまつて自分にのしかゝつて來るやうな息苦しさを感じた。

紅茶とトウストを食べると、伸子は卓子を立ち乍ら女中を呼んだ。

「一寸――納戸にある鞄ね、あれを出して掃除して頂戴」

「お立ちでございますか?」

「あゝ。今日から動坂へ行つて居ないと都合がわるいから――」

緣側へスウト・ケイスを出し艶布巾をかける。傍で、伸子は机の上から日記その他必要の文房具をまとめた。ほんの着換の袷、セル等をつめた上に、原稿紙をのせた。

「お荷物これだけでよろしいんでございますか――」

「――もつと要れば云つてよこすわ、送つて吳れるわね」

「えゝそりや――」

云ひ難さうにし乍ら彼女は尋ねた。

「大抵いつ頃お歸りになりますでせう」

「歸らなかつたら困る?」

と云つて、伸子はふざけるやうに一寸笑つた。

俥を呼ばせた。荷物だけ乘せて動坂へやつた。スウト・ケイスが小さいので、俥に其を幾重にも括りつけた細引の方が目立つやうであつた。

佃が歸らないうちに出掛けて仕舞ふことはさすがに躊躇された。伸子は悲しく搖れる心で三時過まで愚圖々々して居た。が、軈て彼があの聲と眼とをもつて、これ迄の毎日通り格子を開けて來るだらうと思ふと、彼女は急に家を出る氣になつた。

「ぢや、どうぞ氣をつけてね――」

表通りへ出るまで、左右生垣つゞきの横通りが二町ばかりあつた。そこを帛紗包みを抱へて歩き乍ら、伸子は背後が氣になり、我知らず急ぎ足になる厭な氣持を經驗した。通りはずつと眞直、彼方の大通り迄直角に續いて居た。伸子等の家も在る長方形の一區劃を凹形に圍んで居るのであつた。佃が勤め先から歸る路は定つて居た。凹形の右の道をずつと來て煙草屋の角を左へ、今伸子が歩いて居る横通りへ曲つて來るのだ。いつも人通り尠い細道であつたから、彼が角を曲れば、遠くからでも伸子の後姿は見えるわけであつた。何かの都合で彼がいつもより三十分早く戻り、あの角を曲つた拍子に自分を見はしまいか。後から速足で來たり、口笛をふいたりしはしまいか。――佃は今日、伸子がいづれにせよ出掛けることは承知であつた。それだのに、何故此那に逃げる者の感情が自分につよいのか。自分に反抗し、努めて苦しい位悠くり小砂利を敷いた道を歩き乍ら、伸子は、人にも話せない感情だと思ひ、苦い涙が眼に浮んだ。

六

田舍に着いた日、其地方は五月の嵐っぽい天候であつた。俥に乘つて市から村へ通じる寂しい一本道にかゝると、荒い幅廣い風が幾里も先の山脈からその一筋道に吹き下した。幌がドーッと、陣風を孕むと、俥夫は梶棒に全體の重量をかけ、しがみついて立ち澱む。さういふ瞬間、伸子は夕暮の正面に一本ぼんやり白く横はる道と、黑い畑、雲の捲き立つ空が山際のところでだけ物凄く黃色に光つて居るのを、

まじ〳〵と見た。情熱的な暗い不安な空模様が、彼女の心の状態の反映のやうであつた。

祖母は、毎日竹藪をこいだり、納屋へ入つたりして働き廻つた。そして、種々見えないものを發見し、家ぢうの騒ぎを惹き起した。

—一寸畑さ行つて與次郎が居たらよんで來てくんろ—

與次郎が縁側に廻ると、祖母は爐ぶちで煙管をはたき乍ら、

—お前、茶壺しらねえか？ 島根に居た頃、出入りの大工で茶人が居て、これへ茶入れとく〳〵と濕けることがないと云つて呉れたんで、おら大事にして居たに無いごんだ—

—御隠居様、あれは古田さんにお賣りなさつたんぢやありませんか—

祖母は意外に、口を尖らし、

—俺がかあ？」

と、呆れた。

「何して俺が其那事すべつちえ！」

「——困るなあ—

與次郎は伸子に當惑した笑顔を向けた。

—本當に御隠居様がお賣りなりました。古田の隠居が、こりやいゝ茶壺だと云つたら、東京さ持つて行くわけにも行くめからつて、讓つてやんなすつた。——五圓札とひきかへに私が屆けたんだから、間違ひございません」

「さうか——俺そげえに耄碌したべえか——俺ほんとに賣つた覺えなんぞ無えこととしか……」

與次郎は自分が疑はれて居るのを知り、少し荒つぽく、

—ちやあ、私が使ひに行つたんですから、五圓いたゞいて行つて取返して來ませう」

「……さうさなあ……」

與次郎が、有耶無耶に畑へかへると、後で、祖母は机のところまで伸子を追ひかけて來た。

—俺ら、ほんにやんだ（厭だ）ごんだ。——耄碌したにつけ込んで、何するか知れたこつてねえ。こなひださがした銅鍋だつて、俺が山本へ賣つたちふごんだよ—

と訴へるのであつた。

—お祖母さま。耄碌は年の故で仕方ないんだから安心して耄碌しちまつた方がいゝのよ。耄碌なさり乍ら、時々いやにはつきりなさるから、却つて面倒なのよ」

—ふむ……。——だが、伸子、お前何じよに考へる？ 本當に俺が賣つたべか—

伸子は、心が平らな時には、はははと思はず笑つて、

—私に判らう筈ないぢやあないの。[illegible]それおぢや先方へおきゝなさいよ—

と云つた。自分の思ひだけで十分傷ついて居る時、[illegible]〳〵と云ひ出されると、伸子は怒りつけるのであつた。

—お祖母さま、少しは宅でも[illegible]めてぼんやりして居る工夫をなさい」

伸子は六疊の隅に、古本箱を脚にし上に紫檀の机をかぶせて、卓子を拵へた。廊下の外は庭、その奥は畑であつた。障子について居る小障子をあけると、庭と畑とを區切つて居る低い草堤と、勢よい梅の並木の一部分が眺められた。光線が斜に射す午後、その[illegible]い並木、叢の風景は、荒廢した園の趣と初夏の緑の活々した輝きとを相交へ、美しかつた。

伸子の心持は陰鬱で[illegible]で、しんかんと寂しかつた。先、佃を恨んだり自分を鞭打つたりして此處に居た時分は、心がむら〳〵して居たから、周圍の自然など、さう深く自分に浸み透つては來なかつた。今の伸子の心は、病的に澄み沈潜して居た。田舎の天地を孜々として推移させて行く自然の力と、自分と佃とを支配した生存の力とを結びつけ、身に沁みて感じた。自分といふ一人の女性の裡にある種々な欲

望や本能。何でも彼でもぱつと薔薇色に燃え立たせ、陰翳さす餘裕さへ與へなかつた二十歳の情熱――情熱も其處では朗らかな力であつた。佃が三十五歳で、永い放浪の後疲勞と休安の欲望をもつて現れた。その疲れた相貌さへ、愕いたり、身を傾けたり、涙を流したり、何かに熱中したがつて居た仲子の若々しい生命への刺戟であつた。仲子は自分の情熱に陶醉しつつあらひざらひの力で佃を我ものにした。仲子の生命の奥の情熱がそれで燃え盡き、二人の生活にほんのり温味を保つ程度の種になれば無事であつたらう。××教授並に細君――儉約や貯蓄や恩給が夫婦のたのしみで睦じく四十になり五十になり、墓穴まで行けたであらう。ところが仲子の情熱は佃一人に費ひ切れなかつた。彼女の生命は北海道の牛の乳で養はれた細胞と同じやうに豊富で、旺盛で、貪慾であつた。生活の上で彼女が求めるのは、夫である佃が求めるやうな、消耗することも吸收することも少い「我等の安穏」が、生存の標語のやうな態度ではなかつた。彼女は、地面に墜ちた影法師でさへ、二人寄れば二つになるものを、男と女と二人寄れば、二人寄つただけ多く、深く、強く日々新たな人生を暮して行かねばならない筈じた。――

源に溯ればつまり一つの熱情が、愛と現れ憎みと現れる恐しい生々した心の潮、又、自分の本質に烈しく自由や獨立を愛して歇まない本能の在ること、そして更に、人との交渉に於て實に深くはまり込む、信じ易く受け入れ易い自分の性質に對して自然が與へた唯一の意味深い杖であることなど、仲子は、永く靜かに明けては暮れる田舎の一日々々の間に考へ知つて行つた。戀愛や結婚生活の明るく暗い種々雜多な情感を全心的に味はせてくれた人として、例ひ結果は破壞に終つたとしても、佃は自分にとつて決して行きずりの人ではなかつた。考へやうによつては、どんな女性でも一度は捕はれずには居まい結婚生活の夢想から、可成り完全に解放させて呉れた一點でだけでも、感謝すべきなのかもしれない……

いろ〳〵に往來する心持――佃に對して仲子は割に和らいだ氣持であつた。共に苦しみ過した時を共に思ひ出し、それをともに弔ひたいやうな心持になる時さへあつた。最後に、せめて一本、互の思ひ出の爲によい手紙を送りたい。仲子は或晩、追懷や感動に一杯になつて机に向つた。紙を展べ、ペンを執つた。が、最初の一字を書かうとして氣がつくと、何事であらう、いつの間にか感情の扉はぴたりと閉つてしまつて居る。何から書くのか、何を書いても、浮らない、索漠とした空虚な言葉としか響かないやうに感じられた。佃に對する小さな感謝、眞心からの訣れの言葉、文字に書くと其等は皆、譃のやうな、故意とらしい感じを相手に與へさうな虞ればかり感じられた。逆に却て自分が佃に向つて云つた數々の憎らしい言葉、毒々しい言葉が、次から次へ驚くべき現實性をもつて甦つて來た。其に報いて答へた彼の冷淡さうな皮肉、醜い自暴自棄の言葉が、その時の顏つき目つきと一緒にこの鼓膜に今聞くやうにまざまざ響いて來る。――仲子は夜の燈の下で、恐怖をもつて言葉の生きて居ることを感じた。人間によつて云はれた言葉は、きつと云はれた丈には生きる。憤りにまかせ、怨みにまかせ、互の云ひ合つた言葉が、今は互を裂く威力をあらはして居るではないか？

――仲子は一字も書き得なかつた書簡箋を、思ひ沈み乍ら丁寧に細かく引き裂いた。彼女は椅子をずらせ、紙屑籠の眞上から、ぱら〳〵ぱらぱらとその白い紙片をすて、庭へ出た。大きい月の閣りに更に大きい暈がかゝつて、芝は濕つ

ほい夜の匂ひを漂はせて居た。遠くの隅の黒く見える老松の蔭から、湯を貰つて歸る婆さんの姿が現れた。

「えゝ月だなし」

「…………」

「――おやすみなんしよ」

「おやすみなさい」

伸子が無愛想にして居ると、横を通りすがりながら、古い畫像のやうなその婆さんは、わざとらしく瞼を細め、

「えゝ謠があることよしか、遠くはなれて會ひたい時は、月が鏡になればよい。」

彼女は、濡れた手拭を丸めて持つた手で、伸子にちよつかいを出すやうな莫迦げた恰好をした。

七

伸子の樂しみは、素子からの手紙であつた。田舍へ立つ前、伸子の必要から、一緒に鎌倉へ行つた。活動寫眞を見て置く要があつた。それも素子がつきあつた。共に暮して居るのが祖母では、鍋釜の話しか出來ず、さうでない話相手のやうに往復して居た手紙が、伸子にとつて段々生活上必要なものとなつて來た。時々胸一杯になる種々な感情や考へを、細かなことにつき、又他のことにつき伸子は前後かまはず、大きい紙や小さい紙に書きつけて素子に送つた。素子からは、又一々其について彼女の意見を云つてよこした。素子は、初め伸子が感じたやうに感情家ではあるが、底に落付きといふか、世の中を知つて居るといふか、實際的な一種の均衡を保つて居る女性であつた。伸子が性急に感動したり、思索したりするのを、彼女は好意と滑稽とを感じつゝ、愛のある皮肉で應答してよこした。

「あなたなんか、全く世間知らずなんだと思ふ。今日の手紙だつて、あの傳で、個氏についても夢想したのだと思ひました。私に感心なんかするのは馬鹿ですよ。散々買ひかぶられた擧句、どかんと幻滅したりされるのは誰しも御免です」

又、

「私も馬鹿だが、あなたも馬鹿ですね。而も變な手のこんだ馬鹿だ。自分の馬鹿さをいやに堂々と云ひ現す腕がある―」

全くさうだと思ひ、繰返し〳〵素子の手紙を讀み、伸子は愉快に笑つた。その日の氣分によつて、素子は細かい粒の揃つた丸つこい字を丹念に書くかと思ふと、伸子のやうに、罫紙に末に行く程大きくなつて書きなぐつてよこすこともある。文章は要點を心得たらしくあるが、彼女らしい情に脆い、親切な、正直者であることなど、伸子に實感をもつて理解する――素子に會へた偶然を、伸子は眞心で悦ぶやうになつた。伸子の、がらんと空虚に消耗しかけた心に生氣をふき込むのは、素子との稀な結びつきであつた。

或夕、伸子は緣側に祖母と居た。祖母は長椅子に横はり、伸子は踏臺を持ち出してその傍に腰かけた。彼等は、晝過最近雇つた女中の給料について喧嘩して、仲なほりしたところであつた。晝飯かすんだ時、女中が急に入用が出來たから給金を欲しいと賴んだ。其日は二十五日であつた。十五圓といふ世話人への約束で雇つたのに、祖母は、さうは云つたが人數も尠いのだから女中には十三圓の割でやると、急にけちなことを考へついた。伸子が其はよくないと云ひ、他愛なく腹を立てた。却つて後暗じく、祖母は珍しくのび〳〵昔の話など伸子に聞かせた。古いこと、高山といふ家に婆さんが居た。祖父が、參事司補になつたといふのを耳が遠くきゝ違へ、「三里四方といふお役かのし」と訝し

けに訊いた。訊かれたこちらの隠居も亦聾なので、眞面目くさつて、「さやうであります」と返事して居たといふ話など、七十九の祖母は自分よりもつと年上で、老けた二人のばあ樣問答を可笑しがり興にのつて二三度「さやうであります」と兵卒のやうな口調を眞似て伸子を笑はせた。夕飯に呼びに來る年寄ら女中が二通手紙を伸子に渡した。下の一つが、日本封筒で、素子がいつも使ふのにそつくりであつた。然し、朝一つ受取つたので、彼女からと思へず、怪しみ、裏をかへして見た。矢張り素子から來たのであつた。今朝のと同じ日の、夕方の日附であつた。

「二十八日に私の仕事が多分一段落つくのです。暫く暇になると思つたら、急に貴方へ行つて見たくなりました。電報ではいけないから、悪かつたら遠慮なく、直ぐ返事を下さい。行つてよい都合なら大抵二十八日の一時に立ちます」

伸子は、歩き歩き讀んで居たが、思ひがけぬ嬉しさで顏が熱くなるやうになつた。上氣せ、直ぐに、いらつしやいと電報を打たうかと思つたが、電報を前に自分を落付け、食卓についた。先ず話しつゝ、彼女は祖母に告げた。

「お祖母さま、素顔よ、二十八日に吉見さんが來るんですつて」

「ふうん。——何も食物がなくて困るな」

「其那ことかまやしなくてよ。不便なのは解つて居るんだから」

陽氣に箸を取つたが、ふつと伸子は嚥み込んだ飯が喉で塞へる程情がせき上げて來るのを感じた。今自分をこれ程捕へる喜びのつよさにつれ、五年の間自分が如何に暮して來たといふものに飢ゑ暮して來たか、哀れに恐ろしい程はつきり思ひ知らされて來たのであつた。女達でさへ、これ丈あたゝかい悦びは齎して呉れる。何故佃が、たつた一度でも、何かで思ひ出すのも嬉しく誇らしい悦びを自分に與へてくれることが出來なかつたらう。尤もこの田舍の家へ彼が來ることは、動坂に拒まれて居たけれども、彼に若し心さへあれば、五年のうちに何かの機會、何かの場所に、ささやかな然し忘られぬ喜びを結びつけて呉れられただらう。悦ばせ易い、そして悦びたがつてがつがつして居るやうな自分を——全く考へると寧ろ不思議といふ位なものであつた。しんから嬉しかつたこと、佃の暖かい心を身にひきそへて覺えたことは何か無いか。まさか一つも無い筈はあるまい。皆無といふのは恐ろし過ぎ、伸子は記憶の中を遽しく搔きさがした。思ひ出すのは、自分の眞心を信じさせようと熱心に細かく説きつけて居る自分、爭鬪を負けん氣で從へ靜めさうと力んで居る自分、さもなければ、暗い焔のやうな男と女とのことなどばかりであつた。記憶にのこつて居る程の場面々々は、どれも頰を流れた涙、やけつくやうな胸の中を流れた涙の苦々しさを伴つて浮んだ。その間いつも生活の底になつて動き求め藻いて居たのは自分だ——

机に戻り、素子へ返事のハガキを書き、出させ、猶それらのことどもを思ひつゞけると、伸子は震へるやうな悲しみを感じた。佃と生活出來ないと決心してから、伸子は、自分の苦闘と内省とで得た經驗を徒にしまいと深く覺悟して居た。ただの不幸や失敗には終らせまい覺悟であつた。何かを、その上から生れさせよう!

其故どちらかといへば理智的に心が働いて、時代や性の問題を背景とし自分が生活して來た道を通觀したり分析したりしようとする傾きであつた。然し、素子のこだはりない心からあふれた溫かさで伸子の感情はその堰を切つた。彼女は、二十から二十五までの、若い、どんな瞬間でも純に火のやうに受けられた時代を空しく無駄に過して仕舞つた

こと、そして、それらの年は一生に再び還つて來ないことを痛感したのであつた。生活を惜しむ心が髮の毛一筋にまで滿ちた。何と自分との不用要なことを心の中に繰り乍ら、伸子は永い間際限のない歔欷をつゞけた。泣き乍ら、泣くことによつていくらかづつその苦しみを和げられ乍ら、伸子は考へた。世の中に自分のやうな心を持つ女は一人しかないのであらうか。自分の得たいと願ふ生活の歡びは、此世に在つていけない程贅澤極まつたものであつたのであらうか。——神よ、神よ。そして、自分は誰からも愛して貰へない程、度はづれな女なのであらうかと。

八

素子が來る日、伸子は待ちかねて停車場へ迎へに出た。午後からひどい雷雨があつた。家を出る時は小歇みであつたが、市から歸る頃丁度又烈しくでもなつて、俥が出なければ、伸子は市で泊るしかあるまいと思ひ、小さい櫛など持つて出た。去年の夏、村の俥夫の家へ雷が落ちた。彼は其時吃驚した餘り病氣した。其から雷雨がひどいと、その俥夫は足がすくんで動けないのだ。市からはさういふ天候だと、村まで有名な風當りの強い街道を目して來る俥夫などは一人もなかつた。

歸途には、唯風だけになつた。眞暗な夜道の八方を吹き廻す風の荒々しい、唸りだけ聞える。素子が幾分不安さうに前の俥の中から、

「——ひどいな——怖いほどあるんですか、まだ」

といふ聲がした。

「もうあと五分の——」

悠くり力を入れ大きい聲で明晰に返事したのに、風にふき散らされ素子へ屆かなかつた。

「え？」

とき〻返す聲がしたが、伸子はもう默つて搖られて居た。

翌朝、東縁の雨戸をあけると、素子は、

「ほう！　此那いゝ景色のところだつたんですか——」

と、驚きを新たにした。

「二度吃驚ね、昨夜、實は如何なところへ來たことかと少し辟易して居たんだけれど」

電光と雨に洗はれた後の清い潤やかな北國の空、遠くの魅力ある連峯、左手に展望される丘陵の上の可愛い森、活々した美が伸子をも見惚れさせた。

「一寸眞似が出來ないでせう？　誰か爽やかで靜いやうでせう」

「F縣にこんなところがあるとは思はなかつた！」

「——私關西——京都住まゐしか知らないけれど、あの邊の景色より此方の方がよつぽど好きよ。あなたは？」

「あつちは平凡ですよ——平凡な美しさだ」

祖母が出て來、頻りに、

「よく來て下すつたない、田舍で何のおもてなしも出來なくて恥かしいごんだ」

と繰返した。伸子は、

「八十になつてもまだあゝいふ技巧は忘れないのね」

と素子に囁き、大笑ひした。

黑つぽい紺地に絲や茶で古風な粗い格子縞のある膝掛が一枚、戸棚にあつた。伸子は其を庭の芝生に擴げた。二人その上に腹這ひにころがつた。素子が膝掛の房の間から出て居る草を拔き、自分の細いパイプの先にさし、吹矢のやうな遊びを發明した。

「どれ、かして御覽なさい。私なんか、もつともつと飛ばせるわ」

草は輕すぎて、却つて遠くに飛ばなかつた。

「あゝ、斯様にして居たんで肩が痛くなつた」
やがて素子は仰向きになり、兩手を組合せて額にかざし乍ら、遥と地平線を眺めた。香ばしい草や日の匂ひが四邊に漂つて居る……平和な樂しい信頼に滿ちた感情が仲子の胸にあつた。彼女は先達て鎌倉へ行つたとき、ホテルの傍の砂の小高いところに二人矢張りこのやうにして日を浴びて居た氣持を思ひ出した。彼女は素子の傍に居ると、擽りどころのあるやうな居心地よさ、落付き、惡い意味の女らしさから來る窮屈を脱したい、心持がするのであつた。これは仲子に全然新しい感情であつた。

死んだ祖父が使つた遠目鏡を出してかけ、彼女達は空を覗いたり、山を覗いたりした。青々した美しい山肌が遠目鏡で見ると、樹木が疎ら、[illegible]猫の皮膚のやうであつた。——喋り出す。眞面目な話、剽輕な話、思ひ出の話、種はつきず、仲子は素子にこれ迄の生活について偽りのない話を聽いた。樺崎から二人で送つた寄書の返事のハガキが來た。其に、

「今頃きつと吉見さんは其方だらうと思つて居ました。やうで、私の天眼通は偉いもんです。」

と書いて、二人で讀み、笑つた。素子は二日居て歸京した。

素子が立つ前に横はつて居た長椅子がそのまま、羽根蒲團をのせて部屋の隅に在る。夜、境の唐紙をあけ放し、机のある方の部屋は明るく次の間は暗い間をぶら〳〵行きつ戻りつし乍ら、仲子はいつの間にか再び自分を貫いて、活潑な生活慾が流れだして居るのを感じた。自覺しないうちに全身がその流れに領せられたかのやうであつた。一週間前、素子が來るといふ通知を受取つた晩自分を眠らせなかつた殆ど肉體的な痛みのやうな悲しさが、却つて生活慾の目覺めを知らす前兆であつたかの觀があつた。新しい生活をしたい、違つた暮しを見出したい、さう思ひつめ求めて居た時、其等のものは何處にあるか一寸知れなかつた。知らないうちに、時期が來た。或朝不圖目を醒し、人が俄に沁々と天地の春を感じるやうに、氣がついて見廻すと、もういつか自分の周りを流れて居るのは過去の潮ではない。——さういふ氣持が深く仲子を動かした。

翌日、仲子は確りと更に一段奮闘の定つた心持で、佃に手紙を書き出した。情誼ある手紙を書きたいと思ふと、和らいだ氣分はいつぞやの夜の通り、すらりと流れ出ず、變に嚴然とした丁寧な言葉の文が出來た。氣に入らず幾度も破き、諦めて遂に彼女は簡單に要點だけ書くことにした。今度田舍へ來たのは此をけぢめとして互に別の生活に入り度い爲であること、東京に居て其を實行することも、彼に云ふことも出來なかつた弱さを許して欲しいこと。

「此事は最初から私にだけ必要で、貴方にはちつとも必要の認められなかつたことです。恐らく今でも其はさうだらうと思ひます。けれどもどうぞ今度はおきゝ入れ下さい。そしてどうか互に憎み合はずにすむ關係になりたいと心から願ひます」

彼女は、書き終つてからも暫く一枚の書簡箋を眺めて居た。感動して居るのか、平氣なのか自分ではつきりしない心の状態であつた。仲子は念を入れて其を揃へ、畳み、封筒に入れ、自分で持つてポストへ入れに出かけた。

歸途上を仰ぎ見ると、空一杯夕燒であつた。筵雲が彩り多く天の高みに浮いて居た。稻妻が時々閃く。桑畑も杉の防風林も、はては遠い山脈まで耀きに恍惚溶け込んで居た。空氣は透明でそよりともしない。體も心も自然にまかせて空を仰いで居ると、あゝ、やつとこれで輕

荷が下りたといふ心持が犇々と迫り、伸子は、四邊の靜けさ、廣さ、美しさと遠くに居る素子とを一緒に擁きしめ共によろこんで欲しいやうに感じた。東京へ行きたい。……彼女は歩き出した。東京へ行きたい……。行きたい。行きたい。テムポが次第に速くなり、伸子は段々矢も楯も堪らなくなつて來た。素子が歸る時、伸子は成らうことなら一緒に行きたい位であつた。

彼女は其を、佃に對して自分がちやんと立場も明かにして居ないのを考へて堪へた。今、兎に角一段落ついた。東京へ二三日行つても一ケ月の忍耐が無駄になることはあるまい。――伸子は、素子が今忙しい時ではないかと、日を繰つて見た。東京へ行くとしても、彼女は人の出入の多い、いつ佃の來るかもしれぬ動坂へ行くのは厭であつた。彼女は、素子の處へ行く積りであつた。そして、誰にも會はず、都會の賑やかさと素子の皮肉な然し快い鼓舞だけを吸ひ込んで來よう。

伸子は勢づいて歩いたが、急に、自分が一枚も單衣を持つて來て居ないことに思ひ當つた。袷で六月東京は歩けない。妙案が浮んだ。彼女はいそいで家へ戻り、箪笥から藍縞の袷を出し、畑の向うに住んで居る、月が鏡になればよいといふ俗謠をうたつて聞かせた婆さんのところへ持つて行つた。彼女はせき込んで頼んだ。

「これの裏をみんなはがして、裾と襟をくけて頂戴。明日の朝までに。――單衣にするんだから」

其は染なほしで、裏は白く、滑稽なのだが、伸子は羽織を着るから平氣と思つた。

九

動坂の家へ知らせない積りが、東京へ來る汽車中、思ひがけない人に會つた爲に變更した。素子の家の近所の自働電話で、伸子は母を呼び出した。昨夕東京に歸つたと告げると、

「へえ……」

と、母は疑はしいやうな不快に亢奮の籠つた聲を出した。

「妙なことがあるよ――佃は赤坂に居ないよ」

それは如何いふ意味なのか伸子には判斷がつかなかつた。

「私、赤坂に行かないから知らないわ」

「何處に居るんです？」

「吉見さんのところ」

「――兎に角佃は赤坂に居ないよ」

多計代は、脅かすやうに又其を繰返した。

「Kから、前に居た家へ來たかつて電報を打つてよこしたよ」

持つて廻つた、意味ありげな口ぶりだつたので、伸子は直接法に要點にふれた。

「汽車の中でジョンストンさんに會つたら、是非お會ひしたいから明日動坂へ上りますつて。私も行くから、其時いろ／＼伺ふわ」

母は考へて居たが、きつぱり、

「今直ぐおいで」

と云つた。雙方の電話口で暫く無言がつゞいた。伸子は、ぢやあ行きますと云つて電話を切つた。

タクシーに搖られ乍ら、伸子は、では佃がKへ行つたのか、と考へた。手紙を見て、昨日、彼は前日伸子が立つた後へ行つたのだらう。勿論伸子には、あの手紙だけで萬事解決するとは思つて居なかつた。佃が文面を二三度繰返して讀み、伸子が本氣なのを知り、立つ決心をした時の心持が彼女によく察せられた。彼は七分の不安と三分の自信をもつて出かけたのだらう。何故なら、伸子が別になりたいと云ひ出したのはもう二年も昔のことであつた。彼女は鎌倉に暫く家をもつて暮したり迄したが、結局、彼の涙や當座の熱に負けて來た。今度は少し頑固

であらうが、此方も其だけ強硬に根氣づよくとりかゝればよい。さういふ、佃の夫としての習慣的な態度が明らかに見え、伸子はうんざりし腹立たしく、彼に對して抱いて居た或程度までの公平さ迄失ふやうな氣がした。今迄の自分とはもう違ふのだといふ冷やかな反抗的な心持さへ頭を擡げた。

父と母が、難かしい顏をして坐つて居る中へ伸子は入つて行つた。行くのを拒んであるKへ佃が無斷で出かけた。伸子は何時[illegible]譯の分らない苦情が來たのに、當人の[illegible]ない。[illegible]ごた／＼[illegible]まり、而も底に何事か伏在して居るのか[illegible]のつかないところから、[illegible]氣は居心地わるい[illegible]さで、ひどく不[illegible]なものであつた。其感情は伸子に[illegible]出來[illegible]たが、何だか自分の親に立つて、自分をとつてゐたり、あやまつてゐたりしたいやうな[illegible]心持が伸子を傷けた。[illegible]に出まかせ[illegible]自分の[illegible]し、[illegible]はしい心の[illegible]を其に違れて[illegible]はなければならない。自分の責と思ひたが、伸子は、夫を愛してもいけないと云ひ、[illegible]てもいけないと云ふのらしい親心の[illegible]な作用を[illegible]に[illegible]なかつた。

[illegible]た[illegible]ることを[illegible]ず、[illegible]に沈默した。やがて多計代が、

「──一生の大事だから、熟考した上でないといけないね。──お前がそんな感情家で、一生獨身な生活が出來るとは思はれないし」

と、初めてしんみり云つた。

「それは自分も知つて居るの。──考へるだけはもう一年も二年も、もつと永く考へて居たわ。でもね、私はもう理窟ぬきにやり切れなくなつて居るの。魚が水のない場所に生きてゐられない──それを、魚がわるいつていふ人はないでせう？──人間も同じ場合があると思ふわ」

「いづれ、明日でも會ふだらうが、よく考へた方がいゝね──結局、まあ、その方がいゝことになるかもしれないが……」

非常に勇氣のある人は溫和だ。自分にも、どうかその溫和の百分の一を授かり、佃と最後の會見をしたい。伸子はさう思ひ乍ら床についた。

翌朝早く佃から電話で、伸子は起された。

「赤坂からお電話」

といふ聲をきくと、瞼がまだ開き切らない先、いやな心持が胸を掠めるのを感じた。氣持を整へる餘裕を得る爲、着物をなほし、板の間へ出て行つた。

「もし／＼」

いきなり、

「もし／＼、いつ歸ります？」

と、[illegible]に、喉の乾きついたやうな佃の聲が鼓膜を[illegible]した。

「──今日ジョンストンさんがいらつしやるの、お茶に。──それがすんでから──」

「いそがしいんですか」

「──……」

「そんなにいそがしいなら、いつでもすきな時に歸つていらつしやい」

ガチャンと受話機をかけた音がした。

伸子は眠りなほしも出來ず、其まゝ起きた。

一時間も經たないうちに、又、赤坂から電話が來た。

「もし／＼、伸子さんですか」

今度は佃でなく、佃の親しい友人の織田の低い平らな聲であつた。何と云つてよいか判らず默つて居た。

「何時頃歸ります？」

「多分八時頃になるでせうと思ふけれど──貴方──そこにいらつしやるの？」

「えゝ、昨夜泊つたんです──ではどうぞ」

[illegible]にぽつんと電話が切れた。佃と織田

と云ふ人が、男が、もう今空氣がかけて來てやらうかと寝付かず立つて待つて居る部屋の光景を思ふと異様に物々しかつた。伸子は、悒しく思つた。

十

赤坂へ行つたのは九時過ぎであつた。

表の角から、人つ子一人通らない早寝の暗い横通りを歩いて行くと、竹垣の透間から佃の部屋の灯が煌々と往来まで洩れて居た。単衣の肩が薄寒いやうに感じつゝ、其を眺め、伸子は暗い格子をあけた。佃が弦の切れたやうな勢でとび出して来た。

「伸子?」

「――たゞいま」

彼は、伸子が下駄をぬぐのを待ち切れないやうに両手を執り、ぐんぐんと当りの燈火のない部屋へ彼女をつれ込んだ。伸子は、暗闇で間誤付き、椅子につき当り、其につかまつた。佃は猶手をはなさず、片腕に彼女を抱へるやうにし乍ら一つの椅子をずらし其にかけると、狂気のやうな力で彼女を抱き締めた。彼は、

「Do you still love me?」

とどなり、子供のやうに聲を擧げて泣き出した。彼は泣き乍ら伸子の頬に自分の頬をすりつけた。手を撫で、肩を撫で、髪を撫で、顫へる大きい掌で押し潰すやうに彼女の體じうを撫で廻した。――伸子は、凝と動かず、たゞされるまゝにされた。彼の重い頭が、彼女の胸の上にずつしり靠れかゝつて居た。止途ない涙が生暖かく着物を滲み通すのを感じ乍ら、伸子は彼の頭を抱き、静かに悲しみを以てその髪を撫でた。眼が闇に馴れ、嗚咽する毎に夫の肩が波打つのが暗い裡に見えた。茫然と其を見据ゑ、伸子は自分に駭き、ぞつとし乍ら心で呟いた。

「――あゝ私は泣いて居ない……泣いて居ない……」

夫と共にわつと泣き出さない自分に駭き恐れつゝ、伸子は夢中で彼の頭を撫でた。彼女も、佃に悪寒と嘔気を感じ身震ひが出た程、切ない、苦しく悲しいのではあつた。けれども、どうしても涙は出ない。二人がこんなやうに苦しまねばならないこと、而も死んだ愛は再び甦らず、これ等総てさへもう直ぐ嘗てあつたことに帰さうとして居るといふ絶望的な意識、其等は伸子に呼吸の止るやうな苦悩を与へるのであつた。

「あゝ……」

伸子は一層深く胸に埋め、佃の頭を抱きよせ、彼の髪の上に自分の顔を休ませた。

「――私の愛した人、私の愛した人! あなたは可愛く、いとしくあつた人――互の間にどれ程涙が流されたことであらう!……」

一言も口が利けず、涙を出し、眼が痛くなるまで泣き直し伸子は気を失ひさうになつた。彼女は眼を瞑り躊躇いた。佃に[illegible]彼女を支へ、[illegible]

佃は官能の興に、伸子の心を引き攫へ、自分の中へ取り戻さうとするやうであつた。伸子は初め拒絶した。が、終りに、烈しく泣きつゝ自分から荒々しい悲しみで彼の抱擁の下に身を投げた。彼女は自らを傷ける底知れぬ苦しさと、動乱する官能の火花との間を漂ひ乍ら、最後にいつか、大きく〳〵物を云ふやうに、自分達悲しき男女の體の上に書かれて居るのを知つた。

翌日、佃は勤めに出なかつた。

「私は、Kへ出かける時、来週迄欠勤届を出して置いたのです。三日かゝつたら、どつちかに決定すると思つたから―

伸子は、夫が今度は全力的なのを感じた。全力を出したら彼女を思ひ返させ得るといふ確

信の下に。
　それは、一種の監禁であつた。その日は曇つて蒸暑かつたが、障子を閉め切り、狭い本箱の前の疊の上に膝をつき合せて、一日中對坐した。食事の時だけ立つた。その食事も、仲子は止むなく坐らされ、よく一人で考へて居た閑で所詮は一つの返答を捏ね廻して居る間に、佃が自分で用意するのであつた。食べ終る。又彼は或は優しく、或は恐ろしく切り出すのであつた。
「――此處に頼んでも思ひ返して吳れないんですか。――私にだつて缺點はあつたのだらうから、きつと此からなほすと云つて居るのに。其れでも君は一緒に生活しないといふのか」
　仲子は、元氣なく彼を見上げ、訊いた。
「――缺點をなほすからつて――ぢやあ貴方は何處が惡かつたの？」
「其處こそ分るもんですか！」
　彼は沈默を驚かすやうにして答へるのであつた。
「私は自分が惡かつたとは思はない。然し君がさういふから世間のこともあるなら、なほさうと云ふのではないか」
　仲子は、溜息をつき、云つた。
「だからね、もう水掛論のやうなことはやめにしませう、ね。惡いと云へば二人がわるいのよ、喧嘩兩成敗よ。――たゞ、せめて少し物の分る人間らしく、もつと傷け合ふこと丈はやめたいわ」
　暫く默つて居た後、佃は考へ深さうに云つた。
「仕事をする女でも、楢崎さんなんか、あゝやつて立派にして居る――君だつてさう出來るんぢやないかなあ。それに、織田とも云つたんだが、さういふ苦しみは皆我々が十五年前に通つて來たものだ」
　仲子は、苦笑で唇を歪めた。
「――貴方は楢崎氏？――第一、どうして貴方は私が何でも仕事々々といふだけで生きて居られるとお思ひになるのかしら。まるで變だわ――私はへぼ小說を書くより前、女に生れて來て居るのよ、而もまるで女なのに――……」
「それならば、さ」
　彼は仲子の手の甲を、子供を賺すやうに撫でつゝ說服するやうに云つた。
「どうして、此那に愛して居る私のところから去らうとするの？　え？　私はもうどうせ永く生きる體ではない。せめて死ぬまで私の傍に居るだけでよい、居て下さい、ね？」
　涙をためた眼で仲子を見守つて居たが、彼女が默つて居ると、佃は、毒々しい顔付になつた。そして、強迫するやうに云つた。
「――私はKで皆あなたの日記を讀んで來ました」
　――留守の机の廻りを、彼が動搖する感情でせはしく彼方此方かき探しただらう。何かこの當のない掻き立てられた不安に結びつける憎みの石、氣休めの石、何かは見つかるまいかと焦立つた彼の心が感じられた。日記を、彼女は机の上に出しつ放して來た。それには素子に對し傾倒した自分の感情などが細かく書いてあるのであつた。
「……………」
　佃は業を煮やし、もう一つの彈丸を放つた。
「――戸棚をあけたら、ごたごたの中から、君が動坂へやつた手紙が出た、那珂から。――彼那手紙を書く人とは思はなかつた。實に意外だつた」
　暑さ、苦しさ。仲子は頭がぼつとなるやうだつた。再び夜が來た。彼は死なうとする蛾のやうに又仲子の上に兩腕を擴げようとした。
「あゝ、どうするのよ！　どうしようといふの

よ、私を――」
おい／＼泣き出し、止らず、泣きじやくり乍ら伸子に氣を失つた。
同じやうな恐ろしい二日目、伸子の神經はすつかり疲勞し始めた。夕方になつて、彼女はがむやうに佃に云つた。
「ね、氣が變になる迄互に疲らしたつて同じことよ。――いつそといふ手おくれになつて此那に貴方なさるなら、何故もつとずーつと前に、私の本氣を認めて下さらなかつたのでせう。どんなに苦しかつたつて離れられないさ、と高くゝつていらしつて……」
「女はどうか知らないが一旦結婚した男は迚も一人で居られるもんぢやありませんよ 肉體的な意味でなしに――」
「――それはさうでせう。――……でも貴方に本當に入用なのは細君である一人の女なのよ。私が細君だから離せないやうに思ふだけなのよ。強ち伸子に限つたことではないのよ。伸子だから、といふのでは決してないわ――……」
噛みつくやうに伸子を睨まへ、佃は、
「ぢや、どうしてもいやだといふんですね」
と念を押した。伸子は、こつくりと合點した。
「どうしても？」
「――えゝ。――どうしても――」
「それでいゝ！ その返事が聞きたかつたのだ！」
猛々しく佃は立ち上つた。そして、机の上から紙とペンをとつて來た。
「さあ、すつかり定つたから荷物の控え書を作りませう」
白い書簡箋の中央に横線をひき、上に丁、下にNと頭字を書いた。
「それではと、――机――いるでせう？ 椅子は僕も氣の毒だが三脚だけ貰つて置きます。それから箪笥と」
佃は眞面目であつた。頬がげつそりこけて見えた。ペンを持つ人差指に氣味惡い程力を入れ、書くのを、伸子は放心したやうに見守つた。荷物を分ける……荷物を引きとる……心が破れたのに荷物がのこる……何と醜いいやな引き次ぎであらう。伸子は淺間しく、この瞬間其等家具類が一どきに消えて無くなればよい、恥知らず！ と思つた。
「ね、書かないだつてよくつてよ、私何にもいらないわ。――本と燒物だけあれば……」
佃はからりとペンを投げすて、
「あゝ、親父が知つたら、さぞ……」
と頭を[illegible]泣き出した。伸子には[illegible]しみて感じられた。[illegible]哀れに立つ自分等ノ何であらうか――其にも拘らず彼女の瞼から冷たい涙が溢れ、する／＼頬を傳つて膝の上に滴り落ちた。
佃は、よろめくやうに歩いて、納戸から針金切の鋏をもつて來た。そして、縁側に出、隅に作りつけてあつた小鳥籠の前に蹲んだ。紅雀や十姉妹が彼の姿に驚いて羽搏いた。凝と眺めて居たが、
「あゝもう此那ものにも用はない！」
と呟きつゝ、鋏で網を剪り始めた。バリ、バリ、バリ、片端から網がめくれ上るのが、伸子の坐つて居るところから見えた。小鳥共は、俄な變動に驚き、片隅により集り、悲しげに啼き立てた。大きい穴が出來ると、佃は、はた／＼網の後を叩いた。礫のやうについと一羽の十姉妹が破れ目から庭へ飛び去つた。續いて紅雀、殘つた十姉妹。或者はすぐ縁側の下の沈丁花のこんもりした枝に止つた。或者は、もつと遠い梅の梢まで翔び、急に放たれた空氣の廣さと自由さを信じ得ないやうにチッチッと啼いた。すると、何を思つたのか、一羽の十姉妹が、縁側までふつと戻つて來た。頭を傾け、傾け、

破られた[illegible]の目を見て居たが、ちよいと跳んで又元の籠に入つてしまつた。佃も伸子も、鳥の動作にいつか氣を奪はれ眺めて居たが、彼は意外に十姉妹の戻つたのを見ると、いきなり、碎けさうに伸子の手を握へた。

――あゝ、あゝ、鳥でさへ歸つて來るのに――……君は……君は……――

苦々しい心が湧き、伸子は目を逸した。飼鳥になつては堪らない。さういふ心持がした。伸子の視線の行手に夕方の空が見えた。都會の卵色の濁つた夕空の前に庭の松が黒く見えた。非常に鮮やかにくつきり、松葉の一本々々が黒く見えた。

◇

書店の[illegible]――[illegible]一八九六年創立の[illegible]一九[illegible]のスケッチ[illegible]、[illegible]したり[illegible]だり[illegible]に立てたりした[illegible]に清水の[illegible]にぎやかなり、[illegible]の[illegible]上には[illegible]して立てても、[illegible]の手にある小[illegible]書き[illegible]やうな[illegible]小[illegible]でいる

て引込み、新聞と釣錢をのせて再び現れ、活潑に印刷機の上を往復した。印刷術の進歩と六片ロマンスに對する欲求の膨脹が賣子と買ひての距離を無くした。伸びる手の長さでは間に合はなくなつたんでこんな道具が出來た始末だ。

日本女はそこで或朝「デイリー・ヘラルド」を買はうとした。賣切れだ。翌朝又出かけた。又無い。賣子は代りに「タイムス」を小型雪搔きの上へのせ突出した。

見事な紙に二十四頁刷つて「タイムス」は四片だ。これも稀にはいゝ。何故ならTHEといふ定冠詞とTIMESといふ名詞の間に獅子と馬の皇帝紋章が翼をひろげる第一面の下は全部商人廣告欄だ。外國人は時々それを見ることにより、少くともロイヤルアカデミー會員の描いた肖像畫展覽會に於けると等しく英國のあらゆる位階勳等を學ぶことが出來る。包紙としてもなかなか丈夫で役に立つた。然し日本女は、デイリー・ヘラルドを欲しいと思ふ。

ホテルの玄關は[illegible]だ。そこへ[illegible]、女が靴をつき石鹸をつけたブラッシと雑巾を手にもつて床洗ひをして居る。[illegible]に日本女は明日の朝から「デイリー・ヘラルド」を配達して呉れと云つた。するとその金ボタンの大人達は小さな日本女を見下しつゝ云つた。

――それは勞働黨新聞ですよ、お客さん。

――知つてる。それが欲しいんです。

――デイリー・ヘラルドを？

――然り。

――かしこまりました。

翌朝室の戸をあけたら、靴の上にきちんとのつかつて居るのは「デイリー・メイル」だ。

――貴方デイリー・メイルをよこしたのね。

玄關へ行つて日本女が云つた。

――あれならいらない。デイリー・ヘラルドよこして下さい。……きつと、ね？

――かしこまりました。お嬢さん！

次の朝は――もう何にもよこさない。

ラムゼー・マクドナルドの笑の大きさはこの頃一種の目立ちかたをして來た。政權を執つては左であり得ず、又そのやうな分らず屋にでもないことを英國の資本主義と保守主義に向つて事實上表明しつゝある勞働黨、[illegible]の手では今[illegible]の輝くな[illegible]であり得るのだ！

（「ロンドン一九二九年」より）

年譜

明治三十二年

二月十三日、東京小石川區原町で生れた。

父中條精一郎、母葭江。逆さになつて死んで生れた。あきらめてガーゼをかけ、放ぼり出してあつたら、寒さのために生きかへつてオギャーと云つた由。この難產は自分と他の弟妹たちから母の乳を奪つた。自分、母の乳房といふものを知らず。

生後十ケ月から滿三歳まで兩親と札幌で育つた。

明治三十八年

東京市本鄕區駒本尋常高等小學校へ入學。

父はイギリスへ行つてゐた。小さいベビーオルガンが一臺うちにあつて、茶色絹のバラの花簪をさした若い母がそれを鳴らし、聲張りあげて「ホラルの彼方、風荒れて」と歌つた。軍艦のついたエハガキに、母がよく細い字をぎつしり書いてイギリスの父へやつてゐる。正月でか、自分はチリメンの袂のある被布をきせられてゐた。母が急に縁側へ出て、庭の木の下に霜柱のたつてゐる庭へ向ひ「バンザーイ！ バンザーイ！」と兩手をたかく頭の上に擧げ、叫んだ。聲は鋭く、顔は若く、涙をこぼしてゐる。自分はびつくりして泣きたくなり、だが母についてバンザイと云つた。そして、わきに並んで手をあげたら、袂がそれは重かつた。――日露戰爭はこんな形で自分の記憶にのこつてゐる。

多分、この翌年ごろ、アメリカから父の弟省吾叔父かへる。黑い髪を長く肩の上へ垂した大きい男だつた。自分、弟國男、道男、みんな可愛がられた中で、自分は特別愛された。かへつて直き中耳炎になつて大學病院へ入つた。癒らないのに、何故だか本鄕林町の家へかへつて來て、茶室まがひの小室に床をしき放して臥てゐた。自分はその中へホウタイをした叔父ところがつて澤山澤山聖書の物語をきいた。現在、自分の聖書傳說の知識に、殆どその時から増してゐない。叔父は間もなく死んだ。

明治四十年

秋、父かへる。

明治四十三年

本鄕誠之尋常小學校卒業。お茶の水高等女學校入學。

夏休みに、小說の處女作あり。木炭紙へケシの花を描いたのを表紙にし洋紙をリボンで綴ぢて、毛筆で毎日書いた。何でも夜の海岸へ戀をしてゐる若い男と女とが散步に出て、チラチラ遠くに見える漁火を眺めながら仲よく話してゐるところを書いてゐたら、母が見つけて「百合ちゃん、お前これ書いたの？」と云つた。さうだと答へたら「まあ、なんだらう！」と云つた。それつきり、そのケシの花のついた小說帖はどこへか消えてしまつた。いくらさがしても、もうなかつた。

段々手當りばつたりにいろんなものをよみはじめた。『平家物語』『方丈記』西鶴（！）などを、盛に寫したり、口語譯にしたりして、表紙をつけ、手製本をつくる。

與謝野晶子の『口語譯源氏物語』のまねをして『錦木』といふ長篇小説を書いた。「尻きれとんぼ」。『森の魔女の話』も書いた。

両親たちは、自分達の生活にいそがしい。家庭生活や夫婦生活のこまかいことがませた自分に見え、親たちを批評するやうな心持になつた。

お茶の水の女學校も、つまらない。陰氣な、激しい心になつて暮した。よく學校へ行くのをやめたり、早退けしたりして上野の圖書館へ行つた。佐竹ケ原の草の中へころがつてゐたりした。昔の婆やが酒屋の裏にスダレを下げて賃仕事して居る。そこで、一日ゐたこともある。

一葉だの、ワイルドだのの影響があつた。母が、或時土産に二册本をくれた。アラン・ポーの傑作集だつた。以來、時々これで本をお買ひと一圓か二圓くれた。

女學校の四年ごろから、ロシア文學に熱中しだした。トルストイが最も自分を捕へた。西洋史で教はつたローマ法王グレゴリー三世を主人公にした史劇みたいなものを書いた。わが幼稚なる衒學時代の開始。日本の文壇は人道主義が盛だつた。

大正五年

女學校五年。祖母の棲んでゐる福島縣下の田舎へ、小さい時から毎年行つてゐた。その印象をあつめて『農民』といふ小説を書いた。ふり假名つきの支那の詩をよんで、美しいと感服し、漢文の稽古をはじめた。『論語』と『十八史略』をならつたが、先生が感覺なしで、ものにならなかつた。從兄にせがんで助けて貰ひ、『古代ギリシア彫刻家』といふ本の飜譯に着手。これは、仕事がむづかしすぎて結局無駄骨折りで中絶した。

女學校卒業。目白の女子大學英文科豫科へ入學。

『農民』を書きなほし、『貧しき人々の群』といふ題にした。二百枚ぐらゐあつた。母によませた。

坪内逍遙先生のところへそれを持つて行くことになり、「中央公論」の瀧田樗陰に會ふことになり、少しちゞめて、九月の「中央公論」に載せられた。薄謝と書いた紙包に百五十圓入つてゐた。

女子大學は一學期でやめてゐた。成瀬校長は天才とか自由とか、講堂の梁がゆれるやうな言葉をなげつけるが、級の實際はいやに窮屈で、髪の形まで干渉した。丹野禎子、瀬野菊子などと同級だつた。これ等の人々とは數年後から今も親しい友人としてつき合ふやうになつた。

大正六年

『日は輝けり』（「中央公論」）『三郎爺』（「大阪毎日」）『地は饒なり』（「中央公論」）『一つの芽生』。單行本『貧しき人々の群』玄文社から出版。

大正七年

單行本『一つの芽生』『新進作家叢書』の一部として新潮社から出た。『禰宜様宮田』（「中央公論」）。

人道主義的作家見習にはなつたが、當時の所謂文壇とはちつとも交渉なく、僅に久米正雄、芥川龍之介などを知るだけでぽつねんとしてゐた。自身、文壇といふところに入らうとは思はなかつた。さういふ出來あがつた人ばつかりの集つた内にもまれて、文壇語、文壇神經、文壇的考へかたなど貰つたら、自

分が何になるのか分らないのに、困ると思つた。文士の生活といふものに疑問もあつた。自分は野天で育ちたいと思つた。

大正八年

民族的滅亡に追ひこまれてゐるアイヌのことを書きたいと思つて北海道へ行つた。三月から八月まであつちこつちアイヌ村を歩いた。八月に父が札幌へ用事で來て、一緒にかへる汽車の中で、アメリカへ出かけるがついて來ないか、と云つた。行く氣になつた。九月二十六日東京を出發した。十一月十一日、ニューヨークの小さいホテルの露臺に立つて、ヨーロッパ大戰休戰當日の光景を瞰下した。

大正九年

ニューヨークで結婚。『美しき月夜』(「中央公論」)、澁谷家の始祖』(「中央公論」)。十二月歸朝。

大正十年

この年から足かけ四年ばかりは泥沼時代だつた。小ブルヂュア的な、排他的な両親の家庭から脱出したつもりで四邊を見まはしたら、自分と男とのおちこんでゐるのは、やつぱりケチな、狭い、氣稟ない家庭の中だつた。檻の野獸のやうに苦しんだ。對手をも苦しめた。對手は十五年アメリカで苦勞したあげく、休みたがつてゐたのだ。僅に、『黄昏』『古き小畫』などを書いた。

大正十一年

確か大正十一年の夏と思ふ。山川菊榮などが實際の發起者で、與謝野晶子、埴原久和代、其他多勢とロシア飢饉救濟會の仕事をした。

大正十二年

關東大震災の被害は直接蒙らず。今はブルヂュア婦選運動をやつてゐる人々と、三宅やす子の「ウーマン・カレント」を中心とし小規模の救援仕事をした。野上彌生子とこれらの數年間に知る。

大正十三年

春ごろから少し書くことが出來るやうになつた。「心の河」『イタリアの古陶』等。湯淺芳子を知る。

夏、[illegible]ひとりものになつて、長篇『伸子』の第一部『聴き分けられぬ跫音』を書き「改造」へのせた。

大正十四年

『伸子』を三・四度にくぎつて「改造」へ連載。他に『映える』『長崎紀行』『白い翼』などを書いた。

大正十五年(昭和元年)

『伸子』完結。『一太と母』(「女性」)『未開な風景』(「婦人公論」)等。

昭和二年

『伸子』を單行本にする爲の手入れをしながら『高台寺』(「新潮」)『帆』(「文藝春秋」)『白い蚊帳』(「改造」)『街』(「女性」)『一本の花』(「改造」)等を書く。

十二月初旬、湯淺芳子とともにソヴエート・ロシアへ出發した。十二月十五日モスクワ着。

昭和三年

單行本『伸子』改造社から出版された。

春『モスクワの印象』(「改造」)「秋、赤い貨車」(「改造」)をモスクワから送つた。

この夏八月一日、故國で次弟英男(二十一歳)が自殺した。彼が姉にあてて書いたまゝ出さなかつた最後の手紙に、何ものをも惜むな、といふ文句があつた。

彼の豫期しなかつた死、没落と日夜目撃してその中に生きるソヴェートの燃えつゝ前進する新社會相とは、しかし兩面から自分の眼を開いた。ひとりで闘つて來た闘ひを結びつけて行くべき方向と、形と意味を、自分は理解した。政治的行動に、これまでと全く違ふ見かたを得た。藝術家として、自分はどこまでも現社會制度との非妥協性をすてぬ。惜む心をすてぬ。

この秋、洋々たるヴォルガ河を下り、湯淺とコーカサス、バクー油田、ドン・バス炭坑見學をした。

昭和四年

一月から四月いつぱい、猛烈な膽嚢炎で、モスクワ第一大學附屬病院に入院した。

五月から十一月末まで伯林、維納、巴里、ロンドンなどを見物した。ヨーロッパブルヂュア文化の過去の堆積と現在の老朽は實におどろくべきものだつた。本當は、醫者にチェッコ・スロヴキアのカルルスバード鑛泉へ行けと云はれたのだが、金がない。

昭和五年

二月、『ロンドン印象記』(「改造」)「秋」(「子供・子供・子供のモスクワ」)(「改造」)を送る。「戰旗」に二三原稿を送つた。或るものはついた。或るものは着かぬ。

初夏、クリミヤ及ドン地方の大國營農場「ギガント」へ見學旅行した。

湯淺は日本へ歸ることになり、自分はどうしようか、迷つた。遂に歸ることにきめた。

十月二十五日モスクワを立ち、十一月七日東京着。

十二月末、全日本無産者藝術團體協議會作家聯盟に加盟した。

平凡社から『宇野千代集』と合册で『中條百合子集』が出版された。

昭和六年

「三月八日は女の日だ」(「改造」)「スモーリヌイに翻る赤旗」(「大阪毎日」)『ソヴェート五ケ年計畫と藝術』(「ナップ」)その他ソヴェートに關する印象、紹介などを書く。

二月、内外社から單行本「新しきシベリアを横切る」が出版された。

幅びろい雨がロンドンに降つた。夏の終りだ。ペーヴメントを濡らし薄い女靴下をびつしよりにして降る雨は、自動車の幌の上にしぶきを立てつゝ孤獨に走る公園の兩側で夏の緑をずつぷり溶かした。

驟雨が上る。翌日は蒸し暑い殘[illegible]・[illegible]た。

樹がロンドンぢうで黄葉した。

空は灰色だ。雨上りのテームズ河に[illegible]し、汽船が黒、赤、白。低い黒煙とともに流れる。架橋工事の板圍から空へ突出た起重機の鐵の腕が遠く聳えるウエストミンスタア寺院の塔の前で曲つてる。河岸でも葉は黄色かつた。トラックのタイアに黄葉が散つてくついて走つた。

(「ロンドン一九二九年」より)

昭和六年三月十日印刷
昭和六年三月十五日發行

現代日本文學全集 第五十六篇

著者 田村俊子
野上彌生子
中條百合子

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43) [illegible]

株式會社秀英舍印刷

改造社

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02951 3611